

XXIX







里見  
春夫  
集











里見  
藤春  
淳夫  
集集

改  
造  
社  
版

杉浦非水裝幀

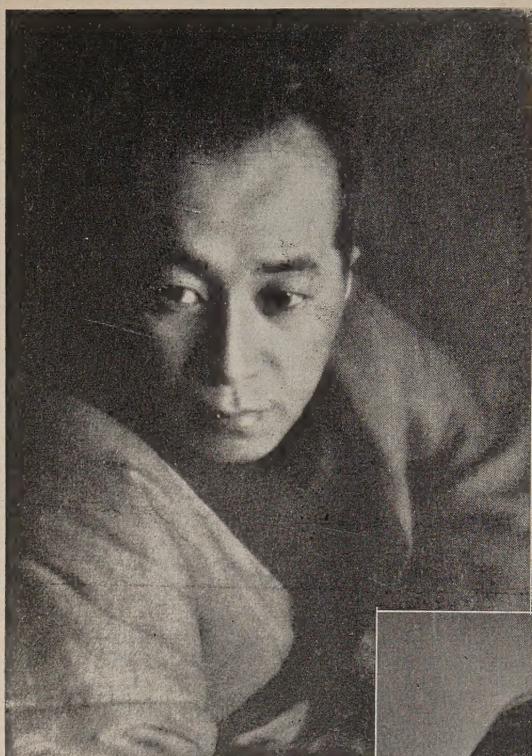




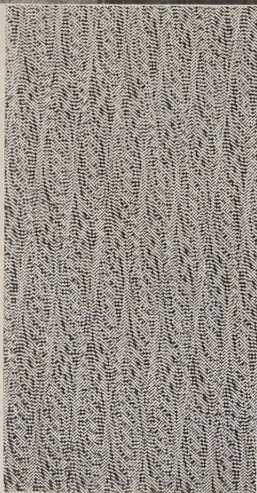




下、佐藤春夫氏の近影



上、最近の里見弴氏





PL755.6

.G38

v.29

出外

民風

樂

新夫

雜錄

新夫

里見淳集



卷頭寫真(照形)

序  
詞  
(筆  
頭)

田園の憂鬱  
.....  
三〇二

都<sup>と</sup>會<sup>かい</sup>の憂<sup>いう</sup>鬱<sup>うつ</sup>  
.....  
三九九

あ  
絹きぬ  
とそ  
の兄きょう  
弟だい  
.....  
四七六

星 ほし

.....

四九三

女おんな  
誠まこと  
扇せん  
綺き  
譚だん

西班牙犬の家へ……………五二七

窓 まど  
展 ひら  
く  
五  
四

夜やの宿やど  
.....  
四

年譜  
五五

多情佛心 (前篇)

序詩

あさ

しらへくとも明けはなれて行つた。

涼しげに小鳥が唄ひだした。

見渡す草原は朝露にうるほひ、早起の花ども

悉く振り仰いだ。

大枝小枝を張つて、櫛の老木は思ひきり伸び

をした。

まづその梢から、旭に照り映えたと見るまに、

空は、深まさり、蒼み互つた。

勢よく、鳥の群が çık かけて行つた。

陽の色と、朝の匂に染まつた空氣の、ごく微

な流れが動いた。

窪地の古池だけがまだ眠りこけてゐた。嚙に

は揺れず、蛇にも過られず、翡翠も掠めず、落

葉も浮べず、沼氣さへもあぶく立たなかつた。

たゞ寂として、もの皆の影を映してゐた。

そこに、緩い傾斜を、男の子が駈けおりて來

た。赤い、はち切れさうな頬、圓眼。

續いて女の子は、草に、ちよいと視をたく

しあげ、あちこち拾つて、ピヨイ〜と跳ぶや

うにしておりて來た。

上の平地に立つてゐる櫛は、もう根本まです

つかり日射のなかにあつた。それでも、坂を下

り、池を渡つて、對岸の土手の上までも、長い

影を落すやうな斜光が、子供たちの立ちどまつ

たところへ、末廣がりの縞になつて、真正面か

らさしてゐた。

男の子は、ちつとその光の縞を見詰めた。池

の面から立ち騰る水蒸氣が、そこへはいると、

ほのぼのと眺められた。

「あら〜、ぐちよ濡れよ」

女の子は一目うすべりの色を見てさう云つ

た。土釜、土釜、錫の鍋や皿、茶碗、どれもこ

れもせい〜大きくてマツチ箱ほどしかない臺

所道具が、濡れとほつて、褐ツちやけたうすべ

りの上に散亂してゐた。なかには、草の葉を盛

つたまゝの皿があつた。葉は、ペシヨ〜に、

動ずみ凋れてゐた。

「だからあたし、うちに持つて歸つとかなくつ

ちア駄目だつて云つたのよ」

「ちア持つて歸りやアいゝのに……」

「だつてほつたらかしといても大丈夫だつて云

ふんですもの」

「誰がき。……僕アそんなこと云つた覚えな

いよ」

「ちア美代ちゃんだつたかも知れないわ……」

「だつていゝちアないか。どうもなつてやしな

いぢアないか」

やつと、光の縞から目をはなして、うすべり

の方を振向くと、「ほら、一つだつてなくなつて

やしまい？」

「なくなつてやしないけど、これぢア坐れやし

ないわ」

「いゝよ、今ぢきに乾くよ。……だけど、僕ア

今日ははいんないぜ」

「なアゼ」

「まゝごとなんてつまんないや」

「あらア……」

「だつてさうぢアないか。まゝごとなんて、男

の意地悪根性ねえ」

私に弱 せし 来り心を物と正しく観

はつきり感じ、遂に真髓にまで

突入り解らうと思ふ。わが一生を

解らうとに達せし者ぞ。

俗に小説と云ふ動機もそれぞ。

解らねば書き解らうと思へば

書き解らねば信じられ、はこそ

筆を執らうとあるのだ。

昭和二年初夏

王見 啓



つた。

涙がおのづと溢れたと思ふ間もなく、お互の顔がぼやけて行つて、瞳につたはる水玉には、大空の光りが映り輝き、硝子の破片から窺いたやうに、滅茶苦茶なものゝ影ばかりが、キラキラと揺れ動いた……

それで、少年が恥しいと思つた。

くるりと背を向けて、手の甲で涙水を吸ひあげると、そのまゝ少年は土手を駆けあがつた。風に切れて、涙が揉上の方へ飛んだ。あがりきつたところで、駆けながら振り返つて見た。池を背に、女の子が、ぼかんとこつちを見上げてゐた。いつの間に出たのか、真っ白な雲が一つ、くつきり水の面に浮んでゐた。ちよつと立

停まらうとして、よして、そこからは、わざと二三歩おきに跳びあがるやうな駆け方をして、榛の木の林の方へ行つた。もとよりそこに、なんにも彼を待つてゐるものがあつたわけではない……

後姿が見えなくなると、急に女の子は悲しくなつて来た。ひとり置いて行かれたとか、こつちを振り向いて顔を見合せながら、立寄りもしずに行つて了つたとか、そんなことで悲しくなつたわけではなかつた。それどころか、男の

子の心持が、――草土手を駆けあがつて行く時の心持が、すつかり自分の胸へも映つて来て、うれしくつて、……嬉しいからこそ悲しいのだつた。

母親の乳よりも甘い涙が、止めどもなく、あとからあとからと流れて来た。ペタンと草の上に坐つて、袂を顔にあてた。草や濕つた土の匂が、清々しく鼻の穴へしみ込んで来た。

いやよ……いやよ、清ちゃんいや、いや……いやー！どこからともなく、さう云ふ言葉が浮んで来て、たゞもうかぶりを振つてゐたかつた。眼もなく満ち足りた心が、何故か、「いやー」と云ふ言葉を叫び続け、何かもつと辛いことを欲した。そして、悲しさうな涙が止めどもなく溢れた……

泣けるだけ泣いたあとは、心持が急にカランとして、軽く面白くなつた。すぐ男の子のそばへ行かうと思つた。そんなに遠くへ行つて了はないことは、よく解つてゐた。それでも、目のふちが赤く泣き腫れてゐはしまいかと思ふと、きまりが悪くなつた。袖口で、抑へつけるやうに、もう一度よく目のまはり拭いてから立ちあがつて、ひよいと上の方を見ると、男の子の頭だけが、土手の上へ出てゐた。

「いやアー  
思はず大きな聲をだして、うしろ向に、草の上に突伏したが、すぐまた身を起すと、両袖に顔を隠したまゝ、「ひどいわ、そんなところから黙つてみてるなんて……」

と云ふ聲に、けれども、喜びが満ちてゐた。少年は、すぐ傾斜のききに跳んで出て、駈下りやうとした足を止めた。

「あのね、仙ちゃん、こつちいいおいでな、いゝ花が澤山あるところを見つけたから」

「あらさう？　ほんとらう？」

「嘘なんぞつきアしないよ。……早くさ、早くおいでつたら……」

促し立てられるまでもなく、もう娘の子は、どん／＼土手を駆けあがつてゐた。ほとんど鳥瞰的に見おろしてゐた少年の心は、軽く、明るく、そして愉快だつた。草深いところへかゝつて、歩き惜さうに、それでも一刻も早く、肩を揺つて大股にあがつて来る、――自分ならばひとつ跳びだ、と思へば、ひとりでに微笑さへ浮んだ。  
あがりきつた女の子が、その微笑してゐる少年と顔を見合せると、すぐこれも微笑つて目をそらした。

「なにが意地悪だい」

「だつて、昨日まで仲間にはいつてゝ……」

「そいだつて、いゝぢやないか……」

「えゝ、いゝわ」

「なアんだい。なにがいゝんだい」

「だからいゝことよ。今日はなんかほかのことして遊びませう。ねえ？ そんならいゝでせう？」

「……うん……」

「清ちゃんみたいにな、すぐそんなに本氣になつて惱めるのいやだわ。ね？ 仲よくしませうね？」  
陽がのぼるにつれて、空はいよゝ色を深め、樹々の若葉は光り輝き、寂坊な池水も、爽やかな朝風の訪れに、漣の微笑を反して、もの皆の倒影を、だんだら縞に搖り動かしした。つれ舞ふ蝶は、高く低く野花を掠めて、やがて見えなくなる……

どこか遠くで鶏が鳴いた。

男の子は、なんとも云はずに、ふと女の子の眼を見た。女の子もちつと見返した。

どこか遠くで、もう一度鶏の聲がした。

たゞなんとなく、うら悲しいやうな心持になつて来て、男の子は目を野末に放つた。女の子は、膝の上に兩袖を重ねて、淋しくそこへ蹲む

と、銅の皿をとりあげて、凋れた草の葉を掴み捨てた。皿の中は濡れてゐた。

ほそくくと吐息をついた。

「あめんばうを掬はうか」

眞面目くさつた顔つきをして、男の子は池の面を見詰めてゐた。

「……え？……。ゐて？」

女の子は、強ひて快活に、立ちあがると、すぐ男の子と肩を並べて、「でも、なんか掬ふものがなくつちやア……」

細い足のさきになちよつと水を窪ませて、スウ

イスウイと居どころを變へる小蟲が、ひとしほ少年の心を淋しくしてゐた。

「……うん……」

今度は、意識的に向き直つて、丁度同じ丈格櫓の女の子を、正面に見た。

「…………？」

小首をかしげて、娘の子もちつと見返したが、瞳と瞳とがきつちりあつて、一二秒もすぎないうちに、男の子は、ほとんど澁面をつくつて、

「もう歸らうか」

「……えゝ……」

と、微に、うち笠垂れて答へ、暫くしてから、「……なんか悩んでるの？」

「うゝん、なんにも悩んでなんぞゐやアしないさ。だけど、……ごめんね……」

「あら！ なぜあやまるの」

「僕、意地悪いつてごめんね」

「まアいやだ。清ちゃん、ちつとも意地悪なんぞ云やアしないわ。それよか、あたしこそごめんなさいね……」

もう一度、瞳がピタリとあつた。いつどちらから寄つたともなく、二人は、鼻と鼻とが觸れ

合ふばかりに近く立つてゐた。

男の子は娘の、娘の子は少年の、瞳のすぐうらに、自分のとまつたく同じ心を見た。もう羞かしさも何もなかつた。相手と目を見合せてゐるのではなくて、今はたゞ自分を見詰めてゐるのだつた。

——その自分は、泣きだしたいほど嬉しがつてゐ、淋しくなるほど甘えてゐ、身ぶるひが出るほど眞面目くさつてゐた……

紺青の朝空も暗み互り、櫓の老木は葉をふるひ枝を垂れ、池水は汐の如くひき、小鳥の叫も蝶の舞も消え行くよとばかり、世はこゝに、二人の小さな心の上に盛り凝つて、たゞしんと耳のはたに鳴つた。そして、これが、夢ではなかつた。……時が飛び去り、時が飛び来

「だつて、隣の電話だからね」

「構やアしないわ。まだやつと一時かそこらでせう。あたしなんぞいつだつてほんとに眠るの

は二時三時よ」

「それアね、電話なんぞ明日の朝だつて構やアしないんだけれどもね」

「ぢアなにがいけないのよう」

娘の聲音は、いかにもじれつたさうだつた。

「だつてさ……」

また云ひ盡つてゐたが、思ひ切つたやうに、あつが早口になつて、「小母さん、へんに思やアしないかしら」

「へんとは……？」

「今ごろ二人ツきりで歸つて來たりして……」

「だつて、それア、あなたが門のところからすぐに歸つて了つたとしても、あたし阿母さんに話すわよ。今時分一人で歸つて來たなんて云へば、

それこそ叱られちまふわ。へんに思はれるどころか、あなた親切だつて、きつとお禮を云はれるくらゐなもんよ。そんなこと、ちつともなん

ともありやアしないぢアないの」

「お禮を云ひながらだつて、へんに思つてないとは限らないからね」

「ぢアいいわ、どうでも勝手になさい！ さつき

泊つて行くつて云つたといつて男のくせに……

「なんだい、送つて來たり惱られたりしちア合

ないや」

「惱つてやしないけど……」

「ぢア、いゝよ、泊つてくよ」

「きつとね！」

肩の丸味で念を押してよこした。

「その代り、へんに思はれたつて知らないよ」

「えゝ、いゝわ、構やしないわ」

「よし！」

と云ふと、青年は、マントの下から手を出して、娘の手を求めた。待つてゐたやうに、すぐ

堅く握り合され、「きつとだね」「えゝ」「うれし

い」「あたしも嬉しい」——そんな風な言葉が掌

と掌とで囁かれた。

手を握り合つたまゝ、一二町行つて、或る冠木

門の前に立つた。丸火屋の薄い光の下で、二人

は、正面に目と目を見合せた。——すぐ、莞爾

とはころびた唇の上に、惱つたやうな眞面目

な青年の顔が伏さつた……

突然、半鐘が鳴つた。

無言で、意味深げな胸を取交すゝ、急いであ

けた耳門を、娘から先にはいつて、二間小砂

利を踏んで内玄関へ來た。月が一枚だけ引き残

してあつた。

「千代や」

格子の鈴を鳴してはいるなり、憚りのない聲

で、「ちよいと、火事だよ」

女中が二人とんで出た時には、娘はもう上

へあがつて、肩掛でコオトをかなぐり捨ててゐ

た。

「お歸んなさいまし」

「阿母さんは？」

「お茶の間においでなさいます」

「堀さん、あなた早く二階へ行つて、どの邊だ

か見て來て頂戴よ」

云はれて、筆で、沓ぬぎに立つてゐる青年に氣

がついて、

「あら、……いらつしやいまし

と、もう一度べたと外つた女中たちに、

「でも、そのスキツチをひねつて、堀さん

をお二階におつれしておくれな」

さう云ひつけて置いて、娘はあたふたと廊下

を茶の間の方へ行つた。帽子やマントを一人の

女中に渡し、もう一人の手に渡されて、青年は足

口に梯子段をあがつた。火事のおかげで、いき

なり茶の間へつれ込まれないですんだのを、心

ひそかに喜んでゐた。



「おゝ苦しい」

眞ッ赤になつて、ハア／＼息をきらしてゐた。男の子は、迎へよつて、手をとると、いきなり一散走りに駈けだした。首がうしろへガクンとなるほどに、腕が抜けるほどに、力一杯引ッ張られて、女の子も夢中で駈けた、二人の足は、夏草よりも、むしろ宙を踏んで……

## よる

蒼暗い空に、凍てついた星の数はたんとでもなかつた。

風は風ぎ、大氣は冷えきつて、轍のあとをそのまゝに、往來が石になつてゐた。

高く低く空を割つた屋根の下に、家々は大方もう戸を鎖して、藥屋、唐物屋の飾窓、蕎麥屋の腰高障子、小さな煙草屋の、うちから金布の幕を引いた硝子戸、自動車屋の車置場、——幅をもつた火影としては、さうした店の前にしか流れ出してゐなかつた。濕氣の滲れ果てた空氣には、軒燈や看板の照明はにじみもしずに、ポツンポツンにべもなく續いた。

兩輪はづして立てかけてある手車のそばから、のそりと起きあがつた大が、用ありげに、

電車通りの方へ出かけて行つた。そつちの空には、カアン／＼と、金槌の音が響いてゐた。

釣鐘マントと、鼻のさきまで肩掛を巻きつけた束髪と、二人の姿が一つに塊つて、五六軒しもた屋の並んだ薄暗がりから、錢湯の、高山の景色を描いた看板を照す五十燭ばかりの灯の下に現はれて來た。首をすくめ、前こゝみになつて、小刻みに、薩摩下駄と薄齒の足音が揃つてゐた。束髪の前が、丁度、深くかぶつた鳥打帽で、いくらか押しひしやげられた耳と、すれすれの高きだつた。

角を一つ曲ると、支那蕎麥の屋臺がズルリズルリ動いて來た。ほんの心もち二人の肩が離れて、すれ違ふと、脂ツこい肌からでも立ち騰つたやうな濕氣に、生温かく二人の頬が舐められた。

「クフン」

息で鼻の穴を清めてから、「臭いな」

「えゝ、ほんとに……」

それきりで、二人はまた前の沈黙に返つた。往來は、だん／＼淋しい屋敷町になつて行つて、薄齒の音が冴え、響き互つた。

「だけど……」  
五六歩も歩いて、まだ男はそのさきを云ひ出

さなかつた。

「だけど、なアに？」

「やつぱり僕、送つて行くだけにしようよ」

「あら、なアゼ？」

「悪いもの」

「あら、ちつとも悪くなんぞありやアしないわ」

「だつて、今時分から行つて、寢床やなんか、小母さんに悪いや」

「ちつともそんな心配いらないうわ。うちぢや、しよつちうお泊りのお客様があるから、いつだつて二階の押入にちやアんと用意がしてあるんですもの」

「だけどね、なんだか……」

またそれきり黙つて了つたので、娘は顔を鎖き込むやうにして、

「どうしたの？ そんなこと云つたつて、第一今時分から歸れやしないわ」

「歸れるさ。まだひよつとすれア赤電車に間に合ふかも知れないし、なけれア俵を探すよ。俵もなけれア歩いたつて知れたもんだ」

「あら、歩いちア大變だわ。そんなこと云はな

いで、泊つていらつしやいよ。歸つたらすぐに電話でうちへさう云つとけばいゝんぢやないの」

## 病氣見舞

口の微(び)かなる貧(ひん)乏(はつ)家の常連(じょうれん)で、夜(よ)よりも晝(ひ)の繁(はん)昌(さか)する青嵐亭(せいあんてい)の食堂(しきどう)も、一時(ひととき)を廻(まわ)るとうろたへた。階段(かいたん)をあがったとツツきの帽子(ぼうし)臺(だい)に掛けきれないで、そばの卓(た)にまで積みあげてあつた帽子(ぼうし)や外套(がいとう)が、今は數(かず)へるほどしかなく、角帶(かくたい)前掛(まへかけ)と云ふ變つたこしらへ、のボオイたちも、まづ一服(いっぷく)と云ふところで、カアテンの蔭(かげ)に姿(すがた)をかくして了(しま)つた。どんよりと曇(くも)つた空(そら)の光(ひかり)は、煉瓦地(れんがぢ)の、明治(めいし)初年(しよねん)風(ふう)な、窓(まど)の小さい建(たて)ものゝ室内(しやうない)を、しめやかに小暗(こくら)く見(み)せてゐた。

赤い房々(さかき)とした髭(ひげ)を採(と)みあげながら、外國(がいこく)の紳士(しんし)が、トイレットルームを出(で)て來(き)て、つれの日本人(にっぽんじん)を促(うなが)して歸(かへ)つて行(い)くと、あとはもう一組(ひとくみ)しか残(のこ)らなかつた。——歳尾(としお)近い午後(ごご)の氣配(けい)は、荷馬車(はばしや)の轍音(わだかま)にも沁(し)んで、なんとなくあたりがひっそりする……

「……と云ふわけでね、この取組(とぐみ)は、あつしやアきつと面白(おもしろ)からうと思(おも)つてゐるんだ——堂(か)いっぱいに片寄(かたよ)せた小さな角卓(かくくわ)子(こ)に煙(へん)草(そう)をつき、左(ひだり)で、半(はん)分以上(じゆうじゆうじゆう)飲(の)んだホット・ウキス

キイのグラスを弄(もてあそ)びながら、かう云(い)つてぢつと相手の顔(かほ)を窺(うかが)き込んだのは、色の淺黒(あさくろ)い、角(かく)刈(き)にした美貌(びやうぼう)の若者(わかしや)で、素人(しやうと)では、いくら二十七八(にじゅうしちはち)と見えるその年(とし)ごろにしても華美(けいび)すぎる、赤入(あかひ)の唐棧柄(からせきがら)の結城(ゆうじやう)を、羽織(はおり)だけ少しあらめに繰(く)らして、すらりと延(の)びた體(からだ)に、ごつく着流(きりやう)してゐた。

差向(さむかひ)ひに、これは生のウキスキイと炭(すす)釜(かま)水を前にして、薩摩(さつま)の蚊紬(かぶつ)の揃(そろ)に、ほとんど無地(むぢ)と見える結城(ゆうじやう)の袴(はかま)を穿(は)き、若白髪(わかしやう)のまじつた粗剛(そこう)さうな毛(け)を、分(わ)けたとも搔(か)き上げたともつかずモシヤクシヤさせ、胃弱(いじやく)らしく青黄(せいわう)色(いろ)い、彈(だん)力(りき)を失(うしな)つた皮膚(ひふ)を脂(あぶら)らぎらせて、少しすわりかけて來(き)た眼(め)で、疑(うたが)ひぶかく見返(みかへ)しながら、ニヤリニヤリしてゐるのは、つい近頃(きんごろ)賣出(うりだ)した劇作家(げきさか)の三好胤夫(みやういんぷ)で、明(あ)けて三十(さんじゅう)にならうと云ふ青年(せいねん)だつた。

然(しか)し、一體(いったい)君(きみ)は、それを誰(たれ)から頼(たの)まれたんだい。まさか當人(あたひ)からぢかぢアあるまい？」

「いえ、それアなんですよ……」

「女將(おんなしやう)さんだらう？ 君(きみ)アあれを願(ねが)つてゐるね？」

どうだ、睨(にら)んだこの眼(め)に問違(まじまじ)ひはあるまい、と云(い)つた調子(てうし)で、骨太(ほねた)な、厚(あ)ぼつた胸(むね)をぐつ

と椅子(いす)の背(せ)に反(そ)らして、下目(しため)に見据(みす)ゑたが、相手(かた)の手(て)は、嚙(か)んでほき出すやうに、

「じよ、冗談(じやうだん)いつちアいけない！ いくつ違(ちが)ふと思(おも)つてゐるんです」

「年齡(ねんれい)の違(ちが)ひを問題(もんだい)にする市川瀧十郎(いちがわたきじうら)が知ら」云(い)ふなり三好(みやう)が、甲高(こうたか)い引笑(ひきわら)ひに笑(わら)ひ崩(やぶ)れるのを、でれ隠(かく)しの、さそくの頓知(とんち)に、ボオイ部屋(べ)の方(かた)を窺(うかが)つて、右(みぎ)で、形(かたち)をつけて抑(おさ)へ、

「シー……隠密(かくもく)々々」

それから急(いそ)に眞面目(まじめ)な顔(かほ)になつて、「然(しか)し、それア先生(せんせい)、……なんぼなんでも、あれアどうも……それアあんまりひどいや——」

「さうか知ら、そんなに云(い)ふほどか知ら。……君(きみ)、なんだぜ、別に何(なん)も謙遜(けんそん)する必要(ひつよう)はないぜ」

「いけませんよ、抑(おさ)ゆつちア」

「だつて……」

「あつしやア、さうならさうと正直(しやうじき)に云(い)ひますよ。そんなこと、先生(せんせい)に隠(かく)したつて仕樣(しやうよう)がないぢアありませんか」

「ところが……」

「まあさ、さう云(い)つてお土砂(どしや)をかけられたら、すなほに、成程(なほほど)それもさうだ、と思(おも)ふやうでなくつちア……」

「なくつちア？ どうだつて云(い)ふんだい。粹(いさ)な



「なに、二つ番だから大丈夫だ」

押入から座布団を出さうとしてゐる女中へともなく呟いて、階段をあがり切つたとツツきの高窓をあけてみた。

「やア、燃えてる〜」

斜右手の空に、まだ始まつて間もない火の手が、赫々と、鮮かに跳められた。

モク〜と力強い弧線を描きながら紅に、朱に、樺に、黄に、紫に、刻々色を移して立騰る煙や、あふりを食ふ度にはツと捲き起る火の粉の、ちらめく金沙子となつて消えて行く空には、月もなく風もなく、星屑さへも稀に、たゞ寂寥たる冬が凝つてゐた、——半鐘の音が、とんだ慌て者に聞えるほど、寂まり返つてゐた。それだけに、遠い物音、人聲が、たゞひと色に、唸るが如くに聞えて来る。青年は、なんとも云ひ表しやうのない、たゞ（やア……）と云ふやうな感動で跳め入つた。なかに一つ、（綺麗だ！）と思ふ心だけは、はつきりしてゐたが……。

一どの邊でございませう」

女中がうしろに立つて云つた。

「さア、××あたりかな、それとも、もうちつと遠いかも知れない」

「見えて？」

勢よく梯子段を駆けあがりながら、娘は聲をかけて、「どのへんなの？」

續いて娘の母親が、しと〜とあがつて来た。

薄暗い廊下で、立ちながら挨拶を交せばすむことを、この偶然の出来事に、もう一度感謝しながら、すぐ青年にそばへよつて、

「小母さん御無沙汰いたしました」

「どうも、實さん、お世話さんでございました。」

もつと早くお暇すればいゝのに……寒いところを態々送つて頂いたりして……。あなた、今夜泊つていらつしやるね？ えゝさうなさい。

ほんとうにお氣の毒さんでしたね。……どう？

火事は見えますか」

すぐ話が、どの邊だらうの詮索に移つて、母親の中に、三人首を並べて眺めてゐたが、その

見當に住んでゐる知人と思ひ出すと、まだそこにゐた女中に、交渉局に聞き合せると命じながら、一緒に階段をおりかけて、

「ぢや、今すぐ床を延べさせますからね。あたしは御免かうむつてお先にやすみますよ。……

お母ちゃん、お前さんいつまでも窓から顔を出して、風邪でもひくといけませんよ」

と、母親は云ひ残した。

丁度胸の高きの窓に兩肘を置いて、それか

ら暫くの間二人は黙つて眺めてゐた。——火

事からうける感動は、決して永くは保たなかつた。もつと盛に焼ければいゝ、さう思ふ心で、

やつと自分を紛らさうとした。然し、やがて二人の心は、まつたくそこから離れて了つた。眼

だけが、たゞぼんやりと美しい火の舞を見詰めてゐるにすぎなかつた。

……いつの間にか、肩と肩とがびつたりと押しつけられてゐた。今度は、マントとコオトとの厚みだけへつてゐた。その上、歩行によつて動かされなかつた。靜に……靜に、いろ〜のことが感じられた。

青年は震へ戦く足を組み違へ、片一方を爪先立てた。薄べつたい甲が、その爪先の下に敷かれたが、動かなかつた。そろ〜と踵からおろして、たうとう踵が、ペタリと重なつた。

決して顔を見合せなかつた。眼は、寢寢を極めた冬の空に舞ぶ火の粉を追つてゐた。チラチラと、それは眩暈ばかりだつた。……時が飛び去り、時が飛び來つた……。青年の腕が、横抱に娘を抱いた。娘は、脅えたやうに、顫へる息を深く吸ひ、靜にそれを吐き出しながら、むかう向に、窓框に置いた肘の上に、ゴツと面を伏せて了つた……。

「あの人、なんとか云つたね」

「お澄ちゃん……」

### 三

「あゝさうく、お澄さん……」

三好はエアーシップに火をつけて、なにかひとりでニヤ／＼しながら、「あゝ見えて、もう二十二三だらうね」

「いゝえ、一ですつて。それであなた、まだ男を知らないつてんだから……」

「そいつアどうも……、なんてつたつてうちの商賣が商賣だし、あんまり當にならないが、先刻の君の話をやうだとすると、兎も角大ぶん古風だね、今時そんな……二十一のもなつて、芝居でつた一通見かけたつきの男を忘れかねて、くよく／＼してるなんて娘さんが、今時實際にあるもんかねえ、ちよつと信じられないくらゐだな。おまけに見初められたのが、藤代の信さんとはね……」

「だからアッしやア、この取組はきつと見物だらうと思つて、是非とも今日は紀尾井町さんを引つ張り出すつて云つてるんです。どうです、これア先生も賛成でせう？」

「だつてお澄さん、めつたに座敷になんぞ出て来やアしないぢやアないか」

「めつたにどころか、絶対に出やアしませんよ。あれで、あの姉さん、中々やかましいんですからね」

「それぢア、揃つて出かけてみたところで仕様のない話ぢアないか。たゞ晩飯を食ひに行くだけのことなら……、君の前でさう云つちアなんだが、あすこは大してうまかアないぜ」

「それアいつもならさうですけど、藤代さんが見えたとなりやア、お澄さんが出てお酌だつてしてくれない限りぢアありませんからね。それアもう女將さんだつて承知だし……」

「そんなやかましやの姉さんが、よくまたそんな浮いた話を平氣でゐるね」

「浮いた話どころですか。さつきも云ふ通り、患ひつかなきアいゝつて、みんなが心配してるくらゐですよ」

「本當かい？」

「誰がそんなこと……」

「いや、嘘だとは思はないが、一體君の話は大袈裟だから……」

「ぢアまあよござんす。行つてごらんになれば分るこつてすから」

「ふん、さうかねえ。ちよいと見たところぢア、健康さうで、相應お洒落で、戀患でもしよろ

つて風にア見えないがね」

「兎に角そいぢやア、紀尾井町さんへ電話をかけてみませうか」

「かけ給へとも。かけるくらゐなら、ちつとも早い方がいゝよ」

「ぢア、勿論先生は附合つてくださるんですね」と、椅子を立ちあがりながら念を押して、「然し弱つたな。アッしやアこのごろ、すつかり奥方をしくじつてる人なんだから……。先生、矢ッ張りあなたの方がいゝや。すみませんが、先生かけてくださいませんか」

「駄目々々！ 俺なんぞなほ駄目だよ。細君の信用、ほとんど零だからね。役者と云ふだけで、君の方がずつとましだよ。それアなんてつたつて、役者の魅力つてものは大したもんだよ、それア矢ッ張り君の方がいゝよ」

「へんなこと云ひつこなしにしようぢアありませんか」

「まあ、そんなこと云はずにやつてみ給へ、きつと大丈夫だから」

苦笑ひをしながら、瀧十郎は立つて行つて、部屋隅にある電話にかゝつた。

四

やがて先方が出て、取次の女中がひつこむと、

(13)

人ぢやないつてえのかい？」

「いゝえ、どういたしまして。……とても出世は覺束ない……」

二

それで、二人聲を揃へて笑つたが、三好はあたりを見廻して、

「なんだか馬鹿に暗くなつて來たね」

濃霧の壁紙が、光りを吸ひとつて、部屋の空氣はしつとりと暗み、早くも夕方が迫つたやうな心持だつた。瀧十郎は、左の袖口をちよいと押しあげて、親指の頭ほどの腕時計を見てから、椅子をずらせて窓近く額をよせた。

「ちつと暖かすぎると思つてたら……、こりやアきつと雪ですぜ」

「さうさねえ……」

誘はれて空を見上げながら「同じ降るなら雨ぢアつまらない」

「然し雪だと、またこれでお物人です」

「何を！ 役者の云草ぢやアないぜ」

云はれると、有繋にちよいとれて、瀧十郎は、ホット・ウキスキーを一口飲んで、

一時に、肝心の話がどつかに飛んでつて了ひましたが、紀尾井町さん、どうでせう、出て來て

くださるでせうか」

「それア、うちにゐさへすれア、大將のこたから、大抵出かけて來るだらうけれど、……一體、どうする氣なんだい、こゝへ來て貰ふのかい？」

「さアそいつですよ。どつちがい、でせう、ぢかに彼方に来て頂いた方がいゝかしら」

「だつて君ア、女將さんに、見舞に來いつて云はれてる人だらう？ さうとすれア、いづれ女將さんの臥てゐる部屋に通される……」

「それをおツしが助けて頂きたいんですよ。すッとお客であがつて置いて、ちよいと二三十分階下に顔出しをして、今日は三好先生と御一緒だから、つて云ふやうなことで、すぐ逃げ出し

て來よう、——ま、正直な話がさう云ふ意氣

なんですから……」

「おい、いゝ加減に馬鹿におしよ。なんぼ俺が附合がいゝつたつて、女よけの呪禁にまで使ふこたアないだらう」

「いゝえ、さう仰有るものに角が立ちます

が……」

「どう云つてみたところで、それに違ひないぢアないか。つまり、いろにはなまじ連は、魔、あれの丁度正反對の場合だアね……」

「ぢア、可厭な女には却つて連が要る、ですか。

悪い語呂だな」

「それもいゝが、借つてえ人は、悪くすると階下へ行つて銀座通りでバツタリ三好さんに

出つくはしちまつて、どうしてもまけなかつたから、仕方なしに一緒につれて來た」ぐらゐの嬉し

がらせを云ひかねないんだから、こいつ、なん

ぼなんでも役が悪すぎらアね」

「あ、あれだ！ なんぼなんでも、あツしやアそんな人の悪いまねはしやアしませんよ。それ

アあんまり残酷だア」

「ところがね、ほかのことと違つて、事ひとた

び女に關すると、忽ち友情もへツた、れも

なくなつちまふんだから……」

「誰が、あツしがですか？」

「いゝえさ。誰彼と云はないでも、凡そ男つて

そんなもんだらうぢアないか」

「それア先生、こつちからかつかと逆上あがつ

てるやうな時なら、それアそんなこともないとは限りませんけど、何しろ相手があれぢア……。

これが妹さんの方なら、またつてこともある

が、こつちでさう思ふ人は、たゞの一遍でいゝ

から紀尾井町さんに逢はせてくれツてんで、ま

るで草紙紙にでもありさうな惚れやうをしてゐ

るんだから……」



いよ」

「あゝ、それぢア困りますよ、先生！」

「甘ったれた調子で、體を捐りよせ、三好が耳にあてがつた受話機のそばへ、自分の耳もつけて行つて、一緒に彼方の言葉を聞かうとした。ちつとも氣乗のしない顔をしてゐながら、電話口に立つと、三好はなかく調子がよかつた。だん／＼形勢を變へて行つた。

「……えゝ、さうですよ、一體萩原なんぞ……」

と、瀧十郎を本名で呼んで、「……萩原なんぞうるさいから、いゝ加減喰ひ荒らしたら二人でうまく消えちまふですね。……えゝさうですとも、ほんの口をよごしてやりさへすればいいんですよ。……えゝ／＼えゝ、それに、今夜はきつと雪になりますよ。夜の雪見はちよつとまたよござんすからね。……えゝ、承知しました。ぢア、すぐお出かけなさいませんか。え？ とこゝろですか……？」

「あゝ、それアあツしからよく分るやうに申しあげませう」

いよ／＼來るときまつたので、ほく／＼しながら、瀧十郎は、もう一度受話機を奪ひ返して、よし野の町どころを傳へ、幾度も馬鹿念を押して、電話を切つた。

「あゝ、まアよかつた」

「どうだい、龜の甲より年の功だらう」

さきに椅子に歸つて、半分ほど残つてゐたウキスキを一口息にあふると、三好は、ことさらに得意さうな容子をしてみせた。

「いや！ たゞもう恐れ入りました」

「こんなことなら、はつきり懸念をきめとくんだつてなア。ねえおい、瀧さん、一體懸念はど

う云ふことになるんだね？」

「ようがす。ちやアんと心得てます」

と、立つたまま、大きく胸を叩いてみせるのにかぶせて、

「なんだい、こゝの晝飯かい？」

「いゝえ……」

「そんなこつちア済まされないう」

「謀略は密なるを以てよしとす。まア、だまつてあツしにお任せください」

「よし！ ぢアこゝはひとつ、俺が拂つて行かう」

「いゝえ、先生、それアほつといってください」

「まアいゝやね。かう云ふ安いとこなら、いかに文筆労働者でも引きうけられるよ。もう一つ露骨に云やア、せめてこんな時にでも……、つてえやつさ」

云ひながら、卓をコツ／＼と叩いてボオイを呼び、まだ四圍々々云つてゐる瀧十郎を押しのけて、勘定をすませた。

「イワイノリ(祝儀)は？」

「ボウ(一圓)でいゝでせう」

一部の文人の間に、行はれてゐる隠語で、そんな風に囁き交す、利便の中からそれだけ残して、二人は帽子臺へ行き、ボオイに手を貸されながら外食を着た。有難に役者らしく、瀧十郎は黒天絨絨の襟巻でふか／＼と顔を包み、榻の中折を目まで引きおろして、ボックスの小型の手提をぶらつかせながら、

「どうもお世話さんでした。いつも永つ尻でお氣の毒さん……」

などと愛嬌を残して、階段をおりた。

「君ア草履か。いやが上にも僕ばかりヒロロ長く見えるわけだな」

眞新しい八幅黒をすげた紐の細い胸下駄を、ステッキの先で引きよせて穿くと、三好は先に立つて、硝子扉のそとに出た。

六

煙簾に曇つた空は、陽の在所も見せず、まだ三時を廻つたばかりなのに、——例へば霖雨ほどの光りしか落してよこさなかつた。眼性の悪

瀧十郎は、大きな目の玉だけをギョロリと三好の方にむけて、

「お宅でしたよ。……もうこつちのもんですね」

と、ニコ／＼するのを、三好は故意と冷淡に、たゞ鼻のききでフンと笑つてゐた。

「あ、もし／＼」

暫くすると、電話口で、いくらか聲の調子をとリ續つて、「え、旦那様でいらつしやいますか、手前瀧十郎でございます、誠にどうも御無沙汰ばかりいたしましたして……」

片手を懐に、横着な顔つきをしながら、そんな風に言葉ばかり馬鹿丁寧にやつてゐるのを見ると、有樂に三好は、ちよつと可厭な氣がした。まさか賣出しの花形役者が、挨拶の言葉につれて、電話口でビョ／＼頭をさげるほど律義であらうとも思ひはしないが、旦那さまの手前だのと、ふだん顔と顔とを見合せては決して使ひはしない他所行き調子をもち出すにも及ばなからうに、へんな奴だ！　ぐらゐの氣持でも、苦々しげに口を歪らした。すると彼方の電話口に出てゐる人にも同じやうに感じられ、それを云つたとみえて、急に瀧十郎が大聲に笑ひだしながら、

「……へ、へ、これアどうも……へ、誠に相済みません。あゝ、相済みませんもいけないんですか。ちアもういつそ引抜きになつて、フーさん、あツしですよ、とやツつけますか。……え？　え、昨日が顔合です。……え、さうです、今度ばかりに樂です。でも、大喜利につかまつてますから……。え？　御冗談でせう！　そんな筋があればア……」

やゝ暫くそんな冗口ばかり利き合つてゐたが、潮加減を見計らつて、晩の食事を木挽町のよし野で附合つてくれないか、今は三好と一緒に青嵐亭にゐるが、来てくれるなら、二人ですぐ彼方へ行つて待つてゐるから、と申し出たが、相手はいろ／＼愚圖ついてゐるらしくつた。

「……なにも、御存知ないうちだつていゝぢやアありませんか。いつかもあたしくしから、一度お願ひしたことがあると思ひますよ。その女將が大へん品展にしてくれそうです。……え？　義理の御附合なんぞ御免だ？　そんなこと仰有らないで……。いゝぢやアありませんか、たまにはこんな顔でも立ててくださるもんですよ。……え、分らない？　いゝえ、すぐ知れますよ。もしんなら、こちらからお迎ひの自動車を差

上げませうか。……あゝ、さうですか、成程……。また昨夜あたりお宅をおあけなすつたんぢやアないんですか？　……いゝえ、あてになるもんですか。……冗談は冗談として、ほんとに今夜だけは、ひとつあたしに體を貸してくださいませんか。……あれだ、とてもかなアない……。ぢやアね、三好先生に出て頂きますから。……えゝ、とてもあたしぢやア駄目さうですから……。いゝえ、いけません／＼！　……ぢア、ちよつとお待ちくださいまし……。……」

受話機をひっかけるところを、右手で抑へて、振り向くと、  
「先生、どうかひとつ……。なんだか知らないが、とても頑強ですよ。あなたにお任せしますから……。懸賞をつけてもいゝ……。……」  
「なんだい。君もまた馬鹿な熱心さだね」  
「えゝ、もうかうなれア意地づく……。腕づくでも……」

## 五

「電話の腕づくはちつと無理だらう」  
云ひながら三好は、さも不承無精らしく椅子を立つて、若い役者の手から受話機をうけとりに行つた。「僕ア然し、一應は勧めるが、もともと外中立の立場だからね、責任はまたな

を催ほさせて十分新鮮だつた。人道に沿つて立てた丸太、上に渡した貫を、手早く紅白の布で巻いて行く仕事師の、いゝ年齢をしたのでも哀げには見えなかつた。右へ左へ行き交ふ人通りのなかには、手廻しよく買物に出た奥さんたちの姿が殊に目立ち、帝國ホテルあたりの客らしい、夫婦づれの外國人が、腕を組んで、午後散歩がてらに、節窓を窺き、行くのも、なんとなく、まださう押しつまらない歳尾の風情だつた。

「眞つ直に彼方にぬけちまはう」  
話しながら行くのに、人通りを避けようとして、三好は、ひとわたり右左の賑ひを望んでから、さうつれに聲をかけた。

「えゝ、さうしませう」

都會人の敏捷と落つきとを以て、二人の青年は樂々と電車通りを横ぎつて行つた。食後に四杯まであふつて、ちよつといふ機嫌になりかけてゐた三好も、冷たい外氣のなかに出では、どんな醒めて行くのが感じられた。それだけに、汗ばんで、眼鏡がうつすり翳つた。貪慾に享樂を想ふやうな心が、その薄暗い視界から湧いて來た。そこには、この場合、——と云ふのは、一口に云つて了へば、かうして瀧十郎とつれ立

つて歩いてゐるのでは、だん／＼苛立たしい氣持に誘ひ込まれて行きさうな、へんな豫感が作つてゐた。

「しかし、役者はいゝね」

「なんです、だしぬけに」

云つてゐる意味はおよそ呑み込めてゐるが、一應瀧十郎は、さう反問した。いゝ理由を、もう一つはつきりした言葉で言はせてみたかつた。

「一體なんだよ、この世の中に、役者くらゐ怪しからぬものはないね」

「おや、今度は、忽ち怪しからなくなつちまつたんですか」

その、おどけた調子にはかけ構ひなく、

「一體、君たちは、なぜ女に騒がれるか知つてるかい？ 君なんぞは、自分がいゝ男だからだと思つてるだらうね」

「手厳しいなア。……さう思ふのは間違ひで、實は大甘なんではうね」

さうは云つても、然し、ごく心底の自惚は少しも傷つけられずに、たゞ先滑りをして、相手の云はうとするところに阿つた調子が露だつたが、三好は、氣にもとめないで、

「君なんぞはまあ、なかぢア、實際にもいゝ男の方だし、その道にかけちア勿論、澤人だし」

「よしとくださいよ。それぢア、藝にかけちア大根だか……と云はないばかりぢアやありませんか」

「さうさ。またそれに違ひないぢアないか。それとも、自分ぢア藝にかけては澤人で、その道の大根だとも思つてるのかね？」

「あやまつた！ 三好先生にかゝつちア、あッしア、まるでもうなしだね」

「冗談いつちアいけない。なしつてえのはそんなもんぢアないよ。いゝ男で、その道の達人だ、……男として、これ以上結構な褒められ方はないだらうぢアないか」

有聲に瀧十郎は、不憚な顔をして黙つて了つた。冗談にも、凡そほどのあるもんだ！ と云ふやうな氣持だつた。ところが、三好は三好で、存外人眞面目だつた。

## 八

「それにしてもだ……」

と、三好は言葉と續けて、「それにしても、若し君が素人だつたら、今の四分の一ほどでも、女たちにちやほやされるかどうか分りやアしないぜ。つまり個人としての君に惚れるよりも、役者と云ふものの、魅力に目が眩んで了ふ女たちがかなり多いんだからね。その心理を解剖し



い三好には、六七間さきは、もうものゝ文色もはつきりしなかつた。で、芝居を見る時とか、夕方や夜そとを歩く時とかに限つてかける、十二度の近眼鏡を、袂のなかに探りながら、

「一體、女將さん、どうしたんだい。病氣つたつて、……君に見舞に來いと云つてよこすほど重いのか、それとも、さう云つてよこすほど軽いのか、どつちなんだい」

この、ちよつと氣の利いた質間の仕方に、我ながら微笑まれて、眼鏡をかけ終へた目尻に、鳥の足跡のやうな皺を刻んで、人道を押こんで歩いて行く瀧十郎の顔を覗き込んだ。

「ウワツワ、ハウワウツワ」

堅く巻きつけた襟巻の下で、猿轡でも囁まされた人のやうに、何かわけの分らないことを云つて、それから鼠色の革手袋をはめた指先を鼻の下に突つ込み、堅さをゆるめながら、「ダイシワ、こつちアないんでせう」

「おい、誤魔化さないで、はつきり口を利きねえよ、はつきり」

故意と、江戸前に、二番目がつて云ふと、その時やつと襟巻を顎の下までたくし下した瀧十郎が、子供のいや／＼のやうに首を左右に振り動かしながら、

「僕誤魔化しなんぞするもんですか。……大したことぢアないんですよ。ねたり起きたりしてゐるらしいんです」

「風邪かい」

「いゝえ、疱瘡……」

「え？ 疱瘡？……俺アよすよ、さるよ。とんでもない話だ……」

「あ、いゝえ、疱瘡は間違ひ……。あの、そら、なんと云つた……えゝと、あのウ……、らん、麻疹麻疹！」

「麻疹だ？ 冗談ぢアない、子供のする病氣ぢアないか……」

「でもさうなんです。あれ、大人になつてからでも罹る人がありますぜ。女將さんのは二度目なんですつて。だから、輕いんですつて」

「ふうん、然し麻疹とは、この忙しい歳尾に來て、輕氣な病氣をやつたもんだなア。一體、今度あの人はいくつになるんだい」

「たしか、丁度でせう」

「丁度たア、四十かい」

「いゝえ、それア、なんぼなんでも可笑想ですよ……」

「へーえ！ ぢア俺と同年だ。午の七赤……。へーん！ さうかねえ。だが、とてもそれアさ

うは見えないぜ。四十は可笑想としても、五つや六つは慥に老けてるよ。……我が親なる瀧さんの前だけれど……」

「何もさう一々あつしに結びつけることはないでせう」

「あるかないか知らないけれどさ。……へえ、さうかい同年かい……」

三度瀧十郎の部屋で一緒にになり、その後つい先月、誘はれて四五人づれで昨飯を喰ひに行つてから、大ぶん附てがとれたとは云ふものゝ、その、ちよいと人を見下したやうな態度が氣に喰はないで、三好にはどうも好きになれない女だつた。それには、年も、先方がずつと上だらう、と云ふやうな氣持が含んでゐたものとみえて、同年と聞くと、急に、なんとなく今までの反感が薄れて行つた。へなアんだ！ と云ふやうな、與し易さから來る好感が湧いて來た。

## 七

銀座通りの店々は、すつかりもう歳尾の装ひだつた。無理にも人目を惹かうとする赤や青の大旗小旗は、風の落ちた空に、忘れてダラリと懸つたが、有聲に、（さアこれから一……）と云つた氣勢は、道ゆく人の胸に、年の瀬の感じ

堰いて、静にこぼしてゐる白水は、古綿雲のやうにモク／＼と、あたりの黝さに、じみ、擴がつて行つた。ちよいと足をとめて、見おろしてゐた三好が、

「おい瀧さん」

と呼びとめて、「今にプロレタリアの世の中つてえのが来ると、君のやうな人間が橋の上からあゝ云ふところを眺めて、あゝして暮すも五十年、とかなんとか獨白があつて、こんな天鵝絨の外套や帽子や襟巻を、ぼおんと川へ擲り込んで、きツと見得になるやうな芝居が出来るぜ」

「成程、鑄掛松の逆ですな」

「心氣一轉して筋肉労働者になる……」

「ところが、今だつてそれに違ひないんですもの」

「なアんでね……昔なら日本橋の叔父さんに訊いて來たな、つてところだが、『新演藝』かなんかで讀んだいな」

「兎に角あなたは不謹慎ですよ。あゝ云ふ哀な生活を見て、すぐ芝居に結びつけて考へるなんて……」

「藝道熱心の然らしむるところぢアないか」

「藝術至上主義ですか」

「生意氣にいろんなことを知つてゐるね」  
「それアもう、新時代の俳優は、ですな、須らく……」

「うるさいな」

やがて彼等は、上方風に、石疊の四尺路次を四五間も奥へひつこんだよし野の玄關ききに立つた。すぐに跳んで出て來たのは、髪ばかり綺麗にして、まだ口口の半纏をはおつた年増の女中だつた。

「まアお珍らしい！ さアどうぞ……」

愛想よく迎へると、正面の階段を駆けあかりながら、ほかの女中の名を云つて、大急ぎで火を持つてあがるやうに云ひつけた。

「お勢さん、まだあとから、もうおひと方みえますからね」

瀧十郎は先にたつて階段をあがると、一番奥の六疊に座布團を並べかけてゐた女中頭に聲をかけて、

「こつちはどうなんだい」

「あゝさやうですか。あたしはまた、お廣いところだとお寒からうと思つて……。ぢア桐にしませうか」

「桐つてどこだつて」

「あら、桐をお忘れんなるなんて……」

象のやうに細く、柔和な目に、意味をこめて睨みながら、する／＼と廊下を展つて來て、賣ツ子は、兎角にどうも薄情になつて困りますね

「あゝ階下か。階下はちつとどうも拙いな」

「なぜです？」

「女將さんの部屋まで聲が聞えるだらう？」

「あら、聞えちアいけないんですか」

「ぢアね、表の方の八疊ね、もしお約定がなければアあすこにしてくれない？」

「困りましたね。お約定になつてゐるんですけれど、他ならぬあなた様のこつてすから……」

「うまく云つてらア……。ぢア先生、どうぞこちらへ」

振向いてちよつと目で誘つて、まるで我が家のやうに瀧十郎は表の間へ案内した。

十

部屋の外に外套や帽子をぬぎ捨て、二枚敷かれた座布團の、床前に三好、折れ曲つて瀧十郎と席がきまると、そこに運んで來た手焙を一つづつ各自のそばに置いてから、お勢は座を退つて、あらためて丁寧に挨拶をした。

「いらつしやいまし」

火の氣のなかつた部屋に、冷い絹布團の上に、

てみると、樂屋に對する興味だ、見てはならないものに惹かれる憧憬だ。女たちの氣持にすれば、役者と樂屋とは、切つても切れない縁で繋がれてゐるんだから、例へば或る一人の役者が、性格的にどんなにあげすけな、平明な、素朴な男だらうと、女の方では自分勝手に、その男の性分なり生活なりに「樂屋」を感じて、奥行や陰陽をつけて、——一口に云へば勿態をつけて、各自の好みで、近づき難くも、面白可笑しく、または夢の世界の人のやうにも、種々雑多な妄想で飾りたてゝ了ふんだ。大抵利口な女でも、表に見えただけをその人と考へることが出来ないで、なんかまだ裏があるんだらう、どこまで行つたら底が見えるのかしらん、……で、「樂屋」につられくて、だんだん興味が深まり、厚意がいつの間にか戀愛になる、——まあざつとさう云つた手順さ。何しろ、表面のあたりはどこまでも明るく氣さくで、それで肚の底になんかしつかりしたものが感じられる、——さう云ふのが一番今の女の心を惹くらしいし、また本統にさう云ふ風なら、出來て人間に違ひないんだが……。ところで役者と來ると、その「肚の底のしつかりしたもの」を、永い傳統をもつた「樂屋」で間に合せる

ことが出来るんだ。勿論間に合せだから結局はくだらないんだが、それでも今の世の中には、一應も二應も通用して行くんだから大したものだ。いや、もつと正直にいやア羨ましいもんだよ……」

「へえ、成程、樂屋……ですかねえ」

さう身を入れて聞いてゐもしなかつた瀧十郎には、三好の説からはつきりした實感ほけみとれなかつた。「樂屋に對する興味」などと云ふ言葉が、安つぽく考へられた。

「すると、つまりなんですね、樂屋口になかつて來て、吾々の出這入りを見物してゐる千守ツ娘ね、——大抵の女が、つまりあの心理なんですね？」

「とも違ふさ。樂屋つたつて實際の樂屋ぢアないぜ。もつと廣く抽象的に云つた樂屋の意味だね。つまりものゝ裏さ。人間てやつは、男女に限らず、裏の好きなもんだよ、普通ぢア見られないところを見るのが好きなもんだよ。君たちは、自然とさう云ふものをうしろに背負つてゐるんだから、素人と比べると、少くも五六割の得があるのさ——」

「それで女が出來なかつたひにやア、人間、半分みたいたいもんですね——」

これには、三好も、思はず噴飯して了つた。肚の底に、獨よがりの傲慢を潛めて、小憎らしくてならない時があるかと思ふと、ふとまた「役者子供」の俚諺に洩れず、馬鹿々々しいほど他愛のないことを云つたり爲たりする、——それでついまたころりとまゐつて了ふ、——遠觀したやうなことは云つてゐるが、その實三好自身とても、「役者の魅力」には、可なりの程度にかゝつてゐたのだ。

「どうして、君なんぞは、素人にしたつて一人前は十分だから、つまり一人前半だよ」

「どういたしまして、役者が着物を着て歩いてるんです、萩原政二郎なんでものは、まるでないでさアね」

## 九

駄辯になれば、どつちも負けず劣らず、他愛のない應酬を續けながら、いつも荷馬車の往來の多い西豐玉河岸を北へ、旭橋を渡る頃には、堀に映る空のさへ薄ら冷たく、いきなり頬にぶつかつて行く小蟲にも、いよくぼつりと來たかと振り仰がれるほどにしづれかゝつた。動かない水の上に、浮ぶ——と云ふより置き忘れたあるやうな達磨船の體で、嬰兒をおんぶした女房が米を研いでゐた。眞つ赤になつた手で



「それアお前さん、三好さん……」

と云ひかけて、ちよつとうしるを振返り、一段と聲をひそめて、「三好さんなんぞに捉まつたが最後、どうしたつてもう道れつこないに極つてらアね。さうとすれア、——どつちみちつれて来なきアならないとすれア、一人も二人もおんなじこつたから、途中で電話をかけて……、あとから来るの、誰だと思ふ？」

「兎に角まア、女將さんの部屋へいらつしやい——お冠かい？」

「それだつて、貴方の顔を見れアなんにも云へやアしませんよ——」

云ふなり、左に瀧十郎の手を把つて、とんとと梯子段を軽く踏んで二足三足おりかけたが、振りむいて、「ほんとに、これッきりもうおつれさんは駄目よ。それもいゝけど、文士なんて……、新聞にでも出されたら困るぢアありませんか？」

「そんな、新聞に出されるなんてことはないけれど、あゝ云ふ人たちと来たら、とツつかまつたら中々はなれないんだからね……、それよりね、あとから藤代さんが来るんだぜ」

「藤代さんて……？」

「なに云つてるんだい。例のお澄ちゃんのこと」

「」

「あらさう。……へえ、ほんとですか」

「ほんととも。これが、なんにも知らずにやつて来るんだが……」

「さうですか。ぢア早速さう云つて知らせあげよう」

「こつちに来てゐなさるんだね？」

「ねていらつしやると、女將さんがもうちよつとの間でも側をお離しなりましたからね」

話しながら梯子段をおりて、帳場と臺所との間の暗い廊下を行くとき、お勢け手い茶盆を配膳棚の上に載せ、酒の支度をしておくやうに聲をかけて、はすかひの渡りでつながつてゐる二三年前に建増した奥の住居の方へと案内した。

「ごめんなさいまし」

襖のそこから聲をかけて、お勢だけ先にはいと、立て廻した六枚折の蔭から顔を出し、膝をついて、「若旦那がお見えなさいました」

「へえ、さう、どうぞ」

廊下まで、——當の瀧十郎に聞えることを十分意識して、何しに來た、と云はんばかりの、ひどく冷淡な響きをこめた女將の聲が洩れて來た。

た。けれども、瀧十郎にとっては、その調子だけが意味ではなかつた。さう云ふ聞かせ」を使ふ心の奥が讀めてゐたから、却つて北男笑まれるくらゐのものだつた。一度行つとなくなつちアならないが、可厭だなア、またねち／＼やられるのか、——そんな風にいろ／＼苦にしてゐた氣持などは、かうしていよ／＼とぶどたん場へ来てみると、却つてさらりと消えて了つた。

——衣紋を繕ひながら、瀧十郎は、すつかりもう色事師らしい餘裕や落つきで、隙なく心を申つてゐた。

「どうぞおはいりくださいまし」

笑顔で振り向いて、廊下に聲をかけながら、押入から座布團を出してよいあたりに敷くと、すぐ下つて行くお勢と入れ替りに、なんの屈託もなげな歩調で、屏風を廻つてついといるなり、

「どうもこれア……」

と、瀧十郎は、故意とぶきツちよに頭をさげ

出入口と並んで半間の透欄、いぼの杉柱で仕切つた床には柄風の横物が贅澤な表装で懸つてゐ、折れ曲つた書院くづしの窓から一間、ま

## 十二

「どうぞおはいりくださいまし」

笑顔で振り向いて、廊下に聲をかけながら、押入から座布團を出してよいあたりに敷くと、すぐ下つて行くお勢と入れ替りに、なんの屈託もなげな歩調で、屏風を廻つてついといるなり、

「どうもこれア……」

と、瀧十郎は、故意とぶきツちよに頭をさげ

出入口と並んで半間の透欄、いぼの杉柱で仕切つた床には柄風の横物が贅澤な表装で懸つてゐ、折れ曲つた書院くづしの窓から一間、ま

急に外套(ぐわいこう)だけが薄着(うすぎ)になつて、ぞく／＼する背中(せなか)を振りながら、――火(ひ)にかざした手先(てさき)をこすり合せながら、

「お寒(さむ)う」

「いつぞやは御世話(おせわ)さんでした。いかがです、いつもお忙(いそ)しいでせう」

瀧十郎(たきじゅうろう)は愛嬌(あいぎょう)笑(わら)ひをした。

「いゝえ、なんです、それア暇(ひま)なんでございますよ。あたしなんぞ、こんなうまい風(ふう)をして」

ちよいと兩手(りやうて)を擴(ひろ)げてみせて、「まだお風呂(ふろ)へも行(い)かないんですよ。眞ッ黒(まっくろ)けでせう」

「どういたしまして。肌理(きめ)の細(こま)かな人の白粉(ひやくこな)ツけなしつてものは、またどうも、なんと云(い)はれないもんです」

「まア! 可怕(こわ)い!」

「可怕(こわ)いはよかつた!」

と、三好(みよし)は、ボンと横手(よこて)を打(う)つて、「いや、實(じつ)に實感(じつかん)が出(で)たよ。ねえ、お勢(せい)さん、全く可怕(こわ)いやうな口(くち)ですね。有縁(えん)にいゝことを云(い)ふよ、あなたは」

「時に……」

瀧十郎(たきじゅうろう)はけろりとしたもので、「女將(おんなしやう)さんはいかがです。自分(じぶん)で電話口(でんわぐち)に出(で)られるくらゐだか

ら……」

そこまで云(い)ひかけて、(まづかつた!)と、はつとしたが、丁度(ちょうど)三好(みよし)が床(とこ)の間の軸(ちく)を眺(なが)めて、こつちには背(せ)を向(む)けてゐたのに安心(あんしん)して、さあらぬ態(たい)に言葉(ことば)を續(つづ)けた。「なんでせう? もう起きておいでなんでせう?」

「いゝえ、まだねたり起きたり……」

云(い)ひながら、お勢(せい)は、眉間(まゆま)のあたり(あたり)に頻(しき)りと和衣(わい)を走(は)らせて、(ちよいとまア廊下(りやうか)へたつて来(こ)い)と云(い)ふ意(い)を打電(だいでん)して、「でも、おかげさんで、もう發疹(はつしん)はすっかりひいたんですけど、冷(ひや)い風(かぜ)にあたるのがいけないつてますから……。ぢアあたしは、ちよつと失禮(しつれい)してお風呂(ふろ)に行(い)つて参(まゐ)りますわ。……あの、召上(めいじやう)りものは?」

「えゝ、いつもの通(とほ)りお任せ(まか)します。それから……」

「お料理(くり)があがるまで、海鼠腸(こねわた)かなんかで一杯(いっぱい)めしあがる、――さうでせう?」

「その通(とほ)り! 兎(う)に角(かく)、つうと云(い)やアかあんだからね、この人(ひと)は」

笑(わら)つて二人(ふたり)の膝(ひざ)の前(まえ)から、あいた茶碗(ちawan)をさげながら、お勢(せい)はもう一度(いちど)瀧十郎(たきじゅうろう)に目交(めま)をした。

「ぢアお銚子(ちやうし)をすぐもつて來(こ)させます」

「えゝ。それから、なんにしてくださいな、餉(かづ)……」

臺(たい)に。お膳(ぜん)つてやつア、どうも吾々(われわれ)のやうな野人(やじん)には向(む)かない……」

三好(みよし)がさう口(くち)を出(だ)した。

「承知(しやうち)いたしました」

茶盆(ちawan)を片手(ひとて)に、お勢(せい)が立つて襖(ふすま)のそとに出て、あを閉(と)めて切(き)らうとした瞬間(しゆんかん)に、

「ちよいと……。それからね……」

と聲(こゑ)をかけながら、すぐ瀧十郎(たきじゅうろう)は立つて行(い)つて、襖(ふすま)の隙(すき)から、するりと廊下(りやうか)へ、お勢(せい)を體(からだ)で押(お)すやうにして、後手(うしろて)にあとをびたりとしめた。

## 十一

「女將(おんなしやう)さん惱(おこ)つてやしなかつた?」

薄暗(うすぐら)い廊下(りやうか)を、階段(かたて)の上(うへ)の高窓(たかまど)のそばまで来(こ)ると、うしろから肩(かた)にかけてゐた兩手(りやうて)で、くる

りとお勢(せい)の體(からだ)をこつち向(む)にして、「昨日(きのう)來(き)るつて云(い)つといたんだけど、つい忙(いそ)しかつたもんだから……」

いゝえ、それよりあなた、おつれさんなんぞ引(ひ)つ張(は)つて來(き)ちア駄目(だめ)よ」

「いゝえね、途中(ちゆうちう)ではつたり逢(あ)つちまつたんだよ」

「だつて、もうおひと方(あた)あとからお見(み)えになるつてぢアありませんか」

いやにくつきりした烏睛を据ゑて、ぢツと男を見詰めながら、おもんは一膝のり出し、舉て手を火鉢にかざした。

「これアどうも……つい申しおくれましたが、いかがでいらつしやいます」

「よして頂戴！ そんな幫問みたいなまね……」

「ぢア、御病氣はいかがです」

「あなた見舞にきてくれたの」

「……」

「それでも、あたしが病氣だつてことだけは分つてたとみえるわね」

「まア、さう皮肉に……」

「あたし慍つてるのよ」

「ですからさ、もう夙にお見舞に來なけれアならなかつたんですけど……」

「それアもう、お忙しいことはよく分つてますよ。何しろ當時賣り出しの……」

「よさうぜ、野暮ツくさい！」

「えゝえ、どうせあたしは……」

「おもんさん、お前さんも、土地で何の某と云はれた人ぢアないか。白粉臭い人間を相手にした時と、代議士かなんかを痛振つてるのは、ちつたア差異がつけれさうなもんだね……こ

んな馳出でも、ちつとやそつとは盆暮のくぼりものをする先だつてあるんだから、さう普通の月のやうな具合にやアいかなひよ。あたしだつて、歳尾が來りやア人並に忙しんだよ……」

「だのに、度々電話なんぞかけたたりして……」

「すぐさう……」

「えゝゝ、ひねくれますとも！」

「いゝえさ、だから、あたしも忙しかつたし、今日行く、明日行くつて延び／＼になつてたのは濟まない。それアあたしあやまりますよ。さア、この通り、手をついて改めてあやまりますよ。……だからさ、ね、もう機嫌をなほしてくださいね？ いゝだらう？ 分つたね……」

手をとつて、掌のうちにぢツと握りしめ、窺き込むやうにされると、おもんはだん／＼首を垂れて、日には一杯涙をためて了つた。流十郎は白い灰に包まれた機嫌に視線を移して、そつとそのまゝにして置いたが、心のうちでは、扱これからつれのあることを話さなければなら

ないが、なんとかうまい機嫌はないかしら、などと考へてゐた。

刻々と、軒端には夕暗が迫つて來た。見ると、松の幹を包んだ藁ばかりが、いやに浮き上つて、いとゞ小暗い八ツ手の茂のあたりに、白

いものが三つ四つ、ふはり／＼輕げに舞ひ落ちてゐた。

「あ、たうとう雪だ」

「あらさう？」

「暫く眺めてゐるうちに、女の指に、ぎゆうツと力がこもつて來た……」

#### 十四

それに應へるともなく、瀧十郎も、柔かい、骨細な女の手を握りしめて、

「もう喧嘩するのよしませうね、仲よくしませうね」

薄暗く、濕つたやうな部屋の空氣のなかに、おもんは癖の、顎を引いて、ほの白い頬に突觸すると、面を伏せて、そつと手の甲へ肩を押した。

「随分おこつてたんだけど、駄目ね……」

ぐツたり横坐りになるのを、そのまゝ胸に引きよせて、額に、日に、それから唇に……

いく時かすぎて、ばツと電燈が灯つた。五十燭の、日映い光の下に、すぐ二人は體を離して、なんとなく微笑み交した。

三刻だつて面白くなからうし、それにもうそるそる藤代さんの來る時分だ、と思ふと、瀧十郎も有業に落つかなかつた、あとはあととして、



た南側、二間は深い土庇、落縁で、半間は壁、残つた一方は押入と、襖のたつ水屋をつた十疊間だつたが、面皮に細く赤松の鴨居を廻し、天井は嵯摩の上物、面とりの華車な押縁、落懸が胡麻竹、と云つた風で、謂ふところの名古屋普請の嫌味ばかり露な、新橋邊の二三流の待合氣分に充滿てゐた。軒の深さにあけ放した障子の中硝子を透して見える、廣くはないが茶がかつた木石の布置には、松の吊枝、下草の瑞玉、敷松葉と、すつかりもう冬の装ひが座してあつた。その、新春を待つ氣持は、ちよつと悪くなかつた。

床の間に沿つて、出入口から立廻した屏風の方を枕に、寒いほど白い敷布もこんもりと、クリム色の細襪を返した夜着布團の友染には、紅のちらつくなかに、ちよこなんと腰まで埋まつて、あらひ流縞の丹前の袖口から兩の手先を入れて膝におき、珊瑚珠の釵卷に一層ちひさく見える首を、顎を引き加減にちよいと右にかしげて、はいつて來た流十郎に、眞ッ黒な瞳をちらと走らせたが、

「いらつしやい」  
とばかりで、領返しもしなかつた、——これが、よし野の主人で名をおもんと呼ぶ。

いくらか裾によせて、間に、華美な絹布團で炬燵の山、並べて桑の小机、その上で書きかけてゐた年賀の葉書を、透き通りさうな指先に揃へて、姉に比べれば餘程人柄だが、然しまづ、中肉中丈の身を起すと、部屋隅に机を片よせてから、お澄は丁寧にお辭儀をして、

「いらつしやいまし」

今では舊式と云へる束髪、あらい大島の書生羽織に、同じもの、普段着をわりに裾短に着た容子は、挨拶の手重さと相俟つて、ちよつと山の手のお嬢さんとも云ひたい風情があつた。

「お寒うござんす」

と、それはお澄へ、流十郎は、すげない女將の容子ツぶりなどにはかけ構ひなく、靜に鐵瓶の沸つてゐる桑の八角火鉢へ躡りよると、搾るやうに兩手を揉んで、「どうもすみません。なんですか茲んとこへ來てくだらなくごたつちまつたもんですから……」

それでも、おもんはまだ黙つてゐた。袖口から入れて、膝の上にきちんと置いてゐる手をほどかうともしず、に、硝子を透して庭を見詰めてゐた。

「お澄ちゃん、これ、おろしちアいけないんですか」

どこまで行つても快活に、流十郎は鐵瓶をぶらさげて、あつちこつちへ二三度ふり動かしながら、一なんなかう、おろすものはありませんかね

枕もとの、高詩緒の手箱、藥瓶の高低に晒布をかぶせた盆、——鐵瓶敷は、そのそばに片よせてあつた。おもんは、横目でちらりとその方を見たが、知らん顔をしてゐた。

### 十三

「あら、ちよつと待つてくださいよ」

姉ほどではなくとも、矢張りどこかつんとして見える顔つきに似げなく、存外可哀らしい口の利きやうをして、枕もとは誰よりも一番遠くにゐたお澄が、すぐ立つて行つて流十郎のそばにより、鐵瓶を受取らうとしたが、

「よござんす、よござんす。それをこつちによこしてください」

「さう？　へえ」

茶の湯の釜敷のやうなやつを近くによせてやつて、立つと、今度はもとの座へは戻らずに、そのまゝするく、と屏風を廻つて、お澄は部屋を出て行つて了つた。

「あなた一體なにに來たの」  
人並より少しちひさいかと思はれるやうな、

は年末に重なつて來てゐる家事向の雑用に坪をあけて置かうとして、十一時頃例によつて朝食の食事をすますと、前から暖めさせて置いた洋館の書齋に、謂はば自分自身を熱銅してつたのだ。大鏡の前に、亡き両親の寫眞や、球を踏まへた獅子の彫刻で飾つた英國製の舊い時計や、友達の結婚披露に贈られた銀の小胸や、三Bのマドロス・パイプや、そんなものが雑然と載つてゐる舊式な大理石のマントル・ピースに近く肘椅子をよせて、鯛の色に、また馬糞紙の色に捲れ捲る煙の下から、ほろ／＼ほろ／＼と舌を吐く石炭の火を見詰めてゐると、然しそのまゝもう腰がもちあがらなくなつて了つた。たつた一人である時の信之の陰氣臭さ、不精ッたらしさ、——それは、どれほど彼に親しんだつもりでも、ちよつと想像だにしかれるほどのものだつた。ひとりぢつとものを思ふと云ふことは、彼にあつては、その思考の對象から、一枚一枚衣を剥ぎとることに外ならなかつた。寒く、瘦せ細つて行く芯を、容赦もなく、あとからあとからとむいてはむく、……結局は、自分の心が、寂しさに澁面をつくり、寒さに凍りついて了ふまで剥きつづける。——今日も、燐燐の前にとつかりと腰を据ゑたり、手を延ばして机

の上の手紙を一通とつてみるでもなく、外見からはたゞぼかと焰の舌を見詰めたまゝ、瀧十郎の電話を取次いで來るまで、凡そ四時間ばかりと云ふもの、景氣よくは欠伸びとつ出ないほどの陰鬱に耽つてゐたのだ。

電話口に立つた信之は、けれどもまた、全く別人だつた。どれほど不機嫌な時だらうと、——彼のもの思ひのなかで、人間と云ふものが、死神のやうに瘦せさらばへて了ふとか、泥濘のなかの猫の屍骸のやうに、蛆だらけになつて腐りかけるとか、そんな風な場合だらうとも、一旦「そと面」となれば、顔、聲、身振り、どこにひとつ、陰鬱のイの字、不景氣のフの字など、樂にしたくも見出せなくなつて了つた。勿論、承知するしないは、自らそれとは別問題で、本當を云へばこんな日に、三好や瀧十郎と逢ひたくはなかつたのだが、その斷り方でも、大抵の人の承知の仕様よりも、却つて元氣よく、嬉しさうで、はたから聞けば、内心行きたいのを、いろいろ揶揄つて誘ひてをちらしてでもゐるとしか思はれなかつた。

偶然、電話室の前に通りかゝつた細君のことにすれば、たまにうちにあるかと思へば、書齋に引つ込んだきりおやつを知らせにやつても出

ても來ないくせに、よそから呼出しの電話がかつたとなると、うつて變つた機嫌で、ヘラヘラとくだらない口を利いてゐるのだから、これは決して、心持でなかつたに違ひない。さうなると、斷つてゐるのさへ、そこに通りかゝつた自分への體裁と狼狽されて來る。

正直で、善良な朋子は、すつかり腹を立てさせられてゐたのだ。

## 二

「おい！」

冷たく、わるく落つき拂つて出て行かうとする朋子の背なかに、思はず叩きつけるやうな聲を放つた信之は、一望千里の荒野と眺めてゐた胸のなかに、急に人間臭い「怒り」を感じて、むしろ蘇生の思ひだつた。假令刑に覆はれた峠道だらうと、死に角それは人里へ導くところのものだし、それに、相手が、妻以外の誰かだつたなら、さう容易くは、「怒」らせても貰へなかつたに違ひない、——それを思へば、寧ろ幸福と歡喜に躍りあがつてもいい場合だつたが、一旦踏み込んだ刑の道を、彼は一日散に駈けおりたのだ、——胸の「喜び」を、怒つて怒鳴り散らしたのだ。

——なんだ、その佛頂面は！」

ひと先でも、つれの待つてゐる座敷の方へ戻つて行かなければならない、と思つた。

「それアさうとね、實は今日は、お見舞を兼ねて、御飯を頂きに出たんですがね。……いゝえね、……つまりその、お二人ばかりお客様が見えることになつてゐるんですがね……」

案のぢやう女將が不憚な顔をして、何か云ひかけるのに、おツかぶせて、

「實はね、お一人は藤代さん、……ね、分つたでせう。始終御馳走にばかりなつてゐるし、冗談半分ぢアあるけれど、いつかもお澄ちゃんに、今度はきつとおつれて来るからつて、あんなにさう云つてあるもんだしするから、お見舞を兼ねて、……一體、兼ねたりしちアすまないんだけど、もうお一人は、……あ、いつか見えた三好先生ね、あの方にお相客を願つてさ、ちよいと晩御飯だけ附合つて頂くことになつてゐるんだがねえ。」

「あなたともでお三人ね……」

おもんは、ちよつと考へるやうな目つきをしてゐたが、急に輕快な調子になると、「三人くらゐはいり切れないことはないわね」

と云ひながら、部屋を測るのに氣が附かなかつたなら、瀧十郎でも、その意味が、

すぐには呑み込めなかつたに違ひない。全くそれは、思ひもかけない話だつたが、急に突拍子もない考へをもつことの大好きなおもんの平常を知つてゐれば、(はゝア、また始まつたな)と、領けないでもなかつた。咄嗟に、それから起る都合不都合を思ひ料りながら、けれども瀧十郎は、どこまでも譯が解らないと云つた表情で、

「三人はいり切るつて……」

「今夜はね、あたしの御招待にさせて頂戴。年忘れやら、全快……でもないけれど、まアまお床上げの祝を兼ねて、あたしが皆さんをおよびするわ、この部屋で皆さん御一緒に、一杯召上げて頂くわ。ね、いゝでせう？」

「それアもうあつしは、喜んでおうけするが……、三好さんだつて、別になにはなからうと思ふが……」

「藤代さんつて方には、まだお目にかゝつたことがないんだから、いきなりでは失禮かしら」

「いゝえ、失禮つてこともないだらうけれど……、ぢア、もうそろ／＼お見えになる頃だから、兎も角あつしからさう申しあげてみませう。大抵可厭とは仰有るまいと思ふんだが……」

「さうしたら、お澄ちゃんにお酌をして貰つて

……、あの人だつてどんなに喜ぶか知れやアしないわ」

「あゝ、その點は、それアもう非常に興味があゐるんだがね……」

「あゝ、いゝわ。さうなさいよ、さう決めちゃまひませうよ」

子供のやうに剪みたつて、おもんは、なんの爲ともなく身を起し、すぐまた坐つたりした。

## 初雪の夜

一

藤代信之は、自動車の方で、いまうちを出がけに、細君の朋子と取り交して來た言葉争に就いて、ぼんやり思ひ返してゐた。――書齋に呼んで、用かけるから何か着物を見て、揃へて置いてくれ、と頼んだのに對して、さして珍

しくもないことだが、随つてまた彼の方でもいい加減それに馴れて了ひさうなのだが、いつもの佛頂面、碌に返事もしらずに出て行かうとしたのが、事の起りだつた。

三日來の飲みすぎ、夜更で、勞れから來た不機嫌は、自分でも承知してゐたから、うちの者とも出來るだけ口を利かない算段と、一つ



假に人生を五十と云ふならば、十年前に半を過ぎ、餘すところ十五年、その十五年にも、あともう僅ばかりで手がつかうとしてゐる。信之なのだが、今もつて、「埃だらけの絲屑」を、あとからあとから拵へて行かなければ、承知ならないとは……。

ちら／＼と白いものゝ落ちだした灯ともしごろ、禁酒の掟はまだのこと、よしんば世の中がひつくり返らうとも、假令いのちは召されうとも、今宵この、酒と戀とをよそにして、なんの生き甲斐があるものか——と、信之の心は、盃を握らずして早くも酔ひ、ひとと見えざるに既に恍惚たるものがあつた。……二重廻しの袖を引き合せ、たゞ一人自動車の片隅に小さくなつて、うつとりと目を細くしてゐたのだ。助手が交番へ駈けつけて、訊くとすぐに知れて、ほどなく彼はよし野の門前に降り立つた。「お迎へは？」

「いりません」

頼みつけのうちなので、祝儀だけ渡して、すぐ石鋪の路次をはいつて行つた。大ぶん繁くなつて来た雪は、外套の袖にかゝり、瀧石の上に消え、植込の葉に幽な囁きをたてた。——信之は、たゞもう無上にいゝ心持だつた。

「ごめんなさい」  
廊下に二三人の足音がドカ／＼と駈ける

と、

「どうれ」  
ちよつと鼻にかゝる瀧十郎の聲で、「それ、女どもお出迎へ……」

「まあ、ほんとに茶目さんね」

二十一二のと、十六七の赤い頬をしたのと、二人の女中をあとさきにして、瀧十郎が飛んで出たが、いきなり壁にへいつくばつて、

「これは／＼、藤代様には遠路のところ……」

「馬鹿め！」

「おや？ それア、違ふでせう、それア歸りがけの臺詞でせう」

「往復ともに通用するよ、相手が馬鹿でさへあれア」

「あれ、河内山が往復符を買つてはいつて来ちアいけないア」

「サウシュるつてね」

「え——？」

「損するつてんだよ」

「それア少し違ふでせう」

「どう云ふことになりますね」  
「坊主まる儲け……」

「へ、丁度おあとの支度が……」

右の肩越にちよいとうしろを指さして、頭をさげる容子に、よくは分らないながら、女中たちまでどツと笑ひ服れた。

#### 四

それには笑ひ顔も向けずに、そ／＼と外套や襟巻をとつてそこに置き、縮目も分らないほど、みな結城だろひの背を丸くして、信之は兩手をこすり合せながら、

「まあ然し、御案内ねがひませう」

「いや、これアどうも。あんまり御機嫌がいゝんで、ついうっかりお顔を見入つちまひましたよ」

「それアもう……、雪さへ降りやア……大ッこそ同然で……」

先へ立つて梯子段をあがりながら、瀧十郎が、

「少しはいつてゐるらしい……」

「とんだこつてす。人様の御招待を控へて、……」

「そんな……」

「そんな、……なんです」

「そんな失禮なことと、綺麗ごと云つとかうか、それとも、そんな無駄なこと、といつそがつくばらんにぶちまけちまはうかと思つてね、實はちよいと迷つてたところさ」

それでも、知らん顔で、扉の把手をガチャリと廻してあげようとする、——それが、信之には、良人の理不盡を、黙つて「世間」に訴へ、「世間の判決を待たうとする」「公開」のやうに感じられたのだ。

「おい、待たないか！ 俺が口を利いてるのが分らないのか。なんとか返事をしたらどうだ！」

きつと、蒼白んだ顔を振り向けて、

「なんにも御返事をすることはないぢやありませんか」

「心に不平があるならあるで、そんなへんな顔をしてゐないで、はつきり口で云へといふんだ。いやに反抗的な態度を見せて置きながら、云ふことがないものなんだ！」

「どうもすみません」

その白々と冷たい挨拶で、良人は一層かツとなつた。

「誰があやまつてくれと云つた！ 嘘つき！」

もつと口と口とを一緒にしろ。何故思つてることがそのまゝ口へ出せないんだ！」

「申しあげたところで無駄なことです」

「無駄か無駄でないか、云つてみないで結果が分かるさ。云つてみる！」

然し細君は、たうとう何も云はなかつた。さ

う怒鳴りたてられてまで、云ふべきほどのことでもなく、よし云つてみたところで仕様がなと思つてゐる氣持も、またその不平の原因も、その實信之にはすつかり感じられてゐたのだ。感じられてゐながら云はせてみたく、云はせて置いてやり返してみたく、それで最後に泣きだしてもしたら、自分の方からあやまつて、いたはり慰めてやりたかつたのだ。それほど人里を戀しがつてゐたのだ……。

霞ヶ關をおり、日比谷公園をぬけて自動車

を走らうと、大分平かな氣持に返つた信之は、自分

に對しては寛大すぎるほど思ひやり深く、細君

に對してはたゞ氣の毒に、すべて暖かく、

明るくものごとが考へられるやうになつて來

た。——眞盛りの桃の花の間に、ぼつ／＼萱屋

根を望むやうな、人臭いと云ふほどでもない里

近くまで、どうやらかうやらおきて來たのだつ

た。けれども、それも彼には淋しかつた。遠く

桃里を望む、と云ふやうな境地は、ちよつとは

悪くないとしても、性分なり年齢なりから云つ

て到底彼が安住の地ではあり得なかつた。色

や音や味や匂や、矢鱈に數多く、滅茶苦茶に混

亂し、焦け爛れさうに熱く、烈しく、強く、あ

たまがグラ／＼して來なければ、「人の間」に生

きてゐるやうな氣がしないのだつた。

……氣がつくと、窓のそとに、我ひとりたそ

がれの空の光を吸ひがほに、片々と雪が飛んで

ゐた。初雪、——その初めてと云ふことが、なん

となく、要するに子供らしく、信之の心をはし

やがせた。

### 三

暢氣な遊び仲間が待つてゐる方へ運ばれて行

く自動車、尾張町の「止れ」にひッ掛つたりす

ると、じり／＼して、思はず身を起して彼方

を見るほどに、信之は急きたつて來た。ともつた

ばかりの街の灯、——ものゝ哀を知つて二十年、

幾千度ともなく見馴れても、歡樂に誘ふその魅

力は、いまだに微ながら心を操つて、動す

れば、甘く悲しい追憶の郷につれて行かれさう

になる……。そこには、心に残る女の姿も、

五人や六人ではきかなかつた。影の薄いの、

こんがらかつた色緑のやうに、どこを紅とも緑

とも分ちかねた。その上、今では、さう云ふほ

どに鮮かでもなかつた。下積の分からだん／＼

に、記憶の藏の底にまみれ色あせて、線と云

つたところで、紅らしいところを引ずり出して

みたところで、どうにも仕様のないものになつ

て行つた。大ぶん小切すぎたきらひはあるが、

で、信之が前に控へた盃に、「へ、お待ちませ申しましてすみません」

「これア一遍三好君に返さう」

「まアどうぞ……」

「ぢア、先生にはこちらを……」

と、瀧十郎は、手早く自分の席の盃に伏せてあつたやつを取つて、呪禁ほどに盃洗で清めて、三好に渡さうとした。

「まア、藤代さんにお酌をしたまいな」

「そいぢアお先に……」

辭退しに注がせ、一口のんで置くと、信之はニコ／＼顔で、「察するところ、これアなんだね、瀧さんは、来るなり奥へ引き取られの、胤さんひとり、ぼつねんと今まで待たされたところから、少々ばかりお冠と……、どうだい違つたかね？」

顔を見られて、瀧十郎は、耳のうしろをチョコチョコと掻きながら、故意とらしい卑屈な頭のさげ方をした。

「役者たア附合へねえ」

突然三好が、吐き出すやうに云つた。

「まア何もさう一圖に……」

「いゝえ、さうですよ」

「いよくさうだと思ふなら、それア附合はな

いもよからうが……」

そこまでは、ちよいときつぱり云つて、然し瀧さんも決してよかアないね。御座眞に對するお勤めか、それとももう少し違つたものか、そのへんのことはあたしも知らないがね、友達アよかつたんだ。友達を誘つて置いて、たゞの一杯お相手もしないうちから消えちまふんだぞは、ちつともを知らなすぎた仕方だぜ。それもさ、實はかうく／＼斯々だからと、ちやアんと譯を話して……、三好君、なんとか前にお斷りして立つたのかね？」

「どういたしまして」  
「だらう？ それぢやア瀧さん、仲よしの間の想だて、とは云はれないね。何をされたつて、相手の心持がよく解つてさへすれア、なんとも思ふもんぢアないけれど、そんな奇怪なまねをされりやア、誰だつていゝ心持はしないからね。奇怪なまねつて云ふのは……まアいゝや、そこまですばないつたつて解つてらアね、解つてるだらう？」  
顔を覗き込まれるほど、なほく／＼深く首垂れて、瀧十郎は、子供ツぽく二三度合點々々をした。

先刻の盃がまだ空のまゝであるのに氣がつくと、信之は、自分のを乾して三好に獻し、酌をしてから、空のを取つて瀧十郎の前に押しやりながら、

「これアまア、一杯君がのんで、それからのことにしたまいな」

六

「いろ／＼とどうも有難うございました」

とまづ信之に、「誠に失禮をいたしましたて申譯でございます」

と、三好に、丁寧に二度頭をさげて呟いたが、その言葉は、瀧十郎としては、いつになく素朴で、大へんよかつたけれど、調子に、信之はなんとなく氣に入らないものを感じた。丁度その時、然しおよしがはいつて来て、盃、箸、海風腸と云ふやうなものを、一通り彼の前に並べてから、瀧十郎に、  
「あの……」  
「お料理ですか？ すぐこゝへ出して下さい」  
「いゝえ……」  
「いゝから、早くお料理を持つて来て下さいよ！」  
「はい」



云ふうちに表二階に來ると、松の間の襖を指さきでコツ／＼とやつて置いてから、瀧十郎があけて、

「さアどうぞ……」

不貞腐れたやうに、ぐつたりと簡臺に頬杖をつき、眉の間には不機嫌な皺を疊んで、三好がじろりと目を向けた。

「や、どうも、これア、ひどく不景氣な顔をしてるね。えー、もうすぐに華魁もお廻りになりますから……、とても申しあげたくなる顔つきだぜ」

なんとしても、すぐに切り返して來るだらうと思つて、いきなりそんな毒舌を浴せかけながら、信之は、突當りの壁を背負ふ位置に坐り込んだが、どうしたのか、ゲスリとも云はずに苦りきつてゐるなどは、取捲上手の三好としては、餘つほど珍しかつた。よく／＼のことがあつたか、さもなければ氣合でも悪いのだらうと思はれた。あとをしめてはいつて來た瀧十郎にも、ちよいと白け返つたやうな容子がみえた。こいつア一つ、なんとかほぐらかして了はなきアならない、と信之は、自分でも決していゝとは思へないのに、それが癖の勤氣を出して、早速手近の銚子を取り上げてみたが、冷えきつて、而

も大ぶん輕かつた。もう一本には手應へがあつた。熱燗すきの三好には、ちつとどうかとも思はれたが、景氣よく、

「さア、一つあけて頂かうぢやないか」

「さうですか、どうもすみません」

それでも居ずまひを正して、盃の底に残つてゐたのを、チャプリと盃洗にあけて酌をして貰ふと、一口に飲んで、すぐ信之に獻した。信之は三好の酌でたて續けに三杯のんだが、冷めたやつで、却つて身うちが寒くなつた。その間に瀧十郎が呼鈴を押し、すぐまた廊下に出て手を叩いたりしてゐるところへ、先刻玄關に出て迎へた二十一二の大柄な女が、手焙と絞り手拭を持つてあがつて來て、

「いらつしやいまし」

と、入口に手拭つき、すぐに信之のそばへそれ運んで來た。

「およしさん、お銚子はどうしたんだ。大急ぎ大急ぎ」

瀧十郎は、いつになく突慥貪な調子で促したてたが、ひよいと振り向いて、舟の形に編んだ手拭入の竹籠を見ると、少しはてれかくしのやうに、「おや、絞り手拭が出ましたね？ 資本家が來ると、すぐから扱ひが違ふんだから可厭

ンなつちやふなア。ねえ、三好先生、舌々は、かうぶふかしだての振リバンみたいなものは頂戴しませんでしたね」

そんなことを云つて、いかにも自然らしい笑顔を三好の方に向けた。

## 五

けれども三好は、聞えなかつたやうに、そつちには知らん顔をして、まだそこにまご／＼してゐる女中のおよしに、

「おい君、何をしてるんだな、早く酒を持つて來ないか、酒を！」

「はい」

そこは若いものらしく、すぐ頬をふくらませたが、瀧十郎の方を見あげると、急に優しくなつて、

「あの、お手拭ももつて参りませうか」

「いゝえ、嘘だよ、冗談だよ。それよりお銚子をね……」

「はい、唯今」

と云ふ時、襖のそこから「およしさん」と聲をかけて、細目にあけた隙から、若い方の娘が銚子をさし入れた。

「そら、來たよ」

とばかり、瀧十郎はひつ欄むと、下座に突膝

「そこまで云つちまつちア、みも蓋もないが、まア／＼そんなことだ、ねえ、瀧さん、さうだらう？」

「ま、いかやうともよろしきやうに……」

無理やりに笑ひながら、さばけた調子で、無關心な氣持をみせようとしたが、底の不愉快は隠しきれなかつた。

「だがね、瀧さん、先の喧嘩は今して置け、だよ。それくらゐに思つて置けば、あとでよければ大結構だし、大抵わるくつたつて驚かないですむからね」

「つまりなんだア、この招待をうけるにツイチア、それくらゐの覺悟が要る、と云つたやうなわけだ」

「兜の忍緒を切つた態ですね？」

兎にも角にも、この容子ならばみんな階下へ附合つてくれさうだと思ふと、急に瀧十郎は、つけ景氣にはしやぎだして、「思ひ切つたる兜の袖、行きがた知れず——ウ」

「なに、命までとらうたア云ふまい」

その信之の言葉で、すつかりもう話がきまつたことにして、

「有難い！ ぢア御迷惑でも、今夜は一つ附合つてやつてくださいまし」

と云ふなり、踊り出すやうな恰好をして立ち上り、ボン／＼と手を拍つてから、今度はまた慌てくさつて呼鈴を押した。

「あんなにも嬉しいもんですかね」

信之の方を向いてさう云ふ三好の調子には、まだなんとなく毒々しいところが残つてゐたけれども、瀧十郎は、洒々としたもので、雀右衛門の臺詞廻しに似せて、

「ま、これが嬉しいなうて、なんとしませうぞいなウ。……ね、三好先生、これからです。これからが大へんなことになつて来るんでさアね。ね、さうでせう？ ね？」

芝居によくある、「な、それ、何ぢやによつて、何々を、なア」と目のくり玉をクル／＼させながら、露には云へないことを相手に呑み込ませようとする、あのお定りの技巧、——瀧十郎にとつてはお手のもの、技巧を用ゐて、無言で、

頻と胸で押すやうな形をしてみせると、忽ち三好はのつて了つて、だん／＼に先方の意思が通じて來る、受の役者の技巧を、見真似にしては器用にやつて、「む、む、む」と呑み込んで了つた。

「なアんだい」  
自分に關したことは、すぐに感じられたけ

れども、その上さう感じたばかりでもうなんとなく加減になつて來たけれども、信之は、出來るだけ何氣ない態にさらりと云つてのけた。「餅を咽にひつかけた人が、二人よつて、眼ばかり白黒さしてらア」

## 八

そこに、すつかりお化粧をして小ざつぱりと着更へたお勢が、二品ばかりの料理と銚子を載せた廣器を持つてはいいつて來て、信之の前に鄭重に挨拶すると、

「ちつともお構ひ致しませんですみません」

「ほんとだよ、ちつと構はなすきまずぜ。おかげで、いま先生とあツしが、咽へ餅をつかへさせて大苦みさ」

「え、お餅？」

と、顔を見て、すぐ冗談と知ると、「なに云つてらつしやるんですね。生憎、二三日前からお常さんがうちへ歸つてるもんですから、馴れない人たちがばかりで、ほんとに困つちまふんですよ」

「あ、お料理もつて來ちまつたんだね？」

「あら、あなたがこつちに持つて來いって仰つたつて……」

「お前さんは、お風呂かなんかへ行つちまつて

劍幕に驚いて、へんな顔で、すぐさがつて行つた。信之は商並のいゝ口もと故に、一層晴々しく見える笑顔を傾けて、瀧十郎の盃に酌をしてやり、すぐ一口にあけて三好に獻したのにも酌をしてやり、それから自分の盃を起して瀧十郎が手を出すのを、「ま、いゝよく」と拂ひのけて、手酌で注いだが、つい盛あがるほどになつたやつへ、口からもつて行きながら、

「瀧さん、まだ君、なんか隠してやアしないかい？」

と、一口吸つて、「いゝえ、餘計なお世話かも知れないけどさ、もし君がなんか隠してるために、——たつた今あたしにはへんなことを云はれてるし、つまり板挟みのやうな態になつて、君が困りやアしないかと思つてさ。困ることがなけれアそれでいゝんだけど……」

「何しろ、今日は少しへんだよ」

三好が、瀧十郎から獻されたのを返して、酌をしてやりながら、「どうもいつもの瀧さんのやうな具合に、すかつといかないぜ。すつかりとぼつちちまつてるんぢアないのかい」

「實はね」

思ひ切つたやうに、ぐつとあふつて信之に獻し、ひと膝のり出して、「實は……」

「どうしたんだい」

と、信之が笑へば、自分でも笑ひだして、「いゝえ、『實は』と切り出すほど改まつた話でもなかつたもんですから、へんにあとが出そ

びれちまつたんです。なにね、こゝの女將さんが先達ちうから麻疹でねてたんですがね、もう殆ど全快したんで、その身祝ひなり年忘れと云ふやうな意味で、あんまり唐突ですけど、今夜みなさんに一口差上げたつて云ふんです。

これアなんですよ、たつた今あつしがちよつと奥へ顔出しをして、今夜これ〜でお二人がお見えになるつて話したもんですから、それぢアつてことになつたんで、決して前々から段取つてあつた譯ぢアないんですよ……」

「誰もさう思つてやアしないよ」

と、三好がやゝ皮肉に口を入れた。瀧十郎は、信之の方へばかり目をやつて、

「で、甚だ失禮ですけれど、自分の部屋へ来て頂いて、うちの者と一緒に、——と云つたところ、他には妹さんが一人きりですが、たゞもう面白くひと晩騒ぎたいつて云ふんです。つまり賑かなことの好きき人ですてね、自分が出られ〜ば、すぐにもお座敷へ飛んで来るんです

が、まだそこまで快なつてないので、たゞ自

分の部屋をお座敷と思つて、ちつとも御遠慮なく、十分に召あがつて座きたいつて云ふんですがね、いかがでせう、承知してやつてくださると、どんなに喜ぶか知れないんですがね」

# 七

聞き終ると、信之は、例の笑顔よく、幾度も無言で頷いた。それは、直覺と云へば、覺あてずッほうと云へばあてずッほうだが、ふとそんなことぢアないかと思つてゐたのが、不思議なほどにびたりと的中つて、我知らずこみあげて來た、無邪氣な得意と満足との笑ひだつた。

「君も、感心に、可なり露骨に云ひけしたかと、暫くニコ／＼してゐた揚句に、信之が口を切つて、一つまり、早い話が、三人して取捲いてほしいんだらう？ 無禮講はどんなに無禮講でもかまはないが、兎に角取捲かせたい氣持は十分にあるんだね。」

「もう一つ突ツ込んで云やア……」

すぐその尾について、三好が、君ひとりならそれでよし、つれがあるくらゐなら、いつそ總揚にしてアつて、面白可笑しく一晩あそばさう……」



ふ言葉にさへ、今は少しの皮肉もなく、たゞ正直なところを述べると云ふ風になつてゐた。

「えゝ、ですから、彼方へ行つても、吾々ばかりの氣で、勝手に振舞つてやりませうよ。文字どほり、傍人なきが如くにね。……ザアどうぞ、御案内いたしますから……」

またもや御意の變らぬ間に、と云つた氣持を露骨に、瀧十郎は腰をもたげて、「お勢さん、それぢアすぐ行きますから、奥へさう云つといってください」

これでまアひと安心、と云ふ表情で、お勢もいそ／＼と小走りに出て行つた。

「どりや、座敷を變へて、飲み直さうか」三好が故意と足もとをひよろつかして立ち上りながら、「どうしても、門弟何の某だな。白ツぽい袴の下から向脛を出してゐる輩だな」

「一番さきが荒次郎さんで、あとは大抵丈の順に引ッ込んで行きますね」

すぐもう元口になつてゐる間に、信之は、表に向いた肘掛窓をあけて、ぼんやり立つて眺めてゐた。いつかすつかり白くなつた屋根が、遠く近く濃淡を見せ、暗い空の下に、しみ／＼と靜に、重なり續いてゐた。あけた幅に流れ出た灯のなかを、ちら／＼と、だいぶん大ぶりに

なつて來たやつが、輕く舞ひ落ちて來た。灯の綱をはづれると、嘘のやうに、その白さが消えて了ふ……。もうさ／＼と木の葉や軒に觸れる音もなく、——全く音がないのに、しんとぶふ氣持で、降りつもつて行くのが感じられた。なんとなく、信之には、廣重と云ふ人が思ひ出され、江戸と云ふ時代が胸に浮んで來た……

「おや、いつの間にか眞ツ白になつちまひましたね」

瀧十郎が、その時、うしろから信之の肩を抱くやうにして、おもてをすかしたが、「これア明日は、とても素敵ですぜ。ところで、こいつが、生憎明日顔寄と來てるんだから、可厭なつちやふなア。世の中、よくしたもんだ……」行くなら行くで、さつきと行かうぢやアないか——

立ちながら、手酌で一杯ぐつとやつて、三好は、そとの眺めなどには更に興味がないうらしく、促したてた。隣きもしずに、どこを焦點ともなく、ちつと雪を見詰めてゐた信之が、空洞な心で、一行かう——と、咳いて、名残惜げにふをしめた。

## 十

「さア、それぢアどうぞ……」

瀧十郎を先に、信之、三好と並んで廊下へ出た。いつの間に來たか、一組ばかりの客があるらしく、奥の部屋からは盛んな笑ひ聲が聞えたり、女中のおよしが、あいた食器をさげて來るのに行き會つたりした。

「ちよいと路次を一つぬけますから……。大へんなところですよ」

故意と帳場の繁さんと云ふ五十男にも聞えよがしに、そんなことを云ひながら、例の裏所のそばへかゝると、瀧十郎は急ぎ足に駆け、序に、「今晩は、お寒うござい」と聲をかけた。

「いらつしやいます。どうもえらいところお通し申しまして……」

筆を持ったまゝの手で、禿けあがつた額をつるりとやつて、帳場が愛想笑ひをした。

「御免なさい」

信之も聲をかけて續いた。

奥の間の廊下まで來ると、俄に瀧十郎は酷漢らしいいきり聲をあげて、

「さア、來ましたよ、來ましたよ！ ど、同勢

そろつて闖入しますよ！」

て知るまいが、急に女将さんの御招待つてことになつて、これからお屏間へ押参に及ぼうと云ふところなんだぜ」

「へーえ」

肥つた片頬の笑ひに、知つてゐることは十分に見えたが、「さうですか、さう云ふことになつてゐるでしたら、このまゝおさげして……」

「まア折角もつて来たもんだ、それはそれでここで頂戴して、あちらはあちらで、十分にまた頂くことにしようぢアないか。……兎に角あたしは初顔面だ、生れて初めて會ふ人に、なんの理由もなく御馳走にならうと云ふんだから、いかに圖々しいとは云つても、こいつちよつとてれだよ。お面を被つて行かないとはいり憎いから、もう少しこゝで飲んでかうぢアないか」

「賛成だな」

三好があけて信之に獻すのに、いま運んで来た銚子で酌をしながら、

「それアもうお友達同士の方が、どのくらゐお氣が張らないで、――」

と、信之の言葉を実正一面から釋つて、存外氣のいゝお勢が、心から氣の毒さうに呟きかけた時に、急に瀧十郎は遮つて、  
「ぢアどうぞさう云ふことにして、お料理を並

べてくださいな。なんだかアツシアお腹がすいて来たよ。それから、お如きもあるまいが、右の趣を女将さんの方へもよろしくお取次ねがひます」

「承知いたしました」

意味ありげな目で、瀧十郎の方へ笑ひかけながら、小皿ものを各自の前に並べた。それで畢つて、酒席らしい情景が調つて來た。氣持の上でも、きまるだけのことはきまつて、どうやら少し落つて來た。たゞ信之だけは、自分に關したことからしい、先刻の二人の課し合が、心配になると云ふほどではないけれども、軽く心に殘つてゐた。どう云ふものか、それが女に關すること、而も自分の役廻りは決して悪くない、と云ふ感じが、例へば、どこからともなく微風が載せて來る花の香りのやうに、氣持よく心の面を撫でてゐた。それだけにもう一度そこへ話題を戻すことは未、少しでも氣にかけてゐるやうに思はれるだけでも、自分ひとりの心持として、ひどく恥しかつた。――さう云ふ二重の關心から、平常よりも一層盛達に、自在に、明朗に振舞ひたかつた。  
(だが、意識的になつちアいけない、意識的になつちアいけない、虚心に、虚心に……)

さう思へば思ふほど、却つて虚心し彼から逃げて行きさうだつた。

## 九

二時間とは經たないうちに、いづれも豪酒の、運ばれた銚子の數も決して少くはなく、一座の興は早くも酣になりかけてゐた。たゞ然し、時々來ては平もとに口をよせるお勢にうん、よしよし、解つてゐるゝと云ふ風に、すつかり呑み込んで、顔き返してゐる瀧十郎の板挟みの立場は、彼自身だけでなく、はたの一人の酒興をも妨げた。遠慮から、恐らくは度ごとに露骨になるのだらうと思はれる催促の言葉を、よくは聞きもしずに、握りつぶして、我から、

「まア、もう二三本……」

などと、どこまでも友達の附合を人事に、一生懸命つとめてゐるのが、先刻叱言じみたことを云つてゐるだけに、殊さら信之には氣の毒らしくてならなかつた。

「どうだね、それぢア御遠慮なしに、そろゝ、御招待の席へ罷り出ることにしちア」

たうとう、彼から口を切つた。

「正直いやア、水入らずで、この方が面白いんだがなア……」

三好は、いつかすつかり機嫌を直して、さう云

ツ張り仰有ることが違ひますわね」

と、例の頸を引いて優婉みに見据ゑて置いて、急に弾け返つたやうな笑ひ聲をあげ、その笑ひの尾を引きながら、部屋の間へ立つて行つて、呼鈴を押した。

一度や二度の馴染で、この應酬は、信之はまた鯨鯨立をしても出来ない義當だつた。殊に流十郎を目の前に置いて、「取ッ附く病氣までが若々しい」は、釋りやうによつては、聊か失言のきらひがないでもなかつた。

「いえね、實はその話で先刻大失策……。麻疹つてははうとしたやつが、どうしたはずみか、抱病と出ちやつて——」

「抱病？」  
すぐまた座に戻つて來ながら、袖口をもれる長襦袢の具合をして、「いゝえ、いゝ年をして、やたらと赤いものが好きなのところなんぞ、どつちかと云やア抱病神に御縁のある方かも知れませんよ」

總ての好み、誰が目にもちと華美すぎるだけに、——つまり、あんまり本當のことがズはれてゐるだけに、この言葉は、うまくうけて、なんとかはぐらかしてはしないと、一座に白けた空氣を醸さないとも限らない性質を帯びてゐ

た。たつた今いづくつた長襦袢に、問題の色がちらつてゐたことが、それ故にこそこの言葉でもあらうが、同時にまた、かの危險性を一層強めてもゐた。

「へえ、赤い色がお好きですか」

と、信之が聲で口を開いて、「それア大に：話せる、とぶつちや矢張だが……、あたしも同感ですね、赤はよござんすよ。なんてたつて女は赤ですよ。黒い髪の毛に、赤い珠でもよし、赤い手給でもいゝが、兎に角さう云ふものを用ゐ始めた女は、大した人ですね……」

「巴里の料流行が……」  
三好が言葉を挟んで、「それだつて云ひますね、黒と赤の取合せだつて……」

## 十二

そこへ、廣蓋に酒肴を運んで來たのはお勢だつた。女將も、あとの料理のことを睥たりしながら手傳つて、客の前に並べ、最後に自分の分を取りあげると、

「御免かうむつて、あたしもこちらでお相伴させて頂きます」

「それアもう無論……」

と、三好がエアシッパの煙をモク／＼と吐き出して、「それから、お妹御さんもおよろしか

つたら、御一緒にどうです」

流十郎の方へも、ちよい／＼目を向けながらさう云ふと、女將は「いゝえ、もうあんな者は……」でも云つた氣持の笑ひ方をしてから、

「……でもまア、せめてはお酌だけでも……」

と、これはお勢へ向つて云つた。

「そんなこと云はずに、御免かうむつて、御一緒ににしたらいいぢアありませんか、ねえ、女將さん、さうなさいな」

「いゝえ、どうせ並べてやつたところで、なんにも頂けやアしませんわ」

意味をこめた日つきで流十郎の方を見やつてから、あととはじはたへの「聞かせに、一それになんですか、今夜は珍らしくちと立て込んでるやうですから、こつちは、不馴れですけれどあ

の娘にお給仕をして貰ひませう、それもまた家庭的で却つていゝかも知れませんか」

ちよつと使ひさうもなくつて、それで云はれてみると、成程使ひたがりさうな、その「家庭的」と云ふ言葉が、男たちの胸のなかで、ちよつと擦つたく響いた。

「ぢやアまアそれならそれで……」

流十郎は、延びあがるやうにしてお勢の目を捉へて、「早く出ていらつしやいつて。あんまり



まし」

内なる聲も、十分に愛嬌を含んで、ひどく景気がよかつた。入口の屏風は、一枚疊んで短くして、そのまゝ立て廻してあつたが、夜具布團や薬箱、手巾などは勿論のこと、茶の小俵、炬燵まで綺麗に取り片づけて、真ん中よりやや床前によせて、三越ものゝ、折り疊みの利く大きな餠臺が出してあつた。眞つ先に跳び込んだ瀧十郎が、

「や、これアすつかり景色が變つちやつて…」と云ひさして、慌てゝ口を噤むのを、縞お召のちよい／＼着て着更へ、小紋の羽織をひつかけて、うつすり化粧もし直したらしいおもんが、立つて出迎へながら、すばやく口つきで制めると、すぐあでやかな笑顔になつて、

「まア／＼、みなさん、折角お酒宴のところを御無理をお願いしましたのに、よくこそおいでくださいました。さア、どうぞずうツとお通んなすってくださいまし」

云ひながら、入れ違ひに自分は下座にさがり、床前に二つ並べた座布團の方へ、信之と三好とを押しやらんばかりにした。悪く遠慮をしず、つか／＼と通つて、床前の下座の方に信之が坐つた。

「そりやアいけません」

三好がむきになつて云ふのを、

「まアま、どうぞ先生、そちらへ…」

あなたまで一緒になつて、先生はないでせう。

…ねえ、信さん、ほんとに、あちらへいらし

つてくださいなね」

「おんなじこつてさア」

「おんなじこつたから、變つてくださいいよ」

部屋突きあたり、餠臺から云へば横幅で、一人分の席になつてゐるところへ、自分はこゝと

納まつて、それでもまだ突つ立つてゐた瀧十郎

まで一緒になつて、一言三言口を添へると、

「ギアまアお年役で、御免かうむりますかな」

と、信之は、笑ひながら、坐つてゐた布團を裏返して、正座に移つた。

「えゝと、御紹介いたしませう」

席が定まるや否や、瀧十郎は、巫山戯たやうな眞面目顔で、藤代さんです。始終もうあた

しがお世話にばかりなつてます。…えゝ、これが當家の女將、有名なおもんの方、何分とも

どうぞ御最上になつて…」

# 十一

故意とらしいと判れば、一種逆手の傲慢とも見觀られるほどに、初對面の人に對する信之の

態度は殷懃を極めたものだつた。が、事實それは、どこか世馴れない、人見知りする性分から

來ることだつた。餘程酒でもはいつてゐる場合は別だが、さもない限り、生面はもとより一應

の知人でも、一度ふつ切れた感じがもてないうちは、堅くなつて、へんに取片づけた顔をして

ゐるのが常だつた。二階で、お面を被つて行かないとはいり憎い」と云つたのも、決して言葉の面白味からばかりではなかつた。

つまりは料理屋にあがつた客から、疊に手をさげられると、おもんの方も勢、鄭重になら

ない譯にはいかないで、この挨拶はちよつと、場合と情景とに對して、不相當なほどのものにな

つた。その代り云ふのも可笑しいが、慥に、意識の下にはその氣持も倒れて、三好と女將と

の挨拶が、これはまた馬鹿に親しげな、詞子のいゝものだつた。

「どうも先日は…。いかがです、ちつとお加減がお悪かつたさうで…」

「まア先生、この年になつて、どうでせうあなた、麻疹つてのは…」

「いやそれですよ、有難はあなたで、取ツ附く病氣までが若々しい」

「あらまア、狂言でもお書きになるお方は、矢

色氣もなくひよつとこ面で、そつくり身振りまでして見せて、「あ、あれですね。うまきいくと、あの通り……つてやつね」

「まあほんとうに呆れ返つたもんだ」

女將がぬからず、丁度自分の口を出すべき時機を擬んで、氣取つて「一つ衣紋をぬくと、全くこの分でしたら、いつが日役者をやるやうなことになるでも大丈夫ですわね」

「するとあたしも、作者をやめて共稼が。いや、とんだものに拘き込まれたなア」

三好には、調子よく酒が廻りだしてゐた。一座さへはずんで來れば、なかに一人や二人初對面の人が泣つてゐたところで、信之もそんなに堅くならずにすむわけだつた。(まづ今夜はうまくいきさうだ) 例の悪い癖の勘から、妙な具合にならなければいゝがと祝に案じてゐた心もゆるみ、女將が豫想されたよりもずつと控目なのも助かつた氣持として嬉しく、潮時をみて成可く早く切りあげ、三好を誘つて、雪のなかを足の向くまゝにほつつき歩いてみようか、などと思つてゐたことも忘れて、どうやらいゝ心持にお神輿が据りさうだつた……

その時、屏風の簾を衣箱の音が近づいたと思ふと、なんと云ふわけもなく、信之の心は(は

ツ)として、あらぬ方へ視線が滑つて了つた。

「いらつしやいまし」

はつきりと、落つた聲に、目をやつた時には、その聲のもつ平穩には似氣なく、なかげ女將のうしろに隠れ、丁寧に頭をさげてゐる女があつた。——女、處女だとか、さうでないとか云ふ問題を離れて、唯ほんの言葉の感じだけで、それは「娘」とよりは、女と呼びたかつた。それと「大人しやか」と云ふ印象を、最初の一瞥が運び込んで來た。

#### 十四

「もう一度御前介の夢をとります」

藩十郎は坐り直して、「女將さんのお姓、御さんで、お澄さんと申されます。こちらが藤代信之さんで、あちらが三好胤夫先生。おふた方とも、あたしにとつては大先輩、大恩人でいらつしやいます」

その、眞面目くさつて巫山戯てゐる調子に、ちよいと目もとで笑ひ返しながら、けれども禮儀は崩さずに、お澄は、二人に對してそれ／＼丁寧に挨拶した。信之は例の感慙に、餉臺の前を應々端向になつて、片手だけでも懸へおろした。女將の眼下で一二が見かけたことはあるが、謂はば初對面の三好も、少くとも信之の程

度には尊重しなければならなかつたのだが、その通りの形を學ぶのも、なんとなく業腹だつたので、餉臺に兩手を置いたまゝ、それでも出来るだけ頭は低く上げた。方牌は、身をよけるやうに振向いて、

「なんだつて丁寧に越したことはないけれど、お前さんの御挨拶もちつと堅ッ音しすぎるね」と云つた心持は、いづれ君僕、又敬に毛の生えたくらゐる連中に、それほどの禮儀を返させたのは、——殊に酒席とは云ひ、内心迷惑だつたらう、との推量からで、むしろ客に對する謝辭だつた。それも解らないではないが、はいつて來るなりそんな風に云はれては、決していゝ氣持はしなからうと、はたで却つて信之の心が痛んだ。そこへ續いて來た沈黙は誰にもちよいと救ひかねた。自分で時いた種を、女將が自分で刈るより仕方がなかつた。で、言葉を繼いで、

「かう云ふ稼業はしこ居りますが、この人だけは、つい近所に一軒別にうちをもたせて置きますし、お座敷に出すやうなことは、たゞの一通だつてさせやアしませんけれど、その故ばかりではなく、あたしとけ反對に、この人はまたちつと變屈な方として、まるでもう素ッ堅氣のお

いつまでもおめかししてると、却つて出端がなくなつちまひますからつて、あッしがさう云つてたつてさう云つてください」

その間に女將の酌でとうに二人の盃は満たされ、銚子の口が瀧十郎の方を向いて待つてゐた。

「さア餘計なおせつかいをやかずに、早くお盃をお持ちなさいなね」

「と叱られて……」

自分の床に合せて、盃を差し出し、注がせるとすぐに銚子をうけ取つて、右に持ちかへながら、「さアどうぞ」

「へ、ありがたう」

みんな揃つたところで、信之が、

「おア取ります」

と、克明に挨拶して盃を取りあげた。

「え！ 御不快のお祝を……」

瀧十郎は、洋風の乾盃を眞似た手つきで目の高さまで持つて行つた。

「お芽出度う」

はたの二人もそれに和した。

「有難うございます。どうも恐れ入りました」

有難に心から嬉しさに微笑みながら、おもんが軽く會釈を返すと、勢としても、みんな

一息に乾して了つた。そこに、四つの盃の盃を控へて、ちよいと繼續なく、手持無沙汰の態にならうとするのを、瀧十郎がすばやく銚子を取りあげて、

「と云ふやうなわけで、これでお座席がすむと、すぐトーンと來ますね。……馬鹿だね！」

云ひながら、乗り出して、信之、三好、女將と酌をして廻り、自分のへは、ほんの體裁に手を出す女將にかけ構ひなく、手酌で注いで、「さうすると、急に叱責するやうな聲を出して、さア、お惚話なさい！……つて云ひますね」

「よくそんな古風な臺詞を心得てるね」

すぐ三好が言葉敵に立つた。

### 十三

「冗談でせう」

瀧十郎はそろ／＼用心して、たんとは口へは

いらないやうに、巧みに盃の縁を吸つて、「今だつてあなた、吉原へ行つて横町藝者なるものに逢つてごらんなさい……」

「それより手ツ取早くいくにやア、席亭に限らね。お白湯を呑みながら、ひとりでうかれて

る氣遣ひが、必ず一人や二人は出て来るよ」

「あゝさう／＼。あゝぶふ人たちはきつとやりますね。さアお惚話なはい、お惚話なはい、お惚話なすつてお試しなはい！……なんてね」

「この二人はね……」

と、信之が、呆れ顔をしてゐる女將に、「今いふお白湯を呑むと氣のふれる連中に、一人粗んでやつてゐるのがあるませう。つまりあれなんですよ。たゞいくら口が替澤になつて、お

白湯よりお酒の方がいゝなんて云ひますがね、その代りには、どんなお座敷でも唯です。いつの間にどこで修業して來たものか、感心によく合せますよ」

「鶴龜いちぬけだ！ 三好先生あッシアもうよしますよ」

「ひッ腰のねえ、もうちつと辛抱すりやアいゝに」

「べらぼうめ、掛合落語とみられた上からは、窮屈な思ひをするだけ無駄だ。どなたも眞ッ平ごめんなせえ」

「あの通り……」

「あゝさうだ／＼」

三好が子供のやうに嬉しがつて、瀧十郎へ向つて手を振りながら、信之はあれだよ、ほり、なんとかぶつた、あゝ、金助々々！」

「あ、成程、赤い仰で煙被をして、太夫の落した穂を拾ふと、これはやり損ひ……」



「あ、さうか、吃驚した！」  
「それとも、慥つたのかも知れないわ」

「いゝえ、もう駄目ですよ」

初から訊かないでも解つてゐることだから、  
なほ更のこと 瀧十郎は、酒々としたもので、「中  
中あんなことくらゐで慥るやうな、……我が、  
つて云ひますね」

今度は有鑿の相棒も、すぐには呑み込みかね  
て、

「わが……」

「我がお澄ちゃん……」

「成程、云ひます……」どうかすると、親愛な  
る、なんてのが挟りますね」

何が面白いのか、そんなことを云ひ合つて、

二人はクツクと身を揉んで笑つた。附合で、仕  
方なくニヤリ／＼してゐる信之に、女將は酌を  
してやつてから、

「あたし、今やつと思ひ出したんですけれど、  
あなたの阿父様は、東北鐵道の……」

「えゝ、さうですよ」

突然の思ひがけない話題に、みんな聞耳を立  
てた。中に信之はさんざん苦勞をかけた揚句、  
死なれて見ると、一年々次第に有難味が解つ  
て來た父親のこととて、急に心が引き締つた。

「慥にその藤代です」

「へえ、ぢア矢ッ張り……」

「なんです？」

「さうだと、あたし、あなたにお日にかゝるの、  
今日が初めてぢアありませんわ」

「へーえ」

そこに、やゝ急ぎ足ではいつて來たお澄と、  
信之はびたりと目を見合せた。慌てゝ逃して、

もう一度、「へーえ、一體それア、どう云ふん  
です」

## 十六

けれども、續いてそこにお勢もはいつて來て、  
一時餉臺の上が、水焔爐を置いたり鮫鱈鍋をか  
けたりでごたついたために、すぐには女將の返

事は聞かれなかつた。その間にも、お澄が、い  
ま運んで來た銚子を取りあげて、「お熱いのを  
……」などと、みんなに勧めたり、男同士の獻  
酬があつたりして、云ふまでもなく、少しの穴  
もあきはしなかつたが。

「ひとつ差上げます」

手のあくのを待つてゐて、信之から女將に獻  
した。

「頂きます」

と、うけながら、ひとりでニコ／＼して、「へ

え、さうですかねえ。世の中、ほんとに廣いや  
うで狭いもんですわねえ……」

「さうまア氣をもたせないで……」

瀧十郎は、信之に、盃を廻しながら、「そも近  
ひ初めの物語り、聞きたいな……」

「遠くからで御免ください。有難うございまし  
た」

女將は、小さな體を浮かして、左にちよつ  
と袖口を抑へ、白い綺麗な腕をのばして、「あな  
た、それぢやア、市村さんが初て助六をやつた  
時の芝居、憶えておいでせうね」

「ン、なるほど……」

「東北鐵道が國有になつたお祝で、はなの間  
ずうツと會社の買切でした。毎日のやうにみ

んなあなた、白襟の……紋が可厭なつちま  
ふんですよ。あの會社の印が、なんぼなんでも  
あんまり露骨ぢアありませんか、そつくり汽車  
の輪なんですよのね、帯から何からすつかりお

揃ひで、……今から思へば、なんのことはない、  
みんな藝者が出方代りに使はれたんですよ。

お宅の阿父様なんでも、毎日のやうに詰めてお  
いでしたわ。それアほんとに陽氣な、面白い  
方……さだめし今もつてお洋者で……」

「いゝえ、死にました。それからもう六年にな

嬢さんみたいなんです。そのくせ爆きだすと、これで中々面白いことを云ふんですけれど」

そんな風に、目の前で自分のことを云はれながら、ぷりツとしたり、つんと澄したりするほどでもなく、さうかと云つて、どの視線も自分の方へ注がれてゐるにきまり切つた場合を、圖圖しく目をあげて、ニヤリ／＼あたりを見廻すやうなことはなほ更なかつたが、その、大人しやかなうちにも、ちよいとねれたところのある感じで、一層信之の第一印象、——「娘」とよりは「女」と云ふ言葉で呼びたい氣持が深められた。道樂者の常として、あまり娘々してゐるよりも、女らしいと云ふほどが好もしく、もとより信之も、その好みの故にこそ、一目でそれが感じられもし、今また深められたその感じで、思はず心のうちに「悪くないなア」と唸かずにゐられなかつたのだ。(成程女將さんの云ふ通り、これなら、どうかすると「面白いこと」を云ひさうだ) そんなことまで考へて、まだ隣すツぽ顔も見ないうちから、早くも信之の心は、お澄に傾きかけてゐた。——俗に「見惚れ、氣惚れ」それからなんとか惚れと云ふ、若しこの階梯が誰にも必ず來るものとすれば、丁度彼

はその第二期にゐるものだつた。

「まアひとつ……」

出抜に大きな聲で、瀧十郎がお澄に獻した。

「あたくし……?」

顔中で一番の缺點になつてゐるやゝ厚ぼつた唇に、不思議なほどの色氣を濃はせて、「まアお酌させて頂きますわ——」もの云ひは、飽までつきりしてゐた。

## 十五

「まア——まア」

駄々ツ兒のやうに體を振り動かし、瀧十郎が、誰がなんと云つても聴かないと云ふ勢を示すと、微笑ひながら、お澄は、少しも場うてのした客子もなく、すらりと立つてそばに坐り直した。女將が酌をしてやつて、

「なに、この人は、兩けば、あたしなんぞと違つて、いくらでも飲めるんですよ」

「あら、いくらでもなんて……」

「あ、さう／＼。いつか、なんの時だつたか、随分お澄ちゃんに飲ませちやつたことがありますね——」

「え、今年の節分の晩……」

「もうそれでいゝわ。あと云つちア可厭ですよ」

「と云やアもう……」

云ひかけて、瀧十郎は、先列からへんに癖のやうになつて了つた掛合落語の意氣で、相棒の三好の方へ、あとを取れ、と云はんばかりの目を向けると、これがまた忽ち感應して、

「少くも、飲んだことだけは……」

「さうです、……憶得ですね。而も、なんか云はれて困るやうなことがあつたとすると……」

「ま、酔つての上……でせうかね」

「さう／＼、酔つての上で……」

「もう澤山よ」

失日ながら、存外落ちついて云ふと、ちよいと清めて返す盃を、瀧十郎は受け取らうともしずに、

「いかがです」

「と、顎でしやくつて、その手つきを指し、三好の方へ、

「この、盃洗の水を切つて、かうちよいと絲底へ二本の指がかゝつて……」

「知らないわ」

「ト、盃をそこへ置くと、すぐ立つて部屋を出て行つて了つた。」

「えー、温つちやつたんですか」

「いゝえ、お銚子を取りに行つたのよ」

こり笑つて見やりながら、

「武田家の二階で……」

「あゝ、あなたが……」

と、思はずのり出して、ふとまた調子をぢつ

と沈め、「いや、なんでも二三人の方に大へん

お世話になつた憶は慥にあります。何しろ、胸

はむかつくし、目の前にはなんだか黄色ッぽい

ものがまや／＼して来るし、大苦みの最中で、

はつきりとは憶えてませんが、……さうですか、

その時にあなたもいらしたんですか」

「あら、心細いのねえ……」

「少しよくなると、親爺の仲ですぐ送り歸され

ちまつて、碌にお禮を云ふ暇もなかつたんだが、

——うちへ歸つて一時間もしないうちに、すぐ

ケロ／＼と癒つて了つて、それがなんだか氣に

はか／＼つてゐたんですが、きまりが悪くつて、

翌日からもうとても歌舞伎座へ出かける勇氣な

んかなくなつちまつたんです……」

「三十九年と云やア、信さん、あなたは十九で

すね」

「さうさ」

「十九にしちア……」

と今度は澁十郎の方へ顔を向けて、「すこし

話が綺麗ごとすぎやアしないかい」

「成程ね、御年十九と云やア既に、……十九で  
すからね」

「既に十九と云やア、……皆だからね」

「いや、皆であらうがあるまいが、さうだつた

んだから仕方がない」

「えゝ、それアもうきつと、今のお話の通りに

違ひないわ」

と、おもんが、ひどく眞面目な調子で、「これ

は、あたしだからつて云ふ自惚で云ふんぢアあ

りませんよ、だけど、女の方から憶えてゐると

云はれて、殿方つてものは、ほんとに忘れてゐ

ても、大抵なんとか調子を合せて、いゝやうに

話をなさるもんですよ、それだのに……」

## 十八

「いゝえ――

急に信之が進り制めて、「そんな風に云はれ

ちア取入りますよ。……一體あたしは忘れッぽ

い質のところへもつて来て、何しろ舊い話です

からね。……どうもすみません」

だいぶんしどろもどろの態で、突ツ拍子も

なく「すみません」などと、ビョコリと頭をさげ

たりする容子が、そのまゝ上まない滑稽になつ

た。三好と澁十郎とは、すぐ聲を合せて笑ひ、

當の相手のおもんは、

「あら！」

と、寧ろ呆れた顔だつたが、だん／＼その色

ツぽい目のうちに、(まアこの人は、なんて子供

らしいんだらうとでもぶつた氣持の、さも好も

しげな笑が浮んで来た。そのなかに、ひとりお

澄は、ぢツと膝を見詰めてゐた。嬉しさとも有

難さともつかない涙を、一生懸命おとすまいと

してゐるうちに、大島の絆が、はつきりとは見

えなくなつて行つた。信之の目は、けれども、

正面に姉の視線をうけとめてゐた。うけとめ

ながら、(こいつは危険いぞ)と思つた。思ふ

と同時に、自分の方からは逃せない氣持に捉へ

られて了つた。逃すが最後、その危険は二倍に

される、と云ふ感じだ……。圖らずも現はれた

子供ッぽさ、それを好もしげに笑つてゐる目に

對しては、圖々しくぢツと見返すと云ふことの

方が、少くも裏にはなるわけだつた。

「どうしてあたしはかう忘れッぽいかな」

とは云へその見返しも、さう永くは續かなか

つた。三好の方へ、頬の肉の硬直つたやうな、

てれ隠しの笑ひ顔を向けて、そんな風にでも云

ふよりほかなかつた。

「若老碌と云ふやつで、つまり幸四郎ですな。

いやもう、ただ／＼お羨ましい御身分ですよ」



ります」

「さうですか」

と、感慨に堪へぬものゝやうに言葉に力を入れて、「それアどうも、ちつとも存じませんでしたが……」

「なに、年に不足はなかつたんですが……」

「それアまあ……さう申しアなんですけど、あの時分でもう……、さアおいくつでしたらう、なんでももういゝお年でしたわ」

「然し、羽左衛門の助六の初役と云へば……」

その時三好が、解せぬ顔つきで口を出しかけるのを、女將は、やゝ充奮して、手つきでも抑へて、すぐにかぶせて云つた。

「さ、ですからあたしは、舊い話になると、いつでも忘れたやうな顔をして、決してきちんとしたことを云つた試しがないんですけど、今夜はもう本當の年齢がばれる覺悟で、あたしの方から持ち出したんです……政さん、あなた吃驚しちアいけませんよ……」

氣を撃たれて、有繋の瀧十郎も、返す言葉を知りなかつた。

「まあ然しそれアいゝでせう」

と、信之は、思ひもかけず遽に緊迫して來た空氣に、いくらかでも餘裕をつけようとして、

「それより、その時にどうしてあたし……」

「いゝえ、それもいますぐお話ししますけれど、あたしが誰んでも云つてある年で勘定すれば、その時分やつと十二三だつたわけですよ……」

「さうですとも……えゝと、あれは、助六の初役は……」

芝居に關する三好の懷舊強記には、驚くべきものがあつた。場合を忘れて、自然とてれの發表が動いたのだ。「あれは、三十九年の五月、

——東北鐵道の買切なんぞがあつて、初日が二十日すぎになつてゐるから、一般には六月興行のやうに思はれてゐるけれど、隨に五月です——

## 十七

「ですもの、二十七年生れとすれア、まだ子供の筈ですよ。まさか雛妓が白ねで……」

「いや、それアね……」

やつと自分を回復した瀧十郎が、なんとなく苛つた氣持で、「市村の兄さんが初役に助六をやつた時なんて、話にこそ聞いてゐるが、まだあツしななざア袖の長い着物を着せられて、たまに舞臺に出れア、『母様いなう』なんて、このへんから聲を出してた時分ですもの。それなのに女將さんが、藝者の出方に頼まれてゐるなんて、

どうも少し話が合はないア思つてたんですが

ね……」

「ですからさ、みんな七つ八つさはよまれてたのよ」

「イエー」

と、仰山に驚いてみせて、「ぢアあなた、信さんより年上ですか」

「さア、たしかさうらしかつたわねえ、顎を引いて、流し目にちつと信之を見た。そこには、妹だと、どうかした拍子に唇に薄ふところのものが、眞にしたゝるばかりだつた。

とてもそれとは勝負にならないまでも、なんとか少しは色ッぽい返事がしたかつたけれど、生憎と信之には、全くなんの記憶も甦つて來なかつた。

「どうも、それが、あたしには……」

「まるで形なし？」

「一體なんの語だか、あたしも、……下等だが、唯なのをいゝことにして、二日か三日行つて、そこらまご／＼してゐたやうには思ふんだが……」

「膾炙血をおこした憶はありませんか」

「あゝ……」

とてつもない聲と一緒に、ピョコンと胸が延び、遠い昔に瞳が醒めるのを、おもんけにツ

あだつた。文學について、爪の垢ほども關知するところのない見物でこへ、そこを通りかゝれば、少くも、何か「公人」の寄集まりだ、と云ふほどの印象はうけて、必ず見返つて行き過ぎた。——さう云ふ一群のなかに、紋附、袴の三好が、柱によりかゝり、腕を組んで立つてゐた。この仲間では、まだ自ら若輩と感じてゐるらしく、一般の話題、——丁度その時には、いまだ詰まですんだ新作の史劇の批評だつたが、それには口出しもしずに、とは云へ、無遠慮にそばによつて耳を欲てゐる文學青年のやうな熱心はなく、ぼんやりした顔つきをしてゐた。すぐその柱のそばの藤椅子から、小説も戯曲も書いて、既に一家を成してゐる伊庭順作が、ちよいと三好の袖を引いて、低聲に、

「紀尾井町の若旦那、大へんな御亂行だつて話ぢやないか」

さう云つて、ニヤリ／＼笑ひかけられると、三好は、(はて今點がいかない)と云ふ風に、小首をかしげながら、

「へえ、さうですかしら……」

「隠したつて駄目だよ。ちゃんともう種はあがつてゐるんだからね」

「なんだ、去年の歳尾の話ですか」

「去年たつて、まだ日數にしたら十日と經ちアしまい」

「へーえ、どこから傳はつたらう」

「惡事千里だよ。さう一人占にしないで、たまにやア俺たちにも取らせるもんだぜ」

大きな平顔を笑ひ皺めて、伊庭は、惡態らしい口上には似げなく、クツ／＼クツと、鳩のやうに可憐らしく笑つた。

「何しろ不思議です。あの人くらゐ女の出来る人は、あたしやア摩てだ」

「當時なんだつてえぢやないか、十割の率だつてえぢやないか。十人あへば十人……」

「まさか」

急に破裂したやうな笑ひ聲で、はたの者も二人の方を見向いた。

## 二

「なんです」

血色のいゝ、少しは角をとつてあるがまづまづくり／＼坊主に刈つて、モオニングを着込んだ、なかで一番文學者らしく見えない瀬川と云ふ評論家が、そばによつて來て、「なんだか、ひどく面白い話らしいですな」

「いえ、なに、ちよつと……」

伊庭は、あたりの人と、瀬川とへ半分々々に

目をやつて、ニヤリ／＼笑つた。

「なんです」

もう一度さう云つて、紋附を着た伊庭の肥つた肩に手をかけ、こゝみかゝるやうに自分の耳をそばへもつて行つた。

「いゝえ、金主の御亂行についてね……」

「金主? 信さんですか? 信さんがどうしたんです」

「三好君がお伴なんだ」

聞くとすぐ、今度は三好の肩へ兩手をかけて、二三度グン／＼と揺りながら、

「や、この人の取捲きやうは、どうも實がよくない。瀧十郎なんて不良少年と譏し合せたりして……」

「冗談いつちアいけませんよ」

三好は、ちよつと頬を染めながらも、「どうして、なか／＼彼方の方が、一枚も二枚も役者が上ですもの」

「どうだかな」

「それア信さんも、その道にかけると、中々ぬからないことはぬからないからね」

伊庭は、さう云ひながら、重さうに體を擡げて、「どうです、お茶でも飲みませんか」

さう云ふ聲を洩れ聞けば、誘はれもしないの

調子に、少からず嘲笑の響きがあつたが、むつとでもすることか、信之は、心弱くもそむけた頬を眞ッ赤にして、

「冗談いっちゃいけない」

「いえ、まつたく。あなたは少しお憤みなさいといけませんね」

と、すぐに瀧十郎も尻馬にのつて、ニヤリニヤリ笑ひかけた。

「とんでもない。それア君たちのこつたらう。

あたしはそんな……あたしは……」

「ほんとに正直な方ねえ」

助太刀の意味もあつて、女將はお澄を顧みたが、まだ靜に項垂たまゝだった。よもや涙ぐんでゐようとは思ひもよらなかつたから、随つて

それには氣もつかなかつたけれど、容子で、きばきした返事などは、思ひもよらなかつたので、瀧十郎でも言葉相手にと、目を向けた時、

「いゝえ、どういたしまして、正直どころの騒ぎぢやありません……」

信之にしてみれば、まだ友達の冷かしの方が

ましだつたから、さう答へながらも、一層面喰つて、ぐつと一息に乾すと、何をどうまづい

たものか、自分でも譯わからずに、眞つ直お澄にさしつけて了つた。生れて初めの盃にして

は、いかにも機縁がなさすぎて、はたからは、これもちよつと噴飯したくなる仕草だつた。

「お澄ちゃん」

姉に注意されて、伏目のまゝお澄は盃をうけた。手近から酌をしてやる時に、どうしたのかお喋りの瀧十郎が、ふと考へ込んでゐた。

不意に、五人の一座に來た沈黙は深かつた。降り積む雪の氣勢が、逆上あがりさうに睨まつた部屋のかなかで、しん／＼と滲み込んで來た。

無言のまゝ、ちよつと頂いて、お澄が一息にあけて返した。信之の心は、なんとなく綺麗に沈はれた感じだつた。

## 樂屋

### 一

今日が初日の春芝居は、一番日がまだ二位と切れないうちに、客をとめる景氣だつた。赤い顔をして、紗附、袴で、廊下を行き交ふ財物

も、芝居は二の次の、廻禮代りに、出賃ふ限りの知つた顔に「お芽出度う」を浴せかけ、あはよくば作れだつて食堂でとぐろを捲いて、夜の宴

會までの時間を消さうと、云つた氣持の連中が多かつた。それには、赤いところの大家分が、

初日招待の客、役者の家來、表方の關係者などで、ちつと落つていて見てゐるのは稀だつたから、二層廊下の社交が賑ふわけでもあつた。な

かにも、どこの座もきまりで、門下家、當劇批評家などが占めてゐる東二階は、殆んど晝間

を待ちかねての、廊下が忽ち雑談會場になるのだつた。誰、彼、一風變つた頭の前の方、整へ方をしてゐるだけでも、この一群は、すぐ

に見分けられたが、文學趣味の青年たちがよつて來てぐるりを取り圍んで、一生懸命聴耳たて

てゐるなかで、或はそれによつて得意にされては、或は名士然として自尊心から操目にな

り、或はさう云ふ傍觀者をもつたことに煩はされず、虚心平氣に振舞はうと云ふ意識で、却

つて虚心平氣になれずゐるなど、その空氣は、慥に學者らしい偏重を十分に漂はせてゐた。劇場の關係者たちは、愛嬌よく控出して、

そのなかを忙しうに通ひぬけて行きながら、彼等の、大體から見ての充奮に對する輕蔑

と反感とを、隠し終せしなかつた。白粉、烏田で、電話口にも呼ばれて行くらしい急ぎ足の藝者も、その一群のなかのどれかしらの顔へ、

ちよつと日禮を送つて通らないものはないくら



と、三好は言葉をついで、つまり六七年前に、一度でも顔と合せてゐる、……どころぢやない、詳しい話はたうとう出なかつたけれど、何か少しぐらゐる色ツばい場面もあつたらしいから、その懐舊の情ですか。はたから想像したつて、それアどちにも悪くない記憶に違ひありませんから。當時紀尾井町は十九でせう。

女將さんが一つ二つ上で、小つまとか云つて盛に嬌名を謳はれてた時分だつてぶふし、折しも五月の下旬、唯でさへ逆上あがるやうな時候を、芝居小屋にゐて、白襟紋附のうよくしてゐる廊下で腹貧血をおこして青白くなる。監査役だか取締役だか、兎に角重役さんの息子だから、これがまた大した扱で、武田家の二階の一間にねかされる。それ冷せ、あつためで……」

「きまつて葡萄酒を飲ませるやつさ」

「吊り込まれて瀬川が、一飲ませようとするが、酒を食ひしばつてゐて中々うまくいかない。その時口うつしに飲ませたのが小つまだつたつてね」

「すぐさう小説にしちまつちアいけない」と伊庭が、例の罪のない笑ひ顔で云つて、帳場の方へウキスキイの代りを注文した。

「いや」

三好は考へるやうにしながら、「さう云へば、その想像は、びつたり的中してゐるかも知れませんが。コッパ酒の荒事になつてから、女將が信さんに凭れかゝちやつて、口うつしに飲ませる、あなたにはさうして貰つてもいい、義理があるんだ、なんて云つてましたからね」

「へーえ。……で、信さんどうしたい」

思はず瀬川は、卓の上へ乗り出して訊いた。

「やりましたなア」

「やつたかい」

「少しも悪びれずに、ゴクン／＼とやりましたなア」

#### 四

「成程ね、ゴクン／＼とやつたかね。……然しそいつを見せつけられたんぢや、なんぼ満でもちつたアしよげたらう」

「それアあの男のことですから、側からワイワイ云つて嘲したたりしてね、せい／＼燥いさせてましたけれど、矢ッ張りどことなく陰鬱にややつてましたね。そのくせ、初は、病氣に見舞に行くだけのことを、ひどく御難がつてゐたんですがね」

「どういたしまして」

瀬川が嚙んでほき出すやうに「心から可厭と

なりやア、日に百度呼び出しが、……来たつて、めつたに出かけて行くやうな流ぢやアないよ。そいつを、一人ぢや恒はないから、とかないと云はれて、のめ／＼附合ふ氣になつたのは、一生の不覺だね。それとも、君は君で、なかまたうまいことでもして来たかね」

「とんでもない！ あすこまでやられると、あたしなんぢやア、側で見えてゐるだけで、なんだか、可憐いやうな氣がして來ますよ」

そこに多少の實感が言まれてゐることも、感ぜられてはゐるのだが、故意と二人は、（その手で素人をお騙しよと云つた表情を見合して、てんで返事さへしなかつた。

「それで……」

伊庭が、三日のウキスキイを仰ぎながら、結局どう云ふことになつたんだい」

結局、驚くべきことには、ですな、一方にそんなことをして置きながら、平氣で信さんは、妹のお澄さんの方に餘計好意を示すんですよ。尤もそれア誰が見たつて女將さんでえ人は、なんとなく底の浅い感じてしてね。あたしに素敵な名評があるんだが、つまり無智と色氣の象徴と云やアよく解るやうな女なんです。そこへ行くと、お澄さんは、どつちかよつて手

に、すぐついて歩きだすやうな人間も、そこらにゐないではなかつたが、三人の容子に、他聞を憚る話をしに行く、と云ふ心持が、露骨すぎるほどに見えてゐたので、すぐもう反感の眼差で見送つてゐた。

表二階の喫茶店は、いつばいの客だつたが、それでも隅の窓ぎはに、どうやら三人腰をおろす場所があつた。伊庭が紅茶を誂へて、すぐはたにウキスキイを入れるかどうかを訊いて、みんな賛成すると、追ツかけてそれをも註文した。

一體どうしたんです」

瀬川が、出来るだけ好奇心の餌になつてゐる自分を落つけようと、煙草に火をつけたが、徐に口を切つた。

「よし野の話、まだ聞きませんか」

「いゝえ、知りません。よし野つて……」

「ついでこの近くの料理屋です」

「へえ、そんな新開拓があるんですか」

「僕は一度三好君と一緒に رفتたことがあるが、もとはと云へば、瀧十郎の最良筋のうちなんでせう。ね、さうなんだらう？」

「えゝ、最良も最良も、ずんと念のいつた最良でしてね……」

「成程ね」

と、瀬川もすぐ呑み込んで、性急にあとを促したてた。「そこで、どんな騒動がもちあがつたね？」

「一遍で、その女將さんと、女將さんの妹と、かう二人まゐつちやつたんです」

「誰に？ まさか君にぢやあるまいね」

「ですから、紀尾井町さんの話です」

「で、どつちが誰のスキメなんだい」

スキメとは彼等仲間の隠語で、情婦と云ふ意味だつた。

「女將さんの方だつたんですがね……」

「だつた、は可哀想だな。事既に過去に属するわけか」

泉でも噴き、れるやうに、伊庭は、大きな腹から、クツクとこみ上げて笑つた。

### 三

「しかし」

瀬川は、そこに運んで来た紅茶に、ウキスキイを割つて掻きまぜながら、「一遍で二人ともまゐつたと云ふが、そのまゐり方の度合が問題だね。ちよいと頼母しい人だらうのか、それとも……」

「いゝえ、それが中々そんな程度ぢやないんで

す。みんなもいゝ加減酔はらつちやつてからのことですけれど、女將さんとは、隨にセツセツまではいつてゐるんですからね」

隠語の意味は、接吻だつた。自分だけしか知らないことを話す場合の、もの惜みの氣持や得意やらが、蒼青色の二好の顔に、ありくと現はれてゐた。

「それア酔つての上のことなら……」

と、伊庭が云ひかけるのにかぶせて、

「いゝえ、いくら酔つてたつて、その晩初めて逢つて、而も自分の……つまり瀧の見てる前で……それア矢ッ張り、餘つぽと惚れてなきア出来なない藝當ですよ。ねえ、瀬川さん、あなたどう思ひます」

「まあ、それアさうだらうな。ところで、一體どう云ふ機縁からそんなことになつたんだい」

訊かれて三好は、文學者らしい細かさで、初からの顛末を話した。瀧十郎と女將との關係、お澄が以前に矢張りこの劇場で藤代を見初め

てゐたこと、女將の病氣見舞に二人が誘はれた意味、表二階から階下へ移つての情景、七つ

八つ誤魔化してゐた年齢の話、續いて東北鐵道會社が買ひ切つた少居での出来ごと……

「一番重大な動機と云へば……」

まゝに、高等學校、大學と英法科に學び、法學士の證書をもつてゐるばかりか、辯護士の資格までも得てゐた。それもほんの申譯に、どうやらかうやら卒業證書だけ誤魔化し得た、と云ふやうなのではなく、法律と云ふ學問に對しても、相應の興味はもつてゐた。殊に犯罪學に關する書籍は、それがさして舊い研究でないだけに、殆んど悉くと云つてもよいほどに讀破し、一家の見識も備へてゐたが、博士論文でも書かうと云ふやうな氣にはなれなかつた。辯護士の方も、知人に頼まれれば意見も述べ、調べるものがあれば調べてゐるが、一般の依頼に應じる業務とはしてゐなかつたから、知つてゐる人でも、彼が法學士であり、辯護士であると云ふことを、ついつかり忘れてゐる時が多いほどに、日常の生活は、その方面の色彩なり、雰囲気にと乏しかつた。

七八年前に、ある友達の紹介で伊庭と相知り、それからだん／＼に文學者との交際が擴がつて行つたわけだが、一昨年の秋、伊庭から雜誌を御覽する資金の相談をうけ、それを引うけて以來、急に親密の度が加はつて來たので、それまでは、例の殷勤な言葉使ひなども残つてゐて、お互にさううちとけた仲ではなかつた。それ

が、相談會のくづれと云へば、いつもきまつて狭斜の巷へ自動車を飛ばし、酔の中で友情が堅くなつて行つた。——時には、さう云ふことが、ひとり居の信之を、救はれ慣ひ陰鬱に導きもしたが、ずる／＼と習慣に引きずられて、今ではもう、同人の誰かと顔を合せさへすれば、酒や妓なしには別れかねるほどの、不思議な粘着が生じてゐた。

なかでも、編輯の衝にあたつてゐる三好は、忙しい期間には毎日のやうに、藤代家の洋館の一室に置いてある編輯事務所に詰めかけてゐる關係からも、一番仲がとれてゐた。それでも、三好は、稿料の前借などで、同人と金主との間に立つことは、ひどく可厭がつてゐた、なんとなく、彼にとつて、信之は可怕い人だつた。

## 六

而もその可怕い人の前に、編輯に關する金銭の出入りで、去年の十月頃から、三好は祝物をもつやうになつてゐた。勿論それは、悪事とは名づけられないほど輕い意味のもので、なければないでもすむのを、なまじ財布にはいつてゐるばかりに、友達を誘つて一緒に酌めしでも食ふことになり、酒がはいれば、そのまゝにけ別

れ憎く、夜が更けてから態々宿に歸る氣もなくなつて、ついそで泊る、——そんな風にして、自分のものでない金が、三四百圓費されて了つたのだ。——上遊蕩の金となると、まるで低能兄のやうにだらしがなくなるけれども、元來信之には、見かけによらない事務の才能があつて、編輯營業の出納なども、中々きちんとしたものだつたから、三月の間に三四百圓と云ふ僅な金でも、少くも七八回は、三好の口が噓で穢されなければならなかつた。例へば自分達でやつてゐる雜誌でなく、ほかからの依頼は初てだと云ふやうな、ごく新しい作家で、謝禮などは二の次の、「高踏」に掲載されるの名譽と心得て執筆したやうな人へ送る答の原稿料とか、高踏社と近い關係の本屋などから、思ひのほか几帳面によこした廣告の料金とか、堂々たる作家から申込まれた前借金の一部とか、多くはそんな性質の金だつたから、帳簿を誤魔化するのなんのと云ふやうな、巧んでの悪事とは違つて、何か訊かれてもした時に、ちよいと心苦しい思ひをして、嘘の一言二言ついて置けば、さう尻からばれて來るやうな心配はなかつた。その上三好の氣持としては、誤魔化するの私消するのと云ふのではなく、結果からみれば



強いところがある、一遍や二遍の割合では肝底が知れないやうなところがある、——いっだって、信さんが口をつけるのは、きつとさう云ふ質の女ですからね。だから初っからあたしは、結局さう云ふことになるたア 晩んでましたかね……」

「理論はそれとして……」

瀬川の普段から血色のいゝ顔は、もう白ツ赤になつてゐた。「事實の結末はどうついたね。御亂行の御亂行たる所以は……」

「十二時頃まで飲んで、瀧だけ無理にあとへ残して、吾々は引きあげちやつたんです」

「どこへ」

「ヒモト(日本橋)へ」

「で、ハク(泊)か」

「それアもう、例のが現はれて、……信さん、ちつと悪酔で、ト(吐)きなんかあつたんですが、介抱いたらざるなく、でね。どつちへ廻つても、あたしと云ふものは、まるでなしでさアね」

「ま、それも御修行のうちでせう」

伊庭が押揃ひ顔に云つて、あたりを見廻した。が、いつか暮があいたとみえて、もう一人客は残つてゐなかつた。大きく伸びをしたが、窓からそとを眺めると、手を出せばつい届きさ

うな近くに、植木の裏がいつぱいの目隠しとなつて立つてゐた。冬の陽は既に落ちて、窓の四角が、菰葎りの上に明かるく映つてゐた。

「さアて、そろく、出かけるかな」

「どこへ行くんだい」

「どこつてこともないが、いつまで芝居にゐたつて仕様があるまいぢアないか」

「それもさうだが、……困つたなア」

と、瀬川は爪を立て、ガリノノ頭を掻きながら、

「どうだ、三好君、三月號にはきつと書くから、ちつと前借させないか」

「さうですね、今に金主が見えやアしないかと

思つて、實はあたしも心待にしてゐるんですがね」

## 五

藤代信之が、この連中に金主々々と呼ばれてゐる意味は、たゞ飲食や遊蕩に、いつも勘定方を仰つかるからばかりではなかつた。伊庭瀬川のほか

に四五人の同人、準同人をもつた文藝雜誌「高踏」のために、月々の不足を補ひ、經營の一切を引うけてゐる實際の金主だつた。そして彼自身は、文藝に對して優れた鑑賞や、生涯

渝りさうもないほどの愛好をもつてはゐるが、一度でも自ら筆を執つてみようなどと思つた

ことはなかつた。親しい文學者との對談に、たまに極めて拙目な言葉で批評めいたことを云ふくらゐがせいゝで、常には、その道のことには、なんと云つてもその道で苦勞して來た人のやうに、眞心で解る筈はない、と云つたやうな謙遜な氣持から、所謂門外漢としての自分の立場を堅く守つてゐた。清原などでも、文學者同士の藝術論が始まると、體を正して熱心に傾聴する、と云つた風で、時折畫家のパトロンに見かけるやうな、我儘や輕蔑の念など更になかつた。さう云ふ意味で、彼を呼ぶには、藝術の「愛好者」を以てするよりも、寧ろ「贊成者」とでも云ひたいくらいだつた。

その贊成の念は、ほんの子供の時分から彼に芽ざしてゐた。古今東西の藝術、——殊に文學に對する彼の熱意は、第一に永の年月と、生れた家の資産と、飽ことを知らない讀書力などが相俟つて、をさ／＼その道の人にも譲れないものがあつたが、一つの理由としては、それ故に、澤山立派な作品に觸れて來てゐるだけに、盲目蛇に怖ずの丁度正反對で、自分自身が藝術家たり得ようなどとは思へなくなつて了つたのだ。そこへもつて來て、都會人らしい平ひを避けたがる性分から、父親の望むが

瀬川は、自分をも含めて嘲笑ふやうな調子で云つた。

「元談は元談として……」

卓に乗り出して額をよせ、伊庭は一段と聲をひそめて、「實際なんとかして、もう少し金を出させる工夫はないもんかね。三好君なんぞは、だいぶんうまきやつてゐるらしいが、中々僕等までは潤つて来やアしないよ。一體信さんつて人は、ぐうたらなやうで、芯じまりで、芯じまりのやうでぐうたらで、ちよつとわけの解らない人だからな。どつからどう云ふ風にもちかけたら、一番いゝのかしらんと思つて、實は近頃、ひとりで時々それを研究してみろんだがね。どうです、三好君、なんかいゝ智慧はありませんかー」

急に言葉使ひを丁寧にしたところに、軽い皮肉が感じられて、心のうちにやゝどぎまぎしただけ、三好は答へに、露骨な不快を現はさずには置けなかつた。

うよ」

「不當だ？ 不當を云ふなら、信さんの所有物の一切が不當だらうぢアないか。第一、なに一つ仕事らしい仕事もしずに、のらくら遊んでゐられると云ふ身分からして不當だらう」

氣色ばんで伊庭がきめつけるのを、瀬川は、ニヤ／＼しながら宥めにかゝつた。

「それアもう、云はないでも、世の中のこととは大抵不當だよ。たゞ、親の遺産を食ひへらしてゐる方が、他人の財産を自分のものゝやうに使はうと云ふより、幾分か不當さが少いと云ふだけのことさ、不當を云やア、それア君の云ふ通りどつちも不當だよ。ちよつとした程度の違ひだけだよ」

# 八

伊庭は、じろりと瀬川を見据ゑた、云はれた言葉よりも、云つてゐる心持をはつきり見極めようとする風で……。それから、舌なめずりをしながら、自分で自分を宥めるやうな、また嘲るやうな氣持の微笑を浮かべて、

「可厭なことを云ふなア。理窟らしくつて、氣持で裏を云つてやアがる……」

「さうかしら。僕は君に賛成してゐるんだぜ。不當の世の中だから、大に不當に出させようと云つてゐるんだぜ」

云つてゐるんだぜ」

や、阿るやうな瀬川の調子には、相手も酔はらひ抜ひにしてゐる氣持もないではなかつたが、伊庭には氣がつかなかつたのか、氣はついてゐても、自分でもうそれ以上角目だつた言葉のやりとりをするのが可厭になつて來たのか、急に口つきを柔げ、幾度も頷いて、

「さうだよ。もつとどし／＼出させなきやア安だよ。信さんに何か立派な仕事でもありやア格別、色事師みたいな今の生活を續けて行くために、莫大な金を空費させとくのは馬鹿げてゐる。それくらゐなら、俺たちに使はせた方が、まだしもましだからなア」

先刻の劍幕で、ちよいとへこんでゐた三好が、その時、さも平氣を装つて口を出した。

「色事師とは名評ですな。實際近ごろの信さんには、さう云ふ態がありますよ」

「生意氣ぶなよ」

と、今度は瀬川が唇を失らせて、「一體君なんぞが、信さんなんて友達づき合ひにするなア早すぎるよ。あの人は、あれで中々しつかりと生活してゐるぜ。そこへ行つちア、君なんぞまだ駄目だよ、薄ッぺらだよ」

そんな風につけ／＼づつても、不思議に瀬川

まりはさう云ふことになつて了ふまでも、ほんの一時の融通で、自分の作が上演されてもした場合には、その料金のうちから返済すればすむ、くらゐの釋はもつてゐた。とは云へ、もともと可怕い人の前に、さう云ふ秘密をもつたことで、彼の生活氣分が暗くかげつて來てゐたのは事實だつた。殊に、伊庭や瀬川のやうな、一高踏と切つても切れない縁故をもつた先住たちが、近頃の彼の、身分不相當な金使ひの話を聞いてゐる、うすくはその金の性質に就いて、抱きついてゐるらしい容子なのも、壓しつけられる氣持だつた。そんなところからも、いま瀬川からも出された稿料の前借を、信之に掛合つてやらうなどと云ふ氣にはなれなかつた。直接自分に關係したことではないけれど、ならうことなら、今の場合そんな話には觸れなくなつたのだ。——なにがなし日映しい氣持で、舞臺を見るためにかけてゐた例の十二度の眼鏡をはづし、寒水石の卓の上で、三好はカチャリ／＼とそれをおもちゃにしてゐた。

「だつて、そんなことは編輯人の役ぢやないか。信さんが來るんならなほ都合がいゝや。二割の手數料を出すから、ちよつと百圓かそこら貸して貰つてくれよ」

瀬川は冗談とも本氣ともつかない調子で、ねちねちとそんなことを云ひ出した。

「何しろ、なんだね……」

豪酒で有名な伊庭も、立てつゞけに四五杯のウキスキイをあふつて、だん／＼機嫌になつてゐた。「われ／＼編輯同人には、編輯費の外に、月々五六百圓の機密費を出してくれないと困るね。高踏の同人と云へば、世間ぢや信さんを食ひものにしてゐるやうに思つてゐるやつがかなり多いんだから、吾々から云へば、その名譽毀損料としても、信さんから、當然それくらゐなことはして貰つてもいい筈だよ」

## 七

「女にもてすぎる税金としてだつて、相應出してもいい筈ですよ」

「一好は、先刻はなしかけてゐて、つい何かに紛れてそのまゝになつて了つたよし野でのもて振を思ひ出すと、そんな風に云つて、もう一度話題をもとへ戻さうとしたが、（なアに、その點ならば俺だつて……と云つた氣持は、そんな場合すゞ大抵の男の胸には湧くもので、豫期したやうな同感の言葉などが、ましてや、自惚にかけては常に必ず人後に落ちない文學者の口から聞かれさうな筈もなかつた。その默殺されたや

うな立場のためにも、三好が押し切つて話したしたのは、お澄の態度だつた。そこには具體的に、纏つた一つの面白い話柄となるやうな出來事は何もなかつたのだけれど、その代りまた、細い心理を話すとなれば、文學者として大切な武器の一つである觀察力の點で、同時に自分自身をも高く價値づけ、よく役づけることも出来るわけだつた。が、つゞめたところは、女將の傍若無人な振舞で不快にされ、嫉妬をも感ぜてゐながら、健氣にもそれを抑へ／＼て、出來るだけ快活に、そして信之に對しては、目立たないやうにはあるが、飽まで忠實しく心を使つてゐた、——あれだけのことが、大抵の惚れ方であるものではない、と云ふやうな話だつた。

「實際あたしも、ちよつと驚いたんですがね……」

と、少しは大袈裟にして、いよ／＼その物語りにかゝらうとした時に、伊庭が、（もう澤山だと云ひたけに違つて、

「なんの税でも構はないから、せめて一人あて百圓づつもくれないかな。もしなんなら、取捨料の名目でもいいゝや」

「つまり太鼓持の御祝儀だね」



急ぎ足に出て行つた。あとに、瀬川が勘定をす  
ましたところへ、續いて三好も立つて来て、  
「先刻お話のシャク(借)のこと、お急ぎです  
か」

と、いかにも編輯者らしい職業的な口調で尋  
ねた。

「いや、冗談だよ」

と笑つて、背中を一つ叩き、その手でうしろ  
から押しやるやうに廊下へ出て行つたが、そこ  
の窓硝子のそとは、いつの間にかもう眞暗な冬  
の夜になつてゐた。朦朧と硝子の面に映る自分  
の顔の赤さを撫で廻しながら、然し瀬川はまた  
言葉續けて、「全然冗談と云ふわけでも  
ないが……もし四五日のうちに……勿論態々  
でなくつてもいいんだが、ひよつとして皆さん  
に遇ひでもしたら、一通話といつてくれないか。  
正月早々からあんまりだらしのない話だけ  
ど、實際こゝんとこ、ちよつと手詰つてゐるん  
だから……」

「承知しました。きつと明日か明後日にはお日  
にかゝれさうな気がしてゐますから、さうした  
ら、お話しでなんとかしといつて頂きませう。  
百圓でいゝんでしたね？」

「まあ、そんなわけだが、然し、無論それア、

多けれア多いほど結構さ。その代り、三月號に  
はきつと書くよ」

「えゝ、どうぞ今度は、ひとつ間違ひなくやつ  
て頂きたいんです。今のところ、ほかにまだ一  
人も極つてない、つて云ふやうなわけですから、  
ほんとに何分とも宜敷お願ひ申します」

# 十

雑誌の方の用談をすますと、三好は、便所へ  
でも行くやうな何気ない容子で、瀬川一人を置  
ざりに階段をおりた。先刻から彼は、多少とも  
上手へ向つての、而も文學者らしく纖細に神經  
を働かせなければならぬ、會話に勞れ、隨つ  
て高立易い氣持になつてゐた。さう云ふ時に、  
やゝ下向に、氣樂な話の出来る瀧十郎に逢ひた  
くなるのは、ごく自然なことだつた。

三好の顔を知つてゐて、手早く麻更草履を出  
して貸してくれた揚幕の番人に、五十錢札を二  
枚握ませて、

「や、有難う」

と、草履を突ッ掛けると、さつきと奈落へお  
りて行つた。舞臺や観覧席や廊下の華かさ、  
賑かさのすぐ下に、こんな陰氣な地下道が通つ  
てゐようとは、……まるで地獄煉樂のやうだ。  
これは、雖もそこへおりて行つた者には、

誰にでも必ず起る感慨に違ひない。じめく  
と冷たく、穢臭い空氣、へんに裾ツちやけて見  
える薄汚い裸電燈、汚れて傷だらけな廻り舞  
の束、置き捨てられた數疊の枯葉の蔭からは、  
絡でも顔を出しさうで、薄氣味わるいほどだつ  
たが、馴れては、それもちよつと薄ら寒い廊下  
と云つたほどの感じだつた。通りすぎ、須取部屋の前  
にあがつて、そこからすぐまた二階へ、階段か  
らほど近い瀧十郎の部屋暖簾を分けて顔を出し  
た。

「いらつしやいまし、お芽出度うございます」

「や、お芽出度う」

元氣よく、小部屋の男衆に聲をかけて、「お  
ますか？」

「どうぞお通りくださいまし」

顔から先に、寢き込むやうにしながらはいつ  
て行くと、奥に一座の若女形市川左喜松の鏡  
臺だが、折から舞臺とみえて、大柄な友染の座  
布団がその前にきちんと直してあり、間に紐子  
の火鉢を附て、定紋をちらした襦袢の鏡臺の  
前から、襟を大きく割つた締人のちゃん／＼一  
枚のもろ肌ぬぎで、瀧十郎は丁度、二番目に出  
る町家の若旦那の顔をしてゐた。そのそばに、  
古びた根株の火鉢に手ぞかざして、連中の幹事

の言葉にも愛嬌があつた。少くも、相手をさう不快にはさせない響きがこもつてゐた。それにしても、立て續けにヤツつけられて、三好は、すっかり面白くなつて了つた。(この人たちは嫉妬するんだ。自分たちと信さんとの間に、俺と云ふものが挟まつて、利益を齟齬してゐるやうに感じられて、その話となると、すぐからいきり立つて了ふんだ。あゝあ、可厭だ)。どうしてかう卑劣なんだらう。そんな風に考へて行つた心は、すぐ自分自身の咽喉輪に手をかけてゐた。——去年の秋以來して來たこと、その事實に對しては、何者の前に出ても、立派に辯辯できるけれど、その事實からうけた心の暗みは、相手が、最近にそれを経験して來てゐる心そのものである以上、なんと誤魔化しやうもないわけだつた。——三好の心は、急に二重の暗さに鎖されて行つた。

「兎に角、然し……」

その顔色を讀みながら、伊庭はそれが好みの、惡黨らしい調子になつて、「かう云ふ内輪の樂屋話は、外に漏れないやうに、十分お互に氣をつけようぜ。それでなくつてさへ、いゝ加減俺たちはブルジョワのお抱え家のやうに云はれてるんだからなア」

けれども三好には、この言葉が、云はれた意味には受取れないで、自己嫌惡に陥いつてゐる自分への慰めと感じられ、そしてその志が有難かつた。——病人のそばでは、いかに彼が健康であるかを説くよりも、近頃どこそこが惡いと黒猫をこぼす見舞客の方が、慥に喜ばれるに違ひない。さう云ふ灸所に觸られると、三好も忽ち心弱くなつて、胸が熱くなつて來た。(あゝ、友達け有難いもんだ!) そんな感慨で、自己嫌惡の方は、いつの間にかさりと拭ひ去られてゐた。

## 九

「樂屋話か……」

暫く沈黙が続いたあとで、瀬川が、たつた一言、丁度古池のおもてに、チャボンと小石でも落し込んだやうに、獨語ちたが、波紋は、はたの心へも、靜に擴がつて行つた。伊庭には、それが婉曲な非難のやうに響いた。生活に樂屋を必要とするとは……、そんな氣持がいま瀬川の胸に動いてゐるのではないかと、感じられた。三好は、自分の視密をつつ突かれたやうにひやりとしたが、すぐ云ひ手の表情で、それが自分の考へ過しと解つてやゝ安堵した。さう云ふ、岸からまた搖れ返して來る波紋は、微なが

ら中心の瀬川まで達しないではゐなかつた。彼の心では、いろ／＼な意味で二重生活の弱味が考へられてゐた。——そんな風に、たつた言の呟きを眞中に置いて、三人三様の思ひに耽つてゐるところへ、本家茶屋の女中がはいつて來た。

「伊庭先生、お電話でございます」

「あゝさう。どうも有難う」

すぐに思ひあたるところがあるらしく、先方の名を訊き返ししに、慌たゞしく椅子を立てて給仕の娘を呼び、勘定を拂はうとした。

「いゝよ、こゝはいゝから早く電話に出たまへ」

瀬川がニヤ／＼しながら、自分立ち上つて勘定場の方へ歩きだしたが、その途中で、伊庭

の耳もとに口をよせて、「待つた甲斐があつて、たうとうお座敷がかゝつたね」

「まだ三ヶ日のうちだぜ、なんぼ僕だつて一つや二つ……」

「いやもう、いくつになつても、よくお賣れになることで……」

「どういたしまして——」

てれ隠しに大きな聲で笑ひながら、一チア失敬、いづれまた……

と、二人に挨拶して、茶屋の女中に導かれて、

から驚きますよ」

「たゞなんだね、趣味のないことだけは他だね、どんな場合でも決して拵へたところはないからね、その點は、吾々には大へん氣持がいゝが、女なんぞにとつちア、とても魅力になりさうもないことだからね」

「それア然し、女だつてそのくらゐのことは解りますよ」

「さうかしら。さうだとすれア、矢つ張り一種人格の力、とでも云ふやうなことになるね」

「結局さう云ふことになるんでせうね。さア、あつしもこれから大に勉強して、人格の向上を計らうかな」

「初ッから、女を拵へるのが目的でやる人格修養ぢア、まアく大したことはないね、安心だね」

「安心、へんなところへ安心を使つたもんですね。あつしに女が出来る、先生に御心配をかけることにもなるんですか」

「女は兎に角、君なんぞにさう偉くなられちア候はないよ。まア、今くらゐなところで丁度いゝよ。そのうへ女に出来られたら、自分だつても困るだらうしね」

「羽二重！」

だしぬけに瀧十郎が、いやに權柄づきな聲を次の間かけると、待ち構へてゐたやうに、油が滲みて半透明になつた薄汚い羽二重を持つて、床山が跳んで來た。顔を合せて、……そのとき彼は、一個の熱心な藝人だつた。

十二

羽二重を合せて了ふと、それでもだいぶん氣味惡さが消えて、舞臺で見る瀧十郎の顔を偲ぶことも出来た。目を細くして、鏡のなかの顔を見詰めながら、

「どうでせう、ちつと赤すぎますかしら」

「さアね、白すぎるくらゐぢアないかね」

「さうでせうか」

「尤も役者の白粉が、白すぎて困ると云ふ場合は、絶対にないわけかも知れないが……」

「と云ふと、白ければ白いほどいいんですか」

「さうさ、勿論それア、君のやうな役者の心理から云つてだよ」

「なんだ」

と、有繋にちよつと不憚な顔をして、「ぢアもうちつと赤くませうか」

「なに、その御遠慮にやア及ばないよ。尤ももう二番目になると、白粉は大抵歸つちまつてるがね」

「さう云ふアね、先生」

火鉢の方へくると振り向き、煙草に火をつけて、いつになく、初心らしくも、もじもじしながら「近いうちに一度ゆつくりお日にかゝりたいんですがね。……と云ふのは……」

「また新情人の惣話でも聞かせようつて、ふんだらう」

「茶化しちまつちやアいけません。實はあつしも、今度はちよつと、先生の前に兜をぬがなかつちアならないはめに立至つてるんですがね……ちよつと失禮します」

喫みかけの煙草を灰にさし、急に立ち上ると、衣装方と呼んで手早く支度にかゝりながら、

「まア然し、そのうちゆつくりお話し申しませう」

「へーえ」

衣装方、男衆の忙しく立ち働く場面をあけるために、三好は、座布団ごと隅の方へ膝行つて、目の前で昔の男に變つて行く瀧十郎を見上げ、だいぶん得意さうに微笑んで、「僕に兜をぬいだと云ふと、つまり、ソジン(素人)にメ(女)でも出来たとか、出来かゝつたとか云ふやうな話かね？」

はたに人があるなかで、降語ゆゑに、不氣で



らしい、四十男の先客があつた。

「いらつしやいまし」

次の間から顔を出した三好は、鏡のなかに映してみて、瀧十郎は愛想よく聲をかけた。二三杯のウキスキイははいつてゐたが、俄にその酔をだいぶん誇張した容子なりもの云ひなりで、三好は、簡単に新年の挨拶を取り交し、先客の方へもちよいと頭をさげてから、

「どうです」

「いやどうも……。先夜は……、一別以來ですね」

「少しお氣の毒だが、まづお互にと云つてもよからう、お互に……」

「まつたくひどいことになるもんですね」

さう云ふ僅な言葉ほど、なほお互の肚のなかが解るやうで可笑しかつた。眞つ白に塗りたてゝゐるために、普段はまるで氣もつかない、

……どころか綺麗だと思はれるのに、それが急に

煙脂だらけの薄黄色に見える齒をむき出した瀧十郎の笑ひ顔は、決して氣持のいいものでは

なかつた。おまけに、素顔ではあれほど澄んで見える白眼までが、黄ばんで、血ばしつたやう

で、いかにも無氣味だつた。けれども、これも奈落と同じ理窟で、見馴れた三好には、さして

著しくは感じられなかつた。

面白さうな、然しつぱり譯の解らない話を、

ニヤ／＼するのも憚れて、伏目になつて聞かぬ

顔である先客は、隙をみて、瀧十郎に挨拶する

と、急いで出て行つて了つた。二人は急に氣を

樂にした。

## 十一

合せ鏡をして、頸筋の白粉を、牡丹刷毛での

ばしながら、

「あの後、紀尾井町さんにお逢ひでしたか」

「歳尾に雑誌の方の用で二三度事務所へ行つた

けれど、お留守だつたり、いらしつても馬鹿に

お忙しさうだつたから、ゆつくり話はしなかつ

たし、元日御年始に伺つた時は、珍らしく御

夫婦づれでお出掛になつたあとだつたんで、ま

だ今年になつてからお目にかゝれないわけさ。

だからその後、あの晩の話も出ないよ」

「今日はお見えになりさうなものですがね」

「さア、僕もさう思つてゐるんだが……。君は、

あれからホウヤ(よし野)へ行つたかい」

「どういたしまして」

「ちア、紀尾井町さんが残して來た印象と云

ふやうなもの、まだ聞かないわけか」

「どうもあゝ荒されちまつちアね」

「へえ、瀧さんでも、そんなことを氣にやむか

ねえ。あのくらゐはほんの御座興たらうぢアな

いか」

「さう云やアまあさうですけれど、然し……」

「あんまりいゝ心持はしなかつたかね」

「誰が、あツしが？　じよ、冗談いつちアいけ

ませんぜ。然し、一體紀尾井町さんつて方は

どう云ふんです。不思議な魅力をもつた方で

すね」

「まつたくね、いゝ男のことを云ふなら、勿論

瀧さんの方が十枚も二十枚も上だし、云ふこと

爲すことだつて、別段氣が利いてゐるつてほどぢ

やなし、それに女房子持でさ……」

「女房子なんぞ、相手がッジン(素人)の場合な

らどうだか知りませんが、却て一家の主

人と云ふ方が、重みがあつていゝくらゐでせう

よ。それはいゝとしたつて、どうも吾々男の目

には、どこに一つこれはと云ふやうな、目立つ

たところがあるとは思はれませんかねえ。一

體男でも女でも、人勢のなかへ出て、なんと

なく人目につくつて云ふやうな人なら、きつと

色っぽい話が多いもんですが、紀尾井町さん

は、どつちかと云やアくすんだ方でせう？　そ

れだのに、忽ちあゝふふ景色になつちまふんだ

これは、どちらかと云へば丸顔で、剃り込んであるとしても、尻下りに長く引いた眉や、並びの白い歯、人中のさが心持まくれ上つた薄い唇など、兄にはまるでないところの、西洋人むきの美しさに富んでゐた。

箸にも棒にもかゝらない道樂者だつた鈴江の父親も、どうやらさが考へられて來にとみえて、三四年前からは、横濱の或る大きなホテルの主廚の位置を、後生大事と勤めるやうになり、昔から仲のよくなかつた母親の手から、娘の鈴江を引きとつて、我が儘のさせ放題に、ただ猫ッ可愛がりに可愛がつてゐた。鈴江としては、氣むづかしい母親や、——彼の女の言葉に従へば、「俺がばかりの出世を鼻にかけて、一人ではばり散らす」兄の政次郎のそばで、窮屈に暮してゐるよりも、夜よりほかゐたことのない父親の家に、誰からも掣肘を加へられることなく、思ふがままに振舞へる現在の生活を、どれほど喜んでゐたか知れない。現金でこそ、月にやつと二三十圓しかあてがはれなかつたけれど、身につけるものなどでねだる分には、大抵のことまでは、聽かれなと云ふためしがなかつた。——一二年以來横濱で、岡島鈴江と云へば、知つてゐる人々には、すぐ微笑や、機を向

いてアツと吐きたくなる唾や、北叟笑や、眉間の皺や、その他いろ／＼の表情を催させる名前になつてゐた。

## 二

西山は夙に鈴江を見つけてゐたけれども、遠くから合圖をするでもなく、また黙つてそばへ行くでもなく、兩手を外食の衣囊に突ツ込んだまゝ、冷然として唇を鳴らし續けてゐた。空色のむすび、革手袋をはめた指先で改札掛に渡して出ると、鈴江は、キョロ／＼あたりを見廻すやうなこともしせずに、そのまゝさつさつと正面の口へ急いだ。やり過して置いて、西山も續いて歩き出し、往來の土を踏む時分には、追ひついて肩を並べた。すまし込んで、そのまゝ二人は二三間乏しの電車通りの方へ歩いて行つた。

「ひどい道だね。タクシーにしようか」

歳尾の大寒以來、いまだに泥海の壯觀を呈してゐる東京名物の悪道路に、上履をかけない裾革の華車な靴を爪立てながら、鈴江は、男のやうな聲で、そして男のやうな言葉で、撃てかう口を切つた。西山の方は、上履をした泥まみれの靴で、憎げもなくビチャ／＼歩いてゐたが、振りむいて、

「一體、どこへ行くんだい」

「なに云つてゐるんだよ、こなひだ……」  
「それア解つてゐるよ。だから、その人のうちはどこだつて云ふんぢやよ」

「麹町の紀尾井町さ」

「ギア、乗合自動車で銀座へ出て、ちよつとお茶でも飲んでから、新宿行の乗合自動車……」

「バス／＼つて、いやに乗合が好きなんだね」

「いゝギアないか、腹臭くさくつて。わしアあの機關の焼けた匂が大好きぢやがねえ」

「わしアあんまり好かんが、銀座に出るのは賛成だから、ギアバスにしようよ。何しろ、この道は歩けやアしないよ」

「もうちよつと深々と泳げるんぢやが、實に残念なもんぢやね」

「馬鹿々々、往來を泳いでたまるもんかね」  
有藝に女らしくクツクツと忍び笑ひをしながら、またあと戻りをして、表玄関の前で乗合自動車を待たせた。ほどなくそれが、一腹臭くさい一煙をはき散らして、頭でつかちな一寸法師のやうに、よち／＼揺れ動いて來た。「先つ婦人の境に従つて、西山は、氣取つた容子ッぶりで女を助け乗せ、續いて自分も身輕く車上の人となつた。

「おや、暫くね」

さう云ふ話が出来ると云ふ意識で、一層嫌いだ  
氣持にされてゐた。けれども瀧十郎には「出来  
たとか、出来かゝつたとか」と云ふやうな言葉だ  
けでも、勘のいい男衆などには、すぐ氣どら  
れさうな氣がしたので、片眼をほそめて、パチ  
パチと臆を合せて注意した。

花魁の新造とか、藝者の箱屋とか、役者の男  
衆とか、すべてさう云ふ寄生蟲的な生活をし  
てゐる人間が、喰ひさがつてゐる者の隅から隅  
まで悉く掌中に置き、少しでも餘計に榮養を  
盗み吸ひ取らうとする根性から、油斷も隙もな  
く、常に祕密の匂に鼻をヒコつかせてゐる事實  
は、三好も見聞してゐたうへに、瀧十郎の男  
衆、大橋善太郎が、典型的な寄生蟲根性の男  
だと云ふことも知つてゐた。悪賢いと云つても  
いゝほどで、無論年齢にすれば驚くばかり利口  
な瀧十郎が、なんとなく、自分の使つてゐる者  
の前に、始終頭のあがらない態なのも、要す  
るに深遠な祕密を握られてゐるせむだらうと察  
しられたし、また大抵のことまでは、——それ  
も「もたれ込み」と云つた風な、一つの手かは知  
らないが、ズバ／＼と、少しも隠しだしてしに、  
寧ろいろ／＼の助力をうけてゐるらしい容子も  
日についてゐた。にも拘らず、今その大橋の前

を、大慌てに慌て、取締はうとするのは、よく  
よくの大祕密に違ひない、と感じられたので、  
ぬからず三好は、仙事を云つて、うまくその場  
を誤魔化して了つた。

## 不良の徒

厚いアーチの下、石段に、大勢の足音がこも  
り響いて、いづれも一分一秒を争ふやうな氣忙  
しなで、眞直に改札口へと傾れて來たのは、  
大きな手荷物を持ったのが殆ど一人もゐないの  
を見て、櫻木町發の上り電車から吐きださ  
れて來た人々に違ひなかつた。

一二等婦人待合室の入口に立つて、唇をと  
んがらかさずに、僅な隙から息を漏らすやうに方  
の口笛で、何やらダンス、ミュージックを口吟  
みながら、四つ並んだ改札口へ油斷なく目を配  
つてゐるのは、荒い辨慶縞の烏打帽を、兩耳が  
押し曲げられるほど深く阿彌陀に被り、鼠つぽ  
い厚羅紗の、やつと膝まであるかなしの外套に、  
やゝ流行おくれの空色がかつた背廣を着た美少  
年だつた。美少年と云つても、可愛らしいと云  
ふのではなく、誰が見ても正確に二十歳と思

ふまいほどにふけてゐるし、丈は四寸型で、  
肉は薄く、キリ、としまつた、凄、質の美しさ  
だつた。膚色の眉毛の下に、眼は深く鋭く、羅  
馬鼻で、しやくれ加減の顎にナポレオンのやう  
な縦の割目のある、すべて道具から云へば、純  
然たる外國風だが、たゞ皮膚の色が、一種日本  
人獨特の淺黒さだつた。——獨逸人を父に、日  
本人を母にもつて、西山普烈と云ふのが彼の名  
だつた。

今その西山が、探し求めてゐたのは、大勢の  
なかでも、すぐに目につく筈の者だつた。大黒  
様の頭巾のやうな型の、紺色の帽子に、流行の  
黒羅紗の外套を裾短に着て、成熟しきつた腰  
の形も露に、はたの視線を平然と受け流して、  
膝の高い靴でコト／＼と小股に歩い一來る中肉  
中丈の日本人の女がそれだつた。

不思議なやうな話ではあるが、これが、萩原  
政次郎、すなはち瀧十郎の、周遊ひの妹で、  
岡島鈴江と云ふ、二十二歳の、文學志望の娘だ  
つた。争はれないもので、瀧十郎の享けてゐる  
やうな、皮膚の淺黒さ、滑らかさや、髪の色光  
澤などは、そつくりまたこの娘のものだつたけ  
れど、顔の道具は、父親似のせゐか、全く別も  
のだつた。瀧十郎の、役者らしい細面に對して、



鈴江は、冷然と、——と云ふより寧ろ事務的に口を利いた。「何しろあなたつて人は、文壇の電信局なんだからね」

「さア、それが可怕けりやア、今のうちに何とか色をつけといて貰ふんだね」

「誰が！」

一旦の弱氣から、三好の積勢は到底もり返し難くなつて来た。こんな女を相手に……とは思ふのだが、不愉快を露に口を嚙むよりほかなかつた。

竹川町の手前まで来ると、鈴江は、あたり構はぬ大膽で、離れた席の西山へ、  
「この次あたりでおりようか」

「うん」

ちよつと見向いて、堅く口を結んだまゝ、頷いたが、その眼色に、三好は、自分に對する反感を感じて、一層可厭な氣持にされて了つた。

「藤代さんゐるかしら」

そのとき突然鈴江が、ごく普通の調子で、「どこへも旅行なんぞはしてゐないでせうね」

#### 四

一體、ほかにまだまだやうだいはあるが、政次郎、鈴江たちの母である萩原お民と云ふのは、新橋に名古屋だねが移入され始めた頃、ほんの

下地ッ娘の年齢でつれて来られ、雛妓から一本と、全く土地風に育てあげられたので、まだ江戸ッ兒が幅を利かしてゐたその當時にも、詳しいことを知らない大方の客や朋輩の間で、地方ものとしての輕蔑をうけるやうなことは少く、大して、看板のうちでもなかつたが、あたまたの働く性分で、座敷は面白く、出先の女將さん女中たちにもうけがいくと云つた具合で、だんだん約束に入ねられるやうになり、遂には、押しも押されもせぬ一流の如き株まで漕ぎつけてゐたのだから、若しそれが病の男道樂さへなかつたなら、夙の昔に玉の輿にも乗つてゐられる女だつた。いゝ旦那がついた、今度こそ……と、却つてはたのものが喜んで心配したりにしてゐる間もなく、いつもきまつて情夫ゆゑにしくじつて了ふ。度重なるにつれて、御相談に與る老妓連が、「へえ、誠に結構ですけれど、どうもあの妓ばかりは……」と首をかしげるほどになれば、一流と云ふ位置さへも、なんとなく影がうすれて行かないわけはなかつた。それを、あゝあたしが悪かつた、と後悔するには、性分が勝氣すぎた。勢、心持が荒み、自樂じみた行爲が多くなつたが、客と云ふものは妙なもので、それがまた却つて人氣になつて、一時

ぱつと咲き返るかとも見えたが、矢張りなんといつても狂ひ咲きの面白味で永もちがせず、いつとはなしに凋落の影がさして来た。その時分にひどく憎がつて、なんとか人氣を立て直してやらうと骨を折つたのが、信之の父、藤代信策だつた。けれども、それは既に手後れで、第一當人の氣に、それだけの張りがなくなつてゐた。そんなひツかゝりから深はまりした信策は、うちのなかの容子まで知つてみると、その亂脈さは、到底そのまゝ手を引くに忍びないものがあつた。せめて子供たちだけでも、と殆ど低能兒と云つてもいゝやうな、誰の胤ともよくは知れない長男の勝太郎を、東北鐵道の上野の本社で給仕に使つてやり、その時分やつと小學校に通ひ始めたくらゐの政次郎は、傲慢ゆゑにあまり世に容れられなかつた亡き名優の胤でもあり、殊に常日頃の寢物語りにも、この子は、どうにでもして役者に仕立てゝくれと、歌に唄つてゐた山を聞いて、遠いながら亡父と血を引いた市川□□に頼んで子飼からの弟子にとつて貰ふやうに盡力もしたのだつた。そんな關係だつたから、以前は、益正月などに、萩原一家のものが、必ず一同揃つて紀尾井町の邸へ御機嫌伺ひに出た。どうかすると、お民の地で、長

低い天井の下に、前こいみになつてはいいつて行つた鈴江は、讀んでゐた雑誌から顔をあげた三好嵐夫を見つけて、すぐかう聲をかけた。

「ヤア、しばらく……」

三好は、目ざとく續いてはいいつて来たつれをも觀察して、ニヤ／＼笑ひかけながら、膝を譲つて彼の女のために席をつくつてやつた。「かけられるよ」

「有難う」

と、遠慮なく割り込んで、苦しきうに背をかがめ、眞鍮の棒に據まつて、ふら／＼してゐる西山の方は見向きもしずに、「その後いかがです。カフエ黒猫の話きゝましたよ」

「なんだい、カフエ黒猫の話つて……」

「隠したつて駄目よ、あたしが東京にゐなくなつたつて、あつちこつちに澤山手下が配つてあるんだから、……一々ちやアんと報告が来るんだから」

あたりかまはず、例の男のやうな調子でまくしたてるので、一齊に乗合の視線を浴びて、三好の方がたじろいで了つた。それに、早速もち出された話にも、慥に痛痒いところはあつた。

### 三

同時に、「澤山手下が配つてあるんだから」と

云ふ鈴江の言葉にも、ちよつとした弱味がないではないうやうに、三好には感じられた。——それで巧にも、一緒に乗り込んで来たつれの美少年と自分との關係を、いち早く説明し、釋疑しようとかゝつてゐる氣持が感じられたのだ。

この場合、すなほに、その手に乗つてゐた方が無事らしい、と考へた三好は、目立たないやうに、——窓からおもてを見ようとでもするやうに、鈴江の方へぐつと首を振向け、耳のはたで微かに肩を動かした。

「そこにゐる先生も、ちア、『彼等のうち』かね？」

逆手の效果あらたかに、鈴江には、ひどくその間が氣に入つたらしく、

「あゝ」

と、美しい齒並を見せて、にいつと微笑みながら、あまた度うなづきながら、「まづ、……さうさね、小頭とか組頭とか云ふくらゐのところかね」

「暫らく違はなかつたらちに、素晴らしくいゝ顔になつたもんだな」

「それアもう！ 大したもんです！」

「今日は、兄貴ンとこへでも行くのかい」

「誰が！ まだお正月になつてから、お年始

にだつて行きやアしない。葉書一本出しゃアしない」

「瀧十、レイコウ（鈴江）おん仲不和とならせ給ひ……かね？」

「三好さんは相變らず一緒に飲み歩いてるんだらうね。さぞ、今日あたしと逢つたことなんぞも、手柄師に話さつたらうね」

「あゝあ、それア話すとも……」

それから、もう一度ぐつと耳もとへ口をよせて、混血兒の情夫をつれて歩いてたつてね、云ふなり、自分の言葉で自分がてれて了つた

態に、肝心の鈴江の顔からは目を逃して、その時にはもう向側の、運轉手臺に近いところへ席を得てゐた見知らぬ若者の方へ、テラリと視線を送つた。すまじ込んで、横向に、自動車を進むさきを見詰めてゐた。で、それだけしつから、やつと鈴江の顔に目を戻した。もしその言葉から、彼女に現はれる表情を待ち、そしてそこに何等かの思考を得ようとしてゐたものとすれば、三好も存外氣が弱いと云はなければならな

い……。瞬間の表情は、彼の費した瞬間に消えて了ふ筈だから。

「さうさ、だからあたしが云ふのさ、さぞ手柄

師に喋るだらうつて

ば、襖一重でめいゝが女を買ふ、と云ふやうな亂暴でも、平氣の平左でやつてのける今日に及んだのだ。

そこで、妹の鈴江の方は、云ふまでもなく初は兄の紹介だったが、昔から氣の合はないこの二人は、一度でもつれだつて信之を尋ねて来るやうなことはなかつた。度數で云へば、年中忙しい澁十郎よりも、却つて妹の方が度々遊びに来てゐた。初めうちは、勿論、文學、美術、音樂と云ふやうな話題が主だったが、だん／＼馴れ親むにつれて、まるでもう滅茶苦茶だつた。ほかに男の友達でも来てゐて、男女間の露骨な話などが出て、この娘の前でならば、普段禮儀正しい信之も、平氣で大口を叩いてゐた。鈴江は、一體がむら氣で、以前から、來だすと毎日のやうにも来るし、來ないとなれば半年も顔を見せない、と云ふ風があつたが、横濱に移つたために、咄くなれば泊つて行くやうなこともあつたけれど、昨年あたりから、何故か急に遠く遠くなつてゐた。

## 六

云ふまでもなく、それらのことも知つてゐる三好だつたから、鈴江が信之の在否を尋ねたか

れより、自分を、藤代家のことなら何から何まで承知してゐる、謂はば出入りの書生かなんぞのやうに改つて、要もないのに、人なかで、故意とそんな質問をするのだ、と感じられて、それがいかにも不愉快だつた。それには、今日にもすぐ紀尾井町へ行くものなら、きつと一應とも自分を誘ひさうに思はれるのに、さうはしらず、而も自分の知らない、恐らくは信之だつて知りさうもないつれがあるのだから、訪問する意志など少しもないにきまつてゐる、それを自分に在否を問めるのは、どうしても殊更人なかで云ふいやがらせとよりほか釋れなかつたのだ。――三好は、聞えなかつたふりをして、ちツと眞正面目に目を据ゑてゐた。

「ねえ、三好さん」  
ちよいと膝をつつ突いて、横から顔を覗き込むやうにしながら、――藤代さん、東京にゐるんですかよう」

「さうだらう、僕はまだ今年になつてから逢はない」

「さう？ どうして……？」  
まだ何か云ひかけて、斜向ひの席で西山が立ちかけるのを、視野のはづれに感じると、すぐ自分も顔を擡げ、顔だけ振りむけて、ちア、い

づれまた……さよなら」

徐行になつたところを、身傍に二人は、ヒョイヒョイと激いて跳びおり、人道にはいつて、さつさと尾張町の四辻の方へ歩さだした。

「今、なんだい」

西山は正面を向いたまゝ、無表情な調子で訊いた。

「雑誌の……こなひだ讀した『高路』つて雑誌の編輯人で、脚本なんかも書いてるひよつこ文士さ」

そんな人間には、爪の垢ほども興味がないうしく、さうか、とも云はずに、三四歩行つてから、

「どこにしよう。珈琲はユウロップがうまいがね……」

「いゝだらう、あすこなら、ちよつと話も出来る」

外國人のやつてゐる、裏通りのカフェエの椅子に、やがて二人は差向ひに腰をおろした。サンドウキツチと珈琲とを注文してふと、鳥打帽の下につぶれた黒褐色の木が、い愛の毛を、顔と後へ高く掻き上げたが、西山は、狡猾さうな笑ひを唇に漂はせて、  
「うま／＼續圖いいいたよ」



男と政次郎との間の娘、——今は流れく——て臺灣にあると云ふのや、その頃まだ尉斗目の振袖を着、薄化粧をして、ヘナクナしてゐた今の瀧十郎や、大阪へ行つて堅氣の女房さんになつてゐる鈴江の姉にあたる娘やらで、何か短いものを踊つてみせたりした。が、さう云ふことは三四年ほどしか續かなかつた。いま臺灣に藝者をしてゐる長女と、その當時門長屋の書生部屋にゴロ／＼してゐた學生の一人とが、可訝な關係になつてゐたことが知れると、若い者どもの風儀のために、と云ふ名目で、以來堅く出入が禁められて了つたのだ。

それまでに、鈴江も一度や二度は、藤代家の閨を跨いでゐたが、瀧十郎にしろ、彼の女にしる、信之との交際は、なかな十年を隔て、先代信策の歿後、改めて結ばれたもので、それには幾分なりとも、以前からの御最良と云ふやうな感じもあつたにしろ、まるでまた新しい關係だつたのだ。

## 五

盆正月に、萩原一家の者が、ぞろ／＼と揃つて御機嫌伺ひに出る頃の信之は、剛健な氣風の、勤勉な中學生だつたから、頭からさう云ふ種類の男女に反感をもち、踊が始まるからなど

と女中が傳へて來ても、苦蟲を噛みつぶしたやうな顔をして、決して書齋から出て行かうとはしなかつた。殊に、男のくせに薄化粧をした瀧十郎を見ると、その時分の年齢で八つも違へば、所詮相手にならない子供ながら、横ッぽうの一つもはり飛ばしてやりたくなるほどの氣持だつた。

それが、ほんの三四年たつたかた、ないうちに、大へんな芝居好きになつて了つた。最初の動機は、ふと年上の友達に誘はれて、宮戸座の夜芝居に、壽藏、源之助、訥升、菊四郎と云つた顔ぶれで、「鬼神のお松」を見たのが始まりで、それから、交通の不便だつたその頃の東京中を、芝居とさへ云へば、千里を遙しとしない勢で駆けずり廻つた。それまでも、父母につれられて、團菊左の芝居や、小傳次を座頭とした子供芝居もよく／＼見てはゐたのだが、決してさう面白く思はなかつたのに、その時機が至つたとしても云ふのだらう、ほんのふとした拍子で、源之助のお松が病つきとなつて了つたのだ。さう云ふ、みいちゃんはおちやんにをさ／＼劣らず狂氣じみた芝居好きとして、その頃子役のなかの麒麟兒と唄はれ、あつちこつちの芝居から引張祇に買ひに來られてゐた瀧十郎を見逃

す筈はない。幼時のよくない印象などは却つて一種の御愛嬌になつて了つて、以前を知つてゐると云ふだけの縁をもひどく嬉しく思ふやうになつて行つた。例の三十九年の叻の芝居を、いかにたいとは云ひながら、毎日のやうに見に出かけたのも、この凝りかたまりの最中だつたからのことだ。

けれども、さう云ふ熱心はせい／＼二十歳まで、それからだん／＼下り坂になり、二十四五の頃には、全く愛想をつかしてゐた、その空想を補つたのが、文藝、美術だつた。その時分、身は帝國大學の法科教授でありながら、フロックコオトで、歌舞伎、新富、明治と、一暮見のかけ持をして歩くほど芝居好きの先生があつて、教室以外で信之と逢つた時に、偶然芝居話に花を咲かせたのがもとで、この人の紹介によつて、瀧十郎や、そのほか四五人の役者と懇／＼するやうになつたのだ。けれども瀧十郎は、理由は兎も角も、一日藤代家への出入を禁められた人だつたから、母親お民の注意もあつたのだらう、そとでは逢つても、決して紀尾井町へ尋ねて來るやうなことはしなかつた。そのうち先代信策が死んで、信之の代となり、お互の隔てもすつかりとれて、一緒に旅行もすれ

「澤山」

自分は一本屑の間に衝へて、柄の長い西洋マツチを草の足へ摺りつけた。

「悪黨は悪黨らしく、せめて往生きはだけでも綺麗にしようよ」

一旦衝へた煙草を口からはなして、それだけ云つてから火をつけた。

「わしア悪黨は嫌ひぢや」

溜息を吐くのと一緒に呟いて、今度は腕組をし、二三度眉毛をあげさげしてから、卓上の一點を見詰めて、鈴江は、じいん……と沈み込んで行くやうな、陰鬱な表情を扮つた。

「ふうん、……未練が出たかね？」

「なんだい？」

「あゝあ、これだから女はいやさ」

椅子の上で、ぐらツと反りくり返り、襷が袂を張つた形に、両肘に力をこめて折り曲げ、熊手にした指で、毛をモシヤクシヤにして、ガリ／＼音がするほど頭の地肌を掻き廻した。

## 八

「どうもお待たせ申しました」

そこに、白い前掛けをかけた給仕女が、註文したものを運んで来た。何はさて措いてもしなればならないことのやうに、西山は、椅子をうしろ

ろの足だけで立たせて反りくり返つたまゝ、下目づかひに、その女の顔を見た。見る、と云ふよりも、一應審査する、と云つた方がよさうな目つきだつた。續いて眼色に現はれた審査の結果は、落第らしかつた。一息にうんと喫んだ煙草の煙を、若々しい肺の廣さと思はせるやうな力強さで、ふう／＼と遠くまで吐き出した。鈴江は、縦に切つた麵麩の上に、煙腿や腸詰を置き並べた獨逸風のサンドウキツチを引きよせて、早速肉叉を突ツ立てゝゐるが、急にふり向いて、立ち去らうとする女給を呼び止めた。

「あの、電話を一つかけてくださいませんか」

吃驚するほど急に女らしい口の利きやうになると、聲までが、いくらか甲高に聞えた。

「はい、何番におかけいたしますか？」

「えゝと、番町のね、あら、九段に變つたんだつたかしら……」

必要以上に大きな聲で、暫くそんなことを獨語ちてゐるが、「あゝいゝわ、あとであたしがかけますから……」

「それぢア、電話帳を持つて参りませうか」

「いゝえ、よござんす。どつかに書いたつたかと思ひますから……」

前掛の衣袋に突つ込んで、女給は勘定場の方へさがつて行つた。ほかに外國人の老夫婦がひと組、隅の方で、ぼそ／＼と話し込んでゐるきりだつたが、その静かさが、却つて密談の邪魔だつた。

「ぢア、そこは飛ばしとして先へ行かうか」

西山も、飲み食ひに取りかゝりながら、(で、まづ一番に今の日本の活動の會社が、何故く

だらなフィルムばかり拵へてゐるか、その原因を話して、個人經營の、ほんの小さな組織のものゝ方が、きつといゝフィルムが出来んだし、——これまた實際の話だから、それに

金もかゝらない。金をかけずにいゝフィルムを造る。いゝフィルムさへ出来れば、もう今の時世なら、賣込は難作ないんだから、右から左に金になる。——これがまづ第一段だ……」

「駄目々々！ それア會社の重役かなんかを相手に廻した時の手だよ。そんな唄いことを云つてたひにやア、相手を意屈させちまふばかりだよ。辯護士つたつて、名ばかりで、その實まア吾々と大した違ひはないんだから、——年中

のらくらしてゐるんだから……」

「まア黙つて聞いといでよ、これア大體の骨組で、いざとなりやア意屈させるやうなへまはし

「どう云ふ模様だい？ あらまし聞いとかない  
と、話がとんちんかんになつても困るからね。  
細いことは、その場／＼でうまくヒントを合せ  
ちまふけど……」

「いろ／＼考へちアみたんだが、矢つ張りねた  
は活動寫眞ぢやね、ほかにどうも、わしでやれ  
さうなことがないもの。でも、その人が活動が  
嫌ひだつて云ふんぢやから……」

「嫌ひつたつて、めつたに見に行かないつてだ  
けのことで、何も、話を聞くのも可厭だつてほ  
ど嫌ひなわけぢやないよ。何か面白い喜劇の筋  
でも一つ二つ話して聞かせれア、そいつは面白  
さうだが、今どつかでやつてますか、とかなんと  
か、すぐのつて来さうな人なんだから……」

「そんなことならお手のもんぢやよ。活動で構  
はないとなりやア、あとは萬事わしがうまくや  
るよ

「よし／＼、フリッツなら、大抵うまくやれさ  
うだよ」

七

「それで？」

と、西山は、褒められても格別嬉しさうな顔  
もしずに、「一體、どう云ふ質だね？」

「さうさねえ、……なんてつたらいゝだら

う……」

「正直かね？」

「まあさうだらうね、……さうだね、……大へ  
ん正直な方だね、上に馬鹿をつけてもいゝくら  
ゐかも知れないね」

「うん」

自分に頷いて、「それから……？」

「なんだい、それから、……なんだよ」

「お前さんは嘘つきだから駄目だね、訊いたつ  
て無駄だね」

「一體なんの話しさ。それア場合によつちア嘘も  
つくけど、……なんだよ」

「この場合は、嘘をついちアいけない場合なん  
だ。大きな嘘をついたための材料にするんだか  
ら、正直に云はなくちア駄目だよ。どうだね、  
正直に云へさうかね？」

西山は、相變らず堅い、動きのない表情のま  
ま、ぢつと相手の娘を見据ゑた。

「なんだい、一體問題はなんなんだよ」  
へんにとんがった感じの、冷い視線を恐れる  
やうに、しねくねと肩をもぢりながら、上横目  
にあらぬ方を見る、少ししんとした時の西洋婦  
人の表情を、鈴江は、そつくりそのまゝ眞似て  
みせた。

「ちよいとこつちを見へらん」

「なんだよ」

視線で視線を、ぎやううつと釘ぎしにして置い  
て、西山は、暫く間をもつてから、

「お前さんとは、關係があつたのかい」

「馬鹿！」

あばれたい馬が、むしろ鞭の加へられるのを  
待つ氣持で、ぢつと抑へられてゐた視線を、そ  
の一言を聞くや否や、びいんとはねあげ、びい  
とそつぽを向いて了つたが、すぐまた勇敢に見  
返すと、「およしよ、みつともない……」

「嫉妬んぢやねえ、金儲けの相談だい！」

低聲ながら、殺氣を帯びるほどに、きつぱりと  
きめつけられたが、卓に片附たて、顎をのせ、  
例の上横目で、窓から、午後二時頃の、綺麗に  
晴れた冬の空を見上げたまま、鈴江は、組み違  
へた足の先で拍子をとつて、鼻音で、カルメン  
の謠を低唱しだした。その、從容迫らず、と  
云つた態度も、然しどこかに、無理に形づくつ  
てゐる生硬な氣持を隠し終せはしなかつた。西  
山は胸着の胸衣裏から、薄手な、胸の丸味に反  
せた銀の巻煙草入をぬき取ると、パチンと開い  
て、靜に鈴江の前へ差し出した。

「いかがです」



て、鈴江はいま踏み出さうとした足をとめた。そこへ女給が来て、銀色の盆に載せた傳票をどちらに差出すべきか、ほんのちよつとのま迷つた揚句、二人の間の卓上に置いた。

「なに？ お勘定？」

「いゝえ、さうぢやない。電話はかけない方がいゝだらう」

例へば水を銜んだ海綿のやうにボテ／＼と、いやに重たく吹き、勘定場へ傳票を持つて行つて拂をしますと、すぐ戻つて来て、鈴江に外套を着せかけながら、耳のはたで、「こゝまで来て、大事なお客を電話でおとされてたまるもんか。お氣の毒だが、どうもまだお前さんのやり口は青いよ」

十

然し鈴江は、振り向かうともしずにな、そのままきつと出て行つて了つた。あとに残された西山は、有聲に少し急きこんで、外套の袖に通した兩腕の肘を張つて廻轉させ、肩へ振り上げながら、續いて階段を駆けおりたが、下足の爺さんに上覆をかけて貰ふのにまた手間どつて、おもてへ出た時には、右にも左にも、その横町にはもう鈴江の姿は見えなかつた。慥つたのではなく、慥つたふりをしてゐるのだ、

と高をくゝつてゐる西山には、そのまゝ姿を消して了ふ氣づかひはなさきうに思はれたが、兎も角もこの場合、まご／＼したくはなかつた。取敢ず電車通りに出で、見廻すと、向側の日あたりの人道を、数軒屋橋の方へ、早くも秀英舎の前あたりまで行つてゐた。すぐあとを追つて、

こちらは日かげの人道を大勝に歩きだしたが、そこへうしろから電車がか来たのに氣がつくと、駆けよつてヒラリと飛び乗り、車掌臺の向側へぬけて、鈴江の後姿がほんの見えるか見えない程度に顔を窺かしてゐた。日本人にしては、わりに膝の延びた足どりで、とつと道を急いでゐる遠くの後姿を眺めただけで、西山には、そばで顔の表情を凝視してゐるほどにはつきりと、鈴江の心のなかが解るやうな氣がした。振り返りたい首を無理に正面に向け、耳はたどうしろから駆けよつて来る足音ばかりに待ちくたびれながら、へうま／＼く歩いてやつたなどと、こゝとさら自分に吹き聞かせてゐるに違ひない彼の女の氣持が、手にとる如くに響いて來た。

公園の横手を交番の手前まで來ると、たうとう鈴江は我慢しきれなくなつたとみえて、歩きながら首だけ振向けたが、その容子には、豫想の距離と見當へ、目を向けさへすれば、必ず視野の

なかに西山の姿がはいつて来るものと信じきつた氣持が、だつた。而も豫想外の近きまで、豫想外の電車で追ひついて來てゐる西山は、横着にも窺けた顔を引つ込めもしずにゐる。鈴江の方では、駆けださないまでも、大急ぎで人道を近づいて来る火の高い姿、――さう云ふ豫想が、

最初の一聲で裏切られると、だん／＼に歩みを緩め、遂には立ち停まつて、くるりと後向に、伸び上るやうにしながら、往き來の人を物色し始めた。その視點が、次第に遠く、尾張町の四角の方へ進んで行く時分に、探し覓められてゐる御本尊は、物蔭にも忍ばず、むきだしのみゝで、正反對に、近くへ／＼と迫り、たうとう彼の女の眞横を、僅二三間隔でたところまで來ると、胴着の衣裳から往復し符の片割れを摘まみ出して車掌に渡し、悠々と電車をおりたのだ。

「お待ちさま」

斜うしろからボンと肩を叩かれて、

「あ、吃驚した！」

と、思はず本音を吹いて振り向くと、視線がカチンとぶつかつた。いかに負惜みの強い鈴江でも、凱旋將軍の優越を感じてゐる西山の眼色を、とても永くは見えてゐられなかつた。早速、いまだ動き出さうとしてゐる電車に視線を移して、

やアしないよ。……それから第二段にはだ、吾の友達に、活動の好きな芝居心のあるやつが男にも女にもうんとゐる。こいつらが、みんなたいで働いてくれる。無論お前さんもわしも役者になつて演るやうに話すんぢや……」

「駄目！ フリッツ、お前さんではちつと堅くなつてよ。そんな計畫なんぞ立てゝ行つちアとても駄目だよ。いつものやうに、もつとかう……、インスピレーションでいかにくつちやア」

「うつもだつて……」

一語々々に力を入れて句切りながら、「いつもだつて、はたでお前さんがみてるやうな、そんなぞんきなもんぢアないんだよ、ぞんきに見せるまでにやア、裏に相應からくりがしてあるんだよ」

## 九

「ぢアまあいゝさ」

鈴江は、さも面倒臭うに、「すつかりそつちへお任せしますから、いかやうともよろしきやうにやつてごらんさい、だ。たゞね、あんまり買被つて、くだらなく資本倒れにならないやうにと云ふだけのことさ」

「ところが、どうもさうらしくないね。わしやアまだ會つたことはないが、どうもお前さんの

わへてるやうなもんぢアなさうだね。在外手強さうな氣がするね。だからこそ、今度の仕事は面白さうなんだよ。ちやんと繪圖はひいてあるが、場合によつちア、今日はこれんばかりも持ち出さずに、とんでもない見當違ひの話ばかりして歸つて來ることになるかも知れないよ。——つまりそれも、繪圖のうちだが……」

「あゝ面倒臭い！ 何しろそつくりそつちに荷をおろしちやつたんだから、わしアもう高見の見物ぢや」

放り出すやうにさう云ふ女の顔つきに、ぢいツと目をつけて、

「ものゝ哀れを感じてるな？」

「何を……」

「何をぢアない。とんだ人にレンズを向けたと思つて、今さら後悔してゐるだらう」

「利口で馬鹿の刺身賣り……、ひとりであつてやアがる……」

さう罵られても、西山は、すましたもので、上着の裏を返し、左の指先をその內衣袋へつツ込むと、じり／＼と少しづつ顔を出す鼠色の西洋封筒があつた。

「往生ぎはを綺麗にしようね」

「あッ」

と云ふ叫びは、危く呑み込んだが、然し有聲の鈴江は言葉が出なかつた。ちよいと顔の色が變つてゐた。

「なんてつたつて、お前さんはまだ泰んだよ」

はち切れさうに身にびつちりとあつた上着の釦をかけながら、云ふ文句ほどには静かない調子で、「だから、あんまり利いた風な口をたゞきなさんなつてぶふことさ」

「だからあたしは、惡黨は嫌ひだつて云つてゐるぢアないか」

はずむ息をガツとこらへると、いくらか震へ聲になつた。

「尤も好きだつて、お前さんにやアなれやしないから安心おし」

「まあなんでもいゝさ、もう出かけようよ——冷くなつて底に残つてゐた珈琲を、振り仰いでぐつと飲むと、椅子の足を鳴して立ちあがり、女給のゐる方へ、西洋流に手の平を自分の方へ向けたいので／＼をして、近づいて來たのに、

「お勘定をお願いします……。あゝ、さう／＼、電話をかけるのすつかり忘れちやつてた——「ちよつと待つた」

それまでの動作を、冷やかな目つきで仔細に觀てゐた西山に、一秒もすかさず聲をかけられ

木上に手を把られた。

「いけねえ、兎に角、……さうだ、兎に角

お前さん先に歸つてくれ」

「まだ歸らないつもりか」

「歸るんだ」

「ぢア、うちへ歸らない氣なのか」

「まア、……さうだ」

もう一度遠くで笑ひ聲がした。

「ぢア、どこいでも行きたいとこまで送つてやらう」

「澤山だ、自動車は嫌ひだ」

云ふうちに胸がむか／＼して來た。

## 二

急いで下駄をつツかけて、石鋪を往來まで出

ようとした。石鋪の間が馬鹿に長かつた。たう

とら間にはなくなつて、低い竹垣につかまつ

て、植込のなかに吐いた。

女中が庭下駄を鳴らして、鹽の微温湯を持つて來てくれた。

「よるなよ、そばによるとくせえぞ」

「たうとうやつちまやアがつたな」

まゝもそばに來てゐて、……オ上か女中かど

つちか分らないが、背なかを撫でくれた。撫

でられるとまた吐きたくなつた。吐いて、らが

ひをしてふと、大ぶん氣持がはつきりした。

「ぢアさいなら！」

そのまゝ、どん／＼往來へ駈けだした。

「おい、帽子々々」

成程、頭が寒かつたが、振り向も答へもしず

に、一生懸命走つた。

往來には、まだ可なり人通りが多かつた。少

しきまりが悪かつた。……俣夫のたまりを見つ

けた。

「一臺！」

「へい」

「早く／＼」

追手でも恐れてゐるやうに、うしろが顧みら

れた。

「へい、唯今」

はア／＼息が切れ、足はもげて了ひさうだつ

た。跳び乗つて腰かけると、尻の肉がジンと

痛かつた。

梶棒をあげながら、

「どちらへ？」

「こかアどこだ」

「御冗談で……」

「まアいゝや、もうちつと吞ませろよ、酒さい吞ましてくれるうちならどこでもいゝや、どこ

いでもつけてくれ！」

「……」

「ぢア、兎も角歩いてくれ、握きだしてくれ、駈けてくうちに俺がどつかみついたらア

「旦那、さう仰有つたつて、どつち向いて駈け

だしていゝんだか分りませんやねー

「ぢア、なんだア、……さうだ、仕様がねえ、銀座だ」

けれども、突然の運動で、またぐうツと酔が

發して來た。幌のうから飲み屋を探すところ

ではなく、目をつぶると、ぐる／＼と唸をた

てゝあたまの壁が廻りだした。

「おい、ほんとにこゝはどこだよ」

と、俣夫に訊いてみようと思つたが、それだ

けの口を利くすら億劫だつた。ヂツと、あたま

のなかの廻るのを感じてゐるうちに、いゝ心持

に、また分らなくなつて行つた……。

「旦那、旦那！」

「兎に角」

「旦那、銀座へ來ましたよ」

「ぎんざ？……あゝ、銀座か。どうだい、銀座

おきてるかね。……一體、今なん時頃だい」

「さうですね、まだ十一時にヤアなりますまい

よ」



「あれに乗つて來たね、あれに」

「ま、兎に角行かう」

二人は、數寄屋橋の方へ歩きだした。先刻から殆ど完膚なきまでに、ヤツつけられ通しの鈴江が、性質の負ン氣を以てして、なほ不思議にも、ギリ／＼齒を喰ひしばるやうな敵愾を感じなかつた。寧ろ陰鬱になつてゐた。この情らしい男に對して、一度すつかり冷めきつて了つたつもりの愛情が、ヤツつけられる度毎に、心の底の底から、搖り動かされて、もう一度目醒めて來さうな氣持だつた。

## 妾宅

近頃になく信之は酔つた。

はつきりものを考へてゐるので、これアまだ大丈夫だ、と思ふと、すぐそのはつきり考へてゐたことも、大丈夫と思つたことも、煙のやうなものゝなかへ溶け込んで行つて了つた。はつきりものが見えた、が、それが明るい大きな電球だつたり、水飲コップについだ日本酒だつたり、女の顔だつたりで、それとこれとの間にどんな聯絡があるのやら、一向とりとめはな

つた。——さう云ふ混沌のなかに、何か一つこびりついてゐるやうなものがあつた。それに付けても、第一、もうこゝにかうしてゐてはならないんだ……と氣がついた。で、ヒヨイと立ちあがつた。

「おい、藤代どこへ行くんだ」

「歸る」

「駄目だ／＼。もうちつとそこらで寝てろ」

「俺が自動車で送つてやるからもうちよつと待たないか」

「おい、ちよつと、君、女中さん、藤代を氣をつけてやつて……」

「あなた、おあぶなうございます……」

（なに、なにが、なにがあぶねえんだい。吉田なんぞに、自動車で送られてたまるもんかい。

……兎に角假令何がどうあらうとも、嘘をつくなアよくねえや……）

と思つたので、

「兎に角、嘘をつくなアよくねえや」

「まだ云つてるぜ、俤にでも乗つけて歸しちまへ」

「俺が送つてつてやるから、もうちつと寝てないか」

うしろから來て肩をつかまへたのは、慥に木

上と分つた。（木上ならまだましだ）と思つたが、「いやだ、第一今から寝られるかよ」

「よし／＼、ぢア俺ももう失敬しよう、一緒に行くからちよつと待つてろよ」

急に突ツかひ棒がなくなつて、ひよろ／＼とした。

「あぶない！」

「大丈夫！ さア歸らう」

つかまへてくれた女中と、そのまゝ腕を組んで廊下に出た……、それからあとが分らない。

玄關の式臺に腰をかけて、

「兎に角、嘘をつくなア……」

「よし／＼、もう分つた／＼。さあ、早く下駄を穿くん」

（送られちアたまらない）と思つた。

「穿くと自動車に乗せるだらう」

「穿かなくつたつて、あんまり愚圖々々云つてれア擔ぎ込んでしまふばかりだ」

それで、女中たちや下足の半纏着まで、聲を揃へて笑つたのが、遠くの方に聞えた。

「兎に角……」

「嘘をつくなアよくねえや、だらう」

「違ふよ。……兎に角、……なんだつけない……」

「兎に角、下駄を穿いて立てよ」

外套の胸を押し開いて、懷中に兩手を差し込んだ。衣紋がくづれて、襟衣を着ない肌が、青白くむきだしになった。

「おや? おや?」

「あたしがお預りしてますよ」

ボンと帯の上から叩いてみせた。

「なアんでえ、道理で帽子を買つてやるのなんのつて、いやに氣前がいゝと思つた」

女給たちや、彼方の卓の客からも、笑ひ聲が起つた。

四

けれども、たつた一人、その布疋あたりの土人によくあるやうな半月形に長く引いた眉や、大きなばつちりした目もとに、やゝ可怖らしいほどの野蠻美を備へた女だけが、堅く一文字に唇を結んでニツコリともしなかつた。眉間に氣むづかしげな縦皺をよせて、ちツとその女の目を見返してゐた信之は、何かしら、そこに深い同感が感じられて、急に氣持が引き締つて來た。

もし生酔の程度だつたなら、初めはたの者を笑はせようとしてかゝるほどではなくとも、つかり云つたのが、存外そこに樂い笑聲でも、つい圖に乗つて、續いてなんとか操り

を考へるやうなおツちよこちよいに陥り、なかに一人すまし込んでゐる者などがあれば、なんだこん畜生、生意氣な! くらゐな反感を抱かせられたかも知れない。ところが、信之の醉は、彼のあたまたから、夙にそんな遊びを迫ひ出してゐた。泥酔者の生眞面目は、はたの笑聲などには亂されずに、いきなり眞面目くさつた女の目に惹きつけられて了つたのだ。——一日で、そこに、偽りのない好意を讀んだ。

外套の袖をはねあけて、いきなり女の手を握むと、力いつぱい握りしめた。その握力以外には、「有難う」も「サンキュー」も「メルシ」も、彼の心の云ひ表しには全く役に立たないものに感じられた。その代りまた、それでお仕舞だつた。それにつけ加へるべき何ものもなかつた。時が永びいてすらいけなかつた。——黙つて立ちあがつて、改めて指に力をこめて打ち振りながら、

「チア、さよなら」

「お歸りですか」

女も立ちあがると、靜に手をほどいて、帯の間から信之の財布をぬき出し、少しも惡快れずに、はだかつた内懷ふかく押し込んで、あとをきちんと襟を合せてやつた。

「ヨウ、色男!」

客のなかに、きな臭い暖れ聲をあげるものがあつた。待ち構へてゐたやうな笑が、その叫聲の尻を掠めて湧き起つた。

「お美津ちゃん、御馳走さま!」

「いゝぞ、とても素敵だぞ!」

續いてそんな風に嘲したてたり、指さきを口に銜んで、鋭い口笛の音をあげたりするものがあつたが、日頃のてれ性にも似ず、信之は不然と構へてゐた。

「いくらだ!」

「近いうちに、または非いらしつて下さい、そんなとき御一緒にどうぞんすから」

女も落つき拂つたものだつた。

「その代り名刺を一枚いたゞきました、いゝでせうね!」

「いくらだよ」

いま折角しまつてくれた財布をまたもや掴み出して、あやしい手つきで、五圓札を一枚卓の上に置いた。

「この次の時でござんすつてのに」

「この次いつて、一體こゝはどこだい?」

「分らない? チア、銀座通りまで送つてつてあげるわ」

「よし、ちア吞まう」

「どこいつけますか？」

「どこでもいいや、成可く知つてるやつゝの來てゐさうもないとこがいゝや」

「てえまずと……？」

「だから、どこでもいゝから、俺の知らねえやうなところへつれてつてくれよ」

「困りましたな」

「解らねえなア、つまりよ、裏通りのへんでこな、あんまり人の知らねえやうなちがいゝつてえんぢアねえか」

### 三

俣はまた、搖れながら動きだした。

日本酒の匂が、ぶうんと鼻に來た。こいつはちつとこたへるな、と思つた。

「おい、ウキスキイがいゝや、ウキスキイ……」

「ちア、カフェエにしませうか」

「感心！　すぐカフェエと出るやうなら大したもんだ。是非そのカフェエで、ウキスキイを……」

もう一度わからなくなつて行つた。

それから、今度は急に狭い酒場にゐた。頭の色角ばつた、然しちよいとした女を、信之の酔眼が捉へた。

「おい、君、君、君！　俣夫どうしたい？」

「もう尻に歸りましたわ」

「酒のんでつたかい」

「たゞ笑つてゐた。」

「君やア齒並が綺麗だな。こつちい來ないか。」

「これ、半分つ吞まう」

「えゝ、頂きませう」

つゝとそばへ來て椅子にかけた。

「君やアこゝの女給さんぢアないね？」

「あら、どうしてです？」

「呼ばれて、一通ですぐそばへ來てくれるなんぢア、失禮だが、雇人ぢア出來ねえ藝當だよ。」

「なんだ、女將さんか、女將さんの妹か、それとも親類の嬢か」

「雇人です」

「嘘つつけえ？」

「半信半疑に云ふと、何かその言葉に繋がつて、思ひ出されることがありさうな氣がした。」

「嘘つつけえ……」

もう一度さう云つて、ぐたりと卓によりかゝり、兩手で頭を擁へた。

「あら、駄目よ！」

白ペンキで塗つた安っぽい卓の上を、琥珀色の液體が、盛りあがつて流れて來た。

「もう一杯！」

「いゝえ、もうおよしなさいね」

「もう一杯ツきり！　それを君と半分つ吞むんだ。いゝだらう？」

「いゝえ、もういけません！　それより、そこらまであたしが送つてあげますから、あなたもお歸んなさい」

「どこい歸るんだい」

「おうちへさ」

「いやだよ」

「ちア、あなたに帽子を買つてあげるから、あたしと一緒に銀座までいらつしやい」

さう云ふ顔を、信之は、ちつと目を据ゑて見詰めてゐたが、

「ど、どう云ふんだい、帽子を買つてくれるつてのは、一體どう云ふわけなんだい」

「あなた、帽子をどつかに落して來ちまつたこと知らないんでせう？」

「さうかい、かぶつてゐなかつたんなら、それア落して來たんだらう。それアいゝが、何故お前さんは、帽子を買つてくれるくらゐの親切があつて、ウキスキイ一杯のませねえんだ！」

「吞ませてもいいけど、そんなにあなた……」

「酔つてたつて、迷惑はかけねえよ」



きよなら。どうぞよろしく。

「あ、どなたに？」

「間違々々、今のよろしくは間違だ。……で

も、女將さんの一番好きな人に逢つたら、さう

云つてくれてもいいや」

振り向きもしずに、そんなことを云ひながら、

ふらり／＼とあぶなつかしい歩調を運んで行つ

た。ちつとその後影を見送つてゐたが、気がつ

くと、いつ歩いたともなく、店の前から七八間

も離れたところに佇んでゐる自分を見出して、

美津枝は、ひとりでクスリと笑つた。

## 六

「兎も角、嘘をつくなアよくねえや」

暫くはぼうとして、たゞ、いやにガクン／＼

する重い足を引摺つて行つたが、ふとその言葉

が唇を滑り出して來たのに、信之は、我なが

ら（おやッ）と思つた。舌に泥みがあるばかりで

なく、それに繋がつて引き出されて來さうな記

憶も、つい緒だけは、黒い渦が巻いてゐるや

うなあたまたのなかにちら／＼と見えがくれして

ゐた。

爛々たる大眼玉を光らして、自動車が前方か

ら走つて來た。プツリ、プツ／＼、プツリ、小

秒砂の上に、鹽豌豆が皸裂るやうな音を殘して、

夜目にもしる／＼、もう／＼と埃を捲きあげなが  
ら通り過ぎて行つた。信之はあぶなく道ばたに  
身を避けて、

「畜生！ 假令何がどうあらうと、嘘をつくな

アよくねえぞ！」

さう叫んで、自動車を睨めつけたが、急に酔

漢らしい高笑ひになつて、またひよろ／＼と歩

き出した。それで、用か／＼つた記憶の緒も、

そのまゝ、絶たれて了つた。

曲り角の度に迷つたり立ち停まつたりするや

うなこともなく、――よそ目にはまるで足にま

かせた當ずツぼうのやうに、だん／＼と切れ込

んで行つたのは、もう人通りも稀な、木挽町三

丁目の裏通りだつた。ガツ／＼首を垂れ、手は

懐に、外套の兩袖もふら／＼と、駈下駄の

尻を引摺つて、更に細い横町へ曲るなり、角か

ら二軒目の、小ぢんまりとした屋根門のくぐり

のある扉へ、いきなりとさんと肩からさきに身

體をぶツつけた。

「オーイ」

それでも、近所を憚る心が、いくらかはかすめ

た、然し決して小さくはない生得のどす聲で、

「寝ちやつたのか、オイ！……お直さん……」

それで、ちよいとのま聞き耳をたてたが、コ

トリとももの音のしないのに、不承無精右手  
を出し、ぐつたり凭りかゝつたまゝの扉へ、續  
けうちにてつ／＼握拳をあてながら、ふと、念

のため、と云ふ風に、上目づかひに表札を見あ

げた。丸火屋の軒燈の火影に、小さな木札の、

武井寓と、まだ墨色も新しく、信之の醉眼にさ

へ、あり／＼と讀まれた。

「オイ、お直さん、あけとくれ！」

「どなた？」

五十がらみの女の、しつかりした聲だつた。

すぐそれに縋りつくやうに、

「俺だよ、……あたしだよ……」

「あら、紀尾井町さんですか」

「さうだ／＼、早くあけとくれ」

「ちよいとお待ちくださいまし……」

貼りついたやうになつてゐた扉から、漸く

身を起して、信之は、性急に、くぐりの取手に

手をかけて、ガタ／＼やり始めた。

「唯今すぐあけます」

玄關の障子、格子、雨戸と、順に内からあ

く音がし、二足三足下駄が鳴ると、すぐもう

くぐりの、襦袢がはづされた。待ちかねて、信之

がボタンと押しあけはいらうとして、跣むと、

急に目の前がクラ／＼とした。

「断るよ。……これで足りなきやア……」

信之が、また財布の口をあけかゝるのを、女は、手早く制めて、懷中させながら、

「もう澤山々々！ 三圓八十錢ですから、チア今おつりを……」

「要らねえ／＼、チアさよなら、また来るよ。」

俺アお前さんが好きになつたよ。兎に角、……嘘つきはいけねえが、お前さんは正直だからいいや。チア、さよなら！」

もう一度手を振つて、それから信之は、ひよろひよろとおもてへひよろけ出た。

## 五

「あら、どこへいらつしやるの」

砂利を踏んで、左にひよろけたまゝ、ふらふらツとそつちへ歩きだすと、うしろから、カフエエの女に聲をかけられた。振り向いて、四尺ほどが観音開きになつた出入口の硝子戸ごしに、うちから射す明い光を背負つて、影繪になつて立つてゐる姿を、暫くちつと見てゐたが、

「お前さん、名はなんてんだ」

「美津枝」

少しもためらはずに答へてから、「あなた、そつちへいらしつちア木挽町の方へ出まひますよ」

「木挽町？ ほんとうかい」

「駄目ね、そんなことチア、とても紀尾井町まではむづかしいわね」

草履をべた／＼鳴らしながら、そばへよつて来て、外套の袖を捉へると、「俵をさう云つてあげますから、乗つていらつしやい」

「紀尾井町？ なんでえ、どうして、お前さん、俺ンちを知つてるんだい」

「ですから、名刺を頂きましたつて云つたチアありませんか」

「あゝ、さうか……、お前さんの名前、なんてつたつね」

「美津枝」

「うちの名は？」

「カフエエ、シャノアル」

「なんだつて？」

「カフエエ、シャノアルです」

「え？ シャノアル？ それチアお前さんの名前、美津枝さんでんチアないかい」

「ですから、さつきつから、さう云つてゐるチアありませんか」

「ふうん、さうかい……」

暗い夜空の下に、ほの／＼と浮んだ女の顔へ、さしのぞくやうに近々と目をよせて、もう

一度、「ふうん、さうかい」

「どうして？ なんか……」

「へーえ、お前さんが黒猫屋の美津枝さんかい。こいつアどうも……、チア、さよなら」

「また／＼！ そつちい行つちア駄目ですつてのに。銀座に出るんなら、あつちですよ」

「だから、こつちが木挽町だらう？」

「えゝ、だつて……」

「さうかい、美津枝さんかい。そいつアちつとも氣がつかかなかつた」

「あら、へんねえ」

「然し、お前さんならいゝや、お前は正直でいいや」

「なによウ、氣になつちやぶわ」

「いゝえいえ、ちつとも氣にすることアないんだ。どうもいろ／＼お世話さん……」

また歩きだすと、

「あなた、駄目ですつたら。あたし呼んで来てあげますから、矢ツ張りお俵になさいな」

「なに、もう見當がついたから大丈夫。これを眞直に行つて、橋を渡れアすぐ木挽町の二丁目だらう」

「えゝ、さうよ。でも、あなた……」

「そわれみなさい、だからもう大丈夫さ。チア

とつて、

「ちよいと汚いものを見るんだから、二人とも  
そつちへいつちまつて、戸をしめといてくれな  
いか」

「あなた……」

「ま、いゝから、あたしの云ふなりになつて、  
くださいい！」

仕方なしに、玄關にはいつて、うちから兩戸  
をたてきつて了つた。

## 八

星影まに、風もおちた大空の下に、大都市  
の夜は、いま沈々として更け互つた。……信之  
が右手にかざした榎火の火先は、とろ／＼と延  
びあがりながら、霜に凝つて、ほのかな虹をゆ  
らめかしてゐた。

……魚の腐りかけた臓腑を思ひ出させるやう  
な、なんとも云はれず腥い匂ひが、うツと口  
腔いっぱいに突きあげて來たとき、信之は全身  
の血が一時に冷めて行くやうな氣がした。

(たうとう……！)

健氣にも、すぐさう觀念はしたものの、しつ  
かり見定めるまではと、まだ一縷の望みは捨て  
なかつた。下ッ腹にうんと力を入れて、今その  
決定の瞬間に臨まうとしてゐた。

……靜に、じり／＼とさげて行つた視點を、  
膝から二尺ばかりさきの、鑿石の上にきツと見  
据ゑた。薄濁つた液體のあちこちに、三箇所、  
耳ほどの大きさに、どろりとしたチコレエト  
色の塊が散つてゐた。

「あ！」

思はず聲が洩れ、だしぬけに頭をがアんと云  
ふほど打ちのめされたやうに、ふら／＼と眩  
暈が來た。けれども信之は、その時、うツと息  
を詰めて、もう一度下ッ腹の力を入れ直した。

二三秒さうしてゐてから、睜つた目と灯とを一  
緒に、汚物の上に近よせた。……そこに見たも  
のは、紛ふ方なく、七年前に父の信策が、枕の  
上から纔に首を傾けて、口へ何回となく金盞  
のなかに吐いた、あの癌腫の排血に相違なかつ  
た。惨しい心で、幾度それを見つて金盞にうけたこ  
とだらう。七年が十年三十年と経ようと、そ  
の色、その匂ひ、——烙印のやうな記憶が、少  
しでも薄れて行かう筈はない、——信之は、か  
らりと手燭を投げ出して、兩手に額を埋めて  
了つた……と、玄關の兩戸があいて、お澄と

叔母とが跳び出して來た。

「あなた！」

「兎も角、お澄ちゃん、うちへ……」

兩方から腕を把つて引き起されると、信之は、  
戸の隙から未廣がりに射して來る玄關の灯を見  
詰めたまゝ、無表情な顔つきで、

「なんでもない／＼、」

と呟いて、足は運ばずに、把られた腕を振り  
ほどかうとしながら、「待つてくれ、ちよいと汚  
いもの、始末をして行くから……」

「そんなこと……」

「いゝえ、俺が自分でしなくつちアいけない  
だ」

「よござんすツたら！ さア、おとなしくうち

へはいつてくださいい！」

叱りつけるやうなお澄の調子だつた。

「いや、だけど、おきだから……」

「いけません！」

信之は、畢竟その影が映りさうになつて來  
た眼差を、お澄に向けた。ちよつと見交してゐ  
るうちに、蒼白い頬にも微かな笑が浮んで來た。

「えはるんだねえ……」

「世話をやかすんぢアないの」

お澄もにツこりして、「さ、うちへはいりませ  
うね」

「だけど、ちよつと……」

「そんなに氣になるんなら……叔母さん、す



「あぶない！」

うちから手貸さうとする暇もなく、框に足をすくはれて、見事に石鋪の上へつんのめつて了つた。

「まア、あぶないこと……」

すぐ元氣よく跳ね起きると思つたのが、案外、そのまゝべつたり腹ン筋になつたきりなので、女は、あとをしめて置いて、肩に手をかけながら、「どうかお打ちなさいましたか。ねえ、もし……」

七

けれども信之は、起きあがらうともしず、聲もたてなかつた。

「どうかなさいまして……?」

やゝ不安らしく、顔をさし寄せると、ぼうんとアルコオルの匂ひがした。「まア……大へんめしやがつていらしたんですね」

却つてそれで安心して、女が抱き起さうすると、信之は両手を突ツ張つて、花崗石の壁石から、上半身だけは離したが、そこで微に首をふつて、いや／＼をした。

「お苦しいんですか」

うツ／＼と、息をつめて唸り、猫背に丸まつたと思ふと、咽に異様な音をたて、吐き始め

た、

「あら」

それは殆ど口のうちに、寝間着の胸のあくのも構はず、横からしつかりと抱き擁へ、かすめたとは云へ可なりの大聲で、

「ちよいと！ 早く来てください！」

それと同時に、梯子段をしとやかに、けれども急ぎ足において、玄關の燈の下に立つたのは、よし野の女將の妹、お澄だつた。

「どうかなすつたの?」

階下の氣勢を聞くなり、すぐ普段着に着更へてゐたところとみえて、羽織の片袖を通し乍ら、おもての容子をすかして見ると、躊躇はず沓脱きツと顔をあげた信之に、

「いけない！ 来ちアいけない」

と、まるで叱りつけるやうに、厳しくきめつけられて、思はずお澄は、びたりと足を止めた。

見ると、信之は、まっ蒼になつて、ギョロリと目を睨いてゐる……

「……………」

「ちよいと、手をかしてよ！ 一人ぢア……」

「でも……ね、行つてもいゝんでせう?」

「いけない！ 斷然いけない！」

「ぢアね、お澄さん、おひやをもつて来てくださいな、おひやを——」

「要らない！ それより灯をくれないか。蠟燭でもなんでもいいゝ……」

「はい」

たゞならぬ顔色に、お澄は、なんのためにとも解らぬながら、氣を撃たれて、早速奥の間へ駈け込んで行つた。そのまに信之は、吐いたものを前に、きちんと壁石の上に正座した。

「右難う、もう大丈夫！」

さうはぶつても、堅く目をつぶつて、肩でついてゐる呼吸の早さが、尋常ではなかつた。

「さ、あなた、早くうちにはいりませう」

腋の下から手を入れて、引き立てようとしたが、どツしり構へて首を横に振る容子には、少しも酔漢らしいところなどはなかつた。

「ちよつと待つて！ いま……今すぐ……」

そこに、お澄が、燭臺を持つて出て來ると、

「お直さん、あなたあれを受けとつて……それで、お澄は……お澄さんは、出て來ちアいけない！」

ふぶがまゝに、お澄の義理の叔母にあたるお直が、珧瑯鐵器の手燭に火をともし、片手で風を遮りながら戻つて來ると、信之はそれをうけ

と云やア、おもんさんのとこだらう？」

## 十

と云ふやうなことで、だん／＼訊いてみて、信之は、自分の迂闊さ加減に呆れ返らなければならなかった。が、それで、自分を嘲嗤つて了へない彼だつた。自分だけの間拔な立場は、滑稽味もあつて、そんなに悪い氣持でもなかつたが、しら／＼しくも嘘を並べてゐたお澄だと思ふと、矢ツ張り腹はたつた。

：あの、初雪の日から中二日隔いて、歳尾もぐツと押しつまつて來た或る晩、愛宕下の歳の市に出かけようとしてゐるお澄、お勢、それにその時が初對面のお直と、かう三人づれで、熱い飲料や菓子でも、とはいつて來た店つゞきの藥品部の方には、風邪心地の、ピラミドンを買つてゐた信之が、偶然にも、こみ合つた客のうしろにぼんやり突つ立つてゐた。すぐ聲をかけ合つて、一緒にそこでひと休みしてから、誘はれるまゝに愛宕さんの市にもつき合ひ、歸りがけには、また銀座まで送つて出て、吉田で蕎麥を食つて別れた。そこでふと出た弄花の話から、正月三日の晩、丁度、流十郎の出でゐる芝居の喫茶店で、「高路」の同人がよつて、信之の噂をしてゐた時刻には、約束通り、木挽町三

丁目の、ついよし野とは昔なか合せの裏通に、肇とお澄を訪ねて來たのだつた。

マツチ箱ほどの裏長屋と聞かされて、——もとよりそのまゝ、信之もしなかつたけれど、別戸を構へてゐる理由が、第一よし野には部屋もなし、年中あんな騒々しいところにもゐられないから、と云ふやうな話だつただけに、信之も、お澄と叔母のお直とが、女世帯らしく、蒲酒とはしてゐても、ほんの假住居の、小體に暮してゐるものとばかり想像してゐたのに、來て見ると、決して廣くはなかつたが、それも場所柄としては相應に間數もあり、二階二間はあとから載せたお神樂には違ひないにしても、木口なり手間なりに、おろそかならぬ心遣ひや、ギラつかないほどの金目も見えて、よし野の内裏がどれほど豊かは知らないが、兎にも角にもちよつとした小料理屋の女將の妹が住むにしては、贅澤すぎるかと云へる家だつた。それでも信之は、疑ひの「う」の字もあたまにもたなかつた……。

その晩は、骨牌に夜を更かして、いろ／＼に引き止められるのを、振り切るやうに、二時頃俵を云つて貰つて歸つたが、言はず語らず、信之には、女の心が嬌しく讀めてゐた。……その後まだ二十日とは經つてゐなかつたけれど、

その居心地のいゝ二階で、奥の水神で、違ふたび毎に、逢ひたさのつづつて行く二人になつてゐた。寢物語に、どうしたつて出なければならぬのは、お澄の過去だつた、そして現在だつた。

兩親には夙く別れ、金銭上では姉おもん、身のみはり、鶯、稽古ごと、そんな方面では叔母のお直に、一方ならぬ世話になつて人となり、十九の年齢に、仲に立つ者があつて、濱町の方の病院に勤めてゐた醫學士のもとへ縁づいたのだが、仔細があつて、一年とはゐないで歸つて來た、——とぶふのが、信之が聞かされてゐる限りの過去の物語りだつた。そして現在……？

「この年齢になつて、相變らず姉さんの厄介もんですわ。どうせもうこんな疵ものですから、お嫁に貰つてくれる方もありやアしませんし、あたしにしたつてもう懲々ですわ。厄介ついでに、一生姉さんの世話になつて、……いよ／＼食べさせてくれてがなくなつたら、まア、尼さんにでもなんにでもなつちまふんだわね」

## 十一

屢々そんな風に云ふのを、信之はしげ／＼と顔を見詰めながら聞いてゐた。疵ものだとも、

みませんが、あなたちよつと……

「ええ、今すぐあたしが綺麗に始末しときますから……」

信之がまだ何か云はうとするのを、

「どうしてあなたはさう強情をはるんです」

云ふとお澄は、片手を背なかに廻して、力のかぎり信之を玄關へ押し込めようとした。

## 九

信之には、急に意地も張も云つてゐられないやうな疲労困憊が來た。お澄の手に支へられて、足袋蹴のまゝ玄關にあがり、外套や襦袢をかなぐり捨てると、六疊の茶の間へひよろけ込んだ。

一時に酔がさめて、彼のあたまでは、いま寒いほど冷え返つて來た。……不思議にも、然しそこには、現在の醫學の力でどうすることも出来ない難病が既に彼の胃を侵し始めてゐると云ふ恐しい、むしろ絶望的な事實に對して、直接の憂慮や煩擾の影は少しもなかつた。一つにはこの結果が、決して思ひもかけない、と云ふやうなものではなく、二三年前から醫者にも注意され、自分でも、晩かれ早かれ……とは、凡そ

「残念してゐたところだつたからかも知れない。母方の祖母と叔父、續いて父の信策と、親い血

族のなかから三人まで瘧で斃されてゐる。宿願の遺傳が、今日の醫學では、まだ不確定な事實だとしても、信之はもとより、醫者に云はせても、それを考慮に入れないわけにはいかなかつた。そのうへ、三四年前までは、これも父親に似て、二升までの酒ならば、翌朝の胃に、さしてこたへなかつたものが、三十三と云ふ年齢から、急に酒量もへり、少し無理をすると、あとで必ず嘔吐する癖がついて了つた。けれども、

祖母と父は七十を越し、叔父にしても四十二の厄までは保つたのだから……と云ふやうな、頼みにもならないことを頼んだり、恐しい宣告を聞かされるのが可厭さに、いくら友達や家人に勧められても、どうしても本式に醫者の診察をうけようとはしなかつた。……さうは云つても人の世の不思議な魅力には、死もなほ厭はしめぬものがある。あなたがち頼み難きを頼み、眞實を怖れる心ばかりが、信之の攝生を妨げてゐた、とは云ひきれない。短い命にも代へがたく、彼には欲しいものがあつた……。

「お澄さん」

疊の上に、刻煙草の一筋が落ちてゐても、指のさきに吸はせて、火鉢の灰のなかに拂ひ落すとか何とかしなれば氣がすまないやうな、

視力の明かさだつた。空を渡る風の強さに、空中の水蒸氣が吹き散らされて、物象の輪廓から、悉くその柔かみが失はれた日のやうな、すさまじいばかりに、ぎす／＼と鋭いあたゝまの状態だつた。——不治の病が、既に我身にとりつてゐると知つての、一種の亢奮ではあらうけれど、その時信之のあたに浮かんできたのは、途次いく度となく繰返した、兎も角嘘をつくなアよくねえや」だつた、その言葉の内容容だつた。

——その晩は、帝國大學の英法科を同期に卒業した舊友の新年會で、龜島町の支那料理屋に十二三人の會食があつた。普段會嫌ひの信之が、ふと久振りの友達に逢つてみたくなつて出席してゐた。酒が酣になつてから、ひと塊道樂仲間ばかり集まつてゐた席で、「よし野」と云ふ言葉が、二三度繰返されるのが聞えた。信之は、ふと聞耳たてずにはゐられなかつた。

「なんてつたつて腹違ひだからね、そこは女將も水臭いやね……」

こんな言葉が聞えて來ると、信之はもうぢつとしてゐられなかつた。何気なく立つて、その一塊の放蕩もの、仲間間に割り込んで行つた。「なんだか由ありげなひそ／＼話だが、よし野



合はず、おもんに輪をかけた慾ばりで、慾ばりだけが知つてゐる慾ばりの灸所から、うまくと、有弊のおもんも一杯くはされ、一旦は大事なお澄をくれてやつたのだが、あとでだんくの嘘がはげて来ると、忽ち引き戻して、その後は自分の目の届くところで妾をさせてゐる。今且那と云ふのは、天下の實權を三分し、自ら進んで經濟界の盤を握んだと云はれる故田島伯の乾分の一人で、株式取引所創立の當時から辣腕を揮ひ、今では世に聞えた大實業家になりすましてゐる窪井謙五郎だつた。

「ふうん」

と、たゞ一應の鬱鬱を現はして聞き過して置いたやうなものゝ、信之にとつて、その名は呪ひの言葉なしには口に出来ないほどのものだつた。東北鐵道の國有問題が起つた當時、いろいろの缺點があつたとしても、清廉剛直の操行にかけては、われ人ともに許してゐた藤代信策をして、殆んど憤死せしめんとしたのは、かれ窪井謙五郎に他ならなかつた。當時まだ二十歳にも達しない信之には、詳しい消息は解らなかつたけれども、要するに金の問題だつた。東北鐵道ほどの大會社が、清算事務の帳尻を合す前には、あゝでもよくかうでもいゝと云つた性

質の金だけでも、決して馬鹿にならない額だつた。問題が、その處分方法にかゝつてゐたことは云ふまでもないが、信之が眼前見たところのものは、若い頃にあぶなく偏一狂の本式な患者になりかけたこともあるほどの一本氣で、日夜々、憤懣鬱悶を重ね、こんなことが永く續いたならばと、母親はじめ一家のうへに、明るい光が鎮されてしまつたほどの、——その頃の父信策の姿だつた。後年信之は、芝居で、仙臺萩の外記とか、あれに類する役をみると、その頃の父の姿と結びついて、はたの人には解らない涙が、止めどもなく落ちて来て、これにはいつも困らされたものだつた。最後の會議に、取締役の辭表を懷に出席した信策は、激論數刻に互つたのち、窪井を口がけて椅子を投げつけると云ふ狂態まで演じた。もとより社長の前に、續いて辭表も突き出されてゐたのだが、調停に立つ者があつて、信策も我を折り、表面だけは、最後の清算事務を終るまで、書類の調印にも與つたが、窪井一味のものが私腹を肥した、その何十分の一と云ふものも、信策は懷に入れなかつた。

さう云ふ、到底、生計すことの出来ない記憶のからみついた窪井謙五郎だつた。昔風に對

し大袈裟に云へば、親の仇だつた。人もあらうに、選りもよつて、その仇が、お澄の旦那だらうとは……

いゝ加減に廻りかけてゐた信之は、それからが飲みを始めた。老酒と日本酒とをちゃんぽんに、めちやくちやに飲んだ。例令どう云ふ動機からでも、——と云ふのは、好意から出たこととは信じられるのだが、それにしてもお澄が、一切さう云ふ事實を隠してゐたことは、氣に入らなかつた。その腹立が、深くあたに滲みついてゐたものとみえて、前後不覺に酔が廻つてからは、例令何がどうあらうと、嘘をつくなアよくねえや」が、唇から歪を離さへすれば、口癖のやうに、幾度となく飛び出して來たのだつた。

### 十三

長火鉢の前で、兩手を膝にきちんと坐りなほした信之は、自分の生命に、決して通しつこない強い爪を、ずぶりと突ツ立てゝゐる病魔のこなど、綺麗に忘れ果てゝゐた。茶簞當の横の烏府を把つて、火鉢の向う側に來て、埋火を掘り起し、器用に、すばやくつぎたしてゐるお澄の白い手先を、チツと見詰めてゐた。……恐し



嫁に貰ひてがないとも、眞實尼になる氣があらうとも、もとく正面の意味だけで聞ける言葉ではなかつたが、さればと云つて、その蔭にいろいろの祕密が匿されてゐようとも思はなかつた。——むしろ思ひたくなかつた。従つて、根柢り葉柢り、執拗く尋ねてみようと思はずに、つい今日まで日が経つて了つたのだ。それには、一年たらずの結婚生活の後に續いた三年間の獨身、——しみくそんなことを思はせられるやうなものを、お澄の心なり肉體から感じてゐる信之として、その蟲惑が、どんな言葉よりも確に、現在の彼の女を物語るやうに思はれもしたのだ。たゞ一つ可訝しく釋れないこともなかつたのは、どうかして信之を、よし野へ行かないやうに仕向けることだつた。もとより、こと改めて口止めをされたわけではないけれど、一緒に暮してゐるお直のほかに、二人の仲を知らせまいとする氣持は、言はず語らず通つてゐたが、それとは別に、何かもつと特殊な意味で、姉のおもんにだけは知られたくない、と云ふ容子がみえた。姉と云ふでう、親も同然の關係ではあり、あの初雪の晝にしても、酒のうへとは云へ、へんな具合な三角關係が、少くも三人の心にだけは渦を卷いたあとではあり、かた

がたこんなことが知れては……と云ふだけの意味か、或は、何かそこにもつと深い經緯でもあるのか、それは信之には解らなかつたけれども、兎に角よし野へは絶対に付いて貰ひたくなさうだつたし、瀧十郎に逢ふことすら、延いてはおもんとの交渉が生じると思はれるらしく、なんとか云つてはよさせるやうにする、と云ふ風だつた。

ところが、その晩、同級會の席で、或る商會社の支那人で、吉田と云ふ、若手ながら相應に顔の賣れた實業家の口から、圖らずも信之は、お澄の今の身の上について、思ひもかけない事實を聞き知つたのだつた。その云ふところで據れば、おもんは昔から有名な手とりで、つい四五年前までは、維新の元勳田島伯爵の寵愛をうけてゐたのだが、伯爵の死後、勢からぬ財物を贈られて邸内の妾宅を去り、ほどなくよし野を創めたのだと云ふ。それにしても、有るにまかせて、大がかりな待合などに手を出さず、全財産の何分の一と云ふやうな資本で、小體な料理屋を始めたところなど、いかにもおもんらしい利口なやり口だ、との評も出た。その料理屋と云ふ思ひつきも、有名な食道樂で、邸内に馬鹿らしいほど廣い庭園を設け、和洋とも一流

の料理人を雇つてゐた故伯の在此中から、祕かに通じてゐた若い美貌の料理番をつれ出して、わが手足のやうに働かせようと云ふ、色慾との二股かけた考へだつた。尤もその料理番は、開業して二月も経たないうちに、おもんと烈しい口論をした揚句、自分の方からさつさと出て行つて了つたので、今のよし野の料理は、なんの特色もない平凡なものになつてゐたが

蓄財慾に溺れたおもんは、なほその上に、よし野の後楯と瞻されるやうな、相應な實業家の三人までもつてゐた。胸違ひとけ云へ、妹の一人や二人、別に家をもたせて、一生ぶらぶら好き勝手なをさせて置いたところで、びくともするやうな身の上ではないのだつたが、

## 十二

と、慾と吝嗇にかけては、學校時代から決してひとに負けない方だつた吉田でさへ、そんな風に云つて憤慨したほどで、おもんは、親に代つて育てあげた恩をかさに着て、お澄の身體で、資本も利もとあげようとかゝつたのだ、——と、まづ吉田の話ではさう云ふことになる。濱町の方の醫者と云ふのが、これがまだ若いに似

意のもてよう筈はないぢアありませんか。それも、たゞ嫌ひだったと云ふだけぢアなくつて、あいつ、……一人と云ふわけでもあるまいけれど、つまりあいつ等一味の人間には、ひどい目にあはされてるんだ。おかげで親命は、一遍に三つ四つ年をとおちまふほどの心配をさせられたんだから……。まあ然し、そんなことア、この場合どうだつていゝんです。それどころか、考へてみれア却つて仕合なくらゐなもので、若しこれがあべこべに、あたしの大好きな人だつたりしてみたがいゝ、それこそ穴へはいつてもおツつかない氣持だらう。……が、これア今になつて、ちつと落つて考へてからの理窟で、なんてつたつて、あなたの、……なにが、幹井と聞いた時の氣持は……」

「よく解りました」

とまではきつぱり云つたが、急に膝の上にぼたぼたと涙をおとして、あとは杜切れゝゝに、

「夙くにあたしが、何もかも申しあげちまへばよかつたのに……。あたしなんぞ、もうどうなつたつて、ちつとも構やアしませんけれど、あなたに、——なんにも御存知のないあなたに、そんな……お顔に……お顔に泥を……、とんだことをしちまひましたわねえ……」

(まるで違つてる、そんな風に考へちやアいけな！)

とは感じられるのだが、つい今までの、すさまじいばかり冴え返つてゐたあなたが、急にどうなつて來たやうでもないのに、なんとなく信之は、自分の云ひたい氣持が、はつきりと捉へられなくなつてゐた。さう云ふ自分自身に對しても、またさう云ふ自分へ丁度かなつた言葉ばかり並べてゐるお澄に對しても、もの足りなさや苛立たしさが湧き返つて來た。

「あなたが、自分の心に苦しく思ふのは、ちつとも無理ぢアないが、あたしは何も、あなたに詫つて貰はうと思つて來たんぢやアない。……いや、先刻までは、——酔つてた間は、詫らすどころか、場合によつちア何をしでかすか分らないくらゐの氣持も、憶にありはあつたんだが、今は違ふ、今はまつたく別な氣持だ。皮肉でも、負憎みでも、冷淡でもなんでもなしに、あなたが、もうちつとも憎らしくなくなつちやつたんだもの。あなたに悪いことをされたなんて氣持は、これんばかりも残つてやアしないし、また考へてみれア、實際ちつとも悪いことなんぢアしてやアしないんだからね。……もし悪いと云へるとすれやア、あたしを借用してくれなかつ

たことだ。どんなことを聞かせても、あたしがあなたを嫌ひになるの、可厭になるのつてことは斷じてない、——さう云ふ氣持になつてゐてくれなかつたことだ、それだけは、あたしに云はせれば、慥にいゝことぢアなかつた。あたしはあなたに、何もかも話して聞かせたつもりですよ。お喋りだから、初めて違つた喉から、とんだ喋つて了つたね。それは、あたしが、あなたの心を信じて、ちつとも疑はなかつたからだらう？ それなのに、あなたは……」

## 十五

言葉の數を並べれば並べるほど、信之は、自分の氣持と離れて行く淋しさに鎖されて了つた。嘘つきは、お澄でなく、自分だ、——そんな反省も、微に肚の底に動いて來た。

……一體信之が、飽くことを知らない貪慾で、この世に探し求めてゐるものは、余でも名譽でもなく、人の眞心だった。相手が男だらうと女だらうと、事が戀愛に關しようと關しまいと、眞心の光に接し、それが擲めたと思ふ瞬間に、この世を忽ち天國とも觀じる樂天家の彼だった。同時に一旦それを見失つたが最後、ひとたまりもなくべしやゝに凋れ返つて、世界滅亡の秋に、たつた一人とに残されたほどの落

それで長い、しなやかな五本の指どもこそ恐ろかつた……。

「お澄さん」

もう一度呼びかけて、また黙つて了つた。……お澄には豫感があつた。目に沁みるやうな火氣の上から、顔を擡げられなかつた。「はい」とも「なんです」とも、返事が出て來なかつた。然しそれが、――返事の出來ないことが、一番正直な返事だ、と云ふやうな、微な安心も、どこか心の奥にあつた。

「お澄さん」

三度目には、答へる暇もなくあとを續けた。

「實はあたしは、今夜あなたのこととてむしやうに腹をたてゝやつて來たんです。卑怯な話だが、酒の力をかりても、うんと云ふだけ云つて、それツきり死んでも二度とは逢はない決心でやつて來たんです。黙してゐた、――なんにも云はなかつた、と云ふことは、理窟で云やア嘘ぢアない、嘘をついたことにやアならない……」

「いゝえ、あたしは嘘つきです！　ですけどあたし、どんなことがあつても、あなたと別れるのいや！　それがいやだから……」

お澄ももう、正面にびたりと視線を合せて、立派にそこまでは云つたものゝ、急に胸一杯に

こみあげて來て、いくら噛みしめようとしても、眼の前の一切が、忽ちぼやくと霞んで行つた。……今夜こそは、いや／＼この次に、と心弱くも延ばし／＼して來たことばかりが悔まれた。こんなことをしてゐるうちには、おそれ早かれ、どこからか信之の耳にはいることも、その瞬の自分の立場も、重々承知はしてゐながらも、あんまり素直に、殆ど子供やうな單純さで信頼されてゐるにつけ、つ／＼打ちあけにく／＼なつて、……たうとう恐れ／＼てゐた今夜が來て了つたのだ。どこまでも自分が悪い。然し、せめては惡意からでないことだけでも解つて貰ひたい。惡かつたのは、たゞ心弱さだけだ……。あゝ何故あたしは、あたしは――

「ごめんなさいまし」

歎歎の間から、やつとそれだけ呟いて、疊の上に突つ伏して了つた。

「いゝえ、あなたが嘘つきでないのは云ふまでもないし、これまであたしに明せずして來た氣持も、よく解つてゐるつもりです……」

なんと云はれてもお澄には、……第一、二人きりの差向ひにさん附で呼ばれ、いつものお前があなたになり、言葉尻まで他人行儀に改まつ

て了つた、――その信之の心根が悲しかつた。それくらゐなら、髮毛でも持つて引き倒し、打つたり蹴つたりされでもした方が、どんなに嬉しいか知れはしない、もうあたしの氣持なんぞ、通じても通じなくつても構ふものか、……とまでにお澄は、悲しみにとりのぼせて了つた。

「これアあなたの知つたことぢアないけれど……」

信之は默然として目を閉ぢ、靜に、寂しく呟いた。「たゞ不仕合な偶然と云ふよりほかないんだが、またいかにも相手がわるかつた！　窪井は、あたしにとつては、親の仇のやうな奴なんぞでねえ」

#### 十四

と聞くと、思はずお澄は身を起して、涙に濡れた瞳も黒く、ばツちりと睜つたまゝ、とみに口も割けなかつた。その容子から、自分の言葉に氣がついて、

「親の仇も大袈裟だが……」

と信之は、片頬に微な笑を浮べながら、「兎に角うちの死んだ親命とは、大喧嘩をしたらしいし、……神様の目であたら、どつちがどうなのか、本當のことは解りやアしないが、親命が生涯惡く云つてた人間に、あたしとしたつて好

と、何に捧げる禮心か、有難涙がはら／＼と落ちた。

「もういゝ／＼！ ね、もう氣がすんだらう？」  
ほつとつく息も動ずむばかりに、

「あたし悪い人、悪い人、ほんとにあたしは……」

「うゝん、ちつとも悪かアない！ 俺が云ふんで氣がすまなけれア、よく自分の心に訊いてごらん！ 眞心にだよ。今お前を虐めてるのは餘計なやつだよ、へんなやつだよ！ 眞心に訊きやア、きつと俺とおんなじことを云ふよ！

ね、解るかい？ 解るね！」

云はれてお澄は、もう一度聲をあげて泣いた……

「ごめんなさい……」

その時、遠慮がちな、もの柔かな聲をかけて、お直が襖をあげると、伏目のまゝで、「二階が暖かになつてますから、どうぞおあがんなすつてくださいまし。更けましたせぬか、大へんお寒くなつて來ましたから、お風邪でもめす……」

「えゝ、有難う、行きませう」

「お澄ちゃん」

初てそつと目を向けて、遠くから姪の方へ、

（これ、お前さん）とでも云ふ風に、招くやうな手つきをした。

「よござんす、今あたしがつれてきますから……。そして、あなたもう寢てくださいましね。寒いのに、汚いものゝ始末までさせたりして、ほんとにお氣の毒さんでした」

「いゝえもう、あなた……。さ、お澄ちゃん……」

信之の膝からは離れたが、お澄は、そのまゝまだ疊の上に突つ伏してゐた。

「あたしが、ついつまらないことを云ひ出しちまつたもんですから……」

さう云ひながら信之は、すなほな、これた笑顏で立ちあがり、ちよいとお澄の肩を叩いて、

「さ、ね、二階へ行かう」

「まア／＼、お袴をすつかり……」

お直も部屋のかなへはいつて來て、「それだけこゝへぬいでいらしつてくださいまし……」

「なに……」

榻ッぽいぢみな仙臺平に、ところ／＼黒く滲んだ涙のあとをボン／＼とはたいて、「さア、ここにあると、いつまでもお直さんが寢られないから二階へ行かうよ」

「どうしたんですよウ、ねえお澄ちゃん……」

叔母もやゝ氣輕な調子になつて、うしろから抱き起さうとすると、

「いやッ」  
と、急に立ちあがつて、「叔母さん、可厭！ 撥つたいわ」

涙に濡れた目もとで、お澄は、傻眼みに叔母を睨まへながら莞爾した。

## 半處女

一

丸の中に三の字を染抜いた紺暖簾の、裾長くかれ地面まで引いた陰から、ぬつと首だけ突込んで、

「今晚は」

「おや三好さん、お珍らしい……」

梅造りに、ちよいと手間を掛けた屋敷の奥に、磨き込んだ銅の大鍋を控へて、丸二の女房は、二重のキヨロリとした眼もとに愛嬌皺をよせ、無難作に束ねた縮れツ毛の額で軽く會釋しながら、「まアどうぞ……ずつとお通んなすつてください」

「あいてる、あいてる。珍しいな」

「いゝえ、この頃は暇なんですよ。旦那お一人」



其を、どう紛らやうもなくなつて了ふ。誠世家でもあつた。厳しく云へば、己れの心の眞だけでは、安心立命の得られない弱蟲だつた。もう一度云ひ換へると、自分の心をむきだしに、この世の風に晒して置けない寒がりで、常に自分からそれ相應の衣を着けてゐながら、裸な心の温みばかりを戀慕ひ、それに觸れば忽ち天上、それを失へば即ち地底と、他もなく心魂を揺り動かされて、一生を泣いたり笑つたりして送る凡衆の一人に過ぎなかつた。

：けれども、今の場合、信之の眞心は、澄の眞心に疑ひをもつてはゐなかつた。そのくせ、人もあらうに窪井の妾だつたことを、今日が日まで秘し隠しにかくされてゐたと云ふ表面の事實には、どうしても拘らずにゐられない氣持も、慥にあつた。何を聞いても、少しも心を煩はされずに、黙つてお澄の眞心に觸れ温まつてゐる、と云ふやうなねびまさつた心にもなれず、さうかと云つて、一時の憤怒に前後を忘れて、かつと取りのぼせて了ふほどの若々しい熱情も、酒の酔と共にさめ、そのうへ不治の病が集積つてゐる身と知つた今となつては、掻き立てやうもないほどに、さむく／＼と白け切つて了つたのだ。

：信之には、心で立派に宥してゐる人に、口で黒圖々々云つてゐるやうな、中途半端な自分自身が、だん／＼はつきりと感じられだして來た。……つまり、それは自分のと云はず、お澄のと云はず、眞心と云ふものに信據する心の怠りで、また力弱さだつた。信之としては、生活の心棒のぐらつきだつた。

：そこへ氣がつくと、疲れ果てた精根も、急にぎり／＼と引き締つて來た。

「だけどもう、これつきりこの話はいさう」

と、言葉が続けて、「なんにも云はないでも、なんにも訊かないでも、お互の心の底はよく解つてゐらね、ね、ね……」がつしりした如輪の長火鉢を、兩側から押しつぶさんばかりの力が、思はず腕に走つて、軀が微に震へて來た。

「あたしもう、これきりお日にかゝりませんわ……」

はつきりと、袖のなかから洩れたこの意外なひと言は、信之の胸を衝いた。——とは云へ、昂まつた彼の心には、言葉は、その表面の意味を運んで來るだけの道具ではなくなつてゐた。

「弱いよ、お澄！」

「いや／＼いや！ 弱くつてもなんでも、もう

決してお目にかゝりません。歸つてください、今すぐ歸つてください！」

靜に立つて、信之はお澄のそばに坐り直すと、泣く音をたてまいとして烈しくうち震ふ胸を膝へ抱きあげ、兩腕にちつと力をこめた。忍びかねて、お澄は、子供のやうに聲をたて、泣きだして了つた。

### 十六

急に、信之の心の眼は明るみ互り、清い涙に潤つた……

「解る、解るよ、よく解るよ！」

お澄の後悔は、軀で己れを憎み厭ふ心ひとなつて、われとわが心にあて着る軀の音が、手にとる如く信之の胸へも響いて來た。

「仕様が、氣がすむまで、もつとぶてぶて！」

さながら、笞刑をうけてゐる軀のやうに、のたうつ春筋をしかと抱き締め、眼目痛坐、氣味の悪いほどに蒼白んだ信之は、紋服袴のきちんとした装だけに、深更の冷い空氣のなかに、現世のものとは思へないくらゐだつた。寅の八百と云ふ星の勝氣から、お澄の、己れに加へる鋭い鞭の下に、覆ひ被さり、とも／＼にその痛みを忍ばうと、額に力をこめて齒を喰ひしはる

がり云はせて、幅が狭くて丈の高い、へんに腰かけにくい縁臺を押し込んでよこした。

「へ、少々ごめんなさいよ。…ねえ、三好さん、い、御機嫌でえのは、そんなぼんやりしたもんぢアありませんやねえ」

「あゝ草臥た！ 腰でもかけなきやア口を利く威勢もねえや。…さアみなさん、お手を拜借して、もうちつと前によせませうぜ」

目白押に三人腰をおろしながら、縁臺を屋臺のそばへずらせた。顔を見るなり手早く女房がつけて置いた大阪風の錫のちろりが、すぐもうそこへ出た。三好が盥洗の盃をまづ瀧十郎から順に、自分まで取ると、やゝ場うての態で、先刻からもち／＼してゐる美津枝に代つて、瀧十郎は、反對に三好の方から順に酌をしなが

ら、  
「女將さん、紹介しよう。この御婦人は、銀座のカフェエ、シャノアル、翻譯すれば黒猫亭とでも云ふ洋食屋を、御兄君と二人で經營なすつておいでなさる、柳澤美津枝嬢…。いゝかい、解つたね、嬢だよ、ミスだよ…。」「あら、いやですわよう、あたしカフェエの女給なの」

東髪（そでがみ）の鬼（おに）ピンにしても、お召（めし）のコオトにして

も、襟巻（えりまき）にしても、女給（にょきつ）にしては贅澤（ぜいざく）すぎるし、女優（じゆう）にしてはぢみだし、藝者（げいしや）でもなし、奥（おく）さんや嬢（ぢやう）さんにしては、十二時過ぎに男二人とつれ

だつて歩き廻るのもへんだしと、先刻（さうぎ）から鑑定（かんてい）をつけかけてゐた丸三（まるさん）の女房（にようばう）は、成程（なるほど）兄妹（けいがい）でカフェエをやつてるとは、さう云はれてみれば、いかにもそれが動かないところだと、擧（あ）げて胸（むね）には落ちたが、それは氣振（けいぶり）にも見せずに、

「あゝ、さやうですか。あたしはまた…。」「なんと見た？」

「あのウ、旦那（だんな）とおんなじ…。」「と、瀧（たき）十郎（じろ）の方（かた）へ口（くち）を向（む）けると、

「女優（じゆう）さんかい？…あ、これだけの女優（じゆう）さんがゐりやア、あつしやアすぐにも帝劇（ていげき）に買（か）はれて行くね」

「あら！」「ちよいと晚（おそ）んだ日を、美津枝（みつえだ）はすぐ一好（いっさう）の方（かた）へ向（む）けて、「始（はじ）まりましたよ、萩原（はぎはら）さんの十八番（じちはん）が…」

「柔道（じゆうどう）で云ふと、一級（いっけい）とか二級（にけい）とか、つまり初段（しよだん）になりかけのところで、やたらにお土砂（どしゃ）が使（つか）つてみた／＼つてならない時期（じき）なんだからね、まアせいゝ、云（い）はしとくさ」

「まア、お土砂（どしゃ）の一級（いっけい）…。」「

女房（にようばう）がくつくと笑（わら）へば、亭主（ていしゆ）はまたのツッソリとした面（おもて）つきで、

「なんです、お土砂（どしゃ）つてえなア…。」「

### 三

「お土砂（どしゃ）か？ お土砂（どしゃ）はお前（まへ）…。」「

と、三好（さんこう）が、手酌（てしやく）でやりながら、「昔（むかし）は死人（しにん）の首（くび）に頭陀袋（だうたふく）と云ふものをかけて、お土砂（どしゃ）と、途（つ）の川の渡（わた）しに穴（あな）あきを銭（ぜに）…。」「

「それア知（し）つてますよ。なんてつたつて、わッしアあなたより十（じゅう）以上（じやうじやう）も上（うへ）だもの。」「

「だからさ、そのお土砂（どしゃ）は、死人（しにん）の身體（からだ）を柔（やわ）かにするためにふりかけて、残（のこ）つたヤツを袋（ふくろ）に入（い）れてやつたもんだらう？」「

「そこまでは知らない…。」「

「それみろ！ つまりそこで、堅（かた）いやつにふりかけて、柔（やわ）かにするのでお土砂（どしゃ）だ。解（か）つたらう」

「解（か）らない。」「

「えゝ、強情（じやうじやう）に血（ち）の環（わ）りの悪い親（おや）だなア。お世敵（よせどく）のこつたよ！」。」「

「いやだね、お父（おや）さんは」

と、鮎（あや）をぶつ切（き）に拵（こしら）へながら、女房（にようばう）もそばから口（くち）を出（い）して、「都（みやこ）新聞（しんぶん）を見てごらん、六（む）代目（だいに）さんの噂（うわさ）に、よくお土砂（どしゃ）／＼つて出てるぢ

ですか」

「いや」

三好は振返ると、片手に暖簾をかゝげて、「さアおはいんなさい……おでんやに恐れをなす君でもあるまい」

「自動車、ヤツぱり待つて貰ふことにしましたよ。一時間かそこらなら構はないつて云ふから……」

そこには瀧十郎の聲で、「さア……まア……あなたから、先におはいんなさいな」

「ぢやア御免なさい」  
と、髪をかばつて、身を斜にはいつて來たのは、カフェエ・シャノアルの美津枝だつた。

「いらつしやいまし」

女客と見ると、女房はさつそく表情を優しくして、暖簾ごしに裏の方に聲を掛けた。「阿父さん、縁臺を出してあげてくださいな」

「おいしよ」  
車道と人通との境に、屋臺と並べて置いた丸三の印の入つた箱車から、何やら取出さうとしてゐた亭主の三吉が、附景氣の返事をした。

「とツさん、手傳はうか」  
まだ暖簾のそとにゐた瀧十郎が、聲をかけて

近よつて行くと、

「やア、旦那ですか、随分お久振ですね」

「どうも御無沙汰。どうです、相變らず御繁昌でせう」

「大した景氣でさア」

「そりやア何より結構……」  
「景氣がいくから、おでんなンぞ食ひてがないんで暇ですよ」

「旦那！」

と、うちから女房が笑ひながら、瀧十郎に、「そんな人の相手になつてないで、早くこちらへおはいんなさいいましよ」

「當時賣田の若手俳優だと思ふアがつて、噂め、いやに胡麻をすりやアがる」

「あれだ……」

女房がくつくと笑つてみせるのを、三好は一向可笑くもない顔つきで、

「いやもう、相變らずお仲のいゝコツです……」  
瀧さん早くおはいりよ、うかう／＼相手になつてると、いゝやうに二人に遊ばれちまふよ、馬鹿馬鹿しい……」

「さう／＼」  
亭主はなほもへらず口を叩いて、「そこへ氣がついたところをもつてみると、三好先生もち

よつと苦勞をしましたね……」

「なま云つてやアがらア。そんな無駄を云つてる手間で、早く腰掛でも出して來いよ」

「心得た」

二品、三品原料を、屋臺の裏所にあたる女房の横手へ置いて、早速丸三の親命は、近所の薪炭商に預けてある縁臺を取りに行き、瀧十郎も暖簾をくゞつてはいつて來た。

## 二

「やア女將さん、どうです……」

「いらつしやいまし。旦那、随分御無沙汰ぢやアありませんか」

「いやもうどうも、當時、かう云ふ悪友とは成可く附合はないことにしますからね」

瀧十郎は、間に挟んだ美津枝の頭ごしに、三好の方を顎で指して、帽子をぬいだ。

「へ、こちらに頂きませう」

女房は、鍋の上から手を延してそれをうけとり、序に三好にも、

「旦那のお預りいたしませうか」

さう云かれても、三好は屋臺の隅にぐつたりと凭れかゝつて、上目使ひにぼんやり一つところを見詰めてゐるので、「どうなさいました。大

ぶんもういゝ御機嫌のやうですね」

そこに亭主が、三好のうしろから、小砂利を

ふ娘のうちに、下町よりは山の手の女學生風、——それ以上には、學校へも通はせない深窓のお姫様、——どうかすると、恐れけもなくまだその上の望みをさへ口外する、と云つた風で、要するに、性的に無智、無教養であればあるほど、三好の理想が満されるわけだつた。さうは云つても、彼の氣持は、プラトニックな戀でもしようと思ふやうな、そんな清淨なものでは決してないのみならず、なまじ人工の調味を加へられるより、庖丁一つあてないうちに、生かじりに啗らうと云つた風な、一種の徹底したエロティシズムから出發してゐた。この強氣には、信之なども屢々壓迫に似た感じを味はされたものだ。自然に即くと云ふ意味では、ホイットマンを思はせるほどに正々堂々としてゐながら、それを享ける心持の惡魔的な點にかけると、金錢づくで女を自由にするなどとは、むしろ可變らしい仕事とも云へるくらゐで、いつそ自然を歪めずに、有形のまゝ玩具にする。——謂はば自然のしやつ面へ青癡でもはッかけるやうな冒瀆を、空恐ろしいとは思はない勇氣には、反感よりもさきに震撃を感じて、いつも信之は、口を噤むより他なかつた。ところが、そこへ行くと瀧十郎は、まだ別の意味での勇者だつた。

三好の處女讚美論が出るごとに、それが空想としての價值はあつても、實際にあたれば、全く無價値なものだ、老人にその論者の多いのも、あたまたの助けを借りようとするからで、その間の消息は、これに徴しても明かだ、三好はきつと體力に缺けるところがあるに違ひない、なにと、平氣で、青癡の上を土足でふんづけて歩くやうな説を述べたてるのが常だつた。三好はもとより、黃口兒なんするものぞ、と云つた調子で揶揄し論駁する。——かやうにして彼等の交際が好まつて以來、最近まで、兩雄互に堅く執つて降らなかつたのだ。

それが、どうした拍子か、ふと瀧十郎が、カフェエ、シャノアルの美津枝を見染めたと云つて、遽に三好の前に兎をぬいだわけだつた。

「なアんだ、どんな大した代物かと思つたら、たかがカフェエの女なんぞ、……素人が聞いて呆れらア——」

一週間ほど前の或る晩、芝居歸りに、二人して鳥屋によつて一杯やりながら、初て瀧十郎からその話を聞かされた時に、三好は、一言ものにとさう譏しつけはしたが、なんと云つても自分の鼻と云つた類つきで、いつもの、藝者相手の惚話とは違ひ、親しきをもつて、自分の方か

ら、根柢り蒐掘り記きたゞしたりした。

## 五

それでは早速これから二人で出かけようか、となつた時には、もう十二時近かつたので、兩方の都合を云ひ合つてみて、結局芝居が千秋樂になつた翌晩の今夜を約束して別れたのだが、

「兎に角、この件についてア、あなたは先輩なんだから、へんなまねはしつこなしにしませうね——」

と、もういよいよ腰をもちあげようと云ふ間際になつて、瀧十郎が、微笑ひながらそんなことを云ひだした。

「なんだい、へんなまねてえのは——」  
「たつたいま、先生、なんて云ひました、——」  
たかがカフェエの女なんぞ、とか仰有いましたね——

「云つたとも。市川瀧十郎ともあらう者がさ、素人々々つて大騒ぎをするにちア、實際また、あんまり馬鹿々々しすぎらアね——」

「よろしい、なんでも仰有い！ 兎をぬいだ上に、今夜から改めてあッしア素人科のお弟子入りをしたつもりでゐるんだから、どんなに馬鹿にされたつて仕方がありません。然し、あッしにア、兎にも角にも立派な素人に思へるんだ



やないかね」

「へん、そんなとこを見てる暇がありやア、加藤さんの演説でも讀まアな」

「へえ、お前は憲政會の眞ん中かい」

「勿論！ わッしだつて、かう見えて、普選即行の……」

「よせやい、無銭遊興の間違ひだらう……」

それアさうと、今夜ア蝦はないのかい、ほんの屋敷のおでん屋ながら、商賣熱心の上に潑り性な女房が、どこで誰に教つたともなく覺えて來ては、まるきり碌な食物屋のないこの四谷通りに、材料だけでも下町の一流どころにをさく、劣らないほどの、おやつと思ふやうな料理を食はせてゐる丸三だつた。大木戸の友達を尋ねた歸りに、ふと飛び込んだのが縁となつて、信之は、三四年前からの、大した鼻根だつたが、或る時大阪へ行つた序に、そこでは、亭主と料理と共に一番好きで、富久亭と云ふ小料理屋に譯を話して、丸三の女房を、夏と冬と二度に、半月ほどづつ料理見習ひに住込ませるやうに計らつてやつたこともあるくらゐで、もう近頃では、女房の腹前は、とても屋臺店のもではなかつたが、昔を忘れずに、矢ッ張りおでんの鍋は、始終「ゴト」と音をさせてあつ

た。ふりの客は、それだけ食べて行つたけれど、遠方からでも、態々自動車を乗りつけて來ようとぶふ馴染客は、はいつて來るなり、甘いのねだりをするやうなことになる。三好や瀧十郎は、云ふまでもなく信之の紹介で、迷惑なほど永ッ所でも、まづは上顧客の側だつた。

「蝦は生憎みんなにちやひましたか、虎魚のいゝのがありますから、このあとへ、赤だしにして差あげようと思つてるんですけど……、どういたしませう」

「赤だし結構だな」

と、瀧十郎は、そこへ出た鮎のぶつ切に早速箸をつけたが、美津枝にも、「どうぞ、一生懸命うまがつて食べてやつてください」

「へえ、どうぞ、今夜のは、旦那のお好きなお腹の方ですよ」

「ねえ、それア誰しも背なかの方よりやア腹がよござんさアねえ」

頼みもしないのに、いつものこととて、運轉手や助手のために、おでんをとつた皿を兩手に持ち、自動車の待つてゐる方へ出て行かうとしながら、三吉が、一面に笑み皺めた顔を振り向けて、そんな捨臺詞を投げつけた。

「助平爺！」  
その二好の言葉は機縁に、若いカフエエの女將を除いた三人は、ドツと聲をあげて笑ひだした。

#### 四

そのなかでも、他愛もなく可笑しがつてゐるやうに見せかけて、瀧十郎の日だけは、並んで腰かけた美津枝の顔に鋭く注がれてゐた。が、生憎、丁度鮎を口に入れて、モグ／＼やつてゐたところなので、その、嬢々とした豊かな頬に讀みとらうとした微笑の影などは、まるで曖昧にされて了つた。もしニヤリとでもしてゐたら、あとからそこへ語をすげて、十中八九はもうこつちのものと心の辻占も、それでおぢやんにされたわけだつた。

初日の樂屋で、三好の前に兜をぬがなければならぬ事件が起りかけてゐるやうな口吻を洩したのは、實はこの美津枝のことだつた。一體三好は、ひとに誘はれ、ば、敢て辭するでもなかつたが、どつちかと云へば、花柳界の女や、その情趣には、あまり率直を感じない方だつた。まづ下から云ふと、底の止りけ、素人と云ふ言葉で限られ、同じ素人のうちにも、處女、――處女のうちに、十六七の娘、さう云

えほどの罰アあたねえつもりだア――

「きちげえぐるま」

長く引いた眉を八の字にして、額に深く皺をよせ、口をポカンとあいて、美津枝が、(アア呆れた!)と云ふ表情で、その言葉を繰り返した。

それが馬鹿に瀧十郎には好ましかつた。ひとりでくつくと笑つてゐた。

「おい、瀧さん、俺ア今晚、君んちに泊めて貰ふよ」

「いやだ、断る!」

瀧十郎も、故意と突濃食に答へた。

「あたしも、二人ツきりぢアいやだわ」

初ツから、三人一緒とばかり思ひ込んでゐたのに、嘘はなささうだつた。――結局、明るくなる時分まで飲んでゐようとも、ちつとも構はない丸一を思ひついて、あとは兎も角も、ひとまづそこへ落つくことにきまつたのだつた。

「ねえ、女将さん、もつとなんか甘いもんくれ

よ」

カクテルやウキスキが混つた場句の日本酒

で、有難酒の三好も、大ぶん口つきがトロン

コになつて来てゐた。「今夜はねえ、女将さん!

身を入れてこつちの話を聞きねえな! 今

夜は俺アどんなに瀧に御馳走になつたつても、

い、譯があるんだ」

「へーえ」

女房の目の玉がぬけめなくギョロリ／＼と、瀧十郎と美津枝との間を往復した。瀧十郎は、然し平氣な顔をして、赤だしを吸つてゐた。

「と云つたところで、何も色ツばい話ぢアねえよ」

(どうだ、かう見えたつてまだ正氣だぞ、へまなこたア云やアしないから安心してろ!)とでも云ひたげな目つきで、三好は、一人おいて隣

の瀧十郎の顔を、ちよい／＼覗き込みながら言

葉を續けて、一つまり俺が、今夜ツから瀧の先生

になつたんだ。その學問てのは……、その學問

たるや、大した學問だ。だから、その束脩

だと思やア安いもんさ! ね、解つたかい」

「ちつとも解らない」

三吉は、例の暗闇から牛を引きずり出したや

うなとぼけ顔で、一何がなんだか、さつぱりわけ

が解らない――

「へん、お前みてえな唐變木にぶつてらんぢア

ねえやい。なア阿母ア、阿母アの前だが、お前

んちの爺さんと來たひにヤア、よつぽど確し

てるぜ。よせよもう、あんなやつ」

「大きにお世話だ」

女房の方に背を向けて腰かけ、三吉は納まり返つて、悠々と一服吸ひつけた。

## 七

「さてその束脩だ……」

と、三好はもう水でも飲むやうに、がぶりと

盃をあけて瀧十郎へ獻し、女房に向つて言葉

を續けた。「本來いやア、何しろ學問が學問だか

ら、丸三づらのぢア……」

「あら、ぐらゐ、はないでせう」

「ヤツ、これは失言! それアもう、目さから

云やアぐらゐつて言葉はないわけだけれど、何

しろお前んこは安いからね」

「お土砂ノ……」

ぬからず亭主が半疊を入れた。

「でもまア取敢ず今夜のところは、ほんの手附

のつもりで、束脩の手附も可笑しいが、兎

に角なんかもつと甘いもんを食はせろよ

「そんなに仰有らないでも、これからだん／＼

にあけようと思つてるところですよ……あゝ、

あとでね、富久亭直傳の鮎が丁度宜り加減で

すから召あがつてみてくださいまし。紀尾井町

さんへも、夕方、少しばかりですけれど、阿父

さんに持つてつて貰つたんです」

「紀尾井町さんつてええ、こゝんところ暫く

から……」

「兄妹で經營してゐるなんて云つたつて、その兄貴が、どんな兄貴やら、藝者の兄さんほどにも當になるんぢアなし、勿論處女でないことは知れきつた話……」

「ちよいとく、お言葉の中ですがね、まだ顔も見ないさきから、いかに大先生でも、それアさうは云はせませんよ」

「なんだい、ぢア君は、その美津枝さんとやらが、處女だとも思つてゐるのかい？」

「……」

「眞からさう信じられるのかい？」

「それアまア……」

「それアまア？」

「それアなんですよ、ぶぶの處女とも思ひはしませんがね、まア相撲の星で云つてみれア、つまり半星と云ふやうなところで……」

「ぢや半處女か」

「さうく、それですよ、その半處女ぐらゐな價值はたしかにありますよ」

「ぢアまア、それアそれとして置いて……」

「そこでだ、二十八日の晩までは、お一人でこつそり出かけるやうなことは、まさかなさうやしますまいね」

「そんなこたア僕の自由ぢアないか」

「いゝえ、それアいけませんよ！ そんなあなた、素人料の大先生ともあらう者が、お弟子を出しぬくなんて」

「出しぬくなんてわけぢアないが、たゞちよつと下檢分……」

「下檢分も上檢分もあるんですか、そんな卑怯なまねをなさるんなら、あッしアもうこれツきり斷然絶交だ！」

「よしく、それほどまでに可怕けれア、慈悲憐愍の情をかけて行かずに置いてやらう、その代りなんだぜ、その晩二人で一緒に行つてだね、……勿論君はお馴染、僕は初でだよ、それで向う僕の方が率がよかつた場合には……」

「そ、そんな馬鹿な話……」

「おや！ 大した自信なんだね。それくらゐなら、何も態々僕を突支棒に引つぱりだすことはないだらう。誰にも内證にして置いて、一人でせつせと通ふがいゝぢアないか」

「意地が悪いつて、ま、およそあなたくらゐ意地の悪い方もめつたにないね。何もさうへんてこにぢやくばらないたつて……」

「よしく、もうなんにも云ふな、云ふな！ 何も附合だ。こゝは一つ俠氣を出して、立派に

君に花を持たしてあげるよ」

「よろしい、きつとですね！ や、それでこそ三好先生だ！」

## 六

かう云ふ、冗談のやうな、眞剣なやうな、要するに馬鹿々々しい經緯があつた後で、今夜一人で、有樂座に或る新しい芝居を見物してから、十二時すぎで丸三に現はれるまで、カフェエ、シヤノアルで飲んでゐた。そして、いざ歸ると云ふだになつて、瀧十郎が自動車と呼ばせると、初のうちいくら話つても可厭がつてゐた美津枝が、急に自分の方から進んで送つて行くと云ひ出した。

「おや／＼おや、これは怪しからん……」

牛込横寺町の下宿へ歸る三好としては、赤阪の丹後町へ向つて走り出さうとする自動車には、途中まで、とも云ひ出せない仕儀だつた。

心中ひどく面白くないのを、出来るだけ氣さくなもの云ひに紛らして、「さうさうまア俺アもう今夜は、夜ツびてこゝで飲み明すからさう思つてくれ」

「あら、三好さんは御一緒にぢやないんですか」  
「べらぼうめ、かう見えなつてプロレタリアでえ！ まだ、氣違車に乗らなくつちアならね

「そんな、旦那、なんぼなんでも……」  
 「なア、それくらゐなら、百圓札で十廻けつてもふいた方がまだましなくらゐだらう、なア、とッさん、さうだらう」  
 「ふうん、何しろ太え野郎ですね、その不良少年でえのは、一體どこの小僧なんです」  
 「そんなことまでは知らねえが、なんでも金看板極附の代物だつてえ話だよ」  
 「そんなやつがまたどうして紀尾井町のお屋敷へ伺つたんでせう、紹介もなんにもなしに、だしぬけですか」  
 「それア……」  
 と、云ひかけて、酔つてはゐても、有様に三好も、はッと氣がついた。現在の兄の前で、まさかに鈴江の名は出でなかつた。太急ぎで盃を口へ持つて行つて、一息に乾すと、ちよつと獻しどころにまごついてから、美津枝の前にさし出した。  
 「わたくし? とてももうそんなに頂けやアしませんわ」  
 「まア、いゝさ」  
 と、無理に持たせて酌をしてやりながら、「それア、いづれ紹介する人はあつたんだがね、ただ逢つて話でも聞ける分にやア差し支へない

が、……一體不良少年に限つて、それア實に話がうまいもんだよ。それで、大抵はあたゝまがよくつて、器用で、……ひとかどの不良少年と云はれるにやア、矢ッ張り馬鹿ぢや出来ねえんだね。……だからあいつら仲間の、珍らしい變つたことでも、誠そらごと取りまぜて面白可笑しく話すのを聞ける分にやア、こつちが暇な時なら丁度いい相手さ。だけど、そんな小僧ツツの口車に乗せられて、初對面の目に、いきなり千兩してやられるなんざア、信さんにも似合はねえ、あんまり馬鹿げた話だアな、どうも人將、近頃ちつと焼が廻つたぜ」  
 「ありがたう」  
 言葉の切れ目に、美津枝は盃を返して、「先刻から紀尾井町さんで仰有つてゐるの、もしや藤代さんで方ぢやないんですか」  
 「え」  
 瀧十郎と三好とは、兩方から女の顔を窺き込んで、思はず意外の驚きを聲に立てた。

## 九

「お前さん、知つてゐるのかい」  
 「どうしてまた」  
 三好と瀧十郎との言葉が、兩側から、殆ど同時に放たれた。急にその場の女主人公になつた

やうな氣持で、美津枝は輝かしく微笑んで、  
 「え、存じてますわ」  
 「いつ? どこで?」  
 瀧十郎が、氣配しなく聲みかけて訊くのを、ちツと見返した日のうちには、抑捺するやうな色さへ深かんでゐた。  
 「ずつと先から」  
 「え? どこで?」  
 「嘘よ、ほんととはいふ一昨々日の晩……」  
 「ふうん、一昨々日の晩、君とところへ現はれたのかい」  
 「え、大へん酔つていらしたわ」  
 その時まで黙つて聞いてゐた三好が、急にさもさも感に堪へた容子ツぶりて、  
 「これア、恐れ入つた! 實にまめなもんだなア。いやもう、寧ろ来れ返るよ」  
 「と云ふと」  
 「實ア俺がすつかり喋つちまつたんだがね」  
 「え、信さんにと いけないなア、先生!」  
 それアいけないや」  
 「まアさう恨みがましく云ふなよ。なんぼ大將でも、まさかそこまでは手廻るまいと思つてたんだが、……へーえ。さうかなア」



お目にかゝらないが……」

瀧十郎は、三人ならばゆつくりかけられる縁臺の幅を、故ら美津枝の方にびつたりくつついて、時々肩で押し加減にしたりしながら、それでも信之の話が出ると、真から懐しさうに言葉を挟んだ。

「へえ、さやうですか、なんですか、ちつとお加減が悪くて、二三日前からおやすみなつていらつしやるとかつて、ねえ阿父さん」  
そとへ出て洗物をしてゐた三吉が、その答をすぐ客の方へ、

「またなんでせう、いつもの飲みすぎなんですう、胃だとか腸だとか女中さんが云つてましたから……。わつしも夕方のことで急いでましたし、奥さんにもお目にかゝらずに歸つて來ちまつたもんですから、詳しいことは伺ひませんでしたけれど、なに、大したことぢやなからうと思ひますよ」

「なんだい、何が大了たこつちアないんだい」

兩肘を張つて屋臺に凭れかゝり、トロロコな目を見据ゑたまゝ、うつとりしかけてゐた三好が、そのとき急に頓狂な聲を出した。

「紀尾井町さんが、少し胃腸のお加減が悪い

んですつて。二三日ねておいでさうですよ」

「へーえ、大將どうも、近頃めつきり弱つてゐるア。少し餘計に飲みかへすれア、きつとあとで吐く容すだからア。一度かかるとなれば醫者に診せといたらつて云ふんだけど、中々あれで強情だからね。あぶねえよ、何しろ胃腸がお家のものなんだつてえから……」

「なアに、でもあの心氣なら……」

大ぶもういゝ心持になりかけてゐた瀧十郎は、醇淡らしい心理で、ちつとでも景氣の悪い話なんぞしたくない氣持だつた。……どうして、相變らず御亂行つゞきらしい噂だぜ。何しても結構な御身分さ。吾々と違つて、自分の稼いだ金で遊ぶんぢアないんだから、はたから見ただとどことなくかうゆつたりと、大まかで、ただいとお美ましい限りだよ」

「吾々と違つて……」の一言がはさまつてゐるだけに、丸三の女房も、すぐに同感の言葉で迎へるわけにもゆかぬが、「たゞ……お美ましい限りだよ」の可笑しなだけを、咽喉頭から押し出すやうに、軽く笑つて置いた。

## 八

「大まかもういゝが……」

三好には、多少つつかゝつて行きたい酒癖が

あつた。ひとが右と云へば、無理にも左とさくらひたくなるのがきまりだつた。「大まかもういゝが、随分馬鹿けたこともあらアね。現に

先達もさ、くだらない不良少年にひつかつて、ちよろツと千兩してやられてゐるんだもの、ひとごとながら腹が立たアね」

「へーえ、それアまたどう云ふ話なんです」

三吉が、一週間ほど無精した、顔半分ベツとりの髭を撫で廻しながら、さも御主君の「大事」と云つた風に、目を丸くした。

なアに、活動なんかを種に、みすゝく嘘にきまつた話を持ち込まれてき、御當人、活動嫌ひと來てるから、年に一遍も見るか見ないだらう。そんならそれで、俺ア活動なんぞ人嫌ひだつて、頭から斷つちまへばいゝものを、なんにも解らないくせに、きつと上顎と下顎とぶつかり放題の講釋を、神妙に小一時間聞かされたんだらうよ。その揚句に、三千圓と吹つかけられたんださうだが、貸すのは可厭だから、千圓だけなら進呈しようつて……、馬鹿々々しいぢアねえか、それも初めて來た、やつと二十歳かそこの小僧ツ子に、その場で小切手を許いで渡したつてんだから、まつたく呆れもされねえや」

したちがなんか悪口みたいなことを、ちよつとでも云ひかけると、すぐ慌てゝそばから揉み消して了ふやうになさるくらゐですもの……」

「なんでえ、お前たちは、どうせ信さん最辰だから、そんな風に云ふんだらうが、なんでえ、あつちにもこつちにも女ばかり拵へて、色魔と云はれたつて、ぐうの音も出せねえ筈の身もぢぢアねえか。そんなことまでは知らねえなら知らねえで、黙つて引ッ込んでりやアいゝんだ！」

「それアね」と、親爺は、中々黙つて引ッ込んでゐなかつた。「それアそこらにゐる人のやうに、女のけつばかり追ッかけ廻しても、出来ない人にやア出来ねえし、出来るところにやアまた、大人しくおててをちやんと膝の上に置いてゐたつて、先方からお膳を据ゑに来るんだもの。幾人女があつたからつて、それで色魔と限りやアしませんや」

その言葉の間にも、女房は幾度も筒ッぽの肘を引いたり、およしよ、と云ふ風なことを云ひかけてもみたが、そこまで来ると、もうとても黙つてはゐられないと云ふ風に口を出して、

「まア、うちの阿父さんと来たら、すぐあゝむきになるんですよ。お客さんだらうとなんだらうと、もうさうなつたひにやアまるツきり見境がつかないんですから……」

などと、女は女同士と云つた調子を借りて、笑顔を振りたてながら頻りと美津枝に喋りかけた。

「でもね、あたしも一度しかお目にかゝらないんですけど、藤代さんつて方、そんな方ぢアありませんわ」

「え……」

ぐらり／＼搖れだした體を、無理にピンとさせようと力を入れながら、三白に吊しあがつた目に亭主の方をぢツと見据ゑてゐる三好に氣をかねて、女房はそれには曖昧に答へて置いて、今度は瀧十郎の方へ、「でもね、この道ばかりはまた別だつて云ひますから、それアね、あたしどもにやア解らないやうなことも、それアおあんなさらない限りぢアありませんからねえ。：旦那いかがです、おあと、鯛茶にでもいたしませうか」

十一

何事も穩便にと、ひとり氣をもんでゐる女房の手前としても、瀧十郎は、不粹らしく、不憚な顔もしてゐられないはめだつたけれど、いくら追ひかけ廻したつて出来ない人には出来な

い、などと、三好へあてゝの言葉とはい言へ、この場合の瀧十郎の胸には、ちよいと痛い釘を差されたりして、亭主の三吉に對しては、可なりの反感を感じてゐた。

「三好先生、どうしませう、鯛茶漬を貰ひますか、それとも――」

出来るだけ平氣を拵つて、そんな風に相談をもちかけてみたが、三好は、それには答へようとしずに、何を思ひ出したのか急に、

「瀧さんの前だが、一體お前さんの妹つてやつは……」

と、頻りと唇を舐めずり廻しながら、どうもちつと生意氣すぎるぜ。あんな女をまた、どこがよくつて……」

「およしなさいよ、先生、もうおよしなさいつたら……。よく解つてますよ。ねえ、もうそろ／＼出かけようぢアありませんか。あッしが、お宅までお送りしませう――」

「まアいゝさ、……それになんだらう、美津ちゃん、君はお腹がすいたらう？ 御當家御自慢の鯛茶でも食べたらどうだい」

「いゝえ、もうあたしお腹はいっぱいです」

「さよですか、ぢアお茶を差しあげませうか――」

と、女房は、婉曲に、そろ／＼歸るべき時

「それで、なんかあツしの話が出たかい？」  
「いゝえ、なんにも知らずにいらしたらしいわ」

「そんなわけアないよ。現に俺が……えゝと、なんだッけ、……さうだ！ 非常なシャンがあるつて、君のことを話したいんだもの」

「あらいいだ！ あなただつて、今夜初こいらしてくだすつたんぢアありませんか」

さう云ふ美津枝の顔つきは、何故かふツと噴飯しきうに、笑ひをこらへてゐた。

「でもさ、噂くらゐは聞いてゐたよ……ねえ、おい瀧さん、ちつと呆れるね」

「どうもね、心掛が違ひますね」

「その心事たるや、むしろ憐むべきものがあるぢアないか」

「えゝ……」

と、曖昧には云つたが、瀧十郎も、心のうちでは、なんとなく面白くなかつた。口止めこそしなかつたけれど、三好にだけのつもりでした話、

忽ち信之に傳はり、その信之は、早速もう出かけてゐるとは……

「それで、一人ツきり？」

「えゝ、まるでもうぐでんぐで、俣から轉げ落ちるやうにはいつていらしつて、俣夫を相手

に飲むんだなんて……」

「へえ、そいから？」

「その上にまたウキスキを四五杯もめしあがつて、あぶなくつて見てゐられないほど、ひよるひよろしながらお歸なすつたんです」

「どうしてまた、君は、そんな初での客の、名前まで知つたんだい」

美津枝は、鍋の上から、九三の女房の方をちらと見て、出合頭に視線ががち合ふと、すぐあらぬ方へ逃して、そのまゝ黙つて了つた。

ねえ、君、どうして名前が分つたんだよ」

瀧十郎は、執拗く訊いた。

「あのね、藤代さんは、うちにあなた方がお見えになるなんてことは、まるで御存知なしにいらしたんですよ。前から御存知だつたとして

も、そことは思はずにはいつていらしたの、全く偶然だつたの。あたしの名前を申しあげてから、やつとなんか思ひ出したやうな御容子で

したわ、それアほんとですよ」

顧みて他を云ふ、と云ふやつで、美津枝は、狡猾らしく、けれども一生懸命に、それを云ひ張つた。

十

「そんな筈はない」

と、瀧十郎はてんでうけつけようとしせずに、ニヤリ／＼笑ひながら、美津枝の顔を窺き込んで、

「あの人はね、……まアよしとかう

「何故よすの、云ひかけたことなら仰有いな」

「ちよつと色魔つてところがあるんだよ」

ものをとつて投げつけるやうな調子で、三好が云ひ放つと、九三の女房は、目を丸くして、

「あら、さうですか……」

「冗談いつちやアいけねえ」

けれども亭主は、落つき拂つて客席の方へ向き直ると、威儀を正す、と云ふほどではなくとも、やゝきつぱりして、「三好さん、あなたそんなこと云ふもんぢアありませんよ。謂はばあなたは、あちらへ出入する人ぢアありませんか。

ちつとでも御恩になつてる人のことを、藤であなた、色魔だなんて……紀尾井町さんがこゝへいらしつてたつて、あなた方の話でも出た場合、これンばかりでも藤口なんぞ仰有つたためしはありアしませんぜ。いつだつて、……な

ア阿母ア、……而と向つちアどうだか知らないけれど、それア藤ぢアなんとかかんとか褒めて

ばかりいらつしやらアなア」

えゝ、それアほんとですよ。正直な話、あた

いまし」

と、おもてへ顔を向け、少し調子を張つて聲をかけた。

「女將さん、御馳走さんでした。またお伺ひします」

振り返つて、暖簾をかゝげた隙から眼だけ出して、美津枝も笑顔よく挨拶を返した。その肩へ、うしろからぐつと手がかゝると、三好が、なんのゆりもなく引きよせて、

「漣を送つてつて、もしどこかに寄つてつたら、構アねえから、知らん顔をして一緒に待つてみる！」

耳のはたで、早口にさう囁いてから、すぐについとそばを離れて、一つ二つ、四つ五つ、十二三、ばらりと星の数を散らした、寒いほど静り返つた空を振り仰ぐと、「あゝあ、また明日も日があたるのかい。馬鹿にしてやアがら」

そこへ、漣十郎も勘定をすまして、愛想のいい同士で、いろいろ穴口まじりに女房と挨拶を交しながら、ぶらりとおもてへ出て来た。

「おい、漣さん、ぢア俺アこゝで失敬するよ。いづれまた二三日うちに……」

「さうですか。それでは……、美津枝さんはあたしが送つて行きますせう」

「いゝえ、先にお宅へお送りした方が道順ですわ、どうせ自動車屋さんには、うちのすぐ近所なんですから……」

「まあ、兎に角乗りませうよ」

三好は、存外まだ足もとも慥で、——とは云つても、ずるりく下駄を引摺りながら、俥の待つてゐるところへ来て、

「牛込横寺町……」

その云ひ方の通りの没やいな身の動作で、ぐたりと車上の人となると、「萩原氏、よき吉左有を……」

送つて出てゐた丸三の三吉が、ぬからず、

「ちよん！」

と、口で柝を入れた。

「相待ち居るぞよ……」

### 十三

ついその調子に引き込まれて、俥天までなんとなく景氣よく柝をあげると、護謄輪の、音のないうの足らなかつたか、人通りも稀な夜更の街に、カラ、ランと、つ鈴を響かして、

荒木横町の方へ向いて引きだした。

「ぢア旦那、御免ください」

「さやうなら」

「どうも失禮、おやすみ！」

口々に呼びかけるのに、三好は幌のなから、たゞ一言ぶつきら棒に「さよなら」と答へたきり、すぐ遠ざかつて行つた。

「さア、それぢアお乗なさい」

「まあどうぞ……」

「まあ……」

ちよつと譲り合つてから、美津枝がまづ乗り、漣十郎も押し並んで席についた。扉を閉める前に、助手が顔を出して、

「どちらへ？」

「赤坂の丹後町……」

と、すばやく答へたのは美津枝だった。

「いえまあ、あなたの方を先にしませうよ」

「いゝえ、それはいくら晩くなつたつて、ちつとも構アしませんから……」

「さうですか、なんだかそれぢアお氣の毒だけれど……」

それから助手へ、「ぢアヤね、兎も角赤坂の方を先にしてくださいな」

「へ」

すぐ自動車は動きだした。そとでお囃儀をしてゐる丸三の親爺に「お前子ごしに顔返すと、漣十郎は席のやうに見せて、窓掛を引おろ



を暗示して、女客の前にだけ湯呑の茶を勧めた。

「だけど、考へてみると……」

三好は、いつかもう九三に對する反感を忘れかけて、ものを考へるあたまでの習慣が、そろそろと順調に廻りだしたのに、ひとり上機嫌な微笑さへ浮かべて、「トウダイ、藤代」つて人は、實際わけの解らない人だね。大した鋭さをもつてるかと思ふと、からきしだらしがなかったり、馬鹿かと思つてると、なんでも解つてたり……

「要するに、然し、一筋縄ぢアいかない方ですね」

「ところがさ、たゞの一過で、小僧ツ子の不良少年に騙されちまつたり、レイコウ（鈴江）だつて……」

「先生！ 後生だから、あいつの話だけは堪忍してくださいな。さうして、もう……」

と、右の袖口をちよいとまくりあげ、腕時計を見て、「もう十五分で二時ですよ。そろそろ帰るとしようぢアありませんか」

「ぢアわたしは、こゝで失禮いたしますから……」

と、美津枝は、瀧十郎と三好と兩方へ軽く頭

をさげてから、女房へ、「あの、俵をさう云つて貰へませんかしら」

「へえ、どちらまで？」

亭主が、景氣よく引きとつて、「すぐその鹽町の角に、新宿歸りを待つてゐるのが、かれこれ夜どほしぬまさア」

「ぢア、すみませんが、銀座まで一臺……」

「いゝ、ぢアありませんか、あツしがぐるツと送つて廻りませうよ。これから牛込へ出て、それから銀座を廻つて、最後にあツしが歸ると……」

「かれこれ三時になるね」

と、三好が嘲るやうに笑ひながら、「いやもう、御殊勝なお心がけです。だが、俺アいゝよ。これから士官學校の裏を山伏町の方へぬけて

けば、なに、歩いたつて知れたもんだ

## 十二

「ぢア、もう一臺お俵をさう申しませうか」

女房は、兎も角一刻も早く歸つて貰ひたい氣持を押しかくして、三好の方へ、機嫌をとるやうな言葉をかけたが、瀧十郎が遮つて、

「いゝよゝゝ、自動車でぐるツと廻りやなんでもないんだ。それより、ちよつとお會計を願ひたいな」

「へえ、いえまた、いつでもお序に頂きます

から……」

まアさう云はないで、御面會でも、ちよつと何してみてくださいな

そこへ、いち早くも亭主は、俵を云ひつけて歸つて來た。

「へえ、たゞ今すぐに参りますから」

「さう、どうもありがたう」

と、美津枝は腰を浮かして、それでは、わたくしお先に御免かうりますます。どうも失禮いたしました

「まア待ち給へな」

三好も立つて、どちらへも出やうのない美津枝を導くやうに、自分から先に暖簾のてとへ出て行きながら、「俵は僕が乗つて歸るから、君は丹後町へ送つてつて、それから、うちへ歸りやア、丁度道順ぢやないか。さうし給いな」

「でも、それぢアあなたが一人になつちやつて、お淋しいでせう」

續いて美津枝も暖簾をくぐつて出ると、偶然のやうに、二人はそこで、鼻と鼻と突き合せんばかりに向ひ合つて立つた。空に記憶えてゐる出た料理の數を、低聲によみあげて、亭主に算盤を弾かせてゐた女房は、その合間に、

「どうも有難うございました。ぢア御免くださ

もし否との答だつたら、すぐ冗談に紛らして了へるやうに、弱々しい、卑怯な微笑を、酒氣のために却つて蒼白く、粉がふいたやうな頬に浮かべながら、瀧十郎は、一本々々組合せた指の股に力を罩めて締めつけた。けれども、美津枝の表情には、紙裂然で撫でたほどの變化も起らなかった。

「ねえ、どうかへ行かうよ」

「どこへ……？」

「どうか……」

「今時分からどこへ行つたつて、起きてるうちにんてありやしませんわ」

初て顔を振りむけて、優しく着なめるやうに微笑んだ。女を大さづばに、母型と姉妹型に分けるなら、それは母型の笑ひ方だつた。もし言ひ得べくんば「姉妹」の笑ひと云へば、更に適切だつた。……瀧十郎には、少年の日の、懇心ともつかない憧憬の氣持が、懐しいほのかな匂となつて、胸を搔るやうに感じられた。

「ぢアね、もし起きてるうちがあつたら、よるかい」

「一體どこへ行くおつもりなの？」

「それは訊かないで、きつと二人で一緒によつて約束してくれないかねえ」

「今時分から、どこへよつたつて仕様がないうアないの」

「ぢア……、ぢアいつそ泊るさ」

「あら、二人ツきりで……？」

「いけないかい？」

「二人ツきりぢア……」

「ぢア、三好君も引つ張つて來れアよかつたね」

「ええ、二人ツきりでなけれア、一晚ぢう話し明したつていゝけど……」

# 十五

もう一息押しさへすれば、可厭と云はないだらうことは、度々の經驗で、瀧十郎にはよく解つてゐたが、

「それぢアかうしよう、運を天に任せることにしよう。一軒だけ、——たつた一軒だけ叩いてみて、すぐ起きたらよるし、ちよつと起きて來さうもなかつたら、すぐ歸ると……。どうだい、そんならいゝだらう？」

執拗な感じを避けるために、故意とかう、ふうはりを持ちかけた。

「……ええ、……でも」

目の色を沈めて、考へ深さうに何か云ひかけるのに被せて、

「ミア、もうそれにきめた！」

ぶふなり、美津枝の側の窓硝子を通しておもてを見ると、いつかもう赤阪離宮の通用門の前を紀國坂へかゝるとこゝろだつた。そのまゝ、黙つてゐれば、右に折れて東門の前の警察署の方へ出て行くのが順だつた。腰を浮かして運轉子の席との隔ての硝子を叩きながら、

「君！ 溜池の方へ曲つてくれ給へ、さうして、田町の通りにはいるんだ。あの、東海銀行の通り……」

「一體どこへつれてくつもりなの？」

今更になつてそれを尋ねると云ふことは、むしろ、夙からもう行先が知れてゐた、と云ふ氣持の裏書にほかならなかつた。それがよく解つてゐるだけに、瀧十郎は、さも興ありげに微笑つて、

「まアいゝよ、黙つて、大人しくしておいでよ」

「だつて……。あのね、もし起きたらどうするの？」

「起きたらあがるのさ」

「あがつてどうするの？」

「あがつて？ まア一林やるのさ」

「あなた、まだ召やがりたいの？ ……今時分からお酒を飲ませるうちなんてあるもんでせう

して了つた。

「この事は、なかで燈をつけたり消したり出来るやうな仕掛になつてないのかな」

考へやう一つで、ひどい露骨なことに、またなんの他意もないことのやうにも釋れさうな言葉で、すまして、そこへぽんと擲り出して、瀧十郎は、灰おとしのあたりに、スキツチの鉤を探した。

「さうですね」

美津枝も、すまして、自分の側を撫廻してみた。「とてもそんなハイカラなぢやないでせう」

「かう明るくつちアつまないね」

云ひながら、二重廻しの袖をつい身動きの拍子でかゝつたと云ふ風に、ふはり和美津枝の膝の上をかけ、すぐその下で、手を索つた。長い襟巻を下から捲きあげて、暖手筒のやうにしたなかに、女の手はあたゝかく組み合はれてゐた。その、筒になつたなかまで、右の手を差し入れて、相手の左を把ると、引きよせて、兩の掌のうちに、ぎゆうツと握りしめた。どぎまぎもしずに、美津枝は、

「あら、手袋をはめていらつしやるの？」  
遠くもない道中の氣忙しさから、瀧十郎は、

ついそれをぬぐことを忘れてゐたのだが、先方の手を把つて了つてから、（はッ、しまつた！）と思つてゐた矢先だつた。

「ごめん／＼、いまとるから、ちよつと待つてね」

逃がさない用心に、膝と手の甲との間に、しつかり抑へつけて置いて、急いで兩方の鉤をはずし、交互に、セム革のぬくみのなから指をぬきだした。けれども、その間も、女の手は、ぐたりと重たく膝に載つてゐて、少しでも引つこませさうな氣勢は感じられなかつた。

「さ、これでいゝだらう」

左で、手袋を外套の衣囊に押し込みながら、今度はぢかに掌と掌とを合せて、靜にじりじりと力を罩めた。さうしながら、横目で、女の表情を讀まうとした。

#### 十四

美津枝は、  
「布哇女にありさうな長く引いた眉を、靜に、烏睛がちな、ぼつちりとした目の上に休ませ、強ひてとりすましたやうな、口尻の力をもゆるめて、たゞなんとなく眞正面を見詰めてゐた。驚駭、とぶやうなもの、それもとよりどこにも見られなかつた。喜悅、そのほんの漣すらも肩のあたりに漂つてはゐ

なかつた。悲哀や憤怒でなく、さればとぶつて、恍惚でもなかつた。口邊のたるみには、ちよつとそれに見紛ふものがないではなかつたが、それににしては、瞳の冷たさ、眉の落つきを、なんと解くべきやうもなかつた。胸底の煩悩をガツと押ししらへてゐるにしては、胡桃をも噛み碎きさうな、意思そのものを見るやうな、鯛の鰓ほどこに角ばつた顎の、その力はいらなさをなんと見るべきだらう。――無關心、まづはそこらが一番公平な觀察らしかつたが、同じ無關心にしても、この場合には、バでんと體を投げ出して置く質のものか、さもうるさげに顔をそむけて了ふ側のものか、そこらの隱微な氣持までは、有聲の瀧十郎にも、しかとは見極めかねた。が、なんと云つても、素人、――半處女、と云つた概念は、どこまでも彼のあたまから去らなかつた。その氣持で、ぞろツペいに押してよければ、勿論恍惚と認められないことはなかつたし、少くも、腿の上に感じられた手類の重さで、身體全體が、もういゝ加減だらしく投げかけられてゐるやうに釋るくらゐは、當然、當然、大手を振つて通れるほどの當然さと考へられた……。

「これか二人でどうかへ行かうか」

つたが、二人の間の氣持が、もう大ぶん磨りかけてゐた矢先なので、そんなこともちよつとした刺戟だつた。二人共同でやつてゐるとは云ふでう、僅か二つ違ひの二十三で、兄には、店の用事で大して手傳つて貰へるやうなこともなかつたし、從つて總ての實權も彼の女のものだつたから、身を持つる上についても、美津枝に對して、兎や角云ふやうな人は一人もなく、しよつとさへ思へば、どんなことでも出来る、その自由さにも、飽きが來かけてゐたところなので、何かひやひやするやうな戀の戯れに、一層心を惹かれたわけだつた。そのうへ男と云ひ、口前と云ひ、切離れと云ひ、裏通りの小さなカフェエの客としては、それこそ、塵芥箱に鶴と云つてもいいほどの瀧十郎に對して、美津枝の方でも、少からず興味を感じかけてゐたし……。

九三での別れぎはに、誘はれたらどこへでもついて行け、とまで云はれたが、さうなると、あまりのことに、三好の氣持が解らなくなり、薄氣味わるくさへ感じられるのだつたが、ヒヨツとすると、騙されてゐるのは、瀧十郎ではなくて、自分かも知れない。——二人なれ合ひの上かも知れない、とも考へられぬことはなかつた。然し、ずる／＼とこゝまで來て了つてみれば、

ば、(そんならそれだつても構やアしない、騙しにかゝつてゐることを承知の上で、知らん顔をして騙されてゐるのは、騙してに對する一番皮肉な返報かも知れない。なに、そんならあとで黒圖々々云はれる尻もなし……)ふと、そんな氣持にもなつたりした。

十七

さうは云つても、美津枝の瀧十郎に對する氣持は、今のところ決して戀らしいものではなくつた。ほんのちよつとしたいたづら心をほかにしては、別段に愛情を感じてゐるわけでもなく、惡意こそなければ、却つて、少しは輕蔑してゐるやうなところすらあつた。それは、然し彼の女に澤山な戀の經驗があつたからと云ふ意味ではなくて、むしろ生來のしつかりした性分と、祖母の癖から來てゐた。

一體この兄妹が生れた柳澤家は、徳川直系の士分で、相應の家柄だつたのが、獨維新後に、お定りの士族の商法で微祿して了つた上に、先代は三十臺で夭折し、病弱な若い未亡人と二人の子供は、氣丈な祖母の丹精で、どうやらかうやら、窮乏のうちにもさう賤しい思ひや、飢い日もみずにやつゝ來たのだが、兄妹が小学校へ通つてゐる時分に母親が亡なり、あけて

一昨々年の春は、また杖とも柱とも頼んだ祖母が、七十幾歳であの夜へ旅だつて了つた。その時、狭い貸屋の奥の六疊間で、祖母は、靜々と、人生の行路の難いことを誡め、獨立獨行、一念の方の強さを説き聞かせたあとで、古い手文庫を持つて來させて、明治三十八年以來一錢の出入もなく、利子さへもつけ込んでない三千元がちよつと切れる額の預金帳を、その底から取り出した。そして云ふには、この金があると思へば、心がゆるんで、女の手ひとつで、この永の年月を、病人と子供二人を擁へて、所詮しので來られるわけのものではない。夙の昔に元も子もなくした上に、恐らくは今よりも一層ひどい生活に落ちてゐたらう。自分は、それを預金した銀行が破産して了つたものと思つた、——信じた。初のうちは、どうしても信じられなかつたことが、仕舞には、さうとより思へなくなつて了つたくらゐだ。然し、今は、——死んで行く前には、もう一度それを思ひ出さなければならぬ。やり遂げようと思ふ一心さへあれば、自分のやうななんにも知らない女の瘦腕一本でも、病人と子供を二人も擁へて、どうやら口を糊することも出来るのだ。ましてお前たちは、不足ながらも今日まで學問もさせ



か」

「あるともさ……」

「それから？ お酒を召あがつたらどうなさるの？」

「さあ、どうしよう」

「あら可厭だ！ その先はまだどうなるか解らないんですか？」

ほとんど、憐むやうな眼差だつた。それで急に瀧十郎は（こん畜生！）と云ふやうな氣持にされて、

「その先かい？ その先は、二人でねるのさ」

ギラリと大刀でも引きぬいたやうな氣持の言葉で、今度こそは、あれえ！ と云つた風な表情で受けとるだらうと思はれたのに、美津枝は、落つき拂つて、につこりした。

「それから？」

有繫の瀧十郎も、ちよつとのま嚙にされて了つた。かう云ふ態度が、半處女の名に適はしかどうかは、今はもう思考の外になつてゐたが、兎にも角にも彼には、驚くばかり目新しいものだつた。従つて、どう受けてよいものかあてもつかず、さつそくの頓智さへ引つ込んで了つた。

「君は……、君つて人は、一體どう云ふんです。

一體、君は……」

「何を云つていらつしやるのよウ

美津枝は、ぶつと噴飯して、肚の底から可笑しさうに笑ひ崩れた。

鳴戸の横町まで来た時に、自動車停めさして、すばやく瀧十郎は跳びおり、なかば駈けるやうに左の方へ切れ込んで行つた。

### 十六

ひとり自動車のなかに取り残された美津枝の氣持は、へんに白ツちやけた、馬鹿々々しいやうなものだつた。三好とは、去年の秋からの仲だつた。先方が、さう大して惚れ込んで來てゐるわけでないことも承知なら、自分の方でもただ可厭ではない、と云ふくらゐの氣持のまゝで、ついヒョツとした機會に出來て了つたのだが、逢ふ日の樂みを、それほどとも思はないのに、一度は一度より、ちよつとのことでは別れ憎いやうな、不思議な粘着に絡まれて行つた。それは、思ひ出して、決して快いものではなかつたけれど、然し魅力の強さは、不意にぶるゝと身顛ひされるほどだつた。そんな間にも、男から二十圓、三十圓くらゐづつ小遣ひをねだられてゐた。考へてみるまでもなく馬鹿らしくつてならないばかりか、度ごとにおいそれと云ふ

目を出してやつてゐたひには、いよくもつて甘がられ、増長されるは知れきつた話だつたけれども、それがどう云ふものか、いつもきつぱりと斷りかかれた。それに金銭上の關係が生じてみると、かきにかゝるやうで強いことも云ひ憎く、さればとて弱く出れば注ぎ込んだものに未練でも残すやうに釋られさうで、氣持の上のぎごちなさが、一どきに加はつて來た。結局、差向ひの態度としては、だん／＼弱味に立ち、氣持としては反動的に傾き、而も情慾の執着は深まらつて行つた。

さう云ふ時に、三好が、惡戲な計謀を持つて來た。近頃つゞけて五六度お前のところへ飲みに行く市川瀧十郎と云ふ役者が、お前の素人らしいところに興味をもつて、成るものならなんとかしたい野心を、人もあらうに俺に向つてうちあけた。俺は縁もゆかりもない、初對面のつもりにして置いて、このいつ幾日に二人つれだつて行くから、その時には、お前ばかりでなく、使つてゐる女たちにも豫め云ひ含めて置いて、どこまでも白を切り通してゐる。俺がたねをあかすまでは、どんなきはい、ところまでも知らん顔をしていつて行かなくつちアいない、——かう云ふ話だつた。馬鹿々々しくもあ

を、口のなかで、一から十までの数をよむことにした。

(一、二、三、四、五、六、七……)

そこへ、フェルト裏の草履の音が、凍た往來の上にはバタ／＼と馳けよつて来た。——何よりもまづ助かつたと云ふ氣持だつた。嬉しかつた。思はず、うちから扉の把手に手をかけたが、その時には、もう、いち早くも助手が跳んで降りて、そこから扉をあけてゐた。

「起きたよ、降り給い！」

瀧十郎は、子供の無邪氣さで、殆ど踊りあがらんばかりに勇みたつてゐた。待ちに待つてゐた美津枝は、ひとたまりもなく、その氣持に引き込まれて了つた。

「さう……」

と云つた時には、もう我知らず座席から腰を浮かしてゐた。きまりのついた嬉しさに、それよりほかのことは何もかも忘れ果てゝゐた。

「さ、早く降りないか」

恰も瀧十郎が、そんな命令的な言葉を使ふだけの資格をもつた人のやうな氣持で、

「はい」

と、素直に答へながら、自動車を降り、早くも拂ひを済まして了つた男のあとについて、暗

い横町へ、なんの不安もなしに、いそ／＼とはいつて行つた。

## 飛 礫

### 一

お澄のもとで一夜をあかした翌日の午ごろ、もう一度、ごく少量のチコレト色をした腫いものを、そつと便所で吐いて來たが、い按配にそれきりでをさまつて了つた信之は、この最初の吐血について、誰にも一言も洩らさなかつた。たゞ連日の飲みすぎのために、大づん腸胃を害れてゐるやうだからと稱して、以來は、うちでもそとでも、酒と不消化物を自分から遠慮してゐた。歸つてすぐの四五日は、どこがどうと云ふほどでもなかつたけれど、打ちのめされたやうに體ぢうが痛だるくて、愈にも得にも起きてゐれなかつたので、薄い粥くらゐを啜つてごろ／＼してゐた。それでも、細君の朋子がいくらやかましく云つて勤めても、醫者に診せることだけは、堅くとして聴かなかつた。一つはその警告のうるささと、もう一つには、枕もとに子供たちを呼んで、いろ／＼相手になつて、無邪氣に、楽しく時を消さうとはして

ゐたけれど、なんとゞつても想ひが、「死のそばへじり／＼と沈んで行き、暗く淋しい氣持にされて了ふ機會が多かつたので、五日日の午後、辯護士としての資格で、是非會はなければならぬ來客があつたのを機に床を離れて了つた。さうして、一時なりとも業務に没頭したり、例の文學者連中と一緒に、自分だけは酒を固辭してゐたけれども、あちらこちらと遊び廻つてゐる方が、忘れるともなく氣持に紛れがあつて、床に就いてゐるよりはよほど樂だつた。たゞその行くさき／＼の會ふ人ごとに、顔色が悪い、どうかしたのではないか、などと訊かれるのがきまりで、これには有藝に氣を腐らされてゐた。

ひとりで旅行に出よう、——ふとさう思ひ立つた。はつきりした豫定はつくらずに出かけてみて、氣分次第で、一つところに永く落つくなり、また、その元氣があつたら、先から先へと、知らぬ上地を見て歩くのも面白い、兎に角出かけよう、考へてみなければならぬことも、そのいろ／＼と變つた氣持の間では却つて變通自在に、——一方へ偏らずに、考へ諦めることが出来るかも知れない。愛する者たちのそばから離れて、ひとり前にものを案じて置かなければ

て貰つて来たのだ。自分にさへ出来たことが、お前たち二人よつて出来ない筈はないではないか。若いものが二人かゝつて、こんな死に損ひの婆さんに負けたとあつては、神佛の前にも合す顔がなからう。一目だけは見せて置くが、この通帳のことは、自分が忘れてゐたやうに、お前たちにも忘れて貰はなければならぬ。二人力を併せて、互に誠め合ひ、勵まし合ひ、慰め合つて、ひとをたよらず、自分たちの手足を勞して食ひ、なほ餘りがあつたら學問もして、一かどの人間になつてくれ。この言葉こそは、當家に傳はる一番大切な遺産と心得てくれ。——これが、氣丈な祖母の、最後の言葉だつた。

その後の美津枝は、ちよつとの間耶奉公もして見たが、とてもそれでは、兄を食はせるだけにも足りないで、女給が割がいゝと聞いて、或る大きなカフェエに、つい昨年の二月まで勤めてゐたのだが、兄との相談の上、いかに忘れようとしても忘れられない預金を賭して、一かばちかの運だめしに、僅な経験なり資金ながら、ひとつカフェエを初めてみようではないかと云ふことになつたのだ。そしてこの無謀に近い企てが、今日までのところでは、存外とんく

拍子に行つて、現金でこそ、殆ど無一文になつて了つたけれども、純益を利廻りとして考へてみれば、三倍近くにもあたるし、権利や品物に形を變へた財産を見積つても、少しでも元をへらしてゐる勘定にはならなかつた。

## 十八

年ぢう雇婆よりもつとみじめな装をして、鞆あかざれや汗みづくに暮しながら、きち／＼一杯に、ゆくかゆかずの境涯を脱しかねてゐた祖母の無能を、嘲み笑ひたいやうな氣持が、美津枝の心に巢を喰ひだしたのも、一つはそれがためだつた。年齢の相違にも、世の様の變遷にも、一切目をつぶるとすれば、いかさま祖母が遺して逝つた挑戦に對して、可なりの優越感にもふくれあがりさうなことだつた。いゝ方面から先に云へば、その自信で彼の女の生活は一層さへ／＼と活氣づきはしたが、同時に、その自惚によつて世を甘くみる習癖に馴れ親しんだ事實も否み難かつた。短い耶奉公の間に、その道樂息子によつて、彼の女の處女は既に失はれてゐたけれど、その後ひとつつ間違つて、これが商賣の方でも調子よくいかなかつたならば、却つて生來のきかん氣から、ちよつとまた死んだ祖母にも劣らないほどの、瞬時も轉退の

ない緊張に導かれて行つたかも知れないのだが、幸か不幸かとんく拍子に店の客足かつて行つたばかりに、(なアに、少し一生懸命にやりさへすれア……)と云つた風な要するに世路の難きを安く踏みすぎた、だらけ切つた心の状態に陥ち込んで了つたのだ。女の心に、さう云ふ隙を見つけることにかけては、惡魔ですら男の敵ではない、「一好が、さうぶ男の、丁度三人目に位置したわけだつた。従つて流し郎は、四人目の候補者だつた。

……停止した自動車の薄暗い豆電氣のもとに、ひとり淋しくひとを待つ氣持には、短い時間でも永く感じられた。そこへもつて來て、流し郎の戻りは實際にもなか／＼おそかつた。自分のことよりも、運轉手や助手に對する氣遣で、一秒づつに、わく／＼と胸さきへ苦しさが來た。鎖された表の戸を叩いて、すぐ起きたか、いまだに起きないのか、そんなことはもう問題ではなくなつて、どつちでもいゝから、一刻も早く流し郎に歸つて來て貰ひたかつた。助手を頼んで見せにやつて、もしそこらに姿が見えなかつたら、それであとの申渡はたつわけだから、附はず先に歸つて了はうか、それもあんまり悪いかしら、などと思ひ迷つて、どつちかにきめる間



しは、それならそれでいゝと思ふんです。いゝ悪いは兎も角も、どうにも仕方がなからうぢアありませんか。所謂、長いものには捲かれろ、ですよ。それアあなたにはあなたの、また立派なお考へもおありでせうけれど、世間の信用をなくしたのが最後、人間どうぢたばたしてみたところで、もう誰も相手にはしてくれませんか。これだけは、まア永い間の経験で、この老人が云ふんだからと思つて、ひとつ心にとめて聴いて置いてくださいませんか。世間態だけのことでいゝんですから、信用を失はないやうになさいな。あたしは基督教信者だけれど、何人も人様のなさる道樂にまで、とやかうと口出しをするほどの没分曉漢ぢアないつもりです。ですから、あなたの女遊びが、少々烈しすぎようかどうかと、そんなことはあたしの知つたことぢアありません。たゞ、あいつはどうも道樂者で……と頭から一口にひびき返されて了ふやうなことになる、ちとあとが面倒ぢアなからうか、とそれをお案じ申すだけのことです。どうぞ、その點はよく御諒解ねがつて置きます……」

## 三

平凡な、然しそれだけに動かし難い眞實な話を

るこの老婦議上の前に、信之は、少しもわだかまりのない心で感謝の意を述べた。「あなたにはあなたの、立派なお考へもあらう」と、老人らしい皮肉などは少しも含めない、心からの信用を表されてみると、氣恥しくて、なほ更なるとも云へないことになつて了つた。桑木と自分との、世間と云ふものに對する心の据ゑ方の違ひ、——それははつきり解つてゐた。正直に、自分で云つてゐる通り、「長いものに捲かれようとしてゐるのと、長からうが短からうが、てんでさう云ふものに拘泥ふことからして、察しとしないのでは、既に根本で別世界同士の對話だつた。その點にかけると、信之も、いつ何時でも、飛礫のもとにうち倒されて悔いだけの覺悟はもつてゐた。さう云ふ意味で、五六年前に、或る文學者が、幾度も妻を取り變へたと云ふやうな非難で、烈しく世間から投げつけられた飛礫に對して、悠然と構へてゐた意氣を、蔭ながら大いに壯快としてゐたのだが、從つて、その末路が、悲惨なら悲惨なほど好ましいが……と念じてゐた甲斐もなく、飛礫が勝つたとも、彼の方が世を揺るほどの力で押し通したとも、どつちつかずのうやむやの間に、一時ちよつと人氣をおとしただけのこ

とで、彼の一生にも、世間にも、別段の變りは起らず仕舞に終つたのだ。——口うるさい偽善家の「世間」と云ふものを、今更めかしく嘲笑する氣は起らなかつたとしても、手にたつ敵すらない、と云ふ感じは、可なり淋しいものに違ひなかつた。

それほどに思つてゐても、然しはたから見れば、結局信之のやうな男は、十把一束に一世間知らずのお坊ちゃん一扱ひにされて了ふのだから、一生食ふに困らないだけの遺産が云はせる、誠にはやお日出度い寢言とより釋られつこないにきまつた考へなど、なまじつかに誰にも發表しないに越したことはない、とそれも承知しきつてはゐたけれど、桑木の親切に對して、説き伏せられたでもなければ、不賛成を稱へるでもなく、曖昧に葬り去るのは、いかにも相濟まないことと思はれもした。それにはまづ、父の努力に成る遺産に對して、彼がどう云ふ考へをもつてゐる者であるか、それを語ることが、一番早手廻しのやうに思はれたけれど、こればかりは、一生ひとに洩らしたくない氣持も、可なり堅かつた。

一年ほど前に、これも或る文學者が、少からぬ額の遺産を悉く放棄して、自ら勞し足る



ればならない時が来てゐる……。

こんな風に考へたけれども、出かけるまでに果して置かなければならない業務や、先約などのために、ずる／＼と日を暮すうちには、またそれから先の約束なども出来て来たりして、いつまでも旅だてなかつた。——それと云ふのが、彼の氣持のなかに、旅へ出なければならぬ、いと云ふ、やゝ義務的な感じが多くて、一日も早く飛んで行かうと云つた風な願望にはなつてゐなかつたからで、要するに、行きたいやうな、行きたくないやうな、中途半端の心持だつたのだ。自分でもそれに氣がつき、そのだらしのなき加減に我ながらくさ／＼したり、（な）に、大して行きたくもないのなら、無理に出かける必要はちつともありやアしないなどと、強ひても氣安く自由な考へをもたうとしたりしてゐた。

が、その心の奥の奥には、矢張り「死」に絡はる不安があつたのだ。旅のそらで、あかの他人に介抱されて、七轉八倒の苦しみも遠慮がちに、人を持つ氣持にじりつきながら、この世を觀じる意識の最後を悲しく侘しい色にのみ染めて、いやいや「屍骸」に變つて行くことを思ふと、うかとは東京を離れられない氣もするのだつた。

## 二

東京！

そこには、信之が心から愛してゐる人々が一番澤山ゐた……。

可なり屢々行くさき／＼のさま／＼な女と、忽ちのうちに、決して淺くはない關係を結ぶ信之を、慾にこそかゝらぬけれど、立派な色魔として考へてゐるやうな友達も多く、都新聞などの艶事記事にも、幾度となく引ツ張り出されて、花柳界では、少くも手におへない道樂者のやうに思はれがちだつたし、従つてさう云ふ噂を聞いてゐる人々からは、爪弾きと云ふほどではなくとも、一種の嘲蔑をもつて見られてゐた。現に、彼の同業者で、もう六十を越した基督教信者の桑木博士が、心からの親切に溢れて、彼に忠告したことがある。

「あたしは君が好きです……」

と、その、辯護士には不向とさへ云へさうに善良な老人が云つた。

「それに、さう申しちア失禮だが、別段の理由もなく、あたしは君を信用してゐます。あたしは永いあひだ世間と云ふものを觀て来たから云ふのですが、世間と云ふものには、何よりも信用が大切です。かう申すと何か自慢のやうです

が、あたしは、これでも行ひたゞしく正直にやつて来たつもりです。惡徳には一切近よらないと云ふのが、あたしの立て通して来た主義です。つまり、世間に云はせれば、ちと偏屈すぎた堅人なのでせうが、それでも、そのおかけには、この年齢になるまで、——御承知のさして學問とてもないあたしですが、どうやらからやが無事に世渡りをして来られましたからね。ただもう信用ひとつですよ。この先はどう云ふことになつて来るものか、あたしのやうな者には見當もつきませんが、然しまだ／＼世間と云ふものからは、當分道徳はすたりませんよ。どうして中々、世間と云ふやつは、かう見えて、口やかましい道徳家ですとも！ 勿論それア、所謂世間態と云ふやつで、君たちのやうな血氣盛な方々から見たら、くだらない虚偽でせう。いや、あたしにだつて、勿論それが偽善だつてことくらゐは解つてますよ。御同様、商賈柄で、人様の祕密や世間の裏の裏はしよつちう見聞してゐるのですから、世間からは一代の師表と仰がれ、御自分も大手を振つて威張つてゐなさるやうな方々にも、裏に廻つてみれば、随分いかがはしい行ひがあるものだ、なんてことは、實際いやになるほど知つてゐますよ。だが、あた

平凡な道樂者の辯護に、ぐうたらな一生を送つた、と誰からも思はれてゐないやうな、甚だよくない趣味があつた。その癖、もし人があつて、

「平凡な、道樂者の辯護士……、その通り、正にそれに違ひないぢやないか！ それとも、なんか、その實……、と云ふやうなものが、君の裏にひそんでゐるとも云ふのかね」

とか何とか、眞向から一本くらはせたとしたら、必ず彼は心底から腹を立てるに違ひないのだつた。何故かならば、彼は、自分の一生の仕事、決してさう安くは考へてゐなかつたから。

信之の一生の仕事……？

それは、云ふまでもなく、辯護士の職を指すわけではなかつた。

女に惚れることだつた。本気で惚れ、女にも本気で惚れさせることだつた……。

# 五

これをもう少し上品に云ふならば、眞心に、人生の一番高い位置を與へてゐる信之だつた。むしろ、最聖處に祭りあげてゐた、とでも云つたなら、一層適切かも知れないほど、それに對する隨喜渴仰の念は深かつた。

世間の口を憚らない彼の我儘が、あなたがち、一生食つて行けるだけの遺産にありついてゐると云ふだけの、安價な安心や順氣さから來てゐるものでないことを、一應なりとも領いて聽いて貰ふためには、結局は、その眞心に對する隨喜渴仰の念まで、濁つて語さなければならぬのだけれども、然し、そんなことは、氣取しくて、所詮信之には出來なかつた。その邊を漠然と語して置くことによつて、假令旁木から、彼が常にさう云ふ風に見られてゐる、世間知らずのお坊ちゃんとして、氣の毒さうな眼差でうち眺められるまでも、どうも他に仕様のない場合だつた。

で、心からしんみりと禮を述べたあとで、信之は、吃り／＼こんな風に自分を云ひ説かうとした。

「……かう申したら、みづから搦らざるの愚を嗤はれるかも知れませんし、若氣の至りと危まれもしませうけれど、早い話が、あたしは、世間と云ふものを、貴方の仰有るやうに、長い間の『だとは感じてゐません。いや、さう感じれば感じるほど、いづれつまらない疲弊感には違ひないんですけれど、いよくもつてそれに捲かれる氣がなくなるんです。さうかと云つて、

事ごとに一々横車を押さうと云ふやうな、反抗意識に燃えてゐるわけでは、勿論ありません。泣く子をだますくらゐの根氣まではあつても、地頭をやり込めるやうな卓見や勇猛心でもつてゐるわけではないんですから、大抵なことまでは、ひと一倍引込思案な方です。たゞ自分一人の問題なら、どこまでも自分流儀にやつて行きたいと思つてもゐますし、これまでの作かばかりの経験では、誰からもさう大した掣肘をうけずに來たつもりです。あたし一個の問題を、あたし流儀に處理して行つたために、近い周圍にいろ／＼心配をかけたり、世間の誤解——と云ふのが既に自惚かも知れませんけれど、とかく

の非難を蒙つた覺えもあります。そのうへ今後、この流儀で押し通して行つたら、いま貴方が御心配くださるやうに、仕舞には世間の信用をなくしてさうやうなことになるだらうと、それも覺悟はしてゐるつもりです。甚だ傲慢不遜な言葉ですが、然しさうなつて來れば、どうもなんとも仕様のないことですから、いつ何時でも御隨意にお見限りください、とでも云ひたいやうな氣持でゐます。もと／＼あたしは、今の世の中を決して有難がたり好いたりしてはゐないんですから、今日が日もの別れになつたつ

を知る生活にはいらうとしてゐることが新聞に發表されて、あらゆる階級の話題にのぼつた。信之は、同業の辯護士や、友達の文學者や、理髮店の親方や、妻君の朋子や、藝者、新聞や、いろ／＼さまざまの人の、それに對する批評を聞き、心持を察する機會を得たけれど、いつも彼自身は、閑役にばかり過つてゐた。百の思想も、一つの實行に、その力強さに於て及ばないばかりでなく、容易ならぬ決心のひそんでゐるこの問題を、いかに他人事とは云ひながら、然しさうかと云つて、同じ境遇のもとに置かれ、多少ともその同じ問題について考へてゐた彼として、決して批評や感慨がなかつたわけではない。それどころか、新聞にその報道を読んでから一週間ばかりと云ふもの、一種落つかないやうな氣持で、ともすればそこへ切れ込んで行く考へを、我ながらどうすることも出来なかつたくらいで、兎も角も、彼のうけた感動は、なかなか浅くはなかつたのだ。

#### 四

が、結局信之には、その文學者の心持が解らなかつた。——遺産に就いて考へるならば、當然その根源に溯つて、金錢と云ふものゝ、

人生に占めてゐる位置に就いても、さまざまに考察が繰返されたに違ひないと思はれるのに、それから注意してその文學者の書くものを見落さないやうにしてゐたけれど、少しでも現實に離れのしたことは、例へ考へても、文章には書かない人と見えて、現代を、その有り形のまゝに認めるリヤリストの立場は、決して踏みはづさなかつた。世間の批評では、いゝお道樂だの、詩人の空想だの、實社會とは没交渉な獨善主義だのと、兎かく高踏的な思想らしく扱つたものが多かつたけれど、信之は、それとは全く反對で、現代によつて金錢に與へられてゐる位置に、少しも彼自身の獨特の評價が現はれてゐない點が、——云ひ替へれば餘りに現實に即しすぎた點が、なんとなくもの足りなかつた。巨萬の富を捨て、裸一貫に返る、と云ふことに、だから少しの詩も感じられなかつた。不當にも或る場所に積まれてゐた金を、正當なる他の場所へ移す、と云ふ事務的な、平俗な感じで終始してゐた。溺れかけた教へ子を救はうとして、身もまた水底に沈んだ教師ほどにも、心持の上の飛躍が感じられなかつた。大地を踏みしめた、賞讃すべき足の重さが、信之としては、むしろ呪はしく思へたのだ。

そんな風に考へる信之が、けれども決して欲ばりでないことはなかつた。金錢に對する愛着は、普通世間人のそれに、優るとも劣らないほどだつた。それが遺産であらうと、自分の儲けた金であらうと、むぎ／＼とひとにくれてやるやうな氣には、どうしてもなれなかつた。さうかと云つて、人生に於ける金錢の位置は、人並よりも儘に幾分貳いところへ置いてゐる彼として、蓄財の念などは更になかつた。澤山の金を、自分自身の氣に入つたやうに、むぎ／＼と使ひ捨てたかつた、それだけに悦ばしてくれるものさへあれば、明日が日無一文にならうとも驚かないだけの氣組もあつたが、その代り、氣に入らなければ、總一文でも出し惜む、といふ根性だつた。この我が儘は、人のために盡さうとならば、全力をあげて自分自身のために盡すよりほかに道はない、と云ふ信念から來てゐた。かの文學者も、結局は自分自身のために、あゝ云ふ處置に出でたのだらうけれど、俺はまた俺で、俺の流儀で、自分自身のために、我が儘いづばいにやつてやらう、——まづ、そんな風な肚だつた。

けれども信之は、さう云ふ思ひ立つた心持で、故もなく他人の神經を脅かすことを嫌つた。



肩にかついだ。續いて、長男と女の子まで、わ  
ツと聲をあげて左右からぢやれかゝつた。

「なんだ、パパなんだ、ヤツつちやへー！」

長男は、勢こんで膝へ跳びあがると、もし  
やくしやな父の髪を掴んだが、丁度飼犬が  
主人の指を噛む時のやうな、優しい心遣ひは、  
その小さな掌の握力にも感じられた。

「なんだ、喧嘩か！ 喧嘩なら喧嘩で負けるも  
んか」

次男を背なかの方へ滑り落して置いて、前か  
らの二人を兩腕に擁へ込んだまゝ、二三度採み  
あつた揚句に、うしろから首ツ玉へしがみつ  
て来た次男の力とみせて、

「どっこい、負けたぞ」

と、仰ぬけざまにごろりとなつた。

七

すぐ三人の幼い者どもは、頭も胸もところ  
嫌はず、ぐんぐんと踏み躪り、葡ひあがつて来  
て、口々に罵り喚いたり、歡呼の叫びをあげ  
たりした。……急に信之は、可愛さのために涙  
ぐみさうになつて了つた。自然した細い針金で  
も、ちり／＼と胸さきへ採み込まれるやうな、  
一種痛酸つばい感じだつた。

「ようし！ こいつ等は、よくもパパを負かし

たな」

元氣よく云ひはしたものの、そのまゝ起き返  
りもしずに、彈力のある小さい身體を、ぢツと  
胸に抱きしめてゐた。ふと信之には、位置をか  
へて、彼自身が、さう云ふ親の愛に抱きすくめ  
られた幼時の記憶が蘇つて来た。

……七つ八つの頃、母親と箱根に避暑してゐ  
て、父は、暇のとれた土曜日から日曜にかけて出  
かけてでも来たものらしく、時折しか顔を見せ  
なかつたが、或る日、涼しい朝風に裾を震はせ  
てゐる蚊帳のなかで目をあく、と、廣縁の簾椅子  
に、思ひがけなく、ゆかたがけの父親を見つけた  
のだつた。信之は、跳びあがりたいたいほど嬉し  
かつた。と、同時に、深い簾々に霧の晴れて行  
く朝景色を見入つてゐる父が、自分の目を覺し  
たことに氣がついて、ひよいとこつちを見向い  
たらどうしよう、と、さうされるのが、一通り  
ならぬ取しさに感じられて、そのまゝ身動きも  
しずに、薄目をあいて、肩幅の廣い歳末の後姿  
を見詰めてゐるよりほかなかつた。そのくせ、  
一刻も早くこつちへ顔を向けて、

「おい坊主、もういゝ加減に目を覺まさない  
か」  
とかなんとか聲をかけてくれゝばいゝのに

と、それはかりが待たれるのだつたが、父はいつ  
までも悠々閑々とおもてを眺めてゐる……

(阿父さん！)

胸のなかで呼んでみた。

(阿父さん！)

そつと口のうちに咬いた。それが聞えるわけ  
はない筈なのに、瞬間に、ギギツと簾椅子が鳴  
ると、父の顔がひよいとこつちを見向いた。  
はつと氣がつくと、いつの間にか、薄目をつ  
かつてゐようと思つたことなど忘れてゐたもの  
とみえて、カチンと音がするほどに視線と視線  
とがぶつかつて了つた。——わが子にうしろか  
ら見詰められてゐたことを知つた表情は、父親  
ながらも、いくらかれたやうな、吃驚したやう  
なものだつたが、それはほんの瞬間で、すぐそ  
のあとには、ゴボ／＼と湧きこぼれるやうな愛  
情が、顔ぢう一杯に擴がつて来た、と思ふと、

眼のなかがちツとうるんでゐた……  
後には、大人がそんなことくらゐで泣く筈は  
ないから、ひよつとするとあれは、自分の眼に  
涙が一杯たまつて来たせゐで、そんな風に見え  
たのかも知れない、と思ひ直してみたこともあ  
つたが、どうもその時に、父も涙ぐんでゐたに  
違ひないやうな氣の方が強かつた。



ても、少しも未練は残さないつもりです」

「さ、そこでですよ」

と、桑木老人は、血色のいい頬を優しく笑みほころばせて、「貴方のお氣持が、さう云ふ風に、——さアなんてつたらいゝか、風流と云つても當らないし、——つまりア俗を脱していらつしやる點は、大へん面白い、……面白いと云つちアすみませんが、兎に角誠に美しい、結構なことだと思つてますよ。それはあたしのやうな俗人でも、よく解るつもりだし、あゝあ、お羨しいことだ、とさへ思ふこともありすがね、一方、饒つて考へてみると、あたしが生來の臆病者のせめか、どうもなんだか不安な氣がしてなりませんのですがね。ちとどうも、……露骨に云ひますよ、露骨に云へば、ちとどうも我儘がすぎやアしないか、とね、つまり老人らしく先が案じられるんですよ」

## 六

桑木の言葉は、親身の親のやうな慈愛にこそ満ち溢れてゐたが、要するに、自分でも云つてゐる通り、老婆心の範圍を出るものではなかつた。兩親に死なれて以來、久しくさう云ふ平凡な叱言にもありつかなかつた信之として、たゞその志だけとしても、しみ／＼嬉しかつたに

は違ひないのだけれど、さればとて、その説くところに従つて、一にも二にも世間の思はくを氣をかね、長いものに捲かれてゐようと云ふ氣になれるものでもなかつた。相變らず彼の生活は、世間の目から見て、放蕩無賴だつた。誰に憚らず、うちを外に遊び歩いてゐたのだが、有繋に、吐血後の心には、ひとり靜にものを考へ、諦める旅を思ひ立たせるやうな、しみ／＼とした眞面目な寂しさが來てゐた。そのくせ旅の間に、突然病勢が進んで、他人ばかりの介抱に死んで行くやうな有様が、ふとまた想像の眼前に浮かんて來たりすると、ひとたまりもなく、一寸のがれの、ぐうたらな氣持に返つて了ふのだつた。

そんな風で、不決定な氣持の目を重ねてゐるうちに、二月も末近くなつた。或る風だつた寒い晩に、珍らしくうちの食卓で晩めしをすました信之が、この日ごろの俗しい氣持も忘れて、まだ果物の皿もさげない八疊の茶の間で、七つ六つ五つになる子供たちを相手に、機嫌よく遊び戯れ始めた。子好きは、彼自身がやつと子供を脱するか脱しない時分からの持前だつたから、自分自身の子供たちを得て以來、いかに魂を失はれ、溺れひたつてゐるやうな女が

ある時でも、彼等の上へ全く忘れ果てると云ふためしはなかつた。その愛情が、無心な子供の方へ傳はつて行かない筈もなかつたが、その理由は兎も角、彼等も、年が年中うちをあげ放題にして飛び廻つてゐる不檢束な父親に對して、不思議に深い親しみをもつてゐた。

「さア、紀公かゝつてこい！」

食卓の前から一二尺膝行はなれて、偉か二合に足りない酒に、うちでやる時の常で、すぐもういゝ機嫌になりかゝつた信之が、大手を振げ、まづ長男の信紀に挑みかゝつた。

「よし！」

と、この四月から小學校へ通はうと云ふ長男の子が、元氣よく立ちあがりながらも、總領らしい内氣から、暫くは、はにかんだやうに笑ひ紛らして、遠捲きに、「ヨウ／＼」などとかけ聲ばかりしてゐた。

「どうした、弱蟲！　ちア、信次も一緒にやつて來い。序に文子も負かしてやらうか。手におへない亂暴者の次男が、さう聞かや否や、小犬のやうに跳びかゝつて來た。

「來たな」

父親の幸福に笑ひ輝いて、信之は、小さな體を抱ひ上げるやうにくるりと一／＼宙に廻して、

に抑へつけた信次の背なかに落したが、その瞬間に、朋子も、同じ心持で、目のやり場を變へたのを、ちらと視野のはづれに感じた。——子供を通して、いかにも夫婦らしい、落ついた愛情が流れ通つた。

## 九

そこに、十八になる、まだ子供々々した赤い頬の書生がはいつて来て、來客を告げた。

「西山？」

子供たちの體の間から差し出した首を、張子の虎のやうに振つてゐたが、「知らないなア。

どんな人だい、男か女かい」

「あのう、いつだつたか岡島さんと御一緒に見たことのある、混血兒のやうな……」

「あゝ、普烈か」

「おやだつて云つちまつたの？」

訊かれて書生の顔き返すのを見ると、朋子は、額に薄くハの字をよせて、「なんとか云つてお断りなつたらどう？ およしなさいましょ、

あんな不良少年なんぞとお交際なさるの。きつと仕舞にろくなことないと思ふわ」

「一人かい？」

信之も、一家團圓してひと宵を過ぎうと云ふ、至つて稀な機會からだけに、内々は断つて了ひ

たいやうな氣もしてゐただけれど、細君の云ひ方の、あまり指圖がましいのに、急にまた反撥的にされて、「ちア、書齋に通しておくれ。それから、序にストオブの火を見て置いてくれな

いか」

この頃の少年には珍らしくハキ／＼した返事を殘して、書生が立つて行つたあとに、すぐ子供たちが啖りだした。

「パパ、お客さん、僕たちの知つてない人？」

「お書齋に行つちアいけないの？」

「えゝ、いけませんとも！」

細君が、可怕的顔をしてみせて、「それにあなた方は、そろ／＼もう寝る時間ですよ」

「だつて、パパが行つちまつちアつまんないなア」

「僕だつてつまんないなア」

「べべちゃんだつて、ちゆまんないなア」

いつまでもベビー／＼と呼ばれつた末の子は、いまだに自ら「べべちゃん」と稱してゐたが、丁度幕あきに見る腰元か青侍のやうに、

三人が順おくり、「言つて口を利く可愛さに、

信之の尻は一層重くなりかゝつた。

「ほんとに、大丈夫なんですか？……あゝ云ふ人たちが、ちよく／＼、うちに出入つたりし

て……」

「なにがさ、大丈夫も大丈夫でないもありやアしないぢやないか」

「だつて、横濱の外人殺しの嫌疑で捕まつたこともあるくらゐで、警察でも始終目をつけてるやうな、名うての不良少年だつてぢやありませんか」

「誰からそんなこと聞いた？」

「誰だつてよござんすわ」

「また鈴江のやつが、大袈裟に喋くつたんだらう」

「ほんとにあなたの好奇も、いゝ加減にしときなさらないと、仕舞にやアとんでもない目におあひなさいますよ」

「あたしのことは、誰よりも一番餘計にあたしが考へてるんだ。丁度、お前自身のことは誰よりも一番餘計にお前が考へるやうなものだね。

それから、お前とあたしと、どつちが賢いかと云ふ問題になると……」

「えゝ、もう解りました。餘計なことを申しあげて、どうもすみませんでした」

「餘計なことぢアない。お前があたしに就いていろ／＼心配してくれるつてことは、決して餘計なことぢアないよ。それは當り前のことだ

それから父が立つて来て、自分を寢床のなかから抱き起してくれたのか、頬に接吻でもしてくれたのか、そのさきことはまるで憶えがないのだけれども、その日と日とを見合した二三秒間の氣持は、いつまでも忘れられなかつた。あれほどに、心と心とがべつたりくつ着いたやうな氣持で、父を懷しく嬉しく思つたことは、あとにもさきにもないと言つてよかつた。

## 八

尤もそれには、父の信策が年ぢう忙しからで、四十を越してから思ひがけなくも儲けた一人ツ子の信之に對してさへ、朝にも晩にも、三十分とはかまけてゐられないやうな平常の生活だつたから、謂はばそれだけ蓄積されてゐたやうな愛情が、偶然の機會で、而もそんな單純な形で現はされただけに、一生忘れられないほどの印象となつて残つたのには違ひないが、それはそれとして、三人の子供たちをひと抱へに胸の上に抱き乗せながら、三十年も前に箱根の宿で亡父の眼をうるませたのと、全く同じ氣持の涙が、いま自分の視界をも朦朧とさせてゐるのだと思ふと、信之はなんと云へない深い感慨に撃たれた。——その茫漠とした感慨を、無類にもなにか名づけるならば、不死永生、と

でも云つた風な氣持だつた。親の心、子の心、そのまた子の心と、同じ感情が脈をうつて行く。人類初まつて以來、親子々々と繋がつて來たものは、總てこればつん／＼と飛び離れて存在ではなくして、必ずや靈魂のどこかしら一部と一部とで貼りつき合つた、長い／＼、一例へば一卷の繪巻物のやうな關係だ。愛人や親友との間で、一言も費さずに、千萬無量の心が通ひ合ふ場合が、稀にはあるものだが、それを人の世の、横に貫く通路とするならば、終には親子の感情が、坦々たる往還を成してゐる。心の通路さへたどつて誤らないならば、古今東西、どこに行つても、懸け渡す橋もないやうな難は、決して一箇所でもあるべき筈はない。——こんな風に、はつきり感じたわけではないけれども、強ひて言葉にしてみれば、まづまづこんなことにでもなりさうな、臆げな、けれども生々しい實感が、信之の心に湧いて來ると、忽ちあたりが明るんだかと思はれるばかりの有難さで、もう一度新しい涙が、眼頭に滲み出して來た。

「さア、どうだ、降参か」

顔を見られまいために、子供たちの身體を、布團でも引ツ被るやうに、頭の上までずりあげ

て置いて、力いっぱい抱きしめた。  
「ウ、ウツ、苦しい／＼」  
「降参！ かにん／＼！」  
笑ひながらにも、みんな息／＼まりさうな聲をあげた。

「あんまり執拗／＼なさるのおよしなさいましよ。いつでも貴方は、仕舞にはそれで誰かしら泣かしてしまふんだから……」

久し振りの良人の機嫌を、楽しさうな微笑を浮かべて眺めやつてゐた朋子が、ぢたばたさせる子供たちの足がぶつからないやうにと、長卓を手前に引き寄せながら、その時から言葉をかけた。けれども信之は、それには返事もせずに、手荒くみせて、その實は十分注意をこめて、右へ左へごろり／＼と丸まつちい體を轉がしてやつた。嬉々と笑ひさうめいて、子供たちはすぐ起き返ると、そのまゝ仰向けに倒れてゐる父親の胴體に跳びついて來た。

「なんだ、降参したくせに、まだかゝつて來るな、ようし！」

と坐り直して、ふと細君と目を見合せた、——

そこには、靜かな幸福が宿つてゐた。恐らく自分の目も同じことだらう、と氣がつくと、何故か信之は氣恥しくなつて、慌てゝ視線を、膝の上



て、押して来た肘掛椅子と取り變へると、「あたしはこれがいい」

今度は、腰掛と背なかに簾を張つた船底椅子を引きずつて来て、古風な、大々とした洋爐のそば近く据ゑ、それへゆつたりと腰をおろした。

# 十一

「どうです、それは寒いでせう」

腰掛の配置までは、馬鹿に調子がよかつたのに、座が定まると、へんに堅苦しくなつて了つて、そのまゝいつまでも、ぢいッと洋爐の火を見詰めてゐるので、信之がまづ、云つても云はないでもいゝやうな言葉を擲りだしてみた。

「えゝ、風で、塵埃が大變です」

「何は、鈴江女史は、今夜は一緒にアなかつたんですか」

「えゝ、……僕、鈴江さんに厳しく云はれてたんですけど、字が書けないもんだから、ついあれツきりお禮の手紙も出しませんでした、先達には有難うございました」

びよこりと一つ、お坊ちゃんじみた、きまり悪げなお容儀をした。信之には、そこに少しの拵へた氣持も感じられなかつた。感謝の誠意などは二の次として、

(やつ、いやに初心がつて見せやアがるな)

と云ふやうな邪推で、心が穢されずにすんだのを、ひたすら自分自身のために喜んだ。或は偶然これが、信之にとつては唯一無二の心持のいゝ表現だつたかも知れない。その他の、どんな云ひ廻しや仕草でもが、これほどするりとは、胸に滑り込まなかつたらう、と思はれるほどだつた。

「いゝえ」

思はず、嬉しくつてたまらないやうな微笑が浮かんだ。

「あの時お話した通り、早速仕事にかゝつたんですから……毎日もうみんな、セツトを造るやら、手製で間に合ふ衣裳は女達が縫ふやら……」

活動寫眞の話となると、急にまたいつもの活氣に燃え立つて来て、さも愉快でたまらないと云ふ風に、ひとりでくツくと笑ひだした。

「それア大變だね。そんなことは、みんな鈴江のうちに集まつてやつてゐるんだね？」

「えゝ、わりに廣いし、親父さんは、年中ホテルに行つて、夜もおそくでなくつちア歸つて来ないし……。大變ですよ、そのまゝ晝間の騒動ツたら……。お暇があつたら一度来てごらん

なさいな。座敷ぢうボール紙だア、四分板だア、貫だア、ベンキだア、針金だア、鋸だア、鋤だア、それこそ足の踏み場もありやアしません。さうかと思ふと、ほら、先達お話したでせう？

鴛島に追つかけられる泥棒ね、あの役をやる奴なんぞは、今から馴らしとかなくつちア駄目だつてんで、一日三界庭で鴛島と話をしやアがるんですよ。『おい、こら、こつち向け！駄目だぞ、貴様！ガア公！』なんて。

そいつがまた、とても滑稽な奴でしてね、あんまり云ふことを聴かないもんだから、仕舞に木綿糸を持つて来て、「一生懸命鴛島の首ツ玉を結いて、その先を自分のバンドのうしろんとこにしばりつけたまではよかつたんですけど、どうだ、今度こそは！つてな顔をして、ヤツとばかり馳け出さうとすると、二足いかないうちに、すぐブツンと切れちまつてね、可笑しくつて可笑しくつて……」

一然し、本當に寫す時にやア、そんなことは、一體どうするんだね？」

「それアあなた、そこが芝居と違つて、活動が樂の出来る所で、いくらだつてトリックが利きまされね。そんなことくらゐわかなしですよ。……第一、逃げてく奴が引ツ張るなんて、假令



よ。たゞいつも云ふことだが、口を利く前にもうちつとよくものを考へてみる癖をつけないといけないね。不良少年が来た、心配だ、すぐその心配を生で云ひ表はす、——それぢア、殆どあたまつても、要用はなくなつちまふわけだからね」

十

いまの先まで、うち面の悪い信之としては珍らしい上機嫌でゐただけに、反動的に來た氣分は、へんにひねくれたものになつた。もの云ひだけわるく丁寧で、その底に、冷たい針を含ませるなどは、どつちかと云へば、彼の柄ではなかつた。自分でも、それに氣がつくと、苦々しくてならなかつた。

「まあ然し、安心しておいでよ」

それで、急に晴やかな笑顔になつて、「俺はまだ、こいつは悪人だと思ふやうな人に出つてはしたことがないんだ。世の中に、そんな人が一人でもあらうとは思へないんだ。だから、不良少年つてものが、どれほど悪いか、それを知つとくのも、謂はばまア修行の一つだらうぢアないか」

「それぢア、どうぞまアしつかり御研究なさいまし」

こゝらが折合どころと思つたか、細君も、そんな風に冗談めかして了つた。

「あゝ、そこらにぬかりはないさ。……あとで、紅茶でも煎れて持つて來さしなさいよ」

云ひながら、凭れかゝつてゐた子供たちの體を膝から押し落すやうにして立ちあがつた。「みんな時間になつたら寝なきやアいけないぜ」

「今夜パパと一緒に寝ようと思つてたら、……いやだなア」

「お客さんが早く歸つたら一緒に寝てやらう」

「おそくなつたら？」

「おそくなつたら仕方ないから、パパの床に

はいつて、先に一人で寝ちまふのさ」

「そいぢアつまんないや」

「まアいゝやね、成るべく早く行つてあげるよ」

長男とこんな應酬をしてから、信之は洋館の書齋の方へ出かけて行つた。

西山は例の薄い紺色の、やゝ窮屈さうに思へるくらゐ、體にびつちりとあつた背廣の胸をあけて、胴着の脇の下の剣に、兩手の親指を突ツ込み、うしろ向きに、油繪の額の下に立つて、ギツと睨め入つてゐた。その姿勢にはちよいと拵へたところがあつた。

「おいでなさい」

屏があいたのは女中が茶でも運んで來たのかと思つてゐた、——さうぶ意外の思ひ入れも故意とらしく、振り向くと、快活な、若々しい上低音で、

「今晚は！」

「よく來ましたね。さア、火のそばへおよんなさい」

「えゝ、有難う。……とてもお留守だらうと思つたんですけど」

と、圓卓を隔てゝ主人と善向ひに、一旦小椅子に腰をおろしたが、すぐまた立ちあがつて、

「僕、これを拜借しよう」

見てゐるだけで氣持のいゝやうな、キジ／＼とした身のこなしで、部屋隅の隅に片よせてあつた肘掛椅子を押して來た。その潑刺とした動作ゆゑに救はれて見えたのか、信之にはそれが少しも圖々しくは感じられなかつたばかりでなく、二度目の訪問に、すぐさう親しきをもつて振舞つてくれることが、却つて心持よく思はれるくらゐだつた。

「藤代さん、あなたこれになさい」

「まア君それにかけたらいゝぢアないか」

「いゝえ、どうぞ」

云ふ間に、すばやく信之を小椅子から立たせ

はれちア、ほんとに困るんですよ。なんでもかんでも映さつて、貴方からも一度さう云つてくださいませんか。貴方がさう云やア、あの人きつとやる氣になるんですから」

### 十三

「そんな分らない話があるもんか」

「いゝえ、さうですとも。鈴江さんは、それア貴方を可怕がつてますよ」

云ふうちに、西山の眼が特別な意味をもつた凝視になつて行くのを感じると、信之は我にもなくどぎまぎして了つた。

「じよ、冗談いつちアいけないう。可怕い……、僕に可怕いなんてことはないう……」

「だしぬけに、大變立入つたことを伺つて失禮ですけれど……」

さう云ひ出した時には、態度から顔つきから口の利きやうまで、がらりとつて變つた生真面目さで、相手の言葉など、てんから耳にかけようとしせずに、西山善烈は眞四角に開き直つてゐた。一貴方は……。鈴江の方では、一昨年の五月ごろ、貴方と體の關係があつたやうに云つてますが、——一體こんなことをだしぬけに人に訊くなんて法はありませんが……」

いや、結構です。君が、眞面目で、それから

卒直なのが、大へん愉快です」

「えゝ、あたし随分でたらめですけど、この事についてア眞面目なつもりです。あの時分、つて云ふのは一昨年の春ごろ、あたしは鈴江と結婚しようと思つて、いろ／＼眞面目に考へてもみましたし、永い間とても寄りつけない義理になつてゐたママさんのうちへも行つて、この結婚さへ許してくれるなら、きつと眞人間になつてみせるからつて、堅く約束して、うちへ連れて行つてママさんにも會はせたいんです。さうすると、——うちのママさんつて、少し變人ですてね、すっかり鈴江が氣に入つちまつたんです。お前みたいなのもんの女房には、あゝ云ふ氣の勝つた人でなくつちア駄目だ、なんて云つて……。今の言葉は、そつくりママさんが云つた通りなんです。あたしなら、氣が勝つてゐるなんて言葉であの女を批評しようと思ひまさんし、第一そんな洒落た言草は知りやアしませんでした。……そんなちよつとした言葉まで、いまだに忘れずにゐるくらゐですから、その時の本氣さつたらなかつたんです」

「ふうん、さうですか！ それで、そこまで行つた話が、どうして毀れたんです

「一口に云やア、あの女には、結婚なんて、一

生する氣はないんですよ。だから、なんののかさんざんいゝやうなことを云つときながら、とても駄目だとかをくゝつてたうちのママさんなんぞに買被られたりして、だん／＼話が本式になりかゝつて來ると、急に逃げ腰になつちまやアがつたんです。いつものあたしなら、いゝ幸に、こつちも早速ほかの女にモーションをつけまひますがね、あん時ばかりは、いま思つてみても不思議なほど一生懸命だつたんですよ。そのくせ、あの女が、これまでにして來たことを、何一つ知らないわけぢアなし、仕様のない奴だつてことは、重々承知してるんですからね。たゞ、あたしと關係が出來てからは、——あれはね、二月ですよ、あの同じ年の二月ですよ、——その後は、斷然ほかの男と關り合ふやうなまねはさせなかつたつもりでゐたんです。體裁に云ふんぢアないけれど、あいつだつて、實際あたしに……、あたしが好きでしたよ。過ぎたことを云やアお互に辱みたいのもんだけれど、これで二人が夫婦になれりやア、まアどつちもお互に、救ひ救はれる勘定だらうと思つてたんです。あの女だつて、立派にさう云つてたんです、生れ更はれる、なんて……それが、それが貴方……。まア大體さう云ふわ

切れない、……針金なんかで結いたつて、それぢや追ッかけてるやうに見えッこありやアしません。ずる／＼引摺られて行くやうな形になつちまつたりしちや、なんぼ喜劇だつて、それこそお笑ひ草でさア」

## 十二

こんな調子で、西山は、彼等の「仕事」が、些の滯りもなく、どん／＼捗りつゝあるやうな話を、二時間近くも喋り続けた。活動寫眞には全く興味のない信之だつたけれども、その間まるで退屈を感じなかつたほどに、その内容も何もない、ただ敘事だけの話が、面白可笑しく運ばれた。ひとかどの不良少年で、話術に巧みでない者は稀だと云つてゐるのだが、西山のは普通の意味で能辯の部にははいらないまでも、時々いかにも實感がなければ出て来ないやうな、奇矯な云ひ廻しで、ぎゅツと聞きての心を握んで行く、光つたところがあつた。訪ねたことはもとより、ろくに話に聞いたこともない鈴江の住居の、二階や階下や庭さきまで、いづれも多少とも世をすねた若い男女が、彼等一流の奇智頓才を掉つて、戲言だくさんに、果して仕上げるかどうか、よりも、さうして何かしら仕事らしいことに手足を動かしてゐる樂し

から、ひどく上機嫌に嬉々／＼と光景を、信之は、手にとるやうに思ひ描くことが出来た。十四五年を遡つて、同じ年比の自分自身を思ひ出してみれば、さう云ふ自由さは、夢にも見ることの出来ないものだつたが、それだからと云つて、とても反感などとはもてなかつた。寧ろ聞いてゐる間だけでも、その若々しさが、いくらか自分の氣持に憑り移つて来るやうなのが嬉しかつた。よしんば、西山の話が、悉く根も葉もない虚構で、例へば、スクリンの上に動く映畫の、「鈴江宅の場」であらうとも、彼がそれから享けた樂みの價値に、大した増減があるわけではなかつた。——一月ほど前に一も二もなく出してやつた千圓と云ふ金は、信之の氣持では、もとより活動寫眞の資本のつもりではなく、この世に眞實を見つけ損つてゐる少年の心に、一つの「信」を贈らうとしたに過ぎないのだつた。而も、受けた者の心で、それがどう扱はれようとも、それで甚しく自分の心を傷めないですむほどの距離に立つてゐたくらゐだから、まして現金の費され方などは、全く問題の外に置いてゐた。彼等の手で喜劇のフィルムが一本出来上つたところで、或はそこから生じた利益が、あとから／＼と相應の製作を生み、數人

の男女がそれによつて生活に資することが出来たところで、そんなことは、彼にとつて大した喜びでもなんでもないわけだつた。然し、それはそれとして、西山の話に少しも嘘らしいところなどはなかつた。

「さぞ鈴江が忙しがつて、……尤もいつだつて退屈なんぞしてゐる女ぢやないけれど、これで生き甲斐が出来た、つて云ふやうな氣持で、あつちこつち世話を焼いて廻つてることだらうね、……目に見えるやうだ」

「えゝ、それアもう素敵なもんですよ」

「なんだらうね、映すとなれば、勿論鈴江嬢主演つてことになるんだらうね」

「いゝえ、自分ぢア可厭だつて云つてるんです」

「可厭？　へーえ、それアまたどう云ふわけだらう」

「とても親父さんに叱られちゃふなんて云つてるんですがね……」

「ふーん、あの人もも苦手はあるんだね。ちよつと、お父さんを可怕がる柄にやア見えないがね」

「でもね、僕、初ッからあの人の柄を見て筋を考へたんですから、今になつて出ないなんて云

西山が、今にも何か云ひ出しさにしながら、いつまでも黙つて薄笑ひばかりしてゐるので、信之もつい吊り込まれた微笑を浮かべてかう尋ねた。

「いゝえ、なんでもないんですけど、ちよつとへんなこと考へついたもんだから……。然し失禮しました、どうぞ先をお話してください」

「それアしかけた話だから、ゆつくりお仕舞まで聞いて貰ふがね、一體何を考へついたんだよ。何か鈴江のことかい？」

「いゝえ、今のその分け方ですよ、獨逸の大學者とか考へたことに、僕なんぞがとやかく云つたつて仕方がないけど、僕に云はせられ、世界中の女は一人残らず、その、なんでしたつて、娼婦型……ですか、それだと思ひますね。淫賣根性のない女なんて、一人だつてあるもんだすか。今ふいとそんなことを考へたら、學者なんて甘えもんだ、つてやうな氣がして、つい可笑しくなつちまつたんですよ」

「さうかしら……」

「愚しくもまた勇敢に、漁色荒淫の一生を終らうとしてゐるやうな、千軍萬馬の古勇者の口からでも聞くのなら、同じ反感にしても、それだけこちらにも力はいらうと云ふものだが、

いかに利口でも、どれほど女をたらして來たと云つても、まだやつと二十歳になつたばかりの普烈の云ひ草としては、(何を生意氣な!)と云ふ氣が先にたつて、我慢できるだけはひとの言葉に反對は唱へないことにしてゐる信之だつたが、たゞそのまゝに笑ひ捨てられない氣持にされた。とは云へ、飽まで調子はその柔く、「それアまア、君のやうに云つて云へないこともないだらう。いづれ白と黒と云ふやうな具合に、はつきり二つに分けられるもんぢアないんだから、大體から云つて母型にはいる質の人だつて、多少娼婦型的なところもあるだらうし、反對に一見娼婦型の女にも、母型的な傾向が全然ないとは云へまい。それアまア解り切つたことだけれど、女は一人残らず淫賣根性をもつてゐるなんて云ふ君が、結婚しようと思つたり、本氣で女に惚れたりするのは、ちつとへんぢアないか」

「一時でもそんな氣になつたことがあるだけに、今ぢア僕、却つて女を信用しなくなつてゐんです」

「はアア」

と、冗談めかして微笑ひながら、「それぢアつまり、失態から得た哲學、——とても云ふわけかな?」

苦い顔をして、西山は急に目を逃らして了つた。軽い冗談口で受け流すだらうと思ひの外、すぐお坊ちゃんらしくツブくれて了ふところなど、益々信之は、この相應に名を知られてゐると云ふ不良少年の善良さに、好感情をもたずにはゐられなくなつた。

「話が逃れちまつたが……」

と、ひどく上機嫌な、——相手が結婚しようとしてゐた女と、而も丁度その同じ時期に、自分も關係してゐたことを話さうとする人として、寧ろ不似合なほど上機嫌なニコニコ顔で、信之は、またもとの話へと言葉を續けた。

「そこで鈴江だが、あたしとしては、あゝ云ふ娼婦型の女には、結局深はまり出來ないつてのは、初ツから解つてたことなんだ。同時にまた、その同じ理由で、一層好奇心だけは刺戟されたわけさ。だから二三度逢ふとすぐに、彼方から金の問題を持ち出された時には、正直な話、ほつとしたんだよ……」

十六

「たい貸せと云つて來たんですか、それともなんか、急に入用になつたわけでも話したんですか」

「それアね。……然しそれを話す前に、念のため」



けだつたんで、それで失禮を承知の上で、貴方に伺ふんですが……」

#### 十四

「よく解りました」

兩手をきちんと膝に置いて、眞正面に西山

の眼のなかを見入りながら、大きく一つ頷いた時には、信之の心持は、根から動かされてゐた。――なにがこれが不良少年だらう。なまじ

つか大それた理想などは抱かずに、たゞ少しでもさばくとした生活にはいらうと云ふ心持。同じ仲間の女に、心から惚れこんで、お互に

何もかにも承知の上で、結婚しようと思ふ心持。而も女の方から逃げ腰になられた經緯を、眞面目に今でも人に語らうとする心持。誰がこ

れを「不良」と呼ぶことが出来るだらう。世の誠

に溺れた者のために、一杯の「信」を勧める、――さう云ふ美名のもとに隠れて、その奥底には、

「不良」の深さに、それとなく尺度をおろし、試みようとした氣持も、決してなかつたとは云はれ

ない自分自身の方が、どれくらゐる人が悪いか知れたものではない！と、しみみ信之は、己を恥ぢ悲しんだのだ。

「ぢアね、あたしも正直に話すから、そのつもりで聞いてくれたまい。さうです、鈴江の云つ

た通りです。一昨年の春、と云つても、四月末か五月頃だつたと覺えてゐるが、慥にあたし

はあの女と關係しましたよ。勿論初めから嫌ひと云ふほどぢアなかつたが、一體あたしは、

あゝ云ふ質の女はさう好きぢアない。どこまで行つても氣持の上の繋がりと云ふものが出来て

來さうもないやうに思はれたんだ。また事實その通りだつた。そんなわけで、初めからあたし

には好奇心だけしかなかつた。いつの場合だつて、かう云ふことは、どつちがい、どつちが

悪いのと云へるもんぢアないが、あの女の、あたしに許さうとしてゐる氣勢も可なり露骨には違ひなかつた。

まあ然し、そんなことはどうだつていゝんだが、關係してから間もなく、あの女からあたしに金を貸せと云つて來た。あ

たしとしては、それは寧ろ望むところだつた。と云ふのは、一體あたしは、心持の繋がりから

いつて、だん／＼に深く惚れ合つて行くやうな關係なら、相手の都合次第で、金なんぞやつて

もよし、やらなくつてもいゝと云ふ氣持であられるんだけれど、惚れてもしないのに、ついだ

らなく出来て了つた關係で、その後も大して好きにもならないと云ふやうな關係だと、相手の素人玄人に拘らず、どうにかして金に被けて

了ひたくなるのがきまりなんだよ。卑怯なことは重々承知だが、事の起が悪いんだから、どうもそれも仕様がなと思つてゐるんだ。一體鈴

江つて女は、勿論素人にやア違ひないが、どつちかと云へば、姉婦型の女だからね……」

「シャウフケイツてなんですか？」

「女をね、假に二つの型に分けると、姉婦型――阿母さんになれる質、つまり一家の主婦として

適はしい質の人と、姉婦型、――シャウは姉婦のシャウ、フは婦人のフの字だね」

と指先で圓卓の上に大きく書いて見せながら、「一口に云やア、色慾よりほかに樂みを知ら

ないやうな女、子供を産んだり、家事を取しきつたり、そんなうさいまねは眞つ平御免だ、と

云つた氣風の女だね、さう云ふのと、大體二つに分けられる、――或る獨逸の學者が云ひ出し

たんだが、まア、さう云ふことになつてゐるんだ。ところで、君が考へてみたつて、鈴江を、その

二つのうちどつちかへ片づけるとすれば、どうしたつて、姉婦型の方だらうぢアないか」

西山は、すぐには返事をしなずに、やがてニヤリニヤリ笑ひだした。

#### 十五

「なんだい、何を笑つてゐるんだい」

ま買ひ込んで置く英國製の封筒を見ただけで、それが自分の書いた手紙だと云ふことは、信之にはすぐに解つたし、そのみではなく、鈴江に送つた手紙をたねに、急にゆすりかけようとしてゐる西山だと云ふことも、咄嗟に直覺されて了つた。——その瞬間に、まづ第一に胸に來たものは、鈴江に對する嫌惡の情だつた。目の前にある西山には、恐れにも、憎みにも、なんの感情も起らない先に、遠く離れた鈴江の心持や行爲が、たまらないほど不愉快に映つて來たのも不思議だつた。

信之は、封筒から目をあげて、あらためて西山の顔を見詰めたが、たゞなんとなく氣の毒らしくなつて來て、永くはさうしてゐられなかつた。それでも、我慢して、視線だけはわきへやつて了はないやうにして、焦點でばやかして置いて、

「君はまたどう云ふつもりで、そんなものを持ち出したんだね」

と、穏かに尋ねた。

「なんにも云はずに、器用に買つときなさい」

「君も、もうちつとはしつかりした男かと思つてゐたが、存外馬鹿だね。これぢや千圓は高價かつた。ちつと買ひ被つたなア」

然し、信之の調子にはだん／＼張りが出て來た。眼にも射るやうな光が添つて、ちつと相手を見据ゑだした。

「悪いことにやア違ひないが、こつちぢや君と云ふ人間を千圓で買つた氣なんだ。さう云つて悪ければ、ちよいと君の靈魂に、賂をしてみたんだ。人間が人間を試すなんて、もとより間違つた話だが、おかげでまア君の馬鹿さ加減も、根こそぎ解つたよ。一體自惚が強すぎらアね。

誰が君等に騙されて活動の資金なんぞ出すやつがあるもんか。自分の靈魂に賂をされてるとも知らないで、あの分ならまだいくらでもあとが利く、かなんかで、いゝ心持に嬉しがつて出かけて來たんだらうが、そんな紙屑みたいなものをひねくり廻して、小汚ねえまねをすれア、こつちは千圓どぶに捨てたと思やアすむんだけれど、そつちア一生人間らしい世の中にやア浮かばれねえや。そんな、ものゝ解らねえ惡黨でえがあんもんか！」

「ふざけない！」

顔色を變へて、すつくと立ちあがるや、勢こめて椅子をうしろへ蹴返した。

「ふざけるどころか、こつちは大眞面目だ！」

ふと、山犬に噛まれたよりもまだ馬鹿々々し

い死に方をした總理大臣のことがあたまを掠めた。假令殺されても、あれよりはましだと思つた。いま俺は、眞心から、相手の眞心に叫びかけてゐるんだ。相手はどうあらうとも、死ぬ瞬間としちア、まア上乘の部だ。——そんな安心も肚の底にあつた。紐重ねた膝もそのまゝに、肘掛椅子にどつしりと腰を落つて、たゞ相手の瞳を食入るやうに見据ゑてゐた。立ちは立つたが、それでは西山も、手の出しやうがなかつた。暫くはそのまゝ、睨み合つてゐた。がつちり組み合はされた鬨牛の角のやうに動かない視線のなかに、然し、絶えず力は壓しつ壓されつしてゐた。そしてそれは、結局肚の力だつた。……もう一度信之は、さうしてゐるのが氣の毒らしくなるやうなものを、相手の瞳の裏に感じ始めた。

十八

「まア落つて、ゆつくり一つ考へてみたらどうだい」

さう口を切つた時には、眼と眼との壓し合ひで、もうそれ以上、進むのが、大人げなく感じられるほどに、勝敗の数は決つてゐた、——少くも信之には、そんな氣がされたのだ。ぶらりと立つて行つて、横倒しにひっくり返つてゐ

めに一應訊いときたいんだが、君は今でも鈴江が好きなのかい」

「いゝえ。どうしてです？」

「なにね、それを話すとなると、幾分あの人の悪口になるかも知れないからさ」

「そんなこと！ ちつとも遠慮なさる必要ありませんよ。僕は、いつかまたお話す時があるかも知れませんが、今ね、大へん好きな女が出来てるんですよ。鈴江だつてそれは知つてるし、兎に角もうあの女とは、普通の友達以上には、どんな交渉もありやアしませんよ」

「さう、ギア云はう。——今から思ふと君のとなんだ、……今つたつて、この前鈴江と二人で来てくれた時に、すぐ、あゝこの人だな、とは思つたんだが、今夜君の話を聞いてみると、全くその通りで、……その通りつたつて、大ぶんなまア話は違つてるけれど、君との關係をあたまたに置きながら話したには違ひないんだ。つまりね、或る……阿父さんが獨逸人で阿母さんが日本人の若い男と、以前にちよつと間違ひがあつた、つて云ふ風な話なんだ、その男が、以前にはそんなでもなかつたんだけれど、近頃すつかり不良少年になつちまつて、いろ／＼まアその不良き加減を、實例を擧げて話して聞か

せたがね、多分君の話を大袈裟に喋つてたんだらうと思ふんだ、……その男に、是非結婚しろとか、それが可厭ならどうするとかつて、頻りに強迫されてる、それに就いて、謂はばまア手切金だ……」

「いくらと吹ツかけました？」

と、急にひと膝のり出した西山の容子は、無邪氣ながらも、聲で少しは「不良」とぶつた感じのものになつてゐた。信之は、それでいよく上機嫌に微笑ひながら、

「三百圓だせと云ふから、あたしは友達に金を貸すことは可厭だ、その代り、——これは死んだ親父の眞似なんだが、——申し出した額の半

分だけは進呈しようつて、百五十圓づつ、飽か二度持つてかれたよ。つまり、初めの時に三百圓すぼり擲り出しちまつた方がよつぽど氣が利いてたわけさ。然しおかげで、あたしの氣持だけは、それでさば／＼しちまつたのさ。考へてみれア、随分高いもんについてるがね……」

最後の言葉を故ら冗談めかしく云ふと、信之は、暗やかに聲をあげて笑つた。

「ギアなんですね……」

一緒に笑ひながらも、さう云ひ出した時には、西山の表情が、へんに緊張しかけてゐた。「今

ギアその事件に就いちア、貴方は、いくら世間にはばツとしたつても、一向平氣なもんですかね……？」

信之はギリリとした。——桑木博士の前に、世を恐れなかつたと言ひ、今はまた、さば／＼とした氣持になつてゐると述べて置きながら、その念頭に置かない筈の世間に、自ら顧みて疚しくない筈の事件が知れ互らうとも、些の痛痒は感じまいな、と、たゞ、一言念をつかれただけのことと、とかくの思考に先だつて、まづ弱々しい不安の念に覆はれたのだ。これはなんと云ひ説くべきだらう……

それと見てとつた西山の頬には、惡魔の凱歌が、美しい蔷薇色の血沙に化けて衝きあけて来た。徐ろに背廣の内衣囊を探りながら、

「さうとすれア、もうこんなものも値にやアありませんかね」

## 十七

親指と食指との間にしつかり持つて、ついで、一日見るなり、有繋の鈴江がへこたれて了つた、あれだつた。

何年來、いつも必ず丸善まで出かけて、しこ



は、忘れるともなく薄れかけてゐた。それには、人知れず誕生してゐたおかげにか、その後引き續いて吐血を見るやうなこともなかつた。さうなると、頻りに旅の心が動いて來た。——京都、奈良、宇治、第一にあのへんがあたまに浮かんだ。日も遙に、蓮華と棠種とが続いて、果は薄霞んだ連山まで、一望のうちにをさめるやうな、どこでもいゝ、田舎の舊家と云つた感じの靜な宿屋に轉がつて、ひとりポカンとしてゐたらさぞいゝ心持だらうと思つた。それもいゝが、ぼつり／＼杜切れがちに、もの柔かな京都で、何か水のやうな、毒にも藥にもならな話をしかけてくれる女が、寝ころんだ枕もとに、疊／＼ぐらゐ離れて坐つてゐてくれても悪くない、とも思つた。里奴と云ふ奴のことが、それにつれて考へ出された……

その妓とは、一昨年の夏の末ごろ、大阪京都へちよつとした用件を云ひたてに十日あまりの旅をした時、中學時代に同級の仲よしだった京都産れの日本畫の畫家に招かれて、祇園の茶屋で、五晩六晩つゞきさまに逢つたのが、馴染めだつた。口數を利かない大人しやかな妓だった。眉尻がやゝ八の字なりにさがつたのが、いつも彼女を惹き深く見せ、ひとり仲間をは

づれて、裏の小流れに臨んだ欄干にでも凭つて立つてゐるところを呼ばれて、ニツコリ振り返つたりすると、今が今まで、そつと泣いてゐた人のやうにも思はれるくらゐだつた。その薄命らしいところが、旅にある信之の心には、殊に哀れふかくも懐しく感じられた。彼方でも、信之を嫌つてゐるとは思へなかつたけれど、さうかと云つて、内輪に／＼と、いつも座敷の日陰とも云へるあたりに身を退つてゐる彼の女は、決して人目につくほどの特別の好意を見せるやうなこともなかつた。今後には何か事が起らうなどとは、夢にも思ひ設けずに、信之はやがて東京へ歸つて來て了つたのだつた。それに一つには、十九と云ふその妓の年齢から考へても、彼にはなんとしても自惚れられなかつた。永い間の戀愛生活で、女の方から先に立つて好意をみせて來るのは、きまつて年増だつた。遠慮のない友達などがよると、よくそれを云つて冷嘲かされるくらゐだつたが、いゝ御機嫌に廻つてゐる時の信之は、故意と洒々とした顔つきを扮つて、

「ふん、十奉の小娘なんぞに、俺のいゝところが解つてたまるもんかい。なんつてたつて、問題こゝだからね」

と、心臓のあたりをハタ／＼と打つて見せたりした。そんな風で、若い娘には、たまにこつちから好意はもつても、深く惚れ込むと云ふやうな氣持になることは稀だつたし、不思議にまた彼は、年のいかない女には縁遠かつた。

ところが、東京に歸つて二三日ほどすると、畫家の矢崎から、里奴の繪巻書に、この妓が君のことばかり云つてゐて大變だ、近々にもう一度出直して來る必要がある、などと云つてよこした。文學趣味の女將がやつてゐる例の茶屋で、酒肴の載つてゐる食卓の上でも書いたものとみえて、一筆女將の冷かしのやうな文句やら、里奴はじめ三四人の馴染の妓の自署やらも添へてあつた。

## 二

けれども信之には、里奴の唇が、あたし誰それに阿惚した、と云ふやうな言葉のために動くところは、ちよつと想像の目の前にさへ浮んで來にくいものだつたから、その場かぎりの座興に書かれた文句として、格別氣にもとめないでゐた。ところが、さう云ふ寄書の本畫が、五月十日おきくらゐに三四枚といたあとで、思ひがけなくも里奴からの手紙が來た。もし自分が東京へ出て行つたら逢つてくれるか、逢つて



ろつちん・ナエア  
の船底椅子を起し、うしろから普烈のそばへ押しやつて、「まあもう一度腰かけないか……俺の云ひ様も、少し亂暴だつたかも知れないが、それはまあ友達同士のことで、もとより悪い氣ぢアないんだから、ねえ、もうこれで仲直りしようぢアないか。すつかりお互の氣持も解つてるぢアないか……」

グ、ゲウと、まるで厚い革でも巻き締めるやうな聲をあげたと思ふと、急に西山は、大きな巖丈な兩の手の平で、いつばいに顔を包んで了つて、呼吸もせはしく職歎り泣きを始めた。一瞬間呆氣にとられて立ちつくしてゐた信之も、見るまに、二十歳になつたばかりの、負けることの大嫌な少年の昔へと、自分の心が、そつくりそのまゝ戻つて行つたやうな、一分の隙もない同感で、涙ぐましく胸が迫つて來た。うつかり何か云へば、泪襟になりさうな氣がするの、息を凝して、斜にうしろから、ちつと西山を見詰めてゐるよりほかはなかつた。

「畜生！」

細い管から間歇的に洩れる蒸氣のやうな勢ひで、アスンと一言はき出すと同時に、拳固をあけて、自分の頭を力まかせに擣りつけた。  
「馬鹿！」

もう一つゴッソソといった。  
思はず信之は、場合を忘れて、プツと噴飯して了つた。

「まあさう慍つたつて仕様がないうよ」

「いや〜、いやだ！」

駄々っ兒のやうにぢだんだを踏んで、續けうちに自分の頭に拳を加へた。

「まあいゝから、もう一度腰かけろよ」

「いやだ！ いやだ！」

「ぢやどうすれアいゝんだよ」

「歸る」

信之は、抱きつきたいほど可愛く思つて、そばへよると、

「いやだ！ 顔を見ちアいやだ！」

と、くるりと彼方むきになつて、「オイ、歸らせてくれつたら！」

「なにもそんなに……」

「いや〜いや！ いやだつたら！ 歸るつたら歸せよ！」

「よし〜、ぢアまた近いうちに遊びに來いよ！ ね？」

うしろから肩を抱き締めると、振り拂ひもしずに、――然し、相變らず兩手でしつかりと覆ひ隠してゐた顔を、なほその上にも背けたが、

どうやらをさまりかけてゐた泣聲は、それで、もう一度盛りあがつて來た。

「……すみません、……すみません……」  
殆ど獨語のやうに呟くのが、微に聞えて來た。

「なんだい、今更そんなことを云ふやうがあるもんか。……もう何もかも、底の底まで、すつかり解つてるぢアないか……」  
たうとう信之も、泪聲になつて了つた。

「……さよなら」

顔は背けたまゝに、右の手だけを差し出した。跳びかゝるやうにそれへ掌を合すと、互に堅く握り合せた。

「ぢア、さよなら、また來たまひよ」

前のまゝ肩にかけてゐた左の手で、やゝ押し加減に、信之は、この「不良少年」を玄關の方へ送り出して行つた。

## ひとり旅

ちらほらと花の便りを聞く時候になつて來た。着るものが一枚へるごとに身も心も輕くなつて行くのに誘はれて、病に對する信之の不安

葉で、子供っぽくも、金鶏動章と呼んでゐる、最高の情愛のしるしを贈ることにしたつた。

——假令自分たちの戀の末はどう終らうとも、自分としては一生あなたに好意をもち續けずにはゐられない。あなたにも、その氣持だけは同じく永く續いて行くだらうと信じられる。何年かの未來に、自分たちがどれほど變つた境遇のもとに置かれてゐようと、どつちかの一人が、萬一にも瀕死の床に就くやうな場合には、必ず報知の電報をうつこと、またそれをうけとつたものは、萬難を排して急行して、お互にとり交した心の誠を悦び合ひ、感謝し合はう、——これが、これまでに信之が、女に與へた約束の言葉のうちで、最も尊いものとして、自ら「金鶏動章」と稱へ、易くは許さないことにしてゐるものだった。半年一年つづいた仲でも、戀が醒めたが最後、すぐあかの他人のやうな氣持に還つて了ひさうな感じの女には、夢にもこの言葉は聞かせなかつた。

里奴とは、僅に二日の仲だったがつたが、どう我慢してみても、この最上の愛を契らずにはゐられない氣持にされて了つたのだ。實にそれは、三つめの「金鶏動章」だった。

けれども、不思議な運命は、それ以來今日ま

で、まだ二度と二人を逢はせなかつた。里奴やは、例のそつけないほど簡潔な體狀が一本こどいたきりだったから、信之としては、もつと好ましくもない性分はもつてゐようと、手近の、刺戟の強い戀の方へと惹かれがちで、つい忘れるともなく、無言に二月三月も過して了つた。そのうちに、畫家の矢崎が上京して來て、里奴が肺を患つて、實家に歸つてゐる、と云ふ話を傳へたが、たゞ北野の天満宮に近く住む、貧しい荒物屋とか聞いてゐる、とばかりで、實家の町どころや氏名は、その時には分らなかつた。で、出來るだけ詳しく調べて貰ふやうに頼んで置くと、半月ほど北野の方を廻り歩いて歸洛した矢崎から、北野の店はもぢきれなくなつて、一家を擧げて大阪へ移つたさうだが、その移轉先はいま聞き合はせて貰つてゐるけれど、ちよつと知れ憎いらしい容子だ、と云つてよこした。

すると今年の正月になつて、大阪の住友銀行に勤めてゐる大學時代の友達から傳へ聞いた話だと云つて、辯護士仲間、若い男が、去年の暮に北の新天地に出た妓で、頻りにあなたに逢ひたがつてゐる女がある、なんでも前に京都で出でゐた時分とかに、あなたのあとを追つか

けてこつちまで逢ひに來たことがあるさうだが、などと、ニヤリ／＼笑ひながら冷嘲してゐた。その態度も可厭なり、またそんな傳へ聞では、とても詳しいことなどは解る筈はないと思つて、信之は、氣にはかゝりながらも、そのまゝに聞き流して了つた。

#### 四

それが、つい半月ほど前にうけとつた矢崎の便りによると、大阪で北の新天地に出たのも本當の話だったが、出てからやつと一月になるかならずで、ちよつと小康を見せてゐた胸の病氣が、もう一度振り返して來て、いま入院してゐるさうだから、追つて病院の町どころや名前も訊き合せて知らせよう、とあつた。そして、いまだにそれきりになつてゐた。

ひとり旅のあてを、上方の方へもつて行つて考へてゐるうちに、自然この不仕合せな娘の上に思ひが重く鎖されて行つた。またそれほど悪いと云ふでもないさうだし、約束の報知をよくしたでもないけれど、金鶏動章に對しても、ちよつとでも見舞つてやりたい、なに、出かけて行けば、病院などはすぐ知れるに違ひない、と、一時は殆どそれに決心しかけてゐた。

くれるならすぐにも行きたいから折返し返事をくれ、それだけのことを、ほんの四五行に色氣もそつてもなく、簡単に書いてあつた。言葉にしろ、文章にしろ、簡潔と云ふことは、必ずその云はうとする内容の上に、相當の考慮が費されたあとの結果を意味するものだ。最初の手紙のこの簡潔さは、里奴が、ちよつと人並はづれた才女でなければ、書きかけては破り書きかけでは破りして、何枚もの書翰紙が無駄にされてゐる場合と想像することが出来た。どつちにしろ、信之には、差向ひで、全く新しい眼で、この娘を眺めたい氣持が、可なりに強く動いて來た。

十月の、霧のやうに細な雨のふる晩、特急の列車で着いて來ると云ふ里奴を、東京驛で待ちうけてゐた信之は、いつもになく心のときめきを感じたり、不思議に感傷的な氣持に鎮せられたりした。こちらからの返事に對して、明日あさ特急で行く、と電報が來てゐるきりだつたから、連があるのやらないのやら、あればどう云ふ種類の人のなやら、そのへんのことも、更にあてがつかかなかつた。歩廊の薄暗い電燈の下を、彼は幾度も往つたり來たりした。

目にたゞない、ごく普通の束髪で、雨コート

に足駄を穿き、手には黒ッぽいタツチングの手提袋と蛇の目の傘を持つただけの、電車にも乗らず、ちよつと横町の髪型さんまで、とでも云ひさうな身振へだつた。まだ動きやまない汽車の窓と、歩廊とで、ちよつと目禮を交したあとで、車室から降りて近づいて來る時には、眞面に目も向けず、四五尺はなれたところから、びよこりと小腰をかゝめて、

「御機嫌さん」

「暫く。よく來ましたね。……荷物は？」

「いゝえ、なんにも……」

「ひとり？」

「えゝ」

いつもの寂しい笑顔を傾けた。玄關には、信之が乗つて來た自動車が待たせてあつた。

「東京で生れて東京で育つた人間には、東京の宿屋つてもものは、まるつきり用のないもんだから、どう云ふうちに案内したらいいのか解らないんだけれど、兎に角まア一軒電話で部屋をとつて貰ひました。あたしもこれから行くのが生れて初てのうちなんだが、紹介してくれたい人の話ぢや、どつちかと云へばぢみな、――場所は銀座のすぐ裏通りだけれど、ごく靜なうちださうですから……」

「……おほきに……」

「幾日ぐらゐられるんです」

「明日か、……明後日には是非去なんなりまへんのどツセ」

「あゝ、そんなに……、それア大へんでしたね……」

なんとなく二人ともぐたぐたなつてゐた。それきり息もなく押し黙つて、自動車の窓から、小雨のなかへ滲み出したやうな街の灯を眺めてゐた。

三

薄ら冷く、もの寂しい秋の雨は、里奴が滞在の二日を、しとくと降り續けた。その間に、日本橋の方のうまいもの屋に、一度夕飯を食ひに出たきりで、二人は、奥二階の八疊の座敷に、もの靜にたれこめてゐた。

内氣で、飽までも憤しやかな、いかにも上方の娘らしい氣性は、信之には、何か勿應ない氣がするほどに好もしかつた。またの逢瀬を約束するとか、それまでの寂しさを嘆つとか、そんな言葉はもとより、無言の涙さへ浮かべ得ずに、たゞちつとうつむいてゐるやうな別れの時が近づいて來ると、いぢらしさに堪へられなくなつて、かねて信之が、自分ひとりの心に秘めた言

いて了つたやうで、へんに氣が沈みもした。

通されたのは、こゝとしては下の部の客をいれる部屋らしかつたが、眞黒に光澤々と光つた馬鹿げて太い柱や、頑固な天井の押縁や、釘かくしのついた承塵など、どうしても五六十年ではきかないくらゐに舊い建ものらしく、その朴訥な、落つた感じは悪くなかつた。たゞ十疊と云ふのが氣に入らなかつた。普段から信之は、四疊半、八疊、十二疊半、と云つた風に、すべて眞四角な部屋でない、となんとなく體の据りが悪いやうな氣がした。

「もつと狭くつてもいいんですがね……」

帽子も外套もそのまゝに、部屋の眞中に突つたつて、あたりを見廻しながら、思はず先刻からの不機嫌を、聲の調子に響かせて了つた。

「……へえ。」

案内して來た十八九の、これも部屋に吊り合はせて、不馴らしい女中が、ちよつと云ふ意味を嘸み込みかねた顔つきで、「では、あのウ……」

何しろ一人だし……

すると、はア部屋代を氣にして云つてゐるのだな、とでも思つたらしく、微ながら輕蔑の薄笑ひが、血色のいゝ頬を掠め過ぎるのを見ると、信之はもう腹をたてる勢もなくなつて、

すつかり氣を腐らせて了つた。

「でも、まアいゝや。面倒だからもうこゝにしかう。ほんとと云やアかう云ふ長つ細い部屋は嫌ひなだけれど……」

「もしなんでしたら、あとで番頭さんにさう申しまして……」

「いゝえ、もうこゝで結構。……えゝと、飯は勿論まだです。酒は……と、さうさな、一本つけて來て貰ひませうか。それから、その前に、早速ひと風呂あびたいんですがね」

「へえ、承知いたしました。唯今すぐにお浴衣を持つて参ります」

いやに氣むづかしさうな客だ、と思つたのだらう、女中もそつけない切口上で、疊ざはりも荒々しく出て行つた。

「あゝあ、こいつアどうも……」  
思はず獨語を洩らして、信之は不承不精に、ぼつんと一つ床前に敷いてある座布団のそばへ、爪先でそれを縁近くへ押しよせてから、筆で腰をおちつけた。なんとなくこの調子では、旅のさき／＼まで面白いことはなさうな氣がして來た。  
そこへ女中が二人で、火鉢や茶道具や浴衣、丹前などを運んで來たが、信之は振り向きもし

ずに、硝子戸ごしに、ぢつと宵闇の暗さへ目をやつてゐた。

## 六

「あらー」

突然、いかにも思ひがけないと云ふやうな聲に、振り向いてみると、いま初て顔を見せる年増の女中が、まだ茶盆を下にも置かずに突賤のまゝで、ぢつとこつちを見詰めてゐた。その、ちよつと營養不良と云つた感じの、小さく引き締つた顔つきには、慥に見覚えがあつた。それと同時に、善良な女だつたと云ふ記憶が、續いて信之のあたりに蘇りかけた。

「あゝ、」

誰とも分らないながら、思はず親しみの笑顔にはなつてゐた。それには、先刻からの冷たい待遇で、淋しく氣の沈んでゐたところだけに、少しく大袈裟に云へば、地獄で佛と云つた風な氣持もされたのだ。

「まア旦那様、お久振りでございます」

さう云ふに、れゝば、すぐもうすつかり思ひ出された。長男の信紀が生れた時分だから、足かけ七年も前に、紀尾井町の家で働いてゐたことのある女だつた。名前はずちよつと出て來なかつたが、慥かこゝからは遠くない足柄下郡の、福



けれどもそれが、矢張りどこか體が弱りかけてゐるせゐか、だん／＼と重々しい感じになつて來た。死を思ふ傾きを變へに出かけようと、いふ旅の行く手に、不治の病に冒されてゐる哀れな娘が待つてゐる、——それではなんにもならない氣がした。いざお別れと云ふ場合なら、それはどんな無理をしても飛んで行く、けれども報知もないのに、こつちから尋ね探して行く、行けばどんなに喜んで貰へるかわからない、それを見ればこつちだつて嬉しいには違ひないが、——どこかそこに、ちよつと押附がましいところもあるやうで、すつかりいや氣がさして了つた。

東京で考へてゐたぶんにはきりがいい。つい近くまででも一旦出かけて置いて、それから先のことは、またそこでの氣持できめよう、——迷ひに迷つた揚句、さうでもするよりほかに仕様がなくなつて來た。で、荷物も、ほんの身の圍りの要るものだけを手軽く纏めて、取り敢えず箱根をあてに、新橋驛からたつて行つた。

小田原から自動車で、湯本の町へはいつたのは、春らしい夕靄が河原を明るく白ませ、對岸の樹木の鬱蒼たる暗さには、蒼み互つて、はやちらほらと、寝ぼけたやうな灯の色が光りそめ

る頃だつた。舊くから父の信策が品屋で、信之も子供の時分には、夏二夏母と一緒に暮したこともある宿はあつたが、その後は、箱根へ出かけて來ると、いつも小涌谷、強羅、蘆の湯と、上の方へばかり行きつけて、そこへは、かれこれもう二十年ぶりだつた。一人旅の、暗くなつてから山路へかゝるのもなんとなく心細く、一つには、思ひ出ふかい宿なら、亡き父母の儼を偲ぶすがもあらうかと、ひどく感傷的な氣持になつて、幅の狭い橋の手前で自動車を降り、前ぶれもなく、昔風な土間の入口に立つた。

「いらつしやいまし……」  
と、出迎へた女中の容子は、決して款待的なものではなかつたが、それは然し、信之もかねて覺悟してゐるところだつた。

「どつか部屋ありますから……」  
「へえ、ちよつとお待ちくださいまし」

入れ變つて、四十恰好のひようげた顔つきの番頭が、田舎の舊家の裏所と云つた感じの廣々とした板敷を横ぎつて駈けつけて來た。

「へえ、いらつしやいまし……」

と、型の如く搦手をして、「えゝ、おひと方さうでいらつしやいますか」  
「さうです。廣いとこは要りませんが、どこか

靜かな部屋があいてたら……」  
番頭は、職業的な目つきを敏捷に飼かして、頭のとつべんから足の爪先まで、客の容子をひと紙にべろりと物色した。

## 五

助手のついてゐない自動車だつたので、やゝ遅れて、そこへ運轉手が衣類靴と手提鞆とを兩手にぶらさげてはいつて來た。それと見ると、露骨に番頭の態度が改まつた。

「いえなに、唯今のところ別段た込んで居りませんのですけれど、ぼつ／＼お申込があるもんでございますから……」  
どこそこへ案内しろ、と女中を顧みてぶひつけたが、どつちにしる大した客とは思はれないので、檢分の役目を果たただけで、すぐ自分は奥の方へひつ込んで行つた。

格別金持ぶりたいわけではないけれども、良家に育つた坊ちゃん氣には、初ても同然の、而も相當名のある宿へ、だしぬけに一人で飛びこんで行つたのでは、これくらゐは仕方がないと云ふ察しもついてゐながら、矢／＼張りいゝ氣持はしなかつた。宿の幸地なのだから、いつそ山の上の馴染の宿屋まで登つて行けばよかつた、と後悔もされし、折角の旅の出鼻にけちがつ

掲げてゐるやうな感じが可厭だつた。細君、その話を聞いた時にも、第一に、「それ見ろ！」と云ふやうな気がした。それほど大切な富なら、金庫にでもどこにでもしつかり藏つて置くがいいのだし、さんざんに見せびらかした揚句、ぞろッべいにそこに放りだして置くくらゐなら、見えなくなつたからと云つて、俄に泣く面をして騒がたててゐるまい、とでもぶつてやりたい氣持だつた。現に、誰にも喋らずに諦めて了へ、とまで云つたのだが、その時にはもう女中たちの間に知れ互つてもゐたし、一つには、それが朋子の實家の母親から貰つた形身の品だと云ふ點で、信之も、さう／＼（態アみろ！）と云つた態度ですましてゐるわけにいかなくかつた。仕方なく、警察に届けるとなると、目見得に來だばかりのおはまは、一番割の悪い立場だつた。朋輩や刑事の目が、四方八方から自分ひとりの體にさゝつて來るやうに感じられたに違ひない。その時分、まだ兩親の在世中から勤め續けて來た女中頭格の婆さんがゐて、水天宮かどこかのお札を水に浮かして、その流れよつた方にゐた者が犯人だと云ふ、とんでもない吟味の方法を申し出た。途方にくれてゐた朋子は、或つてそんなことも許す氣になつたとみえて、或

る晩十一時頃に、信之が例の如く酔つて歸つて來ると、茶の間で、水を張つた金盃を真中に置き、うちぢうの者が車座に坐り込んで、いざこれからと云ふところだつた。

一馬鹿！

わけを半分聞くか聞かないに、いきなり彼は金盃を立蹴にけとばして怒鳴りたてた。それで頼むしい氣がしたのか、その晩おはまは、書齋まで酔ひ醒の水を運んで來た序に、絨毯の上にぢかに坐り込んで了つて、自分には全く覺えのないことだから、なんとかして疑ひの晴れるやうにしてくれ、このまゝいつまでもじりじりと疑ひの目で見られてゐるくらゐなら、一暇をとると云ひだせば、尙更疑ひが深くなるばかりだし、どうにもかうにも身が細るほど辛いから、いつそ死んでしまはうかと思つてゐる。などと、涙を流して訴へた。初ツから、誰一人疑はうとしなかつたほど、その事件に冷淡だつただけに、それまで、この目見得中の婢の、氣の毒な立場にも、全く氣づかずゐた信之は、それを聞くと、すつかり同情してしまつた。

## 八

第一その眞剣な態度には、これんばかりの嘘

もなく、この婢の仕業でないことは、明かすぎるほどに明かだつた。それからは、刑事がうちに調べに來たりすると、おはまに代つて、信之は一生懸命辯護に努めてやつたものだ。果して、半月ほど後に、質屋から足がついて、出入りの魚屋の若い者があげられた。勝手口へはいり露路に面した洗面所の窓を窺くと、ちらりと指輪が目についたばかりに、ふとした出来心で、乗つてゐた自轉車を踏臺にして、格子の間から盗んで行つたものだ云ふことまで知れた。品物も、質屋から買ひ戻すことが出來た。信之は、前から氣に食はなかつた老つた女中頭に、なんとつかず暇を出して了つた。——これが事件の大體だつた。

紀尾井町に勤めてゐた間、おはまはひどくこれを徳として、旦那様の御用と云ふと、何を措いてもまめ／＼しく働くと云ふ風だつた。さうされ／＼信之の方でも、一層目をかけて使ふことにもなつて、仕舞には、はたの女中たちの猜みが目につくほどだつた。——だん／＼に、そんなことまでが思ひ出されて來ると、忽ちもう旅の心細さなどは、どこかへ飛んで行つて了つた。

「お前さん、こゝに來てから、もう大ぶんにな

浦村の者だつたと云ふことまで、不思議にもふ  
いと思ひ出された。

「あゝ、お前さんだつたのかい。これアどうも、  
思ひがけないとこで……」

「いつも御無沙汰ばかり申あけて居りますが、  
皆様別にお變りいらつしやいませんか」

折りかゞみなり言葉つきなり、かう云ふとこ  
ろに働いて、もう可なり久しくなるらしく、以  
前とは比べものにならないほど落つきもし、も  
の馴れてもゐた。

「えゝ、有難う。お前さんは……と、信次まで  
は知つてたんだけね」

「へえ、お生れになつて間もなくお暇を頂きま  
したけれど……」

「さうだつたかね。ぢア、あとまた女の子が一  
人ふえてね……。でもまア、仕合にみんな元氣  
にしてゐるよ。……お前さんはいつごろからこ  
こに……？」

「へえ、お邸からお暇を頂戴しましてからぢ  
きに、親たちにやかましく云はれまして、一旦  
わきへ嫁きましたんでございますけれど……」

あゝさう云へば、その節はまた奥様から、結構  
なお祝を態々お送りくださいまして……」

「さう？……いゝえ、なんでしたか……」

「まアどうでせう」

と、朋輩の方を顧みて、口もとに手をあて、  
笑ひながら、「五年も前のお禮を、今ごろになつ  
て……」

「まアどうでせう」

と、朋輩の方を顧みて、口もとに手をあて、  
笑ひながら、「五年も前のお禮を、今ごろになつ  
て……」

「ええ、それで……」

信之は、普段は唄んでもよし唄まないでもす  
むのだが、一人旅の手持無沙汰に買つて來た敷  
島の袋を袂に探つて、不馴な手つきで火をつ  
けながら、話のあとを促した。

「いえ、でも、お着きになるなりこんなに喋り  
込んちまつて、相済みませんでした。……なん  
でございませう、當分御滞在くださるんでござ  
いませう？ またゆつくりお話に伺ふことに  
いたしますから……、どうぞまア、早速にお風

「へえ、それで……」

信之は、普段は唄んでもよし唄まないでもす  
むのだが、一人旅の手持無沙汰に買つて來た敷  
島の袋を袂に探つて、不馴な手つきで火をつ  
けながら、話のあとを促した。

「いえ、でも、お着きになるなりこんなに喋り  
込んちまつて、相済みませんでした。……なん  
でございませう、當分御滞在くださるんでござ  
いませう？ またゆつくりお話に伺ふことに  
いたしますから……、どうぞまア、早速にお風

「へえ、それで……」

信之は、普段は唄んでもよし唄まないでもす  
むのだが、一人旅の手持無沙汰に買つて來た敷  
島の袋を袂に探つて、不馴な手つきで火をつ  
けながら、話のあとを促した。

「いえ、でも、お着きになるなりこんなに喋り  
込んちまつて、相済みませんでした。……なん  
でございませう、當分御滞在くださるんでござ  
いませう？ またゆつくりお話に伺ふことに  
いたしますから……、どうぞまア、早速にお風

呂をおめしなさいまして……」

## 七

「さアね、ぢアまア一ツ風呂あびて來ようか」  
云ひながら立つて着物をぬぎかけると、手早  
く戸前に浴衣を重ねて、うしろへ廻り、  
「でもまア、ほんとうに不思議な御縁でござい  
ますねえ」

「うん、旅に出て知つた人に會つてものは、な  
んとなく氣丈夫になつて嬉しきもんだよ。……  
實はね、先刻つから頻に考へてゐるんだが、ど  
うしても名前が思ひ出せないんだ。お前さん、  
失敬だが、なんてつたつけれね」

相手をしてれさせないほどに、調子よく笑ひなが  
ら、すぐ素直に答へて、  
「はまでございませう」

「あゝさうさ、おはまさんさ……」

ふと、この女が田舎から出て來て間もなく、  
うちのなかに起つた小さな事件が思ひ出され  
た。——朋子の、洗面所の棚に置き忘れた金剛  
石入りの指輪が、ほんの僅の間に紛失してやつ  
たのが、この發端だつた。元來信之は、そん  
なものをほしがる女の氣持はまだしもとして、  
指輪、——殊に金剛石の指輪などは大嫌ひだつ  
た。趣味でもなんでもなく、たゞ富を指の間に

「へえ、それで……」

信之は、普段は唄んでもよし唄まないでもす  
むのだが、一人旅の手持無沙汰に買つて來た敷  
島の袋を袂に探つて、不馴な手つきで火をつ  
けながら、話のあとを促した。

「いえ、でも、お着きになるなりこんなに喋り  
込んちまつて、相済みませんでした。……なん  
でございませう、當分御滞在くださるんでござ  
いませう？ またゆつくりお話に伺ふことに  
いたしますから……、どうぞまア、早速にお風

「へえ、それで……」

信之は、普段は唄んでもよし唄まないでもす  
むのだが、一人旅の手持無沙汰に買つて來た敷  
島の袋を袂に探つて、不馴な手つきで火をつ  
けながら、話のあとを促した。

「いえ、でも、お着きになるなりこんなに喋り  
込んちまつて、相済みませんでした。……なん  
でございませう、當分御滞在くださるんでござ  
いませう？ またゆつくりお話に伺ふことに  
いたしますから……、どうぞまア、早速にお風



感に鳴つて了つたあとだつた。……咄嗟に信之は、どう自分を處置していいものか、まるで見當もつかなくつた。煙にでもなつて消えて了ひたい思ひだつた……。

親の仇と云ひたいほどの、窪井謹五郎が妾とは知れた、——が、それで惚れた女が遽に嫉妬になれるものではなかつた。知らぬ以前は兎も角も、知つてなほ、竊に他人のものをものに通ふさへ、信之の性分としては、心苦しい限りなのに、そのうへ相手が窪井では、あの世へ行つても、親父にあはす顔がないほどに思ふのだが、それでもなんでも、別れられなかつた。胸甲斐なきに、我から髪を掻き撚るやうな思ひの幾夜を明しても、矢ッ張り好きな女は好きに違ひなく、二人の心が渝らない限りは、假令槍ぶすま、白刃の茜の上でも、相見えようと願ふに嘘いつはりはなかつた。その愛執の前には、親父も窪井もあつたものではないのだが、一緒にゐてさへ、思はずほつと深い溜息をもらすやうなことも、決して稀ではなかつた。何より彼より、信之には、(死んだ親父の顔へ泥をぬる)と云つた氣持が、追れられない樺木だつた、そこへあたみが向くと、忽ち世が、生きながらの地獄となつた。

「あゝ……」

つく息さへ勵ずみ盡へた。

「また……また! どうぞそれは考へないで! きつとあたしちやんとしまりをつけますから……。ね? ね?」

「それほど義理つてものは重いかな。たかが金だ、つて氣にはなれないもんかなア」

「でもね、これまでにあたしを育ててくれた姉さんへの義理は、またさうばかりも考へられませんかね」

「だからあたしが……」

「いゝえ、それは駄目! あなたが出ては却つていろく事が面倒になるばかりだから、……」

あなたのお辛いのは、よくあたし解つてゐるんですから、さぞ斷擇いでせうけれど、もう一つとのま辛抱しててくださいね。決してあたし一日のばしにほつたらかしてゐるわけぢやないんですから。なんと云つても、姉は姉ですし、決して忠から悪い人ぢやアないんですから……」

「それアさうだ……」

そこへ話が行くと、いつも必ず信之は、何故かほつんと言葉を切つて了つた。

# 十

さうして、結局ずる／＼べつたりだつた。近

頃では、破裂し易い爆弾のやうに、どちらからもその話に觸れることを怖れるやうな氣持で、而もそれが二人の間に置かれてゐると云ふ意識は、いやが上にも、凄いほど湧え返つてゐながら、堅く口を噤んで、それで矢ッ張り逢ひ續けて来た。つい三四日前に、最後に逢つた時には、丁度信之は、京大阪の旅ばかりを心に描いて、明日にも出かけた氣持であつた折だつたので、その通りを話して別れたのだが、お澄の方からは、旅のタの字も、箱根のハの字も云ひ出しはしなかつた。たゞ一日も早く歸つて来い、などと、そんなことばかり云つてゐたのだ。

それが……、信之は、カアンと一つ、腦天に鐵槌を喰つた氣持で、思ひもかけぬお澄の後姿に見入つて立ちつくした。

案内して来た女中は、それを、婦人客に對する禮儀からの躊躇とでも思つたのか、うしろから聲をかけて、

「どうぞ……、どうぞお構ひなく……」

その時には、信之の吐も据りかけてゐた。まるで氣もつかずに飛び込んだやうに、平氣で板敷を踏み鳴らして近よつて行つた。

髪に手を舉げたまま、ひよいとお澄は振り返つた。——と、まるで幽霊でも見たやうな顔つ



るのかい？」

丹前に手を通しながら、信之は打つて變つた機嫌顔を振り向けて尋ねた。

「へえ、いつの間にかもう丸三年になりますから、どつちかと申せば、古顔の部になつて了ひました。ほんとに月日の経つのは早いものでございませうね。お坊ちやま、さぞおみ大きくおなりで、お可愛らしいことだらう、なんて、始終ひとりで思ひ出して居りますのですよ」

「もうすぐこの四月から學校だからね、憎まれ盛りで、手におへたもんぢやない」

「まア……。ほんとに一度お伺ひして、久し振で皆様のお顔が見たくつて仕様がないうでございませうよ」

信之は手提鞆の前に中腰になつて、手拭や石鹼を取り出しながら、

「おいでなさいな。お客の立込まない時分なら、一晩や二晩暇がとれないことはないだらう。是非一べん泊りがけで遊びにおいでなさいなね」

「ええ、有難うございます。是非お伺ひいたしたいと思つて居ります。……お廣さん、あなたお風呂場に御案内申してね」

「こゝは、なんです、女中さんは、矢張り部屋

部屋で係りがきまつてゐるわけですか」

「ええ、まア、凡そはさうなつて居るんでございますが、忙しい時分にはお互にすけ合ひますから……」

「ぢア、お廣さん、……つて云つたね。あなたがうちの主任と云ふわけかい？」

「主任……」

と、おはまは、信之の脱ぎ捨てた着物の始末をしかけてゐた手をとめて、悪々身を起こして笑

つてから、「この主任さん、來てからまだあんまり間がございませんですから、氣のつきませんとところは、どうぞ御遠慮なくさう仰有つてくださいまし」

そんな風に話題にされて、はにかんでもじもじしてゐたが、やがてその若い女中を先たてて、信之は、幅の廣い廊下上に靴を鳴らして出て行つた。

風呂場の前まで來てみると、俄に舊い記憶があり……と蘇へつて來た。

「あゝ、さう……、もう分つた……」

云ひながら、観音開きの發條仕掛ではね返るやうになつた自在戸を彼方へ押して、一足ふみ入れるなり、信之はびたりとそこに釘づけにされて了つた。

九

一段下つて、八畳間ほどの板敷になつてゐた。左は洗面所、右は四つ五つ並んで風呂の入口がついてゐる廊下で、正面の板羽日は、洗面所の側と鈍角に交はる斜線で、そこへ大きな爰見がかゝつてゐた。

自在戸の上の半分は硝子になつてゐたから、その鏡の前に、人が立つてゐることだけは、湯氣に霧つて朧けながら、あけない先から目にはいつてゐた。——湯あがりには、いま浴衣をはおつたばかりか腰紐もしめず、けれども、任の下をちよいと腰の間にさ込んで立つた後つきの、きちんと帯をしたよりも、却つて足腰の形を露に、ぶはつく筈の胴から上も、うつ向き加減に兩手を束髪のリイズのあたりへあけてゐるせゐで、肩胛骨のありかまでそれと分るほど艶めかしい姿を前にしては、ひよいと踏み込んだ足をそのまゝに、信之はそこへ立竦んで了つた。……正面の板羽日が斜線だけに、肩越しに見える耳から頬へかけての、煙つたやうに柔い線、……よしそれは隠れてゐようと、紛ふかたもなく、それはお澄の骨格だつた、そして肉づきだつた。

生憎とまた、自在戸の發條が、ギイーと無遠

やつとこれで、少しはものゝ食へさうな腹になつた……

それをななけき聞き捨てに、風を起してあつちこつちへ煽り返す自在戸を、やけにグイと押してはいつた信之は、モウ／＼と立籠めた湯氣に、電燈の光さへ薄暗んだ浴室の、誰一人の眼もないところで、いきなり拳固を振りあげる

と、力いっぱい振りつけた。……ミシリ……それは、はいるとすぐ目の下に浴槽が見おろされなために、凡そ身の丈ほどに建て廻した目隠だつた。その、杉柵の四分板が、縦に割れめがはいつて、へこんで了つた。——蒼白んだ信之の頬には、ちよつと苦笑ひが浮かんで、すぐ消えた。

(馬鹿! 馬鹿!)

せめては、自ら嘲ることの痛快さに、堪へ難い情適の情をやるよりほかなかつた。(こんな馬鹿は、あいつらのはいつたあとの風呂へでも飛び込んで、溺れ死んで了ふがいゝんだ!)……けれども、有様に、その浴槽には、身を浸す氣にはなれなかつた。一二秒躊躇した末に、またもや手荒く自在戸を押して出ると、そこにまだゐる筈の男女の方へはちらとも目を向けず、すぐ隣の浴室へ飛んではいつた。——實際

そこに、二人がゐたのやらゐなかつたのやら、……西洋浴衣の白さだけでも、視野の中に感じはしなかつた。そのくせ彼の耳は、ギーンギーンと響けるやうな、窪井の太い聲を掬ひ込んで来て了つた。そのことが、ひどく忌々しかつた……

いゝ按配に、今度の浴室はあいてゐた。帯をときかけた時に、ふと信之には、こんな考が閃いて来た……。きまろをつけて了はう。綺麗に話をつけてやらう。丁度いい機會だ。正々堂々とこつちから名のつて出て、……あとは隣機應變だ。先方の出やうによつちア……、そこまで来て、急に心が淋しく暗んで了つた。——あれほどびつたりくつついてゐたつもりのお澄の心のなかが、いつのまにか信之には、一さい見當のつかないものになつてゐたのだ……

十二

愛する者の心を見はぐれる、——さう云ふ淋しさの底に、いつも必ず待つてゐる氣持があつた。それはひえ／＼と冷たかつたけれども、さうかと云つて、決して可厭な氣持とばかりは云ひ切れなかつた。度かさなるにつれて、信之にとつては、却つて、身のしまるやうなほろ苦さで、しん／＼と浮え返つて来る質のものになつ

てゐた。

……ひとりだ、なんと云つても、結局人間は、ひとりとツぼつちのものだ。水も洩らさぬ、と云ふほどの仲でも、二人めい／＼に、どうにもならないひとりとツぼつちの寄合なのだ。親子の間、夫婦愛人の仲、……三世の縁とまで呼ばれる主従の結びりなどは、今の世には見聞くも稀で、一世はおろか一年でも、二人の人が、——男女の仲に限らず、男同士女同士の親和だらうとなんだらうと、どれほど堅い結びりでも、一年と續く間に唯の一度、(あゝ、なんと云つても、最後までたよりになるのは矢ッ張り自分ばかりだ、結局ひととはひとだ!)と、しみ／＼ひとりとツぼつちの感慨にうたれることがないとするれば、それは既にこの世の仕合ではなくて、天上のものだ、聖賢か愚者か、そんな普通はづれた人でもなければ、めつたに享け得られない仕合だ、——とは諦めてゐても、なみ／＼の心境では、ひとりとツぼつちの淋しさに、よく堪へ得るものではなく、懲性もなく愛しては、反上極樂の夢に遊んで、ふとまた現世のひとりとツぼつちに目を覺ます、眞に聚を炊ぐの暇さへないのだが、猿のやうに、人はまた夢なしには生き難いものとみえる。覺めての淋しき苦さが、いか

きが、軽くあいた肩の間に、息の通ひも止まつたかと思はれるばかり、硬く凍りついて了つた。

「今晩は……」

不思議ななくらゐる信之の氣持は、急に平靜なものに撥け返つて、自分でも氣がつかないうちに、笑ひ顔にさへなつてゐた。「どうして……? いつ來たの?」

皮肉のつもりでもなんでもなく、さう云ふ日常茶飯の言葉がすら／＼と出た、それで一秒でも早く、お澄の心を平かにしてやりたいと、そればかりが願はれた。……けれども、急にお澄は、右手を袖のなかにひつこめると、それでいつばいに顔を覆うて、くるりと彼方むきになつて了つた。あとに、信之は、ひよいと自分の顔を見た、……不自然な、醜い笑顔が、鏡のなかに映つてゐた。

「ふうむ、さうか、矢つ張り俺の方か……、それぢや仕様がなはい!」

この態も、これが破局か、と云ふやうな氣持が、ひやりと胸へ來た……浴衣一枚で彼方むきに立つてゐる女の方へも、突ツ張つたやうな醜い自分の笑顔にも、目の置きどころがなくなつた。ひとりでに歩きだしてゐた。さうすると、

どの浴室があいてゐるのかしら、とそれが氣になりだした。——つまりそれは、窪井がどこにはいつてゐるだらう、と云ふ懸念と同じことだつた。生憎じやぶり／＼、ふた所ほどに、湯を使ふ音がしてゐた。さうかと云つて、いつまでもまご／＼してゐられもしなかつた。構はず、一番手近の開戸へ、コツ／＼と拳固をあてゝみたが、その途端に、なかからぐいと推しあけられる、——と、タオルの西洋浴衣の袖へ手を通さず、前を掻き合せ、懷中で棲をつたやうな具合に、毛氈がむきだしになるまで裾をたくしあげた小男と、真正面に顔を見合せて突ツ立つて了つた。中からの禿で、四圍にほや／＼と残つた猫ツ毛が、やけにタオルで拭き切つたばかりとみえて、有らゆる方向へ飄いてゐた。ひとつはその故で面變つては見えただけれど、十年以前に二三度見かけたことのある、これこそ窪井謹五郎に相違なかつた……。

## 十一

「や、これア失禮」

口には、さらりと、世間普通の挨拶を述べてゐたけれども、心の面を逆撫になであげられたやうなむしやくしした不快は、信之の高く禿でた眉宇の間に露だつた。——今が今まで、

どの浴室に窪井がゐるか、うつかりそこへ飛び込むやうなことがあつては……との懸念をもつてゐたとは云ふでう、何もお澄のつれが、十が十まで窪井としまつたわけでもないのを、一番わるい場合の想像をして置けば間違はない、と云つた氣持から、強ひてもそれにきめこんでゐたのだ。それなのに、自分にも意識したくない心の底の底には、ひよつとすれば、おもんやお直と一緒に來てゐるのかも知れないと、そこは慾目と云はうか蟲眉目と云はうか、萬一の僥倖も望んでゐたのだ。それが、不思議な顔を見合せ、言葉をかけると背を向けられて、手ひどく裏切られた揚句でも、なほかつ一縷の望として残つてゐたのだが……。

思はずちつとその小男を睨め据ゑて、出入口を開いて通させようともしらずに、信之はそこに、仁王立に突ツ立つてゐた。先方でも、(へんなやつだな)と云ひたげな顔つきで、尺でもとんやうに、頭のでつべんから足の爪先まで、大きく飛び出した目の玉をギョロリと動かしなが、いやに底力のある聲で、

「や、お待遠さん……」

と、無愛想に言葉を返すなり、自在戸をもう一つ廣く推しあけて大跡に歩み出ながら「あゝ

「左様、わしは窪井ですが……」

「さうですか。紹介状なしに、またこんな廊下のやうなところで、突然言葉をおかけ申すのは、重々失禮ぢやございますけれど、實は貴方に、折入つてお話し申しあげたいことがあるのです……」

「は、ア、どう云ふ御用件ですかな？」

「こゝではちよつと申し述べかねるのですが、今夜なり明朝なり、ちよつと一二時間お暇を割いて頂けませんでせうか」

「左様さ……」

指の間に櫛を挟んだまゝの手で、短く刈り込んだ口髭を引ッ張りながら、もう一度あらためて、真正面から無遠慮に、じろく相手の容子を觀察してゐたが、「失禮ながら、一體貴方はどう云ふことをなすつておいでなんです、つまり御職業は……？」

「辯護士です」

「は、ア、成程……。で、御用件のあらましは？」

「あらましと云つては申しあげ憎いのですが、武井澄、あの人に關したお話です」

「ふゝむ」

と、大風に鼻音で答へると、急に言葉使ひま

でがぞんざいになつて、「普段忙しい人間が、たまさかかうして氣晴しに出て來とるんだから、どう云ふ話しか知らんが、……なんなら、東京の邸の方へ來て貰はうよ」

「いゝえ、別段そんな面倒な話ぢやありません。もしなんなら、今すぐこゝで申しあげてもいゝのですが……」

「まさか立話もなるまいで」

窪井は、小さな體を揺りあげ、柄にもない豪傑笑ひをして、ぶいと鏡の方へ顔を向けて了ふと、傍に人がゐると思はない顔つきで、またもや頭に櫛の齒をあて始めた。

十四

「でもまア、要點だけでも聞かして頂きますう」

ぬらりくりり脱けて行きさうな氣勢と見てとると、信之は、何は指いても目打針を一本たてて了はなければと、頻に氣を苛つたが、きてその「要點」と呼ぶに適はしいやうな言葉に、自分ではたと行きづまつて了つた。けれども、一瞬間でもそこに隙間のあけられる場合ではなかつた。自分でも、カツと取り逆上せて行くのが感

じられながら、もうどうにも取返しがつかなくなつた。「……つまりなんです、あたしは……、

あたしはお澄と、……そのウ、つまり……」

無残にも、云ふことが、しどろもどろになつて了つた。それに對して、悠々と姿見の前から向き返つた窪井は、刃に導らずして、既に敵の咽喉を扼したやうな優越に、氣持が、ぬく／＼と、十分にふくれあがつてゐた。

「どうしたんだね、君とお澄がどうしたと云ふんだね？」

「つまり……」

「つまり……？」

「大嫌ひな言葉で使ひたくないんですが、つまり、關係があると思ふんです」

「關係？ それア一體、どう云ふ關係があると思ふんだね？ 一口に關係と云つたつて、關係にもいろいろあるから……」

落つき拂つた意地の悪さで、ニヤリともしずに迫り迫つた。

「云ふまでもなく體の關係を云ふんです……情交があると云ふんです」

やけくそな氣持で、思ひきり可厭な言葉を、自分たち自身の上へ投げつけて了つた。

「ふゝうん」

もう一度、例の大風に鼻音で答へてから、「で、それがどうしたと云ふんだね？」



に焦くが如くであらうとも、明もと三寸、時ふれば忽ち忘れ去る熱さなにも、自然の恵みか悪戯か、憂しとはいへど凡夫の身には、そこらの故を以て住みよい浮世と認じなければ、それこそ冥罰を被るところだらう……。

そこへかけての懲性のつかなき加減を云つたなら、信之は決して人後に落ちない方だつた。彼が何より彼より大切にしている真心で、ひた押しに押し進み、一人相撲の力足を、一生懸命に踏みしめてみても、未は、見るも氣の毒ツたらしく、すつてんころりとけし飛んで、足腰の痛みに顔を顰めるくらゐがおちなのだが、不思議なことには、まだその傷所も癒えないうちから、次なる藝當をとりたてて御覽に入れるにあつて、嘗て一度たりとも(また一人相撲か!)と、しぶ／＼ながらに起きあがつたためしはなく、(今度こそは!)の必勝を期して、喜び勇んで四股を踏み、矢聲もろとも跳びかゝるのだから……。

(よし、それちアいよ／＼ひとりだ! 世に、ひとりほど強いものはありやアしない、ひとりになつて……)

かう、信之は考へた。(ひとりになつて……)と云ふのは(實際まだひとりツぽつちかどうか

解らないが、假にひとりになつた氣で……)の意味だつた。——そこまで來ても、まだお澄の心から離れツきりにはなられなかつた。裏にどう云ふ事情が潜んでゐるのか、少しも知らない、また強ひて知らうともしない自分なのだ、いま偶然日の前に見た事實だけで、すぐさまお澄の心までを疑つては相濟まない、——一方には、そんな反省もあるにはあるのだが、然しそれはなんとなく弱々しい力しかもち得なかつた。同時にまた、その弱々しいものをも、力綱にして取り纏らうとしてゐたのだ。

(……ひとりになつて、あの男の前に立たう。ひとりほど強いものはない。さうだ、あの男と會つて話をしよう……)

### 十三

さう心をきめて、信之は、ときかけてゐた帯を締め直した。

(馬鹿らしからうとも、間拔じみて見えようと、そんなことは構はない。成心をつくらずに、生地のみで應對しよう。それが何よりも肝心なことだ!)

いつか充奮しきつて、武者震ひのやうな體の震へが感じられるだけに、一方そんな考へをも保たうとしたが、(それが既に一つの成心ではな

いか、なんにも考へずに、一時も早く出て行け、と、さう促し立てる別の氣持もあった。例へば有難い護符でも頂くやうに、たゞ深い息を一つ腹の底まで嚙みくだすと、信之は少しの躊躇ふところもなく、浴室の戸を押して出た。

そこでは窪井が、鏡の前に立つて、雪白の薄い髪を、左から禿の上に掻きまぜることに氣を奮はれてゐた。手早く身じまひを終へて、先に部屋へ歸つて行つて了つたものか、お澄の髪は、もうそこには見えなかつた。これは、信之にとつては、寧ろお詔への寸法だつた。

「突然で、大へん失禮ですが……」

つか／＼と、つい二尺とは離れないそばまで歩み寄つて、いきなりかう言葉かけた。

「はア……?」

櫛を持つた右の手を、頬のあたりまでかけて、じろりと見やつた眼つきには、胡亂臭いと云ふ以上に、やゝ狼狽たやうな色さへ見えたが、すぐ大した事でもないと思つたか、ぐいと顔を突き出して、自分より五六寸も火の高い信之を、無理にも下目使ひに見あげながら、何か御用ですかな?」

「あたしは藤代信之と申すのですが、貴方は窪井さんぢアいらつしやいませんか」

す。では、何時頃御伺ひいたしましたらよろしいでせうか」

「さう、これから晩飯をやるから、……さうさ、今から三時間ほどしたら出かけて来たい。……いや、いや、時分にこつちから迎ひをあげよう。なんとか云つたね、君の名は？」

「藤代信之と申します」

「藤代……ふん……」

そのとき窪井は、ふと何か思ひついたらしく、こと改めて信之の顔をぢつと見詰めた。——いよいよ、一番辛い瞬間が近づいて来たことを、信之は直覺した。同時に肚の底から、じりりと湧き起つて来る勇氣をも感じた……

「君は、……君の阿父さんは、いま生きてゐなさるのかな？」

「いゝえ、もう居りません」

「生きておいでの頃は、どう云ふことをして居られた方かな？」

「あつちこつちの會社に首を突ツ込んで居りました」

「はゝア、ぢア……」

「さやうです、御推察どおり、信策の作でございます」

「あゝ、さうかい、そんなら君、初ツからさう

云つてくれりやア……」

その俄の親しみと、懐しげな容子には、些の嘘もなかつた。殆んど手を把らんばかりにそばへよつて来た……

これは、幾度となく描き變へられた信之の空想のなかに、全く似よりのものさへなかつた光景だつた。

はツと胸のあたりが熱くなつたと思ふと、もうこらへる暇もなく、眼のなかいっぱいの涙になつてゐた。眞正面に近よつて来た窪井の顔も、ギラ／＼と涙に映る光のために、忽ち消えて了つた。……しばたゝきもしないのに、筋を引いて、熱い涙が頬へ流れ落ちて来た。

## 十六

好意をもつて對つた人に、惡意で報はれた場合の淋しさは、いかにそれが救はれがたく辛くとも、どこかまた瘦我慢に似た底力の、撥き返さうとする氣勢だけでも感じられるものだが、反對に、好意で報はれた徒しい敵意ほど始末に

わるいものはない。云ひ換れば、「人を見たら泥棒と思へ」の人生觀で對つて行くと、存外それが大進ひで、結局「渡る世間に鬼はなし」の實感に、しみ／＼嬉しくなる時の、己を恥づる氣持、「穴があればいいりたい」と云ふやつだが、もと

も人は、なにも好きこのんで惡意や敵意をもちたいわけではなく、望んでも得られないと思へばこそ、先滑りの用心から、故ら着せかけた衣だけに、脱ぐひになれば、さして氣咎めしな

いで、たゞもう嬉しさに溺れて了ふ……。信之の嬉し涙もそれだつた。今が今まで、窪井を可厭なやつとばかり思ひ込んでゐた自分に、ついで、とかくの反省はさて措いて、思ひの外

の善良さに、手も足も出なくなり、誰に捧げるでもない嬉し涙が、たゞだらしもなく零れて来るのだつた。

けれども窪井には、その涙の意味が、本當に汲みとれたかどうか、俄に言葉を改めて、

「いや、これアどうも、全く意外でしたな。

貴方が藤代さんの、……さうですか、……ちつとも存じませんが、つい失禮ばかり申しました

が、どうぞまア悪く思はないで下さい。……御

尊父さんの御在世中には、實に一通りならない

御眷顧にあづかつたもので、いや、全くお見あ

げ申した立派な御人格の方でしたよ。吾々後輩

一同、常に大人の御教訓で、どれくらゐ啓發さ

れるところがあつたか知れませんか。いまだに、

事にふれては、大人のお言葉をひし／＼と思ひ

あたるがありますよ。いや全く、えらいお

「それが、貴方とは全く交渉な話でせうか」  
それだけでも、挑戦的に出たのはよく／＼の  
ことで、信之が、一旦の逆上から、ずる／＼  
と滑り落ちて了つた窮地は、容易に脱出られさ  
うもないものだつた。

「さう、交渉があると云へばあるし、ないと云  
へばないやうなもんだが、一體そんな話を、慇  
懃わしの前に持ち出して来た目的ぢやね、――  
それから先に何はうぢやないか」

「あなたとお澄との交渉を、きつぱり斷つて頂  
きたいと思つてゐるのです」

「はゝア、……慥か君は辯護士をしてゐるとか  
云つたやうだが、一體どう云ふ権利があれば、  
そんな要求を、やたら他人に對してすることが  
出来るものか、後學のために、そいつを一つ承  
はつて置かうか」

「もとより權利義務の問題ぢアありません。た  
だあたしは、眞心をもつて、貴方の眞心に御  
相談ねがひたいと思つて、それでこんなところ  
で、突然お言葉をかけたりましたのですが、目的  
はどこにあるかと仰有られたので、間の細かな  
心持をはぶいて了つて、いきなり最後のお願ひ  
に飛んだのですから、それであたしの言葉が、  
『要求』と云ふやうな、ぶしつけな感じのものに

響いたのでせう。然しあたしの心持は、決して  
そんな、『要求』と云ふやうな大風なものではな  
いのです。そのあたしの心持を、ゆつくり聞  
いて頂きたいと思つて、それで一二時間のお暇  
を願つたわけですが、先ずりをした申分で、自分  
でも大へん不愉快ですが、どうかゆすりがま  
しいことでも云ひ出すではなからうか、と云  
ふやうな御心配なら、決しておもちくださいま  
せんやうに……。いま初てお目にかゝつたばか  
りで、こんなことを申したつて、誰だつて信用  
してくれる人はいないかも知れませんが、決して  
あたしは、そんな胡亂な人間ではございません  
から……」

### 十五

心おきない友達との雑談の場合は別だが、今  
時の若い男としては、信之の言葉使ひは、わり  
に鄭重な方だつたし、殊に年長者に對つては、  
たゞそれだけの理由で、一應の敬意を表すこと  
を忘れなかつた。父の恨みもあり、いま眼の前  
に難攻不落の地の利に安心しきつて、のしか  
かるやうに傲然と構へこんでゐる窪井に對して  
も、憤懣の情が重なり充ぶるほど、表面の禮儀  
は勿論、心持の潤ひ、繊細さをも失ふまいと  
した。

（出来のいい、爆裂彈は、自分の破裂する時機を  
決して間違ひはしない）

ふと浮かんできたそんな格言じみた言葉を、  
自分自身に云つて聞かせたりして、一生懸命  
心を落つけようと努めた。

窪井は、然し、ゆすりではないから安心して  
くれと云はれた言葉を、たゞそのまゝ素直には  
受取らなかつた。（大きにお世話だ！ 誰がお前  
のやうな小僧ツ子を相手に、心配なんぞしてた  
まるもんか！）とでも云ひたいくらいで、却つて  
氣持をこぢらしてゐた。

「わしは、他からゆすられるやうな弱い尻はも  
つて居らんし、従つてまた君を、ゆすりだなん  
ぞと思ふ理由もないんだから、その點は君こそ  
安心したがいゝのだ。……ところでその眞心か  
らの御相談とやら、云ふやつだが、そんなことで  
一二時間も暇をとられちゃり切れんよ。然し  
斷つてと云ふなら、今夜でもわしの部屋に來た  
まい。そして、ひとつ要領よく手知に願ふと  
しようぢやないか。何しろこつちはたまさかの  
暇に、氣保養に出かけて來てるんだからね、い  
つまでもぐづり／＼つまらん愚痴を聞かされる  
のはかなはずよ」

「早速御承諾くださいまして有難うございま



いつまでも窪井が盃を廻してよこすので、食事が永びき、たうとう仕舞には、一座に倦意の色さへ漂ひ始めた。

「いかがでせう……」

と、信之は、それ故に口を切つて、一先刻申しあげていたお話をいたしたいのですが……」

「はア、はア」

窪井は欠伸を噛み殺しながら、「え、伺ひませう……ぢア、君はちよつと遠慮して貰はうかね」

で、おはまは、低聲に何か云つて、膝の上に持つてゐた鏡子を、お澄のそばへ押しやると、一先さがつて行つた。

「早速ですが」

と、信之は、居すまひを正して話しました。

「一應事實を申しあげますと、もと／＼あたしは、お澄……、お澄さんに、貴方のやうな方があると云ふことは、全く知りませんでした。つまり、當人が話してくれなければ、あたしとしてそれを知る筈もなかつたのですけれど、この正月の末に、――好きになつてから丁度二十日ばかり経つてからですが、偶然の機會で、はたから貴方のことを聞いたので、今のうちなら別

れられないことはないと思ひまして、その晩早速出かけて行つたのですが……」

「お話なかばですが、さう云ふ具體的なことは、もう何う必要がなさうですな。どうでせう、いきなり要點へ飛ばうぢアありませんか……」

貴方は、あたしを、所謂懇仇のやうに憎んでおいでですか、それとも、あたしに對して心苦し

いとか濟まないとか云ふやうな氣持でおいでなのですか、それともまた、そんなことはもう問題ではなくつて、どうでもかうでもお澄を自分

ひとりの所有にしてしまひたい、と云ふ御希望なのですか。それ次第であたしは、即座に決着の御返事をいたす考へてゐますがね。お澄はもと

よりのこと、先刻からの御容子で、失禮ながらあたしには、貴方と云ふ方の御氣性もよく嘸み込めてゐると思ひますから、大して間違つた計

らひはいたさないつもりですが……」

## 十八

有難に、いざとなるとしつかりしたものだつた。お座なりや誤魔化しは、藥にしたくも見出

せない窪井の言葉に、豫期のはづれた信之は、やゝ面喰つた氣味だつた。こつちも、もう一度よく／＼考へ直してみても、その上でなければ、

うかとは口が利けない、――さう云ふ感じだつた。

不思議なことには、當然それであるべき第三の場合、どうでもかうでもお澄を自分ひとりの所有にしてしまひたい氣持が、實感として、胸いづばいに溢れては來ないどころか、却つて干潮のやうに、さら／＼と遠退いて行くのが感じられた。何故だか解らなかつた、たゞそれが嘘の

ないところだつた……

(こゝだ！ くだらない負債を出して、ちよつとした恥を、二倍にも三倍にもするやうなことがあつちアならないぞ！ 構はないから、なんでも正直にやツつてろ！)

さう決心すると、急に心がさば／＼と輕くなつた。

「猫の目のやうに、くる／＼云ふことが變つて、――まるで子供みたいで、いかにもお恥しいわけですが、考へてみると、この問題に貴方を引

ツ張り込んだのは間違ひでした。若しあたしたちが、どうでもかうでも一緒にいらうと思へば、失禮ながら貴方に御相談すまでもなく、夙の昔にその意志を貫いてゐなければならぬ筈

です。今日まで、なんのんのと自分たち自身を誤魔化して、曖昧に迷ひ續けて來たことは、それが最も正直に物語るものでせう。お恥しい次第



方でしたな……」

こんな風に、引延ばされた言葉で聞いてみると、然し、今さっきの懐しげな容子までが、ほんの見せかけだったかと疑はれるほどに、雀井の感情の平靜さがむきだされてゐた。なんとなくそらくしくして、聞いてゐる方が恥しくなるくらいだった。どつと一時に溢れて來た泪も、それでまた忽ち乾いて行くのを、信之は、しみじみと淋しく感じた。何ももう云ふことがなくなつて了つたやうな氣持で、黙つて領り返すばかりだった。

「で、貴方、いつこちらへおいででした」

「たつた今ついて來たばかりです。貴方がたのおいでことは、全く夢にも存じませんで……」

「ちア、無論まだ御食事前でせうな。……うん、それア丁度よかつた。お近づきのために、御一緒に食事をいたしたいと思ひますから、どうぞその御都合になすつて下さい。支度が出来次第、こちらからお迎ひを差あげますから、失禮ですが、どうぞ是非部屋までお出かけくださいませんか」

「有難うございますが、お食事のおすみなつた時分にお伺ひいたします。親父との御交際はそれとして、今夜のところは、唯今ちよつと

申しあげたやうなわけで、こちらから無理にも御面會を願つたやうなわけですから……」

「まア、さうお堅く仰有ることはないでせう。食事後に、そのお話もゆつくり伺ひますが、同宿のよしみだけでも、よんだりよばれたりするくらゐは普通でさアね。まして藤代大人の御子息と伺つたからは、是非ともお近づきのお益も頂きたいし……」

「さうですか。それほどに仰有つてくださるのをお斷り申すのも却つて失禮ですから、それでは、御遠慮なくお伺ひいたすことにいたしませう」

## 十七

二時間ほど後には、六十歳を越して少しも精力の衰へを感じない商魂商才で叩きあげた實業家と、その男のために、金で自由を縛られてゐる女と、またその女との相思の愛情を、堅く信じて疑はない壯者と、かう云ふ三人が、而も互にその三角關係を承知して、ひとつ食卓に差向つたと云ふ不思議な晚餐の光景が展開されてゐた。

床の間を背負はされた信之は、丹前浴衣を、結城のちよい／＼着に改めて來てゐた。主人公は、丹前の上から、お召の縫紋をはおつて、大

島に、古代紫がかつた鹽漬の袱紗帶を、安易な氣持に低くしめ、湯あがりの薄化粧に、頬の血色をほの紅く浮めた寵嬖を、そば近く坐らせて、そろ／＼もう機嫌よく酒が廻りかけてゐた。それまでは、生前奇行の多かつた信策の思出などが、主な話柄になつてゐたが、

「勿論、さう云ふ話の聴きとして、信之は、誰よりも興味をもち、また嬉しくも思ふものだった、やがて持ち出さなければならぬ問題が胸にかへてゐるので、さうは氣も引きた／＼ず、頻りと勧められる酒にも味はなかつた。第一、いつも、おい、お前あ／＼しろかうしろと云つた調子で對してゐるお澄を、彼の女の「旦那」のそばに置いて、しかつめらしい顔を見合せてゐるのからして、尻こそばゆい思ひだつた。それもいつそ三人きりならば、最後には、事實ありのまゝの關係をむきだしに、自由な口の利きやうもあらうと云ふものだが、丁度この部屋の手持におはまが廻つてゐて、事々につけて信之のうへに氣を使つてくれるのが、例へば何かの出演に、見ず知らずの他人よりも、内々の人に見てゐられる方が、遙に氣づまりでもあれば、てれ臭くもあるやうなもので、どうにも底を割ることの出來ない感じがあつた。

せられもした。信之は、寧ろその氣持に氣をかねて、一通りあとさきの容子を聞くために、床の上に起き返つて胡坐をかいた。

おはまの語によれば、信之が歸つて、部屋のとあとかたづけをしてゐる間、二人は一言も口を利かなかつたが、床をのべようと云ふと、あとで呼ぶからちよいと待つてくれ、と一旦さがらせたのがお澄で、それから三十分もたつた、ないに、呼ばれて行つてみると、寢屏がごろりと横になつたまゝ、ひどく氣むづかしい顔つきで、すぐ自動車と呼べと云ふ。もう終列車にも間に合はない時刻なのに、どうする氣かと思つて、氣がつくと、隅の方ではお澄がこそ〜と荷造りをしてゐる。いつの間にかすつかり着物も着換へてゐたが、いかに無神経でも、その二人の關係に、取り返しがつかないほど白け返つた空氣を感じずにはゐられないし、そこは女同士で、そばへよつてそれとなく触りをこめて、手傳ふことでもないかと言葉をかけた。いよく別れる時が來ても、女が、「では御機嫌よう」と丁寧に頭をさげたのに對して、男は殆ど振り向きもせず、「ちア、まア……」と言ふ、それもあとを濁して、そのまゝ見送りにも立たずにねころんでゐた、と云ふのだ。いつの

間にどう云ふ話になつたのだから、餘り思ひがけないことだつたので、これは……と、いつべしの忠義だてで、何よりもまづ信之の耳に入れて置かうと、それで自動車を見送るなり、すぐこつちへ駆けつけて來たのだつた。

「へえ、さうかい」

それまで詳しく聞いても、不思議なほど信之の心は平澹だつた。もしや……と、萬々が一の、生命に關するやうな想像も、ちよつとあたりに浮かんて來ないではなかつたが、急に白々しく、總てが遠く隔り去つて了つた感じで、ぼんやり聞いてゐた。

「でもね、時刻が時刻でし、なんぞ心配なことではないんでせうか」

「なに、大抵大丈夫だらう。よしまた大丈夫でなかつたところで、どうにもしやうがありアれない」

「一體どこへいらしたんでせうね。尤もそれア、明日の朝自動車屋に訊き合せてみれば、すぐ分ることで……」

## 二

あかの他人のおはまでさへ、そんな風に云つて氣をもんでゐるのに、つい三四日前に木挽町の二階で、少時の別れを惜み合つた仲でありな

がら、この冷淡さはどうしたことだらう、と、信之には、我身で我身が解らなかつた。心に泥んだ考へ方から云ふならば、これは、どうしたつて薄情と呼ばれなければならない急變だつた。

(えゝ、合せものは離れもの、一旦續飯が利かなくなれア、また原のばら〜だ。世の中はひとりのこと、ひとりのこと！ひとつが二つに離れツこはないんだ……)

そんな風に考へることが、この際ひどく心持がよかつた。それは、ほてつた體を、ぢかに冷たい板敷の上へでも轉がすやうな、ひやくとした快さだつた。

けれども信之には、その快い瞬間をさへ遮り通る影があつた。「この際」と云ふ條件なしに、ひとりの涼しさを喜ぶほどの、――まだそれほどの洒脱には到達してもゐず、また夢にもそんな境地を望んでゐるわけでもなかつたが、而もなんとなく、その快さに溺れ切れないやうな、中途半端な感じは、慥に心の裡を掠めすぎたのだ。

「まア、いゝさ、どこへなりと、行きたいところへ行くがいゝや。一體生意氣だアね、女のくせに、一本立が聞いて呆れらア」

ですが、どこか一本も二本も足りないところのある、いゝ加減な氣持だつたのです。……お澄さん、貴方さうは思はないかね？」

お澄は膝に目を落して、黙つてゐた。自問自答の時間を與へるために、男たちは、可なり永いこと待つてみたが、その容子には、答へようとする意思さへも感じられなかつた。

「いや、全く仰る通りだらうと思ひます」と、窪井が、たうとう待ちかねて口を切つた。

「よくさう男らしく、眞ッ直に仰有れたことだと、内々感心いたしながら何つて居りました。仰る通り、意思はあつたが方法がつかなかつたでは、申開きは立たない道理です。お澄だつて、どうでもかうでも貴方の方へ行かうと云ふ氣なら、さうきつぱりあたしに斷ればすむことです。それをいつまでも愚圖々々してゐたのは、その意志がはつきり確定してゐなかつたからでせう。これは、お澄に代つてあたしから斷言しても、あなたが依怙の沙汰にはあたるまいと信じます。……ところで、問題はまだ將來にかゝつてゐますね。今後もし貴方がたが逢ひ續けて行くものとすれば、そのうちには、またどう變つて來ないものでもない。將來のことは、それが現在に來るまでは何も云へない、と云つ

て了へばそれまでだが……」

「あたしにお暇を頂かせてくださいまし」

その時お澄が、窪井の方へ、きつぱりとかう云ひ放つた。餘り唐突なので、窪井も信之も、氣持のあるところを汲みかねて、黙つてゐると、すぐにあとを續けて、一藤代さんにも、もうこれ

きりお目にはかゝらないつもりです。おふた方のおかげで、あたしにも、ぼんやりながら自分と云ふものが解つて來たやうな氣がいたします。

これからは、あたし、男の心持になりませう。仕合な結婚でもしない限り、それでなくては、とても女は生きて行かれません……」

「違ふな、その情りには、あたしはちつと賛成しかねるな」

かう信之が口を出したけれども、お澄は耳にかけなかつた。

「もうこれからは、きつと一人でやつて行きます。この世の旅には、つれなんでしょう、決して出來ないものと思へばすむことなんですから」

## 裏切者

旅に出てみて、信之は、心もからだも勞れ切

つてゐる自分だと云ふことに、今更ながらつくづく氣がついたのだ。

……昨夜、まだいっぱいに力を出しきらない相談で、ヒヨイと膝をついて了つたやうな、あつて來ると、すぐ寢床のなかにもぐり込んで了つたのだが、もとより眠つかれもしずに、あり餘る思ひに鎮されてゐると、程もなくおはまが、へんな顔つきをしてはいつて來て、枕もとに坐り込んで、たつたいま、お澄ひとりだけ歸つて行つた、と話した時にも、はツと起き直るだけの元氣すらなかつた。尤も、何も知らないおはまの前で、さうすることも、考へてみれば可訝しなわけだが、然し潑刺としてゐる心ならば、そんなことぐる問題にはしない筈なのに、あながちその思はくを氣にしたためでもなく、ただぼかんとして聞いてゐたのだ。おはまにしてみれば、人拂ひまでした會談のあとに、すぐ引き續いて起つた事件だけに、内容に就いては凡その見當さへつかないながらも、信之に話して聞かせたら、きつと吃驚するだらう、くらゐには考へて來たのだらうから、この無關心な態度は、全く意外だつたと同時に、餘計なことをして了つた、と云ふ間の惡さで、幾分しよげさ



ですよ……」

「佐々木つてえと……？」

「對山樓ですわ」

「へえ……」

以前からその宿屋と、どうか云ふ關係でもあつたのなら別だが、夜更に、若い女の身そらで、唯ひとり、ひよつこりはいつて行つたものとすれば、それは、なみ／＼ならぬ決心がなければ出来さうにもないことだつたし、信之のあたまにあるお澄では、どこからどう考へてみても、そんな強氣なまねを仕終せる氣性とも思へなかつた。殊に同じことでも、山をくだらずに、反對に登つて行つたと云ふ點が、さしたる理由もなく、まるで直覺的な不安を植ゑつけるに十分力強かつた。

「ふうん、可訝しいね」

考へてみたところで、あてのつくことでもないのを、信之は、左に顔を支へ、右に盃を弄びながら、ぢつと思ひ沈んだ。——あゝ、ふ優しい、決してひとに楯つくことをしない性質の、どんづまりの底の強さ、そんなものが、擧てあたまたに映つて來た。柳に雪折れなし、しわしわと握み切つた擧句、ぎつちりとこたへる力が、今になつて考へてみると、昨夜急に暇をく

れと云ひだした時からのお澄に感じられないこともないやうな氣がして來た。その力では、どんなところへ追ひこくられて行かないものでもない、——それを思ふと、急に信之は、居ても立つてもゐられない氣持にされて了つた。

「いゝえ……」

「どうしてさ」

「別にお訊きにもなりませんし、いつでもお一人の時は、きまつてさうですけれど、今朝からずうツと坐つたきりで、なんですか調ものゝやうなことをなすつておいでですから……」

「さうかい。……勿論、飯はまだだらうね？」

#### 四

この突然の「飯はまだだらうね？」の意味が、おはまには呑みこめなかつた。

「へ？」

「いえね、もし窪井さんがまだ晩御飯前だつたら、昨夜のお返しがてら、一口つきあつて頂かうかと思つてさ」

今更こつちからは電話一本かけ憎くなつて了つたお澄の上に、俄に眞ッ黒く凝り塊つて來た不安を、せめて口へ出してでも散じようと云

ふのに、窪井こそは、唯一無二の相手だつた。……あとと思へば、その弱々しい氣持も、體に病的だつた、神經衰弱的なものゝ考へ方だつた。けれども信之は、些もそこへ氣がつかかなかつたのだ。

「えゝ、まだお食事は差上げませんが……、それでは、さう申しあげてみませうか——」

「うん、何も特別の御馳走もございせんが、もしお暇でしたらつてね、よく丁寧にさう云つておくれよ」

「へえ、承知いたしました」

客を招んで置いて、こつちばかり赤い顔をしてゐては悪いと思つて、おはまが返事を齎して來るのを、盃はからのまゝで、信之は例の喫つても喫はないでもない煙草を、ぶかり／＼ふかしながら待つてゐた。……思ふともなく、欠ツ張りお澄のことが、あたまたにあつた。それは然し、現在のお澄の身の上を案じ煩ふ心ではなかつた。どうした加減か、ふとあの、お澄に窪井と云ふ旦那のあることを知つた晩の記憶が、細々と思ひ浮かべられたのだ。……だん／＼考へて行くうちに、當時は、あれほどに憎え返つてゐたもりの自分のあただが、存外、いゝ加減な、締のない、もつと悪く云へば狡猾とも呼



苟立ちやすく、信之は、そんな風にお澄のやり方に對する反感を、何も知らないおはまの前で破裂させたりした。

そしてやがて十二時近くに、勞れ切つて眠りに落ちると、一度隣の部屋でも掃除するらしいはたきの音に薄目をあいたきりで、昏々と午後三時すぎまで、なんにも知らなかつた。起きて、ゆつくり風呂をあびて来て、新聞でも見散らかしてゐると、すぐもう山の間には夕陽の影さへ消えて了つて、朝酒やら晩酌やらわけの分らない盃を、酒精中毒で細かく震へる指先に把りあげるこゝとなつた。

「どうしましたね、昨夜あたしが招けて行つた、あの三階のお客さんは。まだ御滞在ですか」  
たぶんもう歸つて了つたことは思ひながら、念のためと、酌についてゐる若い不馴な女中のお廣に、かう尋ねてみた。

「え……」  
「お歸りになつたのかい？」

「いゝえ」

「まだいらつしやるの？　へえ、さうかい。そ

いぢア……」

昨夜の返禮ながら、招んで、二人で一杯やるかな、——十分寢足りた機嫌のよきから、ふい

とそんな氣を起した。それには、同時に同じ女を失つた一人の男が寄り合つて酒を汲むと云ふのも、飄逸な感じで、ちよいと悪くなさうな氣もするのだつた。ぶふまでもなく、昨夜以來、親の仇どころか、雀井が相應すきな人物になつてゐた……。

が、よく考へてみると、飄逸と云ふやうな趣味は、實は彼の柄ではなかつた。雀井の年齢ごろにでもなれば、またとぶふこともあるが、彼としては附焼刃の、相手に阿る態の嫌味になると思ひ返した。

「さうかい、あたしアまた夙にお歸りなつたんだらうと思つてた」  
うつかり云ひ出した言葉をも、そんな風に誤魔化して了つて、信之は、なみ／＼と注がれた杯へ唇をよせて行つたが、同じ屋根の下に知つた人がゐると云ふだけで、相手ほしやの氣持が、俄にたかまつて了つた。

### 三

そこにおはまがはいつて來た。

「まア、随分よくおやすみになりましたものですねえ」  
「おかげで少しは人心地がついたと云ひたいところだけれど、あんまり寢すぎたせゐか、却つ

てまた寢たりないやうな氣がする——  
「ほんとにそんなもんですわねえ……」  
「ときに、例のひとの行方は知れたかしら——  
有繋にそれは氣にかゝつてゐたし、おはまもきつと、何かその話で出かけて來たのだらう、と思はれた。

「それなんですがねえ、旦那様……」  
案の定、すぐ改まつた顔つきになつて、「あたしども、なんにも知りもしないくせに、ほんとに餘計な心配なんですけど、なんだか氣になりますもんですから、今朝ほど自動車屋に電話をかけて訊きましたんです。さうしましたら……」

そこでふと言葉を切つて、こんな云はでものお喋りをしていゝものかしら、とでも考へついたらしく、信之の表情に、ガツと瞳をこらしてゐた。

「さうしたら……？」

何氣なくあとを促しながら、てれ隠しに盃をあけて、お廣に酌をして貰つた。

「さういたしますとね、どうと云ふわけでもございませんけど、たゞなんとなく小田原の方へおくだりになつたこととばかり思つてましたのに、塔の澤の佐々木へお送り申したつて云ふの

でもなかつた。——役にもたないことでは、假令一分たりとも時間を消すわけにいかない、さう云つた氣持の、極端な實利主義が、あの、年寄らしく性急な眉間の八の字と一緒に、まさまじと信之のあたりに思ひ浮かべられた。

然し、人格と遊離してゐる間こそ趣味だが、永年の間に、すっかり染み込んで了へば、丁度體臭のやうなもので、嫌ひ人には鼻持がならないわけけれど、一旦好きになれば、それがまた人格的な魅力となるわけだ。人間として、好き嫌ひのないやつはゐない。趣味と云つたところで、要するに、その好意の延長線上のものだ。決して根のないわけではないのだから、それが外からの附焼刃である限りは、どんなに高雅な趣味だらうと、畢竟は愚劣なものに違ひないけれど、しつくりと己に即いて了つた暁には、場合によつては見識とも云へるし、また或る他の場合には、主義とも主張とも呼ばれて、つまりその人の特徴を成す所以だ、従つて次第に人格の大をも成す所以だ……

信之は、あたまのなかこそいやに雄辯に喋り續けてゐたが、口には時々酒が注ぎこまれるだけで、永い間言葉が斷たれてゐた。もうそろそろ彼は、ひとりゐる時にきまりの、猫の目ほど

もあとから／＼變つて行く己の思考を、我ながらつく／＼小五月蝋く感じだしてゐた。例へば振子のやうに、端から端へと、たゞ目まぐるしく、考へを往きつ戻りつさせてゐたところで、それが大した人格修養になるでもないと思ふと、もう一刻もこんなひとり旅を續けてゐる氣はなくなつて了つた。早く東京へ歸つて、氣の合つた友達や、好きな女たちと、悠々自適してゐる方が、どれほど心の養ひになるか知れない、と思つた。

## 六

十日、半月、永びいたら一ヶ月でもと、出て來た旅が、たつた二晩の泊りで、信之は、ひよろりと東京に舞ひ戻つて來た。

へんに陽の力が強く、蒸暑くて、颯々風の日だつた。近づくに従つて、大火かと驚かされるばかりに、東京の空は、黄褐色の濁りを増し、見たばかりで、氣持が苛立たしく乾いた。誰しも、好きと云ふ人もめつたにあるまいが、信之にとつては、雨風ならばまだしも、天氣がよくて風の強い日くらゐ、氣の落つかない、痼癢の立ち易い、我ながらどうにもならない可厭な氣分にされるものなかつた。——旅で、身にも心にも却つて勞れや衰を増して來た態の

信之は、新橋で汽車を降りるなり、停車場の構内に渦をまいてゐる埃を眞向からくらつて、ひとたまりもなく懷返つて了つた。

タクシーを雇つて、すぐうちに向つて走らせだが、芝口行きの電車通りから、土橋のガードの方へ曲らうと云ふところで、インパネスの袖をはためかし、片手に中折の頂天をおさへて、前こどもに、埃のなかを泳いで來る三好を見かけた。おや、と思ふと、そのうしろには、亂れて赤いものゝちらつく裾を兩手に抑へて、束髪のまはりを戰かせ、おくれ毛をべつとり頬にはりつかせながら、風上へ斜に構へ、絲のやうに目を細くして、立ち竦んでゐる美津子が見えた。

(おや／＼、此風のなかを……)

と、微笑ましい氣持になつて、三好だけ見かけた瞬間に、運轉手に聲をかけて、車をとめて貰はうかと思つたのもそのまゝに、すれ違つて了つた。(どこまで埃っぽい道行をしようと思ふんだらう。……だが、よつほど仲がよくなくなつちや、こんな日、……俺なら御免だなア……)

云ふまでもなく、信之は三好が好きだつた。文學に對する才能も認めてゐたが、それより何より、この二三年來何かと世話をやく方の位置

べないことはないほどのものだつたことに気がついて來た。

……お澄がひとの妾だ、その旦那は窪井だ、かう聞いた時の信之は、實際腹を立てた。然しそれを秘してゐたのは、彼に對する好意からで、それをあかしたなら捨てられはしまいか、と云ふやうな、女心の狭さから、悪い、と思ひながら、つい一日のばしにしてゐた心根は、あの事實を聞いた瞬間から、解りすぎるほどよく解つてゐた。それならば、腹が立つ一方には、既にお澄を赦してゐた筈だ。而も彼は、型の如くに女を恨み、憤つて、型の如くに泥酔し、夜陰に乗じて、男でひとの妾宅を叩き起したのだ。今にして思へば、それでは全く小説の運びだ、芝居氣だ、實感に遠い紋切型の行爲だ、と、肇て信之には、さう云ふ苦々しい反省が浮かんで來たのだ。さうなつて來ると、もう自棄くそ半分、溝泥のなかに自分を擲り込んで、ぐちゃぐちゃに踏み躪つて了はなければ氣のすまない、あの、偏執的な自己嫌惡に陥つて了ふのだつた。……信之は、肚のなかで、自分自身に對して口穢く罵りかゝつた。

どんなことがあつても、家庭の平和だけは破りたくない」と云ふ、いかにも中産階級的な常識

主義から、肚の底の底では、内々お澄の身の未を荷厄介に思つてゐた貴様のことだから、ひとの妾と聞いて、大に安心したり喜んだりしたのが本當なんだ。それを、それではあんまり色惡すぎると思つて、相手の好意から出てゐるほんの些細な祕事を、さも／＼一大惡事でも發見したやうに騒ぎ立て、自棄酒の名のもとに、酒精で本心を麻痺させて了ひ、ひとの妾宅の門を、たれ憚らず叩いた時には、さしづめ羽左衛門の役どころで、さぞ氣のいゝことだつたらうよ。だがそれは、貴様の靈魂とはなんの關はりもない、ほんのくだらないお茶番さ……。

## 五

そんな氣だから、お澄にだつて愛想をつかされるし、窪井にまですつかりうは手に出られて、とんだ馬鹿を晒すことになるんだ。要するに鍊が足りないからだ、上ツ面の常識で動くから、そんな間違ひも起るので、自分の本心に沈潜してゐさへすれば、いくらなんでも、もうちつとはましな行爲が出來た筈だ。そんな風に、氣持がふたはつく」と云ふのが、つまり人間としての鍊の足りない證據だ、駄目だ、駄目だ！ ほんとうにしつかりしなきやア駄目だ！ 男と生れて完全に女に惚れることも出來ないくら

ゐなら、それこそ、豆腐の角へでも頭をぶつけて死んぢまふがいゝんだ！

荒々しい氣持で、無殘なほどに自分自身をやつつけてゐると、そこにおはまが戻つて來た。「さう申しあげましたら、折角ですけれど、少し勞れて居りますから、今夜はお歸り申しますつてことでした」

「あゝ、さう……御苦労さん」

成程、それが大人の心に相違なかつた。同時に同じ女を失つた男が二人よつて、愚痴の云ひ合ひをするなどは、洒脫どころか、齒がうきさうに生々しく、青臭く、そして厭味ツたらしい話ではないか！ それが何故、一時たりとも、ちよいと好もしい風景なり心境なりに思へたのだらう。趣味だ、而も悪い趣味だ！ いや、趣味なんでものに、一つだつていゝものがある筈はない。固定した好み、——そんなものこそ、人を、例の枯涸した常識主義へと導いて行くものなんだ。

（すぐそれと察して、膠もなく斷つてよこしたのは有聲に……）

大したものだ、と無條件に感嘆しかけたが、ふと氣がつくと、そこにまた窪井らしい趣味から割り出された臭味が、ぷうんと感じられない



「いゝえ、それがね、その時にお話するのを忘れて了つただけけれど、まだ今日ぐらゐお在宅だらうと思つて伺つたら、なんて、大へん困つたらしい御容子でしたから、あたしで解りますことならつて、さう申したんですよ……」

「さうしたら？」

「紙屋の拂ひを頂いとくのを忘れてゐたからつて……尤もこんなに早く歸つていらつしやるのでしたら、三好さんもそんなにお困りぢアなかつたんでせうけれど、あなたが、ひよつとすると一月も留守になるやうなことを云つていらつしたし、それに例の通りお出ましになつたらそれつきりで、どこにいらつしやるのやら葉書を一枚下さるわけぢアないんですから、あたしお氣の毒だと思ひまして……」

「金を出してやつたのか？」

「いゝえ、七百何十圓とか云ふんですもの、とてもそんなお金、うちにあらう筈はありませんから……」

「可訝しいな、紙屋にそんな拂が残つてゐるわけはないんだが……で、どうしたんだい？」

「小切手を切つてあげましたわ。請求書を忘れて来て、はつきりした金額が分らないつて仰有いますから、判だけ捺して、金額はあとから書き

込んで頂くやうにしたいんですけど……」  
「それアそれでもいゝが、……可訝しいな、慥に紙屋と云つたかい？ ふうん、つい先達紙屋も印刷屋も拂つてやつたばかりだぜ。二三十圓くらゐのものなら、はしただけ拂ひ残しになつてゐるつてもあるだらうが、七百何十圓なんつて……、どうも少し可訝しいなア……」

## 八

どう考へても胸に落ちない變な話だつたけれども、つい一時間たつたかたゝない前に、同じ東京の街で、埃に捲かれて閉口してゐる姿を見かけてゐる三好だけに、どうしても可厭な想像をもつ氣にはなれなかつた。明日にでも、牛込の下宿の方へ、歸京した由を電話で知らせてやつたなら、出かけて来て、何事もなく總てが明白になるものと考へてゐたかつた。それに、雑誌「高路」の用紙の支拂と聞いたのが、細君の間違ひで、何かほかに急な入用でも出来たのであつてくれゝばいいが、とそこまで念じられた。さうかと云つて、編輯室にあてられてゐる洋館の一間へ行つて、書類を調べるとか、紙屋へ電話で聞き合せるとかして、一時も早くさつぱりした氣持にならうと云ふほどの信念はもてなかつた。なんとなくさうすることが恐ろし

いほどには、立派に三好が疑はれてゐたわけなのだ……。

三好のゐる素人下宿に電話をかけるには、近所の酒屋で取次いで貰はなければならなかつた。従つて翌朝急に歸つて来たから遊びに來ないか、と云ひやるのも言傳だつたし、先方の、昨日午後にお出ましになつたきりまだお歸りがございませぬ、と云ふ返事も、勿論酒屋からの取次だつた。

「さうかい、よし……」

電話口からその返答をもつて來た手子には、氣輕に頷いてみせたけれども、信之の氣持は、それでまた一層暗くされてゐた。もしひよつと使ひ込みでもして……と思ふと、放膽なやうでその實は中々神經質な三好の性分としては、どんなに惨めな陰鬱に陥つてゐるか知れない、取り返しつかないことのやうに世を狭く感じてゐないものでもない、——その氣持が、まざまざと信之の胸に映つて來た。一途に思ひつめる若者の心は、彼には一生の道づれらしかつた。少くとも、年下の人のさう云ふ氣持に同感する場合、往々さきへ行きすぎるほどに被感だつた。その同感の苦しさから、却つて無理解らしい腹立に附り、慰めの言葉の代りに、細癢聲を張



にある信之としては、「可愛い」と云ふ言葉が一番適切かと感じられるほどに、だらしない性質分も承知の上で、そのつもりで、大抵のことまでは大目に見すごして来た。そのくせ、三好は「高踏」の事務などにかゝると、柄になく几帳面で、兩もまめに働いたが、それは責任だけのことは果さうとする勤氣からで、決して性格的に、さうしずにはゐられないと云ふ意味の几帳面ではなかつた。どうかすると、書も睡もしずに、下宿の一室にごろりと長くなつたまゝ、二日三日ねつゞけにねて暮すことがあるのも知つてゐた。露國の作家が創造したもの、ぐさ太郎、オプロモフの有名な物語りは、三好の愛讀書のひとつだつた。さう云ふ方面、——生地の性格を、

信之などの前には、一生懸命かくして、忠實忠實しくやつてゐるところが、彼の弱さであり可愛さであり、また悪く云へば狡猾いところでもあつた。

さう云ふ裏も表も承知のうへで、信之はこの青年を愛してゐた。殊にいま目の前に、好きな女とつれだつて、埃風のなかでキリ／＼舞をしてゐるのを、自動車窓からちらと見ては、微笑しずにはゐられなかつた。

通りすぎて了つてからも、もう一度車をあと

へ返して、二人とも一緒に乗せて、どこか都合のところまで送つて行かうかとまでに思つたりしたが、女づれだけに、むかうがてれても悪いと考へ直して、それは控へることにした。僅三日の旅でも、東京を離れてゐただけに、ひどく友戀しくなつてゐたのだ。

## 七

うちに歸つてみると、二供たちは、書生と女中とに附添はれて、清水谷公園へ遊びに行つてゐると云ふことだつた。それはちよつともの足りなかつたが、その代り細君の朋子へ、懐しい氣持が集中されて、珍しくも信之は、優しい愛撫を與へたりした。

それから折よくはいり加減になつてゐた風呂に飛び込んで、汽車の煤煙や埃つぼさからさばさばとなつて來ると、いきなり茶の間の眞中に大の字なりにねころんでみた。

「あゝあ、なんと云つてもうちが一番氣樂でいいや」

それは、いつも旅から歸つて來る度毎にしみじみ肚の底から呟かれる言葉だつた。そのくせ始終居續けると、そんな有難味はまるでないどころか、ガチャ／＼と氣忙なくて、たまには旅にでも出なければ、碌なもの案じも出來ないや

うに思はれるのも、きまりだつた。一どうなすつたんです、大へんな御機嫌でね

朋子には、ちよつとさう云ふ皮肉じみた口の利きやうを喜ぶ癖があつた。豫想外の早い歸りや、いつにない良人の氣の輕さで、内心はホクホクものであるのだが、それは溶して棚に載せて置いて、つい酒か陽氣の加減で、信之がひとりで嘆きだしたやうな憎まれ口を利くののだつた。

「旅さきでなんかよつぽどいゝことでもおあんなすつたとみえますね」

「なにさ……」

それには、良人はたゞ苦笑ひで答へて置いたが、やがて思ひ出して、偶然にもおはまのゐる宿屋へ泊り合せて話をして聞かせ、ことづかつて來た、くれ／＼もよろしくなどを傳へたりした。

朋子も、留守中の來訪者や、云ひ置かれた用件、その他の報告をしてから、

「一昨日でしたかね、あなたがお出ましになつて間もなく三好さんが見えましたわ……」

「あゝ、たつ二三日前にも逢つたんだから、別に用で來たわけぢアなかつたらう？」

に合せに買つたらしい、安もの、白い封筒を引き裂いた時には、信之の氣持は決して平かなものではなかつた。なかば、問版の雑誌帳から二枚引きちぎつた紙で、勿論これも鉛筆のはしり書だつた。

お氣づきだつたかどうか知りませんが、去年の秋頃から、僕は高踏社の金を使込んでゐました。勿論くだらなく酒色のために使ひはたしたのです。悪いことには違ひないが、僕の心持では、一時の融通で、いよくとなれば故郷の母に泣きつくなり、また僕の脚本が二つも上演され、樂に返せる金額だと思つて、そんなに苦にしてはゐませんでした。その時分には三百二十圓でしたので、もうこれ以上には殖すまいと堅い決心をしてゐたのですが、もと／＼僕の使つていゝ額より、實際使つてゐる額の方が、毎月大抵倍以上にもなつてゐるやうな生活なのです。それから、あちこちの借金は見る間にたまつて了りました。折角この二月まで一生懸命に我慢してゐたのに、またもう一度去年のやうなことを始めました。紙屋や印刷屋に拂ふと云つて貴方から預つて歸つた金のなかから、僕の使ひ込んでゐる分があるのです。

どうしてこんな僕になつて了つたか。それには、實は少しわけがあります。卑怯なやうですが、一通りそれから聞いて頂きたいのです。

# 十

柳澤美津枝と云ふ女に就いては、萩原が興味をもつて通つてゐると云ふ話から、飽まで白ばつてくれば傍觀の態度はとつてゐるが、實は以前から僕が關係してゐた女だ、と云ふことまで、——思ひ出しても冷汗ですけれど、いつぞやお宅で御馳走になつて、いゝ心持に酔つた晩に、つゝいか／＼とお喋りして了ひました。僕はその美津枝と云ふ女に、さう大して心を惹かれてゐるつもりはありませんでしたが、女はどんなことをしても僕から離れられないくらゐの執着をもつてゐると、蟲よくも堅く信じてゐたのです。その自信を、いやが上にも、自分自身に對して確めるやうな氣持から、夜おそく萩原と二人きりで乗つて行かうと云ふ自動車そばで、僕は美津枝に、誘はれたらどこまででもついて行つて見ろ、行くところまで行つてみる、と囁いたのです。女にかけての萩原が、なみ大抵なら手腕家だと云ふことを知つてゐるだけに、さう云ふ危険に曝しても、尙且守るべき最後のものが、僕のために清く残されることを

信じ、またその信が裏切られなかつたと云ふ結果を喜びたかつたのです。

ところが二人に別れた僕は、俾で道の一町と行かないうちに、餘すところのない嫉妬そのものでした。難攻不落と見えた「自信の城」の哀れにも惨な降服が、かうまで速かに來ようとは！

翌日僕は、カフェエ・シャノアルで頼みつけの自動車屋へ、こつそりとはいつて行きました。ぶふまでもなく、前夜二人をどこまで送り届け、たか、それを知らうがためでした。答へが、而も殆ど絶望的でした、赤阪町四丁目の横町で二人を降して來た、と云ふのです。時刻から考へてみたところで、勿論待合よりほかに客のために戸を開く家はない筈ですが、鳴戸の横町と聞けば、いつぞや貴方も御一緒に、萩原に誘はれて二三度行つたことのある、あの梅の井とか云ふうちに違ひありません。

僕は腹を立てました。——今から思へば、その腹を立てたと云ふことだけで、どうやら少しは救はれたのです。と云ふのは、一方には（なんだ、あんな女の一人や二人、大にでもくれてやらア）と云ふやうな、負惜みながらも、冷たい笑ひに紛らして了つて、二度とふたゝみ美津枝

りあげて了ふことすらあつた。

今はもう疑ふ心の苦しきではなかつた。すぐ書齋に引籠つて、三好にあてゝ手紙を書いた。

——先くだりな言葉を許して貰ひたい。萬が一君にどんな間違つた行爲があつたとしても、信じられるなら自分を信じて、何事も素直に打ちあけてくれ。自分は、金銭のことにかけても決して清淨な人間ではない。暗い罪惡感に苛まれた覚えもある。またそこから脱けるために、ほんの少しばかりの勇氣でも掉つた覚えもある。顔を合せ憎い——そんな氣持は、ほんの少しの勇氣で抑へられると思ふから、假令どんな間違が起つてゐようと、是非一度速ひに來て貰ひたい。これは君のためよりも、寧ろ自分のためにお願ひするのだ。君の氣持を同感する苦しさから、一刻も早く救ひ出して貰ひたさの、——さう云ふ利己主義からのお願ひと思つてくれて差支ない。勿論、突然こんなことを云ふのが、君にとつて寢耳に水で、そこになんにも間違なんぞなかつたとすれば、こんな仕合なことではない。たゞ、自分の早合點を取ち入るばかりだ。その恥が與へられるならばこの上もないが、若しさうでない場合には、一日も早く君の心の暗さを、自分のところへ來て解つ氣にな

つてほしい。先くだりながら、くれぐれもこれをお願ひして置く……。

かう云ふ意味を書いて、すぐ速便でだきせると、信之は、やつと少し落つくことが出来た。

## 九

ところが、そのまゝ三好からは電話もかゝつては來ず、手紙の返事も徒しく待たれた。いよいよこれは、何か間違ひが起つて了つたな、と思ふと、信之には、ひとごとながら自棄くそな氣分が、時折胸もとへチリ／＼と焦きついて來た。

盛りの花へ、風のあとの雨が注いだ。しとしと、春雨らしく降り續く、薄暗いあかるさを、たれこめて信之は書齋の窓に眺めてゐた。父信策が好みの松、楓、懸て吉野から取りよせた形の正しい杉、高野檜葉、鶉、椎、八手など、ただ青いものばかりの庭のつくりは、芽だちを控へて、雨に濡れて、落ついた、深い望みの感じだつた。細かな苔に若んだ古い庭土の窪みなどに、どこから飛んで來たか、櫻の花瓣の、三つ、六つ七つ、散り敷いてゐるのは、行く春の弱たけて艶なる風情だつた。

無念無想に、やがて焦點もぼやけ薄れるばかり

り眺め入る、そんなことは、本當にこの何年にもないことだつた。——ふとそれに氣がついて、信之は、身にしめてこの瞬間を有難がつた。勞れ、これも神様からの尊い贈りものゝ一つなんだなア、と感ぜられた。

降り續いた三日目の夕方、豆腐屋の喇叭の通る時分から、急に明るんで來たと思ふと、まだ銀色をした雨の足が、すい／＼と絲を引いてゐるのに、西の空に雲きがして、横なぐりに落ちて來る金色の陽光を見ることが出來た。陽の色は、信之を元氣づけた。

(さてと、今夜あたり、誰かに會つて、ゆつくり飲みたいもんだなア)

そんなことを思つて、友達達の誰彼を、心のうちにより好みしたり、落ち合ふ場所を考へたりしてゐた。そこへ書生が二三通の手紙や葉書を持つて來た。なかに、白い西洋封筒に、鉛筆でグイ／＼力をいれて宛名を書いたのがあつた。裏には、二ヶ所にメがしてあるばかりで、差出人の名はなかつたけれど、信之には、一目でそれが三好から來たものと知れた。そののみならず、鉛筆の、一畫々々に力のはいつた筆跡は、内容のたゞならない感じまで物語つて餘りあるものだつた。どこか田舎の雜貨屋で問



せんが、僕を茲まで導いてくれたものは、勿論美津枝と僕との間に芽ぐんで来た愛情よりほかのものではありませぬけれど、それを助けて、僕の犯した悪業に、幾分の功を歸せないわけにはゆきません。——貴方を始め、高路同人諸兄は云ふまでもなく、故郷の母の前にも、いや世間一般誰の前にも、顔むけのならない不了見者、卑劣な小悪魔と自分を感じる心、天にも地にも身の置きどころなく、消えてなくなりたいほどにしよ返つた氣持、これが僕を、美津枝の胸へ追ひこくつて行つた態がないとは云へません。

このちつぽけな、けちな、だらしない悪人を、何もかも承知であたゝかくかき抱いてくれる者は、なんと云つても、天下に美津枝のほかにはなかつたのです。と云つたところで、俯仰天地に恥ぢず、と云つた氣持では、ひとを愛し得ないものなどとは、決して考へてはゐません。慘のどん底に陥つてから、盲龜の浮木的に、やつと愛の力を感じるなどは、我ながらつくづく情ない心境だと思つてゐますが、盲龜の身としては、浮木の有難さを讀へないではゐられません。——

永々こんなことを書いたのは、つまり貴方へお詫びを申しあげる手紙に筆を執りながら、大して自責の實感を感じない心苦しさを、自分で

どうにか片づけたい氣持からです。

## 十二

さうかと云つて、去年の秋から僕が犯したところのけちくさい、いぢけた、卑劣千萬な詐欺取財——と云ふのか、竊盜と呼ぶべきものか、兎に角高路社に關する金錢の出入から、目立たないほどにちよく誤魔化して来た自分を、決していゝとは思つてゐません。表面高路社の金と云ふでう、つまりは貴方の金を、貴方の厚い信用につけ入つて、かれこれ千圓ほどもくすねました。その上さらに、先達旅にお出かけになつた前々日にお預りした紙屋と印刷屋との拂ののうちから、ついまた七百圓ほどを、差し追つた自分の借金拂ひに流用してしまひました。ところが紙屋の態度が、今月に限つて悪く強硬で、全額の四分の一ばかり入れたのでは、とても承知してはくれないのです。強談に及ばれると、こつちはおもつて傷もつ腰の、キュー／＼の目にあはされて、なんのあてもなしに、二三日のうちには必ずどうにかする、と約束して別れたのですが、あとで、あの勢ひでは、悪くすると直接貴方の方へ掛合が行く、さうすれば今までのことが何もかもばれて了ふ、と思ひついたのです。思案にあまつてゐる間にも、あとからあ

とから矢の催促です。たうとう僕も決心をつけて、一切を貴方の前に打ちあけて了はうと、お宅へ出かけたのが、丁度一足違ひで、貴方は旅行にたつてお了ひなすつたあとでした。そこで、もうどうにもかうにも仕方がなくなつて、奥さんにお話すると、寧ろ不審か、なんの疑ひもおもちなさらずに、すぐ氣輕く小切手を切つてくださいました。而もそれには金額が記入してないので……

僕のあたゝまは、兎に角美津枝でいづばいでした。美津枝で渦をまいてゐました。そこに「金」と云ふのと、「旅」と云ふのと、二つの思ひが飛び込んで来て、渦のなかでキリ／＼舞を始めた。僕の足は、銀行にも紙屋にも向かないで、まつ直に美津枝へと駆けつけたのです。實はその前から、僕は彼の女のために、或る小さな巢を用意してやりました。そのギシ／＼と鳴る、暗く狭い階子段をあがる時分には、僕はすつかり決心してゐたのです。——文學の仕事などはおろかなこと、一生でも棒に振らう、と。身も心も、悉く彼の女の前に捧げつくさう、と。

この根本の心持が、美津枝を動かしました。初めうち、罪難と強談とを重ねて止まなかつた



とは逢ふまいと思ふ氣持が儘に動いてゐたので  
す。若しその時に僕が、さう云ふ冷淡の方へ自  
分自身を賣り渡してゐたならば、今日こんな、  
泥棒にも劣つた惡業を重ね、一生貴方にも顔む  
けのならないやうな罪惡感に苛まれずともすん  
だ代りには、生活の眞摯からは、更に數歩の轉  
退を踏まねばならなかつたでせう。既に悪い精  
神から、悪い實りが來かゝつてゐたのです。一  
足飛びに清淨な世界へは出られつゝありませ  
ん。惡業の世界で、せめては眞摯な熱情に殉  
じたおかげには、利口な去勢者の群にはいるこ  
とだけは助かつたと信じます。

僕は美津枝を誂りました。美津枝は體に間違  
ひのなかつたことを飽すで云ひ張ります。誰が  
それについて眞の事實を證明するものがあり  
得ませう。信じるか信じないか、問題はそれだ  
けです。肚の底から信じられてはゐない女を、  
いつか誇大されて了つた自信で、故さらあぶな  
いところへ突き出してやつた、その不眞摯の祟  
りです。歸つて來た彼の女が、幾度同じ言葉  
を繰返しても、今度は僕には、信じることも、信  
じないことも出來なくなつて了ひました。罰で  
す、天罰です。信じてゐないものを、いかに  
も信じ切つたやうなふりをすれば、その報いと

しては、信すべきものでも、信じられなくなつ  
て了ふのでせう。僕はさう云ふ罰を蒙つたの  
です。

## 十一

信じられないと云ふことで、僕は、すつかり  
くしやく／＼して了ひました。腹立は二重にされ  
たのです。

それと同時に、一方には不思議な愛着で、畢  
て美津枝に惹きつけられて行きました。愛が嫉  
妬を生む普通の場合とは反對に、嫉妬から愛が  
生じて來たのでせうか、一時たりとも彼の女  
を、僕の目の届かないところへ置くことが、不  
安で不安で、とても堪へられなくなつて了つた  
のです。

初めの間は、この突然の殆ど病的な愛撫が、  
美津枝を不安にし、苦しがらせました。嫉妬  
が落つくにつれて、僕の愛情は、次第にしんみ  
りとむかうの胸へも滲み込んで行つたものとみ  
えて、どうやら心持も變つて來ました。これま  
での彼の女に、いつも必ず肚の底で、コチンと  
小さく片づけられてゐた我執が、そろ／＼ほど  
けかけ出した己の周圍に體裁よく結び環され  
てあつた根根に穴があくと、呆れ返るほど善良  
な、初々しい心持や、獨力で衣食してゐる娘

にふさはしいやうな自惚氣儘なところが、覆ふとこ  
ろなくむきだしにされて來たのです。——こ  
を、以前の僕の生活氣分で眺め、そこに用ゐら  
れさうな言葉で云ひ現はすとすれば、いよ／＼  
あいつも、だらしなく惚れ込んで來やアがつた  
な——でも北里笑むところでせうけれど、夢にも  
思ひがけない心持がその時分にはもう僕の裡に  
すつかり育ち切つてゐたのです。

生れて肇で僕は肚の底からひとを愛する心  
を知りました。いや、そんなことを云ふさへ空  
恐ろしいほどに、僕の我執は、粉微塵に打ち碎  
かれてゐたのです。卒直に云へば、美津枝が好  
きで好きでたまらなくなつて了つたのです。た  
だそれだけのことです。が、これを、僕の悪い  
癖で、やゝ哲學的に云ふならば、女に惚れたと  
云ふ氣持は、これまでも今く知らないわけ  
はなかつたのですが、今度と云ふ今度は、その  
ことの有難味につく／＼觸れ得た、とても云ふ  
べきでせうか、兎にも角にも、僕の生活のだら  
け切つた點がはつきり目に映つて來て、懣する  
者の有頂天、——生活の沸騰點にありつた  
氣持なのです。最近の僕は、ほんとうに自分  
が生きてゐる氣がするのです。

そこで、卑怯な申譯のやうに聞えるかも知れま

れたやうに感じはもてなかつたことを思つた。好意に背いて金を持ち逃げした裏切者、——そんな感じは、爪の垢ほどでもなかつた。もし強ひても三好を悪い人間と観じなければならぬとすれば、信之自身も悪徒仲間だし、自分もそんなに悪いとは思へない現下の感情を基とするならば、云ふまでもなく三好は、最親しい良友の一人だつた。

(戀は人を淨化する。いや、戀には限らない、一生懸命になりさへすれば、その時間人は誰でも清く美しい心になれるのだ。さうだ、一生懸命と云ふことが肝腎な點だ、戀でも、だらけた、或は餘裕のあるのではなくなんにもならない。

それを思へば、やたら惚れッぽい俺などは、大した仕合を享けて生れた人間かも知れない。すぐ夢中になる、……いや、さうでもない。年齢とともにだん／＼後前の考へをするやうになつて來た。もつと／＼一生懸命に惚れなきアいけない。さうだ、もつと／＼本氣で惚れなきア仕様がなない！)

## 十四

すぐあたゝまに來るのはお澄のことだつた。——晩春の夕にふさはしい寂寥だつた。信之には、どう云ふものか、もう一度逢戻りたいと云ふ

やうな未練が残つてゐなかつたばかりでなく、別離の甘酸っぱい寂しさと、いつまでもその好ましい後味に保つて置きたい氣持から、今後人の噂話に聞くとか、偶然芝居や往來で出會ふとか、そんなことも、寧ろ避けたいくらゐに思はれた。云ふまでもなく、信之の彼の女を愛する心に嘘はなかつたけれども、全く思ひもかけない離別が、かやうに速かに來てみると、その未氣なさの感じに手傳はれるせるか、それほど熱烈だつたとも思へなかつた。何かなしお澄の心の表面には、薄紙のやうな感じのものがあつて、信之には、たうとう別れるまでそれを取り除くことが出來なかつた。とは云へ、齒痒さ、もの足らなさを感ぜながらも、一方に彼は、奥床しい薄色にぼかされたその心ゆゑに、惹きつけられもし、従つてまたしやにむにそれを引ッべがさうとするやうな若々しい熱情には驅られなかつたのだ。

いま信之は、自ら意識しなかつたその老成ぶつた心持に、肇て明かな觀察をくだす時が來た。これは、平生の心懸けから云つて、當然取つた心持に、平生の心懸けから云つた。殊に世の望みからも、友達からも離れて、のめり込むやうに戀愛三昧の生活に飛び込んで行つた三

好の手紙を讀んだばかりの今の氣持には、しみじみと胸にこたへて厭はしい自分だつた、——うるみ霞んだ夕空を見あげて、思はず信之は、深い溜息をもらした。厭はしきは、水のじみ擴がるやうに、お澄の上へも延びて行つた。その理由のないことは承知してゐながら、彼の女にも責の一半を背負はせたいやうな氣がした。奥床しさの魅力ともなつた心の薄皮も、さうなつて來ると、たゞ味もない冷たさとしか感ぜられなかつた。こんなに早く別れが來ようとは、夢さら思ひ設けなかつたばかりに、つい云ひだす折もなかつた金鵝勳章の話、——二人のうちどちらでも危篤と云ふ場合には、どんな境遇のもとにあか、他人になつてゐようと、必ず知らせ合ひ、見舞ひ合はうと云ふ約束も、たうとうしず仕舞になつてゐたことも、結局よかつたと思はれた。すると不思議な直覺が、いつかはお澄に着せかけてゐる幻の、無残に破られる時が必ず來るに違ひない、と囁くのだった……

もう窓近い席も、ものゝ文色をわかないほどに暮れかけたが、信之の寂れ切つた心には、その薄さが丁度ふさはしかつた。ソファに深く腰を沈めて、いつまでも思ひ耽つてゐた。

僕の悪い行爲についても、今はもうなんにも云へなくなつて了つて、すべて僕の思ひのまゝにならうと決心してくれました。奥さんから預つて歸つた小切手で、紙屋の拂七百二十一圓八十錢のほかに、吾々は、無斷で、貴方から千圓の金を拜借する蟲のよき、圖々しさを、繰返し繰返し自ら責め、自ら勵ました擧句、たうとうこの戀を命に生きようと云ふ最後の決心をもう一層堅くするよりほかはありませんでした。翌日銀行から金を引出し、紙屋の拂をすませたり、細々した用事の片をつけたりました。そしてその翌日の午後四時頃、荷物らしい荷物とでもなく、凡の見當を關西とつけたただで、どこまでの切符を買はうと云ふあてもなしに、新橋の停車場にはいつて行つたのです。そこで吾々は、偶然にもお澄さんに逢ひ、貴方が湯本においでになると云ふ話を聞いたのです。

世を捨て、人々と別れて行かうとする前に、もう一度貴方にだけは逢ひたくなりました。悪業のどん底にある、この真切者の、お説の言葉を、一言きいて頂いてからと思ひ、美津枝とも相談の上、すぐさまこの宿屋へやつて來たのです。

### 十三

湯本まで來てみて、貴方が吾々と入れ違ひに、

その同じ日にはもう東京へお歸りになつてゐたことを知り、ほんとうに口惜しく思ひました。美津枝などは、泪ぐんで、少時の間ぼんやり考へ込んで了ひました。彼女の女は、後にも前にもたつた一度しもお目にかゝつたことのない貴方を、それほど好いてゐます。若しも貴方が、引き續いて彼の女の店に行き……さうして僕が、今日の僕のやうな氣持になつて來てゐたなら、きつと今頃は、何か恐ろしいことが起つてゐたに違ひない、と感じられます。彼の女が、自分からそれを云ふくらゐです。そんなことを思ふと、吾々は、運命論者的な氣持で、今の自分たちを、恐ろしいほど幸福に感じます。暗い罪惡感の蔭にも、さうした喜びを胸いつばいに湧き立たせたりしてゐる吾々だと云ふことも、正直に申しあげて置いた方がいゝと思ひます。

長い手紙になつて了ひました。たうとうどこにもお説びの文句らしいものはなくなつて了ひましたが、こと改めてそんな風に申しあげないでも、もう僕の氣持はよくお解りくださったことと思ひます。吾々は今夜の夜行で、關西の方へたつて行かうとしてゐます。吾々の將來については、それくらゐよりほかに申しあげ得る目的も計畫もありません。行きあたりばツたり

に、どうかやつて行くつもりでゐます。

もう一度お目にかゝる機會があるとすれば、その時には、僕も相應の人間になつてゐるつもりです。若しまたお目にかゝれないとすれば、貴方の並大抵ならぬ御好意も、無斷で借用した金子も、すべて溝のなかへでも捨て、了つたものと認めてください。あんまり蟲のよすぎたお願いですが、今の僕としては、これからの正直な言葉はないのです。

御一家の上に永く幸福が続くことを陰ながら祈つて居ります。奥さん、高路同人諸兄へも、宜敷きやうに、僕の方からは永く渝らないつもり的好意をお傳へくださいませ。美津枝からもくれぐれも宜敷申しました。

ではこれで。

いつか斜陽の影も消えて、蒼茫と暮れかけて來た窓ぎはの取附ソファの上で、一字々々拾ふやうに、信之はこの長い手紙を讀んだ。どこからどこまで、一々びたりと胸へ落ち込んで來た。そのことで、いつか彼は、咄々とした氣持になつてゐた。前後矛盾した文句などあつても、その箇所々々の氣持に嘘がなく、三四年來の交際の間にも、これほどぢかべたに三好の心に觸



## 多情佛心

(後篇)

## 押入の中

銀器や貴重な酒、煙草などを藏つて置くために、その一間の押入は、錠のかゝる仕掛になつてゐた。普通に吊つてあつた中棚は取り毀して、三尺おきくらゐに、五段ばかり松六分板を渡してあつた。——これは、移つて來た當時、一應家主に斷つて、ジェムス・マツケンゼンが加へた模様變の一つだつた。

玄關から客間、隣つて食堂、それだけとはとも洋風の建築になつてゐた。二階の八疊二間は板敷に直して寢室にあてられた。廊下を隔て、北向のやゝ茶がかつた四疊半は、無残にも衣装部屋に使はれて、天井まできち／＼に、重さうな洋服箆が二つ、そのほか装身の調度で殆ど足の踏みたて場もないくらゐだつた。

錠のかゝる押入は、臺所と背中合せに、西に向つて高窓があるきりの、薄暗い六疊の間にあつた。大勢女中でもゐれば、さしづめ彼等の

部屋になるところだが、築地の或る商館に通つてゐる主人マツケンゼンと、三十近くも年齢の違ふ日本人の細君與禰子との間には、子もななく、同居の身よりと云ふやうなものもなかつたから、從つて女中も一人しか使つてゐなかつた。それには、書生を置く人のために、玄關のそばで、出這入口の體裁だけは洋風の扉だが、疊の三枚敷ける、矢張り薄暗い北向の部屋があてがはれてゐた。

で、この六疊の間の方は、客でもする時のほかには、三日に一遍も人の出這入る必要のない場所になつてゐた。まして主人のマツケンゼンなどには、自分でその押入の襖をあけるやうな機會は、殆どないと云つてもいいくらゐだつた。雪の結晶を圖案化した安もの、模紙に、わるく光る黒塗の縁がとりつけてあつたから、そこへ惜氣もなくうち込んだ鏡や南京錠も、別に痛しいと云ふほどの感じではなかつた。今から二月ほど前に、けれども、この押入の内味には、驚くべき差變が行はれてゐた。そこ

に藏つてあつた貴重品の數々は、そつくり細君の居間の戸棚へ、またそろ／＼もう普段使ひにおろしてもいいやうな品だけは、食堂の、マホガニー製のがつしりした食器棚の中へと移し入れられてゐた。松六分板の棚板は、上から四段だけ取りはづして、一番下の、床上三尺ばかりの高さにある一段をしつかりさすために、平に積み重ねられた。その上には、臺のと羽毛のと布圍が二枚、而も敷布は、始終洗濯したてのと取り替つて、寝心地のよさうな寢臺を形づくつてゐた。勿論薄い掛布圍も枕も備はつてゐた。そのまた枕もとには、灰落しやマツチ、時には、ウキスキイの瓶などまで置かれてゐることがあつた。以前上へ段々を交へてゐた横木には、あちこちに釘がうつてあつて、上着やズボンでも、またほかの品でも、ちよつとひつ掛け置くことが出来るやうになつてゐた……

この驚くべき内味の變化については、細君の與禰子と、そこで、煙草を吃つたり、バジヤマに着更へたり、パンを齧つたり……要するに彼の生活の或る一部分がそこで送られるところの一人の若者よりほかには、誰も知つてゐるものはなかつた。始終壁一重隣の臺所で働いてゐる女中のおきんでさへ、夢にも思ひよらな



そのとき扉に叩が聞え、信之の答へで、すぐそこをあげたのは朋子だった。

「あら……？」

信之はぢつと身動きもしず、言葉もかけなかつたが、心は、思ひもかけないほどの懐しさで、細君のそばへ飛んで行つてゐた。

「いらつしやるの？」

「うん」

「どうなすつたんです、眞ッ暗闇で……。電氣をつけてもいゝんでせう？」

「あゝ、いゝとも」

パチリとスキツチの鉤を押す音がして、急に部屋ぢう明くなつた。そこに描き出された細君の姿を、珍らしいものでも見るやうに、信之はしげ／＼と眺め入つた。傷ついた心を抱いて歸つて行くところは、なんと云つても朋子よりほかにはない、そんなことを考へながら、然し彼は、立ちあがらうともしず、笑ひかけもせず、なほさら言葉もかけずに、そのまゝ靜に居竝んでゐた……。

(前篇了)

引き笑ひをしてゐる彼等の容子が、目に見えるやうだつた。

## 三

「蓄音機でもかけませうか」

與禰子自身にとつては、意屈な永い沈黙も、決して苦にはならなかつたのだが、客の手前さうさう黙りこんでゐるわけにもいかず、さうかと云つて、枝葉の榮えつこないにきまつた話下手を相手に、無理やりに話題を探し出して、なんの彼のと繋いでゐる畑ひにも堪へられなかつた。そこで蓄音機と云ふ代辯者を思ひついて、俄に愛想のよい笑顔を傾け、ソファから腰をもたげた。

「どうぞ……」

もとより客には、それを拒むなんの理由もなかつた。生氣のない灰色をした烏睛を、ちよいと細ものからあげて、口禮を返したまでのことだつた。

ヴィクタアの機械は、レコオド入を兼ねた臺の上に、手近な一隅に置かれてゐた。勿論何を聞かうと云ふ氣とてもない與禰子は、手あたり放題ぬき出した一枚の、曲の名も見ずに、いきなり廻轉盤に載せ、發條を捲いた。

「なんですか」

客が、ほんのお愛想に尋ねるのを、聞えなかつたふりをして、すぐに始めた。ワルツだつた。

「ダンス・ミュージックですね？」

「えゝ」

そのまゝ、聞き覺えの曲に耳をなぶらせながら、彼の女のあたまでは、安んじて、勝手な世界へと飛んで行つて了つた。

「綺麗ですね」

さう云はれて氣がついた時には、いつかもうお仕舞になつてゐた。けれども、そのことで、眠らずにみてゐた彼の女の夢は醒めきらなかつた。

「えゝ」

云ひながら、針を持ちあげて、ついまた初まりへあてがつて了つた。機械は、同じ音楽をもう一度繰返しだした。

「おやゝ（？）」

眞ッ暗な押入のなかに、意屈しきつてゐる耳には、それはちよつとした失望だつた。ラヴス・ドリーム・ワルツ、——その選擇のくだらなさへ、かてゝ加へて同じものを二度やるとは……

「一體、どうしたんだい！」

仰向に頭の下には、兩の指を組み合せて手を敷いて、柔かな羽根布團にプクリと身を沈ませた。

せながら、背立ち易くも、西山普烈は、思はずさう咳いた。が、いかほど聲にさへてみたところでも、どうするわけにもいかない場合だつた。矢つ張りその音楽にでも耳を付けてゐるよりほかには、どうにも心の縋らしやうのない彼だつた。いつの間にか、また組み合せた指のさきで、熱心にタクトをとつてゐた。

中學も一二年以後は確に通はず、殆どなんの智育もないやうな音烈だつたけれど、音楽にかけての才能ばかりは、ちよつと人並はづれてゐた。またそれだけに好きも好きで、十二三の頃からヴァイオリンの稽古に通つて、最近の二年こそ手にしないが、音楽學校ぼつと出の樂手などでは、足許にも寄りつけないくらゐの腕もあり、曲の組立に就ても相應の理解はもつてゐた。——少しもほかに氣の散らない今の場合のあたまには、殊に耳馴れた曲のことでもあり面白いやうに、作曲家の技巧が見え透いて來た。

（ふゝん、成程さうか……）

曲の組立が、肚のなかで分解されて行くことに、普烈は、ひとり得意げな笑を浮かべて頷いてゐた。

## 四

樂想は、なんの奇もない戀愛の謳歌だつたが、

かつたのだから、ましてや主人のマッケンゼンなど、尙更のことだつた。

ところで、天にも地にもたつた一人、第三者でそれを知つてゐるのが藤代信之だつた。

## 二

五月中旬の或る日曜の午後のこと、赤阪水川町の高臺にあるマッケンゼンの家には、夫婦づれの客が來てゐた。茶がすむと間もなく、少し用談があるとなつて、茶がすむと間もなく、少し用談があるとなつて、主人の寢室へあがつて行つたあとには、もう中年の、西洋人には珍らしく口の重たい、無愛想な細君と差し向ひに、與禰子が、客間のソファで、ぼんやり一つところを見詰めてゐた。

黒い澤やかな、たつぷりある髪を、無難作に、然し有難どころなくハイカラな感じの束髪に結つて、鼠地に、とも薄色であらひ縞と、その間にこつくりとした紅の通つた英國製のセルに、安もの、ジャヴ更紗を帯にしましてゐたが、薄汚れた足袋のせゐか、立派に籍のはいつた正妻ながら、なんとなくラシャメンと云ふ言葉の匂ひがした。亭主のそばに立つたところは、少し嫌をつけば半分以上にいらぬで、日本人の女としても小柄の方だつた。豊頬で、眼鼻だち

のちまゝと調つた顔つきも子供っぽく、二十四とはとても受け取れなかつた。たゞわりに口の大きいことだけが、その感じを裏切つて、所謂男ずきのしさうな、成熟しきつた肉體や感情も物語る色っぽさを現はしてゐた。

「今週の茶館、見においでなりました？」  
「かなり永い沈黙が続いたあとで、やつとこきで思ひついたやうな話題を、義理一週の笑顔で、與禰子はそこへ持ち出してみた。

「いえ、まだ。あなたは何？」

「アイルランドの百姓娘だとか云ふ客の細君は、著しく顔額にかたまつて白髪混つた亚麻色髪のおくれ毛を掻きあげながら、陰氣な日つきを毛絲の編物からあげた。

「昨夜……、昨日の晩でしたか、ちよつと行つて來ました」

「さう、いかがでした？ 面白い？」

「えゝ、まあ……」

「さう」

相手によつては、随分お喋りもする方なのだ、と、與禰子は、この細君を別に好いてもゐず、また一生懸命氣骨を折つてまでお愛想に話しかけなければならぬほど重く見てゐる客でもなかつた。人前の二人づれだと、そこは西洋人の

ことで、親切丁寧に扱つてゐるけれど、道樂者の亭主が、ひとり遊びに來た時には、「うちの山の神さんだの（どん百姓の娘だの）やきもち鼻だの」と云つて、馬鹿にしきつてゐるのが、與禰子にも、氣の毒には感じられないで、いかにも尤もと同感されるやうな、どこに一つ面白味もない女だつた。で、相手の返事が簡単なのをいゝ幸に、そのまゝ口を喋んで了つた。黙つてゐれば、心に浮かんで來ることは山ほどあつた……。

用談と稱して二階へあがつて了つた男たちは、中々戻つて來なかつた。夕方から散歩に出て、マッケンゼンが好物の鰻で飯を食ふことになつてゐたが、出かける間際になつて、うまく自分だけそのお作を運れることに思ひ詰めてゐる與禰子は、申譯の言葉といろ／＼工夫しながら、客の指先きに、機械のやうに動く細棒を見詰めてゐた。

「永いお話、ねえ」

「えゝ、どうしたんでせうね」

ちよつと二階を見あげるやうにして、與禰子はさう答へたが、どうせまた不良老婦どもがゝつて、確な話をしてゐないとは、初めから彼女には察しられてゐた。大口を利いて、クツクと

した、古代希臘の風俗だったが、普段から波をうつた髪の毛へ更に慢を添えて縮らせ、すらりと丈は高く、サンダルのかなの素足も、靴でいぢめられ通したのでなく、さりとして下駄の上で平べったく踏み廣げられもしない、形だつたから、シイザア幕下の若い策士とでも云ひさうで、ちよつと人目を惹いた。マツケンゼン夫人は、その小柄を利用して、雛妓になつて行つてゐた。これもよく似合つて、初め普烈は、どうしてこんな集まりに雛妓なんぞがまぎれ込んで來たらうと、怪しんだほどだつた。紹介してくれる人があつて、彼等は二番一一緒に踊つて、土耳其の軍人に扮したマツケンゼンにも、その折紹介されたが、いやにひとを小馬鹿にしたやうな鄭重さで、普烈のうけた第一印象は、ひどく悪かつた。

その後鶴見の舞踊場で二三度一緒にになると、不良少年に獨特の、至極口あたりのいゝ誘惑の毒盃は、もう十分に振舞はれて了つた。女の方から手紙をつけるほどの逆上りやうだつた。さうして、見るまに二人は深人をして行つた。生れて肇で普烈にも、本氣に惚れ、と云ふ氣持が解つて來た。相手をたゞ快活な、それだけか悪戯ツツとみではあるが、ほんの可愛いお坊

ツちゃんと思ひ切つて、少しくらゐ悪い評判を聞いても、てんで受附けようと思はずに、一圖に好きで好きでたまらないと云つた風な、正直眞ツ法な惚れ込み方には、有繋の普烈も、刃向ふべき刃がなかつた。

これは後になつて解つたことだが、實際また與禰子は、戀愛生活ばかりでなく、人生の暗い蔭を殆ど知らずに來たやうな女だつた。

彼の女の父と云ふのは、いまだ名華族のうちで家運の隆盛を極めてゐる或る伯爵家の、先々代の四男に生れたのだが、妾腹のために全く別物扱ひにされて人となり、その上不思議な性癖から次第に身を落して、五六年前に、たうとう横濱の場末の陋巷に、こつそり死んで行つた人だ。舊知の話によると、ごく若い時は知らず、もう三十臺からは、彼には全く性慾が失はれてゐて、もとより妻女はなかつたと言ふ。與禰子の母親と云ふものもどんな人だつたか、知つてゐる者がなかつたばかりでなく、實子かどうかさへ疑はしかつた。そんな風で、女嫌ひで、而も性慾に關することなら、どんなことでも三度の飯よりも大好きだ、——さう云ふ不思議な性癖をもつてゐた。その道の好的研究なら、かの宮武外骨などの遠く及ぶところでなかつ

たと云ふが、所謂博覽強記で、書き遺したものとてはないけれど、その代り、それに關する書畫、寫眞、神體、道具、藥、玩具、その他、殆ど一生かゝつて蒐集したあらゆる種類のもので、八疊一間きつちりにつまつてゐた。生計は或る種の密書を描いて、竊に外國人に賣ることによつて立てゐるが、少しでも餘分の金がいれば、惜氣もなく例の蒐集のために使ひ果した。

十八の年齡まで、その父親の膝下に、この上もなく可愛がられて育つた與禰子だが、今もつてそんなことは爪の垢ほど知らないのだから、恐らく例の八疊の間は、密室として容易に出入できない仕掛になつてゐ、また細かい繪仕事は夜中にでもそつと起き出してやつたものと思はれる。兎にも角にも、彼の女の父親は、慈愛と威厳とを兼ね備へ、而も新しい時代にも理解をもつた、誠に理想的な方だつた、と、今もつて與禰子は人に自慢するくらゐだから、趣味と實生活とは、確然と二分されてゐたに違ひないのだ。

## 六

この奇癖をもつた老人を、糖尿病で衰弱しきつた病床に、我から望んで見舞ひに來た、一



前半を問ひの、後半は答への、相呼應する態に、謂はば「戀の夢物語」とでも云ふべき心持にしつらへてあつた。速度はアンダンテかアンダンチノノらしかつたが、これは蓄音機のこと、よくは分らなかつた。第一段は、八小節から成る旋律の繰返し、十六小節を、もう一度繰返すこととで終つてゐた。コン・モトで、それが可なり通俗的だつた。次の三十二小節の旋律は、パッサヨナアトに、それからドルチェに、第三段まで進むと、四小節ばかりの纏ぎがはいつて、それから嬰種移調になる……

續けさまに二度同じ曲を聞くと、もうそれくらゐのことが呑み込めると云ふ得意が、普烈を愉快な氣持にしてゐた。驚くべきことには、三度目に聞えだした音楽が、まだ同じラヴ・ス・ドリーム・ワルツだつたけれども、今度はもうそれが少しも類にさはるやうなことはなかつた。それどころか、益々いゝ心持になつて來た。——と云ふのは、音楽が解る以上に、客間にゐる與禰子の心持が、そのことによつてはつきりと感じられたからで……

普烈には、その日の客も、いろ／＼出された菓子も、主人の道樂で、あれこれと吃かす煙草の、二階へあがつて行く時に銜へてゐたのは何

かと云ふことも、あとに客間に差し向ひになつてゐる二人の女の客子も、一々手に取るやうに知れてゐた。然し蓄音機を始めて、同じ曲を三度まで繰返したことは、謂はばそこから打つてよこした無線電信のやうなものだつた。——

解つてゐるでせう？ 何しろ、あの奥さんのことでも、話もなんにもありやアしないわ。仕様がなないから蓄音機をかけてるの。なんだつて構やアしないのよ。どうせみんなが用かけるまでの繋ぎですもの。あたし、面倒臭いから、何通でもおんなじものをやつてやるわ。ねえ、構やアしないわ、ねえ。さう云ふ長文の無線電信をうけとつたも同様の普烈は、三度目の時には、それに合せて舞師の手を考案しだすほど上機嫌になつてゐた。

襖おもく垂れた黒天鷲絨の前で、高い簀の子からあびせてよこすスポットライトのなかで、普烈は自分自身の堅くしまつた體が、戀の夢を美しく描き出してゐる舞踊に、眺め入りながら、同時にまた體ぢうの筋肉に、旋律的な運動感覺の快く走り動くのを感じてゐた。うつゝ心に、看客と演技者とを兼ねた一幕が終らうとしてゐた時分になつて、やつと、申請的に薄い敷物を敷いた階段をおりて來る亭主たちの靴音

が聞えて來た。

(いよ／＼出かけるな)

さう思ひながら、枕もとの時計を探つて、建附の悪い襖と柱との間の隙へもつて行つてみると、五時半になつてゐた。西北に向いて高窓をもつてゐるきりのこの部屋では、一日ぢうでその時刻が一番明るく、日の永くなつたこの頃では、天氣さへよければ、襖の一部へちかの陽光がさして來て、その部分だけ薄明らむのだが、さうでないところをもつてみると、今日は曇りと思つた。——普烈は、土曜日の午後三時頃、そこへ忍び込んだきり、まる一晝夜以上も押入のそのの空氣を吸はないでゐる男だつた。

(さアもうぢきだぞ)

鏡をはずす音さへ忍びやかに、襖をあけると、血に汚れた豹のやうに肌びか／＼て來る與禰子を、想像の目がまぎ／＼と見た。どうぶつ風にして彼の女を苦しめてやらうか、そんなことを彼は老へ始めた。

## 二

西山普烈が、初め與禰子を知つたのは、去年の歳晚、横浜の東亞ホテルに催された、年忘れのファンシー・ボールの折だつた。彼の扮装は、新劇團にある友達の世話で、衣裳屋から借り出

は枕のなかに顔を埋めて了つた。

「解る、よく解ります」

海豹のやうに、唇の上に垂れかゝつた半白の髭を、齒の間に軽く銜へて、異國の友は、いたましげに目をつぶつて、「わたし、奥さんあつた、子供もあつた。女の子供、十七までそばにゐた。可愛がる、——玩具のやうに可愛がる。それから本當にたを思つて可愛がる、二つの心持どちらともよく知つてゐる。言葉うまく云へないけれど、よくわたし、解つてゐるつもり……」

「有難う。それなら安心だ。……だがね、あれは、わたしには娘だが、貴方にはさうぢやないからね、そこを云ふのさ。貴方に娘のやうに可愛がつてくれなんて、そんな無理な註文はつけないよ。あれに對してわたし、貴方と、おんなじ氣持にいいないのは知れきつた話だからね。貴方は貴方の氣持で、思ふとほりを正直に、……たい心の誠だけを盡してくれりやア有難いさ、無理にわたしのやうな氣持になつてください

なんて頼むわけぢやないよ……」

「貴方の言葉、大へん可評しい！ わたし決して……」

「さう／＼、さう誤解されさうなことだと思つたよ。いや、かう云つたからつてね、決して娘

の可愛さに目がくらんで、仕合せへあれば貴方が妾にしようとうしよう構はない、そんな下心があつて云つてゐるんぢやないのさ。よしさうされたところで、どうも仕様のない話だけれど、何も好んでさうしてくれと頼むわけぢやない。つまりア貴方の心持次第さ。わたしからの預りものと云ふ氣で、他人行儀に大事がられるより、貴方のものとして、可愛けれア可愛がる、憎らしい時には打つなり蹴るなりする、また女として可愛くなつてきたら、その時はまたそのやうに可愛がつてくれてもいいし、

つまり、どうとも貴方の好き自由だが、——ただ然し、心の誠だけはどんな時にも失はないやうに、出来るだけのことをしてやつてくださればいいんだ。なまじつか他人行儀に大切にされるよりは、貴方の思ふまゝにして貰つた方が、結局あれの仕合だらうと思ふから、それでこんなことを云ひ出したのさ。悪く釋らないでくださいよ。ねえ、解りましたね！」

「解つた、今度こそよく解つた」

「有難い、ぢやア頼みますよ！」

二人は堅く手を握り合つた。さうして、それから四五日して、老人は息を引きとつたのだが、與禰子の、亞米利加人の家庭に移つてからの生

活は、誠に亡父の望みどほりのものだった。初老の醫者は心から彼の女を可愛がつた。彼の女の方でも、暗々とした、愉快な氣持で、この第二の父親に懐き、親しんだ。——かうして與禰子は、性祕の發掘者のそばで、なんにも知らずに、たゞ可愛がられ通して育つた。

その時分、横濱の或る大きな藥種屋の支配人をしてゐたマッケンゼンは、職業上の關係からも、よくこの同國人の醫者を訪問して來た。さうして一二年ほどが過ぎてから、與禰子に結婚の申込をした。なんにも知らない、まるで子供のやうに育てられて來た彼の女は、至極無邪氣にそれをうけた。風變りな醫者は、三十ばかりも年齢の違ふことを、却つて與禰子のために仕合だらうと云つて、これにも別に不賛成は唱へなかつた。

が、この結婚は、決して幸福とは云はれないものだつた。不思議な廻り合と考へれば考へられもすることだつたが、この花嫁は、亡なつた與禰子の父親と同じやうな體の狀態にあつた。——つまり、不能者に近い健康だつた。

八

とは云へ、もとよりそれを苦にやむやうな與禰子ではなかつた。結婚後半年ほどしてから、

人の亞米利加人の醫者があつた。——一體老人は、外國人相手の商賣で口を糊してゐながら、舊弊な毛唐人と云ふ呼び名を最後まで捨てなかつたほどで、どんな場合にも、決して直接には顧客を引見するやうなことはなかつた。取引は總て或る仲介者を通じてなされ、いつも外國人と云ふものには、理白のない輕蔑や反感をもつてゐたのだ。

既に初老の亞米利加の醫師は、兼々仲介者の話に聞いて、どうかして一度この變態性慾の老人に逢つてみたいと思つてゐた人だつたから、いろ／＼に手を廻して、頑固な老人を説き落させたのだ。仲介者と懇意なくらゐだから、この醫者も、決してその道の門外漢ではなかつた。診察を終つてから、うまく話をそつちへ持つて行つた。老人は思ひがけない外國人の知己を得て大喜びだつた。それから、殆ど毎日のやうに、この獨り身の醫者が見舞つて來た。が、すぐ彼等は、醫者患者の關係ではなく、趣味とは云へないくらゐ深い性癖の似よりで結びつけられた仲よしの友達になつて了つた。

そのうちに、尿毒症を起して來て、老人の命數は、既に限られたものになつてゐた。醫者がそのことをほめかすと、老人もちゃんと覺悟

をしてゐて、それにつけて、一生の間金と時間と根氣とのありつたけを盡して漁り求めた、かの驚くべき蒐集品を、たゞ決して散逸させないといふ條件さへ堅く守つてくれるなら、遺物としてそつくり贈りたい、と申し出した。云ふまでもなく醫者は、喜んでその好意をうけ、それと同時に、誰一人身よりともないやうに聞いてゐるあと／＼の世話は、娘與禰子の一身上のことは勿論、葬式萬端、何から何まで、きつと身に引うけて出来るだけの力を盡したいがどうだらう、と相談しかけた。

「有難う」

と、老人は苦しい息の下で、「それは、こちらから、お願いしたいと思つてゐたことだ。知つての通りわしには一文の貯もないが、葬式や墓場なんぞはどうでもいい、——是非やらなければならぬと思ふなら、一番簡單な方法を選んで貰ひたい。それがわしの望だ。然し、娘には、貴方が出来るだけのことをしてやつてくれないかね。どう云ふ風な女に仕立てゝ貰ひたいと云ふやうな注文はない。たゞ貴方の心の誠に訴へて、出来るだけよくしてやつてくれとお願ひするよりほかはない」

「解つた」

これも風變りな亞米利加の紳士は、枕もとに端坐し、深く頷き返して、「貴方の心持、よく解つた。少しも心配しないでいゝ。出来るだけのこと、わたしに出来ると思ふ」

「有難う」

もう一度老人は、心からの禮を述べて、それから少時は日をつぶつてゐたが、靜にかう云ひ出した。「貴方は娘を、わしの蒐集品の一つだと考へてやしなかつたかね？」

すぐには、醫者も、口が利けなかつた。心の擾亂は、深い皺の多い、白哲の面上に、露はさざるほどに動いた。それを見ると老人は、僅しく微笑みながら言葉を續けた。

「お察しの通りだ。或る意味で、あれはわしの愛玩の品だつた。蒐集したものうち、一番の寶物だつた。——その氣持は、恐らく貴方のお察しの通りだらう。けれども同時に、わしはあれの親だ。娘を可愛がる男親の氣持には、それもある。わしばかりではなく、誰にでも必ずそれがある。然し、決してそればかりぢやない……」

## 七

道の一里も駈けて來た人のやちに、息を切らし、思はず掣まる顔を見せまいとしてか、老人



く逢瀬でも、そのまゝ駆けつける氣になれないのに無理はなかつた。それも解つてゐながら、普烈は、瘤の強い馬のやうに、じり／＼と苛つてゐた。どんな微かな物音でも聞き洩らさない、おのづと耳が澄まされた。臺所と背な合せになつてゐる湯殿の方からは、水を使ふ音が聞えて來た……

と、その時、ガチャ／＼と、扉の握柄を振ぢ試みるらしい物音を、鋭くなつてゐる普烈の耳が捉へた。それは、湯殿とは正反對の方角、——東南の隅にあたる玄關の扉と直覺された。

そのうへ、音の高低をほかにして、そのガチャリガチャリ振ぢ試みる音には、盜賊のやりさうな忍び／＼の心持があつた。ガチャリと一つ廻すと、うちのなかに心附いた者があるかどうか聞きすまして置いて、それから徐にまたガチャリともへ戻す、——さう云ふ風な、忍びやかなやり方だつた。

上半分が硝子になつてゐる觀音開の玄關の扉に、耳をよせて、鍵がかゝつてゐるかどうかを、そつと振ぢ試みてゐるマッケンゼンの姿が、咄嗟に普烈の目の前に浮かんた。——さつと肌が寒状だつて、思はず床の上に起き返つてゐた……

が、どうやらそれは空耳らしかつた。ガチャリガチャリと三四度は慥に聞えたと思ふ物音が、起き直つてぢつとすました耳へは、もうまるで傳はつて來なかつたばかりでなく、米川神社の森に近いこの山の手の奥町には、逢魔が時とでも云ひたいやうな、日暮がたのほんの少時の深い静まりが來てゐた。申し合せてものみな

してゐる習慣から、ズボンのなかに、柄頭だけがバンドの上へ顔を出さうに深く差し込んで身を構へた。が、靴音はすぐまた廊下へ出て行つた。今度け、前ほどには荒々しい歩き方ではなかつた。宛る物音を憚るやうな心持が感じられた。

が、更に一層薄氣味わるいものだつた……ガラリ、——いきなり水口の腰高障子が引きあけられて、すぐ大股に踏みよる、憚るところのない靴音が、反つくり近つた臺所のあげ板を、ガタリゴタリと荒らかに踏み鳴らした。普烈は床に足をおろしたが、そこには立ちあがるほどの餘地はなかつた。腰かけたまゝ、無駄を知りつゝ、もとより引手のない襖の縁へ爪をかけて、力いっぱい引きあげようとした。云ふまでもなく、南京錠が、搖れて鳴るばかりだつた。

「與福さん……」  
「與福さん、あなたどこにゐます？……二階？」  
靴音は階段の方へ、從つてそのすぐそばにある湯殿の方へ、用心深げに、コトリ／＼と遠のいて行つた。

## 十

すぐもう入口の襖があいて、疊の上の靴音が、びたりと押入の前に止まつた。普烈は、手早く寢床の下を窺つて短刀を取り出し、いつもさう

この押入を姦夫の隠れ場と知つてゐて、ことさらに十時頃までは歸らないと云ひ残して出かけておいて、不意打に現場をおさへようと云ふ氣で戻つて來たものか、それともなんにも知らずに、出がけに忘れて行つた好物の茶缶かよんかを取りに歸つて、そこらに細君の姿が見えないところから、いきなりこゝへはいつてみると、



二階の書齋には、カーテンで一隅を仕切つて一人床が入れられて、以來、夫婦別々に寝につくことになつたが、結局、それを氣安く思ふやうな彼の女だつた。さうし、二年ほどの月日が流れたあとへ、突然西山普烈と云ふものが、平和な夫婦の間に立ち現はれて來たのだ。さうなつてみると、矢つ張り此の結婚は、幸福なものとは云へなかつた……

客間には、ものゝ二三十分も、英語と日本語を入混に、人々のがや／＼と喋り合ふ聲が続いた。それは、與禰子が、今夜一緒に鰻を食べに出る約束を、なんとか言葉を立てて、自分一人うちに残らうとする云ひ譯やら、はたからはまた、「まあそんなことを云はずに……」などと同行を勧めるやらで、ひとしきりの賑ひだとは、押入のなかの男にもちゃんと察しがついてゐた。その上、女を大事がする外國人たちのことだから、結局與禰子の云ひ分が通ることも分りきつてゐた。

（えゝ、さつさと出て行きやアがれアいゝんだ！）  
舌うちをして、心に咥く時分に、やつと話のきまりがついたとみえて、靴音が玄關の方へ出て行つた。

「ウエル、ゼン、グツバイ……」  
「さやうなら、……行つてらつしやいまし」  
「行つて來ます。ぢア十時頃には歸つて來ますからね……」

「奥さん、またどうぞお遊びに……」

「有難う、さよならお大事になさい……」

さう云ふ聲々は、はつきりと聞えて來た。

普烈はことさらに悠々とした心持を用意しようと、枕もとのスリー・キャツスルの鑑から一本ぬき取つて、マツチを摺つた。いつかもう隙間から差し込んで來る幽かな光も消えて、殆ど眞暗闇に等しい押入のなかに、赤黄色い火先が延びあがり、ズボンと、上はソフトシャツ一枚のごろ寝の若者を、ちよつとのま描き出した。

靜に、然し小走りに、足音が近づいて來て、入口の襖をあけると、

「……いまぢき來てよ……」

「おきんを便に出しちまひたまい」

待ち構へてゐて、普烈はそれを注意した。

「えゝ、だいぢよぶー」

そしてまた廊下の足音が遠ざかつて行つた。

……息いっぱいに吸ひ込むと、鼻の先の煙草の火で、普烈の刻の深い容貌が、赤々と照し出された。いかにも心地よげに微笑してゐた。

「うーん……、あゝアア……」  
今までとて別にさう窮屈に縮まつてゐたわけでもないが、急になんとなく氣樂な心持になつて、のう／＼と大きく伸をした。手足がすぐ壁へつかへたと思ふと、足もとの方で、ガタンと、寢床から床へ落ちたものがあつた。今はもう然し、そのものの音ではつと身を凍めるやうなこともなかつた。起き返つて、前こゝみに一服ふかく吸ひ込み、その火影にすかしてみた。白鞘の短刀の、二寸ほど鞘はしつたのが、キラリと光つた。（なアんだ！）とも思はずに、拾ひあげて、枕もとの布團の下へ押し込んで了つた。

二階は女中、階下は與禰子と手分けをして、ガタン／＼と雨戸を繰る音がしだした。それがすむと、食堂の方で、貰ひものをぶひつけてゐるらしい主婦の聲が聞えた。暫くしておきんが、臺所の水口から出て行つた。

待ちに待たれる足音は、然し、湯殿の方へ駈けつけ、その板戸のあく音がした。

九

潔癖で、日に何度となく、手を洗つたり、口を漱いだり、髪に櫛の齒を入れたり、ずにはゐられない與禰子が、指先に薄埃のさい／＼と感ぜられる雨戸の棧を掴んだ手では、いかに心の急

心持には、女がよくさう云ふ場合が陥りがちな自己欺瞞がなかつたせゐか、いつまでも永續きがした。とは云へ、二人の男の、位置、財産、名望、才幹と云ふやうなものを比較商量して、強ひても現狀の維持を必要と思ふやうな、さう云ふ理智的な與禰子ではなかつた。夫婦の間とはかうしたもの、そこへ愛人が出来れば、その結果はおのづとかなつて来る、どうもほかに仕様がな、——かう、水の低きにつくやうな邪氣なさで、自分自身の行爲を眺めてゐられる彼の女だつた。

そこへ行くと、普烈の方は、全く凡俗の戀だつた。まづ、不良少年らしい惡戯心や打算からはいつて行つて、次第に本氣になり、今ではどつちかと云へば、却つて自分の方が動きの出来ない愛着に絡まれてゐるくらゐなのに、みづから欺いて、なに、こんな女の一人や二人、いつ捨てたつて惜かアない、ほんの當座の享樂だ、と云ふ風に考へてゐた。さうでも考へてゐなければ、この場合殊に満たされ憎い戀人の獨占慾を、どうにも處置のつけやうがないわけだつた。

この二つの心の据ゑ方の違ひは、可怕いほど觀面に、露骨に、事件の發覺に對する二人の覺

悟に現はれてゐた。命知らずと云はれ、喧嘩の名人と謳はれてゐる西山普烈が、時折マッケンゼンの掌中にある短銃を幻に見て、心を寒くしてゐたのに反して、與禰子の方は、もし見つかつて叱られたら、あやまるばかりだし、それでも勘辨してくれなければ、離縁なりなんなり、良人の思ふ存分になるより仕様がな、と、簡明瞭にたかをくくつてゐた。それ故にこそ、小切手の側でも知れるやうに、普烈に關する秘密の取扱ひなどもぞろつべいだつたり、押入を寢床に改造すると云ふやうな、危険な、そして圖々しい企てにても、手を拍ち合せて喜び聲成するわけだつた。たゞ圖々しいだけの普烈の氣持とは、全く別なものがあつた……

風呂場の方からは、普通の調子でものを云ふ聲が聞えて來た。六疊の鍵を出しておくれ、煙草を忘れたから。いゝえ、もう煙草やなんかはあすこに入れてないの、あたしの部屋、今すぐ持つて來ますからね。……そんな風な、穩かな會話らしく思はれるのだが、それにしてはちつと永すぎた。殊に、何を云つてゐるのか言葉は分らないが、マッケンゼンの聲ばかりが多くて、その合間に一言二言づつ挟まる與禰子の調子の、普段よりずつと低聲なのが腑に落ちなかつた。

……じりりと、不安が、もう一度新にこみあげて來た。  
「鬼に角 お貸し！」  
急に、怒鳴りつけるやうなマッケンゼンの聲が響いたと思ふと、ガチャ——と鍵輪が鳴つた。何やら甲高に與禰子の叫び聲が起り、續いて二人もみ合ふらしく、ドタバタと板敷に足音が亂れた。

普烈は力まかせに、襖の裾を蹴つけた。

## 十二

安もの、襖には、ひとたまりもなくボコリと大穴があいたばかりで、さうお詠へどほりはづれてくれなかつた。すぐまた枕もとの方の柱に接した框を狙つて蹴ると、丁度それが外側の溝にはまつてゐたので、中ほどの、錠で二枚とち合はされたあたりで弓のやうに擦つて、一尺ばかり疊の上へずり出した。續けさまに二つ四つ蹴るうちには、外側の一枚だけ上下とも溝がはづれて、——それで、も錠で吊られたまゝ、謂はば三尺の開戸の形に、あく勢で、べつたり内側の襖に折り重なつて了つた。

その眞正面に、疊一疊を隔てるか隔てないところ、八寸豐のマッケンゼンが、ちツと突ツ立つてゐた。西窓に微かに残つた外の光を背負

襖に錠がおりてゐるので、それですぐまた錠を  
取りに出て行つて了つたのか、聲音や足音が  
りで想像するのでは、マッケンゼンの本意のあ  
るところが、有繋の普烈にも、まるきり見當が  
つかなかつた。もし何もかも知つてのことゝは  
つきり解つたならば、その暇に襖を蹴破つても  
飛んで出て、素早く西向の高窓から身を隠す  
らゐる藝當は、彼にとつてはさしたる難事でも  
なかつた。然しなんの他意もなしに、忘れもの  
を取りに戻つて來たものとすれば、細君が、あ  
れは都合で藏ひ場所を變へたと云つて、部屋か  
ら持つて來て渡さへすれば、そのまゝ無事に  
すんで了ふことだつた。一旦襖を蹴破ると云ふ  
やうな苦事を演じた上は、身の安全だけは圖ら  
れるとしても、今後の逢ふ瀬が絶対に不可能に  
なるか、少くも困難の度は非常に増すわけだ。  
第一この押入のなかの爲體を、なんと云ひ解く  
すべもない與禰子が、あとに残つてどれほどの  
苦しみにあはなければならぬか知れない。そ  
の立場を思ひやれば、これは迂闊なまねは出來  
ないぞ、と、聴しくも普烈は深く思ひめぐらし  
たのだ。

尤もそれには、普段からのマッケンゼンの感  
度が、不義者たちにとつて、何から何まで知り

ぬいてゐるのやら、それとも全く無邪氣なのや  
ら、なんとも要領を得ない謎のやうなものだつ  
たせゐるもあつて、さう云ふ際どい場合まで行つ  
ても、思案といへば思案だが、悪く云へば持も  
ない氣迷が起るわけでもあつた。飽まで圖々し  
い普烈と、これまであまり嘘と云ふものゝ必要  
に迫られることなしに來た與禰子との取合せだ  
つたから、いかに鈍感な者にでも尻ツ尾を押へ  
られさうなあぶなツかしい瀬戸も、幾度となく  
潛つてゐた。留守中押入から出て、シャツ一枚  
で、悠々と時分はづれの書篋を食はせて貰つて  
ゐるところへ、ぬうツとはいつて來られて、兩  
方で、なんとも云へない珍妙な顔を見合せたこ  
ともある。矢張り不意の歸宅に驚いて、靴を穿  
く暇もなく、手にぶらさげて庭へ跳んでおり、  
内と外と入れ違ひに門の方へ行かうとすると、  
なんと思つてか、いつになくそつちから廻つて  
來かゝつたマッケンセンと、庭木戸のところでは、  
ばツたり眞正面にぶつかつて了つた時などは、  
有繋の普烈も顔色がなかつた。金に困つて、與  
禰子に書いて貰つた小切手に、——そんなところ  
ろはまたいやに正々堂々と、住所も氏名も有の  
儘に裏書をして引き出したのが、程なくばれて、  
銀行で調べられた結果、與禰子がしどろもどろ

に、一時立替へてやつたものと云ひ紛らし、い  
ろいろしてわきから調達して來た金で、普烈か  
ら爲替で良人に送らせて、どうやら誤魔化しを  
つけたこともある。決して愚ではないマッケン  
ゼンが、いかに細君をほんの子供のやうに思ひ、  
それ故にまた信用しきつてゐたとは云へ、かう  
云ふことが度重なつては、それと思ひ極めない  
までも、少くとも疑ひぐらゐはたなければ  
ならない筈だつた。それなのに、彼はたゞの一  
度でも、細君に向つて、普烈との交際を免やか  
う云つたためしがなかつた。まるつきり知らん  
顔をしてゐた。これは、然し二人を、どう云ふ  
關涉よりも尙更に、一種底氣味わるい不安へと  
追ひ落すものだつた。

# 十一

與禰子は、然し彼の女の明い淡泊な性分か  
ら、事件の發覺をそれほど深く慄れてゐるわけでは  
なく、それとはまた全く別に普烈が好きで、  
たまらないのだから、これはどうも仕方がない、  
と云ふやうな氣持だつた。戀ひ進むにつれて、  
良人は顔を見るも可厭になり、愛人と二人きり  
の生活をしく思ふのが普通だけれど、彼の女の、  
はつきり良人は良人、愛人は愛人と云つた風な



た。……急に普烈には、どうにでもしてこの場を逃れようと云ふ氣が、ムラ／＼と湧き起つて来た。

(なに、こんな鐵火箸みたいな野郎！)

さう思つた瞬間だった、あけ放しになつてゐた戸口に、足音もなくすつと立ち現はれた姿があつた。二人はそれを視野のはづれに感じながら、どつちもその相手から目をはなさうとはしなかつた。ちらとでもさうしたが最後、命はな

いもの——この感じには、動きがなかつた。

「あなた！」  
と呼びかけた與禰子の聲は、震へてはゐたが、低く、底力がこもつてゐた。「あたし、亞砒酸をもつてゐるんです。そのピストルをはなしてくださらなければ、今すぐ口へ入れますから……」

「ネヴァ(ならん)！」

正面を睨め据ゑたまふ、思はずマッケンゼンは、ひと言生國の言葉で叫んだ、與禰子は、そろそろ部屋のなかにはいつて来た。

「ぢやアそれをあたしに手渡しください！」

「いけない！ あなたはそつちに行つといでなさい！」

「よろしい。ぢやア毒を嚥んでもいいんです

ね！」

「うーむ……」

低く呻いたと思ふと、ブル／＼と全身に武者震ひが流れる、途端に與禰子の小さな體が、

鞠のやうに弾んで、マッケンゼンの右の手に跳びついた。

……ツウン……重く銃聲が響いた。……ドツ、ドツ、二つ三つ壁の上に力足が踏まれたかと、

思ふと、マッケンゼンの長大な體は、風航玉の息がぬけたやうに、急にシワ／＼シワと崩折

れだした。馬乗りに折り重なつて、普烈もともども、古新聞で腰貼をした黄大洋の壁へ、ツツ

シンと重く倒れかゝつた。

いやな呻き聲と、壁に疊にドタリバタリ手足を打ちあてる音……

「ニ、ニ、西山、……フリツツ……、フリツツ……」

「くそー！」

もう一度薪たに、苦しい呻きが高まつた。

「死んで、一緒に死んで！」

もうそこは夜の闇だった。探りよつて来る與禰子の手を掴んで引よせたのは、いやにペトペトする手だった。

「死なうとも、さアお立ち！」

#### 十四

もとよりその答に嘘はなかつた。が、その一瞬間前ふと我に返つて突ツ立ち上つた時には、

たつた今わが掌にグリ／＼と手應を感じつゝ、

息の根をとめたばかりの男を踏み踞いで、右手には、なほしかと短刀の柄を握つてゐた……そ

れは、噛みしほつて引摺り廻すやうな筋肉の抵抗の間に残して來てもいい筈のものでつた。よ

し十重二十重に取り圍まれようとも、それさへあれば、またどうにか近れ終せないものでもない、——この氣持は、ごく幽にもせよ、動いてゐ

なかつたとは云はれなかつた。だのに、與禰子聲を聞くと同時に、バサンと壁の上へ、その、血

みどろの万ものを投げ捨て、了つたのだ。

(さうだ、二人なら死んだ方がいゝ……)

その時になつて、畢竟二人と云ふことに氣がついた。そして、もし一人だつたら、自殺などは

夢にも思ひ起さないものだつたに違ひない。

「さア、早く……お前の部屋へ行つて、あすこで……」

一刻もそこに居たまれない氣持は、一足ごとに指先が背なかに觸れるほど、急に急いで追ひ縋つて來た。

「起して、た、た、立てない……」



つて、ヒョイと見あげた目には、天井からペロリと黒い紙でもぶらさがつたやうで、顔のありかも知れなかつた。けれども、腕いつぱいに突き出された右の手に、拳銃の握られてゐることだけは、咄嗟に、目が見たか、耳が聞いたか、鼻が嗅いだか、兎も角普烈の心には、はつきりと映つてゐた。思はずたじろぐ、胸へ、俄造りの寢臺の先端がボンとあたると、そのまゝ布団の上に腰かけて了つた。——偶然ながら、それは決して、腰をぬかした、と云ふ形ではなく、くそ度胸を据ゑ、くるりと尻をまくつて坐り込んで了つたと云つた風に見えた。と、マツケンゼンは、一足踏み出して、ビタリと普烈の胸板へ狙ひをつけた。

(どうでもなれ!)

普烈はもう全く変れかぶれの氣持だつた。ソフト・シャツの襟に手をかけて、グイと押し開くと小さな貝釦は手應へもなくバラ／＼とちぎれ落ちた。内懷の肌へおかに、左の手をグツと差し入れその肘の下に隠れるやうに、右だけはシャツの上からズボンへ突ツ込んで、短刀の柄をしかと握つた。

そのまゝで二人は睨み合つてゐた……殆ど影繪に等しいマツケンゼンの顔にも、ヂツと見

詰めてゐると、目口、鼻がはつきりして來て、殊に白眼は、まるで燐光でも放つかと思はれるほどギラ／＼と輝いた。その二つの眼のほかに、眞つ正面に、心臟に擬せられてゐる銃口が、更に恐しいもう一つの眼だつた。それが、ヂツと普烈の生命を睨め据ゑてゐた。

(えゝ、もう、どうともしやがれ!)

所詮のがれられないと覺悟をきめると、普烈は、嘘のやうに急に暢氣な氣持になつて了つた。寢臺からぶらさげてゐる足を、無意識の間に軽く組み違へ、貧乏ゆすりよりもうちつとあらゐ間を廻んで、ゆら／＼とゆすぶらし始めた。

——それだけの、無言の時が過ぎたのだ。

(今までぶつばなさないんなら、こいつだいがん聴れが來てやがるな。やられたところで、存外怪我ぐらゐですむかも知れねえぞ。まア、やられりやアやられるで、それもいゝや)

それくらゐな氣持になつて來た。

(だが、一體與禰子のやつはどうしちまつたらう。口でも舐めたかな。やられるくらゐなら、その前にもうひと口顔を見たいが……。でも、こんなところへ跳び込んで來て、悪く止めだてでもされようもんなら、却つてそれがズドンとぶつばなされるもんだ。かうしてちつと睨

み合つてゐるうちは、なんかきつかけがない限り、ちよつと引金け引けぬえ。)

### 十三

危機一髪ともぶふべき瞬間の、死の恐怖はそのまゝに、不思議にも普烈は、一方そんなことまで考へてゐた。さうしてその考察は、可なり鋭いものだつた。顔色や表情は見極められなかつたとしても、さア立派に撃ちぬいてくれ、と云はんばかりに、シャツの胸をはだけて、眞正面に銃口に對し、而も寢臺からぶらさげてゐる足を、音楽のタクトでもとるやうに、暢氣らしくゆすぶつてゐるのでは、どんな人間でも、ちよつと火蓋の切れるものではなかつた。危険は寧ろその無言の、靜止の狀態が、何か第三者によつて亂される瞬間に懸つてゐた。だから、睨み合ひの狀態のまゝで、二人が化石でもして了はない限り、飛び行く毎秒々々に、逆れ難い危険が迫つてゐたわけだが同時にその狀態が続いてゐる限りは、絶対に安全だともぶへるわけだつた。

刻一刻、外の光は薄れて行つた。打ち込まれた杭のやうに、棒立に立ち塞がつてゐるマツケンゼンの姿に、もはやカラやシャツの白と、上衣の黒とをさへ見分けかねるほどになつて了つ

幾代は、ちよつとハンケチを口のはたへもつて行つて、機嫌よく微笑つたが、信之のは寧ろ苦笑ひだつた。

前の晩は、伊庭や瀧十郎と一緒だつた。機嫌買ひの瀧十郎が、ちよつとした拍子から馬鹿にはしやぎだしてアつて、いゝ加減の部屋では側へもよれないほど、奇智縦横のお座もちぶりを見せた。正面からはぶつりとも云はずに、暗々の裡に、御主人公の信之と、久し振りでなんとなくばつての悪くなつてゐる幾代との間の空気を、和げ、暖め、仕舞には幾分エロティックにさへ萌し醸さうと努めた。その調子のよさは、それだけで一つの藝當になつてゐて、當の信之でさへ、少しもてれることなしに、笑つて見てゐられたが、然し結局、餘計なおせつかいだと云ふ有難迷惑の感じは免れなかつた。そこへ行くと、利口なやうでも幾代は、單純に瀧十郎の心遣ひを嬉しがるばかりだつた。おまけにその現し方が、いかにも遊び馴れた、謂ふところの「粹な」取り廻しになつてゐるので、同じことでも、操られてゐるやうな快味を誘はれたのだ。

「ほんとに面白い人ね」

「ちつと面白すぎるくらゐだね」

信之の云ひ方には、どことなく反感が含まれ

てゐた。

「でも、あの方へかけると、随分凄いですつてね」

相手の氣持を感じると、すぐそれに應ふ方向へ、話の道筋を自然に折り曲げて行くやうな神經や技術は、永く妓婦に身を置いてゐる幾代には、もう一々は意識にものぼらないほどの、心の習慣となつてゐた。

「さうかしら……」

「あなた、木挽町のよし野つてうち御承知でせう？」

「知つてるよ」

ほんの目につくかつかないほどに、信之の眉根がよつた。

「おもんさん……」

意味をもつた目つきで、ちツと相手を見詰めながら、幾代は色ツばく首をかしげた。

## 二

「そのおもんさんも知つてるが、それがどうしたと云ふんだい」

選した目、無理に相手の顔に抑へつけてゐるやうな、いつになく弱々しい表情で、信之が訊き返した。

「あの人ともさうだつたんですつてね」

「萩原がかい？」

「それアもう天下周知の事實ぢやないか」

「さうですか」

と、素直に頷いて、「ぢアあなたは、誰がさうだつたとお思ひなすつたの？」

「いや、それア……。然しあのおもんさんて人は、不思議に評判の悪い人だね。どこで話が出て、つひぞ褒められるのを聞いたためしがないよ」

「ほんとにさうですわね。有繋の萩原さんも、あの人だけには、なんでしたつてね。……有繋になんぞつけて、瀧ちゃんにはすまないけれど……」

「なんでした、たアどう云ふんだい、捲きあげられてゐたとしても云ふのかい？」

「えゝ、まア……」

「そんなことはあるまい。勿論大して金を使つちアあなかつたらうけれど、まさか、萩原を絞りあげるなんて、おもんさん、決してそんな人ぢアないよ」

「さうでせうか。でも、専らさう云ふ取沙汰ですわ」

「あの土地なら兎も角、こゝらまでそんな取沙

探りよる手先が、帯のお太鼓のもツくりとしたふくらみに觸つた。うつ俯になつてゐる兩脇から手を入れ、胸へ抱きあげようとすると、キヤツと叫んで、必死に身をまがきながら、

「だ、だ、誰かゐる！ フリツツ！ 誰かうしろにゐる！」

「俺だよ、どうしたんだ、俺だよ！」

しがみついて行く女の手先へ探りよつてみると、兩手にしつかりつかまつてゐるのは、マツケンゼンの右腕だつた。

「おい、違つてるよ！ それア……おい、それア……」

「いや／＼、いや！」

「馬鹿、俺はこゝにゐるんだ！ うしろにゐるんだ！ これが俺の手だつて云ふのに……」

「いや、フリツツ！ 誰か來てるよ！」

「馬鹿！ 違つたら！ それア……」

「いやだ／＼！ いやですつたら」

生きた二人の手と、みづから動かない一本の手とが絡み合ひ、もつれ合つて争ふうちに、耳を劈く鈍聲が鳴つた。

「人殺し！」

咽喉いつばいに、與禰子の聲が突ツ走つた。續いて、どこまでもぬけて行くか分らないやうな、

太い息が、ウ、ウ、ウ、ウ——ツと呻く、その口へ手の平をあてがつて、全身の力を集めて、女の體をもぎ離すと、ビ、ビツ、と、着物のほころびる音がした。廊下を引きずつて食堂まで來た。そこには、電燈が明るく點つてゐた。みると與禰子はもう顔色がなかつた。

膝に枕をさせて、襟を押し上げた。そこは、手に握へるほどの血だつた。——マツケンゼンの拳にあつた拳銃の引金へ、生きて動く二十本の指の、どの一本が觸れたとも云へなかつた。死

んで動かない五本の指の、そのひとさし指にでも、それくらゐの力が、——或は執念が、生き残つてゐなかつたとも云ひ切れはしまい……

「與禰子！」

靜り返つたあたりへ、その聲は、答へられることなく吸ひ込まれて了つた。ガツと動かない鳥

睛を見詰めてゐたが急に、ドタリと死體を膝から落して、血みどろになつた若者は、ぬツくと突ツ立ち、走るやうに部屋を跳んで出た。

## う は さ

一  
曆では、まだまる一月も早いのに、降り具合は

丁度梅雨だつた。半日かそこらの時間、が、たまらない蒸暑さで、降れば降るでまたじめ／＼と、あたまが抑へつけられるやうな日が続いた。

信之は、もう舊い仲ながら、ちよつと理由があつて、一丁綺麗に切れてゐた日本橋の幾代と云ふ妓と、半年振りに一夜をあかして、翌日がその鬱陶しい雨だつた。二時頃になつて、待合富

久田家の、薄暗い階下座敷で、やつと二人は、朝

とも書とも云へない食事を攝らうとしてゐた。自分でも情ないとは思ひながら、口腹の慾には

脆い信之のことで、そろ／＼また節酒の緒がもどりにかけてゐた。前の晩の深酒がさしてこたへてゐないのをよいことに、ゆつくり腰を据ゑて、ちび／＼始めてゐた。

「なんだい、何を思ひ出し笑ひなんぞしてゐるんだい」

あいた盃を突き出しながら、餉臺の角と左の肩、擡げかけた新聞から顔をあげた拍子に、

ちらと目にとまつた幾代の薄笑ひに、信之は、

つい誘ひ込まれて自分もニヤ／＼した。

「いえね、昨夜の萩原さんの容子を思ひ出したら……」

「いやどうも、これは恐縮……かい？」

「あれを云ふ時の顔つきツたら……」

んな場合でも、決していやみにだけは陥る氣づかひがないんだ、いや、それが人間として當り前の言葉なんだ。——普段から百も承知してゐながら、またそんなくだらない反省を繰返さなければならなかつた。

赤くなつた顔を眞正面に幾代に向けるだけの勇氣は、然しその反省が生んでくれた。

「御免！ 今のは全くきざだつたね、あやまる！」

「あらア」

てれて、幾代は横を向き、手持無沙汰の煙草に火をつけようと、敷島の箱を取り上げた。その時、目の中が一杯の涙になつて來た。——悲しい涙はこらへやうもあるが、嬉しい涙の氣

まぐれさに不意をうたれては、どうにももう誤魔化しがつかなくなかつた。一本ぬき出して、手近の煙草盆へ持つて行くと、富士山の形に綺麗に掻きあげた灰と、その真中の、なかば黒いまゝの櫻炭とが、涙を通して、もじや〜に入れ混つて見えた。信之も黙つてゐた……

「暑い」

ほのかに鈴蘭の匂ふハンケチで、まづ鼻から口へかけてのあたりを押しつけるやうにしてから、手早く眼頭を拭つて、「雨があがるんぢや

ないかしら。いやに蒸して來ましたねー

云ひながら立つて行つて、小庭に向つて五寸ばかり隙してあつた障子をあけ放した。銀の、細い雨足が、スツ、スツと、斜めに、萬雨や矮雞檜葉の下草の茂みに消える。どことなく空の底光りがまして、近くの湯屋の煙であらう、物干竿の屈きさうなあたりを、薄く舞ひおり舞ひあがつて流れる。

さう云ふものを眺めながら、幾代は綺麗に涙をふいた。

#### 四

信之は、手酌で盃を満しながら、  
「こつちにいらつしやいな」

「えゝ」

「おもんさんの話が、中途からとてつもないところに迷ちまつたねー」

平の結城紆の、仕立おろしがやゝ突ツ張つた袖へ、ハンケチをしまひながら座に戻つて來る

幾代を見あげた。おきぬけに風呂へ飛び込み、この階下座敷に來るや否や新聞に讀み耽つてゐて、身じまひを濟まして、あとからお早うござ

います」とはいつて來た幾代には目も向けず、「お早う」と頷き返して置いたので、昨夜に變るそのこしらへに、つい今が今まで氣がつかずに

ゐたのだ。化粧と云ふほどではなく、ノールムでちよいと叩いたばかりの、小紫色の地に、ゆるやかに然しびたりと、葡萄鼠の襟の重なつてゐる具合が、ひどくよかつた。

「大へんねえ、何をそんなにちツと見ていらつしやるの？」

「いや、なんでもない……」

てれてすぐ目を逸したが、話しかけてゐたことを思ひ出して、「だが、あまのじやくなものでね、あんまり悪い噂ばかり聞くと、その噂の當人が、同情されて可哀想になるんぢアなくつて、實際ごくいい人のやうに思はれて來るが、そんなのは俺ばかりかしら。おもんさんだつてさ、はたが自分のことを悪辣な女だと噂をすれば、無理にもその噂どほりにしてゐなければ濟まないやうな氣持になつて了ふほど、それほどういふ人なんぢアないかとさへ思はれるんだ。だから、もしあの人が、この方ばかりは、と思つて、おのづと頭のさがるやうな人が出て來て、それアみんな間違つてゐるんだ、お前さんは悪辣どころか、大へんにいい人なんだよ」と云つて聞かせたら、忽ち生れ變つたやうないゝ心になるに違ひないよ。つまりあの人の振子が、一時、世間の噂と云ふもので、右なら



汰があるほど、一體おもんさんつて人は、大した人なのかね？」

「え、それアあなた、何しても川島伯爵を手玉にとつてゐたんで、すつかり世間へ賣り込んぢまつた名前ですもの」

「さうかなア、さう云ふ名岐質の人たア思へないがなア。然しまア、それアさうなんだらう。三好に云はせると、無智と色氣の象徴だなんて、からもう一文の値打もないやうに云はれてるが……」

「あなたは、大へんまた御最良のやうですわね。少し可訝しいのね」

「可訝しいか可訝しくないかは、そちらの御推察に任せるが、最良は慥に最良だよ。一體ひとの噂つても、ほんとうに當にならないものはないからね、あれはどうも質が悪いの、この人は實に立派な人だのつて、さう人間が善か悪かのどつちかへ、びたりと組込まれてたまるもんぢやアないよ。丁度柱時計の振子みたいなもんでね、いゝ方なり強い方なりに、——つまり右なら右へだね、そつちへ五寸揺れるだけの力があれア、反對の悪心や弱々しい氣持にだつて、同じ五寸と云ふものは揺れ動かなければならない筈のものなんだ。それが、右なら右、左なら左へ

片づんだ揺れ方をしてゐるやうな奴は、きつと一人前の人間ぢやないんだ。嘘つきなんだ。嘘つきつたつて何も詐欺師なんぞのやうに、人を騙すばかりが嘘つきぢやない。世の中に何が教

はれないつて、自分で自分を騙して平氣でゐられる人間ほど始末におへないものはないんだ。さう云ふ奴等に限つて、自分の心を、ぶらんぶらん平氣で右や左へ揺れ動かして置けないもんだから、無理やりに右へ抑へついたり、左へ片づけたりして、得意になつて納まり返つてゐるアがるんだが、あたしに云はせれば、そんなのは一人前の人間ぢやないね。片輪だね。右へ行かうと左へ動かうと、自分の心の揺れる幅をちゃんと心得てゐて、平氣で落ついてゐられるのが本當だ。それでこそ一人前の人間なんだ！」

### 三

「それぢアあたしなんぞも……」

と、よくは嘸み込めないながらに、幾代が言葉を挾んだ。差し向ひの朝酒に、理窟っぽいお談議を、やゝ辟易の態で、ならばうまくほぐらかつて了はう了見だつた。「まんざら馬鹿への五寸ばかりぢやアないですね。ガツチャンと一つ揺れれば、これで利口の五寸もあるわけな

んですわね」

「感心！ その通りだ……」

信之も機嫌よく微笑ひながら、「だが、お前さんなんぞは、馬鹿への五寸が、三寸五分あたりで引き返しちまふ態がないたア云へないぜ。どこまで行つてもだらしがなくならないやうぢア、まだ／＼半人前だね」

「へえ？ どこまで行つても、あなしがだらしなくならない？ へえ、さうですかねえ。尤も半年近くもほつたらかして置かれたんぢア、こちらがいくら隨いて行きたいと思つたつて、踏み出す日途がつかないわけぢやないでせうかね」

「なアんでね、なか／＼味なことを仰有るね。あたしみたいな正直者にうつかり眞にうけられて、あとで困つても知らないよ。困ると考へるのからして、そも／＼自惚たわけなんで、その實は、嘘はれるのがおちかも知れないが」

「可厭なの！ お人柄らしくもないことを仰有るもんぢアありませんよ！」

多少の誇張はあるにしても、その可厭なの！「は、隨に實感らしかつた。信之は、心にもない花柳界の輕口を、深く自ら恥ぢなければならなかつた。問ぬけじみた、智慧のない云ひ草でも、實感からものを云つてゐるさへすれば、

るけれど、いまだにあたしは、あの人が好きだよ。云つたり爲たりすることに、なんとなく底力があつてね、ぐうつと押し来るやうな根強いところがあるんだ。呆れ返られるか知らないが、そのすぐあと、妹のお澄さんとも、たうとうそんなことになつて、この方は三月ばかりも續いたんだが、今になつてみると、性分としちやア、あたしはおもんさんの方が好きだな。へんにしねくねした陰性なところがなくつて、有繋にすつきりしたもんだよ……

「まあ、可憐い！」

「何が可憐いんだい。……あたしを色魔だとも思つてか？」

「色魔か何か知りませんが、何してもえらい腕ですね」

「腕なんて、可哀想に、そんな可厭な言葉を使つてくれるなよ。もしあたしが、腕がいゝとか色魔だとか云はれるやうな人間だつたら、あなたなんぞに圖星をさゝれて、すぐ眞赤になつて、どきまぎして、忽ち尻ツ尾を押へられてしまふやうな、そんなどぢを踏むもんかね。ぬけぬけとした顔をして、へえ、よし野、そんなうちは知らないね、とかなんとか、初つからうまく誤魔化しちまはアね。腕のいゝなんてのは、

こんなもんぢアないだらう」

## 六

目を伏せて、暫くちツと考へ込んでゐたが、幾代は急に職業的な媚笑ひに身を甲ひ、言葉つきも晴々として、

「御免なさいね、お客様を捉へて、腕がいゝのなんのつて、好き放題なことはかり云つて……」

今度は信之の方が、ぢつと相手の顔に目を据ゑて、ちよつとのま黙つてゐたが、

「あたしは、自分の自惚の強いに自分ながら呆れ返つてゐるやうな人間だから、のめく」と云ふがね、あなたはあたしが好きなんだよ」

「あら、さうかしら……」  
「少くとも、今さら、お客様を捉へて、なんて云草はなからうと思ふんだ。……それぢアなんだ、と開き直られても困るが、さうまた急に他人扱ひにしくつたつてよからうと思ふがね」

「すかない！」

「あゝ、嫌味だらうと、きぎだらうと、心からさう思つて云ふんだから仕方がないさ。あなたはあたしが好きだし、あたしもあなたが好きなんだ。あたしはあなたを藝者扱ひにした覚えはないよ……」

「へえ、さうですかね。もしあたしが藝者でなかつたら、あの時……、誰がなんと云つたつて……」

「さア、それだつてもさ、何もあなたが藝者だから、それであんな風に云つて別れたわけぢアない……」

「それアあたしも……」

「いや、ちつともあなたは悪かアない。……なに、要するにあたしが浮氣者なんだよ。浮氣者ぢアあるが、然しさうかつて、決して不眞面目ではないつもりだがな。好きでもないひと、そんな關係を結ばうとは思はないし、體だけで好きになるなんて云ふこともまづないな。……

移氣は移氣でも、助、根性は人並より薄いだらうと思つて。さう云ふことを露骨な目的にしては、人が好きになれるにくらゐなもんだ。さうかつて、好きな人なら、どん／＼近よつて行つて、結局そこまで行かなければ落つけないんだが、でもそれア人間自然の出来がさうなんだから仕方がない。助兵根性だけで女を見こめる人も一種の片輪だが、さうかつて、體で纏めて、全く精神的な戀をしようなんてのも、美しいには違ひないが、自然に背いた空想だね。……あたしに、若し多少とも人と違つてるとこ

「ば右、左ならば左へ銷つかされてゐるので、もとはと云へば、決してそんな一方に偏したもんぢやあるまいと思ふんだ。何もそれは、おもんさんに限つた話ぢやない、世の中の噂なんでものは、どれだつて大抵さうだらうと思ふんだ。それどころか、悪い噂を立てられるくらいなら、きつと心のいい人に違ひないときへ思はれるんだ。——なアんて、馬鹿に一人で力んぢまつたが、どうだい、あなたはさうは思はないかね？」

「さア、さう云ふむづかしいお話になつて來ると、あたしなんぞにはとても解りませんわ。でもね、それアさうかも知れない、と思はれることもあつてよ」

「どうして？」

「いえね、おもんさんがね……」

「なんだ、まだあの人の噂か」

「いけない？」

「なに、いけなかつたかいさ。……どう云ふんだい」

「なんです、あんなに思ひがけない話で、ほんとうかしら、と思つてゐるんですけど……」

「ふうん、またなんか事件でも起したかね？」

「え、どつか我善坊とかのお不動さんに凝つ

てね……」

「なんだい、神信心を始めたの？」

「え、まア……」

と、薄笑ひながら、御信心と云やア御信心かも知れませんが、そこのお住持さんにもまるで夢中なんですつて」

「へーえ、坊さんに惚れたの……。それでア成程不思議だね」

## 五

「その坊さんがね、それア繪から抜けて來たやうない、男なんですつて」

「ふうん、お住持さんと云やア、然しもういゝ加減の年齢だらうにね」

「そんなでもないんです、……三十七八つてんですから、かれこれおもんさんとおツつかツつぢやないかしら」

「おもんさんは、慥あたしより一つ上の亥の五黄だから、七だらう」

「あ、さうですか。大へんお詳しいんですね」

幾代は餉臺の端に兩手を置き、胸を突き出して、意味深げにニヤ／＼しながら、ぢつと信之の瞳のなかを見入つた。

「なんだい……」

見るまに頬に血がのぼつて來た。ぢつと見込まれてゐる瞳を逃すまいとする努力も露はだつた。「なんだい、……なんだよ」

この言外の答へは、もう十分明瞭だつたにも拘らず、幾代は、劬はりなくとも相手の眼から視線をはづさずに、而も口を利かうともしなかつた。たうとら、たまりかねて信之は、盃をとるとグイとあけて、さした。

「まア一つ……」

「可厭！ そんなことでは誤魔化されません。」

あなた、おもんさん……

冷かしてはなく、こんな話には適はしくないほどの生真面目さで、目の色を沈ませ、「さうだつたんですね？」

「あ、……」

眞赤になりながらも、信之は、悪びれずにきつぱり答へた。

「いつごろ？」

「去年の歳暮、あとにも先にもたつた一度……」

序だから何もかも云つちまはらう。あたしは一體あの人の妹さんが好きだつたんだが、ちよいとしたものゝ間違ひで、そんなことになつて了つたんだ。然し、いろ／＼へんなところもあ

たもんでもないと思つてゐるがね」  
この勉強次第で、幾代はぶつと噴飯して下つた。

「何が勉強次第! そんなことを勉強する人つてあるでせうか」

「ほかにはないたつて、少くもあたしは、現に一生懸命……」

「勉強中なんですか? まあ呆れた!」  
「呆れることはないさ……」

「つまりそれが、色修行と云ふのでせうね。さう云ふ方にあつちアあたしなんぞ……」

「それ〱、それが自信のない女の悪い癖だよ。ひとの言葉を、へんに皮肉に歪めて釋つて、自分ばかりいゝ子にならうとする……」

「どうもすみません!」  
「さうまあ憚らなくつたつていゝぢアないか」

「いゝえ、ちつとも憚つてやしません」  
さう云つて幾代は、パイと横を向いて了つた。

# 八

座の白けかゝつたところへ、丁度折よく女中のお豊が、すらり、と云ふよりも、にゆうツと馬鹿高い姿を現はした。運膳には、春日の料理が三品と、銚子が載つてゐた。

「お待たせ申しました」

いやにゆつくり引き延して云つて、すぐ取つて附けたやうな笑ひ聲をたてた。

「寝起のいゝ子だなア」

微笑ひ顔で答へながらも、信之の言葉には、どこかよつと意地の悪い響も含まれてゐた。

「寝起? 可厭ですよ、貴方がたぢアあるまいし。あたしたちはね、もう起きてから六七時間にもなりますよ」

「お豊さん、お序にお銚子をどうぞ」  
「何よう、ひとの鼻のさきへお尻を向けて。ちやんとうしろに來てますよ!」

「あら、大へんね、あなたが態々あたしのうしろへ來て坐つちやつたんぢアないの」

一坐つたら、あなたの方で、その大きなお尻を片づけたらいいぢアないの」

「まあ、お豊さん、あなた……」  
振り向きさまに肩のあたりを日がけて、びしやりと平手で喰はせようとするのを、ひよいとすかして、手首を捉へ、

「さア、どうだ、昨夜廊下であたしに頼んだことを今こゝで云ひませうか、それとも……」

何よ、何をあたしが、あなたに頼んで?」

「まあ、あんな白々しい、あのね、藤さん、この妓はね、昨夜あたしを捉へてね、あの……」

今夜……」

クルツ〱と聞えるやうな、短い笑ひ聲を渡らしながら、幾代はいきなりしがみ附いて、お豊の口を手の平で抑へようとした。

「なに、腕力なら負けるもんか」  
お豊は、それが癖の、男のやうな口のききやうをして、手先をこんぐらかして應戦した。信之も、苦笑ひで眺めてゐるより仕方がなく、手持無沙汰に、からを承知の銚子を取りあげて、注いでみながら、

「おい、總井戸の流しは滑るから氣をつけなよ」

「あら、それア、それア一體なんのこと?」  
俄の運動に、頬を眞赤にして、お豊は息をはずませた。

「裏店の山の神どもが、瀧み合の喧嘩をして、轉ぶとわるいからさ」

「あら、憎らしい!」  
「その手間で、ちよいとお銚子こつちへよこしてくれた方が、體は随に楽だつがな」

それで、どつちからともなく力をゆるめたとこゝで、いきなり幾代が、相手の腕をキリ、と振りあげた。

「あいたゝ、たゝ……何よう變態性!」

「あら!」



ろがあるとするれば、人が好きになりたくつてな  
らない性分なんだ。その裏には、例の振子の理  
合で、ひどく人嫌ひになつて了ふ場合もあるん  
だが、生來の淋しがり屋だから、とても三日と  
は、その人嫌ひの氣持が續かないんだ。人嫌ひ  
の氣持も、例へば巖丈な洞穴かなんかのやうに、  
ヒヤ／＼と冷たく、小暗くつて、そこからはなん  
の交渉もないし、自分一人を強く守つてゐるや  
うな感じは、決して悪くないんだが、淋しがり  
屋には、とても永もちのしない心持なんだね、  
それですぐ人を好きにならうとする、人情の  
曖昧にくるまらうとする。一人好きな人があ  
る上に、また好きな人が出て来れば、慾はつて、  
それも好きになる。移氣と云ふでう、前のが全  
然嫌ひになるわけぢやない。矢ッ張り好きなん  
だが、また別な種類の、違つた好きさが生じて  
来るんだ。」

七

「そんな勝手なのつてないわ。種類の違つた好  
きだなんて、そんな、好きは好きぢやあり  
ませんか。やつぱり飽ツばいのよ、つまり浮氣  
なんだわ。わたし、そんな人嫌ひ！」

さうまで云はれては、有繋に信之も、大ぶん  
しよげた容子だつたが、でもまだ考へ足りない

と云ふ風に、小首をかしげながら、  
「これほど何もかも正直に云つて、それで嫌は  
れるんぢや厭はないわけだが、然しあたしと  
しちや、どれもこれも大真面目なつもりなんだ  
がなア。好きだ、可愛い、と思ふ氣持は、それ  
ほど一人だけに限られなければならないもんか  
しら。あたしみたいな精神的にも肉體的にも、  
人並の力しかもつてゐない男が云ふから、嘘  
らしくも聞えるんだらうけれど、若しこれが頭  
抜けてえらい人だつたらどうだい。女の四人や  
五人、いちどきに可愛がれないうて筈はないと  
思ふがね。またそれだけの實力のあるなしは別  
として、男には誰しも、一人でも多くの女を  
可愛がらうと云ふ氣持が、天然自然と興へられ  
てるやうに思ふがね。そこへ行くと女は、どこ  
までも一人の愛に縋らうとする氣持ばかりだか  
ら、愛人なり良人なりの心がほかへ逸れかゝる  
と、必要以上の心配をしたり、嫉妬をやいたり  
して、大騒動が始まるんだ。男がえられれば、  
それくらゐの騒動は、なんでもなく抑へつけて  
了へるんだから、結局問題にやならないわけだ  
が、いちどきに幾人もの女を可愛がれる男の  
氣持の複雑さを、女としても、ちつとは考へ  
てみるがいゝんだ。いや、そんなことより第一

には、自分のぬうちをちゃんと知つてゐれば、  
安心してゐられるわけなんだ。自信のない女に  
限つて嫉妬深いのが、またそのわけぢやないか、  
いつ何時男の心が自分を離れて行くか知れな  
い、そんな氣持でしよつちやビク／＼してゐる  
んだものね。くだらない自惚ぢや困るが、ちや  
んとした自信があつて、男の自由を認めてゐ  
られるやうだと、ほんものだがね。幾人もの女  
をいちどきに愛せるほどの力をもつた男つて  
のがなか／＼ないのと同じで、いま云つたやう  
な、自信に充滿ちて男の自由を平氣で眺めてゐ  
られる女つてのも、めつたにあらう筈はないん  
だが……」

「それで、あなたにはそれが出来るんですか、  
いま仰つた、そのいちどきに幾人もの女の人  
を好きになるつてことが？」

「立派に、出来ると云ひ切るだけの自信はない  
ね。無理に云へば滑稽な自惚になつて了ふ、つ  
てくらゐなことは、なんぼなんでも解つてるよ。  
然しさうかつて逆鋒立をしても一生出来な  
い仕事だとも思つてないね。なか／＼容易なこ  
とではなささうでゐて、氣がつくと、存外いつ  
の間にかちゃんとそれになつてゐることもあるん  
だ。だから、勉強次第で、決してさう悲觀し

幾代とお豊とは、かう云つて顔を見合せたが、信之はそのしんみりしかけた調子をまぜず返して、

「このうへお豊さんなんぞに好かれたひにやア、女で一命を落すことにならアね。それくらゐなら酒で死んだ方が、よつぽどましだア」

「ぢアもうあたし知らないから、いくらでもいいだけお飲みなさい」

「さうよく、いくらこゝであげないやうにしてゐたつて、よそでめちや飲みをなさりやアおんなじことなんですもの。制めて恨まれるだけが損だわ」

## 十

結局三本目が来て、それを飲み盡す頃には、信之は、口を利くのも懶いほど、いゝ氣持にトロトロなつて了つた。軽く茶づけを一杯半かつこむと、早速もう肘枕で横になつた。

「あら、起きてらつしやいなね、つまないわ」  
ほんの四五杯の酒に、幾代はほんのり頬を染めて、甘つたるい鼻聲で云つた。

「なに、寝やしないがね、ちよつと……」

「駄目よ！ もうぢきあたし、行つて來なきアならなんですかさ。あたしが歸つてからゆつくりおやすみなさいましよ」

「七百貫目の借銭負うて、夜ひる稼ぐ伊左衛門、こんな時に寝ねば寝られぬ……、それからなんてつたつけかね」

「知りませんよ！ ねえ、起きてらつしやいつてば！」

そばへよつて、うしろから肩を小突かれて、目をつぶつたまゝ、ゲタリ／＼と他愛もなく、

「何が何して惣嫁どの……、つて云ふんだが、なんてつたつけかね、憶えてない？」

「邪魔なされな惣嫁どの……」  
やゝ調子をつけて答へた。

「あ、さうか」

「おや、洒落なの？」

「何がさ」

「さうか、つて……」

「どう致しまして、とんでもない。洒落どころか、たゞもう眠い／＼……」

餉臺の上を片づけて了つて、綺麗好きらしく、クツクと布巾をかけながら、お豊が口を出して、

「仕様がなから、今お枕を持つて來てあげますわね」

やがてまた二人きりになつてからの話が、どうかした續き具合で、もう一度おもんの噂に返

つて行つた。——なんでもこの二月ごろからの關係らしく、尤もその佐伯とやらふ坊主が、瀧十郎の男衆大橋の紹介で、よし野へ出入りしだしたのは、去年の秋だと云ふが、二月以來はまるでもう入りびたりに、例の奥まつたおもんの部屋に寝起して、めつたに寺へも歸らなかつたさうだ。それが、三、四、五、と四月續いたと思ふと、何にどう使つたものか、少からずあつた筈の預金はもとより、鐘紡、郵船あたりの持株で、いかに悪い時期とは云へ、十萬は決して切れない額のものが、そつくり人手に渡つて了ひ、土地はなにしてても、よし野の建物造作まで、二

番三番の抵當にはいつてゐると云ふのだから、全體の金額にしたら、嘘のやうな使ひ果しやうに違ひない。使ひ捨てないまでも、佐伯の名義になつたとかなんかで、鬼にも角にもおもんの身は、僅か四月ばかりの間に、綺麗にまる裸にむかれて了つて、今ではもうに／＼ちもさつちもいかないのだ。——と、かう云ふ話だつた。

「嘘だらう」

あまり思ひがけない出來事に、信之の眠さなどはどこかへ飛んで行つて了つて、ひよいと起き返るなり、煙草に火をつけながら、「全く根も葉もないことでもあるまいけれど、なんぼなん

もう一度酒みかゝらうとして、氣を變へると、すらりと立つて、信之のそばへ行き「さア、口惜しかつたら、いくらでもかゝつていらつしやい」

「いやよ、そんな、加勢なんぞつけたりしたつて知らないことよ」

「やア、負けたでせう」

子供の調子で囁しながら、そば近くべたりと坐つて、信之に、「ほんとにお豊さんいけないのよ」

「うん、さうか、よし／＼」

肩に手を廻して、信之も、孫のやうな妓を愛撫する助平爺の身振で、故意とでれん／＼しなだれ懸つてみせた。

## 九

じろりと眺めやつて、お豊は、嚙んでほき出すやうに、

「甘い！」

「同じことなら、あめえの、と云つて貰ひたいな」

「あめえと云はれるにはね、もうちつとどツか小洋なところがなくつちアね……。あなたのは、

あ、ま、い、の！」

「甘い／＼と輕蔑するな、さ」

「西郷隆盛アも甘い？」

すぐ乗つて、あとをつけてみて、幾代は我ながらバツと噴飯して了つた。はたの二人もお義理でなく笑へた。

「まつたく、銅像で見ても、西郷隆盛は甘さうですわね」

お豊などは、その取合せの可笑しさを思ひ出しては、いつまでもクス／＼笑つてゐた。

三人になると、先刻までの理窟っぽい話は、まるで別人のこのやうに、他愛もない冗口ばかり利き合つた。うまい食物や、好きな酒だけでも、安値に信之の享樂心は満たされるのだが、そのうへ、久振りに逢つてみた幾代の心持が、決して見當のつかないほど離れてはゐないのも、内心少からず嬉しかつた。それで、二本目があく頃には、機嫌よく酒が廻りかけてゐた。

「もう御飯でおよろしいんでせう？」

お豊が、ちよいと腰を擡げて、微笑ひながら尋ねた。――矢張りこのうちへ来る客で、信之

と同期に大學を卒へた醫學博士があつて、噂が出るごとに、彼の體を心配して、もうそろ／＼

酒はやめないとほんとにいけない、などと、どちらの座敷へも出る藝者たちや女中相手にで

も、親身になつて云ふのがならひだった。近頃

では、かけ違つて、めつたに顔は合さなかつたが、傳へ聞に、その親切は、信之も嬉しく心にうけてゐた。――お豊が酒を小切るのも、それ故だった。

「だつてまだ二本だぜ。それも大ぶん助けられてるから、正味にしたら……」

「いゝえ、もういけません」

と、幾代が、眞顔になつて、「ついでに二日前にも、財部さんにお目にかゝつたら、相變らず飲んでるらしいが、あなたには癖の系統とかがあるんだし、それでなくつたつてあゝ深酒ばかり續いちア、いくら丈夫な體だつて保ちアしない、なんて、随分それア心配しておいででしたよ。昨夜もあんなに召上つてるんだから、今日はもう御飯になさいね！」

「一なアに、酒に命をとられるんなら、ちつとも恨むところはないが、親父の苦みやうを見てるだけにね。尤もゲエ／＼やる方なら、いゝ」

加減馴れちアあるが、ちア、かうしよう、もう一本だけね、たつた一本、それならいゝだらう」

「仕様がないのねえ、――」

「ほんとにうにお酒のみつて、意地が汚いから嫌ひよ」

「なんだい、なんか變つたことでもあつたのかい」

さう云ふ顔を、まだ疑はしげにちつと見詰めて、幾代は暫く口を開かうともしなかつた。

十二

さうして間をもたれてゐる間、信之は、有紫に落つかなかつた。思ひつめ、張り切つてゐた心も、丁度いつばいに膨らんだ風船玉へ、鋭利な刃物でもあてたやうに、箱根の宿の不思議な出會で、急に他愛もなくベシヤ／＼と萎えて了つたのだが、――そして、さうなつた後から考へてみれば、合性でも悪いと云ふのか、深くなれば深くなるほど、心の奥の、そのまた芯に、なんとしても溶け合はないものがあるやうな氣がしてゐたことも否めなかつたのだが、さてかうして、別れて後の消息でも聞くだんになると、そこはなんと云つても他人の氣持ではゐられなかつた。殊に別れてからはや二月、よきも悪きも、實感の生臭さが薄れて行つたあとには、たゞ淡々とした懐しさばかりが残つてゐた。

「ほんとになんにも知らないんだよ。おまけに、知らないとなつたら、いつそのこと何一つ知らずにゐたいやうな氣持さへあつたらしいな。萩原なんぞに逢つても、こつちからは一切なん

にも云ひ出さないし、彼方でも、へんによし野の話を避けるやうな具合だつたが、それを丁度いゝ幸と思つてたんだから……」

「ぢア、あたしもなんにも喋らない方がよささうね……」

「いや、それアいけないよ……」

「いけないたつて……」

「なんにも云はないんらいゝけれど、そこまで云ひかけといて、あとを聞かせないのはいけないよ。そんなずるい奴があるもんか――」

「ずるい？ 何がずるいのよ！」

「ずるかアないが、話して！」

「あなた悲觀なされアしない？」

「またそんな」

「でも、一時は随分大へんだつたんですつてね。あたしなんでも知つてゐるわ」

「それア兎に角、ほんとに、不思議なくらゐよし野のことに詳しんだね、一體どう云ふわけなんだい？」

「それアもう……」

「無邪氣な得意で、美しい齒並を見せて笑み輝きながら、不思議に思ひなさるでせうねえ……」

「不思議だ、……どう云ふんだよ……」

「ほんととはね、あすこのお勢さんつて人知つてらつしやるでせう？」

「あゝ知つてるよ。あの人が……」

「あのひと、うちに小母さんて人があるのよ、血の繋がつた叔母ぢアないんですけどね、そのひとが昔ツから大へんな仲よしなの。だから、お勢さんは、しよつちううちに遊びに来てゐるわ――」

「へえ、世間つて、全く廣いやうで狭いもんだね、……さうかい、ふうん」

「悪いことつて出来ないもんね」

「まつたくね」

「あら、随分のめ／＼してるわね。そんなこと云ふんなら、もうなんにも聞かせてあげないからいゝ」

「何が、あたしアどんなことも云やアしないぢアないか」

「そんならいゝわ」

ツンと横へ向けた頬を、指のさきで軽く突いて、

「慥つた？」

「慥つた！」

「ぢア御免、あやまるから話して」

「ぢアアんと、頭をさげてあやまらなくつちア可厭！」



でも、そんな……。第一株にでも手を出すとかなんとか、さう云ふことでもしない限り、四月やそこらで、そんな大金が使ひ切れるわけがないぢやアないか。名義を書き換へるなんて、いくら惚れたからつて、まさかそんなことをオィッレと承知するおもんさんでもあるまい」

# 十一

「だつても、ほんとにさうなんですから仕様がなないぢやありませんか」

幾代は、女に獨特な、くだらない意固地をみせて、「あたし慥な人から、もう二三度も聞いてますわ」

「さうかい。ぢアまあそれとして置いて、その後は一體どうなつてるんだい」

絞るだけ絞ると、坊さんはお寺へ歸つちまつたんですつて」

「へえ、世話狂言にでも出て来さうな、大した豪悪なんだね。へーえ、それで？」

「それからがもつと驚いちゃふんですよ。今度はね、おもんさんの方からお寺へ押しかけて行つたんでせう、行つてみると、ちやアんとおかみさんがあるんですつて……」

「それを、その時になるまであの人は知らずにゐたのかい？」

「それアさうでせう、しよつちう、それで探めるんだつて云ひますから」

「可訝しいね、それまでにだつて寺へは行つたらうにね。……尤も隠さうと思やア、どうにでも隠せないことはあるまいけれど」

「ひよつとすると、夫婦馴合かも知れないの。何故つてば、この頃でもずうツとお寺にゐるんださうですけれど、坊さんは、おかみさんばかり大事にして、おもんさんにはそれア邪慳に當るんですつて」

「ふうーん」

「つい二三日前に行つて来たつて人の話だと、可哀想におもんさんが、疣尻かなんかで、よれよれになつたゆかたを着て、しよんぼり臺所の板敷に坐つてたさうですよ」

「へーえ、つまり、それほどにむごく扱はれても、矢つ張りそばが離れられないと云ふわけなんだね？」

「さアそこはね、それほどまでに惚れてるのやら、それとも、どこへも行きどころがなくつて、仕方なしに我慢してゐるやら、そのへんのことは、よくは解りませんけどね……」

「冗談いつちやいけない。それアあの人には、そんな、……そんな乞食みたいな心持で、とて

も一日だつて我慢してゐられる氣遣ひはナリやアしないんだから……」

「だつて、それアどうとも解りませんわ。うちにゐれば、お金を借りた人に責めたてられるし、どこへたよつて行かうにもあてがないと云ふやうなことだつたらどうして？」

「いや、それア然し、まだ十分に未練があるんだよ。どうしてもそばを離れる氣になれないんだよ」

「あら、さうですかしら？」

「餘人の場合ならいざ知らず、あの人に限つちア、借金取りくらゐを雇れて、うちへ寄りつかないなんてことはないよ」

「さうでせうねえ、もしお金だけのことなら、いよくとなれば、お澄さんのところへさう云つて行つてもすむことでせうしね」

「一體さう云ふことになつて来て、お澄さんて人はどうしてるんだらう」

「あら御存知ないの？」

「知らない、なんにも知らない」

「嘘でせう、そんな答つてないわ」

「答があらうがあるまいが、知らないものは知らないんだよ」

「へーえ……」

は、深く自ら恥ぢ、危ぶんだ。

#### 十四

それには、勿論、一見理由のないやうな嫉妬が働いてゐることも事實だつた。これが、二年隔て、起つたことなら兎も角、自分との、あれほどまでの戀が破れたと思ふと、すぐもう後釜が出来てゐたことは、なんとなく悔辱されたやうな氣もし、まだ記憶に新たな愛撫が、他の男の上に思ひ移されて堪へがたい怨恨、憎惡の念ひともなつた。——さう云ふ感情は、明らかに、まな形をとらないまでも、話を聞くや否や、信之の心に湧き起つてゐたに違ひない。

まだそのほかに、話してが幾代であると云ふ關係から、そんなことを聞いたくらゐで少しも弱りはしない。頭ごなしにやつつけてやれると、云つた風な見栄坊もあつたらうし、「ふうん、さうかい」と、さうは無關心に聞き過せるわけはなく、自然、心持が複雑に動いたのだ。そして、複雑と云ふことには、往々にして伴ひ易いところの、不純が紛れ込んだものとは云へ、それにしても、大體から云へば、人格の未熟をなんとしやうもないのだつた。最後には、彼が駄目な人間だ、——それだけの人間だ、と云ふ事實が嚴然として残るばかりだつた。

「さうねえ、奥さんや子供衆のことを思つたら、なんぼなんでも出来ることぢやないわねえ」

かう幾代に同意されてみると、なほさら信之は、恥しさに堪へられなくなつて來た。とは云へ、一旦さう感じたことは、——彼がそれだけの人間だと云ふことは、言葉にしてそれを云ひ表はした長はさなずに係はらず、既に一生夙べからざる事實だつた。彼の人間としての修行道に、進歩の里程を示す一本の標示杭だつた。

而も足のおそさを物語るところの、餘り名譽でもない記録だつた。——これを感ぜながらでは、然し、今さらむきになつて取消しを云ふのも、欠張り恥ぢられれた。

一でもまア、さう一概にも云へない。二人の氣持がどこまでも眞剣なんなら、いかに奥さんや子供たちが氣の毒な日を見ようとも、どうもこれア仕様のない話なんだから」

「あら、あたしはさうは思はないわ……」

「さア、そこはめい／＼の考へで、理窟を云ひ出しやアきりが無いが、あたしはまア、自分の心の誠に従ふことが一番立派だと思つてゐるんだから、さう云ふことも決して不賛成ぢやアないよ、たゞ然し、今あなたから聞いた時に、すぐあたしがうけた感じから云へば、なんだかさ

の眞剣さが疑はれないこともないな。何一つ理由もなしに、獨斷的にそんな暴言を吐く奴もないもんだけれど、どうもあとで二人が後悔するやうな時が來やアしないかつて云ふ風な氣がしたな」

「さうねえ、それアなんとも云はれないわねえ。でも、あなたはどうかの、そこまでの氣持にはとてもおんなじならなかつたんでせうね——あたしは、うちのかみさんが好きだもの、子供たちだつて随分可愛いもの。中々大抵なことアそんな氣持にやアなれないよ」

「さうお」

幾代は淋しく眼を伏せて、そのまゝ黙つて了つた。信之も、なんとなく心が滅入りこんで行つた。

静かながら、雨はや／＼その銀色に光る足を繁く降り出したとみえて、堅樋を落ちる點滴が、甲高に響いて來た。いつか部屋のかなかもむらむらと暗くなつてゐた。

#### 十五

「あなたもうそろ／＼歸らなくつちアいけまい——ふと思ひついて、信之はかう言葉かけた。ひとりになつて、ものを思ひたい心持も、その

「御免々々」

簡臺の上に載せてゐた手を却つて、その薄く靜脈の透いて見える甲へ、きつく脣を當てた。

### 十三

「さア」

微温かく柔い手先を、雨の手の平に弄びながら、信之は、ニコ／＼顔で促したてた。「さア、もう神妙に聞くから、話してくれよ」

「吃驚したつて知らないことよ」

急に、惡戯ッ兒らしく眼を輝かして、幾代は一瞬のり出した。

「大丈夫」

「あのね、お澄さんね、——さう云つたつて、あたしやアお目にかゝつたことなんぞないんだけど……」

「うん」

「お嫁にいつちやつたんですつて」

「お嫁に？　へえ、それアまたどうしたつてことだらう」

「富岡さんつて華族さんがあつて？」

「さア、よくは知らないが、舊い海軍の軍人で、子爵かなんか貰つてゐる富岡つてのがあつたやうな気がするな」

「あゝ、チアそれでせう。もうその方は亡なつて、今は息子さんの代なんですよ」

「さうかも知れない。日清戦争時の將軍だつたと覺えてゐるから、もう死んでもいい年齢だらう。で、その息子さんのとこへ嫁いたわけかい？」

「さうなの。大したいい男なんですとさ。年齢もたしかあなたくらゐなんですせう」

「チア、初婚とすれア晚い方チアないか」

「いゝえ、二度目の。それも、お澄さんが好きになると一緒に、前の奥さんを離縁して貰つたんですつて。二人とかお子さんもあつたんですつてから、随分思ひ切つてゐるわ。なみ一通の惚れやうぢや出来ないわね」

「へーえ、ひどいことをする奴だなア——」

うつかりさう云つて了つてから、ぎくツとした。——それは、全く出鱈目だつた、でないとするれば、なほ悪いわけになるのだが、大嘘だつた。

何よりも誠實を尊ぶ信之だ、もし一人の女を戀して、心の眞がそこに盡されてゐるならば、二人の生活を結んで離すまいとするためには、どんな大切なものでも犠牲にして、ビクともしない信念や勇猛心には、滿腔の敬意を捧げ

ずにゐられない筈だ。道學考流の口吻で、皮相の事實を、陋習的な道德に照し合せ、頭からその非を鳴すやうな、そんな浮薄なまねは出来ない筈だ。——それが、どうだらう、一文の値うちもない放縱無頼な行爲のやうに、たゞ一口に識しつけて了つたのだ……。

（俺はまア、一體……）

あまりのことに、一時は、自分ながら吃驚してゐるが、然しすぐ反省してみるだけには心の平衡をとり戻した。——第一には、人格の未熟と云ふことが考へられた。言葉を換へれば、附焼の人生觀が、いかに成すなきかを、鼻のさきへ、慘らしいまでにまぎ／＼と突きつけられたやうな氣持だつた。思考が思考として在る限り、いざと云ふ場合の、ものゝ要には立たない、思考が、その形を失つて、身内を環る血となり、肉となり、骨となつて了はなければ、假令どんなにそれが立派だらうと、所詮は裝身の具にも等しいのだ、——この理をつく／＼と思ひ知つた。

（……青い、青い、實に青ツぽいもんだ、いつになつたら俺も、もうちつとはどうにかした人間になれることか！）

差向ひに幾代のゐることも忘れ果て、信之

がおもんで、目茶苦茶に飲まれた舉句、おそくなつてよし野の奥座敷にひよろけ込んだ時だつた。ふと床の間を見ると、酔つた眼にも鮮かに、つい三日前までは何事もなかつた栖鳳の横物で、親子兔の圖が、一文字から繪を通り越して軸まで、大しては太くもない筆の根本まで押しつけて、力いっぱいグ、グツと引きさげた墨のあととも黒々と、無残に塗り消されてゐた。訊くと、これも酔つた紛れの、隠しだとも飾ッ氣もなく、おもんが笑つて話したには、前の日の朝、流十郎が、それを御歳暮にくれた或る客のことから、心にもない嫉妬をやいてみせ、いつまでも七規く愚圖々々いつてゐるのに業を煮やし、丁度そばにあつた筆を把るなり、「なによ、こんなものくらゐ……」とばかり、いきなりあゝして了つたのだ、と云ふことだつたが、馬鹿高價くばかりあつて、面白く可笑しくもないその繪の筆者に對しては、密に固飲をさげながらも、信之は矢張りちよいと驚かされた。そんな亂暴がしてみたい氣持もさることながら、それを今もつて掛ッばなしにして置くづばら、更に雄辯におもんの氣持を物語るものゝやうに思はれた。そしてその瞬間には、彼の心はただ寒くばかりされてゐたけれど、今になつて考

へてみれば、多少は芝居氣の馬鹿らしさも感じられないでもないけれど、然しその癪癪には、十分の同感と好意とがもてたのだ。その後の経緯に關しては、迷惑と、奇怪と、そして氣輕な好意との印象が残つてゐた。——おもんもその氣なれば、信之は尙更のことだつた。

一方お澄が、細君や子供の慘さも思ひやらずに、華族に嫁入つたと聞くだけに、坊主に騙されて、さばく／＼と捲きあげられ、ゆかた一枚で臺所の隅に震へてゐると云ふおもんには、急にありつたけの好意が傾き注がれた。永年の間世間から着せかけられてゐた衣をぬいで、やつと本來の馬鹿々々しい人の好きに歸れた、——それは眞面目に考へても、せめて蔭ながらでも祝つてやりたいほどに立派なことだつたが、ただその話の感じだけから云つても、いかにも間拔きみた、古風に大間な味が、なんとも言はれず好ましかつた。

平常の思考から推せば、どうしても同感しなければすまない筈の、萬難を排して惚れた同士が一緒になつたお澄の勇氣、妻も子も忘れ果てた相手の男の猪突、——一旦は無理にも好意をまたうとしてみたその戀愛が、不思議に少しも

身にしみなかつた。お義理に、申譯に、感嘆すべきが本當だからさうしてゐると云つた具合だつた。いきなり心へ響いて來た感じほど鋭いの少しいものはない、とは、これも普段から信之の考へてゐることだつたが、だん／＼そこへ結びついて行つて、華族の息子にもお澄にも、氣持に大ぶん遊びがある、それが自然と直覺されたのだ、と、自信をもつて考へられさうになつて來た。

よし、これからすぐ行つてやらう。たしか我善功のお不動さんとか云つてたな。なに、麻布ぢう探したつて知れたもんだ。若しおもんに逢へなければ善かれ悪かれさう云ふ力をもつた和尚の面つきだけでも見て來てやらう——と、決心して、元氣よく跳ね起きるなり、信之は呼び鈴を押しした。

## 不動堂

ちよつとの間、夕露にあがりさうに見えた空も、いつかまた眞ッ暗に曇つて、眼にもとまらなほどの霧雨が落ちてゐた。——下駄は昨日



底にはあつた。

「えい、もう何時でせう」

と、立つて行つて、透細の亂箱に信之の時計を見ると、「あら！ 大へんく」

「何時？」

「六時十五分前。……あなたは、ずうツと晩までこちらにいらつしやるんでせう？ あたし、

十時までにはきつと歸つて來ますから、待つて

らつしやいね？」

「さうもしてゐられないが、兎も角ちよいとひと寝入さして貰はう。それからのことは、またそこへ行つてきめよう」

云ふうちにもうゴロリと横になる信之の枕もとに來て、どこそこは貰ひいゝから、どこどこを御挨拶にすれば、九時には歸つて來られるから、などと胸のなかでたてる計畫を、そのま

ま口へ出して一通喋つてから、すらり立つて、もう一度待つてゐるやうに念をおしながら、

急いで幾代は歸つて行つた。

お澄のこと、おもんの噂……大好きな、とり

とめのないもの思ひにはもつて來いの材料で、

信之のあたまではいづばいになつてゐた。薄い掛

布圍をもつてはいいつて來たお豊が、幾代で姪は

うとするのにも、眠さうな、一向氣のない返事

をして、すぐに席を立たせた。……お澄の性

分の、どこか底のつかへる感じが、臆げながら

形をとつて握めさうになつて來た。おつとりし

てゐるやうに見えて、存外目端の利ところ、

俗ッばい利口さ、これらしく思へた。心

持の方角を、唯心、唯物の二つに大別すれば、

きつぱり後者に屬すべき生れつきに違ひなかつ

た。反對におもんの方は、人の噂には一筋縄で

も二筋縄でもない、謂ふところの海千山千

で、一生男に惚れるなどと云ふことの出来な

い女のやうに思へるのだが、——事實またそれ

を證據だてるやうないくつもの材料はあるのだ

つたが、それは寧ろ後天的な人世觀なり境遇

なりから出てゐる「行爲」で、その裡の「心」を云

ふならば、お澄などと比べものにならないほど

唯心的な生れと考へられた。信之としては、云

ふまでもなく、おもんのやうな性分の方が好も

しかつた。いや、「好ましい」などと落つたこ

との云つてゐられる場合ではなかつた。生れた

つき切つて世話をやいてくれた女に、然し信之

が、さう云ふ性分などを感ぜ得る筈もなかつた

けれど、それでも、なんとなく嬉しくはあつた。

よしんばそれが唯物國の玉座からおりて來たや

うな女であらうとも、當時のおもんほどに若く

て羨しかつたならば、無論信之には、それでも

同じことだつたに違ひないのだが、懐しくも香

ばしく、舊い記憶が蘇生つて來ると、なんとな

くその頃からの縁ある人」のやうに思はれて、

好意は二倍にも三倍にもされた。

そのくせ、去年の茂尾の間違ひは、全く受身

だつた。今でこそ、人の噂ほど當にならないも

のではない、などと云つてゐるが、その當時の彼

は、隨にそれに影響されてゐた。——迂闊に

のれない女だけれど、折角据ゑられた膳だから

……、と云つた氣持が十分あつた。

十六

もとよりおもんの心は荒み果てゝ、勞れ易く

なつてゐた。享樂を思ふさへ、さア〜と尻か

至められて、不行儀ながら階段のもとに平伏してゐた。五寸ほどの、却つて踏み憎さうな階段が三つ四つで、すぐ廻廊になつてゐた。

信之は、兎も角もそこへあがつて行つて、栗色に塗つたトタン張りの雨戸の隙間から、内の容子を窺つてみた。土蔵づくりで、窓の一つもない、晝は却つて薄暗さうな、ものゝ十五疊よりは廣くない本堂は、須彌壇の燈明があか／＼と灯つてゐるばかりか、右の横手からも電燈の光りがさして来るらしく、そとの暗さに引きかへて、是々と光り輝いてゐた。が、人影はもとより、話聲さへ聞えず、静り返つた明るさは、却つて妙にもの凄かつた。内陣の扉は、これも何か金屬張らしく、黒々と鎖されてゐた。抹香臭い匂ひと、蠟燭の匂ひとが別々に、戸の隙間へ押しつけてゐる鼻のさきへ流れよつて来た……

急に往來の方で、快調な、青年らしい話聲がしたと思ふと、すぐ石盤へ足駄の齒を軋ませながら、人はいいつて来た。信之が振り向いたのと、彼方では彼を見つけたのとが、丁度同時らしかつた。その二人づれの男は、しかけてゐた話は勿論、歩みをもビタリと停めて、ヂツとこつちをすかしてゐた。

一人は、中折で、薄いインパネスをひツかけ

た、足駄の故ばかりでなく、見あげるやうな大男だつた。もう一人は、中丈で、木綿緋に袴をつけ、帽子なしの、オール・バックの頭髮を、例の丸火屋の底に水のたまつた電燈のもとに、ピカ／＼光らせてゐた。(こやつ、何者!)と云つた氣持の身の構へ方から、二人が寺の人か、でなくともこゝに縁の深い人だと云ふことは明かだつた。

どうにも説明しやうのない立場に、信之の面喰ひ方は一通りでなかつた。取り敢ず階段をおりて下駄を穿き、二足三歩歩き出すと、彼方からも眞直に近づいて来て、鼻のさきへ立ち寒がるやうにした。顔を背け、身を避けて、そのま

ま出て行くわけにも行かず、眞正面に眼と眼とを見合せて、信之もぢつと突ツ立つて了つた。

中折は、光りを背負つた蔭でさへも、きはだつて色の白い、瘦がたの、流いやうない、男だつた。「凄いやうな」は、普通「い」男の形容に使はれる意味ばかりでなく、ほんとに鋭い眼つきを、――殺氣を帯びたと云つていゝほどの凄さに射りつけられての印象だつた。それから眼を逸したが最後、もう助からない、と云つた氣持から、信之は、もう一人のオール・バックの方

方はそつちのけに、たゞその鋭い視線に堪へようとはかり努めてゐた。――下ツ腹にうんと力を入れて、ふんぞり反つてゐた。

……一分、二分、中折は、きつと一文字に口を引き結んで、黙つて見据ゑてゐた。信之からなほのこと云ふべき言葉はなかつた。これが、佐伯と云ふ佳職とは、一目顔を見た瞬間に直感されてゐたが、それだけに尙更どうにも始末が悪かつた。

### 三

「何か御用ですか」

たうとう先方から口を切つた。存外調子はその柔かだつたが、釋りやうによつては、それが曲者とも考へられないことはなかつた。

「えゝ、ちよつと御參詣にまゐりましたのですが……」

「はア、さやうですか」

と、もう一度頭の頂邊から足の爪先まで、じろじろと睨め廻して、「大ぶんおそがけのお参りでしたな……」

「えゝ、實は、初めの御參詣ですが、来てみますと、もう御本堂の戸が閉まつて居りましたものですから、遠方から出かけてまゐりましたので、ついちよいと中を窺いたり致しまして……」

「いや、どう致しまして。……え、で、どちら

うちを出た時からの日和で、誰のものやら、女持の蛇の目一本、久田家で借りて来た信之は、夏外套なしでは薄ら寒い肩をすぼめ、歩き憎い敷きたての砂利を踏んで、いま通りがかりの人に教へられたまゝに、小半町もあと戻りをした。普段至つて歩き不精で、ちよつとの道でもずぐ乗物をほしがるのが、さつき食ふなり横になつて了つた腹の具合も悪かつたし、待合で頼んで貰つた自動車で、門前に横附にされるにしては、行く先がちつと變りすぎてゐたので、乗り馴れない電車で出かけて来たのだつた。

靴屋と漬物屋との横町と云ふのはすぐ知れたが、いかに山の手とは云ひながら、電車近りをそこへ切れ込むと、忽ちもうしもた家續きに薄暗くなつて、から傘をかついだ自分の姿が、角の瓦斯燈の光りを背負つて、さほどではないが泥濘んだ道の上を、一足ごとに長く／＼延びて行つた。その蒼白い光りは、また黒板塀の上へ茂り出した濡色の葉櫻も照して、含屬性の光點をあちこちにばら撒いたり、暗緑の葉蔭を陰氣に見せたりした。——どこからともなく、極の花の匂ひが流れ漂つて来た。青臭い、むせ返るやうな、そのくせなんとなく陰鬱とした樹の花の匂ひ……。

塀なしに、ぢかに往來へいたみを見せて、低駒寄を結つたのや、それもなしに、いきなりきつ立の總二階になつたのや、家並がだん／＼みすばらしくなつて行つた。軒燈なども三軒に一つくらゐの割で、その灯影さへ佻しく、なかには丸火屋がかけて、榻茶けた炭素線の五燭球が窺いてゐるのさへあつた。——泥濘もだんだん深くなつて来た。

もうこゝらと思はれるあたりから、伊豆石の塀が五六間右手に續いて、聞いて来た通り花崗石の柱に鐵棒を組んだ扉をつけた門があつた。石塀の内からは、枯れかゝつた鎌倉桐葉や、ヒヨロヒヨロと火ばかり高い櫻が頭を出してゐる、それらに丁度適はしいやうな、やにツこい丸太に取りつけられた電燈は、支柱が、ひとうねり紆つて下へ向いた奴だつた。その滑硝子の丸火屋の底には、二錢銅貨人の埃を汁潑させて、とろりと雨水がたまつてゐた。

正面の堂は、一二だん階段があるきりで、普通の屋造りとあまり違はないほどの床ばりだつたから、てりをつけた屋根の低さが目立つて、調子を破つてゐた。トタン張りの雨戸が四六枚、假に引きよせてあるのか、それとも建附が悪いのか、間々の二三分づつの隙間から、内の

灯がさして来た。

(さアて、どうしようかな)

なんとなく無氣味な感じがして、信之は、往來から窺きこんだまゝ暫く考へ込んでゐた。門扉が、一方だけしめて、一方は半開きになつてゐたのも、ちよいとそこらまで人が出かけたあと、と云つた風のしまりだつた。少し身を斜にすれば、樂に通れるくらゐには開いてあつたのを、傘をつぼめるのが面倒さで、左の手で、さして方もいれずにグイと押すと、ゴロ／＼ツと、妙に腹へ響ける音をたて、弧線に敷いた板金の軌道の上を、扉の底の事で、吃驚するほど軽くあいた。思ひなしか、それさへ、いきなり手頭を把つて引きずり込まれたやうで、いい氣持はしなかつた。

## 二

石甃を眞直に本堂の前に立つてみた。

鰐口から垂れさがつた鎗りの太い綱には、折からのじと／＼雨に、濕氣を吸つて、湿みふやけた大勢の手塀の層を、坂山鐵ちらして跳刺る微菌どもの夜遊びが思ひ描かれて、一尺以内には近よれない氣がした。宝錢箱は、薄紙をあけて狸寝人をしてゐるやうな跼まり方だつた。太い小倉の鼻緒をすけた朴齒が一足、外前に穿き



稽をも、自分では滑稽とは感じなかつた。家の宗旨である淨土眞宗の「南無阿彌陀佛」を口のうちに唱へながら、胸に合掌して、心からの禮拜を捧げた。

「さアどうぞ、御遠慮なくずつとお進みください」

須彌壇のうしろから、さう聲をかけられたのをしほに、立ちあがると、そこへも一つ出してあつた賽銭箱に、五十錢玉を一つチャリンと擲り込んで、奥へはいって行つた。

「いやもう、先住が一向お構ひなさらんお方だつたので、御覽の通りの有様で、誠にお恥しい次第です」

「……………」

なんと挨拶してよいものやら解らなかつた。で、急に話題を變へようとしたが、ふとあたまたに浮かんで來たのは、幾代の話に、この色魔坊主が女を陥れるには、まづ加持とか護摩とか稱へて、兎角二人きりになる算段をするが、大抵はそれでまゐつて了ふところをもつてみると、何か催眠術のやうなことでもするのではなからうか、と云ふ噂さへある、と聞いて來た、その修験の法だつた。

「實は……」

と、差し向ひに立つたまゝで、「よくも話を聞かずに飛んで參りましたやうなわけでした、御宗旨のことは一向に不案内なのですが、伺ひますに、どうかこの、お加持のやうなことをなさいますさうで……？」

「はい、……えゝ、いたしますです」

「それは、なんで御座いませうか、午前中とか、夕方何時までとか……」

「いえ別に、若しなんでしょう、たゞ今からでも……、何かさう云ふことでお出かけでしかなかな？」

「えゝ、ちよいとその……。實は……」

と、その時ふとまた思ひついたのは、西山普烈のことだつた。「氷川町の外人殺し」が、初號見出しの四段抜きで、各新聞に發表されたのは、一昨々日の月曜のことだつたが、その後いまだに犯人の目星もつかないらしく、つい五六時間前に富久田家で見たなにも「復もや事件迷宮に入らん」などと、暗に警視廳の無能を揶揄するやうな書きぶりのものもあつたくらゐだが、信之には、それが普烈の仕業であることは、少しの疑ひを入れる餘地もなかつた。その後どこにどうしてゐるか、——これは、信之のあたまたにこびり附いてゐる考へだつた。

「實は或る男の行方が知りたいのですが」

## 五

「知りたい……？」

濃い眉根にちよつと皺をよせて、住持は解せない顔つきをした。

「つまり失踪者の居所なり、生死なり、さう云ふことを伺ひたいのですが、……いえ、これはあたしの獨斷でして、願事がなんでも大抵はかなふと聞きましたところから、そんなことも伺ひをたてゝ頂いたら、きつとなんか、お告げとでも云ふのでせうか、承知できるものかと思ひまして……」

「成程、それアもう、お望みでしたら、護摩なりお加持なり致しますが、さう云ふことはもとと佛の加護を祈ると云ふ意味合ひのものでして卜じみたことになりますと、つまり早い話が、お門違ひ……と云ふやうなわけで……」

「あゝ、さやうですか。……いえ、あんまり心配なことがございましたものですから、よくも質しも致しますに、なんでもかなへてくださるあらたかなお不動様と聞きましたばかりで、早速駆けつけてまゐりましたやうなわけでした、お話を伺ひますれば、成程これアお門違ひでございました。どうもとんだ粗忽で、申譯ござ



から……？」

「なんです、實は、こちらのお不動様が、大層あらたかだと伺ひましたものですから」

「はア、成程、いやよくこそお参りくださいました。ま、どうぞ……、只今あげさせますから……」

「いえもう、どうぞそのまゝになすつてお置きください。また出直して、明朝にでもお参りさせて頂きますせう」

「いえ、なに、わけはございません。本多君、君、そつちから廻つていつて、あけてくれ給へな」と、顎で指した、向つて右側の格子戸づくり

の玄關には、信之もついでそれまで氣がつかずにゐた。もし彼等の歸りが、もう十分おそかつたら、恐らくはそこをあけて案内を乞うてゐたらうし、ヒョツとすれば、今ごろはもうおもんに逢へてゐたのかも知れない。

逢つたとすれば、どう云ふことが起つてゐたらう。——ふと、そんなことが考へられると、急に信之は可怖くなつてゐた。運命の偶然さ、それへのこゝと乗しかゝつて行かうとした自分の浅慮……それを思へば、よくこそ二人が早く歸つて来てくれたものと、今は却つて助かつたやうな氣持になつて、

「どうぞもう……、今夜はおそうございいますから、いづれまた改めて……」

「なに貴方、神佛を相手におそいも早いもあるのですか。仕儀によつては、止の刻参りさへするぢアございませんか」

なんとなくねツとりと絡んだ云ひ方をして、軽く聲をたてゝ笑ふと、玄關からうちを廻つたオールバックを待ちかねて、つか／＼と廻廊へあがり、戸の隙間へ指を差し込んで、力をこめてあけにかゝつた。

「うん、あく／＼。本多君、よろしい！ あくよくよ」

「いえ、今あけます」  
内外からの力が合して、重さうな戸が、ガラガラとけた／＼ましい響をたてながら引きあけられた。

「さアどうぞ、ずうつとお通りください」  
「これアどうも相済みません」  
すつかり氣おくれがしてゐた、ならば逃げだしたいのを、さうもならず、強ひて引き止められるだけのほ不氣味ながら、信之はもう一度泥まみれの日和下駄を、階段の下にぬがなければならなかつた。

「いやどうも、この通り荒して居りました……」

まだはいつても行かない先から、戸の蔭でさうぶふのが聞えた。

#### 四

「ぢアちよつと拜まして頂きます——」  
と、信之は、行きがかり上、いかさま信心でもしさうな克明な男らしく、小腰をかためて、高い櫃を踏みあがつた。見ると、中折の男は、手早くも帽子や外套を脱ぎ捨て、了つて、衣に輪袈裟の僧形に早變りしてゐた。いよく仕持の佐伯と云ふ男に違ひなかつた。

「さアどうぞ。たい今御内陣もおあけいたしませう」

書生態の男に、脱いだものを持たせて庫裡の方へやり、つか／＼と進んで、自分で内陣の扉を引いた。その間に、信之は須彌壇の前に留いて、——そこで、はたと當惑した。假にも辯護士と云ふやうな職に就いてゐながら、世事に疎いことと云つたら、お話にならない彼だつた。

不動様と云ふのは、神様で、従つてお守をするものも神主のやうな人だらうと思つてゐたから、手合せやうや唱へ言などは、尙更もつて見當がつかないわけだつた。さうかと云つて、神佛に對する尊崇の心は、今時の若いものに似合はず深い方だつたから、この咄嗟の滑

すほどの素性でもございせんが……」  
「辯護士の藤代信之さんと仰有るのけ、貴方ぢやアいらつしやいせんか」

圖星を指されて、信之はもう目と目を見合せてゐるに堪へられなかつた。どう落つかうとしてみても、煩からだん／＼熱くなつて來るのが感じられた。

「辯護士……？ 藤代……信之……？ 貴方、その人を御存知なのですか」

「いゝえ、まだお目にかゝつたことはありませんが、お話は常々聞いて居ります。貴方も藤代さんと仰有るのださうでし、それに、話に聞いて想像したところで、どうやらお容子も、失禮ながら貴方のやうな方らしく思はれますので……」

「へゝえ、あゝ成程……」

烈しい追窮に、信之も有難にしろもどろの態で、曖昧な返事をしながら、目を内陣の奥深く、不動明王のかれこれ等身大ほどもある尊像に向けて、ちらめく裸灯に頻りと瞬きばかりしてゐた。弱々しい微笑で、意味もなく唇が引歪められてゐさうな氣がして、我ながらやりきれなかつた。  
「若し……」

と、佐伯の調子は、際立つて意地悪げな皮肉に緊張して來た。「萬が一にもその藤代さんでしたら、……實は、是非とも會つて頂きたい人もあるのですし、私自身も一度お目にかゝつて、篤と御相談申し上げたいことがあるものだから……」

「あゝ、さやうですか」

「然し、あなたが藤代さんは藤代さんでも、信之さんでないといすれば、こんな餘計なことを申しあげたところで仕様がありませんでした。いや、誠にこれア失禮申しました。どうもとんだお人進みを致しまして、申譯ございません」

「いゝえ、とんでもない！」

「ですが、同じ麹町で、同じ藤代さんで、……これア間違へるわたしも、まんざら無理ぢやございませうまい」

佐伯は、さうぶふなり、大きく口をあけて、無遠慮な哄笑ひを吐き出した。

## 七

いかに嘲笑されようとも、今更信之は、前言を翻して、自分をその常人だとは云ひ出せなかつた。我から勝手に招いたこととは云へ、その弱味には、ひどくじり／＼させられた。恐らくはそれと覺つてゐながら、わざと空呆けて、人

違ひと云ふならそのまゝ歸して置いてやらう、とぶつたらは手の態度に納まり返つてゐる佐伯の前を、もう一秒でも辛抱できないやうな氣持にされて了つた。

「どうもこれア、夜分おそく出まして、とんだお邪魔を致しました」

突然さら／＼挨拶して、丁寧に頭を下げたが、何もかも馬鹿々々しくして、自分自身に對する腹立たしさから、白と身のこなしまでが荒々しくなつてゐた。

「さやうですか。それアどうもいろ／＼失禮を申しまして……。またどうぞお通りがかりの節は、是非お立寄りください」

「有難うございます。いづれまた出直してお伺ひ致します」

もう一度頭をさげて、スタ／＼と本堂を出た信之のあとから、見送りながら廻廊へおり立つた佐伯が、そこへ脱ぎ捨てた下駄を突つけて、戸外から玄關の方へ廻らうとしてついで來た。  
「どうも鬱陶しいお天氣が続きます。……傘はお持ちですか」  
「えゝ、持つて參りました」  
一時も早くと急ぎたつた眼にも、そこに、初

いません」

「いや、どう致しまして。然し何か存じませんが、人を探ねると申すことは、誠にやゝ氣の急くものでして、さぞ御心痛のことでございますう、お察し致します」

「有難うございます。……時に、甚だ不慣れたことを何ふやうですが、貴方がこちらの、……え、御住職で……？」

「はア」

と、讀經のためにつぶれたやうな咽喉を哽らせて、一七年ほど以前に、先住の後を襲ひました者でして、……え、佐伯と申します。どうぞまたこれを御縁に、お通りがかりの節はお参りもして、頂きましたり、至つて若輩ではございますが、え、御法のお話も申上げませうですから、御遠慮なく御立寄りを願ひたうございます」

「有難うございます。あたくしは……」

と、ちよいと内懷を探つてみて、「え、生憎名刺を持合せませんでしたが、藤代と申します。どうぞ以後御別懇に……」

「あ、さやうですか。え、で、なんです、お住居は……、御遠方で……？」

「いえ、遠方、と云ふほどでもございませ

ん。麴町に住んで居ります」

「はア、それア……、高燥の地であり、閑静で、なんと申してもお膝廻りの一等地ですからな、それは結構です」

「どう致しまして。麴町もいろ／＼でして、どうせ吾々のやうな者ですから……」

「とんでもない！ え、麴町の藤代さんと仰有と……？」

うま／＼と釣り寄せられて、信之は、俄にはツと思つた。人勢の人に接する僧侶として、話上手は別に怪むに足りなかつたが、こちらは、いかに嘘をつくことが嫌ひとは云へ、名前も所も有のまゝに喋らされて了つたなどは、なんぼなんでも辻瀾すぎた。世間の狭い一人の遊民と自分で自分を思つてゐ、それはまたそれに違ひないのだが、父信策は、相應世に聞えた實業家ではあり、紀尾井町の邸も、もう三十年以上も住みついてゐるのだから、ちよつとでもあの邊にゐたことがあるとか、親戚知友でも持つてゐるとか云ふ人ならば、「麴町の藤代」で、存外これが通らない名でもなかつたのだ。

## 六

つた。——思へば、馬鹿正直と云ふ以上に、横道な口を利用して了つたものと、今更ながら後悔された。けれどもまた、さへやうによつては、佐伯の麴町の藤代さんと仰有と……、とさも心當でもありさうな云ひ方が、本音を吐かせよう詐みの手で、その實なんの據りどころもない出鱈目かも知れないのだった。さうとすれば、うかと後悔も出来ないわけになる……。信之は空呆けて、商人じみた採手をしながら、

「いえ、とんでもない！ 決しても貴方がたのお耳にはいつてゐるやうな、そんな者ではございません。若しひよつとお心當りでもございませうのなら、多分それは同姓でも、まるで有關係のないお方に違ひございません」

「いや、そんなことは……。失禮ですが、麴町はどの邊でいらつしやいますか」

「ひどい、それはもうごみ／＼した裏町でして……」

「ひよつと、紀尾井町へんちアいらつしやいませんか」

鋭くじろりと見据ゑられて、信之も、これは所詮通れられないかな、と思つたが、後に現はれるまでもと、

「いえ、まるで見當が違ひます。別にお聴し申

低い唖れ聲で、うしろから呼びかけられたやうな気がした。すぐ振り返つたが、黒板塀の外までも深々と茂り出した葉櫻の影に、いとど小暗い裏通りの、犬の仔一匹動く様もなく、まだ宵の口ながら、沈々と更け互つてみえた。

暫く竹んでゐたが、左耳とより他に考へやうはなかつた。こんな突飛なところで、人に呼びかけられるやうな覺えもないし、それに、彼に對して「先生」と云ふ呼び方をする者は、たまに出入する四五人の法學生くらゐのものだった。けれども、その太い唖れた聲は、慥に耳にはいつたのだ……

(可訝しいな……)

薄氣味悪い氣がして、スタ／＼と、表の電車通りの方へと急がうとした。

「ちよつと、先生、先生」

今度ははつきりと、けれどもかすめた聲で、囁くやうに云ふものがあつた。振りかへつて、闇をすかすと、不動堂の石塀が切れて、隣、往來へちかに切つ立つた二階家へ續く、その間の僅か一尺か一尺五寸ほどの庇間に、ちらりと動くものがある……

「誰だ!」

信之は、思はずけはしい聲になつてゐた。手

先だけ出て、ひら／＼と磨ぐ……

「誰だ、何か用か……」

「先生、あたしです、あたしです」

云ふ聲には、慥に憶えがあつたが、すぐには誰とも見當がつかなかつた。場所が場所だけに、自分でも、生れて擧つての、今後二度と通りかゝるかどうかとも解らないやうな、用のない裏町だけに、心當のつけやうもなかつた。

## 九

けれども、うさんな者でないことだけは明かだった。

一二間立戻つて、庇間へ立寄り、蓋のない溝のこちら側から、首を伸して覗き込んで、

「誰だ……」

引摺るくらゐの黒のレインコートで、すつぱり身を隠し、打を眼深に冠つて、背中ではタリとしたみに張付いてゐるのが、顔だけさし寄せて、

「わたしです」

まがぶ方もない西山普朗だつた。

「アツ」

とばかり、有聲に信之も唾にされた。思ひがけない驚きの瞬間に續いては、乍間に報ぜられた慘酷な人殺の下手人に、眼のあたり突ツ立

たれた恐怖も渦巻いて、意氣地なく足がすくんでしまつた……

けれども、闇に馴れて行く眼が、ちきに普烈の僅かばかり現はれた顔を見せてくれた。それは、一時なりとも恐怖を以て對した自分が、恥しくつて堪らなくなるほどに、全き信頼と感謝とを物語つてゐた。眼と眼とがびつたりあつて、一秒、一秒……、どちらの眼にも涙が一杯になつて來た……

「……どうするの?」

まづ信之が、囁くやうな調子で切り出した。

言葉はそれだけだったが、意味は、

「お前の意志が第一だ、今後のお前自身を、どう處置しようと思つてゐるのか、それから先に

聞いて置かう」

といふやうなことだつた。

「ど、どうでもします」

きツぱりした答へだつた。

「よし、ぢやア兎に角うちへ行かう、——どう思ふ?」

思ふ?」

「あなたさへお差支へなければ」

「あたしは、いゝから云ふんだ。君はどう思ふんだい……?」

「いえ、どうでももう先生のおつしやるやうに



めから脱ぎ捨てられた朴商と、住持の足駄はそれのまゝで、信之の日和だけが、向うむきにチャンと揃へてあるのを見通せなかつた。あがりしなに、自分で揃へて脱いだ憶はなかつた。曾てそんな風な丁寧な脱ぎ方をした憶すらない信之だつた。廻廊を廻つて、例のオール・バックの書生でも来て、直して置いてくれた、とても考へるよりほかに考へやうのないことだつた。そんな扱ひをうける参詣人とぶふのも稀だらうし、第一あの書生ッぽが、云ひつけられもしずにそれほど氣を利かすとも思へない話だつたが、急きたつてゐるまゝに、大して訝しみもしずに突ツかけて出た。糠雨は、なほ、飛廻る小蟲のやうに散つてゐた。

「では、御免ください」

「どうも失禮を……。さやうなら」

挨拶を交して、住持は、石燈の岐路を玄關の方へ、信之は門のそとへと別れた。――信之には、遽に夢から醒めたやうに、改めて我と我が行爲が顧みられた。眞直な心の故に、おもんがひどいめに逢はされてゐると聞くと、矢も楯も堪らず飛び出して來たのは、勿論、一目なりと逢つて、云ひ慰めてやりたいと思へばこそだつた。少しでも彼の女の心を明るく、――

自分の陥つた苦悩が、決して悪い心の報いではないと云ふことを説いて、いくらかでもそれを軽くうけ流すことが出来るやうにしてやりたういばかりだつた。その動機には、少しでも嘘や不純が混つてゐたわけではなく、どう非難のしやうもないのだが、さてその結果のどぢき加減と云つたらなかつた。

（俺は、どう考へてみてもあんまり利口ぢやアないな！）

さう思はずにはゐられなかつた。――普段くだらなく思つてゐる「利口」の値うちが、急に立ち勝れてみえて來た。反對に、「馬鹿」は、一文の値うちもなく、我が身ながらに嘔ひ倒したいやうな氣分になつて了つた。

### 八

自分の都合さへ考へてゐれば、誰でもさう愚かしくは振舞へないものだ、それを、負けなくも、ひとごとにも立て入つて氣を揉んだ揚句が、とんだ馬鹿をみる……

（あ、いやだ！）  
いつか信之は、普段輕蔑しきつてゐる世の常の「利口者」と選ぶところのない、消極的な、安全第一の處世法に、ぐたりと心の背を凭せかけてゐた。けれども、その、縮まりこんだ片隅にも、

決して居心地のよい暖かみは見出せない心だつた。二月の空ッ風に吹き曝されて、夕暮の街角にでも突ツ立つてゐる浮浪者のやうな、すさまじい寒さと寂しさとに鎖されて了つた。

（あ、いやだ！）

は、同時にその嘆聲でもあつた。孤獨の感には、いつもひと溜もなくまゐつて了ふのが、信之の生得の性分でありながら、他人のために差しのべた手の拙さに、逃げ込んで來る片隅は、きまつてまた安價な個人主義的な立場だつた。彼を蝸牛に譬へるならば、個人主義はその脆い殻の如きものだつた。脆いことを承知で、始く世の雨風をしのぐ隠れ家が、もとより安住に堪へないのは解り切つた話だつた。

衆はなんの役にも立たないやうな霧雨に、氣持悪く薩摩緋の單衣が浸つて、心ばかりか姿までしょんぼりと、薄暗い寒町の通りへ出た。――慈々やつて來たのに逢へなかつたために、急におもんが戀人の懐しさであたまに絡はりついて來た。よれよれの浴衣一枚で、臺所の片隅に縮こまつてゐると云ふのが、顔かたちなり心持なり、人一倍華美な女だけに、一層哀れふかしく思ひ描かれた。

――先生、……先生、……

ひたすら歡心を得ようとしてゐる心根が、いぢらしく胸に迫つたのだ。ちよつと口が利けなかつた。けれどもおもんは、變り果てた自分の境遇なり身の周りを顧みることさへうち忘れた平氣さで、すぐ言葉續けた。

「奥さんが出て来て？」

「いゝえ、御本堂を窺いてゐるところを、そとから歸つて來たお住持さんに見つかつちまつて、どうもひどく間の悪い思ひをしちやつた」

「あら、もう歸つて？」

氣の急ぐ容子をみせて、「あたしどこへ行つたかさう云つて？」

「いや、まさかあなたに逢ひに來たとは云ひ出しかねて、誤魔化して歸つて來たんだから、無論あなたの話なんかしなかつたし、あたしも、自分の名前は出さずに來たんだが、どうやらあたしと云ふことの察しがついたらしい。歸つてからもし訊かれましたら、そこはうまくやつといて貰ひたいな。何も構やアしないわけだが、一旦さうぢアないと、きつぱり云ひ切つちまつたんだから——」

# 十一

殺人の大罪を犯した者の身の上を、一時たりとも引きうけてゐながら、おもんに逢へば逢ふ

で、そこでもまた引つ懸つてしまふやうな信之だつた。恐らくは普烈が、あの底間から眼だけ窺かして、こつちを見てゐるだらうとは思はれたが、そんなことはちつとも氣にならなかつた。鼻と鼻とを突き合せんばかりに向ひ合つて、なほも言葉續けた。

「あたしがかうして出かけて來たのは、噂によると、貴方があんまり仕合な境遇でなさうに思はれたからなんだ。もし噂のやうなわけなら、及ばずながら御相談相手にもならうと思つて……」

「有難う！ それアあたしにも解つてゐるわ……」

いえね、いまお目にかゝつてさう思つたんぢアなくつて、先達中から、そのうちきつと貴方が來てくださりやアしないかしら、つて云ふやうな氣がしてゐたくらゐなの。だから、ほんとうに嬉しいわ！——

「さう！ あたしが來るかと思つてた？」

「え、なんとそんな氣がしてたの」

「さう！ それア……」

信之も嬉しかつた。子供のやうな無邪氣さで、たゞニコ／＼するばかりだつた。

「だけどあたし……」  
と、おもんほどのものが、これも小娘のやう

にはに cand、頸を傾け、臉を伏せて、今のところどうにも仕様がなと思ふわ。

「と云ふのは、貴方の氣持からだね？ 貴方の氣持として、假令よそ目にはどうあらうとも、今のまゝが一番いと思ふんだね？」

「信さんの親切に對しても、こんな我儘は云へた義理ぢアないけれど……」

「あゝ、それアいけない！ 貴方そんな風に釋つちア間違ひだ。あたしは貴方の我儘を加勢しに來たんで、決して意見なんぞしやうたア思はないよ」

「えゝ、それも解つてゐるつもり……」

「いゝえ、駄目々々！ あたしはね、つまりかう思つたんだ、——もし貴方が、えらい男に引ッ掛つたと思つて後悔しながら、どうか云ふ事情で、辛い思ひを辛抱しい／＼お寺にゐるんぢアつまらないが、——それなんだ、それを心配して來たんだ。然し……」

「えゝ、それもあつてよ。辛いことは、それア……」

見榮もなく、ゆかたの袖を眼に押しあてゝ、急に鼻を吸りあげながら、「奥さんには、女中よりひどく扱はれるし、あの人はあの人で、お湯に行くにも腰をつけさくらゐの嫉妬やきで、

なります—

「それア困る！ 僕は君ぢやない。最後までも君を動かすものは、君の意思以外にはなんにもあつてはならないんだ。僕はたゞ君に忠告したり、助力を與へたりするよりほかに、どうしてあげやうもないんだ。君は君の思ふ通をなんでもかまはずに眞直にやればいいんだ。この際になか僕で出来ることがあつたら、喜んで力を貸すよ。で、どうする？」

「ぢア、兎に角先生のところまでつれてつくださいな。僕腹がへつて……」

「よし、行かう！ でも、一緒でも、ちよつとまづいなア、さうかつて、君……」

「さうです。とてもわたしひとりでふら／＼出掛けられやアしません」

「一體君アいままでどこにゐたんだい？」

「お不動さんの縁の下……」

「え？ 縁の下？」

「先生の下駄が直してあつたでせう？ あれで大抵はお察してくださるだらうと思つてた——」

「じよ、冗談云つちやいけな！ 誰がそんなところに君がゐると思ふもんかね！ 君だつて、僕が来ようなんぞとは、夢にも思ひがけなかつたらう？」

「えゝ、それアさうですけど……」

「まア、然しそんなことはどうでもいいや。どうしよう、なんなら自動車でも頼んで来ようか」

十

「駄目ですよ、こんな裏通りに自動車を入れたりしちやア……」

存外善烈のあたまでは慥だつた。そのことが、信之に、ひどく力強い氣をさせた。

「よし、ぢやかうしよう、僕だけ電車通りに出で、そこで自動車をお願いで来るから、君はその間うまくだどこかに隠れてゐたまい。さうしてあすこの角へ来たなら、僕もおひるから、そこへ出て来てくれるといふね」

「えゝ、さうしませう。……だけれど、こゝら近所には、ちよつと自動車屋がなかつたやうだな」

「まアいゝよ。どつかで捜して来るから……」

「ぢアいゝね、あすこの角に自動車が停つたら出て来るんだよ」

「大丈夫、うまくだやります」

「あッ！ ひつこめ／＼！ 人が来たぞ！」

騒ぐ聲ながら、鋭く注意して、すぐ信之は泥濘を拾ひ／＼歩きだした。なんとなくひとに顔を見られては悪いやうな心持になつてゐた。蛇の目をかき上げて、足早にすれ違はうとしたが、ふ

と、爪革のない男のものゝ古い足駄に、やゝまゐし

をつくつて載せてゐる素足の美しさが目についた。洗ひ晒しながら、雖に先霜のゆかたの柄は、

どうしてもこゝらの細君たちに似つかはしいものでなく、棲さばきにも訓練が見えた。思はず信之は傘を舉げた。と、その瞬間に先方の傘が

上半身を隠した。さうされたことで、いよいよおもんゝ違ひないと直覺した信之は、すぐ足を

とめて振り返つた。女も、斜うしろに傘を廻して、その影からそつと見返つてゐた。

「おもんさん！」

「あら、信さん！ 矢つ張り貴方だつたのね？ どうも歩きつきがよく似た方だと思つてたら……でも、どうして、貴方がこんなところへ……？」

「あんまり思ひがけないんで……」

「貴方に逢はうと思つて……」

「うそウ？」

「ほんとさ？ たつた今お不動さんへ行つて来たところ……」

「さう？」

心から嬉しさうな容顏を傾けた。……湯あがり、濃すぎる白粉の野暮くさが、信之を涙ぐませた。惚れた男のためならば、女として、容易ならぬ己れの趣味も何も打ち捨てゝ、

「過だつて、つまりは仕合せなんだから、氣を長く  
いゝ日が来るのをお待ちなさい」

「どうもいろ／＼有難うございました。貴方も  
どうぞお體をおいとひなすつて……。あゝ、そ  
れから、あんまり深酒はおよしなさいましね。  
……あたし、大喧嘩をした揚句に、綺麗に姉妹の  
縁を切つちまつて、今ではあかの他人ですけれ  
ど、よくお澄から聞いてました、貴方のお體  
には、お酒が一番の毒なんですつてね？ ほん  
とうにお氣をおつけなすつてくださいましね、  
くれ／＼もお願いして置きますよ」

### 十三

一人ツ子に生れて、眞の味は知らないながら、  
姉のやうな優しい姉りを罩めてさう囁かれる  
と、急に信之は、なんと云ふこともなしに悲し  
くなつて了つた。

「……有難う……」

こみあげて来る涙の影には、心が悉く感  
傷に殉じ盡してゐた。「だけれど、あたしには、  
貴方みたいに、自分はどうなつても構はないつ  
てほどの氣持で、好きで／＼たまらない人があ  
るわけぢやなし、寂しくつて、寂しくつて、……  
酒でそれを紛らさうなんて、意氣地のない話だ  
けれど、……まつたく世の中つて、寂しいとこ

ろだからねえ。――  
「あら、信さんのやうな方が、そんなことを仰  
有るなんて。いゝ奥さんがいらしつて、可  
愛い盛りの子供衆もおあんなさるぢアありませ  
んか」

「それア、女房子も可愛いよ。自分でさう云つ  
ちア可笑しいが大抵誰にも負けないくらゐ心  
から可愛がつてるつもりだよ。だけれど、――ど  
う云ふんだらう、つまりひとより慾ばりなのか  
ね。それだけぢアまだ可愛がり足りないやうな  
氣がするんだ。あたしを好いてくれるひとが出  
来れば、幾人でも可愛がらずにはゐられないん  
だ。何も女には限らない、一人でも餘計に好き  
で好きでたまらないやうなひとがほしいんだ。  
それでゐてあたしには、或る點まで行くと、それ  
から先へは進めなくなつて了ふ悪い癖があるん  
だ。つまり、臆病なんだね。これ以上は自分の  
惚込み方に自信がもてない、と云ふやうな氣が  
する時が来る、さうすると自然相手も疑ひたく  
なる。――一旦歩みが止まつたが最後、砂山の中  
腹に立つてゐるやうなもので、ずるり／＼摺落  
ちて、見るまにもとの本阿彌さ！ だらしがな  
い、實際にしががないつちアありやしない！」  
「だつてお澄なんだは、まつたくあれの心根が

よくなかつたんですもの……」

「そんなことは問題ぢアないさ。いゝところも  
悪いところも、つづくるめて好きにならなくつ  
ちア、まだほんとうの好きたア云はれないさ。  
今の貴方の場合だつて、佐伯と云ふ人だ、他人  
のあたしから見れば、決していゝ心掛だとは思  
はれないけれど、それだつて、そんなことは貴  
方にとつちア問題の外なんだ。つまり、相手次  
第で動いてゐる分にはやア、すぐ行きつくところ  
へ行きついて了ふわけさ。どんな場合でも、自  
分の心が先に動いて、相手構はず戀ひまさつて  
行く、一時もやまずに深くなつて行く、――それ  
がほんとうの好きなんだ。さうなつてゐれば、  
相手がくたびれて遅れたり、歩調が亂れたりし  
ても、それを寂しがらうなことはないんだが、  
あたしなんぞは兎角相手のことばかり氣にして  
ゐるもんだから、ちよつとしたことにも、すぐ  
寂しくなつて、氣を腐らせて了ふんだ。まつた  
くなつちアゐないよ！」

「さうばかりも云へませんわ。世の中にはどう  
したつて好きになれないやうな人の方が多いん  
ですもの」

「それアさう！ お釋迦様はどの方でも、縁な  
き衆生は度し難しと仰有つて諦めをつけてい



しよつちう打つたり蹴つたりされどほしだし、それア辛いことを云やア……」

「うん、ぢアかうだね？ 辛いことは辛い、貴方の氣持としては、どんな辛抱でもしてそばにゐたい、さうなんだね？」

「……え、……まア……」

「さうか！ そんなら、いぢやないか。ちつとも恥しさに云ふことはないさ。それなら立派なもんだ！ どこへ出したつて立派な氣持だ！

あたしはまた餘計な老婆心から、今となつては止むを得ずの態かと思つたもんだから……。いえ、そんならもうちつとも心配することはないんだよ……」

假令この後、虐め殺されたと聞いたとて、餘人は知らず信之は、さぞ本望だつたらうと、竊に喜んでやれる場合だつた。

## 十二

「でも、よくまアお心にかけて、態々こんなところまで尋ねて来てくださいましたわね。ほんとうに御禮の中上げやうもありません。」

おもんは、しみじみと信之を見あげながら、涙ぐましく呟いた。

「何もそんな……」

はにかんだやうに、然し嬉しさに微笑つて、

「そんなことアなんでもありやアしないが、この先とも、萬が一にも困るやうなことが起つて來たら、どうか遠慮なくさう云つてよこしてくださいな。碌な御相談も出來まいけれど、辛いことつてものは、たゞひとに聞いて貰つただけでも、いくらかは氣が晴れるもんだし、それに……。兎に角あたしは、貴方のことは、いつも氣にかゝつてゐるのだから……」

「有難う……」

消え入るやうに、しんみりとうけて、「なんぞまた、お力を借りに何ふやうなことになるかも知れませんか、どうぞその節は……」

「え、きつとですよ……。ぢア、早く歸つたらいいでせう。こんなところで立話をしてゐるところでも見附かつたら、また困りやアしない？」

「え、……、あのね、信さん、唐突にへんなことを云ふやうですけれどね、もしあたしに萬一のことがあつた時には、何を措いても貴方駆けつけて来てくださらない？ あたし、死ぬ前に、一目でもいゝから貴方にお目にかゝつて行きたいの。一生に一つのお願ひですから、是だけは是非聽いてくださいいね……」

「それアもう必ずとんで行きますから、知らせ

を忘れちまつちアいけませんよ。……なんて云つてゐるあたしの方が、どうやらお先になりさうだが、その時には勿論貴方も来てくれるでせうね？」

「そんなことがあるもんですか！」

「まアさ、お互にそんなことがあつちア堪らないけれど、いづれ萬が一の話さ。誰がなんと云つても、こればかりはどうにも通れられないことだからね」

「それアさう！ ぢア萬が一さう云ふことだつたら、あたしもきつとお目にかゝりに出ますから、すぐ知らせてくださいいね。假令あたしがどう云ふ體になつてようと、どんな無理をしてでも、その時には必ず駆けつけますわ」

「よろしい、…… ぢア堅く約束しましたよ」

「え、貴方もどうぞ間違ひなくね」

どちらからともなく、思はず手を握り合せ、ぢつと瞳を見合せて、少時は無言のうちに深い心を通はせた。一點翳りのない眞を、お互の目が吸ひとつた。

「ぢア……」

「え、お別れしませう」

「さやうなら、……どうぞ體に氣をお付けなすつて……。好きな人のためなら、どんな辛い境

「大丈夫だ！ 早く来たまい」  
無事に二人は自動車上の人となつた。深い霧を衝いて、車は紀尾井町の藤代家へ向つた。

## 眠られぬ夜

### 一

マツケンゼン殺しとか、氷川町の外人殺しとか謳はれて、新聞を賑はしたのも僅かに二日の間だつた。現場の最初の目撃者である同家の下女おきんの、参考人としての供述によつて、三日にあげず出入りしてゐた西山善烈の名が引き出されると、不良少年の黒表中の立物だけに、九分九厘間違ひのない犯人と目ざされて了つた。刑事は東京横濱間に飛んで、彼の立ち廻りさうな要所々々を堅めた。警視廳でも所轄者でも、正犯人の逮捕に、十分の自信をもつてゐたが、たゞ大抵の不良少年がさうであるやうに、激情に驅られ安い、神經質と云ふよりも、寧ろ神經衰弱的な普烈の性質を鑑みて、あまり新聞でわい／＼騒ぎたてたために、自殺でもされたたり、とんでもない高飛びを企てられたりしても厄介だと云ふところから、三日日ばかり記事掲載が差止められて了つた。

押入の中の状況で、大膽にもそこを嫌史の場所にしてゐた茲通事件であることは疑ふ餘地もなかつた。そこに遺棄された少藥劑し、背版の上着などが普烈の所有品であることも慥められてゐたし、それらの物を身につける暇もなく逃走したとすれば、逮捕は一層容易さうに思はれたのだ。犯罪が重くて、逮捕が容易らしいとすれば、第一の疑懼は犯人の自殺でなければならなかつた。ものとの意思のないことは明かだつたけれど、萬が一にもと、紛失した家財の有無をおきんに就いて調べてゐる中に、玄關の帽子掛にかゝつてゐた笠の、主人が常用の黒の雨外套と、烏打帽子とが、失はれてゐることが判つた。犯人の服裝も、これで慥められたわけだつた。

犯行の現場である納戸の六疊間で、左の下腹部と心臓のやゝ下に、鋭利な刃傷をうけて、多量の出血のなかにうち斃れてゐたマツケンゼンの右の手に、二發だけ發射されたブローニ一の六連發が握られてゐたことで、そこに爭鬭が行はれたと云ふ推定にも誤りはなさうだつた。廊下に残つた血の跡は、與彌子が六疊間で殺されてから、屍體の發見された食堂まで引き摺つて來られたことを物語るものだつたが、

その右の師を貰いてゐる銃傷によれば、マツケンゼンの所爲らしくもあり、彼の女自身の傷口から流れたのではない、外部からの血で、甚しく衣服が汚染されてゐる點から推すと、マツケンゼンが短刀の一撃をうけてから後の出來事であるか、さもなければ、犯人自身も傷を負つてゐるか、そのいづれかでなければならなかつた。犯行の短刀は、現場に發見された。それも、普烈の、口頭攜帶してゐたものであることが探知された。證據物件や、現場の状況や、おきんのほかに當日訪問してゐた米國夫人婦、普烈の友達である二三の不良少年たちの供述によつて、犯人並に犯罪の主因、その方法など、比較的に明瞭だつた。たゞ犯行の日時者が、犯人のほかに二人ながら死んでゐるので、逮捕後の豫審に多少の困難が、もしあるとすればあるくらゐに豫期されてゐた。

世間の噂は、新聞が一時に緘黙して了つただけに、却つてジリ／＼と湧きだして來た。度重なる災害に、京濱の外國人たちの間には、日本警察の不信を唱へようとする氣勢もほのみえて來た。

### 二

けれども、事件發生から五日日の金曜日には、

らつしやるくらゐだから、まして吾々凡夫に、好き嫌ひのあるのは當り前だけれど、好きになつたからには、とことんまで行かなくつちア妾だと思ふね。……だけれど、ついまた喋り込んでしまつたが、いつかまた機會があつたらゆつくり話をすると、今夜はこれで別れませう。ぢアいづれその内……」

#### 十四

今度こそ二人は別れようとして、理由もなくてれた心持から、ほんの頷き合ふほどに頭をさげ、すばやく眼も逆して、くると背を向けて歩き出した。信之の心は和やかに、ひとは可愛く、世は温かく、晴々として輕かつた。

五六間も行くと、振り返りたい氣持が抑へきれなくなつて來た。……振り返つた。おもんの後姿には、急に瘦が目立つて、泥田におりた鶴のやうに、しよんぼりと雨夜の闇に消えて行かうとしてゐた。哀れ深く、いとしが胸に迫つた……。眼を返さうとして、序に普烈のかくれてゐる底間のあたりを見たが、もとよりそこには、鼻の先も窺いてはゐなかつた。

……氣持が入れ混つた。殺人犯人に對する薄

氣味惡さが、おもんの一徹な戀に感じられたり、戀にやつた後姿の哀れふかさが、普烈の血に浸つた心に着せかけられたりした。さう云ふさま／＼な感情の動きはどうあらうとも、併し信之は、結局に於て樂しかつた。自分の心の裡だけと諦めてゐた世界が、いつか自分の周りにも展けて來たやうな氣持で、大威張りして大逆狹しと歩きたかつた。この勢なら、どんなことでも出来る、と云つた風な、力強い感じが頻りに動いた。亢奮して、泥濘も水たまりも構はず、無茶苦茶に歩いて行つた。

飯倉の通りに出て、自動車屋をみつつけ、薄汚れた箱のに乗せられて、もう一度靴屋と漬物屋との横町へ引き返して來た時には、雨はいよいよ細かくなつて、鶴のやうに白く暗んだ夜が美しかつた。

「よし／＼、その角でいゝんだ！」

性急に、まだ停まらないうちから腰を擡げて、運轉手に聲をかけ、自分で戸を半開きにして待つてゐた。と横町から、外套に長靴の巡查が、佩劍を鳴らして出て來た。はつとして、思はず信之は扉を閉てたが、すぐその理由のなさを反省して、躊躇もなく、折から停つた自動車を降り立つた。

一すぐ來るから、ちよいと待つてくれ給へね。じろ／＼風態を見極めながら、ついそばを通り過ぎて行く巡查にも、寧ろ聞えよがしの、平氣な高聲でかう云つてから、信之は、傘も持たずに、横町へ切れ込んで行つた。然し、やつぱりなんとなく氣がかりだつた。平常の彼は、警官に對して、因襲的な敵意や反感をもつやうなことは決してなく、寧ろ親愛の念を抱いてゐるくらゐだつたが、それが俄に、なんとなく怖ろしいものに感じられたことに氣がつくと、

我ながらちよつとへんな氣がした。それが、法律とか制度とか云ふ人爲的なものに對する、理智的な憚りや怖れではなくて、用合頭に猫の前に跳んで出た鼠でも感じさうな、本能的な御動だつただけに、尙更へんな氣がした。

ちよいと振り返つたが、もう巡查の姿は見えなかつた。そのことが、然し一層信之を不安にした。すぐ引返して、表通りの、巡查の曲つて行つた方を透かすと、白い霧の中を、却つて著しく、外套の後姿が、ゆる／＼と遠ざかつて行つた。

「先生！——

どこから出て來たのか、普烈が忍びやかに近づいて來て、「行つちまひましたか。



はしないだらうところの、我執の破産に、赤標にむかれた心の寂しき、——これは、深く信之の心に觸れた。

「ほんとにとんだことだつた。然し、はずみだよ、ほんのちよつとしたもの、はずみだよ。ねえ、さうだらう？」

「さうばかりもぶへません、いざと云ふ場合にやア、やつつけちまふより仕方がないア、かねがね思つてたことなんですから」

「それにしたつて矢つ張りはずみだよ。大袈裟な言葉を使へば、運命だよ。……然し、一體どうして奥さんを……？」

「あれア僕ア知りません！ 多分おやぢが、くたばりかけながら、九死一生の力で引金を引いたんぢアないかと思ふんだが、何しろ眞ッ暗闇だつたから……」

「さうだらう。もし君のしたことだつたら、よもや君だつて生きてやアしまいと思つてんだ。然し、どうして早く自首して出なかつたんだい」

「だつて、それア……」

「可怕かつたのかい？」

子供のするやうに、素直に頷いてみせた。自動車は、霞ヶ關から永田町の高臺へと、前燈

の光のなかを煙のやうに飛ぶ霧と闇とを衝いて、まっしぐらに登つてゐた。

「だけど、今夜まであつちこつち逃げ廻つてゐるのも、随分可怕かつたらう」

「えゝ、……だけど、殺されるよりやゝ……」

信之は、ゲイと心臓を突かれたやうな氣がした。この男は、殺されることの恐ろしさを、目のあたりに見て知つたのだ。それは概念的な恐怖とは全くわけの違ふものなのだ。——さう思ふと、不思議に莊嚴な感じに厭せられて、思はず首を垂れて了つた。が、無理にも心を實際的な問題へ向け變へると、すぐに引き取つて、

「殺される？ 死刑になるつて意味かい？」

「えゝ……」

この言葉から、聞くも恐ろしげに顔を背け、深い溜息を震はせた。

「冗談いつちアいけないぜ！」

「……何が……」

「何が？ 君、せいゝ重くつて十年だよ。うまいきア五年か七年、俺に裁判させれア無論無罪だ！ 死刑なんて、こつちから頼んだつてしてくれるもんかね」

「さうですか？」

と正面に信之の方へ捻向いて縋りよるやうに膝に手をかけると、「ほんとうでせうね、間違ひありませんまいね」

信之としては、普烈が、人を殺したから俺も殺されると云ふ風な法律に關する無智と云ふよりも、寧ろ元始的な感情に支配されて、それで今夜まで逃げ隠れてゐたことが、これまた呆れて言葉も出ないほどの意外に感じられた。

「さうか、君やア、さうかい！」

こんな善良な「不良少年」が世にあらうか、と思はず膝に置かれた手をとつて、しげ／＼と顔を見詰めたのだつた。

#### 四

近々と見合せて、一二秒すぎたと思ふと、普烈の眼の中は、いつぱいの涙になつて了つた。それを見ては、信之とて我慢できなかつた。——

特別の恩典で、纔に死刑を免れた人のやうな、口も开けないほどの感謝に充ち溢れた心が、輝やかしくも信之の眼前にあつた。なんとなく吾身が恥しくなつて来た……

人は、易くも、運命の逃れ難きを云ふ。而も明日の日の來ることを信じて疑ふものはない。萬人の今日も、たつた一つの例外もなしに、「特別の恩典で、纔に死刑を免れてゐるのだと、そ



犯人が、辯護士の藤代信之と云ふものに附添はれて、午前九時頃、直接検事局に自首して出たことが、各紙の夕刊によつて報ぜられた。中には午後になつて、市ヶ谷刑務所に護送されるために、囚人自動車に足を踏みかけてゐる白緋の單衣に袴を穿いた、瘦せてヒヨロ／＼と支ばかり高い若者の寫眞を添へたのもあつた。

……そこで、その後の事實はからだつた。

霧雨を銜いて動き出した自動車のなかで、心を落つけるために、信之は、真正面に運転手の背中を見詰めたまゝ、虎の門のあたりへ来るまでちつとおし黙つてゐた。

「話をしてもよござんすか」

恐る／＼さう口を切つた普烈の心持が、手にとるやうに感じられて、信之は涙ぐむほど可愛かつた。今まで引き締められてゐた額や頰の筋肉が緩んで、急に、思はずも優しい笑顔になつて了つた。

「いゝとも！」

「黙つてると淋しいんです……」

「解る、解る！」

耳に口をよせて、「運転手に聞えないやうに、それだけは氣をつけた方がいゝ……」けれども、毀れかゝつたやうなぼろ自動車だ

つたのが、結局幸で、調子の悪い機關の音に遮られて、その囁くつもりを、却つて振らなければならぬくらゐだつた。

「……えゝ……」

口を利くとなると、然しなんにも言ふことはない、――さうししかつた。僅かの間にげつそりと瘦せ衰へて了つて、ギョロリ／＼光る眼を、まぶしさうに膝へおとした。

「たうとうえらいことがもちあがつちまつたね」

信之は、落つた調子でものが言へるやうに、心の支度を、すつかりもう調へて置いた。大事驚くに足らず、――兎角小事に拘泥したがる性分を自覺して、口頃から取返しつかないことを「運命」と云ふ底まで押し鎮め、心の安定を保つ修養を怠らなかつたおかげには、神總實のわりに、大事に臨んでも狼狽ないだけの支度が出来た。――たうとうと云つたのは、かねて普烈が来ては、事件の發覺が際どい所まで進んでゐる由を、悠話まじりに喋つて、

「何しろ、相手が異人だけに可怕ござんすよ。知らない筈はないのに、顔を合せるといやに鄭重だつたりして、薄氣味が悪くつて仕様があまりやしない」

などと云ふので、信之も、  
「悪いことは出ないもんだ、君みたいな男でも、可怕いといふ氣が出るんだから……」

「冗談いつちアいけませんよ。僕はそんな……」

「いや、異人つてやつアまつたく不氣味だよ。なんて云ふとこれだからね――」

と拳銃を差しつける手眞似をしてみせた。

ほんと／＼！ ズドンと來れアそれつきりなんだからなア。だけど……」

「その人のためならいゝか！ 命もいらな

か。

冗談半分とは云ふでう、こんな會話を取り

交はしたこともあつたのだ。

で、それが、たうとう本事になつて了つた、と云ふほどの意味だつた。

### 三

「えゝ、とんでもないことをしちゃいましたよ」

普烈の蒼白い頬には、微かに苦笑しげな笑みが浮かんて來た。それは、何か取返しつかない失策を仕出かして了つた時に、心では十分に責め訶まれながら、ひとから愚圖々々云はれるに堪へない勝氣な靈魂が、しやうことなしに笑ふところの、あの寂しい笑ひだつた。その上には、神様でさへ、なんの罰をも加へようと思ひ

に籠つりきりかい」

「普通の神社や寺のやうに、馬鹿々々しく床が  
高くないし、さうかつて住居よりは高いから、

……それに晝間もあんまり参詣人は来ないし、  
馬鹿に都合のいい隠れ場所だったんですよ。」

「然し、貴方がやつて来たにやア驚いた。これ  
アてつきり知つて来たんだな、と思つた」

「それアさうだらう、普段の僕とはまるで縁の  
ないところだからね。僕にしたつて、あの二三

時間前までは、あんなとこへ行くことにならう  
たア、夢にも思つてなかつたんだからね」

「あたしもね、あんまり思ひがけないから、初  
は他人の空想だと思つてたくらゐですよ。さう

したら、聲を聞いたら紛ふ方ない貴方なんでせ  
う、嬉しくつてね、すぐ飛び出して行つて抱き

つきたくなつちやつた……」

「さうかい、僕はまたそんなことア夢にも知  
らないからね、慥に脱ぎつばなしにしたい筈

の下駄が、ちゃんと直してあつたりして、可怪  
しいとは思つたんだが……」

「あたしはもうてつきり警察を出しぬいて、貴  
方に足を取られてるんだと思つてたから、有難

は貴方だと思つて、内々敬服してゐたんですよ」  
「成程ね、そこは争はれないもんで、どこまで

も活動式に考へて、僕を名探偵にしちやつた  
わけだね。それで、敵ながらも天晴と云ふんで、  
足駄を直して置いてくれたのか。君もなか／＼  
芝居氣があるんだね」

「いや」

と、生真面目に「實際嬉しかつたからですよ」  
「さうかい」

信之もしみ／＼として、「然し何しろ不思議  
だ。神佛のお引合せとでも考へるよりほかに

考へやうがないくらゐだ」  
「ぢアお不動さんのお引合せでせう」

「うん……」  
と頷いた信之は、(いや、寧ろおもんのお引

合せだ)と云ひたいところだったが、何も知ら  
ない普烈の前を、口を噤んだまゝ、ちよつと思

ひを、氣の毒な、然し勇ましい女の身の上へ走  
らせたのだ。

(どうしてみんなかういふ人ばかりなのだら  
う！)

人の世が、彼の前に、明るく微笑んでゐた。  
六

目頃から信之は、自分をえらい人間だとか、  
大した男だと思つたことはなかつた。たゞそ  
んなに悪い者だと思はないだけだつた。ひとに

は、つまらないことで嘘をつく場合もないでは  
ないが、自分自身に對しては、決して嘘のつけ

ない正直者だと思つてゐた。時には正直を通  
り越して、小心者と、寧ろ可笑想に思へること

さへあつた。殊に、感情の素直さは我ながらい  
ぢらしいくらゐに無邪氣だつた。人心の美し

さに出逢ふと、すぐ涙ぐんで了ひ、世の中が急  
に晴々と明るくもなつたやうに嬉しがるし、ほ

んのちよつとした惡意に預かされると、忽ち  
人嫌になつて、さうしく黙りこんで了ふよりほか、

角も槍も出せない蝸牛だつた。その、あまりに  
他愛なく嫌いだし、めいり込で了ふ具合が、

自分ながら安つばいものに感じられた。まるで  
日向に擲り出してあるボール紙みたいだ、と、

さう自分で自分の惡口を考へるのだった。ちよ  
いと目に晒されまゝ、すぐペコンと反りくり返

るし、さつと水がかゝつたばかりで、じつとり  
濕つて了ひ、少しひどい雨にでもあへば、ペト

ペトに性も張りもなくなくなつて破れて了ふ。  
さう云ふだらしのなさ、怪へ性のなさは、我な

がらつく／＼、實れにも氣の毒にもなるらゐく  
ものだった。が、いかに實れでも氣の毒でも、

それが彼の生得の性分だつた。そしてそれは、  
安つぽくはあるが、――従つてちつとみつとも

んな風に「運命」を觀じてゐる者はないのだ。口には、俗僧も稱へるけれど、實感として心にそれをもつてゐるものは甚だ稀だ。が、事實釋迦の謂はれた通り、誰が明日の日を待つことが出来る。而も、情むべからざるを情むのが、人の性情だ。そのおかげで、人は自棄から追れる。懶惰から救はれる。厭世から放たれる。そして、その代りには、感謝を忘れる。自らを大切にする心を失ふ。惡徳はすべてそこに種を印す。誰か、その日々を、一特別の恩典で、繰に免れてゐる二日だと觀じる者があらう。

さうさせないところが、燕愛に充ちた自然の詐欺で、たまさかさう感じてゐる者の心の美しさこそは、肚から笑つた自然の耀でなければならぬ。

信之は、その耀に撃たれたのだ。己の「明日」をも知れない「死刑」であることを思ひ出させられたのだ。そして「人殺し」の前に、我身を恥しく感じたのだ。——二人の、大きく睜いた眼から、涙が止め度もなくぼろ／＼と零れ落た。

細君の朋子には、良人の連れかへつた人間が、鬼のやうに感じられた。彼女の心配と恐怖との前に、信之は、平身低頭してたゞ／＼頼み入る

よりほかはなかつた。

共同水道から飲み、掃溜から食つて過した五日間の後を思つて、時間もとらず、腹にもきはらないコオン・フレクスに牛乳をかけて食はせた。上等の葡萄酒をぬいて飲ませた。それから、湯に入れて信之の浴衣を着せた。脱ぎすてたものは、云ふまでもなく血に汚れてゐた。それらは、信之自身で風呂敷包みにして、書齋に持つて來てから、やつと少しは落ついた手持で、煙草に火をつけ、葡萄酒の盃を取り上げた。

「有がたう、いゝ手持になりました」

浴衣の袖で耳の穴を拭きながら、やがてそこにはいつて來た普烈は、たゞ何事も無い泊客のやうな、ノウ／＼とした顔つきをしてゐた。

「注がうか」

ボルドウの古酒の瓶をとりあげて、信之も、仲のいゝ友達を迎へた主人の手持で云つた。

「えゝ、もう一杯御馳走になりませう」

「腹はどうだい」

「まだ食へるけれど……」

「でも、さういちどきぢアいけまいから、二三時間してからパンでも食ふかね」

「えゝ、……飯が食ひたいな」

「飯はどうだらう。お粥でない」と無理ぢアない

かね」

「なアに、掃溜なんてものも、あさつて見るとあれでなか／＼御馳走がありますよ。絶食のあとほどに用心する必要があるまいと思ふんです。構はないから、飯を食はしてくださいな」

五

その調子は、寧ろ忘々しさうだつた。腹をすかして、氣むづかしくなつてゐる子供を丸出した普烈が、この上もなく可愛いものに感じられて、信之はニコ／＼と頷いてみせた。

「ザア、何か御馳走を頼んで置かう」と、女中を呼んで、食事の支度を云ひつけてから、……然し實に不思議だつたね。あそこに君がゐようとは、まったく偶然中の偶然だね。一體どうしてあんなところに行つたんだい」

「……なんとなく足が向いちゃつたんですよ。……初に氷川神社に飛び込んだちまつただけで、どうもあんまり近間で、落つかない氣がするもんだから、谷町の通りへおりて行つて、とても賑かんで、こいつアいけないと思つて、すぐ市兵衛町の方へ上つて、ブラ／＼してゐるうちに夜が更けて來たから、丁度通りかゝつたあの寺の縁の下へもぐり込んだちまつたんです」

「あゝ、それぢやア初晩からずう／＼とあすこ

ぶり附いたんです」

「無論右の手だね？」

「さうです。いや、さうぢアなかつたかな、……」

何しろ、毒藥をもつて來て、拳銃を擲り出さなければ、これを飲むと云つておどかしただんすから……」

「ふーん、それで？」

「それで、おやぢが、ちよつとひるんだところを、いきなり僕が跳びかゝつて……」

「突いちまつたわけだね？」

「えゝ、さうです」

「それでも、良心に咎められるかねえ」

「良心だかなんだか知りませんが、兎に角可憫な氣持ですよ」

「それア無論いゝ氣持はしまいけどさ、まごまごして、ア自分の方がやられちまふ場合としたら、どうもそれよりほかに仕様がなかつたらうぢアないか。さうとすれア……」

「いや、こつちが殺されるまでも、殺すといふことはいゝ氣持のものぢアありませんよ。それも、普段から、仇かなんどのやうに憎い／＼と思つてたんならまた別でせうけれど……」

「ぢア君は、死んだマッケンセンに對しても、心から惡かつたと思つてゐるんだね？」

「それアさうですとも」

「で、夫人の方は、全く君にやアどうして死んだんだか分らないのかい？」

「えゝ、先刻も云つた通り、眞つ暗闇の納戸から連れ出さうと思つて、抱き起さうとしてゐるうちに、ドスンと拳銃が鳴つたんで、何が何やらさつぱり分りません」

「ぢア夫人に對しては……」

「それだつて無論、あたしから起つたことですから、直接引金を引いたのが誰の指だらうと、咎はあたしにあるんです。あたしのために死んだんです。あたしは……、あたしは……」

云ふうちに、一釋漱しくしゃくしゃあがたと思ふと、ワツと圓卓に泣き伏して了つた。

# 八

信之はものを言ふことが出来なかつた。が、今度は涙は出なかつた。ほんの少しだが、感情的すぎると云ふやうな氣がしてゐた。それほどに思ひつめた女なら、何故その場を去らず自殺して了はなかつたんだ、今になつて、そんな、メソ／＼泣いたりして……、不思議に高く吊りあがつて了つた心には、さう云ふ非難めいた考へさへ浮かんで來るのだつた。

「すんで了つたことは仕様がな……」

愛する女の死を悲しむ、たゞそれだけの感情として、然し信之も同情をもたないわけではなかつたから、優しく云ひ慰めて、一生死のことは、いかにぢたばたして見たところで、結局どうにもならないのもんだと思ふよ。諦められまいが、その内には時間が諦めさせてくれるだらう。

それよりは目前の問題だね、君がそれほどまでに自分で自分を責めてゐるのなら、もう誰からも文句を聞かされるところはないんだ。自分で自分を責めることを知つてゐる人には、神様だつて罰を與へようとはなさらない筈だ。然し世の中の制度は制度だから……」

「えゝ、自首します。必ず貴方に御迷惑をかけるやうなことは……」

「なに云つてゐるんだ！」

思はず信之は、語氣を荒く、「自分の迷惑なんぞ考へてゐるくらゐなら、誰が君を連れて歸つたりするもんか。第一、初手つから交際やアしないや！」

「いや、さう云ふ……」

「僕は何も、君を自首させようと思つて連れて歸つたわけぢやアないんだ。一應さう云つて勸めてみるくらいのは氣はあつたかも知れないが、もし君が、法律の制裁なんぞうけてたまるもん



なくもあるが、然し決して恥づべきことではないと思はれた。立派ではないにしても、悪いこととは思へなかつた。人格的にじり／＼と大きくなつて行くよりほかに、その點だけをどうかうしようとするのは間違つてゐる、却つてよくない結果になる、——さう思つて諦めてゐた。いや、寧ろ、永く保存したいくらゐの殉情主義もないとはぶへなかつた。

初心な感情、——それは信之にとつては、上品な、愛すべき美點と考へられた。殊に同業者たちの、涸渇した、冷靜な感情のなかにあつては、それは、いつも必ず坊ちゃん扱ひをうけ、馬鹿にされるにきまつたものだつたが、それだけに一層自分一人の私な喜びは深かつた。みんなが、くだらなく磨り減らして了つた寶玉を、自分一人だけは、いまだに大切に護り保つてゐる、——そんな氣持で、平氣でひとから變人扱ひをうけ、小馬鹿にされ、仲間ッばづれにも甘んじてゐた。

いま茲にも、彼自らの謂ふところの「ボール紙」は、強い日射のもとに、ペコンと反つくり返つてゐたのだ。

（さう云ふいゝ人たちが、……一人は、くだらない坊主にひつかゝつて、みじめを見たり、一

人は、法律によつて罰せられなければならないのだ！）

義憤とも云ふべき腹の底の煮えくり返る思ひが、急に信之を捉へた。この青年のために、飽まで法律と戰つてやらうと決心した。まだ一度も刑事の事件を引受けたことはないが、よし！一生一度の大辯論をやつて、どうにでもして無罪にしてやらなければ氣がすまない！——これも例の單純な感情から、信之は、一瞬にさう思ひ込んで了つたのだ。

「で、何かい、君は、悪いことをしたと思つてるかい」

突然のへんな質問に、普烈は、その意を汲みかねて、眼をパチクリさせた。

## 七

「……悪いことつて……？」

「つまり、君の氣持はいゝのかい、悪いのかい。すまないと思つてゐるのか、それとも……」

「それア、無論悪いことをしたと思つてますよ——「どう云ふわけで？」

「だつて、人を……」

然し、若し君がさうしなければ、反對に君の方がさうされてゐたかも知れない場合ぢアなかつたのかい」

「それアおやぢは、眞正面から僕に拳銃を差しつけてゐましたよ。僕は、こいつア所詮はやられるかな、と思つたんです。現に、シヤツの胸をあけて、立派に覺悟をませてやつたくらゐです。尤もなんか體に着いてゐるとやられる場合でも、素裸になると、大抵腹胸の据わつた人間でも、ちよつと手が下せなくなるもんだつて

え話ば、前から聞いてたことがありますが、覺悟をみせたと云つたんぢア、少し立派すぎるかも知れませんが、でも、その氣持だつてまるツきりなかつたわけぢアないんです。そのくせ、一方にはまた、さうして見せたら、よもやぶツ放しはしまい、と云ふやうなこすい見もあつたに違ひないんですから、……その證據には、うまくいさア、あべこべに相手を突つ殺してやらうと思つて、ちやんと短刀差つて用意してゐたんですもの」

「用意してゐたとは……？」

「ズボンのなかで、しつかり柄を握りしめてゐたんです」

「さうしたら？」

「いつまでも撃ちアがらない。随分永いこと睨み合つてたやうな氣がしますが、そこへ與嶋公が飛び込んで来て、いきなりおやぢの腕に武者

向つて、食事の用意に心を使つてくれとまで頼みかたで、女中まかせにして置いたので、ほんの有合せのお物菜だつたのを、山海の珍味でもあるやうに、舌鼓をうつて食べるのを見ては、信之も思はずほろりとなつて、ついそんなお世辭めいた言を云はずにはゐられなかつたのだ。

「いゝえ、御馳走さんでした。うまかつた。ほんとに、こんなにうまう飯を食つたことはめつたにない」

嘘でもお世辭でもなく、普烈は喜んでゐた。信之は、もう一度抱きしめたいほどの哀憐の情に涙ぐんで、

「それアよかつた！……ぢアまア、なんにもおがずがなかつた代りに、煙草のうまいのもやり給い」

さう云つて、日頃から道樂の歐米舶來の巻煙草を五六種、鑑ごとそこへ積んだ。

「貴方は葉巻はあがらないんでしたつけれ」

「あゝ、生憎葉巻は切らしたな」

「いゝえ、僕はいゝんですよ。ぢアこいつを一本頂戴しませう」

と、ロンドン・ライフに火をつけ、一二服すばすばやつたが、苦い顔をして、そのまゝ灰

皿にこすりつけて了つた。

「駄目です、強くつて。矢つ張りこの方がいゝや」

さう云つて、接待煙草を入れた銀の箱から敷島を摘みあげた。

# 十

マッケンゼンの常用品でも誤魔化してゐたのだらう、よく普烈は飛切り上等の葉巻をふかしてゐた。さうでない場合でも、エヤシツプとか

バツトとか、必ず兩切の強いやつばかり用ゐてゐたのに、急に敷島を選ばうになつたのは、

榮養の衰へた上に、五日間煙草にありつかなかつたための結果だつた。

「ひどいもんですね、苦くつてとても吸つてゐられませんよ」

それをぶつて、自分で感心してゐた。

「うちで二三日養生してから行つたつて構はないやうなもんだけれど、それぢアあんまりお上を恐れないやうで、裁判官の感情にもいゝ影響は與へまいし、君だつて體を樂にもつた揚句だと、却つて辛みにきまつてゐるから、ひと思ひに明日の朝行つちまふんだね」

「えゝ、さうしませう」

ふと、普烈は寂しく眼を伏せて、「考へてみれ

ア、さんざ良くないまねをして来たんだから、ちつたア悪い報いもなくちア、天罰が恐ろしいや。監獄に行くくらゐのことですむんなら、あたしは却つて有難いんですよ。お袋は、どうならうとあたしのことなんだ。ちつとも氣にかけ

てくれるやうな人ぢアなし。ちつとも構やアしないんだから……。たいね、生きてるのか、死

んぢまつたのか、それさへ分らないんだけれど、あたしが十三の年齢に獨逸に歸つちまつたバ、

が聞いたら、きつと悲しがつたり腹を立たたりするだらうと思ふんです。それだつて……。謂

はばあたしは、天にも地にも一人ッぽつちみた

いな人間なんだから、與禰公が死んぢまやア、監獄にゐようとどこにゐようとおんなじニツてさ

ア！ そんなに心配してくださらないでも平氣ですよ。よしんば十年ふんづかまつてたつて、

まだ若いんですもの。出て來ても、やつと三十一だ！ 今の貴方よりまだ五つも若いんだもの、

なアに平氣でさアね」

「さうだとも、さう思やアなんでもありやアしない。心氣よく行つて、誰よりも一番快調に働いて、氣持も體も、うんと一つ丈夫になつて來るんだね」

「えゝ、ちよいと悪くありませんね」

か、と云ふやうな氣持で、飽までも逃げ隠れる決心だつたら、それもよからうと思つてたんだ。決心の強きによつては、大いに賛成するくらゐの氣でゐたんだ。なんぼ僕が裁判所に縁のある人間だからつて、警察官ぢやアあるまいし、無理やりに君に自首させようなんだア決して思つてやしないんだからね」

「すみません、僕だつて何もそんなつもりで云つたわけでも……」

「それア無論さうだらう、ほんの挨拶のやうな、輕い意味で云つたんだらう、それア解つてゐるが……、然し、今も云ふ通り、君が飽まで逃げ延びてみせるつて氣なら、少しも遠慮は要らないんだから、さうし給いよ。要するになんでも構はないから、君の思ふ通りにするのが一番いいんだ」

「いや、自首して出ます」

「それが一番いいと思ふかい」

「えゝ、逃げ歩いてる苦しみは、もうこの五日間で澤山です。こんなことが一生續いてたまるもんですか」

「さうかい。それだけ解つた話なら、何より結構だ。ぢや、明日の朝僕も一緒に持つてあげよう。もう犯人は君ときまつて了つたんだから、

一件書類も検事局に廻つてと思ふし、監視廳へ行くより、いきなり裁判所へ出頭した方がいと思ふからさうし給いな」

「えゝ、どうでもいいやうにやつてください」

「それから、公判になつたら、僕は何を指いても辯護に出るがね、豫審中には、なんでも構はずどん／＼正直に喋つちまひ給いね、その方が却つてあとがやりいゝんだから」

## 九

そこへ、食事の支度が出来たことを告げに、女中がはいつて來た。

「お茶の間の方へ行かなくちアいけないんですか」

と、普烈は、やゝ當惑顔をみせて云つた。

「なに、いゝとも、こゝに持つて來て貰はうか」

「ぢア、さうしてくださいな、どうもいろ／＼我儘ばかり云つてすみませんが……」

「なに、……ぢアね、お氣の毒だけれど、こつちへ迎んでくれないか」

「はい、かしこまりました」

「あ、それから、奥さんはどうしたい、もう寝ちやつたかい？」

「いゝえ」

「ぢア、こちらは少し暖くなるかも知れませんが、お先におやすみなさいつて……。それから、御免かうむつて、お體もこゝに持つといでな、俺がお給仕をしてあげるから」

「はい」

やがて食膳が運ばれて、飛びつくやうに普烈が箸を振りあげ、三ぜんの飯を食ひ終るまで、側で信之は、豫審庭の模様などを詳しく聞かせ、自分の友達に森と云ふ判事があるが、うまくその男の番に當つて、調べて貰へるやうだと都合がゝが、などと云ひ出した。食ふことに氣を奪られて、然し普烈には、それもよくは耳へはいらない容子だつたが、最後に、御飯茶碗に一杯なみ／＼と番茶を飲み終ると、

「あゝ、食つた／＼」

と、胸を張つて反り返り、なんの屈託もない人のやうな、幸福に満ちた微笑を浮かべて、「さアもうこれで、矢でも鐵砲でも持つて來いだ！」

「山の手は店屋の仕舞ふのが早いから、なんにも確なおかずがなくなつてお氣の毒だつたね、好き自由に取りれる晩餐の、これが當分のお別れと思へば、どんなにでも御馳走してやりたかつたのだが、すっかり震へあがつてゐる朋子に

もない、と申渡すまでもなく、どつちからもさう云ふ感情はもてなかつた。あまりのことに見かねて、生みの父親の友達が四五人かたり合つて普烈を引とり、面倒を見てやることになつたが、それもほんの半年かそこらで、とても手におへない子供だと云ふことを、つく／＼と彼等に思ひ知らせるだけの結果に終つた。いつそ獨逸に送つてやらうか、との案も纏まりかけたのだが、それは普烈の方で、惜げもなく御免かうむつて了つた。

伊勢崎町のある街角に出る一品洋食屋が、おかれとその内縁の良人との近頃の營業だつた。そして普烈は、十五の年齢から今日まで、「不良少年」を職業として、自ら食ひ、自ら着、自ら仕んで來たのだ。時にそれが押入の中や、縁の下だつたにもせよ……。

## 十二

「態々逢つてみてくだすつたところで、とても無駄なこつてさ」

囁んではき出すやうな普烈の言葉の裏には、然しどこともなく儚い希望の響が單つてゐた。お坊ツちやん育ちの二十一ならば、まだまだたまには駄々の一つもこねてみたい年比だと、二十五で母親を失つた信之には、その裏の心持が、

我身に思ひ合はされて、しみ／＼涙みとれたのだ。一つにはまた、いかにして普烈が不良少年の群に投じたか、それを公判廷で聞く折の參考にもと、最近是非とも母親を尋ねて行くことに心をきめ、町所を訊いて書きとめて置いたりした。

その晩、既に敷いてあつた自分の寢床をも二階の客間に移させ、普烈と枕を並べて横になつたのは、もうかれこれ一時近かつた。久しぶりに柔かい布団の上で、ノウ／＼と手足を踏み延ばすことの出來た普烈は、二言三言ものをぶつたと思ふうちに、忽ち人きた射をかき始めたが、却つて信之は賦つかれなかつた。取とめもなくいろいろなことが考へられた。死ぬ間際には、誰でもが一生を振り返ると云ふが、殆どそのやうに、舊い新しい記憶が、あとから／＼と、終りのない線を繰出した。いろ慾に係りのないといふのは稀だつた。

(可成り俺も浮氣もんだなア)

さう思はずにはゐられなかつた。絶え間なくそれからそれへと渡つて來たばかりでなく、一時に三四人の女と逢つてゐて、どれへもそれに適はしい愛情を注ぐことが出來た時代も往々あつたのだ。さうぶふ記憶にしてからが、然し少

しの自責も感じられなかつたばかりでなく、寧ろ微笑ましく、輕い愛情の情を禁じ得ないくらいのものであつた。願ひれば、どの女にも溺れてゐた、逢つてゐた。それ故にこそ、記憶は微笑ましい哀憐に潤ふのだつたが、その癖一がに、彼は夙くから女性崇拜の傾向を失つてゐる男だつた。いまだ嘗て、男性を凌駕するほどの女性と云ふものが、世に存在したとは信じなかつた。

これを云ひ換へれば、さげつきりに頭があがらないやうな女には、一度でも出逢つた覚えがないのだつた。どんな女だらうと、女ならば、自分より一段劣つたものと観じて、決して誤りのないことを信じてゐた。夙すぎるほど夙く彼に迫つたこの幻滅のあとでも、而もなほ戀愛をやり、女を小馬鹿にしきるやうな精神に育たせなかつたところが、靈妙不可思議な自然の巧だと思ふよりほかはない。大勢のなかには、一旦の幻滅のあとで、決して同じ夢を繰返さうとは思はなくなる性分の人もあらう。けれども大體から云へば、どんな幻滅だらうと、人生では、それが叫喚もと三寸の然さだ。人生では、夢から覺めて、もう決して眠るまいと思ふのも夢なれば、夢だつたかともう一度枕につくのも夢で、白日を頂き、大地を踏んで、我こゝに立



獄中に評判がたつくらる茶目で、活潑な青年としての自分を思ひ描いたのだらう、普烈は、

「監獄なんて、きつとそんなに可厭なところぢやありませんよ。ひよつとすると、娑婆より面白いかも知れない」

「それア大きにそんなことかも知れない。……それから話は別だが、いくら君に冷淡だつて、君の阿母さんも、今度ちつたア心配してなさるだらうぜ。先達から、無論刑事は張り込んでるに違ひないし、何かの新聞にも、おきまり文句ぢやアあるが、誠に心配でたまりません、と涙ながらに物語つた、つて云ふやうな記事も出てゐたからね。その内一遍面會に来て貰つて、君のさう云ふ元氣のいゝとこを見せてあげるんだね」

「元氣がよけれアイゝで、あの通り圖々しいんだから、なんて云ひかねない婆さんですからね。でも、彼方で逢ふつて云つたら逢はせてください、さう云ふ手續きをしてやつてください」

「僕も一度逢つてみようよ。これまで君の話の通りだつたとすれア、この際ちつと心を入れ變へたつていゝと思ふからね。この雨で、かたまる地面ならかためた方がいゝからね」

## 十一

普烈の生母、西山かねと云ふのは、小學校さへ満足には卒へず、殆ど智徳の教養をうけたことのないやうな、程ヶ谷在に生れた田舎娘が、丸ぼちやの色白と云ふだけを取柄に、收入のいゝ代りには多少とも人選のやかましい横濱のホテル奉公に住込んでゐた間に、宿泊中の獨逸人に弄ばれ、身重になつたのを、幸ひその中年の紳士がわりに生眞面目な人だつたおかげに、一時相應の家にかこはれてゐたこともある、謂ふところのラシャメンがその前身なのだ。腹の子は流産して了つたが、どこか氣に入るところがあつたと見えて、ほどなくブローカーのやうな仕事を始め、日本に住みつくことにきまると、山手にうちをもち、そつちへ一緒になつてからは、殆ど奥さんと云つて差支へないほどの待遇をうけたが、然し遂に表面の結婚はしなかつた。

その後三年ほどして生れたのが普烈だつた。一家はいよく幸福に満たされたが、そこに、どうしても歸國しなければならぬやうな事情が出来て来て、急に獨逸人は、後事を友人に託し、永くも一年かそこらの豫定でたつて行つた。

ところで、性の誘惑に對しては、少しの抵抗力もないおかねだつた、寧ろ抵抗すべき何等の

理由をも考へられないやうな、無智な、從つて邪氣なあたまでもつた彼の女だつた。うちの臺所を預つてゐた四十男の、なんのけもない醜男に、易々と身を任せて了つた。そのくらゐだから、きちんと留守中の所帯が張つて行けるわけはなかつた。どれが女中で、どれが主婦なのやらわけがわからないほどの亂脈を極めた家庭に、早熟な普烈の、春期發動が、一層はやめられたのだ。

後事を託された女達の、一應の忠告などが用ゐられさうな筈はなかつた。狀態があらさまに報告され、二三度の往復のうちには、最後の月ぎめの送金と一緒に、手切れの金が届いて來た。そのためばかりでもなかつたらうけれど、留守を預つてゐた二三人の事務員達も解雇されて、或るアパートメントの二階で扱はれてゐた店の仕事も、それきりに鎖されて了つた。

一家解散の時が來た。云ふまでもなく普烈には、生みの母親や、その亭主然と構へてゐる舊のコックは、少しの權威も持ち得なかつた。醜男と憎惡との眼差しでジロ／＼と見てゐるこゝろを供へてやらうと云ふ氣などが、どうして一人の心に起るだらう。改めて、親でもない子で

## 公判廷

偶然にも、豫審は、信之の親しい友達である森判事の受持ときまつて、自首して出た當日から、審理は滞りなく進捗した。犯人の自白は、至つて素直だつたし、それに證據にも缺けるところはなかつたから、案外早く片づいて、八月の十八日が公判と云ふことにきまつた。

辯護士會館で、羽織をぬぎ、薩摩上布の上から法服をはおつて、唐扇をもつただけの、フオロオ一つ提げずに、控室の方へと信之は足を運んだ。十時を少し廻つた暑さは眩めくばかりだつた。四五日来、どうしたのか、胃にこだはつてゐるものがあるやうな氣がして、毎年夏には大して負けない性分なのだが、殆ど普段の三分の一しか食べられなかつた。陽の色を見てさへクラ／＼として、目があいてゐられないほどの衰弱も、その減食のためだらうと思はれた。半眼に渡りの石燈を見おろし、彼方から來る人々をたゞ景繪のやうに黒く眺めながら歩いて行くより外なかつた。目の前に、自分の踵毛の組合されてゐるのが、にじんだ墨のやう

に見えた。

「藤代さん」

女の聲で呼びかけられた。右手の廣場を横ぎつて、白地に露西亞風の更紗を薄く置いたボイルの外田着を裾短に着た岡島鈴江が、大跨に近づいて來た。正月、普烈を紹介するための訪問以來、絶えて久しい對面だつた。大して知りたいことでもなく、——それくらゐだからつい今もつて普烈に尋ねる折もなかつたのだが、あの、ゆすりの種に使はれた手紙に就ては、鈴江も承知の上から、さうでなくても薄々は感づいてゐた仕事だらうと思はれたのだ。さう云ふ、いかにも女らしいだらしのなさに、可なりの不快を感じた信之だつたが、半年あまりも隔てゝは、忘れれるともなくその實感から遠ざかつて、淡い懐かしみすら覺えたのだ。

「ヤア、暫くでした」

と、人なかにだけに、いくぶん言葉も取りつくるつて、「どうです、その後は？」

「どうも大へん御無沙汰しちやひました。皆さん、お變りありませんか。紀ちゃんたちも相變らず元氣なんですやうね」

わりに子供好きで、以前よく／＼訪ねて來てゐたころ、信之の留守や、來客中の折などに

は、心から面白さうに、子供達の相手になつて遊んでくれた。それで子供達の方でも、いまだにどうかすると、「シゼちゃんどうしたらう、ちつとも來ないねなど」と云ひ出すことがあつた。今も、すぐその子供たちの安否を尋ねられたのだつた。

「あゝ、みんな元氣ですよ。時に君ア、無常普烈のなんで來たんでせうね」

「驚いちゃいましたよ。ほんとに仕様のない人……」

クルリと一つ眼の玉をでんぐりかへしてみせて、「うちにも、随分たび／＼刑事にやつて來られて、いゝ迷惑しちやひましたわ」

「それでも、公判を聴きに來ただけでも、いくらかまだ女達甲斐があると云ふもんだ。一人がい？」

「いゝえ」

ちよいとうしろを振り返つた。葉の茂つた櫻の立木の下に、三四人、何れも、洋装の若者たちが、こつちを向いて立つてゐた。

「はゝア 横濱の不良少年團の總見と云ふわけか」

信之としては、ちつと背のあるもの云ひをした。

てりと叫んでゐるものが、果して寤惚けてゐる  
のでないとは、誰がよく證し得よう。眼を開  
けば悟りの夢眼を閉れば迷ひの夢、人生は  
畢竟長夜の眠りと観じたなら、基督ならずと  
も、釋迦ならずとも、歸するところ、昇天を喜  
びとし、涅槃を證へずにはゐられようか。  
然るに生の悦びよ！ 幻の有難さ、迷ひの  
尊さ！ 生活力の旺盛こそは、現世の執着こ  
そは、信之の守本尊でなくてはなであらう。

### 十三

さう云ふ氣持で裏づけられながら、自分で自  
分を浮氣ものと思ふことは、寧ろ微笑ましく  
らみだつたが、世の中の道樂者の、露骨な性慾  
衝動や、單なる好奇心で色を漁るのと一緒にさ  
れた場合には、面には笑つて済まして、肚で  
は相手を輕蔑しずにはゐられない信之だつた。  
さうかと云つて、女を愛すると云ふことが崇  
高な、人道的の行爲だなどとは、假にも思ひよら  
ないのだけれど、惚れた、好きでたまらない、  
息がとまるほど可愛い、可厭なことはなくなし  
てやりたい、——さう云ふ心持は、決して謂ふ  
ところの助平根性ではないと思へるのだつた。  
好きの度が増せば増すほどに、體の愛撫も強  
烈になるけれど、それと同時に清淨な靈的な

愛情も深められるものだ、と云ふ實感をもつて  
ゐた。順當な戀愛の行程なら、必ずこの二つ  
のものは相携へて、前へへと進んで行くべき  
ものだと思つてゐた。「漸らぬ愛を誓ふ」と云ふ  
やうな言葉もあるが、同じ深さの愛が、三日も  
四日も續くやうならば、その踏み止まつてゐる  
つもの足は、丁度砂丘の中腹にでもあるやう  
に、必ずじり／＼とあと滑りをしてゐるのだ。  
桐の木のやうに、スク／＼伸びる代りに密度の  
疎なるものもあらうし、樗の木のやうに、延び  
は遅くとも硬い質の得られるものもあらうし、年  
齡の老若、性情のさま／＼によつて、世に同  
じ戀は二つとないわけだが、習慣的になつて了  
つたのは別として、眞に愛し合つてゐる二つの  
心が、善き方へ、深き方へ、瞬時たけまらず枝を  
摘げ、根を張らないと云ふためしはないのだ。  
これを、「享樂」とのみ觀じ去るならば、甚だ  
誤つてゐる。獨り戀愛のみでなく、世に生あ  
る限りの森羅萬象が、順當なよき生育のもとに  
あると云ふだけのことを、「享樂」とも「努力」  
とも觀ることは出来ない。はたから見ても、樂げ  
な場合もあらうが、常人の身にとつては、中々  
に辛い時もあらうが、それは茶の花に蝶が舞つ  
たり、喬木が嵐に揉まれたりするやうなもので、

總じて生の營みのうちだ。順當なよき生長を  
遂げつゝあるものは、必ずよい戀をするだらう  
し、よい戀けきた、必ずそのものをよく導き  
延ばすだらう。その反對のものならば、何をし  
たつてよい筈はない。——信之の考へはこれだ  
つた。そのためには、假令人には嘘を言つても、  
必ず自分を偽らないこと、即ち、飽まで己れ  
に忠實であること、まごころもつて生さること、  
——これを金科玉條としてゐた。  
（浮氣ぢアあるが、いつだつて俺は本物だ。十  
ぐりかたまつて了ふ、浮氣でこり性、しぶふ  
やつかな……）  
さう思つて、寢床のなかで、ひとりクス／＼  
笑ひ出した。お澄を思つても、おもんを思つて  
も、甲奴を思つても、幾代を思つても、惡魔ッ  
氣の一番強かつた岡島鈴江の思ひ出でさへも、  
少しもあとへ不快な滓が残るやうな感ではな  
かつた。晴々とした氣持だつた。  
廊下の欄間が明るくなつて來た。作が爽か  
に囁いだした。雨あがりの綺麗に晴れた朝らし  
かつた。軒もやんで、ぐつ／＼安眠してゐる普  
烈の寢顔をちよつとめ見詰めてゐてから、ク  
ルリとうしろ向きになつて、信之は寢つかうと  
した。



ろに擴がつてゐた。

(綺麗だなア、綺麗だなア……)

と、そればかりを思ひ續けた。部屋にはいつて、合歌を使ひ、手早く並べてくれた椅子の上に、誰かの風呂敷包を枕に横にされた。

親しい同業者の誰彼が集まつて来て、醫者を呼ばうかのうちへ電話で知らせようかのと、いろいろ親切に云つてくれたが、信之は、普段に似ない強情を表はして、テキパキと斷りを云つた。彼は、法廷で倒れるまでも、今日の辯論

には、どんなことをしても云ふだけのことを云はないでは措かない、と決心してゐたのだ。

信仰の堅い基督教信者で、日頃から藤代品原の老辯護士、桑木博士もはいつて來た。

「それアおよしなさい、斷然およしなさい。どうせ一度や二度の審理で片づきやアしないんだから、貴方のお考へをお述べなさる折はまだいくらでもありますよ。若し心がかりなら、あたしが聞かいて、あとで詳しく話してあげてもいいし、何しろ今日はお歸なさいよ。それア貴方むちやと云ふもんです」

「有難う」

信之は、青白い頬を赤らめて、「折角貴方がさう仰有つてくださるのですから、お言葉に従ひ

たいのは山々ですけれど……」

「何か、特別の事情でもあるんですか」

「いえ、なんにもありませんが」

と、益々赤くなつて、「どうか、この強情だけは通さしてください」

子供に等しい駄々をこねることを、心に恥しく思つたのだが、その陰には、今日法廷に立つて置かなければ、遂に永遠にその機會は來ないんだぞ、と云ふ豫感が、暗に薄雲のやうに淡々と動いてゐたのだ。たうとう桑木も諦めて、その代り元來自分はこの事件に關係はないのだけれど、信之の附添ひとして、一緒に法廷にはいらう、などと云ひ出した。

「そんなにしてくだらないたつて、大丈夫です」

先輩の厚意に、泪ぐましく動かされて、微笑ひながら信之は、あらぬ方へ眼を逸した。

「今日のあたしは、辯護士ぢやない、看護士だ」

などと、桑木は、ちつとも冴えない洒落を云ひながら、やがて定刻におくれること一時間ほどで、いよいよ開廷を知らせて來た。二號法廷の方へと、殆ど手を把らんばかりに釣り違ひで行つた。

普烈は、前の日信之から届けて置いた仕立鉦

しの久留米緋に、キリリと袴をはいて、常よりは二つ三つ若く、と云ふのが實際の年恰好に、そして學生々々して見えた。被告席の木櫃のなかに立つと、看守がそばから深編笠を取つてやつた。と、氣輕に振り向いて、辯護士席の信之

の方へ、ニコニコと笑ひかけた。いゝからそこへかけてろく、と云つた心持で、信之も頷き返した。それで、素直に、傍聽席の方まで振り向けようとしてゐた首をもとに戻して、椅子に腰をおろした。その活々と然し憤みをもつた態度で、信之は、なかば肩の荷を卸したやうな氣がした。

四

合議室との境の扉がさつと開いて、内海裁判長を眞つ先に、判檢事、書記、司法官試補がそれら着席した。

右手の窓そのの青葉は厚く深かつた。それゆゑ室内の光線は芥すんで、海底のやうな小ぢさ

だつた。近くでミンミンと蟬が鳴いてゐた。廊下の方の扉も明けてあつた。人々が平氣でそこを往き來し、言葉 exchanged してゐた。高い天井に反響して、些細なものの音や人聲まで、モリッモ

リッとなるのも異常しく、風は習とも動かなかつた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。

つた。



「まあそんなことですね」

鈴江は如くなく顔ぢうを笑み皺めながら、「それアさうと、藤代さんの辯護士服を着たところ初めて見たけれど、中々よく似合ひますね。今日は一つ、お手並を拜見できるわけかな」

「生意氣いふと證人に引張り出して、判事にうんと脂をとらせてやるぜ。俺もさう云つてやる、——この女は相澤ぢアなくつて、尻刈しだ。活動種々の詐欺や、古手紙の押賣や、ちよいちよいした悪事はみんなこの女の指金だつたんだつて」

「あゝ、あたしさうだらうと思つてたの、藤代さんがきつとさう思つてらつしやるだらうと思つてたの」

急に眞顔になつて、口の利きやうもいつになくしんみりと、「でもね、あたしほんとに知らないのよ。活動の方は、それアあたしも話を聞いてましたけれど、手紙は、……あれはあたしの留守の間に、勝手に部屋ぢう引つ掻き廻して、盗んでつたんですもの……」

「さうかい？」

事の實否は兎も角として、すぐさう本氣になつて辯解しようとする態度だけで、信之は自分

の言ひ出した言葉を恥しく、同時に相手には氣の毒でならないやうな氣持にされて了ふのだつた。一なに、あの當時こそちよつと不憚な氣がしたけれど、今ぢやもうなんとも思つてやアしないんだよ。ちよいと抑捺つてみただけのことだよ」

「でも、すみませんでした。とんでもない人を御紹介しちまつて」

心からさう思つてゐるらしく、ほんの心持胸をかしげただけだつたが、調子にはきつぱりした響が單つた。

「とんでもない人どころか、僕は大好きになつてたよ。いゝ人ぢアないか」

「えゝ、不良青年だの、不良少女だのつてふはれてる人は、大抵いゝ人ばかりですよ」

「すぐさう圖に乗つちやいけない」

と笑つて、一中にやア君みたいなのもゐるんだから……」

「それアもうあたしなんぞ、金箔つきですもの！ 然しどうでせう、あの人、……終身ぢアないだらうかつて話を聞きましたけれど」

「なに、そんなに永いことはあるまい。……ちよつと失敬するよ。なんだが、急に氣持が悪くなつて來たから……」

胃の腑の重さが、だん／＼と鈍い痛みを件つて、堪へ難くなつて來たのだ。

「あたしも、さつきからどうかなすつたんぢアないかと思つてたんです。いやな顔色をしておいでですよ。大丈夫ですか」

眼をつぶつて突つ立つてゐる信之のそばへ寄つて來て、日が廻るんですか。暑さにあたつたんぢアないんですか」

「なに、大丈夫々々々々！」

さうは云つても、いかにも胸先が苦しかつた。鈴江の仲間が休んでゐる方の中庭に建つてゐる共同便所が一ばん近いな、と思つたまではつきりしてゐたが、あとは恰ビ夢中だつた……

小便所の踏段へあがるや否や、うツと口内いつばいにつきあげて來たのは、例の魚の臍が腐つたやうな、たまらない臭氣だつた。しまつた、と思ひまもなく、チヨコレト色のどろどろした排血が、三和土の上へ落ち散つてゐた。

## 三

鈴江や、彼の女の連の、不良青年たちに援けられて、信之は、辯護士會館の方へ引き返した。藤碧の夏の空が、眼を射るばかりの輝きを失つて、地の厚い布が何かの染色のやうに、吃驚するほど美しい碧さで、顔のすぐ上のとこ

そこには、誰の目にも、すぐ檻のなかの獅子を思はせるものがあつた。而も、一旦諭告にかゝると、吾吐即々理路整然として、一劍霜に凍るが如き斬れ味を見せるのだつた。「シシが八町」などと誂名に呼ばれる所以で、再び開延されれば、この獅子が吼りだすわけなのだ。

「さうですね」

信之は、いかに活氣づかうと努めてみても、神身の沮喪にうち克ちかねた。この上は、ほんの些少な精力でも貯藏して置くよりほかはないと思つて、言葉敷を慎み、控室へ戻らうとする桑木に謝して、廊下の窓下に置き並べられた長椅子に腰をおろした。その時、すぐ隣の長椅子から、口に焦けた廣い額をいかにテラ／＼させ、ゆかたがけの胸をはだけた、四十恰好の品の悪い女が、ぢつと彼の方を見詰めてゐたのへ、びたりと視線ががち合つた。普烈が自首して出た翌々日、横濱石川町のごみ／＼した分り憚り露地の奥に、やつとこのことで尋ね當て、ほんの四五分の對談で、なか／＼腹を立てない性分の信之も、そのしら／＼しい冷淡きはまる態度に業を煮やして、「さう云ふ氣持でゐるんなら、とてもお話は出来ませんし、また無理にしたところで無駄なことだと思ひますから」

と、嘘にしろ、「まあどうぞおあがり……」とも云はれずに、門口での立話を、それできつぱり打切つて歸つて来た、——その母親のおかねだつた。彼方では装の變つた信之を、はて、見憶えのある男だが、と思つて見詰めてゐたのに違ひなかつた。

(やア、有繋に出かけて来たんだな……)

と思ふと、すぐ信之は、一月ほど前の憤慨も忘れて、微笑みかけようとした。が、その瞬間に、むかうでは、慌てゝ顔を背けて了つた。信之は、持つて行きどころのなくなつた笑顔へ、苦々しくも八の字をよせ、胸を屈めて、深く長椅子に凭りかゝつた。ふと、氣がつくと、その容子を、子供に獨特の鋭さで、ぢつと見詰めて立つてゐる十一二の女の子があつた。あくどい色のリボンを巻いた、田舎くさい麥藁帽子の顎へかける護顔を、ぶくりとはしてゐるが、榮養不良らしく蒼黄色い頬から、口へ咬へ、それを舌の先でおもちやにしながら、鼻音で唱歌を唄つてゐた。微笑が、苦々しい不機嫌に變つて行く道程を、すつかり觀察されてゐたと思ふと、信之は、なんとなくその娘が憎らしかつた。自とさう云ふ眼つになつたとみえて、破れ靴の踵で、クルリと背なかをむけて、

「おツ母ちゃん、ねえ、おツ母ちゃんてば……」

## 六

さう呼びかけながら、だらしたく股を割つて、肥つた體をもて扱つたやうに、ぐつたり長椅子に凭つてゐるおかねの膝へ跳びついて行つたところをもつてみると、その子は、普烈の麻蓬ひの妹に相違なかつた。さうは知れたが、信之には、どんな子柄だらうと、改めて顔を見ようとするほどの興味すら起つては來なかつた。そこらを往來してゐる見知りのない人々と全く同じ扱ひで、徒しく視野のはづれに蠢かせて置いた。

ふと、それほど無關心でゐられるものを、親とし、妹としてもつた普烈のために、病苦をおしても刑の輕減に努めようとしてゐる自分と云ふものが、可訝しく顧みられた。目前、その肥つた婆さんが、卒中か何かでぶつ倒れようとも、子供が自動車に撥れとばされようとも、恐らく自ら下手をくだしては、なんの世話をもしようとはしまし。それなのに、普烈のためには、壽命を詰めることをも敢て辭せない氣組で、かうして乗りかゝつてゐるのだ……(考へてみれば、我が儘勝手なもんだ……)この反省はあつたが、然し少しの心苦しさも

氏名、年齢、住所の訊問から、型(かた)の如く審理(しんり)が始(はじ)まる。獨法(どくぽう)を信(しん)ぜよより二年先に銀時計(ぎんけい)で出(で)た少壯俊敏(しょうさうしゅんみん)の内海判事は、厚ぼつたい記録(きこく)の上に、その六尺(ろくせき)近い體(てい)を猫背(ねこがせ)に覆(おほ)ひ被(おほ)さり、一方(いっぽう)の耳(みみ)に故障(こしょう)でもあるか、被告(びょうご)が口(くち)を開(ひら)くごとに、縁なしの近眼鏡(きんめがね)の奥(おく)に鋭(えい)い眼(め)を光(ひ)らせながら、右(みぎ)の耳(みみ)を突(つ)き出した。無精(むせう)の細面(こめ)には、判官帽(はんくわんぼう)がよく似合(にあ)ひ、正面(しょうめん)に青紫(せいし)の反射(へいし)をうける高い額(かぶ)は、いよく理智的(りちてき)に蒼白(そうはく)んで、肅然(じくぜん)として法の威嚴(いげん)を思(おも)はせるものがあつた。

事實(じじつ)の訊問(しんもん)に對(たい)しては、始終(しじう)平然(へいぜん)は、きつはりと、「さやうです」間違(まちが)ひございませんとぶふやうな短(みじ)い言葉(ことば)でばかり答(こた)へてゐた。豫審(よせん)の陳述(ちんじゆ)を齟齬(そご)したところは一箇所(いっくしょ)もなかつた。詳細(しんじゆ)しい説明(せつめい)を求められると、落(おち)つた調子(てうし)で、考(かんが)へ考(かんが)へ出來(き)るだけの確(た)かな答(こた)へをしようと努(こ)めた。たゞ與瀨子(よれこ)に關(かん)することでは、二三度鳴咽(めいえん)のため口(くち)が利(き)けないことがあつた。

「なんと思(おも)つて、與瀨子(よれこ)を食堂(しやうたう)までつれて來(き)んだね」

「怪我(けが)をしてゐると思(おも)ひましたが、暗(くろ)いのでどの程度(ていど)か分(わか)りませんでしたから、……それで、かう抱(かか)きあげまして、……その時(とき)あんまり重(おも)いので吃驚(きつけい)しました……」

「重(おも)いので……?」

「えゝ、眠(ね)つて了(しま)つた子供(こども)が重(おも)いのおんなじで、先方(せんぽう)に抱(かか)れようとぶふ心持(こころもち)がちつともないことが感(かん)じられましたから、これア……大變(だいへん)だ……大變(だいへん)なことになつちまつた、と思(おも)ひまして……」

單衣(さんい)の袖(そで)で、鼻(はな)の穴(あな)を押(お)さへるやうにしながら、せぐり來(き)る涙(なみだ)を、一生懸命(いっしょうけんめい)に嘔(おう)みしめた。

「あすこの廊下(ろうか)の電燈(でんとう)は、ついてゐたか、消(き)えてゐたか」

「はつきり憶(おも)えて居(ゐ)りません。ついてゐたとしても、そこでは、歩(あ)きながらには、顔(かほ)を、……

顔(かほ)を見(み)なかつたと思(おも)ひます」

「すぐ食堂(しやうたう)へはいつたんだな?」

「えゝ、途中(ちゆうちう)は、重(おも)いゝ、とたゞそればかり氣(き)になつてゐたやうに憶(おも)えて居(ゐ)ります」

食堂(しやうたう)には勿論(もちろん)電燈(でんとう)はついてゐたと……そこへ來(き)て、それからどうした?」

「膝(ひざ)に擁(よう)へたまふで、顔(かほ)を見(み)ました。……さうしたら、……さうしましたら……」

子供(こども)のやうに、聲(こゑ)をあげて泣(な)き出(だ)しさうになつた。裁判長(さいばんちやう)は、眼(め)を記録(きこく)に落(お)し、忙(いそ)はしく

頁(へ)のあちこちを繰(く)つてみて、

「よろしい。……一體(いったい)、與瀨子(よれこ)が、マッケンゼン

をお前(まへ)に紹(しょう)介(かい)したのは、いつ頃(ころ)のことかね——それでも、普(ふ)烈(れつ)は泣(な)きやまなかつた。裁判長(さいばんちやう)は、ぼかんとしたやうな顔(かほ)つきを窓(まど)の方(かた)へ向(む)けて、靜(しず)かに外の陽光(やうかう)に眼(め)を休(やす)ませてゐた。その寛仁(かんじん)な態度(たいど)の嬉(うれ)しさに、信之(のぶ)の眼(め)もぢいつと潤(うる)んで來(き)た。

## 五

かやうにして訊問(しんもん)は、一時間(じくわん)二十分(ふん)の永(なが)きに互(たが)つた。熱心(ねっしん)な内海判事(うちみはんじ)の面上(めいじやう)には、さらに疲勞(ひれう)の色(いろ)は見(み)えなかつたけれど、陪席判事(はいせきはんじ)の注意(ちうい)に従(したが)つて午食(ごうしょく)のために少時(せうじ)の休延(きゅうえん)が宣(のたま)せられた。人々(ひと)はどや／＼と廊下(ろうか)に流(なが)れ出した。

「大丈夫(だいじやう)だ!」

と、桑木(くわぎ)は、信之(のぶ)の斜(かた)うしろに附添(つきぞ)ひながら、喜(よろこ)ばしげな調子(てうし)で囁(ささ)いた。「あゝ、ぶ立派(りつぱ)な被告(びょうご)の態度(たいど)なら、大丈夫(だいじやう)だ、安心(あんしん)なものですよ。いくら八田君(やちだくん)だつて、さうひどいことは云(い)へないでせう」

八田檢事(やちだけんじ)は、寸毫(すんごう)も假借(かりか)するところのない、峻烈(じゅんれつ)を極(きよく)めた論告(ろんこ)を以(もつ)て鳴(な)つてゐる人(ひと)だつた。いつも必ず、判事(はんじ)の言葉(ことば)の間(ま)は目(め)をつぶつてゐ、被告(びょうご)が口(くち)を開(ひら)くと靜(しず)に懶(あ)げな薄眼(はくがん)をあげて、斜(かた)右(みぎ)下に、トロリとした視線(しせん)を注(そそ)ぐか、時には、ふさぎつばなして聞(き)いてゐるのが癖(くせ)で、



十二分にこれを備へてゐるものと見なければならぬ。即ち、こゝに犯さざればかしこに犯す質の人間で、いつかは法の制裁に會ふべき過去の動因は決して輕視すべきでない。今回の犯罪の原因にしても、遠くして姦通事件であり、近くしてこれが發覺である。姑く溯つて、この有夫姦の事實を検するに、被害者ジェムス・マツケンゼンは、溫良の紳士であつた。事件發生の一月ほど以前から、兩人の醜關係については、薄々と云ふ程度以上に察知してゐたにも拘らず、堪忍大度、よく憤りを抑へ、屢意を言外に託して妻與彌子に警告するところがあつたのは、豫寐に於ける被告の陳述に依つて明かである。而も被告は、その温情につけ入り、圖々しくも、納戸の押入のなかに起臥し、巧に人目を避けて不義の關係を續けてゐたのだ。その大膽な態度は、全く自暴自棄的であつて、いざと云ふ場合には、相手を殺害するくらゐの覺悟は、平常これを胸に藏してゐたに相違なく、それ故にこそ、身邊必ず兇器を携へてゐたのだ。譬へて云へば、爆彈が導火線に火の點ぜられるのを待つてゐたやうなもので、殺害の意志は、犯行に先だつ旬日から、既に暗々裡に被告の心にあつたものと看做すべきである。

かう云ふ調子だつた。犯行に就いても、主人の不意の歸宅を知ると、こゝにいよく平常の殺意を堅めて、外部から銃の卸してあつた機を自ら蹴倒し、脱兎の如く衝いてかゝつたものに相違なく、その際被害者は、自衛のために拳銃を放つたのだが、恐らくはそのとき既に第一の刃傷をうけてゐたため、手元が狂つて、被告の身にかすり傷さへ負はせることが出来なかつたのだらう。さもなくて、六疊の間で、被告の陳述のやうに、泣ひをさだめてゐたとすれば、舛損じる方が不思議だ。また彌彌子は、良人の危急を見ると、有聲に傍觀するに忍びなくなつて、援けようとし、被告は之の行爲に怒りを發し、且つは、止かして置いては後日發覺の基となるは勿論法廷で不利の陳述をされるだらうとを懼れて、俄に殺意を生じ、犯跡を覆ふために、マツケンゼンの手に握つたまゝの拳銃を擲して、その引金を引いたものだ、と推斷したのだ。

で、結論に於て、これは、二人の人命を、暴力的に奪つたところの殺人だと述べ、而も被告平常の行狀からするも、犯行の直接原因である姦通事件を考察するも、一つとして情狀

の酌量すべきものがなく、最後に自首して出たと云へ、それも他動的で、豫審の陳述には、未だ己を庇護し、法官を許らうとする態度が顯著で、決して改悛の情に堪へないものとは認められない、これ等の諸點からして、無論死刑を求刑すべき案件ではあるが、たゞ被告の年未だ若く、憐愍なる害心と云ふより、思慮分別の不足から起つた事件と見ることが出来ないでもないから、この點を斟酌して無期懲役を求刑すると論告した。

代つて私學出の、若い辯護士が立ち上つた。見珥の貧弱さに似けなく、辯舌はなかく、爽かた、まるで諄諄でもして來たやうに、滔々と述べ立てるのだが、論理は大ぶん曖昧だつた。それはよいとしても、與彌子を毒婦型の女にして、つて、性的に缺陷のあつた良人に代ふるに、無邪氣な、そして健康な被告を以てし、淫慾を恣にしつゝ、宛も傀儡の如くに操つてゐたのだ、と云ふやうな強辯をされたのでは、善烈の不愉快さは、たまらないものだつたに違ひない。信之は目を瞑つて、成可くそれば聞かないやうにしながら、自分の考へを纏めて置かうとかゝつたが、手足が震へるほどの亢奮のために、なか／＼さうはいかなかつた。



感じられはしなかつた。もとく彼は、普烈のために、努めていゝことをしてゐると思つてゐないので、自分がさうしたいからするだけの話だつた。善事の名に從つて、公平を期しなればならないやうな、さうぶ理解せぬの心持では決してなかつた。それにしても、つい手のとぎさうなところにある親きやうだいいは、漢もひつけないほどの冷淡さで、たゞ一筋に、常人の上にはかり心を使つてゐるのが、我ながら、不思議と云へば不思議な氣持だつた。

やがて被告が、再び腰繩で牽かれて來た。と見ると、母親は、娘の手をとつて、のこゝと側へよつて行つた。

「それみなさい、云はんこちやアないんだ。今度と云ふ今度こそ、親不孝の罰を思ひ知つたらう、この馬鹿野郎奴が！」

蒼黒い頬の肉を、ブル／＼と震はせて、おかねは可怕い口つきをきつと深編笠に射つけた。

「可憐い、と云つたところで、幾歳になつても生の子ならば、これを可怕がらない筈はないと信じ切つてゐるやうな、めえですよ、めえですよ」あの目つきに外ならなかつた。

編笠が正面に向き、ちよつと足が停まりかけたが、すぐスタ／＼と室内へはいるなり、普烈

は、被告の席に泣き崩折れて了つた。看守に手傳はれて笠を取つてからも、兩手にしつかり鎖を拖うて、——いづぞや信之の書齋で洩したところの、厚い革でも締めつけるやうな、ゲツゲツぶく歐歌泣を續けてゐた。鏡に映すやうに、そこに波打つ氣持が、信之の胸へも映つて來た。それ故、不躰な母親のやり方に對しても、少しも腹は立たなかつた。——と云ふのは、人一倍勝氣な普烈として、勿論口惜しさは勝が九転する思ひに違ひないだらうけれど、たゞそれだけの簡單さではなかつた。有合せの言葉で間に合せれば、「萬感交至」と云ふ氣持で、記憶を生じて以來の、喜びも悲しみも、恨みも懷しさも、愛憎も情適も、ありと有らゆる心持が、大きななねりにもちあがつたと思ふと、忽ちどツと岩へ打ちつけ、飛沫をあげて碎け散つたのだ。子が親にもち得る限りの感情を、一つ残らず、一瞬間に噴きあげた火柱なのだ。

（泣け／＼、泣け／＼！）そのなかでお前の靈魂が丈夫にされるんだ、堅くされるんだ！ 泣け泣け、もつと泣け／＼！）

信之は、心のなかでさう叫び續けてゐた。再び開廷された。大きな風呂敷包をといて、

## 七

黒褐色に血塗られたさま／＼の證據物件が、机の上に横けられた時には、傍聴席は一時にざわめき立ち、うしろの者は延びあがるやうにして眺めやつた。人ひとりの命を斷つた短刀は、豫審の陳述によつて、氷川神社の縁の下から發見された鞘にをさめてあつた。拳銃は血に錆びてゐた。與彌子がそれから床を仰ぐと叫んだと云ふコップも現はれた。紺袴降りの背廣が出て來た。中で最も凄慘をきはめたのは、マッケンゼンのホワイト・シャツだつた。一血痕の附着したと云ふ程度ではなかつた。下着分を、ドツブリ染盡へでも浸けたやうになつてゐた。藤代家の湯殿で、普烈が脱ぎ捨てたのを、人手を借りずに信之自身で風呂敷包にしたシャツやズボンもそこへ示された。——被告は、問の言葉に從つて、一々ちよいと口をあげるだけで、すぐ下を向き、それに相違ない由を答へた。で、調は簡單にすんだ。

いよ／＼、獅子と呼ばれる検事の論告に移つた。まづ、被告平常の行狀について觀るに、その筋の注意人物で、既に横濱の外人殺し事件に際しても、有力な嫌疑者として戸部署の手に拘留された事實もあり、微罪ながら三四の前科もある、金箔つきの不良兒で、犯罪的傾向は

すが、與禰子に對する心持に於ては、一初め相知つた時分には、恐らくこいつ一つものにしてやらう、くらの不良さをもつてゐたでせうけれど、その後だん／＼本氣になり、與禰子の方でも眞面目に彼を愛する心持になつて居つたのでございます。事件の丁度一月ほど前だつたと覺えて居りますが、彼等——被告と與禰子との二人づれで、私のうちに参りまして、離婚訴訟の原因となるべき條件、その手續などに就て相談をうけましたが、その當時彼等は、萬難を排しても夫婦にならうと云ふ堅い決心を、私にうちあけて居ります。本題に關係のないことではございますが、與禰子の籍は、良人マツケンゼンの生國、亞米利加に送られて居りますので、あちらの事情に疎い私には、十分の返答も出来ませんでしたし、訴訟の勝負に就きましては、尙更なんとも豫測いたしかねましたから、有體にそのやうに申し聞かせましたやうな次第でした。然しいよく訴訟の決心がきまつたなら、その手續だけのことなら、自分が引うけて、解らないところは先輩に相談してでも提出してあげようから、遠慮なくさう云つて來るがいゝ、たゞ、どつちみち一年そこらは、無論かゝるものと思はなければなるまい、と、ほん

の一應の、常識的の氣持からですが、多少諒しする氣持を含めて申したのでございます。ところが、その、私のたよりない返事、二人ともすつかり悄氣でしまひまして、與禰子などは、初対面の私の前で、クス／＼泣きだしたりするやうな始末でして、益々私は意外の感にうたれたのでございます。何しろ男は、まだ二十や二十一の、氣持の落つかない、而も名うての不良少年でし、女も、どう云ふ事情からかはまだその當時知りませんでした、外國人の女房になつてゐるくらゐでは、さう清純な娘時代を送つたとも考へられませんでしたので、もつと、ウワ／＼した、寧ろ惡魔は義的な、ほんの一時の出鱈目だらうと思つて居つたのです。で、私は、肇でその眞劍さに撃たれて、深く自分を恥ぢた次第でございます。

# 十

「申しあげれば、まだい／＼の事實もございしますが、たゞこの一事について觀ましても、不良で西山善烈には、立派に心の誠があり、該事件の直接動因たる有夫姦が、必ずしも無賴、破廉恥の行爲ではなかつたことを證するに足ると存じます。

「もとより姦通は、法の禁ずるところであり、

善良なる風俗を害す社會惡の一つであることは、論をまたないのでありますが、これを貫くに誠實を以てするならば、一路精進の道として、當事者にとつては、善惡を越えた、無上の心境と云はなければなりませんし、從つてまた第三者としても、無上正眞の道にいそむ彼等に對して、敬愛の念をい／＼べきだと信じます。とは云へ、法のこれを罰するは當然のことでございます。法に觸るゝところに、精進の一路を見出した彼等には、無謀か、不用意か、意志の薄弱か、教習の不足か、さもなくば強烈な覺悟あつてか、靜に自ら省る時が來たならば、必ず何かしらもの足らなく感じられるところがないければならない筈です。最も立派な場合——嚴のやうな覺悟を以て臨んだ場合ですらも、覺悟と云ふ心境が、それ自體弱者の強みでありまして、決して勇往邁進の決意と混同すべきでないことも、やがては悟らなければならぬ筈です。一國の法が然く掟するならば、これによつて罰せられなければならないのは勿論です、靜觀三省の境には、自の心でも、決して萬全に乗の道だとは考へられないでせう。にも拘らず、憂むべく、悔ふべき至醇無二の誠實あつて存するならば、彼等は既に善惡

「まづ最初に申しあげて置きたいのは……」  
立ち上ると、信之は、まづかう口を切つた。

「被告と私とは、年齢こそ大ぶん隔つて居りますが、友達でございまして、この事件の辯護に立ちますのに、私が必ずしも公平であり得まいと云ふことでございませう。然し、人を裁くにあつて、誰が絶対に公平であり得るかを考へてみますと、正しき裁斷を仰ぐ上から申して、私の位置は、被告にとつてではなく、法廷にとつて、幾分有利であらうとも、決して有害ではあり得ないことを信じて、敢て自らこの事件の辯護を願ひ出たわけでございませう。尚も一つお断り申して置きますが、私は刑事の法廷に辯護士として立ちますのは、これが擧でございまして、一向に慣例を存じません。どうぞ法にかなはないところがございましたら、どん／＼お叱りくださいますやうに、豫めお願ひ申して置きます。

「被告西山普烈は、世に謂ふ不良少年でございませう。實明なる豫審判事の調査にも、可なり詳しく彼の生立は記載されて居るやうに思はれましたから、私から疑くは申しあげません。ただ一言申し添へたいのは、總ての不良少年がさうであるやうに、被告も亦、人の世に誠實があ

ると云ふことを知らずに育つた哀むべき人間の一人だと云ふ點でございませう。餘事を申述べるやうですが、一體不良少年と云ふものは、一種の病人だと考へます。幼時から、ひとの誠實が得られないとか、或は與へられても、何かの理由でそれに觸れられなかつたとか、さう云ふ原因で、遂に全く誠實を見る明を失ひ、世に誠實はないものと思ひ込んで了つた人間が、世に諍ふ不良少年の群を形造つて居るのです。つまり彼等は、誠實に對する不感症、とも云ふべき病氣をもつて居るのです。被告がさやうな性情に陥つたまでの経路は、先程も御審理があらしました彼の生立に就いて考へてみますれば、甚だ明かであると思へられます。

「ところが被告は、マッケンゼン夫人を愛して居りました、熱愛して居りました。これは、この事件に、重なる意味をもたなければならぬことだと信じます。

## 九

「何故かと申しますと……」  
信之もだん／＼氣持が落つてつれて、云はうとしてゐることが、少しはつきりと掴めて來た。一人を愛すると云ふことは、誠實がなくては出来ないからです。何もかう申したからと

て、近頃流行の所謂人道主義とか、親愛衆和とかにかぶれて、「愛」と云ふものに、やたら勿態をつけようとするのではありません。一體私には「愛する」と云ふ言葉より、平俗に「惚れる」とか「好きだ」と云ふ方が好きなのですけれど、法廷の威嚴のために、慥々その嫌ひな言葉を使つてゐるくらゐでして、決してさやうな文學青年じみた氣持から申すものではございませぬ。また、なにも戀愛ばかりが誠實を獨占してゐるわけではなく、憎みにだつて、恨みにだつて、凡そ人が本氣になれる感情には、必ずづいて廻るにきまつた話で……いや、その本氣になると云ふことが、取りも直さず誠實なのですから、いやに理窟はつた倫理論なぞを、こゝでこれく／＼廻さうとしてゐるわけでは毛頭ございませぬ。卑俗な用語をお許し願つた上で申さうなら、普烈は、——いや被告は、本氣で與禰子に惚れてゐたと云ふだけのことなのでございませぬ。

「そんなことが、何故この犯罪に意味をもつか、との御不審もございませうが、それによつて私は、次のやうなことが考へられると思ふのでございませう。即ち、彼を平常の行狀に觀れば、慥に誠實不感症の不良少年でございませう。



日撃者のなかつたことが、被告の不利になつてゐる。と云ふのは、甚だ突然な出来事だつたに違ひなく、その點に關して普烈の答辯のはつきりしないのは、罪を覆はんがためではなくして、全く彼自身にも、本當のことが判らないのだと思ふ。が、彼の語るところに據つて想像すれば、最初、毒杯を仰ぐと云つて、良人の手によつて愛人の胸板に擬せられてゐる銃口を、一時たりとも他へ轉じさせようとした與禰子が、その效を奏しないことを知ると、いきなり身を躍らせて、良人の右腕へ跳びついたのだ。引金を引く意思もなく、手に力がはいつて、第一弾が發せられた。それは丁度この慘劇の開始に、相圖の鈴を鳴らしたやうな結果になつた。すぐ普烈が手もとへ飛び込んで一撃のもとにマツケンゼンを斃す。右腕に武者ぶりつゝゐるた與禰子も、勿論のこと一緒に轉がる。相手が既に抵抗力を失つたことを知ると、普烈は立ちあがつて、兎も角も與禰子を別室へつれて行かうとして、名を呼び、或は抱き起さうとしたのだが、この時あまりの驚愕に、彼の女の精神は朦朧としてゐた。自分が抱きついてゐる體は——良人と、愛人普烈とが混同錯雜してしひ、うしみて來て自分を引き起さうとしてゐる者を、誰か新

しい侵入者と感じたのだ。さもなければ、與禰子が頻と、誰かゐる、誰か來てゐると叫んだと云ふ事實の説明がつかない。それは普烈にとつては、想像するだにたまらない、可厭な、薄氣味悪い言葉だつたに違ひないのだ。それで、一層あせつて、彼の女を、屍體から引き離さうとする、離れまいとする、その最中に第二弾が發射されたのだ。

## 十二

誰の指が、誰の力が、引金に加へられたのか、それは恐らく神よりほかに知るものはない。拳銃をもつた手に、與禰子が武者ぶりつゝゐる、そこへまた、それを放させようとする普烈の手が絡みついて行つて採み合ふうちの出來ごとで、暗さは暗し、全くものゝ拍子と云ふよりほかはないのだ。これを故意による殺人と観るのは、峻嚴と云ふよりも、寧ろ惡意を含んだ曲解である。もしさうとすれば、以後與禰子の屍體を食堂へ運んで行つたりしたことは、なんのためとも解釋のくだしやうがない。尙、その場から逃走したり、自殺を企てなかつたなどの事實は、一層事件が偶發的であつたことを物語するものだ。彼には何等の豫想も覺悟もあつたわけではないのだから、たゞとんでもないことをしてしまつた、と云ふことだけが、ぼんやり考へ續けられるきりで、自分をどうしていいのが見當もつかなくつたに違ひなく、本能的な恐怖からその場を飛び出して、四日の間、あちこちと隠れ歩いてゐたのだ。而も偶然の機會で自分と出會つた時分には、もうすっかり自分の覺悟はついてゐたので、二三の新聞が傳へたやうに、自分が夜通して教訓して、やつと検事局へ同行することを承知させた、といふやうな事實は根もないことである。それについて、麻布からの自動車の中で、またはうちへ歸つてから取り交した會話の内容を、信之は詳しく述べたて、要するに今の普烈は、誰の前にも頭をさげたくつてたまらないやうな、悉く謙虛な心持の人となつてゐる。後悔から、自ら服罪を望んでゐる彼の誠意は、十分に認めてやつて貰ひたい。それは決して嘘ではないのだ。

以上述べ來つた自分の理解に従つて刑期を定めるならば、十年を上越すわけではないと思ふ。なほこの先とも、被告の人となりは、入念に調査して貰ひたい。たゞ一圖に、過去う陽歷に混んで、不良少年と云ふ概念に迷げられ、事件の最初から最後まで一貫してゐるところの、涙ぐましいほどの誠實を見落さないやうにしてや



の彼岸に立つてゐるものと、私は感じてゐます。以上申し述べました如く、私は必ずしも戀愛至上論者ではありません。尙更享樂主義に溺れて居るものでもございません。たゞ人生に於て最も値打高く量られなければならないものが、誠實である、まごころである、と信じて疑はないところの、謂はば「誠實至上主義者」でも申すべき者なのでございます。そして、下品凡骨のわれら如きにあつては、人の世の光りであるまごころを現はすのに、戀愛にでも依るよりほか、なかに精進の退轉を抑へ得ないと思ふところから、我にもひとにも最上の愛をと希ふ心が深いのでございます。

「そこで本論に立返りまして、被告の與彌子に對する戀愛が、果して善惡是非の彼岸に置かれるほど立派なものであつたかどうか、につきましては、種々議論の岐れるところだらうと存じますが、私といたしましては、可なり立派な誠實を、そこに認めないわけには参りません。この點は、檢事の御論告に對して、飽まで異議を申し立てる存念でございます」

こゝで信之は、口頭の彼には、到底思ひ描くことも出来ないやうな、炯々たる眼光を、正面に「獅子の八田」へ射つけた。けれども獅子は、

有名な、いつもの「限り」から、眼を開かうとしなかつた。「もう一點は、犯行の有様について、檢事の御想像が、恐らく被告に對して最初から惡者であるとの觀念をもたれた爲めであらうけれど、甚だしく惡意に満ちたものであつたと感じられますゆゑ、御参考までに、私の想像を申し述べて置きたいと存じます。特に想像と申しますのは、勿論そこにたつた一人の日撃者もなかつたからでして、このことは、恐らく被告にとつて、千載の遺憾ではなかつたらうかと、私はさう感じて居るものでございます」

## 十一

それから信之は、豫審庭に於ける被告の陳述について、心理的な解説を與へた。丁度バラバラにこぼれてゐる球に、紐を通して、一かけの珠數に仕あげるやうに、一つ／＼の事實の間に、一貫した氣持の經過を見出さうとしたのだ。それは、當の普烈にさへ、意識されてはゐなかつたやうな深みへまで、微細を極めて潛入して行つた。惡意の眼、——疑ひが、必ずしも鋭いものではなくて、好意の眼、——信をもつてすれば、却つて思ひがけない捷徑から、ヒヨイと眞實のそばへ出て了ふものだ、とぶふことを思はせるに十分だつた。けれどもそれを

押し進めれば、警察官より、犯人たちに好意をもてよ！惡人を愛せよ！と云ふことにもなつて来る。而も、聖賢としてこれを説かないものは一人もないくらいで、俗耳にさへ、今では較にたかられたほどの感ぜしか與へなくなつて了つたのだ。それほど平凡な常識のつんだのだ。だから、傍聴人の多くは、あの精進上、ちつと甘いぞ、と思ひ、罪を斷じ、惡を罰する法廷に、上御一人の名によつて事を行ふ法官たちには、多少の差はあれ、反感めいたものを感ぜさせた。

信之に従へば、普烈の行爲は、大半正當防禦だと云ふのだつた。押人のなかに人ありと知つたマッケンゼンが、そこに拳銃を携へてゐたとすれば、襖が蹴破られるまでに、それを差しつけてゐない筈はない。銃口を眼前に見、こちらで兇器をもつてゐて、誰か殺意を生じないものがある。殺されるか殺すか、その一つを選まなければならなかつたとすれば、聖賢と雖も從容として前者に就くことは容易でない。まして無謀短慮の普烈が、身を挺して相手を刺したのは、最も自然なことであらう。檢事の論告のやうに、情狀酌量すべきものがないとは、決して考へられないのだ。與彌子の死に就いては、一層

その見覚えのない顔を、信之はちつと見詰めてゐたが、

「一體、あたしはどうしたのです？」

「いえ、なに、大したことでございせんが、出来るだけ安静にしていらしつて頂きたいんです。」

「話もいけませんか」

「えゝ、まあ出来るだけは……」

「さうですか」

ひどくつまらなくは思つたが、強ひて争ふほどの氣持もなかつた。そのまゝ目を閉ぢて了つた。ちつと落つてみると、胃のあたりが妙に重ツ苦しく感じられた。

「さうだ、先刻吐いたんだつけな……」

雖てそれと思ひ出した。抱き擁へられて中庭を過る時に、額のすぐ上に感じられた、青さも青い空の色が、つぶつた眼のなかに美しく擴がつて來た。

ちよつと人聲と足音とが亂れ騒いだ。

「あなた！」

朋子の聲だつた。思はず、兩手を差し伸べた。しつかりとそれが握られた。

「うちへ歸らう」

はつきり眼を睜いて、信之は、一言さう云ふ

なり、また意識が朦朧として行つた。

## 都を離れて

### 一

兩側の店々の明る電燈は、書をあざむくばかり、押し合ふほどの人通りに、ゆかたの白さが青ずみ、白粉は浮び、ものゝ影が幾重にもかさなり動いた。喧返りさうな人いきれたつた。

大阪、心齋橋筋の夏の夜の雑沓のなを、三好

魔夫が、ひとりふらふと、店飾よりも、往き來

の人々の姿態風俗に好奇な眼を光らせながら、

南へ向いて歩いて行つた。鼠竊セルの背廣に

白ズボン、白靴、ちみなネクタイを蝶結びにし

て、革紐のついたケーンを提げたところは、東京にゐた頃よりも、人物は数等立まさつて見え

る。夏やせか、やゝ面やつたものも、年齢よ

りはふけさせて、人なかに出ても、少しは口の

利けさうな若者を思はせた。生活のつかれは、

けれど、なんとなく彼の目の色を沈ませ、皮

膚を脂ぎらせてゐた。

眞つ直に夷橋を渡り、一現茶屋の並んだ裏通

りに切れ込んで、(座の)樂屋口に立つた。幕

間とみえて、大道具の立働く物音が騒々しく響

いて來た。

「満十郎さんはまだゐますかしら」

お辭儀をするにも及ぶまいし、さうかと云つ

て帽子を被つたまゝでもすまいか、と云つた

氣持に裏切られながら、左で麥茶をとり、横撫

に額の汗をハンケチでふきとつてゐる。好を、

どこも無愛想にきまつたやうな、樂屋番の爺が、

じろりと睨据ゑて、

「なんぞ御用だつか」

「えゝ、まだ歸らないんならちよつと……」

「あなたはんは？」

「ちよいとこれを……」

内衣裳を探つて、革の名刺入から一枚ぬいて

渡した。大阪新聞演藝記者の肩書を見ると、

それでも爺は、不承不精ながらも、いくらか

態度を改めた。

「ちよつとお待ちなはつて……」

丁度そこへ通りかゝつた男衆らしいのを捉

へて、部屋への取次を頼むと、役者のお仕着ゆか

たの胸をはだけて、破れ扇子の風を入れた。

「レうもお世話さん」

ゐさへすればもうこつちのもんだ、と、久し

振りに涼しい都の友に逢ふ嬉しさに、ついそ

んなお愛想の一つも云つてみる氣になつた。け

りたいものだ。

滔々一時間に亘つて述べ終り、席についたと思ふと、信之はその腰をおろす動作から引き續いて、すうツと非常な速さで、地の底へ體が落ち込んで行くやうな氣がして、はツとして眼をつぶつた。……それきり覺えがなかつた……

……十五分ほど後に、控室の方で彼は正氣に返つた。桑木博士がゐた。醫者らしい若い男がゐた。小使がゐた。うしろの方から鈴江も顔を差し出してゐた。

「大丈夫」

云はうとも思はないのに、口がそんな風に動いた。どこがどうとも云へないやうな、體全體の苦痛で、すぐまた目をふさいだ。

「今ちぎに奥さんが見える筈だ」

桑木の聲が云つた。その不安な響きが、然し不思議に彼を不安にはしなかつた。却つて、微ながら可笑しい氣がしたくらゐだつた。(こんな、なんでもない、ちよつとしたことで、女房を呼ぶなんて、桑木君もよつぽどどうかしてゐる……) そんな風に考へられた。さうかと云つて(餘計なことをしてくれただもんだ!)と云ふほどの興立にはならなかつた。たゞその狼狽を、好意をもつて「フ、ム」と輕く笑ひたいやうな氣

持だつた。

法廷に出る前に、血を吐いたことを、信之は綺麗に忘れてゐた。若い時分に時々やつた腦貧血だらう、くらゐに老へてゐたのだ。

十三

「桑木さん」

信之の心は、けれども、なんとはなく寂しかつた。古池に泡をあげる沼氣のやうに、ブツブツと騒き交してゐる人聲が、陰氣くさくつてならなかつた。「どうぞもつと大きな聲で話してください」

一時にバタリと話聲がやんで、深夜のやうな沈黙が來た。油蟬の聲ばかりが、葉越の青い光線に駕つて流れ込んで來る。

「今すぐ奥さんが見えます」

暫くして桑木が、もう一度同じことを云つた。それでもまだ信之は、自分の容態について、少しも不安は感じなかつたが、然し寂しさから、一人でも餘計そばにゐてくれる人のふえることは嬉しかつた。

「岡島さん、……鈴江さんがおましたね?」  
「え、こゝにゐますよ」

近づいて來た氣勢に、信之は薄眼をあけてみた。ひどく眞面目な顔をしてゐるな、と思つた。

「でも、今日はよく出かけて來たね。大丈夫だ、普照のことはもう大丈夫だよ」

「さうですか。どうもいろいろ……」

「君は、無論あの人の阿母さんを知つてゐるんだらうね」

「え、今朝も偶然に電車が一緒でした……」

「安心するやうにさう云つてやりたまい。牢獄にはいらうとどうしよう、あれはもう大丈夫だよ。あれならもう、どこへ出したつて立派なもんだと思ふよ。君たちもちつと見習ひたまい」  
それが、元談どころか、大眞面目なので、鈴江も、氣を撃たれて、

「……え……」

「一緒に來てゐるのはみんな、仲間だね?」

「え」

「みんなも本氣になるんだね、本氣なら何をしたつて立派だからね」

「え」

「君には、僕アすまなく思つて……、決して本氣とは云へなかつたからね……」

そこへ、英吉利風に髭を剃り込んだ、やつと

一二年前に學校を出たくらゐの學者が、顔をつき出した。

「あんまりお話をなさらないやうに……」

真底から君を信用して、高踏社の會計一切を任せきつてゐたのなら、自分も立派な權威を以て君に臨むことが出来よう。怒るとしても、宥すとしても、そこに力があり、立派だけれど、自分の君に對してゐた氣持は、そんなしつかりと片づいたものではなかつた。中途半端だつた。前から薄々は勘づいてゐて、心ひそかに困つたことだと思つてゐながら、そのくせ事を好まないうと云へばまだいいが、悪く云へば泰平を喜ぶ性分から、今に碌なことは起らないぞと云ふ豫感を押し殺し／＼して、一日一日の安きについてゐたのだ。決して君を信用して放つて置いたのではない。信用なしに任せてゐたのは、自分ののだらしないさを意味するのだ。そのだらしないさが、一面君の惡業を促し立てたのだとさへも考へられないことはない。要するに僕としては、君の惡業に對して、一言の非難を加へる權威のないものであることを、その後自分で痛感してゐるのだ。

三

然しこれは僕の話だ、僕自身だけの話だ。——と、信之の手紙が更に筆を轉じて續けるには、——だから、この同じ理由で、君が君自身の良心から放たれると云ふわけにはいくまい。君

は君自身としての深い反省がなければならぬ。答だ。恐らくそれは、既に、君の心の裡に幾度となく繰返されたことと信じてゐる。たゞどれほどの密度と堅實さを以て、君がその上へ脱け出して行くことが出来たかは、爾來君の消息に接しない僕には知るよしもないのだが。そこで君が無斷で持つて行つた金に就ては、君に返さうと思ふ意思があり、その出来る時機が來たら返して貰ふこととし、その意思がなければそれでもよいこととして、これ限り君と僕の間から擲つて了はうではないか。吾々の交誼が、たゞこの金の問題だけの爲に遮斷されてゐるのならば、さうだ馬鹿け切つたことだと思ふ。若しそれをほかにして、尚ほ日君が僕に消息しない理由があるのだとすれば、せめてその理由だけでも洩らして貰ひたい。だが、僕には、そんなことは有り得ないやうな氣がしてゐる。それで、突然この手紙を書くやうなことにもなつたのだが。

實は數日前、御地の「新聞の社會部長平賀氏と面談する機會があつた。面談後の話の滑り具合で、さして改まらずに、君をあの社へ推薦することが出来た。今の君が、どこで何をしてゐるかもよくは知らずに、そんな話を持出

したのは、第一には、知つての通りの僕のお節介な性分からであるが、この好機會を兎も角捕へて置かう、斷る分にはなんでもない話だから、と云ふ氣持だつたのだ。

若し君に「新聞社で働いてみよう」と云ふ氣があつたら、御一報次第で紹介狀を書いてあげるし、平賀氏の方へもう一度改めて頼み込んで置かう。同氏を、僕は入へん立派な紳士だと思つてゐる。この人の下に働くことは、決して君を悪い方へ導きはしまいと信じてゐる。心算のよい君からの返事を待つ。——かう云ふ意味の手紙だつた。暑さの最中にも、三好は皮膚が粟立つやうな寒さを感じた。心がキリキリと引きしまつて、思はず涙が零れて了つた。十日もすると、忽ちにして三好は、大體一流の「新聞社社員」だつた。そこでは特別の事情あるものゝほか、出版社の際には和服が禁じられてゐた。支度金のやうな意味で、前纏に改された月給のうちから、三好は、どこへ出て行つても恥しくないやうな洋服を、半金月賦で注文した。名刺も刷れて來た。生活の億意から、口で云ふほどには、差津校も、カフェエ勤めを呼ぶがつてゐたわけではなかつたが、それをしないでずんだと云ふ意味よ



れども爺は、聞えなかつたのか、聞えな振りをしたのか、今度は衣紋をぬいて、禿頭の上から背なかへと風を送り、顔をそつぽに向けてゐた。三好はぐつと癪にさはつたが、強ひて寛仁大度を示さうとして、眞ッ赤に突きあげて來た頬のほてりを隠すやうに、ハンケチで撫で廻して了つた。

頭取部屋の前には、この暑中をも厭はず旅稼ぎに出た若手一座の座頭、市川何某が、眞の扮装で、巻煙草を片手に、岩次に扮した丈の低い役者といふ何やら冗談口を利用して笑つてゐた。さう云ふ樂屋の空氣も、彼には久し振りであつた。

□新聞に職を得たのは、ついこの一週間ほどで、出奔以來の半年ほどと云ふもの、活動寫眞には時折出かけたけれど、芝居とはまるで縁を絶つてゐた。たゞの一幕も見なかつた。

彼にとつて、芝居は慰みごとではなかつた。勉強でもあり仕事でもあつた。それほど大切なものだけに、見るくらゐなら、片つばしから一軒残らず通ひたくなるし、なけなしの財布でけちち見るくらゐなら、いつそ一幕も見に行かない方が氣持がいいのだつた。

新聞社に職を得てからはなほさら、自分の財

布で芝居を見に行くことが馬鹿々々しいやうな氣もし、また暑い盛りに碌な芝居もあいてはゐなかつたので、演藝記者と肩書を刷り込んだ名刺まで出來あがつてゐた今日でさへ、まだつひぞどの座へも足を踏み入れたことはなかつたのだ。けれども、或る若手の一座に加はつて、市川瀧十郎が下阪してくる由を社内の噂話に聞いた時から、三好は、我ながら氣恥しいほど子供々々した嬉しきで、毎日々々相見る日の近づいて來るのを樂み待つてゐた。——都を離れてから、彼は、言葉のほかにいきなり心と心とで語り合ふことの出來るやうな友達に飢ゑ切つてゐた。

一大した御機嫌ね！  
下宿屋の貧しい食膳に向つて、堅く一本きりときめられてゐる晩酌に、馬鹿々々しいほどお喋りになり、笑ひ易くなつてゐる内縁の良人を、嬉しさの裡にも輕い皮肉を罩めて、美津枝が抑揚つたのは、社でその噂話を聞いて歸つたと云ふ方だつた。

信之のもとから持ち出した金も使ひ果し、齒かばかりの友達の間を食ひ倒して歩いてゐた揚句、いざとなればどこかのカフェエでも美津枝を稼がせれば、なに、さう急に二人の口が

乾あがるわけではなし、と自棄に近い氣強さから、却つて惡度胸が据わつて、紹介してくれるものがあつたのを幸ひ、野田へんの安下宿に轉け込んだのだつた。そこへ、半月ほど前に、思ひがけない信之からの手紙が、出金當時まづ頼寄つて行き、三四日するうちに、すぐもうその細君と美津枝との間に醸された氣まづい感情が、延いては亭主同士の云ひ争ひとなつて、夜ふけをも厭はず飛びだしてしまつた邊縁にあたる會社員、池田の住居宛で、それに何枚も附箋が貼られて届いて來た。不貞腐れたやうなその當時の三好の心には、差出人の名前が、たちまち反感と嫌惡との感情をもつて映つて來た。十中の八九までは、拐帶した金の請求だらうと、すぐそんな風に歪んだ釋りやうをしてしまつたのだ。日に焦け、さくれだつた疊の上

に寝そべつたまゝで、忌々しげに封を切つたのだが、讀みだして二三行もいかないうちに、けれどもキチンと坐り直さなideはゐられないやうな氣持にされて了つた。

信之が云ふには、——君のしたことは勿論いいことではない。然しつく／＼駭へてみるに、自分には少しも君を責めただけの權威がないことを知つたのだ。若し自分が、心から、心の

く否定的だつたけれど、その笑ひながらの調子に、嬉しさうな表情に、いつもの一撃のもとに拂ひのけるやうな手厳しさはなかつた。それどころか、やゝ挑戦的にさへ響いたのだ。

「フン」

と、三好は、酌をさせてゐる盃のなかを見込んだまゝ、鼻のさきで笑つて、「せめて、疑ぐられてゐるだけでも嬉しいか」

「えゝ、さうよ。火のないところに煙はたゝないつて云ひますからね」

相手の言葉の毒々しさに吊り込まれて、つい美津枝もそんな言葉を投げ出して了つた。

## 五

椰掄に報ゆるに椰掄を以てしてゐるのだと云ふことは解つてゐたが、それでも瞬間的に、三好は、飯のなかにガチリと石を噛み當てたやうな顔をした。

「へーえ、火があるのかい」

行きがかり上そんな風に呟いた時には、けれども反對に、虚構の疑心などはさらりと消え、それだけにまた面白くも可笑しくもない白々しさに冴え返つた氣持になつてゐた。

「それアさうでせう、兎も角もよる夜中に、たつた二人ツきりであゝ云ふうちへはいつたんで

すからね

美津枝には、遽にこの言葉の遊戲を捨てるに忍びないやうなはしやき切つた上機嫌が來てゐた。而も役者と若い女と

「三面記事的に云へば、それが絶世の美人だつたつてね」

大人げなく、今更不機嫌にもなれず、三好はどうにか笑つて了はうとした。

「さうよ、三面記事的よ、あなたがいつまでもそんなことを云つて椰掄ふのはね」

「さうして女は大抵三面記事しか讀まないもんだよ。丁度君が、口では可厭がりながらも、椰掄はれゝば、矢つ張り相好を崩して嬉しがつて

るやうなもんでね」

自分がうけただけの不愉快は、なんともして、その相手へたゞき返してやらなければ氣のすまない三好だつた。輕くはぶつてのけたやうなものゝその、「相好を崩して嬉しがる」には、可なり毒々しい響があつた。

「あゝさう」

美津枝はつんとして、眼を落残つた空の色へ溶け込ませた。ほんとに氣が知れないつちやあやしない、馬鹿にさばけて出るかと思ふと、急にまたねち／＼した意地悪根性になるんだも

の……と男の氣性に不満を覚え、漠然とした寂しさに鎮されかゝつてゐた。

有繫に三好には、相手ばかりを悪く考へるわけにはいかたかつた。反省は、彼を、あの胸わ

るい自己嫌惡に突落した、その惡心の遺棄でもあるかのやうに、手酌で二三杯たて続けにあふりつけたが、

「兎に角、一ぺんどこかへ飯でも食ひにつれてかなければならないが、その時には、是非君も一緒に行くんだね」

と、斷ることを承知で、寧ろそれをあてに、いかにも實のいらぬ言葉を並べてみた。氣まづい沈黙の、ほんの場ふさげだけのものだつた。

「いやよ！」

調子がちよつと荒々しかつた。

「何故さ」

「何故だつていやだわよ。斷然ごめん家るわ」

「行けよ。假令何事もなかつたにしろ、兎に角一緒に……」

「もう澤山よ。うつかり椰掄ふと、また顔の相

を崩して嬉しがることよ」

「なにもさう根にもつて憚らないだつていゝぢアないか。俺の方アなんにも拘泥せずに、氣輕に誘つてゐるんだから、君も氣輕にうけたらい

りも、久し振りに理髪店へ行つて、新調の洋服を着て、ステッキをもつて、十九圓五十錢のキツドの半靴をはいて、始めての出社に、うす汚い野田あたりの下宿屋の玄関を立ち出でて行く姿には、吃又の妻女の、あの幕切れの喜びをそのまゝ、居ても立つてもゐられない思ひだつた。彼の女は、一生、信之のゐる方角へは、足を向けて寝まいとまで思ひ定めたものだ。

この幸福は、二人が同様の、やゝ頹廢しかけてゐた基調をも一變させてくれた。なんとなく引きしまり、活氣づいて來て、貧しい食膳にも、一本かぎりの銚子にも、幸福の明るさは光り耀くのだった。

#### 四

「あゝ、大した御機嫌さア……」

と、三好はわざと、美津枝の皮肉を軽くうけ流して、ぐツと仰いで盃をさし、「まア、君一つどうだい」

「あたし？」

いつにないことだけに、すぐには手を出さずに、その代り銚子を取りあげて、「あたしよすわ。それよりまアお酌でもしませう」

一ほんと云へば、俺より君の方が嬉しい筈なんだから、お祝のつもりで、ひとツたらしでも惜

しいやつを、特に一杯飲まじやうといふのさ」

「あら、ぢやして？」

「どうしてではないだらう。なんなら一ぺん首尾をしてやらうか」

「執念ぶかい方ね、まだ疑つていらつしやるの？」

この正月、交吏に、赤阪の待合に連れ込まれた翌る日、血相變へて三好に詰問された時には、美津枝も一生懸命だつた。酔つたまざれとは云ひながら、いこまでも瀧十郎の行くと云ふところまでついて行け、などと自分からつまらない難題を持ち出したリして、非は十分三好にあつたのだが、そんなことには觸れようとしずに、ひたすら身の潔白を申開かうとした。いかに事細かに話を訊いても、三好として信じ難い根本は、彼の女が決して誘惑に對して頑強ではあり得ないことを、自分自身の経験で知つてゐる點にあつた。瀧十郎は、誘惑者として、自分以上の魅力をもつてゐなければならぬ筈だ。それに、現に自分には許してゐて彼に許さなかつた、などと云つたからとて、到底そんなことはあり得ないと思はれるのだった。うまく云ひくるめられて、あゝさうか、矢つ張り役者よりは俺の方がよかつたのか、とすつかり甘くな

つて了ふくらゐなら、寧ろ好きな女の體が、友達のために犯されたこと云ふ事實を知つてゐた方が、よつぽい恥しくないと感じられたのだ。

その勢で、詰問されたのだから、たまつたものではなかつた。然し眞實の前には、いかに執念深い疑ひも遂には、温みとけないわけにはいかない、以前に數倍した愛情、——と云ふより、新に舉て生じた戀愛が、俄に喉く二人を結び、遑の出奔となり、さうして今日までまづまづ平和な日が續いて來たのだ。その間にも、たまに、押揃ひ顔に、赤阪の待合の名や、その狭い部屋の名や、瀧十郎の紋どころや、いろ／＼三好の口から持ちだされたけれど、いつも美津枝は、そのよしない冗談を厳しく押ひのけてゐた。いゝ氣になつてうつかり調子など合せて、冗談のうちはいゝとして、若しまたひよつと本氣にでもなられたひには……と、いつぞやの責苦ではよく／＼懲つてゐたものとみえて、その話となると、笑顔ひとつ向け返さないやうにしてゐた。が、その晩の二人は、幸福に光り輝いてゐた。ちよつとしたことくらゐでは、その光りは翳りさうにもなかつた。それに第一には、もう半年の上も経つてゐた。「執念ぶかい方ね、まだ疑つていらつしやるの？」と言葉では悪

りではなかつた。騒音だつた。目まぐるしさだつた。命令だつた。服従だつた。而も三好はケロリと上機嫌になつてゐた。××座は初日だつた。心齋橋筋には明るい人波がゆれ動いてゐた。

さうして、彼はいま樂屋口に立つて、久し振りの都の友に會はうとしてゐたのだ。

## 七

暫くすると、舊から瀧十郎に附いてゐる男衆の大橋が、眞黒な顔に脂汗にテカ／＼させて、頭取部屋の前にかたまつた二三人の役者のそばを、小腰をかきめてすりぬけ、近づいて來た。

「おいでなさいまし」

職業的にもせよ、愛嬌笑ひをみせて、「着くなりお目にかゝれるだらうなんて、旦那ともお噂して居りましたんで……。さアどうぞまア、ひどいので済みませんが……」

と、そこへ直してくれたのは、脂と汚とで、印で捺したやうに足形のついてゐる古麻裏だつた。さうして置いてから、樂屋番の爺の方を振り向いて、ほんの體裁だけに、「ねえ、富さん、もう少しどうかしたのはいないのかね」

「いや、なんでも結構々々」  
三好は慌だしく聲をかけ、半靴をぬぎ捨てる

と、汚れ腐つた草履を突ツかけた。あとへ廻つて大橋が、瀧十郎の名を貼つた下駄箱へ靴を收め、小走りに案内に立つた。

「やア」

「ようこそ」

「お目出度う」

「お目出度うございます」

通りがかりの知つた顔の役者たちとは、そんな風に初日の挨拶を交して、二階へあがり、すぐ瀧十郎の部屋へと來た。

「ゐるの？」

「いえ、たゞ今お風呂で、すぐあがつて参りますから、どうぞ暫く御休息なさいまして」

「ぢアもうからだはあいちまつたんだね」

「へえもう……、ちよいと御免くださいまし」

茶を侑めるやうにと、小聲で弟子の若僧に云ひつけて置いて、すぐまた大橋は、忙しうに上草履を突ツかけながら出て行つて了つた。

合部屋の三人のうち、一人はもう歸つたあととみえて、鏡臺の前がキチンと片づいてゐた。

ほかの一人が、東京にある時の通り、市川左喜松だとは、いかにも女形らしい紅のはいつた座布團の模様だけでも知れたし、見知りぐしの男衆たちもまご／＼してゐた。その人々と時候の

挨拶など交しながら、一番奥の瀧十郎の鏡臺の前で、三好は侑められた座布團から、新調のズボンでいたはつて横巻りの兩足を出し、折々は鏡に映る自分自身の影を好もしげに眺めたりしてゐた。

そこへ、ナイト・ガウンのやうな仕立のタオルの湯あがりをはおつて、片手の袖口で耳の穴を拭きながら、つか／＼と瀧十郎がはいつて來た。

「やア」

いつもの書生流儀に聲をかけると、瀧十郎はたゞ久し振りと云ふだけのことで、どうしたのか人柄に似合はず、へんにてれた表情で、べつたり壁に手をついて、

「しばらく、御機嫌よろしう」

と、改まつた挨拶をした。

「いや、君もいつもお變りなくつて……」

吊り込まれて、三好も投げ出してゐた膝を折り曲げ、軽く頭を下げた。

「どうもすつかり御無沙汰申しました」

「それアもうお互さんで……」  
そこまで来て、やつと二人は、馴染み笑顔を見出すことが出來た、——いろ／＼複雑な心持を通はしつけた、あの重寶きはまりない無聲



いんだ」

「えゝ、あたしだつてなんにも拘泥つてなんぞゐやアしませんが、あたしなんぞが御一緒に居たところ、お邪魔になるばかりで仕様がないでせう」

「邪魔になると思ふや誘ふやアしないよ」

「でもなんでもあたしはよします」

## 六

その調子が、ゆきがかかり上、思はず肝走つた。

三好は、堅く口を噤み、改めてじろりと美津枝を睨め据ゑた。

(假令口が裂けても、二度と再びこの女の前で、澁千郎のタの字も云つてやるもんか！)

そんなことを考へてゐた。まるで、美津枝の慰みにと思つて、好意から持ち出した話題が、なんの愛想ツ氣もなく、見てゐる前で驟かへされでもしたやうな感じになつてゐたのだ。(誰がくそ、下手に出てゐれアいゝゝ氣になりやアがつて、どこまでつけあがるか知れたもんぢない。これだから女は嫌ひよ)

感情が融和されたあとにも、その決心だけ残つた。一座の乗込んで来る日どりや、演題などを報じた新聞が、二人の間に亂らばつてゐて、

それが目について仕様のないやうな時には、なんとたく不機嫌にさへなつた。いよゝ梅川に着いて来ると云ふ朝は、個人としても、演藝記者と云ふ職責から云つても、是非ともブラツ

トフオムに待ち構へてゐなければならぬ筈の三好だつた。ところが、前の晩に、社の先輩三人に誘はれて、始めての打ちとけた酒席になつた。自腹では大したことも出来なかつたけれど、信之はじめ高路社同人たちのおんぶでは、屢々一流の待合で一流の藝者と接して、兎も角場うてだけはしなくなつてゐたし、どうかした言葉のはしゝゝに、花柳界好みの氣のきいた調子が滑り出るので、どちらを向いても知らない顔ばかりの、やゝ仲間はづれの體は、ほんの盃が廻りだした始めの間のことで、すぐもう居心地よく妓たちに取り捲かれて了つた。その、本場仕込の放蕩の匂が、妓たちによつて嗅ぎ出されたことで、三好はひどく満足し、上機嫌にされた。武者修行の若侍が、旅へ出て始めての他流試合に、思はぬ手柄をたてたやうな得意さだつた。で、調子に乗つて飲みすぎし、古綿のやうになつた體が、俣で野田の下宿屋へ送り届けられたのは、もう午前二時頃だつた。それでも、羽朝澁千郎が着いて来るこ

とだけは忘れずにゐたから、七時までに起すやうにと、美津枝に云ひつけてかけて、ふと口をつぐんだ。

(へん、誰がくそ……)

アルコオルで掻き混れた脳味噌に、いつぞやの決心が、偶然にも飛び出して來たのだ。澁千郎のタの字も云はないですむことながら、それに關したとあつては一言でも口は付けなないと云ふやうな、酔ッばらひに獨特な正直さから、なに、起きようときへ思へば目の覺めないことではない、と心に呟くや否や、着のみ着のみふんぞり返ると、忽ちもう高軒で眠つて了つた。そして、その囁から覺めた頃には、一座の役者たちを運んで來た汽車は、かれこれ岡山近くまで走つてゐたのだ

この失策で、三好は、悪く氣を腐らせて了つた。その日は社へも出ずに、一日頃から布団を引ツ被つてゐた。美津枝も、記者生活も、澁千郎も、一生を學び込もうとしてゐた演劇も、何も彼も一切合切の存在が呪はしかつた。だけけした下宿の貸布團に包まれて、人生は暗く味氣なくつまらなかつた。

翌日は重い足を、それでも社へ引きずつて行つた。出てみると、人生は決して濕氣臭いばかり

九

「あゝ、さう……」

我にもなく三好は、ぼつと赤くなつた。……信

之からは、深い宵しの心をうけてゐるし、自分

でも今では、一生を陰らすほどの悪事とは感じ

られなくなつてゐるのに、思ひもかけず突然に

衝きあげて來たこの血潮には、全く面喰つてま

つた。言ふべき言葉は勿論のこと、眼のやり場

にさへまごつて、いきなり前にあつた茶碗を

取りあげたが、生憎底に五厘錢大の黃色い圓が、

搖れ散れば影も止めないばかりだつた。

「オイ、善公、お茶！ 序にあつしにも一杯」

瀧十郎が、すぐさう次の間に聲をかけてくれ

たのは、救ひのやうで、却つて三好には痛痒か

つた。いまの狼狽の一位一什を見詰めてゐたこ

とが、それで裏書されたやうなものだつた。

「いや、もう澤山」

と、乗りかゝつた船で、底にひとツ滴のこつ

たやつをし、しゅつと吸つて、鈴珂の、離に茺菊

を染附けた番茶々碗を、大きな掌の平のうちに、

鼓のやうにボン／＼と打ち鳴らしながら、その

間にいつか血の色の消え散つた頬を、せい／＼

溢苦く、にツと引き念め、落つき拂つて、「あす

こでも、皆さんお變りないんだらうね」

「あれ！ 御承知ないんですか」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

「何を」

僕等やかまし／＼つて、一度陽者に診て貰ふや

うに勸めただがなす。……一體、どう云ふこ

とから急に床に就くやうなことになんなすつた

んだらう、血でも吐かれたのかね」

え、それが例の不良少年、ほら、なんとか

ぶつた、ほら、外人殺しの」

うん、西山善烈か」

え、あの人の裁判に出なすつたことは御存

知でせう？ 盛に新聞にも書きたてられて、困

つておいででしたつてが……」

いや、知らない。こつちへ來てから、新聞

確に見ないもんだから」

さやうですか」

と、眞面目にうけて、すぐ話し続けようとし

たが、急に手を延ばして、三好の肩をぽんと叩

き、咽喉を使ふ職業者に獨特なジャ／＼聲を振

りしほつて、呼ばだ！ 眞面目な話の最中に、

だしぬけに憶語るなんて、怪しからん、とても

下等だ！

十

「じよ、じよ、冗談いふない」

自分では毛頭憶話のつもりではなかつたのだ

が、瀧十郎の方で、無理にもそれにしてしひ、座

興のつもりか、急にそんな風に燥ぎだされてみ

の合言葉を取り返したのだ。

「いかがです」

「いやどうも……」

## 八

瀧十郎の「いかがです」には、云ふまでもなく、美津枝との共同生活を冷かす意味が十分に含まれてゐた。あなた方の情事は、噂でも聞いて居りますが、さぞく御幸福なことでごさいませう、の心持を、故意と空ツとぼけて述べたものだつた。

これに對して、三好の「いやどうも」は、東京にゐた頃、一時彼等の仲間に流行つた通り言葉だつた。そのほか「たゞく」とか、「たゞもう」とか、意味がありさうでないやうな、ないかと思へば、山盛りにもり込んであるやうな言葉を、いかにも感に堪へた顔つきで、そのくせほんの上の空で、無暗矢鯨と使ひたがる一種下町の隠居風とでも云ふやうなものを真似ることが、ただなんとなしと面白くなつたのだ。例へば、芝居でも、會合でも、掛合事でも、一人がどこからか歸つて來て一緒にいる、と云ふやうな場合、はたの者は、まづ挨拶代りにでも、「いかがでした」と聞く、十が十まで、答へはきまつて、「いやどうも」で片がつくのだ。云ひやう一

つで、呆れ返つたとも、とんでもないとも、不思議なものだとも、お話にならないとも、どんな意味でも通はすことが出来るし、それがと云ふに、江戸末期の無感動を粹として尊んだ氣質が基調をなしてゐるからで、若し何か或る芝居でも見て、心底から感心して歸つて來たとしたら、決して「いやどうも」は使はないのだ。だから、つまり、何事も頭から茶化してかゝる世紀末的、人生觀の露骨な現れに他ならないのだつた。で、この場合の三好の云ひ方では、まづ第一に自己輕侮の色彩が鮮かだつた。「からきしだしアありませんや」の氣持だつた。そしてその裏から、うツすりお得意の色もほかし込んであつた。一言にして盡せば、迷惑がつて喜んでゐると云ふ態だつた。それだけ複雑な氣持が、ほんの一口づつ、會話とも云へないほどの應酬で、忽ちお互の胸へはつきりうつつて來るだけでも、友達と云ふものゝ味はまた格別だつた。はたの者には氣違ひじみて聞えさうな笑ひ聲が、すぐそのあとへ續いて爆發した。

「然しまあ、お羨ましいことだ」  
「や、薄氣味わるく、へむ」と笑つて、「たゞたゞ……ですよ」  
「そいつが大違ひ……」

「何が大違ひ……」

「いえ、まつたく。」と思つたのが大當違ひ、つまり、矢張り野に置けといふやつですな」

「いやどうも、なんとも申しあげやうもございません」

と、瀧十郎は、突拍子なくいきなり頭を垂へさげ、「あやまるよ、あッしや。何も大阿三界まで來て、のつけから、矢張り野に置けまで聞かされるこたアないと思ふんだ。暑い。お、暑い、ねえ、三好さん、大阿と云ふことは大層暑い國ですね」

「えゝまあ、おかげさんで。この陽氣でしたら、今年アいくらかお米が下がるでせう」

もう一度二人は、あたり構はず大笑ひをした。すつかりもう旅の心ではなかつた。

時に、實ア今夜は、個人として推薦したわけぢアないんで……

「ア、成程、伺ひました。お社の方と云ふわけ」

「え？ 馬鹿に早いね」

「それアもう。悪事千里つてますからね」

「悪事はないだらう」

「これけ失言。實はね、發ちます前に、ちよつと紀尾井町さんへお伺ひいたしまして……」

んめいた感じ、さうかと思ふと、へんに堅つ苦しいところは、最初の印象の冷たさをいつまでも思ひ出させたり、要するに、よく解つてゐるやうで、今だにしつかりとは捕捉へられない藤代信之と云ふ存在が、あらためて三好の意識の表面に浮かんで来た。彼は、その人に金銭上の迷惑をかけ、而もそれに被せて今日の位置まで與へられてゐた。そのほか有形無形にうけた恩誼は、中々なまやさしいものではなかつた。さう云ふものを然し三好は世間並に、ただ「恩」として感じたくはなかつた。「報恩」と云ふ手段をとりにすへすれば、今日にも帳消しにしてしまふことの出来る水臭い數量の感念で、この關係を見ようとは思はなかつた。さればと云つて、藤代信之を、一生涯とても頭のがらないほどの威厳をもつた大人物と崇め續けてゐられようとは、夢にも思へないことだつた。さう云ふ結果は、信之の行爲に、心の底から出たのではない、やゝ勤め氣な、所謂道德的臭味でもあつてのことか、或はまた自分の考へ方に、我儘勝手なしまりのない點でもあつてのことか、そこは三好にも判斷がつかかねた。然しそれもよく考へてみれば、「解らない」と感じるよりほかないので、平常の彼の氣持では、信之が親切な人だと

云ふ點を、少しも否まうとはしなかつたけれど、さればと云つて、その徳望に敬服しきつてゐると云ふほどのことではなく、つまり徳はあるが、未だ天衣無縫の域には遠く達しない、生半可なものだくらゐの見解に落つてゐたのだ。もう一つ云ひ換へると、信之から示されたくらゐの好意なら、こつちがえらくなつてしまひさへすれば、返さうのなんのと、こと改めずとも自由に、密達に、自づとこちらから彼方へも流れて行く筈のものだ、と觀じてゐた。それ故、決して普通の意味で「恩」に着るやうな氣持にはなると努めてゐたのだ。さうだ、努めてゐたのだ。慥に彼はまだ信之からうけた好意を「卒業」しきつてはゐなかつたので、早く卒業してしまふと努めてゐる最中だつたのだ。

そこへ當の信之が、再び起つことのむづかしい病の床についたと云ふ話を聞かなければならなかつたのだ。——三好は、單純に、素直に、たゞ悲しい、と云ふ氣持にはなれなかつた。無理にも言葉にすれば、困つたことになつた、これア悪くすると、とんだ好意の背負込みものをしなけれアならないぞ、と云つたやうな、迷惑の感じが、なんとなく彼の悲しみの色を濁してゐた。思はず泪ぐむ、と云ふやうな感情とは、

よほどかけ隔てたものだつた。

「一度でもひとに怒つた顔を見せたことのない、あゝ云ふ人だもんだから、それだけにまた、決してひとの云ふことを聴かない性でね、いくら勸めても醫者に診せないんだもの。ひどいことを云やア、自業自得と云つた感じがなくてもいいのさ」

八當りに當り散らしたいやうな氣持さへあつて、三好は、場所柄も忘れたむきな調子で、そんなことを云ひだした。

十二

その時分には、瀧十郎は、すつかり身ごしらへがすんで、中腰に、鏡臺のそばで、腕時計や懐中ものを身につけてゐた。

「さア、出かけませう」

「出かけるつて、一體君ア……」

「兎も角御飯でも……」

「なんだ、賣れてない人かい」

「え、もう、さばく」とね」

「初日の晩に體があいてるやうなことぢア、折角だが、この御飯たべも、あんまりどツと来さうもないね」

樂屋で、忙しない人出入りのなかで、ちよこちよこと挨拶でもして來るのが關の山と、實は



ると、ついこつちもその氣で受けて置くよりはかはなかつた。そこでまづ「冗談いふな」と言葉で打消して、態度で肯定してみせたのだ。

「まったく、世の中にこんな仕合せな人が、またと一人あるかしら。シキメ、情婦をつれて大阪落ちの、すぐさまうまい穴を見つけてはいつちまふなんて……」

「うまい穴とは？」

「……新聞と云やア、大阪一流の社でせう。新聞で大阪一流と云ふことは、日本で一二と云ふことでせう。どうして貴方、大した位置でさうね」

「それもこれも、みんな紀尾井町のおかげなんだ」

三好は、やゝ粗雑な心持で應じた。

「どうして？」

「いゝえね、こんなうまい位置を與へられたのも、藤代さんのお世話だからさ」

「へえ、さうなんですか」

「さうさ、君、知らなかつたのかい？」

「えゝ、紀尾井町さんは、三好君も、いゝ按配に、大阪でこれゝださうだ、なんて、はたから噂にでも聞いたやうな顔をしておいででしたつけ」

「ふうん、さうかい」

「さうですか、あちらのお世話だつたんですか。

「へえ、さうかなア、えらい方だなア」

「ちよいと頭がさがるね」

「えゝ、とてもいけませんね」

味の濃い沈黙が來た。

「失禮、ちアちよいとあたしは着物を着ちまひますから」

タオル浴衣一枚の我が身なりに心づいて、瀧

十郎は、習慣的に鏡のなかをちツと見込んで

から立ちあがった。

「で、その普烈の辯護を引きうけて、それから

どうなつたんだい」

取り揃へて待つてゐた男衆がうしろから着

せかける羅に手を通し、衣紋をつくろつたり

してゐる瀧十郎を見あげながら、三好は、先刻

の話を先を促した。健康な者でもない、加減弱

つた今年の暑さの盛りに、じり／＼と追つてゐ

た衰弱をも顧みず、公判廷に出て行つて、そ

の始まる前に吐血し、それでもなほ屈せず、一

時間餘の大辯論をやると、そのまゝ人事不省

に陥つて了つたと云ふ話を、ひと通り喋つて聞

かす中には、身支度の方も整つてゐた。

「追つてまた、いろ／＼詳しいお話をいたしま

せう。……さうですか、まるで御承知なかつた

んですか。大抵の新聞には、可なり詳しく書き

立てましたがねえ」

「さうかい。で、それ以來ずつと床に就いてる

んだね？」

「起きたがつて仕様がないうんださうですがね、

はたでまア、どうにかかうにかだまくらかし

て、押へつけるやうにしてねかして置くんです

とさ」

「何しろそいつア困つたことになつちまつたな

ア」

鑒て三好には、しみ／＼とこの事の悲惨が胸

に染み込んで來た。あの部屋で誰がどうして、

かうして、子供さんたちはどこで、どうしてか

うしてと、殆ど毎日のやうに行きつけた紀尾井

町の邸の病める主人とその周囲のさまが、あり

ありと眼前に思ひ浮かべられて來たのだ。

#### 十一

四五年前に、伊庭の紹介で初めて會つた時の、もの柔かで殷懃な裡にも、ちよつと親しく憎いやうな、コチンとした、謂はば獨善主義の冷たさとも云ふやうなものを感じた第一印象から、だん／＼打感けて來るにつれて、少し／＼の缺點を隠さうとはしない、人のいゝ、親切な小父さ

「ガブ／＼と云ひたいが、氣の毒ながらガツガツの方が近いやうだな」

瀧十郎と三好とは、から大勢に取り捲かれると、自然と攻守同盟を結ぶ態になつた。妓のなかには一昨日の晩、社の先輩たちと一緒の折に來てゐたのが三四人まぎつてゐて、初めの茶屋へお連様で來たやうでもなく、三好は初手からはしやいでゐた。瀧十郎にとつては、ぶふまでもなく、來る妓が片つ端から顔馴染だつた。よしんば始めてにしても、或は一度かそこらあつたばかりで、すっかり忘れてゐるのでも、調子のいい若手の花形役者の座敷では、てれるのはにがむのと云ふやうな氣ぶりなど、藥にしろたくも見出せなかつた。二時間たないうちに、男にも女にも、いゝ加減酒の力が働きたしてゐた。縁側の柱に、高時然と凭りかゝつて、左右からしなだれかゝる若い妓を兩手に引きよせたまま、老妓の差しつけるコップへ唇を持つて行つて飲んだりしてゐた瀧十郎のうしろへ、何れなくお房が摺寄つて來て、ちよいと耳もとへ驛いた。

「あら、可厭やわ」

と、胡坐の膝によりかゝり、肩へ廻された瀧十郎の手先を、兩掌のうちに弄びながら、と

ろとろといふ心持になつてゐた若い妓が、耳さとも聞きとがめて、美しい眉毛を地蔵様のやうに半月形に吊りあげ、やつとこさ、うるんだ眼を睨いて、「お房姉さん、こんな時、電話なんぞぶうて來なはるつてことおまつか。もうとうにいなはつたぶうて、切つとくんははれ」

「なに、電話？ 女子はんの聲だつたか、男はんの聲だつたか」

「どつちやにしろ、そんなんいかんわ、今夜はもうここからそとへは、一足でも出したげへんのやよつてん……」

老妓や年増たちも、すぐそんな風に合槌をうつた。

「いゝえ、大橋さんだつせ、男衆さんからだつせ。なんや、芝居の方の御用らしわ」

お房が強ひて眞面目顔で云ひ解かうとしたが、蜂の集をつツ突き毀したやうな妓たちの騒ぎは、なか／＼そんなことで鎮りさうもなかつた。ちよつと電話口へ出るだけだとか、決して逃げはしないと、なんなら一緒にいて來てごらんとか、あつちこつちへ、頑し申譯を振り撒いてゐた瀧十郎も、仕舞には問答無益と云はんばかりに、左右の妓を拂ひ退けて立ちあがつた。

駄目々々！ 逃がしたらあきまへんで、老妓の號令と共に、若い連中が前後左右からしがみつぎ、首ツ玉にぶらさがり、たうとうまた座敷の眞ん中へ坐らせて了つた。

#### 十四

「なんて騒ぎだい！ なんなら俺が代りに出てやらうか」

騒動のそとに一人とり残されて、やゝ手持無沙汰に煙草を喫してゐた三好が、先頭着更へた貸浴衣の裾から、腫で縮みあがつたツンツルテンの毛氈も露に、ふら／＼と近づいて來て、眼で瀧十郎に話しかけた。矢ッ張り君ぢア駄目なんだ、と云ふ瀧十郎の眼つきの答だつた。

「なに大丈夫だよ。ザフ（座敷）ならそのやうに、メ（女）ならまたメのやうに、ちやんとうまくやつて來てやるよ」

「そいつがね……。まアいゝや、ぢアね、もうボウトキマ（一時間ほどしたらカウ（行）するからつて……誠にとりも恐れ入りますが……」

「そんな、英語なんぞ云ひなはつたらいいかんわ」「ずるおまつせ」

「アワ、ハ、ワア」

取り圍んだ妓たちが、一時にまはりから唯したて、美しい指を揃へて口を塞がうとする、さ

内々觀念して來たのだが、案外にも、わりにゆつくり話が出来たばかりか、珍しくも體があいてゐて、一緒に出て晩飯でも喰はうと云ふのだつたから、三好にとつては、まづたく願つてもない仕合だつた。けれども、その喜びは色にも見せずに、突ッ込んで可からせの一つも云つてみるのだつた。と、瀧十郎は瀧十郎ですぐまたそれを跳返しにかゝつた。

「なアに貴方、座敷の三つや四つ斷つたつて、假令御鼠屋をしくじつたつて、久し振りの三好先生に代へられますか。よしんばまた、女の一人や二人焦れ死に死ぬまでも……、そんな奴アないか……」

「それアそのくらゐは當り前だ。大阪へ來たら、誰より新聞社のお方様を大切にしないさア、とても藝人は立ち行かないんだから、憚りながらその氣でつきあつて貰はうか」

「へいへい、へい」と、しかつめらしく頭をさげて、「さやうござらばお社の様……」

「うむ、案内いたせ」

「善公、自動車だ」

みんな一度にとつと高笑ひをして、思はず立ち上り、三好はズボンの膝をちよつと氣にして

叩き、鏡の前で眞新しい麥藁帽子を被つてゐるし、瀧十郎は、銀の煙草人にキリアーデを詰めた込む、善公は都屋を飛んで出る、急にさゝめき立つた。――遊びに出かけようとしてゐる若者の氣遣、うき／＼と華やぎ、そは／＼と落つかない、一種なんとも云はれず樂しい氣持が、二人の胸を一杯にしてゐた。不治の病に伏した信之などは、あとかたもなくどこかへけし飛んで了つた……。

一時間たゝないうちに、二人は、北の新地の或るお茶屋の廣間にゐた。一枚残らず建具を取りはづして、ほんの體裁に垂れた御簾さへ巻きあげ、床飾もあつさりし、縁ばなに、人數だけ水淺葱の座布團の敷いてあるのもよかつた。奥二階の欄干のそとはすぐに、星影さへ見えないう閣だつた。遠くの空が、ほんのり街の灯に焦かれてゐるだけで、隣近所の燈火やざわめきを遮つて立つた高城までは、上方風のひらいたい庭づくりが、ものゝ影も落さず靜まり返つてゐる。

「よござんすね」

「また別の味だね」

座敷にはいるなり、二人は、縁側に立つて眺めた。それも旅らしい心持だつた。

「おこし……」

仲居のお房が、肥つた軀を大儀さうに、且はまた、一流の茶屋の仲居としての落つきをみせて、ゆつたりとこへ挨拶に出た。

「や、お機嫌さん……」

瀧十郎は、すぐ大阪辯で答へて、「こんどはまたいろ／＼お世話さんになります。どうぞよろしう」

### 十三

男衆の大橋にでも電話をかけさせてあつたものとみえて、藝者たちの來かたも早かつた。

盃とウキスキイのコツプとがちゃんぽんに、やゝ空腹の、鯛と烏賊のつくり合せや、齏の吸物に箸をもつて行かうとする鼻の先へ突き附けられた。

「まあ、ちよつと待てよ」

「食べるのんかて飲むのんかて、お腹のおつきなる味に變りおまへんで」

と、年増妓の遠慮なく、無理にも相手の手にコップを持たせて、「さア、今夜へレレにのんまへういな」

「どうです、この連中と來たら、いつ違つたつて、酒のない國からたつたいま梅田の驛へ着いて來たばかり、と云つた勢なんだから、呆れますね」

もの馴れた、すこしは年のいつた女らしい口ぶりだつた。「それではどうもひつれい申しました、よろしうお願い申します」

「ぢア、失禮……」

もう少しは擲振つてもみたかつたのだが、三好は、兎も角重荷をおろした心持で、そのまま電話を切つた。二階をあがりながら、心持が、すっかり瀧十郎の身方になり切つてゐるのに氣がついた。戀の取持に、馬鹿々々しいほど眉を入れる待合の女中のやうな、一種へんな満足感に浸つてゐる自分を見出したのだ。さう氣がついても、然しそれがそんなに可厭でもなかつた……

「お房さん」

あんまり人見知りをしない性だけに、もうすつかり馴れ／＼しく呼びかけて、「どうかして瀧のやつを落してやる工夫はないかね」

「さア……、なか／＼えら事だつせ」

「それアえら事だ。だからそこをさ、なんとかうまく……」

「よろし、わたしがうまいことやつてみます」

二階の廣間では、もう一度各自の席に直つて、やゝ落つた座談が始まつた。云ふまでもなく、今度の芝居が主な話題で、従つて瀧十郎

が主な話手だつた。——さうして、みる間に時が経つて行くのを、はたから三好の方が却つて苛々してゐた。

「さア、先生、そろ／＼お暇といたしませうかね」

やがて、ちよつとした言葉の切れ目を巧に捕へて、瀧十郎はちらと腕時計を見た眼を、すぐ三好の方へ意味深く向けると、一何しろまだ二番目の臺詞がまるツきりはいつてゐないんですからね、今夜でも少し讀んどかないと……」

「それアさうだ。あゝどうも粒附につけて貰つてちやア仕様がアリアしない」

「あら、そんなことないわ。よう覚えてなはつて、すら／＼云うてなはつたやおまへんかいな」

と、今日の初日を觀て來た一人が、眞面目顔で反對した。

「さ、そこがお素人衆だ」

瀧十郎がすぐ巫山戯たがるのを、三好はそばから、割込んで、飽まで本氣らしく、

「それアほんとに、あんなこつちアいかんよ。

はる／＼大阪まで出て來て、どうもあんな……」

「そんなことはないわ」

「いや、それアちよいと素人にはわからないよ。

だが、いけない、あれぢア困る……」

## 十六

けれどもその手では、結局、妓たちは誤魔化されなかつた。いくら三好がむきになつて、臺詞を憶えるために、今夜は早く歸宿しなければならぬ瀧十郎だと云ふことを、熱心に説き聞かさうとしても、頭からそんな話には乗つて來ようとしずに、てんでに勝手次第なことばかり喋りたてゝゐた。

そこへ、眞面目顔で、お房がつゝとはいつて來るなり、疊に手をおろして、眞正面から瀧十郎に、ちよつと顔を食しにもらひたいと云つた。どうしても改まつた用件としか思はれない片ツ苦しさだつた。

「は」

瀧十郎も、何事が起つたんだらう、とぶ／＼つきで、すぐ立つて行つた。そこに、冗談口や惡どめの言葉を發する心の餘裕が出て來ないさきに、一人はする／＼と、小走りに廊下を階段へ、何やら囁き交しながら去つて了つた。

「お房さん」

なかでも一番執拗く瀧十郎に絡みつき、引き



うはさせまいとする……。

「よし、解つてゐる。くどくは云ふな」

そのまゝ三好は、いち早く廊下の方へ出て行つた。

「そんな電話、はよ切つて了ひなはれ。三好さんかてぐる、やよつてん出したげたらいかんわ」

無遠慮にかじりついて、キャツキャと騒ぐわけにもいかないうる位置とか性分とかから、遠捲に口先だけで嘲してゐる連中が、二三人ばらばらとあとを追つて來た。

「來ると承知しないぞ」

振り返りざま、三好は、故意と仁王様のやうな形をして怒鳴りつけた。妓たちはワツと云つて立ち竦み、手を抱り合つた。そこへお房が追いつて來て、

「そんならわたしだけ一人ついてきまつさ。あなたたちはこゝで待つてなはつたらよろし、なア先生」

「さうだ。さア、君と二人で道行だ」

背なから腕を廻しあつて、階段をおりながら、三好は、囁くやうにお房の耳もとで、「なんだい、一體、ほんとに電話なのか」

「そりやさうでんがな」

「誰だ」

「さア、……先生知つてはれしめへんの？」

「知つてゐるさ」

と、三好は、瀧十郎のことならなんでももつて來い、と云はんばかりの顔つきをしたが、その實大阪の女のことまでは聞いてはゐなかつた。「知つちアあるが、あれこれと、あいつも中口敷が多いからな。どの口だい」

「知つてやおまへんのでつしやろ？」

「だからさ、どの口だよ。矢つ張りこの土地の人だね」

「いづれ、そりやさうでつしやろかいな」

「ふうん、まあいゝや。どこだい、電話は？」

「こつち」

お房が危ぶんで、まづ自分が出ようとするのを、三好は横手から受話機をひつたくつて了つた。

「もし、もし」

然し答がなかつた。

「それみなはれ、あんまり手間どつたさかい、切れてしまつたんやわ」

お房が變つて、ベルを鳴らし、先方の番號を云つて、改めて呼び出さうとしてゐるところへ、ひよつとりまた相手の人が出て來たらしかつた。

「へえ、わたし、お房……。みんなに捉まつて、もうえらい目にあつてはりまつせ。とても出られなはれしめへんで、……そんなン云ひなはつたかて……。あのな、今な先生がな……」

## 十五

いきなりそんな、先生などと云つたところで、先方の女へ通じる筈はないのだから、三好は、慌てゝそばから受話機へ口をよせ、

「兎に角、一時間かそこらしたら必ず何はせますから、どうぞもう少々御辛抱くださいまし……」

「さ、先生かはんなはれ」

と、お房が自分の耳にあてがつてゐた受話機を、すばやく三好へ渡して、「いま三好先生が代りに出なはりまつせ」

いくら電話でも、先方はひどくてれた容子で、笑ひ聲ながら何かわけのわからないことを呟いてゐるのが聞えた。

「あたしから、責任を以て申しあげます」

三好は、いつそもう度胸を据ゑて、一時間後には、きつと常人を差しだします。誓つてお約束しますから、どうぞ御安心ください」

「まアま、えらいお堅いことで……。おほきに……」

た妓(き)たちが、ワツと噓(うそ)して、てんでに云(い)ひたい放題(はうだい)のことをしやべりだした。三好(みよし)は、それを押し鎮(しづ)めるのにひと骨(ほね)をつてから、

「なにしろ、この通りの人氣(にんき)なんだから……」

と、話(はな)しかけた。「すぐに來(こ)られないもんかね。そつちの御用(ごよう)も、それアもう手放(てな)し憎(にく)からうけれど、それア重々(しんじやう)お察(さつ)し申(まう)してゐるが、俺(おれ)もね、多勢(たせう)に無勢(むせう)でちとあしらひかねてるんだから」

「えゝ、伺(うかが)ひます」

「さう安請合(やすひがひ)しないでさ……」

「それアさうと、だしぬけですが、貴方(あなた)はお民(たみ)さんつて人を御存知(ごぞんち)ですか」

「お民(たみ)さん？……一體(いつたい)なんだいそれア」

「キモノ(薬者(やくしや)です」

「キモノ？……どこの」

「こゝの人(ひと)ださうです」

「知らない。藝名(げいめい)がお民(たみ)さんかい」

「そいつがね……、多分(たぶん)本名(ほんめい)でせうねえ」

「それぢアなほのことわかりツこありやしなによ。藝名(げいめい)で云(い)はれたつてやつと四五人(四五人)覚えてるかどうか怪(あや)しいのに、本名(ほんめい)だなんて……。一體(いつたい)

それがどうしたつて云(い)ふんだい」

「是非(ぜひ)貴方(あなた)にお目(め)にかゝりたいんですつて」

顔をよせて、受話機(じわき)から洩(も)れる先方(せんぽう)の聲(こゑ)に耳(みみ)を傾(かた)けてゐた妓(き)たちが、もう一度(いちど)やんやと騒(さわ)ぎ出した。

「わて、知(し)らんわ」

「まア……、先生(せんせい)……」

「白(しろ)ばツくれはつたかであかんわ」

「まア、ちよつと待つてくれよ」

と、三好(みよし)は、振り向(む)いて、背中(せなか)を叩(たた)きたてる妓(き)たちを制(せい)し、身に覺(おぼ)えはないことながら、矢(や)つ張り悪い氣持(きもち)はしず、わざと隠(かく)してゐるやうにも

釋(はな)れさうなニヤ／＼笑(わら)ひに相好(さうこう)を崩(やぶ)して、「ぢア、このごろ東京(とうきやう)からでも鞍換(くらかひ)して來(こ)た人(ひと)ぢア

ないのかね」

「京都(きやうと)の人(ひと)ですつて。それがね、病氣(びやうき)でね、今日(けふ)明日(あす)も知(し)れない容態(ようたい)だと云(い)ふんですがね。

一日(いちにち)でもいいから先生(せんせい)に逢(あ)つて死(し)にたいつて云(い)つてるんですとさ」

「そんな！ それア人遣(ひとや)ひだよ」

三好(みよし)も、有聲(ごう)に投げだして了(しま)よりほかなくなつて來(き)た。「京都(きやうと)の人(ひと)なんぞに、一人(ひとり)だつて知(し)り合(あ)ひはないよ。何かそれア間違(まちが)ひだらう」

「紀尾井町(きおゐゐちやう)さんの關係(けんが)で、なんか覺(おぼ)えはあり

ませんか」

「信(のぶ)さんの？……ないね。それより早く來(き)たま

いよ。來(き)てからゆつくり話を聞(き)くからさ」そんなことで、やがて電話(でんわ)を切(き)つた。

## 十八

かれこれ二時間(じふにじかん)も待(まち)たされて、やつと瀧十郎(たきじうらう)が戻(もど)つて來(き)たのは、もうやがて一時近(いさ)かつた。

藝者(げしや)たちのなかには、大(だい)ぶん歸(かへ)つて行(い)つたものもあつた。三好(みよし)の、なんののかのと云(い)ひつゝも悲(かな)し

では矢(や)つ張り瀧十郎(たきじうらう)に十分好意(じふぶんこうい)をもつてゐる、

その心根(こころね)のうれしさ難(がた)もしさから、まだほんの

淺(あ)い馴染(なじみ)ながら、十年(じふねん)の知己(ちかび)のやうな親(お)みを見(み)

せて、さすがにもう杯(さかづき)は捨て、しんみり語(かた)り

り更(さら)さうと腰(こし)を落(お)つた四五人(四五人)もあつた。謂(いは)は

ば芝居(しばい)と云(い)ふものゝ魅力(みりき)で緋(ひ)られたその一團(いつだん)

の男女(おんな)は、さんざ待(まち)たされた揚句(やうぐ)、瀧十郎(たきじうらう)の姿(すがた)

を見ると、なんと云(い)はれない懐(なつ)しさを感(か)じて、

うらみつらみを並(なら)べたり、皮肉(くにく)や抑(おさ)えでうんと

脂(あぶら)をとつてやらうとの心づもりも忘れ果(わすれは)て、

ついちやはやと迎(むか)へてしまつた。それでもひと

通りは、やれお樂(が)みのなんのがあつて、やがて

三好(みよし)が口(くち)を切(き)つた。

「なんだい、一體(いつたい)さつきのお民(たみ)さん云々(うんげん)は？」

「あゝ、解(わか)つた／＼、すつかり解(わか)りましたよ」

瀧十郎(たきじうらう)は、くるりと三好(みよし)の方(かた)へ向(む)き直(ただ)つて、

矢(や)つ張り、紀尾井町(きおゐゐちやう)さんの御關係(ごけんが)筋(すべ)だつたん

止めようとしてゐた二十三になる一勇と云ふ奴が、その時分になつて、これ一杯喰はされたかな、くらゐの半信半疑の氣持から、取り敢ず聲だけあとを追ひかけさせた。まだ十分聞える等の階段の中ほどで、しかし返事はなくて、急に足音が早まつた。

「逃げなはるつもりやわ」

それ、方々御油斷あるな、と云つた氣持で突ッ立ちあがる一勇の手を、すばやく三好が捉へて了つた。

「違ふよ。歸るんなら、俺と一緒に歸るさ。このうちで組總見をして貰ふやうなことを云つてたから、多分その日取りやなんかの相談だらう。一言の挨拶もなしに歸るなんて、そんな卑怯なまねをしたら、第一この俺が承知しやアしない」

「あんたはぐるやよつてあかんわ！」

振り拂つて、すぐあとを追つて行つたが、玄關にも廊下にも便所にも、その時にはもう瀧十郎は影も形もなくなつてゐた。おまけにお房さへ見附からず、ほかの仲居に訊いてみれば、みんな一様にニヤ／＼しながら、知らないと言へるばかりだつた。やつと、賴子も被らずに、自動車に飛び乗つてどこかへ出て行つたと云ふだ

けのことを、おちよぼの口から白狀させ、ブンブンして奴が引き返して來た。

三好は、内心まづよかつたと思ひながら、口先では頻と憤慨してみせた。養者たちは、初めからぐるのくせに、それが白々しい、と云つて、二重の怒りを三好の上に破裂させる。が、なんと云つても客と養者の云ひ争ひなのだから、激しければ激しいほど、口数が多ければ多いほど、結局は座敷がはずんだことで、みんなは却つて愉快にされたくらゐのものだつた。

ほどなく、三好に電話を取次いで來た。瀧十郎に違ひなく、この上先生までおびき出さう魂膽だらうが、中々さうはさせない、と云ふので、三好のあとから奴たちがぞろ／＼と喰附いて來て、電話口を取り巻いて了つた。

ところが當の瀧十郎は、電話口に出ないで、先刻は無斷で中座して誠に相濟まない、止むを得ない用件でまだ一時間ほど手間どるが、必ずそちらに戻つて行くから、どうか暫くお待ちを願ひたい、と云ふやうな、摩つ苦しい切口上が、誰やら男の聲で述べ立てられた。油斷なく受話機のそばへ耳をよせてゐた奴たちも、それでは元口の利きやうはなかつた。

「もし間違つたら承知せえへん云うたげなは

れ」  
などと、低聲に三好のうしろから囁くくらゐのことだつた。

## 十七

「ちよいと政次郎君を電話口まで呼んで貰へないでせうか」

三好としては、奴たちの手前にも、こつちは當人が出てゐるのに、先方では代理ですませようとする無禮を、そのまゝ平氣で過すに堪へない氣はするのだが、さうかと云つて、その無禮に對して腹の立つ實感はいさらないのだから、ほんの體裁だけの意味で、遠慮がちにかう申し出たのだつた。

「甚だ失禮でございしますが、ちよいとその手ばなせない用事にかゝつて居りますので……でも少々お待ちくださいまし、只今都合を伺つて参りますから」

「いえ、別に大した用もないのですがね……」  
云ふうちに先方は、いかにも芝居者らしいうはツつらの鄭重さで、つべこべ何か云ひながら引ッ込んで了つた。

## 一

「先生ですか」  
暫くすると、受話機のなかに、いきなりかう瀧十郎の聲が響いた。まはりから取り圍んでゐ

その、いかにも新味には乏しいけれど、通俗的な人情悲劇の情 境で、破たちの口を出る言葉に、十分同情と好意とが盛られたのだ。さう云へば、いつも愛はしげな悲しい顔をしてゐたとか、京都にゐた頃の位置が位置だけに、知つたお客の顔ぶれがよく、従つてことなく上品におつとりしてゐたとか、そんな類の噂だつたが、それにしても、あんな大人しうな人が、一期の思ひ出に是非逢ひたいと云ひ出すほど深く思はれてゐた男と云ふのは、一體どう云ふ方だらう、と、話はやがて、自然とそこに落ち込んで行つたのだ。

「それがその、有名な……、なんでせうね」

瀧十郎は、いつからともなく、自分自身を、戀愛の世界での花々しい若武者と感ずるやうになつてゐた。向ふところ敵なしの氣持にさへなつてゐた。それが信之のためには、大ぶん荷厄介にしてゐたとは云へ、おもんと云ふものを奪はれてゐる。内々氣のあつたお澄と云ふものをしてやられてゐる。反感とまでは云へないけれど、心持が、戀愛の分野に對立の關係で立つ場合になると、なんとなくひねくれくなるのをどうすることも出来なかつた。謂はば商賣仇のやうなもので、氣がついて自分ながら不愉快

になるまでも、相手を装める氣にはなれないのだつた。今も、實は「有名な色魔」と云ひかけたのだが、それではあんまりひどすぎると思つて、ニヤ／＼しながら、三好へ臺詞を渡して了つたわけだつた。

「有名な……、さうさなア、まア色事師だらうな、ちよつとほかに適當な言葉がないが……、つまり色事師と云ふ言葉がもつてゐる江戸情緒をそつくりぬき取つて了つて、その代りに、多少の人道主義を加味した、と云ふくらゐのところがな」

三好自身とても、その商賣仇の感情は、幾度も経験してゐるのだから、瀧十郎が、役をして云はしめようとしてゐる臺詞の内容は、解りすぎるほど解つてゐたのだが、有聲に、それに同じで、卑しむべき反感を表明する氣にはなれなかつた。最近の三好は、美津枝にさへも洩しはしないけれど、可なり信之を有難く思つてゐた。遠く離れた土地で、その當人を色魔として吹聴するやうな、そんな氣持にはどうしてもなれないのだが、さうかと云つて瀧十郎が、臺詞を割つて、渡してよこした氣持を、さうまたべらぼうに裏切つて了ふわけにもいかず、中をとつて、こんな風に云つたのだつた。そして、そ

れが同時に、三好の正直な評價だつたかもしれない。

## 二十

「そんなやゝこしこと云ひなはつたかて、わてらにわかしまへんけど、つまりなんでしやる、よう女子はんのでけるお方でしやるなア」

相變らず、瀧十郎のそばにべつたり喰つ付いて坐つた一勇が、そこにほかの意味をも託して、惚れた男の横顔に秋波を送りながら云つた。眼で見ないでも、心にそれと感じて、瀧十郎は、洒々とした顔つきで、

「すると、つまり、あツしみたいなもんですかね」

「君は色魔さ。その人は、色事師と云つた方が當つてゐるんだ。ちよいとそこは違ふよ」

「へえ、あツしは色魔ですか」

「すかんわ、先生！」

「そんなぶひなはつたら罰あたりまつせ」

三好は忽ち總攻撃に會つたが、故意と言葉仇にはならず、眞面目くさつて瀧十郎に、

「で、僕に逢ひたいと云ふのは、どうぶふんだらう。それより第一、僕と云ふ者の存在を知つてゐるのからして不思議ぢアないか」



です。貴方ぢやアなかつたんだ」

「なアんだい、馬鹿々々しい」

多少とも裏切られたやうな感じがあるだけに、それを誤魔化して了ふため、故意と實感の

五倍ほどにも誇張して、ぐツと三枚目に身を落

し、口あんぐりと反りくり返つてみせた。それが

妓たちにはうけて、さも可笑しさうな笑ひ聲や、

軽い冷かしが出た。

「いかに僕が忘れッばいたア云へ、あんまり覺

えのなさすぎる名だと思つたよ」

三好は、さもつまらなさうに、そんなことを

を呟いてから、「然し、それがまたどう云ふわ

けで僕に逢はうとは云ふんだらう」

「そこですよ。いまに始まつたことぢアないけ

れど、紀尾井町さんつて方は、全く不思議な

方ですね。あれだけ浮氣の仕放題をしてゐな

が、とても深刻なんですからね。……そのお民

さんて人が、肺病で、もういよ／＼いけさうも

ないつて云ふんですがね、その臨終の際になつ

て、一日でい／＼からお目にかゝつて死にたい、

つて云ふんですとき」

「へえ、一體そのお方、藝妓はんだつか、素人

はんだつか」

と、年増の妓が、そこに口を出しかけると、さつき電話室までついて行つた若い妓が、すぐその耳もとへ口をよせて、何か囁いて聞かせた。

「ふーん、さうだつか」

芯から思ひがけないと云ふ顔つきで、老妓は鼻音の感嘆詞を幾度も繰返しながら、小刻に首を左右に振つた。

「なんだい、君ア知つてるのかい」

三好は、すぐその花勝と云ふ若い妓の方へ問ひかけた。

「そやよつてん、先刻わたし、小藤さん云うた

げたやおまへんか」

「小藤さん？ だつて、そんな人知りやアしないよ」

何が何やら、三好にはさっぱりわけが解らなかつた。

「さうなんだ、藝名は小藤と云ふんださうですよ。ついこの春ごろ、京都からこつちへ變つて

來た人なんですつてね？」

「へえ。あつちにゐなはつた頃は、里奴はん云うて、大人しい、品のえ／＼お妓でしてん。わて

その頃からよう知つてまんね」

年増女がかう説明するのを聞いて、三好もはつと思ひ出した。里奴と云ふ名ならば信之の

口から洩れたのを、慥に聞き憶えてゐる。あの、あとをしたつて東京まで愈々信之に逢ひに來たと云ふ、あれに違ひない……。

## 十九

「へえ、さうかい」

と、何か大きな塊でも咽を通す時のやうに、三好はがツくりと一つ頷いて、「こつちでは小

藤と云つて出てゐたんですか。さうかね、それ

アちつとも知らなかつたが、小藤、ねえ、潮さ

ん、可厭だね、小藤たアよくものめ／＼とつけ

たもんだね」

「成程ね、小藤……。いつそのこと、藤代とす

れアなほよかつたでせうにね」

二人は、さう戯れ合つて笑つたが、信之のこ

とをなんにも知らないはたの妓たちには、この

意味は通じなかつた。で、彼等の間には、小藤

の噂話が囁き交され、それがだん／＼に話題

の中心を占めることになつた。ほか土地から變

つて來た人ではあり、それに出てゐたのもほん

の僅かの間だつたから、中には名前さへ知らな

い妓もゐたくらゐで、彼等自身の一流意識から、

勢、軽く取り扱はれたことは云ふまでもない

が、然し、若くして肺病で死にかゝつてゐなが

ら、好きな男に一日でも逢ひたいと云つてゐる、

者の評判をとり、却つてそれで賣つてゐるやうな一流の美女とは、つい去年からの關係だつたが、その人を中心に、信之、小藤、三好などで、しばしの間に、美しい人情の世界に住むことが出来る。戀愛至上の氣持で、人々が親しく結びつくために、自分と清葉との、極度に秘密を要する逢瀬が、さして人目を憚らずとも、屢々繰返されるだらう。清葉は、どんなに信之たちに親切に、そして自分には情合の深い、心ぎまの美しい女になることだらう。——さう云ふ清らかに楽しい空想は、瀧千郎の表情をさへ美しく見せた。

「なに考へこんでなはる？」

年のいつた妓が、さも好もしげな眼差で見やりながら、手を延ばして、ほんとと膝を叩いた。

「え？」

と、瀧千郎は夢から醒めたやうなけうとさでうけたが、すぐ半段の、觸れば切れさうにてきばきした調子になつて、「なに、その藤代さんて方が、どうかしてこつちに出かけて來られるといふと思つてさ」

「さうだな、よつぼどわるおまんの」

「えゝ、何しろ胃腸ですからね」

その時、これも何やら考へ込んでゐた三好が、

急に横あひから口を出して、

「兎に角、一刻でも早い方がいゝね。今夜は無論しようがないけれど、あしたの朝でも、僕を會はせてくれないかね」

「えゝ、よござんすとも、何しろ先方で逢ひたがつてゐるんですもの、貴方……」

「うん。で、入院でもしてゐるのかい、それともうちなのかい？」

「病院ですつて」

「それアなほ世話がなくなつていゝや、どこのなつてえ病院だか聞いて來たの？」

「いゝえまだ……。實は、こんな席ですから、今夜はともにお耳へ入れられまいと思つたんです。それがこんな風に……。どうぞ、皆さん、この話だけは、この場かぎりにしといてくださ

いね」

「えゝゝゝ」

口止めされる者の不愉快も、茲には感じられなかつたから、笑顔よく妓たちは顔返した。

「チア、どうしよう」

「兎に角、今夜はもう晩いから、貴方こゝにお泊んなさいな。さうすれば、あッしが明日の朝早くお話しに來ますよ。都合で、あッしも御一

緒にお伴してもいゝんですから」

二十二

「そんなこと云はんと、あんたかて泊つて行きなはつたらよろしねん」

年増の妓が、故意と權柄づくに、瀧千郎を引き止めにかゝつた。

「いえ、今夜はね、ちよつとさう云ふ具合にいかないんですよ」

強ひて眞面目顔を扮つて答へるのを、妓たちは、少しの斟酌もなしに、

「そらさうだつしやろ」

「よそへ泊んなはたら、えらいひかれはりまっしゃろ」

「そんなやゝこしい人、はよ歸んなはれ、歸んなけれ」

「へえ、そんなやつたら、すぐに去なしてもらひまツさ」

瀧千郎は、四圍伺ひになつて、尻から立ちあがるやうな滑稽な形をしてみせた。

「いかんわ、いかんわ！」

忽ち妓たちは周りに取り纏つて、口々に冷かしやら冗談やらを浴びせかけた。その騒ぎの上に、噂は置いても焦點は定めずに、瞬と

へもしずに、ちつとほかのことを考へ込んでゐた三好が、その時だしぬけに口を切つて、

瀧十郎の説明に従へば、彼が今まで行つてゐた、或る所の「或る人」が、その「お民さん」なる者の遠縁にあつてゐるし、可愛がつてもゐるので、普段から信之のことはよく聞き知つてゐたのだが、その「或る人」のうちの姪が、一昨日の晩三好にあつた話を傳へ聞いたお民が、それはきつと、高踏にゐた方に違ひないから、是非お目にかゝつてお願ひしたいことがある、——と云ふのは、つまり一目でもいゝから信之にあつて死にたいが、自分からぢかにそれを云つてやるのは、いかにも厚かましくて出来ない、あんまりな我儘だけれど、一度自分にあつてくれて、たい見たとりの容態を、なんとつかず東京へ知らせてやつて貰へれば、この上の幸ひはないと云ふのださうだ。それを「或る人」から、くれぐれも三好に頼んでくれと云ふ傳が、肇てそこに、こと細かに、瀧十郎によつて述べられたのだ。そして最後に、一體ならば、他聞を憚らなければならぬのだが、こゝにゐる連中は、みんな「氣心の知れたお友達」だし、二人だけ別室へ行くのも水臭くつて可厭だつたから、構はずこゝで云つて了つたけれど、みんなもどうぞそのつもりで聞いて貰ひたい、と云ふ意味のことを附け足した。——同一の祕密をもつことで、

人の心は親しく結びつけられる。殊にそれが戀愛に關したのだと、若い女の心などには、一種の魅力をもつた絆とさへなるのだ。この場合では、別に大して祕密にしなければならぬほどのことでもなく、却つて美談として語り傳へてもいゝくらゐの話だつたけれど、彼女たちは他言しないことを誓ひ、急にしんみりした氣持になつて、いろ／＼詳しいことを聞きたがつた。また三好に向つては、今夜にも逢つて、容態によつてはすぐ電報で呼びよせるやうにしてあげたらよからう、と熱心おもてに現はして説き勧める姪もあつた。

「ところがね、生憎とその先方の方も御病氣なんださうだが……、ねえ、瀧さん、とてもこつちまで出かけて來られる容態ぢやあるまいね」「さア……。然し、あの方だけにね……」

「それに、事件が事件だからね……」「ですけれど、いくら紀尾井町さんが行くといふつても、欠ツ張りはたが出しますまいね。醫者としたつて許すわけにいきますまいから」

「然し、そんなことなら何故知らせてくれなかつた、なんて、あとで恨言をぶはれても仕方のないことだからね、兎も角、明日の朝でも電報だけは打つて置からうか」

云ひながら、ふと三好は、うは目使ひに、更け渡つた空を見やつた。——天の河が、ほのかに白く流れてゐた。

## 二十一

秋めいた夜更の風がわたつて、一座には、霜でも置いたやうな靜寂が來た。

「さうかて、仕合やわ。そんなにして、死ぬ臨終まで思ひ込んで忘れられんほど好きな人があつたら、ほんまにえゝわ、假令死んだかて、それだけでもう、よつぽど仕合やと思ふわ」花勝と云ふ若い姪が、伏日ながら、述懐めいて呟いた。それはほんとにさうだ、と同じるものと、いくら好きな人があつても、一緒に死ぬのなら兎も角、あたしは死ぬのは可厭だ、死んで花賃は咲かない、そんな風に反對するものがあつた。

男たちは、一人居々に、それ／＼の思ひに耽つてゐた。瀧十郎は、信之が達者で、女の危篤の報を聞いてすぐ出かけて來るのだつたら、どんなによからう、と考へた。そこにゐる彼女の手前を「或る人」などとばやかししたこゝろで、小藤と遠縁であり、そして日頃から可愛がつてゐる、と云つてしまへば、大抵もう見當はついてゐる筈の、清葉と云ふ常磐津の名手で、清葉

料理屋は違つたもんで、この月一杯はお休みです」

「あら、生意氣ねえ」

「生意氣はないでせう。かう見えたつて、郵便貯金で三千七百五十五圓、ちやアんと預金してあるんですからね」

「どこへ行つて来たの？」

「きまつてまされ、買ひ出しですよ」

「お休にしてゐても買ひ出しがあるんですか」

「それアあなた、屋臺は休んでたつて、お座敷がありますもの、そのほか閑遊覧……はあんまり暑中にやアないが、つまり鮎狗のお供な、ちよいとまたその鎌倉あたりの御別荘がたから御託文を頂きますな、中々これで忙しいんですよ」

「結構ですわ……」

「あなたは……」

「あたしなんぞ、人様のやうに山だ海だつて飛んであるける身分ぢアないんですよ、毎晩あせみづくになつて、一生懸命かせいでますわ」

「どうも、恐れ入ります」

「どうも、恐れ入ります」

「どうも、恐れ入ります」

「どうも、恐れ入ります」

「どうも、恐れ入ります」

「どうも、恐れ入ります」

「どうも、恐れ入ります」

「どうも、恐れ入ります」

「どうも、恐れ入ります」

「だつて、その我儘が利くんだから大したもんぢアないの」

「何が大きしたもん……如きなんざア、出かけようと思やアいつだつて、そんな、しみつたれな、お客様の世話になんぞならずとも、どこいでも好きなどこへ行つて、さんざッばら保養して來られるんぢアありませんか」

「いゝえ、人間いつでも出來ると思ふことは、却つてしないもんですよ。珍しがつて、嬉しがつて、飛んでく人に限つて、裏へ廻つてみれば、碌なもんぢアありませんや。現にあたしを御覽なさいな、かうして眞黒になつて働いてゐても、それ、いま云ふ三千七百五十五圓でせう」

「でも、よく貴方、あたしが分つてね」

「それア分りますアね。おまけに鼻のさきをすれすれにお通んなさるんだもの。一體いやこんな往來なかで、あたしどもみたいなもんが、矢鱈にお言葉をかけたらしちアすまないくらゐは、これでもちやんと心得てるんですけれどね、これを話で云やア、どこそこの角でパツタリ出ツくはした、と云ふやつですからね。正にパツ

タリぶつかりかゝつて、ひよいとお顔を見るとあんだだもんだから、ついそれ、失禮をも願みずな……」

「急ぐの？」

「いゝえ、別に急ぎやしませんけれど、またのことにしませうよ。あたしみたいな男が上り込んでるところを、若しまたひよつと旦那にでも見附かつたりすると、あとがうるさうござんすからね」

「おあぶなうござんすよ」

と、丸三の爺は軽く肩に手をかけ、角の下駄屋の飾窓のそばへ押しやりながら、「それでアつたお言葉をかけちまつたやうなわけなんですけど……」

「あたし、實はちよつと齒醫者さんまで行つて來ようかと思つて出かけたんですけど、痛みとまつたし、あんまり暑いから今日はすわ。急がないんならうちへよつていらつしやいな、なんか冷たいものでもさう云はすから」

「へ、有難うござんすが……」

「急ぐの？」

「いゝえ、別に急ぎやしませんけれど、またのことにしませうよ。あたしみたいな男が上り込んでるところを、若しまたひよつと旦那にでも見附かつたりすると、あとがうるさうござんすからね」

「おあぶなうござんすよ」

と、丸三の爺は軽く肩に手をかけ、角の下駄屋の飾窓のそばへ押しやりながら、「それでアつたお言葉をかけちまつたやうなわけなんですけど……」

「あたし、實はちよつと齒醫者さんまで行つて來ようかと思つて出かけたんですけど、痛みとまつたし、あんまり暑いから今日はすわ。急がないんならうちへよつていらつしやいな、なんか冷たいものでもさう云はすから」

「へ、有難うござんすが……」

「急ぐの？」

「いゝえ、別に急ぎやしませんけれど、またのことにしませうよ。あたしみたいな男が上り込んでるところを、若しまたひよつと旦那にでも見附かつたりすると、あとがうるさうござんすからね」

「おあぶなうござんすよ」

と、丸三の爺は軽く肩に手をかけ、角の下駄屋の飾窓のそばへ押しやりながら、「それでアつたお言葉をかけちまつたやうなわけなんですけど……」

「あたし、實はちよつと齒醫者さんまで行つて來ようかと思つて出かけたんですけど、痛みとまつたし、あんまり暑いから今日はすわ。急がないんならうちへよつていらつしやいな、なんか冷たいものでもさう云はすから」

「へ、有難うござんすが……」

「急ぐの？」

「いゝえ、別に急ぎやしませんけれど、またのことにしませうよ。あたしみたいな男が上り込んでるところを、若しまたひよつと旦那にでも見附かつたりすると、あとがうるさうござんすからね」

「おあぶなうござんすよ」



「ぢア兎も角僕は泊つて行かう。君は君の都合で、歸るなり泊るなり御隨意だが、歸るのだつたら、明日の朝間違ひなく一つ誘つてくれないかね。若しまたその都合もつかないやうだつたら、電話でなりと病院を知らせてくれないか。何しろさう云ふ話は、一刻でも早い方がいゝよ。それで僕が行つてみて、模様によつちア、ちよいと僕東京まで行つて來てもいゝや、手紙ぢアどうもまどろっこしくつて仕様がなからね。何しろ、一生に一度の臨終の願ひなんだから、僕たちもいつものやうな、たな氣持で扱つちアすまないよ。そのお民さんとか云ふ人に對しても、紀尾井町さんに對しても、實際お義理でなく、眞面目な氣持になれるからなア」

「それアさうですよ」

とまでは、ひどく眞剣な調子でうけたが、すぐ瀧十郎はニヤ／＼と笑ひかけて、「然し貴方もお變なさいましたね。なんぼなんでも、それほどとは思はなかつたが……」

「なんぼなんでもたアなんだい。第一それほどどうなつたつて云ふんだい」

戯れに、喧嘩面で突ツ掛かつて行くと、瀧十郎も同じく唇をとんがらかつて、

「だつてさうぢアありませんか。以前の貴方な

ら、中々これくらゐのことで、さうへろ／＼に苦提心を起す氣支はなかつたんですもの、それが……」

「うるさい！」

「それがどうです、——なんぼなんでもでせう？　一言半句もありますまい？」

「いや、君は惡だよ、豪惡だよ……ところで、制妻が、いつぞやセキハン（赤阪）へお伴ねがつた時には……」

「殿中ぢやぞよ」

「無論、……だつたんでせうな」

「だつたとは、何がだつた……」

瀧十郎には、急に意地悪い氣持がおさへられなくなつて來て、故ら相手を苛立たせるやうな、複雑を極めた表情を扮つた。裏とみせてそのまた裏が本當で、とみせたのがまた裏で……、と云つた風な心持のものだつた。

「だつたかい？　それをはつきり云つてもいゝかね？」

「え／＼」

間違ひなく「願」と云ふ隠語が持ち出されることと思ひきめてゐた鼻のさきへ、

「肘鐵砲だつたんだらうと云ふのさ」

三好は、興奮のために少しく青白みながら、

傲然とかうぶひ放つた。

## 茶 斷 鹽 斷

### 一

「もし、もしえ……」

午すこし前の日本橋東仲通りの或る四角で、日傘を肩に、何か考へごとをしながら、薄附で小刻に、つい鼻のさきを突ツ切つて行く二十三四の、生地のみで美しい横顔へ、唾の飛ぶさうな近頃から、かう聲をかけたのは、襟に丸と染めた半纏着の半股引で、見榮もなく紺の大風呂敷包を背負ひ込んだ、この炎人に、例のクリクリ刈の大人道、おでん屋の三吉だつた。

「あら！」

はツとして振り向いた、そのこなしに、自分だけでれて、日盛りを急ぎ足に來かゝつた暑さと一緒に、ぼつと頬を染めながら、「まア、吃驚するぢアないの……」

「いかがです。随分久しくお日にがゝりませんか」

さがつた眼尻に、翁の面にあるやうな皺を疊んで、「ちつとお出かけくださいましな」と云ひたいところですけど、なんと云つても一流の

し、お百度も踏み、茶斷鹽斷の祈願をこめ、一心に平癒を念じてゐたのだ。今ごろになつて、飲みつかれた揚句、夜あかしのおでん屋から、向島へ自動車を飛ばした君のはかない逢瀬などを、かれこれ押振はれたとて、なんの變哲もないのだが、それでも信之に關したことになる、矢つ張り虚心平氣ではゐられなかつた。容子を知らうにも、やたら手紙を出していゝやらどうやら分らず、たまに伊庭や瀬川と云ふやうな遊び仲間の文學者の座敷にでも出た時に、さうさう根問ひ葉問ひするわけにもいかないから、ほんの二三三言の話を、大切にもつて歸つて、あとは眠られぬ床に、あゝかからかと想像してゐるくらゐのもので、心配の種はふえこそすれ、決してへりはしなかつた。——それほどの馴染でもない、彼方では名前さへ碌に覚えてはゐなかつたくらゐの丸三の爺を、わざ／＼うちへ誘つて歸らうと云ふのも、さう云へば、ひどく現金にあたるけれど、實は詳しい容態も聞きたし、よしそれは解らないまでも、懐しい人について、何かと話し合ふことが出来ると思へば、今の幾代には、往來の立話くらゐで、そのまゝ別れてしまひ憎い相手だつた。それだけに、先刻から、第一番に承ねたいことには却つて觸れられずに、

つまらない冗口ばかり利いてゐたのだが、そんな心持が彼方へ通じようわけもなく、舊めかしいことなど押振はれるにつけても、氣の短い幾代は、なんとなくじり／＼して來て、折角せい一杯好意のつもりで云つてくれる言葉にも、碌すツ返事をしなかつた。足もとに影のちびまる日盛りを、氣むづかしげに口を引き結んで、たゞとつと歩いて行つた。

「姐さんは、随分足がお早いんですね」

「え、早いでせう」

「老人の足ぢアかなはねえ……。かうしてお伴して行つて、さアて、何が御馳走になれることやら」

「なんでもあなたのお好きなもの……」

「さうですね。——」

「あなたのお酒はあんまりいけなかつたんでしたっけね」

「え、やりません。酒は序ですよ。紀尾井町の旦那だつて、あんまりはうづのねえ飲み方をな。るから、あんなつまらねえ病氣を引き出しちまつたんでさアね」

#### 四

荒ッぼく云ひ罵つてゐる裏に、けれども親身な氣持は十分あつた。いつそ死んでしまつた後ならば、何も壽命と、却つて諦めいゝけれども、かがへのない一生を、飲み食ひの憤みを缺いたために、死病に取りつかれて、あたら杓にふるとは、あんまり馬鹿げた話ではないか、と氣に入つてゐる人だけに、腹が立つてならぬのだつた。その言葉の裏へにじんだ好意が、幾代にはひどく頼母しかつた。

「ほんとね——」

たゞ一言同意を表しただけで、けれども幾代は、そんな氣持は氣ぶりにも見せず、に、さつきと道を急いで、やがてとある横町に、わが家の格子戸をあけた。

「へえ、こちらですか。どうもまあ、よくもこんなに磨きこんだもんだなア」

云ひながら、丸三は、風呂敷の結び端から片手をはなして、格子の横棧を指の先で撫でてみた。

「大へんなうちよ」

突き當りは丸窓をとつた壁で、右へ三疊のあがり口障子を拂つて、二階へあがる梯子段はまる見え、そのかげに臺所、湯殿、女中部屋ぐらゐがあるらしく、左へ續く奥は、簀戸から簀戸で、ほの暗く、涼しげに、六疊八疊が窺はれた。一結構なお住居ですね」

「いゝわ。それで旦那をしくじつたら、あんとこへ押しかけ女房に行くばかりだから。……あゝ、でも駄目ね、あんないゝお上さんがあつてはね」

「旦那つてば、何は、紀尾井町の旦那、どうも困つたことになつちまひましたね。……儘かあちらと御一緒においでくだすつたんでしたつけな？」

「まア、随分心細いのね、四五遍も行つてますのに」

「さうでしたな、いつも紀尾井町の旦那と御一緒に……さうでしたな」

「さうよ、随分あなた忘れっぽいね。ギア、とてもあたしの名なんぞ覚えてやアしないんでせうね」

「だつてそれア伺ひませんでしたもの」

「あら、あんなことを云つて……」

「さうですか？ 伺ひましたか」

改めて、無遠慮にじろく顔を見詰めながら、「あ、さうか、さうく、さうでしたつけない」

「何がさうでしたつけない……」

何故か、その時に妓がぼろつと頬を染めたと見て、三吉は、日尻の皺を深く、ニタ／＼笑ひ

かけて、

「いや、これはどうも失禮を……、その節はまた御馳走様で……」

「何が御馳走様よ……」

「何がはないでせう、ねえ、姐さん、入金のお女将さんはお世帯もんですつてね」

「知らないわ」

肩を揺つて、日傘の柄を、兩の掌の間に、きり／＼と廻した。

「あ、さうだ！」

三吉は、ぼんと膝をうつて、「幾代さん……、ね、さうでしたか？」

「あら、さんざ話をしといてから、今ごろやつと思ひ出したりして……」

「あ、さうか。どうも、さつきから随分考へてたんですよ。お顔はよく覚えてるんだが、」

自慢ぢアござんせんが、可なりこれで下町の綺麗な姐さん方がいらしつてくださいますからね、ついどうもごつちやになつちまつて……」

「今度こそ忘れられないやうに、是非一遍うちへ連れてつとくわ。さあ、黙つてついていらつしやい！」

優婉みに睨め据ゑられると、三吉は、出ツ商の口を無理に結んで、丁寧に頭をさげた。

「いらつしやいよ」

「へえ、もうどこまででもお伴いたします」

### 三

幾代は、先に立つて、もと来た道の方へ引き返した。斜うしろに従つて、背負つた風呂敷包みの重みのために、龜の子のやうに首を前につきだし、ちびた朴蘭を口和つゞきの往來にカタコトと鳴らしながら、三吉は、幾代の名を度忘れしてゐたことの言ひ譯を繰返し、その代り思ひ出したとなると、一遍にいろんなことが解つて了つたと云つて、またしても入金のことをちよいちよいはせたりした。そんな内證ごとまで、どうして知つてゐるか不思議だらう、と云つた風な口吻だったが、それくらゐなことは、信之に頼まれて、三吉が自分で呼んで来た自動車なのだから、あとでその運轉手にでも訊けば、すぐ行先くらゐ知れる筈で、幾代にとつては、大して痛くも可笑しくもない話だつた。五月のし／＼雨の日、久し振りに逢ひ戻つてから、急に兩方うちとけた氣持になり、それ以來、信之が公制廷で卒倒して床に就くやうになるまでの二月半ほど、三日にあけず逢ひ續け、逢ふ度ごとに深い愛情にはいつて行つたのを、不治の病と聞いてからは、日頃信心の金毘羅様へ日參

聲をひそめて、

「それ、ついそこに立つてますよ」

窺いてみると、三吉が、前に手をにぎり合せ、免狀を貰ふ子供のやうなしほらしい容子をして、ぞつと頸をうなだれてゐた。

「あら、どうしたの？」

「へーへー」

眼尻をさげて、馬鹿に嬉しうに、「ちよいと、おみ足を洗はして頂かうと思つて……」

「櫛はないことよ」

「いゝえ、いけませんよ。この上うちぢう足あとだらけにして歩いたひにやア、今度こさア女中さんにつまみ出されちまひますよ。ねえ、あな……」

と、急に言葉をかけ、目を向けられたお波は、呆れてぼかんとしてゐた顔を、それでも有難にすぐ笑ひほころばして、

「どういたしまして、どうぞそのまゝ」

「どこへ行つちまつたのかと思つてたら、いつの間にかこんなところへ廻つて來たりして、ほんとに仕様のない小父さんねえ」

「さア、ほんとにさ、雑巾バケツを貸してくださいなね」

「一度云ひだしたら中々きく人ぢアないんだか

ら、うるさいから、お波、貸しておあげよ」

「うるさい……？」

「うるさいわ、ほんとに。よそのうちに行つて、さうなんのかのと世話をやかすもんぢアないことよ」

「へーい」

「さあ、足をふいたら、さつさとこつちへ上つて來るんですよ」

そのまゝ幾代は臺所を出て、ほんの五六本青いものを植ゑ、植木棚に朝顔の鉢など並べた、猫の額ほどの庭から、たまに判の釣葱にチリ、ンと風鈴を鳴らすほどの風を入れる奥の八疊へ來て、べたんと横すわりに腰を落した。

糊けのないゆかたの肩がすべつて、人には告げよ夏瘦と、あはれ幾代は、身も細るほどの思ひに、大都の炎暑をさへ忘れてゐたのだ。

## 六

幾代は本名を隅田いくと云つて、二代前のことは話にも聞いたことがなく、従つていかなる人の裔とも、今もつて知れないほどの不幸零落のうちに生れて來た女だつた。九尺二間の裏長屋に、もの心がついた頃の父親は、あとで思へば、やつと三十を一つか二つ出たばかりだつたらうか、淺黒い、上唇に一筋線で刷いたやう

な隈のはいつてゐるのが、窪んだとよりは、パツチリしたと云ふ印象を、涼しく澄んだ兩眼に與へてゐる、丈のすらりとした高い、江戸前の、素晴しい、男だつた。後に聞くと、隅田の姓は母のもので、その男が果して實父かどうかとはつきりしなかつたが、兎に角彼の女の十二歳までは、さう云ふ社會の、年若な父親としては、よその子の手前も恥しくなるくらゐ可愛がつてくれた。その時分の母親は、むくみの來る心臟病で、青ンぶくて、唇まで厚ぼつたくなつてゐた。人の話には、吉原で何家の某と云へば、五本の指には洩れなかつた名妓のなれの果ださうだが、わが母親として眺める子供心にも、あんまり氣持のよくない顔かたちだつた。それに、立居振舞の鈍く、しぶくげなのと不釣合に、氣性はいつも張りつめてゐて、少しでも何か氣に入らなことがあつたと、せい／＼息を切らしながらも怒鳴りたてる。相手が良人だらうと、良人の仲間達の習察だらうと、家主だらうと、そんなことにちつとも顧着はなかつたから、まして幼いおいくは、上日使ひに母親の機嫌を窺ふやうな姫に育つた。煮たきぐらゐはぼつ／＼と自分でやつたが、その姿を取ぢてか、おもてへは決して出なかつたために、おいくは、少し大袈裟に云



と、まだ荷を背負つたまま、無遠慮に、あちこち見廻して、「それにまア、どこかも塵ツぱ一つおつこつてませんが、姐さん、あなたよつほど綺麗すきとみえますね。その代り、これぢア女中衆は泣かされらア」

「ところが、その女中さんが綺麗すきで、あたしが散らかして歩くそばから／＼と片づけられてるの。まるでお尻から掃きたてられてるやうな氣持よ」

「ビシャリ／＼簾戸をあけ放して、一旦奥の八疊まで行き、神棚の前でちよいと手を合せて、すぐまた出て來ながら、「お波、お客様ですよ」

「姐さん、あたしよしましたよ。この風態であるうぢアないや、これア」

「ぢア途中來る間は、その風態であるうぢだと思つて、内心輕蔑してたのね」

「そ、さう云ふわけぢアないけれど……」

と、故意とドギマギ面喰つた風をしてみせて、「暑いや、これア、どうも馬鹿に暑いや」

「兎も角もその風呂敷包をおろしたらどうなの」

「へい／＼、なんだか知らないが、まるで叱れに來たやうな氣持だ」

そこへ出て來た女中に、

「お紅茶冷してなかつたかしら」

「氷を入れて、冷蔵庫に入れてございます」

「あらさう、よかつた、頂戴な……さあ、おあがんささいつてば、何してるのよ」

「氷を入れて冷蔵庫に入れるつてのは、一體どう云ふんだらうと思つて、今いろ／＼考へてたところなんですがね……」

「お紅茶のいれ物に氷を入れて、それをまた冷蔵庫に入れてあるんぢアないの」

「あ、さうですか、あたしアまた、冷蔵庫に氷を入れて、そこへ入れてあるつて云ふのかと思つて、さうするとお宅の冷蔵庫は、普段は氷が

はいつてないのかしらと思つて……」

「くだらないことを云つてないで、さつさとおあがんささいなね」

「おや／＼、まご／＼していると、氷を入れて冷蔵庫になかへ擲り込まれちまひさうな見暮だ」

## 五

上り柵に、どつこいしよと荷をおろしてから、沓脱にかけた自分の足の埃に氣がつくと、丸三は黙つておもてに出て、四尺ばかりの露路へはいり、水口に立つて、

「ちよいとすみませんが、あなたバケツを貸してくださいませんか」

だしぬけに聲をかけられて、冷し紅茶を客に出す交度をしてゐた女中のお波は、叱りつけ振向いたが、そこにのそりと立つてゐる丸三が、たつた今まで玄關の方で何か云つてゐた客人だらうとは思はずに、

「どなたです」

と、かう云ふうちの者らしい、ちつとでも弱味は見せまい鼻づ張りで、いやにきつぱりする。

「へッ」

ひとを小馬鹿にしたやうな泰々しさで、膝まで手をさげ、「手前、四谷に屋臺おでんを渡世に致し居ります丸三……、以後お見知り置かれますやう」

「いやだわ、あたし……」

二十五になる、しつかり者の箱屋も、不氣味になつて來て、そろ／＼と腰を挫け、奥の方へはいつて行きながら、「姐さん……」

「何よ」

玄關に姿が見えないので、どこへ行つて了つたらうと思ひながら來かゝつた幾代は、出音がしらに、お波のへんてこな顔つきを見て、「どうしたのよ」

「なんですか、氣遣ひみたいな人が來て……」

よると立つてゐるやうな小庭がついてゐた。浅草の待合に、女中奉公をしてゐた田村かめと云ふ、――堅肥りで、髪の毛が著しく縮れてゐて、赤味のさした肌にてりのある、愚鈍な、その代り飛切りの上人間だつた。――下根岸の妾宅、と云へば、おツそろしく粹に聞えるが、その内容は、實はこんなわけだつた。

こゝでおいくは、十五の年齢まで育てられた。妾のおかめ一人の時には、なんのかのと口やかましき追ひ使はれはしても、どこかしらに、微かながらも彼方から愛を求めて来るやうなところが感じられて、氣持の上では、決して慘とは云へなかつた。そのために却つて、從順の裡に一種の傲を藏した、あまり可愛氣のない性が萌して來た。隠居は、一日と日に見えておいしく對する愛情を増して行つた。猫舌可愛がりに、膝の上に載せて撫で廻したりするには、彼の女はもうだいぶん大きくなりすぎてゐたが、それでも構はず、自分に甘えかゝらせようと思ふばかりに、まづ自分の方で甘つたるいの利きやうをししたりした。おいくの方が、大人の心持で、そのでれつき加減に呆れて了ふやうな時があつた。

「また始まつた! なんですすウ、みつともな

い!」

おかめは、隠居のさう云ふ谷子を見ると、こればかりは馬鹿々々しく立派な商並をむき出して、きまつて怒鳴り立てる。

「何が、見つともない。俺の娘を俺が可愛がるに、別に不思議はなからうぢやアないか」

「へッ、俺の娘……、どこまでお日出度いんだか……」

「なに、お日出度い? 俺がお日出度いつて云ふのか? こゝの娘はな……」

思はず云ひ募らうとして、さすがに老人らしく横を向いて、ぶつ／＼捨臺詞を呟きながら、日向にごろりと長くなつたりするのだつた。

## 八

大體から云つて、おいくの下根岸での生活は、それ以前ほどの苦しみがなかつただけに、だらけた感じのものになつて來た。それには、短氣の男と、無智で貪慾な女との、なんの檢束もない共同生活に醸される、ひどく調子の低い、下品な氣圍氣に影響されるところも少くはなかつた。さうしてそこに、二年の月日が經つて行つた後に、彼の女は、吉原の或る藝者家に抱へられることになつた。

軒並下駄の鼻緒を内職にしてゐるやうな、名

のみ豪勢な花川戸の陋巷に、夕焼空の下を、溝板を踏んで尋ねて來た時分の隠居は、あたりの卑賤なためばかりではなく、どこか大店の旦那らしい上品な、鷹揚なところもあつたのだが、長男がうんと株をもたされて社長に祭りあげられてゐた製菓會社が、人にも話せないやうな馬鹿々々しいつづれ方をして以來、ほんの申譯に煙草錢くらゐのものしか仕送つて貰へなくなつて、急に根性が貧乏くさく縮かんでしまつたせむか、狡猾な、普段から娘子供の賣買や鞍轡で飯を食つてゐるやうな爺に見えて來た。昔は兎に角堀内の旦那で通つてゐた人が、臆面もなく、舊い馴染の老奴を尋ねて行つて、立派に祝をして引かせた妓の末路から、自分の今の身の上を、憐れぶく物語つて、最後に胤の知れない私生兒で、少し纏まつた金を借りたいと切り出したのだ。その老妓には斷られたが、泣きつくやうにして紹介だけして貰つた、その頃賣れ盛りの一流藝者のうちに、やつと話がきまつたのは、おいくが十五の春だつたが、それ以來十九の年齢に姫娘で五六ヶ月引いてゐただけで、その後は今の日本橋から出るやうになつて今日までの十年間を、彼の女は、客と云ふものに寄生して、狭苦しく歪んだ一隅から、人生の種々相

へば、足が立つてよち／＼歩けるやうになると同時に、使ひ歩きに追ひこくられたのだ。

おいが十二歳の春から初夏へかけて、母親の病がだん／＼あらたまつて行つた。そこへ、眞赤に空の焼けた或る夕方、身なりもしして賤しくはないが、それよりも人品のいゝ、白髪頭を知り知り込んだ、骨組の歳まな爺さんが尋ねて來た。その爺さんと母親と、母親と仕事から歸つて來た父親と、父親とその爺さんと、仕舞に三人が一緒になつて、永いこと何かごとと話合つてゐた。夜おそく、歸りがけに爺さんが、上り口の板の間でひとりぽかんとしてゐたおいの頭へ軽く手を置いて、「これがいく坊か。おそくまでよく日が覺めてゐるな。どうだ、小父さんと一緒に小父さんのうちに行かないか。どうか」

軽い反感を感じながら、即座にいや／＼をすると、笑つて、

「可厭か。それア困つたな。今夜は小父さんが來てゐたんで、いつまでも寝かされないで可哀想なことをしたな。今度來る時には、なんか土産を持つて來てあげようよ」

そんなことを云ひながら、ガツ／＼顔を見てゐた。——これが實の父親だとも云ふ。また、そ

の人に圍はれてゐた間に、いゝ男の嘉と出來て、夜逃げをして兩棲に隠れてから後に、腹に宿つたのだ、とも云ふ。

六月十二日に母親が死んで、形ばかりの葬式をすませた翌日、もう一度この白髪頭の人が現はれて來た。そしてそれきりおいは、今に至るまで、色の淺黒い苦み走つた父親——でないとしても、父親らしい愛情を傾けてくれた男の顔を見ないのだ。昔を思つて懐しいと云へば、たゞその人の面影くらゐのものだつた。

おいが引き取られて行つたのは、下根岸の、その頃もう四十二三と見えた、田村かめと云ふ、白髪頭の爺さんの妾のうちだつた。

## 七

白髪頭の爺さんは、里町へんの舊い藥種屋で、堀内と云ふの、隠居だつた。若い頃から河東節に凝つて、自慢の咽を聞かせたさに、少しでも財布がふくらんでゐれば必ず華街へ出かけてはたいて來る、その間、何もかも忘れつくすと云ふほどの深はまりもなかつた代り、お相三味線と云ふやつで、藝の方の友達とも、いろ女ともつかないやうなものは、あつちこつちにあつたと云ふ。誰がやつたところで、凡そ同じやうな商賣柄ゆる、掛引や思はくに手造ひがあつたわ

けでもないのが、時勢の變遷と共に、じりじりと居がさびれて行つた。で、親族會議と云ふのにかゝつて、高等商業を出たばかりの長男に家督を譲られる羽目になつたのは、もう二十年も前の、彼が四十七八の働き盛りだつたけれど、いゝ想に家産を擲つほど意氣もないだけに、舊い家業を守つて行くと云ふやうなことには、爪の垢ほどの興味もなく、くさ／＼しきつてゐた折柄だから、願つてもない仕合せばかり、息子から宛がはれる小遣ひに、いつも決して多い少いを云はず、足りるだけのことで、ほゞ今まで通りの生活が續けられるのに満足してゐた。それには、女房には尻に先だたれて、氣樂な獨り身でもあつた。

下根岸の妾は、おいが引き取られて行くついで、二三年前に圍はれることになつた者が、その前から長男が新しく始めた商賣が思はしくなくて、自然隠居も足らぬがちに、相手になつてくれる女もだん／＼品くだつて行つて、今ではもう河東どころか、端唄が十ばかりと、長唄が三つ四ついけるくらゐの代物になつてゐた。家は六疊、二疊、二疊に藥所、それでも上地柄だけに、さう埃にもまみれない桐橘垣のうちに、鎌倉橋葉の下枝の枯れたやつが二三本ひよろひ



めの寂しきはあつても、はしたない願望嫉妬の念にとり逆上るやうなことはなかつたのだけれど、たゞその話が、好きな男の口から、優しく云ひ聞かされたのではなくて、思ひもかけぬ他人によつて齎されたのには、はかなくも悲しい涙がせきあげて来るのを、どう耐へやうなかつた。いろ／＼思ひ迷つた末に、結局なんにも知らない態で、男からとかくの挨拶が来るのを待つことにした。

菊日和のあたゝかい暑が、静かに／＼移つて行く縁先の柱にもたれて、何気なく空を仰いで、微にほつと溜息をつく男の容子を見ると、幾代はたまらなくなつて泣き出してしまつた。なんにも云はずに、男もハンケチを目にあてた。それだけで、話すことの必要も何もなかつた。感情は、互の胸に溶け、流れ、隈もなく行き擴がつた……

産は重かつた。死兒を生んだあとでも重態が續いた。林はその枕もとへも落つては坐つてゐられないうやうな、結婚前の體だつたので、知らせに驚いて駈つけて来た堀内の、もうすつかり老妻きつて了つた隠居に、立ちがけには、今すぐでも打てるやうに印紙まで貼つた電報用紙を、必ず一枚づつ預けて歸つて行つた。

器者も不思議がつくらぬに、幾代は十九の厄を落して、やがて快方に向ふと、どん／＼もとの體に返つた。林の新郎新婦の寫眞が載つてゐる婦人雑誌の口繪を、偶然目の前に開いた時にも、寢床の上に仰臥したまゝ、たゞちよつと微笑んだだけで、落つた、以前よりも數倍落つきはらつた彼の女になつてゐた。

## 十

病氣は全快したが、幾代は、もう一度前の上地から出るやうな氣にはどうしてもなれなかつた。藝者稼業をぬけられないのは仕方がないとしても、せめて全く新しい周囲のなかに自分を見出したかつた。そんな相談も、矢つ張り林を相手にするよりほかはなかつた。吉原の方の抱主に、さんざ可厭がらせや因業なことを云はれた揚句、それでもどうやらかうやら今の土地へ來てひろめをすることが出来た。

土地が變つてからは、目に見えて商賣熱になつた。金がほしくてではなく、たゞ一日も早く藝者氣質になつて、その日その日の勤めつらさを忘れたかつたのだ。謂はば「職」云ふ衣を身に重ねて、わが心の動きをそとへは見せず、幾分とも感じを鈍らせて置きたい氣持になつて來たのだ。泥水と呼ばれる、その稼業の水

に、そつくり身をひたして、心までも冷ざらしたのだ。そして、彼の女はそれに、可なり成功したと云つてよからう。五年たゝないうちに、生えぬきでもない幾代の名が、約束の數にもれることは稀になつて來たのだから。

結婚後の林は、業態にも似合はない以前の律義さをだん／＼失つて行つた。大人の圖々しさ、狡猾さ、複雑などを、それに裏づけるなんの信念もなしに、たゞこの上もない世間智として喜んでうけ入れたがる生意氣ざかりの年頃が來たのだ。自然、幾代一人を大事に守つてゐるやうなことを、友達の手前にも寧ろ恥として、あつちこつちを食荒して歩いた。幾代に對してする筈のものを、一月三月もほつたらかして置いたりした。さう云ふことをしたあとは、きまつてまた疑ぐり深く、嫉妬ぶよくなつた。酒は飲まないのだが、ちよつとしたことで顔色を變へて慍りだし、時には手荒なまねもした。どうせ俺もかうした水商賣だから、年ぢう出来不出来はあるんだ、いゝ時には、何を措いてもお前のためになつてやる、その代りには、手話つてゐると思つたら、お前の方でも少しは辛抱して、へんなまねをして俺の顔へ泥を塗るやうなことのないやうに、——それくらゐな義理人



に面して來たのだ。

藝者としての幾代は、決して出しや張りにならない程度で、一流らしい自恃を以て、どう云ふ階級の人の話でも相應に理解し、ぼろを出さずに、さうかと云つて上の空にも流れず、明るく面白く會話を延ばして行く鮮やかな手際を示した。藝ごとに熱心な方で、太鼓は土地でのうち手だったし、唄は清元をよくした。要するに藝者らしい藝者、——借りものと云ふ感じの更らない藝者だった。けれども、その裏で彼女のふんで來た生活は、ひどく藝者らしくないどころか、素人にも稀な忍従と克己の、世帯じみたものだった。

吉原に雛妓で出て間もなく、彼の女に戀した若者があつた。鐵橋の近くに大きな店を構へてゐる林と云ふ仲買の若旦那だった。二年ほどは、たゞ「仲よし」と云ふやうな意味で始終よばれて行き、氣の張らない面白座敷と喜んでゐた。きまつてよばれる三四人のうちで、殊に幾代だけに篤くすると云ふ風は氣ぶりにも見せなかつたから、なんにも知らずに、無邪氣に、彼女の女の方でも好いてゐた。そのうちに「仲よし」仲間の一人が、若旦那に對する戀の心を、だんだん露骨に見せ始めた。かゝつて來ると、第一

番に駆けつけて行つては、仲間の腰口をきいたりして、それとなく水をさし、その人の周圍を、自分に頭のあがらない小さな子どもばかりで取り巻かうと企てた。それに對する若旦那の反感を動機として、急にあとの二三人が近づいて行つたなかに、幾代は生得の負けン氣から、林さんと聞くと、胸を轟かして、何を措いても飛んで行くやうなことになるつて了つた。

## 九

それで俄に勇氣づけられた林の若旦那は、さすがにすることが大掛りで、茶屋をもつてうちの方へ正々堂々と、幾代の世話をしようとし込んで來た。その時の彼の女は、不思議な習慣によつて、既に純處女ではなかつたけれど、さうかと云つてこれときまつた旦那などは、土地柄から云つても年から云つても、まだあらう筈はなかつた。抱主から云へば、手つかずの大した賣ものだった。それにしては、いくら金に絲目をつけないと云つても、相手の若くて綺麗なものが、何よりの傷だった。若い同士でかつたとなられては、商賣にはさはるし、とどのつまりも見えすいた話だった。で、暫くごたついた揚句、矢つ張り目の前に並べられる金には勝てないで、公然と二人の仲が結ばれることになつた。

幾代としては、それまで戀と云ふほどの氣持はなかつただけで、そんな風に、まるで素人の結婚にも等しい初心さで一緒にになり、一週に少くも二度以上逢ひ續けて行くうちには、落つた、しみみとした愛情が湧いて來た。よその座敷の辛さも苦にならないやうな幸福が二年ほど續いてから、彼の女は身重になつた。鎌倉の山手へよつた百姓家の離れを借りて、そこで出産の時を待つてゐた。

林の總領息子は、そのとき二十八で親たちや世間の手前、相應以上のうちから嫁を迎へることに話が決まつた。幾度も鎌倉まで出かけて行つては、云ひそびれて歸つて來たりしてゐるうちに、自然と足遠くなり、手紙も書き憎くなつて了つた。心細く、いやな豫感にばかり悩まされてゐた幾代の耳へ、思はぬ方面からその結婚話が傳はつて來た。そのことでは、然し、彼の女の心はさして痛みはしなかつた。晩かれ早かれ、さう云ふ時の來るのは、解り切つてゐたし、若し萬一にも自分を正義にとでも云ひ出されたとしたら、それがどれほど熱心な乞ひであらうとも、決してそんな無理な境涯に身を置かずやうなあと先見すはしまい、飽まで斷り通さうと、しつかり決心もつけてゐたからで、諦

思ひもかけないところで、さう云ふ幾代の苦境を聞き知つた信之は、早速會ひに行つて、なんにも理由は云はずに、もうこれきり別れようと切り出した。すぐ幾代には、その裏の事實は察しられたが、あらはにそれと云はない先方の筋りに對しても、こゝで何もかも自分の感情を押し殺して了ふのが本當だ、とつぶやうな、殉情的なほど犧牲の念に驅られた不思議な氣持から、涙一滴見せずに、その申出に頷き返した。さうして、あのいつかの、五月の逢ひ戻りまで、一口彼等の仲は絶えてゐたのだ。

然し今度はもう事情が變つてゐた。好きな人と逢へばこそ、どんな辛い虐待にも堪へられて來ただけれど、もうその人とも別れて了へば、自分ひとりならどうなつても構はない、義理知らずとも不人情とも、云ふ人の口に任せよう、――さう云ふ捨鉢な度胸が据つて、十年にもなる旦那との仲を、なんの未練氣もなく綺麗に斷つて了つた。普通の考へにすれば、今こそ天下晴れて旦那の氣に入られようと思ふ、曉になつて、たゞ可厭ですからとばかり、茶屋の女將をさんざ手古摺らせて、我を張り通したのも、全く幾代が藝者らしくもなく、へんに小むづかしい道義心から來てゐた。それが理窟にもならな

い正義だつたのだ。――で、今では彼の女も、商賣に縛られるほかに、どこからも文句のつけ手のない自由な體になつてゐた……。

## 十二

折から信之は、普賢の事件で、心持の高揚した日々を暮してゐた。體にも暇がなかつた。それでも下町の方で夜食でもすれば、お豐と云ふ惡口相手のゐる待合常久家によつた。なんと頼んでみても、もうほかの藝者は呼んでくれなかつた。三時間もゐて、ほんの二十分幾代の顔を見て歸るやうなこともあつたが、賑かな座敷の好きな信之が、だん／＼それを喜ぶやうになつて來た。第一審の公判廷で卒倒するまで、明日の用を控へてゐない時は泊つても行き、ちよつとの間でも二人差向ひに、五月の小雨の日のやうに、いやに理窟っぽい話やら、さうかと思ふと他愛もない冗口を利き合つたりして、はたの見る日も氣持のいい、靜かに落つた深い情合へはいつて行つた。

さう云ふ二人の關係とは、夢にも丸三の知らう筈はなかつた。いゝ年齢をして、やゝてれ加減に、天井、柱、内規の木口を見る風で、あちこちへ顔を振り向けながら、その實は、素足の荒い疊ざはりを氣にしながら、奥の八疊の敷居際

まで來て、窮屈さうに膝を折つて坐つた。  
「中々しつかりした御普請ですねえ」  
「さうですか。あたしにはなんにも分らないの」  
と、やゝ素直なく答へて、「お波、お紅茶をあげて頂戴ね」

「いえ、もうどうぞ」  
客と主人の前に、コップが汗をかくほどに冷えきつた紅茶を置いて、いやにきちんと堅くなつてゐるこの不思議な來訪者を盗み見すると、

ブツと吹き出しかけて、お波はあわたしく立つて行つた。それを横目で見ながら、三吉はすまし込んで、  
「いゝお女中さんですね。あのどうも腰つきと云ふものが……」  
「まあ人へんなまの上手ね。さう一々おほめにあづかつて、四谷と違つてこの邊では、丸三つて云ふやうなおいしいお料理屋さんもありませんしね……」  
「恐れ入ります」

ニヤ／＼しながら頭をさげ、序に紅茶のコップを取りあげて、「御遠慮なしに頂戴いたします」  
ゴクリ／＼咽を鳴らして、さうまさうに飲

情はわかりさうなもんだ、よくそんな風に云ひ出した。まるで水の手が切れさへすれば、女と云ふものは、前の男からすぐ次の男へと移つて行くものときめ込んでゐる口吻だつた。けれどもその底に、林の眞實が語られてゐないわけでもなかつた。なんと云つても、初戀以來つゞいて來た女のこと、ほかの浮氣は浮氣としても、矢つ張り幾代に對する執着が一番深かつたのだ。日本橋へ出て二年目に、彼の謂ふ、出來のいゝ時があつて、立派に祝をして、自前にしてやつてもゐるのだ。幾代は、身に疚しいことはないけれど、いつも大人しく打たれたり蹴られたりしてゐて、それで別に男を恨めしくも思ひはしなかつた。

然しかう云ふ關係には、それ自體のなかに、はやくも破局は十分に芽ぐんでゐた。寧ろ、それを意識の上底の下に感じてゐることによつて、どうやら續いて行くやうな態さへあつた。意識の閣下に押し鎮められてゐる倦怠や不満足は、常に解放を待ち望んでゐたのだ。

そこへ信之と云ふものが現はれて來た。千を以て數へられるほどの男の心を、彼の女の氣持では、兎も角も觀て來たつもりでゐたが、そのなかのどの型にもあてはまらないやうなもの

を、臆けながら信之の裡に感じた。最初は、その珍しさで惹きつけられて行つた。それから、いやに淡々としてゐて、易くものごとに動きさうもないのが、不思議な魅力をもつて、頼母しくも懐しく感じられだした。

## 十一

信之の方でも、決して彼の女を嫌つてはゐないと感じられた。けれど幾代は、出來るだけ自分の氣持を抑へ鎮めながら、大勢一緒の座敷でばかり半年の上も逢ひ續けた。けれども、人の感情は、言葉とか、眼色とか、振舞とか、さう云ふ形あるところではかり現はされるものではない、心から心へぢかに、なんの仲媒もなく、通ひ傳はる温か味は、覆ひ遮らうにもすべのないものだ。水の低きにつくやうに、どこに一つ際立つた言葉や目つきが父はされたのもなしに、自然々々と心が相寄り、體が近づき、さうして或る夜の激情が、隙間なく二人を結んで了つた。

これに、良心の關所を大手を張つて通らせられる幾代ではなかつたけれど、さうかと云つて林の前に事實を告げて了ふほどの勇氣もなかつた。義理人情へ締めてもそれは出來ないこと、考へたかつた。良心の命によつてつく嘘の、

この世の中にあることを、感謝と傷心と認めてゐる彼の女としては、そのために自分ひとり苦しがつてゐるのが、最上の道徳だと思ひ諦めるよりほかはなかつた。林にも信之にもなんにも聞かせずに、あらゆる答を自分ひとりの胸にうけようとした。

驚くばかり行き届いた、細かな注意を拂つて、内證の上にも内證にしてゐた信之との逢瀬も、然し度々なるにつけて、ちらほら人の口の端にのぼるやうになつた。何事もない時分では、影を形に疑はれてゐたくらゐるだから、鏡の林の耳からこの噂が逆れてゐようわけはなかつた。夜更とは云ひながら、往來なかで、靴のまゝ腹を蹴飛ばされ、軒下に寄せてあつた手車に倒れかゝつて、梶杓へいやと云ふほど、脾腹を打ちつけたこともあつた。そんな日にあへばあふほど、却つてあだびとの戀しさは増すばかりだつた。さうかと云つて、林と云ふ人も、心から氣の毒に思はれて、どうしても、きつぱり切れとくれとは云ひ出せなかつた。ほんとうにすまないことをしてゐるのだから、うち打擲で氣が晴れるものなら、あたしの體はどうなつてもいい、そんな氣持で、心の底から詫言入りながら、大人しく虐められてゐた。



「げぢ〜よ！」

「げぢ〜？」

「え、げぢ〜だわ！ それくらゐなら、一生懸命勉強してどんな病氣でも癒せるやうにちアんとするがいゝぢアありませんか。それをさ、自分たちに癒せない病氣は、みんな死ぬにきめちまふなんて、一體生意氣よウ！ そんなこと云つたら、神様も佛様もないわけぢアないの。いやよ！ あたしそんなのいやだわ！ げぢ〜！」

「えらいー」  
ボンと鐵手を打つと、丸三は、酸っぱいやうな口つきに出ツ齒をかくして反身になつた。「ああ、えらいことを仰有る……」

「何よ、褒められたつて嬉しくないわ」

幾代は、ほんとに子供のするやうな眞面になつて、「あなただつてげぢ〜よ！」

「それアもう、無論手前もげぢ〜です」

いつになく三吉も本氣だつた。ごくりと喉を飲みこんで、もう一膝のり出し、「いや、然し有繫に紀尾井町さんだ！ 立派なもんなんだ、これならば立派なもんです！」

いきなり盤に兩手をついて、ベツタリと平身低頭した。……幾代はハラ〜と落涙して、な

んにも云へなくなつて了つた。

十

「いや、恐れ入りました」

と、顔はあげたが、いつばい涙のたまつた幾代の眼を見ると、すぐまた三吉は、肩胛骨の間にガクンと首を落して、「それでこそ……いや、どうも實に……」

「あら、大へんねえ」

忽ち笑顔になると、氣取ツけもなく袂のさきで眼を押し拭ひながら、「だつて、あんまり口惜しいんですもの」

「然し姐さん……」

で行きづまつて、首をかしげ、横から見あげるやうにまじ〜としてゐたが、急にあとを早口に、「おそばへ行きたいでせうねえ」  
「それア……、でも諦めてるわ」

「よろしい！」

と、膝頭に置いた手を、颯のつけ根へ引きつけ、胸板を突ツ張らせたまゝ顔を差しよせて、「なんとかしませう。きつとお達はせ申します！」

「そんなことが……」

「いゝえ、出れます。まかり間違つたところで、丸三のお出入が叶はなくなるまでのこつてさ

ゞ。なアにあなた……、それに第一、一生一度のことぢアありませんか」

「いやなの、それがいやなの！ あたしが逢ないことは、それアもうよく諦めてますけれど、一生に一度なんて……そんな風に、……あの方の御病氣については、あたし決して諦めてなんぞおないんですからね」

「さア、癒るもんとしても、姐さんの氣としたら、たゞの一日でもおそばでお世話がしたい筈です」

「いゝえー」

「嘘おつしやい！ そんな瘦我慢を云はないで、あたしにお任せなさいましなね！ 決して悪くは計らひませんよ。あなたのお心持は、今の……さうだ、あのげぢ〜で一遍にあたしのお肚の底まで、ちゃんと落ち込んで來てゐるんですから、どうぞ御安心なすつて、お願いだからあたしに任しといてくださいよ」

「あたしはいや」

聲低ながらしつかりと、「それアね、あちらから來いと仰有つてくださるのなら、それアもう何を措いても飛んで行きますけれど、あたしの方から……」



み乾すのに、思はず幾代は見惚れてゐたが、ふと心持が急きたつと、一時も早く訊きたいことが、山ほどあるやうな氣がして來た。

「あなた、しよつちう紀尾井町さんへお伺ひしてるの？」

「へえ」

と、息を切つて、「よく冷えてますなア、これ

ア……」

「よかつたら、どうぞお代りを……」

幾代は、どこかの配りものらしい朱塗の小盆ごと、自分の前の紅茶を押しやつて、「綺麗なんですから……」

「いえ、もう」

ちよつと遠慮しながらも、残つた滴まで吸ふやうにして、「あゝ、これア結構だつた」

「あがれよ」

「でも、姐さん……」

「あたしは……」

うちの者にさへ告げない心願を、優しく笑ひ紛らして、「いまほしくないの」

「日盛りを、あんなにとツとと歩いていらしつて？」

「えゝ」

「ぢア、御遠慮なしに頂いちはう」

丸三はもう一杯、ものゝ見事にあふりつけて、ほつと息をつくつと、

「あゝ、うまかつた〜」

### 十三

これでやつと少し落ついた、と云ふ風に、手の甲で口のはたを横撫に拭きながら、ひと膝のり出すと、

「なんです、紀尾井町さんですか？」

「えゝ」

「それア時たまお見舞にヤア伺ひますけれど、旦那はもう夙から形のあるものなぞア咽を通せないのですから……」

「で、一體どう云ふ御容態なの」

「さア、前からあゝ云ふ瘦形の方ですから、さほど瘦は目にたちませんけれど、何しろもうどうも……」

と、膝頭に兩手を突つ張り、高まつた肩の間に垂れた首を、二三度力なく振り動かしてみせた。

「それアね、痛と云へば、どうにも仕様がななんだつてますけど、でも、あの病氣が出るにしかアまだお若いんだし……手御で助かつたつて人の話も聞いたことがあるしするから」

「えゝ、その御相談もあつたやうですが、もう

今からぢアむづかしいさうです。ラヂウムとか、ぶぶ……なんでもかう光るもんで、糖栗粒ほどもありやア何萬兩とかする藥だつてええすが、そいつを、今んとこまア上からそうツと宛がつとくらぬことで……それだつて、氣体めみたいなものださうですけれど……。それにね、いけないことにヤア、紀尾井町さんの御先代様が、矢つ張りおんなじ病氣でお亡ななすつたんださうでしてね、だもんだから、——その時そばに附いておいでなすつたもんだから、何から何までちアんと御自分で御承知でさア。だから、ちつとも騙しが利かないで仕様がないつて、奥さんもこぼしておいででしたつて。それにまあ見えて、なか〜氣むづかしいところがまありですからね……」

相手の顔に眼を据ゑて、ぢツと聞き澄してゐた幾代が、その時、さも腹立たしげに述べて、

「氣むづかしいうちは、病人、まだ〜大丈夫よ。何も、今からそんなに氣を落しちまふことアないと思ふわ。お醫者様がみんな進を投げちまつてからだつて、不思議に助かつたなんて話も、いくらも世間にはあることなんですもの。自分たちに解らないからつて、それで死ぬにきまつたもののやうに云ふなんて、一體お醫者は

「なんだ、東京までもたせる氣なんでしょうか」  
 「いや、そりやまア小町園か小はん亭あたりへ行つて食つたつていゝんですがね、久し振りでうまい西洋料理かなんか、……風月でもよし、ライオンもちよつと悪くないな」  
 「どうも然し、東京まではちつと……」  
 「もちさうありませんか。ギア、中をとつて横濱……」  
 「あ、支那料理がいゝや」  
 「よろしい、ギアすぐ行かうギアないですか」  
 そんなことで、急に勢ひづいて出かけて來たので、西へは廻つてゐたが、まだ日は高かつた。で、特にこの、東へ奥まつた小部屋を選んだのだつたが、窓が少いところへ、隣がくツついて建つてゐるので、薄暗いながらにちつともひやりとはせず、なんとなくあただが歴しつくれるやうだつた。

はいるなり、二人とも夏羽織や足袋をぬいで了つて、時はづれの、ほかに客とともない、靜かな、寧ろ陰氣にさびれ果てた感じをどうにか引き立てようと、まづどつしり腰を据ゑて、十分くつろぐ氣になつてゐた。それに、汽車や自動車に搖られてこゝまで來るうちには、朝からなんにもはいつてゐない腹は、いかに宿醉とは云へ、すつかりすき切つてゐたので、いつになく老酒の廻りが馬鹿に早かつた。

## 二

昨夜から差向ひの喋り續けに、有藝にちよつと話が杜切れた時、横濱と云ふ土地につれて、ふと瀬川のあたりに浮かんで來たのは、岡島鈴江だつた。以前丹後町の萩原の家に、母親や瀬十郎と一緒に暮してゐた時分には、彼の女は盛に文學者のうちを歴訪して歩いたものだつた。今よりはずつと綺麗でもあつたし、文學でも好きな少女らしい才氣も仄見えて、訪問をうける若い文學者たちのなかには、植ゑつけられた戀の芽生を、立枯に今も胸の隅にもつてゐるやうな者も、四人や五人はあつたが、然し、父親に引きとられて、横濱に移り住み、急に不良少女めいたいけ圖々しさを現はしてからは、先方からめつたに寄附いても來なかつたし、たまに往來などで顔合せににしても、先くぐりに反感を見せられるので、すつかりもう人氣をなくなつてゐた。レイコウとか、岡鈴とか云ふ親しみの呼び名も、いつか連中の唇に余くのぼらなくなつて了つた……

一體岡島鈴江女史といふものは、その後どうなつて了つたんだらう」

「さア……」  
 伊庭は豐な頬に、ニタリ／＼と薄笑ひを見せて、「貴方でも知つてないすれア、吾々の仲間を知つてゐる人はないでせう」  
 以前、鈴江の文壇人遊歴に、一番しげ／＼と立寄られた門は、本郷森川町の瀬川の家だつた。てつきりもうさうに違ひない、などと岡や連の蔭の噂では、一時それにきめ込まれてゐたらぬだつた。

「それア違ふでせう。信さんですよ」  
 「信さんは信さん、貴方は貴方ぢアないんですか」  
 「いや、僕も多少コツ（惚れること）されてたやうだけれど、然し無論フガン（關係はない）と云ふ意味ですよ」  
 「僕はいかゞきめてゐるんだ、——いかに親しい友達でも、王様ぢき／＼のお調べでも、フガン（關係のあるなしの返答だけは、決して信用できないものだ）と云ふ意味は、僕自身友達にも、女房にも、誰にも本當のことは云はないことにしてゐるんだから、その點にかけると、實に徹底的な懷疑派ですよ。貴方がガンサイだと云つても、フガンだと云つても、要するに、僕にとつちや、それは全く無駄な言葉なんだ。信用も

力がなかつた。

## 振假名

「いゝえ、それは出してでも出さないでもおなじことよ。先の先まで、ちゃんともうあたしのお肚のなかはきまつてるんですから、御親切はしみゝ嬉しんですけれど、どうぞもうそんな御心配はなさらないでください」

「そんな義理堅いことを云つてたつて、今時あんた……、そんな、くだらない……」

「くだらなくつても、時代おくれでもいゝの！あちらが逢ひたいと思つてくだされば、きつと電話なりお便なりくださるでせうし……」

「それア、あなた、旦那だつて逢ひたいにきまつてまさアね。逢ひたいには逢ひたいけれど、そこはまたな……」

「ですから、そこを押しきつても逢ひたいと思つてくださるまでは、あたしとしては大人しく待つてゐたいの。ね、解つたでせう？」

「解りました。解りましたが、つまらねえ遠慮だア……どうもこれアとんだお邪魔をいたしました。ぢア、姐さん、これで御免かうむります」

急に丸三は、切口上に挨拶して、さつさと腰を持ちあげた。

「さうお……」

別に引き止めようともしずに、幾代も續いて立ちあがる、その足もとに、思ひなしかまるで

二人には廣すぎる、徑四尺ほどの、肘をつくと少しがたつくやうな圓卓をさし抜んで、伊庭と瀬川とが支那料理を食つてゐた。横濱でも一流のうぢだけれど、山下町に軒並の、あの占婆けた煉瓦造りの一つで、おまけに支那人流の放恣から、でこぼこな床に敷かれたりノリウムはい

つ取り變へたとも知れないほど、部屋の間々を残して大方は模様も摺消え、壁紙には雨洩りが滲み出し、電燈の紐も裏は通さず、殺風景にもむきだしに天井を匂はせてあつた。

八月の晦日で、ひどい暑さの日だつた。前の晩鎌倉の海岸より、夏ぢう瀬川が借りてゐた三間ばかりの家に、ひよっこり伊庭が尋ねて來て、久し振りだ、大いに飲まうと云ふので、有合

せに、近所の仕出屋から三品、四品とつて、二人ともいける口の、一時過ぎまで雇婆さんにお烟

番をさせながら快談して、今朝起きたのは、かれこれもう午近かつたらう、有聲に宿酔の氣味で、

平野水ばかりがぶく飲んで、赤茶けた盃の上

に寝そべつてゐたが、早めにたてさせた風呂に飛び込むと、大ぶん氣持がシャンとして來た。

で、さてこれからどうしようかと云ふことになつた。大體伊庭の訪問は、夕方の散りに、数寄屋櫓から高築線の上を行く汽車を見て、ふいと氣が變つて出かけて來たと云ふやうなわけで、別

用事もなかつたのだけれど、それだけにうちへも斷らずにあるのだから、成る可くなら今夜は歸つてやらう、くらの氣持だつたし、それに、

瀬川も、昨夜詳しく聞かされた信之の容態が氣にかゝつて、早速見舞に行きたいと思つてゐたので、兎に角夕涼にでもなつたら、上りの列車に

乗ることだけは、暗々のうちにきまつてゐた。「少しなんか食つてもいゝやうな氣持になつて來たなア」

伊庭は、大きな體を、苦しさに起き直つて、裸けた胸を掻き合せながら、「どうです、そろそろ出かけませんか」

「まだ、あなた、暑くつて仕様があまりやしない。でも、腹がすいて來たのなら……」

「いや、そんなでもないけれど……。君は？」

「僕アまだどうも……。然しなんかうまいもんなら食つてもいゝですな。大ぶん久しく都會的な料理を食ひませんからねえ」

「それア君、あんなに始終やつて来て、たまにヤ泊つて行つたりするうちにヤア、それア、信さんでなくつたつて……」

「いや、それア貴方の人生観ですよ。男と云ふ男がみんなさうぢやないですよ」

「みんながみんなさうでないとしても、大抵はさうでせう」

「いや、それアどうも矢つ張り伊庭好みの觀察だな、己をもつて他を誣ひるも甚だしいものだな」

元談と本氣とを半分々々くらゐの調子で、瀬川は、普段から、この、二つ年上の友達に對して飽足らず思つてゐる唯性的人生觀に、輕く非難の一刷毛を加へた。

「ぢアまあ一步を譲つて、少くも信さんなら、あ仕向けられて、どうして大人しく指をくはへて差し控へてる筈はない、そんなこと、所詮僕には考へられもない、と云つたからつて、あなたが男性全體の不面目にもなるまいから、姑く前言をさう訂正さして貰ひませうか。どうです、そんなら貴方だつて、別に異論はないでせう」

圓滑輕妙な答に、自分が眞ッ先に満足して、伊庭は、やゝ政治家好みの野狐禪的な哄笑に破裂した。

#### 四

「然し信さんにしたつて……」

或る一つの傾きをとると、そこに轉けて行く心の勢を、輕くそらせることの出来にくい、

——生眞面目と云ふよりはやゝ度が強く、さればとて一克と云ふほどでもない性分の瀬川だつた。「信さんにしたつて、握膳食はぬは男の取つて云ふやうな、あたじけない、さもし、下等な心理に、さうむざ／＼と支配されて了ふ人ぢアないと思ふがな」

「だつて、現に箸をつけてるんだから仕様がないでせう」

意固地からも、伊庭は、惡魔主義的な見方を誇張して、「それア恐らく、君が信さんだつておんなじことですよ」

「さうかしら。僕も決して自分を女嫌ひとも思つてないけれど、總ての女にそれほどの魅力があるとは考へられないな。前々から好きだつたと云ふやうな、特別な場合なら、それア勿論、一も二もないが、嫌ひなやつぢアどうも……。つまり貴方がたは、結局僕らより毛嫌ひが少

いと云ふことになるのかな」

「女に對しての毛嫌ひはあつても、何もその場に臨んで、兎やかう云ふほどのことぢアないで

せう。それほどの大問題でもないんだから——

「齋藤綠雨も、その心持を、亂暴な言葉で云つてますね、——鼻をかむのとおんなじことだつて。どつちも紙が要ると云へば伺ひ、なんて。

これが綠雨なればこそ、あの時代の青ッぽいセンチメンタリズムの戀愛至上主義に對して、胸のすくやうな痛快味にもなるんだが、今更どうもそんな考へ方は、ちつと時代錯誤ぢアないですか」

「そこが君、眞理の眞理たる所以でさアね、時代が變つても朽ちないところが……」

さう云つて伊庭は、またもや天空快瀾らしく笑つた。——哄笑は、彼の社交になくてならない武器の一つだつた。

「然し——」

と、瀬川は調子を改めて、「信さんつて人も、随分いろんなことをして來たやうだが、感心に品が悪くなつてませんね。道樂者らしい可厭な臭味なんぞ殆どありませんからね」

「ちよいとしたことで、すぐ眞ッ赤になつたりしてね」

「さう／＼、あれアまた不思議ですね。不思議なつてこともないが、何しろくだらなく赤くなる人ですね。殊に女のことになると、差向ひぢア、



しないし、さうかつて嘘だとも思やアしません」  
さう云つて伊庭は、大きな腹から揉りあげるやうな高笑ひをした。ちよつと見には中々堂々たる體格だけれど、芯に弱いところがあつて、仲間うちでは、事實上一番堅い生活をしてゐる瀬川は、伊庭のやうなその方面の猛者にかゝつては、たゞ口舌の戯れだけでも、所詮そばへもよりつかなかつて。いま云つた、いかに伊庭らしい一家の掟にしても、瀬川は、嘗てそんなことに就いて考へてみようとしたことすらないやうなものだつた。それでも生得の負ひ魂から、  
「さうですか。それ僕としても望むところですよ。と云つたところで、レイコウとあつたと云ふ意味を仄かすわけぢないけれど……」  
瀬川も、やつとさう切りぬけて、一緒に高笑ひの出来る廣場へ出て行つた。  
「然し、あれツきりレイコウみたいな文壇娘が出現しませんね。一人くらゐあゝ云ふ無所屬な女がまご／＼してゐてくれる方が、賑かで、なんとなくお色氣があつていいがな」  
やつと笑ひが納まつたところで、伊庭が、老酒の盃をあげながらかう云つた。

### 三

瀬川もそれには同感だつた。

「それアいゝですとも。……いづれなんとか名があるんでせうけど、ベース・ボール・ティームの實質を見ると、よく可愛らしい小さな子供が、まるで選手の雛型かなんどのやうに、矢つ張りちやんとユニフォームを着込んで、仕合と云ふどこへでも喰附いて出かけて行くものらしいが、つまり文壇娘の存在のよさは、あれですよ、なんて云ふものか知らないが、つまりあの豆選手のよさですよ」  
「岡鈴ぢアそれほど可愛くもないが……」  
「まア然し、あれだつてちよつと悪くなかつた。この頃のことは知らないが……」  
「久し振りにちよつと逢つてみるのもいゝですな」  
「簡単に逢へるもんなら、ちよいと逢ひたいですな」  
「俣夫でも頼んで使をやつてみませうか。山手だけれど、こゝからならさう遠かアないし、ゐさへすれば必ず出かけて来るでせう」  
「貴方行つたことがあるんですか？」  
「なに、行つたことアないが、いつだつたか銀座で逢つたとき名刺をくれたから……」  
「懐から大きな三つ折りを取り出して、回数券などを入れて置く革の二つ折のなかをあちこち探してゐたが、」  
「あゝこれだ」  
「ちよいと拜見」  
瀬川は、手を差し延べて、「あいつが名刺なんぞ持つて歩いて、一體どうする氣なんだらう」  
「客をひく氣でせう」  
「まさか……」  
もう一度二人は大笑ひに笑つた。折角たまに横濱に來たものだから、ちよいと知らせといてやらう、と云ふやうなことになるで、瀬川が手帳の紙を引き裂き、それに鉛筆の走書で、いま伊庭君と二人こゝに來てゐるから、もし暇ならば一緒に飯を食べに來ないか、と書いて女房を呼び、俣夫を頼んで届けるやうにぶひつた。

「ゐれア來ますよ」  
「それア勿論飛んで來ますとも。兎も角、ライセン(瀬川)と聞いちゃとてもぢツとしてはゐられませういからね」  
「昔ならね」  
また面白さうに笑ひ聲を合せて、「然し僕のは、浮名儲けか浮名損か分らないけれど、兎も角内容はなほだ空疎なんだが、信さんとは……もう今となれば公開しても贅言ないと思ふが、慥にさうだつたらしいですね」

でさアね」

伊庭は、例の、大きく笑ひ飛ばしてやつて、錫の銚子を取りあげ、瀬川に酌をしようとしたが、丁度もうからになりかけてゐた。「やア、こいつア失敬……」

すぐ手を鳴らした。時はづれの客の少い刻限を、女中たちは、どこかに寄合をつけて喋り込んでゐるのか、幾度か叩いては、耳を澄してみて、中々返事が聞えて来なかつた。見廻すと、部屋中央に、電燈の紐に結びつけて、呼鈴がさがつてゐた。伊庭は、大きな體を大儀さうに立つて行つてそれを押した。遠くで、いけぞんざいな返事が聞えた。――眞夏の午後、支那街は、その時例へば明盲目の白眼の、牡蠣に似た青白さに、寂寞として靜まり返つた。

「あゝ、酔つた」

眩きながら、圓卓の方に戻つて來かけたが、ふと突當りの壁にかゝつてゐる聯が目についた。二つ割の竹に、一節に一字づつ五文字、云ふまでもなく對で、僅か刻り込んだ溝へ、緑青色の胡粉を塗つた、恐らく安物に違ひない、ごく普通の聯だつた。

# 六

「不俗是仙骨」

多情乃佛心」

一面づつ句切つて、伊庭は、聲に出して讀んでみた。

「なんです」

瀬川も振り向いて、すぐ伊庭の視線をたよりに、何やら汚點だらけの壁紙の上に懸つてゐる聯へ目をつけた。「不俗は仙骨……」

「多情乃佛心……」

「成程……、いゝですな」

「ちよいといゝ句ですな。不俗は仙骨は、御尤もすぎて面白くも可笑しくもないが、多情乃佛心の方は……」

「なか／＼いゝですよ」

「ね、面白いですな」

暫くは、二人とも、ちつと聯の面に目を据ゑて、言葉の深みへ、靜に實感の錘を垂れさげてゐた。じり／＼と意味が、奥へ廣まつて行くやうな氣がした。

「なんど讀みます？」

伊庭が、席についても、なほ多情乃佛心の字面に眺め入りながら、何やら思ひついたらしく、ニヤリ／＼笑ひ出した。

「なんと讀むとは？」

「つまり、諸君と書いてみなさん、效能として

ききめと讀ませる意氣で、多情乃佛心に振假名をふつてみたまへ」

「あゝ成程、さうさなア、移り氣は、……どうも佛心がむづかしいですな」

「浮氣は凝性、はどうです？」

「さう、……少し原文に即きすぎてる嫌ひがあるな。浮氣と見えたは深はまり、……まづいかな」

「浮世すてれば人間ばなれ、惚れつばいのがふかなさけ、どうです、そつくり都々逸にしたところなんぞアうまいもんでせう」

「うまい／＼。もう少し原文から離れたところ

で、それはそれこれはこれ、つてのはどうでせう」

「成程、信さんの云ひ草ですな。あの人が、いちどきに二人以上の女に關係してゐる時に、それをふつて御爺ふと、きまつて、それはそれ、これはこれですよ、つて云ふのが十八番だ……」

「ぢアいつそのこと、ふぢしろのぶるき、と讀ませたらどうです」

「そいつアいゝ！」

と、思はず、伊庭は吹き出して、「多情乃佛心」を書いて、藤代信之と讀ませるのはいい。こ

とても僕にやア冷かす氣も出ませんよ。あゝどうも、芯かられて了はれると、却つてこつちが、氣の毒らしくつて困つちまひますからね」

「少し、することに釣ひ合はない赤面ですな。さては、あれも一つの手だつたかな」

すき腹に、料理も酒もうまかつた。口腹の満足で、二人は上機嫌になつて、それから暫くは、藤代信之論を續けた。いつとはなくその調子が、死後の追憶めいたものになつて行くのに、ふと氣がついては、有樂に寂しい氣持にされた。

「ほんとに、どうにかならないもんかなア」「可厭ですね、三十五六ぢア死にたくないなア、何しろ、まだこれからつて氣持の年齢ですからね。信さん、自分でもうとてもいけさうもないと思つてるかしら」

「さア……」「胃痛つてことは、無論もう知つてるんでせうね」

「それア知つてますとも。今年の正月とかにも一度血を吐いたことがあつたんだとさ。それを先生、この頃までだアれにも話さなかつたださうだから、悪くすると、へんな東洋流の諦めかなんで、ちゃんともう覺悟してるのかも知れない」

「いや、さうでもないでせう」

## 五

瀬川は、考へ深さうな眼つきで手に取りあげた盃の底をぢつと見詰めてゐたが、そのま

ま唇へはあてずに卓上に戻して、存外これで人間、諦めがよさうで悪いものぢやないですか。年齢に不足のなさうな爺さんで、誰が見たつて、とてももういけないにきまつた容態をしてゐながら、常人だけは、いつまでも死なうなんぞたア夢にも思はないのであるやうなのが、随分これが多いもんですよ。あれでもちつとどうも困るが、死ぬ間際までも、自惚と云はうか慾目と云はうか、所詮はたからでは考へられないやうな馬鹿げきつた再起の望みが、常人だけに許されると云ふのも、やつぱり例の、自然の意思とか、神の攝理とか呼ばるべきものの、底の知れない觀慮の一つかも知れませんか。云ひ換へれば、造物主といふやうな者が、人間製造の仕上げ間際に、口のうちに唱へた呪文のなかに、自殺止め、或は失望落膽よけの禁厭と云ふのがあつたとすれば、つまりそれですね。さうとは知らずに人間は、『未練』だなんて惡名を負はせてゐるけれど、ひよつとすると、こいつ、

親の心子知らずの口かも知れない。

「それア大きにさうだ。おまけに、親の心と云ふやつが、大抵の場合子にとつて、有難迷惑なことが多いのとおんなじで、こいつもあながち御親切とはふへないかも知れない、――序のことに君の比喩は、そこまで持つてつとした方がいゝ、生きてゐなくなつた人間にとつて、無理に生かして置かれることは、明かに迷惑千萬な話なんですからなれ。成る程、さう考へもなり立たないことではないですな。然し、信さんの場合なんぞ、まだまだ生きてゐたいでせうからね、悲慘と云やアその方が悲惨だが、未練は十分あるでせうよ。」「可哀想に、とんでもない禁厭のおかげで、人間最後の夢をみせられてるわけですか」「何しろ、死ぬのは可厭だな。」「生きてたつて、別段大していいこともないけれど、それでも死ぬのよりはましだらうな。」「大していいことがない？ 貴方が？ チェソ……子供がするやうに、舌を鳴らしてソツぽを向き、瀬川は、さも憤懣に堪へないと云つた調子で、「なんです、さんざ悪いことをし盡して置きながら……」

「だから、悪いことばかりでいいことがないん

「あら／＼、こんなおいしくもない月並なもんばかり註文して、…これだから田舎者は困るつて云ふんだ。ねえ、お兼ちゃん。それに第一、この頃はコックさん二番でせう？」

「あらどうして？」

脂肪肥りの、丈と鼻の低い、どこからどう見ても支那料理屋の女中としか踏めないやうな女が、新しく持つて来た銚子で、面倒臭さうに二人に酌をしながら、朋輩とでも話すくらゐの、いけぞんざいな口の利きやうをした。

「暑いうちは、一番コックは休んでるんだつて、誰だつたかさう云つてたから…」

「そんなことありませんよ」

「君ア中々通らしいが、なんかうまさうなものをさう云つてくれよ」

「通でもないけど…」

瀬川におだてられると、鈴江は柄にもなく鼻白んだが、それでもあれこれ支那語で料理の名を挙げてみて、女中と相談しい／＼二品三品を注文した。

## 八

口のへらない鈴江が加はり、酒肴が新しく持ち運ばれて、興はさらに湧いた。七唄く一つの話題について話し込むやうな根氣は、そろそ

ろういゝ心持になりかけて来た瀬川や伊庭には失はれてゐたから、勢人の噂と云つた風な、断片な話題が、例の冗たぐさんに、次から次へ縋々として續いた。伊庭は、いつぞや自分のところへも、活動寫眞のフィルム製作所の資金を出さないかと云つて、一二度尋ねて来たことのある西山普烈の、今度の事件を思ひ出した。最初の時には、たしか鈴江の紹介状を持つて来たのだし、その後誰かから、二人の間に關係のあつたことも聞いてゐた。

「おい、君、西山のやつえらいことをやつたね」

「えゝ、あれ馬鹿よ！」

「どうして」

「だつて、馬鹿ぢやないの、人殺しなんぞして」誰か自分の知らない人の話だらうと思つて、興味なげにそつぽを向いてゐた瀬川も、人殺し」と聞くと同時に、一月ほど前に「一時ちよいと新聞を賑した不良少年の外人殺し事件を思ひ出してつきりあの男のことだな」と察した。「あゝ、なんとか云ふ西洋人を殺したやつの話かい？」

「うん、マッテンゼン殺し…、あいつはね…」

「あいつなら君、いゝぢやないか。ちつとも馬鹿ぢやないよ」

「いや、この件についてア、レイコウは批評めいたことを云ふ資格なんぞないんだ。あいつは、昔この人の…」

鈴江を指して、「なんだいあゝ云ふのは、一體なんて云ふものなんだい？」

「兎に角馬鹿よ、なにも殺さないだつて、自分が逃げたまへばすむことぢやないの」

「だつて、相手の女には惚れてたんだらう」

「どうだか…」

「おい／＼、今さら嫉妬たつておツツかないぜ」横合から伊庭がかう擲聲つて、大きく笑ひ出した。

「冗談でせう、そんなぢやありませんよ。あいつは、ほんとの不良ですからね…」

「それアさうだらうさ」と、瀬川が、少し可怖らしく吊つて来た烏鵲を鈴江の眉間に射つけて、「君らみたいな不良の徒輩から云つて不良なんだらう。だから、つまり吾々から云はせれば善良なんだ。不良から云つての善良は、即ち不良なんだ…」

「解つた／＼、もう解つたよ」伊庭が、先生、少し過つたなと云つた心持の笑ひ方をして、然し、實際にえらいぢやないか、人



いつア一番傑作だ」

「それとも、子の四縁……あの人の星廻りが、どうもあの年齢の人は、多少とも多情佛心的な傾向がありますね。浮氣は浮氣でも、へんにかう、馬鹿ッ堅いやうなところもあつたりして、結局薄情なまねは出来ないうで、ずるッと深はまりをするやうなところは、どうも多情佛心の星です」

「ぢア、不俗是仙骨の方は、戌の六白かな」

「戌の六白と云ふと……、三十八か」

「つまり僕ですよ」

「あなた？ 冗談いつちやいけませんぜ。それアまだしも僕の方が近いくらゐでさアね。それアとても子の四縁の多情乃佛心ほどにやアびつたりしないけれど……」

そんな他愛もない話にうち興じてゐるところへ、威勢のよい靴音を響かせて、岡島鈴江が、二間もあとに残した案内の女中に、どこ？ 一番奥の部屋？ などと大きな聲で問ひかけながら、つか／＼とはいつて来た。やア、やつて来たな、と云ふやうな氣持は、二人にとつても決して悪いものではなかつた。

七

「今日は」

反身に、額をつき出し、黒く染めた伊太利麥藁の、少しふは／＼する廣い鍔の蔭から斜下に倏然と二人を見くだして、鈴江は、まるで毎日も逢つてゐる人にするやうな、ぞろッぺいな挨拶の言葉をかけた。

「やア、よく今時分うちにゐたね」

瀬川は、手を延ばして、傍の椅子を、すぐ腰かけられる位置になほし、「さアまあ、こゝへ来て掛け給へ」

「お、暑いく。一體どうしたの、貴方がたは？ 今時分、なんと思つてこのへんをぶらつてゐるのよ」

「なんのこたはない、女の巡査さんだね」挨拶の言葉もかけずに、肥つた人には大抵それが特色の、丸まつちく可愛らしい手つきで唇のはたまで持つて行つた盃もそのまゝに、呆氣にとられて鈴江の振舞を眺めてゐた伊庭が、まづ初ッ鼻に、愛嬌のある毒舌を浴せかけて笑つた。

「成程、女の巡査はいム」

ふはりと肚から出た諧謔だけに、いかにも實感が罩つてゐて、瀬川も思はず噴飯さずにはゐられなかつた。「女性巡査と書いてをかじますずえ、と讀ませるのはどうです」

「なにぶつてゐるのよ」

と、有難にちよいとでれて、椅子につくと、手提袋を掲げ出すやうに卓上に置いて、ほんとにどうしたの？ あ、分つた！ 昨夜から来てゐるのね？ また不良中年どもが、キヨあたりで消つて来たんだらう」

「キヨたアなんだい」

瀬川は、盃を獻しながら訊いた。

「あたしお洒さひよ！ なんか冷たいもの持つて来て貰ひたいわ」

「あ、さうだつたね。ぢア今さうぶがね。なんだよ、一體、そのキヨつてのは？」

「白ばツくれたつて駄目よ！」

「あのへんのホテル、相變らずはやつてゐるかい」伊庭がニヤ／＼しながら尋ねた。

「何よ、昨夜泊つて来たんでせう？」

「あゝ、ちやぶ屋ですか」

その時になつて、やつと瀬川に呑みこめたことが、手ツ取り早く鈴江の疑ひを晴らした。女中が、あとから加はつた客のために、箸や皿を運んで来た。鈴江は、年中來つてゐるらしく、聊／＼しく女中と冗口を利きながら、自分の飲ものを注文したり、早速箸を割つて、大ぶん食ひ荒された料理の方へ手を延ばしたりした。

「正面を見ろ、君の眞正面を」  
「何？」

「そこにかゝつてゐる聯を讀んでみろよ」

「不俗……これ仙骨つて讀むの？」

「さうだ、もう一つは？」

「多情、すなはち佛心か……。あゝ。それで佛心……」

「どうだい、多情乃佛心で、ふぢしろのぶゆきつて振假名は？」

「へえ……」

「さう云ふ感じはないかね？」

「ないわね」

「だつて、あの人の多情について、君だつて別に異論はあるまい」

「だから、上の二字でふぢしろはいゝけれど、下の三字がのぶゆきとは讀めないわよ」

「また生意氣いつてやがる」

# 十

さうは叱りつけたやうなものゝ、今度は瀬川も、五六分の同感はあるらしく、にやり／＼笑つて、「それアまた殊に、君の場合なんぞはさう感じられさうなことだよ。つまり君は、信さんの多情だけに觸れて、佛心までは徹しなかつたんだが、その罪の一半は君にあるんだから、仕

方がないさ。もう一つ碎いて云へば、おもちゃにされただけで、可哀がられるところまで行かなかつたんだらう、どうだい？」

「知らないよ」

鈴江は、ツンとすました顔をそつぽに向けて、「死にかゝつてゐるつて云ふから、氣の毒だからあんまり云はずに置くけれど、一體貴方がたは、あの人を買被つてゐるわよ。なアに、あの人だつてなみの男だわ」

「勿論さうさ。誰も、だから聖人だとも君子だとも云つてやアしないぢアないか。なみの男もなみの男も、少し行きすぎてゐるくらゐのなみの男で、つまり……助平爺だよ。然し同じ多情でも、あの人の、佛心に近いところまで至つた多情だと云ふだけのことさ。多情はとりもなほさず佛心だ、と云ふこの言葉の面白味はそこにあるんだからね。別々なものぢアない、一つだと云つてゐる裏に、そこまで徹した人の心境が、自と現はれてゐる。たゞ、助平、そいつアえらいや、と云ふのでは、意味は同じでも、どこかに心持の深さが違ふ。そこが面白くもあるんだし、すぐ吾々が信さんを思ひ出した理由でもあるんだ。だが、そこらのことは君なぞにやアまだ解るまいな。折角ぶつて聞かせ

たところで、ちつと早すぎるかも知れないね。どうだい、それとも解つたかね？」

「そんな面倒臭いこと、てんから聞いてやアしないわよ。うるさい佛心のお講釋より、この點心の方がよつぽどおいしいわ」

云ふ通り、瀬川の長談議などには碌に耳もかざずに恐ろくはその間に考へて置いたのだらう、柄にもなく手綺麗に洒落のめして、そこに出てゐた西瓜の種を、上手に前齒でパツリと噛み割つてゐた。組織だつたものゝ考へ方よりも、當意即妙の、所謂高飛車なものゝひなどを偏重し、自分でも時々、ぬきうち人を切りさけるやうな、やゝ時代おくれの政治家趣味を現はす佻達としては、その場の氣合で、一も二もなく鈴江に軍配をあげ、友達ながらこの勝負瀬川の黒星と見極めをつけて了つた。で、その心持を、すぐ例の高笑ひに託した。

「……」

瀬川は可なり不愉快にされた。云ふべき理窟はいくらでもあるが、いつまでも尾を引いてゐるその笑ひ聲には、「理窟や不愉快さうな顔」を身じて置いて、なほ口つ裏からチク／＼つつ突くやうな、始末におへない響きがあつて、それを押し切つてまでは、——次に續くべき醜い

殺し、と口で云つて了へばなんでもないやうな  
もんだけれど、中々出来ないこつたらうぜ」

「さうさ！一口に、それを馬鹿だなんて、一  
體岡鈴は、この頃ちつと生意氣になりすぎて  
よ。君たちにやアまだ、馬鹿つてのはどう云ふ  
ものだから、利口つてのはどう云ふもんだか、ほ  
んとのことは解りやしないんだ」

かうきめつけられると、けれども鈴江は、酒  
と伊庭の方へ正面に顔を向けて、（あれだ！）  
と云つた風に、一つ顎をしゃくり、片眼を繁叩  
いてみせた。そんなことには構はず、瀬川は、  
言葉を續けた。

「岡鈴はまア仕方がないとしても、あの検事が  
生意氣だよ。あれくらゐのことで死刑だなん  
て、馬鹿だよ！ あんな解らない求刑つてある  
もんか……」

### 九

「でも、第二審の模様だと……」

鈴江は、うんと頬ばつた口もとを、有繋に手  
巾で軽く抑へて、もぐ／＼やりながら言葉を挿  
挟んだ。「大へん具合がよささうですとさ。普  
烈がね、はたではら／＼するくらゐ、何もかも  
どん／＼喋つまふんですとさ。それが却つて  
いゝんですつて、心證とかなんと云ふものが

いゝんですつて。それアね、裁判官だつて人間  
なんだから、被告人の感じのいゝと悪いとザア  
随分違ふでせう。證據もすつかりあがつてゐるん  
だから、普烈だつて、今さら悪あがきをするよ  
り、せめてその心證とかでもよくしといた方が  
得ですかね。あいつのことだから、中々その  
へんはぬかりませんやね」

「實際君は馬鹿だね」

瀬川は、つく／＼呆れ返つたと云ふ風に、鈴  
江の顔を正面に見詰めて、「さういふ下等な打  
算よりほかに、人間の心を動かすものを、一つ  
だつて知つてないらしいね。かうなると寧ろ哀  
れむべき無智と云ふよりほかはないね。人間つ  
て、そんなもんぢアないんだよ」

「知つてゝよ。だけど、あたしの云ふのは普烈  
の場合ですからね。あいつなら……」

そんな話は面倒だ、と思つたか、伊庭が横合  
から押被せて、

「初めの時には君も行つてたんだつてね？」

「えゝ、誰から聞いて？ 藤代さん？」

それには答へずに、

「尤もあれアまア、どつちの義理から云つても、  
是非とも君は見物しとかなきアならない芝居だ  
つたからね」

「えゝ、大へんな芝居……」

「信さんが、血を吐くまで喋つたつて？」

「えゝ、なんだか、随分亢奮してやつてたわ。

あの人、大した普烈最良なのね」

「さうだつてさ。臥つてからも、裁判の模様  
ばかり氣にして、――僕が先達見舞に行つた時  
にも、桑木とか云ふお爺さんの辯護士が来てあ  
たつてが……、臥てゐるもんだから、暇にあか  
しアなんかかんか考へだして、そのたんびに  
あの爺さんが呼びつけられて、あゝ云つてくれ  
の、これも忘れずに説明してくれのつて、一々頼  
まれるわけなんださうだ。あんまり氣の毒だと思  
つて、仲にはいつて奥さんが、三度一度は握  
りつぶして了はうとするんだけれど、先生中々  
承知しないで、それア困りぬくさうだよ」  
「さうなると、信さん、あれで中々凝性だから  
ね。ちよいと、あたまをほかへ轉じるなんてこ  
との出来ない性分だからね」  
さう瀬川の説明する言葉は、酔つてゐるに似  
ず、しみ／＼としたものだつた。  
「つまり、そこらが佛心かな」  
伊庭が冗談らしく云つて笑つた。  
「さうだ／＼、隨に佛心だ」  
「何よ、ブツシつて？」

に……」

「待つてくれ。お前さんは、気が早すぎるよ：。たゞ逢はうと思ふ氣持なら、何もお前さん

を煩はすまでもないさ。電話、……手ツ取り早く電話一本でもすむことだ。こんなことまで

もお前さんに話すことはないんだけれど、これも御縁だ。とんでもないところへ、思ひがけ

ないお前さんと云ふものが飛び込んで來たのも、これも何かの御縁だ。……待つてくれ、す

まないが合歌を一つさせてくれなにか。口が渴いて……」

「へえ」  
慌て氣味に枕もとへ匍ひより、ブツカキを浮かしたコップの水を、硝子管で吸はせ、小さな

金盞を布團の上へぐいと壓しつけるやうにして、枕の上から吐き出すのに具合よくしてやつ

たり、心のくばりは、自とすることの親切になつて現れた。

二  
合歌をすますと、信之は、力のない聲で笑ひ

でした。  
「なんだか、間をおいたら、勿態がついちまつ

て、話した憎くなつた。つまらないことだから、よさうよ」

「旦那、そんなこと云はないで……、なんですね、仰有つて下さいましなね」  
「くだらない話さ、謂はば愚痴だよ、いや、惚話だよ。……堪忍してやうらう」  
「可厭ですよ、氣持のわるい……」  
「なにね、誰しも云ふ口さ、……お互のうち、どつちでも、いよくいけさうもないと云ふ時が來たら、假令その時には別れてゐようと、お互にどれほど變つた身の上になつてゐようと、いくら遠方に離れて住んでゐようと、なんとしてもして知らせ合つて、どちらが先にしろ、死ぬ時だけは必ず枕もとにゐつこ、ツてね、さう云ふ約束がしてあるのさ。笑つちアいけな

いよ……」  
信之は、もう一度力のない笑ひ聲をたてた。三吉は勿論笑はなかつた。首を垂れて、ぢつと考へ込んでゐた。

「どうだね、可笑しきを通り越して、いつそ馬鹿馬鹿しいかね？」

「さうでもありませんが」  
と、顔をあげて、憚るところなく、「旦那に

しちア、そいつはあんまり出來がよくなかつた。そんな約束なんぞどうだつていゝぢアありませんか。來たいと思つたら來る、いやなら來ない、

それでいゝこつちアありませんか」  
「ところがね、それほど堅い約束をして置いてさへ、だあれも來てくれてがないんだは、ひどいもんだよ。我が身ながらも氣の毒ッたらしいほどだよ」

「だあれも來ないつて、そんなに幾人も、あつちこつち口がかけてあるんですか」  
丸三の調子には、反感が露だつたけれども、信之には、まるでそんな感じはないやうに、さも面白さうに笑ひ出した。

「なアに、そんなにたんとでもないさ。金雞勳章だから、さう數は出さないやね。どうだい、金雞勳章つてのはいゝだらう？」

「へツ、金雞勳章……」  
と、やゝお義理に笑つて、「旦那、ほんとうに

浮氣もんだなア」  
「なにに限らず、出來る間に置いて置くことだ。出來なくなつてからぢア、なんにも出來ないからね、え？ さうだらう」

「ぢアもう思ひ置くこともないでせう」  
ズケリと云つて退けて、あとは有聲に、急に元談らしく、例の翁の面に似た笑皺だらけの愛嬌顔になつて、「旦那なんぞ、なみの人間の十人

前やそこらは、いゝことばかりして來たんだか



場面を覺悟してまでは、己を樹てようとする熱意もなかつたのだ。それに、永い間の伊庭との交際で、いゝ加減馴らされてゐたので、また始めやアがつた。くらゐの氣持で、なんにも云はずに苦笑ひをしてゐた。たゞ然し、この無言の賞讃で、鈴江の無言の得意が、天井なしに昇りつめてゐる氣ぶりに、ちよいと我慢がしにくかつた。可厭なやつだと思つて、苦笑ひながらジロ／＼睨めつけてゐた。

「今日は、これから、貴方が一體どうする氣なの？」

「東京へ歸るのさ。瀬川君は信さんの見舞に行つて、それで一緒に出發して來たんだ」

「あたしも、一緒に行かうかな」

さすがに氣兼ねて、二人の氣持に計る調子だつた。冷かしやら冗口やら、いろ／＼あつた末に、結局、食事がすんだら三人づれで東京へ出て、すぐ紀尾井町を尋ねることに話がきまつた。

## 青 蛸

一段は、泊り客でもある時のほかあまり使つ

たことのない、奥まつた八疊を病室にあてゝゐた。次の間の六疊の方を足にして、東枕に、南の縁へ顔を向けてゐる信之は、淺間しいまでに瘦せ衰へて了つた。禿あがつた額の骨の凸凹は、殆ど皮一枚の下に、はつきりと現はれ、骨相學の方から云ふと、觀察力の發達を示すものと稱へる、常から高く秀でた眉骨などは、中にも殊に著しく飛び出し、その蔭に深く落ち込んで三重にも四重にもなつた臉から、こぼれ出しさうな眼の玉が、大くギョロンと睜かれてゐた。鼻は尖り、頬の肉が落ちたために、唇のあがきも苦しさうで、蓬々と延びた鬚のなかに、白い大きな齒が、始終一頭を出してゐた。老人と違つて、若い者のさう云ふ委は、慘しいとよりは、寧ろ不氣味だつた。

遠く目を放つて、軒端をすれ／＼に、光り耀く夏の夕空を見詰めながら、鼻音で、同じほどの間を隔てゝ、微に、うん／＼と返事をしてゐた。丸三の三吉は、假令天子様のお召にあづがつても、このまゝで、お臺所口からお伺ひする、と豫て云つてゐる半纏着で、縁側にビタリと坐りこみ、低聲に何やら話し續けてゐた。ほかに、誰ともせず、青蛸の聲ばかり、廣い邸内の寂寞をひとしほ深くしてゐる……

「……と云ふわけで、あたしもつく／＼お可哀想になりましたので、餘計なことをするやつとお叱りをうけますまでも、どうぞ、一過ちきぢきにお目にかゝつて……」

「うん」

「是非ともお願ひ申してみたいと思ひまして……」

「うん」

「いかがでございませう……？」

「うん」

「たゞの一目でも、……一時の間でも……」

「うん」

「ねえ、旦那……」

「あたしの方では、夙に……夙から來てくれさうなものと思つた。然し、こんなこと云つたつて、なんにも知らないお前さんを捉へて、恨み……恨言の取次でもしてくれと頼むやうに釋られちや困る。來たいが來られない、——その、その遠慮が彼方にあるうちは、あたしだつて、來てほしいが、呼びにやるのを、どうしても遠慮することになるんだ……」

「なアんだ」

三吉は、俄に晴々しい笑ひ顔になつて、「そんな……、なんです、旦那、そんならなせ早く

かに注ぎかける滴薬がないかのやうに、眞ッ暗になつて飛び出してしまふと、三日四日は飲み続ける……

「咽もと過ぎれば熱さを忘る、つてのを知つてるかい」

酔つたなかにも、ふと氣がつくと、自ら嘲らずにはゐられなかつた。「犬狗様が、はや／＼湯氣のたつてる大盃を吹いてる繪だぜ。咽もと過ぎれば熱さを忘る、つてね、思ふも早い忘れののも早いや。なんのことはない日向に置いたボール紙だ。裏へでも表へでもペコン／＼と反りやアがる。安値なんんだぜ。早いがお得だ。代は見てのお戻りだ。ねえ、ペコン／＼とボール紙、さ。裏も表もあるもんか。安値なんんだ。おい、安いよ。早いがお得だ。どうだい、一番俺を買はねえか」

## 四

不機嫌に燥ぎだすと、信之の自嘲は鋭く冷かつた。同時に、飛沫ははたへもかゝつた。酔へば酔ふほど、ひとの心と、その言葉との隔たりに押しあてる物差の目盛りが、はつきりと目に見えて来る。

「なにヨウ云やがる、毒なんならお上で賣らせるか。酒は毒ぢアねえ、こんなくだを巻く口

が毒なんだらう。口ぢアねえ、毒は腹にあるんだ。可厭ならけえれ、さつさとけえつてくれ！

それとも、俺のそばにゐたいことはゐたいんだけれど、いつまでも飲んでるから可厭だつてえんなら、眞直にさう申しあげちまへ！ なんの罪もねえ酒に、……こ、こんなうめえものに、假にも毒、毒たアなんでえ、つまらねえ因縁をつけやアがると承知しねえぞ」

さう云つた調子の自分自身が、いかに下劣であるかと云ふことは、誰よりも一番に自分が承知してゐた。決していゝ心持になつてゐるわけではなかつた。心が傷んだ。けれども、ほかにどうすることも出来なかつた。自分ほど寂しがりのやの、ひとを惹きつける性分の男を、忽ちにして、こんな人嫌ひにしてつたのは、一體誰の仕業だ。みんなひとのせむぢやないか。そのひとが、俺によつて不愉快を與へられたからつて、それは自業自得と云ふもんだ。俺がひとからうけた寂しさの仕返しにちア、まだ／＼とてこんなことぢア足りないんだ。いくら俺が一生懸命になつて、相手構はず片ツぱしから不愉快に、――世の中には、まごゝろなんてものは、これンばかりの破片もおつちてはゐないもんだと云ふ、人間らしい人間ならば、誰し

も必ず「寂しさの反應を呈さずにはゐられない」の毒素を注射してやつたつても、在外平氣の平々なのだからやり切れない。故意と焦らし、て、いつまでも渡さず置いてみたところで、相手が格別それをほしがつてもゐない場合では、折角の意地悪が、なんの役にも立ちはないのだ。そこまで承知でゐながら、矢ツ張りほかにどうしやうもない、その苛だたしき口惜しさなのだから、眞に救ひがたかつた。――なんでも構ふことはない、山葵おろしのやうな、がさつ極まつた下劣さで、心をがり／＼と引ひ搔いて、そこにこびりついてゐる寂しさを刺きとるよりほかに、どうにも納まりのつけやうがなくなつて了ふのだつた。またそんな時に限つて、ほんのちよつとした好意にも、すぐにくろりと參つて、生れ變つたやうに世の中が明るくなり、喜ばしいこゝろになつて、いま鳴いた鳥のニコ／＼顔で、人嫌ひの氣持なんてものは、一體この國へ行つたら見附かるのだらう、とでも云ひたげに、ケロ／＼と變つて了ふ……。彼が好んで使ふところの自嘲の言葉をもつてすれば、「日向のボール紙が、安値にペコンと反つくり返つてゐるわけだつた」。

然し、今度ばかりはさう簡單にはいかなかつ

ら、——そこらぢう金鈴點章だらけにしちまつ  
たんだから……、ねえ、さうでせう、旦那！」

「もう大丈夫見せつけられる心配はない、なん  
ぞと思やアがつて、急に氣が強くなりやアがつ  
て、この期に及んで意見しやがる。可厭なやつ  
とは思ふけれど、まあ……黙つて聞いといてや  
らう。……まつたくだ、素人考へにしたら、  
大抵もう思ひ置くこともなささうに思はれるだ  
らう、いかにもさうありさうなこつた！」

「てえと、その實まだあるんですか……」

「まだ出る……つてね、古い手妻の掛聲ぢアな  
いが、いよ……目をつぶるまではこつちのもの  
だ、誰がなんと云つたつて俺の命だからね、あ  
んまりさう安く扱つて貰ひたくないもんだ。ね  
え、とツさん、どうだい……」

### 三

「呆れた！」

いつの間にか三吉も、すつかりいゝ心持にさ  
れてゐた。云ふ言葉はいかやうともあれ、そこ  
に湛へられる空氣は、なんとも云へず澄み透つ  
てゐた。明るくほがらかだつた。先刻からちよ  
くちよく感じられた反感も、今はさりと捨て  
て、うつかりその明るさに包まれて了つた。「呆  
れた！」言葉の響きでは呆れただが、その場の

意氣では、成程！ 意心！——そんな感じに近  
いものだつた。「然し、旦那まつたくさうしたも  
んでせうね」

「馬鹿にするな。すつかりもう死ぬにきめて  
やアがる」

今度こそ三吉も、力のはいらぬ信之の笑ひ聲  
に合せて、咽ぼとけのあたりで、ころ……と笑  
つた。

秋めいた、黃味の勝つて來た夕陽のなかに、  
寂しく甲高い青銅の聲が浮き互つた。ちつと聞  
き澄してゐた信之の胸には、底の知れない憂鬱  
が來た。

「一人だ！ 結局人間は一人きりのものだ！  
親兄弟だらうといかに深く惚れ合つた情人同  
士だらうと、つゞまるころは他人のより合ひ  
だ。自分のほかに自分はない。一人だ！ 一人  
だ！——幾度信之は、この胸の冷たくなる實  
感を繰返して來たことだらう。——まごころこ  
めた眞實が、なんの手筈もなく消えて行く……、  
湯氣ならば、空に凝つて雲ともなり、雪ともな  
らう、消えて行く眞實の儚さは、天地のそと、  
永劫の後も、一片の影さへもとどめないのだ。  
まごころが、まごころに觸れて、柔く抱きと  
られる深い悦びを、なまじなまなか知つたれば

こそ、畢竟はこの寂しさだ！ まごころよ、速  
く汝の扉を閉ぢよ！ と、憤りは我に還つ  
て、髪をむしり、齒を喰ひしはつたことは、そ  
も幾度だらう。——一人だ！ 一人だ！ 俺の  
好きなやつは、この世はじまつてより終るまで、  
たゞの一人だつてあるものか。だれがくそ！  
だれがくそ！

その憤ろしさのうちはまだよかつた。あと  
へ續く一人ッぽつちの寂しさは、一人ッぽつち  
に沈んで行くよりほか、誰にも、どこへも持  
て行きどころはなかつた。世を憎き、世を憤  
る言葉を、死ぬ間際までも絶たなかつた父信策  
の、一事一念、凝りかたまつたが最後、夜の目  
も合はさず、食も攝らずに、氣違ひじみた眠つ  
きになつて、どうかすると二日二晩も籠りきり  
に籠つたことのある洋風の書齋、——そこに信  
之は、憤りも得ず、泣きも出来ない、暗く冷  
たい孤獨の心を、石ころのやうにこもりと置い  
て、……最後には、たゞぼんやりと氣がぬけた  
やうになつて了ふ、——さう云ふ思ひを幾度く  
り返して來たことだらう。  
けれども、彼には、決してそれが永續きしな  
かつた。子供が出來てからよほど違つて來たと  
は云へ、それでも、石ころの心には、酒よりほ

書生とをつけて、鎌倉の、親類の別荘へやつてあつた子供たちを見たく思はれだしてゐたが、歸つて来るやうに云つてやるのに、手紙ではまどろっこしいし、電報では早すぎるやうな氣がして、誰か迎ひに行つてくれ手はないかと思つてゐたところだつた。で、その時ふと九三がよからうと考へついたので、一方をすげなく斷つた愚痴へにもなるわけと、急にそこへ依頼の話を持ち出したのだつた。

九三も心持よく承知して、今からすぐ發つて、おそくも明日の朝には、みんなつれて歸るからと、縁側に痺れを切らした腰をさすりく立ち上るのを、

「おい、君、君……」

と、うしろから呼びとめて、「君そつちへ行つたら、朋子にちよいと来るやうにさう云つてくれないか」

「畏まりました」

九三は、もう一度ビヨコリと頭をさげて、長い廊下に、ピタ／＼と素足の音をたてながら臺所の方へさがつて行つた。

## 六

普段醫者嫌ひの信之も、今度と云ふ今度は仕様がなかつた。同期の大學生で、日本橋の方の

遊蕩に、時折は一緒になつたこともある財部博士を主治醫に、ほかに二三人診て貰つてゐた。裁判所から、細君と、桑木辯護士とに附添はれて、自動車で歸つて來ての三四日は、煮くたらされたやうにベト／＼になつてゐたけれども、ちよつと小康が來ると、すぐなんのの口やかましくなりだした。絶対安静だの、流動食だのと云ふ言葉は聞いたばかりで、病癪の種だつた。馬鹿々々しく外面のいゝ信之のこととて、看護婦にさへも、めつたに荒い言葉は吐きかけなかつたが、その鬱積を、心おきなく一度に浴びせかけられるのが、朋子だつた。

然し、十日ともたずに、さう云ふ日も過ぎて行つた。この頃では、大抵のことなら、うんうんと大人しく云ふ事を聴いて、頻とひとを慰しがり、細君などは、眠る暇もないほど、格別の用もないのに枕もとに呼びつけられてゐた。さうなつてみれば、毎に、氣むづかしいハの字をよせて、がみ／＼叱り飛ばされてゐた時分の方が、どれ程よかつたか知れない、ひとり朋子は、心細さに堪へられない思ひだつた。

丁度臺所へ、晩御飯の支度を見に行つて、何かと女中に氣をつけてやつたりしてゐるところへ、

「奥さん、旦那様がお召です」

と九三は、いつもの、暗闇から引き出した牛のやうな、ぬうツとした面つきで、ぶつきら棒に云つたまゝ、すぐ水口の下駄を突ツかけようとした。

「お前さん、もう歸るの？」

「へえ」

「もうちつとお相手をしてゐてくれ、ばい」のにさ。ちよいと人の顔が見えなくなると、朋子が始まるんで、ちつとも用が片づかないで仕様がおりやしない」

「結構です」

「何が結構があるもんかね。暇なら、もうちつと油を賣つて行つたらどう？ なんにもないけれど、晩御飯の支度もしたいし……」

「ところが奥さん、さうしてゐられないんで、これから手前は御使者の役目、……なか／＼大役です」

「あゝ、さう。道理で、さつき來た時から、あたしの顔を見る眼つきが、へんにまぶしさうだと思つた」

「いゝえ、それが、今日に限つて大違ひ……」三吉は急に愛嬌笑ひをして、「目ざす仇は鎌倉殿、……お子さんがたのお迎ひと云ふ大役で



た。今日（けふ）このごろの信（のぶ）之（の）の寂（さび）しさは、いつものやうに、そんな、——謂（い）はば手（て）輕（かろ）な調（てう）子（し）で人（ひと）嫌（きら）ひにはなれないし、さうかと云（い）つて、やたらに嬉（うれ）しくもなれないところに、奥（おく）底（ぞこ）の知（し）れない凄（おそろ）みがあつた。深い洞（ほら）穴（あな）でも窺（うかが）くやうな感じがあつた。

總（すべ）てが有（あ）難（がた）く、總（すべ）てが満（まん）足（そく）だつた、同時（どうじ）に總（すべ）てがもの足（たり）らず、總（すべ）てが寂（さび）しかつた。一分（いちぶ）でも喜（よろこ）び勇（ゆう）んでは過（あや）まらなかつた、そのくせ、どんなことがあつても心（こゝろ）からは憤（いらい）れなかつた。……死（し）は夙（しやく）から覺（お）悟（ご）してゐた。然（しか）し、その前（まへ）に、これほど始（はじ）末（まつ）に困（こま）む心境（しんきやう）によつて、じり／＼と毎（まい）秒（びやう）間（かん）を送（おく）らなければならぬ時（とき）が來（き）ようとは、それは夢（ゆめ）にも思（おも）ひ設（もろ）けないところだつた。

## 五

遠（とほ）く近（ぢか）く、甲（か）高（たか）な蛸（しほ）の聲（こゑ）に聞（き）きとれてゐる信（のぶ）之（の）の心（こゝろ）は、その、底（ぞこ）の知（し）れない憂（うれ）鬱（ふさ）に鎖（くわ）されて了（しま）つた……

彼（かれ）には、一（ひと）刻（こく）の猶（なほ）豫（よ）もなく、たつたいま逢（あ）ひたいと、そればかりを念（ねん）じ續（つづ）けてゐる幾（いく）代（だい）の心（こゝろ）が、手（て）にとるやうに解（わ）つてゐた。と云（い）ふのは、彼（かれ）自身（みづか）がその心（こゝろ）持（も）てゐたからだ。たゞ、それだけの簡單（かんたん）な理（り）由（ゆう）から、信（のぶ）之（の）は、夢（ゆめ）にも自（みづか）分の感（かん）得（とく）に誤（あや）まりがあらうとは思（おも）はなかつた。と同時に、

彼の女（おんな）が、自（みづか）分（ぶん）から進（すす）んで出（で）かけて來（き）るやうなことをしないのも、よく解（わ）つてゐた。何（な）故（げ）かならば、この瞬（しゆん）間（かん）のたつた今（いま）、信（のぶ）之（の）自（みづか）身の心（こゝろ）が、萬（ばん）難（なん）を排（は）しても逢（あ）はうとまでは、……それほどの熱（あつ）には燃（も）えてはゐなかつたからだ。この同じ（おなじ）の心（こゝろ）が、幾（いく）代（だい）を有（あ）ゆる現（げん）世（せ）的（てき）の思（し）慮（りょ）から、未（いま）だ全（ぜん）く放（はな）つて至（いた）らしめないことも、あまりに明（あき）かだつた。——現（げん）世（せ）的（てき）、この言（ことば）が信（のぶ）之（の）には、或（ある）特別（とくべつ）の實（じつ）感（かん）をもち始（はじ）めてゐた。達（たつ）者（しや）な時（とき）分（ぶん）の彼（かれ）だつたならば、恐（おそ）らくはそこに、常（じやう）識（し）的（てき）と云（い）ふ言（ことば）を用（もち）ひただらう。常（じやう）識（し）を尊（たつ）び、常（じやう）にそれによつて動（うご）くことをよしとしてゐながら、尙（なほ）且（かつ）、ただの一日（いちにち）でも、さう云（い）ふ己（おのれ）に満（まん）足（そく）しきることの出来（でき）なかつた信（のぶ）之（の）は、いつか現（げん）世（せ）と未（いま）來（らい）とに、それと全（ぜん）く同（どう）じ感（かん）情（じやう）を以（もつ）つて臨（りん）むやうになつてゐた。少（すこ）くも、いま享（かう）つてゐるこの生（せい）くらしゐいゝものはない、と思（おも）ひながら、一方（いっぽう）には、決（けつ）してそれに飽（あ）き足りてもゐられなかつた。佛（ぶつ）法（ぽう）で、來（き）世（せ）とか未（いま）來（らい）とか説（せつ）くものを、その説（と）かれた形（かたち）で考（かう）へてゐたわけでもないが、まごころが、むきだしのまゝ、大（おほ）手（て）を振（ふ）つて通（つう）用（よう）する世（せ）界（かい）、と云（い）ふほどの意味（いみ）では、現（げん）世（せ）の對（たい）話（わ）としての未（いま）來（らい）を、明（あき）かに眼（がん）底（ぞこ）に髣（が）髴（ふ）させてゐた。體（たい）はどこにあらうとも、一旦（いちだん）心（こゝろ）がその世（せ）界（かい）に飛（と）び込（こ）め

ば、そのとき壁（かべ）で、人（ひと）が欲（ほ）するまゝに振（ふ）舞（ま）ひ得（え）る力（ちから）をもつ、——その力（ちから）がまだ幾（いく）代（だい）にも自（みづか）分（ぶん）にも湧（わ）いて來（き）ない。それ故（ゆゑ）に逢（あ）へないのだ、と思（おも）つてゐた。然（しか）し、さうかと云（い）つて、逢（あ）ふために、無理（むり）にもその力（ちから）を驅（か）りたてようとは思（おも）ひもよらなかつた。「無理（むり）にも」と云（い）ふやうな現（げん）世（せ）味（あじ）が、次第（しだい）に信（のぶ）之（の）から失（うしな）はれつゝあつた。——寂（さび）しさの始（はじ）まりは彼（かれ）の裡（うち）にあり、終（は）りもまた彼（かれ）の裡（うち）にあつた……

「ぢアまア、兎（う）に角（かく）あたしにお任（まか）せくださいませるか」

三（さん）吉（きち）は、暫（しばらく）してから、もじ／＼と露（あ）り支（し）度（ど）の尻（しり）を擦（こ）りかけて、「且（かつ）那（な）は、來（き）なければいつても來（き）いつて云（い）ふくらゐの氣（き）持（も）でいらつしやるんだから……」

「折（せ）角（かく）親（おや）切（き）にさう云（い）つてくれるものを、病人（びやうにん）のくせにいやに一（ひと）克（こく）で悪（わる）いけれど、矢（や）つ張（は）り黙（もく）つてほつといてくれないか。なんとなく、今夜（こんや）か明日（あす）の朝（あさ）くらゐには來（き）てくれることになりさうな氣（き）もするし、應（お）々（々）それだけのことを云（い）ひに行（い）つてくれたところで、それですぐ出（で）かけて來（き）るかどうか……。それよりね、お前（まへ）さんには、ほかに頼（たの）みたいこともあるんだから……」

信（のぶ）之（の）には、八月（はちがつ）にはいると間（ま）もなく、女（おんな）中（ちゆう）と

ふのは……。

事毎に、ともすれば不吉な氣持、陥ちたがるこの頃の癖で、それだけのことに、ちつと思ひ沈ませられた。目も伏せて、する／＼と行く縁側の、もう病室まで四五間と云ふあたりで、身を斜によけて、風のやうにすれ違つて行つたものがある……。觀世水に何か花のある洗ひ晒の手拭ゆかたに、紫の伊達巻をしめてゐた。素足の眞白な……。

おや、誰だらう、と振り向いた時には、おかの陽こそなけれ、まだ明るい縁側に、棚引く煙ほどの影もなかつた……。

# 八

(おや、と、口のうちに呟いたが、それは、うしろを振り向きさへすれば、必ず目のなかにはいつて來ると思ひ込んでゐたものが、だアれもなかつたので、おや、可訝しい……くらゐの氣持だつた。不思議にも、床のなかから出て來たばかりと云つた風の身装については、まだその時には、少しの訝しさも感じられなかつた。すれ違ひざまに、小腰をかいて、輕く會釋をし合つたやうな氣持さへ残つてゐたくらゐで、その時刻に、その廊下へ、さやうな装をした女が通りかゝることが、決して不思議でもなんでも

なく思はれてゐたのだ。何よりの不思議はそれだつた。いかにぼんやり考へ込んで歩いてゐたとは云へ、それを可訝しく思はなかつたと云ふのが、第一に可訝しい。それから、あとになつていかに考へ出さうとしてみても、顔かたちと髪とに、まるきり憶えの残つてゐないのも不思議だつた。そのくせ、すれ違ふ拍子に、頭の頂邊から足の爪先まで、ちらとながら目を走らせたやうに思はれるのだが……。

(まア、いやだ！)

と、ちり毛もとから、水を浴びせられたやうに、ぞうツと身顫ひしたのは、うしろを振り向いて、やゝ二三秒もたつてからだつた。思はず朋子は、足音あらく良人の病室へ駆け込んで了つた。

「あなた！」

そば近くべたんと坐つて、はア／＼肩を息をしながら、見ると、良人の衰へ切つたやうな眼のなかにも、いつになく、たゞならぬ色が動いてゐた。

「なんだ……」

「なんです……」

「なんか見たか……」

「あたし、いやですわ……」

脊筋からゾウ／＼して來て、……はツと思ふと、厚い梅の上へ、横坐りにはひつくばつて、瘦せさらばへた良人の肩にしがみついてゐた。信之は、靜に背なから脇へ手を廻して、グツと優しい力を置めた。

「なんでもない、なんでもない」

さう云はれると、なほさら怖さが身にしみて來て、ガタ／＼と齒の根も合はなかつた。桃葉珊瑚、八角金盤、柃、南天、さう云つた下草ものゝ蔭には、もう夕の色が濃かつた。その風の風もなく、軒の岐阜提灯が、縋に冲天に暮れ残つた光を吸つて、あたりにそぐはぬオパールのような明るさに、ぼてりと重くつるさがつてゐる。間違になつて、青蜩の聲がひとしほ寂しい……。

「……あなた……」

「なんでもない、俺にはよく解つてゐるんだ」

「なにが……？」

「あとで、もつと落つてから話してあげよう」

「いや／＼、そんなこといや、云ふんないまま云つて頂戴……」

信之は、しばらく考へ込んでゐたが、そつと朋子の掌を自分の掌に把つて、柔に握り締め

す。尤も大役は無役に近いとか云つて、なに雜作もないお安い御用だが……」

「へえ、さう？　ほんとう？」

「なアんだ、奥さん御承知ぢアないんですか？　あつしアまた、御相談の結果、大命降下と相成つたる次第かと、憚りながら……」

「うるさいね。……へえ、さうかい。それならなほさらのこと、御飯を食べてつたらいゝぢアないの」

「いや、一應館へ立ち歸つた上、鼻左衛門の尉、味良とも、篤と別れを惜まねばならず、兎も角一晩でもうちをあけるとなれば……」

## 七

「ぢアまあ勝手になさいだけれど……」

三吉の冗口に相手になつてゐたひには、いまでもきりのないことを承知しきつてゐる朋子は、強ひては晩飯を勧めなかつたが、然しいよいよ鎌倉まで行つて貰ふとなれば、旅費も渡して置かなければならず、彼方の諸拂も、書生に預けてある分ではとても足りる筈はなく、ことづけて持たせてやりたいし、そのほかいろいろ用事もあるので、兎も角、ちよつと待つておくれな。いろ／＼頼みたいこともあるんだから……」

「まあよござんさアね。木偶の坊を便にやるわけぢアなし、そこは鼻から鼻へぬけるほど利口な丸三でさア、萬事遺漏なくやつて來ますから、御安心なすつていらつしやいましよ」

「だつて、ことづかつて貰ひたいものだつてあるんだからさ」

「お金でせう？　そんなもなアあとでよござんすよ。何しろ、いつも云ふ通り……」

「三千七百圓かい」

と、つい釣り込まれて笑へば、

「三千七百五十五圓、同じことなら、端數まできつちり憶えといて下さいなね。……冗談は兎に角、早い方がいゝから行つて來ませうよ。彼方のお拂ひなんざア、あとからだつて構やアしませんやね。どうンでもしてお子さん方の體だけ持つて來ちまやアいゝんでさア。一刻も早く逢はしてあげたいから、實はあツしア、今夜のうちににお連れして來る氣でゐるんですぜ」

「そんなこと云つたつて……」

「まあ／＼、いゝから任してお置きなさいましよ。それより、奥さん、早く旦那のところへ行つておあげなさいなね。看護婦さん、どこへ行つちまつたんだか、——尤も話の都合でちよいと遠慮して貰つたにやア違ひないが、兎も角い

旦那お一人でしたから……」

「あら、さう！」

と、朋子は、すぐ小走りに行きかけ、振り返つて、「いますぐ來ますからね、ちよつと待つて下さいいよ」

そのまゝ長い廊下を、二箇所曲つて、奥へと急いだ。先達もうつかり誰もつけて置かなかつた間に、含嗽に使ふアイス・ウオタアを、吸飲の口からゴク／＼と飲んでゐるところ、行き合せて、驚き來たことがある。叱ると、なにかう大ツびらにやるのは初てだが、内々には、もう夙から隠し飲みをやつてゐた、含嗽のたんびに少しづつ誤魔化しては咽喉へ入れてゐたのだが、近頃ではすっかり上手になつて了つたから、ちよつとはたの目には分るまい。……だけれど、こんなこと、財部に云ひつけたりすると、承知しないよ、などと、洒々としてゐる始末の悪さに、それ以來必ず誰かしら一人だけは、そばから離さないことにしてゐたのだ。それを、看護婦がついてゐることとばかり思つて、うつかり丸三と話し込んでゐた朋子の足は、無意識に早められてゐた。あたまには、けれども、全く別の考へが浮かんでゐた。——一言の相談もなく、いきなり子供たちを迎ひにやる氣になつたと云

「どつち道、今夜のうちに歸つちア來られませんか」

「さうかしら……。ちア、明日の朝は出来るだけ早い汽車にして貰ひたいな」

「さう申しときまませう」

「ちア早く行つて金を渡してやれよ」

「……え……」

と、朋子は立ちかねてゐた。

「なんだ、まだ、可怕いのか」

「今日は、どうしたんでせう、電氣……」

「電氣がつきア七時になる。ついてくれない方が有難いや。……さア、早く行かないかよ」

急ぎ立てられて朋子は、思ひきつて、夕闇の廊下を、臺所まで夢中にとんで行つた。

# 十

入れ變りに、朋子がよこしたものとみえて、間もなく看護婦が、糊の強い仕事着の裾をカサカサ鳴らしながらはいつて來た。

「ちよつとお體溫を頂かせてくださいまし」

「六度三分……」

「へ？」

「六度三分でも四分でも、そのへんのことはいか減につけてくださいいな」

信之は、今なんにもしたくなかつた、なんに

も喋りたくなかつた。刻々に色を失つて行く庭木の茂みへ視線を休ませたまゝ、瞬きひとつしずにも、ぼんやり焦點を崩してゐた……

「でも、ちよつと……」

云ひながら、うしろから、ゐざりよつて、軽く肩へ手をかけた。さうしたなら、いつものやうにすぐうけとるものと思ひ込んでゐるらしい

のが、——その押しつけがましさが、たまらなく可厭だつた、情なかつた、涙が出るほど口

惜しかつた。

「……」

黙つて知らん顔をしてゐた。

「……ね、ちよいとお入れ遊ばしてくださいましね」

東北の訛で、馬鹿丁寧に、そのくせ心持に

は、子供だましと云ふほどの効りもなく、ほん

のたうはの空で云はれると、それが信之には、

大勢の人なかで、聞くに堪へない侮辱やら暴力

やらを加へられながら、こちらからは口答ひと

つ出来ない場合ほどにも口惜しくつて、我慢し

ようと思ふ心が、忽ち弱々と涙になつて了つ

た。——心ばかりではない、實際目のなかに一

杯たまつて來た涙が、ぼろ／＼と鼻柱へ傳は

り落ちた。

「……ね、ちよつと……」

七握りも、もう一度さう云つて、そつと腕を

擡げようとして、看護婦は、思ひもかけないそ

の涙に氣がついた。吃驚して、だんまりで檢溫

器を鞘にしまひ、こそ／＼と枕もとを離れて、

次の六疊の間へ立つて行つて了つた。

……夢から覺めたやうに、それで信之は、は

つと我に返つた。體溫を計る計らないで泣き出

して了つた自分と云ふものが、はつきりしたあ

たまへ映つて來ると同時に、恥かしさや馬鹿馬

鹿しさではなく、突拍子もない氣持にぶつかつ

てゐた……

(これでほんとうなのだ、これが俺と云ふもの

なのだ。普段こんなことを恥かしがつたり、馬

鹿馬鹿しがつたりしてゐた俺は、……あれはほ

んとうの俺ぢアない、あれは、……一體あれは

なんだらう、兎に角なんかの間違ひだ……。だ

が、その間違ひのなかに住馴れてゐる淺田さん

にしたら、さぞ吃驚しただらう、氣の毒なこと

をしたな……)

さう思ふとまた涙が盛りあがつて來た。今度

は、鼻筋を越して、左下にてゐるその左の

頬まで、微温かく、むづ痒く流れて來た。それ

と共に、清々と、なんとも云はれず、心持に



ながら、

「いつか、京都から逢ひに来てくれたひとがあつたらう、里奴と云ふの……」

細君は、薄い掛布圍のなかに埋めた顔をそのまゝに、軽く頷き答へた。

「あのひとが、肺を患つて、大ぶん悪いと聞いてゐるが、ひよつとするといけなかつたのかも知れない。——お別れに来てくれたんだ」

もう一度朋子は、ブル／＼と顔へあがつた。信之も、身のまはりがスイ／＼して、いやに寒かつた。

「よく然し来てくれたと思つて、俺は喜んでるんだよ。可哀想だけれども、どうも壽命ばかりは仕方がないからなア」

## 九

「どうして、……どうして……」

暫くしてから、朋子はやつと布圍から顔をあげて、幾度も云ひ泣みながら、「どうして、だけど、そのひとだつてことが……」

「それア分るだらうぢアないか、顔を見たんだもの」

「まア……はつきり？」

「ふい」と見ると、いきなりもうそこに坐つてたんだ」

「いやア！」

もう一度かじりつく細君の背を、信之は優しく撫でさすり、笑ひ聲で、

「弱蟲だねえ、なんでもありやしないぢアないか。死の知らせの話なら、世間に腐るほどあるよ。可怕いと云ふことぢアない。不思議には違ひないが、然し決して悪い靈魂が來てゐたわけぢアないんだから……」

「それだつて……」

「矢ッ張り可怕いかい？ よし／＼、ぢアもつと賑やかにしようよ。……どうしたい、三吉はもう歸つたかい？」

「あゝ、さう／＼。ちよつと待つてくれるやうにつてさう云つて來ましたけれど……、ほんとになんですか、鎌倉へ行つて貰ふんですか」

「急にみんなの顔が見たくなつたから……」

さう云つて了つて、信之は、ぞうツとした。なんとも云はれず不吉な氣持が、眞黒く胸に蟬つた。——それが、すぐ細君の方へ傳はつて行くと感じられた。「きつと、なんだ、みんな、目に焦けて、丈夫さうになつて歸つて來るだらうね。文字なんぞ、ヒョツとすると、可怕がつて、俺のそばに寄りつかないかも知れない……」

「そんなこと……」

「いや、さうでないよ。随分これで、ひどいことになつちやつたからなア……。ほんとに子供たちのことを思つたら、こんな惨めな姿は見せない方がいいのかも知れないが……」

「もうそんな心細いこと仰有らないでください……」

「だからさ、大に元氣を出して、子供たちのためにならうとなるまいと、俺が逢ひたくなつたから呼びに行つて貰ふんだよ。……逢ふときまつた、馬鹿に待遠しくなつちまつた。なんだつて、三吉待たしてあるんだい。何か……」

「いゝえ、あんまりだしぬけでしたから、またいつものでんで、丸三にかつがれるんぢアないかと思つて……」

「まさか……」

と、寂しく笑つて、「兎に角、あとのことはあとのこととして、たと持たしてやることはないよ。……現金、あるかね？」

「えゝ、丁度い、按配に今朝少しばかり出させて置きましたから」

「ぢア、すぐ出かけて貰ふやうにさう云つてくれないか。今からなら、七時の汽車に乗れるだらう、少し無理かな」

報てのは始めて聞いた……」

「だから、貴方は舊時代だつて云はれるのよ……」

鈴江が、こゝどとばかり冷かしにかゝるのを、瀬川はかけ構ひもなく讀み始めた。

「オタミキトク……、お民つて誰だらう？」

「三好君と一緒にゐるひとはなんてつたつね？」

「あれは、君……なんだつてな、あゝ美津枝さ。誰だらう……お民危篤、ケイトアイミソコト……、ケイトつて誰だい……」

「ケイトは兄さ、貴兄の兄さ」

「あゝさうか、兄と相見んことを、か。ノゾムセツ、ゴビヨウキトハシレド、ゴボウか」

「ちア、矢つ張り信さんのメ(情人)なんだね」

「さうらしい。この騒ぎのなかに、三好もめちやなやつだなア」

「そんなことはどうでもいゝけれど……」

鈴江は、何やらひとり苛立たしげな容子で、あけ放した奥の方を見込みながら、「なんぼ混雑してゐるつたつて、誰か取次ぎぐらゐ出て来たつてよささうなものね、何してゐるんでせう……」

「構はないから、あがつてつてみようぢアないか」

か」

書生流儀の無難作に、瀬川が下駄をぬいで、式臺へ踏みかけようとした時に、大急ぎでそこに飛んで出て来たのは、丸三の女房お辰だつた。

「おや、皆さんお揃ひで……」

まるで、屋臺の暖簾をわけて突き出された顔にでも對した時のやうに、相變らず愛嬌よく笑ひかけた。

「なんだか、大層うちのがごたつてゐるやうだが、容態でも變つたんぢアないのかね——」

伊庭は、お辰の顔つきを見て、ひとまづ安心はしたやうなものゝ、急ぎ込んでかう尋ねずにはゐられなかつた。

「え……」

と、急にまたガラリと變つた眞面目顔になつて、「夕方、丁度うちの親爺が何つてまして、鎌倉までお子さん方のお迎ひに行つて來いつて、あのお頼まれしましてね、もういま出かけようとしてゐる時だつたさうですがね、これまでに

なく澤山血をおあげなすつたんださうですの。それですぐお醫者様に來て頂くやら何やら大騒ぎになりましたんですけれど、今さつきからちつとお落つきになつて、この分なら今が今と云ふやうな御容態ぢアないからつて、お醫者様も

お一人だけはたつた今お歸んなさいましたが……、まア、どうぞお上りくださいまし……」

「さうかい、そいつは何しろ心配なこつたね、で、何かい、意識ははつきりしてゐるのかい？」

「え、なんでもよくお解りになるさうです。親爺がお枕もとへ行きますと、お前まだ愚圖愚圖してたのか、早く鎌倉へ行つたらいいぢアないか、つてひどく叱られちまつたんださうですよ。それで、一旦うちへ飛んで歸つて参りましてね、あたしに、すぐお手傳ひにあげるやうにつてさう申しまして、そのまんままた新橋へ、じ時の汽車に間に合ふやうにつて、柄にもなく貴方、自動車かなんかで駈けつけて行きましたんですよ。ですから、そのくらゐなんですから、お氣は遣なんぞでせう。あたしは、御遠慮申して、まだお目にはかゝらないんですけれど……」

「さうか、そんなことと知つたら、僕が子供達をつれて來れアよかつたんだがな——」

瀬川は、玄關にあがつて、帽子掛に、大分薄汚れた麥藁靴を引ツかけながら、「今日僕は、鎌倉から出かけて來たんだからね……」

「あら、さうですか、ずつとあちらへ行つていらしたんですか？」

「あゝ、こゝの紀ちゃんたちとも、大抵毎日の

なつて来て、暫らくは、無念無想に泣き續けられた。(死んで行くのも、存外これは樂なことかも知れない……)

ふと、そんな考へが、白紙のやうなあた、まのなかへ、一筋薄墨色の線を、すうツと引いて消えた……

「浅田さん」

また暫くしてから、信之は看護婦へ聲をかけた。いつかもう、少しも普段と變らない調子になつてゐた。涙聲なんぞではなかつた。

「もう電氣は來てゐるんぢやアないんですか」

「まだのやうでございますよ。どうしたんですか、今日はおそうございますね」

「さう。……あの、……それからね、……體溫器をかけませう……」

## 曉天の星

### 一

山下町の支那料理屋を出て、すぐ櫻木町驛から電車で上京して來た伊庭、瀬川、鈴江の三人が、新橋で降りて、銀座を散歩し、冷たい飲料を攝つたりして、うか／＼と八時半ごろになつて了ひ、慌てゝタクシーで紀尾井町へ駈けつ

て來てみると、いつも大抵は締めきりの大きな屋敷門が、八文字に押し開かれて、俵が二三挺と自動車が一臺、玄關さきに客を待つてゐた。

(おや!)

見るなり三人は、一様に肚胸を衝かれたのだが、そこは女だけに、まづ口へ出して呟いたのは鈴江だつた。

「なんだらう。……ねえ、瀬川さん」

「うん」

低く鼻音で答へたばかりで、車が止まりきるのを待ちかねて、瀬川はうちから扉をあけ、眞先に跳びおりた。

「ちよつと、君、いくら?」

急ぎ込んで、心づもりでもう蓋口から掴み出してゐた金を、運轉手の答と同時にその掌に押しつけて、續いて降りて來た二人と一緒に、すぐ玄關さきへ立つた。

「ごめん、ごめんください」  
立派な體格から出る、太い、朗々とした伊庭の案内にも返答がなかつた。瀬川が呼鈴を押した。奥の方で、人聲や、忙しげな足音はしてゐた。「ちよいと、どなたか、お玄關ですよ、お客様ですよ」そんな、甲高い女の聲も聞えてゐたが、まだそこへ誰も取次に出ないうちに、

門内に敷つめた小砂利を鳴らして、自轉車で乗りつけて來たのは、電報配達だつた。

「はい御苦勞様……」

鈴江が五六歩あゆみよつてうけとり、すぐ發行人を、玄關の灯にすかして讀んだ。

「ミヨシ……」

「三好? 三好胤夫かな」

瀬川がそばへ行つて、ひつたくるやうに取つて、封のないのをそのまゝに押し開いた。馬鹿に長いぞ……

「おい、讀むのは亂暴だよ」

笑ひ聲ながら伊庭がたしなめた。

「なに、三好なら構やアしないさ」

「それに親展ぢアないんですもの」

「電報に親展なんぞあるかい!」

伊庭が、例の湧きあがるやうな笑ひに破裂しようとするのを、

「あるとも!」

と引きとつて、瀬川は、大きな目をクリ／＼させながら、親展だけ前のやうな封をするこゝになつたんですよ。この頃は、普通なら、みんなこの通り開封なんだ。驚いたなア、貴方そんなこと知らなかつたんですか。……知らない。……へえ、さうですか、親展の電

「こゝの奥さんはね、嫉妬もひどいけれど、ものゝ解つた人だよ。君なんぞの考へてるやうなものぢやないんだ！」

殆ど喧嘩面だつたので、お辰はその場を取り繕ふために、すぐに話のさきを續けた。

「旦那は、お聞きになると、すぐ通せて仰有つたんですつて。あたしの伺つたのが、丁度、幾代さんですか？ あの人が奥へ案内されて行くところだつたんですの。吃驚しちまひましてね、すぐお女中さんにわけを聞きましたら、さう云ふ話だつたんですよ」

## 四

「然し幾代つてやつも、へんなやつだな……」

一同の上に、壓しかゝるやうな沈黙がちよつとのま繼いだあとで、瀬川が、誰に話しかけるともなくかう呟いた。「へん」とでも云ふよりほか、ちよつと彼の女の行爲に對する氣持の云ひ現はしやうがなかつた。圖々しいと評したいほどの反感もあつた。同時に、胸に壓迫を感じるほどの眞剣さ、根深さにも撃たれてゐた。自分ながら、感傷の焦點を掴み得ないへんな氣持を、そのまゝ幾代の上へ被せて、さう形容してみたまふのことだつた。

「兎に角まア、思ひ切つたことをなさる方です

わね」

丸三の女房は、それくらゐの程度で、同じく反感と敬服と相半ばした氣持を云ひ現はした。

「それアまアいいや」

と、伊庭が、敷島の吸ひ終つたのへ、引き續ぎにもう一本火を移しながら「兎も角吾々の來たことを、奥さんまで取次いで貰はうぢやないか。でもし醫者から禁められてゐるのでなければ、寢顔でもいゝから逢つて行きたいな」

「へえ、さう申しあげて御都合を伺つて参りませう。ついでだらないうお喋りをして丁つて……」

すぐ立つて行かうとするお辰のうしろで、鈴江が急に大きな聲をだした。

「あゝ、それから、瀬川さん、今の電報……」

「あゝ、さう……」

と、手に持つたまゝ忘れてゐたのを、お辰の方へ差し出して、「いま吾々が玄關にあるところへ届いて來たんだ」

「へ、さよですか、持つて参りませう」

「然し……」

渡しかけたやつを、大急ぎでまた引つ込めて、「こいつを、この際奥さんに見せるつてのは、どんなものかな……」

「さう……、ちよつと考へもんだね」

「信さんに逢つてみた上で、容子によつたら、それとなく話して聞かせるなり……、勿論握りつぶしにしてしまふのは悪いけれど……」

「さうね、臨機應變に、なんとかそこはうまくやらうぢやないですか」

「奥さんに見せたところで、どうにも仕様のないことですからね」

「ぢア、よろしいんですね」

小腰をかゝめて話の決着を待つてゐたお辰が、さう饒めてもう一度行きかけた。

「だけど……矢つ張り……、さアどうしたもん

かな……」

瀬川は、神經質に尙も思ひ迷つてゐたが、「まア、いゝだらう。こつちだつて危篤なんだ、どうすることも出來ないのは同じことだ」

「いゝよ！ いゝから、君は奥へさう云つてくれ給へ」

伊庭の決定的な言葉は、お辰が起り上つたあとを、三人は瓦斯入りの白ツぽい電燈の下で、互に云ふべき言葉もないやうな、空洞な氣持に眼を伏せてやゝ暫くちツと身動きするものもなかつた。

「暑いな」



やうに海岸で一緒にたつてた。みんなそれア元氣でね……」

「まアさうですか。……ぢア、兎に角お書齋へお通しくださいませんか。今すぐ奥さんに申しあげて参りますけれど……」

ぞろ／＼と、玄關から左へ、勝手を知つた洋館の書齋の方へはいつて行つた。その入口で、上靴を突っかけながら、瀬川が、

「おもてに自動車や俵が待つてゐるが、ほかに誰か御見舞の方でも見えてゐるのかね？」

「えゝ、財部さんとか仰有る博士の方と、それから……」

云ひかけて、お辰はニヤ／＼笑ひだした。

### 三

書齋の片隅によせてある船底椅子を引き摺つて来て、早速それへ腰をおろさうとした瀬川が、いち早くも九三の女房の笑ひ顔に目をつけて、

「なんだい、ひとりでニヤ／＼笑ひなんぞして、薄氣味のわるい」

「あたし、驚いちまひましたわ……」

「何がさ」

「あのウ、……あの方、たしか日本橋の方でしたわね……」

「だしぬけにそんなこと云つたつて……」

伊庭がそばから引とつて、「誰か藝者でも來てるのかい？」

「えゝ」

と、お辰は、ひつづめにした縮ツ毛の頭を、あまた度うなづいてみせて、「先に二三度、手前どもにも來てくだすつたことのある方ですわ。瀧十郎さんが御一緒の時もありましたし……」

「瀧十郎と一緒？」

「いゝえ、それアイづれこちらの旦那のお伴ですけれども、瀧十郎さんやまだほかに藝者衆が三四人も一緒に來て、屋臺へはいり切れないで、代り番こに食べては往來に出て待つたりして、大騒ぎをなすつたことがありますつてが、その時に目見えてた方です」

伊庭が、（あゝ、なアんだ！）と云ふ風に、大きく口をあけて、

「幾代かア……」

「えゝゝ、さう／＼！ 幾代さん！」

「幾代が、それで、今こゝに來てゐるつてのかい？」

この問ひに頷き返したお辰の眞向から、瀬川は、チエツ！ とひとつ、唾が飛びさうに大きな舌打をした。

「なんぼなんでも、それア信さんめ、ちやだ！ そんな舌打をした。」

れアいけないや！」

「なぜさ」

「なぜつて、君、かう云ふ際に家庭に藝者を呼ぶなんて……」

「いゝえ、あなた……」

お辰は、慌しく遮つて、「それが、お呼びなすつたんぢアないんですから、いよくもつて驚いちまふぢアありませんか」

「なんだ、ぢア、幾代が自分の方から勝手に押かけて來たのか」

「えゝゝ、さうなんですつて。あたしのお伺ひしたほんの十分かそこら前に、眞ッ若な顔をして、たつた一日でいゝから旦那様にお目にかゝらせてくれたつて、お内玄關に立つて、しく／＼泣きだしたんですつて……」

「奥さん、なんて仰有つたらら……？」

鈴江が、さも興味のあることのやうに、話のさきを促したつてた。

「一應旦那様にお伺ひしてみられるけれど、兎も角も書生部屋にでも通してお置きつて、さう仰有つて……」

「へーえ、珍しいことがあるものね」

その、鈴江の調子には、明かに反感が含まれてゐた。それが、瀬川には、ぐツと癪にさけつた。

## 六

「どうでせう……」

瀬川は、思ひ入つた風に、「吾々はお目にかゝつちやアいけませんかしら……」

「ちよつと、財部君に相談して頂いたらどうだらう」

伊庭も口を添へて、「かう云ふ場合には、何よりもまづ醫者の意見が大切ですからね」

「わたくしといはしましては、もうどなた様でも、おいでくださつた方には、お目にかゝらせてやりたいのが山々なんですけれど……」

「角、ちよつとお待ちくださいまし、すぐ財部さんに御相談して参りますから……」

小腰をかゝめて、朋子はすぐ奥へ急ぎ去つた。落つかない氣持で、誰も椅子に腰かけるものはなかつた。

「可厭だなア、死ぬのは可厭だなア——」

瀬川が獨語のやうに呟いて、続麿の花模様を目を落したまゝ、突ツ立つてゐた。

「信さん、まだ死なしたくないなア。どうにかならぬいもんかなア……」

「駄目だね、科學なんでものは、あつてもなくつても結局おんなじことだねえ」

「可憐い、可憐い！ 人間いつ何時死なない限り」

リヂアないんだからなア——

重い體を、ドシリ／＼と、伊庭は、部屋のなかを歩き始めた。

鈴江は壁に背を倚せて、やゝ口をあき加減に、ポカンとして電燈を見詰めてゐた。

さうして十分ほどの時が経つた。小間使らしい少女が、飛ぶやうに駆けつけて來た。

「みなさん、どうぞあちらへおいでくださいまし」

「は——」

長い廊下を茶の間に出て、そこから奥まつた、——よく遊びに來るこの連中でさへ一度か二度しか通されたことのない、離れのやうになつた病室の方へと導かれた。

「おい、朋子！」

存外しつかりした信之の聲が、廊下まで聞えて來た。一灯が暗いな。もつと大きな球はな

いのか。百燭でも、二百燭でも、出來るツたけ明かるくしてくれ、これぢア陰氣で仕様がな

い……」

そこへ、伊庭を先頭に、鈴江を殿に、三人珠散つながらにはいつて行つた。

成程、十六燭がそこらしい電光のもとに、ばんやりと描き出されてゐるものは、まづ雪白

に堆い布團の長方形だつた。そしてその上へ小さく仰臥してゐる、骨と皮ばかりの藤代信之だつた。枕もとに看護婦と並んで、幾代がつましましやかに坐つてゐた。次の間には、紫檀の机をさし挟んで、細君と財部博士とがゐた。

「おう！」

どこからそんな調子が出るかと思はれるやうな、やゝ暖かたどす聲で、一よく來てくれたね、よく來てくれたね……」

白布に包んだ羽根布團の上へ、軀に添へて投げ出されてゐた右の腕を、靜に差し出した。躊躇なく、伊庭は立身のまゝそれを兩掌のうちに把つた。丁度煎餅の厚みと、堅さと、温みと、そして乾き加減だつた。力を入れるわけに

なかつた。持つたまゝ膝をついて、

「どうです」

それにはちよつと目禮を返して置いて、もう一度手を持ちあげにかゝつた。その氣勢で、すぐ入れ代りに瀬川が膝行りよつて、少しでも樂をさすために、軽く布團の上に置いたまゝで握

つて、目を合せたが、云ふべき言葉がないので、代りに、そつと力を入れて打ち振つた。

七

最後に鈴江が、そば近く進みよつて、雞の

瀬川は、ふとまた手にした電報を開いてみた。  
「お民……と、誰だらうな……」

## 五

「あたしね……」

その時鈴江が、顎を突き出して、上目づかひに、天井を見あげながら、「あたし今ふいと思ひ出したんだけど、たしか去年の秋ごろだったかに、こゝへ來たらお留守で、三好さんがひとりで雑誌の方の用をしてゐるつて云ふから、ちよつとあがつて行つたことがあるの、その時に、信さん今日はいゝことがあるんだ、なんて云つて、京都から態々藤代さんに逢ひに出て來てゐた藝者の話を聞かせてくれたことがあつたわ。ひよつとすると、その人ぢやないかしら。その人なら、たぶん里奴つて云ふのよ」

「うん、その里奴の話なら、僕も三好から聞いたし、その後大阪へ住み變へたつてことも知つてゐるが、……何しろ信さんと來たら数が多いんだからね……」

伊庭が、笑ひながらさう云ふのに被せて、「さ、そこが多情。乃佛心の振假名にされて似

合ふところぢやありませんか」

その瀬川の發聲に和して、まるで萬歳でも唱へるやうな、三人の笑ひ聲が破裂した……。

そこへ丸三の女房が戻つて來た。いつにない眞面目な顔を見ると、有聲にみんな笑ひををさめて、その云ひ出すところを待つた。

「たい今ぢきに奥さんがお見えになりますさうですから、どうぞ暫くお待ちくださいまし」

さう云つて軽く頭をさげるなり、お屋は大急ぎで引き返して行つた。

「なんだ、急に容態が變つたんぢやないかな」

「さうですね、なんだか容子がへんでしたわね」

「うん……」

めいゝに、さう一言づつ呟いたきり、あとはもう誰も口を利かうとするものがなかつた。

山の手の、奥深い邸のうちに、夙くも夜更の静けさが來てゐた。窓近く、ジージツと二聲ばかり、おびえたやうに短く蟬が鳴いた。そしてあたりが一層しんとした。

「どうも、大へんにお待たせ申しまして……」

と、朋子がそこへ、ゆかたの袴を掻き合せながら、急ぎ足にはいつて來た。普段からやゝ上り加減の眼尻が、充奮のために吊つて、白薔薇の薫味を帯びた、あの蒼白さに緊張した頬と云

ひ、すぐ、古い内裡襦を思はせるやうな上品さがあつた。客も椅子を立てて襦を返した。年かきの伊庭がまづ口を切つて、

「いかがです、御容態は？」

「毎度お見舞うございまして……」

「いゝえ、ちつとお悪いやうな御容子ですが……」

「え……」

目を伏せ、ぶらりと垂れて、前で指先を組合せてゐた手に、急に力がいゝると、襦の時のやうに、掌を合せて握りしめた。「どうも、いよいよいけさうもございせん。……たい今もまた、ちよつと金盞に半分ほど吐きまして……」

「ふうん」

瀬川は、いたましげに眉を寄せ、深い息を洩らした。「それアどうも……」

「財部君は、まだゐてくれてゐるんですか」

信之の紹介で、伊庭や瀬川も、この年暮な醫學博士とは、日本橋での遊び友達になつてゐた。

「えゝ。なんですか、脈がちつと面白くなつて來たつて云つておいですが……」

「意識は……？」

「はつきりしすぎてゐて、困つて了ふくらゐでございます」

信之は、これも子供がするやうに、無心に顔をさしよせて念を押した。その一言々々に合せて、鈴江は顔き返した。

「あゝ、それでいゝ！」

晴々と眉をあげると、把つてゐた手に、ぎゅツと力を罩めて、「チア、あらためて握手しよう。それから、ちゃんとこつちを見てくれないか……」

鈴江は、自分でわけが解らないほど、涙が出て、涙が出て仕様がなかつた。いつか氣持はさばくと、寧ろ、快いくらゐになつてゐたが、それとは別に、涙だけが泣かれるのだつた。さう云はれると、然し、一生懸命、息がとまるくらゐにこらへながら、涙を押拭つて、正面に信之の眼へぶつつかつて行つた。それは、思つた通りのものだった。——こつちが嬉しがつてゐる通りに、むかうも喜んでゐた。心から、ちつとにじみ出して来るやうな涙が、目のなかを光らせてゐた。

さう云ふ二つの目が、やゝ暫くのあひだ見合された……。もう鈴江には、怖れも、悲しみも、苦しみもなかつた。有難い、と云つてもいゝやうな喜びばかりだった。……押し拭つたばかりの目が、すぐ涙で一材になつて了ひ、さきの顔

が見えなくなるかと思ふと、ポロ／＼と頬へ一筋流れ落ちて、そのあと暫くは、後光のやうな細い光りの縞のなかに、信之があるのだが、すぐまた不正確な結晶體に似た光りばかりに埋もれて行く。……たうとうたまらなくなつて、握り合せた手の上に面を伏せて、聲をあげて泣き入つて了つた。

そこへ、さつき云ひつけられた明るい電球を持つて、朋子がはいつて來た。口の出しやうも手のつけやうもなく、云ひ合せたやうに、みんな膝に目を落してゐた一座は、却つてそれで救はれたやうな氣持になつた。

「つけ更へませう」

瀬川が、すぐ立ち上つて云つた。

「えゝ、どうぞお願いいたします」

枕もとの方へ、紐で釣りよせた電燈のスイッチが切られた。隣の、六疊間の灯だけになつて、一時人々は視力を奪はれた。……キュルツと、ソケットと電球との喰ひ合せが軋み鳴つた……

薄暗さに、瞳孔の調節がついて來た時に、鈴江の肩に手を廻して、耳のはたで何やら云ひ慰めてゐる朋子の姿を人々は見た。そして、百燭光が、眩いばかりに部屋ぢやうを照しだす前に、

その二人は、ひとかたまりになつて、廊下へ出て行つて了つた。

「よし／＼、これはいゝ。これで賑やかになつた……」

信之は、晝よりも明るいくらゐの光りで、頭りと部屋ぢやうを眺め廻した。

「それから、伊庭君……」

と、枕もとの方へ席を退つてゐた文學者の友達達を、目でさしまねいて、高踏の金だがね、あたしは、自分に許されないほどの金を使つて了つて、こんな邸には住んでゐるが、實は借金だらけだ。とてもあたしの死後までは……」

「そんなこと、ちつとも心配しないでください……」

「いゝえ、さうでない。一體金と云ふものは……」

さう云ひかけた時には、信之の頬は、美しい蔷薇色にあかるみ、眼は耀かしく澄んで、衰へ瘦せさらばへながらも、端然として犯すべからざる風貌だった。

## 九

……信之は、金と云ふものについて、こんな獨斷的な考へを述べ始めた。——萬象を、物と心との二つに分ける二元的な考へがなかつ



足のやうに筋骨だつた指さきを、そつと掌の平のうへ載せた。何故とも知れない恐怖で、眞正面に、やつれ果てた信之の顔を見ることが出来ず、掌にある指さきへ目を落してゐた。……、その指さきが、微にうち震ひながら、靜に甲の方へ折り曲げられて、じりりと力が單つた。あとにはもう代るべき人がゐなかつたせゐだらう、信之は、さうして握りしめたまゝで、まづ伊庭と瀬川の方に話しかけた。

「今日は、どう云ふものか、朝から頻とみんなに會ひたい氣がしてね。たぶん近頃になく氣分がいゝせゐだらう、と思つてたんだが、夕方からひどくやりだしたから……」

と、あいてゐる左手で、ちよいと胸から口の方へ、もどすと云ふ意味を手つきで見せて、「どうやら、いよ／＼のお別れがしたくなつたのらしいよ。ところが、偶然に……。偶然なんだらう？ それとも、うちのものが知らせてあげて、それで来てくれたのかい？」

「偶然さ、實は昨日伊庭君が鎌倉に来てくれて……」

「あ、鎌倉に？……さう／＼、君はあつちへ行つてたんだね。うちの子供たちもさつき迎ひにやつたから、今夜か、あしたの朝は、顔が見られ

るだらう。それくらゐは、まだもちさうだよ。……なに、もたせようと思ふやア、半日や一日のところは、どうにでもしてもたせられるものゝやうな氣がするよ。可訝しなことをぶふやうだが、慥にそんな氣がするよ……」

「……紀ちゃんたちも、大抵毎日海岸で一緒になつたが、眞つ黒になつて、なか／＼大へんな元氣だよ」

「さうかい」

と、ニコ／＼笑つて、「それア、お世話さんになつたことだらう……」

「それから今日は、二人で横濱に出かけて、支那料理を食ひにはいつて、急に岡鈴に逢つてやらうかと云ふやうなことになるつて、呼びにやつたら……」

「支那料理か、羨しいなア。……然しよく来てくれたね。偶然に、かうしてみんなに逢へたのは、ほんとに嬉しい……。鈴江さん、だけど君は可訝しな人だね、折角来てくれて……、あたしはまだ君に會はないよ。……日を見せたまへな、目を。目を見ないと人に逢つた氣がしないぢアないか。ちよいとまア、正面にこつち

を見てくれたまへ……」

云ひながら、握つた手に力を入れられると、

鈴江は、急になんともぶはれず悲しく、苦しい氣持になつて来て、洋服できちんと坐つた膝の上に、ポタ／＼と涙を落して了つた……。

「……」

何か云ひかけた、唇を、堅く噤んで、信之はぢつとその容子を見詰めてゐたが、引きよせるやうにして前に進ませ、先方の手を、こちらの兩の掌のうちに包み込むやうに握つて、それから、靜に口を切つた。

「君には、あたし、少し悪いことをしたか、と思つてたが、さうでもなかつたやうだね。どうだい、君はあたしに對して、悪い感情をもつてゐるかね？……或る時期にさう云ふ氣持はあつたかも知れないが、今では、……今はさうぢやなささうだね？ 伊庭君たちに誘はれたので、いやいやながら来た、さうぶ氣持ぢアあるまいね……」

手巾で、鼻と口を抑へて、一生懸命泣聲を殺しながら、――しくり／＼涙をすゝりあげながら、鈴江は、子供がするやうに、たゞかぶり

を振つてみせた。

八

「もうなんとも思ひやアしないね！ さうだらう？ 思つてないね！」

たのならば、決してその表面の事實だけで心を煩はされることはなかつたらうと思ふ。恥しく感じるのは、君たちの生活が、十分それだけの金に値しないものだつたからだ、——あたしはさう思ふ。金の問題ばかりぢやない、あたしの道德の基は總てそれだ。いゝこととか、わるいこととかと云ふのは、謂はば事實の通稱だ。或る人間を呼ぶのに、顔かたちから、心ざま、何から何まで云ひ並べれば、古今東西、たゞの一組でも全く同じ二人の人間と云ふのはない筈だから、それが最も正しくその人を指す名前にならなければならぬのだが、それこそ、じげむじげむ御光のすうりきれ、どころの騒ぎではなく、とても用が足りないから、そこでめいめい八兵衛とか権助とか云ふ通稱をもつことになる。斯々の行爲はいゝことだ、とか、悪いことだ、とか云ふのも、つまりその八兵衛権助の類で、八兵衛とその内容なる人間とが、何等有機的な關係をもたないのと同様、たゞ一種の符徴に過ぎないのだ。だから、斯々の行爲はいゝことだと云つて置いても、勿論それでもすむのだし、またよく／＼内容を吟味してみれば、その行爲と善惡とは、そばへくツつけて考へるさへ可笑しいくらゐのものにならないとも限らない。

人の精神的内容は、なかり善惡とか正邪とかで、さう一言のもとに片づけて了ふことは出来ないのだ。例へば毎日庭を掃いたり、風呂を燃しつたりしてゐる限りは、誰一人として権助が権助であることに異を樹てるものはないのだが、一旦これが、他殺の嫌疑のある死體かなんぞになつて、往來にぶつ倒れてゐたとなると、まづ権助が八兵衛か熊公か、通稱からして調べてかゝらなければならなくなるし、だん／＼の吟味の末は、権助、八兵衛の別は兎もあれ、その人間としての動きを、第一に考へ極める必要が起つて來るのだ。だから、普段から通稱主義の道德なんぞはどうでもいい、精神的内容主義でものを観てゐたい、と云ふのがあたしの心懸なのだ。それがあたしの道義心なのだ。君たちが、あたしをいゝ食ひものにしたと云ふのは、つまりその通稱なのだ。現に幾人かの人が、あたしにその通稱を指摘して、忠告してくれたこともあるけれど、そんなことであたしはちよつとでも心を動かされはしなかつた。しかしま伊庭君の口から、自ら恥ぢてと云ふ言葉は聞かなければならなかつたのは、あたしにとつてちよつと苦しいことだつた。さうかと云つて、空威張りをされるよりは、逆に氣持のいゝことだ

つた。然し要するに今のあたしの氣持なんぞはどうでもいいことで、問題にするがものはないそれよりも、問題は寧ろ君たちの氣持にあると思ふ。通稱なんぞには少しも目をくれずに、自分のしたいことをして、そしてそのしたこと、が、何に對してもちつとも負擔を感じない、つまり行爲に權威あらしめる、これが一番立派な生活だとあたしは思つてゐる。殊に藝術に心を潛めてゐる方々などは、眞つ先にさう云ふ心境にけいつてゐてほしいと思ふ。——もうあたしもかうなつては、つまらない謙遜なんぞしやうとも思はないから、づけ／＼云ふのだが、それで、馬鹿にされようと、生意氣なやつだと思はれようと、感服されようと、いまのあたしにとつては、ほとんど問題ぢやない、たゞあなた方のためを思つて云ふ、心からためを思へばこそ云ふ……

十一

その言葉の切目待ちかねてゐたやうに、次の間から、則部博士が、すらり立ちあがつた。八寸疊のやゝ狹窄に、すた／＼歩みよりながら、

たなら、恐らく金と云ふものは、この世の中に生れて來なかつたらう。物のうちに心を観じて、一元の生活にはいれた人にとつては、すべての價值は、形なく計られる。即ち、何を貰つたりやつたりしても、心持だけのやりとりで、これを金に換算し、相場はせる必要はないのだ。然し今の世から、金を追ひ出すことは出來ないにきまつてゐるし、在る限りには、それは、――物の代表者である金は、最後の一つ手前のものと云はなければならない。これが集散は、明かに、人生にとつて、最後の一つ手前の一大事である。自分は、それについて自分ひとりの考へ方をして來た。と云ふのは、金は、餘計得た人にそれだけ餘計使つていゝ權利があると云ふ、普通の考へに對する一つの反駁にほかならないのだ。止むなくこの世の價值評價を金で計算するとしても、せめてはそれを以て計られる標準には、心を第一に置かうと云ふので、つまり、精神的によい、立派な生活者には、金を取る取らないなどは論外としても、それに値するくらゐの金は、借金だらうと、ひともののだらうと、どん／＼使ふ自由を與へ、精神的にわるい生活をしてゐる者には、いかに澤山の金を儲けても、それを散じる權威を認めないことにするので。

もつと個人の心理にはいつて云ふなら、俺はこれだけ立派に生活してゐる、と云ふ自信だけが、それに値するほどの金を使ふ唯一の特權となるし、精神生活上の劣敗者には、金の使行權は、事實上あるとしても、はたが認めてやらない、――せめてはそれくらゐの世の中にした

いものだ、と云ふ考へ方だつた。

そして、信之自身について云へば、親の遺産を、たゞめちや／＼に使ひ捨てたと云ふことも、自分の一生が、立派であれば、天地に恥ぢないことになるし、いかに自分で稼ぎ貯めた金でも、よくない精神生活のうちに散じられたのでは、我にも人にも申譯なく、面目ない次第になるのだが、いま心を謙虚にして振り返つてみるに、自分の使ひ捨てた金額は、自分の精神生活のよさに比較してみても、どうも十分満足できるとは云へない。生活が、金に對してやゝ負擔を感じるので。

また實際問題として、女房と子供たちが、今後かつ／＼やつて行けるだけのものは、なほ残つてゐるが、「高踏」の出資まではとてもつげられない。同人諸君には、前に述べた意味で、自分ひとりの心苦さを感じながら、こゝで約を解いて貰ふよりほかはないのだ。どうぞ、悪か

らず思つてくれ、――かう云ふ話だつた。

と、伊庭は聞き終つて、思ひ人つたやうに、あまたたび首を打ち振つて、そんな風に云はれては、吾々こそ恥しくつてかまりませんよ。吾々の雜誌に金を出し、貰つてゐた氣持は、決してそんな立派だ、純粹だのと云はれるやうなものぢやありません。露骨に云へば、――うで十、吾々はあなたを、いゝ食ひものにしてゐたのです。決してそれだけとも思ひませんが、その氣持も多分にあつたことを、いま改めて正直に云つて置きます。あやまらなければならぬのけ、あなたぢやなくつて吾々なんです。――うぞ、悪く思はないでください。許してください。――云ひ終つて、日頃傲岸な伊庭も、慚に手を下けた。

# 十

「もし君に、ちよつとでもさう云ふ氣持があつたのなら……」と、信之は雞み落ちた眼にも、心いつぱいの力をこめて、「悪いのは、あたしを食ひものにしたと云ふ事實ぢやない。いまも云ふ通り、僕たちがさうしてもいゝだけの精神生活をしてゐ

云つた。無言で、暫くぢつと天井を見詰めてゐた信之は、溜息をついて、左へ、體ごと振り向けようとした。丁度看護婦は、注射のあと始末をしてゐたので、それと見て、すばやくうしろへ廻つて手をかしたのは、幾代だつた。

「もつと、下の肩を手前に引くやうにしないきア……」

「はい、……これでようございます？」

その聲で、ちよつとうしろを振り向き、

「なんだ、おいきさんか。……どうれで下手だと思つた」

「あら、大へんねえ」

うつかり朋輩たちの間や、座敷で云ひ慣れた言葉解が出て了つた。顔は見えないでも、その失策で、どれぐらゐ幾代がみんなの手前てゐるかは、信之にはよく解つた。一つは、その具合悪さから救ひ出したい氣持もあつたし、さうでなくとも、ふはり出た調子のよさが、馬鹿に彼には嬉しかつた。

「よし／＼！ 久し振りだな。さつきから、ちつともその調子が出ないんで、なんだかもの足りなかつたんだ……、ぢア、改めて握手だ！」

肩ごしに、うしろへ手を出す、すぐそれへ柔かい指が絡んだ。冗談口調とは似もつかぬ、

心の誠をこめて、白と掌に力が單つた。赤くなつて、目を伏せて、幾代も握り返した。

「……だつて、……ごめんなさい……？」

「こつちは喜んでるのに、あやまる人もないもんだ……」

「どうです、醫者と云ふ商賣も、中々これで辛いところがあるでせう？」

と、財部が、二人の文學者へ話しかけて、「かう云ふ景色を見せられても、病人と思へばそばについてなきアならないんですからね」

快い笑ひ聲が起つた。

「まあいゝやね、どうせ永いことはないんだ、友達甲斐に辛抱して貰ふんだね」

さうは云つても、信之は手をはなした。幾代はもとの席に戻つた。

「電文はね……」

その氣持の變り目に、もう一度瀬川が、それを読みにかゝると、信之は軽く手を振つた。

「解つてる……」

「え、解つてる……？」

「誰かが、死んだとか、危篤だとか、そんな知らせぢやアない？」

「さう、お民さんつて人が危篤だつて云ふ……」

「然しもういけなかつたに違ひない……可哀

想に、京都で出てゐた人だが……」

「里奴……」

「よく知つてるね」

「三好か聞いたことがあつた……」

「さう。可哀想だが、然し……。まあ、どうも仕方がない……」

「どうして君は……前から、悪いつてこと云つて来てあつたのかい？」

「いや、……まあさうだ。知らせがあつたんだ。これで、明日の陽があがつて来れば、子供たちには逢へると……。もう一人、是非逢ひたい人があるんだがア……」

「誰、……誰だい？」

伊庭が、いつもの落つきに似合はず、急ぎ込んだ調子で尋ねた。

十三

伊庭君

と、眞正面に瞳を見込んで、「君は知つてる人なんだ。もとのよし野の女將さん、——おもんさん、ね？」

「知つてる……」

場合も忘れて、思はずニヤリとした。

「あの人に逢ひたい！」

信之の方は、しかし飽までも眞面目だつた。



「信さん、さう君ひとりで喋つてちやいけないね。ちつとはたの人にも話してもらつて、聞きてにも廻らなくつちア……」

「さうか……」

信之も、忽ち心からの笑顔でうけて、「だが、時間から云ふと、あたしが一番忙しい人なんだからね。まアみんなはあとからでもゆつくりお喋りが出来らアね」

醫者は、寢床の端に突き膝の中間で、邪慳らしく病人の手頸を把つて、脈どこをを抑へてみた。

「いけないア」

叱る調子と、嘆く調子を半分々に、「こんな脈にしちまつて……。死ぬまでは君の體ぢアないか。自分で大切にしなきア仕様が有りやアしない。さア少し落ついてゐるんだ。ね、信さん、暫くみなさんにあつちに行つて、貰はうぢやアないか」

信之は、てれたやうな笑ひ顔を、一順友達や、ずつと枕もとの方にゐる幾代にまでも向けた。そこには、幾分か、みんなの氣持にも詢つてみる、と云つた容子があつた。伊庭や瀬川は、婉曲な財部の云ひ廻しに對しても、自分たちの方から、なんとか言葉を立て、一度は座を立た

なければならぬ場合だ、と氣はついてゐるのだけれど、懐しく穩かたで、居心地のいいその場から、どうも腰を擡げる氣になれなかつた。

「やがて靜に信之が答へた。

「いゝさ……」

「よかアないよ」

「……ぢア、成可くあたしは口を利かないやうにするから、みなさんには矢ッ張りこゝにゐて貰ふことにしようよ。矢ッ張り、かう……、賑やかな方がいゝからね」

「ぢア、へみたいに、長講一席、君ひとりで喋りだしたら、今度こそ一人ッぼつちにしちまふよ。……それから、一筒、注射をしとかうぢアないか」

「眠り薬なら斷るよ」  
「大丈夫、眠かしやアしない。不倒翁さんを煎じて拵へた薬だ」

それで、みんな、危篤の病人の枕もとにゐるとは思へないやうな、咄々とした笑ひ聲をあげた。さつきから、目を膝に伏せたまゝ、まるで凍りついたやうになつてゐた幾代でさへ、それには仲間入りをして、病人の方に、にこやかな笑顔を向けた。

布団を彼方へ廻つて、看護婦に手傳はせながら、

ら、財部は、何やら静脈内に注射した。そのあひだ病人は目をつぶつてゐた。目をつぶると、急に驚くばかり瘦れ目だつて、正視するに忍びない相好になつた。

瀬川が、伊庭の耳もとに口をよめた。

「電報、どうしませう」

「さアね……」

伊庭も、睨き返した。「この元氣なら、大丈夫、大丈夫です、ね、見せたつて……」

「僕もさう思ふ……」 ぢア、讀んで聞かせませうか。兎に角、握りつづすのはよくないから……」

「いゝでせう、讀んであげたまへな」  
で、注射がすんだところで、いま自分たちが玄關へ來ると同時に配達された三好からの電報のことを話して、

「……君、自分で見ますか、それともこゝで讀んであげませうか？」

聞くと信之は、空を見詰めたまゝ、瀬川への返答ではなく、枕の上に、胸ごと大きく一つ頷いた。

## 十二

「どうします、讀みますか」

すぐもう膝の上に電報を披きながら、瀬川が

「そつちで胡坐になるなり、伊庭は、咽喉風邪でもひいた人のやうなかすめ聲で、財部に容態を尋ねた。

「結局いけさうもありませんね」

若い醫學博士は、首を振り、眼鏡の奥に、鋭い眼を光らせて、「電話で、夕方僕が駆けつけて来た時に、もういけまいと思つたくらゐだ。ひどい脈さ」

二人の文學者たちは、額をよせて、交互に問ひかけた。

「でも、その後はよつほど落つてゐるわけなんですわね？」

「なアに、おんなじことですよ」

「死脈とか云ふやつですか？」

「まあさうですね。君たちに面會を許したのも、さう云ふ容態だったからだが、……然し奇蹟的だよ、あの脈であつてお喋りが出来るつてのは、……少くとも、僕は初めて出會したことだ」

「つまり氣だね、氣でもつてるんだね」

「朱練なやうだが、もう今となつちアどうにも仕様はないんでせうな」

瀬川は、充奮から顔を眞ッ赤にしてゐた。

「どうもね……」

「要するに、時間の問題ですか」

「それもですよ、明日の朝子供たちに逢へるつてのを、大へん楽しみにしてゐるが、僕アどうもそいつさへ」

「さうですか……」

伊庭は悵然として、帷子の袖に手を掛いた。

「注射をどん／＼してみたら……」

「そいつがさ……、食鹽注射つてやつは中々痛いんだからね、あんなに意識が明瞭だと、さうどうも苦しませてもと思ふんでね……」

「さうですか……」

とんでもない時分になつて、とんでもない返事をするいつもの伊庭の癖で、「そんなに悪い脈なんですか」

「悪いとも！ 足なんぞ、もう夙からうつてやしない。嘘だと思ふならさはつてみたまへ。でもまあ、わりに吐き氣の少いのが何より仕合せよ。

幽門はもうすつかり塞がつてゐるんだからね、溜つて来れば、いやでも應でも上へ出るよりほかはないんだが……」

「先刻から何遍やつたんです」

「僕の來ないうちに二度あつたさうだが、三度目のがえらかつた。四合はたつぷりあつたらう」

みんな慘まじげに眉をよせ、目を伏せて、——もう云ふべき言葉もなかつた。思はずも、長くつく息が震へた……。

忍びよるやうに朋子が來た。

「いまおやすみです」

と囁く瀬川に、目だけで答へて、そのまゝ、良人の枕もとへ行つて、きちりと小さく坐つた。

五六歩おくれて、幾代が、硯箱の上に頼信紙を載せて、これも足音靜かにはいつて來た。

## 十五

十二時すぎから、思ひがけなゝ子供たちが歸つて來た。

門前に自動車がとまつた音を聞いても、もし時間の繰合せがついたらもう一度来て診ようと云ひ置いて、夕方歸つて行つた大學病院の或有名な醫者だらうと思つてゐた朋子も、それと聞くと、良人の眠りを醒ませない氣配りに、廊下まではそのつと出たが、あとは宙を飛ぶやうに玄關へ走つてつけた。總領の信紀だけが大きな目を睜きながらも、ぼかんとした顔つきで立つてゐた。信次は九三の腕にぐつすり眠つてゐた。

文子のお河童さんの毛は、書生の肘から、房々と揺れてゐた。——兎も角も、みんな揃つて歸つて來てゐた。それを見ると、朋子はいきな

「屏どころは、はつきりしたことは分らないんだが、我善坊のお不動さんまで行つて貰へば、大抵知れるだらうと思ふ……」

さう云つて、一番近い停留所から、靴屋と漬物屋との横町へ切れ込んで行くまでの道筋を話して、「もしよかつたら、今から自動車で行つてみて貰いたいんだがね。そこにゐなければゐないで、多分行つて先は知れるだらうと思ふんだ。……尤も、その坊主は、ちよつとへんな奴だがね……」

「それア行つて来ようけれど、時間がどうだらう、もう寝ちまやアしないかしら」

財部が、胴着の衣囊から金時計を取り出してみて、

「もう十時すぎてるよ、二十二分、かれこれ半として……」

「夏の十時は宵の口だよ」

そのとき瀬川が口を出した。「僕ア逢つたことはいけれど、よく噂には聞いてるんですが、それほどまでにして逢はなかつちアならないほどの女ですか。どうも僕ア、あんまり賛成できないな……」

きつぱりさう云はれると、信之は、ひとたまりもなくして了つて、軒端に遠く宵闇の、

天の川白い初秋の空へ、いかにも悲しさうな目を放つた。……蟲の音がしきりだつた。

心の底から寂しさうな、信之の目の色を見ては、瀬川も内心後悔してゐたのだが、行きがかり上、すぐまた取り消すわけにもいかず、誰かなんか云ひ出してくれるのを待つてゐた。

「差し出がましいやうですが……」

と、靜に口を切つたのは、思ひもかけない幾代だつた。信之の顔の窺き込むやうに、枕もとから乗り出して、「もし、お構ひなければ、あたしが行つて参りませうかしら。どうもそのお迎ひは、男の方より女のはうが都合がよささうですし、おもんさんなら、——あちらでは忘れておいでせうけれど、あたしもお目にかゝつたことはあるんですから……」

「さう……」

夜の空を見詰めたまゝ、ちつと考へこんでゐたが、「しかし……お前は……、あなた、自分から行きたいわけぢやないんだらう？……よさう、来て貰へたらこの上ないが……、電報を一本うつつといつて貰はうか」

「あなたが行つて来いと仰有るんなら……」

「云はない。反對に、行つちア困ると云つてゐるんだ。……奥さんとこへ行つて、電報用紙を貰

つて来てくれないか。伊庭君、矢張だが、君ちよいと書いてくれませんか」

幾代が立つて行つた。

「どうだい……」

と、伊庭が瀬川を顧みて笑ひながら、いよいよもつて多情佛心だね

「多々情々佛々心々だよ。果れ返る……」

その二人にしか笑へない話題には、信之の耳は惹かれなかつた。ぼんやりしてゐた。

「ねえ、信さん、今日横濱で、面白い文句を見つけて来たんだがね……」

さう云つて呼びかけて置いて、瀬川が、安那料理屋の職について、詳しい話をして聞かせた。

#### 十四

心よげに、「什の話をうん／＼と頷きながら聞いてゐた信之の眼が、そのうち次第に細くなつて行つて、どうやら寝入りさうに見えた。

財部に注意されるまでもなく、それは注目の利き口と察しられたので、だん／＼に話聲を低めて、たゞほんの子守唄がはりに、表情もなく喋つてゐると、やがて信之の返答が、すやく／＼と軽い寢息に變つて了つた。財部初め一同が、眼と眼で、いゝ按配だつたとぶふ心を通はせ、靜に立つて次の間の方へ来た。





眼にいつばい涙をためて了つた。

「お歸り！」

云ふなり、まだ靴を穿いたまゝの信紀を、胸へ抱ひ込んで、頬をすりつけ、抱きしめた。子供も、頸ツ玉に堅くしがみついて來た。

「御苦勞さん、よく早く歸つて來られたね。もうとても明日の朝だらうと思つてた……」

さう云つて、まづ九三と書生とを勞つた。

「かす／＼九時五十分の間に合ひました」

九三は、手柄顔に、ひどく取りすまして答へたが、書生を顧みると、急に笑ひだして、「ねえ、随分あわてましたねえ」

「その代りみなさん、着のみ着のみ、みたいなもんです。でも、多分総列車で、お花さんが、少しは荷を纏めて歸つて來る筈ですが」

「あゝ、いゝとも／＼」

信紀をおろして、九三の手から信次をうけとらうとしたが、

「なに、ようござんす、ようござんす」

と、そのまゝ勝手を知つた寢部屋の方へ、さつさといつて行つた。

「お敏、お前、早く行つて床を敷くんだよ」

まづ／＼してゐる小間使にさう云ひつけて、自分は信紀の手を引き、書生に抱かれた文子の

寝顔を窺き込みながら、「まア、眞ツ黒けになつて……。でも随分肥つたねえ、どうだらうまア、この頬べたは」

「マ、僕、遊げるやうになつたよ」

いきなり、元氣のいい、大きな聲で、信紀が云つた。

「さう？ 遊げるやうになつたの？」

「板子があれば、こゝからね」と、慈々母親の足を止めさせて置いて、「一彼方の、あの、お茶の間に曲る角ぐらゐまでは、大丈夫行けるよ」

「まアさう？ えらいのねえ」

「板子がなくなつたつて、このくらゐなら」

兩手をいつばいに、肩の後まで掲げて、「このくらゐなら遊げらア」

「さう？ よかつたねえ。みんな大人しかつたつてねえ」

「三吉が來て、いきなり僕に、東京へ行きませうつて、僕、吃驚しちやつたア」

「でも、もうそろ／＼歸りたくなつてたんぢアないの？」

「うゝん、僕鎌倉の方がいゝや。東京、海がないんだもの、つまんないや」

話しながら寢部屋まで來ると、洋館の應接間

の方で休息してゐた瀬川が、子供たちの歸りと聞いて、ひと夏の嘲染があるだけに、早速とんで來た。

「やア、みんな歸つて來たね……」

九三も、書生の中村も、口にくそ云はね、心には案じて來たことが起らなかつたのを知つた、――さう察してよい、お遊びの人々の調子だつた。

十六

瀬川まで一緒になつて手傳つて、寢込んで了つた子供たちを床に入れてやつたりしてから、信紀だけつれて、朋子はひとまづ茶の間に落ついた。

「マ、よ、マ、つてばよ、マアマア」

子供のくせに、夜更しで朝寝坊の信紀も、有繋に眠くなつて來て、疊の上にゴロリと轉け、母親の膝を枕に、そろ／＼鼻を鳴らし始めた。遊びにほけて、忘れてゐたのが、久し振に母親に抱かれたりしてみると、急に甘ツたたい氣持で一杯になつて來たのでもある。朋子は丁度、醫者や友達が休んでゐる洋館の方に、ハンと紅茶でも持つて行かせようと思つて、仲働きの女中に、そんなことの用意を云ひつけてゐたので、子供の方への返事があと廻しになつた。

鈴江も幾代も、床の足もとの方へ退ると、こらへこらへてゐた涙を落した。朋子も、あとからあとから頬へ傳ひ流れて来る涙を拭はうともしずに、

「どうも御苦勞さんでした」

と、それでもはつきり挨拶した。

「あつちへつれてつて、寝かしておやり」

信之が、低く囁いた。二人は、静かに立つて、寢部屋の方へ戻つて行つた。

それから暫くは、もの音がなかつた。みんな、おツと病人の顔を見詰めてゐた。

重たく時が動いて行つた……。

病人が、こけ落ちた頬の肉を、ぎごちなさうに動かして、何やらものぶひたげにした。

「含嗽をあげようか」

財部が乗り出して行つて、吸飲みを取りあげた。

それには、血を吐いたあとの口が腥いと云ふので、石炭酸を調合した水がはいつてゐた。口に含んで、信之は、ちよつと不憚な顔をしたが、すぐ金盥に吐き出して、

「水、たゞの水をくれないか」

「飲みたい？」

「飲みたい。もう飲んででもいいだらう？」  
「いゝとも、いくらでも、飲みたいだけ飲みた

まい！」

決然として、若い博士が答へると、病人の頬には、さも嬉しさうな微笑が動いた。

「……お許しが出た……盗み飲みでなく、今度こそ置ききなく飲まれる……」

「あゝ、飲みたまへ！」

看護婦が、手早く吸飲みへ、水差しの水を注ぎ、ぶツかきを三つ四つ匙でしゃくひ込んで、財部に渡した。財部は、朋子を顧みて、目で

そばへよれと告げた。信之を抱いたまゝ膝行りよつて、吸飲みをうけとつた時には、朋子の涙は、微ながら音に洩れた。

信之は、吸飲みに七分目ほどの水を、ごくごく咽を鳴らして飲んだ。それから、硝子の管を唇から離すと、

「朋子……」

と、静かな、沈んだ聲で呼びかけた。人々は座を速應すべきかどうかを語り合ふやうに目を見合せた。瀬川の立ちあがつたもの音で、信之が薄目をあげ、あたりを見廻しながら、

「みんなこゝにゐて、……おいくも鈴江も、みんな、……賑かに……賑かに……にゐてくれ

……。おもんは、おもんはまだ来てくれないかしら……」

## 十九

呼びに行かないでも、丁度そこに鈴江と幾代が戻つて来た。至急報の電報はうつて置いたけれど、うまくそれがおもんの手にはいつたかどうかは危まれた。信之も、それ以上はおもんのことを繰返さなかつた。

「……朋子……」

もう一度呼びかけて、手を求めるやうにした。

「はい」

一膝蹴りよつて、左に信之を抱いたまゝ、右の手を握り合せた。

お前には、いろ／＼苦勞をかけたね。だが、あたしの心が一番よく解つてゐてくれるのは、なんと云つてもお前だ、……今まだ解らないで

も、これからさきお前の一生のうちには、だんだんと解つて行くこともあるだらうと思ふ。だから、あたしは、今更ごんにも云ふことはない

んだが、たゞ、子供たちを大事にしておくれ、それだけで、それだけは、ぶはないたつて大丈夫なことだけれど、ぶはしておくれ。何しろ、これから先、永い間子供たちを見て貰はなければならぬんだが、構はないから、自分の

したいと思ふことをさせておくれ。あたしは一生それでやつて来たのだ。誰にも逆らなかつ

んぢぢありません、分つたでせう？」  
もう一度幾代が飛んで来た。

「奥様、旦那様が……」

「はい」

泣き叫ぶ信紀を抱きあげて、すぐ朋子は廊下を奥の間へ急いだ。行く／＼「お黙んなさい！よ！もう泣くんぢアないの！などと云ひきかせると、それでも、父親のそばへ行くと云ふ氣持からか、泣き聲がだん／＼に低まつて、びつたり肩へ顔を押つけて了つた。

病室では、またもや多量にもどした金盞の始末を終つたところだつた。財部が自分であと口を嗽がせたりしてゐた。

「……歸つて来た、歸つて来た……」

白つちやけた烏睛を、力なく動かして、信紀を見ると、病人は、息を喘いで喜んだ。「ちよいとこゝに……、ちよいと、よこしてごらん」

「眠いもんですから、やかましくつて……」

いくらそこにおろさうとしても、子供はしつかり頸つ玉へかじりついてゐて放れなかつた。

「おい！ 信紀どうしたんだ」

「バ、ちやんが呼んでいらつしやるぢアないの。……さあ、たゞ今をなさい、ね、いゝ子だから」

「まア、いゝや、だん／＼そのうちに機嫌がなほるだらう」

云ひながら、軽く背なかを叩いてやり、「おい、信紀、お前もいゝ人になるんだよ。いゝ人が一番いゝや、ね、いゝ人におなりよ。……それから、信次と、文子……二人ともつれて来ておくれ、……起きないやうに、寝たまんまでうつと抱いて来て、……ね、抱いて來られるだらう？」

目で詢り、頷き合つて、幾代と鈴江が立つて行つた。それを見送つてゐた信之の眼は、花の

湖むやうに靜にとざされた。財部博士は脈をと

りづめに、病人の容子を見守つてゐた。……しんとした。有繫にひや／＼とした夜氣が、

あけ放した六疊の方の縁側から、動くともなく

流れ込んで来た。

自分に構ひてがなくなり、あたりがひつそりして了ふと、信紀はそつと顔をあげて、頸から

母親を見あげた。が、母親の軀は、どこかも石にでもなつて了つたやうに、こつちりとして

動かなかつた。

「マ、ア」

低聲に呼びかけてみた。それでも動かなかつた。どんな顔つきをしてゐるのか見たいと思つ

て、胸から少しばかり身を起した。大きく睨いた目から、いつばいに盛りあがつて来たばかりの涙が、ホロリ、ホロリツと蒼白い頬へ轉け落ちるところだつた。

## 十八

それを見ると、子供の心は、急に悲しくなつて来たが、然し何故か、いま泣き聲をあげてはならないのだ、と云ふ氣が強出した。一生懸命、

涙をこらへてゐた。

そこに、鈴江が信次を、幾代が文子を抱いてはいつて来た。子供たちはよく寝込んでゐた。

手足がだらんとぶらさがつてゐた。

もの音で、信之は微に目をあけた。

「こゝへ……、そばへつれて来て……」

弱々しく聲が細つて、さしまねかうとする手

も、もうもちあがらなかつた。まづ鈴江から進んで、そば近く膝をつき、子供の顔を差しよせて見せた。永くは、信之は見えてゐなかつた。日

をつぶり、微に首を振つて、もういゝと云ふ知らせをした。幾代が代つて、文子の眞ッ赤な頬

を、殆ど床の上にさし置くまでに近よせた。信之は、そうツと軽く指さきを載せて、すぐまた

口をつぶり、あつちへつれて行けと云ふ心を示した。

中々したいことの出来る男だが、出獄人らしくいぢけさせたくないからねえ、何分ともお頼みしますよ。……それから、三好君や萩原にも、もし東京なら逢ひたいのだけれど、遠方のことで仕様がなから……、よろしく云つてくれ給へ……」

「承知しました」

伊庭が顔をよせて、きつぱり答へた。瀬川は、男泣きに泣いてゐて、口が利けなかつた。病人は、これで一安心、と云ふやうに、深く頷いて、目をつぶり、仰臥しようとした。看護婦と幾代とで、體をかはすのを助けてやつた。

「おい、さん、お前に、一杯水を飲ませて貰はう……」

幾代が、片袖で鼻から下を覆ひ、一生懸命泣き聲を洩すまいとしながら、吸飲みの口を差し出した。手が震へて、なかに浮いてゐる水がカチカチと鳴つた。

「しつかり、死ぬ俺がこのくらゐ落つてゐるんだ。しつかりしないか……」

信之は、晴々しくさう戯れて、うまさうに水を飲み乾した。

「おもんさんには逢へさうもない。お前、尋ねて行つてよろしく云つとくれ。あなたの身の上

については、いろ／＼心配してゐたが、……さうなら、と云つてたつて……それから、お澄さんに逢ふ機会があるやうだつたら、おもんさんからよろしく傳へて貰ひたいつて……」

云ひ終ると、どう云ふ力が生き残つてゐたか、信之は、人手をかりずに、兩掌を胸の上に組み合せた。……それから、五六分して、驕いた。

「さやうなら、……みなさんも安心なさい、死んでくのは、存外樂なものですよ、……あゝ、樂だ……」

これが最後の言葉だつた。十分ほど後に、藤代信之の心臓は、全くその働きを含めて了つた。

大正十二年九月朔日、午前四時十五分、そろそろ東の空が白み、星の光りも薄れかけてゐた。

かくして大震災の日が、靜に夜明けつゝあつたのだ……。

(後篇了)

我は宇宙に唯一の者の者だ、この自覺に徹して、己に生きるか。

人は群居動物なり、の意識に始終して、衆に就くか。

前者を執れば、荒い風にも、寂しい思ひにも、痛い目にも會はなければなるまい。

後者を選べば、無事平穩に、存外氣樂な世渡りが出来るだらう。

石か珠か、兎に角堅いものになるか。

それともさう云ふ堅いものゝ間に挟まるつめ綿になるか。

これは、若いうちに、とつくりと考へてみて、い、夥多の諸問題中でも、可なり重要な一つだらうと信じる。尤も、考へてみたばかりでは仕方がないが……。

(『白雲亭漫記』の「同じものは二つない」より)



たけれど、誰の云ふことも聴きはしなかつた。  
たゞ、一番むづかしいのは、自分のしたいことが  
なんであるか、それをはつきり知ることだ。人  
間は、決して自分のしたいと思ふことを、そのま  
まにはしてゐないものだ。一體何をどうしたい  
のやら、自分でではつきりそれが分らないのだ  
が、不思議にそれで満足してゐる。十人に九人  
までは、さう云ふあやふやな生活をしてゐるも  
のだ。自分のしたいことが、はつきり解る、つま  
り心からしたがる、それが何よりむづかしい。  
むづかしいがさうしてやつて行くのなら、何を  
したつていゝ。子供たちには、――いや、子供た  
ちばかりぢやない、お前だつてさうだが、なんで  
もしたいことをするがよい。たゞ、したいこと  
の本體を、しつかり握つてからしたがる習慣を  
つけなないといけない。心からしたいことをする  
分には、何をしたいといふのだ、ほんとに、どん  
なことだつていゝのだ。眞に何がしたいのか、  
それがあやふやだつたり、したがる度合が弱か  
つたりする場合に、平氣でなんかするくらゐい  
けないことはいんだ。解つたかい？……ま  
ア、いま解らなくつても、だん／＼解るからいゝ  
さ。ま／＼から何かしたがること、――これ  
が、あたしの一生かゝつて貯めた財産の全部だ。

これよりほかに遺産はないんだ。貧しいけれど  
仕方がない。ほかのものは、明日が日、火事や  
泥棒にあつても消え失せて了ふし、自分で使つ  
ても減つてくものばかりだが、いま云つた遺産  
だけは、使へば使ふほどよくなる、――だから  
最後に云ひ置いて行く、……信紀！ いまバ、  
の云つたこと、解らないでもいゝから、よく憶  
えてゐるんだよ。信次や文子の分もお前に預け  
て置くからね、大きくなつたら分けてやるんだ  
よ、いゝね、いまバ、が云つて聞かせたことが、  
うちぢうの何よりかより一番大切なものなんだ  
からね、お前は大事に心のなかに持つてゐて、  
今に解るやうになつたら、信次や文子にも話し  
て聞かせるんだ、ね、解つたらう？」

朋子の顎の下に、堅く押しつけられてゐた子  
供の頭が、ガクリ／＼と頷いた。

「解つたのね？ ぢア、バ、ちゃんの方を向い  
て、解りましたつて仰有い」

さう云ひながら、子供を膝からおろして、父  
親の前に坐らせようとするのを、信之は、靜に  
手で制めた。

## 二十

「いゝよ／＼、そのまゝにさしとき。今のあた  
しの顔なんぞ見ない方がいゝ。見られたくもな

い。ね、さうしてマ、にくつついておいで、云ふ  
ことだけ聞えさへすればいいんだからね……」  
それから、寢床の周りを取り囲んだ人々へ、  
一睨目で呼びかけながら、

「みなさんに、お禮を云はしてください。よく  
あたしのやうなものを愛してくださいました。

今後も、女房や子供たちを、あたしと同様に思  
つて頂けるなら、こんな仕合せなことはないま  
せん。たゞ、今もうちの者に申しました通り、

したいことをする、と云ふ家憲を遺して参りま  
すから、何事に限らず、うちの者の方から御相  
談を願はないかぎり、彼等のしたいやうにさ  
せて置いて頂きたうございます。こんなことま

で申しては失禮とは思ひますが、これも所にお  
願ひして置きます。あたしの最後の我儘だと思  
つて許してください……」

目をつぶつて、暫く息を喘いでゐたが、

それから、伊庭君、瀬川君にお頼みして置き  
たいのは、西山善烈のことだがね、裁判の方は、

昨日も桑木博士が来てくれて、出来るだけの力  
は盡すと云つて、……大抵ア五年くらゐの刑

期ですむだらうつて云つてたが、その方は仕方  
がないとして、出て来てからのことを……なん

とか面倒を見てやつてくれませんか。あれは、

と云ふのが、まアよかつた、の調子に落つてゐたので、姪の娘も起き返つた。

「なアに？」

「なによ、あんたこそ！」

「だつて姉さんが……」

「あたしどうもしやしないわ」

「あら、きやつて云つたぢアないの！」

「だつてあんたが薄目なんぞつかつてこつちを見てるからさ」

「あら、それより前に姉さんが、可怕さうな顔をして、本讀むのよして、蒲團のなかに手を引つてめたぢアないの！」

「まあ、見たの？」

「あたし、泥棒でもはいつてるのかと思つたのよ」

「馬鹿ねえ、どうして目を覺したの？」

「姉さんが呼んだんぢアない？」

「いやだわ、呼ぶもんですかね」

「あら、ほんとに呼ばない？」

「知らないことよ！」

「あらア？ ぢアあたし寝米けたのかしら」

「いゝえ、椿が散つたのよ」

「いやア！」

どかしちアいやよ！」

「あら、びつくりするわよ！」

「だつて、姉さんがそんなことを云つて……」

「おどかすんぢアないわ。見てごらんさいな、そこに……」

「いや／＼いや！ いやよ！」

「馬鹿ねえ、床の間に生けといた椿の花が散つたのよ。その音であんたが目覺ましたんぢアないの！」

「あら、さうウ？」

「やうやく顔をはなして、可怕々叔母の肩ごしに、床の間の方を覗き込んだ。「まア、いやだわ、眞ッ赤なのね……」

「そんなこと知らないわ。赤いんだつて白いんだつて、散る時が來れア散るでせうさ。眞ッ赤ならどうだつて云ふのよ」

「なんだか、氣味が悪いわ」

「ぢア、持つてつて、捨てゝいらつしやいな」

「いやよ、姉さん捨てゝ來て頂戴よ」

「椿はないわ、ほつときませうよ」

「でも、なんだか血がたれてるやうで……」

「およしなさいいつてば！」

と美しい眉根に八の字をよせて、本氣になつて窘めたが、「知らない、もうあたしねちま

ふわ

いつかこちらの蒲團の上へ來てゐた姪を突きのけて、こゝりと横になり、すばやく夜着を額の上までひつかぶつて了つた。

「あら、姉さんずるいわ！」

突き飛ばされた力をそのまゝ、これも蒲團へ轉げ込んで、頭から夜着にくるまつて、ぢツと息を殺し、耳をすましてゐた。

しいんとした。

暫くさうしてゐたが、息苦しくつて耐らんくなつて來て、姪が、そうつと顔を出して見ると、いつの間に叔母は、普段のとほり肩をしつかり包んで、こちら向きに、靜にねてゐた。

まアいやな姉さん！と思ひながら、左下に寝返つた。と、部屋の際の暗さに、電燈の覆ひの紅が滲んで、藤紫の隈となつて、しじゅう見動した清方の元祿美人が、屏風のなかで死相を現はしてゐる……。

「あらいやだ」

思はず呟いて、すぐまたくりと向き返る鼻のさきで、だしぬけに叔母が、もうとても耐らない、と云ふ風に、ぶツと噴飯すと、いつも中笑はない人に似けなく、華美な友達の夜着を、鼻の上まで急いで引き上げ、肩から腰へかけて

# 椿

三十を越して獨身の女が、洋紅の覆ひを深々とかぶつた電燈のもとで、床の間の方を枕にして、左下に、ねながら講談雑誌を讀んでゐた。まるで風のない寒い晩だつた。まだ十二時は打つまいと思はれるのに、いつの間にかすつかり人通りが杜絶して了つて、もの音のなくなつたことが、鋭く耳につきだした。頁をめくる序に、ちよいと目をやると、五寸ほど離して並べたとつた寢床には、姪にあたる二十歳の娘が、これは右を下に、つまり向ひ合せに安かな寢顔の鼻から上だけくつきりと天鵝絨の掛襟をぬいて、大へんな美人に見える。珍しさうに、叔母はぢつと眺めてゐた。

「おすましねえ」と押揃つて、一緒に笑ひだしたい氣持だつたが、娘はまるで造りものゝやうに、寢息さへ聞かせなかつた。ひとりで聲を立てずに笑つて、ほんのちよいと身動きをすると、引越のとき表更をさせたばかりの青疊が微に鳴つて、夜庭の下からふはりとあつたかい風が顎や頬へ流れか

かつた。

それからまた暫くは、小説の筋をたどるよりほか、なんにも思はなかつた。——生憎、ちつとも眠くなつて來なかつた。

プウーと知く、どこか遠くで汽笛が鳴つた。それで、あんまり靜なのがちよいと氣になつた。

今夜だけに限られた静けさのやうな氣がشدした。女中を起して、寢床をもつてあがらせ、今夜はうちぢうみんな揃つて、二階にねようかしらとも思つてみたが、起きて行くのも億劫な

ので、そのまゝ讀みつゞけた。そのうち、男女關係のかなりきはどうことを書いたところへ來たけれども、なんともなかつた。引き續きに思ひ出されるやうな男などもなかつた、なんにも思はずに讀み耽つた……

バサツ。

すぐ枕もとだつた。あともさきもなしに、ただそのもの音ひとつきりだつた。疊の上に何か落ちたのに違ひないが、なんであるか、顔をあげて見る氣にはなれなかつた。左の片手に持つて

ゐた雑誌を、そうツと蒲團の上へ置き、手先を引つ込めて、胸のところで握り合せた。左の、石のやうな冷たさが、右の掌へ滲みだ……。見ると、姪が、薄うく眼をあいて、ぢつとこつちへ睨を据ゑてゐる……

ギョソとした。

「なによ！」

跳ね起きるなり、「なによ、節ちゃん！」

「いやア！」

夜店ごと飛びついて來て、膝頭へ面をふせた。

「なんですつたら！」

「なんなの？」

そツツと顔をあげかけた。

「知らないわ！」

膝の重みをはね返して置いて、躊躇はず比もとを見た。感じられたよりは、一尺遠く、床の

飾後表の上に、眞ッ赤な大きな格が、輪、お櫛の蓋でもふせたやうに、ぼつくり散つてゐた。

前にゐた家の庭に、眞盛りを見残して來るのが惜まれて、差配に頼んで、環山剪つて貰つて來たのを、青磁の瓶に生けて飾つた、——それが

もう四日あとのことになる……

「いやだわ、節ちゃん」

父

親

山道を掘いて兩鬢からぬけあがつた五分刈の  
髭きは、石蔵人をグル／＼巻きにした濡手拭  
で逆撫で上げながら、後手に片一方で、縦繁  
の格子に紐をはつた車戸をガラ／＼とやけに  
たて切つて、男湯を出ると、

「やア……」

と、この奇遇を大袈裟に驚いてみせるやうな、  
そして馴々しげな調子で聲をかけたのは、血肥  
に張り切つた頬を、湯あがりに一層赤く、テラ  
テラさせ、胸毛が見えるまで、ゆかたを重ねた  
あらう八端のどてらの襟をはだけた、五十がら  
みの大男だつた。――「あんた、きん助はんや  
ないか」

南地でこそ舊いきん助さんで、島の内一回、  
知らない顔の犬もないほどだつたが、それだけ  
にまた、つい十日ばかり前に引越して來たこの  
堂島が、十里二十里隔つた在所のやうに思はれ  
てならないところへ、居まはりの人らしいいづぼ  
らな風姿の、而も見覚えのない顔なので、てッ  
きり人違ひと、そのまゝ目を迷らさうとしたの

だが、はつきりきん助さんと町びかけられてみ  
れば、まさか知らん顔で行き過ぎもならなかつ  
た。

「あんたはん、まア……」

二三年このかた氣樂に遊んでゐるもの、以  
前の商賣がら、どなたでした、ともまさか訊か  
れもしず、誰だつてかしら、と肚のなかでは頻  
に考へあせりながらも、顔だけはさも親しげに  
笑つてみせて、「まアま、永いことだんなア、あ  
んたはん……」

「あんたはんで、……わてが分るか」

さう云ふ聲音で、いゝ按配に、はッと思ひ出  
された。

「なに云うてなはんね。……そやけど、木田は  
ん、あんたまア、ころツと變なはつたなア。

ちよつと戸外で遇うたくらゐやつたら、ほんま  
に分らしめへんで」

「さうか、誰かてみなそない云ふで。あんたか  
て、ちよつとは分らへなんだやろ。ハッハ、ハ  
ハ」

「けどもまア、いつもお焚りなうて結構だんな  
や」

きん助はちよつと改つたやうに頭をさげ  
て、ほんまに永いことだんなア、もう何年にな  
りまつしやる。……ほして、あんたまたこの頃  
こつちやだんのん？」

「去年の十月戻つて來てん。いつまで京城み  
たいなところにゐたかて、おもしろいことない  
わ。ハッハ、ハハ」

と、今度は少ししてれたやうな笑ひ方をした  
が、「ときにあんたは……」

「ついこの六日のひにこつちへ宿がへして來  
ましてん。おてやんの身の都合でなア……」

「さうだつたか。そやつたら、もう引きたはつた  
ん？」

「わてだつたか？……阿茶らしい、こんな婆が  
おはなにいってどうなりまんね」

「さうかて、ちよつとも、あんた、變らへんで」

「なに云うてなはんねなア。なんば若がつたか  
て、もうあきまへんわ、ほんまにあきまへんわ。

……そやけどなア、木田はん、嘘にでもそない  
云うとくんはなつたら嬉しおまんがな。一遍う  
ちよんなはつたらどうだす。なんぞおごりま  
んがな。……わてとこ、ついこの藥師さんの路



大波を揺らせながら、口をつぶつて、大笑ひに笑ひぬく、——ちよいと始の瞬間こそ面喰つたが、すぐにその可笑しい心持が、鏡にもこの映るが如くに、姪の胸へもびたりと來た。で、これも、ひとたまりもなく笑ひだした。笑ふ、笑ふ、なんにも云はずに、たゞもうくつくと笑ひ轉げる。それがしんかんと寢靜つた眞夜中に、けに——、從つて大聲がたてられないだけに、なほのこと可笑しかつた。可笑しくつて、可笑しくつて、思へば——可笑しくつて、どうにもならなく可笑しかつた……。

(大正十二年九月作)

### 藝道陰陽論

筆の、深く入り込むこと、固より可なりと雖、廣く出づる亦一法たるを失はざるなり。以て藝道の陰陽と呼ばんか。

入りては主観に、出ては客観に、その傾くところ看易きのみ。然り而して、前者は短篇的、後者を長篇的と概説し去るも多く過たざるを信ず。その分るゝところ、もと作家の性に因つて來たるや論なし。獨合點と平俗とは、兩

者が陥り易き病弊にして、入るも出づるも、藝道の處置通過、その完きを得るや、甚難し。入るは已に入るとの謂にして出づるは人に出づるなり。一人の裡の己と他に關しては、予夙にこれを説けり。故に今こゝに於せずと雖、其に人性の深處に基を發し、二者相關互に孤立することなし。己を知るは人に依るなり、人を觀る、これ己を捉ふるに如ず。自他二にして、發して陰陽の態あるのみ。邦家現下の藝壇を觀するに、陰藝に秀たる者、なほ擧げて數ふるに堪ふべし。陽藝の尤に至つては、乃嘖し。試に、展覽會一場の書牘、彫塑に、空間的大を求めんか、甚得易し。傾川上柱さるゝ書牘中より長篇を望むも、その志、必ずしも遂げ難からざらん。而も眞の陽藝に接せんと欲せば、その機遂に至ることあるべからざるなり。露の杜の如きは、元これ陰藝の性に拘らざる、描いて陽に出で、眞に千客萬來の海旅行についで看るの思ひあらしむ。讀過、俗に所謂限に置けないの晩を久しうすること屢々なり。性の陽藝に適せる作家某々等に就ては、縱横無盡、些の隙切をみせず、時に肉食八種の倫を絶せる精枕に却つて嫉惡の情を

かしめらるゝことさへあるべし。初め陰に籠り、後に陽に發す、これ事の順序なり。故に作家の年齢に關するところ決して少しとせず。然者、我國藝壇を目して、若僧の烏合と評するも敢て某と云ふべからず。事實に檢するや、果して然るのみ。予等、頗る不惑に達せざるに大家を以て推さる。滑稽と云はずして何ぞや。且、邦人性の念なり。己に籠り、熱慮沈潜するはその得手たるを失はずと雖、悪人の如くよく、羅羅象を克服して、陽藝を成すに至らざるなり。蓋二千有餘年、未一の弗成、一の成吉斯汗を輩出せざる所以か。陽藝の功力、一にはまた俗に通ずるにあり。藝の俗に通ぜざるは、猶菓子に甘味なきが如し。たゞ物として大を成すの所以は、専らざるにあり。俗專用の藝の値なきは、雅專用の藝の必ずしも尊からざると同じ。雅俗に通ぜんと欲せば、宜しく陽描して宇宙の森羅萬象に及ぶべきなり。陽藝の缺乏は、刻下藝壇の重大問題の一たるを失はず。聊是の病所を論じて、自千杖の筈を受く、また故なしとせんや。

(白醉亭海記より)

向き加減に頸筋を洗ひながら、やがて娘へかう話しかけた。

「いまそこで木田はんに遇うてん」

「だれに？」

「木田はん。あんた覚えてるやろ」

「知らんわ」

「知らんて、……なんだつせ、ほら、八幡筋の、江島屋の……」

「あ、あの木田はんかいな」

「まだほかにも木田はんてあるか」

それには答へずに、

「ふうん、さうか……」

と娘は、急に、冷く鼻のこきで答へた。いい歳をしながら、矢つ張り嬉しいのかしら、さうと思ふと、冷笑したいやうな気がした。——まだ自分が生れないさきに、三つの歳に死んで了つた新吉といふ兄の父親だと聞かされてゐたその「木田はん」なるものは、自分が十か十一になる時分までは、月に一遍ぐらゐ、きまりのやうに酔つばらつて、夜おそく飛び込んで来た。江島屋と云ふ可成りの古道具屋の二男だとは聞いてゐたが、その頃はもう勘當でも受けてゐたのか、身なりなどもひどくみすばらしかつた。當時賣れ盛りの母親は、夜おそくでも、大抵は留

守だつたが、たまさか歸つてゐれば、毛蟲のやうに摘み出されて了ふし、留守だと、その時分にゐた、おでこで色の黒い、お菊と云ふ姉とつた女中までいゝ加減にあしらはれながらも、臺所火鉢長火鉢に當るのの前に坐り込んで、ひとりで威張り散してゐた。恐しくもあるが、子供ながらにもさう大した人間とは思はれなかつたので、おどけ芝居でも見るやうな氣で、よく夜具の襟の蔭から、薄目をあけて窺いてゐたものだ。どうかすると、友川堂のもなかの十錢袋くらゐを懷中から取り出して、「おてこ！ もう寝たんかーなどと咳きながら、そつと枕頭に置いて行つたりしたが、うちぢうの輕蔑がなんとなく染み込んでゐた人物だけに、そんなことも、かくべつ徳とはしてゐなかつた。——さう云ふ舊くからの輕蔑と、一家の生計を支へてゐる娘らしい高慢とが混り合つて、それから十年近くも経つた今日、不意に母親がもち出した木田の名前を、おてるは、小馬鹿にしたやうな氣持で聞いたのだつた。

それは、すぐまた、母親の方へはね返つて感じられた。この小女郎が、生意氣な、と云ふやうな反感に續いて、なんと思つて自分もまた、こんな要もないことを娘に話したのだらう、——

この自分自身に對する忌々しさが湧き起つた。親子さし向ひの、それこそ二箸のこけたこと、また話さずにはゐられないやうな、——謂はば生活からつけられた一種の癖、——その輕い氣持で、つい喋つて了つたのだが、それにつけても、思ひがけなく木田に逢つてからの自分が、いくらかうきくした氣持になつてゐたやうでもあるのに氣がつくと、いよくもつて忌々しかつた。けれども、もとよりそれは色慾ではない、一度でも二度でも、好きな酒も飲み、甘いものでも食へるだらうと思はれるからだ、——そんな風に飽までも口腹の慾へ結びつけて了つた。その方なら、きん助にとつては、少しも恥づべきことではなかつた。——五十よりも六十へ近い歳になつて、二昔も前に半年ほど同棲した年の男に久し振りで逢つたからと云つて、口腹の慾でも満たさなければ、ほかに何をもとめられよう、……そんな風に感じられた。

もみあげから顎のさきへかけて、クツキリと白くした娘が、そこへ若々しく張り切つた體を湯のなかへ沈めて来た。

「今夜のん、どこやつたな」

この土地へ来てまだ間もないのに、もう約束に入れて貰へる、——その得意をそばの人にも

次だんね」

「あ、さうか。そやつたら、つい近所やねんなア、わしとこも裏町三丁目やねん。近いうちは非一遍よせて貰ひまつさ」

「おいなすれ。あんな踏次で、ほんにむさくろしいうちだつけど、わてとおてやんと二人だけで、ほん氣樂にしてまつさかい、久し振りで一杯飲んまへういな」

「昔話でもしヨつか」

「朝鮮のお物語でも聞いたげまつさ」

「その時はた、焼香つけるよつて、おてやんにお酌して貰はんならん。……もういくつや。綺麗になつたやろなア」

「わての子だすよつて、そのだん間違ひおまへんわ」

「アツハ、ハ。そんなら、いづれ近いうちに……」

「ほんまによつとくんはなれや。待つてまつせ。さいなら」

きん助は、愛嬌笑ひをして、マツチ箱ほどの小さな盥へちよつと手をやつてみながら、花崗石の鑿石に剃体の齒を鳴らしながら、女湯の格子戸に手をかけた。そこには、二月末の弱弱とした夕陽が、塀の外へいやにひねくり出し

た赤松の影をうつしてゐた。一遍や二遍はどこかに飲みに行ける、——そんな考へが、十三の歳から五十四まで「客」といふものに寄生して來た老妓の胸に浮んでゐた……

場所がらと云ひ、時刻と云ひ、女湯の客の八九分までは、贅あげをさして來てゐるやうな女たちだつた。甲高い話聲や、湯をつかふ音が、天井の高い屋内に響き渡つて、モウ／＼と立騰る湯氣のやうに陽氣で、そして、ヒヨイとはいつて行つたものには、息づまりさうに騒々しかつた。

きん助は、肩胛骨のあらはな背を丸くして、流板の上をヒタ／＼と小刻みに、娘のおてるを採しもとめながら、湯槽の方へ近よつて行つた。裸形だと、誰も彼もさうのやうに見え、また誰も彼も違ふやうにも思はれた。おや、來てゐないのかしら、と思ふ時分になつて、やつと隅の方で襟白粉をしてゐる娘の後姿を見つけた。一つでも知らない顔がないやうなお互同上のなかで、ひとり新米らしい戸身の狭さに、なんとなく小さくなつてゐた。きん助は、南地にゐた頃から見知りごしの土地の如きん株

の二三人が、人もなげに真ん中に幅太く陣どつて、六尺一つで、足の親指の股に垢擦をはさんだ三助を、己の下男かなんぞのやうに顎で使つたりしてゐるのに、理由もなく反感を掻きながら、——けれども争顔の挨拶をふり撒きながら、娘のそばへ行つた。

「おてやん、あんたこれ忘れて來なはつたんやろ」

出がけに、鏡臺のそばに置いてあつたのを持つて來た襦袢を渡さうとしたが、相手が、あたりの騒々しさに紛れて氣づかずゐるので、「これ！——とぶひながら、それを娘の肩へぼん／＼置いた。

「あ、吃驚した。いややわ、おかアちゃん！ なんだ天井から落つて來たんやと思つたがな」

きん助は、母親らしく笑ひながら、

「忘れて來たんやろがな」

「そんなん婆れへん。昨日久榮はんから貰うた東京のニードたら云ふ洗粉、試につこてみよう思うて、知つて、うち置いたんや」

「あ、さうか。そりや、まア、えら悪おましたな」

そのまゝきん助は、深い浴槽のなかに肩まで沈んだが、口尻に力をいれるやうにして、うつ

「なんでもえゝわ。さア、あがつて一杯飲もか」  
 「無茶ぶひなアんな。わしとこでは、お酒とつてあれしめへんで……」

ヨロ／＼とよろけかゝつて来る、見上げるやうな木田の體を、胸もとへ手をかけて遮るやうにしながら、「それよか、どこぞい行きまへうな。うちでお酒飲んだかて、おいしいことあれへん。なア木田はん、どこぞい連れていとおくなはれへんか」

「もうおそいがな。今夜はもううちで辛抱しとき」

「ちよつともおそいことあれしめへんで。今何時やと思てなはるねん」

茶の間へは、一步も入れまいとするやうに兩手を胸へかけたまゝ、きん助は柱時計を振り向いて見た。「やつと、九時ちよつと廻つたばかりだつせ」

「何時かてえゝわい。わて、もう歩くのんかなはんのやがな」

「さうかて、わしとこにお酒あれしめへんで」  
 「なんでやね、このごろ晩酌やれへんのか」

「やれしめへん。また、四圓も五圓もするお酒が飲めまつかいな」

「お酒が一升四圓も五圓もするやうなんで、え

えねんやないか。色町が、——お前らが、今一番ほろい、ことして行くせに、なにぶうてんね。びく／＼せんかてえゝ……なんやらぶうたな、お前ところの娘の名ア……？」

「おてやんだつかいな」  
 「うん、そや／＼、おてこやつたな。……あの娘がせい／＼俯けて来るやないか。……あ、そらさうと、おてこどうしてん。ゐるか？」

「阿呆らしい。今時分錢收がうちにゐるやうなことで、どないなりまんね。……そやけどもまア、一遍こつちやい來て坐んなはれ」

いつまで立話もしてゐられず、仕方なしにきん助は、先に立つて、次の火鉢の置いてある六疊の間に案内した。そこには、朝から寝るまで、いつ時の間もぼんやりしてゐることを許されな

い女中が、圓々としたの上で、俄にせつせと雑巾をさし始めた。

「おせいどん、炭、少し出して來てんか」  
 「いよう、えゝ娘やなア」  
 木田は、ずり落すやうに古びた一重廻しをぬぎ捨てながら、その女中の前に、膝を突き合せ坐ると、眞ッ赤な頬を、手早くちよいとつツ突いて、「お前みたいな別嬪さんに、炭なんぞ出すしたら罰あたるわ。わいが炭だして來たるよ

つて、お前酒出し」

「お酒みたいなもの、うちにあらへんぶうたら、分らん人やなア。そないほしかつたら、この娘にちよつと酒屋へいて來て貰ひなはれな」

一行かんかてえゝがな。うちにあるに違ひない

「一體、どないしてん、あんた、えらい各當ンなんなはつたもんやなア」  
 「さうかて、あんたが、一杯飲むよつて來い、云うたんやないか。わい、ちやアんと覺えてるで。どや、そやないか。忘れたんか……」

それから、きん助のもの云ひを上手に眞似て、「一體、どないしてん、あんた、えらい耄けなはつたもんやなア」

「どうもしよがない。あんたに會うたらかなはんわ。……おせいどん、あんた氣の毒やけど、ちよつと和泉屋へいて來てえな」

云ひながらきん助は、目額で、ちよつとおもてへ出てみせておいて、それからうちの酒をつけろと云ふ肚を噛み込ませようとした。  
 「なんやねん、えらい、あんた、怪態な顔するねんな」  
 木田は、下唇を突出して、きん助が日父をする顔つきを仰山に眞似てみせて、「……酔う



「お裾分け」したい氣持から きん助は、ちゃんと心得てゐることを、わざ／＼尋ねてみた。

「平鹿」肩から胸を手拭で撫で廻して、あたりの湯を

ガラツと白ませてゐた娘は、さも五月／＼に、さうひと回答へると、「わてもう上りまつせ」

「なんでやね」

「わてら、おかアちゃんみたいにながいにつかつてゐられへんわ」

「さうか、そんならまア、勝手にしな」

一生、重い大棹の持ち續けた、肉は落ちても、太な指を、一本々々入念に洗ひながら、きん助の心は、濡れてつや／＼と光り、あた／＼められて桃色になつた體を、つい鼻のさきから運んで行く娘に對して、微かながら嫉みを覺えてゐた。それが、ぞんざいな洗し方や化粧の仕方を非難する不機嫌に形をとつた。ほんたうにこの頃の若いものは、さう云ふ輕亂とも憤りとも片づかない氣持であつて見送つてゐる。

「姉ちゃん、おさきい……」

見知つた限りの姉さんたちには、一々さう會釋しながら、人々の間を縫つて、娘のおてゐるはおづ／＼と出て行つた。

「はあア」

と、きん助はなんとなく永い溜息をついた。硝子張りの天井の上で、空は次第に暗くなつて行つた。

まめにちよいと、こまか體を動かす質ではあるが、これと云つて是非しなければならぬ用とてはないきん助だつた。娘は座敷に出て行つて了ひ、女中は流しもとで晩食の洗ひもの、音などさせてゐる宵の口に、毎晩きまりの二合の酒でトロリとなりながら、櫛の分厚な縁を廻らした臺所火鉢に頬杖をついて、ふと、こんな時木田でも尋ねて來ればよいのに、と思ふことがあつた。けれども、あれきりなんの音沙汰もなく、半月ばかり經つて了つた。

三月にはいつて間のない、或る雨もよびにムシムシする晩だつた。少し具合の悪くなつてゐる表の要戸をガリ／＼やりながら、

「や、片桐と、……こやな」

などと呟いて、すぐもう格子のぐぐりを引きあけると、大聲に、「おい、きん助はんうちいゐるか。きたで／＼」

その聲が木田だつた。

亦新聞を電燈の方へかざしてゐたきん助は、

われにもなくいそ／＼と立ち上つたが、氣がついて、洋銀縁の老眼鏡をはづしながら、表の間に出て行つた。

「ようおいで……」

見ると、木田は、格子を細めにあけて、そこから首だけ突ツ込んで、ギョ／＼／＼／＼あたりを見廻してゐた。「……木田はん あんなにしてなはんねな……」

「こんなせばいぐぐり、どだい、はいられへん」

「もつとあけなはれいな。……おゝ！ あんたもうだいぶ飲んどいなはづたな。……さア、こつちやへはいんなはれ云うたら……」

「いれてもだんないか、……こんな人けなもん……」

「うだ／＼云はんとはいんなはれ。かどに人が立ちまつせ」

「どやんな、はいるやろか」

「もつとあけなはつたらえ、やおまへんか。まアま、ほんまに大い體だんなア。なんで、こない、えげつなうなんなはつてん」

「なんで云うたかてしやうがないな。おいしいもん食うて、遊んで暮してゐるよつてにやがな」

「えらい、えゝ身分だんねなア」

ない

「さうかて御寮(ごせう)さん、はしり許(もと)が暗(くら)うて、ど  
んだけはいつたんや、わかれしめへなんだ」

「そやつたらしやうがない。瓶(びん)ぐちこいもつ  
といで。こんな大蛇(おうち)みたいな人に見込まれた  
ら、どうで、あるだけ飲まんうちは、去(さ)にやは  
れへんよつてなア」

「大蛇(おうち)? なに云(い)うてんね。お前(まへ)こそ飲んだ  
くれのくせにして……」

「きん助(すけ)は笑(わら)ひもしずに、銚子(さし)の酒を一杯(はい)自分  
の盃(さき)にあけてから、銅壺(どうこ)へつけた。

「そらさうと、さいぜんの話、どないでしたん  
やなア、繼聘(けいへい)を貰(もら)ひなはつたん?」

「女房(にようばう)みたいなもん、もう一生(いっせい)もらエへん、  
こりくや……あ、今(いま)のん取消(とりけし)! おせいど  
ん」

と、すぐもう女中(ぢゆうちゆう)の名を覚えて了(しま)つて、「お前  
やつたら、今(いま)今(いま)でも貰(もら)ふで。どやねん、わい  
とこの嫁(よめ)はんになれへんか」

「しやうむない!」

さうは云(い)つても、有業(うご)にちよつと頬(ほ)を赤(あか)くし  
ながら、女中(ぢゆうちゆう)は流計(りゅうけい)の方(ほう)へ行(い)つて了(しま)つた。

「ふうん、さよか、ひとりであなはるのん。ほ  
して、今(いま)にしてなはんね」

「あんたもまア、永(とこ)いこと出(で)てた人に似合(にあ)はん、  
目(め)の利(き)かんこつちやなア。ちよつと見た(み)たこで  
も、分(わ)りそなもんやになア」

「へ、でけましたでー  
と酌(しやく)をして、自分の盃(さき)にあつた冷酌(ひや)をグツ  
と一口に飲みほすと、それへも手酌(てしやく)で注(つ)ぎなが  
ら、「そやなア、見た(み)たところで云(い)うたら、まア十  
兩(じうらう)までいかんうちに老(い)れてしまつた角力(かくりき)取(と)の  
あがりだつしやろかいなア」

「阿呆(あほう)云(い)はんとき! 角力(かくりき)取(と)にこんなえゝ男(おとこ)  
一人でもあつたら、お口(くち)にかゝるわ」

「そやなかつたら……  
「もうえゝゝゝ。どうで碌(ろく)なこと云(い)へへんにき  
まつて……」

「ほんまになにしてなはんね」

「こゝらに住(す)んでたら、それだけでも大體(たいたい)分(わ)り  
さうなもんやないか」

「あ、さうだつか」

と、盃(さき)を肩(かた)にあてながら、幾度(いくたび)も顔(かほ)いて、  
「けどもなア、わてらの知(し)つてる株屋(かぶや)はんは、も  
うちよつと氣前(きまへ)がよろしおまつたで……」

「なんかしやがねん! ……そらさうと、あ  
んた、大分金(おほぶんきん)でけたやろ」

「阿米(あま)らしい。藝妓(げいき)みたいなもん何年(なんねん)してたか

て、お金(かね)でけるもんやあれしめへんでー  
「そない隠(かく)したかーあけへん。今(いま)のお酒(さけ)もおな  
じことやがな。無い無い云(い)うてたかて、やつぱ  
りあるねん。……どうや、ちつと株(かぶ)で儲(も)けてみ  
る氣(き)ないか」

「そんなお金(かね)があつたら、夙(しやく)に樂屋(らくや)居(い)だんが  
な……」

「そない云(い)はんと、まア聞(き)きたいな」

木田(きでん)は、指(さき)のさきまで赤(あか)くなつたてを、相手(あて)  
の鼻(はな)のさきまで、壁(かべ)でも塗(ぬ)るやうに振(ふ)り動(うご)か  
しが、急に聲(こゑ)をおとして、「わてなア、これ、儲(も)け  
な筋(すぢ)から聞(き)き込んでるねんけど、もうついえら  
いがら来るで。……がらつて分(わ)るか」

「そんなことぐらゐ知(し)つてまんがな」

「えらいもんやな……ほいでな、こゝでな、當(あた)り  
切(きり)で賣(う)りを出(で)しとくねん。なんでもえゝけど、  
まア、紡糸(ほうし)か船(ふね)なんぞやつたら間違(まちが)ひないな  
ア。……こゝら、ほんまに祕密(ひみつ)やねんで。誰(たれ)にも  
云(い)はんときや。……見てゝみい、三百圓(さんひゃくえん)臺(だい)のもの  
んが、この月末(げつふ)になつたら、きつと百圓(ひゃくえん)臺(だい)にな  
る。ほしたら、十株(じゅうかぶ)賣(う)つといたかて、ざつと二  
千圓(にせんえん)の儲(も)けや。こゝで一萬圓(いちまんにん)も遊(あそ)んでる金(かね)があつ  
てみいな、一遍(ぺん)に十萬(じゅうまん)やそこら儲(も)かるねん。ほ  
んまに、受合(うあ)うて儲(も)けさすが、どや、やつてみ

てたかて、木田新太郎はんや、めつたにお前らに誤魔化されへんで。あるもんやつたら、さつさと出したえやないか。なにけち／＼してんね」

「そないえらさうにしなければんねんやつたら、もう去んどくなはれ」

と、きん助は、口交を見つけれられた忌々しさもあつて、少しムツとしたやうにきめつけた。「そんなごりがん(ころ)わて嫌ひや！」

「まア、そない怒らんかてえゝがな。久し振り逢ふのんやないか、ほんまにもう何年になるいな。一昨年、……一昨々年やつたかいなア、新吉の十七年や思て、……わい朝三界うろついてたかて、そんなことちよつとも忘れえへんで……」

「もうよろし、そないぶはんかて、飲ませまッ、飲ませまッ」

「飲まして貰はう思て云うてるんやないで……」

「わかつてる、わかつてる。……おせいどん、お酒出してんか」

「アツハ、ハ。そやよつてん早う出してしもたらえゝのんに、阿呆やなア」

木田は大きな體をもたげて、部屋の際に立て

かけてあつた、足の折り疊める安ものゝちやぶ臺を、毎日來てゐる人のやうなものを馴れた容子で、そこへ用意した。母親も、心づもりとはガラツと違つて來てゐるのだけれども、兎に角好きな酒に相手が出来たので、いつの間にか楽しい心持になつて、火鉢に炭をついだり、置戸棚から、食器や、昆布と松茸の佃煮のやうに鹹く煮たのを入れた蓋ものなどを取り出して來た

りした。  
「まア、こゝに酒の有やつたらたんとあるで」と、木田は、尻の下に蹴くちやになつてゐた外套の衣囊を索つて、へッぽこ宴會などで持たして歸すやうな折を取り出した。

「羽織袴で、えらいあらたまつてなはと思たら、どこぞ宴會の歸りだんねな」

さう云ひながら折を受取つて、蓋の上から覆せてある紙を見て、「ふらん、××行てなはつたんか。あそこ、この頃ちよつともおいしいこととおまへんやろ」

「どうで丁稚あがりのもんの婚禮や、えゝことせえへんにきまつてるわ」

「丁稚つて、お店のんだつつか」  
「店？ わしとこのうちか？ 阿呆らしい。誰があんなうちイ寄りつくもんかいな」

「そやつたら、いまだに出入りしなはれへんのだつつか」

「知れたこつちや。とッ百萬兩の身上があつたかて、あんな道具屋みたいな辛氣くさい商賣がしてゐられるかいな」

「ふうん、ほしたら、あんた今なにしげなはんね。……それよか、もうまた二度目の嫁はん貰ひなはつたんだつしやろな」

そこへ女中が、流許から下駄穿のまゝ、京所(東京の茶の間にあたる)さきへ來て、

「へい」と、盆にも載せず、銚子を突き出して、「お漬もんでも出してまへうか」

「もうえゝわ、なんや知らんけど、こゝに御馳走もつてきやはつてん」

さう云ひながら、きん助はブツと折のしで紐を切つて、蓋をあけてみた。「なんや、しやうむないもんばかりだんなア」

「そらさうやろ」  
「おせいどん」

と、銚子を銅壺につけようとしたきん助が、

「こないいづばいお酒入れるもんやあれへんで。お酒云ふもんはな、お燗したら殖えるよつてん、こない入れたつたら、零れてしまふがな。勿體

口をつけたばかりの一升瓶を、かれこれ空にして了つた二人は、もういゝ加減酔つてゐた。そして、欲めば飲むほど、不思議に二人の口は重くなつて行つた。殊に女中が出て行つたあとでは、へんな重苦しさが懸つて來た。言葉ばかりでなく、目を見合ふことすら氣まづいやうな、——めいゝの肚のなかで思つてゐることが、つい近くまで來てゐながら、掛け渡す橋もないほど深い谷を隔てゝゐると云つた氣持に壓されて了つた。一人が盃に手をやるのに誘はれて、ついそれを取りあげると、黄色い液體の底に映つてゐる光點にちツと見入つて了ふやうな沈黙が続いた……

格子戸のぐぐりがあいた。使に出た女中だらうと思つてゐると、表の間からあがつて來たのは、娘のおてゐるだつた。

「なんやねん、おてやんかいな。どないしてん、えらい早いやないか」

「知らん人ばかりやよつてん、店で待つてゐんの、てれくさいわ」

「そんなことぶうてたらあけへんで。店で待つてたら、誰ぞがまた差込んでくれるのんに、そんな氣のないことやつたら、ほんまにあけへんわ」

「これ、おてやんか」

木田は、三白眼のやうに吊り上つた瞳を刺つけて、「えらいえゝ娘になつたもんやなア……」

あんな、わて覚えてるか——

眉根にハの字をよせて、露骨に不愉快さうな顔そむけたきり、おてゐるは答へなかつた。娘の歸りの早さに大分不機嫌になつて、いつもの宛々しい小言にならうとしてゐた母親だが、木田の今の言葉が、お世辭ではなく、全く、心からの譴咄らしいのに、ふとまたいゝ心持になつて、「おてやん、あんな木田はん覚えてやな……そんなところに突ツ立つてんと、まアこつちい來て坐んなはれ」

さうぶはれると、娘も、さも草履れたやうに膝を折つて、

「おいでやす」

「あ、そんなとこに坐つたら衣裳がだいなしやがな。座蒲團もつといで、

そんなことは耳にもかけずに、

「あゝ、しんど。なんや知らん、今夜だるうてしよがない」

「ほんまに別嬪や。いくつになんなはつてん」

「あゝ、そんな風して柱に凭れたりしたら、帶がわややつせ。ちんとしてなはれへんかいな」

「なア、いくつになつてん」

「十九だす」

と、ほき出すやうに答へて、「わてやつぱり店で待つてまつさ」

「まア、えやないか。今夜はわてがあかし(時半)から母親の親香代一杯買つたげるよつてん、こゝにゐてお酌してえな。なア、きん助はん、そやつたらけんたい(當然客の資格で、えはつ)やなア。……ふうん、十九か……」

木田は、ひとり頷きながら、娘の顔から、肩から、胸から、腰から、横半りに、引いてゐる裾の下に盛り上つて見える足のききまで、舐め廻すやうにジロ／＼と視線を滑らせてゐたが、「きん助はん、どやねん——」

と早口にぶつて、娘の方を、敏捷く顎でしやくつて見せた。

「わて、行てこ」

きらりと裾をさばいて、娘が急に立ちかゝるのを、木田は、慌てゝそばへすりよつた。

「まア、まちいな。兎も角一杯飲んでき。線香つけたらわいかてお客や——」

云ひながら、左に娘の手をしつかり把つて、右で空の盃を矢鱈に振り廻した。

「痛! 痛!」



る氣ないか」

「いや／＼。わしとこらには、遊んでるにも遊んでへんにも、お金なんぞ、どだいあれしめへん。また、ちつとばかりあつたかて、相場みたいなもん、わてら可憐いわ」

「がしんたれ、い／＼やなア。そんなこと云はんと、五千圓、……千圓でえ、よつてん、わてに預けてみい。すぐ三層倍や四層倍にして持つて来てあげるわ。わいなア、若い時いろ／＼世話なつたと思ふよつてん、ほんまに、恩返しのもりで云うてんねんで。相場々々と一概に云ふけれどな、こんどのやうに慥な筋から聞いたんやつたら、ちよつとも危いことあれへん。やま、こやないねん。石橋を叩いて渡るやうなもんやねん。ほんまに勧めるわ。……若しやるんやつたら、わいも一生懸命や、君の御馬前で討死する覺悟でやるわ」

「まアおきまへうかいな」

輕くうけ流して、「……それよかまア、一杯あけなはれへんか」

「さア、飲むことは飲むけどな」

と、盃をさして、それが癖の思案くさく首を傾げながら、折角、儲が目の前にぶらさがつてるのんになア……」

「そんなんやつたら、あんだ、賣るなと買ふなと、たんと儲かるやうにしなはつたらよろしやおまへんかいな。わてらみたいたいな貧乏もんとこい来て、そんなこと云ひなはつたかて、どないも仕様がおまへんやとおまへんか。……おほきに、お酬ししまつ」

木田は、酔漢らしい癡きで、暴落が眼前に迫つてゐること、その豫想がいかにも慥な筋から来てゐるかと云ふこと、どここの株を、どれだけ賣つて置けば、いくら儲かる、と云ふやうな、とらぬ狸の皮算用やらで、小一時間も喋り續けながら、頭に、盃の數を重ねた。きん助の方は、氣のない相槌をうちながら、「しやうむない」と貶した食ひ荒らしの折詰へ、盛に箸を運んでゐた。が、やがて二人とも、同じことの繰り返しに飽きて來た。なんとなく面白くなつて來た。

「久し振りでなんぞ一つやろか。三味線いきいな」

「おきなはれ、怪態な淨瑠璃……」

一淨瑠璃でなうてもえ／＼で。兎も角、三味線だして來いナ」

「しんどい。それよか、なんぞおごんなはれな。もうなんにも食べるもんあれしめへんで」  
「よろし、なんなおごつたら」

木田は便々たる下腹を叩いて、こゝらやつたらなんやろな、北陽軒か」  
「洋食みたいなもんもうよろしわ。もつとなんぞかう、さつぱりしたもんにしまへうな」

「うん、まアなんなと、あんだに任すわ。なんとな勝手なんもん取んははれ。……なア、おせいどん、氣の毒やけどな、どこぞ近くにおいしい食もん屋あつたら、ひと走り行て來てんか。駄賃に、あんだにもなんぞおごるで。……わてはなんでもよろしよつてん、きん助はんの好きなもん、二品三品ぶうて來てあげなはれ」

「御寮ンさん、どこいぶうて來まへう」  
「そやな、やつぱりふくべやろなア」

「ほしたら、なにぶうて來まんね」  
「わて、……そやなア、なんぞ仔オの煮たもんと、蟹の三杯酢でもぶうて來てもらおか」

「わいもそんなことでえ／＼わ。そいからな、井もんかなんぞでけるのんやつたら、ほんまにあんだ、ぶう來て食べなはれ」

「この娘はよろし、あとでまたけつね饅頭でも取つてやりまつき。なア、その方がえ／＼なア」

「へえ、わてもうなんにも結構だす」  
女中は、襦をまるめて袂に入れたがら出て行つた。

「酒や／＼。酒やつたらなんぼでも飲んだらわ」

「お酒もうこい／＼お仕舞だつせ」

と、タラ／＼と筆を切るやうにして注ぎ終るのを、

「そらいかん、おせいどん。お邪魔序に、もう一遍酒屋まで行て来てんか」

「もうおきなはれ」

きん助は食ひものを頬張つて、モグ／＼やりながら、首を横に振つた。

「まあえゝわ、もう五合でえゝよつてん、とつて来てもろてんか」

暫く云ひ争つた末に、女中はまた使に出されることになつた。

「序になア、おせいどん。…なにしてるねん、そこでガタ／＼云はせて…」

「衆だしてまんね」

「そない降つて来たのん？」

「へえ、ほん降りになつて来ましてん」

「さうか。…あ、ほいでな、序にもう一通ふい／＼よつて、書附もろて来てえな。お酒は分つてるけれどな…」

ふた／＼沈黙が来た。木田は幅の廣い肩を、ちやぶ臺の上に覆ひかぶさるやうにして、ぢッ

と一つところへ目を据ゑたまゝ、時々空の盃へ手を持つて行つては、淋しさうに、絲底を指の腹で撫でてみたりしてゐた。きん助の方は、今度け、そんなことにはお構ひなしに、いま来た料理をムシャ／＼平げ始めた。あたりもいつかシンとした。樋を傳ふ雨垂の音ばかりが、耳について聞えた。

やがて酒が来たが、きん助はもう殆ど飲まなかつた。木田が手酌で、まづさうに、それでもグイ／＼咽へ流し込んでゐた。

「さア、それ一本あけたら、もうほんまに去した。…それ一本あけたら、もうほんまに去んなはつたらどうだんね。ほしてな、お料理の値段、二圓と六十錢やさうだす。お酒は、あとの五合は半分残つてますさかいえゝとして、わしとこの一升だけ拂うてもろて、なんやかんて、…そやなア、十圓置いて行きなはれ。おせいどんもさんざ使つたしな…」

「わい、今夜泊めて貰はうかいな」

「なに云うてなはんね。そらいきまへん、いきまへん」

「さうかて、こない降つて来たら…」

「裏町やつたら、あんた、ついひと足やおまへんかいな。なんやつたら衆一本食したけますよつてん、歸んなはれ」

「まあそんなに云はんと、泊めてえな」

「そんなことがでけまつかいな。もうごて／＼云うてんと去んなはれ云うたら、さつさと去んなはれ！」

「なにも、そないえらそに云はんかてえゝやないか。ちつとは昔のことも考へてみい、そないボン／＼云へたもんでもないやろが」

と、少し氣色ばんで云つたが、すぐまたニタニタ薄氣味悪く笑ひかけて、「なア、ちつとは、三味線屋の奥にゐた頃のことでも思ひ出してみたらどうやねん」

さう云ふと木田は、火鉢ごしに、いきなり瘦せて骨ばつたきん助の手頸を把つた。「なア、そやろ」

「おきなはれ」

むきになつてその手を振りほどくと、思はずきん助は立ち上つた。「さア、もう、ほんまに去んなはれ去んなはれ」

「去んだるとも。ふん、この死にぞこなひの慾ばり婆め！」

木田は二重廻しをひッ掴んで立ちかけた。

「木田はん、あんた食進して行きなはる氣か。」

「さうかて、こない降つて来たら…」

娘は大聲に聲を立て、「おかアちゃん！」

「木田はん、わて怒りまつせ。……そない盃を振り廻したら、滴が飛びまんがな。衣裳にかゝつたらどないしまんね。……おてやん、あんたもまた、はよそつちやへ行たらえやないかいな」

「さうかて、こない強うつかまいられてたら、痛！ 痛！」

「軟かい手やなア」

その時ガラリと椅子があいて、

「菊榮はん、徳田屋だつせ」

その人方（東京の節屋）の聲を聞くと、有繫に木田も手を放して、慌てた風に手酌で一杯グツと飲んだ。娘はケロリとして、棲をとりながら、「わてまだ行つたことのない家やし。どこだんね」

「どこかてえゝやないか。はよ行といなはれ。

……うちにゐたかて線香つけへん、損やがな」

娘は逢狀たちよつと灯にすかして見て、機

もとへさし込むと、そのまゝ挨拶もしずに、三

和土の上にズル／＼下駄を引きずつて出て行つ

て了つた。

胡坐の膝に兩脇を張つて、ちやぶ臺の上の一つところをぢつと見詰めてゐた木田は、暫くし

て、ふと、

「あれ、ほんまに貴筈はんの子かいなア」

と、女が自分から坂き去つて行つた。素人義太夫で一時鳴してゐた男の名を持ち出してみた。

「そんなこと訊かんかてよろし」

きん助は不憚な顔をして、「もうお酒あれしめ

へんで」

「そやつたら、買ひにやつたらえやないか」

「もうそろ／＼、あんた、ぶんなはらいでもよろしのんか」

「さうかて、今（いま）御師がくるがな」

「あ、そや／＼。酔うても食べるもんのこと

やつたら、よう覺てなはるわ」

と、大きな前歯を見せて笑つて、「ほしたら、

それたべてしもたら、去んなはれや」

そこへ女中が駆け込んで來た。

「ぼつ／＼降つて來ましたで」

「あ、さうか。……えらおそかつたんやなア。

なにしてゝん」

「生憎一人も出前持がゐえしめへんだよつて

ん、待つてゝ、わてが持つて來ましてん」

せい／＼息をはずませながらも、早口にさう

云つて、女中は、通りにには（表手の格子戸から眞直

に、臺所へで近じる三和

土の）を臺所（間）の前まで來て、そこへ岡持を置いて。

「あ、さうか。そらえらい御苦勞はんやつたな」

きん助は、岡持から食ものを取り出して、そこへ並べたしした。

「貴筈はん、じつたさうやな」

「へえ、死にやはりましたで」

と、それには冷淡に答へて、女中の方へ話しかけた。「蟹、おいしさうやな、お味噌のところが

おいしねんで」

「さうだつか」

これは尙更、こつちの知つたことぢやない、と云つた顔つきで、さつさと表の間へあがつて行つた。

「さうかいなア、貴筈はんの子かいなア。今（いま）

んや知らん、ふいと、わての子のやうな氣がし

てん……」

「しやうむないこと云ひなはん。……さ、早

う食べるもん食べて去んなはれ」

「あんたまア、よう食べるア」

「藝妓のお腹、縮細腹と云ふくらゐだすよつて

ん、なんぼでもはいりまんね。あんたは、もう

食べなはれしめへんのんか」

## 銀二郎の片腕

——かう云ふ話を聞いた——

年の半分は、野も山も深い雪に鎖されて了ふやうな地方の、或る牧場に、銀二郎と云ふ牧夫がゐた。

牧場は女主人で、それに別段相談相手と云ふやうな人もゐなかつたけれども、總てのことが活氣のある秩序の下に、年々よくなつて行つた。三十二で亭主に死別れた彼女は、子供がなかつたせゐか、それからは全く男のやうに振舞つて、牧夫たちの先に立つてよく働いた。牧夫たちの仕事は、先の旦那の時分よりも量に於ては多くなつてゐながら、質に於ては、樂な、面白なものになつた。彼女には、一種、昔博徒の親分の家に、如御と云つて立てられてゐた女たちにでも似つかはしい、世話好きで、思ひやりのある、そして氣丈な性分が急に現はれて來た。ただ、さう云ふ地方のことだから、粹だとか、通だとか、切れ離れがいいとか云ふ傾きは、必要上現はれて來ないで、その代り、馬や牛を観るとか燕麥を調べるとか云ふ専門の技能は、亭主に

別れる前からの耳學問が、やがて本式の商賣人の境に達した。毎春秋に立つ馬市には、これほど質の悪いものはないと云はれる博勞どもの間に混つて、立派に、——と云ふのは相應質の悪いこともして、利益の多い商賣をして來るやうになつた。そのうへ彼女の熱心と勇敢とは、一匹の馬の行方を、——疑もなく既に死骸になつてゐるべきものを搜索するために、朝から日暮れまで雪のなかを彷徨はせたほどだつた。

病氣や怪我をした場合などには、流石に彼女も女らしい優しさを示すことはあつたが、普段は無智で單純な牧夫どもが、馴れ親しみ慣いほどの威嚴を伴つてゐた。さうかと思ふと、何か祝事でもあつて母屋から酒が出た晩などは、自分も少し酔つて土間をカラ／＼下駄を引き摺りながら、納屋と仕事場とに連らなつてゐる牧夫部屋へはいつて來ることもあつた。そんな時には、誰かから巻煙草を貰つて吃したり、酌をしながらやつたりして、そこに主人がゐるやうに堅くなつて坐り直したりする者があると、却つて機嫌

を悪くした。自分がはいつて行つても、いゝ駒に座が白けられない時などは、調子づいて了つて、口三味線で唄を始めたこともあつた。それでも翌る日は、母屋の女中が牧夫部屋に來て、

「いんべ旦那が巻煙草を一本借りたつて。誰だえ、それはなどと云ひながら、一本の巻煙草を大事さうに親指と食指の間に挟んで、それを頭の上で振つて見せたりした。

彼女には、十年來の中風で足腰の利かない男が一人残つてゐたほかに、この人里離れた土地には、遠縁のもの一人ゐなかつた。が、そんなことは、少しも彼女を淋しがらせなかつた。

朝から晩まで男のやうに激しく勞働して、グタグタになつて眠ると云ふ生活が、良人失つてからの彼女には、——少くもこの土地で一番自然に流れ落ちて行つた生活で、そこには、馬や牛や牧夫どもや金錢に絡んで、喜びも悲しみも腹立ちも心配も、——凡そ人が死ぬほど意屈しないだけの複雑さがあつた。たゞ然し、こゝには永い冬がすぐ還つて來る。その間も全く仕事のないことはなかつたが、初めての二三年が過ぎた後に、彼女は、卒業ばかりでは、どうしても慰められない自分を段々感じた。わけもなく苛々して、舌が一す程の厚さあるかと



思ふのだけれど、もうきん<sup>ナ</sup>には口<sup>くち</sup>が利<sup>き</sup>けなか

木田<sup>きだ</sup>が、おてゐるの實<sup>じつ</sup>父<sup>ちち</sup>親<sup>おや</sup>であることを

でもどうしても解らなかつた。けれども、彼女を陰鬱にしてゐたのはそのことではなかつて、これまで自分のつもりでは、女神のやうに、または慈母のやうに、高い所から臨んでゐた牧夫たちの一人に、かう云ふ淺ましい自分を見せて了つたと云ふ點にあつた。日下の者に弱點を握られると云ふことほど、誇りが苛立たしくも踏み躓られることはない。彼女は、ひと思ひに銀二郎を解雇して了はうかと思つた。然し、その腹いせに町へも行つて、あることないこと云ひふらされてはつまらないとも考へた。

「尤もあの男に限つては、そんなこと、よもやしやアしまいけれど……」

十何人ゐる牧夫たちのなかで、銀二郎は、誰にでもすぐ目につくほど、一風變つた男だつた。幅が五分ぐらゐりさうな太い眉と、三白眼と、謂はれる瞳が上へ吊るし上つた陰氣な目付と、額縁で纏れた長い輪廓と、禿上つた廣い額の骨相の方から云つて由ありげな凸凹などが、既に、牧夫に似つかはしい容貌ではなかつた。着る物は普通の牧夫らしく貧しくはあつたが、どことなく身綺麗にしてゐた。なまより少し高い丈を心持猫背にしてスタ／＼歩いてゐる所などは、學者か何かのやうな風情があつた。人の

言葉は容易に肯はない、氣むづかしい。性分がどうも、彼を仲間の人に打ち解けさせなかつた。明かに中年からの牧夫で、この牧場へ来てからまだ九二年にしかならなかつたが、前の半生に就いては、仲間の誰にも、ひと言も話したことがなかつた。代替の組方やその料金に詳しくつたり、古いボン／＼時計が毀れた時に、自信を以てそれを繕つたりしたこと、薄氣味悪く氣がおける裡に、どこかえらさうに思はれ、畏れられてゐた。年は四十くらゐだつたが、然し、實際よりは少し老けて見える方らしく思はれる節もあつた。

この牧場へ雇はれるとすぐから、彼が他の者とは一種特殊な人間であることを示すやうな、種々な話の種を次々に語った。——こゝで一番古顔の、一昔年量な房州は、いつも仲間を複数で呼んでゐた。差し向ひの時に「おめえら」云はれると、自分だけを高い所に置いて、はたの者は十把一禁に安く踏まれてゐるやうな氣がして、誰しも、氣持はしなかつたが、さうかゝつて、別に抗議を申し込んだ者もなかつた。所がこの銀二郎は、來るとすぐ、「それだけはよしてくれ」云つた。ちよつとしたふひ合ひの木に、年寄が笑つて折れた。それでも永年の癖で、そ

の後も「おめえら」が出たが、さう呼ばれたのでは、銀二郎だけは決して返事をしなかつた。その次に仲間を驚かしたのは、彼の小さな荷物の中から、茶碗や箸箱や、汚く御げちよろけた汁椀まで出て來たことだつた。それを彼は自分で、必ずしたのは區別して洗つた。更に、彼を愈々「變人」として仲間に通らせるやうにしたことが起つた。或る日彼の留守に、房州が「惡氣も何もなく、たゞ手近にあつたので、なんの氣も付かずに例の茶碗で飯を食つてゐる所へ、銀二郎がヒョククリ歸つて來た。で、房州爺はボカ／＼三つ四つ喰はされたのだが、それはかう云ふ輩のことで、別段驚くほどのことでもなかつたけれど、茶碗が紐で吊るされて、七日の間井戸の底に漬つさりにしてあつたのは、後々までの誇り草になつた。——彼の潔癖に關するこれに類した話は澤山あるが、それは省いて、「痼性病の穢いもの知らず」の如くに洩れず、彼も、よく辛抱できると思はれるやうな穢いことを、平氣である時もあることと、前に述べた例のやうな、形の上のことばかりでなく、高慢ぶるとか故もなく人に意地悪くするとか、嘘をつくとか云ふ、心の上の不潔に對しても、同様の手厳しさと、同様の等閑とを兼ね備へて

思はれるやうな重くろしい調子で、レロ／＼とわけの分らないことを云ふ。舅に小ツビドク當り散らしたりするやうになつた。さう云ふ時には、丁度舅が、怠惰な「冬」そのものゝやうに思はれて、見てゐるだけでムカ／＼して來た。どうかすると、朝から酒を飲んで炬燵にぬくもりながら、五日も遅れて來る東京の新聞を、トロンとした目で見てゐたりした。

一つ東京へ出て了はうかしら—よくさう考へることゝあつた。十八の齡に東京から離れたきり、二十三年と云ふものこつちでばかり暮したので、一寸冬の間だけ遊びがてら行つて來ると云ふやうに、氣輕くは考へられなくなつてゐた。行くなら、牧場を賣るなりどうなり片をつけてからでなければならぬやうに思はれるので、一生の大問題と云つていゝくらゐ億劫なことになつて了つた。よし冬の間だけ行つて來る氣になつたとしても、知人のない不案内な土地、而も非常に金が費るやうに思はれる土地に一人で行くのも、なんとなく薄氣味悪く、またその間、舅の世話のしてがないのも、矢ッ張り心苦しかつた。

神宮ほどに不思議な都をウト／＼と夢に見てゐると、枕頭で人の氣勢がして目が覺めた。い

つの間にか舅が匍ひよつて來て、大神樂が顎の先に太鼓の撥を立てたやうな恰好に、仰向いて、徳利の底に少しばかり残つてゐた酒を食つてゐた。

「コラ、畜生!」

水口から鼻を突込んで、晩食に買つて置いた魚を銜へようとしてゐる犬を見付けたお婆のやうに叫きながら、彼女はいきなり舅の横ズボウをはつた。——親の頭に手を上げたのは、これが最初だつた。水枕を叩いたやうな手筈と一緒に、舅が不意にそこへぶつ倒れるのを見ると、急に、踏みくちやにしても足りない思ひで、カツとなつて了つた——。

ドタバタイふ音を聞きつけて、丁度何か用があつて臺所へ來てゐた銀二郎がそこへ飛び込んで來た。

「旦那、そりやよくねえ」

かう云つて、腐つた馬鈴薯のやうな舅の體へ乗しかゝつてゐるのを引き離すと、彼女は、暫く惘然ツツ立つてゐたが、急にそこにペタンとなつて、兩手で顔をシツカリ包んで了つた。

舅がウン／＼唸つてゐるのに氣がついて、銀二郎は次の間の寢床へ擁へて行つた。母屋へはめつたに牧夫たちを通さないことにしてあつたか

ら、近くで舅の姿を見たのは初めてだつた。銀二郎の癖癖について後にもつと詳しく話す場合があるが、彼は、舅に觸れた部分は、自分の體ながら切つて捨てたいほどの氣がして、床の上に寝かすと、まるで泥だらけなものを抱へたあとのやうに、思はず兩手を打ち合せたり、胸のあたりを拂つたりした。着てゐたものを取り更へ、體を洗はなければ、と思ふ一念に夢中になつて了つて、思ひがけなく仲にはいつた親子の争ひに就いては、爪の垢ほども考へる餘裕もなく、銀二郎はきつさと部屋へ歸つて行つて了つた。

その日女主人は、一日陰鬱な顔をして炬燵の前を離れずにゐた。自分のしたことが、あの時人の氣勢で目を覺ましたと思つたのが矢ッ張りさうではなくつて、夢のなかでしたことのやうに思はれるほど不思議だつた。然し親をうち打擲したと云ふ最初の經驗に對しては、それほど後悔は感じてゐなかつた。それまでにも、幾度も打ちたいと思つたこともあつたし、それ以上、もつとひどいことを考へたこともあるので、別段初めてしたことのやうな、新しい氣はしなかつた。不思議に思はれるのは、あれだけのことを、なんであんなにまでしたらうと、それは自分



いことも憎めない、いことも嬉しくない、たゞ何もかも懐しく悲しい、もの柔かな心になつてゐた。彼には、面々臭さうな顔をして、云はなでもない、嘘をつつた昔もあつた。澤山嘘をついて、澤山嘘をつかれて、それから自分の嘘をやめた時に、彼の耳の穴は、恰もそこに括約筋が出来たやうに、或は暗箱のしぼりと云ふ機械を取り付けたやうに、大きくも小さくも、自在に締めたり緩めたりすることが出来るやうになつてゐた。嘘は、眞實の周に柔く塗りつけられた嘘は、彼の耳のしぼり機械に會ふと、そのなから眞實だけが手繰込まれるに従つて、綺麗にこき落されて了つて、耳の外部に残つた。彼の生來の潔癖は、このこき落された滓で、外側にもせよ、耳が穢されるのに堪へられなかつた。その滓を搦み取つて、ゲチャリと相手の顔へ叩きつけることが、當然の返報だと思つてゐた。然し誰でもが、その顔へ叩きつけられた汚物を、自分から出たものだとは、容易に肯はなかつた。そのために銀二郎は、都會から町に追はれた、町から村へ——村から、たうとう山のなかへ、までも……

けれどもこゝには、神經過敏な彼の耳の括約筋をすら鈍らせて了ふやうな、のべつな、ど

んな馬鹿の耳にもそのまゝではいらぬやうな嘘があつた。それは、永い冬を幾つとなく越して來た房州の慰みだつた。さうして同時にそれは、仲間、牧夫たちの慰みにもなつてゐたが……

「……さうよ、なんでも俺がこけえ來て草鞋さぬいだ年だアから、もう……さうよ、四五十年も前のこつたなア。なアんともハ、えれえ雪さ降つた揚句だつて。越年のうちイくたばつた鹿の死骸ちふもんがな、なアんと潰ちう埋めてけつから。いま山サの番屋建つてゐるな、あすけえち足の跡みどもねえ、ま、なアもかアも鹿の死骸の下さへえつてな、あんだだけある玫瑰の木が、なアんと、一本なし、見えやしねえもんだつてさア……」

それは、亡つた旦那の片身だと云ふカーキ色のキロツトの上に、綿の透入つた半纏を着た汚い命の齒の抜けた口を通して、意屈し切つた、馬鹿げた「冬」が、即興の詩を唱つてゐるやうなものだつた。周のものが、

「冗談ぢやアねえ、いゝかげんにしとけよ」などと云ふのは、その詩をもつと面白く、もつと永びかせるための合唱に外ならなかつた。合唱隊は、鹿の死骸で岡が築かれるところまでも

即けて行く氣だつた。

さすがの銀二郎も、これにはビントをはづして、しぼりを絞めて了つた。それでも矢ッ張り、彼はこの爺が好きにはなれなかつた。ヒドク無性で、どこか滑稽でみせるやうな動作からして氣に喰はなかつた。

そこで、女主人の話をぢつと聴いてゐた銀二郎は、久し振りで耳の括約筋を緊張させたわけだつた。そこには、少なからぬ滓が残つた。女主人が男に辛く當るやうになつたと云ふ事實は、いかに彼等が母屋への出入を制限されてゐたとは云へ、永い冬の間でも意屈しない銀二郎の目や耳からは、全く追れてゐたことになかつた。然しそのことを、彼は、大して悪いとも感じなかつたばかりでなく、女主人によつては、無理のないことだと思つてゐた。それはただ、彼が女主人を好いてゐたからで、生きたがらの死骸であるやうな、恐らく非常に不潔な男に對しては、好きも嫌ひもないが、思つたばかりで身震ひが出さうだつたからだ。随つて先刻も、體を洗つて着物を取り更へたあとでも、あの事の故に、——子が親を打つたと云ふ理由だから、女主人を責める心持には、少しもなけなかつた。きつと肩が、悪いのだらうと、思



ゐたことを附け加へて置くに止めよう。

かう云ふ銀二郎の特性は、夙から女主人の心を惹いてゐたが、大勢の人々を統御して行く位置にゐる者が感じる「公平」と云ふ考に喰ひ止められて、日常の仕事などには、特に彼を重用すると云ふやうなことを避けてゐた。そのうへ彼も、牧夫の仕事に特に興味をもつてゐるわけではなく、骨惜みをしないと云ふだけの語で、抜群の勤勉を抽でたと云ふほどのこともなかつた。たゞ女主人の心のなかで、あれは並の牧夫ぢやアないし云ふ心持として、別ものにされてゐたに過ぎない。それが、今度のやうな場合に、偶々いくらかの意味をもつことになつた。

「あの男のことだから、きつと誰にも喋りはしまいが、兎に角、呼んで話して置かう」

食慾のない、まづい晩飯のあとで、女主人はかう決心した。一風變つた性質の男としても、知られない半生をもつた男としても、かう云ふ機会に彼と差し向ひの話をすることは、ちよつとした好奇心でもあつた。普段から心服してゐる奴僕の一人として、彼女の意思には絶対に従順なものと豫期してゐたから、いざ呼びつけて話すとなると、先刻までなぜあんなに屈託してゐたか不思議に思はれるほど、ゆつたりした優

越を感じるやうになつた。

銀二郎は、大工や植木屋の親方が、高位の人の縁先へでも呼びつけられた時のやうに、小腰を屈めて恐る／＼はいつて來た。それは、馬小屋の前や牧草の野などで彼等が女主人に對する態度ではなかつた。どうやら、彼は、唯一人母屋へ呼び出されたときと云ふ稀有な出來事で、不安にされてゐるらしかつた。それを見ると女主人は一層安易な心持になつて、とるべき態度が確定したやうに感じた。

「……何ね、私は今朝のこととひと言お前を禮を云ひたいと思つて、それで呼んだんだがね、ほんとにお前がいゝ所へ來てくれて、私は喜んでゐるんだよ」女主人はこんな風に始めた。「思ひ出すと夢のやうで、どうしてまア、あんな、……ほんとにお前には、とんだ恥しい所を見せちまつたがね、實は、——こりや、こゝきりの話にしておくれよ」と云つて、肩がいつの間にか枕頭に来て酒を飲んでゐたことから話した。

「お父ツさん、お前まア何をするんだよ、つてね、私も吃驚して止めたんだけれどね、まるで夢中さ。徳利から啣ひだらう。仕様がなから、私が取り上げて了はうとするとね、まアあんな病人だけれど、飲みたたい／＼の一心

だね、それは實方だね……」こゝで彼女は暗やかに笑つた。「さうなりやア、もう腕づくより仕方がないから、ついまづねえ……それにね、私は寝起きと來てゐるだらう。いやな腹の立つ夢をみてゐて、ヒョイと目をあくそそれだらう。なんだか、半分はわけ分らずでね、お父ツさんもお氣の毒にさ、ほんとにお前が來てくれなかつたら、私は何をしてゐたか分らなかつたくらゐのもんだ」

女主人は、習慣的に樂々／＼のつける滑稽をもつてゐなかつた。嘲諷た、從來の彼女の生活からは、それは殆ど不用たつた。然し、一旦必要に迫られ、女、女の細心や闊太さを言葉の誇張に託して、殆ど止めどがなかつた。話の杜絶に湧いて來るべき不安が、あとを／＼と押し出してよこした。酔つたやうな危態が、彼女の耳朶を赤くしてゐた。——面々裏裏に、云つても云はないでもない／＼このやうな調子で、嘘がつけるやうになるまでには、相應の修行が要る。

銀二郎は、「へエ／＼」無愛想な返事をしながら、相手の方へは一度も視線を向けずに、おつと聽いてゐた。——彼は悲しい心になつてゐた。若い日の自分を思ひ出す時に感じるやうな、悲

明けても暮れても雪だつた。地平線の腰を撫で通る、低い太陽が、薄日ながらも住所を見せて、やがて赫々と洗んで行く日はまだ慰められた。女主人は、以前のやうに牛馬の健康状態や、冬の間の牧夫の従業を看るために、小屋や仕事場に顔を見せることが稀になつた。舅の世話に女中任せにしてゐて、酒と、ウツラウツラした眠りとに耽つてゐた。

牧夫部屋の方も、昨飯のあと、房州が佐かばかり飲む自前の酒に、心持になつて、例の冬の詩を歌ふ時ぐらゐるよりほか、賑かな笑ひ聲は聞かれなかつた。なかにも銀二郎は、暗い顔をして、いつも一人を守つてゐた。

牧夫の一人が町の酌婦と断落をした紛擾で、女主人は一度その料理屋へ出掛けなければならぬ場合があつた。その時、ふとその女將が氣に入つて、それからは、時々そこへ飲みに行くやうになつた。料理屋と云つた所で、街道に沿つて、堀も圍もなしに露出しに建つてゐる、長屋のやうな穢しい家だつた。手堀と油とで黒光に光つてゐる安鏡が、二つ三つ並べてあるのが、出窓の硝子障子ごしに覗かれるやうな、この地方で驛馬の立働きのするくらゐの田舎町には、きまつて二三軒はある、方言で「暖味屋」

と呼ばれる家の一つだつた。そのカタ／＼普請の二階で、白粉を塗り立てただらしない女どもを取巻きに、揃ひ料理や悪い酒を飲みまひするの、それでも、愈加しきつてゐる女主人にとつては、當分、六日と行かずにはゐられないほどの歡樂境になつてゐた。

さう云ふ遊興の一つで、ゲデン／＼に酔ッばらつて了つた女主人を乗せて、或る晩銀二郎が櫓を御して歸らなければならない機会が生じて來た。——星の美しい空が、眞白に降り鎖された平野の上に、寂として廣がてつてゐた。二十何町と云ふ道程の間には、小作人の小屋がポツリポツリ二三軒あるばかりで、夜が更けては全く人通りと絶えて了つた。

「馬鹿にするな。ハッハ、ハ、」

まるで男のやうな調子でだしぬけに女主人が寝言を云つて、それから、いかにも泥酔者らしくブツ／＼呟言でもぶふやうに呟き始めた。銀二郎は振り返つて見た。亡つた旦那が着た男外套の上から、毛布でまたクル／＼巻きにして置いたのが、いつの間にか膝み脱いで了つて、自墮落に手足を投げ出してゐた。

「旦那、寒ウがすぜ——」  
「驚いた。驚いた。おーどーろーい、た」

「銀二郎は思はず微笑して、馬を止めて、毛布を着せかけようとして下りて行つた。長い咽を見せ、ガツクリと首を後に投げてゐる女主人の體は、ヒドク重かつたが、ゲタ／＼になつてゐる手足を動かすのは、死人を扱ふやうに、どうにでも自由になつた。銀二郎は、女主人の手足を勝手な所へ動してゐる自分を申聞きでもするやうに、「風邪を引くといけねえ——」と呟いた。然し、その辯明すら誰も聞いて、れる者はなかつた。廣漠たる雪の原野に消え散つて了つた。仕事は、成し得るよりも永い時間がかゝつた……」

「ウーン」と低く呻いたのは、女主人ではな、て、却つて銀二郎だつた。彼は仕事のなかばで腰を延ばして立ち上つた。彼の三日月は、野に住む獸のやうにギラ／＼と暗のなかに光つた。全身に力を籠めて、眞直に突立つた彼の姿勢には、二つの考の間に迷つてゐる影は少しもなかつた。それは、一つの考の上で、次の、——決行の瞬間に移る恐ろしい静然に溢れて見えた。  
——この土地まで流れこるまでには、銀二郎は必ずしも、潔い行爲ばかりをして來たわけではない。或る淋しい田舎で、いま女主人があるやうに、どうにでも自由になるのではない、

つた。餘ッ程腹でも立てさせられなければ、誰だつて、あゝ云ふ氣味の悪い體の上に乘しかゝつたり、叩いたりする氣になれるものぢやない。若しチュウツと水でも走つたら……オ、たまらないたまらない。銀二郎はもうそれがらさき考へる氣がしないので、また無理に考へるほどの興味もないので、母屋からの使が來た時まで、そのまゝ忘れてゐた——。

「でねえ、お前に限つてそんなことはあるまいとは思ふがね」と最後に女主人が云ひ出した。

「どうぞ今朝のことは、お前、誰にも云つておくれでないよ。一度が未代で、始終そんな風にもしてゐるやうに、兎角悪い方に思ひたがるもんだからね。……私の氣にすりや、あゝ云ふ體になつてまで、そんなにも欲しいものなら、いくらでも飲ませてあげたいけれど、さうかつて、それがもとで急にどうかうつてことでもありやア、矢ッ張り私の落度だからね。決して悪いつもりはなかつたんだけれど、人はさうは思つちやアくれないやね。どうぞ頼むから、これだけは内證にしてくれよ。私だつて、みんなから、鬼のやうなものに思はれるのは、いやだからね……」

「へえ、承知しました。決して誰にも話しやし

ません」

かうキツバリと答へて銀二郎は立ち上らうとした。戀とは云はれないまでも、いくらか敬ふ心持すら含んだ好意を拂つてゐた女主人が、ふとした機會から、これまで度々會つて來た嘘つきの一人であることを知ると、彼は腹を立てるよりも、なんと云へず悲しくなつて了つた。幻が消えて了つた。

齡と共に生得の鬚辮を少しづつ失つて行く質の人もあるが、銀二郎のは、例へば、疊の上に落ちてゐる縁附一つにもすぐ目を引かれるために、いつまでも彼の日は老いるわけにいかず、ちよつとした嘘にも忽ち、括約筋の收縮を感じ

るために、耳も老いるわけにいかないと云ふやうな質だつた。さう云ふ人は、いく度も虎蹴を繰り返して、世の中の不潔癖を見盡せば見盡すほど、益々己の性癖に偏つて行つて、またしても頼めない世の中に幻を創らずにはゐられない。日や耳が老いないやうに、心がいつまでも老いない、さう云ふ永久に幼い心は、鋭い日や耳にも拘らず、「幻」のためには、一生涯騙され通さなければならぬ。——銀二郎がさう云ふ一人だつた。彼がこの二年の間、女主人に着せかけてゐた「幻」が、美しい石鹼玉

がはじけるやうに、ハツと消えて了つた。もうこの土地に止まつてゐるのも面白くなつて了つた。

「銀二郎、お前どうおしだい。何か私の云つたことが氣に障つたのかい」と女主人がうしろから呼び止めたほど、彼は不機嫌な、氣むづかしい顔をして立つて行つた。女が男に向つて、自分の弱みを承認して、それを他に洩らさないやうにと頼んだりする時に、利用しようと思へば利用出来ないこともない強みで、多少とも男があふられるものであることを、或る意識下の本能で感じてゐる女主人には、この結果は稍々意外だつた。

「どうしまして、そんなことは……」銀二郎は障子のそとに蹲まつて、もう一度頭を下げ、  
「では、おやすみなさいまし」と、もの靜かに云つた。

急に女主人は、なんとも知れない恥しさを感じて、引き込まれるやうに、ハイと閉ぢな返事をした。それが、——宛れ果てた野に落ちた雨のやうな一滴が、ボツリと銀二郎の心に沁みた。



か銀二郎の心を、前年よりも深い愛に誘ひ込んで行つた。時には惱ましい思ひにまで導かれた。

夏が過ぎて行つた。もうやがて冬が来るといふ頃の或る日、牧場では、母屋から廊下傳ひに行かれる小さな隠居所の落成祝ひがあつた。男にそこで冬を過ぎせようと云ふのだつた。例によつて牧夫部屋にも酒肴が運ばれた。また永い意地な冬が来るんだ、今晚は一つ大にやツつけろ、と云ふやうな心持で、牧夫たちは飲み食ひに飽きることを知らなかつた。ランブの敷をふやしたので、いつもの汚い牧夫部屋も、いくらか寛裕らしく見えた。

銀二郎だけが、また自分を別ものにしてゐた。酒も少しでやめて了つて、面白くなさうな顔をして隅の方に引つ込んでゐた。彼には牧夫部屋よりも大して上等ではない、六疊一間の隠居所が、母屋のものと病室より決してよくなつたとは思へなかつた。却つてそこの方が寒さうだつた。——それは彼にはどうでもよいこととしても、その新築を祝ふための酒に酔ひ痴れてゐる仲間と一絲になつて、面白さうに騒ぐ気にはなれなかつた。

女主人が町からの客をつれて、少し酔つて

はいつて来た。

一旦那、この度はどうも……などと、房州が、自分で、一同の代表者を以て任じて、仰山らしい祝を述べた。

「……いゝえね、もつといくらでもよくして上げたいだけだね」女主人は一間四方もある爐傍に座を占めて、房州の祝を受けてから云つた。

「どう致して、仲々出来ないこつてす」と町からの客が、女主人の志を賞揚した。

「これが、生みの親ならまた何人ですが……いや今く美談です。御隠居もなんでせう、さぞ御満足でせう」

「いゝえ、そんなに仰有れるとお恥しいんですがね、私も、この母親は知りませんし、良人に死なれましてからは、まあ二人分勤める気で、永い間随分、これで、出来まうだけは盡して参つたつもりです」

「そりやアもう全くで……」房州が、保証人が判を捺すやうな調子で云つた。

「それにあゝ云ふ體ですからね……」

「さやう／＼、もう何年になりますかなア」「何年つて、もう永いことですよ。下の世話ばかりは、他人の手は藉りられませずね。随分そ

りや、種々汚したりしましてね」

「今度は、すぐはばかりはお近くにつきましたし、やア何しろ、かう云ふお嫁さんをお貰ひなすつたのが、こちらの御隠居のお仕合せア」

「私もまア永年考へてゐましたことが、やつと志だけでも届きまして、これだけして死んで貰へば、もう心残りはありません」

「さやう／＼、あれで餘程衰りましたらうな、木口も仲々上等でさア」

「いくらつて何でもありませんが、それでも矢ッ張りね、聲建具なんだかんで、存外衰りましたよ」

牧夫たちは鳴りを鎮めて、ガツと聞き惚れてゐた。自分たちの女主人を、殆ど何様のやうに、けだかい、立派なものに思つて、その有難い言葉のひと音でも聞き逃がすまいとして、膝を乗りだして来る者もあり、何か感嘆に堪へないやうな短く、言葉を私語さ合ふ者もあった。

突然、銀二郎がそこへ突立つた。彼の三白眼は一層うは吊つて、唇のやうに輝きながら、真正面に女主人を睨め据ゑてゐた。その瞬間、一人も残らず口を利く術を失つた人のやうにされた。

「こいつは大嘘つきだ！ 我慢のならねえ、質



必死の抵抗のある體に、暴虐な力を加へたこともあつた。その時には、「抵抗」が益々彼を猛惡にした。今は、「不可抵抗」が彼の心を驚嘆みにして放さなかつた。

再び低い櫓の上に、頑丈な銀二郎の體が踞みかゝつた。

「驚いた。驚いた。おどろろーい、た」

「旦那——」

「ハ、ハア、驚いたねえ」

女主人は薄目をあいて、にこやかに、心から樂しそうに微笑した。白い齒が星あかりにきらきらと耀いた。

——急に銀二郎は立ち上つて、櫓に背を向けて、サク／＼と深い雪に踏み込みながら、真正面をぶつと見詰めたまゝ、五六間まっすぐに歩いて行つた。そこに停つて、十分ほど突立つてゐた。彼の心には、獸が血を流して噛み合ふやうな、荒々しい、争が渦を卷いてゐた。

「ウーン」もう一度銀二郎は呻いた。手早く外套を脱ぎ、半纏を脱いで、見るまに素裸になつた。雪のなかに日茶苦茶に轉げ廻つた。全身に堪へられない痛みが感じられた時まで、ウン／＼唸りながら暴れ廻つてゐた……

やがて銀二郎が櫓の所へ歸つた時には、女

主人は寒さを感じたらしく、頭から毛布にくるまつて足を縮めて寝てゐた。その快げな顔を見ながら、銀二郎は微笑して、直ぐ御者臺に上つた。

冬は永かつた。

それだけ雪解は樂しかつた。春と初夏とがひと足違ひにやつて來た。

女主人の生れ變つたやうに活々とした姿が、あすこでもこゝでも、まるでそれが二つも三つもあるかのやうに、行く先々で見られた。その度に牧女等の心は樂しく、喜ばしくされた。

やがて牛や馬が放たれた。思ひ／＼の群が思ひ思ひの所に、丘や小川の岸や若草の野に點々と眺められた。自然は益々美しくなつて行つた。丘の頂に、澄み透つた明るい薄暮の空をクツキリと仕切つて、馬上に反り身になつた女主人の姿が影絵に浮んでゐるのを眺めたりする時には、心ない牧人たちが、主人と云ふ意味からばかりではなく、素朴な尊敬に充ちた目をあけて、自分たちの位置が十分幸福であると云ふやうな満足に酔つた。丘の高みからは、量の豊かな、太い、然し男性の聲帯には與へられて

ゐない或る魅力をもつた聲で、彼女が、愛犬の五郎を呼ぶのが、草の葉の鳴きに乘つて流れて來た。

銀二郎は、永い一日の日光に晒れ上つた庭臺を掻きよせたが、その日の天氣のやうに上機嫌で、「ごらう、ごらう」と、女主人の呼び聲を、低聲で眞似てみた。

不意に彼の後を、音とも風ともつかないものが矢のやうに飛び過ぎて行つた。

「ごらう、ごらう」

英語の "Hello" と云ふのに似た音で、一目散に駆けつける犬を、尚その上にも急ぎ足でやうな女主人の聲が続いた。銀二郎は丘の頂を見た。彼の心が、體を棒に延ばして草のなかを飛んで行く五郎のやうに、女主人の方へ吸ひつけられて行くのを感じた。銅像のやうにちつと立つてゐた馬上の姿がふいと消えた。——そこに、薄白く空を切りぬいて、彼女の影が残つた。

「ごらう、ごらう」とまた口眞似をしながら、彼は仕事の手を動かした。廊下るところのな

い管轄が彼の心を迷した。最初の夕滅の後に、夏が、——女主人を生氣と敏捷と逞しさに美しく飾つた夏が、いつ

## 善 心 惡 心

て、ききしない。昌造の性分では、種々な對象との間に結ばれた困つた關係が、根を斷たれないで、いつまでも、ぐづり／＼尾を引いて残つた。さう云ふ幾條かの尾に纏はられて、彼の生活が次第に息苦しく、甚だしく活氣を失つて來た。彼にはそれを可なり切實に感ずることは出來た。悶擾いて、そこから浮び上らうと希ふ心も決して弱くはなかつた。唯それを實行に持ち來す意力の點になると、彼は全くだらしがなかつた。こゝに問題は元に戻る、——昌造は若いに似合はない、誠にてききしない、齒切れの悪い青年である……

二十五歳の春、彼は、今度こそいよいよ今までの生活からすつぱり蟬脱して了はうと計畫した。第一に始末をつけなければならぬのは、或る年上の女との關係だつた。それは案外にも容易く成就されたが、その顛末は茲には省く。次には、もう一人の年上の女、お京との關係だつた。

ところで、彼には「俺はもうお前がいやにな

つた」と、女に面と向つてぶふだけの勇氣は、さう考へる勇氣さへもなかつた、——からして、さうは考へなかつた。

相手が自分に對して好意を有つてゐると考へられる間は、誰に限らず、こつちからその人に對して惡意を抱くことの出來ないのが、彼の性分の一つだつた。而もその女とは、兎も角も三年越しの關係だつた。そこで、彼がいやで堪らなくなつた「生活」とぶふものゝなかからは、その女は全く排除されてゐた。實際彼にはその女に對してまだ仲々未練もあつたが、それよりも、自分の方から先に相手が嫌ひになり、随つてまた、その女から薄情者のやうに思はれ、さう記憶されることの方が更に辛かつた。別れて了つた後までも、女の胸のなかで、懐しい昔の戀人として永く生きてゐたい慾があつた。そこで「生活」を一變するとぶふ漠然とした考へから發して、女とのこれまでの關係を續けるとぶふこ

とが、勢また不可能になるとぶふ結論の方へと自分を導いたのだ。然し彼に夢にもさう意識

的に工らんだ覺えはない。そんな悽愴なことを自分の考へとして考へ得るだけの勇氣があるくらゐなら、もつと手ツ取早く事が運ぶ。自分を悽愴なりと意識することを恐れる彼は、その恐れてゐるとぶふことををも意識にせないのである。かうぶふ融通の利くあたまを必ずしも狡猾と識ることは出來ない。——それよりももう少し悪い「怯懦」と呼ぶ方が、もつと適當である。だから、彼は自分を、お日出度いほど善い人間だと思つてゐられた、——決してほじくらうと試みなかつた或る微かな不満足な心持を除けば、さうだ。さうして彼は儘かにお日出度いほど善い人間なのだ。——たゞ、大分卑怯なだけで、そしてまた、善い人間には多くの場合、大抵かやうな弱點が伴ふのを常とする。

この女と、決して再び會はないつもりで別れて來る、歡ばしかるべき口は、實際彼にとつて随分悲しかつた。房事と飲酒とでヒドク衰弱してゐたあたまでは、可なり感傷的に倒れてゐたとは云へ、彼は永い間、疊の上に泣き伏して、何年たつたらこの悲みが忘れられるだらうと思つたりした。イゴイストなる彼は、別れて行く自分を慰めるために、同時にまた善良なる

「悪い嘘をつく女だ！ 殺しても足りねえほど穢らしい女郎だ！」

銀二郎はかう囁みかけて、隠し潰したやうな咬れ聲で云つた。——「穢ねえ自分を、綺麗なもんに見せかけようとする嘘ほど、鼻持のならねえもなアねえ！ よしんば、あの水膨を締め殺さうと俺の知つたことぢやアねえ、俺アなんとも思やしねえ。だが、手前の、その、善人面ア我儘がならねえんだ。……オイ、房州、こいつに比べりやア、手前は一生嘘をついた覺がねえと云つたつていゝくれえのもんだよ……。ヤイ、嘘つき女！ どうしてくれうな……」

その時銀二郎は、實際、己の身内に焰々と燃え上つて来るものを、どう處置したものか解らなかつた。この女を殺せばそれは鎮まる。しかし……！

水が、溺れた者の想ふものであるやうに、鍊へられた鐵の、冷たい光が、何よりもいま彼の心を惹きつけるものだった。——彼はツカ／＼と土間におりて行つた。そこに鋭利な鉈があつた。女主人を切る代りに、——自分の左の腕を新割臺の上へ載せかけて置いて、力一杯に鉈を振り下ろした。

「ヤイ、これを手前にやらア」

血の滴る片腕が飛んで来て、色ど失つてある女主人の目の前に、ドサリ、と横たはつた。

それツきり銀二郎は、どこへ行つて了つたのか、皆くれ行方が知れなかつた。女主人が彼の片腕を、どう云ふ風に受け取つたか、銀二郎はそれに就いて、全く無關係なもののやうに、交通機關の不備なこの地方では、匪徒でさへさうは出来ないほど、完全に姿を隠して了つた。彼自身さへ聞き知らうとしないその結果を、他人の私としては、たゞ一應の好奇心にのせられることも憚られたので、たうとうそれは尋ねずに了つた。——七日の間井戸のなかに吊るされてあつた例の茶碗は、その後房州が、わがもの顔に使つてゐると云ふ後日話は聞いたが……。

（大正六年一月作）

## 幼壯老の死

「階全體がミ十度ほど低き聲が降りがり、頭上にいきなり蒼空を仰いだが、それは恐ろしいとも思はなかつた。二日目、三日目あたりの餘震の方が可怕かつた。とても屋根の下にある氣になれなかつた。それが、日々々々、馴れては平氣になつて來た。——あたり前の順序であらう。この三つの時期のうち、勿論第二期でやられるのが一番たまらない。これを一生に引き移すと、第二期はもの心をつかない幼時で、そこへ来る死は、怖しいには違ひないが、そんなに殘忍なやつではない。第三期の老年の死も、今日このごろの實感からいつて、さして恐ろしいことはなさうだ。青年、壯年の死こそは、鬼面人を脅すものでなければならぬ。

（白鷺漫記より）

「昌造さん、あなたまア……」甲高な女優の聲が響く。——その一日種々な、色の濃い刺激に悩まされた彼の神経は、冥に瘦せ細つてゐた。

丁度聲がはりの時期にある時、兎のやうな少年が、頻りに昌造々々と呼ばれるたびに、彼は腹も立たないで、擦つたいやうな、泣き出したやうな氣持になつて了つた。やがて、時間を見計らつて家の者に別を告げると、すぐ新橋の停車場へ行き、そこから彼は、逃げるやうに京都への旅に上つた。

夜汽車のなかの昌造を外的に寫し出すならば、それは悔恨と不安とに身の置き所もなく横んでゐる青年の、立派な、然しどこか空虚な肖像畫が出来上つて行くだらう。彼は非常な速さで走つてゐる汽車のなかにゐて、而も刻々迫ひ絶つて来るものがあるやうに感じた。ふと、殺人犯が高飛びをする場合の心理が思はれる。母親の用簞笥に鍵を差し込む時の、戦々胸の震るしい瞬間を思ひ出す。彼は頭を振つて、立ち上つて、食堂へ酒を飲みに行く。その酒が醒めて行く時分にまた飲む。——かう云ふ風に書いて来ると、然しその次に來るべき、一たうと彼は、翌朝米原で目を覚ますまで、なんにも

知らずにいつたりと深い眠に就いた」と云ふ本當の記述が、前半と互にその效果を食ひ合ふやうな形を免れなくなる。然し茲で作者が會はなければならぬこの矛盾は、そのまゝ、作中の主人公の方へ轉嫁して差し支へない。彼は體中の筋肉を押し上げながら心で叫ぶ。「あゝ俺もたうとう泥棒だ！」。さうして肚のなかで何か呟きながら、杯の酒をガブリとあふる。

然し次の三分が経たないうちに、彼は今度は冷かな笑ひを浮べる。「不安と悔恨が、鉛書通り！」そして酒飲みらしい手つきで唇へ持つて行つた杯をちよつと嘗めて味ふ。「お前が今日一日に仕送げたことを、何故杯を舉げて祝ふ氣になつてはいけないんだ！ お前は何か悪いことでもしたのか？」更にまた次の三分が経たないうちに、「いくら自ら欺かうとしたつて、良心の聲に耳を塞ぐことは出来ない！——かくの如くにして、決局どつちが本當の自分の心なのだか、決して彼には解らなかつた。解らうとして、深く追究しようともしなかつた。作者も亦その孰れにも興しない。「彼は煩悶する」彼は安眠する——小説の效果を互に相殺することの二つの事實も、そのまゝ事實として止めるより仕方がない。——既にこの小説の冒頭にも

つた通り、彼は少し卑怯なだけで、體かに善い人間で、正直であるから。さうして、さう云ふ型の人間は、二つの全く矛盾した思想や感情に支配されることに馴れてゐるから。

京都には全く違つた春が彼を待つてゐた。着いた日の晩、彼と友達佐々木とが工事中の三條大橋の竹矢來について、御影の破片が澤山落ち散つてゐる泥濘に横みながら、假橋の方へ曲らうとした時に、大學の制服を着た市村が突然うしろから「オーイ、昌坊主」と聲をかけた。瘦せてヒヨロ／＼とした體が、ダブ／＼な、薄い夏服のなかでピエロオのやうに氣輕で、滑稽で、放埒に見えた。その印象と、廣先で久振りの友達に會つた喜びとで、昌造は急にウキウキして來た。京都に住んでゐる市村は彼をお茶屋へ案内すると云つて自動電話にはいる。昌造は遊びの興を種々に豫想しながら、十鐘の梯子に凭りかゝつて待つてゐた。ほどなく彼等が銘々の間に脇息を控へて坐つた。ふそれと調和するにはみんな瘦せて見すばらし過ぎたから、やゝ苛厄に持て換つてゐたが、茶がかつた處に面した座敷に、猿のやうに赤い頬をして、髪の仰山な姉にそぐはないボツ／＼



彼は、女の幸福のために、それまでに女から立替へて貰つた遊蕩費の二三倍にも當る金を女に贈ることにした。それをもつて女が、ひどい商賣に繋がれてゐる身の自由を購ふことが出来るだけ多く。

そのために昌造はかう云ふ犠牲を拂つた。

四月中旬の戌立つた日だった。彼は定期預金の證書を懐中して京橋の銀行へ向つた。この預金は、名義上にも事實上にも彼に属したものであつたが、彼自身の勞苦とは全く無關係に、親から傳はつた彼の財産の一部であつた。その上、それは實印と共に、堅く母親の保管の下に置かれてあつた。その朝、母親の留守中にそつとその證書を取り出し、裏書をして、實印を捺した彼は、如何に自ら辯護しても、懐中してゐるものと、「贓品」と云ふ意識とを引き離すことは出来なかつた。錦のやうな罪の感じは胸いつぱいになつて、時々體が微かに顫へるのを覺えた。勿論それは決行する前から當然覺悟されてゐた筈である、——その盗みであることは。それにしても、この胸の暗さは全く豫想外であつた。「お出しになるのですな」

山納係の男は彼の顔を見ながら確めた。い

ま彼の運命の秘が、この生若い、ハッ、ハッ、行員の手に握られてゐると思ふと、彼は忽ち自分の顔から血の氣の引かて行くのが感じられた。

「さうです」と喰ひ締めた齒の間から縋かに答へる。暫くして、

「これはと、何んですな」別な行員が停車場の出入口のやうな穴へ顔を差し出して云つた。これはつい先達漸變へになつて居りますが——

「はア、期限前だと出せませんのですか」彼はもうそれを證書の儘で返して貰ひたくなる。もうこのうへ恐ろしい瞬間に堪へきれなくなつて來たのだ。

「いえ、さう云ふことはありませんが、たゞ利子が大變御損ですが、それさへ御承知でしたら、こちらはいつてもよろしいので」

彼は危機が去つたのを感じると急に圖々しくなつて、ひと思ひに承知の旨を答へて了つた。

ほどなく札の束を握つた時に、彼にはもう犯罪人らしい自棄くそな度胸が据つて、直ぐその足で、女の手へ渡して貰ふ約束になつてゐる友達のうちへ、それを届けた。一時間ほどの後に、彼は十四五の時分から買ひ集めてゐた錦書を握へて、今度は顔染の古道具屋の店に現はれた。そこで、まるで踏みつけられるやうな思ひを我

慢しがなら、愛着の深い秘蔵の品を二束三文で金に換へた。盗んだ金で義理以上の熱意をなした彼は、まだその上にも、こんな血の出るやうな金を、女やその周囲の者ども度々彼を陰險な手段で苦しめた者どもに贈らうとする。それで

別れの記念になるやうな品を調べて貰ふことを頼まうとして、まづ以前の友と、今度ひ出先に近

いミルクホールで落ち合つた。盗んだ金の一文も自分の手には残らず、總ての計畫がひと先づ滞りなく片づいたので、彼の心は今や、落つてゐた。そして、この大きな犠牲の報酬として、

彼は二度と再び言葉も交さない密の女と、電話で話すだけの釋辨を、自分自身に對して指へた。そのミルクホールの帳場に近い電話口で、

友達が呼びだしてくれた女と、何か、この大きな犠牲の報酬としては甚だ平凡なことを二分位ほど話し合つて満足して、電話を切つた。

前からの約束があつて、友達と別れると、その儘で帝國劇場へ、そこで兩親や兄弟たちと一緒にゐるために急ぐ。或る不愉快な社會劇の幕が明いてゐて、扁平な頭をした時折開のやうな役が、彼と同じ名の少年の役を勤めてゐる。この少年に何か悪い習慣が現はれて來るらしい場が演じられてゐた。

昌造も市村もサツカリ勞れ切つて、感傷的になつてゐた。この五六日殆ど晝も夜もぶつづけに一緒にゐて、都踊の花道と見物席とでも、目と目で笑ひ合ふくらゐまで心やすくなつて了つた可愛らしい舞妓たちが、まるで彼等のものの悲しい心とは没交渉に、時々何か面白さうに私語き合ひながら、一生懸命活動寫眞ばかり見てゐる。それは當然のこと、それ以上可愛らしいことで、而も彼等の心を苦しめた。それならば、どうすれば満足するかと云ふに、それは彼等にも解らなかつたが、たゞなんとなくそれでは物足りなかつた。

そこを出てから、みんなに別れて、彼等は久振りで自分たちばかりになつた。まるで恐ものが落ちたやうにボカンとして、何故かお互ひ同士でうら恥しいやうな氣持もする。俄にウカウカと遊び過ぎて了つたことが、取り返しつかないことのやうに、他愛もなく心苦しくなる。惡戯をして、先生の叱言が目の前に迫つてゐる小學校の生徒のやうに、肚の底からた、りない氣がする。二人とも黙つて、薄ら寒く曇つた夕方の町をぶら／＼歩いた。

「あゝあゝ」思はず一人が洩した溜息で、相手も啜飯して了ふ、この場合、それがこの上もなく

適切な「言葉のやうに、同感されたので。そのまゝまた黙つて歩く。銘々種々なことを、反芻動物の食物のやうに、一つ／＼丁寧に味ひ反してみながら。

彼等の十分でもない小遣は、「男性の gallantry (婦人に殷勤なること)」と云ふ、この遊蕩の間に新らしく出来た、冗談とも本氣ともつかない箴言が繰り返される度ごとに、小間物屋の帳場などへまでも滑つて行つて了つた。昌造は黒谷に住んでゐた友達から歸りの旅費を借りて來たが、市村はまるで豫算が狂つて了つた財布を持つて、それから暫くの問下宿の二階に立て籠るにしては、餘りに「男性の gallantry」が發達し過ぎて了つた。たうとう彼は、もう目の前に迫つてゐる試験も顧ず、昌造と一緒に東京へ歸ることにした。それでも彼等は、東京へ着いたら一文なしになる覺悟で、先に歸つてゐた佐々に、電報で、金を持つて銀座に出迎へると云つてやつて置いて、大風な顔をして晝の急行の二等に乗つた。

彼等の話は舞妓遊びで持ち切つた。おそめや一丸やユツツ酒を飲んだ勝綱などが、代る／＼彼等の話題に上り、同時に脚前に身振した。今

く覺える氣もなしに聞いてゐたつもりの唄の一曲などが、どうかしたはずみにヒョイと口に出た。

「羅の輕き袂に通ふなり」云々と云ふその年の都踊の立唄を頻りに繰り返す。

「(どんたくお見舞申します)か」

「オヤ／＼お前はどんたくさん)サ。(そこは端近いぞまづこれへ)か」

「(然らば通るで御座んせう)だね。(然しゆうべの……)」

「(夜前の)だよ」こんな稽古を始める。

「(づうき／＼とするであらう)」

「オホ、」

「(アハ、)」

「(ヨ、イガイヨイ)」

「ツ、ツ、トントロ、ツテツ、トントロ」彼等は夢中になつて同時に聲を合せる。そしてあ

たりの人に聞かれはしなかつたらうかと見廻して、その當座だけ低聲になる。――まるで京都

に浮かされてゐた、そのくせ二人とも、殆ど懸

らしい心はもつてもゐずに。

東へ歸つても、市村は自宅へは寄りつかないで、郊外に住む妻帯した友達のうちに泊り込

とした装の娘が、何か叫びながら飛び込んで来た。これが、昌造が初めて見る舞妓だった。頬を思ひ切り臍で染めて、眉を紺に紅で引いた顔の扮りは、遠くから見ると、都師のこしらへで、髪も同様、たゞ衣装だけが近くで見ると、自分の襟かけの着物に變つた所から起る不調和であることも聞かされたが、當分の間、どうも彼には美しく見えなかつた。すぐ、やゝ小ぶりと同じものがその隣に来て坐つた。

その時彼等はそこ二階で雑魚寝をした。その時分には、舞妓の言葉がいくらか昌造にも通じるやうになつたが、彼は故ら選んで市村と同じ布團のなかに寝た。夜中に彼は何かヒドく堅いもので頭を打たれて目を覺ました。佐々が獨でクツクツと云つて笑つてゐる。丁度目を覺ましてゐた彼の語で、初め市村も昌造も自分たちの枕を外してゐたが、そのうち昌造は自分のでなく、市村の枕をしてしまった。すると暫くして、市村も枕をしようとして、いきなり昌造の頭へイヤと云ふほど自分の頭をぶつたのだと云ふことがわかる。一部始終を見てゐた佐々の可笑しさが思ひやられて、彼等も痛い頭を擦りながら長い間笑つた。床の上に延び上つて、ほの暗い行燈の火影に舞妓の髣髴を眺め

て、相手があゝ云ふ脆弱な破れものでなくつてよかつたなどと云つてまた笑つた。

その翌々晩くらゐには、昌造はもうすっかり舞妓好きになつてゐた。唐木の机を前にして彼等は纏まりのないことを話す。寧ろ舞妓たちの話してゐるのを傍聞きする。サイダアのコップのなかを箸でくるく／＼掻き廻してから、玉鏤色に光る小さな唇へ持つて行くのを眺める。中で年かさの脇綱が、生意氣にコップ酒など飲んでトロンとなつて、獨り喋つてゐた。その容子に、才はじけた一奴が何か適評をした。小さな酔ッばらひが聞き咎めて、一人前らしく、ゲツと開き直つて、

「一奴はん、あんたあてをあなづつとゐるえなあ」そのあなづつとゐるの邊で呂律が廻り切れなくなる。

「へえ、あなづつてます」一奴は平然として受ける。昌造は何んとも云へず嬉しくなつて了ふ。——そこには春雨がシト／＼と降つてゐた。

翌る朝、雑魚寝の布團の上に市村が起き上つて、宿醉の脂ぎつた蒼白い顔をして、生欠仲を噛みながら、帯ひろ襟になつて了つた前をかい合せてゐた。

「まあ、市村はん帯とつて情のあること」この一奴の言葉に、市村はこいつと云つて立つて捕へに行く眞似をして見せた。彼の隣には、まだもの心もつかないほどの小さな子が、口をあけてスヤ／＼眠つてゐる。

或は昌造はヒドく酔つて、どうして寝たかも覺えなかつた。ふと目をあくと、兩戸をたてない部屋のにかに、紫色の美しい暁が靜かに立ち上つてゐた。寝返りを打つて見ると、一つ布團のなかで、思ひがけなくおそめが寝てゐた。この棚口な舞妓に、いつからともなく昌造の心は惹かれてゐた。彼は自分の酒臭い息を恥ぢる。おそめの寝顔をつく／＼眺めてゐるうちに、いつかそつと小さな掌を握る。それ意外にもさう柔ではなかつた。さうしてゐても仲仲目を醒しさうもないので群々にチツ／＼りを入れる。だしぬけに、ふと、涙ぐましいやうな戀心が起る。若しや、寝てゐると思つたおそめの方からも、そつと握り返しはしないだらうか、極く微かにでも。さう思つて掌に神經を集注して待つてゐたが、どんな微かな手答もなかつた。彼は悲しく、泣きだしたくなる。

活動寫眞小屋の椅子に、おそめと小龍とを彼等の間に腰かけさせてゐた時には、たらと



き出て來た。そのはきだめのやうな一隅には、  
 ……書肆の任意により以下約百三十字削除……その他茲  
 に書くことが許されない様々な醜怪事、——虚  
 飾と歡心とが背合せに貼りつけられてゐる人間  
 の住んでゐるどんな所からでも嘆き出すことの  
 出來る醜惡な繪が、その時彼のあたまのなかで  
 一時に跳梁を極めた。その仲間では、彼のした  
 ことは、——血の出るやうな思ひをして別れた  
 女と、忽ちまたズル／＼に關係してつたと云  
 ふ、たゞそれだけのことは、ほんの些細な馬鹿  
 げたことだつた。世界には、たゞ一人或は二人  
 の人が知つてゐて、その人たちの死と共になん  
 の痕跡も残さず消えて了つた恐しい程の醜怪事  
 が山ほどあるに違ひない。昌造に醜怪邪惡を  
 喜ぶ心がふと頭を擡げる時、よく彼はそれを  
 感じる。そして一種憧憬に近い心持で、その  
 永久に知られざる秘密の臭を嗅ぎつけたい慾望  
 に捕へられる。桀紂とか、ティペリウスとか、  
 クレオパトラとか云ふ暴王の話を讀む時、誰で  
 も、多少ともその慾望を感じない人があるだら  
 うか。そこに至ると、昌造はいつも邪惡な秘密  
 の前に頭を下げたくなる。たゞそれが卑近な例  
 としてある時は、彼の頭の一隅にはきだめのや  
 うに汚らしく積まれてゐた。そしてそれを、良

心を鈍らす必要がある場合に、丁度死體を柔  
 かにする時に振りかけるお土砂のやうに、あた  
 まのなかにいつばいに振り撒いて了ふ。  
 「いづれは他愛ないもんさね」女の傍に歸つて  
 來た時に昌造はかう云つた。女は顔紅の所を  
 抑へて、疊の上にうつ伏せになつてゐた。

程なくお京は日黒に一軒小さな家をもつた。  
 山の手線の停車場を出て、ジリ／＼と焦さつけ  
 る陽光を洋傘越しに受けながら、昌造は急な坂  
 を下りた。廓で會つてゐた頃とは全く違つた  
 趣がそこで彼を待つてゐた。北窓の青葉の反  
 射で、無智な女の顔も、時に神經質らしく、  
 蒼白く見えることがある。西日が次の六疊まで  
 差し込んで來るやうな暑い臺所で、丈のヒヨロ  
 長いお京の母親がセツセと夕飯の支度をしてゐ  
 る時女がクス／＼笑ひながら何か手紙に包んだ  
 ものを持つて來て、黙つて昌造の前にさし置い  
 た。昔風な字で「神様のもの」としてある、あけ  
 て見ると、その前の時に昌造が置き忘れて行つ  
 た手巾が綺麗に洗濯されてはいつてゐた。  
 「うちのおつ母さんてば、貴方のことを、いつ  
 でも神様々々つてゐてるのよ」  
 昌造は本當に神様のやうに、心からニコニ

コして、それを彼に與へてくれた者に感謝した  
 いやうな心持になる、——さう呼ばれてもいい、  
 何かを。

永い薄暮の時に、彼等には馬場の高臺の方  
 へ、蜘蛛のトンネルの下を徑づたみに登る、ハ  
 ンディキャップをつけておいて、埒に沿つて、  
 砂を蹴立て、彼等は駆け出す。きめて置いた決  
 勝點まで行かないうちに、女は急に、「おいや」  
 と云つて、浴衣の兩袖で顔を感じて、娘のやう  
 なそぶりをした。彼方の茂みの間から十三四の  
 小娘が飛んで來た。續いて、切り下げにした茶  
 の湯の師匠が、遠くから、一まあお京さん」と聲  
 をかけた。彼等は野花を摘んで、歸りには師匠  
 の家で、娘のお手前を、一服御脚走になる。人通  
 のない道を、二人は戯れながら、小さな住家へ  
 歸る。……替る朝、神様は何んとなく不慮嫌  
 に、怒りッぽくなつて坂道を上る。かゝるまな  
 ければ、更に機嫌の悪い時には、甚近くまで床  
 のなかにゐて、起きるとすぐ酒にした。……そ  
 の間に彼のうちでは、うつと不機嫌に、もつと  
 怒りッぽくなつた彼の親が、女中たちに當り  
 散らした。そして彼の書齋にはいつて行つて、  
 亂雑になつた机の上から書きかけの原稿を取り  
 上げて、一二枚讀んでみて、舌鼓を打つて下り



んでゐたが、五月になつても京都から着て来た縮入を着て、することもなくブラ／＼してゐただけに、京都の餘熱が仲々醒め憎かつた。相變らず、男性の "salutary" を包んだ胸を、懷手をした掌でビタ／＼叩きながら、友達の庭の西洋花を見て廻つたりしてゐた。そこに昌造や佐佐が誘ひ出しに來た。東京の舞妓を相手に遊んでも、彼等はどこかに京都の舞妓の誰かとの似寄りを見つけ出して、「和製のおそめはん」とと呼んだり、京都で覺えて來た「でえんこ」、誰の隣に誰がある」と云ふ他愛のない遊戯をしたりして、せめても、一心ゆかせの薄荷パイプ（そんな流行言葉も出來た）にしてゐた。

それ程の京都熱も、やがて次第に醒めて行つた。殊に銘々が一人である時には、夢のやうな思出ばかりでは何んのだ、そくにもならなかつた。中にも昌造は、愛慾に渴いて、陰鬱な心でゐた。それでも行樂に、時々お京らしい女から、知らない名前前で掛つて來る電話には、決して出ないでゐるだけの心氣はあつた。

カラツと晴れ渡つた初夏の或る日のこと、彼は俥夫が持つて來たと云ふ一封の手紙を受け取つた。一目見てそれはお京の手蹟だつたが、咄嗟に彼は、それをどう處置してよいものか迷つ

た。矢ッ張りあけて讀んだ。そこには、昌造のうちから餘り遠くない或る四辻まで、兎も角一寸でもいゝから出て來てくれ、と書いてあつた。暫く考へてゐたが、矢ッ張り彼は出かけて行つた。殊更に、どうにでもなれ、と云ふやうな氣持になつて。そこには、お京が廓にゐた頃使はれてゐた小女が一人で立つてゐた。彼は、ふと、女が瀕死の床にでもゐるのかと思つた。然し、彼等が一寸口禮を交したまゝ、無言で一町ほども行くうちに、お京はどこからか出て來て、二三間あをと歩いてゐた。電車道へ出た時に追ひついて來て、毎日會つてゐる人にも云ふやうに、いきなり、

「築地に、一寸變つた料理屋が出來ましたつて、行つてごらんならないか」

かう云ふ場合、相手の意表外なことを云ふのがお京の慣用手段だつた。復か、と思ひながら、昌造は暫く女の顔を黙つて見返してゐた。お京は、金齒を出して、「駄目よ！ 一とでも云ふやうにウフ、ハ、と笑つた。彼も誘ひ込まれて、一寸笑つて、そこへ來た電車に乗つた。

その料理屋の二階で、

「一體どう云ふつもりなんだ」と昌造は、改まつた顔をして云つてみた。そこに酒や料理が來

て話が逃れる。暫くして酔つた。

「一體どう云ふつもりで俺を呼ば出したんだ」昌造はもう一度繰り返した。

「どうつて……女は甘えるやうに、口に入れたものを故意とカチ／＼云はせて嘔んでゐたが、

「これからうちへいらつしやらない？ そりや汚いんですよ。吃驚なさるわね、きつ」と、

後半は小女の方へ向いて云つた。

「吃驚するもしないも、まだ誰も行くともなんとも云つてやしないぢやないか

この返事で、お京のうちへ行くことが、殆どきまつたことになつて了つた。――やがて酔つた體が電車に揺られる。淺草のゴミ／＼した街の古道具屋の店先から、階へ上る。お京の母親がゐて初對面の挨拶をする。酒が出て更に酔ふ。

母親と小女とがいつの間にかゐなくなる。暫くして昌造は、男便所のない汚いはばかりのなかで、前後にフラ／＼しながら、成程かつ云ふ

つもりだね。……さうぶ俺は？ 矢ッ張りかうなるつもりか。フン」と、自分で自分を嘲つてゐた。世の中と云ふものはみんな馬鹿けたく

だらなことで埋まつてゐる。俺ばかりぢやアない。――こんな心持が、今まで見聞さした様

様な醜態事でつまつてゐるあたまたまの、隅から汚

へば、日本橋で五本の指に数へられる位の間屋で、まあ御新造さん〜と云はれたこともある女なんぞ御座んすが……」お京の母親が充奮して、いつものオド〜した容子に似けなく、かううは吊つて顔へを帯びた聲で始めた。「それが貴方、まあ、恥を申上げなければ分りませんけども……」

「およしよオ、おッ母さん」とお京は故ら平氣を装つて、涙ッぼろいみんなの氣持を陽氣な世間話の方へでも誘つて行かうとして、晴やかに笑つてみせたりする所に、彼女はまた彼女らしいセンチメンタリズムに裏切られながら、

「昔は昔、今は今さ。面白くもない……」

母親は恨めしさに娘の顔を眺めてゐたが、

「さうさねえ、下らないね。……だがね叔父さん、

お前さんだけはみんな知つてゐるがね、考へてみ

りやア、あれもこれも妻の身から出た錆さ。こ

れと云ひ、長三郎と云ひ……」かう云ふうちに、

彼女の老つた目から、大きな涙の筋がポロ〜

とこぼれ落ちて來た。「あゝあ、一度は二十人三

十人の奉公人を使つたこともある身が、この年

になつて、他人の釜の飯を食べなきアならない

やうな端目になると云ふのも、みんな……」

「大袈裟だねえ」と女は鼻の先で。

「いゝえ、ちつとも大袈裟ぢやアないよ。お前は知るまいがね、ねえ叔父さん、まだ先の旦那の生きてなすつた頃にやア……」

「奉公人のことなんぞ云つてゐるんぢやアないよ。そんな者アよし四十人が五十人だつて、ど

の道今のたしにやアならないやね、下らない」

お京は酔つて、目を据ゑて、ガミ〜噛みつくやうに云つた。さうさ、全くおッ母さんのぶつ通

りさ、みんなお前さんから出たことだよ」

「お京さん、まあお前さん、なんだね」と上さ

んが聞き兼ねて宥めた。

「ハッハッハア」叔父は咽で笑つて、「いゝえ

ね、貴方の前ですが、兎角女でえ奴は愚痴な

奴でがしてね、アッハ、ハ、ハ、さう云つて彼は、

さも可笑し涙でも拭くやうに、目の周りを擦つ

た。その時老つた兄妹の心には、古い日のこ

とが、同じやうに徂徠してゐた。黄色い娘はい

つの間にか八疊の方へ寝に行つて了つた。お京

の母親は、上さんを捕へて婢々と泣言を聞かせ

ては、二人して褌袴の袖で目を拭いてゐた。昌

造と叔父とは、くだらないことをボツリ〜話

しながら頻りと飲む。お京は急に黙り込んで了

つて、ボンヤリ一つ所を見詰めてゐたが、

「さア、もう寝ませう〜。いつまで云つてた

つておなじことさア」と大聲に云つて、昌造を促して、近所で借りて來た屏風で障つた寢床にはいつた。屏風一重向うには、山羊髯を胸の上に載せて、叔父が盛な顔をかき始めた。

上さんと母親とで、カタコトとあと片づけをして了つてから、四疊の方たつた一つある電燈を消さうとした。

「叔母さん、點けといて」お京の氣狂じみた

呪れ聲が屏風の裏から聞える。「それからおい

やを一杯、コップに」

昌造の荒びた心は、この陋巷の棟割長屋の

屋根の下に、一家が散亂しようとしてゐる光景

のなかに、みんな少しづつ充奮して苛立ち易く

なつてゐる無智な、善良な人々の間に、最も

居心地のよい安住の地を見出した。普段イヤに

常識主義なお京までが、苛々と反抗的に、捨

針になつてゐるのも、彼には變つた興味を興へ

た。そこでは總ての感情が、善惡美醜ともに淺

薄で、小規模で、昌造の小さな心も、それを

分解したり味つたりするのに十分廣かつた。彼

はその小さな世界を肴に、エゴイステイックな

立場に泰然と構へて、欲するだけの慾を十分に

飲みながら、引止められるまゝに、二晩ほど彼

て行つた。

秋が来た。澄み透つた空には、吹き千切られたやうな笹毛を出して美しい雲が流れる。光と雨とを得て、果は熟し葉は落ちる。齢を遂うて書かれてゐた昌造の長い自敘傳は、十四歳の或る日、或る暗い事實にぶつかつてこの方、机の上で埃を浴びてゐた。

或る日昌造は、友達、友達の北島と一緒に「和製のおそめさん」に會つてゐたが、彼が夢想してゐたほどには、相手が何んとも思つてないことを知つて、ムシヤクシヤして、友達と別れてからお京のところへ廻つた。お京はもう目黒のうちを疊んで、また浅草へ古集のある區へ歸つて、ひとの二階を借りて住むことになつてゐた。

昌造が、路次の溝板を踏んでその勝手口へ廻ると、丁度そこにゐたお京は、一寸狼狽へた色を見せたが、すぐ決心したやうに先に立つて二階へ上つた。六疊の部屋中いづばいに物が取り散らされてゐる。そのなかで男が古新聞で瀬戸物を包んでゐた。お京は突立つたまゝ、  
「もうこゝも落城……明け渡し」  
「さうして？」  
「叔父さんの所へ轉け込むの……いゝえ、そ

れは別よ」さう云つて道具屋の手から、嘗て昌造が描いて興へた樂焼の菓子皿を取り戻して、うつ伏に胸に當てがつて、「何、これしきの悲運に！」と云ふ風に微笑んだ。……「神様さんは婆や奉公」

「一家散亂だね」昌造は冷かに云つた。前に別れる時にはあれだけのことをした。もう今度はお京の知つたことぢやない。と云ふ心持で、  
「俺の三味線は？」  
「賣つちまつた」

道具屋がへ、ラ笑ひをして昌造の顔を見上げた。そこへ、つい近所にあるお京の叔父の娘が荷物を運びに來て、昌造を見て、羞恥んですぐ下りて行かうとした。女は呼び止めて、挨拶をさせてから、何か二品三品持たせてやる。その時彼等は、黄色い薔薇のやうな顔色をした内氣な娘をつれて外で食事をして歸つてから、何一つないガランとした明き屋のやうな六疊で、

明る過ぎる電燈の下でねる。寝ながら昌造は、先刻仲見世で半襟を買つてやつた娘の日本人に獨特な、黄色い薔薇の花のやうな、わりに光澤のない、細かなきめの皮膚を思ふ。——蠅が一足、寢靜まつた夜に、甲蟲ほどの羽音をブンブン云はせながら、彼等の露はな體に來てはと

まつた。

翌日、人、詰と寢近きだけをお京の叔父の家へ移した。そこは六疊と長四疊、間きりの平家だつた。四疊の方には、上さんが内職の鼻緒を縫ふミシンもあり長火鉢もある。そこ、叔父夫婦と娘とお京親子とが、昌造を上座に据ゑてギツシリまつて別れの宴を張つた。お京の母親の兄に當る叔父は、職業に要求されるまゝに、いかさま賣下者然と蓄へた山羊髭を撫でながら、松茸の土瓶蒸しの通をぶふ。さうして白からその料理を用意する。杯がそれからそれへ廻つた。

……どうぞ今後とも末永く面倒を見てやつて下さい。これだつて」と自分の妹を指して叔父は續けた。「この年になつて、こんな思ひをしやうとは夢にも思はなかつたでせうが、まあ、みんな持つて生れた運でさア。ねえ、人間は七転び八起……」

こんな話になつて來ると、心のいゝ、デブデブと肥つた賣下者の上さんは、すぐに亭主の言葉に感動して、半纏の袖で鼻の穴を突き上げ

るやうにしながら目を緊閉した。  
「申しちやアなんですが、妾もこれで元はと云



くから、新橋の停車場まで一緒に行かうと云つた。新橋まで来ると、もう横濱行はよしと云ふ。いよく別れようとした。すると女が、もう一生會はないとしても、場合によつては、手紙は上げるかも知れないと云ひ出した。昌造はもういよく堪性をなくして、「斷然いかん！」と往來なかで思はず大きな聲を立てた。この争ひの間に、彼等は日比谷公園にはいつた。夕榮えが永田町の岡の上に美しく空を染めてゐた。落ち葉の浮いてゐる池で水禽が群れたり離れたりしてゐる。——むつくりした胸で水を分けて、丸い黒い目であたりを見廻しながら、自分の行きたい方へ勝手に遊いで行く。或る一羽がどう思つてか、陸へ上つて、身震ひをして水を切る。岸の丸石が少し濡れただけで、なんにも重大な結果を生まない。昌造は、人間の行動の一寸した左右から分れて来る善惡の結果と、同じく自由な意志をもつて行動してゐる禽の、全く善惡のない結果とをボンヤリ思ひ比べてゐた。それが難かしい理窟になつて行かずに、たゞ何んとか彼の心の禽のやうにゆつたりと緩んで來た。胸の悶が消えて、長閑な鳥獸の世界を感じた。——ふと後を向くと、女が勞れ切つたやうに口をあいて、夕日を見詰めながらボンヤリ立

つてゐた。ほんの瞬間的に、昌造は、雄鳥が雌鳥を愛するやうな心持になつた。が、すぐまた苦い顔をして黙つて歩き出す。廣い芝生の所へ來た。あたりにはまだで人影がなかつた。

「オイ、もう歸れよ、いゝ加減に」

「近いうちにもう一度だけ會はない？」

「いやだー」

「いやならよござんす」なんの執着もなく云ふ。昌造はカツとなつた。

「そんなら何故初めツからそんな餘計なことを訊くんだ。俺をいやがらせるだけの目的で云ふんだな」

「貴方はもうすツかり氣が變つてお了ひなすつたのね。妾、憎い？」

言葉に現はせない程の憎さを、十分に傳へてやりたい欲望で胸がいっぱいになつて、口が利けなくなつて、洋傘の柄を力まかせに握り締めたまゝ、昌造はブルブル顫へてゐた。

「おいやでせうね、金龍館の下座を情人にしてゐると云はれちゃアね」

昌造は女の代りに大地を力まかせに打つた。洋傘の先が折れて飛んだ。女はその飛んで行つた先を見てゐた。草のなかで金物が光つてゐる。

「俺を責める氣だな、貴様。貴様が一體俺のよし惡を云ふなんて、第一考へるなんて……」

頭の上を鳥の群が鳴きながら歸つて行つた。女は一すうは目づかひに見あげた。羽音が靜かな夕空に遠ざかつて行く。暫くして女は落つき拂つて云つた。

「人間でものは、誰でも倦きるわ」

「生意氣云ふとほんとになぐるぞ」

「貴方はどうかしていらつしやるのね」

「もういゝゝ。どうしてゐようとお前のお世話にやアならない」

「堪忍して下さいね、妾が悪かつたから」

「なアに、あやまるにやアあたらないよ。お前と云ふ人間はさうぶ人間なんだ。あやまつたりするとまた嘘になる。本性を現はしたまゝで引き下つた方が男らしいぞ」

「何をそんなに怒つてらつしやるの？」

「もういゝんだよ。これですツかり片がついたんだ」

「なにがとゆつくり引張つてふつた。

「俺たちが一番お仕舞に本當の肚をぶひ合つて別れるんだ。それでいゝぢやアないか」

さう云つて了つて昌造は歩き出した。それでも彼の注意は後に惹かれた。(どうしたたら



等の間に暮してゐた。

深く露の降りた朝、昌造は珍らしく早起きをして、愈々一同に別れを告げて出た。病氣舉句

に欠振りで外に出た時のやうに、爽やかな朝の空気が彼の皮膚には強すぎた。足腰にも力がなかつた。ついそこらまで送ると云つて一緒に出た

女が、電車道まで来ると、もう少し歩かうと云ふ。彼等はなんと云ふこともなく、一錢蒸氣で

向島へ渡つた。廓にゐた時分随分晶にされた老つた發句の宗匠の庵室めいた家を、土手

の上から眺めて、お京は永い間の遊女生活をボンヤリ思ひ出しながら歩いた。百花園へはい

る頃には、だん／＼露が晴れて、日光が彼等の上に照り始めた。若い藝者風の女と、昌造より

りもまだ若いほどの青年とが、石の上に腰を下ろして、肩を押しつけ合つて休んでゐた。彼等

は一組づつ、互に、互の前の晩を想像し合つた。さうして自分たちをちつとも幸福だとは感

じない。――不穩な沈黙を續けたまゝ、彼等はそこを出た。心の上からクルツと濡紙を貼りつ

けられたやうに、總て彼等の感情は、いま、鈍く、息苦しかつた。通りがかりの人のやうな心

持で、唯並んで歩いた。

そのまゝ、晝近くまで歩き續けて、人形町へ

出た來た時には、日射で體がグタ／＼にだるくなつて了つた。ふと、或る鳥屋へはいつて酒を

飲んだ。焦け爛れた胃の脘に、溜飲に似た苦さで酒がチリ／＼と滲みる。――酔が廻るに従つ

て、彼等は少しづつ生き／＼して來た。

「これから先、一體お前は どうして行く氣なんだ」昌造は言はず語らずのうちに愈々別れる時

が來たと思つて、それをもう既定のこととして、殆ど義理一遍にさう尋ねてみた。

「どうにかなりませうさ――」

「女にやすたりがないか」と毒々しく、「然し

つまで叔父さんの厄介にもなつてゐられまい」

お京は、(そんな生意氣を云ふなら、云つて聞かせてやらうか)と云ふやうに、暫く男の顔

を見詰めて、勿慮らしい間を置いてから、「今夜から活動に出て唄を唄ふんですとさ、金龍館

でね」

それを今まで秘してゐて、いざ別れようと云ふ

ドタンバへ来てつい喋つて了つた女の心持を、ハッキリと感じながらも、昌造は苦笑ひを

浮べただけで黙つてゐた。けれども有繋に活動小屋の内部を思ひ描くと、落ちて行く女の運命

を哀れまずにはゐられなかつた。(出獄したために、獄中より、入獄以前より、更に悪い暗い生

活へはいらなければならなかつたとしても、それは獄吏の知つたことではない。まして俺は、

どんなに控へ目に考へても、少くとも、女をより不幸にしようと思つて、彼女の身の自由を

購つてやつた譯ではなかつた。それが、その結果は――六十近い母親は婆や奉公に出る。女は

漢草の活動小屋で唄を唄ふ。人間の善良な意志が、思ひがけぬ不幸の囚をなした例は山ほど

ある。「運命の皮肉な惡戯!」人間の道義心を嘲笑ふ「運命」の惡戯!――こんな風に昌造は、

自分の一時の出來心に等しい「善良な意志」――それを貫徹させることに全く無努力無責任だ

つたこれまでの態度、そんなことば全く棚に上げて置いて、この不幸の源を、「運命の惡戯」と云ふ、決して不服の出ない、うまい所へおツ

被せて考へた。そしてその思考にあふられて、傲慢になつて、まるで彼が意地悪な「運命」とゲ

ルになつて、初めからこの結果を見越してゐながら、「善良な意志」でお京親子を不幸の穴へ

落し込みでもしたやうに、その企が愈々思ふ壺へ嵌つて來たやうにさへ思ひ曲げて、竊かに

邪惡な心に阿つた。惡心が満足して、出かした出かしたと褒めた。

鳥屋を出ると、お京は、或る用事で横濱へ行

つた。久振りて父母に對する愛を感じながら、子供のやうに泣きじやくりながら寢入つた。

或る日の午後、昌造は佐々を訪ねようと思つて電話で都合を訊くと、市村と牧野とが來てゐるが、よければ、と云ふ返事だつた。昌造はその明け方蟬脱とずる／＼べつたりと題する、幾度か生活を改めようと思志しては幾度も失敗に終る意力のない生活を描いた自叙傳風な小説を脱稿した。それは出来次第に、そのなかの副主人公のモデルである佐々に見せる約束になつてゐた。それで佐々は、他に來客があつてはと云ふ遠慮を言葉のうちに現はしたが、昌造は一寸考へて見て、却つてその方がいゝと思つて、行くことに約束して電話を切つた。

この小説のなかで、昌造は、佐々に對して身を切られるやうな思ひで或ることを自狀してゐた。

それは下のやうな事件だつた。

一體佐々は昌造の兄の俊之助の友達だつた。随つて年も六つほど上だつた。早熟な昌造が、この友達と對等に交際したい欲望をもつてゐたために、往々自分を實力以上に吊るし上げたければ丈が足りなかつた。その吊るし上つた足と地面との距りが、この友達との關係に於て、

昌造の最初の弱味になつた。うは吊つた彼の言説でも、時には、鈍厚な佐々には才氣煥發に聞えた。だから彼等の交際は、はたからは、年のわりにには對等らしく見えた。然しその實は、昌造の宙にぶら下つた足と地面との間には、佐々の思想、趣味、道德などが、芝居の岩のやうに一見頑丈らしく踏み臺にされてゐた。昌造もそれに心づいてゐて、幾度その空洞な足つきを自分の大地にまで踏み碎いて了はうと悶悩したり、或はまたそこから飛び下りて了はうと企てたか知れない。然しかの腹子の岩の周圍は、日と共に膨大して、遂には己の立つてゐる大地を見失つて了ひさうな有様になつて來た。

その時分の或る日、小網町の河岸に臨んだ西洋料理屋の二階で、彼と佐々とは、畫家である英國人の友達から、オオガスト・ジョンと云ふ畫家の話を聞いたことがある。まだ若冠ながらジョンは、恐ろしいやうな一種の強い性格を享つた男だつた。彼の性癖は一タオリヂナルだつた。彼の周圍には、磁石に引き寄せられる鏡片のやうな崇拜者が、常に必ず五六人づつはあつた。そのなかの一人であつたオスボルンと云ふ畫家は、立派に己自身の才能を享つてゐながら、その作畫は、どう悶悩しても、ジョンの足跡を

あとから／＼と追つて行くやうになつた。たうとう彼は、ロンドンを去つて、或る田舎に出込んで了つた。そして子供の心にかへつて、一向自然を觀て描いた。然しオスボルンは、その一枚が出來上ると同時に、ピストルの彈丸を己の頭腦へ射込んで死んで了つた。——かう云ふ話になつて來た時に、昌造と佐々とが殆ど同時に尋ねた。

「その一枚は？」

「オ、非常なもの。彼自身の藝術！」

その後二三日の間と云ふもの、昌造は、佐々を殺して了はうと云ふ考を、どうしてもあたまから追ひ出すことが出來なかつた。自分が殺されて了ふよりは……と思つたのだ。然しこれに關する詳しい記述は茲には省く。

昌造と佐々との間にはまだ次のやうな關係もあつた。仲間の中にもまだ一人も遊びを始めた者がなかつた以前に、昌造はうちで使つてゐた年上の下婢と通じてゐた。この事實に最も親しい友達の佐々にも打ち明けずにあつたが、唯彼がも早や童貞ではないと云ふだけは、いつ話したともなく通じさせてあつた。その後或る冬の晩、佐々が遊びを始めたことを察めて昌造に打ち明けた時に、昌造はそれに對する償ひのやう

う？)

烈しい怒りのあとで、彼の心は次第に、いゝ柔か  
になつて来た。少し云ひ過ぎたやうな氣もして  
女が哀れでもあつた。然し彼は努めてその心  
を抑へつけた。暫くして、二三間あとから女  
の足音がついて来るのを知つた時、まアよかつ  
たと思つた。彼は停留所の方に出すに、そのま  
まうちのある方へ歩いて行つた。女がついて來  
ることが出来るやうに。

足が、うちに向ふと同時に、彼の心は重くなつ  
た。永い間無斷で、電話一つかけないで、うちを  
明けてゐた結果を、彼はよく知つてゐた。屢々  
繰り返したことが、両親は仲々それに馴れな  
かつた。父の怒、母の心配、兄弟の迷惑、彼  
も仲々それに馴れなかつた。結局彼は友達の方  
ちに寄つて、そこから兄でも呼び出して、一緒  
に歸つて貰はうと思つた。

その友達のうち、の前の前に來た時に、昌造は  
振り返つて、今度はまるで違つた優しい聲で、  
勞るやうにかう云つた。

「北島の所へよるがね、若し留守だつたらすぐ  
出て來るけれど、あたたらもう別に斷りには來な  
いからね、五分ほど待つてみて、出て來なかつ  
たら歸つておくれ」

もう全く夜だつた。女の顔がほの白くたゞ  
顔くやうに見えた。  
「ぢやアさよなら」昌造はサツサと門のなかに  
はいつた。

北島は彼を見るなり、

「オイ、元談ぢやアないぜ、一體あれから  
どこに行つてたんだい。君のうちぢやア大騒動  
だぜ。俺は何遍電話口で呼び出されたか知れや  
しない」

同じ夜の九時頃、俊之助兄の後から、昌造が  
ジョンポリ部屋にはいつて來た時に、父母は「ま  
ア助かつた」と思つた。五人の男の子のうちで、  
この四男のやうな放蕩者は初めてだつた。どの作  
もどの作も、成年になる前後に、きつと何か知  
らんで苦勞をかけたけれども、昌造のやうに無  
遠慮に彼等を苦しめる者もなかつた。

「一體どこへ行つてたんだ！」父親の今までの  
心弱い不安が、急に劇しい怒りに變らうとした。

然し、その時彼は、作の、三四日の間にゲツソリ  
瘦せて了つた顔を見た。着く縁どられた日は、  
勞れて力なく見えながらも、思ひ迫つたやうに  
潤んで、深い縦皺を刻んだ眉の下に落ち込んで  
光つてゐた。髭なども汚らしく延びて、一層顔

色を悪く見せてゐた。口こそ一言も出しはし  
なかつたけれども、心のごく底では、實際生命さ  
へも氣づかつてゐた我が子の、かう云ふ哀へ切  
つた容子を見ると、有繋に父親も涙を誘はれた。

母親は情ないことだと思ふと、ハラ／＼と心弱  
い涙を落した。昌造は、自分を一文の値うちも  
ない放蕩者だと心から感じて、父兄の前に身  
置き所もないやうに恐縮してゐた。然しそこ  
は、どこか人の心に觸れるものもあつた。例へ  
ば、悪心の風に吹き曝され、善心の雨にたゝかれ  
ながら、面喰れるまで誘惑の旅をさまよひ廻つ  
た足弱な旅人が、宿を頼むのも恥ぢられはれて、暫

先でウジ／＼してゐるやうな趣があつた。  
「俺は何んにも害なまい」と暫く沈黙が続いた  
後には父親が云つた。「また叱りもしまい、が、こ  
れからはもう少し氣をつけてくれ。老つた親た  
ちのことも思つてくれ。よく自分で一度ちへ  
てごらん。……然し、それよりもまア、今夜はゆ  
つくりお休み、まるで……一身体でもしかけて  
助けられて來た男のやうな顔つきをしてゐる、  
と父親はその時思つただけけれど、元よりそれ  
は口へけ出さなかつた。  
昌造は勞れ切つて自分の書齋にはいると、こ  
れと云ふ理由もなく、聲を立てゝ泣き出してし



友達の方へは決して向けられないで、その女に對して、殊更に佐々の方へ押しやると云ふ心持の、謂はば幸福と云ふ形で苦しめるとでも云ふべき心持で現はれて來た。銀貨隠しの遊びをしてゐた時に、佐々の拳固を指して、「その熊のやうな手！」と云つたのも、翌朝藝妓たちが歸つて了つた時に、「あゝあ、御婦人達がゐなくなると、急にみんな氣をぬいて了つて、惘然した顔をしてるぜ」と云つたのも、昌造の心持には、無遠慮過ぎたと云ふ以外には、全く咎められるべき何んの他意もなかつた。所が、「二三日してから昌造は、「あの晩君が僕に對して爲した下劣な「心の遊戯」で僕は君に對して可なり不愉快を感じてゐる。そしてその心持を今小説に書きかけてゐるから、當分君とは遇ひたくない」と云ふ意味の佐々の手紙を受け取つた。佐々は自分がみさ子に對して抱いた可なり眞面目な愛情を、昌造が馬鹿にして、わざと女の前で自分の毛だらけな手を熊のそれに譬へたりしたのだと釋つたのだつた。

それ以來暫く二人は遇はなかつた。昌造は、自分に對する佐々の不愉快が、日ごとに彼の原稿紙の上に形を取りつゝあることを思ふと、ふと苛立たしく感じるやうな時もあったが、然し

彼にとつては、この友達との間に、どんな形でも變化の來ることは、心竊かに望む所だつたから、さしてそれを苦にもせず、他の友達と一緒に、相變らず遊び歩いてゐた。

もう冬が來てからの或る日のことだつた。昌造は北島からかゝつて來たと云ふ電話に出た。

すると、「妾よ、わかつて？」かう云ふのがお京の聲だつた。彼はすぐ電話を切らなければならぬと感じながら、矢つ張り受話器を耳に當てがつてゐた。

「なんと思つて電話なんぞかけるんだ」

「たゞよ。急に掛けて見たくなつたのよ」お京は明かに餘程酔つてゐた。デレ／＼とよく廻らない舌で、くだらないことを喋り續けた。その後からは、樂隊の音や人の話し聲などが騒々しく聞えてゐた。活動小屋の樂屋の酒宴。酔ばらつた下座の女。堪らなく不愉快になつて、昌造は黙つて電話を切つて了つた。

この時筆めて昌造は、別れて後のお京の生活を目前に浮べて見た。彼はなんとなく胸苦しく情なく感じた。

「いやだ／＼。たまに善いことをすりア、その結果はこんなものだ」

その秋同じことを鳥屋の二階で感じた時に比べると、彼はずつと簡単に、概念的にこの問題を片づけて了つた。人の心に在る善の力が、いかに成すなきかを思ふことは、一面から彼の生活にジャスティファイし、不安を麻痺させる效力があつた。而も彼は善のために悲しまなければならぬやうに感じた、――末世の世には、善もその力を收めなければならぬと云ふ風に。

そしてこの幻滅は、(彼の考へに従へば)末世の世に目を開く前に、必ず受けなければならぬ「To be」であつて、これを経て後、人は、自分達のうちに何か或る尊いものを建立し、常にそれを力綱としてゐるには、一日も生きて行かれないやうなヒロイズム時代から、舉げて現實に面接する不屈の力を備へた成熟の時代にはいるので、恰も彼が今その一轉期に際して、別れて行く過去の時代を懷しみ、かつは幻滅の悲みに返つてゐるのである、とかう昌造は自ら解釋した。――然しまた別な見地から云へば、彼の所謂「To be」は、徴兵検査のやうに、誰でも人が必ず受けなければならぬ「凡人検査」の試験であつて、昌造がその甲種合格者であつたと云ふことも出来る、この考へに従へば、その日の短い電話が、彼を立派な凡人に成熟さ



に、彼自身の秘密をも語れと迫られた。その時以來四年ほどの間、佐々は昌造の相手が神田に住む煙草を商ふ女だと云ふ虚構を信じさせられてゐた。それでも彼は、何故ともなく、あの下婢ではないかと想像して、さう突込んで尋ねたこともあつたが、昌造はどこまでも嘘を云つた。この嘘のために、昌造は益々佐々の前に己を暗く弱く感じなければならなくなつて了つた。遂に彼は、名を創作に藉りて、佐々に本當のことを白狀しようとし、同時に今までの關係にも幾分か光明を持つて来ようと思つた。「蟬脱とずる／＼べつたり」の一部分がこの目的のために割かれてゐた。昌造にとつて、どの道それは苦しい仕事には違ひなかつたが、この頃になつて、彼にそれを成すだけの勇氣が湧いて來た。と云ふよりも、寧ろさうするだけの圖々しさが出來て來たのだと云つた方が當つてゐた。小説のなかで、彼は、人を陥れようとした嘘の穴のなかで、如何に己自らが苦しんだかと云ふ事實を書き、（そこには少しの誇張はあつたとしても、無根の嘘はなかつた）また作者の主観として、苦悶なまでに主人公を鞭うつて、恰もそれで永い間友達を偽つてゐた罪が償はれるものゝやうに感じた。そこには、友達の前で罪

を謝する代りに、この著作に藝術品としてのよい批評でも受けながら、對等な笑ひ顔のうちに、永い間の嘘を白狀し、同時にまた過去に葬つて了はうと云ふ、（さう明かに意識しないまでも）甚だ横着な態度が潜んでゐた。かう云ふヒドイ意味の作を佐々の手に渡すには、差し向ひで日の前で讀まれるよりは、相客があつた方がいゝと感じて、原稿を袱紗に包んで、昌造がその日佐々のうちへ出掛けたわけだつた。先に來てゐた友達はまだ倦んじ果てたやうに、仰ぬけに寝ころんで出鱈目の鼻唄を唄つたり、兩膝を抱いて床柱に凭れながらユサ／＼體を揺つたりして、中心になる感情も話題も明かに失はれてゐるやうに見えた。この空氣はいま昌造が身を置くに最も適してゐた。佐々はこの空氣のなから昌造の創作を持つて隣りの部屋へ出て行つた。昌造の心はワク／＼して來た。それを紛らすには、あたりの空氣を一層ダルにすることが有效だつた。四年の間親しい友達に偽られてゐたことを知つた時には、人を信じることの厚い佐々は可なり不愉快な心持になつた。その上、讀み終つてからもとの座敷へ歸つて見ると、そこでは昌造がダラケ切つた冗口をたゞいてゐて、恬と

して恥ぢる容子もなかつた。佐々は人抵の場合この年下の友達に對して兄貴らしい愛情や寛大や、尙また相應の尊重をも失つたことはなかつたが、その時には彼を下等だと思つた。「どうだつたか？」と昌造が殊更平氣を裝うて訊いた時に、「その内、ゆつくり話さう」とたゞ一言云つただけで、露に苦り切つた顔をしてゐた。その晩彼等は酔つて吉原へはいつて、雨に遇つたが、牧野の童貞に敬意を拂つて、或る馴染のない引手客屋へ上つた。また酒を飲んだり、藝妓たちが來たりした。昌造は亂れ箱のなかに原稿の袱紗包を見つけて、「こんなものが顔を出してちや面白くねえ」などと云つて帽子の下に隠してから、頻りと燥ぎ始めた。「蟬脱とずるべつたり」を讀んだ後で、佐々がさして不機嫌でもないのが昌造には嬉しかつた。と同時に、友達の色を窺ふやうな己の態度に劇しい不愉快をも感じた。酒がその不愉快に働いて、ガサツな、無神経な醜態を拵へた。――藝妓の一人に佐々の心は惹かれた。然しそれには誰も心附かなかつた。たゞ昌造はそのみさ子と云ふのが一番佐々を厚くもてなすと思つて、微かな嫉妬を感じてゐた。然しその嫉妬に根ざす意地悪は、

た。そつちへ歸つてゐるから、一緒にどこかへ遊びに行くから、誘ひに來いと云ふ手紙を受け取つた昌造は、約束の時間に終點で降りて、夕闇のなかに人待ち顔に立つてゐる「ガラ／＼蛇」を見つけた。彼はこの女相應の、或はそれがまた彼自身の財布にとつても相應の料理屋へでも行つて、飲食ひしたりする氣でゐたが、女は頻りに「活動」へ行かうと云つて強請んだ。その時昌造に、ふとかう云ふ名案が浮んだ。「この女と並んで腰かけながら、金龍館でお京の聲を聞かう、と。この思ひ付きが頗る彼を興がらせたので、快く承知して、二人は電車で淺草へ向つた。所が行つて見ると、生憎金龍館は表がかりの改築中で、折角の名案も駄目になつて了つた。それで他の小屋で、立廻りの多い舊劇の寫眞を我慢しなければならなかつた。暫くして、やつと女に頼むやうにして彼等はそこを出た。けちな鰻屋の入れ込みの二階で、晩い夜食を終る頃には、女はすつかり酔つてゐた。「ちよいと如さん／＼。これで熱く煎れ變へて來たつてえのかい」まだよからうと思つてゐるうちに、ガツくり酔はれたので、昌造は面喰つてゐた。「なんだね、お前さんところの脂ツこい稼業で、

熱ういお出花を飲ませることも知らないなんて……もう一度煎れ變へといで」昌造は厄介なことになつて來たと思ひながら、やつと女を宥めておもてへ連れ出さうとした。入れ込みの相客はジロ／＼二人の顔を眺めて、お互に私語き合つてゐた。「なんだつて？ 六區だつて？ 巫山戯ちやいけないう……その上／＼かう見えたつて」までやられてはと、可笑しくもあり、恥しくもあり、昌造は女を引きずるやうにして往來に出た。實は彼とても可なり酔つてゐたのだが、「ガラ／＼蛇」の景氣に怖れをなして、醒めて了つた。馬道まで來ると、これから吉原へ繰り込むのだ、と云つて、女は何んぞ有めても聽かなかつた。「俵夫ア、二挺だよ」などと叫んだりした。吉原では、彼女は衆目を一身に集めて了つた。着物を前はだかりにして、ヒヨロ／＼よろけて行くのを、妓夫どもはよい慰みものがはいつて來たと、てんで巧な冷罵を呈した。辻卜賣の鼻ツ垂れも、「ヤア女の酔つばらひ／＼」などと嘲し立てて、ゾロ／＼跡からついて歩いた。いかな昌造も、偶へよれなかつた。時々女の酔つばらひは後を振り返つて、昌造の姿が見えればよし、一寸でも見附からないと、委細かまはず大聲で彼の姓

を呼び立てた。昌造が知らん顔をして段々近よつて行くと、見附けて、安心してまたヒヨロ／＼歩いて行く。群集は彼女の視線をたどつて、連れの男を見附け出さうとする。そのなかで昌造も、群集の一人のやうなもの、好きな顔をしてあたりを見廻したりした。——大分遅れてゐた昌造が仲の町の通りに出た時に、「ガラ／＼蛇」は、姿が見えないほどの人立に圍まれてゐた。彼女は辻卜賣の子が五月蝋いと云つて、その一ぱらひの義情家が、女と喧嘩を始めたのだ。昌造は、今度こそ知らん顔をして先へ歸つて了はうと思つたが、それが出来る性分なら、もう夙に淺草で女を撒いてゐたらう。彼は人立を分けてはいつて行つて、女の手首を取ると、黙つてゲンゲン大門の方へ引ツ張り出して來た。「ヤア刑事だ刑事だ」などぶ聲を、後に聞きながら、荒れ狂ふ女を無理に俵に乗せて、低聲で俵夫に所番地を云つて聞せてから、刑事「はやつと肩の荷を下ろしたやうに、人通りの比較的少ない三の輪の方へ歩いて行つて、やがて俵に乗つた。寒い月が天に浮えてゐた。俵は鶯谷の下の方へ出る寂しい町を走つてゐた。それほどの日に遇はされた「ガラ／＼蛇」が、彼には、まださ

せた。昌造はそれを進歩だと考へる、——それも事實である。人はいかなる場合にも幻滅を恐れてはならない。滅しないものは、どうしたつて滅しないのだから、滅するだけのものは惜しげなく、ドン／＼滅しさせるがいゝ……。

社會的に名譽も位置もない「素町人」がなんでもするやうに、（と昌造は或る友達への手紙に書いた。）心の上に君臨するものゝない「素人間」は、またどんなことをも恐れない。何かの役に拵へてない役者の顔を素顔と云ふやうに、近頃の彼は全く「役」のない「素人間」になつたやうな氣がする。早熟な、何んでも知つた風な顔をしたがる少年——無自覺な煩悶を道樂にする青年——漁色家——情人、こんな様々な「役」を了へて、俺は顔を洗つて了つた。その時、かう云ふ「役」が、思ひがけず、心の状態の君主であることを知つた。自由な心の所有者は、「素人間」に限られてゐる。然しその「素人間」がまた今の俺の「役」でないとは云へない、心の君主でないとは云へない。が、兎も角俺は永い間望んでゐた心の自由をやつと近ごろ得たやうな氣がする。所がそれは、言葉を換へて云ふなら、「自棄的な所のない放埒」と云つてもよいやうな

ものだつた。俺に於ては、それは淋しい空虚に等しかつた。俺はこれに馴れなければならぬのだらうか。この行手に本當の大きな自由が待つてゐるのだらうか……。

（一週間ほどたつてからの手紙に）

我々は「自由」と云ふものを握むことが出来ようか。他人との對立に於てでなく、自分一人の、絶對の自由と云ふものを。

自由とは畢竟「意識の自由」であることは論を俟たない。人はごく不自由な自分を自由であると意識する自由も、どんな自由な自分を不自由であると意識する自由も、決して失ふことはない。要はたゞその「意識」が外的な何物かに支配されるか否かに歸する。絶對の自由とは開放された意識である。外的な何物をも含まない「人格的意識」——もつと碎いて云ふなら「自然な心」「素な心」それだけが自由だ。僕は近頃かう思つて、爲たいことを爲、思ひたいことを思ひ、全くなんの目標もなく、批判もなく暮してゐる。が、然しどうも淋しい。かう云ふのが、昌造の「成熟した」「自由な心」の哲學だつた。彼の心のなかに「建立」された聲かるべき筈の哲學だつた。——それは丁度、輸入される時に少々損じた上に、日本人の性情には

ピタリとは合ひ惜い「自然主義」と云ふものが、青年の心に種々な形をとつて働き始める時代だつた。——哲學はそれでよい。所で彼の所謂「自由な生活」とはどんなものだつたらう。

翌年の二月頃、昌造は汚い小さな待合の長火鉢の置いてある部屋で、連れの友達が二階から降りて来るのを待つて居た。そこに友達の呼んだ女だけが先に降りて来て、一寸にさんに挨拶をして歸つて行つた。——三時時間後に、友達と別れてから、彼はその近所の或る他の待合にゐた。

「フム、貴方だつたの。よくない人ね、貴方は」先刻友達と呼んだ女が座敷にはいつて來てから云つた。昌造はニヤリ／＼笑つてゐた。

「お馴染かい」

「あの方と……いゝえ」

「何、お馴染だつて構やしないがね。……さつきお前が歸る所を見初めたと云ふわけだ」

歸る時分には、昌造はこの色白で小肥な、女學生上りのスレツカラシを、一ガラ／＼蛇と字名して、それからまた一週間もすると、すぐ交通などを始めたらしい。

この女の生家は江戸川の終點の近くにあつ



腹なので、彼等は構はず鐵道線路の土手へ登つた。そこを横切ればすぐ田町の通りに下りられると思つてゐたが、上つて見ると、土手と向う側の往來との間には、コンクリートの壁か何か工事申らしく、その上案外往來は低かつた。

「こりや下りられない。廻らうか」

「なに、線路についてもうちつと行つてみよう。

大抵下りられるよ」

彼等は新橋の方へ向つて線路のわきを歩いて行つた。そこへ前の方から大地を震動させて下り列車が來た。

「危いよ」

「大丈夫だ。こいつは氣違ひぢやないから」

自動車のことを、ケンノン性な牧野が「氣違ひ電車」と呼んでゐた。電車も怖いが、自動車と來たら、いつ何時どこへどう逃れて來るかわからないのだから、これほど怖いものはない、とよくその友達が云つてゐた。それでも彼等は出来るだけ線路から離れて、土手ぎはの草を踏むくらゐ、端を歩いてゐた。下りの列車は彼等の歩いてゐる側からは一番向うのはづれの線路の上を、轟轟と凄じい響をたてゝ走つて行く。——昌造

のつい目の前から、浴衣がけの佐々の、薄ら白い後姿が、パツと消えてなくなつた。途端に

昌造は、非常な音響と、吹きよるめかされる程の空氣の攪亂に會つた。熱く感じるやうな、焦臭い風が裾をあふる。すぐ頭の上を四角な明るいものがチカ／＼チカツと飛び過ぎる。次の瞬間に、昌造は、目の前に山の手電車の岡のやうに大きな後姿と、赤いランプの光を見る。恐らく三秒よりも短い間にこれだけのことを感覺する一方では、佐々が鞠のやうに五六間さきへケシ飛んで行く瞬間の姿をも見た。そしてその次の瞬間には、切腹した人のやうにうツぶしてゐる佐々を後から抱き起してゐる己を感じた。額から鼻柱の横へ流れてゐる血を見た。目はあいてゐる……。

「大丈夫か」

「大丈夫だ」

怪我人の聲は思つたよりシツカリしてゐて、何か自ら嘲笑ふやうな調子さへあつた。けれども昌造は、「こりや佐々は死ぬかも知れないぞ」と思つた。どうして死ぬのだらう」と自問して、その時初めて、佐々が山の手電車に觸れたと云ふ事實をはつきり意識した。——もう一筋の血が唇から顎へ流れて來た。これが血へドなら

助からない！

「シツカリしてくれ！」

「大丈夫だ。大丈夫だ」佐々は一言づつ確めるやうに云つた。

そこは、往き道に彼等も滑つた三丈ほどある陸橋の天端で、佐々の膝頭から一尺とは隔てない所から、下の往來へ、石垣の高い絶壁になつてゐた。そのつい鼻の下を、涼みの客がゾロゾロ歩いてゐる。それが、彼等とは交渉を許されない他界の人々のやうに、こつちを振り仰ぎながらも、立ち停りも慌てもせずに、平調な足なみでゾロ／＼動いてゐる——昌造は心細くなつて來た。

「誰か來て下さい。大變です」と彼は幾度も呼んだ。谷の底で「どうしました」と云ふ聲が聞えた。

「誰か早く來て下さい」

その間佐々は、膝頭で立つて、前こびみになつたまゝ一言も口を利かなかつた。昌造は後から、その、ガツクリ前こびみにならうとする頭を頭で支へるやうにして、脇の下から差し込んだ兩腕でシツカリと抱いて、指を佐々の乳のあたりで組み合せてゐた。その昌造の指の上にまた佐々の手が軽く載せてあつた。そこには、生温い、サラ／＼に乾いた、アレ性の、いつも通りの佐々の掌の感覺があつた。それがいく



ういやではなかつた。何か哀れなやうな愛憎さへ感じた。——行手に、灯をとられた提燈を點火さうとしてゐる俵があつた。梶棒を下ろさずに俵の上には「ガラ／＼蛇」がいゝ心持に寝入つてゐるらしく、ぐツたりと首を曲げてゐた。「オイ、氣をつけてやつとくれよ」昌造は俵の上から聲をかけて行き過ぎようとした。「なアんだ。貴方だね。わかつてらア」と女は急に顔を振り上げた。その顔にはいつばい月がさして、蒼白く美しく見えた。

その晩二時頃に、若い泥酔してゐる女を、知れ惜い路次の奥の、小さな汚い家へ送り附けた二人の俵夫は、家内には彼女と妹らしい娘との二人きりで、男や大人があぬいことを確めた時に「わつちらも、これから仲まで歸りや夜が明けちまひますから、どこの隅でもよござんさア、一晚泊めてやつておくんさいな」と芝居の科白のやうな口を利いた。俵は路次の奥に箱と月光とを浴びながら朝までそこにあつた。

露骨この上なしの「ガラ／＼蛇」からの話を聞かされた時には、有鑿「自由な心」の所有者も傾け返つて了つた。

再び夏が環つて來てからのことだつた。その時分には既に以前のやうな友誼に復してゐた昌造と佐々とは、嘗て一週間のうち少くも二日まではさうしたやうに、一緒に連れだつてあてもなく街を散歩してから、その年納涼のために公開された御臺場の一つへ渡つて見ようと思ふことになつて、芝浦の埋立地の海岸に立つた。舊曆十五日の月が上りかゝつてゐたが、いかにも夏らしく、夢のやうに足もとが暗かつた。ボウボウと、締りない、生温かく濕つた風が肌にあつて、快くはなかつた。それで、御臺場に渡す船の出る所はちよつと知れもしなかつたが、乗り氣になつて探してみる氣もなくなつて了つた。堤防近く舳つてある般の、高い和船の舳から暗い海の水へドブン／＼と飛び込んでゐる若者たちの呑氣な夜の水浴が、元來かう云ふことの大好きな昌造にさへ妙に危づかしと思はれるやうな晩だつた。それは、耳袋を鳴らしてボウ／＼と吹いて行く、日照り續きの海上で温められた風や、浮雲が流れる度に息をつくやうに明るくなつたり暗くなつたりする寢惚けた夏の月光のせりでもあつたらう。いくらか豫期して來たやうな、爽かな涼味とは丁度正反對と云つてもいいやうな、怠けた、或はそれ以上

不氣味な感じを受けながら、二人は下駄を揃へてぬいだ上へ腰を下ろして、暗い水平線を望んでゐた。潮の匂ひに混つて、腐つた魚の匂ひもして來た。それが、湯のやうになつた海の上へ、白い腹を出して浮んだ死魚の體からでも匂つて來るやうな心持をさせた。廣々とした埋立地の草原を横きつて、彼等はその／＼歸りかけた。行き道には心附かなかつた小屋がけの素人相撲の前へ出た。彼等はそこにはいつて、猿股の上から練金巾の襷など締めた逞しい青年たちを、薄らいカンテラの光の下に眺めた。好惡の劇しい彼等は、數の知れない力士たちのなかから、すぐに最良々々を見つけて出した。規定の時間が來て、木戸番の爺に追ひ立てられるやうにして、最後に彼等がそこを出た時には、いくらか元氣を回復したやうな氣がした。いつか月は天心に昇つて、青く澄んでゐた。棧橋のやうな危づかしい橋を一つ渡つてから、安普請の小料理屋や小待合のゴチャ／＼と建て込んだ一廓へ、例の好奇心から折れ込んではいつた。その道は湯屋の前へ出て行き止つて了つた。片側は石炭燐がガス／＼傾れ落ちて來る暗い傾斜で、上には鐵道のシグナルが雲を突くやうに立つてゐた。あと戻りをするのが業

「君等逃げて了つちやいかんぢやアないか」と云つて巡查が近よつて来た。昌造は腹を立て、「逃げやしないが、何か用があるのか」と喰つてかゝつた。兎も角交番まで来いと云ふので、佐佐の俣夫に田町の通りをソロ／＼先へ行くやうに云ひつけて置いて、昌造は交番へつた。いつの間にかあたりは大變な人立だつた。巡查は彼等二人の姓名職業住所などを訊かうとした。昌造は人立のなかでそれを口にしたくはなかつたので、自分の名刺に佐々の姓名や番地を書き添へて、精しいことはこれからU病院に行くから、そつちに調べに來いと云つて俣に乗つた。怪我人の計文で、ソロ／＼と引いて行く俣は往來の視線を集めた。濕つた手拭が血を吸つて、緒色に染つてゐるので、尙更人目を惹き易かつた。で、昌造は暗い裏通の方を行かせた。そしてU病院——彼の親戚の男が外科の主任をしてゐるそのU病院へ行かうと佐々に告げた。

「U病院で不愉快なことはないか」佐々がかう云つた。昌造にはその意味が解らなかつた。

「何故? ……ないだらう?」

「儘か俺は、この頃U病院に通つてゐるんぢやないのか」

「ウン」と答へはしたが、昌造はギョツとした。

そんなことを人に確かめるとは……。

「そんなら矢ッ張りK病院にして貰はう」

佐々はその時分K病院で治療を受けてゐた病氣を、友達の種類などに知られたくないと、それを氣にしてゐるのだつた。

「でも、大變遠いよ」

「タクシイを云つて貰つたらすぐだ」

「それでもいいが、U病院ではいやかい」

「不愉快なことがありさうだ。我儘を云つてすまないが、矢ッ張りK病院にして貰はう」

そこで、新橋のタクシイへ電話をかけて、彼等の行く道を逆に迎ひに來させようと云ふことにして、昌造の俣だけ先に自動電話のある街角まで走らせた。種々の名で引いてみたが、氣が急いてゐるせゐか、どうしても番號が知れないので、昌造がひとりでワク／＼してゐる所へ、もう佐々の俣が追ひついて來た。その由を告げながら、自動電話の灯で佐々の顔を見ると、着さめてゐるだが、瞳孔が開いたとはかう云ふのを云ふのだらうと思はれるやうな、生氣のない、涙い目付をして一つの所を見詰めてゐた。

昌造はこりやいけな思つた。

「U病院で我慢して貰はう。それだともうすぐなんだから」

「さうか、ぢやアさうしやう 案内佐々様」

昌造はU病院に電話で知らせた。ことにして、佐々の俣を先にそこへ向はせた。電話で大分手間取つて、彼が再び俣に乗つた時には、急にゐても立つてもゐられないやうな不安に襲はれてゐた。「大急ぎ——」と彼は俣の上でぢだんだを踏んだ。俣夫も、人通りの少ない公園を一生懸命に走つてくれた。然しいくら急いでも、行手に佐々の俣が見えなかつた。昌造は目を瞑りながら、兩手に力を込めて、手拭を絞るやうに、ステッキをギリ／＼振り廻してゐた。濡れた佐々の帽子で籠をはめられたやうに堅く締めつけられてゐる彼の頭は、なかがキーン／＼と鳴つてゐるやうな氣がした。

「佐々は死ぬかも知れない!」

四五年前に昌造は、オオガスト・ジョンとオスボルの話を聞いて、佐々を殺さうと思つたことはあつた。しかし、佐々が死ぬかも知れない!と云ふ心持に面接したのはこれが初めてだつた。それは全く有り得べからざる、考へても考へられないやうなことだつた。その言葉には意味があるやうでないやうだつた。

佐々は死ぬかも知れない!

いくら思つても、恐ろしくも、悲しくも、嬉し

らか昌造に勇氣を興へた。「大丈夫だらう」とも思つた。そして急に「兎に角こりや大變なことが出来て了つた」と初めてさう感じた。どこからともなく彼等の周囲には人々が上つて來た。角燈を持つた線路工夫もゐた。

「どうしました」

「電車です。……大變です」

「兎に角往來まで下ろさなくつちやいけない。お待ち」かう云つて手を藉しに寄つて來た中年の男は、ヒドく酒の匂ひをさせてゐた。

「貴方はいけない」昌造はその男の手を拂ひのけてあたりを見廻した。湯屋の歸りらしく、手拭を下げた屈強の若者が目にはいつた。「さつきの相撲とりの一人だナ」と彼は心丈夫に思ひながら、

「貴方すみませんが手を藉してくれませんか」その若者は、人々がかう云ふ場合に得て陥り易い、義に勇むと云ふ風な氣負ひ立つた容子もなく、無愛想に近よつて來た。昌造はそれも氣に入つて、その若者に對しては無遠慮になつてもいいやうな心持で、さげてゐた手拭を貰ひ受けた。それで佐々の頭の後鉢巻をした。濡手拭はググツと堅く締つた。髪の毛のなかで、傷の在かは知れないが、頸額の動脈を締めつけて

置いたら、いくら出血が防げるだらうと。

そこへ白服の巡査が來て、「醫者はまだないか」と云つた。その時佐々が痙攣を立てたやうな聲で、

「警察官なんぞに來て貰はなくつてもいい。それよか早くどこか病院に連れてつて貰はう」

昌造は、自分がすつかり顛倒してゐるのに、怪我人の方が却つてはつきりこんな思慮を保つてゐるのを輕蔑しく、心丈夫に思つた。

「さうか／＼。だけど……大丈夫か」

氣だけはしつかりしてゐても、案外途中で……と、それも案じられるので、昌造はたのめない當人にそれを確める。何しろ傷の程度がちつとも分らないので、彼の不安は手遅れと云ふ點にあつた。それには、若し手遅れになつたら申請がない、と云ふ自分を護る自己本位な考へ方が、慥に混つてゐた。

「大丈夫だ」佐々は受け合ふやうにしつかりと答へた。

「それぢやア醫者はいりませんか、大急ぎで車を二臺云つてくれませんか」

巡査は、昌造にものを云ひつけられたこと、ヒドく感情を害したらしく、そんなことは自分でしろ」と云ふやうな言葉を殘して去つた。

兎に角往來へ下ろすことになつて、湯歸りの若者が前に廻つて背負つた。昌造が後から助け載せようとする、突然怪我人か、「痛い／＼」と叫んだ。見ると昔で浴衣が五六寸ほど二ヶ所破れてゐた。彼の心はまた暗くなつた。

自分のステッキと、丁度持つて歩いてゐた罪と罰の英譯本と、佐々の下駄の片一方とを拾つて、昌造は人々のあとから危つかしい所を田町の往來へ下りた。誰が呼んで來てくれたのか、俥が二臺待つてゐた。

「一緒に乘らなくつてもいいか。一人で大丈夫か」

「大丈夫だ」

佐々は俥の腰かけの端の所へ一寸腰をかけて、前こびみに窮屈さうにしてゐるので、昌造がうまく掛け直させようとする、と體を延ばすと背が痛いのだと云つた。そこに、ツク濡れになつた佐々の麥莖帽や、下駄の片一方を持つて來てくれた人があつた。昌造は先刻拾つた方々の下駄を、こんなもの片ツつぽだけ持つてつてとる氣だこと心附いて、どこかにまた捨て、來たのだ。帽子は自分の下から二重に被つたが、下駄は目立たないやうにそつとまた捨て、下駄。もう出かけようとしてゐた時だつた。



# 年譜

## 明治二十一年(戊子)

七月十四日、横濱市月岡町なる横濱税關局長官舎に、有島武の四男として生れ、英夫と命名。誕生に先立つこと二日、母幸子の里なる山内家の當主英郎、任地大阪に於て死亡せしにより、出生と同時に山内姓を襲ふこととなりたるも、養家の祖母と共に依然有島家に於て養育せらる。

武郎、愛子、壬生馬、志摩子、隆三の三兄、二姉あり。

## 明治二十六年

六月、有島一家と共に鎌倉に移る。學齡に達せしも、田舎の故を以て入學せず、専ら家母によりて同程度の學業を自修せしめられたり。

## 明治二十七年

十一月、更に東京に移り、翌年一月より赤阪區仲ノ町小學校に通學す。

末弟行郎生る。

## 明治二十九年

四月、麴町區下六番町に移ると共に、番町小學校に轉じ、十二月、更に學習院に入學、初等學年三年生たり。

## 明治三十二年

六月、山内家唯一の長老たりし祖母靜子病歿す。父母はいませしかど、この祖母の鍾愛は殊に深く、世に謂ふ「おばあさん子」の觀ありしに、一朝この事に會し、哀愁極めて切なるものありき。

## 明治三十四年

學習院中等學科に編入せらる。既にこの頃より文藝作品に親しみしは、家兄、武郎、壬生馬の感化に負ふところ渺なからざりしなり。

## 明治三十九年

學習院高等學科に移る。校友會雜誌の編輯部

委員たりしことあり。

文學書の閱讀と觀劇とのために、學業を擱ちしかば、在學中、成績は常に甚だ舉らざりき。

## 明治四十一年

九月より翌年同月に至る一年間、竹馬の友たの園池公致、兒島喜久雄、田中治之助、正親町實慶等と共に廻覽雜誌「麥」を月二回編輯し、創作の初步を修行す。武者小路實篤、志賀直哉等に負ふ所制しとせず。

## 明治四十二年

東京帝國大學文科英文科に入學せしも、聽講月餘にして倦み、やがて退學す。折から、家母より、山内家に屬する資産、ひと一人が、慥しやかに一生を送るに足るものあるを告げられしかば、茲に意を決し、畢て文藝作家たらんことを期するに至れり。これより先、中學五六年生時代に、次兄壬生馬の、身を畫道に投ぜんとするを知りて甚大の刺激をうけしも、意思弱き己を省み、生活苦のために文品の卑しからんことを懼るゝの故、自は實業家として立ち、外面より藝術のために



くも、尙更ら可笑しくも、——どんな感情も一つも浮び上つて来なかつた。そのくせ彼は、嘗て自分が彼を殺さうと思つたことも知つてゐた。さうかと思ふと、佐々の遺稿のあとにでも書くやうな、追憶の文章の突飛な一部分があり／＼とあたまたに浮んで来た。佐々が死ねば彼は非常に悲むだらう、と思はれた。しかし、死ぬかもしれない！と云ふ事實に伴ふ感情は、あるやうで、淡淡として霧のやうに取りとめなくあたまのなかに擴がつてゐた。

その晩昌造は、怪我人の枕もとで一晩あかした。醫者は、傷としては生命に關するやうな重傷では勿論ないが、右の肩胛骨の下、打撲傷から何か内臓に餘病を惹き起せば……と危んてゐた。その上佐々は、全く記憶を失つて了つた。手術を終つて病室の寢床に横たへられた時に、彼はヒドク充奮して、頬を赤くして、機嫌よくニコ／＼と笑つてゐた。さうして、「一體俺はどうしたんだい」と昌造に尋ねた。あらましのことを話して聞かすと、「さうか、電車でやられたのかい。さうかなア、随分間抜けなことをしたもんだなア」と笑つた。それから、R病院に通つてゐるのかどうかを確

めて、「俺はあの病氣が悪くなつたんだと思つてた」と云つた。「俺はこの頃何か仕事をしてゐたのかね」と訊く、長篇を書きかけてゐる由を答へると、「さうかなア、ちつとも覺えてゐないなア、どんなのだい。君がR市へ行つた時分のことから書き出してさ」ア、さうか、俺はR市へ行つたのかね」と、こゝらまで来ると、また、「一體俺はどうしたんだ」と初めの質問にあと戻りして、殆ど一つも狂はずに同じ順序で同じことを一順尋ねて了ふと、また最初の質問にすぐ戻つて行く。そして、それほど記憶を失つて了つたと云ふことには、自分で全く何等の不安をも感じてゐないらしい。初めのうち昌造は、「こりや悲惨なことになるつた」と思つてゐたが、一晩中少くも二十通以上同じ返事を繰り返させられたので、仕舞には五月蠅く、少し癪癪さへ立つて来た。彼も充奮してゐてとても寝られさうもなかつたのに、故意と横になつて目をふさいで了つた。それにその記憶力を失つたことは、一時的の現象だらうと思はれたから。翌の日午近く、昌造は血に染つた羽織や「罪と罰」などを風呂敷包みにして、炎天に寝不足な眉を擡めながらうちへ向つた。その時分には、佐々はスヤ／＼眠つてゐた。歸りしな外科醫の

控室で醫者に確め得た所では、もう十中八九心配のないことも解つた。

——佐々も助かつた！

から思ふと昌造は、何かもの足らない氣がした。彼は吃驚して「俺は……ほんとに果れ返つた人間だ！」と思ふ。が、然し彼は心の底では安心してゐた。「俺がしんからそんな男なら、ゆうべあんなに夢中になつて世話をしやアしない！」

佐々の怪我はドン／＼快くなつて行つた。昌造は見舞に行つてよく佐々の母親や兄弟たちと一緒にゐた。この上もなく佐々を愛してゐる祖母が、孫の枕もとで、溢れるやうな喜びに老つた體を震はしてゐるのを見た時には、昌造は不思議な不安を感じた。「俺は佐々の生死よりも、この人たちの喜びが見たかつたのではなかつたらうか。若しこのお婆さんが、喜びの代りに悲みで震へてゐたとしたら……」老祖母は繰り返し／＼昌造に禮を云つた。さうされると、昌造も、何か自分のしたことが、特別善いことでもあつたやうな氣がして来て、嬉しさにニコ／＼してゐた。

(大正五年六月作)

き結婚し出版。

一月、長男を得、洋一と命名す。

大正七年

『一日惚』『刑事の家』『病床記』『子ごろし』

『最後の一手前』のもの『けむり』等を創る。

七月、選集『不幸な偶然』出版。

二月、劇甚なる丹毒に侵され、危篤の状態にあること数日なり。

七月、次男、誠郎生る。

十二月晦日、四谷區右京町の新居に移る。

大正八年

五月より、時事新報紙上に長篇『今年竹』

を發表せしめ、休載多く、百餘回に及んで遂に中斷せらる。

『慾』『強氣弱氣』『毒草』『彼と小娘』『雪の夜話』等はこの年の作なり。

五月、選集『我』七月、選集『未明』九月、第三短篇集『慾』出版。

十一月より、吉井勇、久米正雄、田中純と共に雑誌『人間』を興す。

十二月、次女、瑠璃子を得たり。

大正九年

『愛の鞭打』『夜櫻』『父親』『桐畑』『靴』『川瀬の音』等十二篇を作す。

五月、選集『強氣弱氣』八月、第四短篇集『毒草』九月、選集『善心悪心』を出版。

大正十年

『改造』誌上に前年より連載し來れる『風』を完結し、他に『或る老婦の哲學』『夜香』等を創る。

尙、中村吉右衛門のために處女脚本『新橋』を草し、六月、新富座に上演す。

五月、長篇『桐畑』出版。

六月、號を以て『人間』を廢刊す。

九月より、逗子新街に移り住む。

大正十一年

『甘酒』『おせつかい』『直輔の夢』の三中篇の他、『裁紙刀』『親』『暗い夜空』等の短篇あり。

三月、選集『銀二郎の片腕』四月、第五短篇集『幸福人』選集『勝負』『彼と小娘』

五月、中篇『潮風』九月、感想隨筆『赤き机に凭りて』を出版。

六月、三男、湘三生る。

大正十二年

前年十二月二十六日より、時事新報に連載せる『多情佛心』震災のために一時中絶すと雖も、遂に大晦日に及んで約三百回二千枚に垂とするの長篇となれり。他に『四葉の首飾』『火蛾』『後滿潮』と改題の二中篇、『の巣』『踏切』『橋』等の短篇小説、及び戯曲『平凡長篇』あり。

一月、中篇『直輔の夢』七月、中篇『おせつかい』、第六短篇集『父親』出版。

六月、長兄、武郎を亡ふ。

震災にて逗子の假寓崩壊、上京して處々轉轉せる後、麹町下六番町に一時の住宅を得。

大正十三年

六月より十二月に互り、大阪毎日、東京日日の兩紙上に『附設』後に『凡大愛』と改題を連載。

『百年の戀』『雨に吹く花』『大臣の書飯』『不貞』『仕合な藤七』等のほか、戯曲『愛憎不二』、正體『嫉妬』あり。

一月、長篇『四葉の首飾』五月、長篇『多情佛心』前篇、六月、感想隨筆『白龍潭漫記』

八月、長篇『多情佛心』後篇、九月、第七

盡瘁せんと志しむたりしなり。

### 明治四十三年

四月、武者小路實篤、志賀直哉、木下利玄等の「望野」、荻野二十一、柳宗悅等の「桃園」、並に前記「夢」の三廻覽雜誌の同人相集り、これに武郎、壬生馬、長與善郎、山脇信徳等の新同人を加へて「白樺」を創刊す。年少にして公に文を草すること、父の允すところたらず、爲に里見弾なる筆名に匿れて、短篇、お民さん等を以て「白樺」誌上に初見参す。時に二十三歳なり。

### 明治四十四年

北原白秋に囑せられて「入間川」を「ザンボア」に寄す。これ、所謂「よその雑誌」に執筆せる最初なり。尙、當時「未明」「天探女」の話「河岸のかへり」「友達の見舞」「易い追儼」等の習作的短篇あり。

### 明治四十五年 大正元年

十一月、「白樺」に發表せる『手紙』は當時やゝ自信ありし作なり。

### 大正二年

三月より、「白樺」誌上に、最初の長篇「君と私」を連載せしも、十一月號の原稿、印刷所に紛失し、再び稿を續ぐの勇氣なく、遂に未完のまゝ擱筆す。

この年十月より放浪の旅に上り、鹿児、大坂、南地の或る藝者の屋形(自宅)に寄寓す。素材を同家の老母より得たる「實川延童の死」を「河豚」と改題は、稿を改むること四度、出来ず、意に滿ちたり。

### 大正三年

夏、一時歸京しゐたる時、武者小路實篤を通じて、夏目漱石の依頼をうけ、「東京朝日新聞」に「母と子」を連載し、畢て原稿料を得。

### 大正四年

四月、文壇登龍門の稱ありし「中央公論」に、『晚い初恋』を發表せしより、續いて六月「太陽」の「箱根行」、十月「新小説」の「夏繪」と作品、漸にして市價を生ずるに至る。「白樺」所載の「勝負」も亦苦心の作なり。

十二月、大阪にて寄寓しゐたる山中家の女、まさを携へて歸京し、父母の允を強請し

て遂に娶と定む。依つて有馬家と別れて、麹町五丁目宮通りに一戸を構へたり。これより先、七月、まさによりて長女を得、夏繪と命名せしも、五十日を經ずして夭折す。

### 大正五年

二月、「中央公論」に標題を附せざる小説を發表し、新進作家として破面たる地歩を占む。「善心悪心」「假あれ」「女按摩」「妻を買ふ經驗」等は是れた原稿等いづれも同年中世評を得たる作なり。

十一月、泉鏡花の提議によりて、最初の短篇集「善心悪心」を春陽堂より上梓することを得たり。

七月、麹町區山元町一丁目に轉居。

八月、嫂、安子を、十二月、父、武を亡ふ。

### 大正六年

この一年中の作品は、銀二郎の片腕「三人の弟子」・「惡しき結婚」ひえもととり、或る年の初夏に「幸福人」・「不幸な偶然」・「大火」等十六篇なり。

五月、第二短篇集「三人の弟子」、選集「恐し

佐藤春夫集



短篇集「雨に咲く花」を出版。  
四月、鎌倉蔵屋敷に假居を得て移り住む。

大正十四年

『石門の奥に』『伊豫すだれ』『夢みたいな話』

『縁談箋』『オード・キニン』『蚊やり』或る片輪者『ネクタイ』等の短篇小説、並に、『正直次郎』『眼鏡』の二戯曲成る。

五月、長篇『凡夫愛』八月、『文藝管見』十月、長篇『潮満』現代小説全集第七篇『里見彈集』十二月、第八短篇集『縁談箋』を出版。

六月、四男、靜夫を擧ぐ。

大正十五年 昭和元年

『乾涙を辟く』その人『最初の泊』『小暴君』等の短篇、『たのむ』『白扇の下』『小暴君』『オンネコタン』等の戯曲のほか、『婦人公論』に一年連載の『大道無門』と『苦樂』を刊行、以來滿三年間連載の『今年竹』の二長篇を完成す。

五月、戯曲『始心』、『舞集』をんな』を出版。

十二月、鎌倉西御門に住宅を構へ移る。

昭和二年

『私は見た』『陰』『夏籠』川はまり、等の短

篇『戯曲』『紐』、ラヂオドラマ『或る夫婦』のほか、『改造』二月號より『善魔』を、七月より『報知新聞』に『蛇咬毒』を、共に連載中。  
三月、長篇『大道無門』を上梓す。

### 角力をとつた記憶

晩年の五六年はさうでもなかつたが、私が覺えてからそれまでの父と云ふ人は、ひどく忙しさうで、めつたにうちにはゐなかつた。朝われ／＼が起きる時分には、冬だと、禿頭がほんの少しばかり見えるか見えないほど、スッポリ夜具をかぶつて了つて、ゲウ／＼と可なり大きな鼻をかいて寝てゐた。それツきりこつちは學校へ行つて了ふと、よる私たちの寝る前に歸つて來ることは稀だつた。だから、三日も、四日も、禿のさきだけしか見ないで過ごすことが多かつた。たまにうちにゐると、客の絶えまがなかつた。絶えまがあると小さな手帳に、短くなつた赤鉛筆で、クシヤ／＼に何やら書いてゐた。

そんなわけで、私は、まるで、父の側へよつて弄具にされたり、甘やかされたり、一緒に遊んだりした憶えがない。たつた一度、六つ

か七つの頃、夏、鎌倉の別荘の庭で、兄弟たちがよつて角力とつてゐると、なんと思つたのか、父がふんどし一つになつて飛び出して来て、「さうこい」と構へたのだが、年の順にだんだん轉がされて、やがて私の番が来て、一生懸命に飛びかゝつた時の嬉しさを、今もつて忘れない。あんまり嬉しうと涙が出るものだと思ふ経験を、その時に初めて知つた。前にぶつたやうなわけだつたから、その時分私は、父がさう好きだつた筈はないのだけれど、それでも、なんとも云へず嬉しかつたのは事實だ。

私の子供たちは、このごろそろ／＼丁度いい弄具になつて来て、うちにさへゐれば、晩飯後など、差し上げたり、振り廻したり、喧嘩ごつこをしたりして相手になつてゐるが、嬉しさうには遊ひないけれど、とても涙がにじみ出るほどではなさうだ。私の父は、少しづつ、なしくづしに嬉しがらせてゐるので、父のは、そいつを、いつべんに纏めて、私にさづけてくれたわけだらう。親子でなければ通用しない方法だ。

『白藤夢漫記』の「亡父の五年祭」より

改作 田園の憂鬱

或は 病める 薔薇

I dwell alone

In a world of morn,

And my soul was a stagnant tide.

Elger Allan Poe.

私は、呻吟の世界で

ひとりて住んで居た。

私の靈は澱み腐れた潮であつた。

エドガア アラン ポー

その家が、今、彼の日の前へ現れて來た。

初めのうちは、大變な元氣で砂ぼこりを上げ

ながら、主人の後になり前になりして、飛びまは

り纏はりついて居た彼の二足の犬が、やうやう

柔順になつて、彼のうしろに、二足並んで、そ

ろ隨いて來るやうになつた頃である。高い木

立の下を、路がぐつと大きく曲つた時に、

「ああやつと來ましたよ」

と言ひながら、彼等の案内者である緒毛の太

つちよの女が、片手で日にやけた額から滴り

落ちる汗を、汚れた手拭で拭ひながら、別の片

手では、彼等の行く手の方を指し示した。男の

やうに太いその指の尖を傳うて、彼等の瞳の落

ちたところには、黒っぽい深緑のなかに埋もれ

て、目眩しいそれはそはした夏の朝の光のなか

で、鈍色にどつしりと或る落着きをもつて光つ

て居るささやかな葎茸の屋根があつた。

それが彼のこの家を見た最初の機會であつ

た。彼と彼の妻とは、その時、各この草屋根

の上にさまようて居た彼等の瞳を、互に相手

のそのの上に向けて、瞳と瞳とで會話をし

た――

「いい家のやうな豫感がある」

「ええ私もさう思ふの」

その草屋根を見つめながら歩いた。この家な

らば、何日か遠い以前にでも、夢にであるか、  
幻にであるか、それとも疾走する汽車の窓か  
らでもあつたか、何かで一度見たことがある  
やうにも彼は思つた。その草屋根を焦點として  
の視野は、實際、何處でも見出されさうな、  
平凡な田舎の横顔であつた。而も、それが却つ  
て今の彼の心をひきつけた。今の彼の憧れが  
そんなところにあつたからである。さうして、  
彼がこの地方を自分の住家に擇んだのも、亦こ  
の理由からに外ならなかつた。

廣い武藏野が既にその南端になつて盡きると

ころ、それが漸くに山國の地勢に入らうとする

變化――言はば山脈からの微かな餘情を湛へた

エビロオグであり、やがて大きな野原への波打

つプロロオグでもあるこれ等の小さな丘は、

日のとどろかぎり、北處にも其處にも起伏して、

それが形造るつまらぬ風景の間を縫うて、一

筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街に

北から南へ通じて居るあたりに、その道に沿う

て一つの草深い農村があり、幾つかの草下つた

草屋根があつた。それは王と王と王との大きな

都市と六七里の峰に於いて、譬へば三つの劇

しい魔風の境目に出来た眞のやうに、歴史

からは置きつ放しにされ、世界からは忘れられ、  
文明からは押流されて、しよんぱりと置かれて

僕を彷徨者であるらしい。僕の道は  
遙遙としてゐる。時に南を向ひ時に北を  
指じ。又東又西。人々は僕の鼻の匂いと  
ころが半に遠いのを怪しむのを知れぬ。し  
僕の間は一路である。さうして僕は歩  
みながら花をつんど。雞犬の聲あると  
あらわれざる犬を呼んで口笛を吹いた。人々  
は行くてのふい散る者だといふ僕を思つて居  
るらしい。

佐々木三郎

た。或は、その小さな閃きが魚の鱗のやうに重り合つて居るところもあつた。涼しい風が低く吹いて水の面を滑る時には、其處は細長い瞬間的な銀箔であつた、薄だの、もう夙くにあの情人にものを語へるやうなセンチメンタルな白い小さい花を失つた野茨のひとかたまりの蔭だの、その外、名もない併しそれぞれの花や實を持つ草や灌木が、渠の兩側から茂り合ひかぶさりかかると、水はそれらの草のトンネルをくぐつた。さうしてその影を黒く涼しく浮べては、ゆらゆらと流れ去つた。或る時には、水はゆつたりと流れ流んだ。それは旅人が自分ゝの來た方をふりかへつて佇むのに似て居た。そんな時には土耳其玉のやうな夏の午前の空を、土耳其玉色に——或は側面から透して見た玻璃板の色に、映して居るのであつた。快活な蜻蛉は流れと微風とに逆行して、水の面とすれすれに身軽く滑走し、時々その尾を水にひたして卵を其處に産みつけて居た。その蜻蛉は微風に乘つて、しばらくの間は彼等と同じ方向へ彼等と同じほどの速さで、一行を追ふやうに従うて居たが、何かの泊子について空さまに高く舞ひ上つた。彼は水を見、また空を見た。その蜻蛉を呼びかけて祝福したいやうな子供らしい氣輕

さが、自分の心に湧き出るのは彼は知つた。さうしてこの楽しい流れが、あの家の前を流れて居るであらうことを想ふのが、彼にはうれしかつた。

刷しい暑さは苦しい、楽しい、と表現しようとして木の葉の一枚一枚が寶玉の一斷面のやうに輝くと、それらの下から蟬は焼かれて居るやうに呻いた。灼けた太陽は、空の真中近く昇つて來て居た。併し、彼の妻は、暑さをさほどには感じなかつた。併し、彼の妻から暑さを防いだものは、その頭の上の紫陽花色に紫陽花の刺繡のあるバラソル——貧しい婦人の天蓋——ではなかつた。それは彼の女の物思ひであつた。彼の女は今歩きながら考へ耽つて居る、暑さを身に感じる閑もないほど。彼の女は考へた——さうすれば今間借りをして居る寺のあの西日のいわつと射し込む一室から涼しいところへ脱れられる。それよりもあの下卑た俗惡な慾張りの口うるさい梵妻の近くから脱れられる。さうして、靜に、涼しく、二人は二人して、言ひたい事だけは言ひ、言ひたくない事は一切言はずに暮したい住みたい。さうすれば、風のやうに捕捉し難い海のやうに敏感すぎるこの人の心持も氣分も少しは落着くことであらう。あれほどの

意氣込みで田舎を慣れて來ながら、僅ながらもわざわざ買つて貰つた自分の畑の地面をどう利用しようなどと考へて居るでも無く（それはもとよりさうであらうとは思つたけれども）それよりも本一行見るではなく字一書かうとするでもなく、何一つ手にはつかぬらしい。さうして若しそんな事でも言ひ出せばきつと吐きりつけるにきまつて居る、それでなくてさへも、もろ全然駄目なものを見放されて居る——わけて自分との早婚すぎる無理な結婚の以後は、殊にさう思はれて居るらしい父母への心づかひもなく、ただうからかと——ではないとあの人自身では言つても、とにかくうからかと、その日の日の夢を見て暮して居るのである。何時、建てるものとのめづかしい家の圖面の、而も實用的といふやうな分子などは一つも無いものを何枚も何十枚も、それは細かく細かく描いて居るかと思ふと、不意に庭へ飛び出して、犬の眞似をして犬と一緒になつて、燃えて居る草いきの草原を這つたり轉けまはつたり、さうかと思ふと突然破れるやうな大聲で笑ひ出したり叫び出したりするこの人は、ほんとうに何か非常に寂しいのであらう。何事も自分には話してくれないから解る筈もない。何か自分には隠して



居るのであつた。

「た、彼が最初にこんな路の上で、限りなく楽しみ、又珍らしく心のくつろいだ自分自身を見出したのは、その同じ年の暮春の或る一日であつた。こんな場所にこれほどの片田舎があることを知つて、彼は先づ愕かされた。しかもその不静な四邊の風物は彼に珍らしかつた。ずつと南方の或る半島の突端に生れた彼は、荒い海と峻しい山とが激しく咬み合つて、胸の間に人間が微小にしかし啓明に生きて居る一小市街の傍を、大きな急流の川が、その上に筏を長々と浮べさせて押合ひながら荒荒しい海の方へ聳き合つて流れてゆく彼の故郷のクライマックスの多い戯曲的な風景にくらべて、この丘つづき、空と、雜木原と、田と、畑と、雲雀との村は、實に小さな散文詩であつた。前者の自然は彼の峻厳な父であるとすれば、後者のそれは子に甘しい彼の母であつた。一歸れる放蕩息子に自分自身をたとへた彼は、息苦しい都會の眞中にあつて、柔かに優しいそれ故に平凡な自然のなかへ、溶け込んで了ひたいといふ切願を、可なり久しい以前から持つやうになつて居た。おゝ！そこにはクラシックのやうな平靜な幸福と喜びとが、人を待つて居るに違ひなく。Vanity of

vanity, vanity, all is vanity! 空の空、空の空なる哉都て空なり。或は然うでないにしても。いや、理窟は何もなかつた。ただ都會のただ中では息が屏つた。人間の重さで壓しつぶされるのを感じた。其處に置かれるには彼はあまりに鈍重な機械だ、其處が彼をいやが上にも鋭敏にする。そればかりではない、周囲の騒がしい春が彼を一層孤獨にした。「嗚、こんな處には、何處でもいい、しつとりとした暮春の田舎家のなかで、暗い赤いランプの陰で、手も足も思ふ存分に延ばして、前後も忘れる深い眠に陥入つて見たい」といふ心持が、華やかな白熱燈の下を、石畳の路の上を、疲れ切つた流浪人のやうな足どりで歩いて居る彼の心のなかへ、切なく込上げて來ることが、まことに屢であつた。「おお！深い眠、おれはそれを知らなくなつてからもう何年になるであらう？ 深い眠！それは言はば宗教的な法悦だ。おれの今最も欲しいのはそれだ。熟睡の法悦だ。即ち肉體がほんとうに生きてゐる人の法悦だ。俺は先づそれを求める。そのある處へ行かう。さあ早く行かう！」彼は自分自身の心なかでさう呟いた。或は、口に出してさへ呟いた。さうして矢も楯もたまらない、郷愁に似たやうな名

づけやうのない心が、その何處とも知らない場所へ、自分自身を連れて行けとせがむのであつた……（彼は老人のやうな理智と、青年らしい感情と、それに子供ほどな意志とをもつた青年であつた。）その家が、今、彼の目の前に現れて來たのである。道の右手には、道に沿うて一條の小渠があつた。道が大きく曲れば、渠もそれについて大きく曲つた。そのなかに水は流れて行き流れて來るのであつた。御木山の柳や、柿の樹の傍や、廐の横手や、藪の下や、桐畑や片隅にぼつかり大きな百合や菜を咲かせた農家の庭の前などを通つて、幅六尺ほどのこの渠は、事實は田へ水を引くための灌水であつたけれども、遠い山間から來た川上の水を眞直ぐに引いたものだけに、その美しさは、溪と言ひ度いやうな氣がする。青葉を透して降りそそぐ日の光が、それを一層にさう思はせた。へどろの緒土を洒して、洒し盡して何の濁りも立てずに、淺く走つて行く水は、時時ものに堰かれて、ぎらりぎらりと柄になく大きく光つたり、さうかと思ふと縮細の細のやうに纖細に、或は或る小さなびくびくする痙攣の發作のやうに光つたりするのであつ

細く人の竿だあとを残して、その上を歩く人々に、あの幅一間あまりの渠を越させて、人々をその家の入口へ導く。

入口の左手には大きな柿の樹があつた。さうして奥の方にもあつた。それらの樹の自由自在にうねり曲つた太い枝は、見上げた者の目に、「私は永い間ここに立つて居る。もう實を結ぶことも少くなつた」とその身の上を告げて居るのであつた。その老いた幹には、大きな枝の脇の下に寄生木が生えて居た。その樹に對して右手には、その屋敷とそれの地つづきである桐畑とを區限つて細い溝があつた。何の水であらう、水が潤れて細く——その細い溝の一部分を尙細く流れて男帯よりもつと細く、水はちよろちよろ喘ぎ喘ぎ通つてゐた。じめじめとした場所を、一面に空色の花の月草が生え茂つて居た。また子供たちが「こんべたう」と呼んで居るその葉子の形をした灰赤く白い小さな花や、又「赤まんま」と子供たちに呼ばれて居る草花なども、その月草に雜つて一帯に蔓つて居た。それはなつかしい幼な心をよびます。藪であつた。書間は螢の宿であらう小草のなから、葉には白い堅の縁が鮮に染め出された處が、すらりと、十五六本もひとつところに集つて、爽や

かな長いそのうへ幅廣な葉を風にそよがせて、ざわざわと音をたてて居るのであつた。屋敷の奥の方から流れ出て來た水は、それらの小草の、葉をくぐつてそれらの蘆の短い節節を洗ひきよめながら、うねりうねつて、解きほぐした組練の束のやうにつやつやしく、なよやかに搖れながら流れた。さうして、か細く長長しい或る草の葉を、生えたままで流し倒して、その草のために一時動流することをさへぎられたそれらのささやかな水は、その草の葉を傳うて、より大きな道ばたの渠のなかへ、水時計の水のやうにぼたりぼたりと落ち濺いで居た。彼にはこの家の屋後に、湧き立つ小さな清新な泉がありさうにも感ぜられた——さういふ地勢でもあつたから。

家の背後は山つづきで竹藪になつて居た。竹のなかには素峭しく大きな丈の高い松が、この清楚な竹藪のなかの異端者のやうに、重苦しく立つて居た。屋敷の庭は丈の高い——人間の背丈よりも高くなつた櫛の生垣で取り圍まれてあつた。家全體は、指櫃の遠さで見た時にさうであつた如く、目の前に置かれて見ても、茂るにまかせた樹樹の枝のなかに埋められて、茂るにまかせた草の上に置かれてあつた。

大は一本づつ土橋の側から下りて行つて、灌水の水を交々に味うた。  
彼はその土橋を渡らうとせずに、「三徑就荒」と口吟みたいこの家を、思ひやり深さうにしばらく眺めた。

「ねえ、いいぢやないか、入口の氣持が——彼はこの家の周囲から四居とか陰枝とかいふ心持に相應した或る情趣を、幾つか拾ひ出し得てから、裏にむかつてかう言つた。

「然うね。でも随分荒れて居ること。家のなかへ這入つて見なければ……」

彼の妻は少々不安さうに、又さかしげに、氣まぐれな夫をたしなめる時にすべての妻がする口調をもつてさう答へた。併し、すぐ思ひかへして、

「でも、今のお寺に居ることを思へば、何處だつていいわ」

今飲んだ水から急に元氣を得た二疋の犬は、池へ入るよりも一足さきに庭のなかへ跳り込んだ。松の樹の根元へ濃い樹かげを押し込んだ二疋の犬どもは、わがもの顔に土の上へ長長し身を横へた。彼等が顔を突き出して、口顎から首のところを地面にべつたりと押しつけ、両方から同じ形に顔を並べ合つた。さうして今く同じや

居るのではなからうか……。彼の女は、五六日前に讀みた藤村の「春」を思ひ出した。單純な彼の女の頭には、自分の夫の天分を疑うて見ることなどは知らずに、自分の夫のことをその小説のなかの一人が、自分の目の前へ——生活の隣りへ、その本のなから抜出して來たかのやうにも思つて見た。……あれほど深い自信のあるらしい藝術上の仕事などは忘れて、放擲し、ほんとうにこの田舎で一生を朽ちさせるつもりであらうか。この人は、まあ何といふ不思議な夢を見たがるのであらう……。それにしても、この人は、他人に對しては、それは親切に、優しく調子よくしながら、何故かうまで私には氣難かしいのであらう。若しや、あの人のある女に對する前の戀がまだ褪せきらない間に、私はあの人の胸のなかへ這入つて行つて、そのためにあの人はしばらくはあの女を忘れては居たけれども、根強く残つて居たあの戀が何時の間にか再び自分をのけものにしてまた芽を出したのではなからうか。さうして私には辛いあたる……。今のままでは、さぞかし當人も苦しいであらうが、第一そばに居るものがたまらない。返事が氣に入らないといつては轉がほど突きとばされたり、打たれたり、何が氣に入ら

ないのか二日も三日も一言も口を利かうとはしなかつたり……。あの人はきつと自分との結婚を悔いて居るのだ。少くとも若し自分とはなく、あの女と一緒に住んで居たならばどんなに幸福だつたらうかと、時々考へるに違ひない。考へるばかりではない、現に、自分にむかつてさう言つたことさへある——「あの時、おれがあの女、あの純潔な素直な娘と一緒になれさへしたならば、あの人が私をよく統一して、おれは今ごろ、いろいろな意味でもつと美しいもつと善い生活が出來て居ただらうに」と……。實際あの女は、自分も知つて居るけれども、自分などよりはもつと美しく、もつと優しい。私はあの人があの女をどんなに深く思つて居るかはよく知つて居る……。いや、いや、さうではない。あの人はやつぱりあの人自身で何か別のことを考へ込んで居るのである……。さうだ、夫は、「ただ、私をそつとして置いてくれ」と言つた……

ふと、  
「俺には優しい感情がないのではない。俺はただそれを言ひ現すのが恥しいのだ。俺はさういふ性分に生れつたのだ」  
彼の女は、昨夜、いつになく打解けて彼が語

つた時彼の女にむかつて言つた彼の女の人の言葉と思ひ出すと、その言葉を反芻しながら歩いた。さうして未だ見たことのない家の間どりを考へた。たとひ新婚の夢からはとつくに覺めたころであつても、こんな聲さの下でも、ただ單に轉居するといふだけの動機で心持がふだんよりもずつと活き活きとして來て、こんなことを考へて悲しんだり、喜んだり、慰んだりすることの出来るのは、まだ世の中を少しも知らない幼妻の特權であつたからだ。さうしてそれがまた、あの案内の女が、喋りつづけに喋つて居るその家の由來に就て、何の興味も持たぬらしく、ただ無愛想に空返事を與へて居るに過ぎなかつた所以でもある。——この案内の女は、その長い憂鬱しい道の始終を、ながながと喋りつづけて休まなかつた。この女は自分の興味をもつて居るほどの事なら、他の何人にとつても、非常に面白いのが當然だと信じて居る單かな人の一人であつたから。

こんな道を、彼等は一里近くも歩いた。さうしてその家は、もう、彼等一同の目の前に來てゐた。  
家の前には、果して渠が流れて居た。一つの小さな土橋が、茂るがままの雜草のなかに一筋



家庭の習慣になつて、彼も彼の妻も人に物言ふやうに、犬と猫とに言ひかけるのが常であつた……。

\* \* \* \* \*

彼等夫婦がこの家に住むやうになつた日から、遡つて數年前である――

この村で一番と言はれて居る豪家N家の老主人は、年をとつて、ひどく人生の寂寥を感じ出した。普通人にとつてかういふ時に最も必要なものは、老いと若さを問はず異性であつた。さうしてこの老人は、都會から一人の若い女を連れて來た。この豪家は、この風流人の代にその田の半分を無くしたのだけれども、流石に老人の考へは金持らしいものであつた――ただ美しいだけで、何の能もないやうな女はつれて來なかつた。少し位は醜くとも、年さへ若ければ我慢するとして、村の爲めにもなり、それよりも自分の經濟の爲めにもなるやうな女を擇んだのであつた。一口に言へば、彼は、今までは村に無くして不自由をして居た産業を副業にする妾を蓄へたのだ。それから自分の家の離れ座敷をとり外して、彼の屋敷からはすぐ下に當るところへ、それを建て直した。冬には朝か

ら夕方まで日が當るやうな方角を考へて、四間の長さをつづく縁があつた。玄關の三疊を抜けて、六疊の茶の間に煙を切らせた。黒梯の床柱と、座敷の欄間に嵌込んだ麻の葉つなぎの棧のある障子の細工の細かさは、村人の目をそば立たせた。さすがはうちの山から一本櫓りに擇つて伐り出した柱だ、目ざはりな節一つない、と人工はその中占の柱を愛撫しながら自分のもののやうに褒めた。さうして農家の神神しいほど廣い土間のある、太い棟や梁の眞黒く煤けた臺所に、白足袋を穿いて、ぞろぞろ衣服の裾を引指つた女が、そこで立働くやうになつた。老人は、その家督を四十幾つかになつた自分の長男に指つた。さてこの老人は幸福であつた。村の人人は、自分の年の半分にも足らぬ若さの茶呑友達を得た隠居に就てかけ口を利いた。併し、そんな事位は隠居の幸福を假けはしなかつた。

けれども、併しすべての平和と幸福とは、短い人生の中にあつて最も短い。それはちやうど、秋の日の障子の日向の上にふと影を落す鳥かけのやうである。つと來てはつと消え去る。さうして鳥かけを見た刹那に不思議なさびしさ

が湧く。老人のこれ等の平和の日も來の間であつた。

若いものは、程なく、都會から一人の若い男を誘つて來た。村の人人は、この若い男を番頭さんとお座敷の番頭さんと呼んだ。村の人人は産後には、果して「番頭さん」が入用なものかどうかを知らなかつた。さうしてこの隠居は、自分の若い妾が、自分には無斷で、若い「番頭さん」を雇入れた事に就て不満であつた。非常に不満であつた。第一にこの若い男女の生活は田舎の人人の目には贅澤すぎた。隠居の豫算とは少し違ひすぎた。隠居は彼等がもつとつましやかであり得ると考へ初めた。その事を彼の妾に度度言ひつけた。初めは遠まはしに遠慮勝ちに。併しだんだん思ひ切つて言ふやうになつた。或る夜には夜中言ひ募ることがあつた。番頭さん「は多分これ等の對話を壁一重に聞いただらう。或るそんな夜の後の日に――彼の女が初めて村へ來てから一年ばかりの後若い番頭さん」を若い妾が「雇入れてから半年ほどの後、或る夕方、彼等二人の男女の姿は、突然この村から消えた。夕方に村の方から歸つて來た馬方は、山路の夕闇のなかで、くつきりとい上つて白い丸い頬が目についたので、よく見ると



うな様子に體を曲げて、後脚を投げ出した様子は、まことに愛らしいシンメトリーであつた。赤い舌を垂れて、苦しげな息を吐き出し乍ら、庭に這入つて来た彼等の主人達の顔を無邪氣な上眼で眺めて、靜かに樂しうに尾を動かして見せた。いかにも落着いたらしいその姿は、此處はもう自分たちの家だといふ事を、彼等の主人たちよりさらに十分に豫覺して居るらしいやうにも、彼には見られるのであつた。若しこの時、妻が彼のそばに居たならば彼は妻にから言つたらう——

「ね、フラテもレオ(二つとも犬の名)も御成してゐるよ。」

けれども彼の妻は、案内の女と一緒にその縁側の永い間閉ざされて居た戸を開けようとして、鍵で錠穴をがたがた言はせて居る。

樹といふ樹は茂りに茂つて、線は幾重にも積み重つた。錯雜した枝と枝とは網の目になり堅になり軒になつて、庭はほとんど日かげもさし込まなかつた。土の匂は黒い地面から、冷冷と湧いて来た。彼は足もとから立ちのぼるその土の匂を、香を匂ふ人のやうに官能を失はかせ、て沁み沁みと味うて見た——ぢやらぢやらと涼しく音を立てて居た錠束の音がやまつて、縁側

の戸が開けられるまで。

\* \* \* \* \*

「やつと、家らしくなつた」

昨日、門前で洗ひ淨めた障子を、彼の妻は不慣れな手つきで張つたのである。最後の一枚を張り了つた時、それを茶の間と中の間のあひだの敷居へ納めようとして立つて居る夫の後姿を見やりながら、妻は満足に難いてさう言つた。

「やつと家らしくなつた」彼の女は同じ事を重ねて言つた。「聲は直ぐかへに來るといふし：でも、私はほんとうに厭だつたわ、をとつ

初めてこの家を見た時にはねえ。こんな家に人間が住めるかと思つて」

「でも、まさか狐狸の住家ではあるまい」

「でもまるで浅茅が宿よ。でなけや、こほろぎの家よ。あの時、屏の上一面にびよんびよん逃げまはつたこほろぎはまあどうでせう。恐いほどでしたわ」

「浅茅が宿か、浅茅が宿はよかつたね。……おい、以後この家を雨月草舎と呼ぼうぢやないか——」

(彼等二人は——妻は夫の感化を受けて、上田秋成を讚美して居た。)

夫の愉快な笑ひ音を、久しぶりに見た妻はうれしかつた。

「そこで、今度は戸戸換へですよ、これが大變ね。一年もまるで汲まないといふのですもの、水だつて大がい腐りますわねえ」

「腐るとも、毎日汲み上げて居なければ。俺の頭のやうに腐る」

この言葉に、「又か」と思つた妻は、今までのしやいだい調子を忘れておぼおづと夫の顔を見上げた。しかし夫の今日の言葉はただ日のときだけであつたと見えて、その骨ばつた顔にはもとのままの笑があつた。それほど彼は機嫌がよかつたのである。それを見て安心した妻は甘えるやうに言ひ足した。

「それに、庭を何とかして下さらなけやあ。こんな陰氣なのはいや！」

疲れて壁にもたれかかつた妻の膝には、彼と彼の女との愛猫が、しなやかにしのび寄つてのつそりと上つて居るところであつた。

「青(猫)の名や。お前は苦しいねえ」

と言ひながらも、妻はその猫を抱き上げて居るのである。彼の家庭には犬が居る。猫が居る。一たん愛するとなると、程度を忘れて溺愛せずには居られない彼の性質が、やがて彼等の

細ら納りたり、草鞋を新んだりして、夜に更かさねばならなかつた。家賃は四月日五月日位から滞り出した。母はすり切れた。柱へはいろいろな場合のいろいろな痕跡がいろいろの形に刻みつけられた。「せめては下肥位はたまらう」と校長先生が考へたにも拘はらず、校長先生の作男が下肥を汲みに行く朝は、其處は何時もからつぽだつた。何となれば家の借り手の貧しい百姓が、自分の借りて居る畑へそれを運んでしまつた後であつたから。校長先生はひどくこの借家人を悪く思ひ初めた。會ふほどの人には誰彼となく、貧乏な百姓の狡猾を罵り、訴へた。さうして「どうせ貧乏する位の奴は、義理も何も心得ぬ狡猾漢だ」といふ結論を與へ去つた。外の村人は、直ぐ校長先生の意見に賛同の意を示した。そこで校長先生は自分の論理が眞理として確立されたのを感じ出した。次には、こんな男に家を貸して置くよりも、寧ろ荒れるにまかせて置いた方がどれほどよいか解らないと思ひ出した。何故かといふに、この男に家を貸すことは、積極的に荒廢させることである、反つて、空家として打捨てて置くことはその消極的な方法である。さうしてこの借家人は逐ひ立てられた。村の人人は校長先生

の態度に合理的だと考へた。これらの間、あの居が亡くなつてから後は、その庭の草や木のことを考へるやうな人は、ひとりもなかつた。家と庭とは死ねに死ねた。ただ一人、あの貧乏な百姓の小娘が、隱居が在野の折に植ゑられたままで、今は草の間に野生のやうになつて、年々に葉が衰へになり、莖がくねつて行く菊畑の黄菊白菊の小きな花を、秋の朝毎に見出しては、ちぎくれた愛のかんざしにと祈りつた……

……彼は縁側に立つて、庭をながめながら、あの案内者であつた太つちよの女が、道道語りつづけた話のうちに、彼一流の空想を雜へて、ぼんやり考へるともなく考へ、思ふともなくそんなことを思つて居た。

「フラテ、フラテ」裏の縁側の方では、彼の妻の聲がして、犬を呼んで居る。「おおよしよし、レオも来たのかい。お可憐いね。何も上げるのぢやなかつたのだよ。フラテや、お前はね、今のやうにあんな草ばかりのところで遊ぶのぢやありませんよ。蝮が居ますよ。そろこの間のやうに、鼻の頭を咬まれて、喉が腫れ上つて、お寺の和尚さんのやうにこんな大きな顔になつて來ると、ほんとうに心配ぢやないか。いいか

い。フラテはもうこの間で懲りたから解つたわね。レオや、お前は氣をおつけよ。お前の方はおとなしいから大丈夫だね。……彼の妻は牧歌を派々娘のやうな聲と心持とで、自分の養子である二匹の犬に物ぶうて居る。さうして涼しい竹藪の風は、そこから彼の立つて居る方へ抜けて通りすぎた。

\* \* \* \* \*

真夏の庭園は茂るがままであつた。すべての樹は、土の中にかく出来ただけ根を張つて、そこから土の力を汲み上げ、葉を彼等の體中一面に落けて、太陽の光を思ふ存分に吸ひ込んで居るのであつた——松は松として生き、櫻は櫻として、庭は庭として生きた。出来るだけ多く太陽の光を浴びて、己を大きくするために、彼等は枝を突き延した。互に各の意志を遂げて居る間に、各の枝は重り合ひ、ぶつかり合ひ、絡み合ひ、背き合つた。自分達ばかりが、太陽の寵遇を得るためには、他の何物をも顧慮して居られなかつた。さうして、日光を享けることの出来なくなつた枝は日に日に細つて行つた。一本、小さな松は、杉の下で赤く枯れて居た。樹の生垣は赤土が不揃

「八さんのお産婆だつた、とその次の朝村の人  
人に告げた。併し、これは多分、この男が實際  
にこれを見たわけではなく、彼等が居なくなつ  
たと聞いた時に、思ひついた嘘であつたかも知  
れない。でなければ彼は歸つて來ると直ぐその  
事を、珍らしげに、手柄に言ふべき筈だから  
である。人はこんな時に、ちよつとこんな事を  
言つて見たいやうな一種の藝術的本能を、誰し  
も多少持つて居るものである。——それはどう  
でもいいとして、この話は、話題に饑ゑて居る  
田舎の人人を喜ばせた、當分の間。さうして  
二十八の女には、七十に近いあの隠居よりは、  
二十四五の若者の方が、よく釣合ふべき筈だつ  
たといふのが、村の輿論であつた。

癪ましいのは、若い妾に逃げられたこの隠居  
が、その後、植木の道樂に没頭し出した事であ  
る。

彼は花の咲く木を庭へ集め出した。今日があ  
の木をこちらに植ゑ、明日は別の庭からこ  
の木を自分の庭にうつした。さうして明日は何  
かよい木を捜し出さねばと、毎日毎日、土いぢ  
りに寧日がなかつた。春には牡丹があつた。夏  
には朝顔があつた。秋には菊があつた。冬には  
水仙があつた。さうして、彼の逃げて仕舞つた

妻の代りに、二人の十と七つとの孫娘を、自分  
の左右に眠らせた牀のなかで、この花つくりの  
翁は眠り難かつた。彼は月並の俳諧に耽り出し  
た。

隠居は死んだ、それから丁度一年経つた後  
に。彼は、かうして集めた花の木のそれぞれの  
花を俵かばかり楽しんだばかりであつた。さう  
してその家は、彼の木の娘と共に、村の小學校  
長のものになつた。村の校長はこの隠居の養  
子だつたからである。すると昨日のない植木屋  
があつて、算術の四則には長けて居り、それ  
を實の算盤に應用することにも巧ではあつた  
けれども、美に就ては如何なる種類のそれにも  
一向無頓着な、當主の小學校長をたぶらかし  
て、日ぼし庭の飾りは皆引抜いて行つた。大  
木の白木蓮、玉栴、蘭、海棠、黒竹、枝垂れ  
櫻、大きな花栴檀、梅、夾竹桃、いろいろな種  
類の蘭の鉢。さうしてそれ等の不幸な木はかく  
も忙しくその居所を變へなければならなかつ  
た。土に慣れ親しむ暇もなかつた。かうしてそ  
れ等のうちの或るものは、爲めに枯れたかも知  
れない。

小學校長は、ちやうど新築の出来上つた校舎  
の一部へ住んだ。自分の貰つたこの家は寒家に

して置いた。さうして居るうちにこの家を借り  
手があれば貸したいとちへ出した。住む人が無  
ければ、家は荒廢するばかりである。たとひ二  
回でも、一圓五十錢でも、家賃をとつて損になる  
ことはない、と校長先生の考は極く明瞭であ  
る。ところが、田舎では大抵の人は自分自身の  
家を持つて居る。たとひ軒端がくづれて、朽ち  
腐つた、露屋根にむつくりと青苔が生えて居るや  
うな破家なりとも、親から子に傳へ子から孫に  
傳へる自分の家を持つて居た。どんな立派な家  
にしる、借家をして住まねばならないやうな百  
姓は、最後の最後に自分の屋敷を抵當流れにし  
てしまつた最も貧しい人人に決つて居た。かく  
て、あの隠居が愛する女のために、又自分の老  
後の楽しみにと建てたこの家は實に貧しい貧し  
い百姓の家に化してしまつたのである。隠居が  
茶の間の茶釜をかけた爐には、大きないぶり勝  
ちな松衝が、めちやめちやに押込まれて、その  
煙は田舎家には無駄な天井に邪魔されて、家か  
ら外へ抜けて行く隙もなかつた。さうして洋屋  
を形造つた壁、障子、天井、燈は直ぐに煤び  
て來た。氣の毒な百姓の一家は立籠つた蛇など  
を苦にして居られない。反つてそれから來る  
温さに感謝して、秋の、夕の長い夜た夜たを、



もない今日に、その夢を未だ見果てずに居るかと思ふのである。また假りに、庭の何處の隅にもそんなものの一株もなかつたとしたところが、門口にかぶさりかかつた一幹の松の枝ぶりからでも、それが今日でこそ徒らに硬く太く長い針の葉をぎつしりと身に着けて居ながらも、曾ては人の手が、懇にその枝を勞はり葉を揃へ、幹を撫でたものであつたことは、誰も容易に承認するであらう。實は、その持主である小學校長は、この次にはその松を賣らうと考へて、この松だけはこん度の貸家人が楠木屋を呼ぶときには、根まはりもさせ鬼葉もとらせて置かうと思つて居るのであつた。

故人の遺志を、偉大なそれであるからして時には残忍にも思へる自然と運命との力がどんな風にぐんぐん破壊し去つたかを見よ。それ等の造された木は、庭は、自然の濺刺たる野蠻な力でもなく、また人工のアイフィシヤルな形式でもなかつた。反つて、この兩様の無難作な不統一な混合であつた。さうしてそのなかに醜さといふよりも寧ろ故もなく自然たるものがあつた。この家の新しい主人は、木の影に佇んで、この庭園の夏に見入つた。さて何かに怯かされてゐるのを感じた。瞬間的な或る恐

怖がふと彼の裡に過ぎたやうに思ふ。さてそれが何であつたかは彼自身でも知らない。それを捉へる間もないほどそれは速かに閃き過ぎたからである。けれどもそれが不思議にも、精神的といふよりも寧ろ官能的な、動物の抱くであらうやうな恐怖であつたと思へた。

彼は、その日、暫く、新しい住家のこの法まじく衰へた庭の中を木かけを傳うて、歩き廻つて見た。

家の側面にある白樫の下には、蟻が、黒い長い一列になつて進軍して居るのであつた。彼等の或るものは大きな家寶である食糧を擔いで居た。少し大きな形の蟻がそこらにまくばられて居て、彼等に命令して居るやうにも見える。彼等は出陣ふときには、會粹をするやうに、或は噂をし合ふやうに、或は言傳を託して居るやうに、兩方から立停つて頭をつき合せて居る。これはよくある蟻の轉生であつた。彼は蹲まつて、小さい隊商を凝視した。さうして暫くの間、彼は彼等から子供らしい樂を得させられた。永い年月の間、かういふものを見なかつた事や、若し日に入つたにしても見ようとしなかつたであらう事に、彼は初めて氣づいた。さう言へば、幼年の日以来——あの頃は、外の子

供一倍そんなものを樂み耽つて居たにも拘らず、その思ひ出さへも忘れて居た——落ちついて、月を仰いだこともなければ、鳥を見たこともなかつた。そんな事に氣附いた事が、彼を妙に悲しく、また喜ばしくした。さういふ心を抱きながら其處から立上つて、歩み出さうとする、ふと目に入つたのは、その白樫の幹に道化た態をして、牙のやうな形の大きな前足をそこへ突立てて嘔りついて居る蟻の脱殻であつた。

それは背中のまんなかからばつくり裂けた、赤くびかびかした小さな鏝であつた。なほその幹をよく見て居ると、その脱殻から三四寸ほど上のところに、一疋の蟻が凝乎として居るのを發見することが出来た。それは人のけはひに驚く風もないのは無理もない。その蟻は今生れたばかりだといふ事は一目に解つた。それはまだ極く軟かで體も固まつては居ないのである。この蟲はかうして身動きもせず凝乎としたまま、今、靜かに空氣の神祕にふれて居るのであつた。その軟かな未だ完成しない羽は全體は乳色で、言ふばかりなく可憐で、痛痒しく、小さくちぢかんで居た。ただその緑色の筈ばかりがひどく目立つた。それは爽やかな快活なみどり色で、彼の聯想は白く割れた種子を裂開いて突出



ひになつて、その一列になつた頭の線が不恰好にうねつて居る。それは日のあたるところだけが生ひ茂り丈が延びて、諸の大きな樹の下に覆はれて日蔭になつた部分は、落閑んで了つたからであつた。又、その或る部分は葉を生かすことが出来なくなつて、恰も城壁の覗き窓ほどの穴が、ぽつかりと開いて居るところもあつた。或る部分は分厚に葉が重なり合つてまゝく團つて繁つて居るところもあつた。或る箇所は全く中断されて居るのである。といふのは、丁度その生垣に沿うて植ゑられた大樹の松に覆ひ隠されて、そればかりか、垣根の真中から不意に生ひ出して来た野生の藤蔓が、人間の拇指よりももつと太い蔓になつて、生垣を突分け、その大樹の松の幹を、恰も處を捕へた綱のやうに、ぐるぐる巻きに巻きながら攀ち登つて、その見上げるばかりの梢の梢まで登り盡して、それでまだ満足出来ないとい見える——その巻蔓は、空の方へ、身を悶えながらもの狂しい指のやうに、何もないものを捉へようとしてあせり立つて居るのであつた。その巻蔓のうちの一つは松の隣りのその松よりも一際高い樅の木へ這ひ渡つて、仲間とのれよりも廻に高く、空に向つて延びて居た。又、庭の別の隅では、梅の

新しい枝が直立して長く高く聳へば天を刺貫かうとする梢のやうに突立つて居るのであつた。曾ては菊畑であつた軟かい土には、根強く蔓つた雑草があつた。それは何處か竹に似た形と性質とを持つた強き草であつた。その硬い莖と葉とは土の表面を網目に編みながら這うて自分の領土を確實にするためにその節のあるところから一―根を下して、八方へ擴がつて居た。試にその一部分をとつて、根引にしようとする、その房房した無數の細い根は黒い砂まじりの土を、丁度人間が手づかみ上げるほどづつ持上げて来る。これが彼等の生きようとする意志である。又、一夏の蕨物に命ずる燃ゆるやうな姿である。かく繁りに茂つた枝と葉とを持った雑多な草木は、庭全體として言へば、丁度、狂人の鉛色な顔に垂れかかつた放埒な髪の手を見るやうに陰鬱であつた。それ等の草木は或る不可見な重量をもつて、さほど廣くない庭を丘から壓し、その中央にある建物を周圍から遠巻きして押迫つて来るやうにも感じられた。

併し、速く恐ろしい感じを彼に與へたものは、自然の持つて居るこの暴力的な意志ではなかつた。反つて、この混亂のなかに絶え絶えになつ

て残つて居る人亡の一縷の典雅であつた。それは或る意志の幽霊である。あの抜目のない植木屋が、この庭園から殆んどその全部を奪ひ去つたとは言へ、今に未だ遺されて居るもののなかにも、確かに、故人の花つくりの翁の道樂を偲ばずには置かないものが一つながら目につくのである。自然の力も、未だそれを全く隠し去ることは出来なかつた。例へば、もとけこんもりと東开に刈り込まれて居たであらうと思へる白瑛入りの繻襪相である。それは門から女園への途中にある。それから又、座敷から厠を隠した山茶花がある。そのの下かげの沈丁花がある。鉢をふせたやうな形に造つた露島躑躅の幾体かがある。大きな葉が暑さのために萎れ、その蔭に大輪の花が枯れ萎びて居る年経た紫陽花がある。それらのものは巨人が激怒に任せて投げつけたやうな亂雑な庭のところどころにあつて、白木蓮、沈丁花、玉椿、秋海棠、梅、芙蓉、古木の高野槿、山茶花、萩、蘭の鉢、大きな自然石、むくむくと盛上つた青苔、枝車櫻、黒竹、常夏、花石榴の大木、それに水の近くには芭蕉、其他のものが程よく披排され、人の手で愛まれて居たその當時の夢を、北方の戀人よりもつと亂暴な自然の蹂躪に任されて、顧る人として

つて邪魔をした。さうして正午の前後には、柿の樹や梅の枝がこの薔薇の木から日の光を奪うた。さうしてそれ等杉や梅や柿の茂るがままの枝は、それ等の薔薇の木の上へのさばつて屋根のやうになつて居た。かうしてこれ等の薔薇の木は、その莖はいたたくも蔓草のやうに細つて、尺にもあまるほどの雑草のなかでよろよろと立上つて居た。

八月半すぎといふのに、花は愚かそれらの上には、一片の——實に文字どほりに一片の青い葉さへもないのであつた。それ等の莖が未だ生きたものであることを確めるためには、彼はそれの一本を折つて見るほどであつた。日の光と温かさととは、すべての外のものに全く掃められて、土のなかに蓄へられた彼等の滋養分も彼等の根もとに蔓つた名もない雑草に、悉く奪はれた。彼等は自然から何の恩恵も享けて居ないやうに見えた。ただこんな場所を最も好む蜘蛛の巢の丁度いい足場のやうになつて、ただ、それのためばかりに有用なものになつて、薔薇はかうしてまでその生存を未だつづけて居なければならなかつた。

薔薇は、彼の深くも愛したものの一つであつた。さうして時には「自分の花」とまで呼んだ。

何故かといふに、この花に就ては一つの忘れ難い、慰めに満ちた詩句を、ゲエテが彼に遺して置いてくれたではないか——「薔薇ならば花開かん」と。又、ただそんな理窟ばつた因縁ばかりではなく、彼は心からこの花を愛するやうに思つた。その豊饒な、杯から溢れ出すほどの過剩的な美は、殊にその紅色の花にあつて彼の心をひきつけた。その眩暈くばかりの重い香は、彼には最初の接吻の甘美を思ひ起させるものであつた。さうして彼がそれを然る感ずる爲めにとて、古來幾多の詩人が幾多の美しい詩をこの花に寄せて居るのであつた。西歐の文字は古來この花の爲めに王冠を編んで贈つた。支那の詩人も亦あの繪模様のやうな文字を以てその花の光輝を歌ふことを見逃さなかつた。彼等も亦、大食國の薔薇露を珍重し、この一換骨香を得るために、海外薔薇水中州未得方と嘆じさせた。それ等の詩句の言葉は、この花の爲めに詩の領國內に、貴金屬の鑲嵌のやうな一脈の傳統を——今ではすでに因襲になつたほどまでに、鞏固に形造つて居るのである。一度詩の國に足を踏み入れるものは、誰しも到るところで薔薇の香を聞くほど。さうして、薔薇の色と香と、さては葉も刺も、それらの優秀な無數

の詩句の一つ一つを肥料として己のなかに汲み上げ吸ひ込んで——それらの美しい文字の幻を己の背後に輝かせて、その爲めに枝もたわむになるやうに思へるほどである。それがその花から一しほの美を彼に感得させるのであつた。幸であるか、いや寧ろ甚だしい不幸であらう、彼の性格のなかにはかうした一般の藝術的因襲が非常に根深く心に根を張つて居るのであつた。彼が自分の事業として藝術を擇ぶやうになつたのもこの心からであらう。彼の藝術的な才分はこんな因襲から生れて、非常に早く日覺めて居た。……それ等の事が、やがて無意識のうちに、彼をしてかくまで薔薇を愛させるやうにしたのであらう。自然そのものから、眞に清新な美と喜びとを直接に摘み取ることを知り得なかつた頃から、それら藝術的因襲を通じて、彼はこの花にのみはかうして深い愛を捧げて來て居た。馬鹿馬鹿しいことのやうではあるが、彼は薔薇といふ文字そのものにさへ愛を感じた。

それにしても、今彼の目の前にあるところのこの花の木の見えざらしさよ！彼は會て、非常に温い日向にあつた爲めに寒中に苦んだところの薔薇を、故郷の家の庭で見た事もあつ

した豆の双葉の芽を、ありありと思ひ浮べさせた。それはただにその色ばかりではなく、羽全體が植物の芽生に發露して居た。生れ出すものには、蟲と草との相違はありながら、或る共通な、或る姿がその中に啓示されて居るのを彼は見た。自然そのものには何の法則もないかも知れぬ。けれども少くもそれから、人はそれぞれの法則を、自分の好きなやうに看取することが出来るのであつた。尙ほ慈視すると、この蟲の平たい頭の丁度腹中あたりに、極く微小な、紅玉色で、それよりもつと燦然たる何ものかが、いみじくも縷められて居るのであつた。その寶玉的な何ものかは、科學の上では何であるか（單眼といふものであらう）彼はそれに就て知るべくもなかつた。けれどもその美しさに就ては、彼自身こそ他の何人より知つてゐると思つた。その美しさはこの小さなとるにも足らぬ蟲の誕生を、彼をして神聖なものに感じさせ、禮拜させるためには、就中、非常に有力であつた。

彼のあるか無いかの知識のなかに、蟬といふものは二十年目位にやつと成蟲になるといふやうなことを何日か何處かで、多分農學生が誰かから聞き囁つたことがあつたのを思い出した。

おお、この小さな蟲が、唯一口に蟬鳴蟬と呼ばれて居るほど、人間には無意味に見える一生をするために、彼自身の年齢に殆んど近いほどの年を経て居ようとは！ さうして彼等の命は僅に數日——二日か三日か一週間であらうとは！ 自然は——何のつもりでこんなものを造り出すのであらう。いやいや、こんなものと言つてただ蟬ばかりではない、人間を。彼自身を。神が創造したと言はれて居るこの自然は、恐らく出たらめなものであるまいか。さうして出たらめを出たらめと氣附かないで解かうとする時ほど、それが神視に見え居る時はないのだから。いやいや、何も解らない。さうだ、唯これだけは解る——蟬はかない、さうして人間の雄辯な代議士の一生が蟬ではないと、誰が言はうぞ。蟬の羽は見て居るうちに、目に見えて、そのちぎくれが引延ばされた。同時にそれの半透明な乳白色は、刻刻に少しづつ併し確實に無色で透明なものに變化して來るのであつた。さうしてあの芽生のやうに爽快ではあるけれどもひ弱げな緑も、それに應じて段段と黒ずんで、恰も若草の緑が常若木のものになるやうな、或る現實的な強さが、瞬かに其處にも現れつつあるのであつた。彼はこれ等のものを二

十分あまりも眺めつくして居る間に——それは寧ろある病的な綿密さを以てであつた——白づと息が迫るやうな嚴肅を感じて來た。

突然、彼は自分の心にむかつて言つた。

「見よ、生れる者の悩みを。この小さなものが生れるためにでも、此處にこれだけの忍耐がある！」

それから重ねて言つた。

「この小さな蟲は俺だ！ 蟬よ、どうぞ早く飛立て！」

彼の奇妙な祈禱はこんな風にして行はれた。それはこの時のみならず常にかうして行はれてあつた。

\* \* \* \* \*

さて、ここに幾株かの薔薇がこの庭の隅にあつた。

それは非戸端の水はけに沿うて、垣根のやうに植あつけられて居るのであつた。若し十分に繁茂して居れば「一架長條萬葉春」を見せて、二三間つづきの立派な花の垣根を造つたであらう。

けれどもそれ等は甚だしく不幸なものであつた。朝日をさへぎつては杉の木立があつた。

夕日は家の大きな影が、それらの上にのしかか



引き分けると松は其時ほつと深い吐息をしてみせたやうに、彼には感ぜられた。彼は蔓のきり端を兩手で握ると、力の限りそれを引つぱつて見た。併し、勿論それは到底無駄であつた。松の小枝から梢へそれから更に隣りの櫻の木へまでも纏りついた藤蔓は、引つぱられて、ただ松の枝と松の枝とをたわめて強く拵ぶらせ、それ等の葉を挽ぎ取らせて地の上に降らせ、又櫻の枝にくつついて居た毛蟲を彼の麥稈帽子の上に落しただけで、蔓自身は弓弦のやうに張りきつたのであつた。「私はお前さんの力ぐらゐには驚かんね! どうでも勝手に、もつとしつかりやつて見るがいい!」と、その藤蔓は小面憎くも彼を揶揄したり、傲語したりするのであつた。彼はこの藤蔓には手をやいて、たうとうそれぎりにして置くより外はなかつた。さうして今度は生垣を刈り初めた……

正年すぎからの彼のこの遊びは、夕方になると、生垣の頭がくつきりと一直線に揃ひ、その壁のやうに平になつた側面には、折りから、その面と平行して照し込む夕日の光線が、櫛の黒い硬い葉の上に反射して綺麗にきらきらと光つた。かうなつて見るとあの大きな穴が一層見苦しく目立つてあつた。

「やあ、これやさつぱりしましたね」と、こんな風な御世辭を言ひながら、その穴から家のなかを見通して行く野良歸りの農夫もあつた。それから、彼はその序にあの渠の上へ冠さつて居る猫楊の枝ぶりを繕うても見た。その夕方、彼は珍らしく大食した。夜は夜で快い熟睡を食り得た。而も翌朝目覺めた時には、體が木のやうに硬ばり節節が痛むところの自分を、苦笑をもつて知らなければならなかつた。

その幾日か後の日に、今度はほんとうの植木屋——といつても半農であるが——が、彼の家の庭に這入つた時には、あの松と櫻とにあまで執念深く絡みついて居た藤蔓は、あの百足の足のやうな葉がしを返つて、或る部分はどうすつかり青さを失うて居るのであつた。さうしてあのもの狂ほしい指である葉蔓は、悉くぐつたりとおち入つて居た。彼は悪人の最後を舞臺で見てよるこぶ人の心持で、松の樹の上で植木屋が切り處む太い藤蔓を、軒の下にしやがんで見上げて居た。

「これや、もう四五日ほして置くといひ焚きつけが出来まさあ」と突然植木屋は松の樹の上から話しかけた。

「其奴はよつほど死太い奴だね」彼はそんな事を答へて置いて「然うだ」とひとり考へた。「あの剛情な藤蔓が、そんなに早くも醜く枯れたのは、彼をそんなに太く壯んに育て上げたと同じその太陽の力だ」と、彼はこの藤蔓から古い寓話を聞かされて居た。彼は又彼の意志——人間の意志が、自然の力を左右したやうにも考へた。寧ろ、自然の意志を人間である彼が代つて遂行したやうにも自負した。藤蔓が其處に生えて居た事は、自然にとつて何の不都合でもなかつたであらうに。とにかく、最初に人間の手が造つた庭は、最後まで人間の手が必要なのだ……彼は漫然そんなことを思つて見た。

それにしても、あの薔薇は、どう變つて來るであらうか。花は咲くか知ら? それを待ち樂む心から、彼は立上つて歩いて行つた。薔薇を見るためにである。その上にはただ太陽が明るく頼もしげに照してゐるほか、別に未だ何の變りもないのは、今朝もよく見て知つて居る筈だつたのに。

かうして幾日かはすぎた。薔薇のことは忘れられた。さうしてまた幾日かはすぎた。

\* \* \* \* \*



た。それは淡紅色な大輪の花であつたが、太陽の不自然な温かさに誘はれて苔になつて見たけれども、朝夕の日かげのない時には、南国とても真中は薔薇に寒すぎたに違ひない。苔は日を経て、徒に固く閉ぢて、そのみか白いうちにほの紅い花片の最も外側なものは、日に不思議なことに、緑色の細い線が出来て来て、葉に近い性質、言はば花片と葉との間のものでも言ふやうなものにまで硬はつて行くのを見た事があつた。けれども、彼が今日の前に見るこれらの薔薇の木は、その哀れな點では實てのあの苔の花の比ではない。彼はこれ等の木を見て居るうち、衝動的に一つの考へを持つた。どうかしてこの日かげの薔薇の木、忍辱の薔薇の木の上に日光の恩恵を浴びせてやりたい。花もつけさせたい。かう言ふのが彼のその瞬間に起つた願ひであつた。併し、この願ひのなかには、わざとらしい、遊戯的な所謂詩的といふやうな、又そんな事をするのが今の彼自身に適はしいといふ風な態度に充ちた心が、その大部分を占めて居たのである。彼自身でもそれに氣附かずに居られなかつたほど。(この心が常に、如何なる場合でも彼の誠實を多少づつ裏切るやうな事が多かつた) さて、彼はこの花の木

で自分をうらな見たいやうな氣持があつた——「薔薇ならば花開かん!」彼は自分で近所の農家へ行つた。足早に出て行く主人の姿を、二疋の大は日盛くも認めて追駈けた。錆びた鋸と桑剪り鋏とをかけた彼が、二疋の大を従へて、一種得意げに再び庭へ現れたのは、五分とは経たないうちであつた。彼はにこにこしながら薔薇の傍に立つた。どうすれば其處を最もよく日が照すだらうと、見當をつけて上を見廻しながら、さて肩拔きになつた。先づ鋸で、最もさばり出た樹の太い枝を挽き初めた。枝からはぼろぼろと白い粉が降るやうにこぼれて、鋸の齒が半以上に喰ひ入ると、未だ斷ち切れない部分は、脆くもそれ自身の重みを支へ切れなくなつて、やがてぼきりと自分からへし折れ、大きな重い枝はそれの小枝を地面へ打つて落ちてちかつた。すると、その隙間からはすぐ、日の光が投げつけるやうに、押し寄せるやうに、沁み渡るやうに、あの枯木に等しい薔薇の枝に降り濺いだ。薔薇を抱擁する方向は追迫と廣くなつた。押しかぶさつた梅や杉や柿の枝葉が、追迫に刈られたからである。彼は桑剪り鋏で、薔薇の木の上の蜘蛛の巣を拂うた。其處にはいろいろの蜘蛛が潜んで居

た。蜘蛛取り蜘蛛といふ小さな足の短い蜘蛛は、枝のつけ根に紙の袋のやうな巣を構へて居た。熊甲のやうな色澤の長い足を持つた大きな女郎蜘蛛は、人仕掛な巣を張り渡して居た。鋏がその巣を荒すと、蜘蛛は曲藝師の巧さで絲を手繰りながら逃げて行く。それを人きな鋏が追駈ける。彼等は絲を吐きながら鋏のさきへぶら下がつて、土の上や、草のなかや、水溜りの上に下りて逃げる。それを鋏がちよん斬つた。そんなことが彼の體を汁みどろにした。又彼の心を興奮させた。最初に、最も大きな枝が地に墜ちた音で、彼の珍らしい仕事を見に来た彼の妻は、何か大に喚びかけたやうであつたけれども、彼は全く返事をしなかつた。大どもし主人が今日は少しも相手になつてくれないのを知ると、彼等同じ十二疋で追つかけて合つて、庭中を騒ぎ廻つて居た。何か有頂天とでも言ひたい程な快感が彼にはあつた。さうして無暗に、手當り次第に、何でも挽き切つてやりたいやうな氣持になつた。彼は松に絡みついて居るあの薔薇の太い蔓を、根元から、桑剪り鋏で一息に斷ち切つた。彼は案外自分にも力があると思つた。その蔓を続をもとずやうにくるくる廻しながら松の幹から

るか。彼の父の惱つて居る手紙のなかの、「大  
勇猛心」と呼んで居るものはどんなものか。そ  
れを何處から齎してどうして彼の心へ植ゑ込  
むことが出来るか。どうして彼の心に湧立たせ  
ることが出来るか。それらの一切は、彼には全  
然知り得べくもなかった。さうして田舎にも、  
都會にも、地上には彼を安らかにする樂園は  
どこにも無い。何も無い。

「ただ萬有の造り主なる神のみ心のままに  
……」  
と、そんなことを言つて見ようか。けれども  
彼の心は、決して打碎かれて居るのではなかつ  
た。ただ泰びて居るだけである……。彼は太鼓  
のひびきに耳を傾けて、その音の源の周囲を  
とりかこんで居るであらう元氣のいい若者たち  
を、羨しく眼前に描き出した。

彼の机の上には、讀みもしない、又、讀めも  
しないやうな書物の頁が、時々彼の目の前に曝  
されてあつた。彼はその文字をただ無意味に拾  
つた。彼は、又、時々大きな辭書を持ち出した。  
それのなから、成可く珍らしいやうな文字を  
探し出したためであつた。言葉と言葉とが集團し  
て一つの有機物になつて居る文章といふもの  
を、彼の疲れた心身は讀むことが出来なくなつ

て居たけれども、その代りには、一つ一つの言  
葉に就てはいろいろな空想を喚び起すことが出  
て来た。その靈を、所謂言葉のありありと見  
るやうにさへ思ふこともあつた。その時、言葉  
といふものが彼には言ひ知れない不思議なもの  
に思へた。それには深い神祕的な性質があること  
を感じた。それら言葉の一つ一つはそれ自身で  
既に人間生活の一斷片であつた。それら言葉の  
集合はそれ自身で一つの世界ではないか。それ  
らの言葉の一つ一つを、初めて發明し出したそ  
れぞれの人たちのそれぞれの心持が、懷しく  
も不思議にそれのなかに残つて居るのではない  
か。永遠にさうして日常、すべての人たちに用  
ゐられるやうな新しい言葉のただ一語をでも  
創造した時、その人はその言葉のなかに永遠に、  
普遍に生きてゐるのではないか。さうだ、さう  
だ、これをもつと明確に自覺しなげやあ……。  
彼はそんなことを極くおぼろげに感じた。さう  
して或る一つの心持を、仲間、他の者にはつき  
りと傳へたいといふ人間の不可思議な、靈妙な  
靈望と作用とに就ても、おぼろに考へ及ぶので  
あつた。言葉に倦きた時には、彼はその辭書の  
なかにある細かな挿畫を見ることに依つて、未  
だ見たことも空想したこともない魚や、獸や、

草や、木や、蟲や、魚類や、或は家庭的ないろ  
いろの器具や、武器や、古代から現代の處所に  
用ゐられたさまざまな刑具や、船や、その帆  
の張り方に就ての種種な工夫や、建築の部分な  
どに就て知ることを喜んだ。それらの器物など  
の些細な形や、動物や植物などのなかにさま  
ざまな暗示があつた。就中、人間自身が工夫し  
たさまざまなもののなかに言葉の言葉のなかに  
あるものと全く同じやうに、人類の思想や、  
生活や、空想などが充ち満ちて居るのを感じた  
——それは極く斷片的にはあつたけれども。  
さうして、彼の心の生活はその時やうどそ  
れらの斷片を考へるに相應しただけの力しか  
無いのであつた。

彼は、時々それらの感興の末に、夜更けにな  
つてから、詩のやうなものを書くことがあつた。  
それはその夜中、彼自身には非常に優劣な詩  
句であるかのやうに信ぜられた。併し、翌日にな  
つて目を覺してまづ先きにその紙の上を見る  
と、それは全く無意味な文字が羅列されて居る  
に過ぎなかつた。それは寧ろ、先づ驚くべきこ  
とであつた。——ふと、いい考へが彼のつい身  
のまはりまで來て居たのであつたのに。さうし  
て、それを捉へようとした時、もうそこには何

自然の景物は、夏から秋へ、靜かに變つて行つた。それを、彼ははつきりと見る事が出来た。夜は遙早くも秋になつて居た。蟬だの、秋の先驅であるさまざまな蟲が、或は草原で、或は彼の萩の前で、或は彼の萩の下で鳴き初めた。楽しい田園の新秋の豫感が、村人の心を浮き立たせた。村の若者達は、娘を捜すために、二里三里を涼しい夜風に吹かれながら、その遅い歩みで歩いた。或る者は、又、村祭の用意に太鼓の稽古をして居た。その單純な鳴りものの一生懸命な響きが、夜更けまで、野面を傳うて彼の窓へ傳はつて來た。この村に歸省してゐた女學生、それは市師範學校の生徒で、この村で唯一の女學生は、夏の終りに、彼の妻と友達になつたが、間もなく喜ばしうにその學校のある都會へ彼の妻をとり残して歸つて行つた。

彼の狂暴ないらだたしい心持は、この家へ移つて來て後は、漸く、彼から去つたやうであつた。さうして秋近くなつた今日では、彼の氣分も自ら平靜であつた。彼は、ちやうど草や木や風や雲のやうに、それほど敏感に、自然の影響を身に感得して居ることを知るのが、一種の愉快で誇りにさへ思はれた。この夜ごろの

燈は懐かしいものである。それは心身ともに疲れた彼のやうな人人の目には、柔かな床しい光を與へるランプの光であつた。彼はそのランプを、この地方へ來た行商人から二十幾錢かで買つた。その紙で出來た燈は一錢であつた。けれどもそのランプのガラスの壺は、石油を透して琥珀の塊のやうに美しかつた。或る時には、薄い紫になつて、紫水晶のことを思はせた。その燈の下で、彼は、最初、聖フランシスの傳記を愛讀しようとした。けれども彼は直ぐに飽きた。根氣といふものは、彼の體には、今は寸毫も残されては居なかつた。さうしてどの本を讀みかけても、一切の書物はどれもこれも、皆一様に彼にはつまらなく感じられた。そればかりか、そんな退屈な書物が、世の中で立派に満足されて居るかと思ふと、それが非常に不思議でさへあつた。何か——人間を、彼自身を、すべての物がこの世界とは全く違つたものから出來上つてゐる別世界へ引きずり上げて行くやうな、或はただ彼の目の前へだらしなく展げられてゐるこの古い古い世界を全然別箇のものにして見せるやうな、或はそれを全く根柢から撥してめちやめちやにするやうな、それは何でもいい、ただもう非常な、素直らし

い何ものかが、どうかして、何處かにありさうなものだ。彼はしばしば漫然とそんなことを考へて居た。ほんとうに「日の下には新らしいものがあることは無い」のか。さうして一般の世間の人たちは、それなら一たい何を生き甲斐にして生きていることが出來て居るのであるか？ 彼等は唯彼等自身の、それぞれの愚かさの上に、さもしたりにげに、各の空虚な夢を築き上げて、それが何も無い夢であるといふ事さへも氣づかない程に狂つて生きてゐるだけではなからうか——それは賢人でも馬鹿でも、哲人でも商人でも。人生といふものは、果して生きているだけの値のあるものであらうか。さうして死といふものはまた死ぬだけの値のあるものであらうか。彼は夜毎にそんなことをも考へて居た。さうして、この重苦しい困難きつた退屈が、彼の心の奥底に集積して居る以上、その心の持主の目が見るところの世界萬物は、何時でも、一切、何處までも、退屈なものであるのが當然だといふ事——さうしてこの古い古い世界に新らしく生きているといふ唯一の方法は、彼自身が彼自身の心鏡を一轉するより外にはない事を、彼が知り得た時、但、さういふ状態の己自身を、どうして、どんな方法で新鮮なものにすることが出來



妙な、繊細な、無駄なほど微かな形の美の世界が、何となく今の彼の神經には親しみが多かった。

馬追ひは、毎夜、彼のランプを訪問した。彼は、最初には、この蟲が何のためにランプの光を惹いて来るのか、さてその笠をぐるぐると廻るのか、それらの意味を知らなかつた。併し、見て居るうちに直ぐに解つた。それは決してその蟲の趣味や道樂ではなかつたのである。この蟲は、其處へ跳んで来て、その上にたかつて居るところのもう一層小さい外の蟲どもを食ふためであつたのだ。それらの蟲どもは、夏の自然の端くれを粉にしたとも言ひたいほどに極く微細な、ただ青いだけの蟲であつた。馬追ひは彼の小さな足でもつてそれらの蟲を掻き込むやうに捉へて、それを自分の口のなかへ持つて行つた。馬追ひの口は、何か鋼鐵で出来た精巧な機械にもありさうな仕掛に、ばつくりと開いては、直ぐ四方から一度に閉ぢられた。一層小さな蟲どもはもぐもぐと、この強者の行くに任せて食はれた。食はれる蟲は、その食はれるのを見て居ても、別に何の感情をも誘はれないほど小さく、また親しみのないものばかりであつた。指さきでそれを軽く壓へると、それらの小

さな蟲は、青茶色の斑點をそこに遺して消え去せてしまふほどである。

馬追ひは、或る夜、どこでどうしたのであるか、長い跳ねる脚の片方を失つて飛んで来た。長い觸角の一本も短く折れてしまつてゐた。

遂には或る夜、彼の制止をも聞かなかつた猫が、書棚の上で、彼の主人の夜ごとの友人であるこの不幸な者を捉へた。さんざんに弄んだ上で、その馬追ひを食つて仕舞つた。彼は今度生れ變る時にはこんな蟲もいと思つたことを思ひ出すと、こんな蟲とてもなかなか氣樂ではないかも知れないと小さな蟲の生活を考へて見た。

彼がそんな風な童話めいた空想に耽り、酔ひ、弄んで居る間に、彼の妻は寢床の下で鳴くこほろぎの聲を沁み沁みと聞きつつ、別の童話に思ひ耽つて居るのであつた。——こほろぎの歌から、冬の衣類の用意を思つて、猫が飛び乗つても揺れるところの、空っぽになつた彼女の簞笥の事を考へ、それから今は手もとにない彼女のいろいろな嗜好のことを考へた。さうしてそれ等の着物の縞や模様や色合ひなどが、一つ一つ仔細に瞭然と思ひ浮ばれた。又それにつれてそれ等の一かさね一かさねが持つて居る各

の歴史を追想した。深い吐息がそれ等の考へのなかに雜り、さてはそれが涙ともなつた。彼の女は、女特有の身勝手な主觀によつて、彼の女の弄具の人生苦を人生最大の受難にして考へることが出来た。さうして其悲嘆は、両も訴ふるところがなかつた。これ等のことを今更に告げて見たところで、それをどうしようとも思はぬらしく、何ものも無きに似たれどもすべてのものを持つてり」といふやうな句をただ聞かせるだけで、一人勝手に生きて居る夫、象牙の塔で夢みながら、見えもしない人生を俯瞰した積りで生きて居る夫、その夫を妻が頼み少く思ふことは是非ない事である。彼の女は、時々こんな山里へ来るやうになつた自分を、その短い過去を、運命を、夢のやうに思ひ廻しても見た。さて、今でもまだ舞臺生活をして居る彼の女の技藝上の競争者達を、(彼の女はもと女優であつた。今の自分にひきくらべて華やかに想望することもあつた。……Nといふ山の中の小さな停車場まで二里、馬車のあるところまで一里半、その何れに依つても、それから再び鐵道院の電車を一時間、眞直ぐの里程にすれば六七里しても、その東京までは半日がかりだ……それにしても、どんな大理想があるかは知らないが、



物も無かつたのである。捉へ得たと思つた時、それはただ空閑であつた、ちやうど夢のなかで戀人を抱く人のやうに。そのもどかしさと一緒に、彼はふと自分の名が呼びかけられたと思つて振り返つた時、そこに言葉の主が誰もなかつた時に似た不安をも、その度毎に味うた。

家の圖面を引くことを、彼は再び初めた。彼は非常に複雑な迷宮のやうな構へを想像するこゝとがあつた。さうかと思ふと、コルシカの家がさうであるといふやうに、客間としても寢所としても唯大きな一室より無い家を考へることであつた。その外形や、間どりや、窓などの部分の意匠のデテイルなどが、殆んど毎夜のやうに、彼のノオトブックの上へ縦横に描き出された。遂には白い頁はもう一枚も無くなり、方一寸ぐらゐの餘白が最も貴重なものとして探し出されて、そこもいろいろに組合された幾多の直線で、ぎつしりと埋められてあつた。その無意味な一つ一つの直線に對して、彼は無限の空想を持つことが出来た。そんな時の彼の心持は、ただ一人で監禁された時には、無心で一途に唐草模様を描き耽るものだといふ狂氣の畫家たちによほどよく似て居た。

かうして、又してもたうとう生氣のない無聊

が來た。さうしてそれが幾日もつづいた。

\* \* \*

或る夜、彼のランプの、紙で出来た笠へ、がごと音を立てて飛んで來たものがあつた。

見るとそれは一疋の馬追ひである。その青い、すつきりとした蟲は、その縁を紅くぼかして染め出したランプの笠の上へとまつて、それらの紅と青との對照が先づ彼の目をそれに吸ひつけたが、その姿と動作とが、更におもむろに彼の興味を呼んだ。その蟲は、それ自身の體の半分ほどもあるやうな長い觸角を、自分自身の上方でゆるやかに動かしながら、ランプの圓い笠の紅い場所を、ぐるぐると青く動いて進んで行つた。それは圓く造られた庭園の外側に沿うて漫步する人のやうな氣どつた足どりのやうにさへ、彼には思へた。この青い細長い形の優雅な蟲は、そのきやしやな背中の頂のところにだけ赤茶けた色をして居た。彼は笠の首すぢの赤いことを初めて知り得て、それを歌つた松尾桃青の心持を感じることが出来た。この蟲は、しばらくその圓いところをぐるぐると歩いた。さうして時々、不意に、壁の長押や、障子の棧や、取り散した書櫃や、或は夜更しをしす

ぎて何時になれば寢るものともきまらない夫を勝手にさせて自分だけ先づ眠つて居る彼の妻の蚊帳の上のどこかなどへ、身輕るに飛び渡つては鳴いて見せた。「人間に生れることばかりが、必ずしも幸福ではない」と、草雲雀に就てそんなことを或る詩人が言つた。「今度生れ替る時にはこんな蟲になるのもいい」或る時、彼はそれと同じやうなことを考へながらその蟲を見て居るうちに、ふと、シルクハットの上へ薄羽蜚蜚のまつて居る小さな世界の場面を空想した。あの秀明な大きな翅を背負うた青い小娘の思のやうにふはふはした小さな蟲が、漆黒なびかびかした多少怪奇な形を具へた帽子の眞角なかどの上へ、頼りなげに併しはつきりとまつて、その角の表面をその縁に沿うてのろのろと這つて行く……。それを明るい電燈が黙つて上から照して居た……。彼は突然、彼の目を上げて光を覗いた。それは電燈ではない。ランプの光である。彼はそのランプの光を自分の空想と混同して、自分も今電燈の下に居るやうに思つたからである。

何故に彼がシルクハットと薄羽蜚蜚といふやうな對照をひよつくり思ひ出したか。それは彼自身でも解らなかつた。唯、さういふ風な、奇

彼が蟲をとり選がした空しい手をひらいて見せると、大どもは訝しげに、主人の手の中と主人の顔とをかはるがはる見くらべて、彼等は一様にその頭をかしげ、それから彼等の口の端を少し曲めて、その可憐に輝く眼で彼の顔を見上げた。それがさも主人のその失敗に驚き失望しながら、けれども何故ともなく主人に媚びて居る様であつた。彼等大には、實に豊かな表情があつた！ 彼等は幾度もその徒らな期待の經驗をしたがらも、矢張り自分達よりも主人の方が蟲を捉へるにでも怪しい筈だといふ信念を、決して失はないらしかつた。彼の蟬を捉へようとする身構へと手つきとを見る毎に、彼等は彼等自身が既に成功して居るも同然な蟲を放擲して、主人の手つきを見つめたまま、何時までもその恵みを待ちうけて居るのであつた。彼は空しくひろげた掌で失望して居る大どもの頭を愛撫して居た。大はそれにでも満足して尾を振つた。彼には、それが——大どもの無智な信頼が、またそれに報ゆることの出来ない事が、妙に切なかつた。彼が人間同士の幾多の信頼に反して居ることよりも、この純一な自分の歸依者に對しての申請なきは、彼には寧ろ敷層倍も以上に感じられた。彼は、彼等のあの特有な澄み切つ

た眼つきで見上げられるのが切なきに、遂には、日の前の蟲を捉へようとする一種反射運動的な動作を試みないやうに、細心に努力するのであつた。

何時か、彼自身で手入れをしてやつた日かげの薔薇の木は、それに覆ひかぶさつて居た木木の枝葉を彼が刈り去つて、その上には日の光が浴びられるやうになつた後、一週間ばかり経つと、今では日かげの薔薇ではないその枝には、初めて、ほの紅い芽がところどころに見え出した、さうして更に、その兩三日の後には、太陽の強くべき力が、早くもその芽を若々しい集に仕立てて居た。併し、彼は顔を洗ふために井戸端へは毎朝來ながら、何時しか、それらの薔薇の木のことは忘れるともなくもう全く忘れ果てて居た。

岡らずも、ある朝——それは彼がそれの手入れをしてやつてから二十日足らずの後である、彼は偶然、それ等の木の或る綠鮮やかな葉の新らしい枝の上に花が咲いて居るのを見出した。赤く、高く、ただ一つ。「永い永い牢獄のなかでのやうな一年の後、に、今やつと、また五月が來たのであらうか！」その林れかかつて居た木の季節外れな花は、歡喜の深い吐息を吐き出した。

がら、さう言ひたげに、今四邊を見まはして居るのであつた。秋近い日の光はそれに向つて注集して居た。おお、薔薇の花。彼自身の花。「薔薇ならば花開かん—彼は思はず再び、その手入れをした日の心持が激しく思ひ出された。彼は高く手を延べてその枝を捉へた。そこには嬰兒の爪ほど色あざやかな石竹色の軟かい葉があつて、軽く枝を捉へた彼の手を軽く刺した。それは、甘える愛猫が彼の指を優しく噛む時ほどの痒さを彼に感ぜさせた。彼はそれをたわめてそれを己の身近くひき寄せた。その唯一一つの花は、咲！ ちやうどアネモネの花ほど大きかつた。さうしてそれの八重の花びらは山櫻のそれよりももつと小さかつた。それは庭前の花といふよりも、寧ろ路傍の花の如くであつた。而もその小さな、哀れな、畸形の花が、少年の肩よりも軽く、さうしてやはり薔薇特有の可憐な風情と氣品とを具へ、鼻を近づけるとそれが香さへ帶びて居るのを知つた時彼は言ひ知れぬ感に打たれた。悲しみに似、喜びにも似て何れとも分ち難い感情が、切なく彼にこみ上げたのである。それは恰も、あの主人に信置しきつて居る無智な大の澄みきつた眼でうつと見上げられた時の氣持に似て、もつともつと激しかつた。

こんな田舎へ住むと言ひ出した夫を、又それをうかうかと賛成した彼の女自身を、わけても前者を彼の女は最も非難せずには居られなかつた。遠い東京……近い東京……近い東京……遠い東京……その東京の街街が、アクライトや、ショウキインドウや、おひおひとシイズンになつてくる劇場の廊下や、樂屋や、それらが眠らうとして居る彼の女の目の前をゆつくり通り過ぎた。

\* \* \* \* \*

空の夕焼が毎日つづいた。けれどもそれはついで二三週間前までのやうな灼け爛れた眞赤な空ではなかつた。底には深く沈んだ黄色を隠してうはべだけが紅であつた。明日の暑さで威嚇する夕焼ではなく、明日の快晴を約束する夕焼であつた。西北の空にあたつて、ごく近く、或る丘の四みの間から、富士山がその眞白な頭だけを現して、夕映のなかでくつきり光つて居た。俗悪なまで有名なこの山は、ただそのごく小部分しか見えないといふことに依つて、その本来の美を保ち得て居た。この間うちまでは重り合つた夕雲のかげになつて、それらの雲の一部か或は山かと怪しまれた西方の地平に連

る灰黒色な一列は、今見れば、何處か遠くの連山であることが確かになつた。今日も亦無駄に費したといふ平凡な悔恨が、毎日この夕映を仰ぐ度に、彼にははげしく瞬間的に湧き上るのであつた。多分、色彩といふものが誘ふ感傷が、彼の病的になつてゐる心をさういふ風に刺戟したのであつたらう。地の上の足もとを見るとき、彼の足場である土橋の下を、渠の水が夕榮の空を反映して太い朱線になつて光り、流れて居た。

田の面には、風が自分の姿を、そこに渚のやうな曲線で描き出しながら、ゆるやかに蠕動して進んで居た。それは涼しい夕風であつた。稲田はまだ黄ばむといふほどではなかつたけれども、花は既に實になつて居た。さうして蝗がそれらの少しうな垂れた穂の間で、少しづつ生れ初めて居た。蛭母といふ赤い丸い草の實のころがつて居る田の畦には、彼の足もたら蝗が時折飛び跳ねた。すると彼の散歩の供をして居る二匹の犬は、より早くそれを見出すや否や、彼等の前足でそれを押し壓へると、其處に半死半生で横はつて居る蝗を甘さうに食つてしまつた。彼等の一足はそれを見出す點で、他の一足よりも敏捷であつた。併し、前足を用ゐて捉

へる段になると、別の一定の方が反つて機敏であつた。又一足の方はとり迷ひした奴を直ぐあきらめるらしかつたけれども、他の一足はなかなか執拗に稲田のなかにまで足を泥にふみ込んで追ひ込む。彼等にもよく觀れば各違つた性質を具へて居るのが彼を面白がらせ、且つ一層彼等を愛させた。稲の穂がだんだん頭を垂れてゆくににつれて、蝗の数は一時に非常に殖えて居た。犬は自分からさきになつて彼を意欲やうにしながら田の方へ毎日彼を誘ひ出した。彼は日の前の蝗を見ると、時々、それを捉へて犬どもに食はせてやりたくなつた。それで指を摘けた手で、その蟲をおさへようとした。犬どもは彼等の主人がその身構へをすると、主人の意思がわかるやうになつたと見えて、自分の捉へかかつて居るのを途中でやめて、主人の手つきを目で追うて、主人の獲物が與へられるのを待つて居るのであつた。けれども彼は大てい五度に一度ぐらゐりよりそれを捉へることが出来なかつた。ただ掻きとれた足だけを握つて居たりした。彼は蟲を捉へるには、それに巧でない方の犬にくらべてもずつと下手であつた。それにも拘はらず、犬どもはそんな事にまで主人の優越を信じて、主人を信頼して居るらしかつた。さうして、



入りたいと思つても、彼の家には風呂桶はなかつた。近所の農家では、天氣の日には毎日風呂を沸かしたけれども、野良仕事をしないこの頃の雨の日には、わざわざ水を汲んだりしてまで、風呂へ入る必要はないと、彼等は言つて居た。さうして農家では、朝から何にもせずに、何にも食はずに寝て居るといふ家族もあつた。猫は、毎日毎日外へ出て歩いて、濡れた體と泥だらけの足とで家中を横行した。そればかりか、この猫は或る日、蛙を唾へて家のなかへ運び込んでからは、寒さで動作ののろくなつて居る蛙を、毎日毎日、幾つも幾つも唾へて來た。妻はおぼろげやうに叫び立てて逃げまはつた。いかに叱つても、猫はそれを運ぶことをやめなかつた。妻も叫び立てることをやめなかつた。生白い腹を見せて、蛙は座敷のなかで、よく冗んで居た。猫は家のなかを荒野と同じやうに考へてゐる。さうして家のなかは荒野と全く同じであつた。

或る日、彼の二匹の犬は、隣家の鶏を捕へて食つて居るところを、その家の作代に見つかつて、散散打たれて歸つて來た。その隣家へ、彼の妻がその詫言に行つたところが、圓滑な言葉といふものを學ばなかつた田舎大盡の老妻

君は、案外な不機嫌であつた。犬は以後一切樂いで置いて貰ひたい。運動させなければならぬならば、どうせ遊んで居られる方ばかりだから自分達で連れて歩けばいい。庭のなかへ這入つては糞をしちらかす。田や畑は荒す。夜は吠えてやかましい。そのために子供が目をさます。その上について一週間ほど前から外を喧め始めたばかりのいい鶏などを食はれてたまるものではない。まるで狼のやうな大だ。若し以後、庭のなかへ這入るやうな事があつたならば、遠慮はして居られないから打ちめす、うちには外にも澤山の鶏があるのだから、と何か別的事で非常に激昂して居るらしい心を、彼の犬の方へうつして、ヒステリカルな聲で散散に吐鳴り立てた。その聲が自分の家のなかで坐つて居る彼の耳にまで聞えて來た。この中老の婦人はこの犬どもの主人が、他の村人のやうに彼の女に對して尊敬を拂はぬといつて、籠籠に不愉快に思つて居たからであつた。最も奇妙なことに、彼の女は彼等夫婦が何もう野良仕事をしないといふ事實に就ての彼の女自身の單純な解釋から、彼の女の新しい隣人が何か非常に貧乏な生活でもして居るものと推察して居たものと見える。かういふわけで、發育盛りの若い

二匹の犬は、毎日鎖で繋がれねばならなかつた。彼は初めの數日は自分で自分の犬を運動に連れて行つた。二匹の犬を一人で牽くのは仲々にむづかしかつた。それに傘をもささねばならなかつた。道は非常に滑つて居た。どうせ遊んで居る閑人だ、運動なら自分で連れて歩け、と言つた言葉を思ひ出すと、彼は歩きながら悲しげに苦笑を渡した。若い人さな犬どもは五町や六町位の運動では、到底満足しなかつた。それに彼等は普通の道路を厭うて、そのなかへ足を踏み込むと露で脛まで濡れる畦道の方へ横溢した活氣でもつて、その鎖を強く引つ張りながら、よるめく彼を引き込んで行つた。わけでも關犬の性質を持つた一匹は非常な力であつた。それらの様子を、隣家の老妻君は家のなかから見て居るやうに、彼は思つた。實際そんな時もある。運動不足で満腹を起して居る犬どもは、繋がれながら、夕方になると、與へた飯を一口だけで見むきもせずに、ものに怯えて、淋しい長い聲で何かを訴へて吠え立てた。その聲が、雨のためにほの白く煙つた空間を傳うて、家の向側の丘の方へ傳つて行くと、その丘からはその聲が重苦しい山彦になつて吠え返して來る。犬はそれを自分たち自身の聲とは知らずに、再び



譬へば、それはふとした好奇な出来心から親切を盡してやつて、今は既に全く忘れて居た小娘に、後に偶然にめぐり逢うて「わたしはあの時このかた、あなたの事ばかりを思ひつめて来た。したうでも言はれたやうな心持であつた。彼は一種不可思議な感激に身ぶるひさへ出て、思はず目をしばたたくと、目の前の赤い小さな薔薇は急にぼやけて、双の眼がしからは、涙がわれ知らず滲み出て居た。

涙が出てしまふと感激は直ぐ過ぎ去つた。併し、彼はまだ花の枝を手にしたまま呆然と立ちつくした。頬は涙が乾いて硬ばつて居た。彼はぢつと自分の心の方へ自分の目を向けた。さうして心のなかでいくつかの自分同士がする會話を、人ごとのやうに聞いて居た——

「馬鹿な、俺はいい氣持に詩人のやうに泣けて居る。花にか？ 自分の空想にか？」

「ふふ。若い御隠居がこんな山舎で人間性に饑えて御座る？」

「これあ、俺はひどいヒポコンデリヤだわい」

\* \* \* \* \*

或る夜、庭の樹立がさわめいて、見ると、静かな雨が野面を、丘を、樹を灰白く煙らせて、

それらの上にふりそいで居た。しつとりと降りそそぐ初秋の雨は、草屋根の下では、その聲も響も聞えなかつた。ただ家のなかの空氣をしめやかに、ランプの光をこまやかなものにした。さうして、それ等のなかにつまれて端坐した彼に、或る微かな心持、旅愁のやうな心持を抱かせた。さうして、その秋の雨白らも、遠くへ行く淋しい旅人のやうに、この村の上を通り過ぎて行くのであつた。彼は夜の雨戸をくりながらその白い雨の後姿を見入つた。

そんな雨が二度三度と村を通り過ぎると、夕方の風を寒がつて、猫は彼の主人にすり寄つた。身のまはりには單衣ものより持ち合せて居ない彼も震へた。

或る夕方から降り出した雨は、一晩明けても、二日経つても、三日経つても、なかなかやまなかつた。初めの内こそ、それらの雨にある或る心持を寄せて楽しんで居た彼も、もうこの陰氣な天候には飽き飽きした。それでも雨は未だやまない。

大の體には蚤がわいた。二匹の犬はいぢらしくも、互に、相手の背や尾のさきなどの蚤をとりに合つて居た。彼は彼等のこの動作を優しい心情をもつてながめた。併し、それ等の犬の蚤が

何時の間にか、彼にもうつつた。さうして毎晩蚤に苦しめられ出した。蚤は彼の體中をのそのそと無數の細い線になつて這ひまはつた。

それに運動の不足のために、暫く忘れて居た過性の胃病が、彼を先づ體から陰鬱にした。

それがやがて心を陰鬱にした。毎日毎日の全く同じ食卓が、彼の食慾を不振にした。その毎日同一の食物が彼の血液を腐らせさうにして居ると、感じないでは居られなかつた。犬でさへももうそれには飽きて居た。ちよつと鼻のさきを彼等の皿の上に押しつけただけで、彼等さへ再び見向きもしなかつた。けれどもこれに就て、彼は彼の妻には何も言ふべきではなかつた。この村にある食ひ物としては、これきりだからである。

彼の單物は、へなへなしとつて體にまっはりつき、彼の足のうらは脂汗のためにぬちぬちして、坐つて居る時にはその足の汗と變な温かさとが彼の尻に傳うて来て、蚤は好んでそこに集つて居た。頭の毛のなかにも蚤が居るやうな氣がした。それを梳かうとすると、冷りとしとつた生えるがままの手髪は、堅く櫛に絡んで、櫛は折れてしまつた。その蚤の巢のやうに感じられる體を洗つて、さつぱりするために、風呂に

と、その子供は口口に「いやだあ、うちでは皆眠てゐるだ、戸たてて。まづ暗だもの。下のうちで遊んで来うと言つたべし」と言ふのであつた。「下のうち」といふのは彼の家を指すのである。犬や猫ばかりでない、確にこの子供達が一層澤山に蚤を負うて来るに違ひない、と彼は考へた。彼はいらいらしながらも、よその人とさへ言へばこんな子供にまで小さくなつて、小言一つ言へない性質であつた。さうしてそんなことには無神経なほど無頓着な彼の妻が、その子供たちに雨降りのなかを、お豆腐を買つて来い、お砂糖がなくなつたのと言つては、あまりしげしげ用事に使ふのを見ると、彼は反つてはらはらして、妻を叱り飛ばした。

その子供達の家へ風呂を貰ひに行くと、七十位の百日で耳の遠い老婆が、風呂釜の下を燃してくれないながら、いろいろと東京の話听取了がたつた。東京の話ではない江戸の話である。この老婆は「煙のやうな昔」とそのツルゲニエフのやうな言葉をその老婆自身が言つた娘のところに、江戸の某様の御屋敷で御奉公したとかで、御維新の騒ぎで殿様が甲府の町奉行になるところが駄目になつた話やら、その年は實に悪い年で山王様の御祭が満足に出来なかつた

ことやらを、とぎれとぎれに語り出して、さてまだ眼の見えた昔に見た江戸の質問を彼にするのであつた。維新で田舎へ歸つたと言ひながら、その維新とはどんなものであるかは知らないのであつた。その時にはどんな世の中に代ることかと思つたのに、昔とちつとも代りはしない。こんなことなら、何もあんな大騒ぎをすることもなかつたのに……とそんなことを呟いた。さうして電車が通つて居たり、公園があつたりする東京といふものの概念は何一つ持つて居なかつた。彼には答へる術もないその江戸の質問を、くどくどと尋ねるのであつた。さて彼が「江戸」の事は不案内だと氣がつくと、彼の女の娘時代のその家の全盛、今の主人である息子の馬鹿さ、身上も持てないくせにけちんぼうで御近所へのつき合ひもろくに出来ないこと、それから思ひ出して子供が毎度遊びに行つて御邪魔をするといふやうなこと、あなたの商賣は何だといふ質問、實に實に平凡なことどもを長長と聞かせて、それに對してそれと同等に長長しい返答を要求するのであつた。それでなくてさへ口不調法な彼には、返事の仕方が解らなかつた。それにこの老婆は答へても何も聞えぬだらうほど耳が遠かつた。「俺にはそんな話は面白

くないのだ！ ひとのことなどはどうでもいいのだ！」彼はさう叫んでやりたくなつた。この老婆のくどい話は結局、何のことであるかは解らなかつたけれども、彼の氣持をじめじめさせるには、何しろ十分すぎた。しかもその相手になつてくれと懇願する表情（それは牛ばは死んで居て、犬のその半分の體かではない）をもつて、この老婆は五十六の時に全く失明したと、今のさつきも物語つたその兩眼で、彼を見上げた。見つめた。風呂釜の火がしきりゆらゆらと燃え上つて、ふと、この腰の全く曲つて居る老婆を照すと、片手に長い薙を持つた老婆は、廣い農家の大きな物置場の暗闇の背景からくつきり浮き上つて、何か呪を呟く妖婆のやうにも見えた。

その風呂場を脱れ出でくると、さすがに夜風がさわやかに、彼の湯上りの肌を撫でた。併し家へ歸つて見ると、彼の妻はホヤのすすけた吊りランプの影で、里の母からでも來たらしい手紙を讀んで居たが、彼には見せたくないらしく、速にそれを長長と巻き締めると、不興極まる顔をして、その吐息を彼に吹きかけでもするかのやうに彼をまともに見上げて、涙で光らせた瞳で彼を見上げた。それは何か威嚇するやうに

より激しくそれへ吠え返した。それが再び山の方へびびき渡る。かうしていつまでも犬の遠吠えはやまない。犬をなだめてやらうとして、彼等の名を呼んでも、もうおびえきつて居る犬どもは、彼等の主人をさへ怖しがつて尻込みした。仕方なしにそのまま犬を吠えさせて置くと、そのけたたましいやるせかい聲は、彼の心の底へ沁み込みそれを震動させて、ちやうど胸騒ぎする時の心臓のやうに彼の胸を壓しつけるのである。犬はかうした夕方毎に一しきり物凄く長鳴きした。或る時には犬のその聲を聞いて、隣の隣の大盡の家からは「ほんとうになんといふうるさい大だらう！」と、大きな聲で子供が吐鳴るやうなこともあつた。彼は例の老妻君が、自分の氣にさう言はせて居るのだと氣がついて、この度し難い女に業を煮やした。猫の方は猫で、相變らず蛙を啞へて来て、のつそりと泥だらけの足で夕闇の座敷をうろつて居た。彼は時にはそれらの猫を強く蹴り飛ばした。連日の雨にしみつて燃えなくなつて居る薪の煙が、風の具合で、意地わるく毎日座敷の方へばかり這入り込んで来て天井一面に重くのさばつた。

晝間の犬の音なしの時には、例の隣家の大盡の家では、卵を生んだ鶏が何羽も何羽も、人の脚をそそり盡されば措かないやうな聲で、けけけ、けけけと一時間もそれ以上も鳴きつづけた。或る日、それらの一羽が、彼の家へ紛れ込んで来たが、犬どもの聲がれて居るのを見ると、したりげに後から後から群をなして彼の庭へ闖入した。さうして犬の食ひちらした飯粒を依然と拾ひ初めた。犬は腹を立てて追ふ。鶏はちよつと身を引く。腹を立てた犬は吠え立てたけれども、鶏の一群は別に怖かなかつた。その一群の闖入者を追ひ捌はうとして走り出した犬には、鎖が頸玉をしつかりとおさへて居た。あせればあせるだけ彼自身の喉が締めつけられるだけであつた。遂には彼等同上の二つの鎖が互の身動きも出来ない程に絡み合つて居たりする。さうしてそれを訴へて吠える。彼は雨のなかへ下りて行つて、どう纏れて居るか解らない鎖を直してやらうとする。犬どもは喜んで泥だらけの足を彼の胸のあたりへ叩しつける。犬どもがちつとして居なために、鎖は更に複雑に纏れ合つて行く。苛立たしくもどうしても解けない。たうとう犬は悲鳴をあげる。一度追はれた鶏は、その間に再び平氣で縁側へさへ上つて来て、そこへ汚水のやうな糞をしたりした。手を擴けて追ふと、彼等はさも樂業しく叫

び立てた。彼等はちやうど、あの意地わるくの女主人に言附かつて、彼を擲擲するために来たかときへ思はれた。その女主人は、塙根の向うから、それらの光景を見て居ながら、わざと氣のつかぬふりをして居る。彼の妻はそれを見る、何かあてつけらしく鶏を罵りさうにするのを彼は制止した。彼はそんな事をしては悪いと思つて居るよりも、臆病と卑屈とから、それすらも出来ないものであつた。さうして内心は妻よりより以上に憤慨して居るのである。別の隣家の小汚い女の子が二人、別に嬰兒まで負つて、雨で遊び場がないので、猫よりもつと汚い足と着物とで彼の家へ押込んで来た。昔中の嬰兒が泣く。さうして三人ともそれぞれに何をしても欲しがる。お桑といふ名の十三になるといふ一番上の兒は、もうすでに女特有の性質を發揮して彼の妻を相手に、隣の大盡の家の悪口やら、いろいろの世間話を口やかましく聞かせて居た。それ等の兒は時々彼等が風呂を買つて這入る家の子なので、その子を追ひ立てることは出来にくいと妻は言つた。その實、彼の妻はそんな子供をでも話相手に欲しかつたのである。それでも、さすが彼の妻もうるさいと思ふ時もあると見える。「もううちへお歸り」といふ



彼に向つて、横柄に呼びかけた。巡查かも知れない、と彼は思つた。

「これやあ君の家の犬だらう」

「さうだ、何故だい」

「これやあ、怖くて通れんわい」

その村位、犬を恐怖する村は、先づ世界中にないと、彼は思つた。この附近には、狂犬が非常に多いからだ。村の一人が説明して居た。それに彼の犬の正体は純粹の日本犬であつた。

「大丈夫だよ。形は怖い、おとなしい犬だから」

「何が大丈夫だい。怖くて通れもしない」

「狂犬ぢやないよ。吠えもしないぢやないか」

「飼つて居る者はさうでも、飼はんものにはおつかない。ちよつと出て来て、繋いだらどうだい」

この何者かの非常に横柄な口調は、其奴が闇で覆面して居るからだと思ふと、彼は非常に憤ろしかつた。彼はいきなり其處にあつた杖をとると、傘もささずに道の方へ飛び出した。

雨は糠ほどより降つて居ない。その知らない男は、何かまだぐづぐづ言つて居た。さうしてどうしてもこの犬を繋げ、それでなければ俺は通れぬ、と言ひ張つた。可笑しいほど犬を恐れ乍

ら、可笑しいほど一人で威張つて居た。「これは優しい犬だ、未だ子供だから人懐きが通る人の傍へ行くのだ」と彼は犬のために辯護した。

彼にとつては、今、犬は無辜の民である。その男は暴君である。彼自身は義民であつた。その男の言ふことが一理不盡に思へた彼は、果は大聲でその男を罵つた。彼の妻は何事かと縁側へ出て来たが、この様子を見ると彼の女は暗

のなかの通行人に向つて頻りに詫言ひて居た。彼にはそれが又腹立ちしかつた。

「黙つて居ろ。卑屈な奴だ、誤る事はない。犬が悪いのぢやないぞ。この男が臆病なんだ。

子供や泥棒ぢやあるまいし……」

「何、泥棒だ」と

「お前が泥棒だと言ひしないよ。音無しく尾を振つて居る犬をそんなに怖がる奴は泥棒見たいだと言つただけだ」

彼は、しまひには、その男を罵りつけるつもりであつた。彼等は五六間を距てて口争ひして居た。其處へ、見知らない男の後から一つの提灯が来た。それがその男に向つて何か言つて居たが、提灯は彼の方へ近づいて来た。奴等は棒組だな、と彼は即座にさう思つた。若し傍へ来て何か言つたら、と彼は杖をとり直して身

構へした。

「どうぞ堪忍してやつて下さいましよ。親類やお酒をくらつて居るんでさ」

その提灯の男は、反つて彼に誤つて居たのだ。彼は相手が酔つたらひであつたと知れると、急に自分が馬鹿げて来た。併し、彼は笑へもしなかつた。その時或る説明しがたい心持で、身構へて把つて居た自分の杖をふり上げると、自分の前で何事も知らずに尾を振つてゐる自分の犬を、彼は強かに打ち下した。犬は不意を打たれて、けん、けん、と叫びながら家のなかへ逃げ込む。打たれない犬もつづいて逃込む。彼は呆然とそこに立つて居たが、舌打をして、その杖を渠のなかへたたきつけると、すたすたと家へ這入つて行つた。犬は二足とも床下深く身を隠して居た。さうして庭に這入つて来た彼を見た時、彼等は細い悲しい聲を上げて、彼等の訴へを吹えた。杖を捨てて未だ握つて居た彼の掌は、ぬちこちと汗ばんで居た。

「今に見ろ。村の者を集めてあの犬を打殺してやらあ！」酔つたらひはそんな事を言ひながら、提灯をもつた若い男に連れられて通り去つた。

酔つたらひのその捨白が、その晩から、彼に



も見え、哀願するやうにも見えた。その手紙を、彼は讀まずとも知つてゐる。彼にはつまらぬことであつて、彼の女達には重大な何事かであらう。彼の女等は互に彼の女等の苦しい困窮を訴へ合つて居るのであらう……彼の家には、もう一人泣きに来る女があつた。それはお絹といふ名の四十近い女であつた。彼等がこの家へ引越して来る時に、この家へ案内し、引越しの手傳ひをしたあの女である。その内縁で、その後、彼の家庭へ時々出入りするやうになつた女である。彼の女は身の上ばなしを初めてはよく泣いて来た。お絹はいろいろな生涯を経てこの村へ流れて来た女であつた。最初にたつた一度、あの珍らしきからついこの女の身の上咄に耳を傾けたのが原因で、お絹はその後いつもいつも一つの話を繰り返した。彼はしまひにはお絹の顔を見ると腹立しくなつた。もつとも不思議なことには、彼はお絹の顔さへ見れば胃のあたりが鈍痛し初めるのであつた……。

床の下では、犬が蚤にせめ立てられて、それを追ふために身を揺すぶると、その度にゆれる鎖の音が、がちやがちやと彼に聞えて来た。彼はお絹の身の上ばなしよりも、蚤に惱まされて居る犬の方に、より多くの同情を持つた。さう

して彼は自分自身の背中にも、脇腹にも、襟にも、頭の毛のなかに、蚤が無数にうごめき出すのを感じた……。

せめては早く雨だけでも晴れてくれないうものかと、彼は毎日夕方になると空を見上げた。彼は何故か夕方に空を見上げた。さうして星でも出ては居ないかと、空を見まはした。星どころか、野面は白く焼つて、空はただ無限に重かつた。

些細な單調な出来事のコンビネーションや、パミテエションが、毎日單調に繰り返された。それらがひと度彼の體や心の具合に結びつくことと、それは悉く憂鬱な厭世的なものに化つた。雨は何時までも降りやまない。それは今日でもう幾日になるか、五日であるか、十日であるか、二週間であるか、それとも一週間であるか、彼はそれを知らない。唯もうどの日も、どの日も、區別の無い、單調な、重苦しい、長長しい幾日かであつた。牢獄のなかで人はかういふ幾日かを送るであらうか？ おお！ 然うだ。日陰になつて、五月になつても、八月の半頃になつても青い葉一枚とはなく、ただ蒸ばかりが蔓草のやうに徒らによろめいて延びて居た、この家の井戸端のあの薔薇の木の生活だ。彼は

再び薔薇のことを考へた。考へたばかりではない。あの日かけの薔薇の鬱悶を今は生活そのものをもつて考へるのである、こんな毎日の机の前に坐り込んだまま。

薔薇といへば、その薔薇は、何時かあの涙ぐましい——事實、彼に涙を流させた暗黒な花を一つ咲かせてから、日ましによい花を咲かせて、咲き誇らせて居たのに、花はまたこの頃の長い長い雨に、花片はことごとく紙片のやうによれよれになつて、濡れに濡れて碎けて居た。碎けて吠いた。

\* \* \* \* \*

こんな日頃に、ただ深夜ばかりが、彼に慰安と落着きと與へた。鶏の居ない夜だけ、鎖から放して置くことにした犬が、今ごろ、田の畔をでも元氣よく跳びまはつて居るかと思像することが、寢床のなかで彼をのびのびした氣持にした。

併し或る夜であつた。家の外から彼の家を喚ぶものがあつた。未だ机の前に坐りこんで、考へに耽へつけられて居た彼は、縁側の戸を開けて見ると、一人の黒い男が、生垣と渠との向うの道の上に立つて居た。さうしてその何者かが

は激しく鳴き叫んだ。

彼は、犬に對する夜中の心配を、書間に考へ直すことがあつたが、これはどうも一種の脅迫観念だと氣づかずには居られなかつた。犬だつて自分の力で自分を保護することは知つて居るだらう……さうして、たわいもない犬のこたなどをばかり考へて居る自分が、恥しくも情けなかつた。けれども夜になると、やはり「俺の犬は盜まれる、殺される! きつとだ!」今では、犬は彼にとつてただ犬ではなかつた——何か或る象徴であつた。愛するといふ事は實にそれで苦しむといふ事であつた。杖のこともなかなか忘れられなかつた。犬の心配のない時には、銀金具の握のある杖が、その金具の重みのために頭の方だけ少し沈みながら、濁つた渠のなかを、流れのまにまに浮いたり沈んだりして、何處かを、さうして涯のない遠い何處かへ持つて行かれるために流れて行くところを、彼は屢々床のなかで空想して居た。

\* \* \* \* \*

雨は、一日小降りになつたかと思ふと、その次の日には前よりももう一層ひどく降る。さて、その次の日にはまた小降りになる。併し、その

次の次の日にはまた降りしきる……。この間歇的な雨は何日までも降る……。幾日でも、幾日でも降る……。彼の心身を腐らせようとして降る……。世界そのものを腐らせようとして降る……。

何もかも腐れ……、

腐るなら腐れ……、

勝手に腐れ……、

腐れ腐れ……、

お前の頭が……、

まつさきに腐れ……、

……、

……、

……、

……、

……、

……、

……、

……、

……、

……、

……、

……、

ここに一つの丘があつた。

彼の家の縁側から見ると、庭の松の枝と櫻の枝とは互に兩方から突き出して交り合つて、そこに穹隆形の空間が出来て、その樹と樹との枝と葉とが形作るアアチ形の曲線は、生垣の頭の真直ぐな直線で下から受け支へられて居た。言はばそれらが緑の枠をつくつて居た。額縁であつた。さうしてその額縁の空間のずつと底から、その丘は、程遠くの方に見えるのであつた。

彼は、何時初めてこの丘を見出したのであらう? とにかく、この丘が彼の目をひいた。さうして彼はこの丘を非常に好きになつて居た。長い陰氣なこのごろの雨の日の毎日毎日、彼の沈んだ心の窗である彼の瞳を、人生の憂鬱からそむけて外側の方へ向ける度毎に、彼の瞳に映つて来るのはその丘であつた。

その丘は、わけても、彼の庭の梅樹の枝と葉とが形作つたあの穹隆形の額縁を通して見る時に、自づと一つの別天地のやうな趣があつた。ちやうどいくらゐに程遠くで、さうして現實よりは夢幻的で、夢幻よりは現實的で、その上

は非常な心配の種になつた。村の者が、實際、彼の犬を打殺しはしないかと考へられ出すと、身の上話で泣いて居たあの太つちよの女が、いつか彼に告げた言葉も思ひ出された——「この村では冬になると犬を殺して食ひますよ。御用心なさい、御宅のは若くして太つて居るから丁度いいなんて、冗談でせうがそんな事をいつて居ましたよ」

捨てて仕舞つた杖は、思へば思ふほど、彼には非常に惜しいものであつた。それは唐草模様の花の彫刻をした銀の握のある杖であつた。別段それほど惜しむに足るものではないのに、それが彼には不思議なほど惜しまれた。その翌日は、彼は犬を運動させるやうなふりをして、その杖を捜す爲めに、渠の流れに沿うた道を十町以上も下つて見た。あの清らかであつた渠の水は、毎日の雨で徒らに濁り立つて居た。杖は何處にも見出されなかつた。彼はあんな風にして杖を無くした事を、妻にも内緒にして居るのであつた、全く羞づかしい事だつたので。

杖と酔漢の拾白とが、彼自身でさへ時時は可笑しいばかり氣にかかる。一層、あの時、あの男を捜りつけてやればよかつたに——彼は寢床の

なかで、口惜しくてならない時もあつた……若しや犬がいちめられて居はしないかと、それを夜中放して置くことが苦勞になり出した。氣を苛立てながら聞耳をそば立てると、犬の悲鳴がする。大急ぎで縁側へ出て戸を開けながら口笛を吹くと、犬は直ぐ何處から歸つて来る。さうして鳴いて居るのは外の犬であつた。併し、口笛を吹いても名を呼んでも容易に歸つて来ない事がある。さうして一層けたましく吠えつづける。そんな時には居ても立つても居られない。彼の妻は、あれはうちの犬ではないとか、犬は別に何處でも鳴いては居ないとか言つて、初めは彼を相手にはしなかつたけれども、彼があまりやかましくいふので、この妄想は、何時しか妻の方にまで感染した。彼等は呪はれてゐる者のやうに戰戰兢兢として居た。その上に、ランプの焰がどうした具合か、毎夜、ぼつぼつと小止みなく揺れて、どこをどう直して見ても直らなかつた。彼は自分の不安な心を見るやうにランプの揺れる芯を凝視して、疇を苛立てて居た。或る夜、ただ事でない犬の鳴聲がするので、庭に出て見ると、レオはさも急を告げるらしい様子で彼を見て吠え立てる。遠くの方ではフラテ？の悲鳴が切なく聞えて来る。彼はレ

オの後に従ひながら、悲鳴をたよりに、フラテ！フラテ！と呼びながら、その居所を捜し求めるのであつた。やがて歸つて来たフラテを見ると、顔の半面と體とが泥だらけであつた。フラテは泥の上にすりつけられて折檻されて居たのであらう。何處からか凱歌のやうに人の笑聲が聞えて来る……その夜以來、犬は夜中のただ一二時間だけ放して置いてから、又再び寂くこととした。祖父、それの鎖の場所を玄關の土間のなかへ變へた——素通りの出来る庭の隅では、たとひ繋いで置いても不用心だからである。しかし繋がるために呼ばれるのだと知ると犬は呼んでもなかなか歸つて来なかつた。歸つて来ても、主人たちの顔つきを見ながら、庭の中を逃げ廻つてなかなか捉へられなかつた。そこで食物を與へて釣つて見ても鎖の傍へならば寄りつかなかつた。闘犬の子で逞しい足と、太い牙とを持つてゐるフラテは、或る夜自分の鎖を眞中から食切つて、四邊の壁から脱げるためには床下の土に大きな穴を開け、大きな體をそこからもぐり出すと、鎖の半分は頸にぶらさげて泥濘の地上にそれを曳きながら、夜中楽しく遊びまはつて居た。それを主人に知らせるために、さうして自分も解放されたいために、レオ



て居る。

「透明な心を！ 透明な心を！」

その丘は、彼の瞳にむかつて、さうものを言ひかけた。

ある日。その日は前夜からばったり雨が止んで、その日も朝からうすもりであつた。やがて正午前には、雲に滲んで太陽の形さへ、かなながら空の奥底から卵色に見え出した。

彼の妻は、秋の着物の用意に言寄せて、東京へ行つて来ようと言ひ出した。彼の女は空の天氣を案ずるよりも、夫の天氣の變らないうちに、早い晝飯をすませと、毎夜の憧れである東京へ、あたふたと出かけた。心は恐らく體よりも三時間も早く東京へ着いたに相違ない。

彼は、唯ひとりぼんやりと、縁側に立つて、見るともなしに、日頃の目のやり場であるあの丘を眺めて居た。その時その丘は、何となく全體の趣が常とは違つて居ることに彼は氣づいた。それはどうもただ天氣の光だけではなないのである。けれどもその原因は少しも解らなかつた。と見から見て居るうちに、彼はやつと思ひ出して、机のひき出しから眼鏡を捜し出した。彼は可なりひどい近眼でありながら、近頃は折、眼鏡をかけることさへ忘れて居るのであつ

た。何ごともしない近頃の彼には眼鏡も着んどう用が無くなつて居たから。さうして、つい眼鏡をかけずに居ることが、彼を一層神經衰弱にさせて居ることに氣づかずに。眼鏡をかけて見ると、天地は全く別箇のものに見え出した。今日は天地の間に何かよるこびのやうなものを見ることが出来た。空が明るいからである。丘はつきりと見えた。なる程。丘はいつもととは違つて見える——丘の雑木林の上には鳥が群れて居た。うすれ目を上から浴びて、丘の横腹は、その凹曲が研ぎ出されたやうな丸味を見せて、滑らかに緑金に光つて居る。苗木の畑である數百本の立縞——なる程、違つて居るのは其處だ。その立縞の縞と縞との間の地面をよく見ると、その左の方の一角を要にして、上に開いた扇形に、三角形に、何時もの地面の緑色が、どういふわけか、黒い紫色に變つて居るのである。はて！ 何時の間にこんな變つたのであらう？ 何のために變つたのであらう？ 彼は、實に不思議でならない氣持がした。彼は世にも珍らしい大事が突發したかのやうに、しばらくその丘の上を凝視した。その丘は、彼には或るフェアリー・ランドのやうに思はれた。美しく、小さく、さうして今日はその上にも不可

思議をさへ持つて居るではないか。

かうして暫く見つづけて居ると、その丘の表面の紫色と緑色との境目のところが、ひとりでにむくむくと持ち上つて、その紫色の氣分が、自然と少しづつ延び擴がつて行くやうであつた。尙も、瞳を見据ゑると——さうすると眉と眉との間が少し痛かつたが——其處には、小さな小さな一寸法師が居て、腰をかめては蠢動しながら、せつせとその緑色を收穫して居るのであつた。あの苗木と苗木との列の間に、農夫が何かを作つて置いて居たのであらう。併し、見た日には、その農作物が刈りとられて居るといふよりも、紫色の土が今むくむくと持上つてくるとしか、彼の目には感じられなかつた。

彼は不可思議な遠眼鏡の底を覗いて、その中にフェアリー・ランドのフェアリーが仕事をし居るのをでも見るやうに、この小さな丘に或る超越的な心持を起しながら、ちやうど子供が百色眼鏡を覗き込んだやうに、目じろぎもしない憧れの心持で眺め入つた。彼はたうとう煙草盆と座布團とを縁側まで持ち出して、このひとりでに持ち上る土の紫色を飽かず凝視した。紫色の土は湧くやうに持ち上る。あとからあ



雨の濃淡によつて、或る時にはそれが彼の方へ稍近づいて、或る時にはずつと遠退いて感じられた。或る時には擦ガラスを透して見るやうにほのかであつた。

その丘はどこか女の脇腹の感じに似て居た。のんびりとした感情を持つてうねつてゐる優雅な、思ひ思ひの方向へ走つてゐる無数の曲線が、せり上つて、せり持ちになつて出来上つた一つの立體形であつた。さうして、あの緑色の額縁のなかへきちんと収まつて、譬へば、最も放膽に開展しながらも、發端と大團圓とがしつくりと照應できる物語のやうに、その景色は美しくも、少しの無理も無く、その上にせつこましく無しに纏つて居た。それはどこかに古代希臘の彫刻にあると謂はれてゐる沖靜な、而も活き活きとした美をゆつたりと湛へて居た。それは氣高い愛嬌のある微笑をもつた女の口の端にも似て居た。丘の頂には雜木林があつて、その木は何れも手の指を空に向けて開けたやうに枝を張つて居て、彼の立つてゐる場所からは一寸か五寸ぐらゐに見える——或る時には一寸ぐらゐに、さうして或る時には五寸ぐらゐに感じられて見える。短い頭髮のやうに揃うて立つてゐる林は、裸の丘を額にしてその頂だけ

に、美しい生え際をして生えて見える。それらの林と空とが接する境目にはごく微細な凹凸があつて、それが味ひ盡せないリズムを持つて居る。その少しばかり不足してゐるかと思へるところには、その林の主である家の草屋根が一つ、その單調を補うて居る。さうして、その豊かにもち上つた緑の天鵝絨のやうな横腹には、數百本の縦の筋が、互に規則的な距離をへだてて、平行に、その丘の斜面の表面を、上から下の方へ弓形に滑りおりて、くつきりとした大名綺を描き出して居た。それは緑色の縞瑪瑙の切斷面である。それは多分、杉か檜か何かの苗床であるからであらう。だがそんなことはどうでもいい。唯、この丘をかくまでに繪畫的に、裝飾風に見せて居るのには、この自然のなかの些細な人工性が、期せずして、その爲めに最も著しい効果を與へられて居るのであつた、ちやうど林のなかに家の屋根が見えて居ると同じやうに。さうして、この場合どこからどこまでが自然その儘のもの、どこが人間の造つたものであるかは、もう區別出来ないことである。自然の上に働いた人間の勞作が、自然のなかへ工合よく溶け入つてしまつて居る。何といふ美しさであらう！ それは見て居て、優しく懷し

かつた。おれの住みたい藝術の世界はあんなところなのだが……

「何をそんなに見つめていらつしやるの？」

彼の妻が彼に尋ねる。

「うん。あの丘だよ。あの丘なのだがね」

「あれがどうしたの？」

「どうもしない……綺麗ぢやないか。何とも言へない……」

「さうね。何だか着物のやうだわ」

この丘は濛い、好みの御召の着物を着て居ると、彼の妻は思つて居る。

それは緑色ばかりで描かれた單色畫であつた。しかしこのモノクロオムは、すべての優秀なそれと全く同じやうに、殆んど無限な色彩をその單色のなかに含ませて居た。さうして見て居れば見て居るほど、その豊富が湧き出した。

一見た緑色の一かたまりであつて、而もそれは部分部分に應じて千差萬別の緑色であつた。さうしてそれが動し難い一つの色調を繰り出して居た。譬へば一つの綠玉が、ただそれ自身の緑色を基調にして、併し、その磨かれた一つ一つの面に應じて、各相異つた色と効果とを生み出して居る有様にも似て居た。

彼の瞳は、常に喜んでその丘の上で休息をし

彼はもうそれを攫すことを一先づ断念することにした。それは、妙に、断念すればする程早く出て来るやうだから。彼はそこで気がついて、簾の上から手さぐりに燭臺をとり下した。それへ陰氣な、赤い、揺れる火をともした。

その夜のやうな時に、そんな田舎で、而もただひとり居て、四方を未だ戸締りして居ない家が、彼を薄氣味悪くした。——何とも知れない變な、それは泥棒などといふ素性の知れたものではない別種の侵入者、それは結局正體のない侵入者、それを自由自在に出入するに任せて居るやうな気がするのであった。戸袋といふものはその性質上、家の隅隅にあつた。生れつき最も臆病な、その上更にこの頃ではその程度が、神經質な子供以外の普通の人間には到底同情、どころではない理解もされさうも無い程にまでなつて居た彼には、家の隅といふやうな場所さへ、不安なところに思へるには十分であつた。彼がそこに立つて一枚一枚と戸を練つて行くと、戸の走るその音が、野面の方へ重く這つて行つて、そこで空虚に反響して居た。その音に脅えたのであらうか、今までは音無しに睡入つて居たらしい彼の二足の犬は、その時床の下からほの白く出て来るや否や、又いつもの

あの夕方の遠吠えを初めた……。十枚ぐらゐもあるその縁側の戸を締めてしまつて、もう一つ反對の側にある短い縁側の戸を締めようと、通抜けに六疊の座敷へ彼が足を踏み入れた時である。その床の間に、ちよこんと立つて居た！ランプが、今まであれ程捜して、ここだつて念入りに捜した筈の場所ではないか！いつものやうな小さなものであらう事が、こんな大きなものが……。さう思ふと、彼は全く恐怖に近い或る感じがした。……。これや、このランプにはうっかり手はつけられない。それを持たうと何の氣もなしに手を差し延した刹那、それが自分の目の前で、ふいとまた見えなくなりでもするとしたならば……。彼には、そんな事が想像された。その想像を馬鹿ばかしいと自制しながら、彼は思ひ切つてランプへ手を差し出した。ランプはいい工合に本ものであつた。

ランプへ灯をともして、戸を締めてしまつて、火鉢の前に來た時、彼の氣がついたのは、お茶を飲まうにも湯がなかつた。炭は眞白な灰になり、事間には滾り立つて呻りつづけて居た鐵瓶は、それのなかの水と一緒に冷えきつて居た。それも當然の事である。彼の妻が十一時ごろに出かけて行つた時、それを生けて置いたままで、

彼はそれつきり炭を次がなかつたのだから。炭などは愚かに、彼にはあのフェアリーランドの丘以外には、世界に何も——自分自身でさへも無かつたのだから。……。いい披振にその遠吠えは今日け案外短くて済んだと思つた犬は、今度は二足で、くんくんと鼻を鳴らし出して居た。これは彼等の夕飯の催促なのであつた。空腹なのは彼等と猫とばかりではない。彼自身も先刻からの、妙に胸さわぎのするやうなその臆病な氣持も、うすら寒いのも、一つは確にそれのせゐに相違ないと考へた程に空腹なのであつた。併し、夕飯を食べるに於ては、今夜に先づ飯を炊かなければならなかつた——不意に東京へ行くと言ひ出した彼の妻は、汽車の時間の都合でその用意はして置けない、と、くどくどと言ひ譯をして、停車場への行きがけにそれをお絹に頼んで行かうと言つた。けれども、昨夜もお絹の身の上話のよう十漏日位を聞かせられて惱まされて居た彼は、妻には水を洗はせて水をしかけて、自分自身で炊くことにして居た。火のない火鉢の前に坐り込んで、彼は一晩ぐらゐ飯などは食はなくともいいと思つた。けれども、かうして犬どもにせがまれて、この常に飢に襲はれて居る者どもの空腹を想像

とからと持ち上る。紫色の領土が、緑色の領土を見る見る片はじから侵略して行く。と、うすれ日はだんだんと明るくなつて来る。不意に、夕日の光が、少しづつ暗れて来た西の方の雲の細い隙間から一かたまりに流れ送つて、丘の上に當つた。丘は舞ふやうな光線のなかに急に輝き出す。その丘の上へ色彩のあるフウトライトが投げられたかのやうに。丘の上ではフェアリイも、雑木林も、永い濃い影を地に曳いた。さうしてフェアリイ・ランドの風景は、一層くつきりと浮き上つた。今もち上つたばかりの紫色の土はオルガンの最も低い音色のやうな聲をして、何か一齊に叫び出しさうに見える。丘の頂の林のなかの草屋根は滑らかなものになつて、そのなから濃い白い煙が、縷縷と、ちやうど香煙の煙のやうに、一すぢに立ち昇つた。さうして、彼は今、うつとりとなつてフェアリイ・ランドの王であつた。

その天地の榮光は、自然それ自身の恍惚は、一瞬時の夢のやうに、夕日が雲にかくれた時に消えた。夕日は、雲から、次には一層黒い雲と遠い地平の果の連山の方へ落ち込んで行つた。あの細い雲の隙間のところに、明るいかやかな光の名残を残して。

氣がついて見ると、丘はもうすつかり紫色に變つて居る：フェアリイの仕事が終つたからだ：。見とれて居るうちに、あたりは何時しかとつぷりと暗くなつて居た。それでも彼の瞳のなかに、フェアリイ・ランドの丘だけが、依然として、闇のなかにくつきりと見えるやうに思ふ。

やがて、いつまでも見えるやうに思つてゐた丘も見えなくなつた：……

\* \* \* \* \*

彼が我にかへつて、もうフェアリイ・ランドの王ではなかつた時、闇は、遠い野や山の方から押し寄せて来て、それが部屋といふ部屋中へもうぎつしりとつめ込まれて居た。彼の身のまはりは全く暗黒であつた。彼は先づランプへ灯をともしなければと、煙草盆にあつたマッチを擦つた。さうして家中到處でマッチを擦つた。ランプのありかを求め捜す爲めであつた。けれども何處に置かれて居るのやら、それはどうしても見つからなかつた。

一たい、この頃彼にはそんなことが實によくあつた。ランプなどといふそれ程大きなものではないにしても、その代りには今のさつきまで

自分の手のなかに在つたものの、さうして使つて居たものの、例へばペンであるとか、煙管であるとか、箸であるとか、そんな風なものが、不意にどこかへ見えなくなるのである。さうして一時姿を晦して居たそれらの品物は、後になつて思ひも寄らないやうな、その癖、へればごく當りまへな場所から、或はその時に注意深く捜した筈だと思へる馬鹿げた場所から、ひよつくりと出て来る。併し、捜す時には、實に意地悪く決してそれは姿を現さない。さう言ふ事は誰にもよくある事である。併し、この頃彼に起つた程それほど屢は、決して誰にも起るものではない。彼にはこの頃そんな事が一日に少くとも二三度は必ずあつた。そのふとした事が、彼にその都度どんなにか重大に見えたであらう。實に不可解な、神祕とさへ考へたいやうな、寧ろフェアイタルとも言ひたい程な出来事だ、とさへ彼には感じられるのであつた。誰か日には見えない何者が居て、その間ちよつとその品物を匿して居るといふ風にも思へた。さうして彼の持ちものが、かうして毎日二三品づつ位、身のまはりからひよつくり消え失せてもするやうに彼には感じられるのであつた。それ故ランプの時に「又あれだな」と思ひながら、



た。その時炎の上に跳がれて居た彼の瞳に、ふと何の關聯もなしに、妻の後姿が、極く小さく——あのフェアリーほど小さく見えるやうな氣がした。その燃える火のなかにゐる彼の妻は、どうやら大變な人ごみのなかに居るやうに感ぜられる……。單な想像ではなく、それは目さきにちらつく幻影に近い——幻影といふのはこんなものであらうかと思へるやうな形で、そんな空想が思ひがけなく彼に起つた時に、ああ活動へ行つて居るな！と、彼には直覺的にさう思へた。その次には半ば彼自身の意志から、彼の空想は、東京のそのうちでも人氣の多いやうな場所へ向いて行つた。と、その次の瞬間に、……若しや、自分自身も今ごろは、そんな人込みのなかを歩いて居るのではなからうか、と、そんな有り得べからざることが極く普通の考へのやうに思ひ浮ぶ。……こんな處に、うす暗いうすら寒い臺所の片隅に、竈の前へしよんぽりと跣つて、思ふやうには燃えない炎をさつきからちつと見つづけて居る自分。まるで苦行者が苦行をでもつづけるやうに自分自身の氣分を燃える炎のなかに見つめて、犬や猫にとり圍まれて蹲つて居る自分。これは若しや本當の自分自身ではないので、本當のものは別にちや

んと何處かに在るので、この自分は何か影のやうな自分ではないのか！ そんな氣持がひしひしと彼に湧いて來た。その心持が彼に滲入つた時に、冷たい感覺が彼の背筋の眞中を、閃くが如くに直下した。身のまはりのすべては、自分自身もこの炎も二疋の犬も猫も、眼を上げるとお椀も手桶もランプも流しもとも悉くが、今、ふいと掻き消えはしないかと危ぶまれる。さうして怖る怖る身のまはりが振り返つて見られる。壁の上には、彼自身と二疋の犬との三つの影が三方に據がつて、大きく黒く一面に映つて、それが炎の燃えるまにまに、壁の面では或は小さく或は大きくふるへる。それは小休みなく動く毎に、それだけ少しづつ彼等の本體の方へ近づいて來て、それ等の本體を呑込んでしまひさうに見える。と、彼の左側に居たレオは、突然ぬつくと立ち上つたが、煙を出すために少しばかり隙けて置いた戸の隙間からすり抜けて外の方へ出て行つた。それから急にけたたましい短い聲で吠え出した。耳を後に立ててその兄弟の聲に注意したフラテも同じやうにして出て行つた。彼等は聲を合せて吠えた。——目には見られない何者かが近づいて居ることを彼に告げてもするかのやうに。恐怖が彼を

立上らせた。併し、犬どもは直きにそれをやめて不興げな眞面目な様子で、もとの座へ、彼の傍へ歸つて坐つた。犬どものその様子が彼には不審でならなかつた。彼は心を落着けると、少し身を延び上つて、戸の筋穴から、試みに、そつと外を窺うて見た。すると、ほのかな闇を見透して居る彼の目に、柿の樹の幹のかけから黒い小さな人影が、不思議にも足音なしに現はれて來た！ その人影が小さかつたことが彼をいくらか安心させた。けれどもそれは正しく何の足音もない者であつた！ 併し、それが動いて來て、戸の隙間から洩れて流れて居るランプの光につき當つた時、それは別に奇異なものではなかつた。それはお桑、彼の家へよく遊びに來る隣の家の子になる女の子であることが確であつた。けれども！ あのお喋りの、いつもずつと遠くから大聲で呼ばはりながら驅け込んで來たり、犬の名を呼んだり、或は口笛を吹いたりしながら來る子、さうして夜になつてからなどは決して遊びに來ない子が、今夜あんな風に來る筈はない、と思ふと、そのふはふと近づくお桑は、やはり、奇異なものであつた。彼はそれを確めようと呼んで見た——



して見た時、彼は飯を炊かずに居られなかつた。この頃ではもううつかりして居るうちに日が暮れるのだから、早く用意をして置かなければ……と、さうも言ひ置いた妻の言葉を、彼は思ひ出しながら、自分を臺所の方へ運んで行った。

彼は犬を鎖から放してやつて、それを臺所の方へ呼んで来た。うす暗い隅隅の多い臺所は、彼ひとりではもの淋しかつたからである。犬どもは彼等の主人の心持をよく知つて居たかのやうに、土間にしゃがんでゐる彼の傍へ来て、フラテも、レオも、二疋とも彼にすり寄つて坐つた。猫は猫で、その板間の端に來て彼の顔に近く蹲つた。かうして彼の妙な一家族が、馬の蹄のやうな形に高く積み上げられて土で出来た竈の前にわびしく物言はぬ團圓をした時に、彼はやつと心丈夫に思へた。さうして彼は火を焚き出した。焚きつけだけはよく燃えた。それが燃え盛ると彼の心も明るくなつた。けれども火は直ぐ消えてしまつて、彼の投げ入れた二三本の薪へは決して燃えつかない。彼はただ徒らに焚きつけを燃した。永い間の雨で、薪は濕りきつて居たからである。さうして焚きつけは——こんなもの位はもつとどつさり

用意して置けばいいのを——少ししか無かつた焚きつけは、五六通くべて居るうちには既にもう屑も無かつた。彼は考へつて石油の罐を持ち出した。びくびくしながら薪の上へ石油をぶつかけた。直ぐ石油は地の上から三四寸浮いたところに大きな軽い火の塊をつくつて、燃え立つた。走るやうに燃えた。神秘的に燃えた。それは全く何の精神統一もない人の——彼自身のやうな人の最後に見舞つて燃えた。思へなく、理性を没却して、そのくせ力なく、ただ一氣に燃えた。直ぐにぐつたりと氣がくづをれて下火になつた。石油はただそれがある間はそれ自身だけ燃えて、燃え盡きると、あれほど大きかつた炎の塊は幾つかの小さなそれに分れ分れになつて、その一つ一つは薪の上つらとそこを舐めてしまつたかと思ふと、もう消えて居た。どう黒い臭いとどう黒い色とを持つたその特有の煙、それは馬鹿げた感激の後に来る重い氣分に似た煙が、一度にどつと塊つてさもけだるげに昇つた。それは猫がおどろいて立ち上り、二疋の犬は一樣にそれから顔を反けた程にどつさりであつた。彼はその同じことをもう一度試みた末に、石油は薪に灌がれたものよ

りも土の上に零れたものの方が、最後まで燃えて居るのを發見して（實際、彼は石油の燃え方に就て、いらいらした自分の感激の具象化を、例の病的な綿密さで丹念に、研究者のやうに見つづけたのである）彼は改めて竈の下から、石油の燃えたるしに、その上つらだけが黒く煙されて居る薪を竈の外へ、一たんとり出した。さて竈の底の灰の上へ思ひきつてあるだけの石油を灌いで置いてから、その土の上に薪を組ひ合せて積み上げた。さて燃えて居るマッチを二つかみ投げ込んだ。黒い煙の少しと大きな炎とが、釜の下を傳うて存分に吐き出された。そのうちにそれは少しづつ薪へ燃えうつり出した。

「うまい！ うまい！」

彼は思はず聲を出して、さうひとり言を言つた。その低い聲を聞いて、フラテは彼の細く尖つた顔を上げて、その意味を訊すかのやうに彼の顔を見上げた。やつと、少しづつ燃えて來た薪は、それは心から動かされた人間の、力強い感激のやうに軽もしい炎であつた。おお！ 燃えて来る火といふものはどんなにうれしいか。彼と彼の犬とは同じやうに瞳を輝かして、未開の人たちが神と崇めたその燃える火を見つめ

る、とも思ふ……。若し火事が出たら、眞先きに  
 大どもを鎖から放してやらなければ彼等は焼け  
 死ぬ、と思ふ。その時になつて狼狽するといけ  
 ないから、今のうちから用意に放して置いてや  
 らうかとも思ふ。……大丈夫火事になどはなら  
 ないとも思ふ。何しろ早く夜が明ければいい  
 とも思ふ。そんなことを思ふ傍に別の心があ  
 つて、ほんとうに妻は活動寫眞へ行つたらうか  
 と思ふ。今日の晝間のあのフエアリーの仕事を  
 して居る姿を思ひ浮べる。と、夕日がばつと丘  
 に照つたことから、その色からまた火事の事  
 が思はれて来る……。彼は自分自身で、それを、  
 未だ睡入らずに考へて居るやうにも感じ、もう  
 眠つて居る夢のなかで考へて居るやうにも思  
 つた。さうしてそれが果してどちらであつたや  
 ら、後になつて見ると更に解らない。――

\* \* \* \* \*

或る雨の晴れた晩であつた。それはもつと後  
 の日であつたか、それともここに書くのが順當  
 な頃であつたか解らない。とにかく或る雨の晴  
 れた晩であつた。大きな圓い月が、あの丘の上  
 から、舞臺の背景のせり出しのやうに靜に昇つ  
 て來たことがあつた。

その晩は大が二疋ともいつもよりもつと悲  
 しげに、もつと激しく吠えた。  
 彼は、それらの大どもを遊ばせるつもりで庭  
 へ出た。庭からまた外へ出た。空に月が出て居  
 ることが彼の心を楽しくして居た。月は殆んど  
 中天に昇つて居た。空は東の方からりと晴れ  
 て、西の方へ行くほど曇つてその果は眞黒であ  
 つた。大きな空が一袖毛でぼかされて居た。彼  
 は月をつくづくと見上げた。さうして歩いた。  
 造い水車の音が、コットン、コットン、コット  
 ン、と野面を渡つてひびいて來た。フエアリー  
 ランドの丘の女の脇腹は、月の光が細かく降  
 りそそがれて、それは濡れて光つて居た。彼は  
 彼の家の前の街道を幾度も幾度も往つたり來た  
 りして歩いた。月を背にして自分の短い影を見  
 た。又は、自分の影は見ないで涯しのない月の  
 中を見つめて歩いたりした。二疋の大は彼の後  
 について、二疋で互にふさげ合ひながら、嬉嬉  
 として戯れて居た。彼が立ちどまると、二疋の  
 大は、立つて居る彼のぐるりを、追つかけ合つ  
 て廻つた。彼は水のせせらぎに耳を借した。路  
 の傍に、彼の立つて居る足の下に、あの道に  
 沿うた渠である細い水が、月の光を碎きながら  
 流れて居た。それは大きな雲母の板か何かのや

うに黒く、さうして光つて、音を立ててふるへ  
 て居た。ふと、南の丘の向う側の方を、Kから  
 Hへ行く十時何分かの終列車が、月夜の世界の  
 一角をとどろかせ、搖がせて通り過ぎた。その  
 音が暫く聞かれた。この時、彼にはもの音が懐  
 しかつた。月の光で晝間のやうに明い、いや  
 雨の日の晝はこれよりずっと暗い――野面を越  
 えて、彼は南の丘の方へ目を向けた。……今、  
 物音の聞えたところ、丘の向う側には素暗らし  
 く賑やかな大都會がある……。其處には、家  
 の窓から灯が、きらきらと簇つて輝いて居る  
 ……。彼は不意に何の連絡もなく、遠い汽車の  
 ひびきを聞いただけで、突然そんな空想が湧き  
 上つて來た。さう言へば、一瞬間、ほんの一瞬  
 間、その丘のうしろの空が一面に無數の灯の  
 餘映か何かのやうにぼつと赤くなつた……。かと  
 思ふと、すぐに消えた。それは實際神祕な一瞬  
 間であつた。  
 「俺は都會に對するノスタルヂアを起して居る  
 な？」  
 彼は、さう思ひながら、その丘から目をそら  
 した。さうしながら、見ると彼の突立つてゐる  
 一筋の路の前方から、或る黒い人影が彼の方へ  
 歩いて來つあつた。それは彼とは二町ほど距

「お桑さか？」

「おおつ！　びつくらした！　小父さん居なつたか」

さう答へたのはやはりお桑であつた。併し、彼の呼んだのは妙に落着いた大きな聲のひとり言のやうであつたのに對して、お桑の答へは實に仰山な叫びであつた。その聲で、今まで淋しさをこらへて居た彼が飛び上らうとした程。お桑の聲で安心した彼は、戸を開けた。外には突立つたお桑の妙な表情が明るく浮き出した。「どうしたのだ、お桑さ。……うちで叱られたのか」

「……」　お桑は直ぐには返事をしなかつた。けれどもやがて暫くすると、小父さんは飯を炊いて居たのかとか、小母さんは何日歸るのかとか、この子はいつもの通りに喋り出した。そのうちに、お桑はふと思ひ出したかのやうに言つた。「然うだつて！　おら忘れて居ただ。今日おらあで風呂焚いただよ——お天氣で、皆野良へ出ただもの。今焚いて居るんだよ。もうちつとしたらへえりに来なよ。……小父さんは妙な人だなあ、無え時にべえへえりたがつて、ある時にはへえりたがねえでねえか——お桑はそんなことを言ふと、それはと歸り出した。今夜ばかりは、お桑にでもつと喋つて居て貰ひたいと彼は思つたのに。その女の子は、五六間歩き出した時には、

「小父さん。また降つて来ただよう——と、もういつものとほりのお桑であつた。お桑の奴は今ほつと安心をしたのだ、と彼は思つた——彼には、風呂の事を聞いた時に、あの足音の無いお桑が、偶然にもう解つて来て居たから。お桑の一家族は皆手癖が悪いといふ噂や、この頃外に積んで置く薪があまり減りすぎるといふ事や、時時の朝に、東から崩れて抜け落ちた薪が二三本も井戸端にある、といふやうな事を、彼の妻が言つたのを彼は思ひ合したのである。

さう解つて見ると、そんなことは彼にはどうでもよかつた。唯、  
「小父さん。また降つて来ただよう——」  
と言つたお桑の言葉と、あの時のきつかけでひよくり柿の幹から現はれた人影としてのお桑が彼の心に残つた。それよりも、彼がそれ程に苦心をした飯は、何か用具について居たのか、彼の手にあつたのか、とにかく石油の臭が沁み込んで居た（お茶をかけて、ランプの光に透して見ても、別に何も浮いては居なかつたが。）

彼には、それはどうしても一杯しか食へなかつた。その夜は、飯にばかりではない、夜着の襟も、枕も彼の肩のところも、彼の口のなかも、空氣そのものも、彼の腕にびくびくと小さな心臓の鼓動を傳へて彼の役に來て眠つて居た猫も、皆石油くさかつた。さうしてそのあるかないかの臭が、夕飯の代りにと澤山に彼が飲んだ茶の作用と結びついて、それが極く微かなだけに、彼をひどく昂奮させた。臭はあると思へばあつた、無いと思へばなかつた。……ふと、夕方ランプを捜さうとして方角でマッチを擦つたことや、火を燃さうとして石油を弄んだことを思ふと、釜を竈から下した時その尻にちらちらと動いて居た小さな火の粉の行列を面白がつたことと言ひ、この部屋にみなぎる石油の臭と言ひ、さう思つて見るとお桑が薪を流みに來たことまで、何でもかき皆、今夜この家から火事が出るといふ事の豫覺に思へてならない。……空氣のなかには、既にさういふ用意が出來てゐて、それが彼の官能には假に石油の臭になつて訴へられて居る。とそんな風にも思へる。たうとう……こんな家ぐらゐ燃え上がつてしまへ。火事といふものは愉快なものだ。いやいや、そんなことを考へるとほんととうに火事が出



妻に初めて話した。彼はその夜のうちに、それを人に話すだけの餘裕もないほど怖しかつたからである。この話を聞いた彼の妻は、可笑しがつて彼を腹立たしくしたほど笑つた。突然、人影が見えなくなつたといふのは、犬がその人の足もとまで懷いて來たので、誰かその人が、犬の頭を撫でようと身を屈めたに相違ない。その爲めに畔道を歩いて居た人は、田の稻のかげに隠されて形が見えなくなつたのであらう。と、さういふのがこの事に就ての彼の妻の解釋であつた。成程、それが適當な解釋らしい、と彼も考へた。併しその瞬間に感じた奇異な恐怖は、その説明によつて消されはしなかつた。

\* \* \* \* \*

一度かういふ事もあつた——  
或る時、夜ふけになつてから、ランプの傍へ蛾が一足慕ひ寄つた。蠶蠶の盛んなこの地方では、この頃になつて、この蟲がよく飛んで居たものである。彼はこの蟲を最も嫌つて居た。常から。以前にも一度、この蟲が彼のランプへ來た時、彼は手製の蠅たたきでこの蟲をたたいた。その場に壓しつぶされたこの蟲は、眉の形をし

たまた櫛の齒のやうな形でもあるその太い觸角を、何とも言へず細かくびりびりとふるはせると、最後の努力をもつてくるりとひっくりかへつて、その不氣味なぶよぶよな腹の方を露け出すと、六本程ある彼の小さな脚を、何かものを抱き締めようとでもする形で一度に、びく、びく、と動し、また時には翅に力を入れて彼の腹を浮き上らせ、その觸角と脚と翅と腹とのそれぞれに規則的とも言ふべき小さな動作をいつまでもいつまでも續けて、その死の苦悶を彼に見せつけた事があつた。それは小さなものながら、それを見守つた彼を物凄く思はせるには充分であつた。それ以來彼は殊にこの蟲を厭ひ、怖れて居るのであつた。

この蟲の、灰色の統紺のやうな毛の一面に生えた、妙に小さな頭、その灰黒色のなかに不氣味に、底深く光り返つて居る眞赤な、小さな、少しとび出した眼。べつたりと吸ひついたやうにランプの笠の上へ翅を押しつけておつとして居る一種重苦しい形。それが、急に狂氣の發作のやうに荒荒しくその重い翅を働かす有様。それからいくら追ひ拂つても全く平然として厚顔に執念深く灯のまはりを戯れまはる様子。それがランプの直ぐ近くで、死の舞踏のやうな歡喜の身悶えをする時には、白つぽくばけた茶色の壁の上を、そのグロテスクな物影が壁の半分以上を黒くして、音こそは立てないけれども、物凄く叫び立てて居る飛集のやうに騒騒しく不安に狂ひまはつた。彼の追ひ退けるのをつそりと避けて、障子の上方へ逃げて行つてしまふと、今度はその厚ぼつたい翅でもつて、ちやうど亂舞の足音のやうに、ばたばた、ばたばた、と障子紙を打ち鳴らした。

彼は、蛾が靜かになるのを見守りまして、新聞紙の一片でやつとそれを取り押へた。さうして、その不氣味な蟲を、戸を繰つて外へ投げ捨てた。たたき殺すことはもう懲りて居たからである。

けれどもものの十分とは經たないうちに、その蛾は（それとも別の蛾であるか）再び何處から彼のランプへ忍び寄つた。さうして再び、怖ろしい、黒い、重苦しい、騒々しい、翅の亂舞を初めた。彼はもう一度、その蛾を紙片で取り押へた。さて再び戸を繰つて窓の外へ投げ捨てた。

けれども又ももの十分とは經たないうちに、蛾は三度び何處から忍び寄つた。それは以前に二度まで彼をおびやかしたと同一のものであ



て居た。彼はそれを見つめながら、月の光のなかをそんな風な打開けた場所を人の通つて来るのを、何といふことなく氣味悪く思つた。さうして月夜は闇夜よりも物凄しいと思つた。と、その時、その人影の方から、

「ヒューー！」

と、一聲、ただ一聲、高く口笛が聞えて來た。すると彼の犬は一定とも、突然疾風のやうな勢で、その人影の方へ駆け出した。それが先づ彼には非常に不愉快であつた。これらの犬は彼、即ち犬どもの主人の呼ぶ時より外には、今まで決して他の人の方へは行かうとはしなかつたからである。それがその夜に限つて、この一聲の口笛を聞くと、飛ぶやうに駆け出す。彼は或る狼狽をもつて、

「ヒューー！」

と、同じやうに一聲高く口笛を吹いた。犬をよび返すためである。彼の口笛を聞くと、犬も氣がついたらしく慌てて彼の方へ引き返した。

「フラテ！」

人影はさう言つて、犬の名を呼んだ。

「フラテ！」

彼も慌てて、同じく犬の名を呼んだ。彼のさう叫んだ聲は、妙に、あの人影の聲と

そっくりであつた。さうして直ぐに同じ言葉を呼び返した爲めに、彼の聲は、ちやうど人影の聲の山彦のやうに響いた。二つの聲は、この言ひ現はし難い類似をもつて全く同一なものだと彼自身にさへ感じられた。それを犬でさへもさう聞いたに相違ない。一旦、駆け出した犬は、人影を慕うて行つたまま歸つて來なかつた。

彼は突然と路の上に立つて、その人影を確かめようと思つた。人影は、路から野面の方へ田の畔をでも傳ふらしく、石地藏のあるあたりから折れ曲つた。さうして！

何といふ不思議であらう！ その人影は、明るい月夜のなかで、目を遮るものもない野原のなかで、忽然と形が見えなくなつた。

「あつ」と叫び聲を、口のなかに噛み殺して、彼は家の門へ、家のなかへ一散に駆け込んだ。

「……この村では誰も俺の犬の名を覚えて居る筈はないのだ。呼びにくい名だから。いや、子供が知つて居る。けれども彼等は、『フラテ』といふ名を『クラテ』と訛つて覚えて居る筈だ。たとひ、名を呼ばれても、俺の犬は俺以外の人間の方へ行く筈はないのだ。たとひ、行くとしても、俺が呼び返せばきつと俺の方へ歸つてくる筈なのだ。今までこんなことは一度もない」彼は一

人でさう考へた。「……それにあの人影は何だつて、不意にかき消すやうに見えなくなつたのであらう？ 若しや、あの時俺が、この俺自身と一緒に二人の人間に別れたものではなかつたか？ 離魂病といふ病氣はほんとうにある事であらうか？ 若し然らうだとすると、俺は、若しや離魂病にかかつて居るのではなからうか。犬といふものは物音を聞き別けるのには微妙な能力を持つて居なければならぬ筈だ。わけても人の聲はちやんと聞きわけるとは……」

彼の心臓の劇しい鼓動は、二十分間の以上もつづいた。彼はどういふわけか時計の振子の動くのを見つづけながら、離魂病に就てのさまざまな文學的の記録や、或は犬のことなどを考へつづけて、心臓の鎮まる時間待つた。心がやつと落着くと、彼は妻に命じて、犬がいつもの通りに縁の下に居るかどうかを見させた。犬があつたままあの人影について行つて、もう何時までも歸らないやうに思へたからである。犬はそこには居なかつた。けれども彼の妻が呼んだ時には、彼等は運よく（と彼は思つた）歸つて來た。彼は月はまだ出て居るかと思つた。月は出て居るといふ妻の返事であつた。翌日の朝になつて、彼は昨夜の出來事を彼の

た。ひとりでさう合點して、彼は雨に濡れながら渠のなかに這入つて、その枝を水の底から引き出した。澤山の小枝のあるその太い枝の上には、ぬるぬるとした青い水草が一面に絡んで上つて來た。彼はそれを一先づ路傍へひろひ上げた。さてもう一度、水のなかを覗くと、今まで猫楊の枝の筈にからんで居た木の葉やら、紙片やら、藁くづやら、女の髪の毛やらの流れて行く間に雜つて、其處から五六間の川下を浮きつ沈みつて流れて行く長いものが、ふと口にとまつた。

見れば、それはこの間の晩、酔つぱらひと口争ひをしたあの晩犬を打つてから水のなかへたたきつけたあの銀の握のある杖であつた。

彼は不思議な縁で、再びそれが自分の手もとにかへつたことを非常に喜んだ。何といふことなく恥しく、馬鹿ばかりくつて、それを無くしたことを妻にも隠して居たのに、つい浮つかり話してしまつたほどであつた。さうして彼は考へた——あの騒々しい水音は、きつと、この杖のさせた聲であらう。杖はさうすることに依つて、それを捜し求めて居る彼に、杖自身の在處を告げたのであらうと。

彼はその杖を片手に持つて、とどこほりなく

ひた押しに流れて行く水の面をちつと見た。これならば、今夜はもう静かだ、安心だと思つた。併し、それは間違ひであつた。その夜も、前夜よりは騒がしいかと言つても、決して静かではないせせらぎの音が、それはもとと極く微かなものであるのに、彼にはひどく耳ざはりで、それが彼の睡眠を妨げたことは、前夜と同じことであつた。

けれども、そのせせらぎの音は、もうそれ以上どうすることも出来なかつた。

その外に、もう一つ別に、彼の耳を訪れる音があつた。それは可なり夜が更けてから聞える、南の丘の向側を走る終列車の音であつた。

而も、それはよほどの夜中なので——時計は動いて居ないから時間は明確には解らないけれども、事實の十時六分に、T 驛を發して、直ぐ、彼の家の向側を、一里ほど遠くに、丘越しに通

り過ぎる筈の終列車にしてはそれは時間があまりに晩すぎた。そればかりかそれは一夜中に一度ではなく、最初にそれほどの夜更けに聞いてから、また一時間ばかり経過するうちに又汽車の走る音がする。どうしてもそれは事實上の列車の時間とは、すべて違つて居る……たとい、それが眞黒な貨物列車であつても、こんな田舎鐵

道が、こんな夜更けに、それほど度度貨物列車を出す筈はない。さうして、それほどはつきり聞かれる汽車の音を、彼の妻は決して聞えないと言ふ。その汽車の遠いところきがひびいて來る時には、その汽車のなかには、こんな田舎へ、彼を、思ひがけなくも訪ねて來る友人があつて、その汽車のなかに乗つてゐるやうな氣がしてならない。さうして實際にさう言ふことがあるとしたならば、それは誰であらう。O であらうか？

……E であらうか？……T であらうか？……A であらうか？……K であらうか？……彼は、思ひ出せるだけの友人を思ひ出して見た。けれども、誰もそんな人はありさうも無かつた。併し、人が——誰か知つて居る人が、ひとり車窓に倚りかかつて居る様子が、彼には實にはつきり想像された。さうして妙なことは、それがふと彼自身に思へるやうな晩もあつた——そんな形でそこに腰をかけて居る人は、さうしてそれが彼の耽宕的な空想に、柿らしい、併し魅惑のあるボオの小話の發端を興へた。

時計のセコンドの音。渠のせせらぎ。汽車の進行するひびき。そんな順序で、遂に彼はその外のいろいろな物音を夜毎に聞くやうになつた。その重なるものの一つは、彼が都會で夜更

るか、或は別のものであるかは知らないが、さつきあれほどしつかりと紙のなかにつみ込んで握りつぶしたものが、出て来ることは愚か、生きてゐる筈も無さうだから、これは全く別の蛾であつたらう。とにかく、二度、三度、四度まで彼のランブを襲うた。……この小さな飛ぶ蟲のなかに何か悪魔が居るのである。彼はさう考へずには居られなくなつた。さう思へだすと、もう一度自分でそれを取懸へることは、彼には怖ろしくて出来なくなつた。そこで、わざわざ妻を呼び起して、この蟲を捕へさせた。それから、一枚の大きな新聞紙で捕へられてゐるそれを妻の手から受け取つた彼は、この小さな蟲を、その大きな紙で幾重にも幾重にも捲き込んで、更にもう一枚新聞紙を費して極く念入りに折り熨み込んだ。さうして今度は戸の外へは捨てないで机の上へ乗せ、それからその上へ厚い古雑誌を一冊載せて置いた。

かうして、やつと初めて安堵して、彼は寢床に入つた。

暫くして、眠つたれないままに、燭臺へ灯をとすると、その時ひらひらと飛んで来て、嘲るやうに灯をかすめたものがある。それも蛾であつた！

彼は眠ることが出来なくなつた。

最初には、時計の音がやかましく耳についた。

彼は枕時計も柱時計も、一つともとめてしまつた。全く、彼等の今の生活には、時計は何の

用もないただやかましいだけのものにしか過ぎなかつた。それでも、彼の妻は、毎朝起きると、

いい加減な時間にして時計の振子を動した。彼の

の女は、せめて家のなかに時計の音ぐらゐでも

して居なければ、心もとない、あまり淋しいとい

ふのであつた。それには彼も全く同感である。

何かの都合で、隣家の聲も、犬の聲も、鶏の聲

も、風の音も、妻の聲も、彼自身の聲も、その外

の何物の聲も、音も、ぶつたりと止まつて居る

瞬間を、彼は屢々経験して居た。その一瞬間

は、彼にとつては非常に寂しく、切なく、寧ろ

怖ろしいものであつた。そんな時には、何かが

聲が音かをたててくれればいいがと思つて、待

遠しい心持になつた。それでも何の物音もない

やうな時には、彼は妻にむかつて無意味に、何

ごでも話しかけた。でなければ、

「うん、さうだ――

と、こんな意味のないひとりごとを言つたり

した。

けれども夜の時計の音は、あまり喧しく耳に

ついて、どうしても寝つかれなかつた。それの

一刻の音毎にこそそれられて、彼の心持は一段一

段とせり上つて昂奮して來た。それ故、彼は寢

床に入る時には、必ず時計の針をとめることに

した。さうして毎朝、妻は、夫のとめた時計を

動かす。夫は、妻の動かした時計をとめる。時

計を動かすことと、止めることと、それが毎朝

毎夜の彼等各の目課になつた。

時計の音をとめると、今度は庭の前を流れる

渠のせせらぎが、彼には氣になり初めた。さう

して今度はそれが彼の就眠を妨けるやうに感じ

られた。毎日の雨で水の音は、平常よりは幾分

激しかつたであらう。或る日、彼はその渠のな

かを覗いて見た。其處には幾日か以前に――彼

がこの家へ轉居して來たてに、この家の廢園の

手入れをした時に、渠の土手にある猶楊から剪

り落したその太い枝が、今でも、その渠のなか

に流れ去らずに沈んで居て、それが船のやう

に、水上からの木の葉やら新聞のきれのやうな

ものなどを堰きとめて、水はその筋を跳り越

すために、湧上り湧上りして騒いで居た。あの



を湛へて居ることは、その明るい窓から感じられる……その家はどういふ理由からか、彼には支那料理の店だと直覺が出来る……それをよくよく凝視して居ると、その街全體が、一旦だんだんと彼の鼻の上から遠ざかつて、いやが上に微小になり、もう消えると思えるうちに、非常な急速で景色は擴大され、前のとその儘の街が、非常な大きさに、殆んど自然大に、それでもまだやまずにとめどなく巨大に、まるで大世界一面になつて……それをぼんやり見て居ると、その街はまた靜かに縮小して、もとのミニシアチュアの街になつて、それとともに再び彼の鼻の上のものとの座に歸つて來た。彼はかうして數分間か、それと數秒間に、メルヘンにある小人國から巨人國へ、それから再び、巨人國から小人國へ、ただ一翔りで往復して居る心地がした。その市街が巨人國のものになつた時に、彼自身の眼と眼との間の幅も一度に廣くなつて——ちやうど巨人のもののやうになつて、その爲めに眼界も一度に擴大されるやうな氣のすることもある。何かの拍子に、その幻の街が自然人位の巨大さで、ぱつたり動かなくなる時がある。彼は、突然、實際そんな街へでも自分は來て居るのではなからうかと、慌てて手さぐりでマツ

チを擦つて、闇のなかで自分のすすけた家の天井を見わたした事があつた。それらの風景は、屢彼の目に現はれた。その現はれる都度、それは前度のものとは決して寸毫も變つたところがなかつた。それもこの現象に伴ふところの一つの不思議であつた。或る時には、稀に、その風景の代りに自分自身の頭であることがあつた。自分の頭が豆粒ほどに感じられる……見る見るうちに擴大される……家一杯に……地球ほどに……無限大に……どうしてそんな大きな頭がこの宇宙のなかに這入りきるのであらう。と、やがてまたそれが非常な急速で、豆粒ほどに縮小される。彼はあまりの心配に、思はず自分の手で自分の頭を撫で廻して見る。さうしてやつと安心する。滑稽に感じて笑ひ度くなる。その刹那に、ゴッホと電車のカナブする音が、眉の間に刺し徹す。これら幻視や、幻感、併し、幻聴とはさほど必然的な密接な關係をもつて現はれるものではないらしかつた。一體に幻聴の方は、彼にとつて愉快であつたに拘はらず、こんな風に無限大から無限小へ、一足飛びに伸縮する幻影は、彼にさへ不氣味で、また惱しがつた。これらの怪異な病的現象は、毎夜一層はげ

しくなつて行くのを彼は感じた。彼はそれ等の現象を、彼の妻から傳はつて来るものと考へ始めた。汽車のひびき。電車の軋る音。活動寫眞の囁子。見知らぬ併し東京の何處かである街。それ等の幻影は、すべて彼の妻の都會に對する思ひつめたノスタルヂアが、恐らく彼の女の無意識のうちに、或る妖術的作用をもつて、眠れない彼の眼や耳に形となり聲となつて現はれるのではなからうか、彼はさう假想して見た。それは最初には、ほんの假想であつた。けれども、何時とはなく、それが彼には眞實のやうに感ぜられ出して來た。それだから、彼の何時も居る臺所の方には東京のこの空想が一ぱい充満して居て、いつかの夕方ひとりで飯を炊いた時に、ふとあんな事が思ひ出されたのだ。と、彼はそんなことを考へた。彼自身の如く、殆んど無いと言つてもいい程に意志の力の衰へて居る者の上に、意志の方のより強い他の人間、或はこの空間に葬き合つて居るといふ不可見世界のスピリット達の意志が、自分自身のもの以上に、力強く働きかけるといふことはあり得べき事として、彼はそれを認めざるを得ないやうに思つた。生命といふものは、周圍にあるすべてのものを刻刻に征服し、それを食つて、



けによく聞いた、電車がカアブする時に發する、  
遠くの中甲な軋る音である。それが時時、劇し  
く耳の底を襲うた。或る夜には、うとうと眠つ  
て居て、ふと目が覺めると、直き一町ほどのか  
みにある村の小学校から、朗らかなオルガンの  
音が聞え出して來た。もう朝も遅くなつて、唱  
歌の演奏でも始つて居るのかと、あたりを見る  
と、妻は未だ睡入つて居る。戸の隙間からも朝  
の光は洩れて居ない。何の物音も無い……その  
オルガンの音の外には、深夜である。睡呆けて  
居るのではないかと疑ひながら一層に耳を確  
めた。オルガンの音は、正にその特有の音色  
をもつて、爽やかに、甘く、物哀れに、ちやう  
ど晚春の夕方のやうな情調をもつて、よく聞  
きなれた何かの進行曲を、風のまにまに漂は  
せて來るではないか。彼は恍惚としてその樂の  
音に聞き惚れて居た。或る夜にはまた、活動寫  
眞館でよく聞く樂隊の或る節が……これもやは  
り何かの進行曲であるが……何處からとしも  
なく洩れ聞えて來た。それ等の樂の音を感じる  
やうになつてからは、水のせせらぎは、一向彼  
の耳につかなくなつた。さうして彼はもう眠ら  
うといふ努力をしない代りに、眠れないといふ  
ことも、それほどに苦しくはなかつた。それ等

のものは、電車のカアブする奴だけは別とし  
て、その外のは皆、快活な朗らかな、或は幽  
遠な、それぞれの快感を伴うて居た。彼はそ  
れらの現象を訝しく感ずるよりも前に、それ  
を聴き入ることが、寧ろ言ひ知れない心地よさ  
であつた。就中、オルガンの音が最もよかつ  
た。次に樂隊のひびきであつた。それから寒  
詣りの人が散くやうな鐘の微かな音が續いたこ  
ともあつた。オルガンの音は二三度しか聴かれ  
なかつたけれども、樂隊は殆んど昼夜缺かさず  
に洩れ聞えた。彼はそれを聞き入りながら、つ  
いその口眞似を口のなかでして、その上、臥  
てゐる自分の體を少し浮き上がらせる心持に  
して、體全體で拍子をとつてゐた。それは一  
種性的とも言へるやうな、即ち官能の上の、  
同時に精神的でもある快樂の一つであるかの  
やうであつた。若しそれが修道院のなかで起つ  
たのであつたならば、人人はそれを法悦と呼ん  
だかも知れない。

幻聴は、幻影をも連れて來た。或は幻聴の  
前觸れが無しにひとりでも來た。  
それの一つは極く微細な、併し極く明瞭な市  
街である。その一部分である。ミニアチュア  
の大きさと細かさで、仰臥して居る彼の目の  
前へ、ちやうと鼻の上あたりへ、そのミニアチュ  
アの街が築かれて、ありありと浮び出るのであ  
つた。それは現實には無いやうな立派な街なの  
で、けれども、彼はそれを未だ見たことはない  
けれども、東京の何處かにこれと全く同じ場  
所がきつとありさうに想像され、信じられた。  
それは灯のある夜景であつた。五層樓位の洋  
館の高さが、僅に五分とは無いであらう。そ  
れで居て、その家にも、それよりもつと小さ  
い……その半分も三分の一の高さもない小さ  
な家にも、皆それぞれに、入口も、灯のきら  
びやかに洩れて來る窓もあつた。家は大抵眞白  
であつた。その窓掛けの青い色までが、人間の  
物尺にはもとより、普通の人の想像そのものの  
なかにもちよつとはありさうもないほどの細か  
さで、而も實に明確に、彼の目の前に建て列ね  
られた。いやいや、未だそればかりではない。  
これらの家屋の塔の上の避雷針の傍に星が一  
つ、唯一つ、きつぱりと黒天絨絨のなかの銀絲  
の點のやうに、鮮かに輝いて居る……不思議  
なことには、立派な街の夜でありながら、ど  
んな種類にもせよ、車は勿論、人通り一人もな  
い……柳であらう街樹の並木がある……。いん  
とした、その癖、何處にともしやない騒がしさ

突然、あたりが一面に赤く明るくなつて……と見ると、燭臺の火が眩しく彼の目に射込んで来た。彼は目が覺めた。彼の妻は障子をあけて縁側から這入つて來る所であつた。便所へでも行つて來たのであらう。

「もつと氣を附けてくれなけりやいけないぢやないか、何日も言ふとほり。俺は灯がちよつとでも目に這入ると直ぐ日が覺めるぢやないか。たつた今せつかく寝ついた所だのに」

妻の方を見上げながら、眩しい目をしばたいて彼はがみがみ小言をいつた。

「私、氣をつけて居たつもりだつたけれど……あなた、きつと目をあけたままで睡つていらつしやるのね？」

妻はそんな事を言つて、今更慌ててその灯を吹きつけた。

「王禪寺がどうなすつたの？ あなた、今寢言をおつしやつてよ」

「いつ？」

「つい今、私が灯をともしさうと思つてマツチを擦つた時」

彼は馬鹿ばかしい氣がした。夢のなかで綺麗な足だと思つて見たのは、きつと妻の足を見て居たのだ。おれは枕を外してしまつて、疊の

上へぐかに横顔を押しつけて寢て居たらしいから、妻の足が歩いて行くのを見て夢だと思つて居たのだ。彼はさう氣がついた。それにしても王禪寺の近所の一軒家に絲をとつて居た娘——その時には、そんな場所に美しい小娘が居て、淋しく、つましく絲を紡いで居るのを面白いと思つたが、それつきり全く忘れてしまつて居た娘が、半意識の間に思ひ出されて來たのを、彼は珍らしく思つた。

これは一例である。この時ばかりでは無い。その頃、彼はどうかして睡りたいと思ふと、よくこんな眼りを眠つて居るのであつた。

\* \* \* \* \*

「決して熱なんかは無くつてよ、反つて冷たい位だわ」

彼の額へ手を翳して居た彼の妻は、さう言つて、手を其處からのけて、自分の額へ手を當てて見て居た。

「私の方がよつほど熱い」

それが彼には、反つて甚だ不満であつた。試みに測つて見ようと、驗溫器を出させて見ると、それは度度の遠い引越しのために折れて居た。

若し熱のためでないとするれば、それはこの天氣のせみだ、このひどい風のせみだ。と彼は思つた。全くその日はひどい風であつた。あるかないかの小粒の雨を眞横に降らせて、雲と風自身とが、吹き飛んで居た。そのくせ非常に蒸暑かつた。こんな日には、彼は昔から地震に對する恐怖で怯えねばならなかつたのだけれども、今日はこの漸しい風のためにその點だけは安心であつた。併し、風の日は風の日で、又その特別な天候からくる苛立たしい不安な心持が、彼を胸騒ぎさせたほどびくびくさせた。

猫よ、猫よ。あとへあとへついて來い！

猫よ、猫よ。おくへおくへすつこめ！

ふと、劇しく吹き荒れる大風の底から一つの童謡の合唱が、ちぎれちぎれに飛んで來た。それらは風のかたまりに送り運ばれて、杜絶え勝ちに、彼の耳もとへ傳はつて來たやうに思はれた。けれども、それもやはり幻聴であつたのであらう。それは長い間忘れて居た彼の故郷の方の童謡であつたから。風の劇しい日、然うだ、こんな風の劇しい日に、子供たちが、特に女の子たちが、驅けまはりながら互に前の子の帯の後へつかまり合つたり、或け前の子の羽織の下へ首を突込んだりしながら、こんな謠を今の

そのなかの力を自分のなかに吸引して、而もそれを十分に統一して行く或る力である。肉體的には明らかにさうである。靈的にだつて、精神的にだつてさうに違ひない。さうして今や、他のものを収集し統一する作用を持つた神秘な力は、彼からだんだんと衰へて行きつつあつた。寧ろ彼は今まで持つて居る己自身を刻刻に發散してゐるのみであつた。

彼が、闇といふものは何か隙間なく暮さ合ふものの集りだ、それには重量があると氣附いたのもこの時である。

こんな風にして、彼の喜怒哀樂や恐怖は、現世界に生存して居る他の人々のそれとは、全く共通したい何物かになつて行つた。孤獨と無爲との兄弟は、實に奇異な力を持つて居るものである。——若し自分が今、修道院に居るとしたならば？と、彼は或る時さう考へた。

若し、彼が彼の妻と一緒にこんな生活をしてゐるのではなく、永貞童女である美しいマリヤの畫像を毎日禮拜しながら、この日頃のやうな心身の狀態に居たならば、夜の幻夢は、それは多分天國のもの、その不快なものは地獄のものであつたらう。さうして畫像のなかのけ高い優しい唇は生きて彼にもを言ひかけたで

あらう。さうして情ましいものすべては、畫家スピネロ・スヒネリが描いたといふ惡魔の醜態はしき怖ろしさをもつて彼に現はれ、彼の目の前に出沒して、彼を苦しめたであらう。又、あの一時の睡眠をも持たない夜が、戸の隙間からほかに明け渡つた時に、ふと小鳥のしば鳴きを聞くあの淋しい、切ない、併しすがすがしい、涙を誘はうとするやうな心持は、確かに懺悔心になつたであらう。修道院といふ處では、その生活の様式も思想の暗示も、すべてがそんな風な幻影を呼び起すやうに、呼び起し易いやうに、呼び起さねばならないやうにと、それらの色色の仕掛けで出来て居たのだから……。

彼はそんな事をも考へた。併し、その考へは、この當座よりもつと後になつて纏つた。

\* \* \* \* \*

ふと彼の目の前へ人間の足の形が浮んで來た。……足だけが中有に浮いて居るやうであつた。それはどれほどの大きさであつたか解らないが、そのの大きさに就て、別だん注意を呼ばなかつたところを見ると、普通の人間のものぐらゐであつたであらう。それは白い素足で美し

かつた。それを見て居るうちに、つと、白い手の指がまた現はれた。それはエル・グレコの畫によくあるやうな形をした手なので、拇指と人差指とが何か小さなものを撮んでゐる指であつた。……そのうちに手の方は消えたが、唯さつきの足だけがやはりそこに動いて居て、それがびよびよここと、何かを踏むやうに動き出した。動く度ごとに爪先が上り下りして、そこに力がいいつて、その都度足の指は尺取蟲のやうにかがんだり伸びたりする。……實に變な夢だなあ、と、彼は夢のなかで考へた。さうだ！さうだ！これや王禪寺の方へ遠足した時、道に迷うて這入つて行つた家の縁とリ娘の足だ。それの手だ。縁とリ臺を踏んで居るのだ。紡がれて出る糸すべてをつまんで居る手つきだ。……さう思ふと、またその手の指が現はれて來る。田舎には珍らしい白い手や足だつた。……ちらと彼を見上げた時には、いい泡をして居た。あそこへ行く途中、どこかで夕立がして、虹が浮んだ。……山の中でそれを見た。あの娘は年は十六位だつた。……もつとはつきり、手や足だけではなしに姿もすっかり見えて來ればいいがなあ……。その動搖する白い素足だけの夢を見つづけて、そんな風なことを思ひ出して居ると、



はつこの間の事ではないか。さう自分をたしなめながら訂正した。……彼はかうして幼年時代の追想に耽りつづけた。而もそれらは悉く今日まで殆んど跡方もなく忘却し盡して居たとばかりであつた。さうして、彼はその思ひ出のなかのその子供になつて、彼の母や兄弟や父を想しく懐しく思ひやつた。一たい常に自分自身のことばかりより考へる事のない彼には、この時ほど切なくそれらの人々を思ひ出したことは、今までに決してなかつた。その父へも、母へも、どの兄弟へも、彼はもう半年の上も使ひさへせずに居る。不縁で家に歸つてゐる耳の遠い姉が殊に悲しかつた。彼は第一に母の顔を思ひ出さうと努めて見た。それは半年ばかり前にも逢つたばかりの人でありながら、決して印象を喚び起し得られなかつた。纏らない印象を無理に纏め上げて見た時に、思ひがけなくも、奇妙にも、それは十七八年も昔の或る母の奇怪な顔になつた——母は丹序に罹つて居た。——黒い華を顔一面に塗抹して、黒い假面のやうな、さうして落着んだ眼ばかりが光つて、その病床の傍へ来てはならないと、物憂げに手を振つた怪物のやうな母の顔であつた。子供の彼は、しくしくと泣きながら庭へ出て行つて、もつと

泣いた。その泣いた目で見たばやけた山茶花の枝ぶり、と、そのばやけて残つた花の一つ一つが、不思議と、母のその顔よりもずつと明瞭に目に浮び出て来る……決して思ひ出したことのないやうな事柄ばかりが後へ後へ一列に並んで思ひ澄んで来た。その心持がふと、彼に死のことを考へさせた。こんな心持は確に死を前にした病人の心持に相違ない。して見れば、自分は遠からず死ぬのではなからうか。……それにしても知つた人もないこんな山里で、自分は、今斯うして死んで行くのであらうか。……死んで行くのであるとしたならば？ 彼の空想は果しなく流れた。彼は今まで未だ一度も死に就て直接に考へたことはなかつた。さうして彼はこの時、最初には、多少好奇的に彼の特有の空想の様式で、彼自身の死を知つた知人の人々のその時の有様を一つ一つ描いて見た。すさまじい風のなかに、この騒々しい世界から獨立した静寂へ、人の雲を誘ひ入れるやうに啼きしきるこほろぎの聲に彼は耳を澄した。彼は手をさし延べて、枕のずつと上の方にある書棚から、何か書物を手任せに抽かうとした。その手を書棚にかけた瞬間に、がちやん！ と物の壊れる音がした。彼は自分自身が、何かを

とり落したやうに、びくつくと思ひ、あたりを見まはした。それは彼の妻が臺所の方で、ものを壊した音が、風に吹きとばされて聞えて来たのであつた。

彼の書棚も今は衰へなすまでであつた。其處には僅かばかりの占ひた書物が、塵のなかで、互に支へ合ひながら横倒しになりかかつて立つて居た。あまり余日にならないやうなものばかりが自然と残つて、それは兩三年來、どれもこれも見飽きた本ばかりであつた。彼が今抽き出したのは譯本のフアウストであつた。彼は自分の無益な、あまりに好奇的な自分自身の死といふ空想から逃れたいために、何の興味をも起さないその本をなりと讀まうとした。けれども、風吹の音は斷えず耳もとを掠めた。……所の流しに唯一枚嵌められて居るガラス板が、がちやがちやと揺れどほしに揺れて、彼の耳と心とを揺立たせた。

彼は腹這ひになつて、被けた頁へ目を曝して行つた。

現世以上の快樂ですね。

闇と露との間に山深、れて、天地を好い氣持に懷に抱いて、自分の努力で天地の礎を掻き掘り、



やうな節で繰り返し繰り返し合唱して、彼等は風のためにしやぎながら、彼の故郷の家の門前の廣場をぐるぐると環になつてめぐつて居たものであつた……。それはモノトナスな、けれどもなつかしいリズムをもつた疊句のある童謡で、また諺の心持にしつくりと被つた遊戯であつた。それを見惚れて、砂埃の風のなかで立つて居る子供の彼自身が、彼の頭にはつきりと浮んで来た。それが思ひ出の緒口になつた。その頃、……城跡のうしろの黒い杉林のなかで、……あの城山の最も高い石垣の真下の、それに沿つた細い小道である。そこには大きな杉の林があつて、一面にかさなつた杉の幹のごく少しの隙間から川が見えた。帆の帆が見えた。足もとには大きな藁束が茂つて居る、小道はいつも仄暗かつた。さうして杉の森に特有の重い濡れた高い匂があつた。その道を子供のころ一ばん好きであつた。……もつと大きくなつてからもさうであつた。機械體操で怪我をして、二度魔睡劑をかけられた時に、彼の魔睡の夢は、その森の道を遊び歩いて居るところであつた。二度とも……。その林のなかで、或る夕方、大きな黒色の百合の花を見出した事、そのそばへ近よつてそれを折らうとして、よくよく見て居るうちに、

急に或る怪奇な傳説風の恐怖に打たれて、轉げるやうに山路を駆け下りた。次の日、下男をつれて、そのあたりを隈なく捜したけれども、其處には何もものなかつた。それは彼には、奇怪に思へる自然現象の最初の現はれであつた。それは子供の彼自身の幻覺であつたか、それとも自然そのものの幻覺とも言へる眞實の珍奇な種類の花であつたか、それは今思ひ出しても解らない。ただその時の風にゆらゆらゆれて居るその花の美しさは、永く心に残つた。その珍らしい花が、彼の「青い花」の象徴でもあつたやうに、彼はその頃からそんな風な淋しい子供であつた。さうして彼の家の後である城跡の山や、その裏側の川に沿つた森のなかなどばかりを、よく一人で歩いたものであつた。鎧わりと人人の呼んで居た淵は、わけても彼の氣に入つて居た。そこには石灰を焼く小屋があつた。石灰石、方解石の結晶が、彼の小さな頭に自然の神祕を教へた。又その淵には、時々四疊半位の大きな碧瑠璃の渦が幾つも幾つも渦卷いたのを、彼はよく夢心地で眺め入つた。さうしてそれを夢そのもののなかでも時折見た。その以は八つか九つでもあつたらう。……何か嘘をつくと、その夜はきつと夜半に目が覺めた。さう

してそれが氣にかかつてどうしても眠れなかつた。母を搖り起して、その切ない懺悔をした上で、想を乞ふとやつと再び眠れた……。それから、然う然う、夜半に機を織る簀の音を毎夜聞いたこともあつた。あの頃、俺は五つか六つぐらゐであつたらう。俺は、昔から、あの頃から、もう神經衰弱だつたのか知ら。さうして幻聽の癖もそのころ頃と見える——彼は、さう思ひ出して愕いた。それ等幼年時代の些細な出来事が、昨日の事よりもつとありありと（その時の彼には昨日のことはただ茫漠としてゐた思ひ出された。一つ奇體なことに、つい三四ヶ月前、夏の終り頃に見た、或る川のなかの一件家——そこには、百合と百日紅とが咲いて居た——その人氣のない人ききな家に年とつた母と二人きりで居た小娘、その白い美しい足と手の指とが彼のうつつの夢に現はれたあの娘、それが童話の情調をもつて彼の記憶のずつと奥の方へひつこんで行つて居ることであつた。さうして、それら彼の幼年時代の追想のなかへ、時々強ひて錯誤して織り込まれて、その奥深い記憶の森のなかで仙女にならうとして居るのであつた。彼は、さう思ひながらうとしてゐる自分を、その度毎に氣がついて叱つた。いやいや、これ

つて、お前が聞くつもりなら、面白い話をいくらでもしてくれるのだ。生活を愛するといふことは、ほんとに楽しく生きるといふことは、そんな些細な事を、日常生活を心から十分に楽しむといふ以外には無い筈ではないか……」

彼は囁言のやうに小言を言ひつづけた。それは、その日ごろの全く沈黙勝ちな彼としては、珍らしい長談議であつた。彼はあとからあとからと言葉を次ぎ足してしやべりつづけた。さうしてゐるうちに妻に言ふつもりであつた言葉が、いつか自分に向つての言葉に方向を變へて居た。さうしてそれは平常、彼が考へても居ないやうな思ひがけない考への片鱗であるのに、喋りながら氣がついた。そこに、彼にとつて新しい思想がありさうに思つた時、彼が言はうと思つて居る處へは、もう言葉がとどかなくなつて居た。ただ思想の上つらを言葉がぎくしやくと滑つて居るだけであつた。「日常生活の神聖、日常生活の神祕」彼は、人間の言葉では言へない事を言はうとしてゐるのだ、と自分で思つた。さうして遂に口を噤んだ。

二人は押し黙つて荒れ狂ふ風の音を聞いたが、暫くして妻は、思ひきつて言つた。

「あなた、三月にお父さんから頂いた三百圓は

もう十圓ほつちよりなくなつたのですよ」彼はそれには答へようとしないうで、突然日のなかで眩くやうにひとりごとを言つた。

「おれには天分もなければ、もう何の自信もない……」

\* \* \* \* \*

闇が彼の身のまはりには暮れて居た。それは赤や緑や、紫やそれらの隙間のない集合で積重ねてあつた。無上に重苦しい闇であつた。彼は闇のなかでマツチを手きぐり、枕もとの蠟燭に灯をとるとすゝ寝床から起き上つた。さうしてその燭臺を、隣に眠つて居る妻の顔の上へ、ちつとさしつけた。けれども深い眠に陥入つて彼の女は、身じろぎもしなかつた。彼はしばらくその女の無神経な顔を、蠟燭の搖れる光のなかで、ちつと視つめて見た。彼はこの時、自分の妻の顔を、初めて見る人のやうに物珍らしくつくづくと見た。

蠟燭の光はものの形を、光の世界と影の世界との二つにくつきりと分けた。その光のなかで見た人間の顔は、強い片光を浴びて、その赤い光の強い濃波から生ずる効果は、人間の顔の感じを全く別個のものにして見せた。彼は人

間の顔といふものは——唯に自分の妻だけではなく、一般にかうも醜いものであらうかと、つくづくさう感じた。それは不氣味で陰惨で醜惡な妙な一つのかたまりのものとして彼の目に映じた。女は枕元に、解きほどいた束髪のかもじを黒く丸めて置いて居た。奇妙な現象には、彼はそのかもじを見た時に、これが、ここに眠つて居る女が、自分の妻だつたのだと初めて氣がついた。

彼は燭臺を高く少し持上げたり、或は女の顔の耳の直ぐわきへくつつけて見たり、暫くその光の與へる效果の變化を實驗して遊ぶかのやうに、それをいろいろと眺めて居た。彼の妻はそんなことには少しも氣がつかずに眠つて居る。寢返りもしない。こんな女は、今若し喉もとへ劍を差しつけられても、それでも平氣で眠つて居るだらうか。いや、そんな場合には、いかに無神経なこの女でも、さすがに人間の本能として當然目を睜くであらう。さうでなければならぬ。彼はそんなことを考へた。さうして、若しやこの女は今殺される夢でも見ては居ないだらうかとも思つた。……それにしても、かうした光の蠱惑から人間といふものはさまたなことを思ひ出すものである。こんなことから

六日の神業を自分の胸に體驗し、  
傲る力を感じつつ、何やら知らぬ物を味

ひ、

時としては又溢るる愛を萬物に及ぼし、  
下界の子たる所が消えて無くなつて

偶然、それは「森と洞」との章のメフィストの  
白であつた。この言葉の意味は、彼にははつき  
りと解つた。これこそ彼が初めてこの田舎に來  
たその當座の心持ではなかつたか。

彼は床の中からよけて立ち上つた、机の上  
から赤いインキとペンとを取るために。さうし  
て今讀んだ句からもつと遡つて、洞の中のフア  
ウストの獨白から讀み初めた。彼はベンに赤い  
インキを含ませて讀んで行くところの句の肩に  
一「アンダアラインをした。その線を、活字に  
は少しも觸れないやうに、又少しも歪まないや  
うに、彼は細い極く神漚質な直線を引いて行つ  
た。それがぶるぶるとふるへる彼の指さきには  
非常な努力を要求した。

手短かに申せば、折折は自ら欺く快さを  
お味ひなさるも妨けなしです。

だが長くは我慢が出来すまいよ。  
もう大ぶお疲れが見えてゐる。

これがもつと續くと、陽氣にお氣が狂ふか、  
陰氣に臆病になつてお果てになる。

もう澤山だ……

アンダアラインをするのに氣をとられて、句  
の意味はもう一度讀みかへした時に、初めては  
つと解つた。メフィストは、今、この本のなか  
から俺にものを言ひかけて居るのだ。おお、惡  
い豫言だ！ 陰氣に臆病になつてお果てになる。

それはほんとうか、これほど今の彼にとつて適  
切な言葉が、たとひどれほど浩瀚な書物の一行  
一行を片つばしから、一生懸命に搜して見て  
も、決してもう二度とはここへ啓示されさうも  
ない。それほどこの言葉は彼の今の生活の批  
評として適切だ。適切すぎるその活字の字面  
を見て居ると、彼はその活字が少しづつ怖ろし  
いやうな心にさへなつた。

「まあ、何といふひどい風なのでせう。裏の敷  
のなかの木を御覽なさい。細い癖にひよろひよ  
ろと高いものだから、そのひよろひよろへ風の  
あたること！ 怖ろしいほどに揺れてよ。ねえ  
折れやしないでせうか」彼の妻の聲は、風の音  
に半ばかき消されて遠くから來たやうに、さう  
して何事か重大な事件か寓意かを含んで居る  
らしく、彼の耳に傳はつた。

氣がついて見ると、彼の妻は彼の枕もとに立  
つて居た。彼の女はさつきから立つて居たので  
あつた。妻は彼に食事をすることを聞いて居た。彼  
は答へようとしなないで、いかにも大儀らしく  
寝返りをして、妻の方から意地悪く顔をそむけ  
た。けれども再び直ぐ妻の方へと向き直つた。

「おい！ さつき何か壊したね」

「ええ、十錢で買つた西洋皿」

「ふむ。十錢で買つた西洋皿？ 十錢の西洋皿

だから壊してもいいと思つて居るのぢやないだ  
らうね。十錢だの十圓だのと、それは人間が假

りに、勝手につけた値段だ。それにあれば十錢  
以上に私には用立つた。皿一枚だつて貴重な

ものだ。まあ言はばあれだつて生きて居るやう  
なものだ。まあ、其處へ御坐り。お前はどの頃、

月に五つ位はものを壊すね。皿を手に持つて居  
て、皿の事は考へないで、ぼんやり外のことを

考へる。それだから、その間に皿は腹を立てて、  
お前の手から逃げ出す。すべり落ちるんだ。一

たい、お前は東京のことばかり考へて居るか  
らよくない。お前はここさびしい田舎にある

豊富な生活の鍵を知らないのだ。ここだつてど  
んなに賑やかだかよく氣をつけて御覽。つまら

ないとお前の思つてゐる臺所道具の一つ一つだ



「もう、閉めてもいい？」

妻は、寒さうにさう言つた。

彼はその言葉で初めて我に歸つたのか、手を洗はうと身を乗り出した。その瞬間であつた。

「や、大變！」

「え？」

「犬だ！」

「犬？」

彼は即座に手早く、戸締りに用ゐた竹の棒を引つつかむと、力任せに、それを庭の入口の方へ投げ飛ばした。彼の目には、もんどりを打つ竹

ざれからす早く身をかはして、いきなりそれを目がけて飛びかかると、その竹片を咥へたまま、

眞しぐらに逃げて行く白犬が、はつきりと見え

た。尾を股の間へしつかりと挟んで、耳を後

へ引きつけ、その竹片に噛みついた口からは、

白い牙を露して、涎をたらたらと流しながら、彼

の家の前の道をひた走りに走つて行く。月光を浴びて、房房した毛の大きな銀色の彪犬、その

織るやうな早足、それが日まぐるしく彼の目に  
見える。それは王禪寺といふ山のなかの一軒の  
寺の犬だつた。その形は明確に細密に、一瞬間  
のうちに彼には看取出来た。  
「狂犬だよ！」

彼は自分の犬どもの名を慌しく呼んだ。呼

びつづけた。其處らには居ないのか、犬どもは

彼の聲には應じなかつた。真には何事が起つた

のか、少しも解らなかつた。併し、犬のさうす

るままに、彼の妻も聲を合せて犬の名を呼んだ。

その甲高い聲が丘に御した。七八度も呼ばれる

と、重い鎖の音がして、犬どもは、二足とも同

時に、いかにもものつそりと現はれた。さうして

鎖をぢやらんぢやらんと言はせながら身振ひし

て、主人の不意な召集を訝しく思ひながらも、

彼等は尾をちぎれるほどはげしく振り、鼻をく

んくんとならした。  
月は雲のなかに吞まれてしまつた。  
彼は妻の手から燭臺を受け取るや否や、それ  
を、犬どもの方へ差し出したが、一時に風に吹  
き消された。直ぐに、ランプに灯をともし代へ  
て見たが、彼の犬には別に何の變事もないらし  
かつた。  
「ああ、愕いた。俺はうちの犬が狂犬に噛ま  
れたかと思つた」  
彼は寢床に這入つたが、妻にむかつて、今見  
たところのものを仔細に説明した。彼の妻は最  
初からそれを否定した。いかに明るくとも月の  
光で、そんなにはつきりと見える筈はない。そ

れに王禪寺の犬は、なる程、狂犬になつたのだ、

けれども、もう一週間も十日も前に、そのため

に屠殺された。その時、お絹が、

「だから、お宅の犬もお氣をおつけなさい」

とさう言つた。その事は、その時彼の女自身

の口から彼に語した筈だつた。――妻は事を分

けて、宥めるやうに彼に説明するのであつた。

しかし彼は王禪寺の犬が氣違ひになつた話など

は聞いたこともないと思ふ。

「犬の幽霊が野原をああして驅まはつて居た

のだ。さうして、さういふ靈的なものは俺にば

かりしか見えないのだ……」  
呻吟の世界、靈が彷徨する世界。俺の目にはそ  
んな世界のためにつくられたのか――憂鬱な部  
屋の憂鬱な窓が憂鬱な庭園の方へ見開かれて居  
る。彼はそんな風に考へた。俺の今生きてゐる  
ところは、こはもう生の世界のうちでは無く、  
さうかと言つて死の世界でもなく、その一つの  
間にある或る幽冥の世界ではないか。俺は生き  
たままで死の世界に彷徨してゐるのであらうか  
……ダンテは肉體をつけたままで天界と地獄を  
めぐつたと言ふならば……少くとも、少く  
とも俺が今立つて居る處は、死滅をその底  
にしてその方へ著しく傾斜して居る坂道であ



實際人を殺さうと決心した男が、昔からなかつただらうか……

「尤も、俺は今この女を殺さうとして居るわけではないのだが」

彼は思はず小聲でさう言つた。自分自身の慄くべき妄想に對して、慌てて言ひわけしたのである。

「そこで……俺は今何のためにこんなことをして居たのだつてな」

彼は氣がついて急に妻を揺り起した。

夜中である。

妻はやつと口を覺したが、眩しさうに、擦れて居る蠟燭の光を避けて、目をそむけた。さうして未だ十分に目の覺めて居ない人がよくする通りに口をものがと動かし、半ば口のなかで、

「また戸締りですか、大丈夫よ」

さう言つて、寢返りをした。

「いいや。便所へ行くんだ。ちよつとついて行つてくれ」

厠から出て來た彼は、手を洗はうとして戸を半分ばかり繰つた。すると、今開けた戸の透間から、不意に月の光が流れ込んだ。月はまとも縁側に當つて、歪んだ長方形で板の上に光つ

た。不思議なことには、彼はこれと同じやうに、全く同じやうに月の差込んで居る縁側をちやうど今のさつき夢に見て、目がさめたところであつた。何といふ妙な暗合であらう。彼には先づそれが怪奇でならなかつた。さうして、自分達がかうして此處に立つて居ることも、夢のつづきではないのか……ふと、さう疑はれた。

「おい、夢ではないんだね」  
一何がです。あなた寢ぼけていらつしやるの

蠟燭は彼の妻の手に持たれて、月の光を上から浴びせかけられて、ほんのりと赤くそれ自身の光を失つた。光の穂は風に吹かれて消えさうになびいたが、彼の妻の袖屏風の影で、ゆらゆらと大きく揺れた。風は何時の間にかおだやかになつて居たが、雲は波じい勢で南の方

へ押奔つて居た。小雨を降らせて通り過ぎる眞黒な雲のばつくりと開けた大きな口のファンタスティックな裂目から、月は彼等を冷え冷えと照して居た。

彼れ手を洗ふことを忘れて、珍らしいその月を見上げた。それは奇妙な月であつた。幾日の月であるか、圓いけれども下の方が半分だけ淡くかすれて消え失せさうになつて居た。併し、

上半は、黒雲と黒雲との間の深い空の中底に、研ぎすましたやうに研ぎ研ぎとして、くつきりと浮び出して居た。その上半のくつきりした圓さが、何かにひどく似て居ると、彼は思つた。

然うだ。それは頭蓋骨の顛頂のまるさに似て居る。さう言へば、その月の全體の形も頭蓋骨に似て居る。白銀の頭蓋骨だ。研ぎすました、或は今溶爐からとり出したばかりの白銀の頭蓋骨だ。彼の聯想の作用は、ふと海賊船といふやうなもの事を思ひ出させた。「神聖な海賊船」

ういふわけかそんな言葉も思ひ浮べた。彼は青い月を胸かずに眺めた。ああ、これと同じ事が、全く同じことが、その時も俺はここにかうして立つて居た。雲の形も、月の形もこれとそつくりだつた。どこからどこまで寸分も違はない。そればかりかその時にもかう思つたのだつた。今と同じ事を思つたのだつた。遠い微かな穴の奥底のやうな昔にも、現在と全然同一な、そつくりそのままで重り合ふ、寸分の相違もない出来事が會つてもあつた……茫然として、彼は瞬間的にさう考へた……何時の日のことだつたらう……何處であつたらう……  
空一面を飛び奔る斷れ雲はもう少しで月を、白銀の頭蓋骨を吞まうとして居る。

「ええ、見ましたわ。あの眞中のところに高く  
咲いたあれなの？」

「さうだよ。一華獨秀常庭心、奴さ」彼は  
それからひより言に言つた「新花對白日か。  
いや、白日は可笑しい。何しろ彼等は季節はづ  
れだ……」

「やつと九月に咲き出したのですもの」

「どうだ。あれをここへ摘んで来ないかい」

「ええ、とつて来るわ」

「さうして、ここへ置くんだね」彼は眞い食卓  
の眞中を指でとんとたたきながら言つた。

妻は直ぐに立上つたが、先づ白い卓布を持つ  
て現はれた。

「それでは、これを敷きませう」

「これはいい。ほう！洗つてあつたのだね」

「汚れると、あの雨では洗濯も出来ないと思つ  
てしまつて置いてあつたの」

「これや素的だ！花を御馳走に饗宴を開くの  
だ」

樂しげな彼の笑ひを聞きながら、妻は花を摘  
むべく立ち去つた。

彼の女は花を盛り上げたコップを持って、直  
ぐ歸つて来た。少し芝居がかりと見える不自然  
な様子で、彼の女はそれを捧げながらいそいそ

と歩入つて来た。それが彼には妙に不愉快であ  
つた。彼自身が、人悪く諷刺されて居たやうに  
感じられた。彼は氣のない聲で言つた。

「やあ、澤山とつて来たのだなあ」

「ええ、ありつたけよ。皆だわ！」

さう答へた妻は得意げであつた。それが彼に  
はいまいましかつた。言葉の意味の通じないの  
が。

「なぜ？俺は一つでよかつたんだ」

「でもさうは仰言らないのですもの」

「澤山とでも言つたのかね……。それ見る。俺  
は一つで澤山だつたのだ」

「ぢや外のは捨てて来ませうか」

「いいよ。折角とつて来たものを。まあいい。  
其處へお置き。……おや、お前は何だね——俺

の言つた奴は探つて来なかつたのだね」

「あら、言つたの言はないのつて、これだけし  
きあ無いんですよ！彼處には一

「然うかなあ。俺は少し、底に斯う空色を帯び  
たやうな赤い苔があつたと思つたのに。それを

一つだけ欲しかつたのさ」

「あんな事を。底に空色を帯びたなんて、そん  
な難しいのはないわ、それやきつと空の色でも

反射して居たのでせうよ」

「成程、それで……？」

「あら、そんな怖い顔をなさるものぢやない  
事よ。私が悪かつたなら御免なさいね。私は

また、澤山あるほどいいかと思つたものではな  
ら……」

「さう手軽に誤つて貰はずともいい。それより  
俺の言ふことが解つて貰ひ度い。……一つき。

その一つの苔を、花になるまで、日の前へ置い  
て、日向へ置いてやつたりして、俺はぢつと見

つめて居たかつたのだ。一つをね！外のは枝  
の上にあればいい」

「でも、あなたは豊富なもの御好きぢやなか  
つたの」

「つまらぬものがどつきりより、ほんとうにい  
いものが只一つ。それがほんとうの豊富さ——彼

は自分の言葉を、自分で味つて居るやうに沁み  
沁みと言つた。

「さあ、早く機嫌を直して下さい。せつかくこ  
んないい朝なのに……」

「さうだ。だから、せつかくのいい朝だから、  
俺はこんな事をされると不愉快なのだ」

彼は、併し、そんなことを言つて居るうちに  
も、妻が、併し、そんなことを言つて居るうちに

も、妻が、併し、そんなことを言つて居るうちに  
で自分で自分の我儘に氣がついて居た。妻の人

る……

\* \* \* \* \*

その翌日——雨月の夜の後の日は、久しぶりに晴やかな天気であつた。天と地とが今朝甦へつたやうであつた。森羅万象は、永い雨の間に、何時しかもう深い秋にも化つて居た。稲穂にふりそそぐ日の光も、そよ風も、空も、其處に唯一筋繊維のやうに浮んだ雲も、それは自づと、夏とは變つて居た。すべては透きとほり、色さまざまな色ガラスで仕組んだ風景のやうに、彼には見えた。彼はそれを身體全部で感じた。彼は深い呼吸を呼吸した。冷たい鮮かな空氣が彼の胸に眞直ぐに這入つて行くのが、いかなる飲料よりも甘かつた。彼の妻が、この朝は毎日のやうに犬どもを繋いで置けなかつたのも、無理ではない。それはよい處置であつた。遠い、畑の方では、彼の犬が、フラテもレオも飛び廻つて居るのが見られた。百姓の若者がレオの頭を撫でて居た。音無しいレオは、喜んでするに任せて居る——太陽に祝福され野面や、大や、そこに身を踴めて居る働く農夫などを、彼はしばらく恍惚として眺めた。日は高い。この景色を見るために、何故もつと早く目が覺めなかつ

たらうと、彼は思つた。縁を下りて、瀝をば洗ふと庭を通ると白い犬が昨夜啗へて行つた筈の竹片は、萩の根元に轉がつて居た。彼は思はず苦笑した。それは、併し、寧ろ樂しげな笑ひであつた。

井戸端には、こぼれた米を拾はうとして——妻はわざわざ餘計にこぼしてやつたかも知れないと彼は思つた——省が下りて居た。今までつひどこらで見たこともないほどの澤山で、三四十羽も群れて居た。彼の聲音に愕かされる、それが一時に飛び立つて、そこらの枝の上に逃げて行つた。逃げたりなどはなくてもいいのに。その柿の枝には省とは別の名も知らぬ白い顔の小鳥も居た。その時彼は鳥に説教した聖フランシスを、思ひ出した。彼の家の軒端からぼる朝の煙が、光を透して紫の羅のやうに柿の枝にまづはつた。雨に打ち碎かれて、果は咲かなくなつて居た薔薇が、今朝はまたところどころに咲いて居る。蜘蛛の網は、日光を反射する露でイルミネエトされて居た。薔薇の葉をこぼれた露は、轉びながら断いて蜘蛛の網にかかる、手にはとる術もない瞬間的の寶玉の重みに、網は鷹揚にゆれた、露は絲を傳うて低い方へ走つて行く、ぎらりと光つて、下の草

に落ちる。それらの月並の美を、彼は新鮮な感情をもつて見ることが出来るのであつた。

水を汲み上げようとして、井戸端で見た或る薔薇の葉が、ふと底を覗き込むと、其處には涯知らぬ岩穹を徑三尺の圓に區切つて、底知らぬ瑠璃を靜平にのべて、井戸水はそれ自身が内部から光り透きとほるもののやうにさへ見えた。彼はつるべを落す手を躊躇せずには居られない。それを覗き込んで居るうちに、彼の氣分は井戸水のやうに落着いた。汲み上げた水は、寧ろ、連日の雨に濁つて居たけれども、彼の靜かな氣分はそれ位を恕すには十分であつた。

妻の用意した食卓についた時には、彼の心は平和であつた。食卓には妻が先に東京から持つて來た變つた食物があつた。火鉢の上には鐵瓶が衰つて居た。さうして、陰氣な氣持に妻の言つたとほり、いやな天氣から來たものだった——と、彼は思つた。彼は箸をとり上げようとして、ふと、さつき井戸端で見た或る薔薇の苔の事を思ひ出した。

「おい、氣がつかなかつたかい。今朝はなかなかいい花が咲いて居るぞ。俺の花が。二分どほり咲きかかつてね、それに紅い色が今度のは非常に深い落着いた色だぜ」



——茎の色そつくりの青さで、實に實に細微な蟲、あのミニアチュアの幻の街の石垣ほどにも細かに積重り合つた蟲が、茎の表面を一面に、無數の数が、針の尖ほどの隙もなく裏み覆うて居るのであつた。灰の表を一面の青に、それが擴がつたと見たのとは幻であつたが、この茎を包みかぶさる蟲の群集は、幻ではなかつた——一面に、眞青に、無數に、無數に……

「おお、薔薇、汝病めり！」

ふと、その時彼の耳が聞いた。それは彼自身の口から出たのだ。併しそれは彼の耳には、誰か自分以外の聲に聞えた。彼自身ではない何だか、彼の口に言はせたとしか思へなかつた。その句は、誰かの詩の句の一句である。それを誰かが本の扉か何かに引用して居たのを、彼は覚えて居たのであらう。

彼は成るべく心を落ちつけようと思ひながら、その手段として、目の前の未だ伏せたままの茶碗をとつて、それを靜かに妻の方へ差し出した。その手を前へ突き延す刹那、

「おお、薔薇、汝病めり！」

突然、意味もなく、又その句が口の先に出る。

彼はやつと一杯だけで朝飯を終へた。

妻はしくしくと泣いて居た。「嗟！ また始まるな」

つたか」と心のなかで彼の女の夫に就て呟きながら。さうして食卓を片附けつつ、その花のコップをとり上げたが、さてそれをどうしようかと思惑うて居た。あの蝕んだ焼けた苔は、彼が無意識に攪り碎いたのであらう——火鉢の猫板の上に、粉粉に裂き刻まれて赤くちらばつて居た。彼はそれらのものを見ぬふりをして見ながら、庭へ下りようと片足を縁側から踏み下す。と、その刹那に、

「おお、薔薇、汝病めり！」

フェアリー・ランドの丘は、今日は紺碧の空に女の腸腹のやうな線を——しほくつきりと浮き出させて、美しい雲が、丘の高い部分に小さく聳えて末廣に茂つた木の梢のところから、いとも輕輕と浮いて出る。黄ばんだ赤茶けた色が泣きたいほど美しい。何時か一日のうちに紫に變つた地の色は、あの緑の縦縞を一層引立てる。そのうへ、今日は緑には黒い影の縞が縋り込まれて居る。その丘が、今日又一倍彼の口を突きつける。

「俺は、仕舞ひには彼處で首を縋りはしないか？ 彼處では、何かが俺を招いてゐる」

「馬鹿な。物好きからそんなつまらぬ暗話をするな」

「陰氣にお果てなさねばいいが」彼の空想は、彼の片手をひよくくりと擧げさせる。今、その丘の上の目に見えぬ枝の上に、目に見えぬ帯をでも投げ懸けようとするかのやうに……

「おお、薔薇、汝病めり！」

井戸のなかの水は、朝のとほりに、靜かに圓く漾へられて居る。それに彼の顔がうつる。柿の病葉が一枚、ひらひらと舞ひ落ちて、ぼつりとそこに浮ぶ。その輕い一點から圓い波が一面に靜かにひろがつて、井戸水が揺らめく。さうしてまたもとの平靜に歸る。それは靜で、靜である。涯しなく靜である。

「おお、薔薇、汝病めり！」

薔薇の葉には、今は、花は一つもない。ただ葉ばかりである。それさへ皆蝕みだ。ふと、目につくで見るともなしに見れば、それは今朝の花を盛つたコップを臺所の暗い片隅へ、棚の片わきへ、ちよこんと淋しく、赤く、それを隠すやうに置いて居る。それが彼の目を射る。

「お前はなぜつまらない事に腹を立てるのだ。」

お前は人生を玩具にして居る。怖ろしい事だ。

「お前は忍耐を知らない」

「おお、薔薇、汝病めり！」



着指には、薔薇の刺で突いたのであらう、血が  
吹流して居る。それが彼の口についた。併し、  
そんな心持を妻に言ひ現はす言葉が、彼の性質  
として、彼の口からは出て来なかつた。寧ろ、  
その心持を知られまい、知られまいと包んで居  
る。さうしてどこで不快な言葉を止めていいや  
ら解らない。それが一層彼自身を苛立たせる。  
彼は強ひて口を嚙んだ。さて、その花を盛り上  
げたコップを手に取上げた。最初は、それを口  
の高さに持上げて、コップを透して見た。緑色  
の葉が水にひたされて一しほに緑である。葉う  
らがところどころ銀に光つて居る。そのかげに  
ほの赤い刺も見える。コップの厚い底が水晶の  
やうに冷たく光つて居る。小さなコップの小さ  
な世界は緑と銀との清麗な秋である。

彼はコップを目の下に置いた。さうして一つ  
一つの花を、精細に見入つた。其處にある花は  
花片も花も、不運にも皆蝕んで居る。完全な  
ものは一つもなかつた。それが少し鎖まりかか  
つた彼の心を掻き亂した。

「どうだ、この花は！ もつと吟味をしてとつ  
て来ればいいのに。ふ、みんな蝕みひだ」  
彼は思はず吐き出すやうにさう言つて仕舞つ  
たが、又、妻が氣の毒になつた。急に、その中

の最も美しい苔を一本抜き出すと、彼は言葉  
を和けて、

「ああ、これだよ。俺の言つた苔は。それ、此  
處にあつた！ 此處にあつた！」

彼の言葉のなかには、その言葉で自分を和げ  
て、妻の機嫌をも直させようとする心持があつ  
た。けれども、妻は答へようとはしないで、黙  
つて彼女の女自身の御飯を茶碗に盛つて居るの  
であつた。彼は横眼でそれを睨みながら、唇の額  
を偷視した。このコップを彼處へ、額の上へた  
きつけてやつたなら。いや、いけない。もとも

と自分が我が伊なのだ。彼は仕方なく、寂しく  
切ない心をもつて、その撮み上げた苔を、彼自  
身の目の前へつきつけて眺めだした。……その  
未だ固い苔には、ふくらんだ横腹に、針ほどの穴  
があつた。それは幾重にも幾重にも重つた苔  
の赤い葩を、白く、小さく、深く恋まで貫い  
て穿たれてあつた。言ふまでもなくそれは蟲の  
仕業である。彼は厭はしげに肩を寄せながら、  
尙もその上に苔を視た。

はつと思ふと、彼はそれを取り落した。

その手で、す早く、滾つて居る鐵瓶を下した  
が、再び苔を撮み上げると、直ぐさまそれを火  
の中へ投げ込んだ。——苔の花片はぢぢちと焦

げる……。そのおこり立つた眞紅の炭火を見た  
瞬間、

「やー！」

彼は思はず叫びさうになつた。ぢぢちりさう  
になつた。それを彼はやつと耐へた——ここで  
飛び上つたりすれば、俺はもう狂人だ！ さう  
思ひながら、彼は再び手早に、併し成程く沈着  
に、火鉢で焼けて居る花の苔を、火箸の尖で撮み  
上げるや、彼の炭節のなかに投げ込んだ。彼  
はこれだけの事をして置いて、さて、火鉢の灰の  
なかをおさるおさる覗き込むと、其處には何も  
ない。今あつたやうなものは何もない。愕き叫  
ぶべきものは何もない。彼は灰の中を掻きまは  
して見た。底からも何も出ない。水に滴らした  
石油よりも一層早く、灰の上一面をばつと眞青  
に染がつた！ と彼の見たのは、それは唯ほん  
の一瞬間の或る幻であつたのであらう。

彼は炭籠の底から、もう一度苔を拾ひ出した。  
火箸でつままれた苔は、焼ける火のために色褪  
せて、それに眞黒な炭の粉にまみれて居た。さ  
て、その苔を彼は再び吟味した。其處には、彼  
が初めに見たと同じやうに、彼の指の動き方を  
傳へて懷へて居る苔の上には花の萼から、蝕ん  
だただ二枚の葉の裏まで、何といふ蟲であらう

も雜つて居る。併し、全部改めて書かれたものである。同じ去年九月、雑誌「中外」に『田園の愛戀』として掲載されたものがそれである。その不十分な作品である理由で、自分はその時までその發表を躊躇したのである。當時、書肆天佑社が自分の第一著作集を出版する計畫があつて、その頁數の都合からこれを同集のなかに収録したいと言つた。その著作集「病める薔薇」には、改作された「病める薔薇」が「田園の愛戀」と一つに連續して「病める薔薇」或は「田園の愛戀」といふ二つの題を持つて、未定稿と斷つたままで収録した。今茲、三月四月、自分は同書に憑つて、先づ可なり多くの誤字脱字を改訂する傍、別に約二萬二千字の字數を加へた。二つの新しい篇章をも設けた。それは殆んど各頁に行きわたつての増補で、或は單に字句の修正であり、併しより多くの場所は更に的確精細な描寫と、内容的なりズムの整調とを期し努めたつもりである。而も、もともと今日から見て落筆を誤つたものがあつたが爲めに、一度不完全に表現されてしまつたものは、今更これをどうすることも出来なかつ

た。書き足りない部分にだけ無くて、反つて書かれて居る部分で、作者をして全く堪へ難いやうな氣持を起させるやうな箇所は、自分をただ徒らに愧ぢしめるのみであつた。冒頭からの五十頁ほどは、(前述の如く最も舊く書かれた部分であるが)、その最も著しい例である。そんな部分を私は唯そのまゝにして置いた。それを改めるとは全くの無意味だから。それは、不完全ながら、をかしいながらも、それ自身がそのままで持つてゐる或る有機的な組織を徒らに毀つばかりであつて、それを改めることによつて或は様子のいいものにはする代りに、それに脈動してゐる或る物を得て僅け勝ちである。それは決して藝術に忠實な所以ではない。より忠實な者はこんな場合に寧ろ全部を抹殺すると同じ意味で、全部をそのままに生かして置くであらう。

『田園の愛戀』或は「病める薔薇」は、どもに自分の外的な事情のために、あまりに未定稿のままで、しかも斷片的に發表されたものであつたが爲めに、自分は、最初敢てこれをいくらかでも完全に改作して見よ

うなどと考へもしたやうなもの、一度書かれてしまつたものをつつ、突き返すやうな事は——その可否は別として——今更にながら全く豫想外に、自分には不可能であり、不愉快な仕事でもあつた。さう痛感した時、自分は出来るだけ直ちにそのペンを投げ出した。自分はもうそれ以上の不愉快を忍びたくはなかつたから。自分が、最初にはもつと面目を一變するかも知れない程度での改作を志しながら、敢てそれを存分には遂行しなかつた所以である。かうして、本書改作「田園の愛戀」或は「病める薔薇」が出来た。いつまでも二つの名を負はされたこの一篇は、いつまでも不完全で、つぎはぎであるらしい。それでも未だしも、改作した方がよくなつた(?)と、作者はあやふやな自信をもつてさう考へる。けれども他の人人がそれを見て、無駄だつたと言ひ、又故もなく過去の作品に懣懣として居るものとして笑止がつてくれなければ幸である。とにかくにも、作者は以後、本書をもつて定本としようとする! 『病める薔薇』或は「田園の愛戀」は、もし事情が許したならば第一の機會に於てこれ位

裏の竹藪の或る竹の或る枝に、葛の葉がからんで、別に風とてもないのに、その唯一枚だけが、不思議なほど盛んに、ゆらゆらと左右に揺れて居る。さうしてその都度、葉裏が白く光る——それを凝と見つめて居て……彼を見つけた犬どもが、いそいそ野面から飛んで歸つて、兩方から飛び纏る。それを避けようと身をかはしても……。どこかの樹のどこかの枝で、百舌が、刺すやうにきりきり鳴き出しても……、渡鳥の群が降りちらばるやうに、まぶしい人口の空を亂れ飛ぶのを見上げて……。明るい夕空の紺青を仰いでも……。向側の丘の麓の家から、細細と夕餉の煙がゆれもせず靜に立昇るのを見ても……。

「おお、薔薇、汝病めり！」

言葉がいつまでも彼を追つかける。それは彼の口で言ふのだが、彼の聲ではない。その誰かの聲を彼の耳が聞く。それでなければ、彼の耳が聞いた誰かの聲を、彼の口が卽座に眞似るのだ。——彼は一日、何も口を利かなかつた筈だつたのに。

犬どもは聲を揃へて吠えて居る。その自分の山彦に怯えて、犬どもは一層はげしく吠える。山彦は一層に激しくなる。犬は一層に吠え立て

る……彼の心持が犬の聲になり、犬の聲が彼の心持になる。暗い臺所には、妻が竈へ火を焚きつける。妻が東京へ引き上げたいといふ氣持は、たしかにこんな時に彼處で養はれるに違ひない。何處から歸つて來た猫が、夕飯の催促をしてしきりと鳴く。ばつと火が燃え立つと、妻の顔は半面だけ眞赤に、酩酊浮び出す。その臺所の片隅では、薔薇のコップが暗のなかでぼつりと浮び出して來る。その薔薇は、飢ひの薔薇は煙がつて居る！

彼はランプへ灯をともしようと、マッチを擦る、ばつと、手元が明るくなつた刹那に、

「おお、薔薇、汝病めり！」

彼はランプの心へマッチを持つて行くことを忘れて、その聲に耳を傾ける。マッチの細い軸が燃えつくすと、一旦赤い筋になつて、直ぐと味氣なく消え失せる。黒くなつたマッチの頭が、ぼつりと臺へ落ちて行く。この家の空氣は陰氣になつて、しめつぽくなつて、腐つてしまつて、ランプへも火がともらなくなつたのではあるまいか。彼は再びマッチを擦る。

「おお、薔薇、汝病めり！」

何本擦つても、何本擦つても。

「おお、薔薇、汝病めり！」

その聲は一體どこから來るのだらう。天啓であらうか。預言であらうか。ともかくも、葉が彼を追つかける。何處までも何處までも……。

## 改作田園の憂鬱の後に

「田園の憂鬱」の作者自身が、その改作を凡そ了つた晩に、これの終に、自分と讀者との爲めに書く。

本書冒頭以下の五章は、今からちやうど三年前の五月の作で、同じ六月、雑誌「黒潮」に「病める薔薇の題で掲載された。この部分は同年十二月に全く改作した。別に同年九月の作である「續病める薔薇」約五十枚がある。それは兼ねての約束であつたにもかかはらず、雑誌「黒潮」の編輯者から、その採録を拒絶された。その原稿を自分は遺棄してしまつた。それ故本書のなかにはそれは收められて居ない。それは勿論、惜しむに足るほどの値はない。第六節以下、即ち本書の大部分は、去年の二月三月の作である。それには發表されなかつた原稿「續病める薔薇」に書かれた同一の材



# 都會の憂鬱

近所の人たちはその家を見て、へんに思つた。そこには若い夫婦ものが二人ゐるきりで、犬が二足飼つてあつた。妻君の方は毎日朝のうちから出かけて行つた。派手な服装はただの風俗ではなかつた。その二十ぐらゐの妻君が出かけて行つたあとでは、その家は見たところ空家のやうに感ぜられた。表の戸はいつも一枚だつて完全には明けられてゐなかつた。だがこの家は空家ではない——そのなかに彼が住んでゐたのである。

それは坂の中ほどにある一軒の小さな平家で、その坂はどういふ理由からであるか幽霊坂といふ名であつた。さうしてその名に不相應でないいやな狭い坂道であつた。それにこの道は行きづまりでもなく、またこの大都會の場末といふわけでもないのに、社會に生きて活動してゐる人間にとっては用事のない道であつた。それ故この近所に住んでゐる人ででもなかつたらこんな道のあることは誰も知るまい。そんな坂道の中ほどに彼の家があつた。さうしてそれ

は一日中日の當ることのない家であつた。その代りには坂の中ほどだから、冬の空風が巻き上げる砂埃がどつさり家のなかへ這入り込んだ。あまり味氣ないやうな氣がして彼は表の戸をすつかり明けて見たことがあつたが、そこからは日の光一寸ぢ射すでもないのに、砂埃がざらざら音を立てながら障子にあたつた。そこで表側の戸は全く開けないことにしたけれども、それでも戸の隙間から寒い風と一緒に砂埃が浸透して來た。さうして一日中、日の當らないこの家は、ハウスキイパアが居ないために一そうすら寒く暗く荒涼としてゐた。彼は一日中殆んど物言ふことなしに、或る窓のそばへ足が出がけに用意して行つてくれた置炬燵にもぐつてゐた。別だん何をしてゐるのでもなかつた。もとより毎日さまざまな事を考へはした。然しどれもこれもとりとめのあることではなかつた。身に沁み物を感じようとするには實際弾力のある心でなければならぬ。しかも彼の心のなかにはその弾力といふものはすこしも残つ

てゐない。彼のとるに足りないそれらのさまたまな考のなかで、何ものよりも最も力強く彼に迫つて來るものといふのは、實に、「どうして、この家には日があたらないのだから?」

と、さういふ極くつまらない事實であつた。彼のなかに生き生きとした何物もなくやつてしまつてゐるのは専ら、日の當らない家のなかに住んでゐるといふ事に起因してゐたかのやうに彼には感じられるのであつた。——その事を、彼は或る晩に彼の妻に訴へたことがあつた。彼の妻は彼が駄駄つ子のやうな事を言つてゐるのに對して、それを慰めでもするやうに、この家にだつて日のあたつてゐる時間があるといふ事を聞かせた。彼の妻が言ふには、彼の女が毎朝出かける時刻——といふと九時ごろであるが、その時刻には、この家の表の窓の戸に朝日が射してゐると云ふのであつた。その話を妻から聞いた彼は、その次の日の朝は早く妻と一緒に時刻に起きて見た。さうして表の窓を試みに明けたと、その障子の一番左の端の一枚の上の方に、ちやうど兩方の手の揃指と人差指とを各組合せて形どつて見せることの出来るほどの三角形の日ざしが、冬の太陽がらにも朝日だか



に纏めて發表するのがほんとうであつた。それが作者の當初の企てでもあつた。

雜誌中外に掲載された、田園の憂鬱が、未定稿のまま、比較的江湖に迎へられ且つ文壇諸家の一瞥をも得たことは、年少無名の作者にとつて、望外の光榮であつたと言はなければならぬ。けれども同時に、自ら省みて、それがさまたざま事情で、又さまたざま意味で、まことに喘ぎ喘ぎに綴り合されたもので、心ゆくまでにそれを書き送る機会を逸して、自ら親しく體験し、且つ比較的久しく心にあつた作品としては、その或る世界——それは争ふべくもなくつまらない、が併し、そこに暫く私に住まなければならなかつたところの或る世界のアトモスフィアは、この作品で再現された時には、情けないほど稀薄な、ごくの無いものになつて居るのを感じる。私の Anatomy of Hyloich n'ia は到底ものにはなつて居ない。さうしてそれはいくらか増補された今でも依然としてさうである。しかも今ではもうこれ以上にそれをどうするといふ氣持にもなれないのを、愚痴にも、多少遺憾に思ふ。この書が——多辯にも、

つい自家一個の所感をまで披瀝してしまつた序に、もうしばらく多少の氣恥しさを堪へて書きつづけければ、この書が、近く新に稿を起さうと用意してゐる「都會の憂鬱」が、或は作者自身満足出来る程度に書かれるやうなことがあつた場合、その時に、その微かな作奏としてそれほど邪魔をすることもない姉妹篇としてでも、せめては役立つてくれればいいと自分は願ふ。

一九一九年五月一日

佐藤 春夫

### 斷章

さまよひくれば秋ぐさの  
一つのこりて咲きにけり、  
おもかけ見えてなつかしく  
手折ればくるし、花ちりぬ。

(「殉情詩集」より)

### なみだ

埋火もきゆや泪の流る音

芭蕉

あるはのきばゆたつけぶり、  
あるは樋をゆくたにのみづ、  
あるはわが目にわくなみだ。  
これをさだめとさとのゆゑ、  
ぜひなきものと知るらめど、  
とめてとまらぬものなれば、  
せつなやあはれほそぼそと、  
ひとすぢにこそながるらし。

(「殉情詩集」より)

彼は、その瞬間に何となく、牢屋のなかにゐる者であるかでなければ氣遣ひでもあるかのやうに自分が思へた。

ふと、彼に思ひ出されたのは、彼等がつい二ヶ月ほど前までゐたあの田園の家であつた。その田園の家の庭であつた。その庭にあつた日かげの薔薇であつた。つい半年前まではその田園の日かげの薔薇は彼にはまだいくらか象徴的なものであつた。それ故に美しいものであつた。しかし、今日の彼には何一つ彼の夢を託するものはない。それは灰色の都會であり、この家は日のあたらない家であり、季節はすべての物の音まで消え入りさうな冬であり、彼自身は何の才能も素養もない文學青年——いや、或る場末の劇場に出てゐる下つ端の女優の夫であつた。——かの女の方から言はせたら、夫に意地地がないからそんな場末の下つ端の女優にかの女がなり下つたのだと言ふであらう。……

とりとめもなく一日が暮れて、——この日の當らない家は特別に早く日が暮れて、しかもこんなに暗いのはこの家だけだと見えて、電燈は未だともらなかつた。あの慌しく且つ永い黄昏のなかに、彼は火の消えてしまつてゐる長火鉢を見出して、小指の尖ほどの火種を頼みに火を吹き出した。さうして、先刻からのとりとめのない考へのつづきを、やはりとりとめもなく考へ續けて居た。——彼の一生は結局そんな場末の女優の亭主として朽ちて仕舞ふのであらうか。——さうかも知れない。——それならばそれでもいい。俺には、事實、あらゆる先輩や友人が精一杯の好意の末でもう見放してしまつてゐるとほり何の才能もないのであらう。——父誰だつて自分自身で此の自信をも持てなくなつてゐる一人の男に向つて何の希望をかけるものか。——都會へ出て行けば何とか刺戟があるであらうと言つて彼を再び都會へ連れ出して來た彼の妻だつて、初めは彼に更けに歸つて來ては眞先きに、今日は何か出來さうだつたかと尋ねてゐたのに、この頃になつては一度だつてそんな事を言はないではないか。——人人はもう誰も、彼れも若しかなと才能があるかも知れない男としての彼を全く忘却してしまつてゐるのであらう。無理もない事だ、彼自身も「若しかなと才能があるかも知れない男」を自分自身のなかで刻刻に見失ひつゝあるではないか。——結局それもいい。そんな愚かな夢は早く覺めた方がいい。——が、併し、一生この日の當らない家のなかに住まなければならぬとしたらどんなに物悲しい事であらう。

「日かげ者か！」

彼はふとそんな有り餘れた言葉を思ひついて、それを口に出して呟いた。日かげ者。世外の人。世の中から恥を與へられてゐる人。彼はさう考へて見たが、この「日かげ者」と云ふ言葉が普通に持つてゐる意味は、彼にはそれと力強い響きがなかつた。却つてその文字通りの意味「日光の射さないところに住まなければならぬ人」といふ事の方が痛ろしく思へた。

南國で育つた彼は寒さには實に弱かつた。さうして寒い時期には花が咲かないやうに、冬の寒さには人の空想も凍え、ちなものであつた。自分の空想に酔つて繼に生きる事の出来るやうな性格の彼にとつては、その空想力にぶる冬が最もうら悲しいのである。それ故に、いつも冬になると彼は日向ぼつこをして、その家を造つてゐるのであつた。しかもこの家には日が當らないのである。中流の家庭に人となつた彼は、今までにまだ一度も日向のない家の冬といふものを知らなかつた——さうしてそんな家に住まなければならぬ自分といふ者にほん

らそれこそ華やかに、その銀鼠色にすすけた障子へくつき輝き映つてゐるのであつた。その障子を引くとその日晷は埃の渦巻きのなかを虹色に射透して海老茶色をした壁の上へ三角に突き當つて、白く積んでゐる埃を照し出した。彼は自分の家に射し入つてゐるこの思ひがけない日光を、思ひがけない貴賓を迎へた裏長屋の子供のやうにびつくりして見惚れた。太陽は向ひの二軒の二階屋の屋根の線がすこしばかり喰ひ違つたその隙間から洩れこぼれてくるのであつた。彼はその太陽の方を見た——彼が自分の家のなかから太陽を見たのは五十日目ぐらゐだつた。日晷は古壁の上を刻刻に這つて、有難いことにやつと、掌ほどの大ききしかなかつた日向は、刻刻に大きくなつて十分ほどの後には斜邊が三尺以上もある日向になつた。彼はその小さな貴重な日向へしやがんで見た。その日向は彼の肩の半分を照すのにはやつと十分であつた。しかもその日晷は彼の肩の上で刻刻に縮んで行つてゐたと見える。十分ほどの後にはもうその日晷は消え去つて、この家のなかのどこにも一すぢの日ざしさへなかつた。全く日が當らないと思ひ込んでゐたこの家にも日があつたのであつた——而も、一日のうちに二十分！

その日以後、彼はその二十分の日晷を樂しむために毎朝妻と一緒に起きた。さうして妻と一緒に朝の食事をすると、やがて表の戸を一枚引いて、そこから射し入る朝日の光を身に浴びた。二十分間！ さうしてもう一度、寢床のなかへもぐり込んだ。さうして、彼は犬のやうに犬の眼を——うつらうつらして直ぐに目の覺め易い眼を睜つた。といふのは、妻が朝出がけにそれぞれの店の店へ寄つて彼の夕方の食事のために注文して置いたさまざまな品物を、それぞれの店の小僧が持つて來ると、主人と同じやうに臺所口で眠つてゐる彼の犬がきつと一度は吠えた。さうして彼は目を覺ました。こんな具合にして彼の一日は正午になり、彼は時には朝飯の残りで午飯を済ましたり、或は全く午飯を食べなかつたりした……

彼のその家と太陽との關係をもう少し述べる——彼は或る日偶然彼が午後になつてからよくもぐつてゐる炬燵のある窓の直ぐ向うにある板塀——それは隣の家の家との境目で彼の窓から直ぐ文字通りに手のとどくところにあつた板塀に、ほんの少しばかりではあつたが一時間近くも日が當つて、その反射のためにうす暗いその二疊の部屋がほんのりと温い明るみを

感ずることに氣がついた。その板塀をよく見ると、それは彼の家のものではなく隣の家のものであつたからその日の當つた明い部分には、隣家の方から打ちつけた釘の半が皆、彼の家の方へ突き出してゐた。ふと彼は或る氣配れから、妻の鎧臺の傍へ行つてそこから、一つや大きな鎧を持つて來た。さうして鎧のニツケルで出來た足をぐつと後ぎまに折り返して、その丸くまがつた部分を板塀の上の日向に突きぬけてゐる釘にひつかけて見た。日の光は鎧の面に反射し屈折して、彼の二疊のその机を据ゑた壁の上へ光を照し返した。彼はその上の小さな日光をしばらく眺めて居たが、やがて手を高く舉げて細い日光が流れてゐる路をその掌で遮つた。日光は掌に當つた。その日に當つてゐる掌を彼は嬰兒がよくするやうに握つて見た。り、ひろげて見た。終には、不意に彼は炬燵のなかから立ち上つてその光の路へ彼の顔を當てて、日向にある鎧を、その鎧のなかに在る小さな太陽を覗いて見た。暫くぢつと見つめた。それは單に退屈のあまりに彼がして見たことどもではあつたが、彼が自分のしてゐることに氣がついた時には言ひ知れない馬鹿馬鹿しさと同時に暗鬱な心とを彼のなかに湧かせた。



いと思ひ出された。「あなたの家へ来て見ると念に左前になつた相場師の家を見るやうですれ、箒箒やら長火鉢やら茶箒箒やらが家不相應で、夫人は未だまだ世帯やつれがしてゐませんからね」といふ言葉であつた。それは彼の友人の江森渚山の言葉であつた。その表現のいかにも渚山らしいのが彼には面白かつた。しかし一度この言葉から、この言葉を云つた人江森渚山を思ひ出すと、彼の苦笑はもつと苦いさうして重々しい心持に變つて行つた。

江森渚山こそ何の誇張もなしに敗残者だと思つた。——さうしてさう思つたすぐ後には、渚山をそんな風に考へて自分よりもつと下がある、自分は未だあれ程ではないと思ふことに依つて、無意識にでも自ら慰め或は自ら誇つてゐるのではないか、それならば限りなく野卑なことであると彼は自分を反省して見るのであつたが——、彼ばかりではない渚山を知つてゐる限りの人は、この年長の友を皆これに輕んじてゐるのであつた。年をかくしてゐる渚山は何歳であるかよく解らなかつた。それにしても少くとも彼よりは一時代、十年は

年長であつた。さうして渚山はよく何かにつけて、一時代前の文壇の動搖の氣運に、いかにして將に文壇の表面へ遊び出せさうであつたかを自分でよく説いたのであつた。渚山の年少の友は皆それを或る微笑をもつて聞いた。渚山の言ふところによると、渚山はその時代の二三の大家にも面識があり、その大家の手から二三の創作が相當の雜誌で發表されたこともあつた。さうしてそれが渚山に楽しい思ひ出となつてゐる。

渚山は、経験を重んずる自然主義藝術の信徒を、その文學的生涯の第一歩から同く信じて來た。信じたばかりではない、身を以つてその信徒に奉仕して來たのである。渚山は、多分二十年近く以前にその母を失つた當時に、その頃としては決して少額ではなかつた一千圓以上の金を遺産として手に入れると、彼自身の才能を信じてその才能の完成のために一生を盡さうと決心をした渚山は、小説作家としては學問よりも人格よりもその他何よりも貴重だとその當時誰も言つた人生の経験、その経験を貰ふために且つは彼の青春を樂しむ爲めに、その金のつづつかざりは、そここの避暑地やら温泉宿やらを歩きまはつて年月を暮らした。さて渚山の経験は漸く豊富になり、その豊富な

経験をもちつて、いざ文壇に乗り出さうとして徐ろに試み初めたころには、文壇の傾向——それはうつり氣な、理由のない一般の流行と何の區別もないものであるが——はもうすっかり彼の信奉する主義のものではなくなり、却つてその反動として渚山の考へとは全く逆行するものになりかかつてゐた。しかし一個の發育盛りの頭腦が一つの主義の空氣のなかに若し何の疑をも抱くことなしに生育した場合には、たとひその主義が幽霊にならうとも、それを盲信した人は永くその幽霊のために悩まされ、力の弱い者は、或はその主義を信ずること最も深かつた者は生涯その幽霊のために悩まれるものである。

實際、渚山はその信ずるところのものを後年になつて、たとひ持てあましても決してそれを如何やうにも變へることは出来なかつた。渚山は自分の年少な仲間たちがそれぞれに何れも新しい時代のそれぞれの思想を抱いてゐることを知り、同時にそれを寛大に理解してゐたけれども、渚山自身の思想は、言葉の一端一端にその時代におくれたことと自分してゐた。また生れながらに善良で謙遜な渚山は丁寧な言葉づかひですべての年少の友に接してゐた。それがさうかすると先輩が後輩を導く親切か、それとももつ



うにうらぶれといふ氣持をしみじみと感ずるのであつた。さうして彼は考へた。——日の當らない家に俺が住まはなければならぬといふことは、俺には似合はない事だ。いや、俺には似合

はないばかりではない。人間の誰にだつて割合ひはしない。いや、人間だけではない。犬だつて日向を戀しがるではないか。——だが、そんな事を言つてゐるのもほんの、冬か二冬かで、それ以上この状態がつづけば、今にそんな、日の當らない家などにはすつかり慣れて来るであらう。どんな悪い状態にだつて人間は慣れて来る、——それが人間の一番悲しい事ぢやないか。

少しづつ赤くおこつて来る火を一心に見つめながら、夕方のヒステリイ的な感興でこんな虚無的な意久地のない事を考へつづけてゐるうちに、不意に部屋の中が明るくなった。電燈がともつて、お晝に食べ散らしたままのお膳が片隅に押しやられてあるのを穢らしく照し出して居た。彼は部屋が明るくなつた拍子に無心で茶簞笥の上にあつた時計が五時であるのを見た——さうした目でその文字板を見つめながら、妻が歸つて来るまでにはまだ五時間半あると考へた。さうして十二時前にやつと起きる彼の半

日が慌しいくせに、しかもひどく退屈なのを感じざるを得なかつた。

……二日前、君の家の前を通つて見た。聲を掛けようかと思つたが戸が閉つてゐたね、覗いて見たら上り根に犬が眠つてゐたよ。あの家の生活は、君、小説になりさうぢやないか。或る先輩が彼にさう言つた。——この先輩の家といふのは彼の家から一町とはない屋敷町にあるので、彼は時々、犬を牽いて歩いた歸り路などにそこを訪れることがあつたのだが、その同じ先輩の家で或る時に落ち合つた或る洋畫家は又、彼の顔をつくづくと見て言つた——「面白く、彼の顔は繪畫的だ。頭の毛の具合から露の様子から何一つ調和を破つてゐるものはない！私、青と黒とを基調色にしてあなたの顔を描かせていただきたいのですね。彼は人人が何故にそんなことを言ふかといふことを知つてゐた。彼の家の沈滞して濁つてうすら寒い空氣が家の外側まで蕩つて路を行く人にまでそれを感じさせ、また彼の精神の困憊が淺ましく彼の顔へまで覗き出してゐてそれが初対面の人の目にまで注意を引くのである。——君の家の生活は

小説になる。——君の顔は青と黒とを基調色にした繪になる。この言葉は、神經質な彼には、お前の全生活にはデケイした面白味があるよ——お前は敗滅して行く人間だから」と言はれたのと同じ效果をもつて聴き做された。そんなことを考へるのをひがみだと思つて、そのひがみを抱くのが當然のやうな引け目か自分にあることを思はざるを得なかつた。またあの母親は時にこの家を見舞ひに来て、この不可解なほど氣位が高いくせに生活力と言つては何一つなく、若し何か金銭上の事やなにかを相談でもしようものなら、自分自身のことであり乍ら逆に他人の無心でも聞かぬやうに横を向いて仕舞ふこの奇妙な自身の癖にひどく氣をねをしながらも、苦笑を含んで諷刺した——お前に出来る仕事はまあ何處かのお居敷の犬の番人ぐらゐなものだらうね」と、いろいろの場合に人人から言はれたそれらの言葉が彼の心に残つてゐた。それが時折にひよつくりと彼の心の表面に現になつて浮き上つて來た。それは彼の肩をしかめさせないで置かないものであつたが、もう一つ別に彼の頬を苦笑で歪ませるものがあつた。それは、毎日夕方になつて電燈がともつて急に明るくなつた部屋を見まはした時に、時時にふ

うとけ決してしなかつた。現在の彼の生活を見たら渚山にもそんなことを彼に言ひ出すことの無駄なことは一日して解つた。さうして今は何の物質的な好意をも豫期せずに渚山は彼のところへそれほど繁々と遊びに来るのであった。實に純粋な友情である——と彼は考へた。さうしてそれが彼にとつて情ろしいほど悲しく重なりし心持を感じさせた。渚山は全く渚山自身と同じやうな道を辿らうとしてゐる後進を見て、いかなる他の場所よりも心掛きなくつろいだ氣持を、彼の家の空氣のうちに見出したに違ひない。さればこそ渚山は、折にふれては彼に向つて以前よりは一そう飾氣なしに彼の心の心持や生活の状態などを打ち明けるのであつた。しかも今はそれによつて心の慰め以外の何物をも求めものではなかつた。二三年前——その交際の當初から渚山を何となく輕んぜずには居られなかつた彼は、今でも心のどこかにその同じ感情を渚山に就いて抱いてゐた。しかもその渚山が心置きな無二の友達として彼に對してゐた。それが自尊心の強い彼にはどうやら堪へがたいものであつた。しかし自尊心を持つてゐるといふことが未來ある人間といふことと果して何の關係があらう。渚山にだつて

自尊心がある！ しがし、しかし何は渚山とはいくらか違ふ筈だ——と、彼に漠然とさう信じながら、考へつづけるのが常であつた——だが何といつても、渚山より外にはいかなる意味からしる俺を顧みようといふ友達——逢つて多少なりとも藝術なり人生なりを語らうとしてくれる人は無いではないか。いや、あるかも知れない。しかし、人は何れも各自身の仕事に熱中してゐる。而も、それこそ最も當然な事である。それ故に俺の友達に渚山ひとり——いやもう一人ある……

彼の持つてゐたもう一人の友、それは或る古本屋の小僧であつた。この二十ぐらゐの青年は、或る日、彼が小遣錢を得ようと思つて偶然つれて来た小僧であつたが、この青年は自分の客が賣らうとしてゐるところが嵩ばかりあつて一向値にならない書物や雜誌やらが悉く文學書類であるのを見てとつて、それをいくらか高價——と言つたところで總額にしてせいぜい二圓八十錢だつた——に買ひ入れた上で、彼に向つて藝術や人生や哲學などのさまざまな話を持ち出すのであつた。ベルグソンの哲學を知つてゐるかと言つた。彼がそれに就て何の知識もないことを知ると、小僧は彼のためにその

概論を述べて聞かせた。しかしその説くところは彼には少しも解らなかつた——しかもそれが出鱈目を言はれてゐるせゐであるのかそれとも彼の頭がそれを理解する方を失つてゐるためであつたか、彼にもどうやらそれの判斷もつき兼ねながら、この小僧が得意さうに説明するところを黙つて聽いてゐるより外はなかつた。彼のこの態度のなかに何か満足を見出すところがあつたと見えるこの小僧は、その後一週間ほどして又彼の家へ遣入つて来た。それから二三日、店の使の道草を喰つては彼を訪ねて、タゴオルであるとか、ベルグソンであるとかそんな名前を口にしては最初の時と同じやうに彼を妙に壓迫するのであつた。さうして時たまには讀んで見るやうにとすめて讀書界で流行する書物を持つて来て貸してくれるのであつた。

「私たつてこんな古本屋の小僧などをしてゐたくは無いです。書いて見たいと思ふことはいくらもあるのですが、何しろ主人の目を偷んでは讀んだり書いたりするのでせう。そのうち何か見て下さい。それにしてもあなたなんか何時も机の前に坐つて居られるのを見ると羨しいです。すなわち小僧はそんなことをも言ふのであつた。

と人惡く觀察する時には、落山自身がうつかり親しみのある言葉などを使つてその結果、若い者どもから同輩らしい言葉つかひをされてはならないといふ心づかひからでも出てゐるのではないかと思はれる節さへないではなかつた。落山はよく自分を書かうと思つてゐる小説の筋を話すことがあつたが、若しそれを聞く誰かが、「それは面白い」とでも言はうものならば、落山はその人に向つてうれしそうに次のやうに言ふのであつた——面白いですか。ほう。氣に入りましたか。どうです。一つ書いて御覽になつては。その材料なら差し上げてもいいのです。——私には、もつと書きたい経験が幾つもありますから」落山はさう言つて彼の経験の豊富を誇りながら材料を人にくれたがことは、仲間で有名な話であつた。年若な仲間は落山が自分から出た材料を書かせたが心理を推測して、かげではよく聲色を眞似ながら落山を笑つた。

その落山が彼——この話の中心人物である彼とは、四五年前に、いつどこでもなく知り合ひになつた。落山は生活の必要上からなるべく廣く交友を持つやうに心がけてゐたらしかつた。さうしてそれがすべて年少の友ばかりであつた。落山は屢々彼のところへ來ては、あま

り新しい友であり過ぎるかも知れない彼に向つて、金の無心を言つた事もあつた。——どこか求職の口があるといふ話をした上で、その爲めに入用だから是非とも夏羽織を一枚欲しいと言つた。さうしてその頃、父から僅かばかりの仕送りを貰つて生活してゐた彼の家庭にも少しも金がないことが解ると、落山は彼に幾冊かの書物を貸せるやうに依頼した。求職する人間が見すばらしい服装をしてゐることは當然なことではないかと彼は言はうと思つたが、あまり見すばらしい風態で求職や借金の用事に行きたくはないといふ心理に、何か本當があることを彼は感じた。さうしていくらかをかしい氣がしながらもいやな顔をせずに落山の要求に應じたものであつた。落山の求職は無論駄目であつたが、落山は古着屋で求めた紺の羽織を着た姿で彼の家庭へ來て、その羽織の襟をつまんで示しながら、「お蔭で」といふ言葉を使つて丁寧にお禮を言ひながら、求職口の駄目だつたことや、田舎新聞の記者などといふそんな職業は寧ろ自分を辱しめるものだといふ口吻を洩した。その十日ほど後に、夕方の散歩に出た彼が、夕立ちに降られて慌しく乗り込んだ電車のなかで偶然落山を見出したが、落山はその紺の羽織を

大切さうに新聞にくるんで懷にたたみ込んでしまつてあつた。「濡らしては縮んでしまひますからね」と言ひながら、彼は落山を益愛すべき人物のやうに感じながら、「落山の羽織」といふ語柄をその仲間に提供したものでやつた。……その後、仲間の言へるを捨てて田舎の方へ行つてしまつてゐた彼は、無論、落山ともしばらく逢ふことはなかつたが、再び都會へ舞ひもどつた時に、外の仲間との交友は田舎行つたきりそのまま迷きかつたのに落山との交りだけは再びつづけられた。といふのは、落山の方ですれほど繁榮と彼の家——この日蔭の家へ遊びに來るからであつた。落山の生活は、彼が田舎にゐた一年足らずのうちに益々加速度的に惡くなつて行つて居るやうに見えた。その昔、人生の経験を搜し求めて歩いたところに何處かで傳染してゐた病氣の爲めに、落山の髪はうすくなり、顔色はどす暗くなり、思想は不確になり、物に飽きつぽくなり、體のどこかには絶えず故障があつたやうである。さういふ状態でその生存を辛きずつて居る落山の困窮はもとより言ふまでもなかつたが、しかしその落山もさすがに、二三年以來のやうにいろいろな永つたらしい言ひ譯をしたがら小遣錢を彼から借りよ



る彼も、やはり、さういふ風にして自分の道を擧げて来たのである。彼の父は甲舎の町で開業してゐる醫者であつた。その祖父も亦、醫者であつた。さういふ風に何代か醫者をして来た彼の家では、父は總領息子である彼をやはり醫者にしたいと思つて居た。しかし幼い彼の性情を見て取つて、北海道にちよつとした開墾地を所有してゐた彼の父は彼をどこかの農村大學へでも入れてゆくゆくはその開墾地の管理でもさせたいと考へ直した。父はその子を材料にしてさまざまな希望ある空想をめぐらしてゐるうちに、その子は勝手に大きくなつて何時どんな人からの影響といふことも無しに詩歌集や小説類に読み耽つて志を文學に寄せてゐるのを知つた時、さういふ事に就て全くの無理解でない父は子の望みのままにそれを許さなければならなかつた。この點では、さういふ理解のある父をもつた彼は、普通の文學少年よりは遙に幸福ではあつた。しかし何時如何なる場合にも、父と子とは「父と子」であることを忘れてはならない。父は彼に向つて文學といふ學問を許したのであり、學者たることを要求したのである。決して藝術家なるものを認めたのではなかつた。しかし學者にならうといふ考の寸毫もない

學者と藝術家とは自ら別のものだと信じてゐる彼は官立の學校を希望してゐる父の意向を裏切つてほんの申し譯に氣樂さうな私立學校へ這入り、それならばせめてはそこをでも卒業してくればと思つてゐる父母の心をもう一度無視して、何時の間にかもうその學校も半途で廢學してゐた。その代りには家庭には何の相談もなく一人の、家庭の人たちに取つては全く見知らないやうな女を妻にしてゐるのであつた。しかも彼の父母にとつては、彼がどんな方法かで何事かを努力してゐるものと認めてやるべき材料は、今はもう何もなかつた。彼の母は、その夫の友達の子息たちが夏休みになるとそれぞれに學校から歸省して、或者は某の醫學學校を來年卒業するとか、或はもう大學の二年とか三年とかになつたとか、或者は來年は醫學士になつて歸るだらうとか、さういふ話が白々と耳に這入つてくるのを苦にしながら、彼のやうなのくらゐ息子を楽しんだことを夫に向つて恥ぢるばかりである。折にふれて金の無心に遠く歸つて來た彼に向つて彼の母はそんな事をよくくどくどと言ひ出すのであつた。父はさすがにそんなことは一言も言ひはしなかつた。その代りもつと理に協つたそれ故手ひどい事を言つた――

「例へば、お前は昔から個人主義者だと言ひもしてゐる。父そのやうに振舞つて來てゐる。何時、家庭の一員としてどんなことを家庭の爲めにした事があるか。自分の便宜の時にだけ家庭をたよるといふのは理由が成り立つ事だらうか。……和洋折衷といふことがあるが、お前はまるでそれだ。西洋流の個人主義と日本流の家族主義とを自分の便宜に應じて折衷するのだ」と、そんな風に、一流の苦い諷刺を序することもあつた。又、「お前は私にはろくろく相談もせずに妻を娶つたのだ。その時だつて私は一たいどうして妻子を養つて行くつもりだと考へてやつた。お前はそれには何とも返事けして來なかつた。私はお前にはお前と分別があるものと思つてゐた。私は未だ獨立するだけの力のない子を養ふのは父の義務と思ふからお前の爲めには金をやつてゐる。しかし自分で口を潤すことも出来ないものが勝手に妻つた妻をまで養ふ義務はばじないのである。しかしそんなことを言つて他家の娘を干渉にさせて置かうといふのではない。なるほど夫婦二人では、私がお前に月を送るだけではやつと暮らして、何の人間らしい生活も出来ないか、知れない。しかし二十五圓の月給を貰つてゐる遺徳



藝術に對して本能的な愛情を抱いてゐる彼はたとひ渚山なりこの古本屋の小僧なりをいかに輕蔑しながらも、その道の話題になるとやはり熱中した態度になつて何かしらその場かぎりの考へでも、やはり述べずには居られなかつた。さうして彼等が歸つて行つた後では、意味もなく彼の自尊心が傷つけられたのを感じてさびしいうつろな心を感じた。しかもそれでゐながら、いつも察いで置く犬の爲めに、犬を牽いて散歩にでも出かけてゐる時、ふと誰もゐない留守の家へ、誰か——金銭の話以外の題目を持つた彼等、と言つたところが渚山とあの古本屋の小僧とより外には誰もいないが、その二人のうち誰かが訪れて來はしないだらうかと思ふと、急に家へ歸つて見る氣持になりさへもするのであつた。

藝術といふものは實に不思議なものである。世のなかにこれほど不思議なものは先づ滅多にはない。さうしてこれを説かうにも、それを譬へるべくこれに相當する何物も外には先づ見當らないと言つていい。假りに、人間の誰しもが重かれ輕かれそれに懺まされないうちは居られな

いあの不思議な熱病——戀愛の感情にこれにくらべて見ようか。その情熱は正しく互に似通うた相近いものであるかも知れない。けれども、普通、戀に酬いられなかつた若者はどうかするとその戀人を憎惡をもつて思ひ起さないと限らない——時を経ていづれは懷しさに變つて行くとも、それを忘れる爲めには少くとも一時は多少の憎惡であるとか怨恨であるとか乃至は輕侮であるとか何れさういふ種類の或る感情を以て、その憧憬の標的であるところの戀人を見返すのが普通である。これに反して藝術家が藝術に對する場合には、たとひ彼が藝術のためにどんな世間的苦境に置かれようとも、すべてを藝術の名によつて喜んで受け或は誇として、彼が藝術のやうなものをどうして愛するやうになつたらうと言つて藝術そのものを憎んだり輕んじたり疎じたりするやうなことは決してない。但、己の天分の薄いことや或は自分が時代に合はないことをただただ感じて、自ら挫けながら而も藝術に對する熱愛は益々強く深くなつて行くのである。それは既に信仰歸依の一種である。而も「神は與へるかも知れない。宗教の場合には餘程深い信

徒でもなくては決してかうはあり得ないであらうと思へるところのものを、藝術の場合ではその仕事に携はうと志した者の殆んどすべてが、彼ら自ら別に何の努めるところなしにこの心持をひとりてに抱くものである。勿論、彼らとても藝術をつまらないうと考へることはある。しかしその時間彼にあつてはすべての人生そのものがつまらないのである。藝術を捨ててどこに行かうにも、人生のうちに彼の行くところは全くない。それに一時、神を疑つて惡魔にひれ伏さうかと思へ、慄むかも知れない信仰者のものとは少し趣が違つてゐる。——これ等のことはこの正體の知れない悲しい藝術に魅せられた人、藝術家の本能を持つて生れて來た人以外の者にはいかに説明しようとも結局不可解なことである。

かういふえたいの知れない心を抱いてゐる息子を持つた父が、その息子に對して採る手段といふものは多くの場合何れも同じ順序である。普通この父と子とは互に相手に向つて不満を藏しながら、しかも親は愛するが故に遂には敗けて、風變りな息子を持つた自分の不幸を救済ながら、しかしもうあきらめて子のするがままに任すものである。彼——この話の中心人物であ

母の方では無限に持つてゐてくれさうなその情愛をいい事にしてそれに絶らうとすることは、彼の考へでは不合理でもあり従つて又一種重大な不徳義にも感ぜられた。父が彼の才能に何かまだ信頼のやうなものを置いてゐる間こそ彼は父を自分の藝術上の保護者とも思つて甘えることも出来るけれども、既に彼の父は才能を見放してしまひ、それ以上の事には彼自身が早くももう自分自身の才能を信じられさうにも無くなつてゐる今日、洋教師でない以上は誰がそんな不渡手形を切出して金を要求出来るものではない。

煙草の煙や、その吸殻を火のなかへくべて燃した煙などの爲めに部屋のかなが濛となつてゐるのに氣づきながらも、若しどこかを明ければ寒い風が吹き込むので、ちつと火鉢のそばにそれを氣にしながらしやがんで、彼は自分の頭のなかも正しくこの部屋のやうに鈍びしさや味気なさで濛としてゐるのを感じた。自ら憐れむやうな、自ら蔑すむやうな、又何事ともしれない——多分それをしつかりとつきつめて行けば生れて來たことそのことをかも知れない事を悔

ゆるやうな氣持や、さては何者に向つてともなく反抗しなければならぬやうな、それよりはすべてをせせら笑つて仕舞ふやうな、しかし唯それだけでは決して氣の安まらないいらしきや、さうしてそんな彼自身の心境こそは哀れむべき人間のものであることは疑へないといふやうな反省や、そんなさまざまな心持——しかもそれも激しい活氣のあるものではなく、譬へて見ればたそがれの市街の景物のやうに淡く、どす黒くごたごたと彼の心のなかに去來してゐるのを彼はただ手を束ねて凝視した。かうして精神の衰弱してゐる彼は、いつも自分の精神状態の自脈を取つてゐるのである。さうして自分以外の人間のことは、甚のことできへ別に人に何も考へる閑はなかつた。それでゐて、氣まぐれに、俺にだつて何の才能もないとは限らない、何か短いものでも書いて見ようかと、そんな事を考へてゐると、すると、現實生活とは此かのかかりも無いやうな荒唐無稽なこと——例へば、或る干渉どころへ大變身の輕い舞踏に長けた少女を獻じた者があつた。その少女はあまりに身が輕すぎて夜眠つてゐる間などには飛んで仕舞ふおそれがあつた。そこでその少女の足や手をしつかりと鎖でつないで、それ

でもまだ心もとなないから、毎日の夕方王宮の庭中にその口吹いた花を摘み集めて、その花の息で少女の部屋の空氣を重くした。それから……とか、——或は、月夜に散歩してゐると見なれない洞窟があつた。興に乗じてそこに這入つて行く洞窟のなかは外よりも反つて明くてそこに一人の女、少女が遊んでゐる。しきりに物を食べてゐたから蓮の實だらうと思つてよく見ると、それは蘭であつた。蘭を指であざやかに二つに破き開くとそのなかの蟲を食てゐる……とか、そんな全く意味のないことを二三枚書いては、こんなものが何だと自分を叱りながらその書きかけを裂いて丸めてしまつた。さうして自分の空想のなかには、全く不現實極る或るものがあるのを厭はしく思ふと、たとひそれが十分間であつてもそんなことを面白いと感じた自分が恥しくなつた。自分にはどうして貧乏だとか情愛だとかその外とさまざまな世間なり人情なり乃至は思想なり、他の人々のやうに力強く躍いて來ないのであらう。それは生活そのものが悪いからだ、どういふふうが悪いのか、だがこれよりはどうも仕方がないから、……大勇猛心がないから。それからそれへともう一度またさまざまな問題を循環的に考へ直し

でも振子を養育して生活してゐるぢやないか。  
私がお前に送るのは少いけれども、過去の月給よりは多からう。誰だつて汗水をたらして生活をしてゐるのだ。それが人間の暮しの常といふものだ。お前はただのらくらとして、何の仕事をしてゐるのだ。たとひお前が何かをしてゐるとしたところで、それが儲打のあることかどうか藝術なり文學なりのことを知らない私には一切解らない。これが若し學校にでも通つてゐるといふのなら學業の成なり進級なりによつて、私はそれでお前へ何か進歩してゐるといふことを認めることも出来ようし、或はまたお前が若し何かの仕事をもして世に問うてそれが識者に認められでもしたらば、それは又その時でも私もその識者を通してお前の才能を信用するといふ方法もあらう。私はあり餘るやうな金があつてお前たちを好きなやうにさせてやるやうな身分でもなし、お前の外にはまだ二人も男の子がある。あてにもならないお前にばかり何の爲めに費してゐるかも知れない學資を、お前が望むだけに十分に、それもいつまでといふ制限もなくやつてゐようものなら、あとに若しかすると有望かも知れないお前の弟たちに對して、私が心ゆくままのことをしてや

れないことになるではないか。お前は自分で自分の才能に信賴して自分の道を選んで貧乏などには氣な管ぢやないか。もし又文學で身を立てられないなら、電車の車掌なり巡査なり、お前にだつてなれるものはいくらもあるぢやないか。なるほど、そんな事をお前がするのは家庭としてもお前自身としても名譽なことでないに決つてゐる。しかし全くの白痴でも氣遣ひでもない男が何の仕事もせず、それを父私たちが別に鞭撻しようともせずにあるとすれば、お前が身分の低い職業をするよりはその方がもつと恥づべき事だ。世間にも申しわけのない事だ。父は彼に向つてさう言ひ置いて、それから座にゐる母に對つて、「この事は、お前にも聞いて置いて貰ひたいものだ。世間體が悪いなどと思つて私に内緒で金をやつたりなどしてはならん。紙幣の愛といふ言葉があるが、それはお前のやうなのを言ふのだ。何かにつけて親牛が無暗と仔牛を舐めて可愛がる——それより外に可愛がり方があるのを知らないのだね。教養ある健全な人である彼の父の言ひ分は、いつも一つ一つ尤もであつた。二十五までは、學校に通つてゐてもそれぐらゐの年まではかかるのだから、二十五までは、お前が學校へ行つてゐるものと見

做して、私も今までどほり月月の金は送らう。しかしその以後は決して私を手頼つて貰つては困る。私もお前には一切手頼りはしない。……私はお前の薄志弱行が齒痒いのだ。論語に「女今畫」とある——自分の力に自分で見切りをつけてゐることだ。お前つやうな男が孔子のお弟子にもゐたと見える。大勇猛心といふものが欲しいものだね」さういふふうには彼の父が言つた。彼の母は又、或る時「何ごともお前自身の心がらだから」とも言つた。その彼の二十五はこの正月が來てもう暮れてしまつたのである。彼の妻や妻の母などは、こんなに困窮してゐるのに彼がどうして彼の父から金を貰はうとしないのだらうかと、それを驚く調しく思つてゐる。さういふ意味のことを時折に言葉の端に洩しもする。しかし彼として見れば、實際もう今になつては父母から金を貰ふ理由は成り立たない……單に親子だからといふわけでもない、無心を言へたものではない。それに彼を一度困窮のどん底へ置いて見たらば、と意を決してゐる彼の父は、今の場合もう決して金などをくれる筈のないことは解つてゐる。一たい彼自身のなかにそれほど賄へてゐるものはないに、而も父



なかつた。しかし彼自身にも當分は解釋出来なかつたやうな或る奇妙な戀愛があつた。それは夜更けになつてかうして歸つて來た後の元氣のいい妻に對する時や、また朝朝、彼の女がこつそりと身支度をしてなるべく大の目を覺さないやうに心がけながらいそ／＼と出かけて行くのを、その少しのものの音にも口を覺す彼が寢呆けた目でぼんやりと見る時や、或はまた不眠な夜毎にその傍で心地よささうにぐつすりと寢入つてゐる妻を見る時などは、屢ふとその氣分に襲はれるのであつた。それは彼が今までに味つたことのあるさまざまな感情のなかでは最も嫉妬の感情に近かつた。しかしそれは普通の嫉妬ではなかつた——彼が彼の女に關してそんなことを妄想して見たことは未だ一度もなかつた。しかもその嫉妬に似た或る感情が日毎に少しづつ募つて來た時、その理由らしいものがぼつぽつと彼自身にわかつて來たやうに思へた。それはやはり或る嫉みであつたと彼に解つた。それはすべき仕事乃至職業を持つてゐる人間、その人間が樂しげにその仕事に熱中してゐるのを見る時に、その傍にある何もすることのない人間、何をしていいか解らない人間、何も出來さうにない人間の均く嫉み——言ひ換へれば生活をし

てゐる人間に對する生活のない人間の嫉みではなからうか。彼は自分で自分に言つた——「俺はかうしてゐるのが樂しくつてのらくらしてゐるのぢやない。俺にはすることがないのだ。俺が樂しんで出來るやうなことが何もないので。樂しんでではなくともいい。無理にでも、俺のするやうな職業は一つもないのだ。俺は今までも幾度か會社員にでも新聞記者にでもその他の何にでもならうと思つたではないか……事實、彼は時時知り合ひの先輩や友人などにその事を相談して見たことがあつたけれど、誰一人として彼のその相談を眞に受ける人はなかつた。いや、眞に受けたにしても正直な人は駄目だよ。君に何が務まるものか」と言つた。さう言はれて見ると、彼はなるほど自分には駄目だらうと思つた。露骨にさう言はなかつた人は「君はやはり生れながらの藝術家だから」と、さう言つてとり合はなかつた。すると彼はなるほど俺は生れながらの藝術家だから、と思はないでもなかつた。——一日の職業によつて疲れて、それ故に深く眠ることの出來る羨ましい妻の傍にあつて生きても居なければ死んでもゐない父日を覺してゐなければ眠つてゐない彼等へは一種量と容積とのある影

そのもののやうな彼は、とりとめのない考へで鈍い自己反省をするのであつた。

「……さういふわけで、僕はこのごろつくづく職業が欲しくなつて來てゐるのです。何でもいいのです。何でもやつて見るつもりなのです。ニイチエだつたか誰だつたか、職業は生活の脅威だ——何でもそんなことを言つた人があるさうだが、さうすると僕などはさしたたりくらのやうな人間ですね。僕もつ、何でもいから職業を見つけて、自分の生活をその職業に順應するやうに改造したいものだと思ふのです。たとひその職業が藝術に何の關係もないもので、例へば銀行員といふやうなものです。ね——さう、一そうそんなものの方が反つていいのだ。朝の九時にはちやんと出勤して夕方四時にはきちんと歸つて來るといふやうな、なるべくそんな規律のある生活がいいのです。で、そんな我々としては途方もない職業に努力をして見て、そのために僕の生活がすっかり調和がとれそれに慣れ切つてしまつて、その結果もう小説を書かうなどと考へることなどが莫迦莫迦しい空想に思へてならなくなつてしまつた



て、終には考へることが何になるか！と、自分自身のなかでやけに叫んで、何とも言へないヘルブレスな心になって来た。——このやうなさまざまな彼の物思ひの間にはいつも江森清山の影がちらちらと出没するのを彼は感じた。

毎日、決して實になることのないそれらの雑多な考をあら方一とほり考へるとか、或はそれらのうちの一つについて迷宮を辿るやうに考へ耽つて、彼の頭が全く疲勞し切つた頃になつて、夜が更けたから人通りの全く杜絶えたこの淋しい裏町に或る下駄の音が凍てついてゐる地上に折返つて彼の耳に響いてくると、裏の狭い庭に響かれてゐる一足の犬も、その足音を聞きつけて聞き割けると見えて、頸の鎖をぢやらんぢやらん音させながら柔かに短く吠えたり、クンクンと鼻を鳴せたりするのに對して、家の外からは下手なときれときれな口笛が吹かれる。やがて彼の家の専戸が威勢よく開いて、「レオや！フラテ！フラテ！」と、きつとさう二足の犬の名を呼びつづけたが戸閉りしてゐるのであつた。彼の妻が歸つて來たのである。

寒い風に吹かれた頬を赤くしながら、この快活な若い女は、活潑に長火鉢の向うへ來てしやがんで、黒い手袋のままで手を火に觸しはするけれども、別だんに寒いなどとは言はずに、直ぐに何か今日、外で——雪車のなかや樂屋などで起つた愚にもつかない話を一つ二つ騒騷しい早口にしゃべつて笑つてしまふと、それから、疊の上まで長く垂れてゐた白い長い用巻やら手袋やらをすつかり取り外してしまつて、片手をのばして背後の障子を開けて置いてから、湯のたぎつてゐる銅壺をつまみ上げるとそれを臺所へ持つて行つた。臺所の片わきに或る時にはその茶の間の片隅に無性に押しのけてあるよごれた食卓を手早く處置して、そのよごれてゐた茶碗を洗つて仕舞ふと、それを再び茶の間へ運んで來た。彼の女は彼に、犬に御飯をやつたかどうかを聞いてから未だだつたら、再び庭へ下りて行つて先づ犬たちに食物を與へて置いて、彼等はそれから夜食をするのであつた。しかも夜食が済むともう一度それらのよごれた食器を洗つて翌朝の用意をしてゐることがあつた。——彼は、人一倍無性なさうして寒がりな彼は、自分の妻が、一日中兎も角も働いて來たその女がこんなに事もなげに物事を手早く

してのけるのを果氣に取られるとでもいふやうに見ながら、かうして夜遅く歸つて來て、そればかりか甲斐甲斐しくそれらのことをやつてのける彼の女をつくづくと見てゐると、彼もさすがにいたいたけな心持を抱かずにはゐられなかつた。しかし、小言ならびてきばきと理詰めにいつまでも言ふことかあつても、そのやうな感情を表白する知愛な言葉の種類は彼にはどういふものか決して易易と口から出て來なかつた。つとめてそんなことを言ふのは彼のやうな性格には何となく不快なことであつた。さうして彼はいつも「言も彼の女をいたはるやうな言葉」を言つた事はなかつた。さうしてどちらかと言へばやはり昔い氣むづかしい表情をして、このよきはしやう言葉數の多い妻を興味もなさうに聞き流すことが多かつた。さうかと思ふと彼自身が彼の女よりもつとはしやいで譏笑しかけることも時折にはあつた。しかしそんなことがたとひどちらであつたとしても、そんなことには割合に無神経な、又この三年間の同棲で自然と夫の氣まぐれな性質を呑み込んでしまつてゐる彼の女は、夫が別だんに理由があつて不興なのではないと思つてゐるらしかつた。いかに、彼には何を不興がるといふ理由も

るやうな言葉をもつけ加へた。しかしその口吻とても何も別段小劇場の背景描きを事實上於て彼に勧めたのではなく、單にそれを話のつぎ穂にして、落山は例によつて未だ書かずにゐる或る小説の草稿を一つ、ここで彼に披露する機会を得たかつたのだといふことは、落山が再び口を開いた時に直ぐわかつた——

「私は一つ、やはりさういふ不遇な藝術家に就てのエピソードを考へて置いてあるのですがね——その落山の話といふのは或る青年畫家がある。眞夏の眞晝に或る畫家が高い足場の上で仕事をしてゐたのが、眩しい光線と蒸せるやうな暑さやペンキの臭ひにでも當てられたのか、突然目まひがしてその高いところから墜落して氣絶した。そのまま動けなくなつたから、別の畫家がそのつづきを塗らうとしてその高い足場へ上つて行つたが、その時、二番目の畫家は、前の男が皆がいやがるその高い部分をいつも好んで描いてゐた理由——さうして多分はその爲めに足を踏み外したらうと思へる理由を發見した。といふのはその高い足場から見下すことの出来る視野のうちに、極く近い私娼窟の一室のありさまが開け放した窓の中に露骨に展開

してゐたからである。——落山はさう筋を述べてからいつものやうにそれに就て、自分で自作——しかもまだ一行も書いてはゐない自作の註釋をし初めるのであつた。一何、ほんのつまらない筋ですよ。何しろもう十年以上も前に企てたものですからね。尤も、無論いくらかはそれに似た事實によつてヒントを得たものです。え、當時私はゾラなどのやうなものを心掛けてゐたので、つまり何です——自然主義でありながら筋の面白さもあるといふ作風です。で、私はその時、淺草ばかりを取柄にして「淺草」といふ小説を書かうと企ててゐたのです。一つ一つが獨立した短篇で、その短篇が十二三篇も集つて、一つの長篇になるといふつもりだつたのです。——さうさう、三四ヶ月前に私が「殉教」に書いた小説「およね」といふのを讀んで下さいましたか。いや、どうも冷汗が出ますが、あれもやはりその、「淺草」シリーズの一つなのです。ほう。あんな恥を知らないことまで書いてしまつて……」

或る同人雜誌にお情けで採用してもらつたその「およね」とかいふ作品は、何でも落山自身の経験をも、どうやらそのまま書いてゐるらしかつた。さうしてこの氣の利かない男が昔はどんなことをしてゐたかといふ事に就て多少の興味を抱かないではない彼は、その「およね」の筋は聞いて見たいと思つたが、さきに落山が「あれを讀んでくれたか」と言つた時に彼はその時はこの上にもう一つ落山の小説の筋を聞かせられては……と、うつかりいゝ加減にもそれを讀んだやうなことを言つて仕舞つてゐた。それ故、「およね」が全く落山の自叙傳の一節で、且つそれは自信のある作品だといふ口吻で落山がそれに就て、例の謙遜な口調ではあつたが改めて長廣舌を震ひ出した時には、彼がうっかりちぐはぐな返事をしてはならない爲めに、ただ當り觸りのない返事をするより外には仕方がなかつた。

それにしても落山は——と、彼は落山の語るところを聞くやうに装ひながら、心ではひとりで考へるところであつた。それにしても落山は全くの才能無い人とはどうしても思へない。いや、大した才能はないかも知れない。しかしもつともつと無能な男でありながら一時の風潮に乗じて、他人からも自分自身でも一通りの作家のやうに成り切つてゐる人間の例はいくらでもあるのに。彼はそんなことを思ひながら、炬燵のなかに味氣なく相對してゐるこの年長の

としたら、その時はそれでも結構だ。つまり僕はさういふ節にかかつて藝術家といふものから、落伍した事になるだけです。落伍するものなら、さまざまな節のうちのなるべく早いうちの奴でふるひ落された方が、結局はいいのですからね。——ともかくも今のままではあまり生活が氾濫しきつてゐますからね。こんなふうにしてゐれば今に、精神も肉體も一緒に駄目になつてしまふことは……」

或る時折から訪ねて來てゐた落山をつかまへて、彼は、まるでこの人に向つて求職口を哀願してでも居るかのやうな熱心でこんなことを言ひ出した。さうして「こんなふうにしてゐれば今に、精神も肉體も一緒に駄目にしてみれば……」と彼がさう言ひかけた時に、これを聞かされてゐる相手が落山であつたことにふと氣がつくと、そんなことを今更にこの落山の前で話し出すといふことは、氣のいい落山がたとひそれをどう無神経に聞き流してゐるにしろとここで、あまりに心ないわざのやうに彼には思へた。同時に又、落山などを相手にして自分の憂悶を眞面目に打開けさうになつてゐるこのみじめな自分自身が腹立しくもなつて來た。そこで彼は、今のさつきの沁み沁みとした口調を

一變した。わざと輕佻にさうして自嘲するやうに——

「……と言つたところで、どこへ行つたら僕を雇ふだらう。尤もたつた一ヶ所はありさうないだ——」

「ほう。それは又どういふ所です」今まであまり氣のなささうな受答へをしてゐた落山は急に好奇心を動かしらしく言葉を挟んだ。

「なに、それがね、新劇座の背景の手つだひなのだ。ふ、ふ。女房が新劇座へ這入つた時に、序に僕にも何か仕事がないか、座長の太田秋帆に頼んだのださうです。秋帆は僕が道樂に繪を描くのを知つてゐたと見えて、背景の手つだひはどうだと言つたさうです。なるほど邪劇の臺本を書くよりはこの方が才能のいらぬ事ですからね。樂なことだし毎日の仕事ではなし、なぐさみにやつて見たら小遣錢ぐらゐにはなるだらう——さう言つて女房まで勧めたものです。その當座ね。だが僕はやつぱり悟りが開けてゐなかつたものだから、女房は下つ端の女優、亭主は背景の手つだひをして、夫婦揃つて大川秋帆の家に來にはいくら何だつてなりたくはないと思つて居たのです。ところが今となつては問題はその程度ぢやない。——成程小遣錢も欲

しいには欲しいが、それよりはかうして毎日ちつとしてゐるのが退屈でやりきれない。場木の小屋の背景描きになつてそれに順應するやうな生活を始めたいには、それこそ生活の改善どころか改悪になるかも知れたものぢやない——いや、今のこの生活より悪いものと言つては先づ無さうだが、さうすれば結局今と同じ程度のことかも知れないが、僕はそれでもいいと思ふ。僕の欲するのは生活の改善だが、それが出來なけやせめては轉換だけでもいい。で、僕はこの間そんなつもりで今度は僕の方から背景描きの志願を秋帆に取次いでくれるやうに女房に頼んだのです。すると今度は女房の方でそんな馬鹿なことはいないが、いいと言つて取り合ひさうにはないのです」

「それやマダムにして見れば、あなたが本當にそんなことをしなさうな氣勢を示せば、させたくないに決つて居ます。それよりあなたはやつぱり何か書いて見ちやどうかだらう」落山は一應そんなことを言つてから「——だが、さういふ社會へちよつと這入つて見るのも全く無駄ではなさうですがね」落山は落山らしい考へで——人生に於て絶対に尊重すべき經驗の積らしなものとしてのその仕事を、彼に向つて誘引す



はもう、つくに一人前の文士になつて文壇に現はれ出てゐる。或る者は洋行をしてゐる。せいぜい思はしくない人々でも學校の先生にはなつてゐる。さうして彼ひとりとは、取残された者のやうにそのうちの誰とももう交りつづけてゐる者はない。かつてはさういふ仲間の人であつた彼と秋帆とは、さういふ顔馴染としていつも會釋をし合つたり、或は時たまに同じテールプに來合つて坐るやうな事があると、それぞれに至極春氣さうな無駄話を取交したものである。そのやうな間柄である秋帆のところへ彼が、偶偶やはり同じ新劇壇の女優を妻にして、その女が秋帆の一座に使はれるやうになつたといふ關係を、あたりにたどつてではあつたが、それにしてもその秋帆に向つて、仕事もあらうのに背景描きの手導ひをさせてくれと頼みに行くのは、人並より多分に見え坊らしい彼にとつては、言ふまでもなく決して愉快なことではなかつた。妻がそんなことを取り合はないからしてかうして自分で出かけて行くのではあるが、彼の妻がそれを取り合はないといふのも尤もだと言はざるを得ない。どうぞ秋帆の方で氣を利かして彼にあんまり取扱い氣持をさせないでくれればいいが……

そんなさまざまなことを、或はその頃の友達のことを、さては自然と彼が妻と知り合ひになつた當時のことやら、彼はそれらを歩きながら、電車のおかげでも考へつづけた。さうして新劇座が近づいて來た時に、妻が居る樂屋へ夫である彼が用事を持つことは言へたづねて行くといふことに、彼は妙なひけを感じた。彼が自分で、それも今日突然、秋帆を訪ねて行くなど、妻には一言も言つては置かなかつただけに、かの女はきつと愕んであらう。實際、それほど切實に生活の現状から脱却したがつてゐる彼、その爲めには敢て背景描きの手導ひをでもしようといふ心持になつてゐる彼を、かの女は了解しなかつたであらう。いや、おそらくは外の何人もやはり了解しないであらう。さうしてすべての人は彼の妻とともにそれを、せいぜい彼の物好きな氣まぐれに思ふかも知れない。さう言へば、確かに物好きの氣まぐれも半分ぐらゐはあつた。しかし彼自身はどこまでも眞面目なつもりであつた。彼がやうな人物にとつては氣まぐれと眞面目とがいつも互に解き放し難いほど複雑にもつれ合つてゐるものである——それが所謂ロマンティックといふものの通有性格ではなからうか。さうしてロマンティック

ケルは彼自身いつも自分の眞面目な方面ばかり信ずるし、しかし世間にはいつも彼が氣まぐれの方便かりを見てゐる。——彼は、いつもの癖として、かういふふうに自分自身の事も恰も作者が小説の主人公に就て考察する時のやうに考へながら、歩くたびに埃の舞ひあがる自分の足もとを見つめて、樂屋の階段を二階へ昇つて行つた。

扉を引くとなかなかに眩しいほど明るかつた。今まで彼の通つて來たところがうす暗かつた上に、この六層ほどの部屋には一面の窓から差し込む日光が疊の上にあふれて、その疊の上の日光が窓の下に並べてある四つの鏡臺へ反映して、その鏡の一つからの反射が、扉をあけた拍子に彼の目にあたつて居たからであつた。彼は日ばたきをして、目を伏せてから言つた——

「瀬川瑠璃子は居ませんか  
今まで人の造入つて來たけはひにも別だん氣にもかけずに喋りつづけてゐた女どもは、一齊にふり返つた。さうしてそのなかの一番年かさで一塵美しくない女が、喉を悪くしてゐるやうな聲で、誰だと彼を尋ねた時に、  
「うちの者です」

さう、彼は慚つたやうに答へた。三人の女は

友——この小男の平べつたい特色のない顔、  
——それはもう青年のものではない顔を、電燈  
のまだともらない夕闇のうす暗さを透してしみ  
じみと見守つた。——さて、ほんの幾分かの間、  
彼は自分自身の事(こと)を忘れて居た。

もう春になつたやうに温かな日であつた。そ  
れが彼を勇気づけた。こんな日が十日もつづけ  
ばいくらか助かるやうな氣持さへする。しかし  
これはもとより季節はづれの温かさで、だから  
こんな日に出かけなければと彼は決心をした。  
しかしいざ出かけるとなつて見ると、外套を着  
て見たり脱いで見たりさまたまに思ひ迷ふので  
あつた。もう五年越の古外套は襟が垢だらけ  
で、そればかりか裾が斷れてゐる。今日のやう  
な日ならば外套を着なくともをかしくはない。  
けれどもさてその外套を脱いで見たところで一  
枚看板の銘仙は皺だらけで羽織の襟などはよれ  
よれになつてゐる。それを見ると、もう外へ出  
かける氣勢までが押ささうになる。彼は、この  
温かに空さへも春らしく紫ぼくなつてゐるの  
を窓から見上げながら、ふと十五年も昔、學校  
の帽子が古くなつたと母にせがんで父にひどく

叱られたことのあつたのを思ひ出した——  
「七志道而恥惡衣惡食者未足與議也」  
そんな言葉は父が教へたのはあの時であつた。

その言葉も本當ではあるが、あまり見すばらし  
い身装をしてゐては心まで卑屈になり歩き方だ  
つてたどたどしくなるではないか。それに彼は  
もう、道に——藝術の道に志してゐるといふ  
やうな矜持をもどやうら失ひかかつてゐた。さ  
うして今は一介の求職者として出かけようとし  
てゐるのである。然うだ、「渚山の夏羽織」だ。  
そりや全くほんとうだ。それにしても、外套  
を着てみようと思ひでみようとその見じめな程  
度は同じだとすれば、もうどちらでもいいと思  
ふより仕方がない。

彼は外套を手につつままで歩いた。——と  
いふのはこの古外套は表より裏の方がまだし  
もまいで、持ち方の工夫をすればどうやら破れ  
たところよれたところなども見えないで済み  
さうだつたからである。

それにしても、大川秋帆とはどんな風に  
口を利いたものであらう。全く識らないといふ  
間柄ではなく、と言つて識つてゐるといふ程で  
もなく、それにもう五六年以上も逢つたことは  
ない。——この頃、新しい風潮の演劇が流行

し出した兆に乗じて、やま氣の多い大川秋帆  
が、そのやま氣ともう一つにけふの情婦たるデ  
貌ある一女優の一代の人氣とで、秋帆の成金の  
成功は素晴らしいものであつた。さうして秋帆  
はその一座である男女の俳優たちを引具して意  
氣揚々と、諸所のカフェーへ現はれて、人人の注  
目を集めてゐたものであつた。秋帆と彼とは、  
その頃の「カフェー」の友とでも言つたらしいだ  
らうか——その頃彼はまだ學校にゐたから、さ  
うしてその贅澤な私立大學のなまけ者ぞろひの  
文科生たちは、學校を唯その勢揃ひの場所とし  
て、殆んど毎日、さうして一日中そこかしこの  
カフェーに出入してゐたものであつた。彼等は

金のある間はそれぞれに單獨行動をとつた。金  
がなくなると皆して金を集合つては借をして、  
一杯のコオヒーを注文してそんな場所を數時間  
もしやべりくたびれて悲しくなつてゐることか  
多かつた。さうして秋帆の芝居にはもとより、  
それが書生上りの所謂新なるものの興行  
でさへあればどの芝居へでも、強制的の木戸御  
免で押入つては、もとより芝居などを見るでは  
なく、ただ劇場の廊下をさも自分たちの縄張り  
うちとでもいふやうな顔つきで、うろちろして  
ゐたものであつた。その頃の彼の仲間の或る者

「私です。大川さん」  
彼は秋帆が彼を見忘れたのぢやないかと思つたから、さう自分を紹介しようとした。

「ああ。これはよくこそ」

秋帆はかう一種の切口上で應對をして、その火鉢の向うにあつた座布團を顔でもつて彼にすすめた。さうして置いて久淵をでも絞することか、さも迷惑さうなさうして幾分かよんとした表情を——それでも少しは努めてかくしながら秋帆は、何と言ひ出さうかと戸迷ひしてゐる彼に向つて言つた。

「どういふ御用でお出かけ下さいましたか」

此言葉を開いた彼は一そう戸迷ひをした。——

古い顔馴染としていくらかは心安だてに話が出来るだらうといふ彼の豫想が全く外れてしまつたからであつた。それにしても解らないのは、恰も見知らない大同士が途上で相會した時のやうな秋帆の彼に對するこの態度であつた。彼はふと秋帆がその情婦の樂屋であること、その女と密談でもしてゐるところへ自分が這入つて來たのぢやなからうかと思つた。それはこの部屋にはさまざまな器具調度などが善く調へられてゐて、同じ樂屋と言つても今のさつきまで彼がゐたところなどとは自づと異つた空氣

がある上に、窓には厚味のある窓かけがすつかり垂れ瀧めてゐて、その爲めにこの部屋がしんみり落着いたうす暗さであることからの聯想であつた。しかし扉といつては彼が這入つて來たところより外にはなかつたし、部屋のどこにも外に人のゐるけはひは無い。そこで彼はもう一度考へ直して見た時、秋帆が自分の輩下であるけちな女優の夫が秋帆自身と同輩でもあるやうな顔つきをしてこの部屋へ這入つて來たその事で不愉快に思つてゐるのかも知れないと思つた。さう氣がついた彼は、自分の目の前に結城紬を二枚重ねて納つてゐるこの男を——さうして同時に自分自身をいくらか愚弄するやうな口調で言つた。

「家内がどうもいろいろとお世話になります。それでちよつと御挨拶に上つたのです……」

「はあ。これはどうもわざわざ恐縮で……」

秋帆は口ではそんなことを言つたけれども、その表情には依然として、彼が皮肉にも期待したやうなそんな變化は何もなかつた。

「それに」と彼はつけ加へた。「實は少しお願ひ

がありますので。外でもありませんが——いづぞや瑠璃子がお願ひをした時、私に背景の手傳ひをさせて見てもいいと仰言つてくれたさうで

すが……」

「はあ。そんな事ですか。さうですな。それは」と秋帆は妙に狼狽を示しながら彼の言葉を中途でとつてしまつたきり、しかも自分でもしばらく絶句してから、急に早口で言つた。「さういふ事は一つ御手紙でも——いや、今一ヶ月ほどして見てから改めて御相談下さるといいですなあ——」

この胸に落ちない秋帆は、さう言ひながら立ち上つて、屏から顔を出したと思ふと「田中! 田中!」と大聲で誰かを呼んだ。それから碌にその返事をも待たずに、もう一度「虎公! 虎公! 虎公、居ないか!」と叫んだ。さうして「人の若い男——それは多分秋帆の書生と思へる男がべこべこと秋帆の前へ來た時に、秋帆はそ

の男に言つた——「今直ぐにね、……いや、よし。今おれが自分で行くよ」それはどうも秋帆が自分の客を小うるさがつて早く歸らせようとするための言葉らしかつた。果して秋帆は自分は今ちよつと多忙だからと言つて、彼をその部屋から追ひ返した。

家に歸るために彼は、先刻そこに置いて來た外衣を取つて來ようとして再びあの女優の部屋へ立ち寄つた。そこには若い女優がたつたひとりと、



無遠慮にももう一度彼を見つめたが、そのうち  
の一人ぶかの女の隣りに一つ空いてゐた派手な  
メリンスの座布團——それは瑠璃子のものではあ  
る座布團を彼にすすめると、そこに寝そべつて  
ゐた一人の男は起き直つてその座布團を彼の方  
へ引き寄せて彼にすすめた。さうしてその男は  
立ち上つて扉を開放したままで出て行つた。多  
分、瑠璃子をどこかへ捜しに行つたらしかつた。  
人づき合ひの悪い彼は、三人の初対面の女ど  
ものなかへ坐らせられた手持無沙汰に、煙草を  
叩ひつけてこの亂雑な——赤いものや青いもの  
や、女の衣物をだらしなくそれぞれに脱ぎ捨て  
たり、壁に吊したり、殆んど丸めたと同じやう  
に無難作にたんだりしたこの部屋のかを見  
まはした。女どもも氣むづかしげな彼のために  
いくらか窮屈さうにおしやべりをやめて、筆の  
なかのかの女自身を見つめながら既に出来上つ  
てゐる舞化粧をもう一度直してゐた。

「この部屋はよく日が當つていいですねえ」  
彼は不意にさう言つた——それはただのお愛

想ではなく、久しぶりですんなり日向に坐つた彼  
が思はず言つたのである。

「え、今日はほんとうに暑いやうですわ」さう  
答へたさつきの年のふけた女は、そこに一本

ころんでゐた煙草を拾つて、彼の前にあつた火  
鉢へ手を差し延べて火をつけた。しかしこのぎ  
ごちない對話はもうそれ以上發展させる必要が  
なかつた。といふのは、その時、髪を臺下地に  
結び直して眼尻を長く紅で繪取つた瑠璃子が浴  
衣の上に樂屋衣を羽織つて、さつきから開け放  
してあつた扉のところには現はれたからである。  
彼はだらしない姿をした自分の妻を一種險し

い目つきで見上げた。かの女はまたかの女で彼  
が不意に樂屋などへ來たことを訝しがつてゐる  
様子であつた。

「用事？」

彼女は扉をしめながら言つた。

「いいや」

彼は答へた。

「遊びに來たの！」

「いいや。——遊びになんぞ來るものか」

二人の對話がをかしかつたと見えて、三人の  
女たちは無遠慮に笑つた。彼もかの女の仕方な

ささうに笑つてから、彼は言つた——  
「大川君は今居るかね。ちよつと逢ひたいと思

ふのだ。いや、何でもない事だ。——實は、あ  
の事を自分で話して見ようと思ふがね」

「さうや」

彼女はさう言つたとき黙つてゐたが、秋帆の  
部屋を教へると言つて彼を座から立たせた。彼  
と彼女とは廊下に立つたまま、秋帆にそんな  
ことを今になつて頼んでも無駄だとか無駄でも  
いいとか、二言三言問答をした上で、彼女は秋  
帆の部屋の入口を指で示しておいたさき、衣裳  
をつけなければならぬと言つて何處かへ行つ  
てしまつた。

彼は彼女が教へた扉を二度静かに敲いて見  
た。最後に少し強く敲いた時、「おう」と言つて  
答へたのは確に數年前に聞き覚えのある大川秋  
帆の聲であつた。返事にあつたけれども別に誰  
もなから開けてくれさうにもないから、彼は  
その扉を明けて這入つて行つた。さうして彼が  
秋帆の顔を一日見た瞬間、これぞ這入つてはい  
けなかつたのぢやないかな、とさう思つた。秋  
帆のそれほどむづかしい目附き、彼の這入つ  
て來たことを怪しみ咎めてゐるやうであつた。  
さうしてこの闖入者が彼であつたことを一應認  
めてからも、秋帆はその敵意あるとでも言ひな  
い陰惡な目附きを改めようとせず、ただそ  
の視線を手を當ててゐた桐の角火鉢のなかへ落  
して、それから火箸や手にとつて無意味に灰を  
掻きまはした。

「へえ? 古くからの言ひつたへですか」

「いやいや! なに、僕の生活の上のエピソードとも言ひますかな」

さう落山は話し出した。それを買つたのは、この間、一月末の雪のふり出した晩であつた。それを買つてから夜おそくなつて下宿へ歸つて来た。落山の下宿といふのは——彼は今まで他人の生活といふやうなものは大して興味を持つてはゐなかつたし、その上いつも轉轉と宿所をかへて歩く落山が今は、どんな生活をしてゐたか、どんな家に住んでゐたか別段に尋ねて見たことはなかつた。そこで落山はそのエピソードといふのを語り出す順序として手短かにその下宿のことを説明したが、そこはやはり彼の家と同じやうに或る坂の中ほどにあつて、彼の家と同じやうに日の當らない家であつた。わけても、月三圓の約束で落山が借りてゐる四疊半に至つては一日中、日の光が一寸も射すこととはなかつた。光をとる筈の大きな窓といふのは西北の方に向いてゐる上に、そこにはすぐ五六間へだてて崖の斷面が突立つてゐた。これが落山の部屋であるが、その隣室は横一重で六疊になつてゐたが、そこには少しは朝日が射すやうであつた。そこは月五圓で、砲兵工廠の職

工が借りてゐた。その若い職工のところへは、時々やはりどこかの女工だらうと思へる。人の女が遊びに来て、以前からよく泊つて行くことなどもあつた。

物好きに鳩笛を買つた落山は、しばらくの間、古本屋通りなどをぶらぶらしてゐたが、夜がふけるにつけて雪がひどくなつて来て、あまり寒かつたから、そこらの居酒屋で一杯ひっかけた。電車へ乗るには近いし歩くには少し遠いその下宿まで、落山は酔に乗じて歩いた。然し金のないために十分満すことの出来なかつた落山の微酔は、下宿へ歸りつたころにはもうすつかり醒めてしまつた。醒めきつた酒のために却つて、落山は容易に眠れなかつた。——それに、どうも隣室の職工のところへはいつもの情婦が来てゐるやうな氣勢が感じられたりした。落山は所在なきにふとさつき鳩笛を吹いてみたといふ氣がしたので、それを輕く二聲三聲吹いて見た。それから吹きつづけた。ホオ、ホオ、といふその聲がしづかな夜氣のなかへ消えて行つた時に、

「あら、何か来てゐるわね」

「何が?」

「いま啼き聲がしたぢやないの?」

「うそだよ……」

そんな會話が隣室でとり交されてゐるのが落山の耳に入つた。——果して、例の女が来てゐるな、まだ目をさましてゐたのか知ら。落山は鳩笛を吹くことをやめたが、男の聲が「嘘だよ」と言ひながら、それでも二人して何だか早をすましてゐるらしいのを感ずると、落山はもう一度それを吹いてやりたい氣がして、わざと隅かに鳴した。

……ホオ、ホオ。

「ね! それ、あれだよ」

「うむ。——なんだらう?」

……ホオ、ホオ、ホオ。落山はもう一度づづけて鳴した。

「をかしいわね」

「何だらうな。軒の下へでも来て居るやうだぞ」

「いやよ。わたしこはいわ」

男は、馬鹿なまゝか何か言ひながらも、起きて出たものと見えて、窓の戸を開ける音がした。

「や。これやひどく積つたぞ」男のやや大きな聲がさう言つてから、ミシミシと音がしたのは男が窓の敷居へでも上つたらしい——「なあに、何もあやしないよ」

令嬢風な舞臺衣裳を着飾つたままでしょんぼり、非常な騒がしく賑やかな真中にゐる人間がひよつくりさびしきを感じた時のやうな顔をしてぼんやり坐つてゐたが、彼を見ると、瑠璃子は今舞臺にゐると言つた。さうして「少し待つてゐれば部屋へ歸るから一緒にお辯當でも食べて歸るやうに」瑠璃子が言ひ置いたと聞いた時、その若い女優に、彼は、

「直ぐ歸つたと言つて下さい！」

さうぶつきらばうに言ひ放つた。さうして彼が暗い階段を下りようとする時に、足もとが突然明るくなつて、彼の頭上にぼつかりと電燈がともつたところであつた——木だ早いとばかり思つてゐたのにもうそんな時刻であつたと見える。

二月に入つてから、渚山は一層足繁く彼の家へ遊びに來た。さういふ點に就ては極く常識的な渚山は、あまり頻繁な訪問が相手を迷惑がらせるであらうことを顧慮して、今までは十日に一度とか一週に一度とか、それぐらゐの時日を措いてからでなければ遊びには來なかつたものが、近ごろになつてから隔日ぐらゐに彼をた

づねた。さうして尻を据ゑて話し込むのであつた。氣の小さい渚山は、そんなに度度彼の家へ來ることには、やはりいくらか氣がひけないでもなかつたと見えて、近所の或る私立圖書館へ調べものに通つてゐる序だといふやうな事ねもしないことを述べて言ひ譯をしたりしたことがあつた。どんな調べものだらうと聞いてみると、あやふやな——それ故それ以上聞き返しても悪いやうな返事をしたところを考へると、渚山の圖書館通ひは或はほんとうでなかつたのかも知れない。何にせよ、それほど毎日のやうに渚山は彼のところへ入りびたつてゐた。もともと決して性が合つてゐるわけでもない二人は、いつしか話題を無くして沈黙がちなことが多かつた。彼は犬の運動にかこつて渚山を置きつ放しにしたまま、渚山に留守を頼んで犬を牽いで出てしまつたりした。それでゐて渚山が歸りさうにすると、彼は精一杯それを引き留めた。渚山も彼の言ふがままにいつまでも坐り込んでゐた。

或る日、例によつて渚山が夕方に來た。渚山はいつもの炬燵の向うへ坐ると、懷から何かを取り出しなが言つた——「これは」さう言つて懷から出して來た小さな紙包みを開けて、

それを彼に渡しながら、「——ごくつまらない物ですが、マダムに上げて下さい。マダムはさういふものに趣味を持つてゐられたと思つたので持つて來てみたのですが。それはね、鳩笛といふのです。古くからあるおもちゃのやうですな。ええ、弘前の鳩笛といひましてね。そのブリミチブな形によつと推致があると思ひましてね。何、それは東京で手に入れたのです。ええ、神田の或るおもちゃやを覗いてゐると目につきましたから、これや面白いと思つて二つ買つたのです。もつと人きいのとそれと二つね——二つでいくらだと思ひです、大きいのが六錢、それが四錢です。人きいのは先日岩田氏のところへ行くときにお嬢さんに上げましたがね、この小さい方が小さいだけに不器用に出来てゐて面白いのです。吹いてごらんさい。味のある音を出しますから——」

彼は、渚山からの所謂雅致あるこの贈り物——その小さな鳥に形どつた泥細工の笛をとつて吹いて見た。

「どうです、おもしろい音でせう——渚山が言つた。「ちよつとかう幻想的」でもいふやうな音でせう。——それに就てエビソオドがあるのですがね——」



ちらしてゐるのださうです。——何でも秋帆の情人が外に男でも持つてゐるらしいといふことが解つたとかでね」

「へえ。秋帆の情人といふのは例の橘朱雀でせう」

「さうです。……さうしてその餘汰が僕にまで及んだわけですよ」

渚山と彼とは聲を合せて、二人とも氣の抜けたやうな響のない聲で笑つた。——人生といふものは、結局たださういふ聲で笑ふより外には仕方もないといふやうに。

或る夜、渚山が大分おそくなつて訪ねて來たことがあつた。彼はもう妻が歸つて來たのかと思つた。それにしては、このごろ歸りの遅い妻としては早すぎると思つてゐると、渚山であつた。——もう十時半もすぎてゐたらう。渚山がそんなにおそくなつて出かけて來たことは今までにはまだ一度もなかつた。しかしその夜も渚山は別に用事もないらしかつた。渚山は、久しぶりだから一度マダムにも逢ひたくなつて、夜ふけに來たが、マダムは未だお歸りではないのかといふやうなことを言ひながら坐つた。その

渚山の様子には、近ごろになつてどうも訪問病がよほど募つてゐるらしいところがあつた。

——訪問病といつて別にそんな病氣があるわけではない。言はばただ神經衰弱の一状態なのだが、以前彼や渚山たちの仲間でそんな妙なテクニクが流行したことがあつて、その意味はつまり、何もかも行きづまりになつてしまつて而ももうその孤獨を一人でぢつと踏みこらへるだけの或るものを失つてしまつて、無暗と友人の顔が見たくなつて來て、そこでその友人のところへ行つては見るがさて愉快な話などは決つてあるわけではなく、そこで改めてもう一度今日逢つて見たいやうな友達を心のなかで一とほり吟味してみ、さてその友達のところへ行つても一向落着く筈もなく、果は一種やけのやうな氣になつて、あるかぎりの友人の家を遠近かまはず轉轉として一日中歩きまはる。

ところがかうして、人がその病的な心理に陥つたが最後、この心理はもともと内面生活に何の安定をも得てゐない彼等の仲間中へ傳染し出して、この所謂訪問病にとりつかれたAに訪問されたBもやはりそれに感染し、さうして次にAとBとこの二人の訪問病者がCを訪ねると、今度はまたABCの三人が互にその心理を

助長し合つて、一そう遠いところにあるDを訪ねる……かうして仲間の生活がたうとう交互に腐蝕されて行く。しかも仲間のうちにはいつも一人以上は重いかこの訪問病者が絶えなかつた。自他の生活がひどく荒されることに氣がついて、誰しも一人にならうとあせりながら、それでも何時かしらやはり面白くもない友人の迷惑さうな顔——さうして一時間ほどの後にはやはり自分と同じやうに故もない暗鬱に變つて行くその顔——を見るために、悲しきうに町をうろつきに出る……。こんな状態が、し

きり悪疫のやうにつづいた本にはいよいよその生活が行きづまつて、或る者は故郷へ歸つて小學教師になつたり、或る者は滿洲の方へ放浪して行つたり、かうしてさすがの悪疾も下火になつた。この消え入るやうな群集心理は仲間が瓦解した時に初めてやつと驅逐された有様であつた。そのころ妻を持つてゐる彼はいつもあまり出歩かないといふので、彼の家には、毎日二組以上の訪問病者が押しかけて來て、それが皆彼の家で落ち合つてまるで訪問病者の俱樂部を現出してゐた。彼があつた時あんなふうにして一度都會から避れて田園に悠び住ひをしたのも一つにはこの訪問病者の群から逃れ出したか

落山はをかしさを耐へてしばらく黙つてゐた。さうして男が再び寢床のなかで温まつたと思ふころに、また、しきり吹き鳴した——ホオ、ホオ、ホオ、ホオホオ……男と女とは暫くはそれを不思議がつてゐるらしかつた。——さう言へば、これや夜更けになど聞けばちよつと陰にこもつてかそけきとでもいふ程度の氣味わるい淋しさがありますからね——そんなことを言つて落山は、改めて自分でその笛を鳴して見ながら、その生活のエピソードを結んだ。

彼は落山の話を黙つて聞いてゐたが、落山が事もなげに言ふその出来事の奥底には落山の不幸や孤獨がこの短い話のなかに具體的に現はされてゐるのに氣がつかないでは居られなかつた。落山の話はもとよりさりげない淡い興味でしか語られはしなかつた。もしかすると落山自身は、ただその見かけどほりな淡いをかしさしか自分では氣づいてゐないのかも知れない。しかしそれを落山の口から彼が聞く時には、自然とそこにもつと複雑な陰影を感じさせられずには居られなかつた。さうして、落山が敢て氣づかないふりをしてゐるものとおもへるその複雑な心持にまで思ひ到ると、この雪の夜の鳩笛の話を實に一篇のユーモラスな——人生そのもの

のが無理強ひをされて笑つてゐる時の横顔たるユーモラスな——小話を讀むやうな氣がするものである。

落山は三十五六にもなつてまだ獨身であつた。年の若い仲間は以前時たま冗談に妻帯をすめて落山を揶揄したものであつたが、落山は眞顔になつて生涯妻を持たない積だと言つた上に、その理由をたづねると、それは今は言はないが自分の死後では自然と解ることである、とさう答へるだけであつた。誰が落山の死んだ後まで、どうしてあの男が生涯妻帯しなかつたらうなぞといふ興味を持つてゐるものか！——と、その時仲間の一人が別に大して毒のないかげ口を利いたことがあつたのを、彼は思ひ出す。その落山が裸越しの男女の囁きを聞きながら、深夜にひとり鳩笛を吹いてゐるのを、その形をその心持を想像し初めると、彼は思はず言つた——

「なるほど、これや面白い。これはたしかに書けますね——」

彼の言葉を聞いた落山は、口の兩端に人のいい笑ひを浮べてゐた。しかし彼が落山と目を見交さうとした時落山の目は一瞬時曇つてゐるやうに見做された。さうして口角の笑と眼中の曇

とは次の瞬間にうまく混和されて落山の顔一面は滄いやうな苦笑に變つてゐた。落山は然しいつものやうに、「面白いですか。ほう、ではその材料は着上げてもいいのです」とは言はなかつた。ただその滄い苦笑をしばらく顔に凝はしたきり、何も答へなかつた。その顔を見た時に彼は、初めて氣の毒なことを言つてしまつたことに氣がついた。そこで彼は落山に謝罪するやうなつもりで言つた——

「お互ひに、小説は書けない代りに、小説に書かれる人のやうになつてしまひさうですね」

それから今度は彼が、先日大川秋帆をその樂屋へ誘ねて行つた時の一件を詳しく落山に話して聞かせた。落山は割り合ひに興味をもつてそれを聴いてゐるらしかつたが、秋帆が一向取り合はない様子を語り終ると、落山は何か身に覺えでもあるらしく、又經驗深い先輩の口調で言つた——

「さういふ人は世間によくあるものですよ——「さうでせうね」と彼が言つた。僕もその時は、秋帆の奴は自分の出世を鼻にかけてゐる俗な奴だと思つてゐたのです。ところが、あとになつて家内から聞いて見ると、秋帆はこのごろ氣が氣ではないのださうです。樂屋中のものに當り

ゐの相違がある。それにしても人間といふものは奇妙な實に不合理な心理をもつてゐるものである。渚山は彼にとつてあまりに現實的にみじめすぎて同情の心を動かす餘地もない——彼はそんなことを心に考へながら、敢て渚山の意のあるところを察しようとはしなかつた。ただそんなにいやだといふ今の渚山の下宿、あの崖に而接した北向きの窓がある四疊半の下には、どんな家族がゐるのかといふことを彼は渚山に聞いて見た。

渚山の答へたところでは、そこは六疊と三疊との二間に五十ぐらゐの夫婦と田舎から姪を養女につれて來たとかいふ十六ばかりの娘と三人が住んでゐた。彼等は自分たちの二階を貸して、その上三人で麻つなぎの内職をしてやつと生計を立ててゐる。渚山はそこで麻つなぎといふ内職を一應いろいろと説明をしたが、「で」と渚山は話しつづけた。「夜はいつもおそくまで起きてゐるのです。彼等の寝るのはいつも十二時過ぎです。私は尤も御同様もつとおそくまで起きてゐますが、夜、便所へ行かうと思ふと先づ娘の枕もとを通つて次には夫婦の眠つてゐるところを通り抜けなければなりません。これがなかなかあまりいい氣持のものではあり

ません。——尤もこんなことはその下宿が不愉快な理由にはなりませんがね」渚山はそこで短く氣のない笑ひをしてしばらく口を噤んでゐたが、たうとう言つた。「實はですね、何事かと思ふほどその言葉が改まつてゐた。而もそれは間代が三四月分溜つて來てゐるといふだけの事であつたのはいかにも渚山らしくて彼は思はず微笑させられた。それを渚山は兎も角もいい加減なことを言つて延してゐたのを、先方がそれを當にしてその都度催促をするのである。それも無理ではない。彼等とてもやはりその僅ばかりの金が入用な人たちだから。さうしてもう幾度も違約をした渚山はどうも家に這入つてゐにくい。それで仕事を搜すのだからと言ひわけをして二月の月末まで待たせてはゐるけれども、もとより渚山に思はしい仕事のありやうもない。しかし家へ宵のうちに歸れば十二時まで内職で起きてゐる家族の一人がきつと渚山を出迎へて、出迎へるといつては體裁もいいが、その實、渚山が何か仕事を見つけたかどうか早速たづねるのである。答へやうもないだけに渚山にとつてはそれが不愉快で、それを避けるためにこの頃ではいつも十二時を過ぎて皆が寝てしまつた時刻を見計らつて下宿へ歸ることにし

てゐる。渚山はなるべくこつそり表戸を開けて、それから三疊——そこは二階への上り口でまた娘の寢間である三疊へ渚山が足を踏み込むとその時いつでもきつと、次の六疊の間から下宿のおやちが咳拂ひをするのである。

そんな點でまで自分を警戒してゐるものと見える。——自然主義小説を志してゐるだけに渚山はそんな些細な事實をうまく擱んで輕妙に話すのであつたが、それらの事實は彼にこの前に聞いたあの鳩笛の話と照し合せて見て一層、渚山の生活の近況をはつきりさせた。渚山はたださびしい心持に追ひまくり、友人の家を應訪するだけではなく、自分の下宿に落着いてゐにくいそんな事情もあつてかうして夜更けまでひとの家で話し込んでゐるのだな……彼はさう思ひながら、渚山の話が途切れた時も別に受容へるのしやうもなく黙つてゐた。渚山もしばらくは自分の現狀を呟ふとでもいふやうに沈黙してゐたが、どういふつもりか彼に尋ねた——

「どうも立入つた事を聞かやうですが、マダム瑠璃子は一たい月にどれほど取つてゐられるのです」

「さあ、たしか四十五圓でせう」彼は吐き出す



つたからであつた。實際それらの訪問病者によつて彼は物質的にも精神的にも大分荒らされたのであつた。さうしてそのころの仲間——これは大川秋帆と知り合ひになつた當時の仲間より以後の仲間であるが、その人人は彼が田圃に逃げ込んでしまつた前後から、それぞれにもう訪問病時代を卒業して、或る者は落着いて、と云つたところでいづれ比較的事業のことではあるがともかくも何か熱中すべきものを見出すとか、或る者はまたその病的心理が一層重態になつて例へば彼自身のごとく厭世と憎人との傾向によつて友人の顔など一つも見たくなつたりしてゐる。しかも渚山だけはやつぱり二年ほど全く同じやうに訪問病時代を低徊してゐるらしい。しかも一層氣の毒なことには今日ではもう渚山によつて訪問病を感染させられる仲間は一人もないらしい。渚山はこのころでもやはり一日に數人の友人を訪問して歩いてゐるらしい。唯一人でしかも多分はそれぞれに多様な友人のところを巡歴するのであらう。渚山はさまざまの友人の噂を傳へたがそれは何れも昨日會つたとか今日逢つて来たとかいふ人のことばかりであつた。渚山のその當時の仲間といふのは、しかし、彼とはあまり關係のない人たちで

あつた。それ故渚山の齋せつつかくの噂話もそれ以上開展する話柄にはならなかつた。——彼と渚山との話題は既にきまつたものである上に、そのきまつた話題さへ殆んど毎日のやうに顔合してゐるうちに益々乏しいものになつた。渚山の所謂珍らしい材料ももうすつかり一とほり聞いてしまつた。さうしてその夜も渚山は山峽の人人といふ長篇の話を初めさうにした。しかしその梗概ももう一度聞いたことがあつた。話の途中で渚山もそれに氣がついたと見えて、

「とにかく、私もいいよ書きます。あなたも一ついかがです」

渚山はさう、あたかも主人が客に菓子を出すめるやうな口調で言つて話を納めてしまつたが、この『山峽の人人』こそ渚山が數年來の腹案で、これだけは是非とも書き上げたものだと思つた。渚山は咳くやうに言つた。

「それにしても、あんな下宿にゐたのぢやとてもおちおちと書けるものぢやなし、さうかと云つてどこへも變なところもなし……」

渚山はそんなことをこぼし出した。それがどうした加減でかふと彼には、渚山が彼の家へ来て同宿してはいけないうかといふ謎で——

「どうです、僕のところへ當分來ませんか」とさう彼の口から言はせたいのではないかと感ぜられた。さうしてそれが氣をまはしすぎた解釋でもなささうであつた。しかし彼はそんなことに、向氣がつかないふりをした。以前、彼が今ほど困窮してゐなかつたころ、今は滿洲一浪してゐる多田が食客になつて這入り込んで來たことがあつたのを渚山も知つてゐる。あつた手にとつて、男を同居させたほどならば渚山自身の方が遙かにいい同居人の筈だと、渚山はさう思つてゐるのではないからうか。なるほどそれは争へないことだ。不良少年の多田などにくらべるまでもなく渚山は善良な温厚な人に違ひはない。しかし、彼の暮しの方から言つてそれが全く不可能なことは暫く指いて、たとひ渚山が自分だけの事はするとしたところで、渚山と一緒に生活するといふそれだけの事實は、想像して見ただけでも、今の彼としてはあまりにも悲しすぎた。一緒に生活するにはこの先輩はあまりに適切すぎる相棒ではないか。それに「道樂に窮した金は人も貸せるが暮しむきで切迫した金を人は貸したがない」といふやうなことをよく謂ふが多田と渚山との相違は「道樂に窮した金」と暮しむきで切迫した金」ぐら

屋のどここほりも片附けば、その上どうかすれば鹽竈で醫者を開業してゐる古い知り合ひのところへ居候に出かけるだけの旅費も出来さうです。え、その友人は出掛けてさへ行けば世話をしてくれる筈になつてゐるのです。私はそこで例の奴を書き上げて来ますよ。氣位の高い管の清山は、赤本の原稿のことを聞くと思つてゐてもいぢらしいほど喜んだ。

或る日、彼は三月ぶりぐらゐで散髪をした。それから一週間目ぐらゐで入浴をした。一たい、入浴をしたり散髪をしたりすることは彼にはこの上なくおつくふなことであつた。散髪をしてゐると、彼はいつでも後頭部が息ぐるしいやうな工合になつて目がぐらぐらするし、入浴をしてゐても湯のなかに體がつかつてゐることそれ自體がもう、體の各部を洗つたりなどしてゐられないほどそれ程、體を疲れさせることなので、彼がお湯に這入るといふことは要するにただ、いつもと同じやうなとりとめのないそのくせ唯重苦しい氣持の物思ひを裸になつて熱い水のなかでつづけるためにそこへ行くといふだけの事にしか過ぎなかつた。それに彼は清潔といふ

ことを別段それほどの美德とは思つてゐなかつた。體に垢がついてゐる事とさうでない事とは人生に於て何の大問題でもない。體をきれいに磨いたり髪をそつたり髪をどうにかしたりするのはそれは何だか心にゆとりのある——といふよりは寧ろ考へ込んだりするやうな何物をも心に持たない人間のすること、彼のやうな人間はそこまでは手がまはらない、とでも言うのであらう。何にしても一日そのやうにぼんやりと暮してゐながら、彼はお湯へ這入らうなどと思ふことは滅多になかつた。たまにそんなことを思ひつく事があつても、次の瞬間には全く別な考へ——と言つて例によつて少しも焦點のあるわけではない考へがふいと浮ぶと、そのままその考へをつづけてゐるうちに、いつの間にかもうお湯へなど這入りたくはなくなり、さうして夕方になつてゐるのであつた。彼は夕方にお湯へ這入るのはいやであつた。さまたま人間がごたごたと一向美しくもない自分の體をこしこしと爭つて洗つてゐるのを見るのは、彼にとつてべに味氣ないやうな、またそんな人込みのなかで自分自身が幾日分もこびりついてゐる垢を落してゐるのを彼等に見られるのが妙に厭はしいといふやうな落着かない氣がし

た。お湯へ這入るならば人氣のない朝の十時ごろとか、晝の一時ごろとかそんな時刻が最も好ましいと彼は思つてゐるのに、そんな時刻には彼はいつも寝てゐた。——このやうに物臭な彼がその日に、久しぶりで入浴をして、それから更に散髪をしたのである。別段に理由のあることではなく、恐らくはただの氣まぐれで、いやさういふよりはその日の天氣の加減であつたらう。實際、陽氣はだんだんと温かくなつて、その日などは、彼と一緒に入浴してゐた二人づれの男は花見の相談見たやうな話をしてゐたほどであつた。——さうだ、さうだ。花が咲いて燕が来て、小ぎつぱりとした初給でも着たら、その頃にでもなつたら……お湯のなかにとつぱりとつかつて、高いガラス窓を透して黄色の空を眺め入りながらひよつくりそんなことを考へると彼は、やはり季節の關係であつたらう、また一つには體中が温かくなつて來た理由からであつたらう、どうやら人生にも未だいくらか快樂があるやうな氣がした。時刻は彼が起きて間もない一時ごろであつたから、入浴の客は四人よりなかつたし、それに一羽の鶯が男湯と女湯との仕切りの壁の上の番臺に近いところに乗せられてある籠のなかでしきりに歌つてゐ

やうに答へた。

「四十五圓?」それであなたがだの生活は立ち行きますかね」

「さあどうですか。——家内は四十五圓貰つてゐるのださうですが、それでうちの暮しを立ててゐるのでは無いやうですね。晝と晩と二度のお辨當代や電車賃やそれから樂屋での祝儀やつき合ひや、月賦でつくつた着物の代や、そんなことで大方金が無くなるのでせう。尤も時には五圓ぐらゐもつては來ます。それに質の利上げだけはきちんとするやうです——

一で、さうするとこのうちはどうして立つて行くことになるのです」

「それが僕にも解らないのです。——僕はそんな事は一切知らないのです。いづれ家内のおふくいか何かいかがげんにやり繰りをしてゐることでせうよ……」

「あなたは實に呑氣ですな。まるで人事のやうぢやありませんか。——いくら困つたと言つても未ださうしてゐられるのですから、羨しいわけですね」

そこで二人がもう一度それぞれの物思ひで沈黙した時に、いつもの足音がして、口笛が鳴つて、それは彼の妻が歸つて來たのであつた。——

もう十二時であつた。彼の妻は狂言の都合とかでそのころいつもその時刻でなければ歸らなかつたのだが。

渚山の病氣がそのころになつてよほど重いのになつてゐたことが、その夜偶然なことであつた。といふのは、歸つて來た彼の妻がいつものやうに戸を閉めようとした時に、カラカラと何か倒れた音がして、それがよく聞いて見ると渚山の杖であつた。渚山は何かと言ひまぎらしては居たが、例の病氣で足の關節が痛みでもするの杖にすがつて歩いてゐたのだといふ事が、これより少し後になつてわかつた。しかもそのころはその杖を見られまいと思つて、それを上り框までは持ち込まないで戸の外へかくしてあつたものと見える。渚山はその夜、彼の家へとまゐることになつたが「蕎麥屋と貸布團屋とは市中で一番おそくまで起きてゐる家業だ」と渚山は渚山らしい通を言つて、その上、その近所の貸布團屋のありかを渚山は知つてゐた。この男は今夜來がけから彼のうちへとまゐるつもりでゐて、通りがかりに既に貸布團屋を物色して置いたらしくも思はれない事はなかつた。彼の妻が蕎麥と貸布團とを註文に出かけたあとで、渚山はその片わきに置いてあつた風呂敷づ

つみをほどこいて、妙な細長く丸いものをつと出出した。それから懷中をさぐつて出して來たものは懷爐であつた。「どうも腸をいためてゐるのでこんな老人のやうな事をやつてゐます」さう言ひながら渚山が風呂敷づつみから今取出したものを——懷爐灰を入れ直した時、彼の渚山に對する悲しさは一瞬間でも言はれないものであつた。同時にどうかするとあの小さな風呂敷づつみ一つにそのすべての日用必需品を用意してゐるのではないかと思へる渚山が、或はこのままで彼の家に居据つて住み込むのではないか——もしそんな事情になれば、すげなく追ひ拂ふことも出来るものではない——彼にはそんな心配もあつた。その時ふと思ひ出したのは、いつかあの古本屋の小僧が彼に書かないかとやつてすすめた赤本風の出版物の原稿のことである。外國の冒險小説が何かの出たらめな筋書でも誤謬でも、二百枚ほどで三十圓になる筈であつた。外國語は全く讀まないが、昔中學の三年まで通つたことのある渚山にだつて出来ることだし、彼はその原稿を書いて見る氣はないか渚山にすすめて見た。

「それだけの金があれば——と渚山は言つた。去年の十一月以來の下宿の間代も拂へます。飯



もある。何故かといふのにレオは大へん神經質な犬で、従つて非常に伶俐で、また表情に富んでゐた。さうしてフラテの形や様子を見てすぐ目をレオにうつした人は、誰でも、レオを女犬かと問うた。レオにはさう言へば女のやうな人に媚びるやうなところがあつた。しかもフラテのどこか鈍重なやうな様子の方が、レオのさかしげな媚びよりもつと可憐に思へた。そればかりではなくレオは、小さかつた時にはほんとうに形の整つた奴であつたのに大きくなつたのを見ると、胴ばかり長くつて脊の低い犬になつた。さうしてそれが無暗と太つて、それでなくてさへあまり見栄えのしないものが、フラテと並んで歩くとき一そう不恰好であつた。彼はフラテは鎖につないで自分で牽いて歩いたけれどもレオはいつも放して置いた。それといふのはレオは音無し性質で外の犬と喧嘩をするやうなおそれが少なかつたからではあるが、けれどもレオが見たとさうあんまり素晴らしい犬でなかつたこともその理由の一つでないとはいへない。何故かといふのに、もしレオがフラテほど立派であつたら彼はおそらくに少しぐらゐの難儀はかまはないでレオをやはりフラテと同様に鎖につないで、この二匹の犬を兩手に牽い

て歩いただらう。――その頃はちやうど闘犬が流行した後で、一般に犬に對する流行のために人人は妙に犬に注意を拂ふやうであつた。彼はフラテを牽いて歩くと、すれ違ふ人人が多かれ少かれ皆注目をした。小さな犬が來て吼えたててもフラテは一向知らない振をしてゐた。それは道道もさうであつたが、Kの廣場へ行つてからことにさうであつた。といふのはこの廣場へは近所の子供たちがやはりそれぞれ飼つて牽いて運動に出て來てゐたからである。さうしてフラテの美姿は全く目ざましいものであつた。小さな犬をつれた子供などはフラテが來たのを見ると自分の鎖をひかへて、自分の犬を隠したのもあつた。その邊に遊び飽きてゐた子供たちは嘸し立てながらフラテのまはりに集つて來た。

「おや! いい犬だな」

「ずゐ分よく肥えてゐやがるな」

「こいつは強いぞ」

子供たちはかう口々に讚美した。そのなかにひとり酒屋の樽拾ひが道くさを喰つて雜つてゐたが、この十四五の小僧は最も言葉を盡してフラテをほめた。さうしてひとりで前へ進み出でこはごはにフラテの頭を撫でた。

「や、可愛いなあ。おとなしく尻尾を振つてゐやがら」

小僧は調子に乗つてしゃべりつづけた。さうしてその邊に全く人人から閑却されながらその子供の群のまはりをおおおづとながめてゐたレオに、樽拾ひの小僧がふと目を留めた。

「ふん、こいつは又どうだ。まるで豚見たいな恰好してゐやがる。こら! やい! 豚! 一小僧は、フラテをもつと有効に讚美しようと思つてレオの惡口を言ひながらこの立派な犬の持主である彼に向つて媚びるやうな目つきをした。

それからレオも同じく彼の犬であると知らないこの小僧は、ひとりではしゃぎ切つた末に興に乗じてそこにびくびくしてゐる神經質なレオを追つかけまはした。レオは追はれながら自分の主人の方へ瞳を放つて、彼に助けを求めてゐた。しかし小僧があんなにレオの惡口を言ひ出して、レオにむかつて惡ふざけをし初めた時に、彼はどうも今更その見つともない犬のことを、それも俺の犬だとは言ひそびれた。レオをも彼の犬と氣がつかかなかつた小僧はますますレオを追つかけまはした。けれどもレオは自分の主人の居る傍から敢て放れようとはせず、その主人たる彼と兄弟たるフラテとのまはりをくる

た。それががらんとした浴室の高い窓のなかで反響してのどかで朗らかであつた。——このおやぢはあそこに驚の籠一つ置くことでその生活を豊富にしてゐるのである。彼はそんなことを考へた。——人生といふものは結局そんな些細なことの積み重ねにしか過ぎないのかも知れない。そんな日常生活のうちのちよつとしたことを外にして何か特別に「人生」といふ抽象的なものがあるやうに思つてゐるのはやはり愚にもつかない夢であるやうだ。しかし、そんな夢が終生つづく人こそ藝術家といひ詩人といふので、それだのに天分の無い俺はもうぼつぼつそんな夢から醒めかかつたのかも知れない——そんなことをも彼はぼんやりと感じた。しかしそれはつきつめて考へ込んだやうでなく過ぎ去つて、彼が體を拭きにかかつた時には、ふいと氣がついて、耳もとへこんなにかぶさりかかつてゐる纏陶しい髪を今日は一つ散髪してやらうと思つた。ちやうどたつた一つあつた五十錢銀貨を持つて来た湯銭のおつりもあるから。それにしても床屋はこんなに氣違ひのやうに延びた髪を見て腹立たしく思ふだらう。いや、しかし俺の顔色が悪いから病人で永いこと寝てゐた人間だと思ふかも知れない。彼はそんな餘計なこ

とをちよつと氣にしながらその姿見にうつつてゐる自分の顔をのぞいてゐた。又、着物を着ながら、もうこんなに温くなつたのだからあのインパネスを質に入れて、その代りに衾を一枚新調しなければならぬ。それにしてもあのインパネスが一枚の新らしい衾だけの値になるだらうか。いや、衾が這入つてゐる筈だからインパネスと入れ換へればいい。しかし新調のきちんとしたのを着たいのだが……起きるとすぐさまお湯へ這入つたり、それから散髪を思ひ立つたり、その上に着物のことを考へたりして見るといふことは、この頃の彼としてはもつとも積極的な珍らしい氣分であつた。——それほど生氣のない人間的興味に缺けた性格の彼になつてしまつてゐた。さうして春といふ季節が二足無材の動物にもその力を及ぼす事は微妙なもので、この頃の彼のやうな男に對してさへそんな輕快な氣分を呼び起させるのであつた。

ある。二疋の大はフラテもレオもすっかり成育してゐた。フラテは純粹な秋田犬で見るから逞しい見事な犬になつた。いつかも彼がフラテをつれて近所で日向ぼつこをしてゐると、通りかかつて一人の青年紳士が彼にさまざまなことを話しかけた。先づフラテをしきりにほめそやして、いろいろと犬に就ての通を述べ立てて、フラテは存丈がもう五分も高かつたら理想的な體格だ、體重は多分何(？)キログラムはあるだらうといふやうなことを言つて、それからその人はこの近所には定めし立派な犬が澤山あるだらうといふやうなことを彼に尋ねたりした。この青年紳士は、よく話を聞いて見ると、今年の三月には獸醫學校を出るので、こころへ開業して見たらと思つて場所の檢分に來たのだと打ち明けてゐる。實際、フラテはそれほどいい犬であつた。さうして彼はいつもいくらか得意になつてフラテを鎖に牽いて歩いたりした。その上フラテはこせつけない存氣な氣質であつた。それ故、彼等夫妻の愛情は田園にゐるころからどうもフラテの方に厚いやうなものが自然とあつた。彼は妻にも注意をしてレオをも決してフラテ以下にとり扱つてはいけなうと言つたりしたこし

その理由が解らないだけに一層恐れてどうしても出て来ないのかも知れない。レオは機嫌の直るまで放つて置かう。

彼は部屋のかなへ潜入したが、罪を犯したもののやうに切なかつた。實際俺は見え坊だ——と彼は思ひつづけた。——落山に對してだつてさうだ。——落山がただみじめな生涯の人であるといふ理由で、おれは落山と親密であることを自分ながらに恥ぢてゐるではないか。さうして落山と親友であることを恥づる理由が一體どこにあるだらうか。……

端なくもさういふ順序で、彼はその夜、今の彼のただ一人の親友である落山といふ人物を——今まででは頭になかに、ただ輕んずべき以外の何者でもなかつたその人物の事を、さつきからのヒステリカルな考へ方のつづきとしてではあつたが沁み沁みと考へ耽つたのであつた。一たい落山のどこが友として恥づべき人物であらうか。人として間が抜けてゐるからであらうか。それならば落山のどこがをかし間が抜けてゐるであらうか。あの妙に丁寧な言葉づかひがさうであらうか。妙にきちんとしたさうし

て人のいい態度もさうであらうか。それから一向に世間から認められもしないその自分の藝術を自分だけ高く思ひ做してゐることであらうか。昔その母からの遺産をその青春の無分別の結果持つてきてなかつた才能の爲めに浪費してしまつて今は無一物であるといふ事であらうか。さう考へてくれば、落山その人の全部が何もかも間が抜けてをかしいやうではある。しかし今假りに——と彼は落山のことを考へつづけた——假りに落山が、今のままの落山であつて唯世に時めいてゐる一人の作家であつたとして見たらば……？ 落山はどの後輩にでも親切で丁寧で、謙遜で、常識に富んで、おだやかな性格で、しかも自分自身の藝術に對しては實に熱中ので、そのためにはすべてを賭した人と言へないであらうか。然うだ。落山が若し、唯、唯一、成功者でさへあつたとしたならば、今日をかしい落山のすべてが、一つとして落山の長所として數へられさへするであらう。さうして見ればをかしいのはただ、落山が不遇な人であるといふ事だけである。さうして落山の才能けと言へば、然う、それは實際あまりに豊富ではないかも知れないが——いや、今は豊富ではないかも知れない、しかしながら昔、落山が年

若くて輝いてゐる目を見放つて前途に對した時に、落山は今と全く同じやうに才能がなかつたと言へないであらう。落山の才能はその不遇のうちだんだん今のやうに消磨してしまつたのであるかも知れない。何故かといふのに不遇は通例として、人の才能を養ふものでは決してないではないか。あの田園の家の庭にあつた日のあたらない薔薇のことを考へて見てもわかるではないか。「薔薇ならば花開かむさうして！ その薔薇がしかし生涯日かげにあつたならば、花開く前に枯れ果ててしまはないとは誰が知らう。

——彼の考へはここまで來て何時の間にかもろ決して落山を對象にしたものではなかつた。しかし彼はわざと落山をばかり考へた。何故かといふのにこの場合に自分自身のことを思ふことは、もう彼には怖ろしかつた。それ故に、落山は——と考へつづけた。さうしてこの場合この落山はもう現代的人物ではなく一つの象徴的人物であつた——さてその落山は、その人を皆は、口には才能ない人のやうに思ひ込んでしまつてゐる。然し現に落山がどれだけの人で今あるかといふことは俺も知つてゐる筈はないわけである。でも俺は、落山を最初から決し



くるとまはつて逃げ歩いてゐた。

「おい！と彼は小僧に向つて言つた。「そんなにいちめるのはよせよ」

けれども小僧は、その言葉をもただ人して意味のあるものとは思はなかつた。やはりレオを追ひつづけながらしまひにはその氣持が嵩じて來たと見えて、たうとう足を上げてレオを蹴つた。レオはたうとう彼のそばを放れて逃げ出した。逃げるのを追つて追つかなかつた小僧は、足もとにあつた小石を拾つて馳けて行くレオを目がけて投げつけた。それがレオに當つたのかどうか、レオは悲鳴を上げて、それでも自分の主人の方へ見返り見返りしながら、一散に家の方へ逃げて行つた。彼は急にフラテの鎖を引つばるとその小僧の方へ大股にいそいだ。彼は不意に小僧の襟もとをひつつかんで言つた——

「こら！何をやるんだ。——何だつて石などをぶつつけるんだ！——今までお調子に乗つてゐた小僧は、彼のこの意外な權威に怯えながら、しかしその理由を解し兼ねて呆然としてゐた。その小僧の泣き面を見つめながら、

「——あれや俺の犬だ！」

さう言ひ放つた彼は、彼自身の顔もちやうど小僧のものの同様に歪んでゐるのを自分で感じ

た。さうしてその瞬間しつかり引つ提へてゐた小僧を力なく放した。それから氣ぬけがして立ちすくんでゐる小僧に今までは全く別な寧ろ優しげな一瞥をくると彼はもう見返りもせずにしたすたと歩き出した——今のさつきあんなに濡れ萎れたレオが見返りがちに逃げ去つた道の方へ。

歩きながらも、あのレオの目付きが彼の心を重く壓さへつけた。——おれの主人はどうしておれを庇つてはくれないのだらう。おれが理由なしにいぢめられてゐるのをおれのあの信頼すべき主人はどうして黙つて見てゐるだらう。助けて下さい。罰れんで下さい。——すべての出來事を疑ひながら、しかし彼をどこまでも信頼して憐憫を乞うてゐたレオの瞳。それからまたあの惡意なく人に媚びた末に無邪氣な子供らしく戯れた小僧が不意に怯え恐れてゐた瞳。それは二つながら全く相似た種類のもので、言はば了解されない理由から傷けられながらそれに手向へずに、一つの靈がいたためられてゐることを示す瞳であつた。しかもレオにあんな目付きをさせ、またあの小僧にあんな目付きをさせたこと、それのおこりは皆彼から發してゐる。然らうだ、——と彼は考へながら歩いた——然らうだ、

それは皆彼のちよつとした見えからだ。立派な犬フラテの持主である俺が同時に見つともないレオの持主だといふことを知らせまいとしたその俺の見えから出た事だ。俺はあの小僧に憫る事は何もなかつたのだ……

日は暮れかかつてゐた。その少しづつ暮れてくる淋しい片側町を彼は頭垂れて歩いた。さうして彼は自分自身の考へが正しいが、しかしその感動の仕方はあまりヒステリカルなことに氣づいて、これは、今朝から妙にあまりはいやぎ過ぎた氣分の反動だと自己解剖をしながら、しかしやはりそのヒステリカルな物思ひはおさへる事が出来なかつた。彼は家に歸つて來て早速レオを呼んで見た。レオはひとりで家へ歸つてはゐるが、しかし彼を怖れてゐるのであるか、それとも憤つてゐるのであらうか、深く縁の下にもぐり込んでしまつてゐてなかなか出ては來なかつた。彼は事所から飯を出してそれをレオに與へようとしたが、それでもレオは出て來なかつた。彼はレオが拗ねてゐるやうに思へて忌しくなつて、縁の下へ石を投げ込んでやらうかとしたが、又思ひ返した——レオは拗ねてゐるのか、それとも彼自身では何かわからないが自分で悪い事をしたと思つてその罪を恐れて、

簡單な事をまはりくどく述べた文章とで、それは直ぐと彼の妻の父——その人は内務省の下級官吏であつたが——から來たものだといふことがわかる。はがき一面に書いてあるが、要點はと言へば「少し相談事がある故明日の午後散歩がてらでも來ないか。もしそちらから明日來なければ一兩日中に當方から行つてもいいが……」といふだけの事で、妻の母からの名になつてゐて、その上にある三月二十三日といふ日づけを見ると、行かなくともその用件といふのは解つてゐた。この月の暮れをどうするかといふ問題にきまつてゐる。

彼はそのはがきを丸めたり延したりして弄びながら、一たい彼の家へ郵便といふものが來たのは、この家へ來てから何度目だらうと思つた。この四ヶ月の間に恐らくこのはがき一枚ではなからうか。或はもう一つづらゐあつたかも知れない。——それも——當然である。彼自身ももう永い間誰に向つても手紙などを書く用事も心持もなかつた。その彼にどこの誰から珍らしい便りもあらう筈もない。

孤獨といふものにはもう慣れてゐるこのごろ

の彼にとつては、その晩ほど人に會ひたいと思つたことは珍らしかつた。「話があるから用かけて來い」といふそのはがきを手にとつて、それを弄びながら、その話といふのはきつと暮し向きの事に相違ないと氣がつくと、自づとそんなことが考へ出されるにつけて、一そう人に會ひたいやうな氣持が募つた。誰でもいい。暫く來ないあの古本屋の小でもいい。しかしなるべくならば清山がいい。もし今ひよく清山が來たならば、どうかすると親身に貧乏話をしないとは限らない。いや、自分は貧乏などはおそれはない筈だ。そんなことなどは口に出しては決して言へない。それよりもつとしたいは藝術の上の話である。今日やつと氣がついたあの田舎に於ての自分の生活、彼が觀ることもなく見て來たあの自然と自分の心持との交感の物語——それを話して聞かせたならば、清山は果して、それを彼自身が思つてゐるやうな微妙な物語だと認めてくれるだらうか。またさう認めて、それをいつものやうに、早く書き上げるやうに自分を勇気づけてくれるであらうか。いや、若しそれがほんとうに清山の目から見ても微妙な物語だと信じられたら、或は清山だつて、口では何と言はうとも内心には彼がそんな

立派なものを書きさうにしてゐることに對して、嫉妬と敵愾心とをわくかも知れない。それともこの話は清山には全く了解されないものであるかも知れない。いや、それは決して清山などを眼中に置いて書かざるべきものではな……しかし、しかし、たとひそれが書かれたところで、一たい誰がそれを活字にしてくれるだらうか。——それよりも、一たいその立派な、何かしら心持だけははつきりあるがきてとりとめのありさうもないその話がほんとうに自分の手で書けるだらうか。

こんなふうに、彼は努めて「明日の話」を忘れようとして、その代りにふと思ひついてまだ何のまとまりもない物語のことをさささまに思つて見て、心ご妙に見つて來る。傍から、直ぐまたそれは根柢のない自信であることに氣がつかざるを得ないのであつた。それでも彼の藝術的昇進は、ともかくもその荒筋の項目だけでも何かに書きつけて見ようと思ひ立つた程であつた。さうして彼は、もう二週間以上も机に向つた事がなかつたことに氣がついて、それにもう原稿用紙は一枚も残つてゐないのを知つてゐた。それをこれから出かけて買はうにもそれだけの金すらも彼にはなかつた。五十錢の

て重く見てゐたとは言へない。さうして友達甲斐もなく、その清山の作品を満足な注意を持つて讀んだ事さへまだ一度もなかつたではないか。清山が「自信ある作」などといふ時には清山のこの言葉そのものをさへただをかしいと思ふぐらゐで、敢て讀まうとしなかつた。さうだ。雜誌「殉教」は手もとに貰つてゐる筈ではないか。俺はどうして今までに清山の『およね』を讀んで見ようとはしなかつたのか。そればかりならまだしもいい。何一つ満足に讀みもしないで、清山の才能を最初から見違つてゐたのではないか……

彼は立つて荒涼としてゐる彼の机のところへ行つた。さうしてその近くに積重ねてある古雑誌やらばる冊子やら或は役にも立たない古原稿などをひつくりかへして見た。しかし今直ぐにも讀んで見ようと思ふ清山の『およね』が出てゐる雑誌「殉教」はどうしてもそこには見つからなかつた。ものを捜す手をやすめて、いつしか彼は自分自身の事に思ひ耽つてゐたが、その時ふと思ひ出されたことは、あの田園の日かげの薔薇の花のこと、さうしてそれを考へてゐるとさきまざまに思ひ浮んで来るあの田園の憂鬱な彼自身の生活である。——今まで、それとは氣

がつかなかつたけれども、これはどうやら何か書いて見るだけの値打があるかも知れない。或は俺にだつて書けるかも知れない。今度、清山が來たならば、一つこれを清山に話して聞いて貰はう。——今まで、たとひ何を思つて見ても、それを清山に話さうと思つて楽しみにしたことはない。一度もなかつたのに、その夜はさういふ風に清山を考へたのである。——然うだとも。俺が、清山の友達であることが何が恥しいのだ！ 清山がすべてを俺に語るやうに、俺も何でも清山に語らう！ 覺えてゐよう、清山を輕蔑することゝ縊に自分をえらいものと無意識にでも思つてゐるとしたら、それこそ情けない見えた。それこそもう敗残者の第一歩だ！——いや、それとも俺はもう自分で氣がつかないうちにただに外面的でなく、内面的に、敗残者としての第一歩をも、もつと以上をも踏み出してゐないとは限らない。——或る性格にとつては自己譴責が享樂である事がある。

清山と言へば、もう二週間以上も顔を見せない。——例の冒險小説の原稿を賣りつける約束が成り立つて、その仕事のいくらかを兎も角も

書きなぐつて、全部出来上つてからでなければといふのを無理に頼み込んでやつとなにがしかの金を前借したからお蔭でまあどうやら、遅れながらにも一月の暮れを越すことが出来た。

と、そんなことを言つて清山はその日、厚さ二吋以上もあるやうな立派な種本——しかもそれは夜店で十五錢で賣つてゐたといふ書物を彼に見せた。何れ外國の清山並みよりあまり以上の作者ではないのであらうが、著者の名はあつたがつひぞ知らない名であつた。ステイヴンソンの流行當時、その作風を當て込んで書いたものでもあつたらう。清山はその挿畫のどつきりある書物の畫を開いて示しながら、「こいつを頼みにして話を續つて居るのですがね」と言つてゐた。繪から推して見ると、何でも『寶島』や『黄金の甲蟲』を下手にくどく行つたやうな海賊の物語で、海賊同士の戦争などもあるらしいといふ事であつた。そのやうな話をして歸つて、清山はその後それつきり顔を見せないがどうしたのであらう。あんな仕事にでも身が入つてゐるのであらうか。と思つてゐる折から表が明いた、噂をすれば影と思ふと……しかしそれは郵便であつた。

——一枚のはがきで、その發着面日書體と



を成さない作家でありながら、既に老大家のやうな作品をものしてゐるのである。ああ、最も細な老大家！人としてをかしい清山が作者として何一つをかしくない——どこ言つて缺點を指すことの出来ない作品。だが、どうしてただそれだけでいい藝術があり得ようか。それよりも最も氣の毒なことには、一小さなザラのやうな構圖のなかに、一小さなトルストイのやうな意見のあることであつた。さうして清山の精一杯の新鮮を以てしても、それは單に文壇といふやうなものから見てもう三年、たつた三年だけ遅れてゐる——さういふことを思はせるやうな作品であつた。事實、世のなかにはそのやうな作家や作品があるものである。——この氣の毒な清山が、而今、彼を勇気づけてゐるのである、同輩の無力が人の喜びの一つであるとは、何といふ矛盾した人生であらう。

題は「花咲かぬ薔薇の話……未だ誰も試みたことのない物語だ！」

彼は筆をとつて書き初めた。書きつづけた。

眠らずに書いた。その翌日も彼は、はがきで呼ばれてゐることなどは殆んど思ひ出さずに書きつづけた。——さうしてその夕方、遅筆な彼が珍らしく十七八枚も書いて、それを讀み返した時、その反古紙の裏に書かれた文字は彼をただ絶望させたのであつた。それはあの田舎の家で夜ふけて時折りに書いた詩のやうなものが、その次の朝には一晩のうちにその色と匂とが全く散失してしまひでもしたやうに、そればかりではなく全く無意味な戯言のやうなものであつたのを思ひ起さずにはゐられない。あの奇妙な發作の長いものが今つづいてゐたのである。

「駄目だ！」

と彼は大きな聲を出してひとり言をぶつた。長い間その机の前に坐りつづけた。或る男の言葉が彼に思ひ出された。それは強い個性と大きな體を持つた創造家であつたが、彼は言つた。「自分に藝術の才能がなかつた」とわかつたその時にする事は解つてゐる——たつた一つの「方法だ」この言葉のなかにどれだけの實感があるか、それともただ街の氣味な、或はその人の自信を逆證的に表白するものであるか、そこまで解らない。ただ兎も角も、その創造家がそのアトリエでロダンの作品の寫真版を繰り示した

がら、彼に向つて超越な調子で言つた數年前のその言葉が、彼に思ひ出された。自分自身のなかに何の才能もないといふことが自分自身で宣告され、自信が盡く粉碎されたとしたならば、さうして青年でありながら既に——うであつたならば、その生涯は全く生きてゆくだけの價値のないものになる。しかし多くの才能のない人間がうようよと世のなかに生きてゐるのは、その彼自身に對する幻滅が實にうまい工合に、しづかに一歩一歩忍び足で來るからであらう。さうして人人はその自信を少しづつ片端から徐徐とそぎ去られて行く。さうしてその人自身はそれを少しも氣づかない。——彼は机の前に坐つたままそんなことを考へた。それから斯く自然な順序として、いつものとほり彼の考へは、自己批判のうちに進められた。漠然として冷房もない自信が、今現に目に見えて掌中の砂のやうに刻々に失はれてゆくのを彼は感ずるを得なかつた。さうしてこの場合に、何かしら企むといふことは、ただその自信を磨滅する方法を積極的行ふといふことと同一筆である。しかし事實無きところの才能に就て、いつまでもそれを夢みて信じてゐるといふことはあまりに馬鹿げたことではないか。——藝術に志した人

銀貨を一つで、銭湯に入つて散髪をして煙草を一つ買へば、あとは明日の電車賃である。ただ、彼が時折二三行や或は五六枚も書きかけて放つてある原稿が、行李の蓋に一杯あつた。彼は押入のなかからその行李をとり出すと、それら古原稿の反古を捜して、それを一枚一枚裏がへしに折り直してゐた。

偶然その反古にまじつて雑誌「殉教」が出て來た。それはさつきあれほど捜してゐたものであつた。そのなかには清山の自信ある作「およね」が活字になつてゐるのである。彼は古原稿を折り直す手を暫くやすめて、「およね」の上に目を曝した。——しかし、それはもう清山に對する優しい好意からではなかつたかも知れない。多分は新しい製作を思ひ立つた藝術家が、危かしい自信を或は鼓舞する材料ともならうかと思つて身邊にある仲間の作品を検分するといふ方がきつと適切であつたらう。

「およね」は、ばらばらと頁を繰つて見ると相當に長い短篇であつた。八九十枚はあるだらうと思へる。それは題に示されてある名の女を主人公にしたもので、邦吉といふ青年がおそらく清山自身ではあるまいか。さうして、これもどうやら清山の例の淺草義話のうちの一篇であ

るらしい。——それは淺草のいかげしい女とその相手客とを泊める極く下等な安待合の娘と、そこへ出入りをする客の二人たる邦吉とが、何時しか或る關係になつて、男はたうとう女の家に起居するやうになる。女はまだ十七かそこらで、その母親といふのはまだ四十に足らない寡婦である。この作の主題はその娘と娘の母親とそれから邦吉との間に構成された事件と、それから生ずる邦吉一人の内面的葛藤である。形は可憐ではあるが早くから周囲の事物によつて心の頹廢してゐる娘は半年と続かないうちに邦吉を捨てて新しい情人の方へ行く。邦吉は嫉妬のためにその娘の家から出ようとする。しかし嫉妬よりも未練の方が力強くつて、邦吉は未だその家を立ち去り兼ねてゐる。邦吉に對する娘の母親の同情から、邦吉はその家から逐ひ出されずにゐたのである。娘はその母親が邦吉を同情することに就て、この親子の間にはいつも口争ひが絶えなかつた。邦吉は心に限りのない未練を残してゐる娘のその母親の誘惑に墮ちて、しかしその次の朝にこの怖ろしいしかもそこにゐれば生活だけは保證されるその家から、何の光明も日常もなく逃れ出して來る……といふのがその小説の前であつた。

ひろひ讀みを初めた彼に、清山の筆は忠實な精讀を要求した。清山は頭から馬鹿にした作者ではなかつた。その筆は老練であつたし、又いたづらに狼狽したりたやすく感激したりしないやうな枯れた心境を視させるやうな言葉もところどころにあつた。人としてをかしい印象を與へる清山は作者としては些ともをかしいところになかつた。彼は少しも清山を輕んずべき理由を發見しなかつた。一とほり彼はそれを讀み通して、しかしそれに就てもう一度それを考へ直した時に、容易に物に満足しない批評家としての彼は考へながら、不満であつた。さうしてその不満はだんだんとつひには同情に變つて行くやうに感ぜられた。清山の筆は圓熟してゐるし、その心境は疑ひもなく或る程度に達してゐる。それは少くとも文學の上の修養を心がけてゐた人の作品であつた。取り入れることの出来るものは残らず取り入れてあつた。さうしてその代りとしてあらゆる未熟が失はれてゐた。しかも未熟と一緒に生氣までが無くなつてゐるのはどうした事であらう。さういふ淺ましい事を書きながら氣品のやうなものがあるのは、ただ情熱がうすれてゐる結果としてそのやうに思へるのでないとは限らない。氣の毒な清山は名

ままであそこに居なかつたらう。どうして一層のことあそこをセピア色にした村の住民になつてしまはなかつたらう。何の目あてがあつてもう一度この都へうろつきに出た自分であつたらう。さういふ氣持が感傷的にしじみと味はれた。さうして心がだんだん靜かになつて來て、今夜は妻が歸つたならば田舎の話を——あの丘の話や、井戸端のことやそんなことを話し合つて見よう。さうすれば又何かと新しく氣のつくことも出て來るに違ひないから……さう思ひながら彼はしばらくして家のなかへ這入つた。

敷き放しにしてゐる寢床のなかへ這入つて、もう一度あの書きかけた原稿を讀み直して見ようかとも思つたけれども、しかしもう一度自分の無能を見せつけられなければならないかと思ふと讀みかへすことはやめて、それでもその原稿とペンとを就くとへ丁寧にそへて置いた。

——あの感興もほんの發作的なものであつたやうにあの絶望もやはり發作的なものに過ぎないかも知れない。もう一度いめてゆつくり書いて見よう。おれにだつて何も出來ないと決定してゐるわけではない。彼はさう自分を慰めたが、ふと、清山もこんなことを思ひながら寝るだらうかと思つてみて、その自分の人して意味のない考へがたまらなくをかしかつた。彼は聲を上げてゐる自分の笑ひ聲を自分の耳に聞きながら、この男は何といふへんな男だらう——さう自分の事を遠くから振りかへつて見た。

自分のさまたまな思想や感情のなかでぼんやりしてゐた彼は、突然、犬の短い叫び聲に氣がついて妻が歸つて來たと思つた。それは妻の足音を聞きつけると犬が習慣的にさういふ吠え方をするのである。さうしてそれに答へて妻が口笛を吹くのであつた。しかしその晩は口笛の聲がしなかつた。けれども足音は遠くから聞えて來た。監獄の中にある人間は外界の物音に就て非常に鋭敏になるやうに、彼の耳もどうやら犬の耳のやうに鋭くなつて居た。足音はだんだん近づいた時、どうも妻の足音ではなかつた、しかしその足音は人通りのめつたにない彼の家の近くへ來てゐて、下駄の足音は急に低くなつた。その忍び足の下駄と一緒にボタバタと音を立てるゴム草履のやうな音が聞えて、そのふそろひに二通りにみだれた足音が彼の家の前を過ぎ去つた——妻が歸つて來たのではなかつたのであらう、彼はさう決めようとしてゐた……十分とは經たないうちに、もう一人の足音がして、

さうして、今度は前に來た方角とは反對の方角——いつも彼の妻が歸つて來る道ではない坂の上の方から、足音がひびいて來て、それは彼の家の前へ來ても忍び足にはならなかつた。——戸があけられて居る。いつもとは違つて犬は甘つたれる聲に對しても別に何とも相手になつて貰へない。しかし犬は吠えない。犬は足音でちやんとそれが誰だといふことを知つてゐるからだ。さうして十分前に足音がした時にも犬はそれとほりであつた。訝しが彼を不快にしたから、彼は妻には一言も聲をかけなかつた。ただ突然、おい。今夜はいいおぼろ月夜だらう——さうぼんやりたづねたら、妻はきつと「ええ」と何氣なく答へるだらう。その時「かういふ暗には男は女をつれて女は男をつれて歩くものだ。それがほんとうだよ——さう言つてにやにやと笑つたら、妻はどんな顔つきをするだらう……自分を一瞥して「この男の耳は何と不恰好だらう」と思ふだらうか……彼はそんな風に考へた。さうして何時までも黙つて、妻の歸つたのを知らないもののやうにしてゐた。彼は、しかし疑深い注意をもつて、隣の部屋へもう這入つて來てゐる自分の妻の様子に氣をつけてゐた。かの女はどうやら長火鉢の前へ倚りかかつた



人のうちに、どれだけ澤山の人がこのやうにして、藝術に對する夢想と自信とをその青春と一緒に消滅し盡したか知れない。さうして今のおれがちやうどその時期に来てゐる。しかし藝術が出来ないとしてそれなら自分には外の何事が出来るであらうか。人の一生といふものはどうにかかうにか、どんな人間にでも過ごせるやうには出来てゐるであらう。しかしどうにかかうにかして過ぎるやうな生涯は考へただけでも怖ろしい。それでも才能のない人間にはそれより外に何も與へられてゐないのである。さうして人生の希望といふものは何時も、自分の力を信じて明日を夢みてゐるといふことである。

——さう言へば、今に何かすると信じながらさまたまなことを考へ、さまたまなことを生活し、また當もなく創作をしたりしながら二十年以上の生活を送つて来た落山、外側から見ても何の幸福をも持たずに送つて来た落山は、ただその事だけでも尊敬していいのではなからうか。もし落山の己を知らない不聰明からその苦しみが少かつたものとしても、それならば一そう落山を笑つていいか羨んでいいか解らないことになる……。落山ばかりではない、すべての人が生涯を送るといふことそれ自身が十分に尊敬

すべき事であらう。才能ある人に對してはその才能のためにその生涯を尊敬すべきであるし、さうして才能のない人に向つては、才能なしに生涯を送つて来たといふ理由で同じやうに尊敬すべきではないだらうか。——さうして自分のごときは生涯の門出でもう既に息がきれさうになつてゐる。——人人が讚美する青春といふものは今おれには我慢の出来ない一つの重荷である。

*I am sick of melody*

*There is but one thing an assuage:*

*Cue me of youth, and, see,*

*I will rise in age!*

——彼はうろおぼえの詩を心のなかで思ひ出しながらそんなことを考へてゐたのである。さうだ、青春そのもののこそ人生がヒステリイにかつてゐる状態かも知れない。今自分に必要なものは老人のやうに平靜な透明な生活である。それなのに今のおれの生活はどうだ。青春だ、さうして羨びてゐる青春だ——この一瞬間のうちに三十年ほど経つてしまへばいいのだいや、すべての生涯そのものがこの一瞬間のうちに経つてしまつてもいい。おれは今日分て死ぬやうなそんなヒロイックな積極的な意

志は全く無いだけで、けれども死がひよつくり突然に來てさう驚きはしない……。彼は自分の馬鹿馬鹿しいどこからどこか、が實感で、どれだけ詩のやうな誇張であるかわからないやうな考へが、ちつとしてゐればとめどもなくつづくの凝視しながら、そんな思想が何一つ彼を救つたり慰めたりしないで、却つて頭を混亂させてゐることに気がつくとき、心持を變へるためにこれから英の家へ出かけて見ようかと思ひ立つた。しかし時計は間もなく十時であつた。そこで彼は門口へ出ると田舎で犬を呼んだ。こんなに無用に騒動してゐる時には散歩でもしなければ眠ることも出来なうたらうと思つたからである。たとひ浴まれるものとして何一つない家でもまさか留守置なしにはどこへ出かけることも出来ないし、また出かけて行くところでもないから、彼いんどほりのな自分家の前と、犬と一緒に往つたり來たりしてゐた。もう空け春でおぼろ月夜であつた。その月を見ながら歩いてゐると、あの田舎の生活——昨日から目の前に浮かび出してゐて、けれども決して拙き表はせない田舎のあの生活が、月を見ることで新しく思ひ出されて、それが妙に懷きました。さうして何故もつと長くあの

「さあ、誰のだらうね」かの女はさう言つて笑つて見せた。その笑ひ顔、悪意は寸毫なかつたがどうも野卑な印象を興へる笑ひ方であつた——この笑ひ顔を自分の妻の母が——そんな笑ひ顔をするのを彼はいつも不愉快に思ふのであつたが。さういふ笑ひ顔でちと彼の方を一瞥してから、針を動かす手の方へもう一度視線を返したかの女は、私はどうもこんな柄はいやだね。第一、品がわるいぢやないか」

「さうだな」彼は言つた。僕もいやですね。一たい誰の着物です」

「へ？」かの女はもう一度彼の方を訝しげにちらりと見て、これやお前の見立てぢやなかつたのかい。私はまたお前がこれを知つてゐるわざと私に聞いてゐるのだと思つてゐたよ」

「僕の見立て？ いやだね、そんなのは。——それやあれですか。弓子の着物ですか」

彼はそれが弓子——彼自身の妻のものであつたとわかると心の深いところから不快が湧き出してくるのを感じた。弓子は今まで自分で給金をもらつては居ても、たとひ銘仙でも着物ほどのものを自分勝手ですこしらへるといふやうなことはなかつたし、たとひ何を買ふにしてもその柄なり好みなりに就ては何一つ彼に相談しな

いことのない弓子であつた。その女が、いつそれを貰つたかは知らないが何にしてももう出来上らうとまでしてゐるそれに就て一言も話もしない。それはそれでいいとしてもこの好みは——一たいどうだらう。似合はしいものならたとひどんなに人口に立つものでもいいと考へる彼ではあつたが、しかし極くあたりまへの女學生あがりのやうな風俗をしてゐればともかく間違ひのない女が柄にもなく、なんのつもりでこんな藝者——といつても安っぽい藝者まがひの身装をしようといふのであらう。場木のふ人芝居のやうな一座のそれでも下つ端の方へ加はつてそれで一かどの藝人にでも成り済ましやうな氣持であるかと思ふと腹立たしかつた。彼がそのやうにして黙つてゐるのに對して弓子の母は、見たところそれが彼のいふところ無愛想な沈黙と大して相違がなかつたので、別に氣にも留めないらしく仕事をつづけながら、その紐ひ物に一段落をつけてから、お茶を入れて、その所謂相談事を初めた。——巻紙の切れのやうなものを先づとり出したが、それはかの女がその娘の家庭のためにさまざま方法で用立てであつた時時の金額とそれの用途との心覚えであつた。かの女は彼に向つてその時折の回想を要求するやう

にくどくどと説明をつづけた。なるほどそれらの金は皆うろ覚えながら彼にも思ひだせるものばかりのやうであつた。どうでもいいことである。結局それをどうしようといふのであらうか、語は結末だけにしてほしかつた。外の事ならばともかくも金銭上のは明確でなければいけないといふ考へは彼にとつては不可解な思想であつた。けれどもこのくどい女は、既俗一般の風習として金銭上の明確を人へん迫及するのみならずまた一つ一つ順序立ててまはりくどく説き出さなければ思ふことの言へない性質の人であつた。それにしても今日の語はいつもの月本のものよりももう一そうくどいやうに思ひながら彼は、昨夜の足音のことや今日の市松格子の着物のことなどの方をもつと明確にしようと思ひつづけてゐるうちに、このどうでもいいがの問題はやつと結論に達したらしかつた。

「それでねえ、第一かの女は、問題に就てあまり不熱心な——今までがんど一言も返事らしい返事をしない彼を促すやうに彼の名を呼びかけて置いて、それから長蛇の管で二三服立てつづけて吸ひ込んでから話したつづけた。それでねえ、第一、今もいふとほりお前たちの借金に皆で百九十六圓あるのさ。まあざつと二百圓だねえ。

まま海平としてゐるらしく彼には思はれた。彼がもう寝入つてゐるでも思つたのかかの女も亦何とも聲をかけなかつた。ふと、彼に一つの別な考へがあつた——ひよつとすると妻は昨夜うちから来たあのがきを見てゐたのだから、劇場からの歸り道を自分のうちへ歸つてお母さんと何か相談をして来たのかも知れない。さうして母親がかの女をそこまでおくつて来たのかも知れない。さうして家掛上の心配でかの女は今考へ悩んでゐないとは限らない……。さうだ——

「おい——彼は襖越しに呼んで言つた。『お前はうちの方へまではつて来たのかい』」

「あら、起きていらしつたの——不意に言葉を掛けられてひどく驚いたらしかつたかの女は答へた。『いいえ、なぜ?』」

豫想した答を得なかつた彼は再び黙つてゐたが、もう一度言つた——

「お前は今日は坂の上の方から来たやうだつたね——」

「え、よく解つたわね?」

「わかるさ。何でも解るよ。足音がそつくりよく聞えるのだからね。——何だつてあんなさびしい坂の上からなど歸るんだい」

「……でも温かいいい月夜なのです。電車のなかで知つた人に逢つたの。ちやうど新見附で降りる人だつたので、私も一緒に下りたの。その人はさびしいところをそこまで送つて来てくれたわ——」

女はすらすらとさう言つた。——自分か三分の一だけほんとうを言つてゐる、さう彼は思つた。もしさつき坂の下から一度歸つて来た足音さへ聞いてゐなければ、みんなほんとうを言つてゐると思つてもよかつたのだが。しかし彼はそれ以上もう何も言はうとも聞かうともしなかつた。ただ、枕もとにあつた例の原稿を取り上げるとそれをめりめり破いてしまつた。

「どうなすつたんです」

女がそんなことを言つたのに對して彼は落着いた聲で答へた——

「なにあに。いつもの出来そこなひの原稿をひき破つたのだ。——お前のせぬぢやないよ——」

彼はさう言つてから、起きて妻のゐる部屋へ這入つて行つた。果して長火鉢の前に跪乎としてゐる妻をそこから立ちのかせて、火鉢の相出しを一つ一つさがしてみた——それが彼の妻には不審らしかつた。

「何です?」

「眠り薬だ。まだ一服ぐらゐは残つてゐた」

妻の母親は縁側の日向にうしろ向きで坐つてゐた。彼は木戸をくぐりながら竹山の破れから針仕事をしてゐるらしいかの女を認めると、聲もかけずにつかつかと家のなかへ這入つて行つた。表戸をあけて五足歩けばもう家の中心に立つてゐるほどの小さな家が、彼の妻のさどであつた。いつものとほり無愛想に突立つてゐる彼をふりかへつて見上げて妻の母は言つた——

「おう、よく来ておくれだね。来ないやうだから出かけて行かうと思つてゐたところだつた。これを早く仕上げてからと思つてさ」

かの女はやはり針仕事をしてゐた。「これを」と言つてつまんで見せたものを見ると、その格は赤と黒との市松格子になつた箱の荒い銘仙であつた。もう全く出来上らうとしてゐるところで、その着物には黒織子の襟がかかるものと見えて、裁縫をする人のわきにその布があるのを口々に認めながら彼に、自分で座布團をとつて敷きながら言つた。

「ひどくいきな着物だな。誰のです、一たい?」



言つたつて自分の事だのに――

「フ、フ、フ」彼はかの女と一緒に短く苦笑したが、かの女たちの考へたことが一とほりいい方法のやうに思へた時に彼は尋ねた。「で、何ですか。そのことはもう君子には相談したのですか」

「四五日前の日にね、あれが使をよこして何でも樂屋の頭取の作とかが死んだといふので樂屋中倉集めだが、お金がないから五圓ぐらゐ欲しいといふので、私が都合として持つて行つたものだから、その時やつとその話をしたが、あれはお前さへよかつたらさうしたいやうな話の様子だつたよ――

「へえ？ 四五日前に？ 僕にはそんなことは――あなたにお會ひしたことなども、何とも話しませんでしたよ」彼は妻に對する大きな不快のなかにまた新しいデテイルを加へたことを感じた。その彼の顔色に氣がついたのかどうか、かの女は自分の娘を庇ふやうに言つた――

そんな話をするとお前がさがるものだから、みんな、私にさせるのだね。何にしてもお前がさうしていいと思ふならさう決めようぢやないか。月のうちと言つてももう少しだから私明日からでも道具を纏める手つだひに行つて上

げるよ」

「え……だけど、今直ぐと言つたところで、そのお金がなくなつてもいいのですかね」

「それがね、お前が田舎の地所でお金をこしらへるつもりなら、言つても直ぐには出来ないだらうから、それまでのところならそれを當にして何とか私の方で上夫として上げるよ――ともかく、一ヶ月だつて今のやうにしてゐれば損だから、さうと決めたら月のうちにした方がいいだらう。田舎の地所を抵當にすることに就ては、お父さんの言ふには、考へるだけは考へても見て上げるが自分がそれを世話するのはやめたいと言つてゐた。お前のうちでまた何とか思はれてはいけないと思ふのだね――貧乏人のひがみでさ」

彼とかの女とはそれだけのことを考へてちよつと沈黙をした。

「江森さんはどうしたらうね、それやさうと」かの女は氣まづい沈黙を切り上げようと話題を換へた。「さうかい。お前の方へもしばらく来ないのかい。うちへも暫く来ない。さう前月の二十日ごろには毎晩のやうに來てゐたのだがね。お前知つてゐるかい、あの人はなかなか諒がうまいのだつてね」

「誰が？ さうですか。そんな隠し藝があるのですか――

「隠し藝どころか、玄人だといつてゐるよ。よく枯れたいい聲でね。うちへ来る師匠と『藤戸』とか何とかいふのを諺つたが、師匠も感心をしてゐた。あとで、師匠があの人にはよほど稽古をしたらう、あれなら手ほどきぐらゐ十分出来ると言つたものだから、その次に來た日にお父さんがその話をして――さうさ江森さんにね、こんなに諺のはやる折だから、君も一つ貧乏をしてゐるより諺の師匠でもしたらどうだ。弟子は世話をするよつて、そんなことを言つてゐたよ。お父さんもあけすけな人だから餘計なことを言つてね、江森さんもその時は笑つてゐたがそれつきり來ないのだがまさかそれが氣に入らなかつたのではなからうね。――私たちには、一たいお前さんたちの心掛はちつとも解らないよ」

渚山ほどの間諜な常談家でもやはり變人に見えるるとすれば、この女の目には彼自身などは全く見當がつくまい。さうして彼自身にさへ解らない……それにしても渚山がどんな藝にしろそんな見掛けのしたものを持つてゐながら今日までそんな吹聴を一つもしなかつたといふことが、彼にとつては渚山の性格に或る好もしい

このなかで私が知つた人からお前たちに去年の暮に借り上げた五十圓といふのは今月が期限になつてゐるし——一週間や十日のことはそれやわけを話せば待つてはくれるがね。お前たちの借金にしたところが、私の方に借金でもあれば——まあ假りに、たちがお前のお父さんのやうな身分であつたらだねえ（とかの女は、彼の父母が彼等に冷淡だといふ口ごころの不平をちよつとここに洩らして）それ、可愛い娘とお前とのしでかした借金だもの、それも贅澤でこしらへたとか不始末とかいふのではなし、二百はおろか、それが千圓でも、あるものでさへあれば、私たちがどうにでもして置くのさ。それもお前にしつかりした當でもあつて何時何時までともいふのなら、それや何とか外に方法も考へられもしようが、さうでないかぎりにはかうして今のままで居れば今に共倒れですよ。——それでね、この際一そうのことへ、このものは一先づ片をつけてしまつて置いて方がよからうと思ふのだが、さうかと言つてそれをするいい方法もなしさ、私もほんとうに困つてしまふよ。お前に何か考へがあれば聞かしてもらへないのだがね」かの女は軽くさう言つたが別に彼に向つてその答を聞かうといふでもなく、その代りには

ちよつと苦笑をして見せて直ぐ言ひつづけ、「どうせお前のことだから、考へないことば解つてゐるしね、この間からお父さんとも相談をして見ましたがね、お父さんの言ふには、——まあ黙つてお聞きよ、お前が賛成だかどうか知らないけれどもね。お前が住むと言つて買つた田舎の地所だね、あの畑を抵當にしたら二百や三百の金にはなるのだから、それで三百圓も借りて、今までの借金の方はきれいになしてしまつて、残つたお金のある間にお前も精一杯何か仕事をして見たらどうだらう。それにしても高島百圓ぐらゐ残つたのでは、今のままでは二ヶ月とは無いのだから、一そう今の家を畳んでしまつて、——あそこはお前も氣に入つてはゐないやうだし、それに弓子がうちにゐないのだからお前の不自由も氣の毒だしね、一そう今の家を畳んでしまつて、さうしたら弓子はこの家へ一寸預かつて置いてもいいのだがね——これもお前の考へ次第だけれど。お前も一緒にこの家へ来たつてそれ結構はないが、この通りの家だから机を据ゑるといふところだつてなし、二夫婦では寝るにも不自由といふわけだらう。晝はいいけれども晩になると、お父さんはそれあれん——津晩十時まで話をうたふだらう。お前

はきらひだといふからおれもさういふだらうしね。で、お前いやでさへなければどこか近いところへ一時下宿でもするのがよくはないか。弓子を下宿へつれて行くと言つても、第一二人ではやつぱり金がかかる上に、夫婦で下宿屋にゐるといふのはをかきなものでよ——尤もお前がさうするといふならそれもいいけれど。それで若しお前ひとりなり或は二人でなり下宿をするならついで一町とはいふ近いところ、さうさあの軍隊へ出しているパンを捨てるうちの横を曲つたところの下宿があるだらう。あそこは親父といふのがお父さんの誰の仲間だね。心安いかうどいふ部屋があつてね。明るい南向きの一日中日の當るところだね。四疊半だけれどもなかなかいいよ。十七圓ださうな、お前も一度よく考へて見ていやでなかつたら家を今月限りで畳むやうにして見たらどうだらうね」彼は今まで黙つて聞いてゐたが何とか返事をしなければならなくなつた。さうして彼には別にどうしようといふ考へとてもなかつた。要するにやはりどうでもよかつた。「然う、僕はどうでもいいのですよ」「たよりない男だね、お前は。どうでもいいと

質のものではない筈である。それはすべての贈物と同じやうに先方の好意だけくれるものである。かの女が自分に好意を持たなくなりその結果その一番いい心の贈物である貞操を自分にくれないからと言つて、それを誰が誰に咎め立てすることが出来るだらうか。無理強ひをして贈物を得ようといふことが間違ひではないか——かういふ風に、自由にむしろいくら冷淡にこのことを考へることが出来るといふのは、自分自身既にかの女に情熱を持たなくなつてゐるからではないだらうか。或はまたこれが未だほんの疑惑である聞から、かういふ風にいくら合理的に考へられもするのではなからうか。さうだ、それはいいよ、事實になつて目前に現はれて來ないうちは、自分が自分の妻に對してまだどれだけの情熱を抱いてゐるかといふことは自分自身にも測れない。——つまりはその程度にまで自分自身も冷たくなつてゐると言はなければならぬ。さういふ程度の自分が、況んやどうして單に自分の妻であるといふだけの事實を盾にして、どうしてかの女の貞操を強ふる權利があるだらうか。それにしても自分は、かの女に向つてこの疑念を打ち明けて、かの女に何事かを數願するだけのものがある

ならば數願し、或はまたそれだけの情熱が既に失せてゐるならただの友人としてかの女に何か忠告でもするのが至當であらうか。忠告？ さうしてそれはどんな忠告だらう？ 言ふべきことは何もないやうな氣がする。世間普通だけのことはならん今更にそんなことを言はなくても、一個の人格としてかの女だつてそんなことぐらゐは心得てゐる筈である。自分を捨てて行くならば捨てて行くがいい。自分とても亦それを追つかけるだけの熱心はないであらう。それならば自分をこんなに悩ましてゐるものは何であらう。やはり愛着ではないであらうか。それとも單に男性としての名譽を考へてゐるのであらうか。どうも後者に近いやうに思へる。さうして今もしかの女を憎むとすればそれは自分の愛を裏切つたといふ憤ではなかつて、自分の名譽を——世俗的の名譽を壞すといふいさしい憤である。而も男の名譽を壞すと同時に、その妻も亦女としての世俗的名譽をもやはりすててかかつてゐる仕事ではないか。それならばかの女が女としての名譽を顧みず、父ともかくもかつてかの女が愛した男の名譽が傷つけられることを十分に知りながら、敢てかの女にそんな行爲をさせるものは何か。それはかの女

のなかに新しく湧いた情熱に違ひない——さう思つて來ると、彼の心中にもやはり嫉妬が萌え出してゐることに氣がついた。いや、今初めて萌えたのではなくてずっと前から、この問題がそもそもただの嫉妬であるのを、さう如實に考へることが自らを卑しくすると思つてまはりくどく、さまざまに考へて見てゐるのではないであらうか。……そこで彼は永いことその一點に就て考へ耽つた。と同時に彼のこの疑念はほんの疑念にしかすぎなくなつて、それを問題にするにはあまり根據が薄弱で、——二人で毎晩歩きまはつてゐるためにこの頃ひかの女の歸りが遅いのであらうといふ事も、あの下品な市松模様の浴物が新しい相手の好みだらうと思ふ事も、さてはかの女が自分と別れるための下拵へに先づ家を離れようと思ひついたらうかといふ事も、すべては彼自身の恥づべきまはり氣からの盛氣凌ぎではないかと思ひ返しました。さうかも知れない、と彼に考へながら心のなかに思ひ當ることがあつた。それはかつてその運動のために收監されたことのある社會主義者の一人が彼に語つて聞かされた獄中生活の實である。そこでは多くの囚人がきつと自分の妻が自分の留守のうちに不義をしてゐるであらうといふ疑念



陰影を添へるやうに思へるのであつた。

うららかに唄れた早介の午後三時ごろの日は、今まで對談してゐた北向き的小さな窓一つある部屋から出て來た彼の目には眩しいほどであつた。もとより彼の心持に對しても眩しかつた。人通りの賑やかな坂道の兩側の店にはシヨオウキンドウのけばけばしい裝飾が、自分の足もとを見つめて歩いてゐる彼の目を時時その方へ引きつけた。——それほど華美な色彩であつた。目に觸れるものは何もかも、世界といふものは一たいこんなに明るかつたか知ら——こんなに明るくてもいいか知らと、そんな氣持を起させるやうな天氣であつた。世の中はこの二三時間のうちにすっかり春になつてしまふかと思へる日であつた。さうして冬の間は濃んで流れなかつたためにうつけたやうになつてゐた彼の心が少しづつうごめいて來るに従つて、その困憊の度が一そう濃くなるやうに思へた。ただその氣持ばかりではなく外部の事情もだんだんと逼迫して來てゐて、いやが應でもこの行きつまつてゐる彼の生活が一度に變を切つたやうにくづれて來さうな豫覺——といふ

よりも寧ろ事實上の兆があつて、それが彼の心のなかに小さくはあつたけれども濃い影を翳してゐるのを彼は感じた。——うちへ歸つてうす汚いす暗い部屋のなかへひとり蹲つて考へるにはあまりに適當した問題で、怖ろしいと言はうか厭はしいと言はうか一種不氣味にうとましいものであつた。彼は「たん家へ歸らうとした足の向きをかつて、直ぐ道のわきにあつた上手に登つて行つた。それはこの都會の中心にある古い城壁の廢墟の一部分であつた。彼は心にわだかまりの無い人でもあるかのやうに、もう青んでゐる若草の上をゆつくりと歩きながら、努めてその觸れたくないことを避けてゐるのに、しかし彼の心のうへには翳された影が一刻一刻と擴がつて行つた。彼は歩みをとめて佇んだ。それから草の上に坐つてしばらくするとそこへ仰向きに倒れ横たはつた。空は青いといふよりも紫色として視野のかぎりでは雲一つない——かういふうららかな日に、自分の妻を疑はなければならぬといふ何といふ忌々しいことだらうと彼は思つた。一たいて彼は考へて見た。自分は何時しめじみと妻と語つたことがあるであらう。田舎にゐたとき以來、この都會に出て來てからは殆んど互にしめじみと

話合つたことはないやうな氣がする。いろいろな話をして妻は妻の話題を語り、彼れ彼の話題をしかり語らない。その上に朝早く出て行つて夜遅く、わけてもこのごろは一そう夜遅いかの女と、話さうにもその時間さへもない。それならば自分はいつしめじみと自分の妻のことを思つたらう。實際、それとてももう永いことそんな心持になつたこともない。いや近ごろでは全くそんなものの存在をさへ忘れてゐることが多かつた。自分の仕事のことやそれに關聯して清山のことなどばかり考へてゐたではないか。さうして妻と話すより以上に清山と話をしたではないか。かの女とても亦自分の夫より外誰かと、それが男であるか女であるかは解らないがともかく誰かと、夫とよりより以上の時間を文藝題を話し合ふことであらう。かうして二人の間には互にそれぞれの別の世界が開展してゐたとて、それは決して不自然ではなかつた筈である。昨日までは——文字通りに昨日の夜あの二重にひびく足おとを聞くまでは、全く忘れてゐたとも言ふべき自分の女を、疑念によつて急に重大視するといふことが一たい不合理なことである。直捷といふことはそもそも、何かが何人に向つても要求するやうな性

と凝視することさへ出来たら、それ自身が既に一つの解脫だと言へるかも知れない。どうにでも成るやうになれ——かう叫んでゐる彼は、たゞ半は自分を捨ててかかつてのいひ草である。どうにでも成れ、どこへ行つても道はあるといふのではない。彼にとつては、どうにでもなれ、何れはどこへ行つても行きづまりだからといふだけのことである——このやうに彼は自分のことを一人稱で考へたり三人稱で考へたりしながら、彼の物思ひは時時ひよつくり思想の大通りへ出るかと思ふとすぐにそこを横きつて、またしても妻に對する疑惑の暗い披裏の方へ迷ひ込んで行つた——それにしても、と彼はまた思ひつづけた。こんなに自分を悩ませること出来事が若しもう起つてゐるとしたならば、それは一たい何時から初まつたことであらうと新しい記憶の、しかし新しいにも似合はずばんやりとしたものを述べて、邁つて行くうちに自然と思ひ出されて来るのは、彼が大川秋帆に逢ふために樂屋へ出かけて行つた日のことであつた。——樂屋のなかで、かの女は何となく冷やかに彼に對したやうに思はれる。いやさうではない。それは彼自身があのやうに一種でれた氣持から妻に對して無關心・態度を示したこと

の反映であつたらう。さうして物怖れない場所へ踏み込んで行つてどぎまぎしてゐる彼をろくに顧みようともしなかつたやうな氣もするけれども、それは事實かの女がその役割の時間を追つてゐたために忙しかつたからに違ひない。疑ひをもつて見れば何もかも怪しげに見えるけれども、もしあの頃からして既にそんなことがあつたとすれば、秋帆のあの時の態度を説明するために、それは橋朱雀に新しい情人が出來たからだといふやうなことを、かの女の口から彼に傳へはしないであらう。でも何かかの女になかにも自ら省みてやましいところがあつたならばたとひ他人のことでも氣が刺して、そんなことを大して必要もないときに言ふ苦はなからう。だがそれは解らない。一たい一般の人間といふものは直ぐ目の前で自分のことと全く同じことが他人によつて行はれてゐても、自分の場合のことはその間全く忘れてしまつてでもゐるかのやうにごく平氣で、總ては自分自身への批判であるべき言葉を自分とは何の關係りもなさうに喋りちらしてゐるものである——平俗な人間と多少でも教養のある人間との相違の重大な點の一つとして、これは數へられることである。さうして女の場合には殆んど全くこ

の自分自身に對するまはり氣、或は良心的反射的作用は絶無と言つてもいいものである。彼の妻の場合とても、だから、朱雀のことを手きびしく批判してゐたからと言つてその同じ傷をかの女が持つてゐないといふ證據には決してならないであらう……。——悪いこの建物を築いては打壊し打壊してはまた築き上げて彼の物思ひは例によつて切りがなかつた。  
朱雀に逃げられさうになつてゐるといふ秋帆の硬ばつた顔といらいらした様子とが、事新しく、彼の眼前へ闇のなかに見えて來た。  
かの女はまだ歸つては來なかつた。歸つて來て別にどうといふわけもなく、だから待つてゐるといふのでもいいのに、やはりかの女がまだ歸らないといふことが實にとつて問題であつた。煙草の火をつけたマッチの光で枕もとの目覺し時計の表を照して見ると、よその時計が十二時を打つてからもうよほど時が経つてゐるやうに思ふのに、この時計ではまだ十五分過ぎたばかりであつた。——かの女は、いつも遅く歸つてそれほどおそくないやうな顔をしやうと思つて時計の針をおくれさせて置くのぢやないかな。ふと、そんなことまで彼に考へられ

に惱まされる。その夢を見る。それが悲じて面會に來た妻に向つて突然かの女を面責するやうな實例が屢あるといふのである。彼はその話を心のなかに思ひ出しながら、さうだ自分の不健全なこの兩三年間の生活は、確かに四人の生活のやうに自分の心を不健全にしてゐるかも知れないと彼に思つた。——かうして自分は自分の妻を信じようとしてゐるのだ。それが若し自分の信任に女が背いてゐるとしたら、それは自分の恥にはならなくつてかの女だけの恥になるだらう。そんなことも考へた。

土手の直ぐ下をとほる電車が轟きながら往來するのを聞きながら、彼はそこで二時間近く、このうららかな日に似合しくないことを思ひ耽つてゐた。

さまざまに考へた上で彼が心に決めたことといふのは結局ただ、妻にはこの事に就て何も言ふまいといふことであつた。何もかも手を束ねて見てゐてやらうといふことであつた。それより外には方法もないことではあつたし、たとひどんなことがありさうであらうとも唯出来るだけ冷靜にそれを觀察してゐてやらうといふこ

とであつた。どうしていいか判らない人間にとつてただ出来ることは、そのどうしていいか判らない周囲の事情を鋭い觀察を以て一一見逃さずはつきりと知るといふことだけであらう。

その代りには、一旦何ごとかを言はざるを得ないやうな立場に追ひ込まれた時には、何日の何處に何處でどんな疑はしい事があつたし、又、何時には何があつたといふ彼の觀察を順序立つて述べることは出来るやうにして置かなければならない。さうすることによつて自分が、以前から黙つてこそはゐたけれども決して何も知らずに馬鹿にされてゐたのではないといふことを、その時になつて思ひ知らせてやらう。ここまで考へて來た彼は、自分の妻に對していつの間にか戰慄的な、それも極く消極的な方法を選んでゐる自分がみじめにも淺ましいものに思へてたまらなくなつた。しかし彼は、と彼は考へつづけた。俺は何も別に探偵のやうに努力をしてそれをつきとめてやらうと思つてゐるのではない。ただ今までと同じやうに自然と耳目に觸れることのうちから自分に氣のついたかぎりの事を、自分の疑問を解決するために役立てようといふまでである——かう自分で自分に言ひわけをしてみてもそれは一向に言ひわけ

にもなりさうにもなかつた。さうしてたとひ何をしてゐても一たいがグッドネエチユアに出來てゐるかの女の性質として、巧にそれが包み隠げられるやうなことの出来るわけはなく直ぐにも尻尾を出してしまふだらう。かう思つた時に彼はふと妻ををかしくまた哀れなやうな氣がしないではゐなかつた。さうしてもしこの心持の方が甚じたとしたなら彼は彼の妻に言つたかも知れない。——おい。俺は何も知らない顔はしてゐるが實はお前の見張をしてゐるのたぜ。何か悪い事があるならなるべく上手に俺に知らせなかつた方がいいよ。彼はたとへば自分の役割の白の稽古をする役者のやうに、そんな言葉を自分の心のなかで呟いて見た。然しこんなことを若し自分が妻に向つていふとしたら、それは恐らく妻を愛してゐるからでも憫れんでゐるからでもなく、ただ自分自身が物事を正面から見たくないといふ臆病な卑屈な一時のがれの考へからでないといふ自分でも言へない。——俺には本當に現實家の強い精神が缺乏してゐる。自分の首が斬られようといふ斷頭臺の階段の数をかぞへながらいつもの足どりで上つて行く精神だ。人生のすべてのものを籠かずに悲しまずに誇張や感情の旁を過ぎずにはつきり



ふと昨夜氣がついたあの目覺し時計の針のことを思ひ出して、未だ片づけてない隣の部屋の枕もとの時計を持つて来て、それを茶算盤の上へ置いてから時間をくらべて見た。疑はしいと思つたのは、しかしほんの五分とは遅れてはゐなかつた。

「わたし今日は休むのよ」

彼が時計をそこへ持つて来たことを何と思つたものか、妻はそれをちらと一目見てさう言つた。しかしその聲はものやはらかで今までの永い沈黙が重荷になつてゐることを表してゐた。それに對しては日づと彼も何か答へなければならなかつた——

「何故？」

「でも、ごたごたしてゐるの。——だからわたし今日は休むつて言つて置いて来たわ」何でごたごたしてゐるのだか一向わからない。けれども彼はそれを聞き返さうとしなかつた。かの女はそれで受容へのない話に拍子抜けがした形であつたが更にひとりで喋りつづけた。「朱雀さんがね、今度うやめるのよ——役者はやめてしまふんですつて。何でも大川さんとは別れるらしいのね——黙つて聞いてみると朱雀が一座から脱退するに就て、殆んど朱雀の人氣だけで

賣り込んでゐる大川秋帆の一座は、朱雀が居なくなると一緒に自然と雇主から見放されることになるらしく、この事は兼ね兼ね分つてゐたらしいのだけれどもたとひ暫くの間にしたところで一座の結束を固くして置きたいと思つた秋帆は、昨夜まで誰にもそれを渡らさなかつた。昨夜はねてしまつてからそれを一座に披露したので、その相談のために昨昨夜が更けてしまつて皆して樂屋に泊つたのだ。——さういふ風にかの女は昨夜歸らなかつたことの説明をした。彼らはかの女の語には別に大した興味がないとでもいふやうに、火鉢に肘をついたままでしきりと小さなきさぐれを氣にして指の爪を噛んでゐた。

「それでゆうべ皆して合議をした結果といふのはどういふのだね 彼はよほど暫くしてから思ひ出したやうにさう尋ねて見た。

「それがね——」

かの女はそこでちよつと言葉を區切つて、少しゆくりした眼で彼の顔色を驗して見ながら、唐突な調子だつた——  
「わたしもう役者はやめて仕舞はうかと思つてゐるの——」

その言葉とその眼つきとは、素直に彼の意見

を徴してゐるやうにも看做されたし、またちよつと彼の氣を引いて見るといふやうにも取れないことはなかつた。

「それは又どういふわけだらうな——」

「あそこがやめになつたら皆は浅草へ出るんですつて。皆を路頭に迷はせるといふので、残つた役者を秋帆が浅草の興行師へ賣り込んだのね。でも、わたし浅草へなんぞ出る氣がしないわ。——それにかうしてたまにうちに居て見ると、どこへも行かずにいつもうちにゐたいやうな氣になることよ——」

その言葉の後半に就ては彼は別に耳を假さないで、その代りに「つた——浅草へ出るのがいやだつて。あんな品の悪いところはいいだといふのかね、奥様のお道樂だから無理ないね。だが舞臺や觀客が悪くなつたら役者そのものの集がそんな外儀のことで値が無くなるものだらうか。假りに僕が仕舞はら、さうして芝居そのものが好きなら、浅草だらうが何處だらうが出るね。さうしてその低級な芝居だらうが何だらうが立派なものにやつてのけるだらう。それにA劇場だつてもともと與太芝居ぢやないか。して見ればたゞ場所が落ちるといふだけつちので、本質は疾つくから落ちてゐるわけぢやない

家のなかで何か物音がしたやうな気がして彼の浅い眠がさめた。節々や隙間だらけの戸から洩れる光の具合では朝ももう相當に遅い時刻らしかった。彼はものの愛い手を差し延べて枕もとの襦を開けた。卓所の方から陶器を洗ふ音がして、昨夜はたうとう歸らなかつた妻が、多分今のさつき歸つたらしかつた。枕もとの時計は、八時少し前であつた。呼び掛けるのも忌しいやうな気がして彼は、目を覺したまゝやはり床のなかでまだ十分にはさめ切らない睡を感じながらぼんやりとしてゐた。けれどもどうももう一度眠れさうもなかつた彼はたつた一本だけ残つてゐた煙草へ火をつけて、睡眼不足のせゐか頭が鈍く痛むのを感じた。彼はわざと妻に聲を掛けないうでゐるのだけれども、その沈黙が奇妙に腹立しくなつて、それかと云つて今更何とか言ふことは一そう業腹でもあるし、若し妻の方で彼の起きた事に氣がついてゐるのならこの際何とか向うから聲を掛けなければ、止むなく彼の方から吐鳴りつけなければならぬやうな氣持になつた。吐鳴つてもいいのだけれども、彼は朝になつてやつと歸つて來た妻に對して何と

言つて吐鳴つていいのだからその言葉がわからなかつた。その言葉はわからないとして、假りに何と吐鳴つて見るとしたらと彼はそんなことを考へてゐるうちに、もしそんなことでもしやうものならこれや朝つばらから大變なことになるゝ氣がついた。彼の言葉に對してかの女がやはり何か激しく言ひ返すとか、或はめそれそ泣き出すとか、で結局は喧嘩をしなければならぬことになる——つい半年も以前にはそんな激しい喧嘩をよくした彼は、いつの間にかもうそんなことをするだけの情知も無くなつてゐるのか、今日では妻と喧嘩をすることを彼は大變に恐れてゐた。彼には彼等が喧嘩をおつ初めた時の妻のいろいろの表情が何とも言へず不愉快だからであつた。かの女の言葉は皆それだけに舞臺の上の白のやうだし、その表情もどうしても心の眞實が顔や體に出て來たものと思へないやうなたまらない身振りであつた。彼はそんな折のかの女の様子をひよつくり目の前に思ひ浮べて「女候の大」といふ言葉を自分の心のなかではつくりと意識した。さうしてこれは確に書ける——とそんなことを思ひながら、もうすつかり灰になつてしまつてゐる吸殻を灰皿のなかへ捨てた。

十能へ火を盛つて妻は卓所から次の部屋へ這入つて來た。へんだな」と思つた次の刹那に妻は昨夜かの女の母親が結つてゐたあの着物をもう着てゐることに氣がついた。似合つてゐるといふのだから不似合ひといふのだからだへんで、見なれない女に感じられた。友は十能の王の火を見つめてゐたので、さうして坐つてからも炭をつぐ火の上に煙を落してゐたので、どんな日つきをしてゐたか彼には見えなかつた。—あら。もうお起きになつたの？」かの女は、今それに氣がついたかのやうにそんなことを言つた。彼はそれには答へないでほんのしばらくして言つた。「もう一本煙草が吸ひたいものだね」それから空の袋をくしやくしやに見めて、別々に大した感情を込めたつもりもなく、それを襖の下の方へ投げた。「そんなに皮肉をなさらなくとも、買つて來いと言へば買つて來ますよ」かの女は少しばかり聲を陰しくしてさう言ひながら、煙草を買ひに出かけて行つた。二人はそれつきりしばらく日を利かなかつた。さうして黙つて向ひ合つて朝の食事をした。近所の時計が十時を打つのを聞いて、彼は

「どこだかはきめてゐない。——お漆の土手で  
でも寝ころんで来ようか。いい天氣だからね」  
「そんなところへいらつしやるくらゐなら、意  
地の悪い、何もうちにいらしつてもいいぢやあ  
りませんか。——わたし今日はうちに居るので  
すもの」

「僕にして見れや留守番のある日にゆつくり散  
歩でもしたいといふものだよ」

彼の友だちでも彼の妻でも彼のことを皮肉ば  
かり言ふ男だと言つてゐた。事實彼はどうも  
素直には口の利けない不幸な性質であつた。人  
並な美しい感情の湧いた時にはそれを表出す  
る言葉を見出せないくせに、不機嫌の感情を洩  
らす時に彼の理窟っぽい言葉は自分でも気がつ  
かないくらゐ自由であつた。そのために元來  
センチメンタルな彼を一個超人のやうな思倣  
してゐる友だちさへあつた。しかしそれはただ  
彼の孤獨な氣持から出てゐて、その性癖が彼を  
一そり孤獨にしてゐた。わけても今日は、彼の  
口からつい出でしまふ一語一語は彼自身でも何  
となく不快なものであつた。さうして妻と面し  
てゐる以上はそれがどうにもやみきさうにもなか  
つたし、それに彼には全くひとりでゐたい日  
もあつた。帽子を取り上げる彼を日送した妻の

日が、氣のせるか、どうも少し涙ぐんでゐるの  
ぢやないかと彼には思はれた。それともあかの  
女もただ前夜の睡眠不足でそんな日をしてゐた  
のかも知れない。

家を出て来た彼は、さればと言つて行くこと  
ろもなかつた。ふと思ひついて彼は、渚山がそ  
こへの道ついでに彼の家の立寄ると言つたあの  
圖書館へ行つて以前に讀みかけたことのあるア  
ンナ・カレニナを讀んでみようかと思つた。け  
れどもあの人きな本の形を思ひ出しただけでも  
うんざりしてしまつた。しかし彼が圖書館へ  
と思ひついた時に彼の足は反射的にその方へ運  
んでゐて、彼は自然と、あのいつか不恰好なレ  
オのことで酒屋の樽拾ひの胸ぐらを捉へたこと  
のある廣場の方へ来てゐた——その間にも、彼  
の考へたことはすべて妻のことであつた。彼は  
妻が家でひとりで泣いてゐるのぢやないかと思  
つた。それも何か彼に對する反抗的な氣持から  
ならまだしもいいでなくつて彼の歸りを恐ろ  
しいやうな氣持で待ちうけながら、彼が歸るの  
を見るといきなり一宥して下さい。みんなわた  
しが悪いのです——そんなことを言ひ出したらど  
うだらう？ さう空想して見ると彼は家へ歸る  
のが恐ろしいやうな氣がした。さうかと思ふと

また、泣いてゐると思ひ沈んでゐるもないだ  
かの女は、彼が起つたあとの布団のなかへもぐ  
つてかの女の不足してゐる睡眠を充たさうとぐ  
つすり太平樂に眠入つてゐるのかも知れない。  
：そんなふうにも空想された。馬鹿なことだ、  
何事でも目の前へそれが起つて来るまでは空想  
などは餘計なことだ。——尤も愉快な空想で  
でもあれば別だが。彼はそんなことを自分自身  
に言ひかけながら、偶然そこまで歩いて来て、  
そこにあつた石の共同ベンチに腰を下した。  
そのあたりの櫻の並木はもう皆十分に苔みふく  
らんでそのために枝全體うす赤いのを、彼は一  
とほり唯見渡ししながら、一女といふものは時  
にははつきりと命令をして貰ひたいものなので  
す——と、彼はひよつくりさつき妻の言葉  
を思ひ出してゐた——巧いことを言つたものだ  
：……どうもあれは自分で考へたことぢやあるま  
い。何かの白にでもあるのを應用したのだらう  
……。又してもそんなことを考へ初めたから、  
彼はベンチを立ち上つて、その廣場から街の方  
へ下りる廣い坂道をずつと下りて行つた。綿入  
の井中が太陽を受けて妻がりの彼にさへ熱いほ  
ど温かいのを氣にしたがら。所在なかに彼は、  
その電車通に兩側に澤山並んでゐる古木屋



か。——僕は一たい場にも名優があり、不遇のうちにも才能はあるやうな氣がしてゐるのだ。——と言つて何も、僕はお前を淺草へ出たらいいだらうとも悪いだらうとも言ふのぢやないぜ。もともとお前がどんな考へでもう一度芝居を初めたか知らないが、お前が芝居をしてくれたからと言つてその爲めに僕には一向何の得にもなりはしない——又僕だつてお前に養はれたり小遣を貰つたりしたのぢや不愉快でたまるまいから。お前が何と思つてゐるにしても芝居は結局お前の道樂さ。お前は自分の口ずきはしてゐるだらうが結局小遣錢も相當持ち出すやうだから同じわけだらう。だから僕は前を無理に役者をさせて置かうといふ考へは一つもない。と言つてやめさせやうといふ考へも一つもない。は、は、は、彼はさう言つてちよつと笑つた。彼は彼の方をちらと見た妻の目を感じながら言葉足した。「つまり僕の言はうとするところは今までの小屋ならいいが淺草はいやだといふ、お前の考へ方が不徹底で不純だと言つたまじだよ。やめるならやめるさ」

「あなたばかりとも相談にはなつて下さらないのね」

かの女の聲は少しとげとげしかった。

「相談としてゐるぢやないか。さうして僕はどちらでもいい。好きなやうにしたがいいと言つてゐるぢやないか」

「さう！ でもね、女といふものは時にはつきりと命令をして貰ひたいこともあるものですよ」

「なるほど。これや哲學だ。——だが人に命令をせず、人からも命令をされないのが僕のむかしからの哲學だね——彼は平靜なむしる何か愉快なことを言ふやうな聲でかう言つた。かの女はそれつきり黙つてしまつた。しかししばらく経つとかの女はまた話題を見つけた。

「お母さんのところへいらしつて？」

「行つたよ、昨日。そのへと言つて彼は顎でかの女の着てゐるのを示しながら、その着物が仕上るところを見て來たよ」

「……何か相談があつた？」

「この家を引き拂ふことだらう。——何もかも御意のままだよ。皆のいいやうにしたがいいのだ。僕にはどうしたらいいのだから一向わからないものね」

「あなた、厭なの？」

「厭ぢやないよ。皆のいいやうにすればいいぢやないか」

「皆のいいやうにぢやないわよ。妙な方ね、あなたがいいやうにぢやなくつて——」

「然らうか。それぢや僕のいいやうにだ。僕はどつちでもいい」

「あれだ——ほんとに相談にも何もうりやしない。お母さんがあなたと話をするのをいいが、その無理ぢやないよ——かの女は半ばひとり言をつぶやくやうにさう言つた。

彼、今までの冗談ともほんとうとも自分自身でもわからない話ぶりを改めて、事務的に言つた——「もうちゃんと相談はして來たのだよ。今にお母さんも來るだらう。何でも明日からでも行つて片づけてやるといふことだつたからね。僕は引越して新しい氣持になるのは大好きだ。だが引越そのものは大嫌ひだ。——一つまた僕の知らないやうによろしくやつて貰ふのだね。——夫と女房とをさへ、傾けて下宿をすりやさぞ存氣な身の上になるだらうな。彼は自分のアイロニカルな言葉のなかにある自嘲を自分に感じながら立ち上つて、二十一時か。どうれ、一つ散歩をして來よう」

「散歩？ 夫をつれて？」

「今日は夫はいやだ」

「遠くへいらつしやるの？」

學などといふものは戀愛などと似た種類で何か  
 やはり一種の熱病で、——といふもの通りのこ  
 とを思ひつづけて——その熱病が彼自身で知ら  
 ないうちにけりりと癒えてしまつたのぢやなか  
 らうか、さうだとすると少しは心細いやうでも  
 あると思つて見たり、しかしそれらの考へに就  
 て彼は、この間までのやうに一つ一つ神經質な  
 追及で考察しつづけるやうなことなどは少しも  
 なく、それならば心持が輕快かと言ふと無論決  
 してそんな筈はなく、言はば古沼などが浚んで  
 水が腐りさうになつてその底からポツポツと時  
 時泡を吹き出してゐるやうなものであつた。

——これもやはり神經衰弱中の一兆候であらう。  
 それにしても氣候とか住んでゐる部屋とかいふ  
 ものがこれほどまでに人間の精神状態を變へる  
 か知らと疑はれた。しかし浚んだ水の底にはや  
 はり依然として不安の流れはあつた。それはし  
 かし昨日までのやうに鋭くさうして一つ一つ理  
 智を持つて築き上げたり打碎いたりするやうな  
 ものではない代りに、肩の凝りや齒齦の鈍痛や  
 過食の後の胃の不安やさういふものに類似した  
 ただぼんやりとした鈍いしかし一刻も放れ去ら  
 ないものであつた。彼を悩ますその小さい方の  
 一つはあの田舎の土地を擔保にして金を借りる

事——その事のために彼自身がそんな事務的な  
 ことを自分でしなければならぬといふだけの  
 ことであつた。ただそれだけの事であるが實務  
 に就ては何の才能も經驗もない彼がそんな用事  
 で見ず知らずの人間と對談しなければならぬ  
 ——さうして何時であるかは知らないが、その  
 時期がだんだん切迫して來てゐるのだと考へ  
 たそれだけでも彼はもういい加減に狼狽もした  
 し、うんざりもした。それを思ひ出す度に彼は  
 空元氣を出して自分自身に言つた——「先方で  
 採用さへしてくれればこれから新聞記者になら  
 うといふ人間ぢやないか。それぐらゐることが  
 てきばきとやつてのけられぬで如何する!?」  
 そこで彼はこの間、偶然にも久能と逢つてその  
 時久能から話し出された事を思ひ出して、彼の  
 考へはしばらくそこで停滯した。

彼の困窮してゐることを知つた久能は、或る  
 大新聞社に彼の知人がゐてその人が、久能の大  
 學を卒業するとしなにと不拘、久能をその新  
 聞社へ雇入れようと言つてゐた。久能自身もや  
 はり職業を求めてゐたのだけれども久能はそ  
 れほど切迫した氣持や境遇で求職してゐるわ  
 けでもなし、それで久能は自分自身のものはゆ  
 つくり搜すとしてその新聞社の知人へ彼を推薦

しようと言ふのであつた。さうして四五日のうち  
 にはその知人に面會して、應その事を相談し  
 てくると彼に言つたのである。それつきり一週  
 間ほどになつたが久能からは何のたよりもなか  
 つた。どうせ駄目なものと思つてゐるがそれ  
 でも彼は久能から何とかはがきぐらゐありさう  
 なものだと思つて待ち續けてゐた。「先方で  
 採用さへしてくれれば云々」といふのはその事  
 なのである……。

不安のなかの大きな重い方のは言ふまで  
 もなく彼の妻のことであつた。かの女は彼が黙  
 つて放つて置いたが、やはり淺草の小屋へ出る  
 ことにした。さうしてかの女の生家からそこへ  
 通うてゐるのであつた。

「別別には住んでもうちは近いのだし、行き歸  
 りにはわたしもきつと寄るわ……」

かの女はそんなことを言ひながら一週間に  
 なるのにまだ二度來たきりであつた。それも一  
 度は彼がここへ越して來た次の日か何かに、朝  
 彼がまだ寝てゐるうちに這入つて來て、  
 「……これやいい部屋ぢやないこと。ここな  
 落着いて何か出来るでせう?」

を、何の目的もなしに軒並にひやかした。もしあの店を覗いてみてあの小僧があるやうなら渚山(しづま)の消息でも知つて居るかどうか聞いて見てやう。

或る店頭(みせ)にキファエル前派(ぜんはい)の珍らしい畫集があるのを見て、彼はそれを開いて見てゐた。すると、

「やあ!」

といふ太い元氣のいい聲と一緒に彼の肩へ手を置いた者があるので、彼は振り返つた。この太つた男は、三年越し會はなくなつた古い友達(ともだち)の一人で、久能(ひさの)であつた。今年こそいよいよ卒業論文(りろんぶん)を書くので参考書(さんこうしょ)をあさつてゐたと言つて、久能(ひさの)はどこか近所(きんじよ)のカフェーへ誘つた。——彼は寧ろ迷惑(めいわく)さうなでもないふ顔つきでこのもとから親切(せつてん)な友人(ゆうじん)のあとへついて行つた。

「どうかしたのかい。ひどく顔色が悪いぜ」

「さうかね? よく眠れないからだらう」

「また神経衰弱(しんけいじやく)か。ハッハッハッ」

久能(ひさの)は神経衰弱(しんけいじやく)なら吹飛ばしてやらうとでもいふかのやうに、相變らずの大きな聲でその大きな體(てい)を快活(かいかつ)にゆすぶりながら、意味もなく笑つた。笑ふ時にあの柔和(じやうわ)な目を細くする久能(ひさの)の笑顔(えがほ)が、後(あと)から歩いてゐる彼の目(め)に見

えもしないのにはつきりと映つた。久能(ひさの)は友達(ともだち)の仲間(ななか)で誰(たれ)か西郷隆盛(せいこうりゆうせい)と綽名(しやくめい)をしたやうに、彼(かれ)などとは全然(ぜんぜん)正反對(せいふたい)の性格(せいかく)格(かく)であつた——久能(ひさの)の手(て)などはしばらくすつかり忘れてゐた彼は、ひよつくりその人(ひと)に逢つて彼の性格(せいかく)がひどく羨(うらや)ましいものに思(おも)へた。

彼の引越(ひらく)して來たのは、妻(つま)の母(はは)が言つたとほり妻(つま)のさ(さ)からは一町(いちちやう)とは無いところであつた。その部屋(へや)は南(みなみ)一面(いつめん)が低い窓(まど)でそこに一ぱいのガラス障子(しょうじ)が嵌(は)まつてゐた。そのガラスがしかも磨(さら)ガラスでもなく、またその上(うへ)へ紙(かみ)も何も貼(は)つてはなかつたから、太陽(たいやう)は淺い廊(ろう)からすべつて直射(ちくしゃ)的にこの部屋(へや)の壁(かべ)の上(うへ)へ、殆ど限(かぎ)なく照りつけて居た。一實(いつじつ)に温(ぬ)な部屋(へや)で冬(ふゆ)中はどなたにもお貸(か)し申(まを)さないで利(き)が自分(みづかみ)で仕(つか)んでゐたのですよ」とこの下宿(げしやく)の老主(らうしゆ)人(ひと)が彼(かれ)をその部屋(へや)へ案内(あんない)した時に言(い)つたが、いかに冬(ふゆ)中(ちゆう)はいい部屋(へや)であつたらう。然(しか)しもう四月(ごがつ)になつては、どなたかにお貸(か)し申(まを)さずにけ居(ゐ)られない部屋(へや)であらう。ここではまるで一日(いちにち)中日光浴(にっけいこうよく)をしてゐるやうなものであつた。太陽(たいやう)の光(ひかり)にあれほど憧(あこが)れとほした彼(かれ)ではあつたが、ここへ來てから

三日(みか)ほど経(た)つとこの太陽(たいやう)の洪水(こうすい)のなかで彼はすつかり頭の調子(てうし)まで狂(くる)つて來(き)るに感(かん)じられた。いや、本當(ほんとう)に狂(くる)つて來たのである。それは全く(さ)く不(ふ)思(し)な程(ほど)であつた。彼の體(てい)も心(こころ)もこゝではぐつたりとだらけて仕舞(しま)つて、藝術(げじゆ)だの人生(じんせい)だのそんな問題(もんだい)はどうした事(こと)かもう頭(かぶ)のどの隅(すみ)にも無(な)くなつてしまつて、それならばその代(しろ)りに何(なに)を考(かん)へたり思(おも)つたりするかといふも、それが全然(ぜんぜん)何(なに)も無(な)かつた。夜(よ)は十時(じゅうし)ごろから眠(ね)くなるくせに朝(あさ)に起(お)でなければ起(お)さなかつた。眠(ね)れなくて困(こ)ること今(いま)まであつてもこんなに眠(ね)ることは彼(かれ)には珍(めづ)りかつた。品(しやう)になつて目(め)がさめると朝(あさ)と晝(ひる)とを兼ね(かね)た食(た)事を(して)——それが甘(あま)いんだか不(ふ)味(あじ)いんだかそんなことも少しも感(かん)じられない、ただもう口(くち)のなかへ入れてしまふと、人(ひと)に這入(はいり)つて來られるのがいやだから先(まづ)お膳(ぜん)を廊(ろう)下(か)へ突(つ)き出(だ)して置いて、さつき自分(みづかみ)で疊(たた)んだ布團(ふだん)のなかから彼(かれ)は枕(まくら)をさがし出してそれを壁(かべ)の上(うへ)へ投げ出すと、また再びぐつたりとなつてゐる體(てい)を横(よこ)へた。眠(ね)つてゐるのでもなく目が覺(さ)めてゐるのでもなく、犬(いぬ)が日向(ひなた)ぼつこしてゐるのはこんな氣持(きもち)だらうと彼はそんなことを思(おも)ひながら、世(よ)の中にこれほど無(む)情(じやう)なことがあるだらうかと思(おも)ひつづけて見(み)たり、父(ちち)



雪はまづい顔立だったが色の白いぼつちやりとした初初しい娘だったなどと思つてゐるのであつた。——それにしても現に彼自身の隣室の學生も今ごろ何だかいらした氣持でゐるだらう。……

「もう十二時半ごろでせうね。わたし歸るわ」  
暫く黙つてゐてからかの女はさう言つて立ち上つた。彼は自分の目の前に立つた自分の妻を枕をしたままでちつと見上げた。それから障子をあけて出てしまふのを惜しいもののやうになやましげに目送した。障子をしめてしまひさうにした時に彼は、咽喉の乾いたやうな聲で低く、「おい」と言つて自分の妻を呼びかけた。かの女はまだ十分には閉めてゐなかつた障子をもう一度開けて、しかし部屋のかなへは這入らうとはせず、廊下に突立つて言つた。

「何？」

「いや何でもない」彼はかの女が部屋のかなへ這入つて來ないのを不満に思ひながら、狼狽した聲でそれだけの事を言つたが、急に一種憎憎しい聲で言つた。「お前もさう忙しいところをちよこちよこ寄つてくれないでもいいよ——彼は初め言はうとした事とは全く反對なことを言放つて、それから忌忌しさに枕もとの電燈のス

キツチを振り消した。かの女は何も答へずに立つたやうであつたが、彼は暗くなつた部屋の隅から日除けのないガラス窓のガラスを透してあまり明るくない春の星の一點たまりをちつと見守つたまま、妻がありながら獨身者のさびしさを覺えた。

或る日のことであつた。下宿の女主人である婆さんが彼の部屋へ來て、陰氣な無口な人に對する一種びくびくした調子で、彼のところへ來客があることを知らせた。來客？ 彼のところへ？ しかもこの下宿へ誰が何の用で尋ねてくるだらう？ 訪問して來る人もなければ、何人も彼のこの下宿住ひを知つてゐる人がある筈はないではないか。

「僕のとこへですか？ 人違ひぢやないんですか？」

「いいえ、確にあなたと仰言いました」

「一たいどんな人です」

「お若い——あなたよりもつとお若い方で……」

「ふむ？」

「お洋服を召した立派な方ですよ——誰だらう？ 彼は疑問のなかに一刹那きつ

とした。彼の妻のことが咄嗟に心に浮び出して、その「お若い——あなたよりもつとお若い、お洋服を召した立派な方」が、何故かしら彼の妻と何か關聯があるやうに直感された。「さうですか。ともかくも僕が行つて見ませう」

彼の聲には決心とでも云ふべき音が響つてゐた。彼はつかつかと階段を下りながら玄關口に立つてゐる男——青いスプリングコートの青年紳士がしがやんでゐる後姿を見た。その人は彼の足音を聞くと今までそこにしがやんでもう靴を脱いでゐた體をねぢ向けて彼の方を

「よう！」

と呼びながら見上げた。

「何だ！ お前か！ 何故さう言つて名告らないのだ」

彼はつくけんどんにけんつくを喰はせるやうに自分の弟にさう言つた。それからすたと自分の部屋の方へ上つて來てしまつた。弟は取残されまいとでもするやうに急に彼について部屋へ這入つてから、いきなり壁の高い部分に目をやつてそこをぐるぐると一まはり眺めながら柱の上にあつた一本の釘を素早く見つけ、そこへ自分の帽子を掛けた。それは蒼灰

そんなことを一言二言しゃべつたまま直ぐ出て行つた。彼はろくに目も覺さないで夢のなかか何かのやうにそのそはそはした聲だけを聞いた。目が覺めて見たらかの女はもうゐなかつた。

二度目の時には夜遅く来てもう寝てゐる彼の枕もとへかの女は坐つた。さうして今度の小屋はA劇場とは違つて晝と夜と二回の興行で、九時の樂屋入りだから朝早くて困ることや、家から淺草まではさうしても一時間ももつと以上もかかる事や、從つて夜の歸りもおそくなるから、つい彼のところへ立寄る暇のない事などをひとりて言ひつづけてから不意に思ひ出したやうに言つた——「あなた吉澤といふ人知つてゐる？　吉澤駒太郎といふのよ」

彼はそんな俗な名前の人間は知らないが、それがどうしたのだと訊くと、その男が今度の小屋の樂屋頭取で、彼が學生の時に素人下宿で彼を半年以上も寄寓させた事があると吉澤が言つたといふのであつた。——さう言へば、なるほど、五六年も前に彼は吉澤といふ家に下宿してゐたことがあつた。十六位になる娘があつて、それを九州あたりから來てゐる金まはりらしい書生に推しつけようと母親が厚かま

しく骨折つてゐた。その家族が吉澤だ。その頃でも何か芝居の、大道具か何かの仕事をしてゐた……

「大阪の人間かい？」

「さうよ、大阪のものよ。ぢややつぱりさうなのね。世の中は狭いものだといふが本當ね」

「だから悪いことは出來ないものだよ」彼は肘枕をしたままじろつとかの女を見上げた。かの女は別に變つた表情もしなかつたが、しばらくして言つた。

「今度の樂屋へ来るのはおよしなさいね。頭取が私を呼びかけて、あなたの事は昔よく知つてゐる、お父さんもよく知つてゐる——ちやんとしたうちの坊んちだなんていふのですもの、まるでちやんとしたうちの坊んちが淺草の女優風情と一緒に言はないばかりよ」

「また實際、さうでもあるからね」

「とにかく今度の樂屋へ來ちやいけないわ。あなたもいやでせう、吉澤などと顔を合すのは」

「別に吉澤に悪い事をした覚えもないから構はないがね。——一度逢つて見てもいいがらぬなものだ、彼は心にもないことをわざと言つて、今

までだつて樂屋へなど好んで行きはしないし、今だつて樂屋へ行きたいと言つたわけではない

のに、この女はどうしてさう樂屋へ來てはいけない、來てはいけないといふのだらうとそれを訝しく思つた。直ぐに一つの想像があつて、それは、かの女が今ではもう樂屋中へ廣まつてゐて若し彼が樂屋へでも來るやうなことがあれば自然と彼の耳へ何かの暗示を與へるだらうといふ事をかの女が慮つてゐるのだらうと彼には考へられた。樂屋のなかではかの女のとがその通りに評判になつてゐる。自然そのの評判の女の亭主のことも噂に上らぬにはゐない。吉澤はそこでかの女の亭主の名前を知つたのだ……

「それにしても何だつて用もないのに自分の亭主のことを頭取などに言ふのだい」

「わたしが言つたのぢやないわ。誰かよけいなお喋りをしたからよ」

さうだらう。それに違ひない、思つた通りだ。彼は心のなかでさう思ひながら黙つてもつとそ

のつづきを考へて居た。それがどうしたわけか彼自身でも氣のつかないうちにいつか變つてしまつて、彼はふいと吉澤の娘——たしかお雪

と言つた——との金まはりのいい九州の學生と長い冬の夜を一時ごろになつても彼の隣室でひそひそ話をしてゐた事を思ひ出してゐた。お

来て今に『街の子』の息子のやうに乞食をしさうだと言つてくれ」

弟はそんなことには返事をせずに、「ぢやさやうなら」と言ひながら立ち上つて、ズボンの膝頭を軽くたたいてから柱の釘にあつた例の中折を頭の上へ丁寧にのせた。彼は出て行く弟を、今までのやうに身を横へたままで見送つてゐたが急に立つて玄關まで送り出した。赤い編上げの紐を結んで居る弟を後から見守つてゐるうちに彼は、引越をしても通知一つしない兄を遠い三田の方から捜し訪ねて来た弟をそんなに無愛想に取扱つたのが氣の毒に思へて来て、そこで彼は聲を利けて言つた。

「で、いつこちへ歸るんだい」

彼の無愛想が今になつてやつと弟の心にも反應したかのやうに、今度は弟の方でぶつき棒に答へた。

「さあ、よくわからないね。ゆつくりはしてゐないが。——さよなら」

客を送つて出て来た下宿の婆さんが、出て行つた彼の弟を彼がしよんぼりとまたぼんやりと見送つてゐるのを見て、彼に尋ねた。

「弟御さんでいらつしやいますか」

彼の答はまるで慍つてゐる人のやうな語勢であつた。さうして彼はその言ひ方に些かあつたに取られてゐる様子の婆さんを尻目にかけて再び自分の部屋の方へ引き返した。彼はすべてが氣まづくちぐはぐで彼ひとりだけが皆に——父にも母にも弟にも、下宿の婆さんにさへも取りのこされたかのやうな不安な寂寞な孤獨な心持になつて、いつものやうにごろりと身を横へることさへせずに、どうしてだか何時までも机の前へきちんと坐つて考へ込んでゐた。

彼がそのやうに縷縷としたおぼつかない生活をつづけて居るうちに、江森清山は彼の心のなかからその影を少しづつ薄くして行つて今はもう殆んど思ひ出す間もないやうになつてゐた。毎日のやうに訪ねて来た友人が三ヶ月も顔を見せなくなつたその理由がわからなくとも、さうしてその事を思ひ出したもただ一相變らずどうかして生きてはゐるだらう。位にしか感じない。

彼はそのやうなイゴイストでもあつたし、それよりも第一に彼の生活のなかには親切な人間に必要な心のゆとりがなかつたのである。——「あの男もあれからどうしてゐるかしら？」と一

人の友人をしみじみと思ひ出すためには、人はその人自身が先づ幸福でなければならぬ。さうして我々の主人公は我々も知つてゐるとほり決して幸福ではなかつた。と言つて、彼はまた決して所謂悲惨ででも悲壯ででもあつたわけではない。それは、たとひどんな下らないものにして一つの生活信條を抱いて人生をそれで統一してゐる人間にとつては全く同情出来ないであらうやうなぐうたらなもので、ただ自分をも人をも信じなくなつていらいらとしてひとりぼつちでその結果として彼は自分自身の心持を隅から隅まで凝視しつづけて、きてそれをどうしようといふやうな意力は彼にはもう寸毫も働かなかつた。生活は彼にとつては半睡狀態の夢のやうになつて来てしまつてゐた。——こんなことをしてゐればあの川のなかへ落ち込むのだが、とさう思ひながら人は夢のなかでずんずんその川の方へ歩いて行く——そんな夢がよくあるものだが、そんな類の夢のやうに人生そのものが彼のの上にしかかつて、彼自身少しも意志を持たないなりき作せの生活が彼の上をのそのそと爬つてゐた。この不安な不快な怪物を、今にはどうにかなるであらう——「そう何もかも解らなくなつて自暴自棄になるやうな時



色をした新しい軽さな中折帽であつた。坐する時に新調のズボンの膝が抜けないやうに苦心をしながら弟は、兄の不機嫌な顔色をよく見たけれども、それは兄のいつもの癖であつたからそれほど気にもめなかつた。しかしその日の兄の不機嫌は格別なものであつた。彼の妻に對する不信と危惧とが、極く些細な事でも何かちよつとした事さへあれば飛上るやうになつてゐるその過敏以上の過敏——それが殆んど病的なものになつてゐた自分に氣がつくと、彼は泰然と情怒ともつかないもの、而もそれが誰に向けやうもないそれ故自分自身のなかで内訌する感情で一杯になつた。さうして久しぶりに逢ふ弟に對してどうして彼が今特別に不機嫌であるかといふ理由を説明することも出来ないかと考へると、それが更に彼を不機嫌にした。その上にも亦、弟のきちんと調へた服装を見て彼はもう一そりに不機嫌が募つて來た。ちやうどその場へ、さつきの婆さんがお茶と座布団を持つて進入して來て、この年とつた女が丁寧な言ひ草で會釋をすると、弟は弟で「兄が御厄介になりまして……」といふやうなことを柔和な人懷つこい調子で應答してゐるまでが、彼の心持を苦痛しくした。さういふ社交性

によつてこの弟は人人から愛せられて彼つやうに孤獨でもなかつたし、又平凡な性格に生れついて學校へ不満もなく通つてゐられるといふ事實でこの弟は全く青年紳士のやうな風采を保つだけの保護を父母から受けてゐた。

若若しく無心な弟は、しかし、兄がどんなひねくれた事を考へてゐるか氣づかなかつたから、例の柔和な口調で彼の今までの住居を先づ尋ねたがそこが壺家であつたことや、それで彼の妻のさうへ來て見たらわかるだらうと思つてそこからここを尋ね當てて來た事などを話した。弟はちよつと言葉を途切らせてから言つた。

「ね。突然だが森鷗外博士の譯したもので「街の子」といふ本があるかね。——おやぢが讀み度いから搜してくれと言つて來たのだよ。——それが妙なのさ。何でもうちの方へ田舎まはりの新團圓がまはつて來てそこでそれを上演したのだと。お母さんが人に誘はれて二十何年ぶりとかでその芝居を見て來てのさへりに、お父さんにその筋を話して、あれはまるで兄さんのやうな息子であるのお父さんがあんなに怒るのも無理はないと言つたとかで、どんな事を書いた本だか見たくなつたと、お父さんから手紙が來てね。

「たいどんな本だらうね? —  
一何、おやぢのいふことを聞かない息子が乞食のやうになつてしかも女房子供まで引連れて自分から飛び出した故郷へ舞ひ戻つて、何たか親父と口争ひやら鬭争やらを始めるやうな話だ——雜誌に連載されたきり木にはなつてゐないよ、未だ——

彼はそれだけの事を返事をした。その少しせき込んだ口調で、弟は兄が平常より大へん不機嫌なことにやつと氣がついた。さうしてそれは「街の子」のこなどを言つたからだと考へた。弟はポケットからシガレットケースのなかに這入つた兩切をパイプに差しつけてゆつくりと吹かしながら、もういつまで待つてゐても口を利きさうにない兄に對して言つた。  
「一度うちへ歸つて來ようと思つてゐるんだが、今晚ね——それから獨言のやうにまた崩解するやうにつけ加へた。「休みになつて直ぐ行かうと思つただけけれど迎れてしまつたものだから——  
「ふむ——彼はさう返事したきり何の爲めに——も聞き返さなかつた。  
「別にうちへ用事は無かつたかね? —  
「さうさ。何もないよ。心がらで段々窮迫して

分の胸のなかに奇妙にこんがらがって、人ごととは思ひ難い氣持を感ずると、彼は思はず吐鳴るやうにさう言つたが、その自分の語氣に彼自身が先づ怯えた彼は急におだやかな口調で半ばひとりごとと言ひ足した。「それにしても落山は誰の世話で病院へ這入れたのだらうな。ね、君、そんなにひどく悪くなつたのかい」

彼のこの質問に對して小僧は意外なほど精しく何もかも知つてゐた。さうしてこの若い男は、それを知つてゐることに愉快をでも感ずるかのやうに例の持ち前の雄辯で話したところによると、この男が落山をまるで仲間か何かのやうに言ひ做すのも無理がないほどたつた三ヶ月かそこの間にこの二人の關係は相當に親密なものになつてゐたらしかつた。何故かといふのに、數に於ては決して少くない筈の落山の友人達は、決して落山を惡んでゐるわけではなかつたけれども、皆はそれぞれに彼等の生活で忙しかつたから誰一人として落山の下宿などへ遊びに行つてゐるやうな時間になかつた。さうして落山はもう自由に外へ出ては歩けないほどになつてゐたらしい。ともかくも落山を訪ふものは一種の債權者たるこの古本屋の小僧であつた。さうしてこの小生意氣でえらさうなこと

を吹聴する代りに不親切ではない古本屋の小僧は、頼まれれば落山の汚れた寝間着の着換への工面などまでしたのである。そんなになつてしまつてゐる落山にとつては、今までも相當にそれれ手數をかけてゐる友人たちにまた今度の心配を頼み込むより、この新しい知り合ひに世話を焼いてもらつた方がまだしも氣が樂であつたのかも知れない。

落山は彼のところへ顔を見せなくなつてしまつて以來に絶えず病床にゐたものと見える。さうして或る朝から、落山は全く腰が立たなくなつて一人ではもう便所へも行けなくなつた。呻吟してゐる落山を下宿の夫婦や、或は隣室に下宿してゐる砲兵工廠の職工などが背負ふやうにして便所へつれて行つた。病苦はさほどにひどいものではないらしいけれども、思ふやうに身動きが出来ないのでそれが焦焦するのであらう、どうも子供のやうな氣儘を言ふことがあつたと下宿の主人は、古本屋の小僧をつかまへて迷惑さうに苦笑をした。さうしてさすがにそれは言はなかつたけれども落山をどこかへ早く立退いて貰つて欲しい口ぶりであつた。落山もこのままではどうもならないと思つたに違ひない。或る知り合ひの——と云つてどれほど親密

な人だか解らないが、ともかくも或る牧師に頼み込んでその紹介で築地の S. E. 病院へ入院することに決まつた。その時にも偶然でこへ來させてその事を知つた古本屋の小僧は落山が病院へ運ばれる日にも見舞ひのつもりでその時刻に病院で落山を待合してゐた。落山の人力車が來たので出て見ると、外にもうひとり四十ぐらゐの人が一緒にあつたが、それが落山を病院へ紹介した牧師であつた。

「その牧師は」と古本屋は言つた。「僕をよほど親しい落山氏の親友とでも思つたのか、何かといふ入立つた相談をするのですね。僕はひどく面くらつて一時は、これや餘計なお世話といから飛んだかかり合ひになつたと思ひましたよ。醫者が私たちを、私とその牧師といふ人とを別室へ呼びましてね、この病院では施療患者は二ヶ月より收容することは出来ないのです。が、あの患者は二ヶ月のうちに全治する見込みもないし、また二ヶ月のうちに死ぬ見込みもない。何しろ永い間の病氣が張り横つてもう脊髄まで犯されてゐるのだから今では直る見込みはまづ無い。二ヶ月経つたらどうするといふことも今から考へて置いて下さい」といふやうなことを相談するのです。一たい落山氏は身寄と

が来ればいいといふ具合にちつと堪へてゐるうちに、夢に惱まされる人がただ刻々の現在のために精一ばいでその過去は一瞬で埋没してしまふやうに、彼は江森清山のことなどはもう思つても見なくなつてゐた。その清山が病氣が募つて来て入院してゐるといふ消息を不意に傳へたものはあの古本屋の小僧であつた。彼がまだ幽霊坂にゐたところに、屢彼を訪ねて藝術や思想問題の氣焔を彼に聴かせた事のあるあの古本屋の小僧であつた。

きやうめいな清山は何かちよつとした變つた事、例へば轉居とか小旅行をするとかそんな事でもある毎にいつも彼にはがきをくれるのが常であつた。或るクリスト敦の病院へ入院しなければならぬほど病氣の満ちてゐた清山は、病院からその事を幽霊坂の家へ宛て彼に通知してよこした。しかし郵便物や訪問者を豫想しなかつたし寧ろそんなものを避けてゐた彼は、幽霊坂から引越しをする時にも近所の何人にも轉居先などを教へては置かなかつたから、清山のはがきは彼の手には這入らないで清山の方へ歸つて行つた。その附箋のあるはがきを持つて古本屋の小僧は來たのである。清山はその舞ひ戻つて來たはがきの宛名の住所を消してその代

りに彼の妻の實家の所番地をそこへ新らしく記入してゐた。さうして序の時に、そこへ行つて彼の今度の住所を聞くやうにその古本屋に頼んだのである。「私のところへの手紙へそのはがきを封入して來たのですよ」と、その小僧は言つた。

小僧——と言つてももう一とほりの青年ではあるがしかしその男は清山のことをまるで仲間の人でもあるかのやうな口ぶりで囁をした。それに憑つて彼はその後の清山のことをはつきりと知つた。いつか赤本の原稿としてセンチシヨナルな海賊談の一部をこの古本屋の小僧の手を通して金に代へた清山は、この古本屋の小僧の友達の人でやはり或る本屋の番頭——その人は片手間に赤本を出版しようとしてゐる人から二十圓ばかりの前借をして、しかし清山はそれつきり海賊談のつづきを書いてよこさなかつた。

「たい清山は皆で何故ぐらゐ書いたのだね。その安原稿を？」

「五十枚足らずですよ」と古本屋の小僧は言つた。「それでは是非とも入用だといふので、私は無理にその友達からその五十枚足らずに對して二十圓借りてやつたのです。ところが先生その後

をちつとも書いてはよこさないでせう。また金を貸した友達といふ奴は、せいぜい僕位な年輩でもう小金の四五百圓も貯蓄してそれを元手に赤本を出して儲けようといふ奴なのですから、それに何れ文士の心持などに理解のある男ではなし、その二十圓ばかりの事を小うるさく言ふのです。僕も間へ這入つて困るものだから時時清山のところへ催促のやうな形で遊びに行つてゐたのです。清山氏はひどく恐縮をしてね、けれども恐縮するだけで一向書きさうにもないのです。と言つて別だん外に忙しい仕事があるのでもなく、何時行つて見ても布團のなかへもぐつたきり、それでもペンと原稿用紙とは枕元へ置いて、そのそばには今まで書いた自分の原稿やら或は活字になつた作品の切り抜き見たやうなものをひろげて見ちゃ讀み直してゐるのです。暗い部屋なのです。僕も何だか氣の毒になりましてね。……さう、さう、あの人は夏日漱石さんの手紙を持つてゐますね。先生いつか夏目さんのところへ原稿を持ち込んだ事があるらしいのですね」

「むかしだらう。知つてゐるよ、そんな事は、彼は清山がそんなものをこの小僧にまで見せびらかしたのかと思ふと痛ましさと腹立しさが白



のうちに自然とひとりで歸つてしまふだらうと、彼はその硝子戸を閉めきつて自分の姿をかくしたがそれでもやつぱり思ひ切れなくて土間に突立つたままで硝子越しに透いて見える黒い二つの影を見つづけた。しかしかうしてここに立つてゐては下宿の人が不審に思ふだらうといふ妙な氣兼ねから彼は思ひきつて自分の部屋へ上つてしまつた。けれども犬がいつまでも門口で彼を待つてゐるであらうと案ぜられて、五分も立たないうちにまた梯子段の中程へ下りて覗いて見た。彼等の影はやつぱり動かずに待つてゐた。このやうにして彼が三度目に覗きに行つた時にはやつと彼等は歸つてしまつたらしかつた。

醸し出される彼自身の氣持が堪へがたいので、今までのやうに氣なしに犬の頭を撫でに行くことは出来なくなつた。

或る晩のことであつた。妻が割合に早く——と言つて無論十一時は過ぎて居た——ひよつくり下宿へ來た。部屋へ滑入りながらいきなり言つた。

「フラテは昨日、深川から使が來たからやることにしましたよ」

「え」と妻の言葉は彼には唐突であつた。「深川」といふと——そんなところへ何目犬をやる約束をしたのだい」と

妻の答へたところに依ると、彼が近ごろ以前

のやうに犬のことには熱心ではないしもう飽きたのだと思へるから、それにあの手のやける犬どもを二疋までも飼つて置くといふことはむしろ母の手では出來ないから、それにいい貰ひ手があつたら一疋けよそへやつてもいいと彼自身も言つたではないか——成る程、さう言へば彼等を持て餘してさう言つたこともあるやうには思へるが、

「それにしても彼は言つた。『それは漠然と言つたことだ。なぜ貰ひ手があつた時に一た人相談をしないのだ。俺のものを何故勝手にくれ

てやつたりするんだ」

「それやああなたが悪いのですわ」とかの女が應じた。「ちつとも實家へ廻つて來ないからです。來たら相談をしようと言つてゐたのに。ちつとも寄りつかないのですものね。だから私に相談に行けと言つてゐただけれど私は忙しくつて來られなかつたのです。そのうちに昨日夕方から箱と車を持つて取りに來たから渡したのでせう」

「ぢや、なぜその時相談しなかつたのだ」

「朝早かつたからあなたがまだ寝てゐることは解つてゐるぢやありませんか……。やつてしまつてはいけなかつたの」

「やつた事がいい悪いの問題とは違ふ。なぜ人のものを預つて置きながら自分のものさうな顔をして何故無断でやつてしまつたんだと言ふのだ。二疋の犬は手がやけるさ。それ初から解つてゐるのだから、預つてやるといふ以上はそれだけのことは承知だらう。手がやけてうるさくなつたからと言つて、俺に相談もせずによつてしまつていいものかね。やるならやつてもいいさ。俺はただやる時に自分の手で飯の一杯も食はしてやりたかつたと思ふのだよ。ウフ、フ、フ。彼は自分の笑ひ聲がへんな調子で響くのに

いふやうなものは一人もないのださうですね。

牧師がさう返事をすると醫者と一緒にゐた事務員が「それならばともかくも二ヶ月間はこちらで預つて置きますやう。それから後は都合でこちらからでも取計らつて養育院へでも預けるやうにしませう——さういふ例もありますから」と言ふのです……」

「養育院へ？」彼は思はず口を挿んだ。さうして體を倚せかけた机の上の紙に意味のないガジャガジャの線を落書きしてゐた手を休めて、その言葉を話した相手の顔を見上げた。養育院といふ言葉に彼はひどく感動したのである。しかしその感動は同情から出發したものと全然別なもので、言はば全く思ひがけないしにかいにも自然に開展した物語に驚歎するやうな或はまた小兒が珍らしいものを見た時に目を見張るやうな感動であつた。けれども相手は彼のそんな様子などに注意しようともせずに語りつづけた——

「時に、あなたは清山氏は幾つだと思ひますか」  
「三十五六だらう」  
「ね、さうでせう。私にも三十六だと言つてゐたのです。それがね、ほんとうは三十八なのです。年を二つ懸値をしてゐるのですね。あの人は。——お醫者に問はれてどきまぎしながら、三十八、三十八とベッドに横つたまま小さな聲で叫んでゐるのです——」

清山が年を、それも二つだけ匿してゐたといふことはなるほど面白い発見ではあつた。けれども彼はそれを聞いて無邪氣には笑へなかつた。彼は今まで樂書をしてゐる紙の餘白へ大變念入りにスベンセリアン體の羅馬字を書きながら心持が妙にあぢきなく、さて少しづつ重苦しくなつてくるのに氣がついた……

彼はここへ轉住するやうになつた當座のうちには、妻の實家へ預けた犬を時時見にくことが慰めであつた。それほど彼を彼等は慕うてゐたのである。彼はしかし間もなく、さう度度は犬を見に行かなくなつた。もう犬を愛するやうな

のどかな氣持が、都會へ來てしまつて殊に今のやうな場合にはだんだん轉くなつて來てゐたことは確だけれども、彼が犬を見に行かなくなつたのにはもつと理由があつた。さうしてそれはやつぱり彼がそれほど犬を愛してゐたからといふことになる。——犬を見に行くと、妻の母は近ごろ陽氣のせゐでヒステリイを起してゐて彼

を捉へてはよく愚痴をこぼすのを、彼はいい加減に聞きながして歸らうとすると彼の後を追つて、きつと二足とも樂しさうについて來た。もつと氣輕な時の彼であつたらこの無邪氣なものの爲めに少しぐらゐは一緒に散歩をしてやる氣持にもなれるのであらうが、目に見えない重いものをちよつと振り返つて見るだけであつた。彼等は彼をその下宿まで送つて來た。彼がその門口のガラス戸を開けるのを彼等はけんさうな表情で見上げた。主人と別れ別れに仕込んでゐることの悲しさをものを言はないものが語つてゐるやうに彼には感ぜられた。この犬どもは彼がそんな家のなかへ這入つたのを見ても直ぐには引返さうとはしなかつた。彼等は彼の下宿の戸口に坐つたまま立去らなかつた。その黒い影が磨硝子を通して見えるのが彼には氣になつた。

今閉めた硝子戸をもう一度開けて、歸れといふ命令の意味で彼が手を振ると、犬どもは飛び上つて尾を振つた。立ち上つて歸る姿勢をしながらも彼が戸のなかから出て來ないのを見ても彼は彼の顔を見上げつづけてまた再びもとゝころへ尻を据ゑた。彼は犬どもを追ひ返すことはもうあきらめて、彼の姿が見えなくなればそ

ながら、どんな鎖たか知らないが頸にそんな邪魔つけなものを曳き摺りながら、田舎そだちで一たいに舞香をひどく怖ろしがる傾向のあつたフラテが人やさまざまな車や或はもつと強い犬などに脅かされながら、いつ深川から逃げ出したか知らないが恐ろしくは夜も寝も迷ひながら一途に歩きつづけて来たフラテ、あの尖つた鼻を地面にすりつけながら知らない地上を迂路迂路と歩いてゐるその形。その心持。——彼が下宿から出てその泥濘の道を一目見た時からそんな事がひとりで思はれながら、それを思ひつづけて歩いた。彼等が家に近づいた話聲でレオは彼等を迎へるために飛び出して来たけれども、フラテの姿は見えなかつた。しかし木戸のところまで来たときと違ひ體つきのフラテは家の入口の前の日向に横倒しにされたままのやうな形で死んだやうに眠入つてゐた。なるほどその身近くには御飯一つぶ残さずに食べた空の大皿が二つあつた。犬を呼び起しさにする妻の母を押とどめて彼はしやがんだまま、ただちつとフラテを見入つた。それからそつとフラテの肩に手を觸れた。フラテは一種野蠻のやうな狭さで目を細く開けたが、自分の體に觸れてゐる者が彼であつたのを見るとその目をぱつちりと明

けた。それから首を曲げその彼の手をしきりに紙めた。半分起き上つたやうなその姿勢が窮屈さうに見えたから彼は手でフラテをもとの横倒しの姿勢に押し倒して手をフラテの口のところへ當てて紙めさせてやつた。フラテは横になつたままで尾を振つて地面から塵を掃き上げた。「狡い奴だよ。大儀なものだから起きようともしない」さう妻の母が言つた——いかに可憐といふ調子で。彼は黙つてもう尾を振らなくなつていつの間にか再び眠入つてしまつたそれほど疲れてゐるフラテをいつまでも見入つた。

彼はその晩、幾十日ぶりかでものを書いて見る氣になつた。それは「大」といふ題のスケッチで——

（或る厭世家が言つた。）

私は無論別れた妻のことも思ひ出さないではないが、しかしかの女に今逢つて見たいと思つたことは一度もない。ただその女と一緒に飼つたことのある一疋の犬が今どうしてゐるか、どんな風になつてゐるか、それが無性に見たくて仕方ないことがよくあるのです……

彼はそれだけを一度に書いてあとはもう書けなかつた。「私は無論別れた妻のことを思ひ出さないではないが」とさう空想的に書き放した文字に誇張がないだらうか。自分として眞實でなくはないだらうか。そんな彼自身まだ経験したことも無い心持を考へ初めると、その文句にさまざまなかだはりが出て来てこのスケッチはこれ以上もう書きつづけれなかつた。——大に一疋を人にくれてやつただそれだけの事でこんなに心が動かされる自分、またちよつと涙を溜めてゐる妻の目を見ただけで吐鳴ることも出来なくなるやうな、そんなセンチメンタルな自分が、たとひ理性のなかにどんな自由な思想があつたからと言つても、妻といざ別れるといふ段になればどんな氣持がするかも知れず、また一旦別れてしまつてからでも、別れた女だといふただそれだけの事から却つて戀戀としないとは保證出来ない自分である。實際、世の中には一たん別れてしまひながらも通りになる夫婦といふものもざらにあるのだから……彼には、不用意に書き出した彼自身の文句が彼の胸のなかへそんな風に複雑に反響した。

何もかもその時になつて見なければ判るものぢやない——彼は小うるさい自分の例の考へ方



氣がつきながらふと何かが自分のうちにあるものが押し殺されてゐるやうな聲だと自分ながら氣がついた。そのヒステリックな笑ひに氣がついたのかどうか彼の妻は言つた。

「何といふさびしい笑ひ方をなさるの」

「馬鹿!」危くさう彼は吐鳴らうとした。しかしそれよりも早く、その芝居がかりな厭味な言葉と一緒にかの女がちりと彼に濺いだ一瞥を彼が見返した時に、どういふわけだかかの女の

目のなかにも涙が宿つてゐるのを認めた。それを見るに彼はかの女を吐鳴りつける氣がなくなつた。しかしそのいらだたしい氣持は決して直つたわけではない彼は、それつきりもう口を利かなかつた。新しい話題を捜さうとさへ思はなかつた。一たいひとくお喋りな時のある彼は、近ごろでは全く人と口を利くことが嫌になつてゐた。ただ彼はわけもわからずに泣いてゐる妻を不氣味さうに見ながら、あの田園の風景をひよつくり心に思ひ浮べてゐた。その田園の景色のなかに自分と歩いてゐるフラテのことを彼は思つてゐた。

「いいよ」と不意に割合に優しくしかしひとり言のやうに彼は言ひ出した。「俺はこれからどういふ風に轉轉とした生活をするかわからない

のだ。大だつてああ可愛くなつて見れば足手まといだからね。何れやるものなら早くやつた方がいい。——そのうち一度、その深川とやらへフラテを見に行つて来てもいいな」

かう優しく言つた言葉の自分自身に及ぼす作用からであつたかも知れない。彼の心のなかに珍らしくも柔和な氣持が滾滾と湧いて來た。それを自分自身に感じながらも彼はやつぱりただ押し黙つてゐた。

そんな喉があつてから二日目の朝であつた。

彼は朝のうちに自分の部屋へ闖入して來たものがあるのを口を覺した。

拳雄、拳雄と彼の名を呼び立てながら這入つて來たのは妻の母であつた。かの女はひどく昂奮した調子であつたが、「さあ早く起きてちよつと来てごらん。フラテが歸つて來たのだよ。ひとりで歸つて來たのだよ」よく聞くと、その朝

つい三十分ほど前にフラテはひよつくりと歸つて來たのであつた。頭には噛み切つた鎖を半分ほど曳き指つて、その鎖はもとより、體中泥だらけになつて木戸からひとりのつそりと這入つて來た時にはまあどんなに驚いたらう。あまりいぢらしいから御飯をやる、いつもの一定分を一息に食べてしまつて、改めてもう一皿やる

とそれも直ぐ食べてしまつて一しきりかの女の體のまはりをはまり歩いて臺所の板の間まで上つて來たりしたが、今は入口のいつものところへ横になつてぐつすり眠入つてしまつた。フラテを迎へたレオまでがその同じ場所へ並んで寢て、かの女が外へ出る時にもいつものやうに従いて出ようとはしない——あまりいぢらしいからお前に見せようと思つて起したのだとかの女は言つた。彼の妻の母であるこのヒステリックの女は上品では決してない代りにひどく單純で

もともと動物が好きであつた上に、その大がそのやうにしてひとり自分の家を慕つて歸つて來たといふことを少女のやうに無邪氣に喜んでゐた。さうして彼に起きて見に行くやうに迫き立てた。

フラテが泥だらけになつて來たといふとほり外へ出て見ると路はひどくぬかつてゐた。その泥濘が雨あがりの朝十時ごろの太陽の下に光つてゐた。何でも前日は雨がふつてその上夜になつてからは櫻の花時によくある強風が吹き募つてゐたことを彼は思ひ出した。そんな時にびしよびしよと雨に濡れながら深川からここまで、と言へばこの大都會の果から果までであるが、その遠い見知らない道をあちらこちらとたづね

「だがまあ、考へて見給へ……彼の笑ひ聲はまたつづいた。久能が西郷隆盛と紳名をされてゐるのはその男性的氣質からだけではなくて、二十貫もあらうかといふずんぐりした體格にも原因してゐた。ただひよる長いだけで十二貫あるなしの彼に、久能は自分の着物を貸せようと言つたのである。「まあ考へて見たまへ、君のそのづう體をさ。西郷隆盛の着物をこの僕が着られるか」

「アツ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」久能も初めて氣がついたといふ風に例の笑ひ聲で笑ひ出した。

「君は親切はあるが、どうも空想力は無いね」さう非難するやうに言つた彼の言葉は、彼としては久能に對するその瞬間の深い親愛を表はさうとするものであつた。その言葉に對しても久能はただ、「アツ、ハ、ハ、ハ、ハ」といふ腹の底に響くやうな笑で答へただけであつた。

茫漠として重厚なさうして而もこまやかな感情を解してゐるこの友達に、彼がもつと何か語りさへすればもつと慰安を彼に——たとひ何等意味のあることを答へなくともただその自然な態度によつただけでも十分に、慰安を彼に與へるだらうと彼は考へた。さうしてこの太つた大男の友達と見すばらしく肩を並べて歩きながら

彼は、自分の妻に對してこの日頃抱いてゐる感情をこの友達に打明けたといふ氣持が湧き立つた。自分の苦しい氣持を人に洩すまいとすることは彼のやうな性格にとつては見えでもあつたしまた道徳でもあつた。しかしこの晩久能に對して彼は危く見えと道徳とを打捨てさうになる自分を感じた。彼等の歩いて行く細い坂道は暗かつた。彼は自分の感情を洩したいといふこの切望はこの暗さの誘惑だと思つた。彼はそんな暗い路を早く通り抜けるやうにと自分で先に立つて早足になつた。それから久能に言つた——「おい、其進會のイルミネーションの方へ行かうよ」

ほんの一瞬間であつたが彼の態度はそれほどあの鈍感な久能にさへ怪まれたほど目立つたものであつたと見える。眩しい光のなかにこみ合つてゐる群衆のなかへ突立つた彼を見て久能は言つた。

「何だい？ どうしたんだい？」

「いや、何。なんでもない——彼はやつと我に返つたやうに再び歩き出した。ちよつと知つた人を見かけたものだから——聲を懸けようかと思

ふうちにどこかへまぎれ込んでしまつた——彼は半分の口で嘘、やうにさう答へた。實際、彼はちよつと知つた人を見かけたのだ！ 女、しかも外の女ぢやない彼自身の妻だ。——三十ばかりの春の岡抜けて高い男、その男があまり春が高いので彼はふと何氣なくその方を見た瞬間に、その男の向う側からその男の顔を見つけた女の顔が目にとまとうつた。

「おや！——と思つた次の瞬間にはその女の顔は再び男の體のかげになつて、彼等は人ごみのなかへ、その男の帽子だけが群衆のなかに高く目立つてほかのものは遠く見えなくなつてしまつた。ついで人の頭を三十とはへだてない近きであつた。それは一瞥しただけでは正しく彼の妻の顔であつた。それを確める間はなかつたけれども瞬間的印象はどうしてもそれに間違ひなかつた。それがもしかの女でなかつたといふのなら、彼はこの群衆の真中で妻よりも明るい人工光線の下でかの女の幻を見たときより外は思へない。それにしてもかの女は淺草劇場を休んでゐない限りは未だそこにあるなければならない時刻ではないか……

「久能、もう何時だらう」

「え？ 時間か？」久能はさう答へながら懷中

を一蹴しようと思つて自分でさう結論をつけながら思ひつづけた——それにしても記憶力などといふものは何の爲めにあるのだらう。また何時まで消えずにあるものだらう。たかが一年ほどの間食ふものを與へられたかと言つてあれほどまでして元の家へ歸つて來なければならぬいフラテ。自分の生活にも適應しなくなつたことなどを何の用があつていづまでも記憶してゐなければならぬといふのであらう。そんな事をいつまでも覺えられてゐては切なくてしかたがない。——犬の記憶もさうだが、人の記憶だつても同じことだ。

「例の新聞社にゐる知り合ひが社用で九州方面を一ヶ月も旅行して留守だつたのがやつと歸つたから君のことを話した。ともかくも君に會はうといふ事だが、それより前にもう一度僕の所で打合せしよう。僕はいつでもうちにゐるから夜分にも遊びに來たまへ。なるべく早い方がいい——さういふがきを受取つた彼は、その日の晩に久能をたづねた。久能は彼に向つてその男にいつ逢ひに行くかと尋ねた。彼はいつでも行かうと言つた。久能は前から用意してあつた

らしい紹介狀——秦龍太郎氏に宛てたものを机の抽斗から取り出して彼にくれた。その外には打合せのやうなことも別になく、久能は彼に大變うまい菓子を食べせた。それから例の卒業論文はメレデイスにすることに決めて見たが、難しくしていけないと言つた。暫く文學上の話をしてゐたが久能は散歩をしようと言つた。彼等は暗い坂道を池の端の方へぶらぶらと歩いて行つた。喋りくたびれてゐた彼等は黙つて歩いて居た。ちやうど共進會の夜間開場のある日と見えて、その建物の上あたりの空がひどく明るく煙つてゐるを見上げて歩いてゐる彼に、久能は不意に言つた。

「ね、君。——これはつまらない事だが、新聞社へ行くにはやつぱりちよつと身装でもこしらへて行つた方がいいのだが、もし何なら、その、何か僕の着物でも着て行つちやどうだい——」

久能の言ひ方はひどく遠慮さうな恰も恥かしい事を切り出した人のやうな口調で、早口であつた。久能の打合せといふのはこの事で久能はそれを手紙で書きにくくもあつたしそれに今晩だつて直ぐにそれを言ひ出し兼ねて居たりだらうといふ事が彼に直ぐ感ぜられた。

「有難う」

彼はこの友達のデリケートな言ひ方に感謝しながら、ふと、「清山の夏羽織」を思ひ出した。それから自分ではもう氣がなくなつてしまつてゐたがそんなに見るからに窮迫したやうな身装をしてゐたかと思ふと、急に身のまはりが顧みられた。

「有難う。しかし、僕も質を出しきへすれば何か着る物がありさうだが……彼はさう言ひかけたが自分の返事が相手の優しさに對していくらか反抗的な見えに響くかと感ぜられたので……が、しかしそれも果して出せるかどうか、出せないやうなら君のを借りる事にしよう」

「ああ然うか——」

久能は事もなげに、自分の言ひ出した事が別に相手の氣持を傷けなかつたのを安心したやうに答へた。彼はそのわだかまりのないしかしデリケートな心持を知つてゐる友達を彼は今更のやうに闇を透して見つめた。その時、彼は自分にも思ひがけなかつたやうな大きな聲で笑ひ出してしまつてゐた。そのあまりに突然な笑ひ聲が久能には解せなかつたのであらう。久能は少しぼんやりした顔つきで言つた。

「何だ。急にそんなにうれしそうに笑ひ出したりしてさ——」



に。君に呼びかけられて面くらつたぜ」

「ふむ、お前吉澤知つてゐたのか。おれはまたそんなことを知る筈はなしよ——」ゴドさんと呼ばれたその男はさう答へた。さうして彼等にとこといふこともなしに然し申し合せてやうに同じ方角へ歩いて行つた。

ゴドさんと不思議な名をもつて呼ばれる男はその名のとほりやはり不思議な人物であつた。

もう五十には間もないであらう。それとも五十五かも知れない——この男の緋の袷にハンティングを着てゐる老書生のやうな風采からその年齢を推すことは難しかつたし彼はこの男にまだ年を聞いた事はなかつたからはずきりしたこと

はわからない。その年ばかりではなくこの男がこの年になるまでどんな事をしどんなことを考へて暮して来たかといふことも彼はよく知らない。しかしこの年齢の人間としては高等な教育をも受けてはゐたし而も數學には天才を持つてゐて學校を出る時には首席だつたといふ噂である。若い頃には梧桐と號して文士や詩人などの仲間に加はつてゐたがそれで身を立るといふ

風にはならなかつた。さうして世間的に出世をして行く仲間とはいふも離れてしまつて常に青年とばかり遊んでゐた。さうしてその梧桐といふ

ふ號をいつの頃からか悟道人、或はまた誤道人、又時には「御當人」とも洒落れて隨筆のやうな雜文のやうな一種の社會論評——といふよりは浮世評論とでも謂つた方がその感じを表はし得るやうな文章を書いて、決して歡迎もされない雜誌社などにそれを持ち廻つて暮してゐた。

彼の文章のなかに譏笑や冷罵は卑俗なわりにアマイものでしかし無邪氣で、讀んで見ると悟道人はどんなに人柄を落して見ても決して働きの無いけれども彼の氣質のなかに世俗的精神的賤民と少しばかり違つた何ものかのニュアンスがあつた。人は決してこの人に尊敬を仕拂は

ない代りにはただ惡意のない軽い微笑を以て、その人の爲めには喜んで多少の迷惑を忍んでやる氣にはなれるのであつた。人は彼のことを初めは正しく悟道さんと呼んでも、だんだんとその音をつづめてゴドさんと謂つてこのへんちきりんで少しばかり何となくユウモラスな呼

びかたの方がこの人に似つかはしいことを感じたまものと見える。今ではこの男のことを誰でもゴドさんと呼んだ。このゴドさんと彼が知り合ひになつたのも彼がまだ學校に居た頃であつた

が、ゴドさんは文學に志してゐる學生たちの集合のなかへよく無断で這入つて來た。それか

ら毒のない惡罵で文壇の人たちを一蹴し去るやうな口調を青年たちは別に邪處にはしてゐなかつた。ゴドさんは恰も正當な權利のやうな顔つきをして、屢彼等から小遣錢を徴收した。ゴドさんはただ「電車賃！」と言つて手を突き出して人々が出さうが出すまいが同じやうな表情で、その怪傳な顔つきを頷いて見せた。彼もしばしばゴドさんに電車賃の徴收もうけたしまた下宿への訪問をもうけたものであつた。然しゴド

さんはもう文學青年にも飽きたのかそれとも飽かれたのかこのごろでは新興の藝術的な芝居と稱する小劇團の樂屋へ入り込むことを道樂にしてそんな樂屋の地廻りになつてゐた。その噂は彼も時時彼の妻から聞いて知つてゐた。ゴドさんは淺草劇場の或る女優にのぼせて男樂のやうにしてゐるなどといふ者さへあつた。

ゴドさんはその年までずつと獨身だつたのである……

さつきは「女房を迎へに來た」と浴せかけたゴドさんは、二人きりになると人並な素直なことを言つた。「どうしたい。暫く會はなかつたぢやないか。そこで一杯つき合はないか」

「うむ、彼は氣のない返事をして、しかしこの男ともう少し一緒に居たならば自然、かの女の

時計を持つてゐると見えてちよつと自分の胸も  
との方を見てから一十時少し前だ。十分か十五  
分か。——僕の時計はあてにならないが、夜間  
開場は十時までだから」

「まだ十時前だね、ぢや僕はもう失敬しよう。  
そんな時刻ならちよつとまではつて行きたいとこ  
ろがあるのだ」

彼はさう言つて、群集のまばらな方へ出なが  
ら久能をまぐやうにして別れた。山下の電車通  
りへ出ると、動き始めてゐる電車へ飛び乗つた。

十一時までは小屋にゐなければならぬと聞いて  
ゐるかの女が、もし今日小屋を休んだのでな  
かつたならばまだ小屋にゐる筈だ。さつき見か  
けた女が果してかの女であつたかどうかを知る  
上からは、ともかくも小屋へ行つて見るのが一  
番いいと考へた彼は、かうして浅草行き電車  
に乗つてはしまつたものの、彼が浅草へ来てし  
まつた時には小屋の樂屋口へ自分の妻を捜しに  
行かういふ勇氣はもう無くなつてゐた、彼はそ  
の小屋の樂屋の前を三度か四度往つたり來たり  
した。それから表へまはつてけばばしいペン  
キの畫看板をぼんやりと見上げてゐたがもう一  
度樂屋口の方へかへつた。それから樂屋口に坐  
つてゐるであらう頭取の吉澤のことを考へると

彼は中折帽を日深に冠り直した。彼はすたすた  
と脇目もふらずに、わざと勝手を知つた者のや  
うに這入つて行つた。さうして樂屋口へ番人の  
やうな場所にとつかりと坐つてゐる中老の男を  
認めた時に、なるほどこれややつぱりあの根津  
の素人下宿の吉澤だなと思ひながら、しかし彼  
は知らぬ顔をしてその男に尋ねた。

「瀬川瑠璃子はまだ居りますか」  
さう言つて彼は相手は顔を見られないやうに  
うつ向いてしまつた。

「ええ……と、瀬川瑠璃子さんと……」

相手はちよつと考へ出さうとでもするのか、  
それともそんな質問をうるさがつてゐるのか、  
或はまた何か胡散に感じたのか、ともかくも  
言葉をちよつと區切つた。彼は相手から顔と見  
つめられてゐるやうな氣がすると同時に顔を急  
に燃えるやうにほてつて來た。相手はきつと彼  
を、その女優を讚美してゐる男か何かだと思  
ふかも知れないと感ずることが彼には擧つたい  
恥かしいその上に恥辱に似たやうな氣持であ  
つた。

「瀬川さんですか」相手は思ひ出したやうにも  
う一度聞き返してから「瀬川さんはもう歸りま  
したよ」

「歸つたのですか。——いつでせう」

「もうよほど前ですぜ」

「一時間位ですか……」

「ええと、あの人の出る幕は九時ぐらゐがおし  
まひですから一時間ももつと前でせう」

彼はそこをところをもつとしつかりと確めた  
かつた。しかしもう今まででさへも立ち入つて  
聞き過ぎたやうな氣のしてゐる彼はそれ以上を  
聞かうといふ言葉が出せなかつた。

「あ、然うですか、これはお邪魔……」さう彼  
が言ひかけた時であつた——

「おい尾澤！ 尾澤！」

突然に彼の名が呼ばれたので彼はぎくりとし  
た。しかしその聲は二の太刀を浴せでもするか  
のやうに續いた。「何だい。女房を迎へに來た  
のか？」

のつそりと舞臺うらの方から出て來たその聲  
の主を、彼はその場から引き摺り出すやうに誘  
つて、彼自身は逃げるやうに吉澤の前を立ち去  
つて來た。やつと彼等が外へ出た時に彼は、あ  
の彼をあんなにどきまさせさせた無作法な男に言  
ひかけた。

「おい、ゴドさん。困るぢやないか。おれや吉  
澤とは古い知り合ひだが知らん顔してゐるの

「アツ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

その彼の笑ひ聲が、すべての興行物がハネて人通りの杜絶えた活動小屋の通りに反響するやうな氣がした。足もとにいろいろのビラ紙が捨てられて白く散り敷いて、この筆查の巻にもう人が居なくなつてただ光だけが吉よりも眩しいものがその空虚を一層寂しくした。何氣なくそれとも無意識にはそれと氣がついてゐたかも知れない——見上げた彼の目に入つたものは、偶然にも毒毒しく赤い淺草屋場の看板であつた。その毒毒しさが日に滲みでもしたかのやうに彼の目から涙が滲みださうになつた。彼はゴドさんがうしろから何か言ひかけるのには耳を假さずに一人ですたとと逃げるやうに歩み出した。

「ぢや、二階の應接間で待つてゐて下さい。」

受付の老人は口にくはへた煙管を放さうともせずまた彼の顔を見返さうともせずに冷淡な調子でさう言つた。さうしてこの老人は卓上電話機をもとの場所へかへしながらやや遠いところの壁にある杜時計を眼鑢越しに覗いてから誰か彈るところもないやうな欠伸を一つした。彼は

その欠伸を聞きながら、また老人と一緒に見た時計は四時に二十分前だつたから未だ三時から四時までといふ先方の指定に遅れなかつたことを知りながら、泥だらけの階段を上つた、威勢よくがたがたと下りて来た一人の社員らしい男に路を譲りながら。その階段を上ると應接間といふのは直ぐ左手に自然と目につくところにあつた。扉が閉つてゐたから彼は開けようと思つてノックに手をかけて二寸ほど開けたと思ふと、「使用中——」と内から大聲で吐鳴られた。彼は遂方に暮れてしばらくその廊下に突立つてゐた。しかしその隣にもう一つ第二應接間といふのがあるのに氣がついて今度は恐る恐るその扉を隙けて見ると、そこには誰もゐないやうであつたから彼はそのなかへ這入つて行つた。一つの小さな白木の臺があつてそのまはりにやはり白木の腰掛が三つあつた。そのテーブルとは言へない臺の上にはつい二三日前にでもこぼしたのか黒黒としたインキの汚點が臺から床の上までこぼれ傳うたあとがあつた。さうして臺の上には小さな鐵製の煙草盆があつたが火もマツチもなかつた。この部屋の直ぐ近いところにもその機械が動いてゐるのか輪轉機の響きのためにこの部屋の床はぶぶるとふるへてゐ

た。高い天井の隅にぶらさがつてゐる蜘蛛の巣もふるへてゐた。彼はきよきよと部屋を見廻してからその腰掛の一つに腰を下した時に、閉めてある窓のガラスの隙接した建物の壁のために暗いなか自分の顔とカラとがぼんやり映つてゐるのを見つめた。さうしてさつき町の角のショウウインドウの鏡に映し出された見すばらしく滑稽な姿をまざまざと思ひ出して、こんな洋服などを質屋から出して来て而も氣が利いたやうな顔をしてゐる妻の母がもう一度腹立しくなつた……と、その時、部屋の扉が蹴り飛ばされたやうに元氣よく跳ね上げられたので彼は殆んど反動的に立ち上つてそれから相當に丁寧にお辭儀をした。

「あなたが尾澤君ですか。私はこの秦龍太郎です。一部屋に這入つて来た人は彼の向側にあつた腰掛へ腰を下ろしてからゆつたりした調子でさう言つた。さうして這入つて来た時からくはへてゐたらしい葉巻をしきりに吹し初めた。この人は見たところ三十三から三十八までの間らしかつたがいかにも健康さうに、又人生には何一つ足りないものが無いといふ様子で肥つてゐた。肥つてゐたから暑いのであらう、まだ二週間は以上は早いとは思はれるやうなお召の單衣羽



彼の妻の消息が判るだらうと思つた。「つき合つてもいいが、僕は金を持つて無いよ——」

金はあるよ——おら、あちゃんと夢助から捲き上げて来たからな。クツクツクツ——ゴドさんは怪鳥の聲つやうな笑ひ方をした。夢助といふのはこつ男が男衆のやうになつてゐると言はれてゐる女優の夢子のことであらう。

「おれもたうとうゴドさんにおごつて貰ふやうな身分になつたかな——」或る一軒の小汚いバアへ進入しながら彼がさう言つた時、ゴドさんはどもりながら吐鳴つた——

「バ、バ、バカ！」

それはテーブルにゐた人たちが皆その方をふり返つて見たやうな大聲であつたが、ゴドさんは無調忽つたわけではなく、反對にゴドさんがこのバ、バ、バカ！を連發するのは彼の機嫌のいい事の證據であつた。

彼はひどく酔つぱらつてしまつた。もともと酒のきらひな彼のくせに二十杯も飲んだらう。酒豪のやうな顔つきをして酒毒で頬をビクビクさせてゐるゴドさんも飲んで見ると酒量はごく少いと見えて二人で四本の酒に呂律が廻らなく

なつてゐた。さうして「おら、いにはどうも女と

いふものがわからねえ！」と言ふやうなことをくどくどと喋り立てながらよろよろと倒れさうであつた。彼も心のなかで言つた。「おれにも

どうも女といふものは解らない。……あんなに世話女房だつた奴がいつの間にか變りがした

のだからその變化のあとには實に奇妙なほど解らない——」彼は考へつづけた。さうしてさつきゴドさんがまだあんなに酔つて仕舞はないうちに

彼に言つた言葉とあの實に黄色いきたない齒のある口がもぐもぐする形とを一緒に思ひ浮べた。「おら、あ第一お前が氣に入らねえ。荷も尾

澤衆雄ともある者が、な、女房に女優をさせて自分がのりくらりしてゐる了見が判らない。

「髪結ひの亭主ちやあるまい。おら、あお前に逢つたら忠告してやらうと思つてゐたんだ。女房に女優をさせるなんてこたあよせやい。

「女優たあ何だい。花見踊たあ何だい。赤い禪を女が見せびらかすのが民衆新舞踊か……」その言葉に對して彼は、決して女房には養はれてゐない事や女優をしてゐるのは女自身

の道樂だといふやうなことを辯明したら、その時ゴドさんはそれ以上は何とも言はなかつたが、ゴドさんの彼に忠告したかつた事は「女房

に女優をよさせる事」ぢやなくつて、「あんな女

房はよせ」と云ふ事であつたかも知れない、さうして若し彼がゴドさんの言葉を直ぐその意味に解したとしたら、ゴドさんは自分がそんなこ

とを彼に言ひ出した理由として何か具體的なことを——あの女の樂屋のなかでの評判でも彼

の耳に入れたかつたのであつたかも知れない。それに相違ない。この男は何もかも氣がついて知つてゐるのだ。——「ゴドさん」とさう急

に呼びかけて——と彼は酒のためにめぢやくちやになつてゐる頭のなかでふいと空想して見た

「ゴドさん」とさう不意に呼びかけて、彼自身がこの自分の親父ほどの年をした老友の手を急にしつかりと握つて一教へてくれ。はつきり

言つて見てくれ。君はおれの女房の事は皆知つてゐるんだらう。さあそれを言つて見てくれ——とさう數願したら、ゴドさん——「かどの奇人

になりすましてはゐるが、元來はやはり一種のセンチメンタリストにすぎないこの年取つた方の酔つぱらひはどんな様子をしてどんなことを

言ふだらう。  
「アツ、ハ、ハ、ハ、ハ」  
彼は不意に久能の笑ひ聲を耳もとに思ひ出して彼自身もその通りに笑つて見た。

くも申し込みがあるやうなわけで。無論その人選は私が決めてもいい筈にはなつてゐますが、どうして事實はなかなか手帳には行かないの、何しろこれだけの社になつて見ますと姑小姑が多いものだからその方面からの推薦があつて見ると、それが何かひどく不適當な理由のある人でない限りは、私が自分の好きな人を入れたいといふだけの理由からぢやどうもさういふ有力者からの紹介を無視してしまふわけにも行かない事情がありますよ。それに近ごろの社の方々針ぢや成る可く大學出の人を探らうといふ考へもあるらしいので、そんな肩書でも名刺の上にあると例へば訪問でもしたやうな時に何かと都合でもいいやうなわけでせう。――が、私としては無論必ずしもそんな方針などには重きを置かないで専ら實力を重じたいのです。多少とも文藝の嗜がある人を選んで所謂三面記事なるものをもつと高尚な清新の筆で書いて貰ひたい希望も十分あるので、それにしても記者生活といふものに何か趣味なり或は自信なりをお持ちでせうかな？ あなたは？」

「趣味？ 自信ですか？ さあ、まだやつて見ないから何とも申せませんが一彼は少々狼狽し

ながらどうしてだか急に顔が赭くなるのを感じた。一ただ、私、その今、食ふに困つてゐるだけですよ。困らなけや新聞記者には多分なりまします。どうも自分でもあまり適任とは思へないのです。が、人のすることだから出来るでせう。困つてゐるのでから何でも職業でさへあれや精一ぱいはやつて見たいと思ふのです

が――

「成程、ハ、ハ、ハ」と相手は意味のない笑ひ方をして、しかしそれだけではあまり無愛想だと思つたのであらう、意味のあるやうな無いやうな言葉をつけた。一いや、反つてさういふ人もいいですよ一彼は帶の間の時計をちらし覗いて見て、今も申し上げるやうなわけですから、きつとあなたに來ていただけるかどうかは判りませんよ。何にしても私から社長へ推薦するにも必要でありかたがた一つ、形式的ですがともかくも履歴書を出して見て下さい。いや、私もせいぜい御努力はします、久能君からの言葉もありますからね一秦氏はそこで身づくろひをしながら今までの明快なそのくせどこを捉へていいか結局わからない、しかし秦氏はこの社では決して無勢力な人間でないといふことは實にわかる話ぶりから急に氣を換へるやうに氣

輕に言つた。奥さんは芝居の方ですから、たしか。あなたはどですすお好きですか――實は今日私も義理で見物しなけやならないものだから一秦氏はそこでゆつくりと立ち上りながら再び改まつた口調で言つた。「では一つさういふ事に願ひますか」

彼も相手と殆んど同時に立ち上りながら黙つて禮をした。肥つた立派な男のうしろから彼はひよるひよると部屋を出た。

街に出た彼は無意味な壓迫から初めて逃れながら、今までは否の尖で吸つてゐた煙草もどうやらやつと深く吸ひ込めるやうな氣がした。さうして自然とつい十分間前の自分を回想して見ると、いかにもまづい永職者で自分があつた事に氣づかずにゐられたかつた。返事をすべき時にぼんやり外の事を考へてゐたり、必要もないのに正直なことを言つて顔まで赭くしたり、あれでは全く自分がどんなに新聞記者などといふものに不適任だかといふことを紹介するために、その事の爲めに而も拙い仕立の舊式な襷だらけのモニングなどを着込んだ特欲しげな姿を曝しに來たやうなものだ。俺が若し――と彼は考へつづけた。――若し他が雇ふとしてもあんな男を、十分間前の自分のやうな男を自

織を着てゐた。その服装は彼などには見當のつかないもので所謂五分も隙がないといふこしらへで、またそれに負けないだけの貫目をこの人はもつてゐた。一たいこの男は月給をいくら貰つてゐるのだらう——彼はふとひどく世間的なことを考へながら相手の男の羽織の紐のあたりを見つめてゐた。彼は何と言つて話しかけたらいいか分らなかつたし今に向うから何とかいふだらうと思つてゐたのに先方はそれつきり何も言はないでただひどくいい匂のする煙をいつまでも吹してゐた。彼はどうやら自分がじろじろと見つめられてゐるやうな気がしてならなかつた。さうして彼はかう言つてやりたくなつた——「あなたは私がへんな形のそれも皺だらけのモノニングなどを着込んで來たのを見ていらつしやるのですか。私はこれを威張つて着てゐるわけぢやないのです。これや四年ほど前に拵らへたままそれつきり質に這入つてゐたのです。外にも着るものがあるのですが皆質に這入つてゐます。それに外のものは替いろなるものと相合して預けてあるので一つ抜き出すと高いものにつくださうです。念の爲めもう一度申し上げますが私は決して氣取つてこんなものを着てゐるのぢやありません。よほど氣がひけ

てゐるのです。それならこそ今もあの角の店の中で自分の姿をつくづくと見て來たのです。こんなことなら一そう久能の着物を借り着して來た方がよかつたのです。いや、あのよれよれになつた鎧仙の薄綿の這入つたやつを平氣で着てゐた方がよかつた位です。あなたはよほど着物に興味がおありになるやうですからこんなことを言ふのですが——彼はほんとうにそのとほり言つて見たかつた。——「少くともドストエフスキイのなかへ出る人物は平氣でそんな對話をおつぱじめる。そこが面白いところなのだが彼がそんな用もないことを考へ初めたころであつた。」

「ええ 久能君から電話があつたものだから今日あたり見えるかと思つて心待ちにしてゐたところでした」相手はそのちよつと永すぎる沈黙をうまい具合につくろつてくれて「で、久能からはどんな話でしたかね——」

「——彼はまさか、久能はあまりに汚い着物を着て行くと言つたとも、雇ふやうならば月給は當分八十圓と言つたとも言へないと思ひながら彼は漠然と答へた。」

「とにかく久能君は自分の代りに私を推薦して見ようと言つてくれたのです」

「さうさう。その事は久能からも聞きましたかね——」

「で、久能君は、一度あなたにお日にかかつて見たらいいだらうといふ事でした」

「あ。然うですか、成程——秦氏はそこで葉巻の最後の煙を深く吸つて、小さくなつた吸ひ残しを床の上へ無難作に投げてから「ぢやと言ひかけてまだ床の上で煙の出でゐる葉巻を立つて行つてフェルト草履でふみかけしてからまた座へ歸つて來た。ぢや、久能からもきつとお聞きでせうが、實は今欲しい人といふのは、私の直ぐ下に働いて貰ふ人なのです。ほんの二三ヶ月も見習つて貰へば後は私もすつかり仕事の責任をその人の働き次第ではお譲り出来るやうな人をですな——つまり社會部の幹部ともなるべき記者をですな。つまり最初の二三ヶ月は八九十圓ぐらゐを支給して後になれば百に三十圓ぐらゐにもなり、どこまでも重用できるといふ程の人を捜してゐるのですが、他の社のことはあなたは無論御承知は無いでせうが、こはそ

の點ではずつと社員を優遇してゐるのです。その代りには随分志望者も多ければ、從つて社でも人を入れる時には吟味をしましてね、今度でも二人だけ搜してゐるに就ても、もう三十人近



看護婦は今まで指を挟んで、掌の間に持つてゐたバイブルをその白い事務服のポケットへ收めて、かの女はその手で清山の枕もとにある小さな腰かけの上のもの、手帳から事物らしいものや薬瓶などを取除けてそこに彼の席を掃へようとするらしいのを、清山は軽い手つきで止めながら、

「いや、その、それは構ひません。さあ、尾澤君、どこでもそのベッドの一部分へお掛け下さい。腰かけは御覽の通りの代物ですからお尻が痛いです」

しかしその狭いベッドの一部分にもあまり適當な場所が無いのを見て彼は三步ほど動いてベッドの極の方へ腰を下した。

「これは全く思ひがけないことです。いやどうも有難う」清山は心からうれしいやうに彼を見つめながら「ほう」と例の聲を出した。「ほう、ひどく盛装をしてゐられますね」

「これですか」彼はコオトの胸のところを自分でつまみながら思はず苦笑した。御見舞ひだから一つ精一ばいのおめかしをしてね」その冗談を清山は半信半疑らしく笑つてゐるのを見て彼は言ひつづけた。「いや、嘘です。これには深い仔細がありましてね。實はその序に急に思ひ

立つて御見舞ひに來たのです」

「序でも何でも來て下さつたのは有難いですが、深い仔細とはどんな事です」

「いや、そんなことよりも、その後どんな關係です。御容態は」

有難う。一時はひどく諸君子を煩せたものですが、ここへ來ると直ぐよくなりましたよ。

我々貧民には薬はなかなか利き目がありまして歩行ですか。それがどうも不自由なので大部分も永久に駄目です。立派に癡人になつたわけです」清山は自分自身を冷笑するやうな言變を使つたけれど、彼の氣色のなかにはそれに就て別に感情を動かしてゐるやうなところは少しもなく十分に不静であつた。さうして彼が病院の生活はどうだと言つて尋ねて見た時に、彼は清山が病苦の劇しくない限りはここで全く満足してゐるらしいのを知つた。清山は第一にこの病院がある場所が静かないところ、その上にこの病院の建物もがしりしりしていいことなどを恰もそれが自分の新らしく手に入れた屋敷でもあつたかのやうな口吻で述べた。それから又紹介者の注意があつたのかどうか兎も角も、室の隅の比較的獨立したさうして窓に近い明るいところに寝てゐられることを喜んで

ゐた。「ね、御覽なさい。この窓にはいい眺めがあるでせう。川や海とどういふ關係の場所にあるのですかここから屋根の間に船の帆がぼつちり見えることがありますよ。ここへ來てから一週間目にやつと少しベッドの上に坐れるやうになつた時に偶然發見したことですがね。その後氣をつけて窓を向いてゐるとかうして寝てゐて外が見えなくとも、空の明るい日などには船の帆が通ることがわかるのです。――反射の加減が何かでせうか、ちらとたとへば鳥影が射すと言つた具合にですね。夜になると全くひっそりしますね。少し暗いですがでも本も讀めます。誰だか知らないが、夜になると枕もとで看護婦にバイブルを讀んで貰つてゐる人がゐますが、あの看護婦はいい聲なのだから、それが小聲で水の流れるやうに透明に聞えて來る夜の情調もちよつと悪くないです。我々老人をでもちよつとセンチメンタルにしますね。他の人も皆耳をすましてゐる様子です。あの看護婦は――ええ、この部屋の専屬らしいのですが――これはと言つて清山は自分の顔を指しながら、あれですが、親切なんで、それに閉さへあればしをらしくバイブルを讀んでゐるのです。さう、二十三四にも見えるが二十ぐらゐるすかね。い

分は採用しはしない。それにしても俺だつても三年も前にはもつと臆面もなく人に對するこゝとが出来た筈だつたのに、いつどうしてあまで間が抜けてしまつたらう。氣が利いてゐて臆面もない。それはいいことだか悪い事だか知らないが、こゝかゝもこの社會に生きるには必要なことだつた。さういふ有力な武器を俺はもう一つ失つてしまつた。自分が間抜けであつたと同じ程度で相手はいかに手際よく自分を斷つたか——斷られたものと無論彼は自分で思ひ込んでゐながら、でもひよつとするとまだ雇つて見るつもりかも知れないやうな氣もした。つまりそれほど巧に斷られたといふことになる。が、あのそれはそした場所であつていかにも事もなげに人生をやつてのけてゐる仲間に難つて自分はどうしてたとひどんな内容をにしろ一行の文章だつて書けさうだといふ自信は一つも無いし、また初對面のエライ人などを訪問させられた時の自分を想像して見れば、これは全く採用されない方がいい。履歴書——それは一たいどんな事を書き連ねるべきものやらも知らないが、履歴書などは無論用さずともいい。いやしかし折角さう言つてくれたものだから出して置いたつていい。そんなことは

どつちでもいい。といふやうなことから、それから少くともこの十日ぐらゐの間に田舎の地所で金を借りる運動にどうしても着手しなければならぬ破目になつてゐることやら、いつのまにか心は少しやけ氣味になつてゐてあの疑はしい女房の行跡がどうかして早くばれて同時に自分にも恥も外聞もなくなればいいといふやうなことやら、ひとりりで歩く時のいつもの癖として彼はそれからそれへと思ひ耽りながら、聖のすつかり崩れてゐる古靴のさきを見つめながら歩いた。空を見上げて何と今日に鬱陶しい雲が垂れさがつてゐることだらうと思つた。ふと思ひ出したのは一週間ほど前にあの古本屋の小僧から聞いた渚山の噂である。渚山はちよつと小説のやうに氣の毒であると思つた。そんな言葉で考へながら、S・L病院といふのはどの邊だかは知らないが何れここから遠くはないだらうと思ふと、彼はその小説のやうな渚山を病院へ訪ねて見る氣になつた。これは言はなければならぬ事だが渚山が若し小説のやうに氣の毒でなかつたら彼は多分渚山を訪ふ氣にはならなかつたであらう。彼は一たいがそんな男なのである。然らうだ。渚山を見舞つてやらう！」

彼は自分の思ひつきに満足であつた。さう感じ出すと渚山の性質を呑み込んでゐる彼は偶然にも自分のいかさまなモオニング姿がへんにうれしいやうな氣がして來た——「ともかくも、これや紳士の服装に相違ない。自分の年を二つだけ減してゐた渚山の奴は、紳士が自分を見舞つたことを他の人に對して名譽に思ふかも知れない」

兩側に並んでゐるベッドの間を、彼は自分を案内する看護婦の歩く通りに靜かに歩いた。物珍らしさに目を光らして彼を眺める病人の枕もとを三十も通り過ぎると一番奥のそれ故一番心に近いところ來た看護婦は、病床の上で振り返つて見ようとしてゐる病人に言つた。

「江森さんお見舞の方ですよ」

「江森君、僕です」

「やあ、これはこれは、渚山の聲は少しも衰へてはゐなかつた。それに豫想したよりもずつと敏捷に返事をした。しかし顔を向け合つた時に彼、自分の友人の顔色が上のやうなを見た。

書物は「天路歷程」であつた。

「ほう。看護婦がそんなものを貸してくれるのです」渚山は、彼がそんなものを見てゐるのに氣がついたと見えて、彼には思ひがけなくそんな言葉をかけた。「讚美歌なるものを初めて書いて見ましたが、なかなか面白いのもありますね、文學的に見て」

彼は何とも答へなかつた。さうして心中に渚山はそんなものを讀んでゐることを笑はれはしないだらうかと心配してそんなことを言ふのだと思つた。もう食事を終つたらしい渚山は、いつも残すと言つた御飯をきれいに片づけてゐた。それは蓋のないゆきひらを見れば一目でわかる。看護婦の注意に従つたのかまたベッドのなかへ横になつた渚山の枕もとへ、彼はそのベッドの片隅に狭く腰をかけた。さうして手にとつた讚美歌集を開くともなく開くと、或る頁が、そこがいつでも繰り開かれた結果ひとりでにそこが出て来るかのやうに自然に開いた。この書物にそんな癖をつけた人は渚山であるか、それとも他のこの讚美歌集を借りた事のある人であるか、それはわからないが、そのひとりであるに於いて來た頁を彼はちらと讀んで見た——「夕日はかくれて」といふ句で初まる歌であつた。

歌つてそんなものを見てゐる彼に對して渚山は話題を求めるやうに話しかけた。

「さうさう。その、あなたが盛裝をしてゐる仔細といふのを一つ聞かうぢやありませんか」彼は氣のない顔をして新聞社の一件を話すと渚山は何新聞だ、サラリーはいくらだといふやうなことをどうしてだか詳しく聞きたがつた。彼が體よく斷られて來たといふと誰に面會したのだと尋ねた。その人が秦氏であると聞くと渚山は、彼を慰めでもするかやうな口調で言つた。

「あの人に使はれたつて、どうしてあなたが一月もつとまるのですか」

「どうしてです」彼はちよつと好奇心を動した。「それにあの人をあなたは知つてゐるのですか」

「知つてゐますとも。尤も以前ですがね。——二十年も僕のやうなことをしてゐれば誰をだつて知つて來ます。それにあれや有名な人で、あれや給仕から仕上げた人で……尤もそんなことは無論その人の人格とは關係がない事です。が、それら私の『山峽の人人』のなかに出て來る西洋樂器製造所の主人の鈴木といふのがあるでせう。主人公の良太の如がその人の妾になつてゐる

のです。その鈴木は遊び友達に新聞記者があつて、その男の挿話として……」

「さう。思ひ出しましたよ。私生兒を孕んだ新華族の令嬢を、その親を脅して持參金つきで貰ふ人でせう。彼は、渚山がまたしても書かれざる傑作『山峽の人人』の梗概を話し出すのを、それ、さう話をひきとつた。しかし彼の豫防も何の效もなしに、渚山はやはり『山峽の人人』のうちのエピソードをもう一度一とほり話し直さなければ承知しなかつた——」

「……で、私の小説ではさうなつてゐますが事實は、華族の令嬢ではないのです。或る成金が孕ませた藝者です。その成金が飽きた女を、持參金つきで子供と一緒に貰つただけですが、それを貰つてしまふと自分は別に妾を置いて

——その妾を置きたいからその女を女房に貰つたのだなど悪口を云ふ人もあります。な、ともかくも貰つてしまふとその細君をひどく虐待するのださうです。しかもその女が離縁してくれといふと、秦氏は自分の女房の目前に手をつけて叱るのださうです。これは秦氏の細君から出た話ださうですが、皆は秦氏は女房を歸すと持參金も歸さなげやなるまいし、それよりはあの新聞社と密接の關係のあるその實業家に



や、ひとり差人の看護婦がゐますよ。時時廻診について來ますがね。――

もともと話好きな清山は、久しぶりに話相手を得たせいであらう、楽しさうに口を開いてほとんど一人で喋りつづけた。何時の間にか床の上に身を起してゐた。彼が注意をすると時時は坐つた方がいいのだと言つた。扉が開かれて人が這入つて來るけはひがしてそれが清山の方へ進んで來るらしいので見るとそれは夕方の食事を運んで來たのであつた。看護婦も一緒に來た。さうしてその色の黒い春の低い女は、さつさその上を片づけて彼の席を設けようとしたあの腰かけの上のものをベッドの片隅へ置き直して、食事を運んで來た女に膳をその腰かけの上へ置かせると、その臺のまま食事を起き直つてゐる清山が食べやすいやうな場所へ据ゑてやつた。

「食事がお済みになつたら、もう横におなりになつた方がいいでせう」

看護婦が清山にかういふ注意をのこして歸つて行くのをきつかけに、彼はもう歸らうと言つた。しかし清山はもつとゐて欲しいと言つた。さうして彼もやつぱり何かもつと清山と話してゐてもいい氣持はあつたのである。

いいでせう、もう少しゐて下さい。ほう。どうです。こんなものですが半分召し上りませんか。清山はさう言つて、今運ばれた自分の膳を彼にすすめるのであつた。――どうです。私が食べないうちに半分さきに召し上つて下さい。私はいつも餘るのですから――

――いや、お腹はすきやしないのです。彼は清山の言葉に面くらひながら狼狽したやうに言つた。

「ただ、あまり永居をしちや病人のために悪いと思つただけです。構はないのなら何時までもゐますよ。さあ、私には勝手に食べて下さい。――」

病室のところでどこで病人達が食事に就く前にするのであらう神に對する祈禱が呟かれた。

しかし清山はそんな事はしなかつた。その代りに彼に對して「では、ちよつと失敬して食べてしまひませう」と言ひながら、ごく軟く炊かれた御飯を茶碗に盛つた。それから急に小聲になつて「ね、食事はさう悪くはないでせう。せとてはね」そのせといふのは何のことだかちよつと判らなかつたが多分は施療患者といふ意味であらう。豆腐ばかりらしいいい卵子と味噌との食事を清山は十分満足して味つてゐるらしかつた。彼は先刻から目に這入つてゐる窓ぎはにあるまだ花の咲いてゐない草花の鉢を、それは清

山のものだらうかそれとも外の患者のであらうか看護婦のであらうかなどと考へながら、じかにそれを別に清山に尋ねて見ようとしなかつた。しかし船の帆が近くに見える時があるといふ窓の方へ立つて行つて見た。眺めはた黄昏にまだすこし間のあるどんよりとした空の下に屋根ばかり見えて、なかには二三の洋館の壁と窓とまた寺のものに違ひないと思へる高い屋根も見えて、近いところには此病院の構内になつた一本の梧桐が芽から大きな葉になりかかつてゐた。なるほど高い二階ではあるが眺望も何らあつたものではない。けれどもこんな窓だつて晴れた日に見たならば空が廣廣と見えるだけでも、いくらかは病人の慰めになるには相違ない。いや、ひよつとしたらば「せ」としては悪くない」食事を何の心配もなく食べてゐられるといふ事だけでも清山にとつて近來にない心長閑な氣持であるかも知れない。實際何だつて――

と、彼は考へた――新聞社などに通ふよりはここに寝てゐた方がもつと自分に適當かも知れない。彼はそんなことをちらと考へながら、ふと看護婦がベッドの片わきに置き直した清山の書物を見るときもなく見ると、そこには一冊の詩集歌があつた。それを取り上げるとその下の赤い

状とも見えないが、看護婦があんなに煩さく注意するやうではやはりよくないのであらう。いい場所へ收容してあるのもその病状のためかも知れない。もうかうなつた清山を死なせたくないと言ふのはただのセンチメンタリズムだ。清山はもう死んだ方がいい。誰だつて死んだ方がいい！ それにしても「二十年も僕のやうなことをしてゐれば誰をだつて知つて來ますよ」と言つたつが、何氣なく清山は言つたがその言葉がへんに悲しく彼の心にくこつてゐた——清山が死んだらあの言葉を何時までも思ひ出しさうだな。——清山はあの病院でひどく平靜らしかつたが二月経てば養育院へ行くことは知つてゐるか知ら。彼は遠路歩いて來た人のやうな足どりで、頭ではとぎれとぎれにそんなことを考へて歩いた。と、彼の口角には意地の悪い微笑が我知らず浮んだ——あの堂堂とした風采の、てきぱきした事務家の秦氏が細君の前で平伏して數願するところと同時に清山が病院の食事室を彼に半分食べさせようとした非常識な親切とがごつちやになつて目に見えて來たからである。しかしその微笑は直ぐに消えて彼は苦い顔をした。さうしてその苦い顔も亦ぢきにぼんやりとした悲しげな不快げなだけの顔になつ

てゐた。さうして電車停留所に立ちつづけた彼は、夜に入らうとする都會の混雑時間で満員つづきの電車のなかへ割り込んで乗るだけの氣力さへなかつた。何時の間に空になつてゐる煙草の袋をポケットから引き出してそれを掌でまるめて自分の足もとへ投げすてながら彼は、程近い乗換場所まで再びとぼとぼと歩き出した。もう別に何も考へてはゐなかつた。街に灯がかがやかに光りはじめてゐた。……一たし今は春だつたかしら秋だつたかしら、彼はふとそんなうづけたことを感じてゐると、けたたましい自動車の唸りに彼はうろたへながら路のそばへ退いた。威勢よく過ぎて行く車にはつとした彼は——

「は！ 氣をつけなければ。こんな時に人間は様さ殺されるのだ」

砂ぼこりを浴びながら、そんなことを口に出してゆつくり呟いた。

## 都會の憂鬱の

### 巻尾にしるす文

「都會の憂鬱」は大正十一年一月から同年十二月まで雑誌婦人公論に連載されたもの

のである。單に一人の男の平凡なただ困憊し切つただけの生活を現はして見よう——描くでもない、寫すでもない、歌ふのでもない、現はして見ようとしたのである——と思つてから五年目に筆をとつた。

——といふと、それほど永い間の腹案で、従つてよほどの大作などと早呑込みは困る。ゆつくりとさきをお讀み下さい。——

五年前の腹案は、白狀するが筆をとつて見ると殆んど役に立たなかつた。何となれば私だつてたとひさまたまの不安定のうちに育つても五年立てば五つになつてゐたからである。さうして私はその腹案を打壊すことに苦しみながらいつも手さぐりで書いたのである。やけに書いたのである。大へんつまらない作だと思つたり——講義などといふロクでもないものでこんな事を言ふのぢやない——、必ずしもさう捨てたものではあるまいと思つて見たり、自分で何が何だかもう判らない。本にして鑑みて讀み返して見たら、その點がいくらか判るかも知れない。これがこの書物を上梓する理由の一つでもある。

この小説のなかで、私は或る相當に重大

幅が利かなくなるからだと言してゐますが、私の解釋は全く別なので、『山峽の人人』にもあるとほりに、秦氏はほんとうにその細君に惚れてゐるのですな。……」

そんな話を聞きながら彼は無論何の興味も覺えなかつたし、實は注意をも拂つてゐなかつたからどこからどこ迄が渚山の小説でどこが事實なのやらさへも聞き洩した。ただ渚山は何のためにそんな小説の話などを初めたのだらうと思ふと、この男は自分が小説などを書く才能がある人間だといふことを、自分のベッドに近い人間に吹聴したいのぢやないかとさへ感じだした。事實近く病人たちは渚山の話聲が高くなるにつれて耳を傾けてゐる様子でもあつた。それほどひとりで興に乗つてゐる渚山の枕もとへ再び看護婦が来て「あまり話に身が入りすぎると熱が出ますよ」と笑ひながら優しく咎めたのをいしほにして彼熱く支度をして立ち上つた。自分の言葉の爲めに歸るのだと思つたらしい看護婦が訪問時間の六時までにはまだ十分あるからと言つたけれども、又、渚山が急に淋しうな顔で彼を見上げたけれども彼は再び腰を下さなかつた。

「それぢや又来て下さい。それから一つ今度の

住所を控へさせて下さい」

渚山は枕もとにあつた一番小さな手帳を出しながらさう言つた。立つたまま何気なく見下した彼の目は、その渚山の手帳には近頃病床のつれづれに思ひ出して頻りに書く所かと思へるやうに丁寧に友人の名前や宿所が書き連ねられてあるのを見た。

「僕の宿所ですか——下宿ですがね。近いうちにはまた變ることになるでせうよ。いや、まだことは決りませんが」

「それぢや、マダムの實家へでも手紙を上げればいいですね。どうぞマダムにもよろしく。さうさう。マダムを困却してしまつてちつとも話題にしませんでしたがどうぞよろしくおつしやつて下さい」

「え、ええ」彼は喉がつかまつた人のやうな聲で答へた。

彼は急いで病室から出た。けれども階段の半分まで行つた時に彼は踵をへかして再び渚山の枕もとへわざわざ歸つて來た、何か言ひわすれた事でもあつたやうに。さうして訝しがつてゐる渚山の顔を避けながら言つた。——

手紙は——もし用があつたらどこか外のところへ下さい——僕はひよつとして、多分、近い

うちに、と言つていつだか判りませんが、女房を離縁しようかとも思ふのです。——ほう？ それは又どうしてです？」渚山は無論ひどく驚いた表情であつた。

その事はいづれ又少づくり……。それから「と彼は急に小聲になつて「田舎で金は入りませんか、尤も今あるわけぢやない——近いうちに田舎の地所を抵當に借りようと思ふのですがね。必要なら持つて來ます——」

有難う。——だが私もかうしてゐれば金は必要ありませんね。實は夏日さんの手紙を人にやつて金を貰ひました」

二人は小聲で短くささやき合つてしばらく沈黙した。その沈黙の間で彼は一瞬間はじめて渚山の心にびつたりと觸れるのを感じた。

渚山と別れた彼はどうしたわけかひどく體が疲れてゐるのを覺えた。さうして渚山がいい建物だと自分の家のやうに言つたその大きな煉瓦造を曇天の夕方の暗さのなかにふりかへつて、その壁の上に黒く這つてゐる藁かづらの異様な模様を見ながら彼は門を出た。渚山は打見たところ然ほど險惡な病



とかう言つて私はいま自分を甘えかすのだ。實際、人間には苦言の必要な時もあり甘言の必要な時もある。私には今甘言が必要だ。さうしてしたりげに苦言を呈してくれる人があつても甘言をくれる人はなさうだから私は自分で自分を勉める。それほど人生が今は私に、つらく當つてゐる。白狀するが私は藝術のなかに悠然自適するやうな氣持にはもうなれない。私は文章を書き直して見ば、いいものにしてゐたりするひまはない。出来さうにもなし、したくもない。そんなことをして高められ深められるやうなそんな氣品や力や眞實や美しさなら、つぎと消えて無くなれ！——作家としてさういふ態度がいいか悪いか、悲しむべきか哀れむべきか、またその重荷の爲めに（この重荷とは何だ！ そんなひとりと合點などとはいふものぢやない、私が遂に「人生」の下敷になるか、はたこれが一つの煉獄であつてより深い自分が生れようとしてゐるか。そんなことを私は一切今は知らない。私はすっかり自分自身を見失つてゐる——これはまた一たいどうしたといふ、まだらう。

こんな愚にもつかない述懐をするよりは唯、そんな私をよく懲りもせずに鞭撻して、ともかくもこんなものをでも書き上げさせてくれたのは、一に婦人公論記者半澤成二君の力である。君は職業の熱心以上のもの——友情をもつて私にこれを遂げさせた。半澤君は私にこの作を書かすために、一たいこの一年内に百何十度或は二百何十度ぐらゐ私のところへ足を運び、何十度ぐらゐ私の駄駄を捏ねるのを聞いたらう。君こそ、眞實ある甘言をもつて私をよく支持してくれられた。もしその君が無かつたら、私はこれだけの粗雑なその時のがれの仕事をでもその半で放擲してしまつてゐたらうと思ふ。ここに自分の窮甲斐なきを白狀すると同時に同君の名を記して感謝するのを至當だと私は思ふ。最後にこの書の評判がよく且つ大に賣れることを願ふ。賣れることは私の生活にとつて邪魔ではないし、息子の新作の評判のいい事は何も知らない私の老父母を喜ばすであらう。

(一九三三年十二月十二日)

都會の憂鬱の作者

## 或るとき人に與へて

片こひの身にしあらねど  
わが得しはただこころ妻  
こころ妻こころにいだき  
いねがてのわが冬の夜ぞ。  
うつつよりはかなしうつつ  
ゆめよりもおそろしき夢。  
こころ妻ひとにだかせて  
身も靈をも心のきふるひ  
冬の夜のわがひとり寝ぞ。

〔殉情詩集より〕

## また或るとき人に與へて

しんじつふかき縁あらば  
わかれのこころな忘れそ、  
おつるなみだはただ秘めよ、  
ほのかなるこそ吐息なれ、  
數ならぬ身といふなかれ、  
ひるはひるゆゑわするとも  
ねがめの夜半におもへかし。

〔殉情詩集より〕

な點に殆んど觸れずにした。これだけの長さでは書けさうにもなかつたし、また今の私ではまだおぼつかないとも思へたからである。私はやつぱり安逸を食つたことになる。が、何はともあれ私はこの作で初めて人間といふものを取扱つたわけである。

この作を「田園の憂鬱」に比べて見て或る人は似ても似つかない姉妹篇だと言ふかとも思ふ。又一方、或る人はやはり血すぢは爭はれないところを發見するかも知れないと思ふ。そんなことはどちらでも人まかせだ。ただ私としては、「田園の憂鬱」がいからと言はれてももう一度あれを繰返すことは出来もしないしたくもない代りに、私がもし作家としてくたばつてしまはない限りはたとひ讀者と批評家とが見向いてくれないとも、好意ある人が積極的に私のために非難したり信しんでくれたりしようとも、私はもつともつと「都會の憂鬱」的のものをもう一度、いや幾度でも試みて見ようと思ふ。私自身の藝術に對する考へは、人が何と言はうともさういふ風に變遷して來たのである。——私は一方に絶え

ず厭離の念を募せると同時に不思議なことには、この小ざかしくも奇妙な動物、私自身亦その一員であるこの動物のさまざまな現象を苦しくも私は自づと知るやうになる

と、それを知ること深くなればなるほど私は普通人間と呼ばれてゐるこの動物へんに好き——と言はうか何と言はうか、一種切なく見入らずにはゐられなくなつて來た。この心持が、私の新しい徑路として若し一足でもこの作でその方向を示してゐたならば、私は今はそれだけで満足するより外には仕方がない。さうしてたとひこの作が大へんまづいものであり、また書きながらイヤな氣乗りのしないものであつたにしても、そこに人として作家としての自分の生活が開展しかかつてゐるとすれば——斷るまでもなく、このことは所謂自叙傳的製作といふ意味とは全く別であるが——、その巧拙とか完成不完成とかいふことなどの如き先づどうでもいいことにして置いてもいい。——ムシのいい申し分だけが讀者も今のところそれで勘辨して置いてもらへないだらうか。

私は生地で行きたいのだ。この間、象牙

の塔から立ち退きを命ぜられたのだ。さうしてどこへ轉住しようかと思つて私はまごまごしてゐるのだ。——さう言へば、そんなことよりも今の私にとつてもつと書いて置きたい事は、この作のすべての部分は、私が自分の書棚ではないところ、或時は弟の家庭の一隅で、或時は田舎の小汚い宿屋の一室で、或時は友人の家のおまじりゆつたりもしない二階で、或時は雑誌の編輯所で、或時は印刷所の校正室でさへも書いたといふ事實である。——こんなことを書いて私が、世間見ずにもいかにモライ事かなにかのやうにこれを吹聴したり、或は自分の作の放漫の言ひ譯に役立てたりするだらうと思ふ人には恥あれ。そんなことが何で作家の作品の貧弱な言ひわけになるものか。私は知つてゐる。私は知つてゐる、すぐれた作家はみんなそれぞれの苦境のなかで書き遣したのだ。——唯私はここまで書いて來てうっかり例の感傷の惡弊を發してこんな事を書いてしまつた。何にしても筆をとつて氣むづかしかつた私が、こんな境界や心境でよくもたつて出たらめな一行でも書く事が出来たものだ。

がいくらかかたまつて居た。それらは、人間がむかしどんな場所を選んで自分達の住居にしたかといふことを、實例で示してゐるやうであつた。そんな家の一つに私は住んだのだ。

私は初めN村のうちの字Iといふところに、お寺の一室を借りて居た。しかし三月ほど後に、同じ村のうちの字Kといふところで、一軒の家を借りることになつた。KはIよりも、もう半里以上も上であつた。それだけに一層不便であつた。

私達がIからKへひつ越をした時に、その家へ案内してくれたり、荷物を運ぶ手傳ひをしてくれたり、煤けた障子を家の前の溝で洗つてくれたりした女があつた。その女はなかなか小めに親切に働いてくれた。その女はそんな縁から、その後、私の家へよく遊びに来るやうになつた。私の妻はこの女は後に離別したが、は、話相手がないままに、よくその女といろいろな話をしたり、また時々洗濯物を頼んだりして居たやうであつた。

「ほんたうに親切な人だ」

妻はさう言つて、よくその女をほめて居た。その女はおきんといふ名であつた。さうして、村の桶屋の萬平の妻であつた。年はそのころ三

十五六であつた。或はもつと若かつたかも知れない。併し、正直に言へば醜い女であつたから、實際幾つであらうともそれがあまり重大な問題ではなかつた。おきんは色が黒かつた。その顔の形が栗に似て居た。平たい、ひしやげな顔で、頭が大きくつて、頤がなかつた。よく太つて居た。亭主の萬平はきりぎりすのやうな顔をして居た。さうして瘦せて居た。彼等は

かにもそんな田舎にはありさうな人たちで、さうして都會では決して見られない種類の人たちであつた。その萬平は犬が好きだといつて、私の犬を見に来ることもあつた。萬平は滅多には來なかつたが、おきんの方はよく遊びに來た。秋の夜長になるに従つて、いろいろと畑で出

來るものを手にきけては、おきんはふりつづく秋雨のなかを、遊びに來た。さうして何かと話して居た。おきんは仲話好きさうかつた。或るそんな雨の晩のことである。おきんはひよつくりと、彼の女の身の上話を始めた。私は妻とおきんとが常にどんな話をして居たかは知らないが、この晩はたまたま私もその火鉢の傍に居たから、おきんの話を聞くことになつた。おきんの話は思つたより面白かつた。私はつい感心して、その話をおしまひまで聞いた。見た

ところ何の變つたところもないこの女が、そんな珍らしい運命を堪へ忍んで來たかと思つて、私は深い淵を見つめるやうな心持でつくづくとその女の顔を見た。私は多少感動した。それはおきんが私たちに起させようと試みたと

のとはほど違つて居たかも知れないが、兎にも角にも私はその話に心をひかれた。ところがそれがおきんにはうれしかつたものと見える。おきんの話を聞いて、私ほど耳を傾けた人は今までないと言つて、おきんは私に感謝した。おきんはそれ以來、閑あるごとに私たちを訪ねた。さうして何度でも何度でも、その身の上話をくり返した。思へば私は我儘な男であ

る——その田舎へ孤獨を求めて來ながら、半生とはたたないうちにもうそんな淋しい田舎にも満足出來なかつた。私はどことも知らないところへの郷愁（それは心と體との）から、もの毎にいらいらする心持を起すやうな心身の狀態になつて居た。それでおきんの話も、たうとうおしまひに私を腹立たしくした。私はおきんの顔を見ると逃げるやうになつた。私はそれほど、それに慣まされたほど、度度、その話を聞いたのだ。おかげで私はおきんの話を、今でも、ほとんど彼の女の言葉どほりに語ることが



## お絹とその兄弟

私はかつて下縣郡のNといふ村に住んだことがある。考へると、全く妙な心持がある。あんな片田舎へ、一たい何のつもりで、住まうなどと思ひ立つたものであるか、今日になつて見れば、少少物好きすぎたと思ふ。けれどもその時には、私は本氣にその村で一生を送るつもりだつたのだ。それは、つい、二年ほど前のことである。けれども私は、それがもう十年ももつと昔のことであつたかのやうに思ふ。若しかすると、私はその田舎の一年足らずの生活の間、十年も年をとつたかも知れない。私はその村で非常にさびしい思ひをしたのだから——私はその時の自分の生活の状態を「病める薔薇」或は「田園の憂鬱」といふ作品のなかで書いた。

私自身がさびしい心持を持つて居た。けれども、その村そのものもなかなかさびしい場所であつた。言はばその點がその頃の私の氣に入つて居たのだつた。そこは、東京からでも、横浜からでも、或は八王子からでも、それぞれ七

八里とは離れて居なかつた。それで居てそれらの都會への交通の便といふものは、殆んど全く何もなくあつた。そこは以前鐵道の枕木を産出した地方としてそのみちの人には知られて居た。そのN村は、神奈川と八王子とを行き來する汽車の道からは、一里以上もそれに居た。その汽車を一度乗りそこなふと、無駄に三時間も待つて居なければならなかつた。そんな場合を考へると、この汽車は寧ろ不便なものであつた。村の人人は、僅に圓太郎馬車で神奈川へ行くか、それでなければ歩くのである。その馬車の立て場までだつて、私の住んだあたりからは一里近くの道である。それでも村の人人は、一向に不便を感じはしなかつたのだ。それほどこの村の人人は、單純な生活をしてゐたからである。ちよつと考へると、このわれわれが今居る東京のそれほど近くに、こんな不便な荒廢した田舎があることは、不思議なほどである。

實際、私も最初に偶然この地方を見出した時には、圓太郎馬車に揺られながら、道ばたの田や、

畑や、沼や、橋や、森の木立や、桑畑や、雑木の丘や、桃や梨の果物畑を見て居るうちに、いつの間にか忽然と目の前に展開されて來た天地に氣がついて、驚いたものであつた。しかし、よく考へて見ると、大市街の直ぐ近所にこそ、反つてこんな場所が出来もするのである。それは床しいことでもあるが、また考へさせることもある。

そこは武蔵野の片隅で、その野原が盡きてしまつて、これから山國にならうといふ地勢であつた。そこには平凡な丘が幾つも、幾重にもつづき重つて居た。その丘の或る場所からは上占の人間の造して行つた石の鐵が、大雨の後などに時時出て來るといふところもあつた。さうしてT川の主流で、その流域だけが僅かに打ち開けた田圃であつた。山の丘の遠いうしろには富士山脈のうちのちのあるものが見えた。場所によつては富士山も、その眞白い頂だけが見えた。秩父山脈の諸の峯が、雲の層のやうに——實際夏のうちは雲だとばかり思へた——かすかに黒く西の地平に見えて居た。そんなところに、一筋の道に沿つてそれもやつと片側だけ、飛び飛びに、或はまた道からはずつと距たつてその代りには丘の懷に抱かれて、古い草葺の屋根



出来る。

おきんの生れたのは甲州のMといふ靈場の附近である。おきんは六つの時に母に死に別れた。さうしてその村のお寺で育てられるやうになつた。おきんはそのお寺の住職のことを「和尚さん、和尚さん」とさう言つてなつた。そのころおきんは、自分の父は母よりも先に死んでしまつたので自分は身なし兒だ、といふ風に思ひ込んで居た。それは亡くなつた母がおきんにさう教へて居たからである。けれどもおきんはふとしたことから、「和尚さん」が自分の父ではないかといふことを、子供ごろにも考へるやうになつた。といふのは、おきんが村の學校へ通ふやうになつてから、「やあい! 坊主の子、坊主の子」と、さう言つて、男の子などから毎日からかはれたことである。最初、おきんはそれを、自分がただ和尚さんに養はれて居るから、外の子供たちがそんなことを言ふものと考え、へて居た。と同時に、何故ともなくもしやほんたうに、和尚さんが自分のお父さんではなからうかとも疑はれた。さうして、和尚さんが、おきんの疑うたとほり、おきんのほんたうのお

父さんであつたといふことは、間もなく子供のおきんにもわかつて來た。それは和尚さんの臨終の床である。それを叔母さん(おきんの母の弟の妻)が教へてくれたからである。その時、おきんはたしか八つであつた。かうして今度はほんたうに身なし兒になつたおきんは、母の弟である叔父の夫婦にひきとられた。叔父はお寺とは十五六里も離れた村に住んで居た。その叔父夫婦には子供が無かつた。それでおきんはその二人から非常に可愛がられた。さうして一年半ばかり経つた。或る日の暮れのことであつた。叔父の家へ見知らない若い男が訪ねて來た。その若者は、そんな田舎では見られない町場の風俗であつた。帽子を冠つて居た。さうして旅費をして這入つて來た。叔父とその若い人とは、機嫌よく話合つて居た。叔父は、叔父たち二人のそばでそれを見て居たおきんを呼びかけて、「これやお前の兄さんだぞ」と、言つて聞かせた。おきんは自分にそんな大きな兄さんのあつたことを、この時初めて知つた。叔父と、兄だと言はれたこの若者とは酒を飲み出した。それは多分秋であつたらう。何處でも燐に火を焚き出したころだつたのを、おきん

は覚えて居る。おきんは物珍らしさに二人をぢつと見て居た。さうして自分のことが話されて居るのだと知つた。どういふわけだか、そのうち二人の聲がだんだん高くなつて來て、二人は喧嘩をしさうになつた。叔母が這入つて來て二人をなだめた。叔父はごくおとなしい人で、めつたに惱つたりなどはしなかつたのに、この時には大へんに惱つた。さうして叔母がなだめてもなかなかかきかないで、大きな聲で言つた。「子供のところから家を飛び出して、おふくろの死にも逢ひに來ず、おやぢの葬式にも來なかつたものが、今ごろどのつらをさげて、この家の敷居をまたげられるか。叔父はまたかうも言つた。「われのやうなごろつきに、どうしてこの子が渡されるものか。これはもうおれの子になりさつてゐる。兄、兄、何を笠に着るこゝがある。叔父は叔母を突き退けた。兄は立上つた。兄は非常な大男であつた。「私はその前から泣いて居ましたが、(と、おきんは言つた。兄の立上つたのを見た時には身懷ひが出るほど怖ろしくて、泣きやんだ程です。それでも、おきんはその兄につれられて行かねばならぬことになつた。兄はおきんに、「こんな田舎ではない賑やかな町場へつれて行つてや



れや絲とりににもなれる」と言つた人につれられて、或る家へ奉公させられることになつた。それがおきんの十の年のことである。

おきんのつれられて行つたのは、八王子の直ぐ近在の或る家であつた。その家では機を織るのを商賣にしてゐた。さうしておきんの外にも、雇女が十人ぐらゐも居た。何れも娘ばかりであつたが、皆もう年ごろで、おきんだけが小さかつた。おきんは勿論、機を織ることは出来な。その外、絲を巻くことも出来ない。何も出来ない。只おきんの仕事は人人が經絲の緯をこしらへてしまつた時、その長い經絲のかたまりをちきり、――機の軸になる木へ巻きつけるときに、その軸の木をおさへたりぐるぐる巻いたりする人の手傳ひをして、その巻かれる絲と絲との重なる間へ竹ちぎれをはさんだりすることであつた。また機織りの娘たちが仕事をすると、娘たちが過つて梭をとり落したる役もした。年をとつた娘たちは、おきんをいになぶりのにした。監督をするやうな人が誰も見て居ない時には、その娘たちはわざと梭を落して見て、おきんにそれを拾はせた。あちらでもこちらでも同じやうなことを始める。さう

してしまひには、こごんで梭をとつてゐるおきんの頭を蹴つたりする。さうして皆して、唯し立てて笑ふ。こんな時に主人でも這入つてくると、その娘どもは人間の足音を聞いた鼠のやうに、すばやく、そらぞらしくしんと静まりかへつて、仕事をつづける。さうしてそんな騒ぎのおこりはおきんであつたやうなことを、皆なしていふ。おきんは、「何をめそめそ泣きやがるんだといつてよく主人から叱られた。打たれもした。晝や、ハツの休みや、夜などにはその娘たちはいつでもみだらな話ばかりして居る。さうして仲間はづれのおきんも、しかたがなしにその娘たちのそばにでも居ようものならば、機織り娘どもはすばしこくそれを見つけて、「おきんは子供のくせに男がある」「男の話をききたがる」と言つてからかふ。おきんはこんなことで、この娘たちから日に幾度泣かされたかわからない。おきんはしまひには、休みの時隙に、その娘たちに見つからないやうにひとり物置の隅などへかくれたりして居た。機織り娘たちはおきんが居なくなると、からかふものがあなくてさびしいものだから、おきんを捜し出しに來る。さうして、先づおきんをうまく咄えかして置いて皆のところまで連れ出す。さう

していろいろとおきんをいぢめる。おきんはまた、穢い身なりをして居るといつてはよくいぢめられた。皆して、「あれは乞食の子だ。だから、お小遣ひもなければ、お盆にだつて歸るうちもない。さうして着物はいつでも一枚きりだ。やあい！乞食の子。乞食の子」「乞食の子だから虱がたかつて居る」「皆そばへよると虱がうつる。さう言つて、その機織り娘たちはよくおきんを嘲したてた。おきんをなぶりものにした。實際、機織り娘たちの言ふことはほんたうであつた。おきんには小遣錢をくれる人もなかつた。お盆の日が來て皆それぞれと着物を着かへて出かけても、おきんは別にどこと云つて行くところも無かつた。着物はきたきりであつた。夏から秋になつて來ても、おきんは着更へるものもなかつた。

ところが、この家にもひとりのお婆さんがあつた。さうして誰一人かまつてくれないおきんを見て、子供のときにおきんに身の上をたづねた。それがはじめで、お婆さんはおきんに目をかけてくれるやうになつた。秋ももうずつと末になつた頃、おきんがまだ單衣の一枚しか身につけて居ないのを、お婆さんはやつと氣がついたものと見えて、お婆さんは自分の古ぼけたためくら

を上げて、おい、おい泣く。

「お婆さん、そんな話ばもうよすべえよう  
と、さう言つておきんも泣く。

お婆さんはその話をしないことはなかつた。

毎晩毎晩、その同じことを同じ言葉で、幾度でも幾度でも繰り返すのであつた。おきんには、夜になつてそれを言ひ出されるのが何よりも悲しかった。さびしかつた。氣味が悪いやうで恐ろしくもあつた。それを聞くのがつらいばかりに、おきんはなつかしくもない兄さんが歸つて來てほしいと思ふやうになつた。しかし兄は滅多には歸つては來ない。折折、歸つてくることがあつても、なかなかうちへはとまらない。兄は叔父の家から持つて來たおきんの簞笥を開けては、母の着物やらおきんの着物やらを持出して、夕方になるとどこかへ出て行つてしまふ。さうしてそのまゝ二三日どころか、一週間も歸つて來なかつた。或る日、兄は十日ぐらゐも家を開けて置いてから、見なれない人を二人もつれて、またひよつくり歸つて來た。さうして兄のつれて來た人たちは、二階にあつた簞笥を二階からおろし始めた。兄もその人たちのあとから直ぐ出て行つたが、そのまゝまた當分は歸つて來なかつた。けれどもしばらくするうち

に、またひよつくり歸つて來た。こんどは誰もつれて居なかつた。さうしておきんにむかつて、よく留守をして居た」とさう言つてほめた。

兄は今までこんなことを言つたことは無かつたのに。それから兄は、町へ行かうと言つておきんを誘つた。おきんは今まで、八丁へ來てもまだ一度も町へ行つた事はなかつたのだ。連れて行つてくれる人がだれもなかつた。よぼよぼのお婆さんは、毎日家にばかり居たのだからおきんは兄の誘うてくれるまゝに町へついて行つた。さうしていろいろなところを歩いて、或るところまで來た時に、今まで黙りこんで歩いて居た兄は、不意に立ちどまつた。さうしておきんの手をひいて、ごく優しい聲でおきんに言ひかけた。

お前は今日からよその子になるんだよ。いいかい――

さう言つて置いて、兄はちやうど前にあつた一軒の家の表障子をがらりと開けた。おきんの手をひいて、そこへ這入つて行つた。さうして上り框へ腰をかけた。それから、

「おとつつあん、連れて來たんだがね」と、兄が言ふ。  
見ると、その家のなかには男の人が二人ゐ

て、何か話をしてゐるところであつた。兄がさう言ふと、そのうちの二人は一度に私――おきんを見た。さうしてそのうちの一人が言ふのである。

「うん。その子か。それや年の割にや大きいな」

するともう一人が言ふのである。

「さうさ。それならもう二年もよれやあ、縁とりにもなれやうて」

兄とその人たちは兼ねて相談がしてあつたものと見える。兄は「ぢや、たのんだぜ」といふやうなことを言ふかと思ふと、自分だけ一人でどこかへ行つてしまつた。おきんを見て「年の割には大きい」と言つた方の男が、その後永い間、おきんの父になつた。さうして父らしい、悪い父らしい權力をおきんの上に振ふやうになつた。けれどもおきんはこの養父から、何一つ世話になつたことは、おきんが三十幾つになつた今日までに、それこそただの一度もないのである。その時にだつて、おきんはその人からお茶一杯ふるまつて貰ひはしない。その家の上り框へ腰を下しすらしない。實際、おきんはその時兄が居なくなると直ぐそのまゝ、養父ではない方のもう一人の人――それならもう二年もす

ておきんを連れ戻しに來た筈の人は、黙つてそのまゝかへつてしまつた。するとおきんの名儀上の父は、愉快さうに家内のものの顔を見て笑つた。この日、おきんはこの父から二十錢の銀貨を一つもらつた。おきんがこの父からもものを貰つたといふのは、あとにもさきにも全くこの時限りである。それほどにこの父は上機嫌であつた。この時の上機嫌の理由は、この父のその後のいろいろな仕打ちと考へ合して、おきんにはずつと後になつて初めてわかつた。この父はあの機嫌を續る家へ、何年かの年期をきつて前給金で、おきんを奉公させて居たのであつた。おきんが年期を勤め上げずに逃げてかへつた時におきんの養父は「よくやつた」と思つた。さうしてもう一度、おきんを、二重に給金をとらせるためにどこかへ奉公させようと企めたのであらう。あの二十錢の銀貨は言はばおきんへの褒美なのであつた。事實、おきんは、その日——逃げて來た次の日、早速別の家へ奉公にやられた。

二度目におきんの行つたらちは、やはり近在の村であつた。それは絲を紡ぐ家であつた。しばらくあるうちにおきんは絲をとれるぐらゐになつた。絲をとるのをおきんは好きであつた。

一たい絲とり臺といふのは、一つの大きな部屋のなかに澤山に列んで居る。おきんの居た家にも十五やそこらはあつた。さうして大きな水車と力がもとになつて、列んで居るそれぞれの絲とり臺が一つ一つ一度に動くのである。おきんは子供だつたから屑のやうな悪い絲をとらせられた。このうちではおきんはそれほどいぢめられはしない。つまり誰もおきんなどの相手にはなつてくれなかつたのだ。結局それがおきんには反つてよかつた。それにおきんの腰をかけて居る臺の隣りの臺に居た子は、極くおとなしい、優しい娘であつた。この家でもおきんが一番小さかつたが、その次がこの子だつたらう。よく絲のことなどでいろいろおきんに教へてくれた。その子は何といふ名であつたか、それをおきんは折にふれて、時々思ひ出さうとするけれども忘れてしまつたまま、のどもとまで出てくるやうで居ながらどうしても思ひ出せない。その子は無口な沈んだ子であつた。一日中ほとんどめつたに口も利かない、ただ口のなかで小聲で何か唄をうたつて居るのが癖であつた。その唄の節をおきんは今も耳の底にはつきり覚えてゐる。けれども文句の方は少しも覚えてゐない。それで、その子は色がくつきりして、可愛い

顔である。おきんはその子の側にあるのが妙にうれしかつた。ところが或る日のことである。この娘が不意に姿が見えなくなつた。はじめ、おきんのそばに人が坐つてゐないのを見て、仕事を見まはり來た人が、おきんに、その娘はどこへ行つたかと尋ねた。おきんも知らないから「知らない」と答へた。その人は皆に尋ねた。皆どうしたのだらうと口口に言つた。或る一人がその子がさつき井戸ばたで釣瓶から水を飲んでゐたのを見たと言つた。その子は、時間もたつてまだ歸つて來なかつた。そのうちに夕方になつた。暗くなつた。皆は一層心配した。うちへ歸つたのかも知れないと言ふものもある。ので、そのうちではその子のうちへ、使を出したので、夜おそくなつてその使は歸つて來たが、うちにももどつては居ないといふので、使と一緒にうちからはその子の父親が心配してついて來た。さうして迷子になつたのだらう、神隠しに遇つたのだらうといふので、村の人たちを集めて、その子を夜通して捜すことになつた。けれどもその子はどうしても見つからなかつた。さうして皆もうそのまゝにして置くより外には手の盡し方もなくなつてゐた。ただいろいろと取沙汰するばかりである。すると、その子



縞の單衣を削いて、それをおきんの袴にしてくれた。もつと寒くなつた時にはその同じ袴を解いて、今度は細入れになほしてくれた。着くづや締くづだらけの疵を見て髪を洗へと言つて手傳つてくれた。ほんたうにおきんの頭には虱が物をくつてゐた。

お婆さんはこんなに親切にしてくれた。それに機織りの娘たちもおきんをいぢめることに飽きたと見えて、一ころほはげしくなぶるやうなこともなくなつた。しかしおきんが吻としたのもほんの一ときであつた——或る日のことである、機織り娘のひとりが五錢の白銅をなくしたと言ひ出した。するともう一人がさう言へば自分のも足りないやうだと言ひ出した。すると別の一人が、私はおきんが買ひ食ひをして居るのを見たと言つた。皆はその場ですぐさまおきんを疑ひ出した。おきんはそのことに就いて言つた——私は今日までずいぶんいろいろな苦しい目にも會つて來たけれども、人様のものを盗むどころか、道におちて居るものをだつて拾つたことはない位です、と。(なるほど、おきんのさう言つたのは本當に相違ない、と私も信ずる。おきんは正直な女であつたから)そこで疑ひをうけたおきんはいろいろと正直に

言ひわけをした。しかし人人の疑ひは晴れたとは思へなかつた。おきんは長い間、物置きの上で泣いた。さうしてたうとうあまりの口惜しさと悲しさに、その晩あてもなくこつそりその家から逃げ出した。

さうしてひとりで八王子へ廻り出た。

村はもう夜更けのやうに静かであつたけれども、八王子へ出てくると、そこはまだ明るい宵の口であつた。おきんはうろろと八王子の町を歩いた。あの兄と一緒に住んでゐた家を、おきんを抱いて毎晩泣いたお婆さんの家を、さうと思ひついたのである。けれどもおきんにはそのお婆さんや兄とゐた家はどうしても見つからなかつた。それは、おきんがその家やその家に行く道をよくおぼえて居なかつたのかも知れないが、兎に角、ここだと思ふあたりにはその家はなかつた。そのうちに夜がふけさうになつた。おきんは途方にくれてゐるうちに、ふと子供ながらに氣がついた。いつか兄につれられてほんの五分ばかりゐたことのあるあのうちへ、そこから奉公に出されたあのうちへ行つて見よう。さうして兄のゐどころをたづねてみよう。さう思つておきんはその家を捜した。捜しあてた。その家へ行くと、あの時の男の人がゐて、

何だつて今ごろ歸つて來た? と詰つた。そこでおきんは子供としては出來るだけ細かに、事のなりゆきを泣きじやくりしながら話した。その男はたださうかと言つた。さうして、兄は今八王子には居ない。だが心配をすることはない。このうちへとまればよい。おれはお前のおやぢだから、それにそんな悪いうちなどへはもう行かずともよい。さうその人は案外にも親切に言つてくれた。

その翌日の朝、おきんがゆうべまで奉公してゐた家の主人が、おきんを捜して連れもどすためにその家へ訪ねて來た。自分でおきんの父になつたのだと名告つた男は、その訪ねて來た人を見ると、非常におこつた——ひとのうちの子をつかまへて、乞食の子呼ばはりをした上に、盗人などと難くせをつけやがつて、いくら子供だからつて辛抱しないはあたりまへよ。それをよくもづうづうしくひかへになぞ來られたものだ。うちへ歸つて來たからこそまあいいやうなもの、盗人と言はれた口惜しまぎれに、若し間違ひでもし出かして見ろ。手前たちは何だつておれに顔むけるつもりだつた一さう言つて吐き吐いた。それをかげでききながら、ほんたうにいい氣味だとおきんは思つた。さう吐き吐き

した。

おきんはどうしても逃げ出さねばならないと決心をした。しかし、こん度はあの父の家へも逃げて行くのはいやな、逃げて行けないやうなわけがあった。さうして、逃げるほどならば甲州の叔父の家まで逃げねばならないと決心をした。しかしおきんはちつとも金を持って居なかつた。給金はあの悪い養父がもつて行つたのであらう。客は外の大きな女達には金をくれて居たけれども、誰もおきんと言つてくれるものはなかつた。またおきんはほしいと思ひもしなかつた。それでもおきんは五十錢や七十錢はためて居たやうにも思ふ。しかし、金があつたところで、甲州まで汽車に乗れるものやら、どうして乗るものやら、叔父の村へはどう行くものやら、そんなことは皆目おきんにはわからなかつた。第一叔父の村の名をさへ忘れて居た。ただその村の景色などはつきり目に見えるやうに覚えて居る。行けば解るだらうぐらゐに考へて居た。おきんは迷つた。夕方になつた。おきんは今夜こそ逃げ出さなければ考へた。おきんはお湯に行くと言つて家を出た。手には手拭ひと、襦袢ぶくろをきぎて居た。その家ではお湯へ行く時には湯銭と襦袢とをくれることになつて居

たから。ありたけの銭は以前からいつでも身につけて居る。さうして外におきんが持ち出すやうなものは何もなかつた。しかしおきんは遠い甲州まで行く道のことを案じると、まだほんたうの決心は出来てゐなかつた。おきんはお湯屋の前を何べんか行つたり來たりして、考へた。どうしても本當の決心はつかなかつた。そのうちにふと誰かに、どこへ行くのだと聲をかけられた。お湯へ行くのだと答へると、その人は別に疑ふ様子もなく、さうかと言つた。おきんはこの時初めて決心が出来た。その人に逢つたのが何故にそれのきつかけになつたのだか、それはおきん自身にもわからない。すれ違つたその人の姿が見えなくなつた時、おきんは一さんに駈け出した、その人とは反對の方へ。さうして苦しくなると歩いた。時時また駈けた……もう駈けられなくなつて歩いた……無我夢中で歩いた……

氣がついた時には、おきんはどこだかわからないところに自分が寢て居るのを見た。あたりはただもう煙のやうに眞白であつた。そのうち、おきんにはだんだん自分の居るところがわかつて來た。それは山のなからしいのである。おきんは濡れた草の上に寢てゐた。眞白だつた

のは夏の朝の山の、深い霧であつたのである。あたりがだんだん見えるやうになつて、霧の下の方から上へ、だんだんと晴れて行つた。そのうちすつかり霧がなくなると、おきんの直ぐ目の前には高い峯がすつくりと聳え立つて居るのが見えて、その峯には頂上にだけ少しばかり、朝日がかつとまともに照りつけて居た。おきんはただあたりを見まはして居ると、樹と樹との間の細い山道から、鹿の皮でこしらへた山袴をはいた白髪のお爺さんが、ひとり、不意に出て來た。そのお爺さんは初めはおきんが居るのに氣がつかなかつたものと見えてすたすたとおきんが寢て居る傍まで歩いて來たが、急に二三歩とびのいた。お爺さんはちつと見据えて、自分の眼を疑ふやうな様子であつたが、しばらくしてお爺さんは口を切つた。

「お前、そんなところで何してゐるのだ」

おきんは起き上りながら、自分は叔父のうちへ行くつもりだといふと、お爺さんは、叔父のうちはどこだと言つた。おきんはどうしてか返事が出来ないでゐると、そのお爺さんは重ねて「何とか村か。それとも何とか村か。何とかか」と、その近所にあるらしい村の名を二つ三つづけて言つた。それはみんなおきんの知らない

見えなくなつてから、一日おいて、三日目の夕方である。不意にどしんと大きな音がして、家の屋根全體ぶるぶるとふるへ出した。皆びつくりして、一かたまりになつて家の庭へ出た。初めは地震かと思つたのだ。ところが庭へ出てみると、その家の草屋根の上へ、をとつひ見えなくなった子がぼんやり、灰白く突立つて居る。皆は二度びつくりした。梯子をかけてやると、その子はやつと下りて来た。「それからが面白いのですよ」とおきんは言つた。「その子の言ふのを聞くと、その子は天狗にさらはれたのだつたのです。その子が井戸ばたで水を飲んでゐると、ふいに大きな人が出て来て、その子を上の方へ持ち上げて行つたのださうです。さうしてどことも知れない山のなかへその子連れて行つたさうです。山のなかにはやはり同じやうな天狗が澤山集り合つて居ましたが、その子を見ると、その天狗の中の一人が言ひますには、「それはいい子だからかんべんしてやらう」するとその子をさらつて行つた天狗も、「さうか」と、さう言つたさうです。さうしてその子をもう一度ずつと高いところへつれて行きました。が、そこから帯をもつてぐつと突き落したさう

です。氣がついて見ますと、落ちたところはその家の屋根だつたさうです。その子は、それから一層陰氣になつて一週間ほどといふものは誰にも一言もものを言ひかけませんでしたよ。ええ、さうですその子は十五か六ぐらゐでした。「私が天狗にさらはれた人を見たのはこれが初めてでございましたよ」そんな事もあつた。けれどもおきんには何の變つたこともなく、おきんは十四の春まで絲とりになつてその家で奉公をした。あの父が迎へに来て、たうとうそのうちからひまをとることになつた。おきんは慣れたこの家からひまをとるのが名残惜しかつた。おきんは、それから八王子の遊廓の近くにある小料理屋の小女になつた。おきんは初めつからこんな家に居るつもりではなかつた。おきんは女中たちや客からいろいろ不愉快な思ひをさせられた。主婦からは氣がきかないといつて叱りつけられた。客はわざわざわかにくいやうに符牒をつかつてものを注文した。おきんがわからなくつてまごつくのを見ておもしろがつた。いろいろなものを言ひつけて、おきんがそれを下へとりに行くとき、それは何も無いものであつたりする。聞いた人たちは面白がつて笑ひころがる。併し、おきん

にはそれが何でをかしいのかわからない。今思へば皆それはみだらなことであつたらしい。さうして主婦からは馬鹿だといつて叱られる。この家には大きな女中が三人もあるのに、その女中たちはいつも客のそばにばかり居るので、ものを運んだり、用を言ひつかりたりするのはいつもおきん一人でしなければならぬ。そのうちは小さいくせにむやみと客の多いうちであつた。おきんは日に何十べんとなく梯子段を上り下りしなければならなかつた。それはどんなに足のくたびれるものであるか、實際に、その経験のない人たちには、いくら言つて見ても到底わかるものではない。それにそんなうちのことであるから夜は極くおそい。そのくせ朝は朝で割合に早い。さうして朝いちばん早く起きるものは、おきんである。主婦が床のなかからおきんを起すのである。さうしておきんは人々の朝の食事の用意を一切させられた。おきんはわねながら感心するほど辛抱をした。けれどもやがてこの家からもやはり逃げ出すやうなことになつた。

この家を逃げ出すに至つたことの理由に就ては、おきんは全く説明をしなかつた。その代りには次のやうなことを、次のやうに詳しく話を



せられて——その人は、私の親だ、親だといつては、私の行くべきききをつけまはしたのです。つい五六年前までは生きて居たのです。で、私がこの村へ来て、萬平と一緒に居る時にも、籍を入れようと思つたけれども、籍もその人の方にあるらしいので、その人がまた何を言ひ出すかわからないと思つて、人にも相談して、私が二十五になるまで待つて、二十五になつてから私たちは自由結婚をしたのです」

自由結婚といふその言葉をおきんは使つた。多分、その當時人人が使つたのを聞いて覺えてゐたのであらう。

おきんは「たうとうおしまひに云云」としか言はなかつた。けれどもおきんが何を渡世にしてゐて、この村へ流れて來たのかといふことは直ぐわかる。さうしておきんとでも、今更、それを私たちにかくしたのではなかつたのだ。私たちがちゃんと想像するとおもつて、その言ひづらしい事を言はずにすませたのであらう。實際、私たちが誰からともなく、おきんはその村にいつい數年前まではあつたといふ一軒の或る種の田舎茶屋の女になつて、初めてこの村へ來たのだといふことを、聞くともなくいつか耳にしてゐた。けれども村の人たちもおきんを悪くは言は

なかつた。口口に親切な、人の好い、きさくな女だと言つてゐた。あの工のお寺の大黒でさへ、人のことなら誰彼の別なく何とか言はずにゐられなかつたその大黒でさへ、私たちがおきんの世話によくならないと言つた時に、「あの人のば親切で正直ないい人だから」と言つたほどであつた。おきん自身でも、自分はいい人だといふことを自覺してゐるらしかつた。さうして然うであるやうに心掛けてゐるらしかつた。といふのはおきんは次のやうなことを言つたから。おきんは言つた——おきんは自分自身がさまざまの目にあつて來たから、難澁してゐる人がよく目につく、一たいおきんの住家は八王子から横濱の方へ行く街道にあつて居た。さうして道に沿うて少し小高いところにあつた。おきんが自分の家でゐるいろゝ働いてゐる時などに、ふと下の道に見えない人が通るのを見かけることがある。重さうに足をひきひき屈託ありげに通る。そんな人は問ふまでもなく、金が無くつてその代りには心配をどつさり持つた人たちに相違ない。普通の人のなれば、この便利な世の中に、八王子から横濱あたりまで何を好んでとぼと歩くものか。おきんはさういふ人たちをししばし見る。或る時には若い男と女

とで歩いて行く人たちが目についた。或る時には男であか兒を抱いて行く人が目についた。或る時にはおきんの家のそばの木かげに休んで、一時間をもつと以上も歩き出さうとはしない若い女を見た。その女は子を孕んで居たのではないかと思ふ。或る時には、水を一杯といつておきんの家へ這入つて來て、横濱までも何里かとたづねて、がつかりして居るらしい老人をも見た。おきんはそれ等の人人には、いつても何とか一こと言葉をかける。そんな時に親切な言葉といふものがどんなに力になるものかを、おきんはよく知つてゐる。それから三錢なり五錢なり、或る時には握り飯なり芋なり、何でも手もとにあり合せたものを與へる。頼まれればもとよりであるが、頼まれぬ時にでもさうである。失禮だが欲しくはないかとおきんの方から聞く、それらの人人は先づちつとおきんを見ながら、「もう一度」と答へる。それは十人が十人までほとんど同じ様子である。それからものを渡すと、いろいろと禮をいふ。さうしてその親切は決して忘れないといふ。或る人は無理におきんの名をたづねて、自分は東京まで行くのだが、かへればきつと禮状を出すなどと約束をする。そんな人も三四人はあつた。けれども

名前ばかりである。おきんは思ひ切つて、

「甲州だ」

と言つた。

「甲州! お前! 一たいどこから来た!」

「八王子からだ」

するとお爺さんは二度びつくりして、ちやうどおきんを見つけた時のやうに、また二足三足とびのいた。それから彼は、おきんがびつくりして飛上つたほどの聲で叫んだ。「お前には狐がついてるぞ。そうらそら! その目を見!」

お爺さんは子供がするやうに、おきんの顔をつつ突くやうに指さした。おきんははつと思つた。その時お爺さんはさも安心したといふ風に、

「ああ、よしよし。いま狐奴がおちた。何といふ目をして居たのだ。おれやほんたうに魂消たぞ」

さう言つて、やつとまたおきんのそばへ寄つて来た。さうして、お爺さんは、八王子からこんなところへくれば、甲州などへは出られないで全く反對に川越の方へ出ること、ここはどこからかといへば八王子よりも川越に近いこと、それにしても、八王子からこままでの間の道筋が女や子供の通れる場所ではないことなどをこま

ごまかして、一瞬歩いて来たのだとおきんから聞いた時には一層驚いた。狐につかれてゐたのだ。このあたりには悪い狐が居るんだからとひとりであらうなづいてゐた。さうして狐につかれて居たおきんの目がどんなにおそろしかつたかといふ事をくりかへしくりかへし言ひながら、おきんを、ともかくも自分の家の方へみちびいた。そのあたりにはおきんの背丈けほど大きな山百合が澤山咲いて居た。おきんはその一つをさはらうとして、ふと氣がついて見ると、その手には手拭ひと糠ぶくろとをしつかりと未だゆらべのままに握つて居た。おきんはほんたうに狐につかれて居たのであらう。さう言へば、おきんにも思ひあたることがある。それはおきんが一人に駆け出してから、時々うしろをふりかへつて見たが、何時見ても何度見ても、その都度おきんのすぐうしろには、二すぢに列んだ八王子の遊廓の灯が、すぐ近くにきらきらと見えて、いくら歩いていってもいくら歩いてもそれが決して見えなくなるはならなかつた。初めからしまひまで同じ近さで追つかけて来て居た。おきんはただもうその灯影が遠くなるやうに、遠くなるやうにと一心にそればかり思ひつめて歩きつづけて居たのであつた。お爺さんか

ら一狐につかれて居ると言はれて、はつと思つた剎那に狐はおちたのであらう。おきんもさう思ふ。お爺さんもさう思つた。さて、お爺さんの家といふのは一軒家で、しかもひとりきりで、お爺さんは炭焼きであつた。おきんはお爺さんのすすめてくれるままに、しばらくお爺さんの小屋に居た。お爺さんはおきんを氣の毒がった。さうして、秋にもなれば自分は山を下りて行く、さうすればまた八王子へなり、それとも甲州へなり行く人を捜してお前のつれを見つける序も出来よう」さう言つておきんを慰めた。

おきんはどういふわけか、よくかうしてお爺さんやお婆さんにばかり慰められる。

おきんはこまをほとんど一息に話しつづけた。さうしてここで突然言葉をとぎらせた。さうしてこんなことを言つた。

「それから私はたうとうおしまひに、こんなところ——といつては悪いのですけれども、こんなところへくるやうになつたのです。あの兄が私を渡して行つた人は、あとから聞けばよほど悪い人で、何でも博奕うちの親分であつたのださうです。私はさんざんその人に苦勞をかけさ

三四年前の夏の初めであつた。おきんの家へ見ず知らずの人が突然尋ねて来た。その人は横濱から来たと言つて、旅商人のやうな人であつた。初めは商人とばかり思つてゐたのが何も商ひ物らしいものを持つて居なかつた。その人がわざわざおきんを訪ねて来たのであつた。その人はおきんを見ると「つかぬことを問ふやうだが」と言つて、先づおきんの生れを問うた。さうして突然にも「もしやお前さんには二十年も前に生き別れた兄がありはしなかつたか」と言ひ出した。おきんはびつくりした。といふのは近頃ではもう、兄のことなどを思ひ出すことさへなくなつて、時々思ひ出しても、もう一度會へようとも、會はうとも考へはしなかつたからである。おきんはその妙な人からさう尋ねられた時には、即座には返答も出来なかつた。さうしてただその人の顔をつくづくと偷み視た。けれどもその人が果して兄かどうか、おきんには見別けられなかつた。おきんは兄の面影をもうすつかり疎かたもなく忘れてしまつて居たのである。ただ兄ならもう少し大男な筈だが、とおきんはその兄と叔父とが喧嘩をしうになつた時の昔のことを思ひ出して、さう思つた。返答をしかねてゐるおきんを見てとつて、その見ず

知らずの人は言つた。  
「私は頼まれて来た者だが、人からお前さんのことを聞いて、私の捜すやうに頼まれたのはお前さんに違ひないと思つたのだ」  
おきんは、成程、それではやつぱりこの人が兄ではなかつたのかと思つた。それが兄の常人ではないと知れると、おきんは今さら何となく不氣味であつた。兄は一體、今何をして居るのであらう。さうして何をたくらんで自分を見つけたに來たのであらう。萬平に心配をかけるやうな事でなくしてくれればいいが……。それとも兄が何か悪い事をして、實際そんな悪いことをもし出かさないとは限らない人だから、今來て居るこの人はもしや警察の人ではなからうか。そんな風にさへ疑はれた。さうして胸がどきどきして來た。併し、まさかとも考へ、それにさう言はれて見ればそんな兄は知らないとも言へたものでもないと思ふと、その兄に逢つて見よう、逢ひたいといふ、心持が急にげしげしく湧き上つた。おきんは手短かに身の上を明した。するとその人は「やつぱりさうであつたか」と言つた。それからその人の頼まれたといふ人、即ちおきんの兄らしい人のことを「方丈が」とさう言つた。聞けばおきんの兄(?)は、今、横濱の野

毛のAといふお寺にゐて、その住職になつて居ると言つた。さうして、見つけ次第不幸をかけた妹に逢ひ度いと言つたと傳へた。兄の年を考へ合したり、いろいろと聞いてゐるうちに、何もかも符合した。それが確におきんの兄に相違ないと思へて來た。けれどもまだおきんはその人のいふのを信用出来ないやうな氣しした。又、若しや世の中に自分と全く同じやうな身の上の、さうして全く別の人が居て、その妹をその坊さんが尋ねて居るのではなからうか、最後にそんなことをさへ考へて見た。ちやうどその日はじといふ家へ風呂桶を直しに行つて居た萬平を、おきんは仕事先きへ迎へに行つて、歸つて來た萬平ともよく相談をした上で、會つて見ないうちは未だほんたうと嘘ともわからぬ不思議な兄に會ふために、その日即刻、その人と一緒に横濱へ出かけて見ることにした。おきんはその兄にあつてももうお互に顔などは忘れ果ててゐたならどうしようなどと心配した。併しうれしき事にはそれが不當の兄であつた。さうして途途いろいろと考へて見ても、どうしても思ひ浮べられなかつた兄の顔は、不思議にも本當の兄を見た瞬間に、  
「おお! 然うだこの人だつた!」



未だ誰も禮狀をくれた人はない。おきんは禮狀をもらひ度いとは思はない。ただ時時その人たちがそののちどうしたらうかと思ひ出す。さうして自分のむかしのことを思ひ出す。「併し」とおきんは言つた。「世間といふものはなかなか口やかましいもので、私がそんな風にしてその人達に五錢なり十錢なりをやつて居るところを見た人があつたと見えて、おきんは自分たちが乞食をせんばかりの暮しをしてゐながら、身分不相應にも人にほどこしなどをしてゐる。」といふやうなことを言はれたのを聞いたことがありました。それからといふものは、私はそんな時にはいつでも人にかくれてこつそりと、或る時には三四町も後をつけて行つてから、誰も居ないところを見すましてそつと握り飯などを渡したりしなければならなくなりました。

そんな風なことをもおきんは言つた。さうしていろいろそれらの種類の人人について、一つ一つもつと詳しく話したけれども、それは彼の女自身の身の世話とは違つて、何度も何度も繰り返したのではなく、たつた一度言つただけだったから、私はあまりよくは覺えておかなかつた。それ故、それをこへ描き出すことの出来ないのを残念に思ふ。が、兎に角、おきんといふ女はそんな風な女であつた。さんざ世の

でいぢめられて来て、それでもおきんはやつぱりいつまでも人がよかつた。その上ごくきくでもあつた。さうして時時柄にもなく、つまらぬ駄洒落などといふこともあつた。そんな時に私はふと茶屋女としてのおきんに會ふやうに思つたりした。「ただどうも」と或る人は言つた。

「おきんさんとはもともとだけに、あれでなかなか浮氣もので、男が好きで困る。そこへもつて来て、萬平さんがまた無類のいい人ときてゐる。おきんさんは今も、自分のうちに來てゐる元メめといふ仲だといふことです。毎晩、夕方になると元メめの山の小屋へ出かけて行く。途中で人に逢ふと、桶をこしらへる木ぎれを山へもらひに行くのだと言ふさうです。さうして山へ行くくと元メめに風呂を焚いてやつたりするんだといひます。この間も、この御祭りで山で働いて居る若いものが、皆二時頃まで遊んで來て小屋へかへつて見ると、おきんさんはまだ小屋に居たさうです。毎晩おそくなつて元メめと二人で歸るのを、萬平さんは別に何とも言はないんですね。今までにだつてずる分そんな話はあつたのですよ。萬平さんは時時、道具をもつたまま出仕事に行つて、一月も近在をまはり歩いてく

ることがありますからね」おきんに就て、私はそんな事も噂されてゐるのを聞いた。

おきんは或る時、私たちが別に何もそんなことを勿論問ひもしないのに、今のやうな噂はみんないいかげんな嘘だと言ひ譯をしてゐた。

「私の身の上はまるで小説のやうなのでござい

ますよ——

さう言つて置いて、おきんはまたこんな事をも言つた——

おきんはあの兄とは、ほんの子供の時、あの時あして別れるともなく逃げられてしまつたきり、たうとう二度と會ふことがなかつた。そればかりか、兄がどこで何をしてゐるものやら、

おきんはそれをさへもとより知らない。知れないのは兄ばかりではない。叔父や叔母との消息もばつたり絶えてしまつた。おきんは叔父や叔母のゐたあの村の名を覚えて居なかつた。さうして誰に尋ねようにも、おきんのそばにはそれを知つてゐる誰も居なかつた。かうしておきんは二十何年間といふものは、親身の人たちは全く別れてしまつてゐた。おきんは叔父や叔母はもう死んでゐるかも知れないと思つた。

それがつい三四年前になつて、思ひがけなくも再會出来ることになつた。

して、自分も一緒に、行つてもいいけれども、目の前に盆をひかへて出られない。ちやうど、幸にも自分の知る人に、その山の會社の技師になつて居る人があつて、その人は東京へ會社の買ひ物に來た序に、今横濱へかへつてゐる筈である。さうして二三日のうちに再び山の方へ行く都合だと聞いた。それ故もしもお前の都合さへ悪くないならば、その人と一緒に、行つてはどうだ。それならばお前の亭主の方へは私からそのわけを言つて使ひを出す。それとも都合で今度の時でもいい。一旦田舎へ歸るか。そしてもう一度直ぐ亭主もつれて出直してくるか。さう兄はおきんに相談して言つた。いろいろ兄のいふことを聞いてゐるうちに、いつ流れ出したものか、おきんは顔中が涙で濡れて居た。それがぼたぼたと膝の上へ落ちて來て、初めてそれに氣がついた。おきんは若しほんたうに兄であつたならばかうも言つて見よう、ああも言つて見よう、と馬車のなかで考へ考へして來た事が、兄にむかひ合つて見ると何一つ言へなかつた。そればかりか何を言はうと考へながら來たのか、その事すら忘れてゐた。どういふわけであの悪い人がおきんの養父になつたか。あの八王子のお婆さんはどうしたか。お常といふのはそ

のころの兄さんの妻であつたか。そんな事なども何一つ問へなかつた。おきんはむかしのことに就てはたうとう一言も言はなかつた。さうしてただ問はれるままに亭主の萬平のことや、九年になるけれども二人の間には未だ子供がないことなどを話した。夜が更けて、しまひに兄は黙り込んでしまつた。さうして、突然、さも重大なことを尋ねるやうな口調で、  
「お前幾つになつたのだ」  
さうおきんに問うた。  
「ちやうど三十三です」  
おきんは答へた。けれども、兄は黙つてゐた。それで今度はおきんの方から、  
「兄さんは？」  
と、問うた。  
「四十三だよ」  
と、兄は答へた。さうしてやつぱり黙つて考へ込んで居た。  
……おきんは自分が折からではあり、兄のすすめくれるままに、山に居るといふ叔父と叔母とに、直ぐ會ひに行くことにした。兄はいろいろと土産ものをととのへてくれた。さうしておきんには新しい單衣物をととのへてくれた。それを人に頼んで夜どほしで終

つてもらつた。かうしておきんは技師といふ人に連れてもらつて、甲州へ旅立つた。甲府の少し手前のKといふところで汽車を下りた。登りになつて居る坂道を二里ほど歩いた。夕方になつて、技師は道ばたの、前に葡萄園のある或る一軒家へ這入つて行つた。この技師は極く無口な人で、道中でもあんまりおきんに話しかけたりなどしなかつた。それ故、どんなわけでおきんが叔父たちのところへ行くのだから、それを知らなかつた。技師はその家へ來ても、此處だとも何とも言はなかつた。併しおきんはその家へ這入る時に、直ぐこゝだなと感づいた。家のなかにはお爺さんとお婆さんが居た。さうしてその外には誰もゐなかつた。技師は歸つて來た挨拶をしたり煙草を吸つたりして居た。お婆さんは二人にお茶をすすめてくれた。おきんはその間ぢつとお爺さんとお婆さんとの様子を見て居た。お爺さんもお婆さんも、いたつて丈夫らしく、髪もどつさり生えて居た。しかしそれがすつかり眞白な白髪であつた。そのお爺さんとお婆さんこそ、疑ひもなくおきんの叔父と叔母であつた。それに相違なかつた。さて何と言ひ出したものであらう。おきんの用意して來たことは、この家のなかへ這入るとすつかり無駄に

と、急に思ひ出された。おきんはその時、別にうれしい悲しいといふことはなく、ただぼんやりとしてしまつて、庫裏の土間に突立つて居た。兄はおきんのその後のことに就ては一言も問ひはしなかつた。さうしてただ自分のことばかりを、落着いてではあるがあとからあとと語りつづけて、一言ごとにおきんに詫びてゐた。兄はやつぱり大男であつた。五十以上の人にも見えた。子供のころに父の寺で小僧をしてゐるのがいやに寺を逃げ出したこと、それから田舎廻りの役者にもなつた。博奕もうつた。巡査になつたこともあつた。とそんなことどもを兄は長長とおきんに聞かせた。さうして初めはそれほどでもなかつたものがこの四五年來といふものは、おきんはもとより、兄や叔父などにしきりに會ひたかつたこと、おきんには一番會ひたかつたこと、さまざまにして叔父や兄の居どころだけは捜し出したけれども、おきんがどうしてもわからなかつたこと、そのため兄自身でも一度ならず八王子まで出かけたこと、もう今では殆んどあきらめて悲しんで居たといふこと、そんな事などを順序もなく、丁寧な言葉で兄は言つた。おきんは兄の話を聞いてゐるうちに、おきんにはこの兄より外に未

だ外にも兄があつたことを初めて知つた。けれどもよく聞くと、それはおきんや話をして居るこの兄とは腹違ひなので、年も四十近くも違つてゐた。さうしてその兄といふのは、今は東京に居て、淺草の有名な日寺の格式の高い僧になつて、人人から尊敬されてゐる——それは私などとは違つて（とその時兄は言つた）極くおとなしい立派な人で、迷はずに一途に修行した人であつた。兄はその兄とも相談をしておきんを捜した。「今、お前が見つかつたと言つたなら、その兄もどんなにか喜ぶことであらう——さう言つて兄はおきんにむかつてその兄にも一度是非會ふやうにと言つた。けれどもおきんはその兄といふ人には少しも會つて見たいとは思ひなかつた。それも無理ではない、兄とは言ひながら腹違ひではあり、それに見たことはもとより、噂にだつてこの時に初めて聞くほどだつたから。さうして身分とてもあまりに違ひすぎて居る。それよりも會ひたいのは、叔母や叔父である。兄から叔父や叔母と聞いた時には、未だ生きて居たかと思つて全く飛び立つやうな思ひであつた。けれどもおきんはそれを言ひ出せなかつた。それを言ひ出すことは何となく兄に遠慮があつたからである。けれども、いよいよ兄は

その叔父と叔母とのことを言ひ出した。叔父夫婦は未だ生きて居た。さうしてやはり甲州の——しかし以前の村ではなく、或る山の中の有力電氣の會社に山番をしてゐた。その叔父を以前から、是非とも一度訪ねなければならぬ、と思ひながら、一つにはその間もなく、それより、自分の今までして來たことを考へ直して見ると、いかに氣後れがして、ことに叔父叔母には、おきんのことを初め顔むけのならないことばかりで」と兄は言つた。さうして兄はおきんと八王子で別れてからも、再三叔父のところへ行つたことがあつたこと、そのころ信州や甲州のあたりをうろついてゐたことなどを、手短かにおきんに話した。こんなわけで、手紙だけは出して居たけれども、その後まだ一度も會はないで居たのださうである。さうして初めのうちはお前が見つかつたなら、その時こそ先づお前に行つてもらつて私の詫びをしてもらはうと思つて居た。けれどももうこの頃では、お前は見つかれないものとあきらめて、或は死んでしまつたかとも考へたりして、そのうち自分ひとりで行かうと決心をしたところであつた。「併し、かうしてお前が見つかつた上は、やつぱり先づお前に行つてもらはう——さう兄は言つた。さう



## 第一折

泉州城に近い英内の豪家陳氏には三人の兄弟息子があつた。陳氏は代代、富と譽とのある家であつて、一番年上の兄は早く立身をして、近ごろ兩廣巡察使になつた。まだ年若な二番目と三番目とは志を立てて故郷で勉強して居る。この三番息子の少年を陳氏の第三男といふわけで陳三と呼んで居る。

## 第二折

陳三是谁からであつたかは知らないが、星を見ることを習ひ覺えた。さうして秋の或る晩はつきりした星月夜に、無數の星のなかから一つの星を見出した。それは疑ふべくもなく陳三自身の運命の星であつた。何故かといふに、幾夜試みて見ても、その星は陳三の目の瞬く度ごとに瞬き光るのであつた。さうしてこの一つの

星より外に、そのやうな星は一つもなかつた。陳三はその星にむかつて跪いた。

## 第三折

「どうぞ私の星よ。私に世の中で一ばん美しい娘を私の妻として授けて下さい。又、その妻の腹に宿つて出来る私の男の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい」

陳三の星に祈つた願事はこのとおりであつた。

## 第四折

來年貢生の試験に應ずるための讀書と詩作とに疲れて秋の夜の庭に出た兄は、陳三のこの言葉を聞くともなく偷み聞いた。兄は陳三の祈願を陳三に向つて呟つた。

「お前は馬鹿なことを祈つた。お前はまるで凡人の幸福を願つて居る。若し私がお前なら私

は妻や子供の事などは決して願はなかつたらう。その代り自分自身のことを願つたらうに。自分の子供などではない。自分自身が世の中で一番えらい人になるやうにつて！」

「さうです兄さん一素直な陳三はそこで答へた。一私とても最初はさう願はうとは思はないでなかつたのです。しかし私は考直した。自分がえらい人になるだけの事なら、どうやら自分だけの努力で出来る氣もする。それにひきかへて、世の中で一番美しい娘にめぐり遭つたり、その娘の心をひくことが出来たり、その上その娘を妻にすることができて、その妻によつて子供を持ち、しかもそれが世の中で一番えらい人になる——こんな幸福こそは、自分の身の上のことでしかも自分の努力ではどうにもならない。これこそ星の力にでもよらなければならぬ事だ。と私はさう考へたのでした……」

「なるほど、しかし」と兄は遮つた。「私はまたかとも思ふ。運命といふものはお前が考へるよりもつと大きな力であるかも知れない。假りにお前がもし、惡運の星の下に生れて来て居るとしたら、お前の熱心な祈願も、それをどれだけ善くかへることが出来るだらうか。一た

なつた——といふのはこのお爺さんとお婆さんと、即ちおきんの叔父と叔母とは、おきんのことをその技師の妻君だとばかり思ひ込んで、すつかりひとりじめにさう決めてかかつて居る。さうしておきんを「奥さん、奥さん」といつて、技師と同じやうにもとなしてくれた。「今から上へ行つたところで、今日はどうせ用のない事だらうから奥さんと一緒に今夜は、あばら家だがこのこへとまつて行つてはどうだ。さうして明日の朝、朝涼のうちにに行けばよろしからう」さう言つてお爺さんとお婆さんとは、二人して技師にすすめた。技師はもう一息のことだから、序に行つてしまはう。それに今夜は月夜だから明るいと言ふと、「あなたはそれでもよからうが、奥さんは女だから、きつともうよほどくたびれて居なされるに相違ない」と叔母が言つた。その叔母の聲が昔の聲にそっくりであつた。技師は「さあ」と言ひながらその場に困つて居るやうに無愛想に立上つた。どうしてもまつてはくれないのか、といつてお爺さんとお婆さんとは技師とおきんとに挨拶をした。送り出される挨拶をされておきんは一層困つた。しかたがなしに、また技師の後へついて途方にくれてその家を出てしまつた。すると技師はふりかへつ

て、おきんに、

「あなたの來たのはこぢやなかつたのですかと、訝しうに言つた。

さう言はれて、その時におきんは氣をとり直した。さうして直ぐさま、今來た叔父の家へ引きかへした。技師には道連れになつてくれた禮を、つい言ひ忘れてしまつた。

家へ這入ると、

「叔父さん！ 叔母さん！ 私は二十年前にお別れたおきぬですよ。おきぬですよ」

さう叫んだとき——心は言葉に連れてどつとこみ上げて來た。おきんは思はずそこへ泣き倒れて居た。

「おきぬか！ 本當か……夢ではないか」

叔母はよほどしてからやつとさう言つた。

「まだ生きて居たか」

最後に叔父がさう言つた。

「目がかすんではずきりと見られない」叔母がまたさう言つた。さうして泣いた。みんなして泣いた。夕方のうす暗い中でも、灯をともし

からも。

「私の本當の名はお絹といつたのです。それが

方方を歩いて居るうちに、ついおきんに變つてしまひました」

おきんは、ふと氣がついたやうに、最後にそんな説明をした。

(大正八年九月作)

## 琴うた

吹く風に消息をだにつてばやと思へ  
どもよしなき野べに落ちもこそすれ

梁塵秘抄

かくまでふかき戀慕とは  
わが身ながらに知らざりき、  
目をふるままにいやまさる  
みれんを何にかよはせむ。  
空ふくかぜにつてばやと  
ふみ書きみれどかひなしや、  
むかしのうたをさながらに  
よしなき野べにおつるとぞ。

(殉情詩集より)

## 第九折

陳三は馬をとどめて、今来た道の方を指して行人にたづねた。その家は黄氏の屋敷である。その娘は黄氏の五番目の娘である。世の中で一番美しいと花朝の日以來、潮州城の人人が噂する娘である。——行人はさう答へた。さうして確に、黄五娘こそ世の中で一番美しい娘である！ 陳三は手綱と一緒にあの地上に投げられた荔枝の實をしつかりと把つた手が汗ばんで、心臓が高くとどろくのを感じた。かうして陳三は世の中で一番美しいと言はれる娘、黄五娘を見たのである。

## 第十折

黄五娘の家には代代傳はつてゐる家寶の古鏡がある——陳三は、宿にかへつて再び黄五娘の噂を聞いた時、この鏡のことを聞き知つた。何氣なく聞きすてた鏡のことが陳三にひとつの思ひつきになつた。その鏡にことよせて、陳三はせめてもう一度あの少女を見ようと云ふのである。さまざまに考へ明した一夜のうちに

陳三は宿の下僕を呼んだ。さうして彼の立派な袍と袴とを脱ぎすてて、その上に馬掛まで添へてこの貴公子の著物を、宿の下男のみだん著と取り替へようと申込んだ。

## 第十一折

ある朝、遠いところから歩き廻つて来た工人だ——家代代の祕法を傳へた鏡磨だと名乗る一人の若者が、黄氏の家に來て祕藏の古鏡を磨きたいとどうた。

彼は永い初夏の日を緑の光を透きとほす芭蕉の葉蔭で一日中丹念にそれを磨いた。夕方になつてやつと磨き終つて盒に納めようとした時に鏡は盒とともに石壁の上に墜ちた。盒は幾つかに碎け、鏡は鵲の翼に沿うて二つに破れた。工人は誤つてとり落したのだと言つた。實際、工人の言ふのは嘘ではなかつた。何か不可解なはずみがあつて、この決して碎ける可くもないものが碎破したのである。人人は罵り叫んでその工人を責めたが、最後に主人が出て來て、たいたどんな方法でこの貴重な寶の代を支拂ふつもりかと詰つた。

「仕方がない」陳三は思ひがけない出來事のうちに思ひがけない智恵が湧いた。「私にはもとよりそんな大した銀はない。私はただ自分の身の代でその償ひができるだけである。私は何年でもこの鏡の代を支拂ふに足るだけの年月を、この家の奴隸になつて働かう——見なれない工人は、早く卽座にさう言ひきつた。さうして何故か頬に微な笑を含んだ顔を上げて、私は身をもつて、この鏡に優るとも劣ることのない鏡と鏡盒とを當家に贈らうと思ふ」さう言ひ足して人を見まはした。

この騒ぎを人かげに隠れて見て居た五娘は、この時初めて若い工人を見た。眩しいものを見た時のやうに瞬きした。この工人はどんなく、昨日、自分の家の門前を自分の袵に合せて歌つて過ぎたあの馬上の公子にそっくりだ。五娘は訝しい事に思ふと同時に、或は昨日のやさしげな公子の姿がまだ目にのこつて居て、この工人まであの公子に見えるのではなからうかとも疑つた。

## 第十二折

鏡磨の若い工人は、そこで、黄五娘の家の奴隸になつた。五娘は、その日からこの奴隸



私は星を信じない方だが、それともお前よりも  
もつと信ずると言つた方がいいかも知れない。

何にしる星に祈るのも無駄なことではなささう  
だ。私の星はそれなら、どの星であらう」

兄弟はこんなことを語り合つて、もう一度、  
口を上げて空一めんの星くづに見入つた。

謎の空は無限に深かつた。

## 第五折

「……假りにお前が若し、悪運の星の下に生れ  
て来て居るとしたら、お前の熱心な祈願もそれ  
をどれだけ善くかへることが出来るだらうか——  
何氣なく兄の言つたこの言葉は、恰も陳三  
の祈を聞きとどけた星が、豫め兄の口を借りて  
陳三に告げて置きでもしたかのやうに、後にな  
つて思ひ合されることがあつた。

## 第六折

幾年かは経つた。自分自身の努力でえらい  
人になると言つた陳三の兄——二番目の兄は、  
志を遂げて兩廣總督の役につくことになつ  
た。それには數年ひきつづいて兩廣巡察使

を勤めてゐる長兄の手びきが有力であつたこ  
とは言ふまでもない。

## 第七折

陳三は得意な兄を見送つて潮州城まで來た。

そのころ廈門附近のどこかに根城を置いてゐる  
といふ噂のあつた怖ろしい日本の海賊を避け  
て、今日まで馬上で來た兄の一行は、ここで馬  
をすてて船路を廣東の内地へ行くのである。

「順風！」

陳三は兄に別れをつけてかう叫んだ。

兄の船は六月の海の朝あけのなかに帆を揚  
げた。岬をまはつて南の方へ小さな帆はかく  
れた。

## 第八折

物珍らしい潮州の城内を見物しようと陳三は  
馬に跨つた。兄を見送つた日の午後である。夢  
多い初夏の空の下を若い陳三は馬上でさびしく  
考へ耽つた——兄は志を遂げて、今、兩廣  
總督となるのである。兄はもう既に美しい妻を  
も求め得た。然るに自分は……

自分は自分の星に向つて祈願をこめてからも  
う幾年か経つたのに、まだ世の中で一番美しい  
と言はれる娘の噂を聞いた事さへない。星に  
對する自分の祈願は果して聞かれたのであらう  
か。陳三はかういふ風に考へ耽つてぼんやりと  
馬の行くに任せて居ると、ふと、空の何處から  
か絃の音が聞えるやうな氣がするので、首を上  
げた。

陳三の目の前には、立派な門の向うに茂つた  
花盛りの柘榴の樹の上に響えて、一つの高い赤馬  
樓があつて、すべては陳三の目に幻のやうで  
あつた。何故かといふのに一人の世にも美しい  
娘が、走馬樓の欄に軽く背を倚せて絃を玩  
んで居るからである。黒い杉につり合つてその  
横顔が白い木蓮花のやうに白い。

ただうつとりとして眺め入つて居た陳三は、  
思ひきつて聲を張り上げて歌つた。絃の音に合  
せてである。欄干の娘は驚いてふり返つたが、  
蓮葉な調子で素早く物を投げる手つきをして、  
つと房へ這入つて了つた。

陳三の馬の前には一つの前く然した荔枝の實  
が投げ落ちて、陳三の目には限りなく美しい嬌  
暎と掌上の舞をも能くするやうな細い姿とが  
輝くやうに映つて消えた。

「さあ。この間の相談を實行しませう。それでは先づあなたからさきに街を歩いていらつしやい」——この言葉にはさかしい五娘のたくらみがあつたのである。

益春は五娘の言ふがままに新しい装を凝らして街を歩いた。群集は老幼も男女も皆、益春を見て立ちどまつた。壁氣樓を見るやうに目を見張つた。ふりかへつて見送つた。若者たちは囁いたり、叫んだりした。

「どこの娘だらう」

「世にも美しい娘だ」

「ほんたうに美しい」

「あの板らめた顔を見い」

「この娘は何の花であらう」

## 第十六折

「さあ今度こそ私の番です」

自分の聞いたとほりを傳へる益春の言葉などには耳をかさずに五娘が言つた。

「そのあなたの著て行つた著物をお貸し。」

二人とも同じ著物でなければ不公平だから」

——この言葉にもさかしい五娘のたくらみはあつたのである。

五娘は益春の著てゐた淡紅の衫を着て街へ出た。群集は老幼も男女も皆、この淡紅を着た娘を見てもう一度立ちどまつた。人人は叫んだ。

「やあ、さつきのあの美しい娘がまた通る——この聲と一緒に、五娘はにこやかな顔を上げて人を見まはした。

「いや違ふ。さつきの娘ではない」

「さつきの娘ではない。だが何といふ美しい娘だらう」

「さうだ。さつきの娘にも劣らない」

「寧ろもつと美しいくらゐだ」

「もつと美しい」

「もつと美しいとも」

五娘は世に最も小さな二つの足でよろめきながら、春日のやうに遅遅たる進歩で簇の蔭のなかをゆつくりとくぐり抜けた。自分の豫期したとほりの言葉を浴びてほほ笑みながら。

## 第十七折

潮州城中の人人は、その日、今年の花朝には歩く花のまぼろしを二度見たと噂をした。或者は、さきに歩いたのは秋花の精であり、あとから歩

いたのは春花の精であるとも取沙汰をして喜んだ。この人たちは斬新な思想もないのに徒に世の常ならぬことをいふのを好む人であつた。

## 第十八折

五娘は群集の心持をよく知つてゐたのである。人間といふものは言葉に釣られるものだといふことを勘づいて居たのである。先づ、五娘は同じ著物で益春——一旦人人の注目を鍾めて來た益春のやうに装うて人目を引いた。益春と自分を比べさせようとした。さきに一度、益春を讃めた群集はすぐそのあとに現れてしかもその美しさを何れとも言ひにくい五娘を、益春と同じ程度に讃める爲めには、つい、實際以上に言葉に力を籠めざるを得ない——

この方がもつと美しいと。

さかしい五娘はそのさかしさで人人の心を捉へた。五娘は「世にも美しい」「ほんたうに美しい」益春よりももつと美しいものになつた。

かうして五娘は益春に勝つた。素直な益春は笑ひながらあきらめて、いづれは養はれた身ではあり満足して五娘の召使になつてゐる。

心驕りのした五娘はその爲めに一層美しさを

のことが何となく気がかりで深窓のかげからたえず彼を注視した。又、彼をさういふ風に注視する機はいくらもあつた。何故かといふのに、この奴隸の方でも亦たえず五娘の目にふれようと望んで居るらしいからである。さうして五娘は、遂に確にこれはあの馬上の若者に相違ないと思ひ出した。

「私は身をもつて、この鏡に優るとも劣ることのない鏡と鏡食とを常家に贈らうと思ふ。かう言つたあの若者の言葉とその時の微笑とを思ひ浮べて、さかしい五娘にはすべてがわかるやうにも思ひ、またそれは思ひすごしのやうにも考へたりした。鏡食を人に贈るといふことは、婚約をしようといふ事だからである。五娘は彼を怪しい奴隸だと思ふ。けれども好ましい奴隸だと思ふ。

五娘はこれらの事をもとより誰にも洩しはしない。たつた一人、五娘の召使とも友達とも言ふべき益春にだけは打開けたい気がした。

### 第十三折

益春は洪氏を名乗るものであるが、幼い時身なし兒になつて黃氏に養はれた。五娘とは姉妹

のやうに育つて来て、生れながらの姉妹よりもつと仲がよかつた。五娘も益春も同年で、今年十五であつた。この益春も亦なかなか美しい娘であつた。五娘は金のなかに嵌めた紅玉のやうに、益春は銀のなかに嵌めた青玉のやうに美しい。五娘を妖艶といふならば、益春はどろしても冷艶と言はなければならぬ。五娘の美しさには地上の豊かさがあつた。益春の美しさには天上の静かさがあつた。五娘の美しさのなかに人はをそそり人を酔はせるものがあり、益春の美しさのなかに人は人を醒させ人をひき入れるものがあるやうに思へた。それ故に、人によつては五娘よりも益春の方がもつと美しいとも言ふであらう。或はさう言ふ方が正しいかも知れない。この益春が五娘の召使になつてゐるのである。それに就いては一つの挿話がある。

### 第十四折

五娘も益春も同胞のやうに育つて来て、互に相手の美しいのを愛し合つたが、二人とも年ごろになるに従つて互に相手の美し過ぎるのが氣になり出して來た。お互にどうかすると自分よりも相手の方がもつと美しく見え出したからである。

「私とあなたとは一たい、どちらが美しいのでせう」或日無邪氣な益春はたうとうかう言ひ出した。

「いづれあなたの方が美しいに違ひない。しかし、それは私たち自分ではわからない事です、誰かほかの人、澤山の人たちから見てもらつたのでなければ」かう五娘が答へた。

こんな可憐な問答の末に二人は、花朝の目を卜してそれぞれに城中を歩いて、道行く人たちに二人のうちのどちらが一層美しいかといふことをきめて貰はうといふことに決した。さうして娘たちは冗談のやうに自分たちの一生を賭けた。この競争に負けたものは、一生、勝つたものに仕へよう。——二人は仲がよいのだから一生離れまい。さうして勝つた者は自分の愛する者を好きに擇んで、或は擇ばれて、自分の夫にしたい。負けた者は勝つた者とその擇んだ男子とに仕へて、勝つたものの夫の第二夫人にならうといふのであつた。

### 第十五折

花朝の日は間もなく來た時に、五娘が言つた。



の人が、ほんたうに五娘の言ふとほり、何か身分の高い公子であつてくれればいい。いや、それほどえらい人でなくとも第二夫人ぐらゐ持てる人であつてくれればいい。お、あの人が眞珠のやうに白く光る袍の上に空色の馬掛を著飾つて、大きな馬に乗つて……。それが目に見えて来るやうだ。五娘はその立派な公子の夫人になる。それから、それから、自分はずめて第二夫人にでもい。その公子の妻になりたい。それともあの人は自分の事などどうせ何とも思つてはくれまい。――益春は冷たい牀の中で、熱い溜息をつく。さうして體が顫へる。膚の寒さのためであるか、心の熱さのためであるか、それは彼の女自身にもわからない。益春は誰に向つても一言も洩しはしない。益春はやるせなさを書へて置いた。

## 第二十四折

五娘は嬌羞によつて、益春は清愁によつて、ふたりはそれぞれに益美しくなつた。天から美しさを惠まれて居たこのふたりは、何につけてもただ美しくなるばかりであつた。

## 第二十五折

たうとう、益春は、あの奴隸からの言葉に五娘に傳へなければならなくなつた。  
私は、いかにも、去年の六月にこの門前を馬で通つた。――私は私の星の命ずるままに五娘を見出したのである。――私は泉州城外の英内の陳といふものの第三男である。長兄は兩廣巡察使である。次兄は去年、兩廣總督になつた。私には、然し、何の官位もない。――但、私の今の唯一つの願は人間といふものはどれだけ深く愛されることが出来るか、また妻からどれだけ深く愛されることが出来るか、私はそれを自分の身で知りただけである。私は神仙を望まない。人間の幸福が欲しい。――私の故郷には五落の家がある。私の心には五娘を慕ふ一途な心がある。私は今こそ人傳でなくそれが言ひたい――から彼の奴隸は益春に言つた。  
益春は五娘にさう傳へた。  
五娘は顔を隠して、餘韻のやうに顫へる細い聲で益春に言つた。「あの人と逢はう」

## 第二十六折

益春は、自分の意中の人を、ひそかに、自分ではない娘の房の扉に導いて置いて置いてから、彼女の女はひとり床に伏し倒れた。倒れて泣いた。その次の日の朝は、陳三も五娘も益春も、互に、目を伏せて相手の睡を避けた。益春は苦しく、怖ろしく、悲しく。他の二人は苦しく、怖ろしく、嬉しく。

## 第二十七折

僅に数日の間に、益春は永い寒に服した人のやうに瘦せ衰へた。心がうつろになつて、一日が一月のやうに永い。ただ影のやうに靜に召使の仕事に動いてゐる。嘔と吐息をして窓から、吹送つたさまざまの花を視て見る。益春の氣に入る花はもう一つもない。皆、去年の春の花とは違つてゐる。ぼんやり見つめてゐると涙が目にとまつて來た。その益春の肩へやはらかにしかし不意に手をかけて、五娘が低い聲に力をこめて言ふ――

――春が來たのに、どうしてさう悲しいの。悲し

を増した。心の卑下つた益春はその爲めに一層美しさを増した。各、日目に。

## 第十九折

益春のこの美しきは新らしい奴隸の目にも映ぜずには居なかつた。時には五娘よりも、何れの粧ひもしてゐないこの召使の方がもつと美しいやうな氣持がした。しかし若者はさう思ふたに、はつと氣がついて、五娘に思ひをかけて此家に来ながら、益春のことを考へて居ることのある自分を貞操のないものと思つて恥ぢて居る。この若者は一本氣な男であつた。その上に氣を食うた彼は、いつも顔を會すことの出来る召使の益春よりも、奥の窓の陰に僅に見ることのできる五娘の方に多くの夢をよせた。それを得なければならぬ心持が切になる。出来にくさうな事がしたかつた。——凡人の幸福を願つてゐるこの若者は、どうも凡人らしくない性質を具へて居たやうに見える。

## 第二十折

「どうぞ、私の星よ。私の世の中で一番美しい

い娘を私の妻として授けて下さい。又、その妻の腹に宿つて出来る私の子を世の中で一番美しい人にならせて下さい。——陳三は、人にかくれて自分の星に、今でもやはり同じ願事を祈つた。以前よりもつと切なく祈つた。

## 第二十一折

荒くれた卑しげな奴隸たちに雜つて、同じ荒くれた卑しい仕事をしてゐながらも、鏡磨であつた奴隸には確に裏んでも裏みきれない品格があつた。それが益春にも感じられる。柔かな目つきで益春は、秋の入日のなかに幾人もして重い石臼を曳く人人に雜つた骨組の華奢な奴隸を、いたいたしさうに見る。

## 第二十二折

五娘はまた、あの怪しい若い奴隸をいつまでも何となく氣にかけてゐて、冬の夜がたりに、益春をつかまへてはその若者の噂をしたがるのであつた。五娘が言ふには……どうもあの奴隸は唯の身分の賤しい若者ではない。——鐘磨

の工人にしたところであまり品がありすぎる。

——何かわけのある人に相違ない。——といふのは、實は自分はある人が大きな馬に乗つて眞珠のやうに白く光る袍の上に空色の馬掛を著飾つてこの家の門の前を通つて行くのを見たことがある。——それだけ夢まぼろしのやうな話ではあるが、決して夢や幻ではない。この初夏のころのことであつた。さう、五娘はまのあたり今それを見つづけてゐるかのやうな目差で話しつつけるのであつた。

## 第二十三折

このやうな月日のなかに、益春は嬉しいやうな悲しいやうな、切ない立場に置かれてゐる自分にはつきりと氣がついた。といふのは心ひそかにいたいたしいと思つてゐるあの華奢な奴隸といつからか物かげで口を利くやうになつたかと思ふと、その人は益春に向つて五娘の戀しさを打明けた。「お前がなつかしい」と囁いたのではないのである。

益春はひとり、よく、いつか五娘と冗談のやうに取交したあの一生の約束を思つて見る。さうして奴隸といふにはあまりやさしすぎるあ

「あの方<sup>かた</sup>は、おとなしいそれでゐる足<sup>あし</sup>の疾<sup>はや</sup>い馬<sup>うま</sup>を手<sup>て</sup>に入れて置いて下さる。それから私もあなたも……」五娘<sup>ごぢやう</sup>はさも無邪氣<sup>むじゃぎ</sup>に笑<sup>わら</sup>つて早口<sup>はやぐち</sup>に「私もあなたも男<sup>おとこ</sup>の著物<sup>しやくぶつ</sup>を著<sup>き</sup>るのですつて。

さうしなければいけないつてあの方がさう言<sup>い</sup>ふの<sup>の</sup>一<sup>ひと</sup>男<sup>おとこ</sup>の著物<sup>しやくぶつ</sup>を著<sup>き</sup>る話<sup>はなし</sup>は、内氣<sup>ないき</sup>な益春<sup>えきしゆん</sup>の顔<sup>かほ</sup>を赧<sup>はにか</sup>きさせた。

籠中<sup>ろうちゆう</sup>の玉燕<sup>ぎよくん</sup>がふと朗<sup>はげ</sup>かな聲<sup>こゑ</sup>を揚<sup>あ</sup>げて囁<sup>ささ</sup>り出した。何<sup>なん</sup>となくぢつとしてはゐられない五娘<sup>ごぢやう</sup>は、氣まぐれのやうに手<sup>て</sup>を差<sup>さ</sup>しのべて籠<sup>かご</sup>の口<sup>くち</sup>を開<sup>あ</sup>けた。玉燕<sup>ぎよくん</sup>は驚<sup>おどろ</sup>いて歌<sup>うた</sup>をやめたが、とまり木<sup>き</sup>の上<sup>うへ</sup>でしばらく考<sup>かんが</sup>へてから、怯怏<sup>けつやう</sup>と籠<sup>かご</sup>の口<sup>くち</sup>へ出<sup>で</sup>て見る。それから輕<sup>かろ</sup>く飛<sup>と</sup>んで、この愛育<sup>あいよく</sup>されて人に慣<sup>な</sup>れた黄色<sup>きせき</sup>い小鳥<sup>こどり</sup>は欄干<sup>らんかん</sup>の上<sup>うへ</sup>に來<sup>き</sup>て短<sup>みじ</sup>く歌<sup>うた</sup>つたが、五娘<sup>ごぢやう</sup>が手<sup>て</sup>を振<sup>ふ</sup>つた機<sup>はづ</sup>みに我<sup>われ</sup>を忘<sup>わす</sup>れて飛<sup>と</sup>び立つ。——程遠<sup>ほどほ</sup>くの花<sup>はな</sup>の一<sup>ひと</sup>ばいある樹<sup>き</sup>のなにかにかくれた。

「でも、もう明日<sup>あす</sup>から餌<sup>え</sup>をやる人はゐないのだもの」五娘<sup>ごぢやう</sup>は空<sup>そら</sup>になつて微<sup>さ</sup>かに動<sup>うご</sup>いてゐる象牙<sup>げうが</sup>の鳥籠<sup>とりかご</sup>を見<sup>み</sup>やりながら、誰<sup>たれ</sup>にむかつてともなく申<sup>まを</sup>譯<sup>わけ</sup>らしくかう言<sup>い</sup>つて、立つて欄干<sup>らんかん</sup>に凭<sup>よ</sup>つた。益春<sup>えきしゆん</sup>も同じ<sup>おな</sup>やうに立つて五娘<sup>ごぢやう</sup>と肩<sup>かた</sup>を並<sup>なら</sup>べた。この走馬樓<sup>そうばろう</sup>が、私<sup>わたし</sup>のはじめてあの方<sup>かた</sup>を見<sup>み</sup>たところなのだ」五娘<sup>ごぢやう</sup>はしみじみとひとり言<sup>ひとりご</sup>を言<sup>い</sup>つた。

さて、ふたりは暫<sup>しばらく</sup>く首<sup>くび</sup>を垂<sup>た</sup>れてものを思<sup>おも</sup>うた。

### 第三十一折

三人<sup>さんにん</sup>はやつと城門<sup>じやうもん</sup>まで來<sup>き</sup>た。冒險<sup>ぼうけん</sup>者<sup>しや</sup>たちは一<sup>ひと</sup>言<sup>い</sup>も口<sup>くち</sup>を利<sup>き</sup>かなかつた。もし、固<sup>か</sup>く温<sup>ぬか</sup>く握<sup>にぎ</sup>られてゐる手<sup>て</sup>を感じ<sup>かん</sup>じなかつたら、ふたりの娘<sup>むすめ</sup>たちはこの闇<sup>やみ</sup>のなかを自分<sup>自分</sup>たちをぐんぐん引<sup>ひ</sup>つづつて行<sup>い</sup>く者<sup>もの</sup>が、ほんたうにあの懸<sup>けん</sup>しい人<sup>ひと</sup>かどうかを疑<sup>うたが</sup>つたかも知れない。それほど不氣味<sup>ふきみ</sup>に誰<sup>たれ</sup>も口<sup>くち</sup>を利<sup>き</sup>かない。城門<sup>じやうもん</sup>を守る男<sup>おとこ</sup>は、この三人<sup>さんにん</sup>を見<sup>み</sup>るとやはりものを言<sup>い</sup>はないで、扉<sup>かど</sup>をさしらせないうやうに用心<sup>用心</sup>して門<sup>かど</sup>を隙<sup>ひま</sup>けた。この男<sup>おとこ</sup>は昨日<sup>きのう</sup>の夕方<sup>ゆふがた</sup>、見<sup>み</sup>なれない若い男<sup>おとこ</sup>から、夜中<sup>よなかつ</sup>にそつと門<sup>かど</sup>を開<sup>あ</sup>ける約束<sup>やくそく</sup>で、懷<sup>い</sup>に重いほどの銀<sup>ぎん</sup>を貰<sup>もら</sup>つてゐたからである。城門<sup>じやうもん</sup>からすり抜<sup>ぬ</sup>けた時<sup>とき</sup>になつたかしら聲<sup>こゑ</sup>が初<sup>はじ</sup>めて言<sup>い</sup>つた。「安心<sup>あんしん</sup>をおし」それから多<sup>おほ</sup>少<sup>せう</sup>歩<sup>あ</sup>みをゆるめて言<sup>い</sup>ひつづけた。「ごらん」北<sup>きた</sup>の空<sup>そら</sup>の一方<sup>いっぽう</sup>を指<sup>さ</sup>さして「あれが私<sup>わたし</sup>の星<sup>ほし</sup>だ。この間<sup>ま</sup>からああして三<sup>さん</sup>つ並<sup>なら</sup>んでゐる。それに、今夜<sup>こんや</sup>はちやうど私<sup>わたし</sup>の故郷<sup>こきやう</sup>の方角<sup>ほうかく</sup>にある」それからまた押黙<sup>おしだま</sup>つてややしばらく歩<sup>あ</sup>いた。「待つておいで。ほんの暫<sup>しばらく</sup>くだから。馬<sup>うま</sup>が來<sup>き</sup>てゐる筈<sup>はず</sup>だ」彼はさう言<sup>い</sup>ひ置いて急<sup>いそ</sup>にどこかへ馳<sup>は</sup>け出した。

### 第三十二折

一人<sup>ひとり</sup>は交<sup>か</sup>交<sup>か</sup>手<sup>て</sup>をとつて二人<sup>ふたり</sup>を馬<sup>うま</sup>に乗<sup>の</sup>せる。馬<sup>うま</sup>は三頭<sup>さんとう</sup>である。「大<sup>だい</sup>丈夫<sup>じやうぶ</sup>だ。ただ手綱<sup>てなづな</sup>をしつかり握<sup>にぎ</sup>つて！」二頭<sup>にとう</sup>の馬<sup>うま</sup>は先驅<sup>せんきよ</sup>について、そのとほりに走<sup>はし</sup>る。先驅<sup>せんきよ</sup>は輕快<sup>けいかい</sup>な騎手<sup>きしゅ</sup>である。さう後<sup>あと</sup>から來<sup>き</sup>る二頭<sup>にとう</sup>のために細<sup>こ</sup>心<sup>しん</sup>な注<sup>しゆ</sup>意<sup>い</sup>を怠<sup>た</sup>らない。それ故<sup>ゆゑ</sup>に不慣<sup>ふかん</sup>れな二人<sup>ふたり</sup>の騎手<sup>きしゅ</sup>としては最大<sup>さいだい</sup>の速<sup>すみ</sup>さで走<sup>はし</sup>る。自然<sup>しぜん</sup>に走<sup>はし</sup>る。且<sup>かつ</sup>、この馬<sup>うま</sup>は戰<sup>いくさ</sup>に使<sup>つか</sup>ふ爲<sup>ため</sup>によく馴<sup>な</sup>練<sup>れん</sup>された馬<sup>うま</sup>である。二人<sup>ふたり</sup>の無頼<sup>むらい</sup>な兵卒<sup>へいそく</sup>がやつと盜<sup>ぬす</sup>み出<sup>だ</sup>して北門<sup>きたもん</sup>外<sup>がわ</sup>の一<sup>ひと</sup>番<sup>ばん</sup>大<sup>だい</sup>きな龍<sup>りゆう</sup>眼<sup>がん</sup>肉<sup>にく</sup>の樹<sup>じゆ</sup>の下<sup>した</sup>で待<sup>まち</sup>受<sup>う</sup>けてゐるのである。賣<sup>う</sup>り手<sup>て</sup>は「これこそ大月<sup>たいげつ</sup>氏國<sup>しこく</sup>から來<sup>き</sup>た汗血<sup>あせち</sup>の馬<sup>うま</sup>だ」と言<sup>い</sup>ひ張<sup>は</sup>つた。分秒<sup>ぶんぼう</sup>を惜<sup>おし</sup>む買<sup>か</sup>ひ手<sup>て</sup>は、この三頭<sup>さんとう</sup>の爲<sup>ため</sup>に兩手<sup>りやうて</sup>に一<sup>ひと</sup>ばいの銀<sup>ぎん</sup>をせびられた。その三頭<sup>さんとう</sup>の馬<sup>うま</sup>が走<sup>はし</sup>る。「晩春<sup>ばんしゆん</sup>の曙<sup>あけぼの</sup>の空<sup>そら</sup>の下<sup>した</sup>を。——足<sup>あし</sup>並<sup>なら</sup>をそろへて。昨日<sup>きのう</sup>までの騎手<sup>きしゅ</sup>にくらべては嘘<sup>うそ</sup>のやうに華奢<sup>わさ</sup>なものに乗<sup>の</sup>せて。——夜<sup>よ</sup>が白<sup>しろ</sup>んで光<sup>ひ</sup>うすれて行<sup>い</sup>くあの三<sup>さん</sup>つの星<sup>ほし</sup>の方<sup>かた</sup>へ。

### 第三十三折

五娘<sup>ごぢやう</sup>の家<sup>いえ</sup>で、あの無口<sup>むぐち</sup>な氣<sup>き</sup>の置<sup>お</sup>ける奴隸<sup>どれい</sup>がゐる



夫人になるのだから。私は去年の花朝の日の約束を忘れはしません

益春は訝しげに振返つて五娘の顔をしげしげと見た。大きな蝶が庭から迷つて来て、五娘のかざしてゐる金色の花に戯れて去つたのを、益春はうつけたやうに見送つて、何もないところをぢつと見た。

## 第二十八折

若しさう言つてくれたらどんなに嬉しからう、とさう思つて時時自分で自分に囁いて見るその通りの言葉を、今益春は聞いたのである。空頼みにふと考へてみるのと寸分も違はない言葉を聞かされて益春は自分の耳を信じない。この言葉が怪しくないなら、益春の住んでゐる天と地とそのものが怪しい。漸くして、しかし、この言葉を言つたのはほんたうに五娘で、またその五娘は本氣でこれを言つたのだといふことが益春にも信じられるやうになつた。さうして五娘がもつと詳しく話出した時に、益春には出来事がもう一層夢としか思へなくなる。——五娘は、今、陳三につれられて泉州へ行かうと決心して居るのであつた。はげしい愛慾にひか

れて、この情熱に富んだ娘は、父の家を惜しげもなく出て行かうといふのであつた。益春にはこの養はれた人の家を見捨てるのさへなかなか躊躇はれるのに……

## 第二十九折

「かうなれば一日も早く家出をしよう。その上で更めて私の家からあなたの家へあなたを貰ひに行かう。それより外には方法はない。——でなければ、年とつた人といふものは氣の毒にも疑ひ深くて、この奴隷を自分の娘に與へるに相應した若者であらうとは、容易に信じてはくれない。——さきの日に家の寶の鏡を壊した時にやつと命を助けられた私は、今それ以上の家の寶であるあなたを盗んだことが知れたら、今度こそは殺されるであらう。——奴隷には娘はくれない。けれども英内の陳の家にならばきつと拒むまい。——どうしても私の妻になつてくれようといふのなら、早く私と一緒に逃げてくれ。——道は長いが危くはない。私は来る時に通つて来てその安全なのをよく知つて居る。——私は路銀にと思つて金と銀とを土中に埋めて置いた。——私と一緒に行かう。——愛があるな

らば疑ふな。きのふの夜、陳三は五娘にさう言つた。五娘は言葉どほりに陳三を信じた。しかし五娘はひとりでは、たとひ思ふ人と一緒にでも、そんな遠いところへ行くのは心細い。五娘は益春にも別れたくはない。また益春と二人の方がまだしも年とつた母が安心する。益春のこ

とを、五娘は陳三にも話したのである……  
……だから、さあ私たちと一緒に行きませう。でも萬萬一、あなたが行かなければ私はひとりでもあの方について泉州へ行く。五娘は益春にさう言つた。  
五娘がさう言ふなら、陳三がさうしなければならぬのなら、益春だつてやはり泉州へ行かうと思ふ。益春も五娘には別れたくない。それよりもつと陳三に別れたくない。  
「おお、私もつれて行つて下さい」陳三がかがせて益春は感言のやうに呟いた。

## 第三十折

「たうとう明日になつたの」五娘は、或日、益春に囁いた。「私たちは、あの方、私もあなたも、明日の朝まだ夜の深いうちにこの家を出て行くの」五娘は沈みがちな聲に元氣をつけ

かにも、うす暗い房の奥に「かたまりの黒いものが動いてゐて、それが三人の人間らしかった。四人たちは何事であらうかと今更新しくふるへて檻窓の外を注視した。えらい役人はただ顔いてゆつくり一歩あるき出した。

「兄さん！ 待つて下さい。兄さん！ 私です！」

「あまり四人を虐待してはならない。——ここにある者は氣が違つてゐるのか」

えらい役人は獄吏の方をふり返つて言つた。

「いいや！ 私ぢや。兄さん！」

囚人はもう一度叫んだ。——實際、狂人のやうに。えらい役人は立ちどまつた。懐かしい故郷の訛に耳を打たれた。耳のひびきが顔色を動かした。しかしえらい役人は獄吏の何か答へるを聞き流しながら騒がずに言つた。——「何しろ、この囚人を私は一度よく見よう」

### 第三十七折

「今に後悔するぞ！」さう偶然に言つた陳三の叫びは、全く偶然にも實現された。このえらい役人は、疑ふべくもなく陳三の長兄であつた。彼は廣東の任地から特別な任務でやはり巡

察使として、亂れてゐるといふ噂の最も高いこの閩海の地方へ突然來たのであつた。久しく相見る機のないかつた彼等は、長兄は次第の面影から末弟を信じ、末弟はまた次兄の面影から長兄を認めた。彼等は泉州の言葉で半時あまりも語り合つた。既に壯年を越えた長兄は、年若き末弟が正直に告げたところを聞いて、その情癡を憫れんだ。さうして彼の愛する弟の望みを果させてやりたいと思つた。日を期して彼自ら潮州の黃家を訪ねようと言つた。——その古鏡に優るとも劣ることのない鏡と鏡像とを求めた黃家へ贈らなければならぬと言つた。

「昨日の囚人は今日の貴賓であつた。五娘と益春とはもう憚るところなく髪を梳り、簪を飾つてよかつた。昨日彼等に辱と罪とを與へた者どもは今日自分でその辱と罪とを受けなければならなかつた。

### 第三十八折

「どうぞ、私の星よ。私に世の中で一番美しい娘を私の妻として授けて下さい。又その妻の腹に宿つて出来る私の男の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい。——あなたはお

う私の祈願の半分を聞きとけて下さつたやうに見える。尙も、私を恵んで私の祈願を完うさせて下さい。私にどうぞ、人間らしい幸福を授けて下さい」

陳三は、長兄との傳奇的なこの邂逅のあつた夜、彼の星にむかつて彼がその守護を得てゐることを深く感謝した。さうして彼はいつもより熱心に永いあひだ跪いた。さて、戀を思ひながら星に埋つた蒼穹を仰いだ陳三は、人間のあまりに微小なことを感じ、しかもその微小な人間の微小な胸の底にも亦一個無限の星辰を鏤めた蒼穹が宿されてゐるのを感じた。それ故に人間と生れたことは實にはかなく切なく、而もさればこそ生甲斐がある——陳三はこのやうな感に打たれながら、彼の目を星そのもののやうに輝かせた。

陳三の星を敬へられ、さてその左右に並んでゐるところの星が各自自分のものであることを信じた五娘と益春とも亦恋をほしてその星を拜みながら、ひそかに祈念した。

「どうぞ、私の星よ。私が私の夫によつて生涯深く愛せられるやうに私をお守り下さい」彼の女たちの願事は期せずして一致した。世の中のすべての花嫁たちがさうでなければなら

なくなつたことを、外の奴隸たちが氣づいたころには、三人は既に城外百里のところにあつた。その奴隸と一緒に五娘も益春も居なくなつたことを、家の人たちがすべてが氣づいたころには、三人は既に城外二百里のところにあつた。さうして今日のうちにもう五十里行けばいいものとして、馬の歩みをゆるめた。——五娘の家では、娘たちは人買ひの船に乗せられたものと思ひ込んで歎いた。五娘の母は罪をひたすらに益春に歸した。

### 第三十四折

三人の騎馬旅行者は、工夫を凝らして人目を避けてゐるのに、どうも人の目につきやすかつた。一人は黒い袍を他の二人は藍の袍を、いづれも普通の服裝をした少年たちであるのに、それがどうも行き逢ふ人に目を注がせる。立ち停らせる。振り返らせる。何故かといふのに馬上の三人はこんな地方で見ることの稀な美少年たちである。就中、年の若い二人は、その手綱を大事に握つた手の指一つ見ただけでも、どうも女にまがふ程だからである。彼等はいさうと怪まれた。今日は漳州で泊ら

うといふ日に、一隊の兵卒が彼等を捕へたのである。世は亂れ始めて居た。良民を保護することに名を繕ひて、寧ろ彼等を苦しめるために武器を持つてゐる兵卒たちは、以前から土著の民に迫つては酒肉を得、羈旅の客を脅しては金銀を掠めてゐた。公認された土匪のやうな輩であつた。——一年前に總督の一行としての陳三を迎へた時には、正しい軍律を装うて、地方の平安をよく支へてゐるやうに見せてゐた。さうして陳三は、世間知らずにも、道は長いが危くはないと信じてゐたのであつた。然るに今、總督の一行ではない陳三は捕へられた。

### 第三十五折

男裝した娘たちは白目の光のなかで素裸にされた。兵卒どもは、うつ伏せになつて戰慄してゐる二人の娘の青く透くほど白い腰の細さを食ひ見比べた。路銀は預つて置くと言つて取り上げられた。それから、これは嚴しく取調べなければならぬ奴どもだと宣言された。「今に後悔するぞ!」

陳三は牢屋のなかへ投げ込まれながら、さう叫んだ。然し陳三の心のなかにこれと言つて方

法があつたわけではない。唯あまりの口惜しさで叫んだまでであつた。けれども、この威を持つた一言と二人の美姫と三頭の良馬と、それに豫想外に巨額の路銀とが、兵卒どもを無氣味にした。ただの旅行者ではないと思はせたからである。若しさもなかつたら、この獸に類した兵卒どもは、あの書問貪り見たものの如くにそれられて、二人の娘たちを深夜牢屋から牽き出したことであらう。

### 第三十六折

「ここに居る者は、莫大な金銀財寶と容色ある少女一名とそれに馴育のといいた軍馬三頭とを盗んだ強盗でございませう。軍馬を盗む程の奴ですから餘程のしたたか者に相違ありません。罪科は明白ですがまだ白狀を致しません。何れ拷問に掛けようと思ひましたから、足械と手械をさせて置きました。若い女どもも兎も角も一緒にここに置いてございませう。これは二人とも足械だけさせて置きました!」

から獄吏が説明をして、了寧に一揖すると、一隊の整列した兵卒たちに護せられた官位の高さうな役人が一人、監房のなかを覗き込んだ。い



を見ない夜にはその戀しさを多く忍ぶのに、陳三を見る時にはつい胸一ぱいに閉ぢ籠つてゐる。怨言の方を先に言ふ。その盡きない怨言のまだ終らないうちに夜が明ける。さうして何故この戀しさの方を言はなかつたらう。このつぎにこそこれを言はう。次の日には日ねもすかう後悔する。しかしやはり又の夜には怨言の方をさきに言ふ。氣の弱い陳三は五娘をも悪んでは居ないだけにその刺のある言葉が聞きづらひ。さうしてそれをあの沁み出るやうな益春の優しさに比べて見る。それに心の嶮しくなつた五娘は前ほど美しくない氣がする。さうして五娘を慰めてかき抱きながら心は、愛と望とに美しく奥深く光つてゐる益春の黒い瞳をばかり思つてゐる。一たび礎のゆるんだ家は傾く。傾いた家はその倒れかかつたもの自身の重さでだんだん崩壊しようとする。そのやうに五娘と陳三との互の愛はくづれさうに見える。琴は張り過ぎてゐる。瑟は弛んでゐる。五娘はとだえ勝な蟋蟀の聲に悶えながらさびしさの極つて眠ることのない夜の考へで、陳三がまだいくらかでも自分と思つてゐてくれる心があるかどうかを、試して見ないでは居られなくなつた。證を求めないではゐられない愛は苦しい。

#### 第四十二折

或る夜明けに、陳三は益春の房から出て五娘の房を訪れた。前の宵の五娘との約束を果さなければならぬからである。陳三は五娘の牀の帳を押し明けた。訝しい事に五娘はそこに居ない。ただ枕もとに、その上へ金簪を置いた一通の手紙があつた。残燈のほのかな白さのもとに、陳三はふるふる手でそれを開いた。驚いて、彼は扉を拂して出た。まだ暗いことに氣がついて燭を秉つて再び出た。一庭の井戸へ。五娘がそこへ身を投げると書き遣したところへ。石だたみの上には赤い小さな隴が片一方ある！五娘のものだ！陳三は燭を高く斜にかざしてその下から井戸をのぞき込んだ。黒く隴の形が一つ、灯を金色に映じた水の圓いなかにしよんぼりと浮んでゐる。水は重たく靜まつてゐた。陳三は燭を石の上に置いた。それから石の上の隴を拾つた。赤いうへに蔓草とそれの花とが黒く縫ひ飾つてある。——これこそ、あの第一の晩に五娘が帳中で穿いてゐたものである。陳三はもう一ぺん井戸のなかを見る。そこには靜かな黒い水の面に星が一つ天から影

を落してゐる。つくづく見るとそれが陳三自身の星である。

「五娘！」

陳三は叫んだ。黒影を映した深い水が彼をおびき入れる。よろめいて彼は際ちた——突きめされるやうに、父狼狽して足を踏み外したやうに。

短い叫び聲が井戸に近い穀倉から鋭く叫んだ。しかしそれは人を存んだ黒い井戸の吼えるやうな響で消された。

陳三は苦悶のうちに水面から擡げた頭の眞上に、彼自身の星を最後に見た。——その星だけは、どんな激しい感情が陳三を井戸のなかへ追ひ入れたかを、或は知つてゐるかも知れない……

#### 第四十三折

井戸のそばには、遣された燭の灯が大きく揺れながら燃えてゐる。穀倉のなかからよろめき出た人の影は、この燭の灯に照された時に幽鬼のやうに蒼ざめた五娘であつた。その五娘は井戸には目もくれないでよろめき走る。よろめき走つて彼の女の房へ行く。彼の女は筆をとつて

ない如く。

### 第三十九折

悲みのなかにあつて樂しかつた日を振り返るほど堪へ難いものはないと謂ふ。而も悲みのなかにある者は、せめては樂しかつた日を振り返らないではゐられない。

五娘はいつの間にか、徒らに今日の憂悶を新らしくするために空しく昨日を思ひ耽る人であつた。月日は何の爲めに去るのであらう。新しい幸福を齎す爲めに新しい月日が来るのでなかつたならば、どうして幸福の満ちて居る瞬時に義和氏の車は駐らないのであらう。「いやいや、私には決して幸福を齎す義和氏の車ではなかつた。掠め去つて行く車だつた。その車が益春には山のやうに、堆く幸福を積んで來た。あれほど愛し合つた思ひや、その幸福は消えて今日どこへ行つて仕舞つたのであらう」五娘はさう怨みながら飛び去つた一年半の月日を見る。怨みながら夫の陳三と第二夫人の益春とを見る。怨みながら黄昏のうちにあの三つ並んでゐる星のうちの一番光のうすいものを見る——あの時、あの一生のうちで一番うれ

しかつた時、あの星に祈つた私の願事は聞かれてはゐなかつたのか——五娘はさう思つて目ぶたが熱くなり長い睫毛のふるふる目をしばたいた。

### 第四十折

「それにしても夫の愛が——あれほど深かつた夫の愛が、いつからどうして益春の方へうつつて行つたらう」五娘は自然と明瞭であるこの問を、幾千度となく自分の心に繰り返す。五娘は愛さを紛らさうとして機にのぞんで、しかし長く縦る手をやめて、その代りに校のやうに休みのない思ひで心は悪い布を縦つてゐる。夫の愛は、嫉ましくも益春が夫の子をその腹に宿したその夜からに違ひない。どうして自分には夫の子が宿らないのであらう。自分には夫の寵愛も勘なければ天の寵愛も無いのだ。それにしても、守るにも及ばない戯れの約束を思つて、自分の夫に益春を第二夫人として薦めた自分が怨めしい——あの時の自分はある餘つてゐる幸福を、悲歎の底にゐる益春にも少しは分けてやりたかつたのだ。それがそつくり持つて行かれようとはどうして思はう。それにし

ても、怨めしいのは輕薄な情をもつた夫である。いやいや、夫はやはり戀しい人だ。怨めしいのは何と言つても益春である。あの時の恩を思ひ出さうとせぜに夫の愛をひとり占にして、果は心が高ぶつて自分を憫れむべきものか何かのやうに、時時氣の毒さうな目つきで偷み視てゐる。自分にははつきりとそれがわかつてゐる——氣の毒にも、五娘は幼くから幸福のなかで温室の花として養育されて、それ故順境に置かれればいくらでも優しくなり得る代りには、世に寒さのあることを知らずに、逆境には脆くひねくれ易く生れて來てゐた。

### 第四十一折

益春は戀しい人の子が自分の體のなかにあることを考へると、ぞくぞくするやうな嬉しさが湧いて、これほどまでも深い嬉しさをくれるその人を一層戀しく思ふ。もともと素直な心が更にやさしくなる。夫の愛が自分に厚いものを感ずるうれしさと一緒に五娘には濟まないと思ふ、陳三を説いて屢五娘を愛させようとする。しかし、陳三にはどうしても五娘の房の秋はうすら寒く灯がしめつぽい氣がする。五娘は陳三

善くかへることが出来るだらうか——それは實に何氣なく口を出た言葉ではあつた。しかし今になつて思へば彼のその一言が識をなしたかのやうで堪へがたく悲しい。更に具に事情を知つた時には、その感が一層に深い。彼は以前に弟が目ごろどんなに人間らしい幸福を望んでゐたかを知つてゐる故に、弟の死を思うては夜も晝も心がふさいだ。慰めがたい心を慰めようとする感情は自然と幾つかの哀詩になつた。そのうちの一つに、次のやうな意味を歌つたものがある。——地の上に藍色の玫瑰花が色咲かない限り、人の世には完全な幸福はない。ただ夢みることと信ずることがある。これを悟らずに幸福を追及する者はみな絶望する。酔つて鏡花を追ふ蝶と信じて水月に憧れる猿とを私は憫れまい。常に夢みることの出来た弟よ、私はお前の痛ましい死を傷むまい。計のある女の愛をさへ無上のものと信じたお前、お前こそは幸福を恵まれた人であつた。云云。

#### 第四十七折

益春の生んだのは男の子であつた。この生

れながらに父を知らない子供は、母の喜びであり同時に悲しみであつた。益春は子供の笑ひ顔の上に屢涙を落した。益春は喪があけても決して再び粧はない。しかし益春の美しさはそのために衰へることはなかつた。さうして未だ年若い益春に向つて再び夫を持つやうに誘ふ人は澤山あつた。その都度、益春はいつも身の傍にある子を示して「この子の爲めに」と答へた。さうしてその子はだんだん大きくなり、益春の悲しみも古曲のやうにふるくなつて行く。それは慣れては居るけれども奏でるごとに新しい力で身に沁み徹る。さうして益春の志は挫けなかつた。こんな貞潔な妻を持つた夫は死後にも幸福がのこる、人人はさう言つて益春を讃歎し陳三を黷蔑した。その陳三の墓——同時に五娘の墓——には苔が蒸して、相思子はやがて若木になり、成育した木になつた。その夢を成す枝は榮えた、その淡紅の花はこの墓を四阿のやうに覆うた。秋が來ると、朝に香華を供へる爲めに來る益春とその子との上に、蕨から彈ぜた實が驟雪のやうに落ちて來る。この紅豆はあの悲しい五娘の濡れた庭のやうに赤い。かうして益春のうへに月日が経つ、さびしくしかし美しく。何故かといふのに、彼

#### 第四十八折

の女の子供は早くから優れた智慧を示して益春に悲しい人の言葉をうれしく思ひ出させる——「後の世の中で一番えらい人になる子だ」

日と月とは人間の爲めに動くのではない。人間の禍福などには一向冷淡な日と月とはただ彼等自身の爲めに動いてゐるのかも知れない。さうして彼等自身でさへその行方を知らないために、恆に不斷の徂々をつづけて同じ道を我々は迷うてゐるのかも知れない。それらの事を我々は一切知らない。ただ我々は日と月とが東から來て西へ去るのを見る。さうしてこの同じことが果してどれだけ度度繰り返されるか、それを人間は何人も、どんな方法でも、數へ盡すことは出来ない。ただ人間の出来ることはその無限の徂々をつづける日と月との下で、それだけに、さまざまな思ひで、刻刻に生きてゆくこと——乃至は刻刻に死んで行くことだけである。さうして、益春は彼の女の生甲斐としてその愛する子——死んだ夫の生きて育つてゆく思ひを出をしつかりと守つた。この母の目にはその男の子は生育するに従つてだんだん彼の父に



書く。その意味は——私は私の浅はかな智恵から夫の深い愛を最らうとした。私は死んだやうに見せかけて夫の悲歎がどれほどだかためしに見ようとした。さうして私は私の夫を死なせた。あなたの夫を死なせた。あなたの子の父を死なせた。みんな私の曲つた心と浅い智恵とを許していただきたい。あの方には今から陰府へ行つてお許を乞ふつもりです。——それは三を驚かせ死なせた。作の遺書ではない。眞實のものである。益春に宛ててあつた。遺書は紫煙の鏡臺の上に見出されたが、その鏡臺の螺鈿玉の唐草模様が「富貴多子」であつたのも哀れではないか。

#### 第四十四折

燃え盡きて蠟涙のこぼれ傳うた銀の燭臺が井戸ばたに置かれてあつた。陳三と五娘との屍が水の底から上つた。屍と一緒に五娘の屍が二足あつた。益春は書き置を見ても五娘を庇ふつもりで多くを人々に語らない。人人は同じ時に同じ處で死んだこの若い夫婦を且つは怪しみ且つは悲しんだ。この二人を同じ一つの停に納め同じ一つの穴に葬つて同じ一つの墓を建

てた。墓碑には相思子を植ゑた。

#### 第四十五折

益春は夫に殉じて死ぬることは容易で、ひとりで生きることの却てむづかしいのを悟つた。しかし益春は、腹のなかにうごめくものを考へ、また夫がその死の前夜に偶然にも言つた言葉と思ひ合せると、どうしても生きなければならぬ。夫は彼の女を愛撫しながら言つた——「天の目からはお前こそ世の中で一番美しい娘で、それ故私のまことの妻だ。それならばこそ私の子は、私の祈願のとおほりお前の腹に宿つた。それは男の子に違ひない。さうして後には世の中で一番えらい人になる子だ」と。それが今となつて見れば益春には、何となくその腹にある子を守り育てよといふ夫の遺言のやうに思へる。益春はもう直きに生れる子供をも見ないで死んだ夫を、夫の爲めに悲しむ。子の爲めに悲しむ。又、自分自身の爲めに悲しむ。しかし夫を恨むことは少かつた。愛の薄くなつてゐた五娘の爲めにさへあの方は死ぬることをした。私の爲めにならば猶のことであつたらう。これほど眞實のある夫を持つことの出来た私

たちは幸福であつた。その方が今はもう亡い。さうして情ぶかいあの方は私がひとりでもさびしくないやうにと思つて、私には子供を遺して行つて下さつた。私はもともと身なし兒であつた。それに今ではあの方のおかげでここにこの通りに可愛い子供がある。私はもうさびしいひとりぼっちではない——益春は悲しい時にさう思ふやうに努力した。さうして奴の煙に冷たい涙を細く流した。

#### 第四十六折

陳三と五娘とに起つたこの不祥事を、益春の次に最も多く歎いたのはあの兩廣總督になつた兄であつた。彼はもう十年も以前に弟が星に祈つた願事を偷み聞いた事があつた。さうして彼から結婚の消息を得た時には、彼もその父中にあるとほり全く、弟の星への祈願が聞かれたものと思つてその幸福を祝したのに、今日その不應の死を報じた消息を手にとつて、ふと思ひ出されたのはやはりあの同じ夜に庭の樹かけで弟に言つた言葉である——「假りにお前が若し、悪運の星の下に生れて来てゐるとしたら、お前の熱心な祈願もそれをどれだけ

## 第五十一折

方方で起つた流賊のなかで、最も勢力のあつたのは陝西の男で、或る大きな馬賊の頭の婿であつた。この男は李自成と言つた。政府では最初、彼等のことを難疥のやうな病氣だ——困つたものだが、どう廣がつても命にかかはりはないと言つてゐた。それがいつの間にか盛んな勢力になつてゐて、癸酉の年には畿南、河北、湖廣のあたりへ侵入して來た。行く先き先きで火をつけたり物を掠めたりする。花婿を殺して花嫁を犯したりする。鳳陽を陥れた時には帝王の陵を發いて廟を焚き拂つた。陝西の地方は全く彼等のものになつて仕舞つた。彼等は西方から都へ押し寄せようとして居る。政府では今更にびつくりして澤山の兵を召して彼等の方へ差し向けた。洪承疇をその大將にした。

——この間に北の方からゆつくりと攻め上つて來てゐた滿洲の軍兵は、國を名告るほどの勢力になつて清と稱し創めた。この新しい國、清の天子はこのごろ自身で兵を引き連れて朝鮮の征伐をしてゐた。さうして洪承疇がやつと李自成を打拂つた頃には、清がもう都の間近まで

攻入つてゐた。天子はもう一度、洪承疇に命令をして今度清を伐たせた。天子は「今の世の中で一番えらい人はこの人だ」と思つて洪承疇を頼みにした。

## 第五十二折

大軍に逢ふと直ぐにちりぢりに分れて、それが去るとどこに隠れてゐたものか直ぐまた四方から集つて來る。これが李自成の軍隊の慣策であつた。洪承疇が清と戦ふ爲めに北へ行つた間に、復、河南で勢を盛り返した。そこで二人の王を殺して、その勢でふたたび都の方へ押し寄せて來る。李自成の軍のこの情勢を知つた時に、清と決戦をするために陣中であつた洪承疇は氣が挫けた。——たとひ今ここで清のこの大軍を征服することができたにしたら、ところが、その間に殆んど守のない都が陥つたらば何にもならない。——寧ろ、この優れた軍勢を従へてゐる清に一たん降つて、仕方がなければ大明の半分を清に與へようとも、かうして國が全く亡びるよりは未だしもいい。全く——大明の半分を割くことを申し出て清と平和を結ぼう。清のために敗けよう。その代り清の援兵

を得て流賊どもを平定しよう。そのうちには再び清と覇を爭ふ日月も來るであらう。これが洪承疇の苦しい考へであつた。さうして彼は清に降服した。洪承疇が破れたといふ風聞が都に傳へられた時、天子は彼はきつと國の爲めに殉じたのであらうと信じた。さうしてこの人を失つたのは國が亡びたと同じことだと歎いた。天子は洪承疇の爲めに祭壇を十六壇も設けて、このえらい忠臣を弔うた。しかし、死を決してゐながらも未だ死ぬことの出來ない洪承疇は、清の軍勢を導いて都を援ける爲めに怠いだ。けれども時は逝かつた。その間にもう李自成の軍が都を陥れてゐた。氣の弱い天子思宗は心が怪しくなつて玉階に近い柳の樹に自ら縊れた——「お傷はしい事だ——十三年前にさう言つてじろりと彼を見入つたあの易者の冷たい眼の光におびえながら。

李自成は安西に居て自分で王を稱へて、この逆賊は國號を大順と呼んだ。

## 第五十三折

洪承疇はまだ死ぬことは出來なかつた。彼は彼をそれほど信愛して居た天子が國に殉じたる

そつくりに見えるのも嬉しく悲しい。

#### 第四十九折

益春の子は母の姓を次いで洪氏を名乗つた。字は亨九と言ひ名は承疇である。彼は萬曆の中ごろに進士になつた。この立身の喜と一緒に彼は氣のくづをれた母を失つて悲んだ。しかしその母はその子が「後に世の中で一番えらい人になる」ことを決して疑はないで死んだ。さう信じられた子は神宗、光宗、熹宗、思宗の四代に仕へた。國は神宗の世を最後の盛りにしてだんだんと衰へて行くのではないかと思はれる前兆があつた。光宗はたつた三十日、帝王であつた。熹宗は七年帝位に居られた。それから。思宗の世になつた。さうして洪承疇は薊遼總督であつた。

#### 第五十折

思宗は、或る時、普通の人民の著物を著てこつそり宮殿から出た。さうしてそのころ評判のあつた或る易者をたづねた。天子が口を開かうとすると、この有名な易者は不機嫌さうに手

でそれを制した。彼は占はれる人から一言も聞かないで占ふといふのが白慢であつた。易者はさまざまな方法で占つて見た上で先づ言つた。

「お前は國家の事を憂へて私のところへ來たのだらう」

そこで普通の民を装うてゐる若い天子は、この言葉の権柄な易者が人の心中を見抜く力の鋭いのに感心しながら氣輕に言つた——「さうだ。私は憂國の民だ。國內がどうも騒がしい。山西には賊が起つたと言ふことだ。それに滿洲の方の軍兵がじりじりと都の方へ近づいてくるさうな。才能のある人間は國よりも自分の才能を愛してその才能を全うしようと思ふ。皆山へ隠れる。國の難儀を救はうとする人は少い。見えない光の星が出たとも言ふ。天子の御心になればさぞ御心配であらせられるだらう。さう思ふと我我まで國の前途が氣になるのだ」

「よろしい」易者が言ふ。國運は私が占つてやらう。さあ、今お前の思ひつく文字を言つて見るがいい——「それで一占つて貰ふ人は暫く考へてから答へた。『イウと言ふ字だ』」——憂國の憂か。易者は杖のやうな指で筆をと

りながら言つた。

「いや、いや。友情の友だ」

易者は紙の上へ友と大きく書いた。さうして冷にひとりを言つた。「なるほど、反の字が頭を出してゐるな」

「いや、いや。そのイウではなかつた」天子は慌てて打消した。「私の言ふのは有利の有だ」

易者は二度目に紙の上へ有と大きく書いた。さうして冷にひとりを言つた。「ふむ大明が半分無くなるのか」

「いや、いや、そのイウではなかつた」天子は慌てて打消した。「私の言ふのは癸酉の酉だ——來年は癸酉の年だから」

易者は三度目に紙の上に酉と大きく書いた。さうして冷にひとりを言つた。「ふむ悪いお方がにも下も……はて、これはどういふ事だらう」易者は筆を捨てて、上眼で占はれる人をじろりと見上げて言つた——

「お傷はしい事だ」天子は、三つの文字が人大きく書かれてゐる紙の上へ銀を一枚投げ出すと、蒼ざめた顔と顫へる聲とを隠す爲に何も言はずに急いで出て行かれた。かう呟き乍ら——悪い冗談だ。つまらぬ洒落だ。——だが、どうも氣になる……



て私を育ててくれたお母さん。私のさびしいお母さん。私はどこまでもあなたの子だ。彼は心にある母の像を呼び起して幼児の如く切なく寄り纏つた。

## 第五十五折

「どうぞ、私の星よ世の中で一番美しい娘を私の妻に授けて下さい。私の妻の腹に宿つて出来る私の男の子を世の中で一番美しい人にならせて下さい。さういふ願事を彼の星に祈つた陳三や、その陳三と死を併にし慕を一つにした第一夫人——世の人に一番美しいと言はれた五娘や、陳三のえらい男の子を腹に宿した第二夫人——天の目で一番美しいと思はれた益春や、そのえらい男の子洪承疇や、その外のすべての彼等が生きてゐて、それぞれに笑ひ、嘆き、溜息をし、涙を流し、憤り、勝ち誇り、淋しきに堪へ、さて、死んで仕舞つてから、もう三百年以上になる。その間に清の國も亦明と同じやうに亡びた。ただ泉州に近い英内には、陳三の五落の家が普江の岸に沿うて流水に影を映じながら、崩れさうになつてではあるが、今でもまだ残つてゐる。——しかし、私はその家は見な

い。私は去年旅をしてあの近くへは行つたが、泉州へはたうとう行かないのだから。

(大正十年三月作)

## 海邊の戀

こぼれ松葉をかきあつめ  
をとめのごとき君なりき、  
こぼれ松葉に火をはなち  
わらべのごときわれなりき。

わらべをとめよりそひぬ  
ただたまゆらの火をかこみ、  
うれしくふたり手をとれぬ。  
かひなきことをただ夢み、

入り日のなかに立つけぶり  
ありやなしやとただほのか、  
海べのこひのはかなさは  
こぼれ松葉の火なりけむ。

(殉情詩集より)

## 水邊月夜の歌

せつなき戀をするゆゑに  
月かけさむく身にぞ沈む。  
もののあはれを知るゆゑに  
水のひかりぞなげかるる。  
身をうたかたとおもふとも  
うたかたならじわが思ひ。  
げにいやしかるわれながら  
うれひは清し、君ゆゑに。

(殉情詩集より)

## 後の日に

つれなかりせばなかなかに  
そらにわすれて過ぎなまし、  
そもいくたびしほりけむ  
とたもせつなしのかのたもと。

せつなさわれにつもるとも  
沾ぢてはかわくものなれば  
昨日のたもとにこと問はむ  
ぬるるやいかにけふもなほ

(殉情詩集より)

ことを知つて知らないふりをしてゐる、何故かといふに、彼は彼の天子の仇である李自成を討たなければならぬからである。彼は清の大將の吳三桂のために大順を亡ぼす計をめぐらした。その謀によつて李自成は九宮山といふ山中へ身をもつて逃げ込まねばならなくなつた。この暴虐な逆賊の大將は村民たちから追撃された。さうしてこの大順國の王も遂に自分で縊れて死んだ。洪承疇は今こそもう命を捨てていいやうに思つた。而もやはり彼は死ぬことができなかった——ちやうど、彼の母が夫のために命をすてることの容易なことを感じながら生きなければならなかつたやうに。洪承疇は李自成を討つために清の軍に従うてゐるうちに、心にもなく清の恩になつて來た。清の軍兵のために彼は天子の仇を報い得たのである。そればかりではない。清の順治帝は洪承疇を見て亂世には珍らしいえらい人だと思つた。さまざまに説いて洪承疇を清に仕へるやうに勧めた。この苦しい知遇をどうしても辭退できなくなつた時に、洪承疇は最後に言つた。「若し、私の願が聞いていただけるならば私は仕へませう——さうしてその願といふのは、國を開いたばかりで未だ少しも定まつて居ない清國の制度や法律を彼自身に定めさせて貰ひたい、と言ふのであつた。實際彼には軍事上の才能があつたやうに政治的の才能もあつた。さうして洪承疇は清に仕へた。——國の名は代つた。國を治めるものは代つた。しかし治められるところの民は、私をあれほど信愛して下さつた帝王の民と同一の民である。私は恥を忍んでこの先帝の民に仕へよう。この先帝の民の爲めに幸福な制度を設けよう。さう洪承疇は考へたからである。

## 第五十四折

洪承疇は日夜この薪らしい仕事に喜んで勉めた。さうして彼は彼の耳に自づと這入つて來る彼に對する或る非難を聞き流した。人人は言つた。「洪承疇は不忠の臣である。彼を寵愛された思宗は一途に彼が國に殉じたものと思ひ込まれて亡くなられた。思宗は彼が清に降つたといふことを聞かれた時には彼の生死などは一言も問はれずに、あれほど盛大に彼を弔はれた。その彼は平然と生きてゐた。しかも今敵國のために仕へてゐる。彼の母は貞節ある夫人であつた。さうして彼は無節の大夫である——」洪承疇はこの言葉を聞いて憤らなかつた。また敢

て嘲を解かうとも努めなかつた。もともと信じてない人人に言ひ譯をして見たところ、何にならう、但、洪承疇はさびしかつた。何人も自分の心事を思ひやつてくれないといふさびしさが堪へがたかつた。それは微弱な毒を溶かした苦い酒のやうに、日々に彼を衰へさせて行くのではないかとさへ感じられた。そのさびしさが彼を仕事に驅つた。夜ふけて彼は彼の仕事の草案の筆を措きながら、目を自分の内側にむけて心を噛むさびしさをつくづくと見守りながらひとり心に言つた。「自分はえらい人であるかどうかを自分で知らない。しかし、このさびしさは最もえらい人間が支拂ふ最も率の高い租税であらう。喜んでこれが支拂はれるやうになれば人間は神仙である。年老いた彼は靜かに往事を思ひ出して母をなつかしむことが頻であつた。「母は私をどこまでも信じてゐてくれた。若し、今日母がゐてくれたならば、私の心持をわかつてはくれないまでも、私の言ふとほりを信じてくれたらうに。それにしても、よく私に、お前は後に世の中で一番えらい人になる子だと言つた私の母は、お前は後に世の中で一番さびしい人になる子だと何故言はなかつたらう。……お母さん。孤兒として他家に養はれ寡婦になつ

調土人の赤嵌城を目あてに歩いて行く道では、目につく家といふ家は悉く荒れ果てたままの無住である。あまりふるくない以前に外國人が經營した製糖會社の社宅であるが、その會社が解散すると同時に空屋になつてしまつた。何れも立派な煉瓦づくりの相當な構への洋館で、ちよつとした前おさへ型ばかりは残つてゐる。しかし砂ばかりの土には雜草もあまり蔓つてはゐない。その並び立つた空屋の窓といふ窓のガラスは、子供たちがいたづらに投げた石の爲めでもあらうか、破れて穴があいてないものはなく、その軒には巢でもつくつてゐるのか驚くほどたくさん雀が、黒く集合して喋りつづけてゐる。

私たちは試みにその一軒のなかへ這入つてみた。内にはこなごなに散ばつて光つてゐるガラスの破片と壊れた窓枠とが塵埃に埋まつてゐるよりほかは何もなかつた。しかし二階で人の話聲がするので上つて行つてみると、そのペランダに乞食ではないかと思へるやうな装ひをした老人が、これでも使へるのだらうかと疑はれるぼろぼろになつた漁網をつくるつてゐる傍に、この爺の孫でもあるか、五つ六つの男の子がしきりにひとり言を喋りながら、手であたり

の埃を掻き集めて遊んでゐたらしいのが、我々の足音に驚いて闖入者を見上げた。老漁夫も我を怖れてゐるやうな目つきをした。彼等はどこか近所の者であらうが、暑さをこの廢屋の二階に避けてゐたのであらう。ともかくもこれほど立派な廢屋が軒を連ねて立つてゐる市街は、私にとつては空想も出来なかつた事實である。(この二三年後に臺灣の行政制度が變つて臺南の官衙でも急に増員する必要が生じた時、これらの安平の廢屋を一時、官舎にしたらよからうといふ説があつたが、尤もなことである。)

赤嵌城址に登つて見た。ただ名ばかりが残つてゐるので、コンクリートで築かれた古い礎のあとがあるとはいふけれども、どれがどれだかさすがの世外民もそれを知らなかつた。今は税關俱樂部の一部分になつてゐる小高い丘の上である。私の友、世外民はその丘の上で例の古圖を取りながら所謂安平港外の七鯉身のこととを指さし、また古書に見えてゐるといふ鬼工奇絶と評せられる赤嵌城の建築などに就て詳しく説明をしてくれたものであるが、私は生憎と皆忘れてしまつた。さうして私の驚いたことといふのは、むかし安平の内港と稱したところのものは、今は全く埋没してしまつてゐる

のだといふだけの事であつた——全くあまり單純すぎた話ではあるが。事實、私は歴史なんでものはにてんで興味がなほど若かつた。さうしても世外民の影響がなかつたならば、安平などといふ愚にもつかないところへ來てみるやうな心掛さへなかつたらう。さういふ程度私だから、同じやうな若い身で世外民がしきりと過去を述べ立てて咏嘆めいた口をきくの、さすがに支那人の血をうけた詩人は違つたものだ位にしか思つてゐなかつたのである。

そのやうな私ではあり、またいくら蘭人壯圖の址と言つたところで、その古を偲ぶよすがになるやうなものとも見當らないのだから一向仕方がなかつたけれども、それでもその丘の眺望そのものは人の情感を唆らざるにはゐないものであつた。單に景色としてみても私はあれほど驚涼たる自然がさう澤山あらうとは思はない。私にもし、エドガア・アラン・ポオの筆力があつたとしたら、私は恐らくこの景を掻き出し、彼の「アッシャ家の崩壊」の冒頭に對抗することが出来るだらうに。

私の目の前に屍がつたのは一面の泥の海であつた。苔ばんだ褐色をして、それがしかもせつこましい波の穂を無數にあとからあとから



# 女 誠 扇 綺 譚

## 一 赤 嵌 城 址

クツタウカン——字でかけば禿頭港。すべて禿頭といふのは、面白く言葉だが物事の行きづまりを意味する俗語だから、禿頭港とはやがて安平港の最も奥の港といふことであるらしい。臺南市の西端で安平の廢港に接するあたりではあるが、さうして名前だけの説明を聞けばなるほどと思ふかも知れないが、その場所を事實目前に見た人は、寧ろ却つてそんなところに港と名づけてゐるのを訝しく感ずるに違ひない。それはただ低い濕つぽい蘆荻の多い泥沼に沿うた貧民窟みたやうなところで、しかも海からは殆んど一里も距つてゐる。沼を埋め立てた塵塚の臭ひが暑さに蒸せ返つて鼻をつく厭な場末で、そんなところに土着の臺灣人のせせこまし家が、不行儀に、それもぎつしりと立並んでゐる。土人街のなかでもここは最も用もない邊なのだが、私はその日、友人の世外民に誘

はれるがままに、安平港の廢市を見物に行つてのかへり路を、世外民が参考のために持つて來た臺灣府古圖の導くがままに、ひよつくりこんなところへ來てゐた。

\* \* \* \* \*

人はよく荒廢の美を説く。又その概念だけなら私にもある。しかし私はまだそれを痛切に實感した事はなかつた。安平へ行つてみて私はやつとそれが判りかかつたやうな氣がした。そこにはさまで古くないとは言へ、さまざまの歴史がある。この島の主要な歴史と言へば、蘭人の壯圖、鄭成功の雄志、新しくはまた劉永福の野望の末路も皆この一港市に關聯してゐると言つても差支ないのだが、私はここでそれを説かうとも思はないし、また好古家で且詩人たる世外民なら知らないこと、私には出來さうもない。私が安平で荒廢の美に打たれたといふのは、又必ずしもその史的知識の爲めではないのである。だから誰でもいい、何も知らずに

でもいい。ただ一度そこへ足を踏み込んでみさへすれば、その衰頹した市街は直ぐに目に映る。さうして若し心ある人ならば、そのなかから悽然たる美を感じさうなものだと思ふのである。

臺南から四十分ほどの間を、土か石かになつたつもりでトロツコで運ばなければならない。平坦たる殆んど一直線の道の兩側は、安平魚の養魚場なのだが、見た目には、田圃ともつかず沼ともつかぬ。海であつたものが埋まつてしまつた——といふより埋まりつつあるのだが、古圖によるとともとと淺淺であつたものと見えて、名所圖繪式のこの地圖に水牛に曳かせた車の軛が半分以上も水に漬つてゐるのは、このあたりの方角であらう。しかし今ばかりは田圃のやうではあつても陸地には違ひない。さうしてその、變化もとりとめもない道をトロツコが滑走して行く。熱國のいつも青青として草いきれのする場所でありながら、荒野のやうな印象のせるか、思ひ出すと、草が枯れてゐたやうな氣持さへする。これが安平の情調の序曲である。

トロツコの着いたところから、むかし和蘭人が築いたといふ THE CASTLE ZEELANDIA 所

人間のかけを見かけなかつた事である。通筋の家々は必ずしも皆空屋でもないであらうのに、どこの門口にも出入する人はなく、また話聲さへ洩れなかつた。私たちが町を一巡した間に逢つた人間といふのはただあの廢屋のゼランダにゐた老漁夫と小兒とだけである。行人に逢ふやうなことなどは一度もなかつた。深夜の街とてもこれほどに人氣が絶えてゐることはないと言ひたい。しかも眩しい太陽が照りつけてゐるのだから、さびしき一種別様の深さを帯びてゐた。我々は黙々と歩いた。不意にあたりの家並のどこから、日ざかりのつれづれを慰めようとしてもいふのか、絃と呼ばれてゐる胡弓をならし出した者があつた。

「月下の吹笛よりも更に悲しい」

詩人世外民は、早くも耳にとめて私にさう言ふのであつた。月下の吹笛を聯想するところに彼の例のマンネリズムとセンチメンタリズムとがあるが、でも彼の感じ方には賛成していい。

私たちは再び養魚場の土堤の路をトロツコで歸つたが、その歸り着いたところ、臺南市の西郊が、私のこれか言はうとする禿頭港なのである。安平見物を完うするためにこのあた

りをも一巡しようと思ふと、世外民が言ひ出した時、時刻が過ぎてしまつてひどく空腹を覚えてゐながらも私が別に、もう澤山だと言はなかつたところを見て、私がこの半日のうちに安平に對して多少の興味を持つやうになつてゐたことは判るだらう。

しかしトロツコから下りて一町とは歩かないうちに、私は禿頭港などは蛇足だつたと、思ひ始めたのである。ただ水溜の多い、不潔な入組んだ場末といふより外には、一向何の奇もありさうには見えなかつた。

\* \* \* \* \*

## 二 禿頭港の廢屋

道を左に折れると私たちはまた泥水のあるところへ出た。片側町で、路に沿うたところには石垣があつて、その垣の向うから大きな榕樹が枝を路まで突き出してゐた。私たちはその樹かげへぐつたりして立ちどまつた。上衣を脱いで煙草へ火をつけて、さて改めてあたりを見まはすと、今出て来たこの路は、今までのせせつこましい貧民區よりはよほど町らしかつた。現に私たちが背を倚せてゐる石垣も古くこそ

はなつてゐるけれども相當な家でなければ、このあたりでこれほどの石垣を外圍ひにしたのはあまり見かけない。さう思つてあたりを見渡すと、この一廓は非常にふんだんに石を用ゐてゐる。みな古色を帯びてそれ故目立たないけれども、このあたりが今まで歩いて來たすべての場所とその氣持が全く違つて、汚いながらも妙に裕かに感ぜられるといふのも、どうやら石が澤山に用ゐることがその理由であるらしい。

この町筋——と云つても一町足らずで盡きてしまふが、この片側町の私たちの立つてゐる方は、それぞれに石圍ひをした五六軒の住宅であるが、その別の側、即ち私たちが向つて立つた前方は例によつて惡臭を發する泥水である。黒い土の上には少しばかりの水が漂うてゐて、淺いところには泥を担り歩きながら豚が五六疋遊んでゐるし、稍深きところには油のやうなどろどろの水に波紋を畫きながら家鴨が群れて浮んでゐる。この水溜の普通のものとは違ふところは、これは漆の底に割れ残つたものであることである。大きな切石がこの泥池のぐりりを御丁寧に取圍んでゐる。しかも幅は七八間もあり、長さはと言へばこの町全體に沿うて

と續いて来る、十重二十重といふ言葉はあるが、あのやうに重ねかきねに打ち返す浪を捲く言葉は我の語彙にはないであらう、その浪は水平線までつづいて、それがみな一様に我の立つてゐる方向へ押寄せて来るのである。昔は赤坂城の真下まで海であつたといふが、今はこの丘からまだ二三町も海濱がある。その遠さの爲めに浪の音も聞えない程である。それほどに安平の外港も埋まつてしまつたけれども、しかしその無限に重なりつづく濁浪は生温い風と極度の遠浅の砂とに煽られ、今にも丘の脚下まで押寄せて来るやうに感ぜられる。その濁り切つた浪の面には、熱帯の正午に近い太陽さへ、その光を反射させることが出来ないといえる。光のないこの奇怪な海——といふよりも水の林野原の真中に、無邊際にも重なりつづく浪と間斷なく聞ひながら一葉の舳舻が、何ぞ目的にか、いかにすらに沖へ沖へと急いでゐる。

白く灼けた眞晝の下、光を全く吸ひ込んでしまつてゐる海。水平線まで重なり重なる小さな浪頭。洪水を思はせるその色。圖翻と漂うてゐる小舟。激しい活動的な景色のなかに聞として何の物音もひびかない。時折にマラーヤ患者の息吹のやうに蒸れたのろい微風が動いて來

る。それらすべてが一種内面的な風景を形成して、象徴めいて、惡夢のやうな不氣味さをさへ私に與へたのである。いや、形容だけではない、この景色に接してから後、私は亂酔の後の日などに、ここによく似た殺風景な海濱を惡夢に見て怯かされたことが二三度もあつた。——このやうな海を私がしばらく見入つてゐる間、世外民もまた私と同じやうな感銘を持つたかも知れない、——このよく喋る男もたうとう押黙つてしまつてゐた。私は目を低く垂れて思はず溜息を洩した。尤も、多少は感銘のせるであつたかも知れないが、大部分は炎天の暑さに喘いだのである。今更だが、かういふ暑さは舳舻傘などのかげで防げるものではない。

「ウ、ウ、ウ、ウ——」

不意に微かに、たとへばこの景色全體が呻くやうな音が響き渡つた、見ると、水平線の上に一隻の蒸汽船が黒く小さく、その煙筒や橋などが僅に鮮かに見える程の遠さに浮んでゐた。沿岸航路の船らしい。さうしてさつきから浪に捲れてゐる舳舻はそれの舳で間もなく本船の來ることを豫想して急いでゐたものらしい。

「あの蒸汽はどこへ着くのだい」  
私が世外民に尋ねると我我の案内について

來たトロッコ運搬夫が代つて答へをした——  
「もう着いてゐる。今の汽笛は着いた合圖です」

「あそこへか。——あんな遠くへか」

「さうです。あれより内へは來ません」

私はもう一べん沖の方を念の爲めに見てから  
呟いた——

「フム、これが港か！」

「さうだ！——世外民は私の聲に應じた。」「港だ。昔は、昔は臺灣第一の港だ！」

昔は……私とも思はず無意味に繰返した。それが多少感動的でないやだつたと気がついた時、私は軽く虚無的に言ひ直した。「昔は……か丘を下りて我の出したところは、もと來た路ではなかつた。ここは比較的舊い町筋である」と

見えて、一たいが占びてゐた。あたりの支那風の家屋はみんな貧しい漁夫などのものに見えて、あのエランダのある二階建の堂堂たる空屋にくらべるまでもなく、小さく衰れてあつた。さうしてもともと所謂軀身たる出島の一つであつたと見えて、地質も自から變つてゐた。砂ではなくもつと軽い、歩く度に足もとからひどい塵が舞ひ立つ白茶けた土であつた。但、來たときと一向變らない事は、そのあたりで私は全く



彼から言はれるまでもなく私もそれを見て取つてゐた。理由は何かないが、誰の目に見てもあまりに荒れ果ててゐる。澤山の窓は残らずしまつてゐるが、さうでないものは戸そのものももう朽ちて、なくなつてしまつたに相違ない。「全く豪華な家だな。二階の戸を欄干見給へ。實に細かな細工だ。またあの壁をごらん。あの家は裸の煉瓦造りではないのだ。美しい色ですつかり化粧してゐる。一帯に淡い紅色の漆喰で塗つてある。そのぐるりはまたくつきりと空色のほそい輪廓だらう。色が褪せて白つちやけてしまつてゐるところが、却つて夢幻的ではないか。走馬樓の軒下の雨に打たれないあたりには、まだ色彩がほんのりと残つてゐる——私が延坪を考へてゐる間に、同じ家に就て世外民には彼の觀方があつたのだ。彼の注意によつて私はもう一べん仔細に眺め出した。なるほど、二階の走馬樓——ゼランダの奥の壁には、淡いながらに鮮かな色がしつとり、時代を帯びてゐた。事實この廢屋は見てゐるほど、その隅隅から素晴らしい豪華が滾滾と湧き出して來るのを感じた。たとへばその礎である。普通土間のなかに住んでゐる支那人の家は、その礎は一般にごく低い。地面よりただ一足だ

け高くつくられてゐる。それなのに今我々の目の前にあるこの廢屋の礎は、高さ三尺ぐらゐはあり、やはり見事に描つた石で積み疊んであつた。もつと注意すると、水門の突當りにあつた場所には、その汀に三級の石段があることばもう知つてゐるが、その奥の家の高い礎にもやはり二三級の石段がある。その間、間ほどの石段の兩側に、二本の圓柱があつて、それが二階の走馬樓を支へてゐるのだが、この圓柱は、……どうも少し遠すぎてはつきりとはわからないけれども、普通の外の柱よりも壯麗である。上の方には何やらごちやごちやと彫刻でしてあるらしい。その根元にあたるあたり、地上にはやはり石の細工で出來た大きな水盤らしいのが、左右相對をして据ゑつけてある。——これらの事物がこの正面を特別に堂堂たるものにしてゐるのが私の注意を惹いた。私には、そこがこの家の玄關口ではないかと思はれて來た。そこで私は自分の疑問を世外民に話した——「このうちは、君、ここが正面、——玄關だらうかね」

「さうだらうよ——濠の方に向いて？」

世外民の「港」といふ一言が自分をハツと思はせた。さうしてそれは口のなかで禿頭港と呼んでみた。私は禿頭港を見に來てゐながら、ここが港であつたことはいつの間にやらつた忘却してゐたのである。一つには私は、この目の前の驚きな廢屋に見とれてゐたのと、もう一つにはあたりの變遷にどこにも海のやうな、港のやうな名残を捜し出すことが出來なかつたからである。この點に於ては世外民は、殊に私とは異つてゐる。彼はこの港と興を共にした種族でこの土地にとつては私のやうな無關心者ではなく、またそんな理窟よりも彼は今のさつき古圖を披いてしみじみと見入つてゐるうちに、このあたりの往時の有様を腦裡に描いてゐたのであらう。「港」の一語は私に對して一種靈感的なものであつた。今まで死んでゐたこの廢屋がやつと靈を得たのを私は感じた。泥水の濠ではないのだ。この廢渠こそむかし、朝夕の満潮があつた石段をひたひたと浸した。走馬樓はきららかに波の光る港に面して展かれてあつた。さうして海を玄關にしてこの家は在つたのか。——してみれば、何をする家だか知らないけれども、この家こそ盛時の安平の絶好な片身で

ある。深さは少くも十尺はある。この漆の向うには汀からすぐに立つた高い石圍ひがある。長い石垣のちやうど中ほどがすつかり瓦解してしまつてゐる。いや、悉く崩れたのではないらしい。もともとその部分がわざと石垣をしてなかつたらしい。その角であつた一角がくづれたのに違ひない。落ち崩れた石が幾塊か亂れ重なつて、埋め残された角角を泥の中から現してゐる。その大きな石と言ひ巨濤と言ひ、恰も小規模な古城の廢城を見るやうな感じである。いや、事實、城なのかも知れないのだ——崩れた石垣の向うのはづれに遠く、一本の龍眼肉の大樹が黒いまでに来るく、青空へ枝を茂らせてゐて、そのかげに灰白色の高い建物があるのは、ごく小型でこそはあれ、どうしたつて銃機でなければならぬ。圓い建物でその平な屋根のふちには規則正しい凹凸をした砦があり、その下にはまた眞四角な銃眼窓がある。

「君！」

私は、またしても古圖をひらいてゐる世外民の肩をゆすぶつて彼の注意を呼ぶと同時に、今発見したものを指さした——

「ね、何だらう、あれは？」

さう言つて私は歩き出した、その小さな橋

の砦の方へ。——屋敷のなかには、氣がつくとほかにも屋根が見える。その長さで家は大きな橋だといふことがわかる。その屋敷を私は見たいと思つた。石圍ひの崩れたところからきつと見えると思つた。何でもいい、少しは變つたものを見つければ、禿頭港はあまり忌まひしすぎる。

石垣のとざれた前まで来ると、それを通して案の定、家がしかも的面に見えた。いや、偶然にさうだつたのではない。この家はさう見るやうな意向によつて造られてゐたのである。また石圍ひの中絶してゐるのはやはりただ崩れ果てたのではなく、もともとそこが特にあけてあつた跡がある。水門としてであらう。何故かといふのに漆はすつとこの屋敷の庭の中まで喰入つてゐて、崩れた石圍ひの彼方も亦、正しい長方形の小さい漆である。十艘の舳板を並べて繋ぐだけの廣さは確にある。さうしてその汀に下りるために、そこには正面に石段が三級ある。しかもその水は潤き切つてしまつて、露はな底から石段まではどう見ても七尺以上の高さがあつたならば、今は豚と家鴨との遊び場所であるこの大きな空しい漆も一面に水になるであらう。それにしてもこれ程の漆を庭園の内と外とに築いた家は、その正面からの外觀は、三つの棟によつて四字形をしてゐる。凸字形の漆に對して、それに沿うて建てられてゐる。正面に長く展がつた軒は五間もあり、またその左右に翼をなして切妻を見せつてゐる出屋の屋根は各四間はあらう。それが總二階なのである。

——「たいが小造りな平家を幾つも並べて建てる習慣のある支那住宅の原則から見ても、これは甚だ大きな住居と言へるであらう。私はくたびれた足を休める意味でしやがんだ席に、上の上へこの家の見取圖をかき、それから目分量で測つた間敷によつて、この建物は延坪百五十坪は優にあると計算した。たい私は必要なのは非ともしなければならぬ事に對してはこの上なくづばらなくせに、無用なことにかけては妙に熱中する性癖が、その頃最もひどかつた。

「何をしてゐるんだい？」

世外民の聲がして、彼は私のうしろに突立つてゐた。私は何故かいたづらを見つけれられた小兒のやうにばつて悪いのを感じたので、立つて土の上の圖紙を足で踏みにじりながら、

「何でもない……」

「大きな家だね」

も知れないが、それにしても、風雨に曝されて物毎にさびれてゐる事が厭味と野卑とを救ひ、それにやつとその一部分だけが残されてゐるといふことは却つて人に空想の自由をも與へたし、また哀れむべきさまざまな不調和を呈出するより前にただその異國情緒を先づ喜ぶといふこともあり得る。況んや、私は美的鑑識にかけでは單なるイカモノ喰ひなことは自ら心得てゐる。

細長い石を綱代に組み並べた床の縁は幅四尺ぐらゐ、その上が二階の走馬樓である。私たちがそこへ上つてみたのだ。観音開きになつた玄關の木扉は、一枚はもう毀れて外れてしまつてゐた。残つてゐる扉に手をかけて、私は部屋のなかを覗いた。——二階へ上る階段がどこにあるだらうかと思つて、支那家屋に住み慣れてゐる世外民には大たいの見當が判ると見えて、彼はすぐづかづかと二三歩廣間のなかへ歩み込んだ。

「××××、×××××！」

不意にその時、二階から聲がした。低いが透きとほるやうな聲であつた。誰も居ないと思つてゐた折から、ことにそれが私のそこに這入らうとする瞬間であつただけに、その呼吸が私

をひどく不意打した。ことに私には判らない言葉を、だから鳥の叫ぶやうな聲に思へたのは一層へんであつた。思ひがけなかつたのは、しかし、私ひとりではない。世外民も踏み込んだ足をびたと留めて、疑ふやうに二階の方を見上げた。それから彼は答へるが如くまた、問ふが如く叫んだ——

「××××！」

「××××！」

——世外民の聲は、廣間のなかで反響して鳴つた。世外民と私は互に顔を見合せながら再び二階からの聲を待つたけれども、聲はそれつきり、もう何もなかつた。世外民は足音を竊んで私のところへ出て來た。

「二階から何か言つたらう」

「うん」

「人が住んでゐるんだね」

私たちは聲をしのばせてこれだけの事を言ふと、這入つてくる時とは大へん變つた半調で——つまり遠慮がちに、黙つて裏門から出た。しばらく沈黙したが出てしまつてからやつと私は言つた。

「女の聲だつたね。一たい何を言つたのだい？ はつきり聞えたのに何だかわからなかつた」

「さうだらう。あれや泉州人々の言葉たものね。普通に、この島で全く廣く用ゐられるのは廈門の言葉で、それならば私も三年ここにある間に多少覚えてゐた——尤も今は大部分忘れたが。泉州の言葉は無論私に解らう筈はなかつたのである。

「で、何と言つたの——泉州言葉で——」

「さ、僕にもはつきり解らないが。どうしたの？ なぜもつと早くいらつしやらない。……」

——と、何だか……

「へえ？ そんなさかい。で、君は何と言つたの」

「いや、わからないから、もう一度聞き返しただけだ」

私たちはきよんとしたまま、疲労と不審と空腹とをこつちやに感じながら、自然の筋道として再び先刻の濠に沿うた道に出て來た。ふと先方を見渡すと、自分たちが先刻そこから初めてあの廢屋を注視したその同じ場所に、老婆がひとり立つて、ちつと我我がしたと同じやうに濠を越してあの廢屋をもの珍しげに見入つてゐるのであつた、それが、近づくに従つて、今のさつき世外民に裏門への道を教へた同じ老婆だといふことが分つた。



はなかつたか。私はこの家の大きさと古さと美しさとだけを見て、その意味を今まで全く氣づかずにゐたのだ。

今まで氣づかなかつただけに、私の興味と好奇とが相續れて一時に昂つた。

「這入つてみようぢやないか。——誰も住んでゐないのだらう」私は息込んでさう言つたものの、漆を距てまた高い石圍ひを繞してゐるこの屋敷へはどこから這入れるのだから、ちよつと見當がつかかなかつた——這ばたの廢屋なら、さつき安平でやつたやうについ、つかつかと這入り込んでみたいのだが。後に考へ合せた事だが、入口が直ぐにわからないといふこの同じ理由が、この廢屋を、その情趣の上でも事實の上でも、陰氣な別天地として保存するのに有力であつたであらう。

その家のなかへ這入つてみたいといふ考へが、世外民に同感でない筈はない。世外民はきよらきよとあたりを見廻してゐたが、我々が背をよせて立つてゐた石圍ひの奥に、家の日かげに臺灣人の老婆がひとり、棕櫚の葉の團扇に風を求めて小さな木の椅子に腰かけてゐるのを彼は見つけた。彼は直ぐにそこへ歩いて行つて、何か話をしてゐた。向側の廢屋を指さし

たりしてゐる様子で、そのふたりの對話の題目はおのづと知れる。

世外民はすぐに私の方へ歸つて來た。「わかつたよ、君。あの道を行つて——彼は言ひながら漆のわきにある道を指さして一向うに裏門があるさうだ。少し人組んでゐるやうだが、行けば解るとき。——やつたり廢屋だ。もう永いこと誰も住んでゐないさうだ。もとは沈といふ臺灣南部で第一の富豪の邸だつたのださうだ。立派な筈さ——」

話しながら私たちはその裏門を搜した。世外民が不確な聽き方をして來てゐたので、私たちはちつとまごつた。こせこせした家の間へ入り込んでしまつた。尋ねようにもあたりには人は見當らなかつた。このあたりは割に繁華なところらしいのだが、人氣のないのは、今が午後二時頃の日盛りで、彼等の風習でこの時刻には大抵の人間が午睡を食つてゐるのである。私たちは仕方なしにいい加減に歩いたが、もともと近いところまで來てゐた事ではあり、また日ざす家は覺えてゐたから自とわかつた。但、その家のはの漆のあちらから見た時には、ただ一つの高樓であつたが、裏へ來て見ると、その樓の後には低い屋根が二三重もつながつてゐた。

所謂五層の家といふのはこんなのであらうが、大家族の住居だといふことが一層はつきりすると同時に、あの正面の二階建が主要な部屋だといふことは更に確かだ。私たちは他の場所よりも、あの走馬樓のある二階や圓柱があつた玄關が第一に見たかつた。それ故、私たちは裏門を入るとすぐに、低い建物はその外側を廻つて、表へ出た。

圓柱はやはり石造りであつた。遠くから、上部にござやござやあると見たものは果して彫刻で、二枚の柱ともそこに纏つてゐる龍を彫取つたものであつたが、一つは上に昇つてゐたし、一つは下に降りようとしてゐた。雨に打たれた部分の四みのあたりには、それを影つた朱や金が黒みながらもくつきりと残つてゐた。割合から言つて模様の部分が多すぎで、全體として柱が低く感ぜられたし、また家の他の部分にくらべて多少古風で莊重すぎるやうに私は感じた。しかし私と世外民とは、この二つの柱をてんでに撫でて見ながら、この家が遠見よりも、ここに來て見れば近まきりして贅澤なのを知つた。細部が自と目についたからである。尤も、もし私に眞の美術的見識があつたならば、たかが植民地の暴富者の似而非趣味を嘲笑つたか

賑やかたところは東南にもなかつた程だといひます。——沈は本當に安平港の主だつたと見える。——沈家が没落すると一緒に、安平港は急に火が消えたやうになりました。沈のゐない安平港へは用がないと言つて來なくなつた船が澤山あるさうです。それに海はだんだん淺くなるばかりで、しかもいつの間にか氣がついた頃にはすつかり埋まつてゐたのですよ。この急な變り方までが、まるで沈家にそつくりだと、今もよくみんなして年寄たちは話し合ひますよ。——沈の家ですか？　それがまた不思議なほど急に、一度に、唯の一夏の、しかも只の一晚のうちに急に没落したのです。百萬長者が目を開けて見るとを食になつてゐたのです。夢でもかうは急に變るまい。他人事ながら考へれば人間が味氣なくなる——と、家の父は、この話が出るとうよくさう言ひました。何でも沈の家ではその時、盛りの絶頂だつたのです。今の普請もついでその三四年前に出來上つたばかりで、その普請がまた大したもので、石でも木でもみんな漳州や泉州から運んだので、五十艘の持船がみんな、その爲めに二度つつ、そればかりに通つたといふ程ですよ。それといふのも沈家には、この子の爲めなら、双親とも目がないといふ可

愛い、ひとり娘があつて、その掙取りの用意にこんな大がかりな普請をしたものだからです。それに美しい娘だつたさうです——私が見た時には、もう四十ぐらゐになつてもゐたし、落ぶれてへんになつてはゐましたが、それでもさう聞けばなるほどと思ふやうなところはありました。……そんなにまた、急に、どうして沈の家が没落したのです？　四外民は、沈急に話の重大な點をとらへてたづねた。

——ごめんなさい。私は年寄で話が下手で——聞いてゐるうちに解つて來たが、この老婆は上品な中流の老婦人であつた。怖ろしい海の颶風だつたのです。陸でも崩れた家が澤山あつたさうです。それはさうでせう。——ごらんない、あの沈の家の水門の石垣でさへあの角が吹き崩されたのださうです。さうしてそれを直すことさへもう出來なかつたので、今もそのままに残つてゐるのですが、夜が明けてみてその石垣——そのころはまだ築いたばかりの新しい石垣の、あんな大きな石が崩れ落ちてゐるのを見て、沈の主人は心配さうにそれを見てゐたさうです。運の悪い事に、その晩、宵のうちは静かな満月の夜でもあつたさうだし、沈の五十艘の船

はみんな海に出てゐたのださうです。沈の主人は——五十位の人だつたさうですが、崩れた石垣を見るにつけても、海に出てゐた持船が心配だつたのでせう。船の便りは容易に知れなかつたさうですが、五日経つても十日経つても歸る船はなかつたさうです。ただ人間だけが、それも船出した時の十分の一ぐらゐの人数がぼつぽつと病み呆けて歸つて來て、それぞれに難船の話を傳へただけでした。無事に歸つた船は只の一艘もなかつたさうです。でも、人の噂では、港にゐて颶風に出會はなかつた船も三艘や五艘はあつたに相違ないが、友が本當に難船したことから惡企みを思ひ、自分達の船も難船して自分は死んだやうな顔をして、船も荷物も横領したまま遠くへ行つてしまつて歸つて來なかつたものも、どうやらあるらしいと言ひます。現に何處とかの誰は廣東で、死んだ客の何の某に逢つたの、名前と色どりとこそ變つてゐたが沈の船の「鰐鰐」とそつくりのものを廈門で見かけたなどと、言ふ人もあつたさうです。何にしても一林に荷物を積み込んだ大船が五十艘歸つて來なかつたのです。その騒ぎはどんなだつたか判るではありませんか。なかには沈自身に荷物ではないものも半分以上あつて、荷主

「お婆さん」その前まで来た時に世外氏は無愛想に呼びかけた。「嘘を教へてくれましたね」

「道はわかりませんでしたか」

「いいや。——でも、人が住んでゐるぢやありませんか」

「人が? (へえ? どんな人が? 見ましたか?)」

この老婆は、我我も意外に思ふほど熱心な目つきで私たちの返事を待つらしい。

「見やしませんよ。這入つて行かうとしたら二階から聲をかけられたのさ」

「どんな聲? 女ですか?」

「女だよ」

「泉州言葉で?」

「さうだ! どうして?」

「まあ! 何と言つたのです!」

「よくわからないのだが、なぜもつと早く来ないのだ?」と言つたと思ふのです

「本當ですか? 本當ですか! 本當に、貴方がた、お聞きになつたのですか! 泉州言葉で、なぜもつと早く来ないのだ?」

「おお!」

臺灣人の古い人には男にも女にも、歐洲人などと同じく演劇的な誇張の巧みな表情術がある。その老婆は今それを見せてゐるが、彼女

のそれはただの身振りではなく真情が溢れ出てゐる。恐怖に似た目つきになり、氣のせめるか顔色まで青くなつた。この突然な變化が寧ろ私たちの方を不氣味にしたのである。彼女はその感動が少し鎮まるのを待ちでもするやうに沈黙して、しかし私たちに注いだ凝視をつづけながら、最後に言つた——

「早く縁起直しをしておいでなさい。——貴方がたは貴方がたは死靈の聲を聞いたのです!」

### 三 戦慄

老婆は改めてやつと語り出した、初めはひとり言めいた口調で……

「……さういふ噂は長いこと聞いてはゐました。けれどもその聲を本當に、自分が本當に聞いたといふ人を——貴方がたのやうな人を見るのは初めてです。若い男の人たちは、一たいそこへ近づいてはいけなかつたのです。貴方がたは最初、私にその裏口をおききになつた時に、

私はほんたうはお留めしたいと思つたのです。が、それには長い話があるし、また昔ものが何をいふかとお笑ひになつたと思つたのですから……。それに今はもう月日も経つたことでは

あり、私もまさかそんなことがあらうと信じたかつたものだから……。でも、私は何か悪い事が起らねばいいと氣がかりになつて、實は貴方がたの様子をこちらから見すつてゐたところですよ。——あれは昔から幽霊屋敷だといふので、この邊では誰も近づくと人のなかつたところなのです。——ごらんない、あそこ大きな龍眼肉の樹には見事な實が鈴なりにみゐるのですが、それだつて探りに行く人もない程です……」

彼女は向うに見える大樹を指さし、白とその下の銃樓が目についたのであらう——

「昔はあの家は、海賊が現つて來るといふので、あの櫓の上に毎時鐵砲をもつた不審番が立つた程の金持でした。北方の林に對抗して南方の沈と言へば誰ひとり知らぬ人になつたのです。いいえ、まだつい六十年になるかならぬぐらゐの事です。大きな戎克船を五艘も持つて、泉州や漳州や福州はもとより廣東の方まで取引をしたといふ大商人で、船間屋を築いてゐました。『安平港の沈か、沈の安平港か』とみんな唄つたものです。——御存じのとほりそのころの安平港はまだ立派な港で、そのなかでも禿頭港と言へば安平と臺南の市街とのつづきとこ



畑の持主といふのは七十程の寡婦だつた。だから、何の怖れることもなかつたのだ。しかし第一の稗をその畑に入れようとする、場にあつたこの年とつた女は急に走つて来て、その稗の前の地面へ小さな體を投げ出した。――

「助けて下さい。これは私の命なのです。私の夫と息子とがむかし汗を流した土地です。今は私がかうして少しばかりの自分の食ひ代を作り出す土地です。――この土地を取り上げる程なら、この老ぼれの命をとつて下さい！」

沈の手下に働くだけに悪い者どもばかりではあつたけれども、さすがに稗をとめたまま、土をさへ突かうとする者もなかつた。男どもは歸つてこの事を兄の沈に話すと、彼は苦笑をして、仕方がないと答へたさうだ。弟の沈はその時は何も知らなかつた。しかし、その後二三日して畑を見廻りに来て、馬上から見渡すと彼等の畑のなかにひどく荒れてゐるところがある。作男どもを叱つた。するとそれが隣の寡婦の畑だと判つて、初めてその事情を聞いた。なるほど、今もひとり老ぼれの婆さんがそこにゐるのを見ると、彼は馬を逆めた。さうして近くに働いてゐた自分の作男に、言つた――

「稗を持つて来い」

主人の氣質を知つてゐるから作男は拒むことが出来なかつた。主人は再び言つた――

「この荒れてゐる畑へ、稗を入れる。こら！ いつもいふ通り、おれは自分の地所の近所に手のとどかない畑があるのは、氣に入らないのだ――

老寡婦はこの前と同じ方法を取つて哀願した。作男が主人の命令とこの命懸けの懇願との板挟みになつて躊躇してゐるのを見ると、沈は馬から下りた。畑のなかへ歩み入りながら、

「婆さん。さあ退いた。畑といふものは荒して置くものぢやない」

さう言ひながら、大きな稗を引いてゐる水牛の尻に鞭をかざした。婆さんは沈の顔を見上げたきり動かうとはしなかつた。

「本當に死にたいんだな。もう死んでもいい年だ」

言つたかと思ふと、ふり上げてゐた鞭を強かに水牛の尻に當てた。水牛が急に歩き出した。無論、婆さんは殺された。

さあぐづぐづせずに、あとを早くやれ――。こんな老ぼれのために廣い地面を遊ばしてゐてなるものか

いつもと大して變らない聲でさう言ひながら、この男は馬に乗つて歸つてしまつた。これほどの男だからこそ、その兄があんな死に方をした時にも、世間では弟の牢に落ちたのだと言つて、でも自分の手に懸けないだけかまだしも兄弟の情だ、などと噂したさうである。何にしても、兄が死んでしまつてから、弟がその管理を一切ひとりでやつた。その後、その家は一層榮えるし、彼は七十近くまで生きてゐて――

悪い事をしてても報いはないものかと思ふやうな生涯を終る時に、彼は一つの遺言をしたのだ。その遺言は、だだ注意すべきものである。

今から後、三十年経つたら我が我の家族は、田地をすつかり賣り拂つて仕舞はなけやならない。それから南部の安平へ行つてそこで船を持つて本國の對岸地方と商賣をするのだ。

その理由を尋ねようと思ふともう昏睡してしまつてゐた。しかし子供はその遺言を守つて、安平の充頭港へ出て来たのだ。――この遺言の話はやはり沈の一族からつと後に渡れたといふので皆知つてゐたが、あの一晚の門風が甚で、それこそ思ひやうに沈家に吹き寄せた不幸の時から、世間、人人は沈家の祖先の遺言から、またその祖先のした悪行をさまざま

は、みんな沈の家へ申し合せて押かけて、その債ひを持って歸つたさうです。普請や娘の支度などで金を費つたあとではあり、それに派手な人で、商ひも大きかつただけに、手許には案外、金も銀も少かつたと言ひます。人の心といふものは怖ろしいもので、かうなつて仕舞ふと、取るものは残らず取立てても、拂つて貰へる可きものは何も取れない。そればかりか殆んど口どりで定つてゐた娘の養子は、斷つて來たさうです。もともと金持の沈と縁組をする筈で貧乏人の沈と縁を結ぶつもりではなかつたからでせう。……おお、あそこに、いい日蔭が出來ました。あそこへ行つてまあ腰でもお掛けなさい。

老婆は、ちやうど前栽に一本だけあつた榕樹が、少し西に傾いた日ざしによつてやや廣い影を造つたのを見つけて、さう言ひながら自分がさきに立つて小さな足でよちよちと歩いた。今まで別に氣がつかずにゐたが、この老婆の家といふのも大したことはないが、ひとりの家で、昔の繁華の地に残つてゐるだけの事はあつた。樹かけて老婆は更に話しつづけた、彼女はよほど話好きと見えて、また上手でもある。ただ小さい聲で早口で、それが私にとつては外

國語だけに聴きとりにくい場合や、判らない言葉などもある。私は後に世外民にも改めて聞き返したりしたが、更に老婆の説きつづけたことは次のやうである――

前述のやうな具合で沈の家が没落し出すと、それが緒で主人の沈は病氣になりそれが間もなく死ぬと同時に、縁談の破れたことを悲しんでゐた娘は重なる新しい敷きのために鬱鬱としてゐた事句、たうとう狂氣してしまふ。その娘を不憫に思つてゐるうちにその母親も病氣で死んでしまふ。全く、作り話のやうに、不運は鎖になつてつづいた。

一たいこの沈といふ家に就て世間ではいろいろなことを言ふ。

\* \* \* \* \*

その四代ほど前といふのは、何でも泉州から臺灣中部の胡蘆屯の附近へ來た人で、もともと多少の資産はあつたさうだが、一代のうちにそれほどの大富豪になつたに就ては、何かにつけて随分と非常なやり口があつたらしい。虚構か事實かは知らないけれどもこんなことを言ふ――例へば、或時の如き隣接した四邊の田畑の境界線を、その收穫が近づいたころを見計つ

て、夜のうちに出來るだけ四方へ遠くまで動かして置く。その石標を抱いて手下の男が幾人も一晩のうちに建てたほして置くのだ。次の日になると平氣な顔をして、その他人の田畑を非常に多人数で一時に刈入れにかかつた。所有者達が驚いて抗議をすると、その石標を橋に逆に公事を起した。その前にはずつと以前から、その道の役人とは十分結託してゐたから、彼の公事は負ける筈はなかつた。彼は悪い役人に扶けられたまた扶けて、臺灣の中部の廣い土地は數年のうちに彼のものになり、そこでの役人達だつて彼の頃の動くままに動かなければならぬやうになつた、悪い國を一つこしらへた程の勢であつた。一たいこの頃、沈は兄弟でそんなことをしてゐたのだが、兄の方は鹿港の役所で役人と口論の末に、役人を斬らうとして却つて殺されてしまつた。これだつても、どうやら弟の沈が仕組んで兄を殺させたのだといふ噂さへある程で、兄弟のうちでも弟の方に一層惡聲がある。實際、兄の方はいくらかはよかつたらしい。ある時、彼等のいつもの策では、隣の畑へ犁を入れようとしたのだ。その時にはその畑に持ち込み入つてゐるのを眼の前に見ながら最も阿太くやりだしたのだ。といふのはその

日からかお嬢さんの姿をまるで見かけなくなつたのです。病氣でもあらうかと思つて人が行つてみると、お嬢さんはその寢床のなかでもう腐りかからうとしてゐたさうです。金簪を飾つて花嫁姿をしてゐたと言ひますよ。——それが不思議な事に、それなのに、その人が二階へ上らうとすると、やつぱりお嬢さんが生きてゐた時と同じやうに、涼しい聲でいつもの言葉を呼びかけたさうです。ね！ 貴方がたが聞いたのと少しも違はない言葉ですよ！ だから死んでゐるなどとは露思はなかつただけにその人は一層びつくりしたとの事です。それから後にも、その聲をそこで聞いたといふ人は時々あつたのです。——お嬢さんは病氣といふよりは、もしや飢ゑて死んだのではあるまいかと云ふ人もあります。といふのはその家のなかには、昔そこそこにあつた見事な様様の品物が、もう何一つ残つてゐなかつたさうですから。さうして死骸に附いてゐた金簪は葬の費用になつたと言ひます」

#### 四 怪傑沈氏

この風變りな一日の終りに私と世外民とは

醉仙閣にゐた。——私たちのよく出かける旗亭である。

これが若し私が入社した當時のやうな熱心な新聞記者だつたら、趣味的ないの特種でも拾つた氣になつて、早速「廢港ローマンス」とか何とか割註をして、さぞセンセシヨナルな文字を羅列することを胸中に企ててゐただらうが、その頃は私はもう自分の新聞を上等にしてやらうなどといふ考へは毛頭なかつた。毎日の出版社へ満足には勤めずにわが酒徒世外民とばかり飲み暮してゐた。諸君はさだめし私の文章のなかに、さまざまの蕪雜を發見することだらうと覺悟はしてゐるが、それこそ私がそのころ飲んだ酒と書き飛ばした文字との顔面の酬いであらう……。

——で、私たちは醉仙閣で飲んでゐた。

世外民は禿頭港の廢屋に對して心から怪異の思ひがしてゐるらしい。さう言へばあの話はいかにも支那風に出来てゐる。廢屋や廢址に美女の靈が遺つてゐるのは、支那文學の一つの定型である。それだけにこの民族によつてはよく共感できるらしい。しかし、私はといふとどうもさうは行かない。私がそのうちで少しばかり氣に入つた點と言へば、その道具立が總て大き

くその色彩が悪くアクどい事にあつた。もしこれを本當に表現することさへ出来れば、浮世繪師の年の狂想などはアマイものにして化舞ふことが出来るかも知れない。そのなかにある人物は根強く大陸的で、語柄の美としてはそれが醜と同居してゐるところの野蠻のなかに近代的地方とある。幽霊話とすればそれが夜陰や月明ではなしに、明るさもこの上ない烈日のさなかのなかが取柄だが、總してこの話は怪異譚としては一番價值に乏しい。それなのに世外民などは專らそこに興味を繁いでゐるらしい。いや、むしろ恐怖してさへある。彼は自分が幽霊と對話したと思つてゐるのかも知れない。

私は世外民の荒唐無稽好きを笑つてゐる。

——といふのはそれに對しては私はもうとつくに思ひ當つたことがあるからだ。なぜ私はあの時すぐ引返して、あの廢屋の聲のところへ入込んでゐなかつたらうか。さうすれば世外民に今かうは頑張らせはしないのだ。それをしなかつたといふのも世外民があまり厭がるのと、それよりも空腹であつたのと、また億劫な思ひをして行つてみるまでもなく解つてゐると信じたからだ。それもすぐに、さうと氣がついたのならよかつたのに、あんな判りきつた事が、なぜ一時



に思ひ出して、因果は應報でさすがに天上聖母は沈の持節を守らない。——あの遺言こそまるで子孫に今日の天罰を受けさせようと思つて、老婦の死靈が臨終の仇敵に乗り移つたのだとか、あの颯風はその老婦が犇で殺されてから何十年年月の祥月命日であるとか、人人は沈家の悲運を同情しながらもそんなことを噂した。何にしても、大きな不運の後であとからあとから一時に皆死に絶えてしまつて、遭つた人といふのは年若い娘ひとりで、それさへ氣が狂つて生きてゐた。

祖先にたとひどんな喉があらうとも、かうして生きてゐる纖弱い女をほつて置くわけにはいかないといふので、近隣の人人は、いつも食事くらゐは運んでやつた。それが永い間絶えなかつたといふのも、いはば金持の餘徳とも言へよう。といふのは食事を運んでやる人たちは、その都度何かしら、その家のそこらに飾つてある品物の手輕なものを、一つ二つづつこつそりと持つて来る者があるらしかつた。部屋にあつたものは目と少くなり、さうなると近隣でも相當な家の人達はもうそこへ行かなくなつた——他人のものを少しづつ掠めてくるやうな人たちの一人と思はれたくないと思つて、自と控へる

やうになつたのである。その代りにはまた、厚かましい人があつて、當然のやうな顔をして品物を持つて来てそれを賣拂つたりするやうな人も出て来た。下さいと言つて頼むと氣の違つてゐる人は、極く大様にくれるといふことであつた。——さあ、お祝ひに何なりと持つておいで——高僧なものさういふ風に犇はれて、やつぱりあの家では昔の年貢を今收めてゐるのだよなどと、口きかない人人は言つた。

どういふ風に、娘は氣が違つてゐるのかといふのに、娘は刻刻に人の——恐らくは彼女の夫の、来るのを待つてゐるらしかつた。人の足音が來さへすれば叫ぶのだ——泉州言葉で、——どうしたのです。なぜもつと早く來て下さらない？——

——つまり、我々が聞いたのと全く同じやうな言葉なのだ。彼女は姿こそ年とつたがその聲は、いつまでも若く美しかつた！——我々が聞いたその聲のやうに？——

その聲を聞いて、人人は深い哀れに打たれながら、その部屋へ這入つて行くと、彼女は人人を先づ凝視して、それからさめざめと泣くのだ。待つてゐる人でなかつた事を怨むのだ。そこで人人は明日こそその當の人が來るだらうと言つ

て慰める。彼女はまた新しい希望を湧き起す。彼女はいつも美しい着物を着て人を得つ用意をしてゐた。たしかに海を越えて来るその夫を待つてゐるのだといふことは疑ひなかつた。さういふ風にして彼女は二十年以上も生きてゐたのだらう——

「私が十七の年に、初めてこの家へ來たころには、その人はまだ生きてゐたものです」と、この長話を我々に語つた禿頭港の老婦人は言つた。

——この婦人ももう六十に近いであらうが四十年位前にこの家へ嫁に來たものと見える。「私は近づいてその人を見た事はありませんけれども、天氣の靜な日などには、よく皆がまたお嬢さんが出てゐるよ」といふものだから、見ると走馬樓の欄干によりかかつて、ずつと遠い海の方を長いこと——半日も立つて見てゐるらしいやうなことがよくありました。夫を乗せた船の帆でも見えるやうに思つたのですかねえ。いづれややつぱりその海が見えるからでせう、お嬢さんのある部屋といふのは、あの二階ばかりで、外の部屋へは一足も出なかつたさうです。皆はお嬢さん、お嬢さんと呼び慣はしてはゐましたが、その頃はもうやがて四十ぐらゐにはなつてゐるだらうといふ事でした。それが、何

と、……君、憤つてはいかんよ——どうも亡國の趣味だね。亡びたものがどうしていつまでもあるのか。無ければこそ亡びたといふのぢやないか」

「君!」世外民は大きな聲を出した。「亡びたものと、荒廢とは違ふだらう。——亡びたものはなるほど無くなつたものかも知れない。しかし荒廢とは無くなつたとしつある者のなかに、まだ生きた精神が残つてゐるといふことぢやないか」

「なるほど。これは君のいふとほりであつた。

しかしともかくも荒廢は本當に生きてゐることとは違ふね。だらう? 荒廢の解釋はまあ僕が間違つたとしてもいいが、そこにはいつまでもその靈が横溢しはしないのだ。むしろ、一つつと力のある濃刺とした生きたものがその廢木にだつてさまざまな罪が簇るではないか。我我は荒廢の美に囚はれて歎くよりも、そこから新しく誕生するものを讚美しようぢやないか——なんて、柄にない事を言つてゐる。さういふ人生觀が、腹の底にちゃんとしまつてある程なら、僕だつて臺灣三界でこんなだらしない

酒飲みになれやしないだらうがね。だからさ、僕がさういふ生き方をしてゐるかどうかは先づ二の次にしてさ」

「成程。——ところでそれが、禿頭港の幽靈——でないといふならば、その生きた女の聲と何の關係があるんだらう?」

「下らない理窟を言つたが僕のいふのは簡單なことなのだ。ね、我々の聞いたあの聲の言つたのは『どうしたの?』 なぜもつと早くいらつしやらない。……云云といふのだつたさうだね。それや無論誰が聞いても人々を待つてゐる言葉さ。で、あの場所の傳説のことは後にして、虚心に考へると、若い女が——生きた女がだよ、人に氣づかれないうやうな場所にたつたひとりでゐて、人の足音を聞きつけて 今の一言を言つたとすれば、これは男を待つてゐるのぢやないだらうかといふ疑ひは、誰にでも起る。あたりまへの順序だ。我々があの際、すぐさう感じなかつたのが反つて不思議だ。あの際、僕があれを日本語で聞いたのだつたら一瞬間にさう感附くよ。そこであの場所だが、氣味の悪い噂があつて人の絶対に立ち寄らない場所だ。しかも時刻はといふと近所の人がみな午睡をする頃だ。戀人たちが人に隠れて逢ふには絶好の時と

所ではないか。——それも互によほど愛してゐると僕が考へるのは、それはいづれあそこからさう遠いところに住んでゐる人ではなからうが、それならあの家に纏はる不氣味千萬な噂はもとより知つてゐるのだらうから、迷信深い臺灣人がその恐ろしさにめげずに、あの場所を撰ぶといふところに、その戀人たちの熱烈が現れてゐる。それからまた僕は考へるね。そのふたりは人分以前から、あの時刻とあの場所とを利用することに慣れてゐるのだ。でない位なら、そんないやな場所へ、女が先に來て待つ度胸も珍しいし、男だつてそれぢやあまり不人情さ。——君が、あの聲を聞いて咄嗟にそれをする住人のものと斷定してしまつたのも無理はないよ。彼等はそこをもう自分たちふたりの場所と信じて切つてゐるほど、その場所に安心し聞れ切つてゐるのだ。それならばこそ我我、足音を聞いただけで輕輕しく、あんな聲をかけたたりしたのだ。——あそこへは全く近よる人もない

と見えるね。そのくせあの家は、女ひとりで這入つて行つても何の怖ろしい事もないほど、異變のない場所なのだ。若い美しい女——藝者の玉聲仔のやうな奴かな。いや、若い女ではな

間も経つてからやつと氣がついたといふのだらう。多分、あまりに思ひがけなく踏込まうとするその刹那であつた爲めと、二階から響いて來た言葉が外國語だつたのと、それにつづいてあの老婦人の大袈裟な戰慄の身振りやら、ちよつと異様な話やらで、全くくやしき事だ。私も暫くの間は多少驚かされたものと見える。本當に理智の働く餘裕はなかつたらしい。——廢屋だと確めて置いた家の中から人聲がしたのであつてみれば、それはその家の住人でない誰かが、そこにゐたのにきまつてゐる。その人のために我々が這入つて行くことを遠慮する理由は少しもなかつた筈だ。現に安平の家のなかにだつて網を繕つてゐた人間の聲がしても我々は平氣で闖入して行つた程だ。何のために我々は躊躇したか。世外民が一人が住んでゐるんだねと言つたからだ。世外民は何故そんなことを言つたか。それはその時の彼の心理を考へなければならぬ。多分、聲が我々の踏み込んだ瞬間に恰もそれを咎めるがごとく響いた事が一つ——しかも、その言葉の意味は、あとで聞けば全く反對のものであるが。またあの廢屋は安平のものよりも数十倍も堂堂としてゐて荒れながらにもなほ犯しがたい權威を具へてゐた事。

最後に一番重なる理由としてはそれが單に、女の若さうな玲瓏たる聲であつたが爲めに、若い男である世外民も私も無意識のうちに妙にひるんでゐたのである。さうして、その聲に就ては何の考へることをもせず、ただびつくりして歸つて來てしまつたのである。

「何にしても這人つて見さへすればよかつたのになあ。馬鹿馬鹿しい、誰が幽霊の聲などを聞くものか。生きてゐる臟のドキドキしてゐる若い女——多分若くて美しいだらうよ、そんな氣がするな——それがそこにゐただけの事さ——」

「でも、むかしから傳はつてゐるのと同じ言葉を、しかも泉州言葉で、それもそのたつた一言を、その女が何故我々に向つて言ふのだ——世外民は抗議した。

「泉州言葉は幽霊の專用語ではあるまいぜ。泉州人なら生きた人間の方がどうも普通に使ふらしいぜ。アハ、ハハ。それが偶然、幽霊が言ひ慣れた言葉と同じだつたのは不思議と言へば不思議さね。——でもたつたそれだけの事だ。君はあの言葉が我々に向つて言はれたと思ひ込むから、幽霊の正體がわからないのだよ。」

「外の人間に向つて言つた言葉が偶然我々に聞かれたのだ。いや、我々を外の人間と間違へて、その女が言ひかけたのさ。さうと氣がついたから、たつた一言だけしか言はなかつたのだ。君、何でもないよある幽霊だぜ、あれや……」

「それぢや、昔からその同じ言葉を聞いたといふその人達はどうしたのだ——」

「知らない——私は言つた。——それや僕が聞いたのぢやないのだからね。——ただ、多分は君のやうな、幽霊好きが聞いたのだらうよ。だから僕は自分の關係しない、昔のことは一切知らないのだ。ただ今日の聲なら、あれは正しく生きている若い女の聲だよ！ 世外民君、君は一人あまり詩人過ぎる。舊い傳統がしみ込んでゐるのは結構ではあるが、月の光では、ものごとはほんやりしか見えないぜ。美しいか、汚いかは知らないが、ともかく太陽の光の方がはつきりと見えるからね——」

「比喩などを言はずに、はつきり言つてくれ給へ——」本氣な世外民は少々憤つてゐるらしい。

「では言ふがね、亡びたものの荒廢のなかにむかしの靈が生き残つてゐるといふ美觀は、——これや支那の傳統的なものが、僕に言はせる



「はい、かに植民地政治でもだんだん行届いて整つて来た。擧句に、彼が折角開拓した廣大な土地を、今度は彼よりもつと大きい暴虐者が出て左右することを見抜いてゐたのだ。何と痛らしい誤見ではないか——彼は政治といふものの根本義を、まるで社會學者みたいに知つてゐて、それを利用したのだ。人のものを掠奪してそれへすつかり仕上げをかけて、やれ田代の如きと鐵金をするさ、そいつを賣拂つて金に代へる。それから商賣をするんだね。全く商賣といふものは世が開化した後の唯一の戰爭だからね。しかも安全な戰爭だ——元手の多い奴ほど勝つてゐる。彼は自分の子孫たちに必勝の戰術を傳授して置いたのさ。奴の仕事は何もかも生きる力に満ちてゐる。萬歳だ。ところでさ、そのやうな先見のある男でも、自然が不意に何をするかは知らなかつたのが、人間の淺ましきだ。繁茂してゐた自然を永い間かかつて斬り苛んだ結果に福を得た富を、一晩の颶風でやつぱりもとの自然に返上したといふのだから好いな。態を見やがれさ。——するとやつぱり因果應報といふことになるのか。僕はそんなことを説教するつもりではなかつたつけな……」

私はいつの間にかひどく酔つて来て、舌も纏れては来るし、段段芽えて來ると已惚れてゐた頭がへんにとりとめがなくなり、ふと口走つた——「花嫁の姿をして腐つてゐたつて? よくある奴さ。花嫁の姿をして死ぬ。それがだんだん腐つてくる、か。生きてゐる奴で冷たくなつて、だんだん腐つてくるのもある。金貨で飾つてさ、ウム」

世外民はこれも亦いつもの癖で、深淵のやうに沈黙したまま、私のをかしな言葉などは聞き咎めるどころか、てんで耳に入らぬらしく、ど酒の盃を持ち上げたまままで中絶を凝視してゐた。

世外民、世外民。この男の盃を持つてゐるところにけつ々魔氣があるて——

\* \* \* \* \*

世外民といふ風變りな名を、私はこの話の當初から何の説明もなしに連發してゐることに気がついたが、これは私の臺灣時代の殆ど唯一の友人である。この妙な名前はずとより匿名である。彼のペンネームである。彼の投稿したものを私はそれを新聞に採録した。私は彼の詩——無論、漢詩であるが、その文才を十分瞭解

したといふわけではないが、寧ろその反抗の氣概を喜んだのである。しかし、その詩は一度採録したきりだつた。當局から注意があつて、私は呼び出されて統治上有害だと言ふのでその非常識を咎められた。再度の投稿に對しては、私は正直にその旨を附記して返送した。すると、世外民は私を訪ねて遊びに來た。見かけは優雅な若者であつたが案外な酒徒で、盃が私たちを深い友達にした。彼は臺南から汽車で一時間行程の龜山の徳の豪家の出であつた。安代代秀才を出したといふので知られてゐたその頃の私は、つまらない話だが或る失態事件によつて自暴自棄に墮入つて、世上のすべてのものを否定した態度で、だから世外民が友達になつたのだ。この頃の私にいつも酒に不自由させなかつたのがこの世外民だ。だが私が世外民の藉口をつとめたと誰とも思ふまい。第一に世外民は友をこそ求めたが藉口などを必要とする男ではなかつた。私はその點を敬してゐた。

——この話として何の用もあることではないが、私の交友録を抄録したまでである。彼が私との訣別を惜んで私に與へた一詩を私は覚えてゐる。——あまり上手な詩でもないさうだが、私にはそんなことはどうでもいい。

「一聲は若かつたがな」

「さ、聲は若くつても、事實は圖太い年増女かも知れないな。でなけや、やつぱり必ず若い熱烈なる少女か。——それはどうでもいい。判らない。しかし兎も角もさ、今日のあの聲は不埒かは知らないが不思議は何もない生きた女のもので、あそこが逢史の場所に擇ばれてゐたといふ事と、又それだから、あそこにはほんの噂だけで何の怪異もない事は、おのづと明瞭さ。僕は疑はない——ああ、這入つて行つて見れやよかつたのになあ——」

「例によつてそろそろと理窟つぼくなつたぞ。」

「理窟には合つてゐさうだよ。ただね、それが僕の神經を鎮めるには何の役にも立たない」

「さうかい。困つたね」

「世外民はやつぱり私に同感しようとはしない。私は少しばかり、ほんの少しだが、忌忌し

かつた。私は酒を飲めば飲むほど、奇妙に理窟つぼくなる。人を説き伏せたくなる。そこでお

喋りになるといふごく好くない癖があつた。自分では頭がびえて来るやうな氣がするんだが、それは酔つばらひの已惚れで傍で聞いたらさぞ

をかしいのだらう。私はつづけた。

仕方がない。君は何とでも思ひ給へ。だが、

今日の事實は怪異譚としてはまるで何の値打もないのだがな。禿頭港で聞いた話にしたつて、因縁話にはなつてゐるものか。——そんな見方をすれや、せいぜい三面特種の値打だ。寧ろ面白いののは、あんな荒つぽいいやな話のなかに案外支那人といふものの性格や生活が現れてゐることだ。……」

「夜中に境界標の石を四方へ擴げる話か。——あれや、君、臺灣の大地主のことなら、みんなあんな風に言ふんだ。あれこそ臺灣共通の傳説だよ。——現に——世外民は酒で蒼くなつた顔を苦笑させて、

「僕の家のことだつてもさう言つてらあ!」

「へえ? これはなほ面白い。いづれはどこかに本當の例が、事實あつたのだらうがね。多分、あの沈家が本當だらう。それにしてもそいつをどこの大地主にも應用するところはえらい。實

際、あの話はあらゆる富豪といふものを簡單明瞭に説明するからね。ふむ。さうかね。だがそれよりも僕にもつと面白いのは、犂でよぼよぼ

の老寡婦を突き殺す話だ。——僕はその沈の祖先といふのは粗野な惡黨でこゝろあるがなかなか

の人傑だつたやうな氣がするのだ。ね、さうでなければ道理に合はない。いかに清朝の末期に

近い政府だつて、また先が植民地の臺灣だからと言つて、さうさう腐敗した祿でなしの役人ばかりをあとへあとへ派遣したわけではあるまい。それが皆丸められるのだ。單に金の力だけではあるまい。沈にはきつと役人たちよりも

えらい經營の才があつたのだ——まあ聞きたまへ、僕の幻想だから。胡蘆屯附近と言へば、君、この島でも最もよく開墾された農地だらう。……いつもいふ通り、おれは自分の地所の

近所に手のとかない畑があるのは、氣に入らないのだ。……婆さん。さあどいた。畑といふものは荒して置くものぢやない。……本當に死

にたいんだな。もう死んでもいい年だから。さう言つてひらりと馬を下りて自分の手で突き殺したと言つたね。僕には強い實行力のある男の

横顔が見えるやうな氣がするんだ。さういふ男の手によつてこそ、未開の山も野も開墾出来る

のだ。草創時代の植民地はさういふ人間を必要としたのだ。役人たちの日の利いたものは、

彼の事業を、政府自身の爲めに樂しみにしてゐたかも知れないのだ。その報酬に惡意を見逃す

ばかりか、暗には獎勵してゐたかも知れないのだ。その男はちやんとそれを心得てゐた。その遺言が更に面白いではないか。三十年すれ

こを昇降する人間があることは疑へなかつた。といふのは、それは何も鮮かな足跡ではないのだが、寧ろ譬へば冬原の草の上におのづと出来た小徑といふ具合に、そこだけは他の部分より黒くなつて、白い塵埃のなから、階段の板の色がぼんやり見えてゐるのであつた。二階には人のけはひはない。私は幽霊の正體は先づ見られさうにもないと思つた。二階へ出た。

案外にそこは明るかつた。その代りどうしてだか急に暑くムツとした。人影のやうなものは何もなかつた。氣が落着いて來たので私は何もかも注意して見ることが出来たが、床の上にもまた人の歩いたあとがあつて、それがまた一筋の道になつて残つてゐる。工形になつた部屋の壁のかげから、光が帯になつて流れて來る。この部屋へ澤山の明るさを供給してゐるのは、その窓で、人の歩いたあととまたその窓の方へ行つてゐる。壁のかげに誰かがピツタリと身をよせて隠れてゐるやうな氣もする。私はその窓の方へおのづと歩いて行つた。我々の足元から立つ塵は、光の帯のなかで舞ひ立つた。顔に珍しく風が當つて、明るい窓といふのが開いてゐること、その壁に沿つて一つの臺があることが、一時に私の目についた。臺といふのはごく厚く

黒檀で出来たもので、四方には五尺ほどの高さの細い柱が、その上にはやはり黒檀の屋根を支へてゐる。その大ききから言つて寢床のやうに思はれた。

「寢床だね」

一さうだ—

これが私と世外民とが、この家へ這入つてからやつと第一に取交した會話であつた。寢床には塵は積つてはゐなかつた——少くとも輕い塵より外には。さうして黒檀は落着いた調子で冷冷と底光りがしてゐた。私は世外民を顧みながら、その寢床の上を指さした。私の指が黒檀の厚板の面へ白くうつつた。

世外民は頷いた。

その寢床の外には家具と言へば、日立つものも目立たないものも文字通りに一つもなかつた。話に聞いたあの金簪を飾つた花嫁姿の狂女は、この寢床の上で腐りつゝあつたのではないだらうか。それにしてはこれだけの立派な檀木の家具を、今だにここに遺してゐるのは、憐憫によつてではなく、やはり恐怖からであらう。

寢床のうしろの壁の上には大小幾足かの壁虎が、時時のつそりと動く。尤もこれは珍しい事ではない。この地方では、どこの家の天井に

だつて多少は動いてゐる。内地に於ける蜘蛛ぐらゐる資格である。ただこの壁の上には、廣さの割合から言つて少々多すぎるだけだ。六坪ほどの壁に三四十足はゐた。

世外民はどうだか知らないが、私はもう充分に自分の見たところのもので満足であつた。

歸らうと思つて、歸りがけにもう一度窓外の碧い水を見た。その他の場所あまりに氣を沈ませたからだ。歸らうとして私はふと自分の足もとへ目を落すと、そこに、ちやうど寢床のすぐ下に、扇子見たやうなものがある——骨が四五本開いたままで。私は身をかためて拾つた。そのままハンケチと一緒に自分のポケットのなかへ入れた。なぜかといふのに世外民はいつの間にか歸るために、私に背を向けて四五歩も歩き出した。出たからだ。

世外民も私も下りる時には何だかひどく急いだ。表の入口を出る時には今まで壓へてゐた不氣味が爆發したのを感じて、我々は無意識に早足で出た。さうして無言をつづけてその屋敷の裏門を出た。

「どうだい。世外民君。別に幽霊もゐなかつたね」  
「うむ。世外民は不承不承に承認した



登彼高岡空夕噓  
天邊孤雁嘆離群  
溫盟何必酒杯  
君夢我時我夢君

## 五 女誠扇

私はいやがる世外民を無理に強ひて、禿頭の廢屋のなかへ、今度こそ這入つて行つたのは、彼がその次に臺南へ出て來た時であつた。多分最初にあの家を發見してから五日とは經てゐなかつたらう——世外民は當時少くとも週に二度は私を訪れたものだから。

「さあ。今日こそ僕の想像の的確なことを見せる。運がよければ、君がそれほど氣に病む幽霊の正體が見られるかも知れないよ」

私はかう宣言して、この前の機會と同じ時刻を擇んだ。そこに幽霊のゐないことを信じてゐる私は、しかし、自分の事を、高い雕欄のいい窪みを見つけて巢を營んでゐる双燕を驚愕させる蛇ではいかと思つて、最初は考へたのだが構はないと思つた。といふのはもしそこに一對の男女があるやうならば、自分はその時の

相手の風態によつては、わざと氣がつかないふりをして、彼等をその家の居住者のやうに扱つて、自分達が無法にも闖入したのを謝罪しようと思つたからである。私たちはそれだからごく普通の足音をさせて、あの石の圓柱のある表からこの前の口のほとりに入口を這入つた。その時、さすがに私もちよつと立止つて聞き耳を立ててはみた。勿論どんな泉州言葉も聞かれはしなかつた。それなのに困つた事に、世外民は氣味悪がつて先に這入らないのだ。表の廣間のなかにはうす暗くて、またこんな家のどこに二階への階段があるか、私には見當がつきにくい。しかし世外民は口で案内して、表扉を這入つて廣間の奥の左或は右の小扉を開いてみたら、そこから上るやうになつてゐるだらう、といふのである。その廣間といふのは二十疊以上はあるだらう。四つの閉めた窓の破れた隙間からの光で見ると、他には何一つないらしい。私は這入つて行つた。その時、思はず私が呻つたのは、例の聲を聞いたからではないのだ。ただの閉め切つた部屋臭ひである。どんな臭ひとも言へない。ただ蒸れるやうなやつで、それがしかし建物がいから熱いのではない。割に冷たくつてゐて蒸れるとでもいふより外には

言ひ方がない。この臭ひを、世外民は案内平氣らしかつた。天井を見つて眞白に粉がふいて微がはえてゐる。その微の臭ひだつたかも知れない。私たちは先づ右の扉を開けた。——果してすぐそこが階段であつた。幅二尺位の細いのが一直線に少し急な傾斜で立つてゐる。それが上からの光で割に明るい。何も怖氣がさすやうなものはないが、それでもやはりさう明るい眼中におかないが、それでもやはりさう明るい心持にはなれないことは確だ。氣味が悪いと言つては言ひすぎるが、私はよく世外民をひつばつて來たと思つた。私はひとりでも一度來てみる意志があつたのだが、もしもひとりだつたらあまり落着いて見物はしにくいかと思ふ。それにしてもあんな傳説を迷信深く抱いてゐる人人が、たとひそれは二人連れであつた事が確でも、第一日によくまあここへ來たものだと云へる。いや、よくもここを擇ぶ氣になつたものだ。私はこの細い階段を戀人たちが互に寄りそひながらおぼおぼして、のぼつて行つた時を想像してみた。

私は世外民を振り返つて促しながら、階段を昇り出した。そこには私の想像を満足させることには、ごく稀にはあるがこのごろでもそ

はない。「善惡の彼岸」を言ふのだ……

## 六 エビロオグ

あの廢屋はさういふわけで私の感興を多少惹いた。何ごとにもさう興味を見出さなかつたその頃の私としては、ほんの當座だけにしろそんな氣持になつたのは珍しいのだが、それらすべての話をとほして、私は主として三個の人物を幻想した。市井の英雄兄ともいふべき沈の祖先、狂念によつて永遠に明日を見出してゐる女、野性によつて習俗を超えた少女、——とでもいふ、ともかく、そんな人物が跳梁するのが私には愉快であつた。そいつを活動のシネリオにでもしてみゐる氣があつて、私は「死の花嫁」だとか、紅の蛾などといふ題などを考へてみたりしたほどであつた。しかしさう思つてみるだけで、やらないと言ふかやれないと言ふか、ともかく實行力のないのが私なので、その私が前述の三人物の空想をしたのだからをかしい。意味がそこにあるかも知れない。さうして私自身はいふと、いかなる方法でも世の中を征服するどころか、世の力によつて刻刻に壓しつぶされ、見放されつつあつた。尤も私

は何の力もないくせに精一杯の我儘をふるまつて、それで或程度だけのことなら押し通してもゐたのだ。それでは何によつて私がやつとそれだけでも強かつたか。自暴自棄。この哀れむべき強さが、他のものと違ふところは、第一自分がそれによつて決して愉快ではないといふことにある。私は事實、刻刻を甚だ不愉快に送つてゐた。それといふのも私は當然早く忘れてしまふべき或る女の面影を、私の眼底にいつまでも持つてゐるからである。

私は先づ第一に酒を飲むことをやめなければならぬ。何故かといふのに私は自分に快適だから酒を飲むのではない。自分に快適でないことをしてゐるのはよくない。無論、新聞社などは酒よりもさきにやめたい程だ。で、すると結局は或は生きることが快適でなくなるかも知れない懼れがある。だが、若しさうならば生きることをそのものを、やめるのが寧ろ正しいかも知れない。……

梅になく、と思ふかも知れないが、私は時折にそんなことをひどく考へ込む事があつた。その日もちやうどさうであつた。折から世外民が訪れた。

「君一世外民はいきなり非常な興奮を以て叫んだ。君、知つてゐる？——禿頭港の首く

りはね……」

え？ 首はごく短くではあるが死に就て考へてゐた折からだつたから少しへんな氣がした。

首くくり？ 何の首くくりだ？

「知らないのか？ 新聞にも出てゐるのに」

「僕は新聞は讀まない。それに今日で四日社を休んでゐる」

「禿頭港で首くくりがあつたのだよ……あの我ががいつか見た家さ。——誰も行かない家さ。

あそこで若い男が縊死してゐたのだ。新聞には尤も一行ばかりしか出ない。僕は今、用があつて行つたさきでその噂を聞いて來たのだからよく知つてゐるが、あの黒檀の寢床を足場にしてやつたらしいのだ。美しい若い男ださうだよ、それがね、口元に微字をふくんでゐたといふので、やつぱり例の聲でおびき寄せられたのだ、花嫁もたうとう聲をとつたと言つてゐるよ

皆は、それかき、やつぱりもう腐敗して少しくさいぐらゐになつてゐたのださうだ。僕は聞いてゐてゾクツとした。我がが聞いたあの聲やそれに紅い蛾などを思ひ出してね——

私もふつと死の惡鬼が鼻をかすめるやうな氣がした——あの微くさい廣間の空氣を鼻に追想

が「しかし、君、君はあの黒檀の寢臺の上へ今出て来た大きな紅い蛾を見なかつたね。まるで掌ほどもあるのだ。それがどこから出て来て、あの黒光りの板の上を這つてゐるのを一日は美しいと思つたが、見てゐるうちに僕はへんに氣味が悪くなつて、出たくなつたのだ。」

「へえ。そんなものが出て来たか。僕は知らなかつた。僕はただ壁虎を見ただけだ。君、君の詩ではないのか。幻想ではないのか。」

——私は世外民があの寢牀の上で死んだ狂女のことをさう美化してゐるのだらうと思つた。

「いいや、本當だとも。あんな大きな紅い蛾を、僕は初めてだ。」

私は歩きながら、思ひ出してさつきの扇をとり出してみた。さうして豫想外に立派なのに驚き、また困りもした。

その女持の扇子といふのは親骨は象牙で、そこへもつて来て水仙が薄肉で彫つてある。その花と蕾との部分は透彫になつてゐる。それだけでも立派な細工らしいのに、開けてみると此だ凝つたものであつた。表には宛んど一面に紅白の蓮を描いてゐる。裏は象牙の骨が見えて——表一枚だけしか紙を貼つてゐないので、

裏からは骨があらはれるやうに出来てゐたのだ。が、その象牙の骨の上には金泥で何か文章が書いてある。

——「君はもう一度表を見返しながら世外民に呼びかけた。玉秋とていふのは名のある畫家かね。」

「玉秋とていふ。さ。聞かないがね。なぜ——私は黙つてその扇子を渡した。世外民が訝しがつたのは言ふまでもない。私もちよつと何と言つていいかわからなかつた——私は無賴兒ではあつたが、盗んで来たやうな氣がしていけないのだ。私はそのままの話をすると、世外民は案外何でもないやうな顔をして、それよりも仔細にその扇をしらべながら歩いてゐた——」

「玉秋とていふ。大した人の畫ではないが職人でもないな。不蔓不枝——彼はその畫贊を讀んだのだ。「愛蓮説のうちの一句だね。不蔓不枝。——だが女の扇にしちや不吉な言葉ぢやないか。蔓せず枝せざるほど婦女にとつて悲しい事はあるまいよ。どうしてまた富貴多子にでもしないのだらう——平凡すぎると思つたのかな」

「一たい幸福といふのは平凡だね。で、その富貴多子とかいふのは何だい」

「牡丹が富貴、石榴が多子さ」世外民は扇のうら返して見て、口のなかで讀みつづけながら「おや、これは曹大家の女説の二節か。専心章だから、なるほど、不蔓不枝を擯んだかな……」

扇は案外に世外民の興味をひいたと見える間に、私はまた私で同じ扇に就て全く別様のことをちへてゐた。

その扇はうち見たところ、少くとも現代の製作ではない。さうしてその凝つた意匠は、その親が、愛する娘が人妻にならうとする時に興へるものに相當してゐる。——恐らく沈家のものに相違ないであらう。昔、狂女がそれを持つて死んでゐなかつたとも限らない。その扇だ。更に私は假りに、禿頭港の細民區の解放無智な娘をひとり空想する。彼女が本能の導くがままに悽慘な傳説の家をも怖れない。また昔、それの上でどんな人がどんな死をしたかを忘れ果ててあの豪華な寢牀の上に、その手には彼女の道德に就て明記した暗記したこの扇をそれが何であるかを知らずに且つ片ひ且つ翻して、彼女の汗にまみれた情人に涼風を贈つてゐる……彼女が生きた命の氾濫にまかせて一切を無視する。——私はその善惡を説くので



私は無智な人人が他を信ずることの篤いのに一驚すると同時に、そんな事を言つてうまうま人と人をたぶらかすやうな少女ならば、いづれは圖圖しい奴だらうと思ふと、何もかもあばいてやれといふ氣になつた。私はまだ年が若かつたから人情を知らずに、思へば、若い女が智慧に餘つて吐いた馬鹿馬鹿しい嘘を、同情をもつて見てやれなかつたのだ。

「世外民君、来て一役持つてくれ給へ」

私は例の扇をポケットに入れ、それから新聞記者の肩書のある名刺がまだ残つてゐるかどうかを確かめた上で外へ出た。無論、その穀物問屋へ行かうと思ひ立つたからである。さうして娘に逢へば扇を突きつけて詰問しなへすれば判るが、ただその親が新聞記者などに娘を會はせるかどうかはむづかしい。逢はせるにしてもその對話を監視するかもしれない。世外民がうまくその間を計らつてくれる手筈ではあるが、それにしてもその娘が泉州の言葉しか知らなかつたらそれつきりだがなどと思つてゐるうちに、私はもうさつき勢ひ込んだことなどはどうでもよくなつた。自分に何の役にも立たない事に興味を持った自分を、私は自分でをかしくなつた。

「つまらない。もうよさう」

世外民はしかし折角來たのだからといふ。それに穀物問屋はすぐ二三軒さきの家だつた。それから後の出来事はすべて私の考へどほりと言ひたい所だが、事實は私の空想より少しは思ひがけない。

まづ第一にその穀屋といふのは思つたより大間屋であつた。父、主人といふのは寧ろ私の訪問を歓迎した位だ。この男は臺灣人の相當な商人によくある奴で内地人につきあふことが好きらしく、ことに今日は娘がそんな靈感を持つてゐる噂が高まつて、新聞記者の來るのがうれしと言ふのであつた。さうして店からずつと奥の方へ通してくれた。

「汝來任請坐」

と叫んだのは娘ではなく、そこに、籠の中ではなくて裸の留木にあた白い鸚鵡である。

娘は、しかし、我々の訪れを見てびつくりしたらしく、私の名刺を受取つた手がふるへ、顔は蒼白になつた。それをつつみ隠すのは空しい努力であつた。彼女は年は十八ぐらゐで、美しくない事はない。私はまづ彼女の態度を黙つて見てゐた。

あ、よくいらつしやいましたー

思ひがけなくも娘は日本語で、それも流麗な口調であつた。椅子にかけながら私は言つた――

「お嬢さん。あなたは泉州語をごぞんじですか？」

「はいえー」

娘は不意に奇妙なことを問はれたのを疑ふやうに、私を見上げたが、その好もしい瞳のなかに嘘はなかつた。私はポケットから扇をとり出した。それを半ばひろげて卓子の上に置きながら私はまた言つた――

「この扇を御存じでせう」

「まあ一娘は手にとつてみて「美しい扇です」と物珍しさに扇の面を見つめてゐた。

「あなたは扇を御存じない筈はないのです」私は試みに少しおこつたやうに言つてみた。

「ケ、ケ、ケツ、ケ、ケ」

鸚鵡が私の言葉に反抗して一度に冠を立てた。

みんな黙つてゐるなかに、不意に激しく啜泣く聲がして、それは鸚鵡の背景をたす帳の陰から聞えて來たのだ。涙をすすり上げる聲とともに言葉が聞えてきた――

したのであらう。世外民はその家の怪異を又新らしく言ひ出して、私がそこで拾つた扇を氣味悪がり私にそれを捨ててしまふやうに説くのであつた。——この間はあんなに興味を持つて、自分でも欲しいやうなことを言つた様に。尤も私がやらうと言つた時にはやはり、今と同じく不氣味がつて結局いらなひとは言つたが。私としてはまた世外民にやらうと思つた程だから、捨ててしまつても惜しいとも思はないが、私はその理由を認めなかつた。またいざ捨てよと言はれると、勿體ないほど珍奇な細工にも思へた。私は世外民の迷信を笑つた。

「大通りの真中で縊死人があつてそれが腐るまで氣がつかない、とでもいふのなら不思議はあるだらうが、人の行かないところで自殺したり逢死したりするのは一向當り前ぢやないか。——ただあんな淋しいところが市街のなかにあるのは、何かとよくないね——」  
私はその家の内部の記憶をはつきり目前に浮べてさう言つた。

同時に私にはこの縊死の發見に就て一つの疑問が起つた。といふのは、あの部屋のかなで起つた事は誰もそこに這入つて行かない以上は、一切發見される筈がない。あそこには開いた窓

が一つあるにはあつたが、そこには青い天より外には何も見えない——つまり天以外からは覗けない。もし臭氣が四邊にもれるにしては、あの家の周囲があまりに廣すぎる。さう考へてゐるうちに、私は大して興味のなかつたこの話が又面白くなつて來るのを感じながら言つた。  
「出鱈目だね。いや、死人はあつたらう。若い美しい男だなんて。もう美しいか醜いか年とつたか若いかも見分けがつくものか」  
「いや、でも皆さう言つてゐる」  
「それぢや、誰がその死人を發見したのだ？」  
あそこならどこからも見えず、誰も偶然行つてみるわけはないがな——ふと、私は場所が同じだといふことから考へて、この縊死人——年若く美しいと傳へられる者と、いつか私が空想し獨斷したあの逢死とがどうも關係ありさうに思へて來た。そこで私は世外民に言つた。「いつ

でもいいが今度序に、その死人を發見したのはどんな人だか聞いてきてもらひたいものだ。それがもし泉州生れの若い女だつたらもう何もかもわかるのだよ。——いつか我々が聞いたあの廢屋の壁の主も。それから今度の縊死人の原因も。——本當に若い男だつたといふのなら、それや失戀の結果だらう。——幽霊の壁にまど

はされて死ぬより失戀で死ぬ方がよくある事實だものね。尤も二つとも自分から生んだ幻影だといふ點は同じだが」

私は大して興味はなかつた。しかし世外民が大へん面白がつた。罪を人に着せるのではない。これは本當だ。事實、世外民は先づ興味をもちすぎた。さうしてそれが私に傳染したので。世外民は私の觀察に同感すると早速その場を立つて發見者を調べるために出かけた程なのだ。近所へ行つて聞けばわかるだらうといふので。

間もなく、世外民は歸つて來たが、その答を聞いて私は、臺灣人といふものの無邪氣なのに、今更ながら驚いたのである。彼等の噂するところによると、それは黃といふ姓の贅物問屋の娘が、——家は禿頭港から少し遠いところにあるさうだが——彼女が偶然に夢で見たといふその男がどうやら死んだ若者だし、それが這入つて行つた大きな不思議な家といふのが、どうも禿頭港のあの廢屋らしい。その暗示によつて、なくなつた男の行方を捜してゐた人人はやつと發見することが出來たといふのである。靈感を持つた女だといふ風に人人が傳へてゐると言ふ。

# 西班牙犬の家

(夢見心地になることの好きな人の爲めの短篇)

フラテ(犬の名)は急に駆け出して、蹄鍛冶屋の横に折れる岐路のところで、私を待つてゐる。この犬は非常に賢い犬で、私の年來の友達であるが、私の妻などは勿論大多數の人間などよりよほど賢い、私は信じて居る。で、いつでも散歩に出る時には、きつとフラテを連れて出る。奴は時々、思ひもかけぬやうなところへ自分を連れてゆく。で近頃では私は散歩といへば、自分でどこかへ行かうなどと考へずに、この犬の行く方へだまつてついて行くことに決めて居るやうなわけなのである。蹄鍛冶屋の横道は、私は未だ一度も歩かない。よし、犬の案内に任せて今日はそこを歩かう。そこで私はそこを曲る。その細い道はだらだら坂道で、時々ひどく曲りかねつて居る。私はその道に沿うて犬について——景色を見るでもなく、歩へるでもなく、ただぼんやりと空想に耽つて歩く。時々空を仰いで雲を見る。ひよいと道ばたの草の花が目につく。そこで私はその花を摘んで、自分の鼻の

先で匂うて見る。何といふ花だか知らないが、い匂である。指で摘んでくるるまはし乍ら歩く。するとフラテは何かの拍子にそれを見つけて、ちよつと立ちどまつて、首をかしげて、私の目の中をのぞき込む。それを欲しいといふ顔つきである。そこでその花を投げてやる。犬は地面に落ちた花を、ちよつと嗅いで見て、何だピケットちやなかつたのかと言ひただけである。さうして又急に駆け出す。こんな風にして私は二時間近くも歩いた。歩いてゐるうちに我我はひどく高くへ登つたものと見える。そこはちよつとした見晴し、打開けた一面の畑の下に、遠くこの町とも知れない町が、雲と霞との間からぼんやりと見える。しばらくそれを見て居たが、たしかに町に相違ない。それにしてもあんな方角に、あれほどの人家のある場所があるとすれば、一たい何處なものであらう。私は少し膝に落ちぬ氣持がする。しかし私はこの邊一帶の地理は一向に知らないのだから、解らないのも無理ではないが、それはそれとして、さて後の方は注意して見ると、そこは極くなだらかな傾斜で、遠くへ行けば行くほど低くなつて居るらしく、どこも一面の雑木林のやうである。ふん雑木林は可なり深いやうだ。さうしてさほど大くもない澤山の木の幹の平面を照して、正午に間もない優しい春の日ざしが、漆や桜や栗や白樺などの芽生したばかりの爽やかな葉の透間から、煙のやうに、また匂のやうに流れ込んで、その幹や地面やのりかげと日向との加減が、ちよつと口では言へない種類の美しさである。私はこの雑木林の奥へ這入つて行きたい氣持になつた。その林のなかへ、かき分けねばならぬといふほどの深い草原でもなく、行かうと思へば霞もないからだ。

私の人のフラテも同じ考へであつたと見える。彼はうれしげにずんずんと林の中へ這入つてゆく。私もその後に従うた。約一町ばかり進んだかと思ふころ、犬は今までの歩き方とは違ふやうな足どりになつた。氣らくな今までの漫歩の態度ではなく、織るやうないそがしさに足を動かす。鼻を前の方につき出して居る。これは何かを発見したに違ひない。兎の足あとで



「みんなおつしやつて下さいまし、お嬢さま。もう構ひませんわ。その代りにその扇は私にただかしてく下さい」

「……」  
誰れも何と答へていいかわからなかつた。世外民と私とは目を見合した。

委の見える女はむせび泣きながら更に言つた。「誰方だか存じませんが、お嬢さまは少しも知らない事なのです。わたしの苦しみを兼ねて下さつただけなのです。ただあなたが拾つておいでになつたその扇——蓮の花の扇を私に下さい。その代りには何でもみんな申しします」

「いいえ。それには及びません」私はその聲に向つて答へた。「私はもう何も聞きたくない。扇もお返ししますよ」

「私のもありませんが、推測しがたい女は口ごもりながら「ただ私の思ひ出ではあります」「さよなら」私たちは立ちあがつた。私は卓上の扇を一度とり上げてから、置き直した。「この扇はあの奥にある人にあげて下さい。どういふ人かは知らないが、あなたからよく慰めておあげなさい。私は新聞などへは書きも何もしやしないのです」

「有難うございます。有難うございます」黄嬢の目には涙があふれ出た。

\* \* \* \* \*

幾日目で社へ出てみると、同僚の一人が警察から探つて來た種のかなに、穀商黃氏の下婢十七になる女が主人の世話した内地人に嫁することを嫌つて、器衆の實を多量に食つて死んだといふのがあつた。彼女は幼くて孤兒になり、この隣人に拾はれて養育されてゐたのだといふ。この記事を書く男は、臺灣人が内地人に嫁することを嫌つたといふところに焦點を置いて、それが不都合であるかの如き口吻の記事を作つてゐた。——あの廢屋の逢ふ女、——不思議な因縁によつて、私がその聲だけは二度も聞きたがら、妾は終に一瞥することも出来なかつたあの少女は、事實に於ては、自分の幻想の人物と大變違つたもののやうに私は今は感ずる。

(大正十四年四月作)

### ちよかいせんきたん あとがき

この作がすぐれてゐるかどうかを、作者はもとより知らない。知り得ない。

但、作者はこの作を愛してゐる。さうしてこの作を惡評した評論家を甚だ輕蔑する氣持になつたことは事實である。

作者はだんだん年をとるに、浪漫的色彩を失ひつつある。その代りには、何ものかが別に加はるだらうが、ともかくもこの作品は作者にとつて浪漫的作品の最後のものであるかも知れない。そんな氣もする。數數の不満はあるけれども、それにしても作者自らはこの作を愛してゐる。この點でおそらく、この作は指折つてみて五つのうちに加はるだらう。

かういふわけで、かたがた手ごろではあり、多少筆を加へて、この物語だけを單獨に本にしてみらつた。我儘をよるこんで許してくれた第一書房主人に感謝する。

十五年二月四日夜

この書の作者

に飲んで居た。私は一瞥のうちにこれらのものを自分の睡へ刻みつけた。

さて私は静に石段の上を登る。ひつそりとしたこの四邊の世界に對して、私の靴音は静寂を破るといふほどでもなく響いた。私は「おれは今、隠るか、でなければ魔法使の家を訪問して居るのだぞ」と自分自身に囁かれて見た。さうして私の犬の方を見ると、彼は別段變つた風もなく、赤い舌を垂れて、尾をふつて居た。

私はこつこつと西洋風の扉を西洋風にたたいて見た。内からは何の返答もない。私はもう一べん同じことを繰返さねばならなかつた。内からはやつぱり返答がない。今度は聲を出して案内を乞うて見た。依然、何の反響もない。留守なのかしら空家なのかしらと考へてゐるうちに私は多少不氣味になつて來た。そつと足音をぬすんで——これは何の爲めであつたかわからな

いが——薔薇のある方の窓のところへ立つて、そこから春のびをして内を見まはして見た。

窓にはこの家の外見とは似合くない立派な品の、黒ずんだ海苔茶にとろどころ青い紙の見えるどつしりとした窓かけがしてあつたけれども、それは半分ほどしぼつてあつたので部屋

屋の中央には、石で彫つて出來た大きな水盤があつてその高さは床の上から二尺とはないが、その真中のところからは、水が湧立つて居て、水盤のふちからは不斷に水がこぼれて居る。そこで水盤には青い苔が生えて、その附近の床——これもやつぱり石であつた——は少ししめつぽく見える。このこぼれた水が薔薇のなからきりきら光りながら蛇のやうにぬけ出して來る水なのだらうといふことは、後で考へて見て解つた。私はこの水盤には少なからず驚いた。ちよいとと異風な家だとはさきほどから氣がついて居たものの、こんな異體の知れない仕掛まであらうとは豫想出來ないからだ。そこで私の好奇心は、一層注意ぶかく家の内部を窓越しに觀察し初めた。床も石である。何といふ行だか知らないが、青白いやうな石で水で濡つた部分は美しい青色であつた。それが無難作に、切出した時の自然のままの面を利用して列べてある。人

の裸の卓があつて、その上には……何があるのだか顔をびつたりくつつけても硝子が邪魔をして覗き込めないから見られない。おや待てよ。これは勿論空家ではない、それどころか、つい今さきまで人が居たに相違ない。といふのはその大きな卓の片隅から、吸ひさしの煙草から出る煙の絲が非常に靜かに二尺ほど眞直に立ちのぼつて、そこで一つゆれて、それからだんだん上へゆくほど亂れて行くのが見えるではないか。

私はこの煙を見て今思ひがけぬことばかりなので、つい忘れて居た煙草のことを思出した。そこで自分も一本を出して火をつけた。それからどうかしてこの家のなかへ這入つて見たいといふ好奇心がどうもおさへ切れなくなつた。さてつくづく考へるうちに、私は決心をした。この家の中へ這入つて行かう。留守中でもいい這入つてやう。若し主人が歸つて來たならば私は正直にわけを話すのだ。こんな變つた生活をして居る人なのだからさう話せば何ともいふまい。反つて歡迎してくれないとも限らぬ。それには今まで荷厄介にして居たこの繪具箱が、私の泥棒でないといふ證人として役立つであらう。私は盡のいいことを考へて斯う決心した。

あつたのか、それとも草のなかに鳥の巢でもあ  
るのであらうか。あちらこちらと氣ぜはしげに  
行き來するうちに、犬はその行くべき道を發見  
したものでらしく、眞直に進み初めた。私は少し  
ばかり好奇心をもつてその後を追うて行つた。  
我我は時時交尾して居たらしい梢の野鳥を駭  
かした。斯うした早足で行くこと三十分ばかり  
で、犬は急に立ちどまつた。同時に私は潺湲た  
る水の音を聞きつけたやうな氣がした。(一たい  
この邊は泉の多い地方である)犬は耳を細性ら  
しく動かして二三間ひきかへして、再び地面を  
嗅ぐや、今度は左の方へ折れて歩み出した。思  
つたよりもこの林の深いのに少しおどろいた。  
この地方にこんな廣い雑木林があらうとは考  
へなかつたが、この工合ではこの林は二三百町  
歩もあるかも知れない。犬の様子といひ、いっ  
までも續く林といひ、私は好奇心で一杯にな  
つて來た。かうしてまた二三十分ほど行くうち  
に、犬は再び立ちどまつた。さて、わつ、わつ！  
といふ風に短く二聲吠えた。その時までは、つ  
い氣がつかずに居たが、直ぐ目の前に一軒の家  
があるのである。それにしても多少の不思議で  
ある、こんなところに唯一つの住家があらう  
とは、それが炭焼小屋でない以上は。

打見たところ、この家には別に庭といふ風な  
ものはない様子で、また唐突にその林のなかに  
雜つてゐるのである。この「林」のなかに雜つて  
居る「といふ言葉はここでは一番よくはまる。  
今も言つた通り私はすぐ目の前でこの家を見  
したのでからして、その遠望の姿を知るわけに  
はいかぬ。また恐らくはこの家は、この地勢と  
位置とから考へて見てさほど遠くから認め得ら  
れようと思へない。近づいての家は別段に變  
つた家とも思へない。ただその家は草屋根であ  
つたけれども、普通の百姓家とはちよつと趣  
が違ふ。といふのは、この家の窓はすべてガラ  
ス月で西洋風な造へ方なのである。ここから入  
口の見えないところを見ると、我我は今多分こ  
の家の背後と側面とに對して立つて居るものと  
思ふ。その角のところから二方面の壁の半分づ  
つほどを覆うたつたかづらだけが、言はばこの  
家のここからの姿に多少の風情と興味とを具  
へしめて居る裝飾で、他は一見極く質朴な、こ  
んな林のなかにありさうな家なのである。私  
は初めこれはこの林の番小屋でないかしらと思  
つた。それにしては少し大きすぎる。又わざわざ  
ざとこんな家を建てて番をしなければならぬほ  
どの林でもない。と思ひ直してこの最初の認定

を否定した。兎も角も私はこの家へ這入つて見  
よう、道に迷うたものだと言つて、茶の一杯も  
もらつて持つて來た辨當に、我我の空腹を満さ  
う。と思つて、この家の正面だと思へる方へ歩  
み出した、すると今まで目の方の注意によつて  
忘れられて居たらしい耳の感覚が働いて、私  
は流れが近くにあることを知つた。さきに潺湲  
たる水聲を耳にしたと思つたのはこの近所であ  
つたのであらう。  
正面へ廻つて見ると、そこも一面の林に面  
して居た、ただここへ來て一つの奇異な事には  
その家の入口は、家全體のつり合ひから考へて  
ひどく贅澤にも立派な石の階段が丁度四級もつ  
いて居るのであつた。その石は家の他の部分よ  
りも、何故か古くなつて所所苔が生えて居る  
のである。さうしてこの正面である南側の窓  
の下には家の壁に沿うて一列に、時を分たず咲  
くであらうと思へる紅い小さな薔薇の花が、わ  
がもの顔に亂れ咲いて居た。そればかりではな  
い、その薔薇の叢の下から帶のやうな幅で、  
きらきらと日にかがやきながら、水が流れ出  
て居るのである。それが一見どうしてもその家の  
なから流れ出して居るとしか思へない。私の  
家來のフラテはこの水をさも甘さうにしたたか





そこでもう一度入口の階段を上つて、念の爲め扉をかけてそつと扉をあけた。扉には別に錠もおおりては居なかつたから。

私は這入つて行くといきなり二足三足あとすぎりした。何故かといふに、入口に近い窓の日向に眞黒な西班牙犬が居るではないか。頸を床にくいつけて丸くなつて居眠りして居た奴が、私の這入るのを見て狡さうにそつと口を開けて、のつそり起き上つたからである。

これを見た私の犬のフラテは、うなりながらその犬の方へ進んで行つた。そこで兩方しばらくうなりつづけたが、この西班牙犬は案外柔和な奴と見えて、兩方で鼻面を嗅ぎ合つてから、向うから尾を振り初めた。そこで私の犬も尾を振り初めた。さて西班牙犬は再びもとの床の上へ身を横へた。私の犬もすぐその傍へ同じやうに横になつた。見知らない同性同士犬と犬とのかういふ和解はなかなか得難いものである。

これは私の犬が温良なのに因るが主として向うの犬の寛大を賞讃しなければなるまい。そこで私は安心して這入つて行つた。この西班牙犬はこの種の犬としては可なり大きな體で、例のこの種特有の房房した毛のある大きな尾をくると尻の上に巻上げたところはなかなか立

派である。しかし毛の艶や、顔の表情から推して見て、大分老大であることは、犬のことを少しばかり知つて居る私には推察出来た。私は彼の方へ接近して行つて、この當座の主人である彼に會釋するために、敬意を表するために彼の頭を愛撫した。一體人といふものは、人間がいちめ抜いた野良犬でない限りは、淋しいところに居る犬ほど人を懐しがらるもので見ず知らずの人でも親切な人には決して怪我をさせるものでないことを、経験の上から私は信じて居る。それに彼等には必然的な本能があつて、犬好きと犬をいぢめる人とは直ぐ見わけれるものだ。私の考へは間違ひではなかつた。西班牙犬はよこんで私の手のひらを舐めた。

それにしても一體、この家の主人といふのは何者なのであらう。何處へ行つたのであらう。直ぐ歸るだらうか知ら。這入つて見るとさすがに氣が咎めた。それで這入つたことは這入つたが、私はしばらくあの石の大きな水盤のところで作立したままで居た。その水盤はやつぱり外から見た通りで、高さは膝まで位しかなかつた。ふちの厚さは二寸位で、そのふちへもつてつて、また細い溝が三方にある。上ぼれる水はそこを流れて、水盤の外がはをつたうてこぼれて仕舞

ふのである。成程斯ういふ地勢では斯ういふ水の引き方も可能なわけである。この家では必ずこれを日常の飲み水にして居るのではなからうか。どうもただの裝飾ではないと思ふ。

一體この家はこの部屋一つきりで何もかもこの部屋を兼ねて居るやうだ、椅子が皆一つ一つ……きりしきりしない。水盤の傍と、ファイヤプレースそれに卓に面して各一つづつ。何れもただ腰をかけられるといふだけに造られて、別に手のこんだとはどこにも無い。見過して居るうちに私はだんだんと大膽になつて來た。氣がつくとこの静かな家の脈搏のやうに時計が分秒を刻む音がして居る。どこに時計があるのであらう。濃い障子の壁にはどこにもない。あああれだ。あの例の大きな卓の上の置時計だ。私はこの家の今の主人と見るべき西班牙犬に少し遠慮しながら、卓の方へ歩いて行つた。

卓の片隅には果して、窓の外から見たとほり、今では白く燃えつくした煙草が一本あつた。時計は文字板の上に繪が描いてあつて、その玩具のやうな趣向がいかにこの部屋の平野蠻な様子に對照をして居る。文字板の上には一人の貴婦人と、一人の紳士とそれにもう一人の男

のである。いや、まだ出来上つてはゐない。出来上りつつあつた。大工も何もない、ただ男がふたりで、鋸をゴシゴシ操りながら家の背中に無難作に、穴をあけたのである。大きさはまづ二尺平方だつた。朝寝坊な私の家でまだ氣づかないうちに、大部分の仕事は已に終つてゐて、細部を工夫してゐるところだつた。

私は豆腐屋の言葉には返事もせずに部屋へかへつた。言葉数の少ないRも何一つ答へた様子はない。

「今、ものを言つたのはうちへ言つたのぢやなかつたの？」Tがさう尋ねた。

「さうだよ」

「なぜなんとか返事をなさらないの？」

私はこの窓が氣に入らなかつた。それや、自分の家の背中に自分で穴をあけるのは、こちらで文句はないが、私の家の雪隠とあまり近いからだ。彼の家と私の家の間はほんの二尺とはない。私の雪隠の窓から手を出せば、彼の窓に手がどくどころではない。手は窓をとおして彼の家の空氣をつかむときへ出来るのだ。

—それよりも私はもともとこの豆腐屋を甚

だ憎んでゐる。彼は、私の家から彼の屋根へ唾をするとか、ものを投げたとか、さては自分の家の背中で埃を燃したりして貰つては、ここにはいい布團が納つてあるから煙ぶるとか、さういふ抗議を持つて家主へ私のうちを排斥に行つたことがある。彼の屋根が汚くなることも本當ではあるし、埃を燃したので誤つて彼の家の板が少しこげたことも事實である。そのころ何しろ男ばかりの家でだらしないはしてあつた。しかし私の家の誰もわざわざそのやうなことをしたことはないのである。私の家の二階の窓から何げなくやるのが、みんな彼の家の屋根に落ちかかる。問題は家があんまり接近してゐることだ。なるほどまた、そんな市中で火を燃しては悪いとは云へ、たかが埃でせいぜい煙草の吸殻が蓄つて汚いからといふぐらゐのことだ。それを直接私の方へ注意をすることか、わざわざ家主へ言つて行く程のものはないのである。

しかし言はれてみればこちらが悪いのだからあやまつては置いた。しかしこちらから喧嘩をするつもりなら、彼と同じぐらゐな言ひ分はあつたのだ。雨がふると彼の家の物置き屋根のしづきが私の家の廊下へはげしく飛沫をあげせかけて、そこを開けては置けない。それは向うの

屋根が遠慮もなくこちらへ突き出して來てゐるからだ。また火を使ふ商賣である彼の家の煙突が非常に低くつて、風の工合でその煙が私の二階へ吹き込む。煙だけでは、その低い煙突のところへ鉋屑や紙屑を放り込むと見えて、その燃料の形をした火の子が盛んに舞ひ込む。夏のうち、白い干しものでもしてゐると、その爲めに汚れるほどである。それだけの低きの煙突ならば、きつと石炭を燃す竈で許可されてゐるに相違ない。だが、近所合衆で一一そんなことを言ひ合つてゐては仕方がない。私たちはただ相手が自分の受ける不快だけ知つてゐて、自分の腹へる不快を一向氣づかない蟲のよさを苦笑してすましてゐた。

それだけならば何でもなかつたのだが、この春のころの事である。私は或る家から小夫を預けられた——轉居するに就て今度の家は新築で、隣家との間にまだ垣根が出来てゐない。直ぐに垣根をこしらへるからほんのしばらく預かるといふのであつた。(私の大好きは有名なつた)それはまだ二ヶ月とは経たない小夫だつたので直に私の家に馴れた。それが或る朝見えなかつたのだ。捜すと、近所の子供の語に、大は豆腐屋のおやち殺されてどこかへ持つて行



# 窓展

電車通りから四五間奥まった路地に、鳥籠のやうな恰好の描ひの家が七八軒一廓を起してゐる。私の家はその一廓のうちで表に一番近いところにある。それでなくつてさへ小つぽけな貸家の、ましてや街の中のことだから、庭などといふもののおらう筈はない。でも、申しわけだけに裏に三坪程あるにはある。しかし、そこは、さる高貴な人のお邸に接してゐて、高い煉瓦塀で、ところがその煉瓦塀だけでもまだ不充分と見えてその上へもつて来てトタン塀をもう一層高くつぎ足して築いて、完全に日光を私の庭から遮つてゐる。おかげで立枯れになつてしまつた躑躅が二本、それにこれもやはり枯れ木の栢櫓が一本。躑躅の方はひつこく抜いて、その片隅へ隠して置いたが、栢櫓は厄介なことに、ちよつとした大木なものでから、どうにも仕方がない。手輕に抜き取る事もならず、抜いたにしたところが、その捨場所もない。どこかへ持ち出さうにも、この家の兩脇はびつしり隣家へくつついて、人ひとりがどうやら辛うじ

てといふほどの、空地とも呼べない空地なのだから、こんな枝を張つた木などは五十坪にでも切り刻まなけや、外へ運び出せもしない。もともと腰かけに住んでゐるのではありません、それ程の面倒をするがものもないので、木は枯れたままで立つてゐる。その栢木がまた、表を自動車でも疾走する度にひどくふるへる。それが例の煉瓦塀の上のトタン塀へ小枝が觸れてゐるものだから、ガタンガタン業業しい音を立てる。家の小屋組は地震ですつかりゆるんでしまつたところへこの物音だから、知らない客はまた地震かと目を見据ゑるほどである。かういふ困つた木のほかに、家主が縁日ででも仕入れて植ゑたらしいつまらない灌木がそれでも、不思議に枯れもせずにある。これが色も香もない私のところの庭である。私は時々故郷の田園の廣い庭を思ひ出して、自分の都會での居住を、塵自ら呪ふことがある。ついでに一般の都會居住者をも憐れむのである。……

現在、この家に住んでゐるのが四人——でも、

ひとりに四疊以上の廣さを占めることが出来る。

その人人とは第一が私。

それからA。

それからR。

それからT。

最後の人物だけはちよつと紹介するが、これは私の内縁の妻である。半年ほど前からこの家にゐる。

で、大たいに於て私は幸福だと言つていい。即ち、平凡にも事が選んでゐるの謂である。

そこでついでこの間のことであつたが、——さう、まだ十日とは經つまい。或る雨あがりの美しい朝であつた。楊枝をつかひながら見てゐると、三坪ほどの空地を掃くためにRは、庭掃と埃とりを持つて、雪隠のうらへ出た。「や！ どうもすみません。あとで掃除をします」

突然、さう言つたのは、背中合せになつてゐる豆腐屋のおやぢだつた。それが思ひがけないところから首を出してゐたのだ。おや！ 妙なところへ穴をあけやがつたな。私もその時初めて氣が付いた。それは私の家の雪隠の窓に向ひ合つて、豆腐屋では一つの新しい窓を設けた

すべてはTがまだこの家へ来る以前のことであったから、彼女は私が豆腐屋を憎んで口も利かない理由には知らなかつたのだ。實際、私は諸君が冷靜に考へるより案外この豆腐屋を憎んでゐるのだ。最初はただ身障手な男とばかり思つてゐたのを、その後、花を愛するものは詩人だ。動物を愛するものは善人だ」といふ私の箴言によつて、私は豆腐屋を悪人の仲間へ入れてしまつた。又、鑑札を受けてゐないから殺してもいいといふ彼の正義観がへんに私に氣に入らなかつた。私の家では彼から豆腐を買はない事にした。尤も豆腐を私はあまり好きではない。ところでこの男が私の家の便所や庭といふのも、前述のとほり滑稽だが、を唯一の眺望として勝手に窓をつくる。それから、いやどうも濟みませんなどと、自分の都合の悪い時にはなまなか温和さうに人並の口を利くのだ。そんな男に返事をする口は私は持たない。私は身分によつて人を侮蔑した覺えは一度もないだけに、相手を高が豆腐屋のおやぢとは思へないで、その厚かましさを憎むのである。そのくせ私は當の豆腐屋のおやぢの顔は別に見覺えてゐない程である。この種の私の偏屈は實におとなげなくをかしいものであることを私は自分で氣がつく。ど

うも、をかしくつても仕方がない。ともかくも、私は豆腐屋には返答をしなかつた。私のつもりでは、豆腐屋がそこへ窓を設けたことを、私が認めないものである。窓と窓とはこのやうに向ひ合つて、私の家の便所からは隣の二室は見とほしになつた。先方でそんなへんなところへ勝手に窓をこしらへたのを、何もこちらで遠慮をしてやることはないといふので、私は敢て私の便所の窓をしめてやらない。先方はガラスに紙を張つたものを嵌込むやうにこしらへてゐるのに、何故かそれを開放してある。かうして私の便所の窓も亦、一つの展望を持つことになつた。その部屋といふのは、離れ座敷で、座敷といふのもをかしいが、ともかくも一つの獨立した屋根の下にある。そのトタン屋根は前に私たちがそこを汚くするといふので抗議されたところだし、その床の下は例の小犬がもぐつて行つたところなのだ。屋根の大きさから判断すると六疊ほどある。しかし、便所の窓から見るところによると押入れがあるやうだから四疊半だらう。そこにひとりの男が世帯を持つてゐる。どうも新らしくそこへ住む事になつたらしい。豆腐屋が部屋賃をしたのだらう。さうしてあ

まり薄暗いでもいふので、あんなところへ窓をきつたらしい。この同居人——私にとつて新しい隣人は三十すぎの男だつた。それ以上には、どんな顔の、何をする男だらうといふ程な興味すらも私には持てなかつた。ただその新しい窓に對する敵意もどうやら薄らいだ。豆腐屋のおやぢなら、もし間違つて紙屑一片でも投げたら吐き鳴りつけてやらうぐらゐる氣持は、この窓に對してもう無かつた……

「男やもめに何とかと言ふけれども、一たいどんなことをして暮してゐるのでせうねえ」女には多少の興味があるらしくTはそんなことを言つてゐたけれども、その後、話題にならなかつたところを見ると面白い發見も別になかつたらしい。それが、一昨晩のことだつた

客があつてみんな二階にゐた。不意にTが下から呼んだ。

「Aさん! Rさん! おりて来てごらんさい。珍らしいものがあるんだから」

何か冗談らしいのだが、その聲がほんとうだつたからAもRも下りて行つた。それから梯子段のところで何か話合つてゐる。客といふのは極く親しい人であり、私も何かと思つて客をはふり放しにして下りて行つてみた。Tは梯

かれたといふのである。理由は、小犬が豆腐やのひとり子にぢやれつて子供は大きな聲で泣いたのださうである。もう少し大きな子供の見聞では、おやぢがいきなり出て来て、鑑札も何もない奴だから殺してもいいのだ。狂犬かもしれないぞと言ひながら太い鐵の棒で頭を打ち据ゑた。小犬はその場でクルツと一まはりするとそのまま打ち倒れた。そいつを豆腐やはつまみ上げて行つて、大通りの泥溝のなかへはふり込んだといふのである。そこへまたもうひとり別に近所のそばやの小僧が来て、犬はまだ死んでゐない、溝のなかでもがいてゐたのを小僧自身拾ひ上げて、泥だらけだったから水をかけて洗つてやつて来たかと知らしてくれた。飯たきを頼んでゐた婆やが、その事をまだ寝てゐる私に報告に来て、その演死の小犬を「たいどうしよう」と相談をした。仕方がない、放つて置かう。死にさうなつてゐるのを動かすのも悪いし、それよりはそんなに苦しんでゐる者を見たくない。その代り死んでしまつたら、おれが自分で行つて豆腐屋の店さきへ投り込んでくれるからと言ひながら、私は起き直つた。婆やは自分のせゐのやうに詫びて、庭から外へ出さないやうに注意してゐたのだつたのに、犬は自分で出た

のだと言つた。また、尤も豆腐屋は二三日來業を煮してゐたかも知れない。犬は與へてやつた寝床を寒がつて、豆腐屋の床下へもぐつてそこに寝てゐた。時々鼻をならすものだから豆腐でもうるさいと思つてゐた折からだつたのだらうとも言つた。婆や自身もうるさがつてゐたらしい口吻が私を「そう不機嫌にした。窓の外はじめじめした春雨であつた。私は豆腐屋のトタン屋根へ喉を吐つかけてやつた。さうしてこんなせせつましいところへ大なんど預けに來た人間まで腹立たしくなつて來た。通りには死にかかつてゐる小犬を見るために人だかりがしてゐた。とさう來客のひとりが話した。それや私の家の犬だ。まだ死なないでゐるのかと問ふと、八分どほりは死んでゐたといふ事であつた。そのうちに私の家の前がどやどやと驟がしくなつて、近所の子供たちがうちの婆やを口口に呼びかけた——をばさん。犬が來たよ。をばさん。犬が來たよ。よろめいて辛うじて歩いてゐた。一心に地面を嗅ぎながら、日はつり上つて、呼んだけれども睡を動かすことさへも出来ないらしかつた。不憫を感ずる前に物凄かつた。頭は腫上つて、ぐつしよりと泥に濡れた體は板のやうにつぶれて

しまつてゐた。まだ朝飯もやつてなかつたのである。食物を與へたがもとより見むきもしなかつた。二日間、小犬は水さへ飲まなかつた。しかし回復した。私は喜びながら四這ひになつてよろめいて歸つて來た犬の眞似をして皆々笑はせた。興に乗じて、私は獨白で犬の心理描寫を試みた——。俺はひよつとすると今死ぬかも知れない。俺のまはりのこの人だかりは俺を見物に來てゐるのだな。……それにしてもここはどこだらう。さうだ。ここはどこかの道ばちぢやないか。——俺は道ばちで死なうとしてゐる。みんなは俺を宿なしの野良犬だと思ひ込んでゐるに違ひないが、俺はそんな者ではない。ちやんとした家がある。家の人たちは俺の事を案じてゐるだらうな。然うだ。ここでのまゝ死んだのでは俺は死恥を曝すのだ。ともかくも俺はどうにかして吾家へ歸らなげやならない。これがこの際の急務だ。……そこで、犬を眞似て倒れてゐた私は、よろめきながら立つて——。それにしても俺の家は「たいどの」方角だつたらう。——犬の私は目を引きつらせて鼻を擧げにすりつけてふらふらと歩き出した……



寝る前に二階の窓から首を出してみると十三夜のこの上なく静かな月夜だった。そのせもあるだらう、私は「正直にやつてさへすればね」と言つた新夫婦を祝福する好い隣人の心を持つてゐた。

次の日の朝になつて、——つまり昨日の朝だが、私は多少の好奇心を持つてそつと隣をうかがつて見た。男は窓の方をうしろにしてものと明い方に机に向つてゐた——そこに机があつたことは、少し意外だった。男はその机によつて手紙を書いてゐるらしい。すでに書き上げたのが五六通ばかりもそのうしろに置いてある。女は？ 少しのび上つて注意してみると男のうしろに、お尻を向けあつて疊の上へこごみ込んでゐる。さういふ新境界に於かれた男女の自然な状態として單にでれてゐるのだといふやうにも思へるし、また妙に不安のある静かさのやうにもある。何か氣に入らない事があるつたのぢやないかなと、ひととながら少し氣がかりだった。朝飯を了つてそれから新聞をのこりなく見てから、私は唾をはくために庭の方へ首を差延べた。さうして何氣なくその方を見ると、あの小窓はここからも見えるので、そこへ深く肘をかけた女がちつと俯向いたまま私の

すさまじい庭の土を見つめてゐる。この朝はその前後のよい月夜にくらべて思ひがけない雨だから、そのやうな様子をしてゐる女が少し陰氣すぎていけない。

それでも、そのうちに、私は隣から洩れたごく低い笑ひ聲を一度聞いた。

今日は昨日よりもよけいに話聲がするではないか。

今も笑ひ聲が聞える。又、鋸の音のやうなのがしてゐるが、今度はもう窓を展くのではあるまい。恐らくは閉すのであらうか——工合の思はしくなかつた障子をもう一度細工しなほして。それがいい。私たちはもう眠かないつもりだけれども、それでも、もう秋冷を覺えるではないか。

「秋ふかき隣は何をする人ぞ」

(大正十三年九月作)

## よきひとよ

よきひとよ、はかなからずやうつくしきなれが乳ぶさもいとあまきそのくちびるも手とりて泣けるちかひもわがけふのかかるなげきもうつり香の明日はきえつめぐりあふ後さへ知らずよきひとよ、地上のものは切なくもはかなからずや。

(『殉情詩集』より)

## ところ遍はざる日に

ところを人にさられどもげにもとなけく人ぞなき、こころのいたで血を噴けどあなやと叫ぶ人ぞなき。すまじきものは戀にして苦しきものぞこころなる、こころはいとし、すべもなし、手にはとられず目には見られず。

(『殉情詩集』より)

子段の中ほどにゐて、例の窓の方を指しながら  
性急に騒いだ——

「いま、お嫁さんが来たんですよ。——え、お嫁  
入りですよ。周旋屋がつれて来たの。周旋は兩  
方から十五圓づつとるんですね。金を受取つて  
ゐたわよ。それから里がへりがどうのなんて、  
いろんことを言つてゐるのが聞えたわ……」  
つまらない事を發見して来て「Tは子供のやうに  
珍しがつて喜んでゐる。一氣の早い。もう丸髷  
を結つて来てゐるのよ。ちよつと覗いてごらん  
なさい——」

私もちよつとした興味に驅られて覗いて來  
てみた。なるほど丸髷の女二十五六のがひと  
窓の正面に見える。しかし私はそれ以上に視  
き込むほどの好奇心もなかつた。ただ、こんな  
ところから、こんな結婚式を見ることが一種奇  
妙にをかしかつた。ユーモラスといふことの正  
當な意味はかうでもあらうかと思へる。聞け  
ば隣人はともかくも羽織にセルの袴をちゃんと  
着用してゐるさうである。眞面目なめたい  
結婚に相違ないのだ。その花婿に周旋屋が  
前さんもまあそのうち、それや一週間後でも半  
年後でもいい、懷の都合もあるだらうから工  
面のいい時に、一つ花嫁の實家へ二人づれで行

つて安心もし安心もさせたがよからう——といふ  
やうなことを言ひながら、十五圓受取つてゐた  
さうだ。外にも三四人ぐらゐの人がゐると見え  
て、酒氣を帯びた談笑の聲が手にとるやうに聞  
えて來た。

「さうさう」とTが思出したらしく言つた。「さ  
う言へば、きのふお友達らしい人が來て話をし  
てゐたのはやつぱりお嫁さんの事だつたのね。  
十八九のがひとり、外にももうひとりあるがそ  
れは少し年をとつてゐる。二十六七だから、若  
い方がいいだらう。とさう言つてゐたが、年と  
つた方がよかつたと見えるわね。歸りぎはにそ  
のお友達のやうな人が、財布でも開けて云つた  
のでせう——つまらないな、一錢銅貨一つだつ  
てありやしないといふと、だからさ、飢ぐらゐ  
食つて行けよ——と隣の人が言つてゐてよ。あ  
れ新湯の人ぢやないか知ら。そんな言葉つきだ  
けれど」

すると無口のRが言つた。「へ、考へるとを  
つひも面白いことがあつたのです——やつぱり  
そのきのふの友達かも知れない。ふたりでね、  
自由結婚論をしてゐたつげが——

「ふむ！ どんな自由結婚論をね？」  
「いや、何でもない、ただ、男は三十以上、女

なら二十五以上、勝手に結婚すること法律上  
いいといふやうなことだけですけれどね。  
「どんな男だい、俺はよく見ないが——」

「さあね。わからないわ。處を分けて眼鏡をか  
けて、ニコニコがすりの單衣なを着て、何を  
商賣にするんだか知らないが、夜なべに袋は  
りなど内職してゐたわ。きつとお嫁さんを買ふ  
のでかせいでゐたんでせう。驚見したやうなも  
のもあるし、鼠人らずなども買つて來てありま  
すよ——」

隣の談笑は十一時ごろまでつづいた。私  
たちもそのころまで隣の噂をした。それぞれ疲  
に就かうといふので便所へ這入ると、又新らし  
い發見をした。それは手まはしのいい丸髷の花  
嫁と思つたのは間違ひで、あれはいづれ世話  
した友達の女房が何からしくもう歸つてしまつ  
てゐて、その代りにはやはり昨日の話のとほり  
若い十七八の島田髷がひとり残つてゐたさうで  
ある。——これもやつぱりTの發見である——  
「ガスの着物にメリンスの帯で島田だけはでも  
結び立てよ。私はまた私で誰も見なかつたけ  
れど男の聲だけを聞いた。それは何のことだか  
は知れないけれども「正直にやつてさへすれば  
ね」といふ一言だけだつた。

の修行をして見たいと思つてゐた。けれども父は自分に小學校の先生になることを求めた。父自身は小學校の校長で、自分は長男ではありながら、小學校長ぐらゐの俸給ではその長男ひとりでも東京の學校へ修行に出すだけの資力がなないのである。一たい自分のうちは家族が多かつたし、それに自分の修行したいといふことは物質的には望みの難い學藝であつた。けれども自分は子供のころから繪描きより外には何にもならうとは思つても見なかつた。自分の父は田舎の古い校長などによくある型で漢學の素養などのある嚴格な人ではあつたけれども、それでもまだそんなに年はとつてゐなかつたから、さうわからずやといふほどでもなかつた。いやがる私を無理に教員にしようと思つてもしなかつたが、事實、やつぱり私を東京へ出すのは物質的に苦しかつたのだ。それを看取つて私は家から逃げ出した。東京に叔母があつたから、さうしてもしどうにかして自活の道を立てるときへ出来るなら父は、私に私が繪の修學をすることをさう拒みはしないだらうと信じてゐたからである。

私は叔母の家へ來て、しかし自活をする方法などが、この大都會にさうやすやすと轉が

てゐよう筈もないし、私は仕方なくだごろごろしてゐた。私が思ひ切つて家を出て來た氣持を父も察してくれたものと見えて、別段に私を口掛りかへさうともしなかつた。それにつけても、自分がそんなにのりくりと一日一日を過してゐることが父に對しても亦、叔母に對しても心苦しくて仕方がないと思つてゐるやうきに、私は或る口ふと新聞の「人を求む」といふ欄で仕事の口を見つけた。それは八丁子の或る織物會社で友染の下繪描きを募集してゐるのであつた。さうして相當澤山あつた同じ求職者のうちで、どうしたはすみだつたか自信も經驗も一向にない私が雇入れられることになつた。

會社の仕事場は二丁子の渡しの手前の瀬田といふところにあつたので、私は新町の大工の二階を借りてそこから勤めてゐた。私はほんのしばらくその仕事にたづさはつたけれど、我儘な話だがその仕事はどうも私の肌合に合はなかつた。私には父譲りの頑固な性質があつて、それに私には許嫁もあるし、自分で吹聴するのも妙なことはあるが私は男女關係のことはトルストイアンでその主張を實行してゐた。私の周囲の人たちはそんな點ではごく自由

なのが、私には放縱に感じられた。そんなことを考へてくると私は女の長襟袴などにするやうなそんななまめいた圖案などをしてゐるのとすら、どうやら、幼時から父に受けてゐる感化と合致しないやうな氣持にさへなつた。そんな馬鹿なことを考へて見るうちに、私は、一そ、これはもうこの仕事はよしの方がいいと思ひ立つた。思ひ立つと私はもうすぐにそのとほりにした——私はそんな氣質ではあつたし、ま

た世間見ずで、年から言つても二十の時であつたから。

四月の終りで、私はその月のさまざまな仕拂ひをすませると懐中には四十何錢が残つてゐた。無駄のない生活をしてそれでその生活費を仕拂ふと私の手に自然残つたのがそれだけなのだから、私はその時もらつてゐた給料はほぼわかるでせう。私は東京へかへつても仕方がないと思つた。それよりは京都へ行かうと決めた。全く無鐵砲なことであつたのは四五日するた直ぐにわかつたが、私はその四十何錢——たしか四十二錢であつた——を持って、中仙道を京都の方へ抜ける計畫をしたのである。さうして出發した。

その第一日である。一日中歩き通して日のく



# 一夜の宿

「私はこの間、八王子の方へ行つて來ましたよ……」

さう、私に話し出したのは無名の青年畫家S・Tであつた。

S・Tは私の好きな男だ。五六年前に二度人につれられて私のところへ遊びに來たことがあつた。無口な朴訥な青年で、彼をつれて來た男のおしやべりなのといひ對照してゐたが、しかし彼の一見地味な畫が彼の爲人を語るには相當に雄辯であつた。荒涼とした砂丘の畫が澤山あつた。何でもない村の風景があつた。どれもこれも畫學紙八つ切りほどのスケッチブックのなかに、水彩なのでもとより彼の畫才を十分に覗ふことは出來なかつたにしても、その小さな畫面には相當につつましい靈があつた。私はうまさは一とほりだと思つたがその心持が同感出來た。私は彼とは永い友情が結べさうな氣がした。彼の重厚な氣持が私に素

直に感ぜられたのだ。それなのに私と彼とはさまざま事情で逢はなかつた。それが四五年前のことなので、私も自づとS・Tのことを忘れてしまつてゐた。或る日——ついこの間の或る日、彼が突然私を訪ねた時には、私は全く思ひがけなかつた。彼は袂のなかや懷のなかなどにその後の習作をどつさりねぢ込んで、それを私に見せに來たのであつた。私は彼に會つた時に一度に二つの喜びを感じた。彼の爲人を觀察した目が間違つてゐなかつたこと。私たちは暫くぶりで逢ひながら毎日逢ふ人のやうに話し合ふことが出來た。この時を最初にしてS・Tはその後、よく私のところへ遊びに來る。

彼は私の作品の「お絹とその兄弟」といふのを好きだと言つた。あの小説のために挿畫風の繪を描いて見たいと言つた。そのためには一度、折からの陽氣でもあるし、八王子の方へ遊びに行つて見るとも言つた。私はS・Tがさう言

つてくれるのを嬉しく思つた。何故かといふのに、彼は二人がかけへだてて逢はなくなつてから、私に逢ふことの代りに私の作品を讀んでゐてくれたらしいからである。それに彼が好きだと言つてくれたのは作者たる私自身にも氣に入つてゐるものではあり、S・Tのやうな性格の人にはいかにも同感されていい作だと自分でも信じてゐるからであつた。

八王子の地方は私も知つてゐるので、私は言つた。「五年ほど前にちよつとあの邊を歩いたことがありましてね……あの近所は面白い。いかにも田舎田舎してゐて、私もあの平凡なところが好きです——さうだ。近いうちにもう一ぺん行つてよく見て來ませう」

S・Tがそんなことを言つてゐたのが、その次に訪ねて來た時には、ほんとに八王子の方へ行つて來たと言ふのであつた。

彼はどこから話し出していいか戸惑ひしてゐたらしかつたが、やがて語り出した。

ふるい事に遊らなげやならない。もう五年の前のことである。そのころS・T自身は東京に近い或る小都會の中學校を出て、自分では畫

は通りすがりにちよつとした言葉のやりとりをした。田舎言葉でよくはわからないながら、今日一日の仕事がすんだことを喜び合つて明日までの別れをのべる親愛の言葉であつた。

私は彼等の言葉を聞きながら、断られてゐる自分だのに、どつかり腰を下してしまつてゐた。意地にも立つてはゐられないほどくたびれ切つてゐたから。この外から見て納屋のやうな家は中へ這入つても納屋のやうであつた。半分は土間で、自分の腰をかけた蓑蔭敷の床は三疊とはな。彼女が言ふとほり全くこの廣さのなかへ男ひとり餘分に泊めることは出来まい。——言ひ忘れてゐたが、この醜い母親のそばには八つぐらゐる男の子と四つぐらゐる女の子が纏りついて、私を不思議さうに見上げてゐた。

私は言つた。「實は、私は屋根さへあれば物置小屋のなかでも何處でも寝るつもりだつたのです。床のあるところぢやなくともいい。土間へ、その籠のそばに寝させて下さい。藁を自分で捜してくるから……」

「さうまで言ふのなら」と女は言つた。「どうにかすれば泊めて上げられるでせう」さう答へながら、女は手を差しのべてそこらにあつた豆らんぶへ、籠のなかの火を一たん盛くづにうつし

てその藁くづから豆らんぶへ灯をともした。さうして改めて私の顔を見た。

「あなたはきれいな着物を着てゐる」とその女は言つた。その言葉の意味を解きかねてゐると、女は言ひつづけた。「東京の人はみんなきれいななりをしてゐる。だからお金がないと言つても田舎者は本當にはしない」

彼女はその籠の上にかけてあつたお湯をばけつにうつしたがそれへ鹽を入れて、その鹽湯で私に足を洗へと言ふのであつた。それからこれとは別に湯呑へ鹽湯を飲むためにくれた。彼女が言ふには、いつか母と娘づれの巡禮をやつばりこの家にとめた事があつたさうである。その女巡禮が這入つて来るとまつさきに彼女に求めて、自分の娘に飲ましたものは鹽湯であつた。それから足を洗ふ鹽湯であつた。鹽といふものは尊いもので、それで足を洗へばつかれは直るし、それを飲めば一時の飢ゑを忍ぶことも出来る——とさうその巡禮が言つた。あの人たちは長い旅の経験からそんなことをおぼえたのであらうが、あなたもへと、私にこれから長い旅に出ようといふのだから心得て置いたらいいであらう。鹽湯ぐらゐるなものはどこの家だつてもくれるから……」

私は彼女のすすめてくれるままに足も洗つたしお湯も呑んだ。そのお湯を呑みながら、私もさしい事をちよつと考へたが、それはもしやこの家では鹽湯をくれただけで御飯はくれないのではないかといふことであつた。寝るところが決ると私はひどく空腹になつて来たのであつた。でも私はまもなく皆と一緒に御飯を貰つて食べた。——南京米のつめたい麥飯がぼろぼろになつてゐた。さうしてそれを私にくれるために、彼女とその子等はいつもより少くたべたであらうことは言ふまでもない。

女は、瀬田からこの立川まで、私の歩いて来た里程を十二里ぐらゐと言つてゐた。

私たちの坐つてゐる蓑蔭敷といふのは、私がさつき足を洗つたりしてゐる間に見たのだが、それは上の上から一尺ぐらゐ高いところに薪にするやうな雑木の伐り倒したのを渡しならべて、その上に板をもう一べん敷き並べて、蓑蔭敷を敷いてゐるのである。その蓑蔭敷の廣さはさつきも言ふとほりまあ三疊あるなしである。釜の蓋の上へよこん置かれてある緑しんの豆らんぶの光は、そんな狭いところをさへやつと照しかれてゐる。

御飯がすんだ時に、女は佛壇のやうな神棚の

れかかつたところは立川といふ村であつた。私は長い坂道を下りて勢れ切つたところで、道ばたにあつた一軒の寺へ行つて宿を乞ふと、出て來たのは中年の坊さんであつた。私の話を聞くと急にうさん臭さうに私の様子を見てから言つた――

「今どきそんな馬鹿なことを言つてはいかん。若い者のくせに。京都へ行かうと思へば汽車になり何になり乗るものはある。それをせずにおまけに金も無しで行つて見ようなどとは、以つての外のことだ。ほんとうに金が無いなら、早く東京へ歸つたがいい。ここではそんな人間の宿は出来ない」

私はその次には、お寺から五六町も行つたところで或る水車小屋へ這入つて行つた。そこではまた、自分のうちへとめない代りには、もう少し行けば木賃宿のかたまつた場所があることを教へてくれた。――この水車小屋のところから少しばかり行くと、長さ二間とはない板橋がある。その橋を渡つてほんのしばらく行くと今度は長い橋がある。この橋のあるところが多摩川だが、そこを渡るには橋錢を三錢出さなければならぬ。木賃宿はその橋を渡つたところに五六軒もあるといふのだつた。どの家でも泊め

てはくれさうにもないのを見て私は仕方なければ、もうその木賃宿へ泊るつもりでゐた。けれども四十何錢のうちから、旅に出ると早早、たとひ木賃でも宿錢を拂つてとまるのはもつたになかつた。そんなことを考へながらまたよた歩いてゐると、これがさつき教へられた短い板橋であらう、なるほど二間とはない。古くなつて手すりなどが朽ちてゐる。その下を水が四五尺、川原が四五尺、淺くて美しい流が夕闇のなかでせせらぎを立ててゐる。そのせせらぎが私の心持をほんとうに旅人にしたものである。その橋を渡つた時、私はうしろから一臺の馬車に追ひ越された。この馬車は空つぽではあるがその構造から見ても、確し運ぶものだといふことがすぐわかつた。その馬車を見送るともなく見送つてゐると、私は自分の行く手の方に、白く暮れなやんでゐる夕方の川原道の中ほどに物置小屋が一軒あるのに氣がついた。

「これはいい具合だ」と、私は思つた。言ふまでもなく私はこの小屋で一夜を明してやらうと思ひついたからである。

しかし、私がその納屋のやうな建物の前へ來た時には、この小屋がやつぱり人間の住家であ

つたのを知つて多少意外でもあつたし、それよりはがつかりした。さう言へば、さつきの荷馬車の男が、この小屋の前でちよつと車の早さをゆるめて、こゝを素通りしなかつたやうな氣がしたが、この家のかど口の戸は半分だけ開けられてあつた。私はそこから中をのぞき込んだ。中は眞黒で、けれども竈には火が燃してあつて、その前には女が彼女自身の焚く火で照し出されてゐた。

私はつかつかとその家のなかへ這入つて行つた。さうして第一の機會ではあのお点で、第二の機會ではあの水車小屋で言つたのと全く同じ言葉繰返して、一夜の宿を頼んでみた。

土間にある竈の前にある女は全くとり合ひさうにもなかつた。――「私のうちはこのとおり、お寺や水車小屋のやうなきれいなところぢやないから」私が前に二軒の家でもことわられて來たことを言つたものだから女はそんなことを答へた。女といふのは四十に手のとどきさうになつた醜い顔であつた――焚火で照し出されて浮き出してゐる。家の外を折から荷馬車が通つた。それはさつき私を追ひ越したあの荷馬車が、もう一度引き返して來たのだが、女はその方へ目を向けた。それから馬車の男とかの女と



のではなくあの昨夜の御神像を描いたお禮のもりらしかった。私は無論受けようとはしなかつた。しかし女は私の拒むのを聞き入れなかつた——

「あなたはまだ貧乏は知らないのだ。たつた六錢だけでも、これからさきには今もう一錢だけ、たつた一錢だけあつたらなあと思ふやうな目を見ることが無いとは言へない。その時の用意と思つて持つて行つて下さい」

彼女はさうも言つた。それから私の着物がきれいすぎるといふことをもう一ぺん言つた。私はその六錢を受けて、それから女に名をたづねた。

「イタヤきよ」と女は答へた。

「どんな字です」

「木へんの板に谷です」と女は答へた。それぐらゐの文字を知つてゐたのである。

私はそれから大垂水峠を越して三日ほど歩いた。三十四五里行つたが、四月目にはもう到底これ以上つづけることが出来ないのを悟つて東京へ引返した。

東京へ来てから、私は板谷きよに御禮のはがきを出した。

「お細とその兄弟を讀んだ時、八王子の近所の田舎のことやら、それから自然に板谷きよのことなどを聯想したが、私にふと妙な不安があつた。それはあの時、あの物置小屋のやうな家を現に目の前に見た時には別に何とも考へなかつたことで、それだのになつて思ひ出した時に氣がついたのだが、あの川原のなかの家は、もし出水でもあつた時には流れてしまひはしないだらうか——ありさうなことだ。無いとは限らない：：

それから五年経つた。

私はこの間八王子へ行つて来た、八王子までの切符を買つて、かへりがけに立川の方をまはつて来るつもりであつた。ところが八王子へまだつかないうちに、——さう、八王子まではまだもう一つ間があるのだが、立川の驛まで来ると、私は古いあの苦しい旅の記憶が生きて来た。私は豫定をまるで逆にして立川で汽車を下りると、八王子まで歩くつもりになつた——せいぜい三里ぐらゐの道のりであらう。私はその邊を歩いたことは前にも言つたとほりだけれども、停車場の方は知らなかつた。人にたづねながら古い街道の方へたどつて来た。あの邊

の風景はほんとうに平凡で素直だ。何でもなかつて面白い。たうとう見覚えのある道へ出た。草や木などにでも馴染のあるのはうれしいものだ。ことに私はさういふものが好きだから、丁度人の顔つきやなどを思ひ出すやうに、時々はいろいろな樹の枝ぶりなどを思ひ出すほどの私である。

あの夕方に疲れた足でとぼとぼと進んだ道を、來て見ると私ははつきり知つてゐた。季節も偶然同じやうに晩春であつた。お寺のところは通らなかつたが、あの水車小屋の方へは出た。それから川のあるところへ通ふ道であつた。あの朽ち腐つてゐた小さな板橋は見事な石橋に變つてゐた。——その下をくぐつてゐる小さな流れは、あの夕方が私をそのせせらぎの爲めに足を留め、その次の朝私はそこへ下りて行つて、そこで口を嗽ぎ顔を洗つたところである。私は向うの方をながめてあの物置小屋のやうな板谷きよの家を捜して見た。捜すまでのことはない。川原のなかに一つぼつんと目につく筈である。それなのに、その家が無かつたからである。その家はなかつた。けれどもそれと同じ場所に一軒のもつと新しくつてもつと見ばのいい小屋がある。

やうなものへ御燈明を上げた——それまで気がつかないが、壁の隅の高いところにそんなものがあつたのである。さうして子供たちや私にはかまはないで、女は一心に御經を上げ出した。それは彼女の日課の一つであつたと見えて、慣れてゐる子供たちは音無しくそれを聞いてゐた。讀經が終ると彼女は立つて行つて御燈明を消してから、ふたりの子供たちの相手になつた。彼女は男の子に言つた——「あした東京へ行つたらお前には二圓で袴を買つて来てやらうな。それからおみさには……」おみさといふのがその女の子の名であらう。その子の頭を撫でながら母は明日の土産を約束してゐた。その品物が何であつたか私は今思ひ出せない。ただその時私は、この貧しいうす暗いしかし情味には決して缺けてゐない團欒や、彼女の旅人をもてなす様子や、讀經の日課などのことを思ひ合して、その醜い女が案外にも美しい心持を持つてゐる人に思へたのであつた。

彼女は私の方を顧みて何をあきなひする人だとたづねた時には、私は正直に畫描きの修行をしてゐるのだと答へて、手輕に自分の身のうへ——と言つて何もむつかしいこともない身の上を話したりした。女は私に是非とも一つ描い

て貰ひたいものがあると言ひ出した。私は承知したが、それは彼女自身が持つてゐるものを描き直すのだと言つて、彼女がそれを捜しに立つた時には、私はちよつと何が出てくるかといふ好奇心があつた。それは例の佛壇のなかに仕舞つてあつたが、見ると金毘羅さまの御神像であつた。それが彼女の御守だけれども御神像は古くなつて拜みにくくなつてゐるから寫しなほしてほしいといふのである。なるほど煤びてもゐたし手擦れてもゐた。もともとさう複雑なものではなかつたから、丹念に書いてやつたけれどもわけなく出来た。私は秘藏してゐた墨をつかつて描いてやつた。彼女はひどく満足して、一生大事に保存すると言つた。

私はもう寒い季節だしそれに外套を持つてゐるからふとんはいらないと辭退した。それでも彼女は、ここはこんなところだから寝てしまふと川風の寒いのがまだ身に沁みと言つてどうしても私にふとんを一枚貸せないでは描かなかつた。親切は有難かつたが、そのふとんがまたそれがかつぐと垢がこびりついてゐるので膚のさはるところがひやりとして却つて寒い。何でもとはこの寒婦の夫の着物でもあつたらうかと思はれるこまかい大名縞の布で出来て

ゐた。それもつぎはぎだらけで、またこの光をてゐる垢を落さうと洗濯でもして見たら今度はもうちぎれちぎれに朽ちて到底布の形では居まいと思へるやうなもので出来た布圍であつた。そのうち私は長屋の生活もしたし木賃宿にもとまつたし、また妙なことを言ふやうだが私はそんな人たちに或る親しみを持てるので場村の貧民窟なども歩きまはつて見たこともあるけれども、そのどんな機會にも、あれほど——あの時私自身が着て眠つたものほどきたならしい布圍はあとにもさきにも見たことはない。世間には無論布圍のない人もたくさんあるだらうが、無いのは別として有る以上はあれよりきたないのがあり得るだらうとは、私もちよつと想像し兼ねる。

それでも夜が明けて、私が出発しようとする時には彼女は私の爲めに握飯を二つ用意してくれてあつた。それから彼女は私に六錢くれようといふのであつた——

——これを持つて行きなさい。もつとあげたいが、どうもこれよりないのだ。子供が學校へ上るのでお金がいつた。東京へも行かなければならない。ほんの志だ」

そんなことを述べて、彼女は私に恵みをする

「夕方になつたら」女の子が言つた。

「用事に行つたのかい？」

「ゴミ上げだい！」男の子が叫んだ。

「ゴミ上げ？」

「うむ。さうだよ。なあ、おみさ。夕方になつたらお父つあんもお母さんも橋のところへ蒸気で歸つて来らあなあ。蒸気のなかで遊ぶんだなあ。面白いよ」

「ゴミ上げといふのはどんなことだか尋ねて見たけれど、男の子も女の子も要領を得た返事をしなかつた。

子供たちは私の描くのを見るのに飽きたと見えて、ふたりで追つ驅け合つたりしてふざけ合つてゐたが、そのままだこかへ行つてしまつた。

けれどもしばらくすると再び彼等は、手に蓮華草などを摘み集めて歸つて来た。男の子はその一束ねの草花を黙つて押しつけるやうに私の方へ差出した。年の割にはずつと幼い人懐つこい仕方であつた。私にそれをくれようといふのであらう。

「有難う。……坊やは一たい何とていふ名だい？」

「ハラダ」

「ハラダ——原田か？　苗字だね。ぢやおみさもやつぱり原田か」

「ううん。ハラ——だ」

「原田ではない——原かい？」

「……………」

「お父さんの苗字だね——お父さんはいつ来たの」

「来やしないよ。前からあるよ」

「来たのはお父つあぢやないよ——お母さんだ」女の子は男の子の言葉を補ふやうに言つた。

「お母さんが来たんだ？」私には子供らの言葉の意味がどうもよくわからない……

「うん。別のお母さんが来たんだ——もう先だ」女の子の説明はもつと私をわからなくした……

「それぢや」と私は言つた。「お母さんは何といふのだ——板谷きよ、ぢやないのか？」

「お母さんも原だ！」と男の子が言つた。

「でも、さつきは板谷きよだと言つたではないか？」

「……………」男の子は黙つてしまつた——どうもこの子はいくらか低能児である。

私は子供らの言葉をさまざまに自分で想像して見て、たうとうかう聞いて見た。「ぢや、お母さんは二人あるのかい」

「さうだよ。二人あるのだ——前のお母さんと後のお母さんと……」女の子の返事である。

「然うか、それぢやその前のお母さんはどうした——板谷きよといふお母さんは？」

「死んぢやつたよ——もう先に……」

「もう先に？」

「なあ、おみさ。砂村に打ち上つたんだなあ——男の子はそのことなら自分でも知つてゐるといふやうに言い放つた。

その子供たちを相手にして聞いて見てもわかりさうなことでもなかつたから、私はもうそれ以上は聞きもせずには歸つた。

しかし、砂村に打ち上つたといふかの女は家ごと流れたのでないことだけは確かだ。あの納屋のやうな家はそのわきに馬小屋が出来てゐる外は變つたこともなくものまゝに在つたのだから。

(大正十一年六月作)



「やあ、新築をしたのだな」私は心のなかでさう思つたが、新築といふ言葉が新舊のそれらの小屋に對して何となく自分ながらをかしかつた。で、私はひとりで微笑しながら「ひよつとすると、出水でまへの小屋が流れたのかも知れない」と思ひながら、私はその家を見つづけないが歩いて行つた。と、不意にその小屋のなから馬が首を出した。「ああ、馬小屋であつたか——私はさう氣がついたがそれにしても、板谷きよの古い家よりも馬小屋の方がまだしも立派であつた。さうしてそれははつきりと目の前にくらべて見ることが出来た。といふのはもう無いものと思つたあの古い小屋は、歩いてくるうちにその新しい馬小屋のかけから見えて來たのである。——馬小屋の屋根の方がずつと脊が高い。馬が首を出した時に、さうして板谷きよの家がその馬小屋の隣にまだあることを發見した時に、私が直ぐに思出したのはあの磔を運ぶ荷馬車の男であつた。板谷きよは、なるほどあの馬車屋の女房になつたのであらう……。ありさうなことだ。あつていいことだ。——私は暗やかに笑ひたい氣持であつた。

私は彼女の家の前に立つて見た。障子は閉めてあつたし、その破れからちよつとなかを覗

いて見ると、誰もゐないやうなけはひでもあつたし、またゐるらしい氣もした。私はわざわざ障子を開けてこの家を訪ふほどのことも無いと思つた。ふとふりかへて見ると、そのあたり川原は描いて見てもよかつた。スケッチブックをとり出して私は描き出した。

氣がついて見ると自分のうしろに、私の描いてゐるのをしきりに見てゐる子供がひとりゐた。いつどこから來たのだか知らなかつた。私はちよつとふり返つて見た——十一二の子供であつた。この子だらうと私は思つた。

「坊やが好きだね?」

「!」子供はうなづいたやうであつたが言つた。「好きだ」

「自分で描けるかい」

「描けないよ」

「坊や學校へ行つてゐるだらう?」

「あ」

「何年生だ?」

「一年生だよ」

「え? 一年生だ。そんな大きな體をしてかい?」

「落第したんだ。落第したからやめちやつたんだ。また今年から行くやうになつたんだ」子供

はそんなことを答へたが、突然大きな聲を張り上げて叫んだ。おみさ、來て見ろや。馬描いてゐるんだぞ!」

見ると私のうしろに、あの小屋の方から八つぐらゐる女の兒が駆け出してゐた。この子供たち兄弟は、五年前のあの子供たちにちがひなかつた——どこに見覚えはなかつたけれど、おみさといふ女の子の名は、東京からの土産を約束する母親の聲と一緒私に私の耳にくつきりとした思出があつた。私は描く手をやめて言つた——

「君たちは兄弟だね。あのうちの子だらう。お母さんは板谷きよといふのだらう?」

「……男の子はしばらく考へてゐた。それから」さうだよと言つたのは、女の子と男の子と同じだつた。

「お母さんは今うちにゐるかい?」

「ゐないよ」と男の子が言つた。

「どこへ行つたの?」

「東京だ」

「東京へよく行くのだな。親類でもあるのかい?」

「……………」

「いつ歸つてくるの?」

編輯するところの同人雑誌『星座』に掲ぐ。  
十二月、再び出京す。

### 大正六年

五月、『病める薔薇』『田園の憂鬱』(第一稿)のうち四十枚成る。雑誌『新潮』に掲げらる。  
六月、M.K女(當時二十歳)と同様す。  
十月、『病める薔薇』後半五十枚、意に滿たずして破毀す。『或る女の幻想』を雑誌『中外』に掲げらる。生田長江の推薦するところなり。

十二月、郷里に歸る。同月十四日再び新に『田園の憂鬱』の稿を起す。

### 大正七年

一月中旬、『田園の憂鬱』未定稿全部成る。

三月、上京す。

四月、『李太白』成る。『中央公論』に發表す。

谷崎潤一郎の推薦するところ也。

六月、『指紋』成る。『中央公論』に發表す。

八月、谷崎潤一郎及び『中外』記者の勧めに従ひて『田園の憂鬱』第二稿を發表す。

九月、『お絹とその兄弟』成る。諏訪三郎と相知る。『中央公論』に發表す。

### 大正八年

十二月、短篇集『病める薔薇』天佑社より出版せらる。

四月、『どうして魚の口から一枚の金が出たか』といふ神聖な噺』後に『最もよき犬』と改題す。八月、『笛吹きと王様との話』九月、『海邊の望樓にて』十月、『美しき町』(後に『夢を築く人々』、他に『見失はれた白鳥の話』等の作あり。

二月、『故宮ノ澤瀉太郎』と相知る。短篇集『お絹とその兄弟』新潮社より出版せらる。

六月、長篇『田園の憂鬱』(定本)新潮社より出版。

十二月、短篇集『美しき町』天佑社より出版せらる。

### 大正九年

一月、『佐藤春夫選集』春陽堂より出版せらる。

二月、極度なる神経衰弱のため郷里に歸る。

六月、臺灣及び支那福建に旅行す。

十月、歸來、M.K女と別る。

### 大正十年

この年、作品殆んど無し。

三月、『星』八、九、十、十一月、『南方紀行』十月、『その日暮しをする人』等、僅に三四の作あり。

五月、『殉情詩集』七月、短篇集『幻燈』、『南方紀行』新潮社より出版せらる。

三月、谷崎潤一郎と交を絶つ。

### 大正十一年

一月より十二月まで長篇『都會の憂鬱』を『婦人公論』に連載す。四月、『俗しすぎる』、六月、『一夜の宿』、『厭世家の誕生日』等の作あり。

五月、感想集『藝術家の喜び』を金星堂より、八月、中篇『剪られた花』、『その日暮しをする人』を書きつけたものなり。新潮社より出版せらる。

五月、高橋新吉と相知る。

### 大正十二年

五月より八月まで『美人』を『新潮』に連載、

# 年譜

明治二十五年（壬辰）

四月九日、和歌山縣東牟婁郡新宮町に生る。豊太郎の長男なり。父祖はみな醫を業とす。

明治三十七年

縣立新宮中學校に入學す。將來の志望を問はれたるに對し、文學者たらしむ事を答ふ。近視眼者なりしことを知る。また齲齒を病むこと頻なり。

明治三十九年

同校第三學級に於て原級に留めらる。代數幾何を解すること淺く、且、文學書を耽讀し、放縱にして不良性生徒として懲戒するの意あるものなり。奥榮一と相知り、日夕、共に文學を談ず。

明治四十二年

夏期休暇中、町内有志者の開催せる文學講演

會の席上に於ける一場の談話は地方教育會の物議を醸し、無期停學を命ぜらる。この文學講演會に於て、生田長江、與謝野寛、石井柏亭の諸先輩を知る。校内に於て同體校の事あり。總數五百名の生徒のうち三百五十人の參加するものなり。この騒動の首領を以て振せらる。しかも無期停學の懲戒は解かれしも、身邊の甚だ多事なるを煩はしとし郷里を出奔せんとす。志成らざりしも母の同意を得て上京す。約二週間に於て電報に接し歸郷す。學校の特別教室に放火し、その一棟を焼失せしめたる者あるに因つてなり。偶、上京中なりしをもつてこの事件に關累なかりき。

明治四十二年

三月、中學校を卒業し、四月、上京す。生田長江に師事し、又與謝野寛によりて詩歌の批評を受く。堀口大學と相知る。九月、堀口大學と共に慶應義塾大學漢科文學部に入

學す。永井荷風の教を受けんことを願へるなり。以後、三四年間に二三の散文小品及び若干の詩作あり。「三田文學」ニ「我等」(萬造寺齊の發行せるもの)等に掲げらる。當時の詩作中の一部分は後年の詩集のなかに採録せり。

大正二年

慶應義塾を退學す。既に先年よりただ學籍を置きしのみにて全く通學せざりしなり。徴兵検査を受く。近視眼九度、體重また甚だ輕く丁種なり。或るプラトニックラヴによりて身心甚だしく懨めり。慢性の不眠症に罹る。

大正四年

十二月、E・Y女(當時十八歳)と同棲す。無名の一女優なり。

大正五年

四月、E・Y女及び愛犬二頭、愛猫二匹と共に神奈川県都筑郡中里村に轉す。九月、「病める薔薇」の腹案成る。十一月、小品「西班牙犬の家」を江口渙等が



昭和二年十二月二十日

昭和二年八月一日 印刷  
昭和二年八月五日 發行

現代日本文學全集 第二十九篇

著者 里見 佐藤 春夫

發行者 山本 美

印刷者 杉山 愛二



發兌

東京市麹町區內幸町一丁目參番地  
幸ビルヂョウグ

改

造

社

電話 東京 銀座 座 五五七〇  
電話 東京 銀座 座 六八三二

十月、『魔鳥』、『吾が回想する大杉榮』、十一月、『あさましや隨筆』を發表。

二月、詩文集『わが千九百二十二年』、八月、支那短篇集『玉簪花』を新潮社より、七月、短篇集『俗しすぎる』改造社より出版せらる。

#### 大正十三年

一月、『父の夢』、對話『退屈問答』、二月、小説『窓残月の記』、三月、『囚人』、『戯曲』、『暮春挿話』、『評論』、『風流論』、六月、『賣笑婦マリ』、十月、『窓展く』、また十月より『秋風一夕話』等を發表す。

六月、『暮春挿話』を明窓社より出版す。

三月、小田中タミ（當時二十二歳）と妻とす。

教坊の出なり。

十月、郷里に歸る。

#### 大正十四年

一月、『彼者誰』、『時計のいたづら』、三月、『霧社』、四月、『砒』、『マダム、ルツクスの遺書』、五月、『女誠扇綺譚』、十月、戯曲『日光室の五人』等を發表す。又、七月より長篇『この三人』等を發表す。又、七月より長篇『この三つのもの』を約二年半の豫定を以て『改造』に連載し初む。

#### 大正十五年 昭和元年

一月、F・O・C、三月、『晩春』、四月、『集父戯に飲ふ』、九月、『新秋の記』等を發表す。又二月より、『新潮』に自傳の少年時代、回想を連載、十一月より、『報知新聞』に、『藝笛』を連載、翌年二月に到つて完結す。

二月、『佐藤春夫詩集』、『女誠扇綺譚』を第一書房より、三月、短篇集『窓展く』を改造社より出版す。

四月、報知新聞社客員となる。

#### 昭和二年

二月、『惡魔の玩具』、三月、『春風馬堤園譜』、『谷崎潤一郎、人及びその藝術』等を發表す。又一月より、『去年の雪いまいづこ』を『婦人公論』に連載す。

七月、支那に旅行し、八月上旬歸る。

#### 少年の日

野ゆき山ゆき海邊ゆき  
眞ひるの丘べ花を敷き  
つばら瞳の君ゆゑに  
うれひは青し空よりも。

2

影おほき林をたどり  
夢ふかきみ瞳を戀ひ  
あたたかき眞雪の丘べ  
花を敷き、あはれ若き日。

3

君が瞳はつばらにて  
君が心は知りがたし。  
君をはなれて唯ひとり  
月夜の海に石を投ぐ。

4

君は夜な夜な毛糸編む  
銀の編み棒に編む糸は  
かぐるなる緑あかき糸  
そのラムフ敷き誰がものぞ。

（『痴情詩集』より）





野村

GTU LIBRARY



3 2400 00559 7517

野  
村  
辰  
次  
郎

GTU Library  
2400 Ridge Road  
Berkeley, CA 94709  
(510) 649-2500





改造社